

暁の水平線に勝利を刻めるか

ジャーマンポテトin納豆

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

深海棲艦によって追いつめられた世界。

その中でも日本は特に絶望的な状況に陥っていた。

制海権は握られ、制空権をも失った。

そんな時、艦娘と呼ばれる存在とともにかつての大戦時の艦艇が姿を現す。

当初、日本は戦力を増やし反抗作戦を実施。一時期はアダムン海からマリアナ諸島、カロリン諸島、ビスマルク諸島までを奪還するに至る。

しかしながらアメリカ海軍との合同で実施されたハワイ諸島奪還作戦にて投入戦力の約6割を喪失。アメリカ海軍の喪失があまりにも多く、日本艦隊にも少なくない被害が出た。

その後、制海権は急速に後退

早々にビスマルク諸島の前線基地であるラバウルが陥落。すぐさま戦力をカロリン諸島方面に撤退させ防衛を固めるも、2度に渡る海戦にて敗退。

マリアナ諸島近海でハワイ諸島奪還作戦時、共に日本に撤退したアメリカ艦隊と共に迎え撃つも圧倒的な戦力差から大敗。

その後アダムン海を失うと、そこから産油地帯などの資源地帯を喪失。

南西諸島からフィリピンに至るラインでの陸海空全ての残存戦力

を掻き集めた反抗作戦を実施するも大敗。早期撤退判断により失った戦力は少なかつたものの損傷を受けた艦艇が殆どで以後、近海の警備すら危うくなる。

そんな、難易度ベリーハードな日本にふと気が付いたら立っていた男は、日本を、艦娘を、世界を勝利へと導けるか？

注意

本作はゴリツゴリの戦闘メインです。

恋愛要素等は今現在考えていません。戦記みたいな感覚で読んで頂けると幸いです。知識不足ながら必死に考えて書いて行きます。多少違いがあったり、時折漢字の変換ミスがあるかもしれませんが。それでも出来るだけその様な事が無い様頑張って書かせて頂きます。

どうぞよろしくお願いします。

目次

閑話 提督の休日	1
序章	
プロローグ	19
第1話	28
第2話	43
第3話	59
大規模輸送作戦	
第4話	80
第5話	111
第6話	126
第7話	140
第8話	157
第9話	169
第10話	190
第11話	206
第12話	221
南西諸島奪還作戦	
第13話	226
第14話	245
第15話	267
第16話	292
第17話	332
第18話	348

視察任務

第41話

747

第40話

731

第39話

717

第38話

707

第37話

685

第36話

673

第34話

660

第33話

633

第32話

620

第31話

604

第30話

583

第29話

568

中部太平洋方面迎擊戰

第28話

542

第27話

530

第26話

507

第25話

476

第24話

456

第23話

438

第22話

411

南方方面奪還作戰

第21話

405

第20話

385

第19話

374

第64話

第63話

第62話

フィリピン奪還

第61話

第60話

第59話

第58話

第57話

第56話

第55話

第54話

第53話

第52話

第51話

第50話

第49話

第48話

第47話

第46話

北海道防衛戦

第45話

第44話

第43話

第42話

112211061089

10811060104410271013 990 978 965 948 931 911 898 880 871 863 846

839 818 792 762

第84話	第83話	第82話	南洋諸島作戦 → マリアナ諸島奪還作戦	第81話	第80話	第79話	第78話	第77話	ニューギニア・ソロモン方面	第76話	第75話	第74話	第73話	第72話	第71話	第70話	第69話	第68話	豪州方面	第67話	第66話	第65話
1559	1540	1522		1496	1467	1450	1436	1416		1383	1361	1338	1302	1280	1255	1234	1208	1190		1181	1166	1143

閑話 提督の休日

今日から1週間の休みである。

元々休日を取る予定など欠片も無かったのだが、1週間の休暇になつたのにはマリアナ海溝よりも深い訳がある。

ああいや、訳などと言わないから頼むからせめて言い訳、だどちよつと格好が悪い、弁明させてほしい。

本来ならば、陸海両軍の最高指揮官である俺が休んでいる暇など無いのだが、つい4か月ほど執務に没頭していたら、見兼ねた皆が執務室に乗り込んできて仕事と言う仕事を全て取り上げられてしまった。

仕方ないじゃないか、俺が仕事をせねば前線での業務がそれだけ遅れるのだから、最前線の南方で戦っている皆を考えれば休む暇も無い。

燃料弾薬食料水、医薬品。

これら全ての補給やらの申請はどうしても俺を通さねばならない。それらを受理して、送り届けるにはどうしても俺が書類に判を押さねばならない。

と幾ら言つても皆が頷く訳も無い。

それどころか、

「提督、貴方が身体を壊して入院でもしたらそれこそ業務が滞るではありませんか！確かに提督がいなければ、負けていたでしょう。ですがそれが理由で貴方が4か月も休み無しで働いてよいと言う理由にはなりません！」

とまあ散々怒られた。

中代中将達にも話が行っているらしく、電話で休めと怒られてしまったわけだ。

「私達ですら週1程度、最低でも月に3日は休んでいると言うのに貴

方と来たらば4か月も休み無しで働いているだなんて！」

とそれはもう、訓練期間を思い出すほどにしつかりとお叱りを受けたのだ。

中代中将からのお叱りもしつかり1時間ほど有難く頂戴したものだ。

しかもその前に食生活絡みで散々怒られたばかりだったから、まあ怒られた。

全て正しい事だから、俺が頷くしかないのは必然だ。

いやなに、不快だとかなんて欠片も思っていない。

寧ろ感謝するべきだろう。

この年齢にもなつて、それこそ陸海軍の実働部隊のトップに居るのにも関わらず、誰かが俺を想って叱ってくれるなんてことは、とても有難い事だ。

そう言ってくれなければ、俺は俺の犯した間違いに気が付くことも出来ない愚か者だからな、ああして泣き落としをしてでも叱ってくれるのだから、寧ろ感謝せねばなるまい。

とまあ、そんなわけで突然与えられた休暇なわけだ。

「提督く、隠れてお仕事なんて絶対しないようにく」

「わ、分かっているとも。うん、分かっている」

「それじゃあ、クーラーボックスの中の書類、出しましょう?」

「……はい」

「素直でよろしい」

龍田が微笑む。

何となくそこに、末恐ろしいものを感じて背筋を冷たくさせながら正直に頷いた。

俺が休暇であるにも関わらず、目を離すと何をするか分からないと罪人染みた扱いでもって、艦隊中でも屈指の実力者たる龍田が秘書艦として側にいる。

艦種事に、そういう存在がいるのだが龍田は神通と並んでの双壁だ。

空母であれば、鳳翔の名を誰もが上げるだろう。

母艦航空隊や空母の母であるからだ。

戦艦だと、長門か霧島の名を上げる者が多い。

戦艦は総じて訓練が過酷であるが、長門はその自負故に、霧島は武闘派故により一層だ。

重巡だと、意外にも鈴谷だ。

軽巡は龍田と神通。

駆逐艦だと龍田、神通に率いられた水雷戦隊は全てになる。

と言うか必死について行っているだけなのだが、結果的にだ。

それ故に艦隊の中では神通が率いる水雷戦隊と、龍田が率いる水雷戦隊、どちらがより過酷か、恐ろしいかは議論が尽きない。

いや、別に体罰が云々と言うわけでは無い。

寧ろ陸海軍全軍において体罰、殴る蹴ると言った制裁を厳禁にしている。

あんなもの、やって意味は無い。

腕立てぐらいの罰則なら別に過度な回数や時間を与えないのであれば体力錬成の意味もあつて問題無いが、殴ったり蹴ったりするのは全く違う。

全く意味が無い。

神通と龍田率いる水雷戦隊が恐ろしいと言われる由縁は、その訓練のレベルの高さなどによるものだ。

想定される状況の設定も恐ろしく細かく、そして自軍に不利な状況でやるのが常だ。

ついこの前なんぞ、制空権無し、友軍は旗艦軽巡以下駆逐艦のみ、昼戦。

敵状については航空攻撃に加えて、戦艦重巡による観測機よつての弾着観測砲撃下、随伴水雷戦隊有り、なんて言う狂気染みた想定下での演習をやっていた。

制空権の無い状況でそんな事させないから、流石にやり過ぎじゃないかと聞いてみたら、

「有り得ない、と言うのはそれこそ有り得ません。提督とて間違いを犯し、全空母全戦艦戦闘力喪失、なんて状況も考え得るわけです。そうなれば我々は殿を命じられることもあるでしょう。そうなれば、敵の航空機からの攻撃を受けつつ敵艦隊の足止めをもやってのけねばなりません」

「砲雷撃戦に持ち込まれたならば、我々が活路を見出せるとしたら雷撃だけです。私達に載せられている砲では重巡や戦艦は沈められませんが。もし1発でも敵に魚雷を捻じ込むことが出来れば、その混乱に乗じて逃げおおせることも不可能ではありません」

「考え得る、あらゆる想定を訓練で実践して、それでも想定外の事が起きたならば動揺を抑えてそれに対処する能力を育てる。これこそが訓練の意味です」

神通にそう言われた時、なるほど、と頷くことしか出来なかった。まあ、流石に死者を出すようなことだけは無いように、と厳命してある。

訓練で怪我をしたり死んだりしては元も子もない。

安全対策は徹底した上での苛烈な訓練である。

そう言う意味で、恐ろしいだとか色々と言われている訳である。

勿論、神通と龍田両人も武道の達人である。

神通は徒手格闘が専らであるが、武器を使った戦いもお手の物だ。

龍田は槍術と徒手格闘が凄まじい。

正直戦国時代にでも生まれていたら、語り継がれること間違いなしであるのだ。

神通は普段は物静かで、比較的内気なところがあるのだが如何せん荒事になると性格が変わる。

龍田は普段とあまり変わらぬ態度だが、寧ろそれが恐ろしいところであるのだ。

そんな龍田が秘書艦である。

理由としては単純であり、龍田の艦体は長期間の訓練航海と戦闘訓

練によって整備の必要がある為に現在入渠中であるからだ。

交代での入渠であるし、龍田も休暇中であつたのだが秘書艦を買って出てくれた。

有難い限りである。

仮に俺一人で過ごすとなれば、また食生活が乱れ、隠れて仕事をし
て皆に怒られる。

言わばアルコール依存症の治療に近いかもしれない。

アルコールを絶つて治療するのと同様に、俺は仕事中毒を絶つた
めに仕事から隔離するわけである。

「それで、今日は何処に行くのかしら」

「一番近くの金剛に行こうかと思つてな。半休だと言つていたし休
みの下士官達が釣り大会をやると言つていたから混ざろうかと」

「そうしたら、今日の晩御飯はお魚で決まりかしら」

「坊主かもしれんぞ」

「そしたら今日は主菜無しのお野菜中心晩御飯ね」

「それは困るな」

龍田の作る飯は美味い。

俺の舌が馬鹿なことを除いても、普通に店を出せる。

龍田は家庭的で優しいのだ。

長門とかは豪快な料理が多いな。

魚丸々一匹素揚げにしたとか。

あれはあれで良い。

「だったら釣つてこないかね」

「精進しよう」

何時も通り、半袖短パンの軽装に着替えて壁に掛けてある麦わら帽
子を被る。

釣り竿と餌、さつきまで書類が入っていたクーラーボックスの中に
氷と昼飯を詰める。

どうやら龍田も付いてくるらしいので、釣り竿を選んでもらった。

流石に一日中見ているだけはずまらないだろう。

金剛とを往復する内火艇に便乗させてもらい、金剛へ。

どことなく金剛乗組員の面々の表情が強張っているが、理由は俺ではない。

隣に座る龍田が理由だ。

その恐ろしさは戦艦乗組員にも轟いているらしい。

噂には尾鰭が付き物だが、その内の一つにちよつかいを掛けた男の両手を槍捌きで切り落としただとか、笑顔のまま吊るして海に浸しただとかばかりである。

数多くの艦が停泊しているから、駆逐艦から空母まで様々な艦が見える。

大抵は戦隊事に纏まって停泊しており、今俺と龍田は一航戦以下の中を進んでいることになる。

遠目に飛龍や蒼龍も見える。

着くと、何時も通り金剛が熱烈な抱擁でもって出迎えてくれる。

彼女は距離感が近いのだ。

「テイトク、今日は私のところに来てくれてアリガトネー」

「いや、寧ろ休みなのに邪魔して済まないな」

「シーン、何時でも歓迎するヨ。私ワ訓練指揮あるから一緒に居られないケド休日楽しんでネ」

「ああ、ありがとう」

金剛と別れて、艦尾の方に向かう。

休日中は敬礼をしなくて良いと言っているのだが、すれ違う皆は敬礼をしていつてくれる。

答礼する俺は半袖短パンに麦わら帽子と言う、なんとも恰好が付かないのだが。

「敬礼ッ」

釣り大会を開いていた者達を監督していた士官が代表して号令を掛けて付近に居た全員が立ち上がって一斉に敬礼をしてくれる。

これまた格好の付かない答礼をして各々自由にさせる。

休日だ、態々誰が監督しているとかの報告までは流石にしない。

元々は士官が監督していなかったのだが、釣果の競い合いの中で血の気の多い連中が喧嘩をしたことがあった。

それを機に釣り大会に参加する者の中で階級が一番高い者が監督役も兼ねるように、となったわけだ。

「どうだ、今日は」

「良くも悪くも無い、と言った具合です。今日は運が良い奴が釣れる日ですね」

「そうかあ……。もしかしたら今日は釣れんかもなあ」

「提督は運が良いと存じておりますが」

「そんな事は無いと思うぞ。周りの運が良いからそう見えるだけだ。最後に釣りした時なんぞ憐れんで釣果を恵んでもらったほどだ」

「それは確かに運が無いですね。では、提督の釣果を祈っております」

「ああ、君もな」

監督していた士官と軽く話してから龍田と二人分のスペースを見つけて、準備をする。

龍田も釣りの心得があるのか、手際は良い。

と言うより艦上での娯楽は限られているから、必然的に釣りは誰でも数度はやることになるのが理由だろう。

「それじゃあ、頑張ろうか」

「釣りって頑張る場面なんて殆どないけれどね。多分頑張ったら逆に釣れないんじゃないかしら」

「大会だからなあ、頑張ると言う言葉以外になんといえれば良いのか分からん」

「それもそうね……。それじゃあ、勝っちゃおうかしら」

「龍田が言うのと、本当に優勝しそうだ」

龍田なら釣り竿使って、釣りをするよりも槍とか鉾で突いた方が絶対速いし圧倒的な釣果を得られそうなものだが、それは心の中に留めておこう。

釣り糸を海に垂らして、折り畳み式椅子に龍田と並んでぐっ、と深

く腰掛ける。

後ろには金剛が搭載する35・6cm連装砲2基や、増設され手入れを終えた機銃群が横にある。

砲門には砲栓がされ、機銃には防水布製の袋が被されている。

休みの場合艦の半分、例えば真ん中から前側と後ろ側で分けて交代で休暇を取る。

今日の金剛の場合は前側が勤務で、後ろ側が休暇と言った塩梅なわけだ。

なので前側は慌ただしく主砲や機銃を操作したり、戦闘配置までのタイムを一秒でも短く出来るようにと訓練をしているが、後ろ側はなんとものんびりとした空気が流れている。

釣り竿を握ったまま舟を漕いでいる者や、そのまま寝落ちしている者もチラホラ見える。

艦の上とは言え、副砲を撤去して対空砲や機銃を所狭しと並べられ、水雷防御を高めるべく艦種から艦尾に至るまでバルジを追加、と言う様々な改装を施されて34000tもの排水量を有する艦の上では穏やかな日である今日では揺れを感じることは無い。

金剛は信濃を始めとした250mを超える艦と並ぶと巡洋艦の様に見える、だなんて言われるが金剛は頼もしいのには違いない。

砲火力もさることながら、艦隊防空の要たる彼女がいなければ、我々は敵機に対抗する力が大きく削がれてしまう。

そしてなによりも最も戦場を駆け回っている戦艦は他には居ない。

昼時になると、ラツパが鳴り響き休暇中とは言えど皆艦内の食堂に足を運ぶ。

後部甲板に残されたのは、偶然であろうが俺と龍田だけだ。

「俺達も飯にしよう」

「そうね」

クーラーボックスの中から、朝に龍田が作っておいてくれた握り飯とおかず、それに水筒を取り出す。

因みに釣果はゼロなので生臭くなったりしていない。

龍田の方はバケツの中に数匹の釣果が入っているが、俺は全くだ。

半日海面を漂う浮をぼーっと眺めて偶に餌を付け替えたりしていただいだけである。

「頂きます」

「相変わらず美味しい」

おにぎりには海苔が巻かれており、中に入っているのは鮭や梅干し、鱈子であったり昆布であったりと様々だ。

シンプルな塩掬びもあるので、そちらは弁当のおかずと共に食べる。

水筒の中には麦茶が入られており、渴きを潤すのに最適だ。

弁当の中には卵焼き、それも俺の好きなしょっぱい味付けのものが入れられている。

他にも野菜炒めなど色彩にも富んでいて、勿論味も文句の付けようがない。

「そんなに掻き込まなくても誰も取らないわよ」

「う、む」

早食いを窘められるが、軍隊生活が長いとどうしても早食いが習慣に染み付いてしまう。

戦闘配食なんて特に早食いになりやすい。

早食いは良くないと、しっかりと噛んで食べる様にと言われるが、どうにもならん。

とは言えちゃんと味わってはいるぞ。

「ご馳走様でした」

「お粗末様でした」

片付けて、再び釣りに戻る。

龍田はと言うと釣り上げた魚をめて、クーラーボックスに突っ込んでいる。

手際も良く、俺よりも上手い。

結局その日1日、俺は全く釣果に恵まれなかった。

龍田は二十数匹の釣果を得て、文句無しの優勝に輝いた。

当の龍田はと言うとこれで暫くは提督の晩飯に困らないわく、と言っていた。

頭が上がない。

休暇3日目。

今日は市街地に買い出しに出る。

先日の釣りで主食たる魚は干物などにして冷凍庫の中に入れられている。

本日買うのは調味料や日用品、野菜や米などだ。

大規模作戦の発動予定はまだまだ先であるし、それまでは陸の上で執務に明け暮れ、時折演習の指揮を執る日々だ。

だから必然的にここ、自宅兼執務室で食事を摂るのが殆どだ。

となれば冷蔵庫の中には食材が無ければならないのだが、無くなれば俺は飢えに苦しむことになる。

流石にそれは困る。

適当な服装に着替えて、出掛ける。

相変わらず装甲車と完全武装の兵士10名に守られての買い物だ。

とは言え流石に慣れたのか、奇異の目で見られることは少なくなっ

てきた。

見られはするが、何時もの事だ、ときつさと日常に戻っていく。一番近い雑貨店から寄って、石鹸や鉛筆などの日用品を買い込んでいく。

八百屋では各種龍田の書いたメモに書かれている野菜やら果物やらを何度も往復して買う。

他にも塩コショウなどの調味料に加えて、隼鷹達酒飲みが殴り込んできた時に備えて一升瓶を何本か買っておく。

それに米と小麦粉なども。

どれもこれも数週間分、それに俺と秘書艦の二人分だから量は多い。

装甲車とトラックに上手い事積み込む。

あとは何時もの店で珈琲豆と紅茶、それに緑茶を買っておく。

珈琲と紅茶は欧州出身勢が好んで飲むし、緑茶は日本勢が飲む。

同じ店で軍からの放出品である牛缶や豚缶、鳥缶を数個つつ買う。どれもこれもトラックに積んでいく。

兵士達には、トラックで待機している者を除いて空弾倉を装着しておくように言っている。

万が一暴発でもしようものなら、大事だ。

それに彼らは銃が無くてもナイフ一本銃剣一本あれば戦えるように鍛え上げられている、そんな強者達だ。

ここに居る面々は、海軍陸戦隊に属しているがその立ち位置は全く別の部隊の所属である。所謂特殊部隊だ。

所属は俺の直轄、部隊名は第413大隊。

海軍陸戦隊として存在する部隊は通常2桁番号で、3桁の部隊は特殊部隊だけである。

非正規戦や破壊工作、潜入工作、上陸前の機雷除去と言った特殊任務が主だ。

その任務の中には要人警護も含まれており、俺の護衛などお手の物である。

市街戦や対テロ戦も訓練されており、名目上は深海棲艦が相手であ

るが実のところ今現在彼らが投入された任務の9割が対人戦だ。

警察が、この大戦の初期に消防などと共に徴兵され壊滅してからというもの、その治安維持任務を軍が引き継いでいる為に、各地での反政府武装組織、特に多いのは大戦前に中国やロシア、北朝鮮と言った国の工作員やその支援を受けた現地協力者の摘発などだ。

これがまた厄介で、大陸への反抗作戦を実施するように求めている人間は大抵この繋がりか、もしくはただの馬鹿か。

戦前や戦中に向こうの国から流れて来た武器なんかも所持している場合が多く、通常の警察任務を担う憲兵では手に余る。

装備も拳銃程度の憲兵は太刀打ち出来ない。

警察業務をするだけなら戦前の警察同様、拳銃で十分だからだ。

そこで彼らにお鉢が回ってくると言うわけだ。

確かに深海棲艦と戦い、そして勝つことも重要だがその後の世界の事も考えねばならない。

その時に、このままの態勢でいけば日本は破滅する。

そうならないためにも、色々とやっておかねばならないのだ。

「皆、何時もご苦労」

護衛に就いてきてくれた兵士達に炭酸飲料と、煙草を1箱買って渡す。

「何時も態々ありがとうございます」

「いや、それは俺が言うべき言葉だ。ありがとう」

全ての買い物を終わらせ、昼頃に帰る。

護衛の皆と共に荷下ろしを済ませて、昼飯だ。

既に龍田が拵えてくれていた。

手早く済ませて、本屋で買って来た本を読む。

元々読書は好きだったし、この世界の娯楽なんてラジオか、読書なものだ。

ゲームもあるにはあるが、戦前からゲーム機本体とソフトを持っていく家庭しか今はやれないし、なんなら慢性的な電力不足が原因で使

用される電力も制限される中では出来ようも無い。

南方方面からの資源輸送が行われているとは言えど、深海棲艦による通商破壊戦や、陸海軍が作戦から輸送任務、訓練、戦闘で使用する膨大な燃料量を考えるとどうしても民間に回せる量は少なくなってしまう。

タンカー10隻もあれば、作戦中の大抵の艦には燃料を行き渡らせる事が出来るが、任務の性質上、奪還地域の飛行場は安全確保のために破壊してしまうことが多い。

故に母艦航空隊が作戦序盤の制空権を握る大切な鍵なのだが、そうになると艦隊は現地から離れるわけには行かない。

軍隊で使われる乗り物の殆どは経済性に難がある。

理由は軍事行動を取る上で経済性は二次、三の次になってしまうからだ。

軍艦と言うのは、訓練や乗組員の食事を作ったりする為に、電力を落とすことが出来ない。

仮に完全に罐の火を落としてしまうと再び動き出すのに丸々1日以上時間を必要とする。

俺が着任した頃は、燃料不足が深刻であったために基本的に訓練航海以外は罐の火を完全に落としていたが、今は奪還地域が増えて深海棲艦の本土爆撃や各地への圧力が増大した為に来襲したとなれば艦隊の総力を挙げてでも防がねばならない。

そんな時に丸々1日も呑気に罐の火を再び入れ始めていたら、間に合わない。

停泊時も常に燃料を消費するもので、戦艦や空母と言う大型艦にでもなれば一日30〜60tを消費する、なんてのは当たり前だ。

唯一完全に罐の火を落とすのは入渠する時だけである。

停泊しているときの方が、燃費が悪いわけである。

なんせ1cmも進んでいないのだからな。

唯一今まで民間に大量に流れていた、一般家庭にあるストーブなんかに使われる暖房用の灯油も今では本土防空を一手に担う震電の燃

料として使われているから民間に回せる量は極小だ。

石炭も燃料不足を解決するべく液化燃料に転用されて主に陸軍へ供給されている。

大規模作戦や、何時かの時の様に押し込まれたときの為に備蓄しておかねばならない。

まあ、それでも石炭による火力発電は行われているのだが、必要電力量には到底及ばない。

原子力は、深海棲艦による本土空襲が連日連夜行われる中では余りにも危険過ぎて稼働させることは出来ない。

そもその話だが、今の日本には燃料となるウランが存在しない。正確には、ウラン鉱床は存在はするが埋蔵量が少なすぎて採算が取れなさ過ぎて使うことが出来ない、と言うのが正しい。

元々日本はオーストラリアやカナダと言った国からウランを輸入していたが、例に漏れず輸入出来なくなったし、本土空襲が始まった時に安全性を考慮して稼働を停止している。

現段階の軍の目標の一つである豪州が奪還されれば、ウランの安定供給が為されるかもしれないが、それでも空襲がある限りは使えない。

軍にはマリアナ諸島を奪還する予定は無く、精々泊地として利用可能なパラオ諸島を前哨基地目的で奪還しても良い、ぐらいだ。

あくまでも陸海軍は豪州奪還に伴う南方方面での作戦を主軸に考えている。

マリアナ諸島の奪還作戦が発動されるとしたら、恐らくは南方方面での奪還作戦が全て終わってからになるだろう。

結局のところ、どれだけ戦っても敵の本拠地であるハワイ諸島を叩いて奪還せねば、太平洋地域での未来は無い。

今日日本の発電量の殆どを担っているのは石炭とガスによる火力発電であるが、軍での需要が高過ぎる為に、これから再生可能エネルギー、主に潮力発電や風力発電を主軸にしていく予定である。

太陽光発電は、敷地面積が少ないので大規模発電をするには随分と

開けた土地が必要だ。

しかし山々には田畑が広がっているし、都市部でも普通に人が暮らしている。

新しく土地を開こうとしたら、どれだけの期間と労力、金が必要になるか分からない。

太陽光発電は、各家庭単位での運用になる。

今現在、政府は一般家庭などに太陽光パネルを設置し、自家発電を行おうとする場合は補助金を出すとしている。

それでもしないと、今の状況では電力を賄えないからだ。

その点、早急に電力を必要とする今は風力や潮力は、日本は島国国家であるから太平洋やら日本海やらで幾らでも可能だ。

既に工事は始まっている。

あとは風力発電に必要な資機材を作る為の資源があればいいだけだ。

そちらには軍も協力して出来る限りの資材を供給している。

船舶の航行などの理由で設置する場所には制限を設けなければならないが、それでもかなりの電力量を賄うことが出来る。

あとは深海域に広がる海上油田やガス田、各種金属資源の鋳床の開発をも平行して行われている。

埋蔵量は屈指のものであるし、活用しない手は無い。

これが大々的に使えるようになれば、南方方面からの資源輸送に頼り切り、と言う状況にはならず済む。

自室では、龍田が部屋の本棚を物色して好きな本を持って行って読んでいる。

2時間ほどで、小説を1冊読み終える。

この仕事をしていると、より早く書類を呼んで考えて可否の判を押すために知らず知らずのうちに文章を読む速度がかなり早くなった。

だから普通の文庫本程度だと、2時間も掛からずに読み終えてしま
う事も多い。

こうした、軍人として何時しんでもおかしくない身分の俺からすれ
ば、何でもない特筆することの無い日常と言うのはなんとも得難く、
とても貴重なものだ。

特に今も最前線で戦い、そして死んでいつている部下がいると言
う、戦争の中では。

時折こうして過ごすことがあると、ふと思うことがある。

もしこの世界に来ることが無かったとするのならば、俺は今頃何を
していたのであろうか、と。

俺も今年で30になる。

普通であれば、結婚するなりして、妻子がいたりするのだろうか。
会社勤めであれば、そこそこのキャリアを築いていたり、役職に就
いていたりするものだろうか。

あの当時、これから先俺はどうするのだろうかと思う事もあつた
が、何となく考える事を避けていたように思う。

だから自分がどのような道を歩んでいたのか全く想像が付かない
のだ。

凡そ、俺の才能からすれば他と変わりない、特に突出したような人
生を送ると言う事は絶対に無かつただろう。

通っていた大学も、平凡なところだったし、成績も中ほど、兎に角
落第さえせずにいればよいぐらいの心持ちであつたのは疑いようも
無い事実だつた。

結果的に社会経験にはなつたが、それと言うよりは、何となく周り
がそうだったからと言うようにアルバイトをしていたし、勉学も特段
励んだりはしなかつた。

身体を動かすこと自体は好きであつたから、毎日ランニングと筋力
トレーニングはしていたが、自衛隊に進む訳でもないからそれが何の
役に立つのかと言われると、すぐには答えられない。

まあ、筋肉が無いと骨やら間接を支えられなくなるとか、やらない
でいるよりはやった方が良いであろう、とは言える。

そう考えると、本当に俺が元居た世界でどんな人生を歩んだのか全く想像出来ないのだ。

何冊か読み進めっていると、1700、終業を告げる喇叭が鳴り響く。栗を挟んで、椅子から立ち上がり身体を伸ばす。

ポキポキと音が鳴る。

停泊している艦上からも、それぞれ喇叭が鳴り響き、喇叭手の下手が随分と分かり易い。

鎮守府での喇叭手も、上手い奴はとんでもなく上手いが下手な奴はとことん下手だからなあ。

そこで音程がズレるのか、とか聞いていて飽きることは無い。

瀬戸内海が茜色に照らされ、多くの艦が浮かぶ光景は良いものだ。

恐らく、鎮守府や各艦上に居る戦史記録係達がカメラにこの光景を収めていることだろう。

戦史記録係は、いわば民間の従軍カメラマンと同じであり、その立場が軍人であることが違うだけだ。

今まで多くの写真を収めており、それらはデータや現像された写真として残されている。

作戦時ではない、平穏な時の日常や訓練から、砲弾銃弾飛び交う戦鬨中や戦地での生活や行軍のものまで様々だ。

それらは軍の広報活動に使われたり、単純に機密情報が写つてしまった写真以外は公開される。

機密とされている写真も、後年に必要とする者達が現れるであろうから可能な限り残してある。

特に艦艇の記録写真は貴重で、太平洋戦争中に失われた情報を大きく補完するものである。

それらは全て残すべき遺産であり、将兵達がどのような思いで戦い、死んでいったのかを後世に残さねばならない。

1800になると、龍田が拵えてくれた晩飯を二人で食べる。相変わらずの美味さであり、おかわりしてしまうほどだ。

食事を終え、少し休憩をした後にランニングに出掛ける。

1時間ほど走り、1時間ほど筋トレをした後に風呂に入って同時に歯を磨く。

時刻は2140であり、消灯時間まではまだ幾分か時間がある。

警衛業務や夜勤業務に指名されている者以外は、外泊を許可されていない者を除いて余程の理由が無い限りは基本的に2200には消灯となる。

艦橋などから漏れる灯りも随分と見慣れたものだ。

龍田を少しばかり雑談をして、消灯時刻になる少し前に龍田は帰っていく。

鎮守府敷地内には艦娘専用の寮があり、警備は下手をすれば俺よりも嚴重だ。

許可無く近付くとそれだけで二日間の独房ないしは営倉行きである。

因みにそれは俺も同様で、もし彼女達の寮に俺が近付いたとなれば容赦無く独房か営倉にぶち込まれる。

龍田を見送った後、ベッドに潜り込む。

本当ならば少しでも仕事をしたいところであるが、これでバレたら俺が怒られるのは当然だが龍田も怒られてしまう。

だからさっさと寝てしまうのだ。

夜更かしをするほどの理由も無いのだからな。

翌日も大して変わりない休日過ごし、そうして俺の休暇は終わったのであった。

序章 プロローグ

第一次ハワイ沖海戦概要

2016年7月18日から翌日19日に掛けてリムパック、環太平洋合同演習中の合同艦隊、及びハワイ駐留アメリカ空軍と深海棲艦隊との間に生起した戦いの総称。

結果としてこの海戦は合同艦隊、空軍部隊の大敗。

損失は合同艦隊の殲滅、空軍戦力の8割喪失という惨憺たる結果となった。

その後、アメリカ政府はハワイ諸島の防衛は事実上不可能と判断、同諸島の放棄を決定。民間人の避難の為に第二次ハワイ沖海戦が生起する事になる。

2016年7月19日午前11時47分

ハワイ諸島より北西に270km地点にて正体不明の生物、その数27が確認される。

同日、環太平洋合同演習中であつた合同艦隊は報告を受けるもクジラ等の海洋生物の群れと判断し対応せず、演習続行。

午後12時29分

突如として対抗演習中であつた合同艦隊が突如攻撃を受ける。未確認生物から放たれたと思われる未確認飛行物体からの爆撃、雷撃により40隻中13隻が轟沈。

内訳はアメリカ海軍は5隻、オーストラリア海軍2隻、大韓民国海軍2隻、中華人民解放軍海軍4隻。

即座に艦隊司令部は真珠湾の米太平洋艦隊司令部に報告。

米太平洋艦隊司令部は偵察を命令。

米太平洋艦隊司令部は本国の大統領府に報告を上げるも即座に対応が決まらず、具体的な指示はされなかった。

未確認飛行物体各種レーダーに一切、影が映らなかった事により未確認飛行物体は、既存の航空機よりも高度なステルス能力を有しているものと思われた。

当初各国艦隊は敵対国家による奇襲攻撃を一番に考えたものの、どの国にも被害があり現場での判断により無しとされた。

午後12時57分

現場指揮官の独断によりアメリカ海軍原子力空母CVN-74ジョン・C・ステニスより偵察の為にF/A-18スーパーホーネット、1機が飛び立つ。

この時のCVN-74ジョン・C・ステニス搭載機数は少なかった。F/A-18スーパーホーネット10機、AH-Wスーパーコブラ3機、CH-53Eスーパースタリオン4機、計17機で全てだった。

午後13時17分

艦隊司令部に送られていた映像により、どの生態系にも当て嵌まらないナニカの撮影に成功。偵察に出たF/A-18との通信途絶。

午後13時18分

情報を更集める為に艦隊司令部はF/A-18を4機発艦。同時に各艦隊に対し集合命令と輪形陣の構成を伝令。

午後13時27分

担当区間の決定や一度も連携訓練をしたことのない相手との輪形陣形成の為に多少手間取るも完了。その後艦隊は一度距離を取るために南へ変針。

午後13時47分

偵察に出ていたF/A-18を4機から通信が入る。

接触時間が大幅に遅れた理由としては、最初の偵察で得られた映像からレーダーらしきものを確認。それらを考え欺瞞航路を取っていたため。

結果、この偵察で得られた情報はF/A-18を4機を引き換えに未確認生物の総数とサイズ程度であった。

数は当初報告されていた27よりも遥かに多い77隻。

サイズは総じて数百メートル規模、一昔前の軍艦のサイズや艦影に酷似していた。

中には艦上構造物が無く、飛行甲板と思われるものを持つ未確認生物も複数確認。同時に現代の艦船では考えられない、巨大な砲塔らしき物を持つ未確認生物も同時に複数確認された。

午後13時56分

艦隊司令部CVN-74ジョン・C・ステニスの搭載機数は12機に減っており、ハワイ諸島に一時置いてきていた艦載機を急遽呼び戻す事に決定。

喪失した5機の補充機も含め、F/A-18のみで70機を数えた。

同時に役割の分担を行い、敵艦隊への攻撃はアメリカ艦隊が担当し、他艦隊は防空に専念する事となった。

午後14時14分

艦隊に未確認飛行物体群の接近を確認。

レーダーに反応はなく、空中哨戒機による目視報告だった。

数は約400機

未確認生物との距離、250km。CVN-74ジョン・C・ステニスから迎撃戦闘の為、第一陣にF/A-18、40機発艦。第2陣に未確認生物攻撃の任務が与えられ30機が発艦。

午後14時15分

迎撃隊の40機が未確認飛行物体との戦闘開始の報告。

中距離空対空ミサイルが二波にわけ40発づつ、計80発発射。第一波は命中36を数える。第二波の命中は34発。

通常ならばこれで最大70の撃墜を数える筈だったが、撃墜を確認出来たのは0。

あまりの驚愕により判断の遅れが生じ、次にミサイルを放ったのは3分後の事だった。

午後14時20分

迎撃隊は短距離空対空ミサイルを発射。

命中弾を多数数えるも、撃墜は無し。数で囲まれ格闘戦に引きずり込まれる。この時の報告によれば、「目視した限りレシプロ機としか思えない機影だ」との事。

しかしながらレシプロ機を相手に行っているとは思えないほどに焦り、追い込まれている声であったと言われている。

午後14時30分

迎撃隊との通信、完全に途絶。

殲滅された、と艦隊司令部は判断。

午後14時49分

攻撃隊から、攻撃開始の報告を受ける。

攻撃隊は立て続けに空対艦ミサイルを発射。全弾命中を確認するが目標への損害は無し。対して攻撃隊は多数の未確認飛行物体の迎撃を受け壊滅。27機を失う事になる。残った3機も被弾により2機が帰還出来ずパイロットはペイルアウト。しかしながら救助をすることが出来ず、MIA（作戦行動中行方不明）とされるも後日ハワ

イ放棄後、K I A（戦死）とされた。

午後15時37分

未確認飛行物体群による攻撃を受ける。

事前に艦隊空ミサイルの一斉射を行うも効果は無し。

この攻撃により残存27隻中CVN-74ジョン・C・ステニスを含む23隻が轟沈。

たった4隻しか攻撃を切り抜ける事は出来ず、残りの4隻も機関部への甚大な損傷、兵装の殆どが破壊されていたりと戦闘をすることが出来ず真珠湾に向け変針。

真珠湾に到着する前に再度攻撃を受け3隻が轟沈。残った1隻も入港する前に浮力がなくなる寸前でハワイ島ハプナ・ビーチに座礁させる。

生き残った乗員はすぐさまオアフ島に飛ぶ。

午後16時28分

合同艦隊壊滅の報告が米太平洋艦隊司令部に報告される。

航空機の手配に手間取り報告が遅れる。

午後16時49分

40隻もの艦隊をほぼ殲滅するような相手に対しての対応に手間取っている間にホノルル全体が空襲を受ける。未確認飛行物体の総数は450機以上。

レーダーには映っていないかった。

飛行場への被害も多少なりともあったが即時復旧、戦闘機を飛ばせるまでになった。

午後17時30分

空軍に対して戦闘準備命令が下令。
攻撃準備開始。

午後17時50分

空軍、戦闘準備完了。

戦力はF-22戦闘機44機、F-15E戦闘機36機。B-52爆撃機28機の総勢108機。これまでにない大規模な戦力となった。

空中集合の後に未確認生物群へと向かった。

これほどの数と戦力を一纏めにしての攻撃なのだから誰もが殲滅は出来ずとも大打撃を与えることは容易であると考えていた。

午後18時30分

対艦ミサイルを発射。

多数命中するも効果無し。

午後18時37分

攻撃隊、迎撃を受ける。

F-22、F-15戦闘機は制空戦闘開始。

しかしながらあまりにも数が多く多勢に無勢となり次々に落とされていった。

午後19時29分

攻撃隊、帰投。

残存機数F-22、5機。F-15、全滅。

B-52、20機。

B-52の被害が最も少なかった理由は戦闘機隊が文字通り身を挺して守ったからである。ただし残存機の殆どが被弾し次の戦闘に

耐えられる機体はB—52が数機のみだった。

翌日午前7時24分

未確認飛行物体群がハワイ諸島全域を空襲。

被害は前日の物とは比べ物にならないほどに甚大、飛行場は全て1か月以上使用不可能、港湾設備も復旧に年単位の日数が必要なほどの損害を被った。

しかしながらもし艦隊が無事だったとしても米太平洋艦隊司令部の貯蔵していた燃料の殆どが焼き払われ、まともに行動することが出来なかっただろう。

これにて一連の戦いは終了した。

しかしながら午前8時42分にオアフ島近海に巨大な軍艦らしきものを確認、砲塔と思われるものがホノルル市街及び周辺に照準を付けていると思われ、即座に避難命令が出されるも間に合わず、砲撃が開始され民間人に多数の死傷者が発生、これがワシントン・D・Cに報告されると事前の偵察写真やB—52の搭乗員が撮影した写真や映像の解析した上で、太平洋に残存する戦力で敵戦力を駆逐することは困難であると判断された。

この時点で、米大統領はハワイ諸島の民間人の避難のために軍を投入することを決定。

この2週間後、ハワイ諸島の民間人撤退の為に第二次ハワイ沖海戦が勃発。

結果は避難途中の輸送船団、護衛艦隊諸共に壊滅的打撃を受け、米海軍はこれ以降太平洋での作戦行動がとれなくなる。同時にハワイ駐留の陸軍師団、海兵隊師団は引き付ける為に残り、3日後に連絡が途絶。恐らく殲滅されたものと思われる。

その後の影響。

それ以降各国は協議を重ねるも時すでに遅し。

国連で未確認生物の正式名称『深海棲艦』と決定されるまでに深海棲艦は急速に世界中の海域に拡大、各国の海軍は沿岸部を守る事で精一杯、あまり海軍力の強くない国は沿岸部を全て奪われ内陸部に避難。しかしながらそれでも安心する事は出来ず深海棲艦が飛ばした航空機によつて連日連夜の爆撃に晒される事になる。

その影響でシーレーンは機能せず、何とかして防衛、タンカーや輸送船の護衛をしようにも、一切攻撃は効かず、一方的に殴られるばかりで派遣した輸送船団と護衛艦隊が一隻も帰ってこないというのも珍しくない状況になっていた。

これにより特に影響を受けたのは資源を輸入に頼っていた国々である。日本も例外ではなく元々国内に備蓄されていた資源に頼るしなくなつた。

何度か反抗作戦が試みられるもその全てが海の藻屑と消え、島嶼帯の防衛についた陸上戦力も各個撃破、殲滅されていき一人の生還者もいなかった。

しかしながら燃料があるうちはまだ各国は近海の制海権は奪われど敵艦隊の撃退には成功していた。

と言つても本土を攻略する意思が深海棲艦にはないのか適当なところで引いていったと言つた方が正しい。

嫌がらせの様に現れては戦力を削っていく、そのようにも見えた。

徐々に国民生活にも影響し始め、残つた備蓄燃料も殆どが防衛の為に艦艇を動かすために回され車など殆ど走らなくなった。

電気も最小限の発電しかされず夜になれば何百年も前のように真つ暗な闇が世界を覆つた。

海軍戦力のみで陸軍戦力は役に立っていない、というわけでは無

く、対空戦闘や沿岸部に出現した深海棲艦への砲撃などで空海戦力の不足を補っていた。

アジアでは特にこのようなことが見受けられ、沿岸部を守り上陸を阻止していたのは日本ぐらいであり、中華人民共和国も海軍戦力の拡充をしてきてはいたが未だに発展途上で内陸部へ後退。

欧州ではイギリスが主体となり、ドイツ、フランス、イタリア、スペインといった各国で最初期は何とか持っていたものの、徐々に戦力回復が追い付かず自国の沿岸部防衛で精一杯の状況が続いた。

そんな絶望の中、日本近海にて艦娘とともにその艦体、同時に妖精と呼ばれる存在が現れる。

第1話

立っていた。真っ白で何も無いただの空間に。

気が付くと俺は何処かにぼうつと立っていた。

そこには何も無く、ただ広がる空間。

踏んでいる感覚はあるのに何処か実体がない地面の様な感じだ。しつかり踏み締めて立っていると言うよりは若干ふわふわと浮いている、と言った方が正しいかもしれない。

夢でも見ているのか？いや、それにしても妙に現実味があるな……

キヨロキヨロと周りを見渡すが本当に何も無い。いや、存在しないと言った方が正しいか。

そんな、夢にしてはやけに現実味のある、これは現実に起きている事だ、と思ってしまう様な空間に立ってから数分。なんとなく気配を感じた。

……？いや、気のせいかな？

しかし気のせいにしては気配の多さと、視線の数が多し気がするな。かなりの数に、一斉に見つめられている感覚だ。

それこそ学校のステージの上に立った時などとは比べ物にならないぐらいだ。俺は実際に立った事など無いのだが、どう考えても数が多し。多すぎる。

段々と恐怖感が湧き、どうすれば良いのかと助けを求める様に周りを見るも何も無いのだからどうしようもない。

すると、あくまでも感覚でしか無いが、遠くの方に人影の様な、ぼんやりとしたものが目に映った。

あれは何だろうかと見つめてみると、驚いた事に段々と数を増やし

ていくではないか。

しかも10や20なんて小さな数では無く、何千、何万、何十万、何百万とどんどん膨れ上がっていく。

それらは一樣に軍服の様な服装であったり私服を着ていたりバラバラだったが明らかに軍人と思えるものが多かった。

―― お前達はなんだ!? 何故俺を取り囲みそんなにも見つめる!?――

恐怖心に、そう声を出そうとするが声は出ない。無意味に口を開閉させるだけで終わった。

すると、何処からとも無く声が聞こえてくる。

―― 祖国に、戦友に、武運長久があらん事を――

―― 家族に、子に、親に、孫に、愛する者達に平和な世界を――

―― 再び自由な海を取り戻せ――

―― 勝利を君の手に――

次々と聞こえてくるこえは、底冷えする様な、ぞつとするほどに怖いものだった。

執念や、怨念とも取れる程に恐ろしかったが、最後の最後に、温かいと感じた。

なんと言ったかは分からないが、何処か温かいと感じた。

火などの暖かさと言うよりは人間の温もりと言った感じで、自身の家族や友人知人達、祖国を思いながらと言った感じだろうか？

俺の意識はそこで途切れた。

ふと、意識を取り戻し気が付くと何処か見覚えのある様で、見覚えの無い場所にポツンと立っていた。

ここは何処だろうか？

高層ビルは崩れて瓦礫になっていたり、半壊していたりとボロボロだ。

アスファルトで舗装されていたであろう道は、瓦礫に埋もれ、見え

ていても大きな穴が空いている。

建物全体も、もう既に何年も使われていない様相でメンテナンスもされていないのか崩れていないものも劣化が進んでいるのが分かる。それどころか、人の気配が無い。薄いとか少ないではなく本当に無いのだ。

「何処だ……」

そう漏らした声に答える声は無い。

ウロウロと歩き、瓦礫の中からここがどこなのかを知る為の手掛かりを探す。しかしここが俺が住んでいる日本だと言う事は辛うじて分かる程度。

幾らか歩いてみたが瓦礫の山と言う言葉がそっくりそのまま当て嵌まる。

しかし多少の収穫はあった。

看板なんかに書かれている文字は紛れもなく日本語だったからだ。しかし詳細な位置を知る為の情報は得られず、どうすれば良いのか分からずじまい。

なんだかんだで3時間程歩き回ったのかかなり疲れその辺の適当な瓦礫に腰を下ろした。空を見上げると太陽は真上にある。

今は大体昼頃って事か。

そう考えても状況の改善には何の役にも立たない。

これからどうすればいいか分からず息を吐く。

そして唐突に先程漏らした俺の声に答える声の変わりに聞こえて来たのは何かのエンジン音の様なものだった。

車何かとは全く違う音で、同じ地面を移動している乗り物では無い。

「空か？」

そのエンジン音は、ビルが崩れ見やすくなった空から聞こえて来る。

しかも複数が同時に群れを成して飛んでいる様な感じだ。

首を動かして探すと、ずっと遠くに巨大な機影が何十機と固まって

此方に飛んで来るのが分かる。色は紫の様な黒だ。

なんだあれ。

あんな趣味の悪い飛行機なんて見た事無い。

まあ飛行機には余り詳しくは無いので不確かだが、態々あんな色合いの飛行機を集めて一斉に飛ばすなんて馬鹿な事はしないだろう。何かしらの宣伝が目的ならあんな色合いにするより宣伝を書き込む筈だが。

そこまで高い高度を飛んでいる訳では無さそうだ。

するとそれとは別の、真反対の、俺の後ろの方から別のエンジン音が聞こえてくる。

このエンジン音の主は巨大な機影よりも小さく、頼りないと感じる。しかしながら此方も複数機いるのか合わさって大きな音だ。

その小さなエンジン音は、俺の頭上を飛び去ると巨大な機影に向かって行く。その機影はプロペラで飛んでいて、ジェット機が殆どを占めるこの時代においてはどこか古めかしいと感じる。だが同時にとても頼もしく力強いと感じた。

その翼には赤い丸が書いてあり、恐らくは日本の飛行機なのだろう。

しかし何が起きているんだ？訳が分からないぞ。

巨大な機影を見ていると、それに向かって白い筋が何本も伸びて行く。見ただけで数十はあるだろうか。

頭上を飛んで行った機体では無いだろう。速度が違いすぎる。

白い筋は巨大な機影に伸びていき、爆ぜた。

「!?」

何十と言う赤い火が膨れ上がり消えて行くが、巨大な機影に何かしらの被害がある様には見えない。

悠々と跳び続ける。

暫くすると先程頭上を飛んで行った飛行機が巨大な機影と、明らかに戦い始めた。幾つもの赤い線が巨大な機影に伸びていき、巨大な機影からは黒煙が吹き出て落ちて行く機体すらある。

しかしながらその逆もあり、クルクルと回りながら落ちて行く。すると、ふとかなり近い距離である事に気が付いた。

段々と戦っている集団は此方に近づいてくる。

遂に頭上に来て、更に進んで行く。

すると頭上を飛んで行った飛行機は急に離れて行った。

次に起きたのは巨大な機影の周りや中心に爆発が起き、黒い煙を残す。

更に暫くすると連続した爆発音が何度も聞こえてくる。

もう本当に何が起きているのか全く分からない。

頭上を飛んで行った飛行機がかなり低空を飛ぶと、俺に気が付いたのか翼を左右に何度か振ると何処かに飛び去って行った。

しかし、本当に何が起きていたんだ？

それからどうする事も出来ず。暫く瓦礫の山に座り込み考えていた。

すると、どこからか車のエンジン音が聞こえて来る。次は何だ？

車は明らかに軍用車で、そこから3人の迷彩服を着た男達が降りて来た。車には運転席に1人と、天井に取り付けられたでかい銃を構えているのがもう1人。合計で5人はいるのか。一体何の様だ？

「両手を上げて膝を地面に付け!!」

いきなりなんだ!?

「ちよ、ちよつと待ってくれ!今何が起きているのかさっぱり分からない!」

「いいから指示に従え!」

男達はそれぞれ銃を俺に向け構え、引き金に指を掛けている。

おいおい、本当に何が何だか分からないんだぞ。

俺はこのまま押し問答を続けても仕方が無いので指示に従う。

最悪撃たれかねない。死ぬよりは良いだろう。

男達の1人が俺の後ろに回り、手錠を掛ける。

そして車に乗せられ、何処かに向かつて走り始めた。

これから俺はどうなるんだろうか。

そんな不安を感じた。

———— side ??? ————

ウウ————!!!

空襲サイレンが鳴り響いた。

これも毎日毎日来る深海棲艦の定期便だ。

俺達妖精と、艦娘が現れてから既に3年が過ぎていた。

人類が深海棲艦との存亡を掛けたこの戦争が始まってから4年。

当初は負ける事もあつたが全体的には勝ち進み、深海棲艦が一番最初に発見されたハワイ奪還作戦を実施するまでに盛り返した。

シーレーンも回復して船の行き来はアジアに限れば活発にもなった。

しかしながらハワイ奪還作戦の大敗によつて、後退を余儀なくされた。

多くの犠牲を払って奪還したミッドウエーを放棄、南太平洋で守りを固め、ラバウルに戦力を集中させたがラバウルが陥落。ビスマルク諸島が深海棲艦に奪われた。俺はその時から妖精として戦い続けているが負け戦ばかり。

カロリン諸島で防衛を固めて敵艦隊を迎撃したがこれも失敗。

航空隊も、艦隊も海に消えて、守備隊も同じように1人残らず死んだ。

南西諸島からフィリピンのラインまでで陸海空の区別無く、残った戦力の殆どを本土防衛に最低限必要なほんの僅かの航空隊を残して、

掻き集めて挑んだ反抗作戦も失敗。

作戦は悪くはなかった。ただ、敵の数が余りにも多過ぎたのだ。もし戦力比が同等か、せめて2倍程度ならまだ勝ち目があったかもしれない。

だが深海棲艦は空母だけで20隻以上。それらの護衛の戦艦や巡洋艦、駆逐艦を含めれば純粋な戦闘艦艇だけで数百隻。

さらに上陸船団と思われる部隊も複数発見された。

敵主力艦隊との戦闘ですら覚束無い状況なのにそこに、更に上陸船団だなんて無理があった。

輸送ワ級だけではなくその護衛艦隊も相応の規模。

あの時点での撤退命令は、確かに理にかなっていた。

実際に艦娘とその艦体は損傷はすれど殆ど失われずにすんだのだから。

だが俺達航空隊は違った。

攻撃隊は敵艦隊に向かう道中で落とされていき、護衛の俺達戦闘機隊は何も出来なかった。

成す術なく燃えて落ちて行く艦攻や艦爆、狙われた艦攻の身代わりとして被弾し爆散した僚機。

燃料タンクに被弾し、自身も重症を負って帰還は困難と判断したのか敵艦に突っ込む総隊長機。

なけなしの戦力でなんとかして物資を持ち帰ろうと輸送船団護衛の為に正規空母瑞鶴、大鳳の2隻も引っぱり出して、俺も瑞鶴に愛機と共に乗り込んだが奴らは輸送船だけを狙って俺達には目もくれなかった。

余りの数の多さに自身が落とされたい様にするので精一杯。

挙句、大鳳までもが大破。なんとか本土に帰る事は出来たが、今日まで物資不足で修理すら出来ていない。

空母航空隊は壊滅。

残ったのは一定以上の腕を持つ奴らだけだった。全体の2割程度に過ぎなかった。これでも戦争初期から生き残っていた妖精、各地の戦いでエースクラスの戦果を残した連中を集めたのにこの結果。俺は偶々運が良かった。愛機である零戦52型がエンジン不調を起こして飛べなかつたから生き残れただけに過ぎない。

最後は攻撃を受けて次々と沈んで行く輸送船を見ているだけで、何も出来なかつた。

そんな日々がもう丸々2年。

備蓄していた燃料も底を突き掛け、弾薬も生産はされているが供給量は明らかに少なく足りていない。

新型機の生産が開始された、と聞いたが現状では何の役にも立たないだろう。幾ら性能が良くても数が揃っていないければ袋叩きにされる。

潜水艦による輸送作戦が何度か成功して、燃料は極小ながらも補給の目処があるだけマシ。

船を動かすだけの燃料は無く、潜水艦娘以外の艦娘と艦体が最後に動いたのはいつの事だったか。

燃料タンクの燃料を全て底まで搔つ攫えば幾らかは集まるかもしれない。

そう思いながらも何も出来ず。

しかしながら定期便相手に迎撃に出ないと言う訳にもいかない。

「敵機の機種と数は？」

「B―24です。機数は60機以上」

「高度は？」

「3500mです。低いですね」

「昨日の迎撃で散々邪魔をしてやったからな、爆弾の命中率も悪かつた。今日は多少の犠牲を払ってでも命中率を上げたいんだろう。進路は？」

「このまま真つ直ぐに飛び続ければ、この飛行場か更に奥にある工場地帯です」

「飛行場だろうな。機数が多い爆撃を受ければこの飛行場は2、3日は使えなくなる。それからゆっくり工場を叩けばいい話だ」

対空電探手と会話して、滑走路に走って向かう。

すると既に皆集まって整列をして待機していた。

「すまない、待たせた」

「いいえ、問題ありません」

「それでは、今日も深海棲艦の奴らの定期便だ。機数は60以上、機種はB-24だ。高度は3500mと低い。迎撃するには楽だが……昨日の迎撃で損傷した機体が多い。出撃出来るのは俺を含めて20機」

皆は黙って聞いている。

しかしながら俺が20機しか出撃出来ないと言うと、悔しそうに顔を歪め、拳を握る者がいた。

昨日の迎撃で機体が損傷し、修理が間に合わなかった連中だろう。

昨日は全員で53名と52機の紫電改二戦闘機が存在したが30機が迎撃に向かい、迎撃から帰った時は41機まで減っていた。その中の26機が被弾、比較的損傷が小さい機体から修理をしているため20機まで戦力は回復したが、今日は倍の数の敵機を相手取らなければならぬ。

しかもこの紫電改二は今現在本土防空しかしないため、いくつか機体内に内蔵されている燃料タンクの幾つかを下ろして代わりに防弾板を増やしたために機体の操縦性がかなり下がってしまった。速度も低下してしまった。

まあこれは残存する航空隊の機体全てに言える事なのであまり大きな声で文句は言えない。

元々俺達は空母搭乗員だったし、しばらく前まで使っていたのも零戦52型だ。そのあとに紫電が来たが今は紫電改二。

この紫電改二は、陸上機として開発された紫電を艦載機用に改造を施したもののだが今は動かせる空母が無く、一度も空母で運用され

しれない。

そんな縁起でもないことを考えてしまう。

軽く頭を振るってそんな余計な考えを消し飛ばすと戦闘に集中することにした。

俺達の部隊は精銳が集められているんだ、奴らなら大丈夫。

下を覗くと敵編隊は真下を通り過ぎていた。

「攻撃開始！・攻撃開始！」

その合図と共に機体を横転させて敵編隊に向けて突っ込む。

すると敵機のそれぞれの銃座から一斉に火箭が伸びてくる。機体の横やコックピットの横を飛んで行く銃弾の音がビュンビュンとするが未だに命中していない。

距離が100mでエンジンを狙い引き金を引く。

放たれた20mmの弾丸は、正確に1機のB-24のエンジンを貫き、翼をへし折った。そのまま機体を敵編隊の下に潜り込ませる。

後ろを見ると全機攻撃に成功したようで、14機ほどがエンジンから黒い煙を吐いている。

撃墜出来たのは……4機か。出来ればもう何機かは落としかつた……仕方が無い。

敵編隊を離れ降下のエネルギーを使いながらそのまま機首を起こしてもう一度敵編隊の上を取り同じように攻撃をする。しかしこれ以上、上を取っての攻撃は難しそうだ。これつきりだな。

「各機、この攻撃が終わったらロツテを組め。次は横方向から攻撃を加える。万が一の場合の判断はそれぞれに任せる。行くぞ」

通信でそう伝える。

そのあと、攻撃を加えた。

後ろを振り向くと、B-24ではなく2機の紫電改二が火を噴いて落ちて行った。

B-24は5機落ちていくのが分かる。さっきの攻撃で黒煙を吐いていたやつを狙ったから楽に落とせた。

しかし今回は2機を引き換えに5機か……厳しいな。

攻撃を加えた後、早い段階で機首を引き起こして離れていきロツテを組み左横から攻撃を加える。

B―24の銃座から飛んでくる弾を右へ左へ避けながら代わりにこっちの20mm弾を叩き込む。

そんな戦闘をしていると、気が付けば対空砲の射程圏内に入っていた。

本当ならばもっと戦闘を続けたいのだが同士討ちは絶対にあつてはならない。それに我々も20機中、9機が落とされた。幸い脱出した者もいるがこれじゃ壊滅的な打撃を受けたといつてもおかしくない。

しかし、またしても途中不思議な感覚に襲われた。

ほんの少しだけだが確かに、機体のエンジンの調子なんかも良くなったし何よりも俺自身の視界が透き通った。

判断能力も上がっていたし敵編隊の一番弱そうな箇所も何となくだがかかった。

事実俺だけではなく部下達もそうだったようでその時だけは動きが普段よりもずっと機敏だったのを覚えている。そのお陰か、B―24は当初60機もいたのに飛行場を爆撃出来たのはパツと見て30機程だったようだ。

それでも護衛戦闘機無しの敵爆撃機を相手に8機も落とされてしまった。

かなり機体同士が密集していて弾幕が濃密だったからかもしれない。

こちらへの損害は1度目の攻撃は損害無し。

2度目は2機失った。

3度目でもう2機。

4度目で更に3機。

5度目で2機。

2回目以降になると確実に2機は落とされている。

『ええ、問題ありません。計器は全て異常無し。燃料が続く限りはまだまだ飛べます』

「よし、警戒が終わったら少しだけ探しものだ」

『脱出した連中ですか』

「それもあるが、敵編隊に向かう途中と戦闘中、帰ってくる途中でなんだか不思議な感覚を覚えたんだ」

『ああ、それですか。私は気のせいだと思うんですが……確かにエンジンの調子や私自身の動きが全然違いましたからね』

「ああ、それに3回も同じ場所でその感覚があるなんておかしいだろう。探す理由としては俺的には十分だと思うんだが、どうだろうか」

『……そうですね、脱出した奴らの搜索と言っておけば上もあまり文句は言つてこないでしょう』

「ははは、そうだな。上にはそう報告しておこう。それじゃ、空中警戒が終わり次第探しに行くか」

『了』

それから全機が降り立ち機体から全員が降りたのを確認すると俺と副隊長は機体を翻し脱出した部下と、例の感覚を覚えたあたりに飛んで行った。

探しに行つて戻ってきた。

今頃は全員に迎えが言っていることだろう。

そして例の感覚だが、結果としては大当たりだった。探しに行つたとき再び同じ空域で同じ感覚を覚えた。その辺りを探した結果、人間を1人見つけた。

あの人間を見た瞬間に、こううまく言い表せないが強く感じるものがあった。

向こうは何が何だか分からないといった顔でこちらを見ていたが、俺はあいつに絶対何かある。あいつがこの感覚の原因だ、と確信し

た。

しかし、あの辺りは危険区域として一切の立ち入りが禁止されている筈なんだがどうやって入り込んだんだろうか。監視網に引っつかからずに入り込むのは不可能なんだが。

まあ取り敢えずは救助するしかない。連絡をして迎えを寄こすことにした。

本当は迎えが来るまで上を飛んで守るべきなんだろうが俺も副隊長も流石に燃料が無くなってきた。今戻らねば俺たちは燃料が空になつて墜落だ。

仕方なく飛行場に向かった。

飛行場に戻ると、部下達が出迎えてくれた。

報告を受けると、どうやら明日までに修理できる機体は今現在修理を進めている機体を合わせてもたったの10機。

出撃出来るのは俺を含めてたったの12機だそうだ。

これは、流石にまずい。

もう一度同じ規模のB-24が襲ってきたら殆どを取り逃がすことになる。

B-24に限らずだが……これでこの航空隊も壊滅か。

整備班も同じ結論に至ったのか、今も死に物狂いで修理を進めている。

だが2、3機増えても成す術が無いのは同じだろう。

明日の定期便までに果たして何機が飛べるようになるだろうか。

そもそもこの日本に、希望はあるのだろうか。

第2話

今俺は何処かの軍事施設の一室にいる。

と言うのも瓦礫となった街中で迷彩服の男達に連れられてここに来たのだが、明らか軍事施設としか言えないのだ。

入り口は鉄条網とフェンスで囲まれて、完全武装の兵士が何人も立って巡回していた。これでただの民間施設だ、というのには明らかに無理がある。いや、無理だと断言しよう。

詳しい場所も分からないしどうしようも無いのだが。

俺は今この施設で職務質問と言うか、いや尋問と言った方が正しいだろう。

俺と相對しているこの人は、話し方は柔らかいが発せられる雰囲気はかなりピリピリしている。いや、ピリピリなんてものじゃないな。

それにこの施設全体がそんな雰囲気纏っているから、正直なところ居心地が悪くてしょうがない。それどころか今すぐにでも逃げ出してしまいたいぐらいだがそれは叶わない夢だろうな。

「それで、何度も聞くが君は何故あんな場所に居たんだ？」

「本当に全く記憶が無いんですよ。なぜあそこに一人で立っていたのかも、あそこにいたのかも。気が付いたらあの辺りに立っていて。少し歩き回ってみましたが結局のところは分からずじまいでした」

「それで、もしその話が本当だ、としてもその話を私が信じるとでも？そもそもその話の信憑性など皆無じゃないか。本当の事を言った方が身の為だぞ」

「本当の事なんですけど……」

そうやって何度も同じやりとりを繰り返す事1時間。

だんだんと相手側の話し方も最初と比べると随分と堅苦しくなってきた。本当のことを言っているつもりなんだが……

そもそも記憶が定かじやないから確証をもってこれだ、そうだ、と言えないし領けない。

ちらりと時計を見るとかなり時間が過ぎていた。

時計が掛かっているから時間は分かる。今の時間は3時半だが流石に同じやり取りを2時間も続けていると疲れて来る。さて、どうしたものか……

すると部屋のドアを開けて1人の男が入って来た。

その手には何かの書類が握られており、挨拶と共にそれを差し出して何か話始めた。

「失礼します。少佐、調査の結果です」

「ご苦労」

大尉と呼ばれた彼は、書類を受け取ると読み始めた。

しかし、大尉と言う階級がどれほど高いのかは分からないが、随分と若い気がするな。見たところ20代前半だろうか？恐らく30代では無いだろう。

しかしそう思えば、今の今までにすれ違ったりしてきた人達も全員、かなり若いと感じた様に思う。

普通なら40代50代がそれなりにいてもおかしくは無いのだが……

しかしながら全員の顔には疲労が色濃く浮き出ている、ある種の絶望に近い顔をしている人もいた。本当に今、何が起きているんだろうか。

「それと、彼にお会いしたいと言う方が」

「会いたい？誰だ？」

「第343海軍航空隊の隊長殿と副隊長殿です」

「何？何故彼らが……」

「分かりません。それと調書をご覧頂きたいのですが」

「……なんだこれは。何の情報も書いてないじゃないか。まるつきりただの白紙だぞ。」

「どうやら戸籍などの情報が一切存在していない様なのです。一切の痕跡がありません。出生記録も、修学記録も、職業履歴も何も。最初から存在して居なかったかの様だと調べた連中も困惑していました。今現在各省庁に確認中ですが望みは薄いです」

「……分かった」

「それで、面会要請に付いてはどうしますか？」

「……取り敢えず保留にしたい」

「ですがお二人共、既に居らっしゃっています。どうやら今すぐにも、可及的速やかにお会いしたいと」

「そんなに重要なのか……？まあ分かった。4時に面会出来るようにしておいてくれ。それまでは待っていて欲しいと伝えてくれ」

「分かりました」

「それでは下がってくれ」

「はい。失礼します」

俺の事を尋問していた、階級の高そうな男と今入って来た男は何か話すとまた出て行った。

よく聞こえなかったが何か問題でも起きたのだろうか。

「さて、君の調書が届いたが……」

「はあ」

と言われても生返事しか返せない。

そんなものが届いたと言われても俺にはどうしようもない。少なくとも人に見られて困る様な生き方はしていない筈だが。

「どうやら君は、存在していないらしい」

「はっ」

「戸籍から何かから何まで一切痕跡が無い。と言う事はだ。君の言っていた事がにわかには現実味を帯びて来る事になるが……」

「す、すみません、本当に一切記録が無いんですか？」

「ああ。我々は追い詰められているとは言えかなりの情報収集能力があると自負しているのだが、それらを持ってしても君の情報が得られなかった」

彼は俺に調書を差し出す。

俺はそれを受け取り、端から端まで見るが俺が通い、卒業した筈の小学校や中学校、高校の名前は一切載っておらず、代わりに不明の判子の2文字だけが押されていた。

それどころか、家族構成欄には両親やばあちゃん、姉さん、弟の名

前も本籍地の住所も家のある住所、郵便番号も電話番号も書いていなかった。

本当に何も書いていないただの紙切れだった。

「……なんだこれ」

「君から聞いた御両親の名前も姉弟の名前も探したが無い。住所などはあつたが君が住んでいた、登録されていた記録は一度も無かつた」

「……ここは、ここはどこなんですか？」

「ここか？ここは埼玉県秩父市山中に作られた陸軍第1師団本部の一室だが」

「は？そ、それじゃ俺が拾われた辺りは？」

「あそこは板橋区の辺りだな。それがどうかしたのか？」

「……今は、今は何年ですか？」

「今は、2020年6月5日だ」

俺は、混乱しながらも幾つかの質問を試してみた。

すると、更に混乱を加速させる情報ばかりが返ってくる。

まず、陸上自衛隊はあつたが陸軍なんて存在していない。

それに秩父市？山中？しかも地下？そんな場所にそんなものが存在していたなんて聞いた事も無い。

俺が拾われた辺りは板橋区だが、板橋区はあんな瓦礫の山じゃない。いや、通つて来た道の建物も全て瓦礫になっていたが日本はそんな事になっていたらなんて聞いた事もない。

そもそもそんなことになっていたら絶対になら絶対になら絶対にニュースや新聞で大きく報道されるはずなのにそうではない。

さらに、俺がいた日本は2016年だったはずだ。

それなのに4年も先の日本？俺はタイムスリップでもしたのか。

どういう事だ本当に……どうなっているんだ？

「……少佐、さん」

「なんだ？」

「俺は……今いる日本の事を知りません」

思い切つて、言ってみることにした。

確証は持てないが、今いる日本は、この世界は俺の知っているもの

ではない。

「はあ……？何を言っているんだ一体。そんなわけないだろう。いくら戸籍などが存在しないからと言って自分の生まれ育った国の事を知らない訳が無い」

「……俺がいた日本は、まだ西暦2016年でした」

「……話を聞こう」

俺の声音が、本気の本物だと分かったのか先ほどまでは頭がおかしくなった奴を見るような感じだったが今はしっかりと椅子に座り対面して座っている。

俺だったら信じないし話を聞くこともしないだろうに、戸籍も何もない、本来なら信用出来る訳が無い人間の話を聞いてくれようとするなんてこの人はとてもいい人なのかもしれない。

「俺がいた日本はまだ西暦2016年でした」

「それこそ信じられない話だが……その顔を見る限り本当の事の様だ」

他にも陸軍が存在していない事などすべてをぶちまけた。

「……話は分かった。だが今すぐに信じろと言われても無理がある。っと、時間か。すまないが君に会いたいと言っている人、いや妖精が居てね。まずは彼らに会ってほしい。それと今の話は面会中に考えさせてほしい。さつきも言ったがすぐに信じられる話じゃないからな」

「分かりました」

「それじゃ、ここで待っていてくれ」

そういうと少佐さんはどこかに行ってしまった。

数分すると代わりに入ってきたのは、体格の良い男性が2人。

身長は160cmくらいだが少佐さんよりも遥かにがっしりとした身体だ。

「初めまして、海軍第343航空隊隊長の原田です」

「初めまして、同じく343空の山岸です」

「あ、どうも初めまして、湯野です」

それぞれ挨拶と握手をする。

原田、と名乗った彼の手は俺の手に比べるとはるかにごつごつとしていて、頼もしい。

しかし陸軍の次は海軍が出てきたか……もう本当にどうなっているんだ。

「さて、私達がここにきた理由ですが……あることを確かめたかった」「はあ……」

「まあいきなり言われても困惑するでしょう。ただ、あなたと直接対面して分かりました。貴方はある力を持っている」

「ある力、ですか」

「はい。貴方は艦娘や妖精を指揮し、本来の力を十全に発揮させる事の出来る提督となる素質があります」

いやいやいやいや、そんなことを急に言われても困る。

何よりも艦娘？妖精？なんだそれは。聞いたことも無い。

「いや待ってください。その、艦娘？妖精？って何なんですか？」

「艦娘と妖精を知らない？」

「はい……何と言いますか、恐らく俺は今いる日本ではない別の世界の日本から来た、というんでしょうか」

「別の世界から来た？」

「気が付いたら、瓦礫の山の中に立っていたんです」

「ふうむ……それは災難でしたね」

「え？信じるんですか？」

「ええまあ我々自身も妖精という説明のつかない存在ですからね。世界を渡ってきたと言われても失礼な言い方になってしまいかもしれませんが、……何と言いますか。同類なんですね、という感想しか」

「まさか、さつきまで話していた陸軍の人も……？」

「いえ、彼らは普通の人間ですよ」

「そうなんですか……」

「しかし艦娘、妖精の存在が無い世界から来た、ですか。そうなる」と

色々説明しなければなりませんね」

それから原田さんと山岸さんから色々説明を聞いた。

どうやらこの世界の日本は、というよりは世界中が深海棲艦という存在と全面戦争中らしい。しかもかなり追い詰められている状況で。

最初は深海棲艦に押されていたが、原田さん達妖精と艦娘という存在のおかげで一時期はかなり持ち直したのだが今じゃ最初よりもずっと追い込まれている、とのこと。

まあ正直詳しく聞いて、なんだその世紀末な世界は、と思った。

だがどうやら事実らしい。

そして俺はそんな世界に来てしまった。

しかも原田さん達が言うには俺は、提督？になるための素質があるらしいのだ。

「湯野さんには、是非提督になっていただきたい。そうでなければこの国は、いえ、この世界は本当に終わりを迎えます。どうか手を貸してほしい」

そういうと2人は頭を下げてくるが、そんなこと今すぐに決められるわけがない。

「そ、そんな頭を上げてください。そういわれても今すぐに決められませんし、そもそも説明はしてはいますが別の世界に来たということですから混乱しているんです」

「それもそうですか……申し訳ありません」

「それに、今の俺には戸籍も何も無いんです。原田さん達は、海軍と言いましたよね？戸籍も何も無い人間が属せる筈が無いでしょう」

「いえ、その辺は上に報告すれば何とかかなると思えますが……分かりました。出来るだけ早めにお返事を下さると有難いです。今現在もどんだん追い詰められているのです。どうかして打開しないと」
「分かりました」

それから何度か言葉を交わし、2人は出て行った。

まああまりの急展開に頭が追い付いていないし、考えさせてほしいと言ったが多分、俺は提督とやらになるしかないだろう。

それから、少佐さんが部屋に入ってきて、別室に移された。
しかも明らかに高待遇だと言える部屋だ。

「言つて下されば多少の便宜を図ります。立ち入り禁止区画以外ならば誰かを連れて出歩いて構いません」

そういうと頭を下げてもどこかに行ってしまった。

いや、そんな事言われても困る。

ベツトに腰を掛けて、息を吐く。

本当に、どうしたものか。

どうすればいいのか分からず頭を抱えてしまった。

————— side 原田 —————

飛行場に戻ってから暫くすると、陸軍が先程立ち入り禁止区域で見かけた人間を保護、いや連行したと言っていた。

まあ確かにそうなるのが普通というか、当たり前なのだろう。

元々立ち入り禁止区域に1人で立っていたのだから捕まってその目的を問い質されるのが普通だ。

しかも立ち入り禁止の理由があつたのは深海棲艦の攻撃によって瓦礫の山と化してしまい、形を保っている建物もあるがそのどれもが崩れ落ちる危険性がある。

地下鉄の路線も多くが整備されずに爆撃や砲撃に晒されて陥没の危険だつてあるし、深海棲艦の落とした爆弾や砲弾の不発弾がどこかに眠っているかもしれない。

それを考えれば立ち入り禁止区域になってもおかしくはない。
なのにあそこで1人立っていたら、まあ捕まる。

しかし、俺はそうも言っていられない。

あの時の、不思議な感覚の正体を突き止めなければならぬのだから。これが俺1人だけが感じた事ならば勘違いや気のせいでは片付けられるだろう。

だが出撃してあの時、あの場所を通った私以下、すべての妖精が同じ事を感じたのならそれは勘違いや気のせいなんかでは片付けられない。片付けてはならない気がするのだ。

しかも明確に、1人の人間から感じたのだ。

確実に何かある。

これが一時的な物なのか、それとも近づくたびにそうなるのか。

どちらかは分からないが確かめておいた方が良いのは確かだ。あの時、明らかにエンジンの調子や俺自身の調子もポテンシャルも上がっていた。それがもし数百キロという範囲で可能になるのなら少なくとも現状は遥かに良い方に転がっていく。

被撃墜率も大きく下がるだろうし何よりも、もしかしたら人類側にもう一度深海棲艦に対しての反抗の機会が巡ってくるかもしれない。

それを考えると、

本当に、本当に極小の可能性で。無いかもしれないが、唯一残された最後の希望かもしれない。

あり得ないかもしれない、無いかもしれない。でも今の日本は、世界はそんなちっぽけなものに縋るしかないのだ。

陸軍第1師団本部。

秩父山中の地下に構築された、今現在日本に唯一存在する人間のみに構成されている師団だ。と言っても戦闘能力は殆ど無く憲兵隊のような役割を担っている。

それもそうだ、深海棲艦に対しては人間の武器は一切効果が無いのだから。

今では陸軍の保有する戦力の殆どが我々妖精で構成された師団に置き換わり日本本土各地で、深海棲艦の上陸を許した場合に備えて配備されている。

元々、軍にいた人間はハワイ諸島攻略作戦の後、押され始めた頃から攻撃は通じないと分かっているも戦線に投入され、死んでいったか今は各地の民需工場で働いている。

軍役につかせたとしても遊兵にすらならない、というのが下された決断だ。

しかし前者の方が圧倒的多数で、戦線に投入されなくとも本土への爆撃や艦砲射撃により反撃もままならず消えていった師団も数多い。

掻き集めればそれこそ、4個師団くらいならば集まるだろうが充足率の全く足りていない人間の部隊なんて深海棲艦からすれば道端の石ころほどの価値すらない。足止めすらならない。

我々妖精が使用する砲弾薬、燃料、各種資材は妖精でなければ生産できない。

正確には深海棲艦に対して効果のある武器弾薬、航空機は妖精にか生産出来ない。だから妖精が使用する武器弾薬、航空機などは山岳地帯の地下に生産拠点を移し生産している。まあ航空機を作るのに必要なアルミやクロム、ニッケルと言った戦略資源はそもそも材料となるボーキサイトなどの原石を輸送出来ないため備蓄してあるものを切り崩し細々としてしか生産出来ない。

それ以外にも鉄鋼石、銅、錫といった物もすべて輸入に頼ってきていたからどれもこれも無い。

日本近海の海底には様々な鉱物資源が眠っているらしいがそんなものを採掘出来る訳が無い。呑気にそんなことをすれば深海棲艦からしたら良いのだ。

どこからか聞いた話では、備蓄していた各種資源、資材はもう殆ど残っていないらしい。備蓄していた倉庫は爆撃などで焼き払われてしまったし、山岳地下に大急ぎで建設した備蓄倉庫にも残っていない、すっからかん。

本当かどうかは分からないが恐らく本当の事なのだろう。

でなければ我が343空に限った話ではないが毎月、たったの数機しか補充の機体が寄こされないなんてある訳が無い。

しかも修理用の部品や予備のエンジン、敵の弾丸で空いた穴を塞ぐための修理用資材と言ったものも月に2機分届くかどうか。

全体で見れば航空機の月産数十機程度の生産はあるかもしれない。

エンジンや修理用部品、修理用資材の生産もあるだろう。

だがそれら全てを1つの部隊にのみ渡すわけにはいかず、結局の所全国に分散してしまう。

343空は全国的に見ても練度は高くそういった物は創立初期の時点で出来るだけ備蓄に回していたから、多少ならばある。だが今やそれすらも心許無く、明日までに12機まで稼働機を回復するのがやっと。

使用に耐えられなくなった機体から部品を取り外してこれだ。それ以降は、共食い整備となる。

そんな俺は今現在、入間飛行場から秩父山中の陸軍第1師団本部に來ている。

付き添いには副隊長を。本来ならば副隊長は残してくるべきなのだろうが出来るだけ詳細に確かめたいので連れてきた。

「すまない、343空の原田中佐だ。先ほど連行されて来た人間に面会を申し込みたいのだが」

「!?は、原田中佐！お疲れ様です！面会希望ですね、ただいま確認してまいります！」

声を掛けて用件を伝えると、驚いて慌ただしく走って行ってしまった。

何と言うか、あれほど慌てさせてしまうと申し訳なくなってしまうな……

少しすると、先ほど声を掛けた者が走って戻ってきた。

「4時まででは取り調べをしたい、とのことですのでそれまでお待ち頂けるのでしたら面会は可能です」

「分かった。待たせてもらおう。ああ、気遣いはしなくていい、取り調べをしている部屋の近くで適当に待たせてもらうから案内して貰えないだろうか？」

「了解しました」

彼の案内で取調室の近くの椅子に腰を掛けて待つ。

さて、4時まで30分30もある。

「副隊長、損傷機の修理度合はどれほどだ？明日までに修理出来るのは本当に12機しか無いのか」

「整備班の話では、現状12機が精一杯だそうです。というのも修理用資材が足りていないのだとか。穴を塞ぐのも12機でギリギリ。これ以上機数を増やすとなると、何機分かの機体から外板を取り外すなりして共食い整備がやはり必要になってしまいます」

「共食い整備か……修理不可能な機体からならば問題無いが飛ばせる機体からは駄目だな。となるとやはり明日は12機か……戦う前に失う機体が無いことが幸いか」

「予定では明後日に修理用資材が2機分と新しい機体が3機届くそうですが……」

「意味は無いか……それに明日、明後日と出撃して被害を被ったら土で言えば——だな」

「他の部隊も軒並みここにきて状況的に追い詰められ始めてしまつて

各地から補充要請が届いているそうです」

「無理だろうな」

「ええ、聞いた話では潜水艦隊が近々資源を持って帰ってくるそうですか……」

「微々たるもので、解決には至らない、か……」

2人で話す。

確認のような会話だが改めて絶望的な状況だということを知り知らされる。

近くにいた陸軍の人間に話を聞いたが我々とさして変わらない状況だそうだ。

「原田中佐、取り調べが終わったので面会が可能です。こちらへどうぞ」

どうやら取り調べが終わったようだ。

「さて、行くとしようか」

「はい」

案内され、取調室に2人で入る。

すると、目に入ったのは現代人と比べても比較的大柄な部類に入るのであろう身長を持つ男だ。180cmはあるだろう。

見た目もかなり若く、下手をすると10代の可能性すらあり得る。

「初めまして、海軍第343航空隊隊長の原田です」

「初めまして、同じく343空の山岸です」

「あ、どうも初めまして、湯野です」

互いに挨拶をするために立ち上がる。やはり高身長だ。

だが鍛えているわけでは無いらしく線が細い。

握手を交わしたが私からすると、どうも頼りないと感じてしまう手をしている。

俺とは違いごつごつとした手ではなく、随分と柔らかいというか。彼は俺と逆の感想を抱いたのか俺の手を少しばかりじっと見ると、

すぐさま視線を外した。

そして俺はここに来た理由を切り出す。

「さて、私達がここにきた理由ですが……あることを確かめたかった」
「はあ……」

「まあいきなり言われても困惑するでしょう。ただ、あなたと直接対面して分かりました。貴方はある力を持っている」

「ある力、ですか」

「はい。貴方は艦娘や妖精を指揮し、本来の力を十全に発揮させる事の出来る提督となる素質があります」

彼と対面して確信した。

彼には、提督という存在になるための素質がある。それもかなり高いレベルでだ。

提督についてまず説明しなければならない。

提督というのは文字通りだ。正確に言えば我々妖精や艦娘を指揮することに特化した、が付く。

この素質は希少なレベルではなく、過去にその素質を持っていたのはイタリア人の女性が1人だけ。しかしながらその女性も地中海方面での深海棲艦の大攻勢によって戦死しているから、今現在その素質を持っているのは湯野さんただ1人ということになる。

全世界で提督となりえる人間を探したが結果は1人も見つからず。

提督という存在は、我々妖精、艦娘のありとあらゆる性能を大きく引き上げる。

それこそ俺のような戦闘機妖精で言えば操縦能力や判断能力が軒並み上がるし機体のエンジンの調子も良くなるし良いことづくめだ。各種の戦闘能力も向上するし我々からすれば無くてはならない存在なのだが。

「いや待ってください。その、艦娘？妖精？って何なんですか？」
「艦娘と妖精を知らない？」

ふむ、どういう事だろうか。

今のご時世、老若男女問わずそれこそ小さな子供ですら知っている事なのに知らない？

「はい……何と言いますか、恐らく俺は今いる日本ではない別の世界の日本から来た、というんでしょうか」

「別の世界から来た？」

「気が付いたら、瓦礫の山の中に立っていたんです」

「ふうむ……それは災難でしたね」

別の世界から来た、か。

まあ信じるほかないな。今ここでそんな意味の無い嘘を付いても利益は無い。

それどころかただの精神異常者と取られかねない。まあこんなご時世だから精神が病んでしまったという可能性もあるにはあるが話した限りではそんな感じはしない。

「え？信じるんですか？」

「ええまあ我々自身も妖精という説明のつかない存在ですからね。世界を渡ってきたと言われても失礼な言い方になってしまいかもしれませんが、こう何と言いますか。同類なんですね、という感想しか」
本人は信じた我々に対してかなり驚いているな。

自分でも滅茶苦茶なことを言っているという自覚はあるのだろう。だがこれでより一層信じるに値する。

「まさか、さつきまで話していた陸軍の人も……？」

「いえ、彼らは普通の人間ですよ」

「そうなんですか……」

「しかし艦娘、妖精の存在が無い世界から来た、ですか。そうなるの色々と説明しなければなりませんね」

艦娘や妖精の存在を知らない湯野さんに説明をする。

まあ正直な話、我々妖精自身もその正体や何処から来たのかなんてことは分からないので説明出来る事も大したことはないのだが。

そして最後に、湯野さんに提督になって欲しい旨を念を押して伝える。

「湯野さんには、是非提督になっていただきたい。そうでなければこ

の国は、いえ、この世界は本当に終わりを迎えます。どうか手を貸してほしい」

そう言つて頭を下げるが、そんなこと今すぐに決められるわけがない。

「そ、そんな頭を上げてください。そういわれても今すぐに決められませんし、そもそも説明はしてはいますが別の世界に来たということですから混乱しているんです」

「それもそうですか……申し訳ありません」

「それに、今の俺には戸籍も何も無いんです。原田さん達は、海軍と言いましたよね？戸籍も何も無い人間が属せる筈が無いでしょう」

「いえ、その辺は上に報告すれば何とかなると思いますが……分かりました。出来るだけ早めにお返事を下さると有難いです。今現在もどンドン追い詰められているのです。どうかして打開しないと」
「分かりました」

最後に何度か言葉を軽く交わして部屋を出た。

部屋を出て、私は彼に幾らかの便宜を図るように伝えておく。

流石にこれから我々の上官になるかもしれない人を粗末な部屋に押し込めておくのも気が引ける。

彼には、恐らく提督となるしか道は残されていない。

道を塞ぐ様な感じになってしまつて本当に申し訳無いが我々にはもうこれしか道は残されていないのだ。

本当にすまない。

心の中で謝罪をしながら飛行場に戻った。

———— side out ————

第3話

原田さんと山岸さんと初めて会ってから3か月が過ぎた。

その間に俺は何をやっていたかというところ、提督になる為に必要な知識を学んでいた。

と言つてもかなり付け焼刃だ。本来なら部隊の指揮をするような、いわゆる大佐とかそういう階級の育成には最低でも数年単位、その階級まで上がるのに人にもよるが更に十数年は必要だ。

にもかかわらず今の俺の階級は少将。

本当に名ばかりの階級になってしまったがしょうがない、全力を尽くそう。

状況が状況な為に、学んだことは戦術などと言つたかなり限られた物に限定して本当に必要な物だけを教え込まれた。

最初、俺は原田さん達と別れて2日後に提督になる事を決意した。

と言うのも、元居た世界に、家族の元に帰れる保証が一切無いこと。

それを考えれば、海軍に入り提督としてやっていければ最低限どころか国がその身分を保証してくれると言う事に他ならない。

身寄りも無く、戸籍も何も無い俺からすれば飛び付いても確実に得るべき物だ。

そして何より決定的に提督となると決意した理由は、目の前で深海棲艦の空襲を受けて燃える工場や家を見て、原田さん達妖精が戦闘機を駆つて必死に戦っているその姿を見たからだだろう。

その時、もし俺に出来る事が、役に立てる事があるのなら手を出したいと強く願った。

確かに俺には提督となる他に道は無かつたのだろう。それしか選べなかつたのかもしれない。

だが、それでも俺は構わない。

何故なら、今この戦争を戦い抜いて勝たなければ世界にも日本にも未来は無いし、必然的に俺にも未来は無いのだから。

人間、こんな状況になると意外と肝が据わるものでそれから早

かった。

原田さんに連絡を入れて、提督となる旨を伝えた。

次の日には海軍のお偉いさんが来て本当に提督となれるのかを確かめて事実だと分かると、びつくりするぐらいの警護の元、案内されたのは海軍のある施設。

栃木県の山中に構築された海軍の司令部だが、ここは航空機の生産なども担当しているらしくかなり大規模な施設だった。

しかしそこにいるのは右を見ても左を見ても妖精ばかりで、人間は海軍上層部の5人だけ。

俺の実質上官はこの5人だけだ。

と言うのも人間で未だに海軍に勤務しているのはこの5人だけになる。

それ以外の軍人達は民需工場や食糧生産の為に日々働いている。

階級は上から軍令部総長、及び連合艦隊司令長官を兼任である市木

重尚大将。

次に海軍艦政本部長、西村直義中将。

次に海軍航空本部長、黒川村治中将。

次に作戦本部長、中代美咲中将。

次に所謂、補給、諜報や測量などを一纏めに受け持っている、広野拓司中将。

上3人は既に70歳を超える、一番の高齢な西村中将は82歳になるお爺ちゃん、と言った感じだ。

しかし最後の2人、中代中将と広野中将は別物だ。

未だに2人とも未だに26歳と37歳と言う若さながら中将の階級まで登り詰めた、完全な実力者だ。

聞いた話では中代中将は太平洋戦線を提督でないながら指示を出し必死に保とうとして、艦娘が現れてからの人類側の反抗作戦や、追い込まれ始めた時期から今に至るまでその全てを取り仕切っている。

広野中将は37歳だが、こんな差し迫った補給状況ながらなんとかやりくりする為に四苦八苦している。

俺の指揮下に潜水艦隊が入るまでは、潜水艦隊を指揮下に持ち、輸送作戦で運ぶ物資の選定、出航時期を諜報部をフルで使いなんとかして来た人だ。

まあ、5人とも普通では考えられない程に疲れ、市木大将ですら二徹は当たり前、広野、中代両中将は初めて会った日に余りにも隈が凄まじく聞いてみると既に四徹目に入り、少しばかり仮眠を取ろうと言う時に俺の話が舞い込んできて六徹になったと言った。

本当に申し訳ない。

市木大将を始めとした高齢組は平時であれば好々爺然とした感じだが今では纏う雰囲気は張り詰め、それでも俺に対する気遣いからか会う時ばかりは優しく笑う。

しかし疲労が凄まじいのか、立ち上がるとフラフラとして今にも死んでしまいそうな感じだが、新海棲艦に勝つまでは死ぬぬ、と言う気概だけで生きていると感じた。

広野中将は、見た目はこれまでの苦勞のせい髪は無く、顔にもかなりの疲労の色が見て取れた。

中代中将は見た感じ疲労と相まってかなりキツそうなキヤリアウーマンと言った感じだが、話して関わってみると何処か世話焼きの年上の近所のお姉さんと言った感じだ。

俺は彼女を筆頭に諸々を教え、叩き込まれた。

鬼教官と言った言葉がピッタリだったが幸いなのは運動関連の訓練は最低限、勉強にのみに絞って教えられていた事だろうか。でなければ今頃、俺は干物になっていたかもしれない。

指揮下に入る部隊に関しても色々と便宜を図って出来るだけ精銳を集めてくれたし、更に驚いたのは陸軍の1個飛行戦隊が追加で指揮下に入る事だろう。

後々に説明をするが、そう言う訳で5人の指導の下、3ヶ月間色々知識を叩き込まれ俺は提督となった。

色々と教えられている、その間に本来ならあり得ないのだが潜水艦隊の指揮を執っていた。

と言っても広野中将の負担軽減の為と言う意味合いが強く命令は広野中将がしていた事と大差は無い。

それと資源輸送任務のみで指揮に慣れるというのが目的だった。それでも潜水艦娘達は俺の指揮下に入った為に輸送できる資源量が大幅に増加した。動かせる潜水艦娘達をローテーションを組んでフルで資源輸送任務に従事させて出来る限り多くの資源を輸送することに成功した。

指揮下に入った潜水艦娘とその妖精は、

潜水艦娘が伊400、伊401、伊402、伊404、伊405、伊168、伊8、伊19、伊26、伊58、伊13、伊14の計12隻。

この12隻は全て海軍籍で船体もかなり大きかった。

それ以外にまるゆと呼ばれている陸軍の正式名称三式潜航輸送艇というらしいがその艦娘達も居るにはいたが航続距離の関係上、指揮下に入る事は見送られた。

彼女達はほぼすべてのスペースに資源を詰め込む為にどの潜水艦も武装は最低限の魚雷以外を全て外し、水上機を格納出来る格納筒には水上機は搭載せず。

もし攻撃されても反撃がままならないという状況の中、必死になって資源を運んできてくれた。

まあ細かい指示なんて元一般人の俺には出せるはずも無く、大した指示は出せなかったのだが。

幾つか出した命令だが、毎回行き帰りの航路を変えて、感づかれたとしても待ち伏せされることの無いようにという事と、必ず生きて帰ってくることを厳命していた。最悪輸送中の資源を捨ててでも帰還する事を厳しく言い聞かせた。

長い目で見れば、ここで1隻でも失ってしまえば後々に大きく響いてくる。

一度くらい輸送に失敗したとしても全然取り返せるのだ。

さて、その指示を出したのが2か月前。

今日は勉強を終え、生き残った妖精や艦娘、艦体を指揮下に入れる日だ。

3か月の期間で教えて貰ったのだが、生き残っている艦娘や艦体もその多くが損傷しており出撃が出来ない。

潜水艦隊の資源輸送任務で得られた各種資源で修理を施したりとかなり努力をした。

しかしそれでも圧倒的にその数は少なく今現在健在で修理を必要としない艦艇は

正規空母3隻

飛龍、蒼龍、瑞鶴

軽空母3隻

隼鷹、飛鷹、鳳翔

戦艦3隻

金剛、霧島、長門

航空戦艦1隻

日向

重巡洋艦8隻

鈴谷、熊野、青葉、古鷹、那智、羽黒、愛宕、摩耶

軽巡洋艦6隻

多摩、天龍、龍田、神通、能代、矢矧、

駆逐艦22隻

秋月、照月、涼月、初月、若月、霜月、春月、宵月、満月、花月、陽炎、雪風、浦風、萩風、村雨、時雨、響、朧、初雪、浦波、菊月、望月

潜水艦

伊400、伊401、伊402、伊404、伊405、伊168、伊8、伊19、伊26、伊58、伊13、伊14

揚陸艦1隻

神州丸

輸送船13隻

合計72隻

見た感じ多く感じるだろうが、存在している全ての艦艇と全盛期の海軍の戦力と比べると殆ど残っていない。

しかもこれらの内の殆どが燃料不足で動かすことが出来ない。

特に戦艦、航空戦艦は多量の燃料を消費するため当分の間は浮砲台になつてしまう。

正規空母も動かせない。動かせたとしても搭載する航空機が揃っていないのでただの箱にしかない。それでも格納庫内に燃料や資源を搭載することもできるだろうがもし被弾したら取り返しがつかない。

さらに言えば揚陸艦である神州丸は元々陸軍の船だったのだが紆余曲折の末、海軍籍に移され今では揚陸艦とは名ばかりで輸送船となつている。

しかも輸送船13隻は通常の間人が動かす船で武装など一つもつけておらず丸腰の状態。全国中から燃料タンクの底まで浚つて掻き集めたとしても戦力として動かせるのは艦種にもよるだろうが、全部で半分動かせればいい方か。

入間飛行場から、一式陸上攻撃機に乗り護衛戦闘機に守られながら岩国飛行場に飛ぶ。そこから車で呉軍港に向かいそこで初めて艦娘、そして艦体に乗りに込む妖精達と顔合わせだ。

一式陸攻は全部で3機。

護衛についているのは原田さん以下第343航空隊の28機の烈風戦闘機だ。

それに加えて陸軍第32飛行戦隊の四式戦闘機疾風が12機だ。

これらの陣容については、先ず一式陸攻に関してはダミーを含まれているのだが、入間飛行場に駐屯していた海軍第343航空隊と陸軍第32飛行戦隊が俺と共に岩国飛行場へ配置転換となったのだ。

だから俺の護衛をしながら一緒に乗機と共に移動している。

しかしながら第343航空隊はパイロットだけで73名いるのだが今飛んでいる28名の機体以外は補充待ちという状況だ。

それでも工場が必死に生産した28機であり馬鹿には出来ない。

岩国飛行場に到着後、定数73機と予備の15機を含めて88機が343空には配備される予定だ。

陸軍に関しても同様で疾風は新型戦闘機という事だ。

これにはいろいろと面倒なことが絡んでくるので説明を省くが、陸軍第32航空隊は俺の指揮下に入ることとなったのだ。もうこれだけで色々と複雑になりそうな指揮系統だがどういうわけか 市木大將を筆頭に多方面に掛け合ってくれたらしく、資源に関して多少融通するということでも落ち着いたそうさ。

まあ海軍と陸軍の両方から全く違う命令が下されないという点ではとてもありがたい。

32戦隊は2個中隊で一纏めを3つの計72機を数える筈だったのだが未だに12機、全体の6分の1の1個中隊分しか無い。

というのも3週間前、疾風の生産工場3つの内が2つが爆撃で吹き飛ばされてしまったのだ。それでも使える部品やらなにやらを掻き集めて残った1つの工場に運び込んで必死に生産しているらしいが受領出来るのは1週間後。

本来ならば今日までに30機までなるはずだったのだが……

これはかなり痛手だ。

それまでは12機だけだ。これでなんとかやりくりするしかない。

最大で定数72機、予備15機の計87機だ。

本来陸軍飛行戦隊は1個中隊12機を3個中隊集めた36機＋予備機の編成だが大盤振る舞いで倍近い数になっている。

特例として24機で1個中隊とし、それを3個中隊の編成だが。

これら陸海合わせて175機の戦闘機だが今は40機だけ。4分

の1以下しかない。

艦爆や艦攻は今現在は戦闘機の生産を最優先にしている為配備はされていない。近々新型機の生産が始まり配備される予定だがまずは戦闘機、と言う事らしい。

今現在の攻撃兵力は俺が乗って来た一式陸攻と編隊機の2、3番機だけ。

どちらの航空隊もパイロットは戦闘機を受領後に最低1個小隊が集まった後に岩国飛行場に飛んでくる予定だ。

1週間後は343空が13機、32戦隊が6機受領する予定だ。それから数日飛行訓練をして岩国飛行場へ飛んできてそこで習熟訓練となる予定だ。

それまでは今現在の40機で訓練を行う。

343空の発着艦訓練以外は合同となる。

パイロット達は各地の航空隊、飛行戦隊から出来るだけ多くのエースクラス、熟練と言った腕利きを集めて構成されている。

中には新米などもいるが彼ら腕利きに抜かれて2ヶ月もすれば1級線の腕を持つ様になるだろう。

因みにだが入間飛行場の343空、32戦隊の後任は既に元々使用していた紫電改二と飛燕を受け取って防空の任務に就いている。

母艦航空隊は全く再建が進んでいないので343空が唯一の母艦航空隊だ。

一式陸攻の窓から外を覗いてみると烈風と疾風がともに編隊を組んで飛んでいて定数には全然足りていないとは言っても中々に壮観な光景だ。

やはり男心を撥られるものがあるな。

しかしそれでもパイロット達は周りへの警戒を解かない。
きよろきよろと辺りを見回しながら敵機が襲って来ないか警戒している。

岩国飛行場に問題無く到着した。

途中で3番機がエンジン不調で近くの空港に着陸したがそれ以外は問題なかった。

一式陸攻に続いて、疾風、烈風の順に降りてくる。

全機が着陸を確認してから飛行場に降り立つと、多くの妖精達が勢揃い。タラップを降りると、

「湯野提督にー、敬礼！」

飛行場司令の号令で一斉に俺に敬礼をしてきた。

こんな事しなくても良かったのだが、最重要機密扱いの俺がどうやら話は伝わっているようで。

まあ確かにこのご時世少将なんて階級の人間が艦隊指揮のために着任することはないから噂や嘘なんかではなく本当の事だと通っているらしい。

しかし道中で深海棲艦の襲撃が無かったのは良かった。

敬礼に対して答礼を返す。

「湯野少将、いえ提督とお呼びした方がよろしいでしょうか？」

「いえ、どちらでも構いませんよ」

「では湯野提督と。私は岩国飛行場司令の山下大佐であります。以下岩国飛行場はこれより湯野提督の指揮下に入ります」

「了解しました。ご存じの通り、湯野 勝則です。態々こんなにも盛大にお迎え頂きありがとうございます」

「いえいえ、当然の事です。なにせ我々からすれば長年待ち望んだ希望なのでからこれぐらいは当然の事。呉鎮守府へ向かう車は既に用意されております」

「ありがとうございます。しかし呉鎮守府への到着予定までは2時間程あるので、軽くここを見て回りたいのですがよろしいですか？」

「ええ、構いませんよ。案内を付けましょう」

「ありがとうございます」

基地司令の山下大佐に呼ばれ駆け寄ってくる1人の妖精。

「中谷、湯野提督を案内して差し上げろ」

「了解しました」

「湯野提督、時間は1時間程で構いませんか？」

「ええ、十分ですよ。それでは早速歩きましょうか」

「お車を回しますよ？」

「いや、今は俺が歩けばそれだけ節約になりますから」

「分かりました。中谷、頼んだぞ」

「はい」

中谷と呼ばれた妖精は、俺を連れて飛行場を案内してくれた。

俺は二種軍装、白い軍装から三種軍装に着替えてから見回った。

本来なら第三种軍装は海軍陸戦隊の士官用なのだがまあその辺の細かい声はよく分からない。何故か支給されているのでもしかすると南西諸島奪還の準備の為に陸戦隊か陸軍部隊が指揮下に入るのかもしれない。

案内されながら、格納庫やエプロン帯、対空機銃座、対空砲座を見て回る。一緒に飛んで来た疾風と烈風の整備が早々に行われていてそれらを見る事が出来たのは個人的に嬉しかった。

1時間飛行場をぐるっと見て周った感想だが、まあやはりと言うか物資不足が目立つ。どこもそうだがこれから先、岩国飛行場は燃料で困るだろう。同じ飛行場に2つの航空隊が居るのだからしょうがないと言えそうだが早めになんとかしないと。

山下大佐に挨拶をして案内をしてくれた中谷さんにお礼を言って車に乗って呉鎮守府に向かった。

さて、呉鎮守府だがまあなんと言うか、他よりも被害は軽微だ。

と言っても鎮守府の敷地内には未だに埋められていない爆弾孔が

幾つもあるし建物が崩れずに残っている程度。

しかしその建物も倒壊する危険があるのか立ち入り禁止の立て札が立っていて入る事は出来ない。

鎮守府の門に来ると門番に挨拶をして通してもらおう。

「すみません、本日着任予定の湯野 勝則少将です」

「お話は伺っております。このまま車でこの地点までお進み下さい」
「分かりました」

車を言われた場所まで進めると、鎮守府の広い営庭に艦娘と思われる少女達や女性達が整列をして立ち、その後ろに乗組員の中でも幹部クラスと思われる妖精が並んで立っている。

ーこれまた随分と豪華な歓迎だな。

車が止まり、運転手がドアを開けてくれる。

そして降りて案内されるまま、壇上の上に立たされると大きなよく通る綺麗な声で号令が響いた。

「湯野少将にー!!敬礼!!」

1000人は居るだろうか、という人数に一齐に敬礼を向けられ少しじろいってしまったが、答礼を返す。

そして俺が手を下ろすと、

「直れ!!」

号令が掛かり手が下される。

「戦艦長門以下、只今より湯野少将の指揮下に入ります!!」

声を上げて号令を出していたのは艦娘の長門だった。

光栄な事だな。

「湯野提督、挨拶を」

隣に立っている妖精に促され、挨拶をする。

しかし考えていなかったからな、何を話そうか。

「初めまして、湯野 勝則少将です。皆さんを指揮下に入れられる事を光栄に思います。あー………すみません、こんなに盛大に出迎えて貰えるとは思っていなかったので挨拶の文面を全く考えていませんでした」

頭をぽりぽりと掻きながら言うと少しばかり笑いが起きる。

綺麗な水色の髪をした艦娘は余程面白かったのか笑いを堪え、隣の艦娘に突かれ注意されている。

なんと言うか、一番に目につくぐらい目立つ髪色だ。
俺は一息吐くと、

「今、日本だけでなく世界中が危機に瀕して、滅亡寸前です。正直な事を言ってしまうえば私は戦略や戦術と言うものは多少齧った程度の素人です。そんな私が世界の命運を背負うなんて馬鹿らしいと思うかもしれない。ですがそれでも皆さんの力になりたい。だからどうか皆さんも私に力を貸して欲しい。締まらない感じになってしまいました。どうぞ宜しくお願いします」

挨拶を終えると、拍手が起こる。

俺はそれを聞きながら壇上の中から降りる。

解散の号令が掛かると、さてどうしたものか。

俺はどうすれば良いか分からず立ち惚けてしまった。

自室にでも行ってみるか？

荷物は第一種軍装と二種軍装(冬服)、三種軍装がそれぞれ2着ずつと軍刀ぐらいしかないものだ。軍刀は今身に付けているが一種軍装と二種軍装、もう1着の三種軍装は鞆に詰め込んでいる。しかも車の中に置いて来てしまっているから今頃は自室に運ばれているかもしれない。

他にあるとすれば、市木大将に餞別として頂いた日本酒が1本あるがそれも鞆の中だからな。

本当に手持ち無沙汰になってしまったな……

そうだ、鎮守府内を見て回ろうか。仕事もあるだろうが色々見回り、把握しなければならぬのも事実だ。

よし、そうしよう。

さて、どこから見て回ろうか。

と考えていると、声を掛けられる。

「提督、宜しいですか？」

随分と綺麗で凛々しい声だな、と思いながら振り向くとそこに立っていたのは、女性にしては高身長で170cmはあるだろう黒髪的美

人。

「ああ、長門さん、であってます?」

「はっ、長門であります。執務室へご案内したいのですが宜しいでしょうか?」

「ありがとうございます。お願いしてもいいですか?」

「勿論です。此方にどうぞ」

長門に付いて歩き、執務室に案内される。

しかしながら執務室は二階建てのプレハブで作られた建物でいかにも急造と言った感じだ。

「申し訳ありません、深海棲艦の空襲などで本舎は倒壊の恐れがあり使用出来ません。なので暫くの間は此方のプレハブを執務室と自室にして頂きます」

「構いません。寧ろ屋内であればどこでも。最悪テントの可能性すら考えていましたからありがたい」

プレハブに案内され、執務室の中に入るとそこには少ない物資で必死に拵えてくれた努力が伝わる内装だ。

「この執務机は、手作りですか?」

「ええまあ……本当は調達しようと思ったのですがどうしても手に入らなくて。手先の器用な妖精と共に製作しました。テーブルは購入した物なので気に入らなかつたらそちらを使ってください」

「いや、温かい感じで良いじゃないですか。このままでいいですよ」

壁は剥き出しだが手作りの執務机の上には各種の文房具や硯、筆などが置かれ、それとは別のテーブルの上には花瓶と共に何種類かの花が入れられて飾られている。

「この花は、誰が?」

「駆逐艦雪風と浦風、村雨、時雨、響の5人が寂しいからとそれぞれ摘んで来た物です。……気に入らなかつたでしょうか?」

「いえ、寧ろその逆ですよ。彼女達には後でお礼を言わないといけませんですね」

「そうでしたか。明日から視察の時間を設けていますからその時にも言つて下されば喜ぶ筈です」

「ありがとうございます。それじゃ早速仕事を始めましょう。時間は無駄に出来ないですから」

「分かりました。何か必要な物はありますか？」

「……鎮守府の各種備蓄資源量を記した書類と、損傷艦の一覧をお願いします」

「分かりました。ただ今持って来ます」

「それと、敬語は使わなくても構いませんよ。自然体で。他の皆さんにも伝えて置いて下さい」

「……分かった。それでは持つてくるから待っていてくれ。それと私が暫くの間、秘書艦を勤めるから宜しく頼む」

「ありがとうございます。宜しく願います」

長門はそう言うと言類を取りに行った。

その間、彼女達が作ってくれた執務机と執務椅子に腰かけ、飾られた花を眺める。

今だけは本当は平和な世の中なのではないかと錯覚してしまった。

十数分後、戻ってきた長門から書類を受け取り、見ていく。

「やはり資源量が全く足りていないな……」

「これでもここ2ヶ月は潜水艦隊の資源輸送任務のおかげで多少はマシになって来ているんだ。潜水艦隊を指揮したのも提督だと聞いている。ありがとうございます」

「いや、大した事は無いですよ」

長門はそう言ってくれるが、やはり燃料や損傷艦の修理をする為の鋼材は絶対的に足りていない。

グラフを見てみるが燃料は凡そ22000、弾薬はまだマシで40000ほどあるが一度でも戦闘を行えば直ぐに底をつく。

潜水艦隊が俺の指揮下に入ってから急激に備蓄資源量は増えているが足りない。

どうしたものか、と考えていると唐突に長門が言った。

「……提督、その敬語はなんとかならないか？」

「え？」

「私達だけが敬語で話すのは納得出来ない。提督ももつと砕けた口調で話して欲しい」

確かに艦娘に砕けた口調で話せと言っているのに自分だけ敬語は変だ。出来るだけ中を深めたいので言う通りにしよう。

「……分かった。そうするよ」

損傷艦の一覧を見るとそこには数多くの艦名が書かれている。

中には俺ですら知っている戦艦大和の名前も。大和は大破の損傷を受け、今現在は修理が出来ずに浮いているだけ、か。

姉妹艦の武蔵も同様だ。

見てみれば、長いと2年以上も損傷したまま修理されていないと書いてある艦もいて、早急にかしなくならないとならない。

しかしながらそれらの問題よりも一番に解決すべきは資源問題だ。

幾ら修理をしたいと言っても鉄が無ければ無理だし、燃料が無ければ動かせない。

取り敢えず修理は後回しにして燃料を集める事に専念するしかない。

となれば方針は、航空機を作るのに必要なボーキサイトやクロム、ニッケル、コバルトと言った資源と燃料を集中して集める他無い。

損傷艦を修理して戦力を立て直したい気持ちも山々だが我慢だ。

「潜水艦隊が次に帰港するのは……明日か。今居るのは伊400達の第1潜水艦隊だな。これは燃料輸送に専念させて伊168の第2潜水艦隊はボーキサイトなどに専念させよう」

「なんだ、鋼材は輸送しないのか？」

「ああ、まずは今健在な艦を動かせる様にする。それにはまず燃料が大量に必要だし、指揮下にある343空と32飛行戦隊の航空機を行き渡らせないとならない」

「そう言う事か。なら私達戦艦組は暫く出番は無いな」

「申し訳ないけどその通りだ。輸送船が13隻あるからこの13隻＋護衛艦隊を動かせるだけの燃料を集める」

「……長い道のりだな」

「そうだな。でも出来る事を少しずつやっていくしか無い」
長門と一緒に色々と策を練りながら夕方を迎えた。

長門がふと声を出した。

「提督、ささやかながら歓迎会を開く用意をしてある。どうか参加して欲しい」

「歓迎会？それは嬉しいな。ありがとう、参加させてもらうよ」
「ならば行こう。もう準備は整っている筈だ」

「そうなのか。なら行こうか。片付けるから少し待っていてくれ」
「手伝うぞ」

「ありがとう、長門」

散らかっていた書類を簡単に纏めて片付けてファイルに閉じて棚に突っ込んでいく。

それが終わったら長門と共に、会場である食堂に向かった。

すると艦娘だけが勢揃い。

「提督、挨拶を頼む」

長門に言われて立つと視線が一斉に集まる。

「皆、歓迎会を開いてくれてありがとう。損傷艦の艦娘は居ないが必ず勢揃いで宴会を開ける様に努力する。今日はここに居る皆だけでも楽しんでくれ。以上」

「提督、ありがとう。それでは、提督の着任祝いとこれからの戦局打開を願って、乾杯！」

「」「」「乾杯！」「」「」

始まった歓迎会は、出された料理も豪華ではないし確かに、本当にささやかな物だったがとても暖かく、これから先の希望を持たた。

途中、何人かの艦娘が態々挨拶に来てくれた。

誰も彼もやはり今までの疲れがあるのか顔に現れていた。

しかしそれでも俺の前では気丈に振る舞い、弱いところを見せまいとしていた。

改めてなんとかしなければならぬと心に誓った。

世界は今、絶望に包まれている。

だが今日、私達の前に来る提督は、そんな絶望を希望に変えてくれるかもしれない存在なのだ。

今日、世界でたった一人しかない提督となれる人間の男性が着任する。

中代中将を中心に市木大将も忙しい合間を縫って彼に3か月と言う短い期間ながらも教え込んだと聞いている。

少なくともあの5人が、3ヶ月しか学んでいないにも関わらず優秀だと言うぐらいだから期待出来る。

13:00、提督が到着した。

私達艦娘と、艦の幹部要員を集めて鎮守府の営庭に整列して出迎え

た。車から降りて来たのは鍛えている妖精や人間の兵士と比べると随分と線が細く頼りないと思ってしまう、高身長男性だ。

私も170cmあるがそれよりも10cmは高い。

優しいような、温和な顔をしていて余り戦いに向いてはいなさそうだ。

そもそも、提督適正とは簡単に言ってしまうえば私達艦娘と艦体に乗りに込む事が出来なければならぬのだ。

前提条件としてまずそれをクリア出来る人間がいない。

居たとしてもそれが出来て、更に指揮下に入れられるかどうか関わってくる。

さらに艦娘だけではなく妖精達も指揮下に入れられなければならないので提督適正を持っている人間はそれこそ天文学的数値だ。

しかし聞いた話では既に潜水艦娘達を指揮下に加え、輸送作戦を成功させている。

しかも指揮下に入ってから資源輸送量が大幅に増加して呉鎮守府に回される資源が増えた。

それだけでなく呉に着任するに当たり、海軍の中でも最精鋭と名高い第343航空隊と、陸軍第32飛行戦隊も指揮下に置いていと聞く。

これほどの規模を既に指揮下に置いているのだから、その辺の心配をする必要はないだろう。

しかし何故横須賀ではなく、ここ呉にまで態々来るのか。

それはここを拠点として反抗の機会を窺うのだ。

というのもここ、呉は他の都市や港に比べると損害は軽微だ。

それに敵艦隊がこの占領を目指してくるには瀬戸内海を通らなければならぬ。そこには多数の機雷を二重三重に設置している。

瀬戸内海に入るのはそれこそ自殺行為だ。まあ深海棲艦がどのようになっているのかさっぱり分からないが。

近くにはいくつもの飛行場が存在しているし防空の面から見ても

1番だと思う。

まあ敷地内には幾つかの爆弾孔が空いているし稼働機の話ですれば切りが無いが。

守り易く、攻めずらい。

天然の要害と言うわけだ。

そして一番の理由だと思うのは私達だ。

戦艦である私達や正規空母は燃料が無いから動かせない。

重巡くらいまでなら何とかなるかもしれないが……

損傷艦も横須賀や佐世保、舞鶴に回航出来ないから浮いているだけの状態。

要は配置転換をしたくても出来ないというのが実際の所だ。

それに比べると戦闘機は遥かに少ない量の燃料で動かせるから配置転換するにはこちらを動かした方が良い。

最初の内は潜水艦隊を中心に資源を集めていくしかない。

損傷艦の修理もあるし、航空機の生産も必要だ。それらを動かす為の燃料も。今は無い無い尽くしだがそれでもやっけて行くしかない。

提督は促されて壇上に登り挨拶をする。

途中、頭を掻きながらこんなにも盛大に迎えてくれるとは思っていなかったから挨拶を考えていなかったと、言っただけ少し笑いが起こる。

挨拶を終え壇上から降りる。

それら一連の事が終わり、解散の号令を掛けた後にキョロキョロと周りを見ている提督の元へ駆け寄り声を掛けるとどうやら私の事を覚えてくれた様だ。

幾らか会話をした後執務室に案内する。

と言っても庁舎は使用しないが。

本来なら鎮守府の建物に執務室が入る筈だが深海棲艦の空襲でボロボロ。いつ崩れてもおかしくは無い。

だからプレハブで急造した自室兼執務室を使ってもらおう。
家具などは出来るだけ良い物を揃えて足りないものは自作だ。
テーブルとイス、棚は何とか揃えられたのだが執務机と執務椅子は
無理だった。

だから手先の器用な妖精と協力して製作したのだ。

彫刻なんかは施せないが、何処から持って来たのかニスを塗って出
来るだけ良い物にしようと努力をしたがやはり比べるとどうも素人
が作ったという感じがしてしまう。

提督は気に入ってくれたのか嬉しそうに笑う。

テーブルの上に飾ってある花に目を向けると誰がやったのか聞い
てくる。

それは雪風、浦風、村雨、時雨、響の5人がプレハブで作られた執
務室が寂しいと感じて敷地内に咲いている花を摘んで来て飾ったの
だ。

花瓶も何処からか持って来た。

提督はその花を見てまた嬉しそうに笑う。

恐らくこの人はとても優しい人なのだろう。

上辺だけでこの言葉を述べて笑っても、こんなにも嬉しそうに出来
る筈が無い。

提督は、早速仕事をするという。

何か必要なものはあるかと尋ねるとこの呉鎮守府に備蓄されてい
る資源、燃料と弾薬の了を確認したいからそれが書いてある書類と、
損傷艦の一覧を持って来て欲しい、とのこと。

その指示に従って取りに行く。

それを持って戻ると、執務椅子に座って花瓶の花を眺めていた。

それから5時頃まで私と提督は色々と策を話し合い、丁度良い時間
だったので提督を歓迎会に誘う。

こんな状況かだから派手には出来ないし、本当にささやかになつて
しまうがそれでも開きたいと、私達と共にた戦ってくれるのだからと

いうことで開くことにした。

提督を連れて食堂に向かうと既に準備は整い、皆が揃っていた。と言っても艦娘だけだがそれでも十分な数だ。

提督は終始にこにこと笑っていた。

挨拶に来る艦娘を相手に話をしては笑い、少ししか出せない食事を美味しそうに食べて。

歓迎会が終わると提督は私には早めに休むように言って執務室に戻った。

明日は確か第2潜水艦隊が輸送任務から帰還する予定だから、その調整と次に出発する第1潜水艦隊の出撃の調整や持ち帰って欲しい資源を通達するのだろう。

私は言われた通りに休むために艦に戻った。

————— side out —————

大規模輸送作戦 第4話

呉鎮守府に着任してから早くも6か月。

その間、季節は夏から秋に移り変わりそろそろ台風が吹き荒れるだろうかという時期だ。

今の今まで潜水艦隊に燃料と航空機生産に必要なボーキサイト、クロム、ニッケルやコバルトと言った希少金属のみに絞って輸送したお陰か今では当初よりも随分と状況は改善した。

まずは343空と32飛行戦隊は予備機を除いて全員に機体が行き渡り、燃料の事情でローテーションになってしまっているが日夜訓練に励んでいる。

驚いたことに栃木の山中で勉学に励んでいた時は毎日毎日、当たり前のように定期便と呼ばれる爆撃を受けていたのだがここ呉はそんなことはなかった。

それどころか空襲警報が鳴るのも3日に一度ほどだ。

お陰で機体とパイロットを消耗せずに済んだ。ただ予備機は未だに届いていないので1機でも失ってしまうと大ごとだ。

そして各地の航空隊にも補充の戦闘機や新型戦闘機が少しづつ、少しづつだが行き渡り始めている。

更に嬉しいことに、ここに来て航空機生産に必要な資源を輸送してきたおかげか新型機の開発が進み、更に新型機の開発が終わりその量産型の生産が続々と始まったのだ。

今現在海軍が主生産している戦闘機は紫電二一型（これより後は紫電改と記述）だ。

烈風は艦載戦闘機の為に343空向けに少数生産だが紫電改は本土防空の要として各地の生産工場で増産が始まっている。と言ってもやはり資源の問題で細々としたものになってしまっている。

紫電二一型は紫電改とも呼ばれる。

紫電改二との違いは、紫電改は陸上に建設された飛行場から飛び立つのが目的だが紫電改二は艦載戦闘機としての改造を施されているという違いがある。

紫電改二には紫電改にない空母に着艦する為のアレスティング・フックを装備したりと結構な違いがある。

それに比べ紫電改は飛行場から飛び立つのでアレスティング・フックなどの空母に搭載するための装備は搭載されていない。

武装は20mm機銃を4門とかなりの重武装で、大型爆撃機にしても戦闘機を相手にするにしても十分な威力がある。

紫電改二は既に艦上戦闘機の座を烈風に譲ったため、生産は部品のみで機体は生産されておらずそのまま各地の航空隊に配備されている。

そしてもう1機種。

俺達の艦隊の為の新型攻撃機である流星だ。

この機体は雷撃と爆撃を同時にこなせる機体として開発が進められた。先日ようやく量産段階にこぎつけたのだ。

重量が重かったりと多少難点はあるがそれまでの九七艦攻や天山に比べると性能は良い。

流星の開発完了と同時期に俺が市木大将宛に母艦戦闘機隊錬成完了の報告を上げたため、ならば機動部隊を再建するためには攻撃機も必要だろう、とのことで量産をしないという方針を翻し順次量産を開始。

今は第1次量産段階で、予備機以外の量産は動かせる空母が増えると同時に量産を行う。

それに伴い343空には流星が現段階で24機配備されている。

これでは対艦攻撃兵力としては数が少なく魚雷を抱いて敵艦隊に向かうのは無茶だが船団護衛に必要な対潜哨戒任務は十分にこなすことが出来る。

作戦決行時期までには32機の流星が配備される予定だ。

今は改良型の開発を行っていると聞くと、このまま進めば戦力も大幅に回復することが出来る。

そして、それに伴い2か月前に軍令部、正確には市木大将から指令が届いた。

「護衛艦隊ヲ編成シ、複数ノ輸送船ヲ伴ウ大規模輸送作戦ノ準備ヲ開始セヨ」

俺の指揮下にある輸送船13隻と、その護衛艦隊で資源の大規模輸送作戦を行う算段を立てているらしい。

どうやら市木大将は今ならば大規模輸送作戦が成功すると見ているらしい。

確かに備蓄資源の量も着々と増え続け今では、集めた燃料を使い編成にもよるが軽空母までなら動かせる状態になった。流星に正規空母や戦艦ともなると無理だが。

確かにこのまま更に備蓄燃料を増やすのも一手だがこの大規模輸送作戦を実施するだけの価値は確かにある。

まず輸送船の中にはタンカーが4隻存在する。

この4隻全てに原油を満載し持ち帰ることが出来たのなら、艦体の稼働艦艇の制約を大幅に緩めることが出来る。

そうなれば更に輸送作戦を実施できるしそうなれば鋼材の輸送も再開し損傷艦の修理も出来る。

本来なら南西諸島を先に奪還して海路を確保した上で実施するべきなのだが今現在俺達には南西諸島を奪還するだけの戦力は無く、奪還することが出来たとしても維持が出来ない。上陸部隊の陸軍師団を運ぶための船は足りていないし常日頃から南西諸島海域を警備するための船も無い。もし深海棲艦が再び侵攻してきた時はそれこそ日本の終わりだ。

大規模輸送作戦に関する大まかな作戦に関しては中代中将が立ててくれるようだが細かいところはこちらに任せるとの事だった。というのも何が起るか分からないというのが正直なところで細かい指示も出してしまうとその通りに動きすぎて不測の事態が起きた場合に対処できなくなるかもしれない、という心配もあるからだ。

そこで俺はこう考えた。

今の時期、夏から秋にかけての時期は台風が頻繁に発生する。

だからその台風を隠れ蓑にしてしまえばいいのではないかと考えたのだ。

台風の中であればいくら深海棲艦と言えども艦載機は飛ばせない。

しかしそれはこちらも一緒だ。

中代中将に聞いてみたところ、賛成は出来ないと言われてしまった。

彼女によると、

「確かにその作戦ならば安全性も大幅に向上するし成功すれば大きな戦果となる。しかしながら今の輸送船の乗組員にはそんな嵐の中を航行出来るだけの技量が無く、衝突の危険性があまりにも大きすぎる」

「それに艦娘やその艦体、妖精達をもってしても嵐の中を突き進むなんて事をすればどうなるか分からない。さらに付け加えるとすればタイミング良く台風が発生してくれるという保証もない。流石に運頼み、神頼み過ぎる」

らしい。

確かに言われてみればその通りだ。

もつと言ってしまうえば気象衛星は飛んでいてもその電波を受信するための施設や設備は破壊されてしまつて正確な気象予報は得られない。

良い考えだと思つたのだが駄目だった。

艦娘と乗組員である妖精達も大規模輸送作戦に備えて俺からの命令により機銃座を動かせないが対空戦闘などに精を出し練度向上に努めている。

艦を動かせず、やきもきする中で懸命に訓練している姿は本当に頭が下がる思いだ。

艦娘や妖精達との関係はと言うと俺自身はかなり良好だ、と思っ
ている。

駆逐艦娘達は、テーブルに飾ってあった花のお礼を言った後からやけに懐かれたし、彼女達には来るべき戦いの日の為に可能な限り欲しい物は戦意高揚の為に仕入れた。

妖精達にも、菓子類や酒と言った嗜好品を時折差し入れて、それを抜きにしても良好な関係だろう。

さて、今現在俺の指揮下にある戦力は着任当初と変わりない。

というのも前述のとおりだが損傷艦の修理より燃料、航空機生産に必要な資源の輸送に完全に舵を切っているため修理するほどの鋼材は無い。

そもそもの話だがドックが空襲などで破壊されている場合が多く入渠が出来ない状況だ。それでも呉海軍工廠のドックに空襲を免れたドックが1つだけあるのでそこに駆逐艦を2隻入渠させ少ない鋼材で修理中だ。

というのも空母の護衛をするためにどうしても駆逐艦が必要なのだ。

今の数でも足りなくはないが損傷した時の事を考えるとどうしても交代要員が必要だという判断を下した。

他の空母や戦艦の艦娘には悪いが今ここで一つでも選択を間違えてしまうと本当に取り返しのつかない事態に成り兼ねないのだ。

秘書艦は継続して長門に務めて貰っている。

特に俺が指示を出して決めているわけじゃなく時々、長門以外の艦娘も秘書艦につくことがあるが基本的には長門だ。

きっちりしているので書類関連なんかの整理もやってくれるし本当にありがたい限りだ。

今はまだ資源輸送と岩国飛行場の仕事しかしていないから空いた時間で長門を始めとした戦艦組には砲戦の知識を。

鳳翔を始めとした空母組から航空戦の知識を。

重巡、軽巡組からは雷撃戦に関しての知識をそれぞれ教えて貰っている。

驚いた事に戦艦金剛や重巡鈴谷、軽巡天龍は、失礼だが正直馬鹿なのではないか？と疑っていた。

いやだって金剛はイギリスで建造されたという経歴があるからか語尾がなんか片言だし、鈴谷は平和な町中に居ればただのギャル女子高生にしか見えない。

天龍は天龍で俺と話す時、何故か擬音ばかり使うから何が言いたいのかさっぱり分からない時がある。まあ龍田が説明してくれるので何とかなるが。言い換えてしまえば龍田が居ないと天龍の話は理解が出来ないという。

そんな3人だが教えて貰う時に大丈夫か……？と思ってしまったがそれは大間違いだった。何と言えはいいのか、本当に普通に教えて貰えることが出来た。

なんなら天龍に至っては寧ろ分かり易かったりした。いわゆる姉御肌で面倒見がかなり良く分かるまで延々と説明と解説の為に付き切りで面倒を見てくれた。

3人とも口ではなんだかんだと文句を言いながらも最後の最後まで面倒を見てくれるのでとにかくありがたいかった。

それ以外の艦娘達も同じように俺が納得するまで付き合ってくれた。

いやしかし本当に覚えなければならぬ事が多く大変だ。

取り敢えず時間が出来たら教えて貰った事を書き記したノートを

必死に読み返したり、食事時でもノートを開いて読み込んでいたら鳳翔に行儀が悪いと怒られて取り上げられてしまった。

それはさておき、大規模輸送作戦の件だが既に作戦は開始されている。

先ず今現在行っているのは潜水艦隊による輸送作戦の一次中止。

1か月前から潜水艦隊の輸送作戦も一度中止して偽装している。

要はもうこちら側に船を動かせるだけの燃料が無いと思わせるためだ。

幾ら潜水艦隊と言っても発見されていることはあるだろうしそれを考えると必要だ。

だから潜水艦隊による輸送作戦を中断しているのだ。こうすることで深海棲艦の警戒を緩くし少しでも成功率を上げようとしている。

次に頃合いを見て護衛艦隊は輸送船団を伴い南方のインドネシアにあるパレンバンに向かいそこで先ずは燃料の元である石油と航空機生産など様々なことに必要不可欠なゴムを積み込む。

同時に航空機生産に必要なボーキサイト及び希少金属を積み込む艦隊とはここで分かれる。

距離的には相互支援が可能な距離なので特段問題は無いだろうと思われる。

この時同時に第1潜水艦隊が石油を、第2潜水艦隊はボーキサイトなどをそれぞれにも積載する。

ただし出撃日時は潜水艦隊は護衛艦隊及び輸送船団より3日ほど先に出撃し偵察任務との兼務となる。

合流後は前衛哨戒を任せるためもし敵艦隊と遭遇した場合は即座に護衛艦隊に報告、出来るだけ身を潜めてやり過ごし、それが出来ない場合に限り攻撃を許可している。

搭載兵装は魚雷に限り満数搭載予定だ。

伊400型の艦娘達に限って言えば艦首発射型魚雷を8門装備しているが、魚雷を20本搭載可能。

とぎつくりと説明したが大体そんな感じで作戦を進めていく。

しかし既に伊400を旗艦としている第1潜水艦隊は出撃し敵情報収集任務に就いている。連続行動時間は約4か月。航続距離は潜航をせずに水上を航行した場合は14ノットで37500海里と無補給で地球一周が可能な航続距離を有している為、偵察などにはもってこいだ。

そして作戦参加艦艇、及び編成は以下の通り。

第1護衛艦隊

航空母艦1隻 飛龍(旗艦) 搭載機 烈風37機、流星16機、彩雲9機。計59機。

重巡洋艦1隻 摩耶

軽巡洋艦1隻 能代

駆逐艦5隻 秋月、照月、宵月、満月、花月

第2護衛艦隊

航空母艦1隻 蒼龍(旗艦) 搭載機 烈風36機、流星16機、彩雲9機。計58機。

重巡洋艦1隻 那智

軽巡洋艦1隻 矢矧

駆逐艦5隻 涼月、初月、若月、霜月、春月、

第3護衛艦隊

重巡洋艦1隻 鈴谷(旗艦)

軽巡洋艦1隻 神通
駆逐艦5隻 陽炎、雪風、浦風、萩風、村雨

輸送船団
タンカー 11隻
輸送船 9隻

戦闘艦艇23隻輸送船20隻の計40隻にもなる大艦隊だ。これらの艦隊全てで必要燃料数は以下の通り。

空母 飛龍 3750トン
蒼龍 3400トン
重巡 摩耶 2318トン
鈴谷 2243トン
那智 2214トン
軽巡 阿賀野型 1429トン
神通 重油1050トン、石炭580トン
駆逐艦 秋月型全て合わせて 10800トン
陽炎型全て合わせて 2488トン

重油 29692トン
石炭 580トン

プラス輸送船団分と補給分の燃料をタンカーに乗せて行くため更に余裕をもって25000トン分追加される。
合計すると凡そ55000トン分の燃料を消費する。

正直、これだけの量を使ってしまい、作戦が失敗したとなると後々、かなり厳しくなる。

しかし成功したときは見返りが莫大だ。

輸送船団のタンカーの割合が多いのはそれも理由の一つだ。

今回護衛艦隊だけでこれだけの燃料消費量だが、しかしながら今回のタンカーは最大で30000トンの石油を積める。

戦時緊急増産型として79隻と数多く生産されたこのタンカーが残っているのは16隻のみ。それ以外は深海棲艦の通商破壊部隊によって沈められた。

今回は11隻のタンカーが参加し補給艦として艦隊に燃料を補給する役割を担う3隻を除いて全艦が無事に日本に帰れたとすると24000トンと、消費した4倍強の燃料を持ち帰ることが出来る。どれほどの量を補給するかにもよるが、空いたタンクには石油を積み込めるしもう少し持ち帰れる量は増えそうだ。

さて、それでは次にそれぞれの艦隊について説明しよう。

その前に正規空母である、飛龍、蒼龍を艦隊に選んだ理由だが、燃料の搭載量が少なくて済む。ただこれだけの単純な問題である。

先ず瑞鶴だが満載状態での重油搭載量は5069トン。

一応軽空母の分類になっている隼鷹、飛鷹は満載で重油4117.89トン。

飛龍は満載3750トン。

蒼龍は満載3400トン。

比べてみると明らかだが飛龍、蒼龍の方が消費燃料が少なくて済むのだ。

正直な話、これにはかなり驚いた。

先程隼鷹と飛鷹を一応軽空母の分類と言ったのもこれが原因だ。正規空母扱いの飛龍、蒼龍よりも搭載燃料が多い事のどこが軽空母なのだろうか。

それこそ飛龍と蒼龍の方が軽空母になってしまっじゃないか。

まあ搭載機数の問題だったり色々あるんだろうがこれは議論するべきことではない。

航続距離の問題だが飛龍、蒼龍でも十分だという結果になった。両空母共に航続距離は約7700海里になるので十分往復は可能。

第1、第2護衛艦隊は対空戦闘を主目的とし対空兵装を充実化させた。

対空、対水上電探をそれぞれ装備し、摩耶に関しては砲塔の1基を撤去して機銃を増設、駆逐艦達はソナーこそ装備しているが爆雷投射機、爆雷、魚雷を撤去してそのスペースに機銃を増設した。

第3護衛艦隊だけは対空戦闘ではなく、砲撃戦や水雷戦、対潜水艦戦をこなすための装備になっている。

那智は対水上、対空電探を装備し、神通以下は各種ソナー、爆雷、魚雷を装備。

今現在も準備は進められており作戦参加艦艇には出来るだけ対空電探、対水上電探を装備させるために改装中。

ただやはり電探は装備できる艦が少なかつた。

そもそも在庫と言うか、生産数が極小だったためにそれはしようがない。

ソナーは装備させることが出来ただけマシか。

飛龍、蒼龍の搭載機についてだが基本は防空に徹底して務める方針だ。

343空を全て艦載し、対潜哨戒を行うために流星を16機ずつ搭載する。まあ敵艦隊の陣容によっては爆弾なり魚雷なりを抱いて攻撃隊として向かわせることもあるかもしれない。

偵察に関しては彩雲を8機ずつ、計16機装備。これらで担当する。

それぞれの空母の艦載機に関しては次の通りだ。

飛龍	
烈風	45機（補用8機）
流星	16機
彩雲	8機
合計	69機

蒼龍	
烈風	43機（補用7機）
流星	16機
彩雲	8機
合計	67機

2 空母合わせて136機。

これらの艦載機は折り畳み式翼を採用しているため搭載機数が多くなった。

と、艦隊の航空兵力の陣容に関しては大体このぐらいだろう。

艦載機隊に関して言えば343空は流星隊が配備される前に空母での発着艦訓練は終えている。少ない燃料をやりくりして空母を動かしての訓練だ。

流星と彩雲に関しては今現在も錬成中だがあと4日ほどあれば完了出来ると報告を受けている。

輸送船団だが追加でタンカーが7隻追加で派遣された。

先程説明したがこの11隻のうち3隻は補給艦として燃料に不安が出てくるであろう駆逐艦や軽巡に適宜補給を行う予定だ。

揚陸艦である神州丸も輸送船団に加えてはどうかという意見も出たが速力が最大で20ノットほどこしか出せない。

それに比べてそれ以外のタンカーや輸送船は最大で26ノットを発揮出来る。

この艦隊はどちらかと言うと高速艦隊に分類することが出来るのでその中に最大20ノットしか発揮出来ない艦が居ると万が一空襲

や敵艦隊と戦闘になった場合、艦隊全体が一番遅い神州丸の20ノットに合わせざるを得なくなり高速での離脱が出来なくなる。

そういうわけで神州丸の参加は見送られた。

それら全てを考えた上で、市木大将と中代中将からGOサインが出たのは10日後。出来るだけ隠密性を高める為に夜間の出航になる。

まあ40隻もの大艦隊で行動するのだから隠密性もクソも無いんじゃない……と思ってしまうがそれだけ必要なものは多く、期待も大きい。のだから何としても応えなければならぬ。

作戦決行日までの間、艦艇用燃料、航空機用燃料や砲弾薬、対潜爆弾、艦船用爆弾、魚雷の積み込み作業を行う。妖精達には交代で休暇を取らせた。

既に作戦については説明済み、参加艦艇の発表も行った。

そうしてようやく10日後。

大規模輸送作戦決行日が来た。

「提督、現在時刻2300。出航時刻だよ」

「分かった。それでは、この作戦の成功を祈ろう。艦隊抜錨!!」

飛龍から報告を受けた俺は抜錨命令を出す。

すると参加艦艇40隻が勢ぞろいで一斉に錨を巻き上げる。

真つ暗な夜の闇の中、最低限の船の明かりだけが灯っているのが良く分かる。

俺は飛龍に乗り込み艦橋で椅子に座っている。

横には飛龍が立っていて、さらに俺達の周りには艦長や副艦長、参謀だったり困んで立っている。

参謀である山田大佐と艦長を務める木村大佐は、もう二度と船を動

かすことが出来ないと思っていた、とボロボロと大粒の涙を零しながら俺に感謝の言葉を述べてくる。

しかし俺はそんなことはないと思う。

俺がやったのはあくまでも燃料を集めただけに過ぎず、今の今までもう二度と艦を動かせないかもしれないのに各所の整備や維持を行って来たのは彼らだ。

それが無ければ幾ら燃料があったとしても動かす事は出来なかつただろう。

先ず豊後水道を抜けたのは第3護衛艦隊だ。

前路対潜哨戒の為に先に出て行ったのだ。

第3護衛艦隊旗艦、那智から異常無しの報告が入る。

その報告を受けた後、続けざまに第1、第2護衛艦隊が豊後水道に入り抜けていく。

全艦隊が豊後水道を抜けたのを確認後、各艦隊に集合命令を通達。事前に知らせておいた配置で艦隊を組む

先頭を進むのは雪風。鈴谷を挟んで陽炎と浦風がそれに続く。

その後ろは神通を真ん中に萩風と村雨が。

更にその後ろに飛龍と蒼龍が陣取り後ろには横一列5隻を4列で進む輸送船団。

その左右を第1、第2護衛艦隊の空母随伴艦が固める。

タンカーを中心に輪形陣を組むような形だ。

それぞれの艦同士の間隔は200m。

雪風

陽炎 鈴谷 浦風

萩風 神通 村雨

照月 蒼龍 飛龍 涼月

タ タ タ タ タ

摩耶 那智

	能代	夕	夕	夕	夕	夕	矢矧
	輸	輸	夕	輸	輸		
秋月	輸	輸	輸	輸	輸		初月
宵月							若月
	満月					霜月	
	花月		春月				

「対潜、対空警戒を厳となせ」
「了解」

艦隊が陣形を組み終わり次第、対潜警戒、対空警戒の命令を下す。幾ら夜間だと言っても油断はできない。むしろ潜水艦にとっては夜こそが本領を發揮し、狩りの時間と言っても過言ではない。

大型の偵察機ならば夜間でも十分飛べるし発見されることは出来るだけ避けたい。

航路は大陸寄りの航路を行きたいのは山々なのだがそちらを進むと南西諸島方面を支配下に置いている深海棲艦の索敵網に引っ掛かる恐れがある。

偵察の結果、何故か大陸寄りの航路よりも太平洋の方が敵艦隊の数が少なかったのだ。普通なら太平洋側にも同じくらいの深海棲艦が居てもおかしくはないのにも関わらず。

グラフに纏めて見ても大した変化は無くどういうわけか敵艦の数が減少傾向にすらある。市木大将以下、中将達で頭を捻っても結論は出なかった。

減っているというのならそれはそれで構わない、作戦を執行するにあたっては寧ろ都合ですらある、という結論に至った。

ただそれでも何かしらの理由がある筈で、それが判明していない以

上最大限警戒しながら大規模輸送作戦を実施すべきとも。

中代中将と西村中将は実施に渋り、やはり延期すべきとの意見だったが深海棲艦の数が減っているのなら好機でもあるのでは、という事で実施に至った。

今現在艦隊は豊後水道付近で集結、陣形構築後、南下していき太平洋に出て行っている途中だ。

フィリピン海の真ん中あたりに差し掛かったら台湾とフィリピンのイトバヤット島の間を通過するためにそちらの方に向かって針路をとる。

道のりは艦隊速力18ノットを保って進んでいく。

凡そ行き帰りで2週間を予定している。資源の積み込みにどれぐらいの日数が掛かるかによってはかなり前後する。それに航行中も偵察機と前衛哨戒任務に就いている第2潜水艦隊から敵艦隊発見の報告が入れば出来るだけ戦闘を避け、こちらも見つからない様にするためと目的を悟られない様に欺瞞航路をとる可能性もある。そうすると距離にもよるが1、2日程度の延長は想定範囲内だ。

3日後、針路をバシー海峡へ取って進んでいる。

「提督、あと凡そ350海里でバシー海峡に差し掛かります」

航海長の妖精が俺に報告を上げる。

「バシー海峡に敵影は？」

「3時間前に届いた第2潜水艦隊からの報告では無し」

敵影は無し。

だが報告を受けたのは3時間も前だ。海峡に差し掛かるまで5時間もある。

このまま進んだ時にもし敵艦隊が居たとしたら待ち伏せさせられてしまう。

それならば偵察機を出した方が良かったらう。

「海峡に向けて偵察機を出す事は？」

「準備に1時間ほど頂ければ可能だよ」

飛龍に聞いてみると可能だという。

それなら決まりだ。

「よし、準備を進めてくれ」

「何機出しますか？」

「4機だ。バシー海峡からルソン島の間に向かって放射線状に放つてくれ」

「分かりました。艦長、偵察機出撃準備始め」

「了解。格納庫、偵察機出撃準備始め。偵察機出撃準備始め」

「提督、偵察機の件なんだけどちよっとまだ距離が遠いんだ。だから出来ればあと30か40海里ぐらい進んでから偵察機を出すことにしない？」

「今の距離では無理か」

「無理じゃないけどもし敵機に襲われたりした時に逃げ回ったり速度を上げたりしたら燃料が足りなくなるかも」

「……分かった。発艦は丁度300海里地点にしよう」

「ありがとう提督。艦長、聞いてたね？」

「はい、しつかりと。発艦は海峡から300海里地点で偵察機発艦、ですすね」

「うん、それじゃ宜しくお願いね」

さて、一応出来ることは全部やった筈だ。

しかしこれから先、どうなることやら……

「提督、偵察機発艦しました」

「分かった。それじゃ報告を待とう」

「提督、昼食をお持ちしました」

「ん、ありがとう。頂くよ」

偵察機が無事発艦したという報告を受けると続いて昼食を態々

持って来てくれた。献立は握り飯が4つと味噌汁に沢庵だ。

「申し訳ありません、本来ならば士官用の食事をお出ししなければならぬのに……」

「ああ、全然気にしていないから。寧ろこういう簡単な物の方が俺は良いよ。何せ貧乏舌だから変に凝ったものを出されると緊張しちゃって駄目だ」

何と言うか個人的にだが俺は高級食はあまり口に合わない。

そりやたまになら分厚いステーキとか食いたいとは思うがそんなのがしよつちゆう出てきたら嫌になる。それに士官用の食事はフルコースみたいなやつで、テーブルマナーやらなんやらと面倒というものもある。

だから握り飯の様に簡単に、手軽な方が俺としては望ましいのだ。

鎮守府では艦娘の皆と同じものを同じ場所で食べるからそう言った心配は無いのが気楽な所か。

「そうですか……」

「確かに提督って食事とかあんまり気にしてる節は無いなあ。偶に提督に言われて長門は先に食堂に来てるのに肝心の提督は来なくて。今じゃ絶対秘書艦と一緒に来るように、って厳命されちゃったもんね？」

「それは言わない約束だろう？何故だか鳳翔には逆らえんのだ……」

鳳翔と言う艦娘が居るんだがこれがまた母親の様でどうにも逆らえない。本当に注意されてしまうとうとうしょうもない。

「あはは、ごめんごめん」

「まあしかし、提督になる前は本当にただの、特技も何も無い一般人だったからな」

「でも、提督が現れて私達の指揮を執るって聞いた時は本当に驚いたなあ。全然知らされてなかったし噂程度なら聞いてたけど何処からか流れた嘘だと思ってたし」

「我々もです。何処からか流れてきた噂程度にしか受け取っていませんでした」

「まあ、そう取られても使方が無いな。実際かなり急だったのは確か

だ。それ故に教育を受けたのもたったの3か月だけだ」

「でも鎮守府に来てからは私達からも色々教わってるでしょ？有名なんだよ、提督は勉強熱心だって」

「いや、当然の事だ。皆の命を預かるんだし中途半端な真似は出来ないし、何より俺がしたくない」

「でもそれでご飯時までノートを開いて鳳翔さんに怒られてたら元も子も無いと思うよ？」

「それは言わんでくれ……あの時は本当に怖かったんだから」

飛龍と会話していると張りつめていた艦橋内に笑いが起こり少しだけ雰囲気緩和された。

「提督、昨日からずっと起きていられますから少しばかり仮眠を取られては？」

「いや、皆が頑張ってくれているんだからこれぐらいは、な」

確かに昨日から一睡も取っていないが、緊張からなのか、それともアドレナリンが出ているのかは分からないがどうにも眠くないのだ。寧ろかなりしっかりと目が覚めている。

それに今寝てしまうとそれこそ緊急を用する時に反応が鈍くなるかもしれないからあまり寝たくないのだ。

「ですがこれから忙しくなると予想されます。その中でお倒れになられては大事です」

「そうだよ提督。大丈夫、偵察機から報告が来たらちゃんと伝えるから」

「む……」

確かに参謀と飛龍のいう事にも一理ある。

ここぞという時に倒れる方が一大事だ。俺と言う提督が居るといふ強みを生かせ無くなってしまいう事は出来るだけ避けたい。2人の言う事に従う方が良いか。

「確かにその通りだな……分かった、少しばかり休ませてもらうよ」

「うん、そうした方が良く。それじゃあ艦長、私は提督を部屋まで送るから戻ってくるまでお願いね」

「はっ、了解しました。提督、おやすみなさい」

「ああ、お休み」

飛龍と共に艦橋から降りて自室に向かう。

タラップを降りて、艦内に入っていく。歩いていると時折擦れ違う下士官だっただりの妖精達に敬礼され、答礼を返しながら自室に向かつていく。

自室に着いてドアを開ける。

すると中は軍艦の艦内とは思えない意匠を凝らしてある。

上着を脱いで三角ハンガーにかける。するとふと後ろから飛龍が声を掛けてきた。

「提督さ、もう少し肩の力を抜いた方が良くよ」

「どういうことだ」

「提督さ、普段から難しい顔してるの自覚してないでしょ」

「何？そうだったのか……」

「まあこんな状況だからしょうがないとは思うけど、ずっと張り詰めたままだといつか糸が切れた時、本当に倒れちゃうよ？」

「……そうだな。でもそうは言ってられない。俺が踏ん張ればそれ以上飛龍達艦娘や妖精達の負担も大きく減る。それに少しでも選択を誤ればどうしようもないほどに今以上に追い込まれて取り返しがつかなくなる。だから今ここで気を抜く事は出来ないのだ」

確かに睡眠もしつかり摂らなければならぬとは思う。

だがそれは平時に限った事だ。今はそんな呑気に構えていられる情勢では無い。ただでさえ艦娘や妖精達には負担を強いているのに俺が休んだら更に重く押し掛かってしまう事になる。事実、俺がやらなければならぬ、俺にしか出来ない事も数多い。

「でもそれで提督が倒れたらそれこそ取り返しが付かなくなっちゃうと思うんだけど。……これ本当は話さないはずだったんだけどね、皆心配してるよ。確かに勉強しなきゃいけない事も沢山あるだろうけどそれでも頑張りすぎだつて。執務室とか自室の明かりがつい

てるの、何度も見たことあるし、警備任務についてる妖精も毎日だ、つて」

「……」

「金剛は寝てくれないのなら一緒に寝てしまえば寝てくれるとか、鳳翔さんはベットに縛り付けてしまいましょうか、って言ってたよ。個人的には実行に移される前に生活習慣とかしつかりした方が良いよ。ちゃんと食べて寝てお風呂に入って。それから仕事をすればいいの」「……そうだな。善処するよ」

流石に金剛や鳳翔の提案だけは避けねばなるまい。

そんなことされても寧ろ寝れなくなってしまう。

「うん。……ちゃんと一人で寝れる?」

「寝れるとも。何歳だと思ってるんだ……」

恥ずかしいやら情けないやらという感情で手で顔を覆ってしまう。

既に誕生日を迎え21歳になった。そんな男が何故に年上の女性に1人で寝られるかと心配されなければならないのか。

それほどに今までの俺は生活習慣が乱れていたか?それでも毎日3時には寝て6時には起きるようにしているのだがなあ……

正直余りにもやらなければならぬ事などが多すぎてそんな誕生日を迎えたと言う実感は一切無いのだが。誕生日を1か月以上過ぎてからふと、そう言えば俺21になったのか……、と思い出したぐら이다。

「それじゃあちゃんと寝てね。それじゃお休み提督」

「ああ、お休み」

飛龍はそういうと艦橋に戻った。

しかし、ううむ……

それほどまでに俺の生活習慣は乱れていたのか……

全くそんな実感は無いのだが他人から言われてしまうと事実なのだと認めなければなるまい。

思わず腕を組んで唸ってしまう。

……鳳翔に怒られる前に戻さねば。飯もちちゃんと食べて睡眠も摂るようにしよう。

そう決意してからズボンを脱ぎハンガーにかけてからベツトに潜り込む。

300海里で偵察機を放ったから、早ければあと2時間ほどでバシー海峡上空に到達するはずだ。それから敵艦隊の有無を確認するから報告の電文が届くのはそれからだ。長ければ3時間程度の睡眠だ。

それまでは言われた通り、しっかりと寝ておこう。恐らくこれから先大忙しになる筈だからな。

ベツトに潜り込んで10分ほどで俺は眠りについた。

—— side —— 山田 ——

俺は今航空母艦飛龍に載っている。

役職は343空所属の艦上偵察機である彩雲のパイロットだ。

343空は元々防空戦闘機隊だったと聞くが今では流星や彩雲を装備する立派な母艦航空隊だ。

元々俺は所属が千歳飛行場の偵察員として零式水上偵察機を操縦していた。

その前はフィリピンのダバオ飛行場で偵察部隊所属の艦攻に載っていた。あの時はまだ天山艦攻を使用していたから偵察専用の機体は無く速度が遅くて苦労したな。

同じ機に乗っている石田とはその時からの付き合いだ。

あの時はまだ新米で周りをきよろきよろと見回して落ち着かず、その時新しく配属されたのが石田だけだったから周りの全員から坊主と呼ばれてなんだかんだ言いながら可愛がられていた。

そんな石田も今じゃ立派に自分の役割をこなせるようになった。

まあ、ダバオにいた時の仲間達はもう俺と石田を入れても数えるの

に両手で十分足りるほどまでに減ってしまった。

つい先日その内の1人が戦死したと知らせが届いた。

俺達だけじゃない。

1人、また1人と櫛の歯が抜け落ちていくようにどんどん熟練も新米も区別無く死んで逝く。

明日は俺か、それとも隣に座っている石田か。はたまた一緒に煙草を吸った奴か。飯を共に食べて笑いあった奴か。

そう思っただけ毎日毎日過す。

ところがそんな状況の中、石田と共に飛行場司令室に呼び出されるといきなり配置が岩国になると言われて。

「今更こんな状況で配置が変わるだど？何の意味があるんだ……？」と首を傾げていた。

まあ上からの命令なので岩国飛行場に行ってみるとそこにあつたのは、今時珍しい70機を超える航空隊だ。それも陸軍と一緒に駐屯しているのだから驚きだ。しかもどちらとも陸軍海軍では最精鋭と名高い343空に32飛行戦隊だ。

(これはただ事では無いな……)

と考えていると、偵察隊に配備された機体は新型の彩雲だった。

彩雲を受領した後に始まったのは文字通り月月火水木金金と言い表せる程の猛訓練。

機体に慣れるための操縦訓練を2か月。

一体なんの為に今頃こんな訓練をするのか不思議でしようがなかった。

先に配備されていた戦闘機隊の連中に聞いてみても、誰もが、

「俺たちや、母艦航空隊だろうが」

と、ニヤツと笑っただけ。

2か月の猛訓練の末、操縦に慣れて漸く一息つけるな、と思った瞬間始まったのはなげなしの燃料を使って空母を動かしての着艦訓練地獄。

その頃からどうやら何か大きな作戦を控えているらしい、と我々妖

精の間で噂になった。と言っても戦闘機隊の連中は知っていたのか大して驚きもしなかったが。

でなければ空母を瀬戸内海だけだが動かして艦載機の発着艦訓練などやる必要もないし、そもそもの話、全国中の航空隊から手練れを集めて編成する必要も無い。

そしてその噂は的中。

提督から作戦の説明を受けた艦娘飛龍さんから俺たちは説明を受けた。

大規模輸送作戦を実施するとの事。

確かに今の日本には艦を動かすための燃料も航空機を生産するためのボーキサイトも無い。損傷艦の修理をするための鉄鋼はとつくの昔にそこが尽きて今じゃなけなしの鋼材を集めて駆逐艦2隻を修理するのがやつと。

それを考えればなるほど、どこかの奪還作戦よりもずっと重要だ。だが同時に思った。

「こりゃ相当な大博打じゃないかと。」

何故なら出撃したこの陣容を考えればそれこそ本当に失敗したときに取り返しが付かなくなる。

まあ確かにやる価値はあるが、どうにも腰が引けてしまう。だがここまで来た以上やるしかない。腹を括った。

そして実施された大規模輸送作戦は、今まで潜水艦隊が命懸けで運んできた燃料を使っての作戦だ。投入戦力は正規空母2隻と重巡3隻に軽巡3隻、駆逐艦15隻、2個潜水艦隊までも投入する万全っぷり。

輸送船団は20隻を数える。

輸送船の数を考えれば駆逐艦だけでもあと、もう5隻は欲しい所だったが本土の防衛もしなければならぬ以上これが限界か。空母ももう1隻いれば出来る事の範囲が大きく広がるのだが艦載機が無

いから出撃してもただ燃料を無駄にして、デカイ標的にしかならない。

それでもこれほどの艦隊が動くのは、何時以来だろうか？

思わずその姿を見て涙が零れそうになったのは俺だけではない。

彩雲に共に乗る偵察員の石田も並んで立っている時に少しだけ涙ぐんでいた。

さて、そんな艦隊の一員として出撃してから数日。

格納庫内に偵察機の出撃準備の命令が放送された。そしてにわか慌ただしくなる格納庫内。出撃するのは俺の機を含めて4機の彩雲だ。

整備員によって燃料が積み込まれ、銃弾の装填が行われ、エンジンの点検が行われていく。そしてそれらが終わり昇降機（エレベーター）によって甲板に彩雲が上がっていく。

その最中、俺は飛行隊長兼戦闘機隊長である原田大佐から説明を受ける。

「今回はバシー海峡からルソン島間の偵察を行ってもらおう。これより4機を放射線状に進み、敵艦隊の有無を確認してきてもらいたい。場合によってはそれを超えて更に奥を偵察してもらおう。高度は5000m。貴官らを収容する地点は、バシー海峡とルソン島の間地点より東に200海里だ。……何か質問は？」

「……………無し……………」

「よし、良いか？必ず生きて帰ってこい」

「……………了解！……………」

「諸君らの武運を祈る。それでは作業に掛かれ。別れ」

「……………別れます！……………」

号令で一斉に愛機に向かって走る。

「武運を」

「ありがとう」

整備員から言葉を受け取り操縦席に入り発艦準備を進める。

既に暖機運転は済み、あとは発進するだけだ。

飛龍は艦首を風に立てて合成風力を作り出す。すると今まで甲板に吹いていた風よりもずっと強い風が吹き始める。

こうすることで短い飛行甲板上でも十分発艦が可能になる。

そして遂に車輪止めが外され、発艦始めの旗が振られた。

それと同時にブレーキを外しフルスロットルまで一気にスロットルを押し込む。

彩雲は飛行甲板を駆けてだんだんと速度を上がっていき、一瞬ふわりとした感覚が全身を襲った。それが甲板から離れて飛び立ったことに他ならない事実だ。

操縦桿を少しづつ引き起こし高度を上げていく。

暫くして高度5000mに到達した。

計器を確認し、何処にも異常が無いことを確かめる。

そして後ろの偵察員の石田にも確認する。

「石田、異常はあるか？」

「いいえ、ありません。すべて正常です」

ようし、それじゃあ偵察しに行くでしょう。

進み続ける。多少雲が多いがこれならばまあ、高度を500mほど落として飛ばせば特段問題無く偵察出来る。

思った通り500mほど高度を落とすと周りに雲は無く上に広がっているだけだ。気を付けるとすれば雲の中から敵機が俺達に向かって急降下してきた時に直前まで察知出来ないことだが俺達の彩雲のエンジン音以外には何も聞こえないから大丈夫だろう。それでも警戒はしなければならぬが。ただ同時にもし敵に発見されそうになったら襲撃を食らった時に雲の中に逃げ込める利点もある。

辺りを見回すと久しく見ていなかった南洋の海が広がっている。

空から見ると、遠くの海面が太陽に照らされキラキラと光っている。

る。この光景だけならば本当は戦争なんてしていないんじゃないかと勘違いしてしまいうる。

ああ、やはり日本の海とは全然違う。とても綺麗だ……

「石田、俺達は帰って来たんだな……」

「ええ、まさかもう一度この目で南の海を空から拝めるとは……感激です」

帰って来たと言う訳ではないがそれでもそう感じてしまう。石田の声も心成しか震えている。

しかしそう長くは感傷に浸っては居られない。俺達は一番ルソン島寄りを飛んでいるから計算上、そろそろルソン島が遠目に見えてくるはずだからだ。この辺りは完全に深海棲艦の支配領域だ、気を抜いては居られない。

本来の索敵は敵を見つける事が最重要目標だが、今回ばかりは見つからないでいて欲しいと願うばかりだ。輸送船団の安全の為と言う事もあるが今回は敵艦隊とやり合えるだけの戦力は無い。流星だつて空母2隻で32機だけ。

これが敵の哨戒艦隊で最大でも軽巡くらいまでしかいないようなのなら砲撃戦でも航空攻撃でも潰せるだろうが戦艦や空母を含む有力な艦隊が相手ともなるとかなり厳しい。

航空戦だと空母ヲ級は1隻で90機程の艦載機を搭載しているから2隻も出てきてしまえば圧倒される。

幾ら防空に専念したと言っても厳しい戦いを強いられる。

更に周辺にいる敵艦隊に通報して集まってこられると、輸送船団の護衛なんて出来るわけがない。

砲撃戦にしても戦艦相手だとかなり厳しいと言わざるを得ない。

こちらには戦艦なんて1隻もないのだから夕級1隻でさえ負ける。必殺の酸素魚雷を叩き込めることが出来れば当たり所によつては一撃でも撃沈可能だが、駆逐艦は魚雷を降ろしてその代わりに対空機銃を搭載したから装備しているのは重巡だけ。一斉射を行つても連装魚雷だから片舷6本。命中率は相当低い。

1本でも命中させたいのならば通常5000mから放つ所を最低

でもその半分は距離を詰めなければならない。当然敵弾の命中率も上がるし戦艦からすればこんな距離は主砲の最大射程からすれば超至近距離。寧ろ命中させられない方がおかしいぐらいだ。

それに空母は対艦攻撃用の航空魚雷や爆弾も余り搭載せずに来て
いる。その分航空機用燃料と戦闘機の機銃弾や対空砲弾を多く搭載
しているが機銃掃射で戦艦や空母は沈められない。全力攻撃を一度
でも行ってしまうえば航空魚雷は無くなってしまおうし爆弾も残り少
ない。空母や戦艦と言った大型艦を沈めるのには魚雷が必須。爆弾で
も空母なら飛行甲板に叩き込めば使用不能に出来るが修理されてし
まえば最低でも戦闘機の発艦は出来るようになってしまう。

それらを考えると出来るだけ敵艦隊と遭遇せずにパレンバンまで
行つて呉に帰る事が最良だ。

「石田、敵艦隊は確認出来るか？」

「今のところは見えませんね……」

石田は双眼鏡を覗いてあちらこちらを見回しているが発見は出来
ない。

左側を見れば遠くの方にルソン島とバブヤン諸島が見えるし、右側
にもバリタン海峡とルソン海峡が見える。その向こうにはバテー
ンズがある筈だが俺達からは見えない。2番機なら見えていること
だろう。

どうするか……この辺りに敵艦隊が見えない事からして敵艦隊が
存在していない事は確かだろう。だが更に奥側がどうなっているの
かが不安要素だ。

もし今見えている先に敵艦隊が待ち伏せをしていた場合、艦隊は奇
襲を受けることになる。対空電探や対水上電探を装備しているから
どちらかと言うと強襲になるか。

どうする？

燃料計を見てみると、飛龍が遊弋している海域まで戻る事を考えれ
ば……

飛龍を探し回る事にならなければまだ幾らかは進めそうだ。

よし、艦隊の安全の為にも行こう。

「石田、もう少しだけ偵察をしたい。もしかすると艦隊に戻れなくなるかもしれない。それでもいいだろうか？」

「山田さん、そんな無粋な事聞かんでくださいよ。まだ死ぬと決まっていたわけじゃないんです。それに俺たちが今ここで引き返したら偵察機に乗っている意味が無いでしょう？」

「……その通りだな。よし、行こう。変なことを聞いて悪かったな」

「いえ、気にしないでください」

石田はそう言っているが実際は死ぬ覚悟を決めたのだろう。振り向いて見ると額に大粒の脂汗が浮かんでいる。

俺は今更だ。とつくの昔に何時でも死ぬ覚悟は決まっている。

だがしかし、先に死んでいった戦友に恥じない働きをしてからでないと死に切れんからな。

あれから進んできた。今の所敵艦隊は発見出来ていない。

……やはり敵艦隊はこの近辺の海域に存在していないのか。

そう考えて機体を翻し空母に戻ろうとした時だった。不意に石田が声を上げた。

「!!山田さん!!航跡が!」

「何!?!どこだ!!」

「前方のかなり遠くにうつつすらと!あれは波なんかじゃない!」

出来る指差した方を双眼鏡で見ると、確かにそこには航跡がうつつすらと残っていた。それを見て即断した。

「よし、行こう。ここで帰ったらここまで進んできた意味が無くなってしまう!」

「はい!勿論です!」

石田の指示に従って機首を航跡の方に向ける。

暫く進むと双眼鏡を覗かなくても確認出来るようになった。

航跡に沿って飛んで行くと、その先に確かに敵艦隊が存在していた。

双眼鏡を覗いて敵艦隊の陣容を確認する。

「ありやあ、空母だな……それも2隻もいるぞ……」

「ええ、重巡と、戦艦も1隻いますね……」

その艦隊は空母2隻、戦艦1隻、重巡1隻、その随伴艦が10隻ほどの艦隊だった。

空母の数は同数、戦艦は向こうの勝ち。重巡の数と軽巡以下の随伴艦の数はこちらが勝っている、か……

「空母と戦艦の艦種は分かるか？」

「空母の方は……あれは……どちらともヲ級ですね……飛行甲板のデカさが又級じゃないですね。戦艦の方は……恐らくル級かと」

「ヲ級2に、ル級1か……艦隊じゃ相手出来んな」

「ええ、ヲ級もですがル級と言うのが辛い。砲火力もですが対空火力もヲ級より上ですから攻撃隊を向かわせたら迎撃戦闘機と相まって相当被害がでるでしょうね……」

「こつちに気が付いていないのか？どう見ても迎撃戦闘機が発艦している様子が無い」

「もしかすると電探を作動させていないのでは？この辺りは奴らの完全な支配領域です。気を抜いていたりしてもなんらおかしくはありません」

「そうだな……よし、空母に帰投しよう。敵が探知出来ない距離まで離れたら電文を打つ」

「了解」

気が付かれていないのなら好都合だ。

このまま離れて行こう。もう少し偵察をしたいんだがこれ以上飛ぶと帰れなくなる。

「石田、電文を打て」

「了解。電文打ちます」

『バンギー湾ヨリ南西ニ70km地点で敵艦隊発見ス。空母ヲ級2、戦艦ル級1、重巡1、随伴艦多数』

『敵艦隊ノ針路ハ北西、速度凡ソ18ノット。敵艦隊ハ我々ニ感ズカズ。1543』

「電文打ち終わりました」

「よし、警戒を厳となせ。飛龍に帰るぞ」

「はい」

電文が打ち終わったという報告を受けた後からは、俺達は無言だった。

燃料計を見るとかなりギリギリになるな……頼むぞ、飛龍までもつてくれよ。

俺はそう願った。

今は飛龍に無事辿り着ける事を願うばかりだ。

l l l l l s i d e o u t l l l l l

第5話

「提督！失礼します！」

「ッ!?どうした！何があった!?!」

勢い良く開け放たれる自室のドア。

その音で飛び起きた俺は、即座に何があったのか聞く。

「突然お部屋に押し入ってしまい申し訳ありません、ですが緊急性の高い物と判断した為失礼ながら入らせてもらいました」

部屋に入ってきたのは参謀長である山田大佐だ。

彼は、頭を下げ謝罪の言葉を述べるが血相を変えて俺を起こしに来るぐらいの事が起きているのだろう、そんな状況で一々咎めたりしない。

第2種軍装である真っ白のズボンと上衣を着ながら用件を尋ねた。

「構わない、用件は？」

「偵察機に出た1番機から敵艦隊発見との電文が届きました！」

「何!?!分かった。今すぐに艦橋に上がろう」

服を着て、軍帽を被り山田参謀と一緒に艦橋に向かい小走りで進む。

「湯野提督、艦橋に入られます！」

下士官妖精の1人が声を上げ、金属製の扉を開けてくれる。

中に入ると飛龍を含めた全員が俺に対して敬礼をしている。それに対して俺は答礼を返しすぐに降ろす。

「敵艦隊が発見されたらしいな。位置は？」

「バンギー湾より南西に70km地点です」

「敵艦隊の陣容は？」

「空母ヲ級2、戦艦ル級1、重巡1、随伴艦多数です」

「……相手にするには厳しいな」

「ええ、予測では我々の搭載機数より50〜60機ほど多い計算になります」

「……原田大佐、もし戦うとしたらどう見る?」

「我々ならばやれます。……と言いたい所ですが正直に申し上げます」

す。敵戦闘機の数は凡そ同数と考えます。そうなると全力で迎撃をしたとしても敵戦闘機との戦闘で精一杯となり敵の艦爆や艦攻には一切手出し出来なくなります。流星を迎撃に加えれば何とかなるかもしれませんがやはり厳しいことになりませんか」

「やはりか……敵艦隊との距離と針路、速度は？」

「約400海里です。針路は北西、速度凡そ18ノットです」

「敵がこちらに攻撃隊を飛ばしてくる可能性は？」

「航続距離の関係上、それはあり得ないでしょう。我々の艦載機ならば300海里以内に入ってしまうれば攻撃は可能です。ですが深海棲艦の艦載機はこの距離で攻撃隊を放ってくる事はまず無い、と言えます」

原田大佐はそう答える。

敵からの航空攻撃は有り得ないか。我が艦隊も18ノットの速力で進んでいる。この速力を維持すれば今の距離を保てる。

考えていると、山田参謀長が声を上げた。

「提督、気になる事が一つあります」

「なんだ？」

「電文の最後に『敵艦隊ハ我々ニ感ズカズ』とあります。彩雲が敵の艦隊を視認し更には艦種を特定出来るほどの距離に近づいても迎撃を受けたり発見された兆候は一切無いという事は、恐らくですが敵艦隊は電探などの電源を落としているのでは？」

「……あり得るな」

「更に言ってしまうえば彩雲だけでなく我々艦隊にも一切感じていない可能性が高いと思われます。実際に我々は今の今までソナー以外一度も使用していません。そう考えると逆探に探知される可能性も無い。今の今まで敵潜水艦との接触も無いのです、もし我々を発見しているのなら今頃潜水艦の雷撃や敵の航空機で滅多打ちにされていなければおかしいです」

「だが、待ち伏せの可能性は？我が艦隊が海峡を越えてから複数の空母艦隊で袋叩きにするという可能性は？」

「確かにその可能性もあるでしょう。ですが先ほども申し上げた通り

それはあり得ません。何故なら待ち伏せを企図しているのなら今発見された艦隊以外にも敵艦隊が見つかっていなければおかしい。しかしこの艦隊以外に発見はされていない」

「となると敵には我々を攻撃する意図どころか存在すら知らない、と仮定します。何より敵はもし我々を発見していたらそこまでの戦力ではない事、輸送船団を伴って行動している事は知っている筈。態々袋叩きにしなくとも確認された戦力ないしは複数の潜水艦で壊滅させられる。護衛艦隊を相手せずとも輸送船団を叩けば深海棲艦の勝ちです。それぐらゐは馬鹿でも分かる。それなのに攻撃してこないとなるとやはり我々の存在を知らないと見るべきです」

山田参謀や艦長などが俺の質問に対してそれぞれの考えを述べてくる。

確かにそれぞれ述べた意見には筋が通っている。

それらの意見を聞いた上でどうするべきか……どのような指示を出すべきか……

まずは敵情をしつかりと把握すべきか。

仮に敵艦隊が我々の存在を知らないとすれば今ここで下手に手を出すとかえって存在を露呈する羽目になる。

一番確実なのは偵察機だが今現在の位置から放つてもそこまでの偵察範囲拡大にはならない。幾らかは奥の方を偵察出来るだろうが殆ど今帰投中の偵察機と同じだ。なにより折り返し地点に到達したころにはもう敵艦隊はどこか遠くへ行ってしまっている筈。

それらを踏まえて考えると敵艦隊の航路に先回りして偵察が可能なのは潜水艦隊か。

「……第1潜水艦隊の位置は？」

「は、予定通りならば今頃は丁度南沙諸島と西沙諸島の中間地点を航行中かと」

「よし、ならば第1潜水艦隊に敵艦隊の動向を探る様に暗号文を打つてくれ。第2潜水艦隊にも前進、同じく動向を探って欲しい、と暗号文を」

「了解しました」

そして通信参謀は電信室に俺の伝えた暗号文を両艦隊に打つよう伝えた。

「提督、我々はどうしますか？」

「まずは偵察機を全機收容しよう。予定地点に向かってくれ。着艦したら敵艦隊を発見した偵察機の搭乗員を呼んでくれ。詳しく話を聞きたい」

「了解しました」

「それと念の為に直掩戦闘機隊出したい。何機出せる？」

「我が飛龍と蒼龍で12機ずつは出せます」

「分かった。それで構わない」

「了解しました。艦橋より格納庫へ命令を発す。第2戦闘機中隊発艦準備始め。繰り返す第2戦闘機中隊発艦準備始め」

伝声管で命令が伝えられる。

恐らく今頃は偵察機の発艦準備命令の時よりも慌ただしく動いていることだろう。

「各艦、対空対潜警戒を厳となせ。繰り返す。各艦、対空対潜警戒を厳となせ」

山田参謀長がそう命令を出し、各艦に発光信号で伝えられていく。

「さて、どうなることやら……」

小さな声で俺はぼそりとそうつぶやいた。

それから偵察機を3機無事に收容した。

報告によると電文を打った1番機は燃料がもう殆ど残っておらず、良く帰ってこられたもんだ。

「さて、帰って来たばかりで呼び出して申し訳ない」

「いえ、構いません」

「それで用件だが」

「敵艦隊の事、ですね」

「ああ、出来るだけ詳細に話を聞かせて欲しい」

「分かりました。先ず敵艦隊の発見位置や陣容に関しては電文の通りです」

「その艦隊以外に敵艦隊は発見出来なかったのか？」

「はい、艦影どころか航跡すら発見出来ませんでした」

「進路に関してだが、北西だったな」

「はい。正確にはリアウ諸島の方角でした」

リアウ諸島と言う名前を聞いて艦長は不思議そうに首を傾げる。

リアウ諸島はシンガポールから南方に位置する。主な島は5つほどで深海棲艦との戦争が始まる以前はインドネシアに属していた。

シンガポール海峡に面しているから通行船舶量は多いが、深海棲艦の泊地や基地などは無かった筈。あるとすればリング泊地くらいなものだ。

「リアウ諸島……？そんな場所に向かってどうするんだ？」

「参謀長、リアウ諸島に敵艦隊の泊地があるという情報なんてあったか？」

「いえ、ありません。あの辺りにある大型艦船の停泊が可能な泊地はリング泊地のみだったと記憶しています。インド洋に出ればスリランカのコロンボ軍港、モルディブのアッドゥ環礁などが存在していますが……」

「補給を受けるにしろ、態々インド洋までは行かないか」

「はい。修理やオーバーホールをするならばコロンボも考えられなくは無いです。ただ補給や停泊をするだけならばインド洋に向かう必要はありません」

「もしかすると発見した敵艦隊はリング泊地へ補給に向かっているのではないのでしょうか？」

「補給か……うーむ、どうにも敵艦隊の意図などが掴めないな。補給にしても電探を切る必要なんて無いだろうに」

何が目的で、どのように行動しているのか掴めない。

と言うのも今までの深海棲艦の行動は一定の規則性があった。俺がこの世界に来る前の資料なんかも色々と見てみたが、大規模攻勢な

ど何らかの行動をする時はこちらが情報を掴めるくらいには敵艦隊の集結などがあつた筈なのだ。

それ故に艦隊の移動や通信量の増加などもあるから、何かしらの行動を起こすであろうと言う事は掴める。だが今回は全くと言っていいほど変化が無かつたのだ。

事実、その様な報告は潜水艦隊からも軍令部の広野中将からも上がって来ていない。

いよいよ訳が分からなくなってきた。

参謀長や艦長、飛龍と共にうんうん頭を捻る。するとふと、飛龍が思い出したように言った。

「……………ねえ提督、そう言えば敵艦の数が減っているって報告が上がってなかつた？」

「ん……………ああ、確かそんな報告が上がっていたな。それがどうかしたのか？」

「もしかしてだけどき、敵艦隊ってインド洋の方に行ったんじゃない？」

「インド洋に？しかし何の目的があつて？太平洋の戦力を全てインド洋に回航してどうするんだ？」

「うーん、それを聞かれちゃうと困るんだよね。その方面の深海棲艦の艦隊が大打撃を受けた、なんて言えないし。そもそもインド洋の方に深海棲艦に大打撃を与えられるような国も艦隊も存在していないしなあ……………」

「確かにその通りなんだ。インド洋に抜けるとしてもどういう訳で行くのかさっぱりだ」

「日本本土に大攻勢を仕掛けるのならバリンガ泊地なんて場所に集結せずにもっと近い沖縄近海などの南西諸島に集結する筈です」

「ううむ……………」

参謀長が言つて艦長はそれを聞いていよいよ分からないと言つた顔をする。艦橋にいる誰もが理解しえない。

事前の偵察でも敵艦の数が減少傾向にあることは報告されていた。

だが結局その原因が分からないまま輸送作戦を決行したツケが今

回って来たか。

そうなると下手に動けない。

命令した潜水艦隊の報告が来るまではどうしようもない。

「まずは潜水艦隊の報告を待った方が良さだろう。それまではバシー海峡を越えられないな」

「ですが、どうするんですか？燃料の問題もあります。多少はタンカーに積んできた燃料で洋上補給が可能ですがそれもいずれ尽きてしまいます」

「……一度、現在地点よりもつと南に南下して偵察機を放つてみるのはどうだ？」

「今は少しでも情報が欲しいので偵察機を放つということに関しては同意します。ただ何処で放つか、と言うのが問題です」

「ふむ？」

俺の提案に対して艦長は問題があると指摘した。

それに対して俺は頷きながら続きを話すように促す。

「と言うのも、今現在艦隊の方針としては提督の決定によりバシー海峡を通過しません。これには私も賛成です。状況があまりにも不可解ですから。そして、南下して偵察機を放つと仰いましたが、南下する距離はどれほどをお考えでしょうか？」

「そうだな……2、300kmほどだ」

「今現在の地点から200kmとすると最初に偵察機を放った位置と大差ありません。より広範囲を偵察するのならば600kmは南下しなければ意味は無い。」

「しかしながらそれほどまでに南下してもあるのはフィリピンの島々です。もしそれほど南下して偵察機を放つとなるとその島々に出る限り近づき、更に偵察機はルソン島と言ったフィリピンの島々を飛び越えて行かなければ遠くを偵察できません。出来るだけ搭乗員の負担を減らす事を考えると出来るだけ近づかなければなりません。しかし近づきすぎると深海棲艦の沿岸監視部隊などに発見されるリスクが大きくなります。更に言えばその方面の事前の偵察は一切行われておりません。ルソン島にはベラー湾やラモン湾と言った湾

が多数あります。もしそこに敵艦隊が停泊していたとなると殊更に状況は面倒極まりない物になってしまいうでしょう」

「ふむ……」

確かに彼の言う通りだ。

となると南下して偵察機を放つこの案はダメか。

「この案は駄目だな。とするとどうするべきか」

「ここは仕方が無いですが、潜水艦隊からの報告が来るまではバシー海峡から適度な距離を保ちつつ現海域を遊弋して待つしかありません。同じ海域に留まっていると発見される可能性も高くなりますが何の情報も無く海峡を越えるよりは安全かと」

「とすると、最低今日、明日は動けなくなるか」

「そうですね。一応艦隊周辺に偵察機を飛ばしておきましょう。今出来る事はそれぐらいでしょう。電探の使用も可能ですがどうしますか?」

「よし、電探も使おう」

「分かりました。すぐに稼働させるように言っておきます」

一応、艦隊の方針は決まった。

あとは潜水艦隊からの報告を待つばかりだ。

———— side ———— 伊401 ————

ついさつき、提督から私達潜水艦隊に発見した敵艦隊の動向を探るように命令された。

どうやらバシー海峡を通過する前に偵察機を飛ばしたら敵艦隊を発見したからその艦隊の動向を探って欲しいって。

どうやら敵艦隊の動きとかで腑に落ちなかったりする事があったんだろう。

その命令に従って私達第1潜水艦隊は発見した敵艦隊を追うため

に暗号文で送られてきた敵艦隊の予想針路上で待ち構える。

私達は南沙諸島とパラワン島、カリマンタン島の間にある海域に今は居る。

そして敵艦隊が通過するのを待っている、水測員が声を上げた。

「聴音機に感あり。数は14ないし15」

「聴音員、判別は出来る？」

「……大型艦の推進音が4隻分確認出来ました。動向を探る様に言われていた敵艦隊かと」

「よし、それじゃ敵艦隊が私達の上を通過したら艦首回頭。追いかけてよう」

恐らく伊400達も既に存在は掴んでいるだろうから通信を送る必要は無い。

ただ海流とかの影響で聞こえなかったりすることもあるから暗号文で送らないといけない。

艦長は私が指示する前に命令を出してくれた。

「電信員、潜水艦隊全艦に暗号文を。それと護衛艦隊にもこれから追跡に移る旨を暗号文で送れ」

「了解」

『伊401敵艦隊発見ス。現在敵艦隊ハ我ガ艦ノ直上ヲ通過中。全艦集マラレタシ。1953』

更に護衛艦隊にも暗号文を送る。

『我伊401。我敵艦隊発見ス。コレヨリ追跡ニ移ル。1955』

「暗号文送りました」

「ありがとう。それじゃ追いかけてようか」

「操舵手、艦首180度回頭。追尾するぞ」

「了解。艦首180度回頭。追尾します」

幾らか距離が離れたところで洋上航行中にバッテリーに貯めておいた電気で進む。

エンジンで進めないことも無いけどそれだと音が大きいからね。

「敵艦隊、方向を変えました。このまま進むと……リンガ泊地の方です」

「分かった。取り敢えずこのまま追いかけてよう」

敵艦隊はリングガ泊地の方に向かうのか。

とすると補給目的かな？近くにはパレンバン油田があるから燃料補給には困らないし。

そのまま追いかけていくと、リングガ泊地に一度停泊した。

「リングガ泊地に投錨しました。やはり補給でしょうか？」

「うーん……多分そうだと思う。ただ一応もう暫く様子を見てみよう」

「了解です」

やっぱり補給目的かな……

「！聴音機に感あり。数は……大型艦が4隻、随伴艦多数。左舷後方から徐々に近づいてきます」

「なに？」

「段々と推進音の音が小さくなっています」

「近づいてきているのに推進音が小さくなっている？」

「これは……機関出力を落としているようです。恐らくリングガ泊地に停泊するのかと」

「ふむ……」

「艦長、敵艦隊が通り過ぎた後に他に敵艦隊が居なさそうなら潜望鏡深度まで浮上。危ないけど目視確認してみよう」

「は、了解しました」

敵艦隊が通り過ぎて暫く。

「艦長、危ないけど潜望鏡深度まで浮上」

「了解、潜望鏡深度まで浮上します」

潜望鏡で海上を覗くと、そこには驚愕なんて言葉じゃ言い表せない光景が広がっていた。

「艦長、これは……」

「深海棲艦の数が減っていたのはこれが原因か……」

「うわあ……何この数。見た事無いよ……」

そこに居たのは動向を探った艦隊を含めても異常な程の数の艦隊が集結していた。

「パツと見ただけでもヲ級が10隻、ヌ級も10隻は居る。戦艦もル級々級合わせて2、30は居るね。随伴艦も相応の規模……ワ級もうじやうじや居るね。全部合わせてざつと130隻つて所かな……」

「こりやあ……相当な一大事ですな……」

潜望鏡を覗いた艦長も圧倒されたのかぼそりと声を漏らした。

「しつかしこれだけの数を集めて何処に行こうつてんだ？日本の息の根を止めるなら態々こんな遠くに集まる必要は無いだろうに……」

「追いかけていた艦隊は燃料補給を受けてますね……」

「いよいよ何が起こっているのか分からないな」

「……深度80で懸吊。潜航始め。これ以上潜望鏡を覗いていると気が付かれかねないからね」

「了解。深度80。潜航始め」

もう暫く敵情を調べたかったけど流石にこれ以上はまずい。

でも真夜中の12時と言うのもあつてか見つかつては居なさそう。だけど普通なら対潜警戒の駆逐艦が巡回していたりするものなんだけど、対潜警戒どころかソナーの1つも作動させていないなんて幾ら何でも無警戒が過ぎる。

何故そう言い切れるのか、と言うとソナーが作動していたり対潜警戒中の駆逐艦が居るのなら今頃私達はとっくに見つかつて爆雷の雨が降つて来ていなきやおかしい。

気が付かれていない今なら空母でも戦艦でも狙い放題なんだけど、その気持ちをグツと抑える。今の私達の任務は偵察だ。少しでも多くの詳しい情報を集めることが最優先。

「このままここで無音潜航するよ。何か少しでも異変があつたら報告して」

「了解」

この場所に留まつて偵察を続ける。あれほどの艦隊を目の前にして離れるわけにはいかない。もし輸送船団や護衛艦隊の方に向かつたら最悪、私達が沈められても報告しないといけない。

これからただひたすら静かに待つだけ。
忍耐力なら私達潜水艦は誰にも負けないよ。

時計を見てみると、あれから8時間が経っていた。

これまでに、敵の新しい艦隊がここリング泊地にやってきて錨を降ろしていた。数は3個艦隊にもなりそれだけで、もう既に今の日本を簡単に再起不能に追い込めるだけの戦力。

今では正規空母、軽空母の数だけで40。

戦艦もル級、夕級合わせて30。

その重巡以下の随伴艦は軽く100隻は超える大艦隊。更にワ級が100隻以上。

これだけで300隻近い大艦隊がリング泊地とその周辺海域に集結している。

余りの数の多さに驚きを隠せなかった。

ただ不思議なのはどの艦も警戒と言う言葉とは無縁過ぎるほどに一切なんの警戒もしていなかった。

途中、何度か敵のソナー音が聞こえてきたけど多分対潜警戒として巡回しているわけじゃない。だってそうなら定期的に、一定の間隔で同じ様にソナー音が聞こえてこなきゃおかしい。しかも全部素通りで私達に気が付かないで行っちゃった。

それぞれの持ち場でやれることをやる。

水測員はずっとヘッドホンを付けたまま耳を澄ませている。

「ん……？」

「どうしたの？」

「いや、どうにも聞き取りずらいんですが機関始動音がしたような……」

「……もしかすると気のせいじゃないかもしれないから引き続きしっかりと耳を澄ませてください」

「了解です」

水測員が一瞬機関始動音が聞こえたって言うていたけどそれ以上は何も聞こえなかった。

「おかしいな……故障か……?」

「どうした?何かあったのか?」

「いえ、それが遠くの方でやはり何度も機関始動音と、推進音が聞こえてくるんですがやけに聞き取りづらいんです。雑音が混じっているんです。雑音の方はずっと続いている状況ですし」

「ほう……」

「あ、また始まった……」

「ふむ……」

「……潜望鏡深度までもう一度浮上してみよっか」

「了解です」

私の指示で潜望鏡を海面から覗かせてみると、かなり強い雨が降っていた。多分この雨が海面を叩く音が混じって聞き取りづらかったんだと思う。

視界が悪くなっていて見づらいけど、どうにも敵艦の数が少なくなっている気がする。

「艦長、敵艦の数が減少しています」

「その様だね……」

「あの空母、動いてますね。方向は……マラッカ海峡に向かっている?」

それから暫く見ていたら、どうにも敵艦隊はマラッカ海峡を目指して進んでいった。その数はどんどん少なくなっていて雨が止んで日の光が見える頃にはもう殆どの敵艦隊がそこに居なかった。かなり遠めに10隻くらいのワ級とヌ級が2隻、随伴艦が幾らかいるだけ。

それも少しするとマラッカ海峡に向かっていた。

「周辺に敵艦隊無し。上空にも敵機は見えません」

「……よし、イチかバチか浮上してみようか」

「……了解です」

そして浮上して艦橋から双眼鏡を覗いて見渡してみると本当に1隻も存在していなかった。

「護衛艦隊に敵艦隊がリング泊地に1隻も存在していないことを打電して。潜水艦隊全艦にも同じように伝えて」

「了解です」

『我伊401。リング泊地ニ敵艦隊存在セズ。輸送船団ノ脅威ハ無シト思ワレル。0937』

暗号文を送ったと同時に暗号文が届いたと報告が上がった。

「報告。第2潜水艦隊の伊168から暗号文で報告が届きました」

「読み上げて」

「はっ。『我伊168。我パレンバンノ偵察ヲ決行。周辺海域ニハヌ級2ヲ含ム小規模艦隊ノミ。ソレ以上ノ敵艦隊ハ発見出来ズ。0938』です」

「パレンバンには最低限の防衛艦隊を残してそれ以外を全部マラッカ海峡を通過させた、って事か」

「恐らくは。浮上していても攻撃を受けない辺り、この辺りの艦は根こそぎマラッカ海峡を抜けてインド洋に出て行った、と考えるよろしいかと」

「まあ、多分これで輸送船団の安全は確保されたってことだね。あとは提督がどう判断するか」

「パレンバン周辺で発見された艦隊も護衛艦隊の艦載機だけでも十分対処は可能です。砲撃戦に持ち込まれても数で押し切れるでしょう」

「どちらにしても、私達の最初の目的は達成出来た。護衛艦隊から何か命令はあった？」

「は、『潜水艦隊ハ偵察ヲ続行セヨ』と」

「分かった。それじゃ命令通りこのまま偵察を続けよう。潜航はしないで洋上航行。対空対水上警戒をしっかりとね」

「了解」

最後に私はそう言って艦内に戻った。

l
l
l
l
s
i
d
e
o
u
t
|

第6話

第1潜水艦隊の伊401から報告の暗号文が届いた。

『リング泊地ニ敵艦隊存在セズ。輸送船団ノ脅威ハ無シト思ワレル。0937』

それまで俺は艦橋要員である参謀長、艦長や副艦長、通信長達と飛龍とで交代で仮眠を取っていた。

その時は俺が艦橋に居て、飛龍、参謀長、副艦長と通信長が仮眠をとっていた。

椅子に腰掛けて遅めの朝食を艦長達と共に食べて一息ついていた時だった。

報告によると、リング泊地には敵艦隊が居ないらしい。

続けて伊400から届いた暗号文には敵艦隊はリング泊地に一時は300隻を超える大艦隊が集結していたそうだがどうやらマラッカ海峡を渡ってインド洋に向かったらしい。

続けて伊168から送られて来た暗号文にはこう書かれていた。

『我伊168。パレンバンノ偵察ヲ決行。周辺海域ニハヌ級2ヲ含ム小規模艦隊ノミ。ソレ以上ノ敵艦隊ハ発見出来ズ』

どうやら敵さんは本当に最低限、それも今の我々の艦隊でも十分対処出来る、小規模な艦隊だけを残してインド洋に向かったらしい。

「山田参謀長、これをどう見る?」

「そうですね、恐らくこの報告の通りでほぼ間違いないかと思われます。もしインド洋に出ているのなら出航時刻にもよりますが一番最初に出向した敵艦は既にコロombo軍港のあるスリランカ近海、もしくはスリランカ以西に到達していてもおかしくはありません」

「となると、今この時が最大の好機と言う訳だな」

「そうなります」

敵艦隊が最短距離で引き返してくるにはマラッカ海峡を通過しなければならぬ。だがマラッカ海峡と言うものは水深が浅く幅が狭い。記憶が正しければ20m前後しか水深は存在していない。場所によっては船舶が航行する海峡だとは思えないほどに浅い水深の場

所もある。

必然的に通れる艦船の大きさは制限されていくわけだが……その辺の話はまた後日にしよう。

報告にあつた通りの規模の艦隊ならば一番最後尾の艦がマラッカ海峡を通過し終わってからでないところちに戻ってくる事は不可能だと思われる。更に言ってしまうえばあの海峡は海流のせいか海底の砂が浚われて流され、水深が常に変化し続けるという特性もありマラッカ海峡内の下手な場所で船を回頭させれば深海棲艦と言えども座礁は避けられまい。

さて、そうなると今ここで決断を下さなければ。

まあもう答えは決まっている。ここで渋っていては好機を逃して大損になる。

「よし、報告を信じよう。念の為に偵察機を各方位に放って周辺警戒を怠らずに」

「パレンバン近海の敵艦隊はどうしますか？」

「出来れば戦闘は避けたいが……敵艦隊の位置によっては輸送船団の安全を考えて撃破せねばなるまい。伊168に敵艦隊を追尾するよう暗号文を打っておいてくれ」

「了解しました」

「……これはかなりの好機だと捉えるべきだ。通信長、本土に追加で輸送船団を準備させて大至急派遣は可能か打電してくれ。大至急返答が欲しい、と言う文も添えてな。可能ならば動かせる艦数隻と向かわせるように」

「了解しました。暗号文でよろしいでしょうか？」

「ああ、構わん」

「了解しました。それでは打電します」

「さて、それじゃ艦隊の針路をパレンバンに向ける」

「了解」

俺の号令と共に全艦に向けて針路をパレンバンに向けるよう打電された。

すると南西諸島に向けて進んでいた艦隊は、先頭を進んでいた雪風

が左に舵を切った。

それに続いて陣形を組んだ艦隊は舵を切る。

艦隊は暫くするとバシー海峡を通過。偵察機を飛ばしているがどこにも敵艦隊は発見されないし、潜水艦もない。

更に艦隊はパレンバンに向けて進んでいく。

既にリアウ諸島を通過し、パレンバンは目と鼻の先だ。

すると偵察機から報告が入った。

『我敵艦隊発見ス。又級2、随伴艦5。位置パレンバンヨリ北東に70海里。パレンバンカラ70海里ノ距離ヲ保チ遊弋中。1542』

恐らく伊168が発見した艦隊で間違い無い。

報告に遭った通りの距離を保って遊弋しているのならば撃破しなければ輸送船団をパレンバンへ送るのは難しい。

石油などの積み込み作業中に空襲でも受けたら大惨事になる。

「攻撃隊発艦準備を始めてくれ。敵艦隊を叩く」

「了解しました。兵力はどうしますか？」

「直掩戦闘機を飛龍と蒼龍で1個中隊ずつ残してそれ以外はすべて向かわせる」

「了解しました」

艦隊には24機の烈風を残してそれ以外の烈風は原田大佐の指揮の下、出撃の準備を進めた。

攻撃隊発艦準備始め、の命令が下されると格納庫内は大騒ぎになり始めた。

「流星の兵装は8機が魚雷、8機が爆弾だ！急げ！」

「爆弾は50番（500キログラム爆弾）だ！間違っても25番（250キログラム爆弾）を持ってくるんじゃないぞ！」

「了解！」

整備班長の怒号が響き、弾薬庫から8本の航空魚雷と8発の対艦用爆弾が運び出されて大急ぎで流星の機体下に懸架されていく。その隣では烈風に機銃弾と燃料を満載し、昇降機に載せられて飛行甲板上がっていく。

それらが終わり、飛行甲板上には烈風25機、流星16機が所狭しと並んでいる。

蒼龍を見してみると24機の烈風、16機の流星が同じように並べられている。

2隻合わせて81機の全力攻撃である。

一斉にエンジンが始動し始め、艦橋の中に居ても聞こえてくるほどの大音量が響く。

その後、風上、つまりは風が吹いてくる方向に向かって艦首を一斉に艦隊は向ける。

すると合成風力が作り出され飛行甲板には強風が雪崩れ込み轟々と大きな音を立てる。

「提督、発艦準備完了しました」

「搭乗員達は？」

「既に作戦概要の説明も終わり愛機に乗り込んで発艦の合図を待つております」

「よし、それじゃあ敵艦隊を叩こう。攻撃隊発艦始め」

「了解しました。攻撃隊発艦始め！繰り返す！攻撃隊発艦始め！」

艦長がそう大声で言うと、発艦誘導員が大きく旗を振った。

次の瞬間、一番先頭に駐機していた原田大佐の乗り込む烈風が動き出し、速度を上げて飛行甲板を駆ける。

「総員！帽振れ!!」

その号令が掛かると同時に機銃座や退避した整備員達が一斉に帽子を振るった。

本来ならば3回頭上で回すのだが興奮している彼らは大声を上げ

待避所から身を乗り出してブンブンと何度も何度も振り回している。まあそれも仕方が無い。空母から艦載機が敵艦隊に向かって飛び立つのはもう何時以来だろうかと言うぐらい昔の事だ。

偵察機や直掩戦闘機が飛び立った時も帽振れは行われたがここまですでは無かった。

俺や艦橋に居た妖精達も全員で帽振れを行い、飛龍は敬礼をしている。

恐らく帰ってくる時には全員が返ってくる事は無いだろう。敵戦闘機の迎撃を受けたり敵艦の対空砲火によつて撃墜される事もある。それを分かっている、敵に向かっていく彼らに対して武運長久を祈るのだ。

烈風が飛行甲板から離れる時、一瞬海面に向かって機体が沈み込む。恐らく少しばかり滑走距離が足りなかったのだろう。零戦に比べて烈風は機体重量も大きさも段違いだ、仕方が無い。

しかし直ぐに持ち直し大きなエンジン音を響かせながら大空に向かっていった。

それに続いて2番機、3番機とどんどん飛行甲板から飛び立っていく。

戦闘機隊全機が発艦を終えると次は流星だ。

先ずは比較的軽い爆弾を装備している流星が飛び立っていく。

爆弾は500キログラムだが魚雷は1トン以上の重量がある。

飛び立つ飛行機が重くなるにつれて滑走距離は長くなるのだが、一番に飛び立つのは戦闘機だ。理由は爆弾も何も装備せず、燃料と機銃弾だけだからだ。

それに比べて爆弾や魚雷を抱いて飛ぶ攻撃機はその爆弾と魚雷分、重くなる。

だから、順番としては戦闘機である烈風が一番に飛び立ち、続いて爆弾装備の流星、その後魚雷装備の流星となる。

流星は飛行甲板から飛び立つ時に、烈風とは比べ物にならないぐらい機体が大きく沈み込む。

しかし全機問題無く飛び立ち大空に舞い上がっていった。

「提督、全機発艦完了。蒼龍も全機発艦完了と発光信号で知らせてきました」

「よし、良くやってくれた。敵の攻撃隊に備えて直掩戦闘機隊も上げる」

「了解しました」

その後、直掩戦闘機隊が増槽を装備して発艦。

艦隊はパレンバン方向に向けて針路をとり進んだ。

今の俺達に出来ることは敵攻撃隊が来た時に備えているか、あとは精々、攻撃隊が敵艦隊を葬り、一機でも多く無事に帰還してくれる事を祈るぐらいだろう。

それから1時間程経った時に市木大将の名前で先程の暗号文の返答が返って来た。

『派遣可能。既二出航準備中ナリ。数ハ輸送船7、タンカー7、護衛艦隊愛宕以下、軽巡龍田、駆逐艦村雨、時雨、響、朧、初雪、浦波。出航は翌日明朝0530予定。貴艦隊ノ状況ハ如何ナリヤ』と。

輸送船団だけでも14隻、護衛艦隊は7隻と少ないが駆逐艦は今現在俺と共にいる15隻を含めると20隻。本土に残る健全な駆逐艦は2隻になった。

陣容はかなりギリギリの編成だろう。

空母や軽空母が存在していないのは母艦航空隊が存在していないからだ。

今現在の母艦航空隊は飛龍、蒼龍に搭載されている343空のみ。紫電改二がいるとしても発着艦訓練をやったことのない搭乗員では事故が何度も発生するに決まっている。

ならば空への警戒は多少犠牲になろうともしようがないと判断し

たようだ。

重巡である愛宕を含めたのは対空戦闘能力を向上させるのが狙いか。

—— side —— 西北 ——

俺は流星に乗って飛んでいる。

役職は343空流星隊隊長だ。今回は原田大佐が攻撃隊の総隊長だが実際は俺に一任されていた。

元は343空所属では無く鹿屋飛行場に天山搭乗員として所属していた。

配属が変わると言われてかなり急に343空の所属に。

そこで待っていたのは新型機である流星とその搭乗員達。更に毎日の訓練だ。

毎日訓練に明け暮れていた時、出撃命令が出て今の今まで飛龍艦上で偵察機や直掩戦闘機が飛び立つのを見ていた。

そして出撃を今か今かと待ちわびていた時に今回の出撃命令。

しかも目標は軽空母2隻。正直正規空母と比べれば見劣りするが相手としては不足は無い。それどころか初陣としては大物。

事実俺は南西諸島防衛戦からこの戦争へ参加した。

実戦経験もその時と近海の哨戒、偵察任務ぐらい。

実戦経験と言っても敵艦隊に魚雷を抱いて飛んで行ったはいいが金星を挙げる事は叶わず。

俺だけでは無く流星隊のほぼ全員が実戦経験の無い新米ばかり。

中には俺と同じ程度の実戦経験がある者も居るが数人だけ。

話に聞く、かつての精鋭達は今や空に海に散っていった。

その栄光の影も形も無い。だが構わない。何故なら俺たちが精鋭

になって再び栄光の輝きを光らせればいいのだ。

俺達の練度は高いと思う。実際に原田大佐もそう言ってくれたし訓練では駆逐艦が曳航する木製の目標に対して命中率は総合すれば20%になるし急降下爆撃にしても33%を叩き出した。しかしそれはあくまでも駆逐艦が曳航して速度が遅く、更には対空砲火を撃ち上げて反撃してくることも無い。

更に問題なのは実戦経験が無い事だ。正直に言って敵戦闘機が飛来し味方の攻撃機をバタバタと落としていく様子は、本当に恐怖だった。

訓練だけしかしていない新兵達は本当に敵戦闘機に襲われた時、ともに動けるかどうか……

それに比べて戦闘機隊の原田大佐達は全員が実戦経験豊富だ。

全員が全員と言う訳では無いが、搭乗員の殆どが数度の過酷な戦線へ参加し母艦航空隊として我々が追い詰められた時から戦い生き抜いている。

原田大佐はラバウル防衛戦から参加していると聞いた。それから母艦航空隊の一員として戦い抜き、今まで生き残っている。

更には空母が動かせなくなった後も関東圏防空任務に就いていたから追い詰められた状況にも関わらず実戦経験は豊富だ。聞いた話では毎日定期便と呼ばれる爆撃機編隊を迎撃していた。

まあ元々設立の際に各航空隊から熟練やエース・パイロットを集めて編成したらしいから当然と言えば当然だ。それでもやはり人員の入れ替わりはそれなりにある様でかなりの数の戦友が散って行つたと、着隊してすぐのささやかな歓迎会で聞いた。

ここ最近岩国飛行場に転属になり、余り迎撃任務が無いからこれはこれで鈍りそうだと、とんでもない事を言っていた。

恐らくそんな事が言えるのは343空の戦闘機隊だけだろう。

そんな彼らに守られて今現在俺達攻撃隊は敵艦隊目指して進撃している。雲は無く空は澄み渡っている。とても心強いな。安心感が

桁違いだ。

そろそろ敵戦闘機の迎撃を受けてもいい頃なのだが一向に見えない。

これだけ雲も無いのなら発見する事は大して苦労しない。なのに敵戦闘機は現れず平穏だ。本当に乗っているのが流星ではなく遊覧飛行用の小型機ならばただの団体観光客の様にしか見えない。

そのまま敵戦闘機の迎撃を受けないまま進むと、流星の1機が敵艦隊を発見した様だ。

右前方に航跡が薄らとあり、更にその先には黒い点が幾つか見える。

「木下！飛龍に敵艦隊発見と打電！」

「了解！」

同乗している木下に艦隊に向けて打電させる。この時発するのはテ連送と言って敵を発見したことを伝えるものだ。

飛行機、船舶に限らずこれを使う。

態々暗号にする時間も無い。今は敵戦闘機が迎撃に上がって来ていないがもしかするとどこかで待ち伏せているのかもしれない。

そう指示を出した後、俺は翼をバンクさせ敵艦隊へ針路をとる。

「打ち終わりました！」

「ようし、それじゃあ待ちに待った戦闘だ！」

そう叫んでから攻撃目標の振り分けをする。

まず飛龍隊、蒼龍隊の流星は16機ずつ、急降下爆撃隊と雷撃隊がそれぞれ8機ずつの内訳になる。

本当は全艦に攻撃を仕掛けて叩いておきたいのだが今回ばかりは軽空母に集中しよう。

「蒼龍隊！手前の空母をやれ！俺達は奥の空母を仕留める！」

無線に向かってそう叫ぶ。

すると無線の向こうから了解！、と！勇ましい声が聞こえてきた。

「艦戦隊は上空警戒！」

同じように了解、と声が聞こえてきた。

それぞれ指示を出し終える。

「トツレ連送送れ！」

「トツレ送ります！」

突撃準備隊形作れの電文を全機に送った。

すぐさま隊形が作られていく。

準備は整った。

それじゃやるとしよう！

「全機攻撃開始！全機攻撃開始！」

その合図と共に雷撃隊は海面ギリギリの低空に、急降下爆撃隊は高度そのままに進んでいく。俺は雷撃隊だから低空だ。

「木下！ト連送！」

「了解！」

海面ギリギリで飛行する。

魚雷を投下するときには一定の高度を取らなければならない。

高すぎても低すぎても駄目なのだ。

にしても敵は俺達に気が付いていなかったのか対空機銃や対空砲の迎撃はかなり散発的だ。狙いは良いが数が少ないから当たりはしない。

敵艦の速度は目測で22ノット。艦首でしぶきを上げている海水で何となく分かる。増速したのが俺達がかかり接近してからののか思ったよりも速度は速く無い。

「敵艦まで1500！」

「1400！」

「1300！」

「1200！」

「1100！」

「1000！」

「魚雷投下！」

1000mを切った時、敵の予想針路に向かって魚雷を投下した。機体が一気に1トンほど軽くなったから一瞬機体が浮くが直ぐに元の高度にする。

「木下！命中したか!？」

「いいえ、まだ確認出来ません！ああ!？第2小隊の3番機が被弾炎上！」

「クソッ！」

恐らく敵が撃ち上げていた機銃弾が運悪く燃料タンクかエンジンにでも被弾したんだろう。

「……………！水柱を1本確認！」

「よし！軽空母相手に沈められるか微妙だが当たらないよりは良い！」

「！続けて2本命中を確認！急降下爆撃隊も3発命中させたようです！」

「よし！良くやった！」

正規空母ですらこれほどの被弾は轟沈してもおかしくは無い致命傷だ。

軽空母又級なら撃沈確実だろう。

「蒼龍隊はどうなった!？」

「分かりません！ですが又級が左に傾いて飛行甲板からも黒煙が吹きあがっています！撃破確実です！」

「よし！これで敵艦隊の航空戦力は潰したぞ！」

暫くして空中集合を終えた。

見渡すと、蒼龍隊が1機減っている。

蒼龍隊からの報告だと、魚雷命中4、爆弾は2だそうだ。

これなら撃沈は確実だろう。

「艦隊に戦果を打電！」

「了解！」

『我敵艦隊ヲ攻撃ス。戦果ハ又級2撃沈確実。我流星2ヲ失ウ。再攻

撃ノ要ハ無シト認ム』

「打電完了」

「よし、それじゃ帰るぞ。警戒を怠るな」

そう言つて、俺達は飛龍を目指した。

———— side out ————

攻撃隊を送り出してから2時間。

「提督、攻撃隊から敵艦隊発見の報告が入りました」

「提督、攻撃隊からトツレ連送を発しました」

通信長からそう報告が入ってくる。

そして遂にその時が来た。

「攻撃隊からト連送が」

「うむ……」

そうか、攻撃を始めたか。

頼むぞ、出来れば1機も失わずに攻撃を終えてくれ。

10分後、再び攻撃隊から電文が送られてきた。

『我敵艦隊ヲ攻撃ス。戦果ハ又級2撃沈確實。我流星2ヲ失ウ。再攻撃ノ要ハ無シト認ム』

「提督！大戦果です！我々は2機失いましたがそれを補って余りある戦果です！」

「……だが、貴重な搭乗員4人と機体を2機も失ってしまった」

失った搭乗員の事を考え、項垂れていると飛龍にがちりと両頬を掴まれ至近距離で目をじっと見てくる。

そして彼女は言った。

「提督、それは仕方が無いんだよ。非情だと思われるかもしれないけど攻撃隊を送り出すと必ず被害は出るの。ここで泣いていたら死んだ4人に申し訳が無いでしょ」

確かにその通りだ。

だが、どうしても心に引つ掛かるものがある。

「ほら、あとでギョって抱き締めてあげるからその時に思う存分泣いて良いから！今は敵の攻撃隊に備えて提督が指示を出さないと！」

「……そうだな。その通りだ。よし、電探、しっかり空を見張れ」

「了解！」

彼女の言う通りだ。

後でいくらでも泣けるのだから今は生きている皆と共に無事に帰ることを最優先にしなければならぬ。

敵機の襲来に備えて指示を出した。

しかし一向に敵攻撃隊は現れない。

そのままパレンバンへ針路を取り続けると反応があつたのは対空電探ではなく対水上電探の方だった。

「対水上電探に感あり！数は5！距離は26km！大型艦の反応は無し！」

敵艦隊はどうやらのんびりと進んでいた我々艦隊とパレンバンの間に滑り込んだ様だ。

燃料を気にせず全速力で向かってきたのだろう。

「提督、恐らく空襲した敵艦隊の残存艦艇かと思われます。このままですと輸送船団や飛龍、蒼龍を危険に晒す事になりますが迎撃しますか？」

「勿論だ。第3護衛艦隊を向かわせろ」

「では我々は後退しますか？」

「……攻撃隊収容地点はどこだ？」

「丁度この辺りになります」

「よし、我々は現海域に留まり攻撃隊を収容する。もしかすると被弾して燃料がギリギリの機体もあるかもしれん。敵空母を沈めてくれた彼らを海で泳がせるという事はしたくはない」

「わかりました。ですがあまりにも近すぎます。せめて10海里だけでも後退しましょう」

「よし、そうしよう」

敵艦隊を対水上電探で捉えた。

迎撃に向かうのは鈴谷率いる第3護衛艦隊。

数でも攻撃力でも勝っているから早々、大事にはならないと思うが

……

艦長の言葉により、念の為第3護衛艦隊から10海里後方に下がることにした。

それから十数分後、後にバンカ島沖砲戦と呼ばれる海戦が始まる。

第7話

攻撃隊を收容し始めたのはも1830ともう殆ど太陽は傾き沈んでいた頃だった。

完全に太陽が沈む前に大急ぎで攻撃隊の收容が行われ、完全に收容しきったのは1910ともう辺りはかなり薄暗くなっていた。

そして第1護衛艦隊と第2護衛艦隊は攻撃隊を收容後、砲撃戦に巻き込まれるのを防ぐ為に後方に退避した。

既にその位置は第3護衛艦隊から50kmも離れていた。

その間、第3護衛艦隊は敵艦隊は会敵し戦闘が始まっていた。

「攻撃隊收容完了しました」

「分かった」

「第3護衛艦隊はどうなっている？もう会敵して暫く経っているが」

「交戦距離が遠いからか互いに決定打を打ち出せずにいるようです。

鈴谷に敵駆逐艦の砲弾が何発か命中しているようですが損害は無し、カタパルト付近で小規模な火災が発生したようですが即座に消火を完了したようです」

「そうか……」

事実、第3護衛艦隊と敵艦隊の距離は約17000mとかなり離れていて、重巡である鈴谷の主砲射程は約29500mと余裕はあるが神通や駆逐艦達の主砲は最大射程が20000mも無く命中弾を得られずにいた。

両艦隊とも27ノットとかなりの高速で同航戦になっている為、それも要因だろう。

「うーん、命中弾が出せないね」

「交戦距離が遠いので命中弾を得られずにいます。雪風が既に挟叉を出していますがやはり命中弾は無しです」

「距離を詰めたんだけど近づこうとすると離れて行って今の距離を保とうとするからね」

「はい、しかもこの速度ですからね……」

「うーん、数と攻撃力じゃ私達が勝っているんだけど」

「敵は軽巡までしかいませんから一撃でも当てられれば良いのですが今更だが第3護衛艦隊の隊列は以下の通りだ。」

陽炎	イ級
雪風	イ級
神通	イ級
鈴谷	へ級
浦風	ハ級
萩風	二級
村雨	

第3護衛艦隊の各艦の距離は250mほどの距離を保っている。

ここで対水上電探を全艦が装備をしていれば各艦の電探から得られた情報を元に所謂レーダー射撃の実行も可能だったのだが対水上電探を装備しているのは鈴谷と神通だけで駆逐艦は対空電探とソナーの両方、もしくはそのどちらかを装備していた。

既に戦闘開始から2時間以上の膠着状態で辺りはもう真っ暗闇、見

える明かりは船の艦橋から漏れる最低限の照明か主砲から敵艦を仕留めようと砲弾が放たれるときの砲炎だけだ。

「おおっと……今のは近かったね。軽巡へ級の砲弾かな？」

「その様です」

「雪風が敵の最後尾の駆逐艦に命中弾3を数えました！」

決定打に欠ける中、雪風の放った砲弾が一番後ろを航行していた二級の艦首付近に2発、艦中央部に1発命中した。

雪風は幸運艦と呼ばれ、この戦争の初戦から常に最前線で戦い続けている。所謂武勲艦と呼ばれる艦である。

その名に恥じる事無く戦果や参加した海戦も数多く、空母機動部隊の護衛、夜戦への参加と多岐に渡る。

「さすが雪風達じゃん！幸運艦とか言われてるけど練度も十分以上に高いからね、幸運艦って言葉だけで片付けられない」

「その通りですな」

『鈴谷さん！私やりましたよ！』

「あー、雪風？嬉しいのは分かるけど今戦闘中だかんね？関係無い通信は駄目だよー」

『はっ!?ごめんなさい！』

（嬉しいのは分かるけどこの戦闘中に意味の無い通信をしちゃう癖治させないとなあ……下手したら混乱の原因になっちゃうね）

「にしてもこう、決定打に欠けて長引いちゃうと面倒だね」

「対空戦闘能力を上げる為に駆逐艦から魚雷を全て降ろしてしまったのはかなり痛いです」

彼女達には元々命中すれば一撃必殺となる酸素魚雷が搭載されていた。

しかしながら想定されていた戦闘が敵空母から放たれた航空機との戦闘だったために誘爆の恐れもある魚雷を降ろして代わりに対空機銃を増設したのだ。

魚雷を装備しているのは鈴谷のみでそれも片舷に61cm3連装魚雷発射管を2基装備しているだけ。酸素魚雷を持って来ては居るが撃つ機会があるかどうかは分からない。被弾によって火災などが

発生し誘爆の危険が出てきてしまうと投棄せざるを得なくなる。

「ま、それも戦闘が予想されてたのが敵の空母だったから仕方ないって」

「魚雷を装備しているのが我が艦のみですから。突撃する訳にも行きません」

「この距離と速度じゃまず魚雷なんて当たらないからね、最低5000m以内までは接近しないと」

魚雷は砲弾と比べると格段に速度が遅い。

それでも他国の艦娘や深海棲艦が使用する魚雷に比べると速度も射程も長いのだが。

因みにだが6000m先の目標に対して魚雷を放った場合、到達までに凡そ3分ほどかかる。

「どうでしょうか」

「敵の増援は？」

「電探には何の反応もありません」

「目視は……この暗闇じゃ使えないね」

「敵の増援が来ると？」

「うーん、どうか……でもその可能性は否定出来ないね」

「そうですね」

「空母がやられたら普通撤退するし。まあ夜戦に持ち込んで輸送船団を狙うのが目的なら分からなくもないけど数で負ける上に相手には重巡洋艦がいるんだよ？夕立とか綾波程の戦闘狂じゃなければ普通は撤退するって。なのに撤退もしないでズルズル戦闘を長引かせてるのはおかしいでしょ。そうなると増援が来るかも」

「ならば早めに決着を付けなければなりません……」

「こうも一定の距離を保ったままチマチマやられるとどうしようも無いですな」

一応言っておくと、既に各艦とも挟み弾は出しているし、更に言えば命中弾も与えている艦もいる。

だが射程ギリギリの距離で砲撃をして、更に言えば27ノットとそれなりの高速で互いに進み、回避行動も取ったりするからどうしても

決定的な、敵艦を沈める一撃を双方共に与えられないのだ。

決して練度が低いと言う訳ではない。

「……峰艦長、神通に電文を送って」

「はっ、なんと送りますか？」

「陽炎と雪風を率いて突撃するように」

「了解しました」

『我鈴谷。神通ハコレヨリ陽炎、雪風ヲ率イテ敵艦隊ニ突撃ヲ敢行セヨ。実施ハ10分後』

「打電完了しました」

「それじゃ私達は突撃支援だよ」

その10分後、神通率いる突撃部隊が敵艦隊目掛け大きく舵を切った。

既に戦闘開始から2時間半。各艦ともに、特に駆逐艦は弾薬面で不安が出てくる頃合いだが未だ、戦意は旺盛、主砲や副砲の発砲炎が収まる様子は無い。

「皆さん、突撃命令です」

「おお！漸くですか！待ち草臥れましたな！」

「今より10分後、前方陽炎、雪風と共に敵艦隊へ突っ込みます。良いですか、華の二水戦旗艦の恐ろしさ、思い知らせてやりましょう」

「そうですね。先に散って行った戦友達の仇も取れず、悔しい思いをしています。がまさかこんな形で仇を取る機会が唐突にやってくるとは」

神通の艦橋内ではそんな会話が繰り広げられていた。

流石と言うべきか、神通自身も、そして神通に乗艦している妖精達も艦娘と妖精が現れた頃から長年最前線で戦い続けてきているだけあって他の艦娘や妖精とは比べ物にならない程に落ち着き払っていて、戦闘中で無いかのようだ。

「10分経過しました」

「……では、行きましょう。速力を33ノットへ増速。敵艦隊の前方へ出て針路を塞ぎます」

「了解。陽炎、雪風も増速、続きます」

神通が右へ舵を切り、敵艦隊の針路を塞ぎにかかる。

だが深海棲艦もそうはさせまいと前方の駆逐艦2隻が速度を上げて妨害しようとした。

だが相手が悪かった。

これが神通ではなく他の軽巡や駆逐艦のみであったなら確かにその妨害は成功しただろう。だが彼女はそんな事お見通しとばかりに既に命令が出されていた。

「各砲塔には敵が私達を妨害するために出てくるでしょう。予め照準を距離5000に合わせておくように。5000になったら命令を待たずに射撃を開始するように」

そう、この行動もすべて読まれていたのだ。

そうとは知らずに何とか神通達の足を止めようと進んでくる。主砲だけでなく機銃まで乱射してきている。

だが神通、陽炎、雪風は主砲も、機銃も1発も撃たずに突っ込んでくる。

そして、予め照準を合わせていた5000mになった時、彼女達は一齐に左に舵を切った。すると、T字戦になった。

東郷平八郎元帥がバルチック艦隊を破った時に使われた戦法である。

神通達の砲門は一齐に深海棲艦2隻を捉え、瞬時に射撃が始まった。神通の放った14cm砲弾の1発が前を進んでいた敵駆逐艦の2番砲塔正面を貫いた。

すると砲塔内にあつた砲弾が、それとも揚弾筒内か、弾薬庫かに誘爆したのか大きな音と火を上げて吹き飛んだ。同時に大量の水も水柱となって空に向かって飛んで行き、その水柱が収まった時にはもうそこに敵駆逐艦は沈んだ後だった。

残る1隻は、それに驚き慌ててしまったのか一瞬砲撃の手が緩んでしまった。

そんな明らかな隙を彼女達が見逃す訳が無く、陽炎、雪風の12.7cm砲弾を雨の様に浴び、周囲には外れた砲弾が水柱を立てる。そこに神通の砲撃が加わり、残った1隻も物の2分程度で沈んでいった。

「敵駆逐艦2、撃沈」

「では、予定通り敵艦隊の針路を塞いで叩きます」

3隻は予定通り、敵の残存艦隊の針路上に一気に出て鈴谷達と共に砲撃を浴びせる。

鈴谷達は前方に神通達が出たことで速力を落とした隙を見逃さず、速度を33ノットまで上げ一気に距離を詰めた。

もはやたつた3隻しか残っていない深海棲艦には成す術は無く、軽巡へ級は鈴谷の20.3cm砲弾が複数命中、そのうちの1発が弾薬庫を捉え木端微塵に吹き飛んだ。

その後ろに続いていた八級と二級は袋叩きにされて沈むのに10分と掛からなかった。

結局、2時間半も膠着していた戦闘はこんなにもあっさりと決着が着いた。

その後、鈴谷は艦隊を集合させ、周辺海域に他に深海棲艦が存在しない事を確認した後、輸送船団に合流。

戦果は軽巡洋艦1撃沈、駆逐艦5隻撃沈。

大して第3護衛艦隊の損害は鈴谷が敵軽巡の砲弾を食らった際に機銃座2つが破片によって電気系統の配線を寸断されて旋回が出来なくなった。

そしてカタパルト付近で火災が起きていたが小規模で特に損害らしい損害は運良くなかった。

水上機も搭載されていなかったし、そのための航空燃料も積んでいない。

もしこれで両方共に搭載されていたならば火災の勢いが大きくな

り狙い撃ちにされていただろう。

そして故障した機銃座も翌日には修理が完了し使用可能となり、実質的には損害は0となった。

一言で言ってしまうならば完全勝利と言うものである。

第3護衛艦隊は手を上げて数年ぶりの大戦果に大きく沸いた。

その結果を受けて、輸送船団はパレンバンへ入港した。

———— side 提督 ————

輸送船団がパレンバンへ入港してから5時間後。

石油とゴムの積み込み作業は順調に行われた。と言っても同時に積み込みを出来るのが5隻ずつで、更に満載にするにはかなり時間が掛かる。

タンカー10隻、ゴムを搭載する為の輸送船2隻を伴ったの行動だ。

残りのタンカー1隻、輸送船7隻は第2護衛艦隊と行動している。タンカー1隻は燃料を補給するために伴わせた。

補給用の燃料を積んできたタンカーも、重なる洋上補給によって9000トン近く搭載してきた燃料も、主に駆逐艦への補給によって2隻分6000トンが空になってしまっていた。残る1隻も帰りの分を考えるとギリギリだ。

秋月型10隻だけで10000トン以上の燃料を消費する。

思いのほか昨日の夜戦が響いてきている。速力を30ノット近くまで上げたりと高速で3時間近く戦い続けていたから燃料の消費が馬鹿にならなかった。

それによって消費した分の燃料を第3護衛艦隊全艦への補給をした。万が一の時に戦闘行動が取れなくなるようなことは絶対に避けなければならない。

第1護衛艦隊はバンカ島とリング島の間、かなりバンカ島寄りに航行して上空支援の為の戦闘機を常時12機飛ばし続けていた。

更に周辺に偵察機も飛ばし昼間は奇襲を受けないように務めている。

と言っても夜間は飛ばせないので無防備になってしまいが、一応タンカーの甲板上に海軍陸戦隊合計2500名の精鋭妖精が警備にっているから多少の安全は確保されているだろう。

ただ、戦闘機隊の皆が完全に真っ暗になってから帰投するもんだから心配でしようがない。一応飛行甲板に誘導灯が無い代わりに飛行甲板外周に沿って電灯を無理矢理くつつけている。

まあ戦闘機隊の面々は真っ暗闇でも艦橋から漏れる灯りだけで当たり前のように着艦するもんだからそこまで心配はいらないのかもしれない。彼ら曰く、

「艦橋の位置さえ分かっただけでしまえば飛行甲板や着艦制動装置の位置も分かりますよ。頭に叩き込んでおいて正解でした」

と。いや、そんなこと普通出来ないしやろうとしないだろう。

その間、第2護衛艦隊は輸送船7隻を伴いボーキサイトを始めとした航空機生産に必要な資源を各地に回収しに行かせている。

第3護衛艦隊は我々第1護衛艦隊と共に行動している。

……今更だが深海棲艦は燃料とかどうしているんだろうか？ 幾ら

深海棲艦と言えども燃料も無しに行動は出来ないだろうし航空機を補充するのには作らなければならないし、砲弾だって鉄が無ければ作れないと思うのだが。

しかしパレンバンや各地の鉱山には深海棲艦が使用した形跡は無い。

人類がここまで追い詰められた原因や無尽蔵とも言える深海棲艦の戦力の所以はそこにあるのかもしれない。

艦橋内にいるのは俺、艦長、参謀長の3人だ。

飛龍は仮眠中、他の司令部要員はそれぞれ別の持ち場に行っているか飛龍と同じく仮眠中だ。

「提督、増派艦隊は2日後に我々と合流出来るようです」

「2日後か……輸送船団への積み込み作業はどの程度まで進捗している？」

「現在、タンカー10隻中5隻が積み込みを完了。残る5隻も明後日までには完了する予定です。輸送船に関しては既に2隻とも積み込みが完了しております」

「丁度、合流予定日と同じか」

「はい、かなり急いで積み込みを進め、タンカー乗組員や技術者達が不眠不休でやってくれているお陰です」

参謀長から報告を受ける。

今の所問題無く進んでいるようで、寧ろ作業スピードは予定よりも早いそうだ。

「何か問題は起きているか？」

「そうですね、すぐさまと言う訳ではないのですが航空燃料が少々心許無いですね」

「やはりか……タンカーから補給を受けたいが……」

「第2護衛艦隊の方に回してしまいましたからね、第2護衛艦隊と合流するまでは無理でしょう」

問題らしい問題は無いが、やはり航空燃料が心許無い。

それはそうだ、昼間は常に12機の烈風を増槽付きで飛ばして上空警戒をしているからそりや消費量は馬鹿にならない。

今すぐに底を着く、と言う訳では無いが、一度補給を受けないともし敵機と戦闘になった場合少々不味いことになる。今回の出撃において、空母である飛龍と蒼龍は基本的には迎撃、防空を主眼に置いているから、何度も敵機が来襲しその度に迎撃戦闘機を上げなければならない。

そんな最中に、敵機が向かってきていたり予想される時に航空燃料が無いから、と言ってタンカーから補給なんて受けられるはずも無く。そんな事をしていたらただの良いのだ。

合流したら早急に航空燃料の補給を受けなければなるまい。

「潜水艦隊から何か報告は？」

「無しです。マラッカ海峡を監視している第1潜水艦隊第1分遣隊、ジャワ海監視の同第2分遣隊、バンド海第2潜水艦隊第1分遣隊、セレベス海同第2分遣隊も、定時報告以外は何も無し、至極平穩で深海棲艦を1隻も見ないぐらいだ、と」

「それならいいんだが……やはりこの方面の深海棲艦は根こそぎインド洋に出たか」

「そのようです。残念ながらその後の動向は探れませんが分かりますが今現在マラッカ海峡からも遠回りとなるジャワ海ルート、更に遠くのバンド海方面にも一切引き返してくる艦隊はありません」

今現在、インド洋に出て行った敵大艦隊が戻って来ないとも限らないのでマラッカ海峡、ジャワ海、バンド海、セレベス海で2個潜水艦隊を4つに分けて警戒監視任務に就かせている。その際、敵艦隊を発見しそれが戦艦や空母を含む有力な艦隊であった場合は出来るだけ戦力を削るために攻撃を許可している。

だが報告によればどうも引き返してくるという事は無さそうだ。

俺達は軽空母又級2隻を含む艦隊を殲滅したのだから、その攻撃を受けたときに救援の連絡が言っていれば普通引き返してくるが、それを放置してでもやらなければならぬ目的があるのだろうか。

「敵さんは、本当に何を考えているんだろうな」

「分かりません。ですが幾つか仮説は立てられます」

「どうやら、山田参謀長は敵艦隊の目的にある程度の見当を付けているらしい。」

「ほう、その仮説とは？」

「深海棲艦の目的がインド洋ではなく更にその先なのでは？」

「先、と言うとアフリカ大陸か？」

「いえ、その可能性は皆無かと」

「ならばどこを指してあんな大艦隊が出発したというのだ？」

「スエズ運河を超えた先、地中海や大西洋方面です」

「……まさか奴ら欧州を完全にこの戦争から脱落させる気か？」

「その可能性が大いにあります。スエズ運河は陸続きとあつて各国陸軍妖精や航空戦力が死守していました。ですが1年程前に陥落した際、その戦力の殆どは欧州方面へ撤退し燃料等を考えなければ戦力はまだ島国である日本よりはあります。もし、その戦力が攻勢に転じ欧州近海の深海棲艦戦力を押し返す、もしくは駆逐したとなれば……」

「危機感を募らせた深海棲艦が戦力を掻き集めてそれを潰しにかかる、か」

「今現在、日本は欧州、大陸方面、南北アメリカ大陸、アフリカといった全ての国々との連絡が断たれている。一切通信が出来ない状態にある。」

人工衛星に関しては流石の深海棲艦と言えども宇宙空間にある物は攻撃出来ないのか中継衛星や気象衛星は無事だ。だが、地上にあるその電波を受け取るための施設が軒並み1つ残らず爆撃や砲撃で吹き飛んでしまった為に使用不可能なのだ。

再建しようにも資材は無く、したとしても直ぐに破壊される。

それにこちらが使えても向こうが使えなければ意味が無いのだ。だから今では通信と言えは有線の電話か先程から戦闘などで使っている物になる。

俺からすれば、スマートフォンや個人用のデスクトップ、ノートパソコンで瞬時に通信が出来ていた、それももうすぐで5G回線なるものが普及し始めようとしていたところに、いきなり旧石器時代に放り込まれたような感覚だ。

流石に黒電話やモールス信号まで持ち出して使用していると知ったときは軽く絶望感を覚えた。

「はい。欧州において今現在深海棲艦に対抗可能な海上戦力を保有しているのは、イギリス、ドイツ、イタリア、フランスとなっております。しかしながらイギリス以外の国は艦娘とその艦体の数が少なく、イギリスを主戦力としています」

「確か、欧州各国の全体的な戦力は深海棲艦による地中海大攻勢でかなり消耗したんだっただか」

「はい、連絡手段が途切れる以前の1年前までの戦力になりますが空母は、

イギリスのグローリアス級が1隻、

アークロイヤル、

イラストリアス級が2隻、

ドイツのグラーフ・ツェツペリン級が2隻の計6隻だけです。

戦艦は多少余裕がありイギリスのクイーン・エリザベス級2隻、

リヴェンジ級2隻、

ネルソン級1隻、

キングジョージ5世級3隻、

ライオン級1隻、

ヴァンガード。

ドイツがグナイゼナウ、ビスマルク、ティルピッツの3隻。

イタリアがヴィットリオ・ヴェネト級4隻。

フランスもリシュリユ級を2隻。

と計18隻のみです。他艦艇を含めれば総数はそれなりの数を数

えるでしょう。ですが1年前の情報なので信頼性は皆無です」

「日本の現状を考えると、今言った戦力の4分の1が動かせればマシンか……」

「はい。どちらにせよ、あれほどの規模の深海棲艦隊の大攻勢を止められる程の戦力は持ち合わせていないと考えるべきです」

「かつてのロイヤル・ネイビーも今や影も形も無い、か」

「ええ」

「そう言えばロシアはどうした？」

「ロシア海軍は文字通り壊滅しました。北極海沿岸部を全て防衛しようとした事、ソ連時代の影響力を取り戻そうとしたのかむやみやたらに北海方面に派遣した結果、壊滅しました。ロシアは今現在沿岸部をすべて捨て内陸部に後退しました。どうやら幾らかの艦娘と妖精、陸軍妖精は残っているようですが詳しい情報はありません」

「警告する手段もなければ援軍を送る戦力も無い。必然的に見捨てるという結果になってしまふのか」

「そうなります。燃料も北海油田は深海棲艦の勢力下、頼みの綱だったバクー油田も重爆撃機によって破壊されつくしましたから……」

「我が海軍以上に燃料問題は深刻か」

「スエズ運河は放棄時に徹底的に破壊したそうですが既に使用可能になっけていてもおかしくはないかと」

「そうか……」

日本は全国中が焼け野原になっているが戦える力と、その戦力を立て直せる設備が多少なりともあるだけマシンだ。

援軍の話をするとすれば、向かわせる事はほぼ不可能。

太平洋から行くにしてもインド洋から行くにしても超が付くほどの遠回りだ。

パナマ運河、スエズ運河は深海棲艦に支配されているから必然的に南米大陸、アフリカ大陸をぐるっと迂回して行かなければならない。

しかもその道中には深海棲艦の一大拠点、棲巢と呼ばれるものがある。

ここには、陸上型の深海棲艦が存在している。鬼、姫級の名前が付

いているとんでもなく厄介な存在だ。

しかも陸上型だけならばまだいい。だがそれだけではなく戦艦や空母、軽、重巡洋艦クラス、駆逐艦クラス、潜水艦とそれぞれの艦種まで全てに存在している。

太平洋には南太平洋方面のラバウル、パプアニューギニアのポートモレスビー、ソロモン諸島、ニューカレドニアと確認されているだけで4つ。

北太平洋にはアリューシャン列島沿いに1つとダッチハーバーの2つ。

中部太平洋にミッドウェー諸島、ハワイ諸島。

正直、このハワイ諸島が一番厄介なのだ。大敗北を期した日米合同艦隊での奪還作戦時に確認されただけでも陸上型の、飛行場姫などが最低でも5〜6。そしてそこにいる各艦種を合わせて最低でも20以上。

それに加えてヲ級やヌ級と言った空母にル級などの戦艦、随伴艦の巡洋艦や駆逐艦。

総戦力はインド洋に向かった300隻よりも少ないが、質が桁違いだ。

インド洋にはコロンボ軍港とモルディブのアッドウ環礁の2か所。地中海にはジブラルタル海峡、シチリア島、ダーダネルス海峡、ボスポラス海峡。

大西洋にも存在するらしいが未だに確認できていない。

これほどの一大勢力地を通り抜けるか、潰して漸く海路が確保出来て派遣可能となる。

それにパナマ運河、スエズ運河も棲巢となつてしていると予測されるし、その2か所を奪還しなければ燃料を無駄に消費し、日露戦争時のバルチック艦隊と同じ運命を辿る事になる。

正直、どうにかして助けたいという思いこそあれど、見捨てるしかないのだ。

そもそも今の日本には自国の防衛すら危ういのに出来るわけがない。

俺達に出来る事と言えば、心の中で謝る事ぐらいなのだ。

2日後、増派艦隊と合流。

第2護衛艦隊と増派護衛艦隊は航空機生産資源を運ぶ輸送船を護衛し各地を回り、第1護衛艦隊と第3護衛艦隊は引き続きリンガ島の間、かなりバンカ島寄りの海域を遊弋し護衛に務めた。

数日を掛けて増派輸送船団も石油やゴム、各種資源の積み込みが完了了。

気が付けば62隻の大艦隊となっていた。

まあ輸送船が半分以上を占めるので疑問は残るが。

幾ら敵艦隊が1隻も見つからないとはいえ、のんびりとはしてられない。

積み込みが完了し、即座に日本へ向けて針路を取った。

途中、スコールに何度か襲われたが風呂に入る機会の少ない船の上では恵みの雨として下士官妖精達が素っ裸で体や頭、衣類を洗っていた。

艦娘的には自身の体の上で入浴され、洗濯されているような物だからどうなのか、と思った。

その時、思わず女性としてどう思っているのかと飛龍に聞いてみたがかなり意外な返答が返って来た。

「え？ああ、正直気にしてないかな。あの戦争の時なんか目を逸らす事も出来なかったし。今は目を逸らせるからねー。それにこれは仕方が無いと思う。ていうか提督、女性として扱ってくれるのは嬉しいけどあんまりそういう事聞かない方が良いよ？」
だそうだ。

心なしか艦長や参謀長達が申し訳なきように顔を背けた気がした。

日本へ向けて航行している道中、これと言って何か問題が起きた訳では無く、寧ろクルージングでもしているのかと思うほど平穏だった。

そして日本から出撃して2週間と3日。

「提督、四国が見えてきました」

「そうだな……最後までしつかりと警戒を怠るな。最後の最後に被害が出るなぞあつてはならないからな」

「勿論承知しております」

漸く日本に帰国した。

————— side out —————

第8話

日本へ帰国した時の流れを少しだけ。

まず輸送船団を豊後水道、瀬戸内海へ。先導には第3護衛艦隊が務めて無事送り届けた。

それから我々護衛艦隊が続いた。

艦は呉鎮守府正面海域や柱島泊地の各艦に割り当てられた投錨地にそれぞれ停泊。母艦航空隊は岩国飛行場へ。

そして休暇……とはならない。

すぐさま機関や各銃座の点検や必要であれば部品交換を行った。

夜戦において被弾した鈴谷は念の為にドックへ入れ精密検査を実施。

結果、どこにも異常は見られなかった。念の為に損傷した機銃座を取り換えたぐらいで5日ほどで鈴谷を含む全艦は一連の作業を終えた。

輸送した各種資源は以下の通り。

石油18隻分540000トン

ボーキサイト輸送船9隻分計160000トン

クロム、ニッケル等7隻分計140000トン

これだけの量の資源を運んできたとしても燃料は陸海の航空隊、艦艇分を考えれば備蓄に回せる量はそこまでではない。

更にボーキサイトなどの航空機生産必需資源は全国中に存在する航空隊へ行き渡らせ、損失した機体の補充を考えると足りず。

そもそも機体を作るための工場が限られているのだから一気に作れるわけじゃない。

それらの資源は瀬戸内海各地の精製所に送られた。

石油であれば天然ガス、ナフサ（ガソリン）灯油、軽油、重油、潤滑油、アスファルトなどに分けることが出来る。

ただしこれらは民間の需要を満たすには程遠く、精々が天然ガスと灯油が発電用や暖房用に向けられるぐらいか。

軽油は航空機の燃料に使われ、重油は艦艇の燃料、アスファルトは飛行場の滑走路修理に。上げればキリが無い。

しようがないと言えましょうがないが、民間への恩恵は今の所少ない。殆どないと言っていいだろう。だがそうでもしないと本当にどうしようもないほど追い込まれているのだ。

艦の各種点検や修理等が行われているその間、俺は報告書類の作成に追われようやく終わったと思いきや栃木山中の軍令部に呼び出された。

そこで待っていたのは勲章が2つ。

まあ市木大将達から裏でこっそり教えて貰ったのだが、どうにも深海棲艦と戦争をして行く上で、所謂プロパガンダというやつだ。

ここで絡んでくるのが軍以外の人間達なのだが、先ず言っておくと今現在この国に内閣総理大臣と言う役職や、各省庁の大臣や長官、政治家と言うものは存在しない。何故かというと深海棲艦はこちらの指揮系統を完全にズタズタにするために彼らを真っ先に消しに掛かった。

更に言えばその後後釜として据えられた人間が、次々に空爆などで死んでいった為に、5人目の奴がまさかの国外逃亡をするという暴挙に出たのだ。

まあ結果としては失敗して深海棲艦の戦闘機に撃墜されたのだが。そして俺をプロパガンダとして持ち上げる事を一番最初に提案したのがまさかの天皇陛下。困窮し、希望を見いだせない国民の為に、と言われてしまい流石の市木大将も断れず。

そして天皇陛下の提案に乗ったのが周りの人間だ。

軍としてはその存在を秘匿し安全を確保しておきたかったのだが天皇陛下を始めとして多くの人間に頭を下げられてまで断ることは出来なかった。

まあしかし、流石に今すぐに、と言う訳ではない。

こちらの戦力が整い、万が一深海棲艦が俺を消すために戦力を向けてきたとしても対応出来るようになるまではどうか待って欲しいと、なんとかしてその条件を飲んでもらった。

軍全体には噂として出回ってしまったているがそれに関しては市木大将からの直接的な命令と言う形で箝口令が敷かれているために絶対ではないが暫くの間は安心できるだろう。

勲章の授与式、といっても市木大将以下、西村中将、黒川中将、中代中将、広野中将の5人だけの小さなものだったが。それでも5人は形式的な物が終わった後にそれとは別に、何と言えはいいのだろうか、こう、別で祝ってくれた。

5人から、
「本当は5人別々で祝いの品を送りたかったんだが、物が無くてな……5人纏めて送ってしまう事になって申し訳ないが、良かったら受け取ってくれ」

そう言つて万年筆とそれに使うためのインク、書類等に押す為の印鑑を頂いた。

今までは印鑑が無かったから書類に直接サインしていた。しかも筆で書いていたからこれは有難い。

慣れればどうつてことは無いが、やはりグシャつとしてしまう。まあ市木大将達はそれのおかげで直ぐに俺から送られてきた書類だと判別ができていたと笑っていた。少しばかり恥ずかしかった。

授与式が終わり、時間も無いからと言う事ですぐに、これからの方針をどうするか会議が行われたが、現時点での積極的攻勢は不可能であると判断しこのまま資源備蓄に努める事とした。

結果、2週間後にもう一度大規模輸送作戦を実施することが決定。同じくパレンバンへ輸送船団を率いて出撃することとなった。

作戦参加戦力は輸送船団に限りタンカー18隻(その内2隻はドラム缶輸送)輸送船16隻が指定された。

それ以外の護衛艦隊に関して。

第1護衛艦隊

航空母艦1隻 飛龍(旗艦) 搭載機 烈風37機、流星20機、彩雲9機。計66機。

重巡洋艦1隻 摩耶

軽巡洋艦1隻 能代

駆逐艦5隻 秋月、照月、宵月、満月、花月

第2護衛艦隊

航空母艦1隻 蒼龍(旗艦) 搭載機 烈風36機、流星20機、彩雲9機。計65機。

重巡洋艦1隻 那智

軽巡洋艦1隻 矢矧

駆逐艦5隻 涼月、初月、若月、霜月、春月

第1、第2護衛艦隊の編成はそのままに。

第3護衛艦隊には瑞鶴を新たに編成。そして増派輸送船団護衛艦隊を第4護衛艦隊として編成。

第3護衛艦隊

航空母艦1隻 瑞鶴 搭載機 烈風 24機 流星38機 彩雲12機 計74機

重巡洋艦1隻 鈴谷

軽巡洋艦1隻 神通

駆逐艦5隻 陽炎、雪風、浦風、萩風、村雨

第4護衛艦隊

重巡洋艦1隻 愛宕
軽巡洋艦1隻 龍田
駆逐艦5隻 村雨、時雨、響、朧、初雪、浦波

タンカー 18隻（その内2隻はドラム缶輸送）

輸送船 16隻

輸送船団計34隻

4個護衛艦隊 計31隻

総勢 65隻

以上のようになった。

今までにない大艦隊となったが実際の戦闘能力は輸送船団の護衛という足枷を嵌められているので大きく減衰している。

飛龍、蒼龍の先の敵艦隊攻撃の際に失った2機の流星と、更に追加で4機ずつ配属され、搭乗員は補充された。

瑞鶴に関してだが、艦載機と搭乗員は、実は搭乗員のみならば確保されていた。

ただ艦載機である烈風の製造が間に合わなかったこと、燃料が無く空母を動かせなかったことで一度目の大規模輸送作戦には参加が見送られた。

その間、出来る訓練と言えば飛行場から離陸しての戦闘訓練だけだ。勿論空母を動かせないのもその間に発着艦訓練は行えない。

一応、飛行場に飛行甲板を模した設備を設けて訓練をしていたが、動くことのない陸の飛行場の模擬設備と実際に洋上を進む、波の影響を多少なりとも受ける本物の飛行甲板ではまるつきり、完全に別物だ。

搭乗員の練度はそれなりだが空母への発着艦と言う観点から見ると不安が残る。一度、瑞鶴に乗艦し訓練を見てみたが確かに艦の運用と言う面から見れば熟練達が揃っていて飛龍や蒼龍に負けない程に安心が出来る。

だがやはり艦載機の発着艦訓練ともなるとかなりヒヤツとした。

着艦する際に侵入角度を失敗して飛行甲板で一度跳ねてしまった。

アレスティング・フックを着艦制動装置、簡単に言えばアレスティング・フックを引っ掛ける為のワイヤーである。それを引っ掛けられずに、咄嗟に飛び立たなければ危うく艦首飛行甲板から海へ落つこちる所だった。

それだけではなく着艦した際に艦橋に危うく接触事故を起こしかけたりとまあなんとも新兵の様な有様だった。

まあ仕方が無いと言えばそうなのだ。

今回瑞鶴の艦載機を操る搭乗員達は皆、腕は立つが空母に乗ったことが無いというのだから。まあ今時343空の様にエース・パイロットで固められた母艦航空隊が希少なのだ。

取り敢えず瑞鶴艦載機隊には出撃までひたすら発着艦訓練を反復訓練をさせる事にし、そう命令も出した。いくら腕が立つとはいっても空母で運用出来ないのであれば意味が無い。

そして迎えた第2次大規模輸送作戦は、輸送任務を中止し新たに偵察任務を与えられた潜水艦隊の情報の下、損害どころか敵艦隊を発見することも、敵艦隊との戦闘すら発生せず終了した。

そして第2次輸送作戦から2週間後。

軍令部から第3次大規模輸送作戦を発令、出撃準備に移っていた。

しかしそこで大きな問題が発生した。

『我伊403。敵ノ有力ナル艦隊、マラッカ海峡ヲ通過ス。夜間ノ為詳細ハ確認出来ズ。コレヨリ追跡ニ移ル。1959』

『我伊19。敵艦隊スマトラ島ジャワ島間ヲ通過ス。詳細不明。コレ

ヨリ追跡ニ移ル。2042』

敵の艦隊がパレンバン周辺に存在するとの情報が入った。

更に翌日、続けて入ってきたのはその詳細な戦力を知らせる電文だった。

『我伊403。敵艦隊ハ空母ヲ級2、軽空母又級1、随伴艦24ヲ伴ウ。0936』

『我伊19。敵艦隊ハ戦艦ル級2、重巡リ級3、随伴艦12ヲ伴ウ。1252』

この報告に、俺達は恐らく欧州に向かったのであろう大艦隊から戦力を抽出し我々の輸送船団撃滅を狙ったものだと思われる。

まず伊403が発見した、マラツカ海峡を通過した敵艦隊は、空母機動部隊として航空戦力からの輸送船団撃滅を。

伊19が発見したスマトラ島ジャワ島間を通過した艦隊は戦艦打撃艦隊だ。

まあ何故二手に分けたのかと言う疑問は恐らくマラツカ海峡を通過する時間を短縮する為だと思われる。

あの海峡は以前話した通り水深が浅く座礁の危険性が高い。だから航行速度も遅くなる。だからだろう。

まあそんなことはどうでもいい。

大規模輸送作戦を実行するかどうか、と言う事の方が重要だ。

俺は市木大将達と話し合った。

そして結論から言えば、実行することになった。

理由としては、先ず敵戦力の少なさが挙げられる。

というのも欧州方面へ行った艦隊を主力と仮定すると、その主力が居ない今こそが好機なのだ。

向こうには空母だけでも40はくだらない。

それらを相手にするよりかは、現状空母3隻、戦艦2隻の方が絶対

的に相手取るのは楽なのだ。

だからこそ、まだ可能性がありその敵艦隊を撃滅し輸送船団を送り届けるのだ。

だが俺を含めて市木大将達6人は満場一致で大規模輸送作戦は今回、もしくは次回で最後となると結論付けた。

それを超えると欧州方面から戻った敵主力が戻り、再び大規模輸送を実施するには沖縄などの南西諸島から南方方面にかけて奪還作戦を実施し奪還した上でその2つの海域を維持しなければならない。

となると現有戦力では奪還は可能であつても維持は困難、と言うのが現実だ。

南西諸島ならば奪還は出来るだろうが、「維持は可能か？」と聞かれると首を縦に振る事は出来ない。

まあその辺の話は追々解決していくので置いておいて。

第3次大規模輸送作戦の参加戦力は以下の通り。

第1機動艦隊

航空母艦3隻

第1航空戦隊

飛龍(旗艦) 搭載機 烈風37機、流星20機、彩雲9機。計66機。

蒼龍 搭載機 烈風36機、流星20機、彩雲9機。計65機。

瑞鶴 搭載機 烈風24機、流星38機、彩雲12機。計74機。

艦載機数 計205機

重巡洋艦2隻

摩耶

那智

軽巡洋艦2隻

能代

矢矧

駆逐艦10隻

秋月、照月、宵月、満月、花月、涼月、初月、若月、霜月、春月

第1戦隊

戦艦2隻

金剛

霧島

重巡洋艦2隻

鈴谷 古鷹

軽巡洋艦1隻

神通

駆逐艦5隻

陽炎、雪風、浦風、萩風、村雨

先ずは、飛龍、蒼龍、瑞鶴を基幹とする空母打撃艦隊である第1機動艦隊を編成。

この艦隊は敵空母艦隊を相手取るための編成だ。といっても航行中は輸送船団の護衛も同時に務める。

ただ敵艦隊を発見した場合は輸送船団防衛の観点から先行して敵空母に対し攻撃を行う。

そして第1戦隊は敵戦艦部隊と夜戦などになった場合、その実力を発揮してもらう事になっている。

本来ならば霧島の代わりに長門が編成されていたはずなのだが長門は今現在、なんとも間が悪い事に機関部の故障により修理中なのだ。

というのも1週間前に久々に出撃すると言う事で各部の点検を行うために瀬戸内海を航行していたのだが、その最中に全速力を出した。すると機関4基4軸の内の1つから、低圧反動型タービンと減速

ギアボックスに異常が見つかったのだ。

当初、停泊時の点検中には見つからなかったのだが、全速力を出したところタービン翼と減速ギアに亀裂が入った。

原因は材料不足故に品質の低下したものを使用したことによるものと、整備はしていたが部品交換が出来ずにいたことによる経年劣化だった。

調査の結果、艦後部の第3、第4砲塔を撤去し、後部甲板を全て引き剥がして機関そのものを取り換えなければならなくなった。

しかもその亀裂が入った機関以外の3つの内1つからも同様の故障の可能性があるとすればそれも取り換える事に。最短でも1か月は掛かるであろう大修理だ。

金剛、霧島に関しては、全速力を行っても問題無かった。

そう言う訳で急遽、霧島を編入した。

長門と、艦長以下乗組員達は余りにも悔しくてしようがなかったのか大泣きし、長門に至っては機関を2つ使えない状態でも出撃させるとプレハブ執務室に殴りこんできた。

拳句の果てには艦長が腹を切ろうとするわ、部品を製造していた妖精達も同じように、自身の仕事にプライドを持ってやっていたからかその衝撃は大きく、

「こんな大作戦を前に我々が作った物が原因で戦艦長門が出撃出来ないとは！死んで詫びるしかない！」

と集団自殺を図ったりと、もう大騒ぎとなった。

更に事を収めるのに丸々2日掛かった。

俺が直接彼らを説得して周り、最後の最後は市木大将達にもお願いをしてどうか説得してもらった。

事実、彼らの部品を作る腕は確かで一級品だ。

今回の事故は材料、材質不足から起きた不慮の事故、として片付けられた。

その後は高品質部品を作るために、しっかりとした質、量の材料を確保することしか解決は出来ない。

そこで浮き彫りになったこの艦艇用部品の品質低下問題を解決す

るために今回は輸送船にそれらの材料となる資源を輸送することも求められた。

なので今回は航空機生産に必要なボーキサイトの量を抑える事になった。2回の大規模輸送作戦によってボーキサイトに関しては短期的に見れば余裕があるからだ。

かなり話がずれてしまった。艦隊の編成の話に戻ろう。

第1護衛艦隊

航空母艦

隼鷹（旗艦） 搭載機 烈風 28機 流星24機 彩雲8機 計

60機

重巡洋艦1隻

愛宕

軽巡洋艦1隻

龍田

駆逐艦5隻

時雨、響、朧、初雪、浦波

輸送船団には隼鷹を旗艦とした8隻の護衛艦隊を付ける。

まあ第1機動艦隊と第1戦隊も敵艦隊を発見するまでは護衛に就くのでそれまでは問題無いだろう。

タンカー 25隻（その内9隻はドラム缶輸送、その内6隻は補給用）

輸送船 16隻

輸送船団 計41隻

第1機動艦隊、第1戦隊、第1護衛艦隊 計32隻

総勢73隻を数える大艦隊だ。

消費燃料は補給用燃料も含めると軽く10万トンを超える。

だが2回の大規模輸送作戦で108万トン入手。10分の1を消費するがまあ致し方無い。

まあこの作戦を成功させれば75万トンの石油を確保出来る。

見返りを考えれば、実施するに値する。

そして多くの期待と共に発動された第3次大規模輸送作戦。

それは、今までで1番に苛烈で過酷な物となる事を俺はまだ知る由も無かった。

輸 輸 輸
輸 輸 輸
響 輸 輸 輸 輸 輸
龍田
浦波

以上の様になった。

各艦の距離は輸送船は200m。戦闘艦艇は250m。

艦隊の速度は18ノットで進み戦闘行動時には輸送船団を第1機動艦隊と第1戦隊から分離する。

基本は空母と輸送船団を中心に輪形陣を組み、それらを防護する。

基本的に第1機動艦隊は対艦攻撃能力が空母3隻の艦載機と重巡2隻、軽巡2隻の砲撃能力しかない。

と言うのも第1機動艦隊護衛に就いている秋月以下10隻の駆逐艦は、主砲を対空対艦対地をこなせる陽炎や雪風達に装備されている50口径3年式12.7cm砲ではなく、65口径10cm連装高角砲を装備している。

この65口径10cm連装高角砲は、高角砲と名前が付いている通り対空戦闘を主目的とする対空砲だ。まあ初速はこちらの方が早いので距離などによっては貫通力などは勝るかもしれない。

まあその辺の問題は第1戦隊が十分な性能を持っているために特段問題は無い。

戦艦金剛、霧島、重巡古鷹の3隻は対水上電探を突貫作業で装備させた。対空電探は残念ながら間に合わなかった。

まあそれは置いておいて。
バシー海峡通過後、敵艦隊を追尾していた伊403から通報が入った。

『敵艦隊、リング泊地ニテ合流後、リング泊地カラ東13海里ヲ航行中。貴艦隊方向ニ向カウ。警戒サレタシ。1047』

敵艦隊が遂に動き出したということだ。

「提督、今我々が居るのはルソン島バンギー湾から西に50海里の凡そこの辺りです。敵艦隊との距離は未だ2000kmはあります。彩雲を持って敵艦隊を偵察ならば可能です。ですが攻撃隊の発艦は無理でしょう」

「そうだな……ひとまずここは潜水艦隊にそのまま追尾させよう」

「了解しました。念の為に対空電探や対水上電探を稼働させますがよろしいですか？」

「ああ、構わん。奇襲を受ける事だけは避けねばならん」

「ご最中です」

しかしまだ2000kmも離れているか。

先程も言ったがこの距離だと攻撃隊を向かわせる事は不可能だ。

敵機との戦闘も考えると300〜400海里（1海里1825mとした場合約550km〜730km）まで近づかないとならない。

烈風の航続距離は1960km（約1074海里）（増槽付き）＋全力運転だ。これじゃどうやっても無理がある。

流星の航続距離約3000km（約1644海里）ならば行っていくだけなら可能だが帰って来ることは不可能だ。

短い烈風に合わせるとなると単純に往復するならば440海里、800kmでも大丈夫だろう。だが被弾等を考えると400海里以下、350海里でどうか？と言うところだろう。

所謂アウトレンジ戦法というやつだ。敵戦闘機の航続距離はこちらよりも短い為に成せるが搭乗員への負担が大きい。だから可能な限り距離を詰めてからでないと攻撃隊は出せない。戦闘機隊の原田大佐達ならどうってことない、平然とやれるだろうが流星隊は駄目だ、と断言する。

先のバンカ島沖での攻撃隊に参加していた飛龍、蒼龍の連中でもここまで距離は遠くなかったからな。瑞鶴流星隊は無理だ。実戦経験が無い。隼鷹流星隊も実戦経験が無いからな、万が一参加するとなると無理がある。

そう言う訳で今、攻撃隊を出すことは見送られた。

「提督、輸送船団はどうする？このままこの海域で留まらせても問題無いと思うけど」

「……もう少し進んだら偵察機を出そう。流石に潜水艦からの情報だけだと不安が残る。その時に輸送船団と我々は分離する。」

「了解。1200で良い？」

「ああ、構わん」

そう言う訳で1200に偵察機が放たれることになった。

偵察機を放って我々は敵艦隊方向に進む。既に偵察機を放った時に輸送船団とは分離し、分離した海域で輸送船団は遊弋している。

偵察機を放ってから1時間程経った頃。

「提督、伊403から報告が」

「読み上げてくれ」

『我伊403。敵空母カラ発艦スル機影アリ。針路ハ貴艦隊方向。対空警戒ヲ敵トサレタシ。1312』

「……敵の偵察機か」

「恐らくは」

「こちらの偵察機は？」

「片道で2時間半は掛かるので……敵艦隊を視認するまではあと1時間掛かるかと」

「そろそろ直掩戦闘機を上げておいた方が良だろうかと？」

「敵の偵察機は彩雲の様な専門の機体ではなく雷撃機が務めることが多いです。機種はTBFアヴェンジャーと思われませんが、航続距離は彩雲の半分程度です。対空電探を使用するのには問題無いですが直掩戦闘機を今から上げるとなるとまだ早いかと」

「では、直掩戦闘機を上げるのは何時頃が良い？」

「早くても1時間後で問題無いでしょう」

「ならそうしよう。対潜警戒も忘れるな」

「問題ありません。ソナーは常時稼働していますが敵潜の反応はありません」

「それなら良いんだが」

その会話から1時間後、偵察に放った彩雲が敵艦隊発見の報告を發した。

『我彩雲2号機。敵艦隊発見ス。空母ヲ級2、又級1、戦艦ル級2、重巡り級3、他随伴艦多数ヲ含ム大艦隊。速力ハ20ノット、方角我が艦隊二向ケテ北東二航行中。1437』

それに続いて敵艦隊の詳細な位置情報を送ってきた。

その電文の20分後、偵察機からの連絡が途絶えた。恐らく撃墜されたのであろう。

彼らが命と引き換えに俺たちに与えてくれた情報によると、敵艦隊はリアウ諸島ライナイより北に100kmの地点まで進出してきているらしい。

そして俺達の現在位置は南沙諸島と西沙諸島の丁度中間地点をリంగా泊地方方向に向かって南下している。

「敵艦隊との距離は350海里です。この距離ならば敵艦隊へ攻撃隊を放つても問題は無いと思われませんが……」

「問題は、それじゃない。攻撃兵力をどうするか、と言う事だ。敵のヲ級は1隻で90機を超える艦載機数を誇る。下手をすると100機に届く。又級も45機を超えるからな……」

「ええ、3隻合わせて最低でも250機を数える事になります対してこちらは彩雲を入れて205機……敵しいですな」

「艦隊の直掩と、攻撃隊に随伴させる戦闘機隊の数のどちらを優先的に取るか、が一番の問題ですね」

戦闘機の数だけでもこちらは97機、向こうはこの1.5倍は居ると思つていい。これでは攻撃隊に向かわせられるのは多めに見積もつても50機程度なので敵戦闘機の数に押される。原田大佐以下、戦闘機隊搭乗員の技量が高いとは言つても数で囲まれてしまうと流星を守るのは難しいと言わざるを得ない。

攻撃機である流星は78機と、あまり多くない。

全力出撃を行うと仮定し、急降下爆撃機を多めに見積もつて飛龍、蒼龍は魚雷を27本、瑞鶴は45本しか搭載出来ない。正直、半分に

分けても魚雷は2回出撃すれば尽きてしまう。

敵戦闘機の迎撃、対空砲火、敵だつて馬鹿じゃないんだから回避行動を行うはず。命中率は流星の搭乗員に賭けるしかないが、実戦経験のない新米の彼らの技量を考えると大損害を与えるのは難しい。

「山田参謀長、どう見る?」

「攻撃隊を出撃させる事は可能です。ですが確実に敵空母にそれ以降の航空機運用に支障をきたすレベルの被害を出させられるか、と聞かれると……」

「首を傾げてしまふ、か」

「艦長はどう思う? 飛龍は?」

「私も同じ意見です」

「私も同じ意見だね。今ここで艦載機と搭乗員を無駄に消費しちゃうのは後々の事を考えると薦められる事じゃないね」

念の為、皆にも聞いてみたが俺と同意見だった。

「しかし、攻撃しないと言う訳には行きません。潜水艦隊には存在を悟られずそのまま偵察任務を続行して貫わなければならぬので雷撃を仕掛ける、と命じる事も出来ません」

参謀長はそう言ってくるが確かにその通りだとは思ふ。

だが補給のめどが無い我々は無理をする事は出来ない。

全員で頭を捻る。

はてさて、どうしたものか……

そう考えていると、妙案を思い付いた。

「……敵艦隊を攻撃しなくても良いのではないか?」

「は、それはどういう事でしょうか?」

「まあ待て、ちゃんと説明するから」

俺の発言によって艦橋内に居た全員が首を傾げた。

そりゃそうだ、俺だつてそんなことを上官が言い出したら首を傾げる。

「簡単に言えばだな、迎撃に徹すればいいのではないか?と言う事だ」

「迎撃に徹する、ですか?」

「その通りだ。何も無理をして攻撃をせずとも敵の艦爆や艦攻を落と

してしまえばこちらの艦隊には手出しできないし、何より敵戦闘機隊は艦爆、艦攻を守らなければならぬと言う足枷を嵌められているからな、思うようには行動出来ん。ならばその隙をついてしまおうと言う訳だが……どうだ？」

参謀長と艦長、飛龍達は俺の話を聞いて互いに話し合う。そして代表して参謀長が口を開いた。

「……案としては今の我が艦隊の艦載機数を考えると最も効果的である、と考えます」

「なら、実行可能か？」

「搭乗員の負担を考えても攻撃隊を向かわせるよりは楽でしょう、端的に言えば実行可能です」

「……流星を迎撃機に使う事は出来るか？」

「流星を、ですか？」

「ああ、流星には翼内に20mm機銃を2門装備しているだろう、それに烈風程ではないにせよそれなりに格闘戦もこなせる筈だ。それなら敵機を落とすこともできるんじゃないか？」

「撃墜は出来るでしょう。ですが、搭乗員達の練度が問題です」

「本来流星の搭乗員達は雷撃と急降下爆撃の2種類の訓練しかしていません。敵機を追いかけて銃弾を叩き込む、と言う訓練はしておりません。迎撃に上げてても敵機を落とせるかどうかは個々人の才能に頼らざるを得なくなります」

「更に言えば、その次にすぐ様攻撃隊を送り出すことが出来なくなってしまうてしまいます。銃弾はいいとして、再度燃料を積み込む時間と魚雷、爆弾を装備させる時間が余計に掛かってしまいます」

「だけど、取り敢えず数を揃えなきゃいけないって言うんなら何とかなるかも」

「……取り敢えずは、燃料の積み込みだけはして発艦準備だけさせておこう。全機空中退避させるんだ。1隻でも空母が生き残れば敵艦隊を攻撃する事は出来る」

「ミッドウエーの時の私みたいに？」

「まあ、その通りだな」

「では、烈風、流星全機に出撃準備をさせます。雷装、爆装はさせずに
と言う事でよろしいですね？」

「ああ、それで進めてくれ」

そして、それから空母3隻の艦載機全てに燃料と銃弾が積み込まれ
て行き、発艦の時を今か今かと待ち侘びていた。

さて、今更だが輸送船団と分離した我々第1機動艦隊と第1戦隊の
陣形は以下の通り。

秋月	照月
摩耶	那智
宵月	飛龍
金剛	霧島
満月	瑞鶴
鈴谷	古鷹
初月	蒼龍
能代	矢矧
雪風	神通
萩風	霜月
陽炎	村雨
	浦風
	若月

空母3隻を中心に輪形陣を組み、その外側には戦艦、重巡、軽巡を
配置。

そして更にその外側を駆逐艦達で固めた。

各艦の距離は500mと結構離れているが、これは回避行動を取る
となった時に200mだと近すぎて衝突の危険性があるからだ。
まあこの距離でも危険はあるがこれ以上離れてしまうと対空砲火が
分散してしまう可能性があると言う事で衝突ギリギリの距離になっ
てしまった。まあ、こうなっては戦闘機隊の活躍に期待するしかな
い。

それから1時間後。

彼我の距離は300海里(約550km)まで接近していた。

そこへ、対空電探に反応が出た。

「対空電探に感あり！南約70kmに敵機と思われる反応を確認！」

「直掩戦闘機を向かわせろ」

即座に直掩に就いていた烈風を4機向かわせる。

程なくして烈風から敵機撃墜の報告が入った。

「提督、これは敵機に我が艦隊の凡その位置を発信されたと見るべきです。攻撃隊が向かってくるのも時間の問題です。戦闘機隊をすぐさま上げましょう」

「分かった。全艦に対空戦闘用意を下令。蒼龍、瑞鶴に戦闘機隊を発艦させろ。余裕があったら流星も上げてくれ」

「了解しました」

その命令の10分後、昇降機によって飛行甲板に挙げられた烈風は既に燃料や銃弾を満載させ3隻の空母から続々と飛び立っていく。今回は飛行甲板に並べずに飛行甲板上げた機体からどんどん発艦させていく。

その発艦作業が始まってすぐに伊403から報告が入った。

『我伊401。敵空母3隻カラ敵機ノ発艦ヲ確認。警戒サレタシ。1545』

「提督、敵攻撃隊の発艦を確認しました。早ければ2時間程で到達するはずですよ」

「今は、戦闘機隊に賭けるしかないさ。……流星はどうだ？」

「各空母で10機ずつ程が発艦準備を終えています。どういたしますか？」

「上げてくれ。艦に残して置いたら被弾した時に大惨事になる」

「了解しました。準備が終わっていない機体に関してはどういたしますか？」

今の格納庫内にある流星は、弾薬や燃料を少なからず搭載してしまっている。

万が一被弾した場合、それらに引火してしまうと地獄絵図の完成になつてしまう。ならば大急ぎで準備を終えさせて発艦させなければならぬ。

「……出来るだけ急いで準備を進めて発艦させろ。銃弾は積まなくていいから敵機の攻撃開始約30分前までには完了させるように、手際の整備員も全員回せ」

「了解しました。直ぐに通達します」

かなり早め早めの行動になつてはいるがまあ、問題無いだろう。

烈風の発艦が終わり、てんてこ舞いの大騒ぎになつていた格納庫内は、その騒ぎは収まることなく続く。先ずは出撃準備の終わっている10機の流星が飛行甲板に上げられていき発艦していく。

既に戦闘機隊は迎撃に向かう。艦隊より南に150kmの辺りで敵攻撃隊を待ち構える。

暫くすると、敵機との戦闘を開始したと言う電文が送られてきた。

———— side 原田 ————

飛龍を飛び立って、提督から指示された地点（南に150km）で敵の攻撃隊を待ち構える。

「全機、異常無いか？」

「『『『『『無し』』』』』』」

迎撃に上がっている烈風全機に異常の有無を確認すると、返事が返つて来た。

それなら問題無い。

しかし、提督も思い切つたことをするものだ。

攻撃隊を出さずに迎撃に専念、しかも流星まで迎撃機として上げるとは。普通ならば敵よりも先に攻撃し、その戦力を削るのだが提督は攻撃隊を守る烈風と艦隊を守る烈風に分ける事を良し、としなかったのだ。

まあ確かに敵艦隊に向かった時、敵戦闘機との戦いを考えれば半々の数である48機でも守り切るのは難しい。だが迎撃に専念するとなると97機全機で一方向的に迎え撃つことが出来るし、足りない手数は流星で補う事が出来る。

流星は烈風程ではないにせよそれなりに機動能力を持ち合わせている。まあ攻撃機には必要か？と思うようなレベルだし、更に言えば20mm機銃を2門と重武装だ。

頑丈な深海棲艦機と言えども20mm機銃2門は侮れない。

俺達が発艦して空中集合し、暫くすると流星が30機合流した。そのまま指示された地点に向かい待機する。

暫くすると、敵艦隊の方向から黒い点々が空を進んでくる。

「敵機だ！まずは烈風が突っ込んで敵戦闘機を抑える！流星は俺から指示が出るまで待機だ。指示が出たら敵の艦爆や艦攻を落としてくれ。いいか、絶対に深追いはするな、一撃離脱を心掛ける！」

矢継ぎ早に指示を出して、俺は烈風を率いて敵編隊に突っ込む。

流星隊は敵編隊の直上から急降下一撃離脱を狙うのか少しばかり遠回りして高度を上げていく。

それを横目に見ながら一気に突っ込んでいく。

すると、やはりと言うか必然的に敵戦闘機が前に出て機銃を乱射してくる。所謂ヘッドオンと言うやつだが態々乗っついていやすることはしない。

そのまま全機は回避を行い敵が俺達の後ろを抜けていった瞬間に

一斉に反転。俺達はこの程度で落とされるような訓練はしていない。何機かは被弾したのか多少煙を吐いてはいるが戦闘に支障は無さそうだ。

反転した俺達に狙いを付けられた哀れな深海棲艦機は炎を吐いて落ちて行ったり翼を叩き折られクルクルと周りながら、操縦席をぶち抜かれた奴は急激に高度を落としていったりする。

パツと見ると敵はF6FとF4Uが半々ずつ。その後ろに攻撃隊が70機ほど見える。

だが敵戦闘機の数は我々烈風隊と同数かそれよりも少しばかり少ない。これならば余裕で格闘戦に巻き込める。

「全機散開！格闘戦に移れ！相互援護を忘れるな！」

その指示が出た瞬間、一気に散開、それぞれ手頃な敵機に狙いをつけ追い掛け回し落としていく。

俺も目の前にいるF6Fに向かって20mm機銃と13mm機銃合計4門をぶっ放す。

するとしっかりと射弾は敵の翼を捉え押し折った。

零戦じゃ20mm機銃の弾数に不安があった。しかも使い切ってしまうと7・7mm機銃となんともひ弱なものに頼らざるを得なくなってしまう。

これじゃ深海棲艦機には幾ら撃ち込んでも落とせない。が烈風はそんなことは無いから遠慮無く撃てる。

後ろを見るとF4Uが1機、俺に食いついてきたがその瞬間に俺を落とせなかつた時点で負けだ。

ひらりと機体を翻して敵機の後ろに付く。そして難無く落とすことが出来た。

一度、離脱をして見渡してみると全体的に我々が有利に事を運んでいるようだ。するとその上空から流星が30機反転急降下、狙いをつけて撃ち始める。

だがやはり敵機を落とす訓練をしていないから10機程を度落とすに留まった。

だがそれに比べて烈風隊は敵戦闘機隊を敵の攻撃隊をあっちこつちから襲い掛かる流星に手出しさせまいと喰い付いて追い掛け回す。俺もうかうかしてられない。

取り敢えずは、あの後ろを取られて逃げ回る部下の1人を助けに入ろう。

「全機戦闘終了！集まれ！」

そろそろ艦隊の対空射撃が始まる。

恐らくは金剛と霧島の主砲が火を噴く頃合いだからこれ以上敵機を追うと巻き込まれてしまう。同士討ちだけは避けねばならない。

号令を掛け、全機が集まる。

見てみると、烈風隊は97機だったのが85機ぐらゐまで減っているな。

流星は……7、8機落とされたか。

だが脱出した奴も多いからな、戦闘終了後に回収してやらねばなるまい。

艦隊に向かったのは大体攻撃機は、急降下爆撃機が約10機、雷撃機が約20機に戦闘機が40〜50機の合計70〜80機ぐらゐか。

その情報を艦隊に向けて発信する。それが終われば後は空母に帰還するだけだが戦闘が終わるまでは無理だな。

被弾した機も少なくは無い。

翼から燃料が漏れ出ている機体やエンジンから煙が出ている機体もある。なるべく早めに着艦させたいが……

おおっと、対空戦が始まったようだ。

向こうの方にデカイ花火が撃ち上がったぞ。

ありや金剛か霧島の三式弾だな。
今俺達に出来る事は全艦が無事に空襲を乗り切ってくれ
祈るばかりだ。

———— side out ————

原田大佐から急降下爆撃機10、雷撃機20機、戦闘機40〜50機が烈風と流星の迎撃をすり抜けてこちらに向かってくる報告が入った。

この内完全に脅威となるのは急降下爆撃機と雷撃機の30機だけだ。戦闘機は直接的に船を沈める事は出来ないからな。それこそロケット弾や爆弾でもぶら下げていけば別だが報告には無い。もし戦闘機が爆弾なりロケット弾なりをぶら下げてきているのなら原田大佐が見逃す事も報告し忘れる事も無い。

「全艦、対空戦闘用意」

再度下令されたその命令に従い慌ただしく動く妖精達。

「金剛、霧島に主砲三式弾射撃を命じてくれ」

「既に準備は整っております」

「ありがとう。全艦、射程に入り次第撃ち方始め」

「了解」

すると、金剛と霧島それぞれの艦前部主砲45口径35.6cm連装砲2基4門づつが

空に向けてその大きな砲身を向けた。

それだけではない。重巡の4隻や軽巡、駆逐艦までもが主砲や対空砲、機銃を一齐に向ける

その十数秒後、とんでもなく大きな砲声と共に金剛と霧島の主砲か

ら対空用の三式弾が8発飛んで行く。

「金剛、霧島、命中弾を得ず。続けて第2斉射を始めます」
放った三式弾は敵編隊を捉える事は出来なかったようだ。

その後にもう一度撃った三式弾も駄目だったようだ。艦橋で悔しがる金剛の姿が目に見えようではあるがそんな事を気にしている場合じゃない。

金剛と霧島の主砲の照準から外れると続いて重巡組の主砲から三式弾が一斉に打ち出される。するとその内の何発かが敵機の内の何機かを捉えたようだ。

「……2機撃墜です」

山田参謀長が双眼鏡を覗いてそう報告してくる。

だが重巡の主砲の射程からも外れ更に進んでくる。
すると、駆逐艦の主砲と高角砲が一斉に火を噴いた。

軽く100門を超える数が一斉に射撃を始めた。その射撃速度は戦艦や重巡の主砲の比じゃない。遠くの空が瞬く間に黒い爆煙で覆われ始めた。

だがそれだけ撃つても落ちていく機体は無い。

飛龍も例に漏れず撃ちまくっているから砲声が近くで聞こえる。

「提督、しっかり何処かに掴まってね。回避運動を取ったり、万が一被弾したら吹き飛ばされちゃうから」

「ああ、分かっている」

初めてこんなにも恐ろしい経験であるのにも関わらず、どうにも、随分と落ち着いている。こういう時は緊張したりして暑くなるものだと思っていたんだがやけに冷えている。

視界も冴えていて飛んでくる敵機が良く分かる。

「敵機二手に分かれました！雷撃機12！急降下爆撃機21！」

見張り員が大声で叫ぶ。続いて別の見張り員が大声で叫んだ。

敵機が更に近づいてくる。

すると機銃の射程内に入ったのか一斉に火を噴いた。

連続した対空砲よりもずっと小さい射撃音があちらこちらから響いてくる。空に向かって射弾が伸びていき敵機を落とさんとシヤカリキになつて撃ちまくっているが残念ながら墮ちる機は無かつた。

だがどの艦のものかさっぱり分からないが4機の急降下爆撃機と2機の雷撃機が火を噴いて海面に突っ込んだ。

だが全機を墮とす事は出来ない。

先ず雷撃機に狙われたのは蒼龍だつた。俺の乗り込んでいる飛龍と瑞鶴は前後左右を重巡と戦艦にがちりと囲まれて対空機銃や対空砲の弾幕も分厚い。

だが蒼龍は後ろ側を能代、矢矧と神通と軽巡に守られていて飛龍と瑞鶴よりは対空機銃や対空砲は薄い。だから敵機はあれならやれると思つて狙つたのだろう。だがそれは大間違いだ。戦艦や重巡との対空砲火の差を埋める為に機銃がハリネズミの様に機銃を増設したのだ。寧ろ戦艦や重巡よりもずっと機銃の弾幕は分厚い。

そんな中に飛び込んで更に雷撃機は3機が海面に叩き付けられた。

残つた7機の雷撃機はこれは狙えないと判断したのか狙いを金剛と鈴谷に変更した。

勿論そう簡単に魚雷を食らつてやる理由も無い。

そもそも艦隊が既に30ノットの高速で疾走しているのだ、ただ命中だけでも難しい。

だが雷撃機だけじゃない。上空からは急降下爆撃機も迫りつつある。

その数を16機に減らしてもなお突っ込んでくる。

「敵機直上！急降下アア!!」

「艦長！回避行動を取れ!!!」

「取舵一杯！（左）」

「取舵一杯宜候！」

そして遂に急降下を始めた。敵急降下爆撃機が狙つたのは飛龍とその後ろを航行していた瑞鶴だつた。それぞれに8機ずつ突っ込ん

でくる。

その血気迫る勢いは腹に抱えた爆弾を必ずぶち当てて墮とされた仲間達の無念を晴らそうと言わんばかりだ。

俺は艦長に回避しよう怒鳴る。

必死に操舵員が舵を回すがこれほどの巨体を持つ空母が30ノットと言う高速で航行しているのだ、舵は瑞鶴程ではないにせよ中々利かない。

急降下してくる敵機にこちらも空母をやらせはしない、空母を守らんと周りの駆逐艦や金剛達は必死に機銃を撃つが撃墜したのは4機に留まった。

それぞれ6機が突っ込んでくる。

そして漸く舵が聞き始めた時、敵機が投弾した。

1発目は舵が利いたからか予測針路がズレて艦首のすぐ近くに大きな水柱を上げるだけだった。

「1発目至近弾！」

続けて2機目、3機目と投弾するがそれらも外れた。

4機目も飛龍が取舵から面舵（右）へ変更したときに投弾したが外れ。

続けて5機目と6機目が連続して投弾した。

「!!敵弾1発直撃コース！」

「総員衝撃に備えろ！」

艦長が大声を上げて全員が衝撃に備えたその時だった。

「提督！危ない！」

飛龍が俺を艦橋の床に押し倒し庇う。

ドオオン!!

そのすぐあと、大きな爆発音を立てて敵の爆弾が前部甲板の艦首に近い場所のど真ん中に1発命中した。

ドオオン!!

続いて艦橋付近に1発命中。

顔を上げると飛行甲板の二か所から黒煙と炎を上げている。

合計2発の爆弾を食らった。

「艦長！ダメージコントロール急げ！」

俺がそう声を上げたときには消火用ホースを持った妖精が火の手を上げている甲板に向かって放水を始めていた。

瑞鶴の方を見ると、遅れて投弾したのか最後の1機が投弾した瞬間だった。

だがその爆弾は瑞鶴の艦橋を捉える事は叶わず水柱を立てただけだった。

———— side 鈴谷 ————

敵機の空襲が始まった。

機銃弾をばら撒いて必死に敵機を落とそうとするけれど中々落ちない。

そして私達は雷撃機に狙われた。

左舷から突っ込んでくる雷撃機。

そして距離が800mを切った時、敵雷撃機が魚雷を投下した。

「敵雷撃機魚雷投下！距離800！」

2機の雷撃機が次々に投下。白い航跡を描きながらスルスルと私に向かって伸びてくる魚雷を巻き込んで回避するために、私は取り舵を命じた。

「取り舵一杯！」

「取舵一杯宜候！」

操舵員が舵を回す。

少しすると舵が利き始めたのかグググッ……と左に曲がり始めた。

よし、この分なら避けられる。

そんな事を思っ提督が乗っている飛龍を見た時。爆弾が命中しているのが見えた。

黒い煙を飛行甲板から、もうもうと上げているのがはっきりと分かる。

ああ!?提督は!?飛龍さんは!?無事なの!?

そう思った時だった。

見張り員の1人が大声を上げて叫んだ。

「敵雷撃機更に1機が魚雷投下!距離400!」

あの雷撃機、私達が取舵をするのに掛けたんだ。

だからタイミングをずらして投下したんだろう。

もう400mじゃ回避のしようが無い。

「総員衝撃に備えて!」

ズドン!!

爆弾を食らうよりもずっと重い衝撃が艦全体と私を襲った。

大きな水柱が空に向かって聳え立ち、少しするとドドドドド!と言

う音と一緒に海水が降り注ぐ。

命中したのは艦中央部。

「ダメコン急いで!浸水を何としても食い止めて!」

私は大声で叫ぶ。

敵機はもう飛び去った後だった。

被害は艦が浸水によって5度傾いた。

だけどこれは反対側に注水すればすぐに修復できる。

———— side out ————

雷撃機に狙われた金剛と鈴谷は、回避を続けている。

だが敵の技量も高かったのだろう。投下された魚雷7本の魚雷の内1本が鈴谷の艦中央部で爆弾とは比べ物にならない大きさの水柱を立てた。それが意味するのは命中した、と言う事だろう。

それを最後に敵機は飛び去って行った。

空襲終了後、艦長が被害を纏めて報告してくる。

「提督、我が飛龍に命中したのは250kg爆弾が2発です。飛行甲板艦首付近と艦橋付近に1発ずつですが幸いにも格納庫に可燃物となる機体などが無かったため飛行甲板に穴が空いたのと火災が発生しましたが消火は完了。1時間後には飛行甲板も応急修理で穴を塞ぎ終わります。被雷した鈴谷ですが浸水の影響で左に5度傾斜したようですが注水によって復元。戦闘行動に支障無しとの事です」

「そうか……良かった。それで、飛龍は機体の収容は出来るか？攻撃隊の発艦は？」

「修理が完了すればどちらとも問題無く行えます」

「もし修理が終わってから攻撃隊を発艦させるとなるとどれくらい時間が掛かる？」

「……最短でも1時間半は掛かるかと思われます」

「そうか……」

1時間半か。

そうなると攻撃隊が帰投するころには真つ暗になってしまう可能性があるな……

飛龍、蒼龍の戦闘機隊の連中ならまだしも瑞鶴の戦闘機隊や流星隊は夜間の着艦は危険すぎる。

だがこのままだと再び攻撃を受ける事になる。

「艦長、何とかして30分に修理時間を縮めてくれ。修理完了次第迎撃隊を収容、攻撃隊を編成する」

「了解しました。すると、攻撃隊を出すのですね？」

「ああ、勿論だ。やられっぱなしじゃ誰も納得出来んだろう」

俺がそう言うのと艦長を始めとした艦橋の全員が歓声を上げた。

「飛龍」

「ん？どうしたの提督」

「さっきは庇ってくれてありがとう」

「んーん、どういたしまして。怪我とか無い？」

「ああ、お陰でな。飛龍はどうだ？大丈夫か？」

「うん、大丈夫。まだまだ戦えるよ。だからそんな心配そうな顔しないでどっしり構えてて」

「……ああ、分かった」

先程、俺を庇ってくれた飛龍に礼を言った。

第10話

敵攻撃隊が艦隊の上空を飛び去ってから、迎撃隊と空中退避させていた流星を瑞鶴、蒼龍に収容をした。

飛龍の損傷個所の修理はそれぞれの妖精達のおかげで30分に短縮するようになると言ったところ、見事に30分に短縮して見せた。

そして艦載機を収容後、損傷機の修理などを進める。

「提督、出撃に耐えうる機体は烈風80機、流星61機です。空中退避させた流星は全機無事でした。ですが迎撃に加えた流星30機の内、撃墜されたのが7機。損傷が酷く出撃出来ない機体が5機です」

「そうか。直ぐに攻撃準備を始めろ。修理出来る機体はしっかりと修理して送り出すように」

「既に修理は終わっており、魚雷などを装着するとなるとあと30分程で完了する見込みです」

「そうか……それで、撃墜された機体の搭乗員達は怎么样了？」

「既に彩雲を発艦させ空中で誘導、救助を近海を航行していた潜水艦伊405に担当させています」

「それならいいが……」

搭乗員の救助は、問題無く行われているようだ。

その後、攻撃隊の戦力をどうするか話し合った。

結果、攻撃参加兵力は以下の通り。

飛龍 烈風24機 流星17機（爆装7機 雷装10機）

蒼龍 烈風24機 流星16機（爆装6機 雷装10機）

瑞鶴 烈風12機 流星27機（爆装13機 雷装14機）

烈風60機

爆装流星22機

雷装流星38機

合計120機の攻撃兵力だ。

艦隊の防空には飛龍7機、蒼龍7機、瑞鶴6機の計20機の烈風を残しておく。

正直、敵の急降下爆撃機や雷撃機は殆ど落としたし、何より電探に敵の第2波攻撃隊を捉えていない事と、敵艦隊監視任務に就いている伊403からの通報も無い。恐らくまた攻撃を受ける心配は無いと思われる。

本来なら敵艦隊を攻撃するのに、攻撃隊を二つに分けても良かったのだがこれ以上後に放つとなると帰投時間が夜間になってしまう。

だから一回限りの全力攻撃と言う訳だ。正直、空母3隻だけを狙うならば61機の流星でも事足りるが、戦艦2隻も含まれているとなると不安が残る。

今回は22機の急降下爆撃を担当する流星に、38機の雷撃を担当する流星だ。

この数なら空母を撃沈出来る可能性は十分にあるがそこに戦艦も加えるとなると厳しい。

というのもこの航空戦の後に予想されるのが夜間の戦艦同士の殴り合いだからだ。

金剛と霧島に不満がある訳じゃないが、敵のル級は40cmの主砲だ。

大してこっちは35.6cm砲と戦艦同士で殴り合いをするには威力が十分ではない。だからこそ仕留められなくとも少しばかりは敵戦艦に損傷を与えておかなければならないのだが……

「提督、これだけの流星の数となると空母を仕留めるのに精一杯です。戦艦までどうにかするととなると攻撃兵力が圧倒的に足りません。せめてあと20機いれば何とか打撃を与えられるとは思いますが……」

「ここにきて迎撃に上げたときの代償が来たか……」

「ですがあれが無ければ実際に我が飛龍の損害だけでなく蒼龍や瑞鶴までもが被弾を免れない状況になっていたと思われる。鈴谷だけでなく金剛も被雷していたかと。今は限られたこの兵力で敵に最大限出血を強要させる手段を考えなければ……」

迎撃に参加させた流星の力が無ければ実際に参謀長が言った通り今以上の被害が出ていただろう。

金剛の被雷も確かに有り得た事だ。

被雷をすれば当然、浸水によって速力は落ちるし戦闘行動に支障が出る。それがまだ浸水によって物だけならばいい。最悪、機関部に浸水を起こして使えなくなる。

もっと酷いと、機関部の高熱によって流入した海水が水蒸気爆発を起こす事も有り得る。如何な戦艦と言えどもそうなつてはどうしようもない。曳航して本土に連れ帰る事も出来ず、貴重な戦艦と言う戦力を無駄に消耗するだけだ。

そうなれば敵戦艦を夜戦にて撃滅すると言う事も出来なくなる。

だが、差し迫った問題としてそれ以上に深刻な問題があるのだ。

まず説明すると、深海棲艦の対空砲火は我々の比ではない程に濃密で苛烈だ。

我が艦隊をネズミだとするならば奴らはハリネズミだ。しかも発射速度が速く弾幕の形成も容易。単艦だけでも我々の数隻分に匹敵するのではないかと感じるぐらいだ。

下手な鉄砲も数撃ちや当たる、とはよく言ったものだ。

その撃ち出される砲弾や機銃弾の数は命中率を補って余りあるものだ。

しかもそれは戦艦にもなると筆舌に尽くしがたい程までになるからどうしようも無い。空母ですらそうなのだから戦艦は針山地獄の様な有様だろう。

それを何とかしないと空母に雷撃をすることは難しい。

同じことを艦長が口に出す。

「ル級の対空砲火は激しいからな。せめてそれらを沈黙させないと空母へ雷撃をするのも難しいだろう」

「それならばル級には4機ずつ急降下爆撃を仕掛ければ良い。50番(500kg爆弾)は以前までの25番(250kg爆弾)より破壊力も大きい。艦上の対空機銃を薙ぎ払う事ぐらいならば問題無く行える」

艦長の言葉に対して、参謀長がそう答えた。

確かにその通りだ。だが、4機で何とかなる物だろうか。

夜戦が発生する事を仮定するとすれば、出来るだけ金剛と霧島の負担を減らしておいてやりたい。

「こうなつては、潜水艦隊に雷撃を命じるか？空襲直後や最中ならば魚雷を命中させることも難しくは無いだろう。第1潜水艦隊に集合を命じて一気に叩けばそれなりに被害を出させる事も出来るだろう」「確かにそれは有効な手ではあるでしょう。ですが先の事を考えると、以降の活動に支障が出てしまうかと……」

「む……そう言えばそうだったか。やはり急降下爆撃隊から何機か選抜して叩くしかないか……」

「現状、それが唯一の手立てかと」

結局、急降下爆撃隊から数機ずつ戦艦に対して攻撃に向かわせると言う事で決定した。

まあ仕方が無いと言えば仕方が無いのだろう。

夜戦に置いては金剛達に負担を強いる事になってしまうが何とかして貰うしかない。

「提督、発艦準備完了しました」

「よし、分かった。艦首風上に立て」

俺の声によつて艦隊が艦首を風上に向けてを航行し始める。

今日は以前よりも風が多少強いからゴウゴウと音を立てて風が吹いている。

「艦首、風上に立てました」

「攻撃隊発艦始め」

「了解。攻撃隊発艦始め！」

その号令が掛かつたと同時に旗が振られ、戦闘の原田大佐機が飛行甲板を駆け出す。

「総員帽振れー！」

飛行甲板の待避所にいる整備員や機銃、対空砲の要員達が帽子を振り回す。

興奮したのか大声で叫んで帽子だけじゃなくもう片方の手も何も

持っていないのにブンブンと振り回している。

俺も制帽を振り、それが終わってから敬礼をする。俺の敬礼に対して搭乗員達は敬礼を返してくる。

心の中で、皆の武運長久と無事に帰ってこれるように、と祈った。

———— side 山田 ————

攻撃隊の総隊長として飛行甲板を飛び立ってから暫く。

指示された海域に進む。今日も相変わらず雲は無く、俺達は必死に命懸けで戦っていると言うのにそれを関係が無いと言わんばかりだ。腹が立つほどに何処までも青空が広がっている。

攻撃隊は4500m上空を編隊を組んで飛び進んでいく。

全機に警戒を厳となせ、と送っているからしきりにきよろきよろと周りを見ている。

そろそろ敵戦闘機の迎撃を受けても良いのではないかという頃合いだ。

そう思っただけで周囲を警戒していると、進行方向から左上方にこちらに向かってくる黒い点々。

すぐさま悟った。

あれは迎撃に出てきた敵の戦闘機だ、と。

だが思ったよりも数が少ない。双眼鏡を覗いてみたが30機居るか?と言うぐらいだ。

そこで俺は攻撃隊に随伴している烈風戦闘機隊の内、蒼龍戦闘機隊を向かわせた。

数では多少劣るかもしれないがそれを覆すだけの練度がある。正直先程の迎撃戦で分かったが数は多いが練度はそこまでではない。

そう思っただけで蒼龍戦闘機隊を向かわせたがその予想は的中。

瞬く間に落ちていく機体が出る。今の所落ちていく機体の全てが

敵の戦闘機であるF4UやF6Fの様だ。

暫くすると敵の迎撃戦闘機は半分近くを落とされてから遁走。煙を吐いていたりふらふらと覚束ない足取りで飛んでいる機体もいるから撃墜数は更に伸びるかもしれない。

そして、正面に再び黒い点々が見えてきた。

今回は先程よりも機数が多く、40機は居るだろうか？

俺は飛龍戦闘機隊と瑞鶴戦闘機隊を向かわせた。

すると瞬く間に敵戦闘機はその殆どが空戦に巻き込まれ俺達流星に手出しが出来なくなつた。

だが敵も意地があるのか烈風を振り切つて3機がこちらに突っ込んでくる。

即座に蒼龍隊に命じて4機を向かわせて迎え撃つがそれを完全に素通りし尚もこちらに向かつてくる。

すると遂に一番前を飛んでいた流星に敵戦闘機の火箭が伸びていく。

敵戦闘機に流星を落とさせまい、と編隊を直掩していた残りの烈風が銃弾を撃つが中々当たらない。

そして遂に敵戦闘機の銃弾が2機の流星を捉えた。

こちらの20mm機銃よりも細いが一機毎に撃ち出されるその数はこちらよりもずっと多い。

狙われた流星3機の内、被弾して瞬く間に2機が火を噴いて落ちていった。出来れば脱出する事を願うがあの様子じゃ無理そうだ。

あれは……蒼龍隊の奴らか。

落ちていった流星の所属を確認すると蒼龍隊の奴らだ。

すまない、ここで振り返る暇は無いんだ。あとで手を合わせるから許してくれ。

そう心の中で謝り俺は前を見る。

敵戦闘機の攻撃はまだ続く。

2機を撃墜した敵戦闘機3機は一度俺達の編隊の下に潜り込み、更

に一撃を啜えようとする。そこに漸く先程素通りされた蒼龍隊が戻って後ろから追撃を仕掛けて見事に1機、撃墜する。

だが残りの2機は下から一撃加えると編隊の上に出た。その瞬間に後部に取り付けられている13mm旋回機銃が、各機から一斉に放たれる。

先程の下方からの一撃は烈風に邪魔をされてこちらの流星を捉えられなかったようだ。

逆に13mm旋回機銃の弾幕射撃を一斉に食らって1機が火を噴いてクルクルと落ちていく。残った1機も編隊上空から離脱しようとしたところを烈風に撃墜された。

一応、敵戦闘機の脅威は去ったと見ていいだろう。

前方の敵戦闘機もあらかた落として飛龍隊と蒼龍隊が合流してくる。

あとは、敵艦隊を仕留めるだけだ。

更に進むと右前方に航跡が見えた。その奥の方には艦影が見える。双眼鏡で覗くとそこには空母3隻に戦艦が2隻、輪形陣の中心に陣取っていた。

「石田、艦隊へ敵艦隊発見の報告」

「了解」

随伴艦は20〜30程。これほどになると対空砲火はかなり強烈なものになる。提督には事前に敵戦艦の対空砲火を弱める為に急降下爆撃隊の内の何機かを向かわせるように、と言われている。

確かにその通りだろう。

直ぐに敵空母への攻撃戦力の振り分けを行う。

先ず、瑞鶴隊には先頭を進む敵空母ヲ級の1番艦を。

次に飛龍隊がヲ級2番艦。

最も攻撃戦力の少ない蒼龍隊には軽空母ヌ級を狙わせる。

敵戦艦には4機ずつ急降下爆撃隊を向かわせると言われたが……

よし、蒼龍隊と飛龍隊から2機ずつ、奥を航行している敵戦艦を。

瑞鶴隊から4機、手前を航行している敵戦艦をやらせよう。空母への急降下爆撃が少なくなるが空母へは1発でも命中させることが出来ればあとは我々雷撃隊が何とかする。

そして、その振り分けを伝えた後にトツレ連送を全機に送る。

雷撃隊は海面すれすれの低空へ。急降下爆撃隊は高度を5000まで上昇。

「石田、ト連送！」

「了解！」

ト連送を送った次の瞬間、敵艦から対空砲火が一齐に火を吹いた。周囲に黒い煙が爆音と閃光と共に広がっていく。

艦爆隊の方を見るとそちらにも対空砲弾が飛んで行つて周囲を黒い煙に囲まれている。

雷撃隊は海面を飛んで進んでいくと、その内の3機が落とされた。更に進むと対空機銃の射程に入ったのか一齐に、とんでもない数の機銃弾が音を立てて飛んでくる。瞬く間に雷撃隊の5機が落とされる。

それだけではない、煙や燃料を噴き出している機体も居る。

そろそろ魚雷投下距離だが、先んじて急降下爆撃隊が敵戦艦に爆弾を落とし始めたようだ。敵戦艦2隻には4機づつが投下した50番が手前のに3発、奥のには2発見事に命中した。

その瞬間、敵戦艦の撃ち上げる対空機銃は大きく減衰して穴が出来る。

「全機！急降下爆撃隊の作った隙を無駄にするな！」

スロットルを最大まで押し込んで速力を上げる。

ぐんぐんと近づいてくる敵戦艦を尻目に敵空母目掛けて一齐に突っ込む。

「距離3000！」

「まだまだ！まだ突っ込む！」

「ああクソ！後続の2機が落とされました！」

「振り向くな！目の前の敵空母に集中しろ！」

大声で叫ぶ俺と石田。

敵空母目掛けて先に急降下爆撃隊が一斉に逆落としになって突っ込んでいく。

「急降下爆撃隊、一番機投下しました！」

「頼む！一発で良いから命中させろ！」

俺が大声でそう叫ぶと、その願いが通じたのか、はたまた急降下爆撃隊の技量が高かったのか、我が飛龍隊の狙う敵空母の飛行甲板に3回、爆発が起きた。

「急降下爆撃隊、3発命中！」

「良くやった！あとは俺達がばっちり決めるだけだ！」

「距離1200！」

「あと少し！あと少しだけ進む！」

「900を切りました！」

「魚雷投下アア!!」

大声で叫びながら魚雷を投下する。

軽くなつた反動でふわりと機体が浮くが直ぐに持ち直す。

だが中には持ち直せずに浮き上がった瞬間を狙い撃ちにされて火を噴いて海面に突っ込んでいく機もいた。

「何機投下出来た!?!」

「我が飛龍隊は7機です！」

「それだけ投下出来れば2発は当たる！」

そう喜んだ瞬間だった。

「クソ！4番機被弾炎上！そのまま敵空母に突っ込んでいきます！」

「馬鹿野郎！」

4番機が機銃弾を受けて炎上、そのまま海面に突っ込むぐらいならば、と敵空母に機体と共に突っ込んだ。

「石田！戦果確認！あいつらの犠牲を無駄にするな！」

「了解！」

空母の上を通り過ぎてそのまま敵艦隊の輪形陣を抜ける為に飛んで行く。

すると、石田が大声で叫んだ。

「1本命中！続けて2本！」

「クソ、3本か!?これじゃあ仕留めきれないぞ！」

「……いや、更にもう1本命中！方舷4本です！撃沈確実です！」

7機が魚雷を投下して、4本命中。

戦果としては上々、空母なら爆弾3発と合わさって撃沈確実だろう。だが飛龍隊10機の内、今のところ飛んでいるのは5機だがその内の1機は燃料とエンジンから黒煙を吐いている。そう長くは飛べないだろう。そうすると無事なのは4機だけか。

その後、蒼龍隊、瑞鶴隊と集合してそれぞれ戦果を確認した。どうやら軽空母を狙った蒼龍隊は魚雷3本に爆弾3発と撃沈確実。

だが瑞鶴隊の方は敵の護衛駆逐艦や巡洋艦の対空砲火が激しくそもそも魚雷を投下出来たのが4機、爆弾を投下出来たのは7機と多かったが、魚雷の命中は2本と爆弾は4発。だがこれじゃ戦闘能力を奪う事は出来ただろうが撃沈には至らないだろう。

運良く敵の機関部などの重要区画に損害を与えることが出来ている事を願うばかりだ。

そしてその後、戦闘機隊と共に空母に向けて針路を取った。

———— side out ————

攻撃隊から戦果報告が入った。

『我攻撃隊総隊長機。敵艦隊ヲ攻撃。戦果ハ以下ノ通り。ヲ級1撃沈確実、又級1撃沈確実。ヲ級1撃破。ル級2ニ爆弾ヲソレゾレ3発、2発ノ命中ヲ確認。以上』

空母はヲ級と又級を1隻ずつ撃沈確実か。

もう1隻を仕留められなかったのは残念だが対空砲火の事を考えれば上々。

「本当ならもう一度攻撃隊を出したい所なんだけど……時間的にも兵力的にも多分無理かな」

「それは同意見だ。提督、その後の報告では帰投出来るのは21機のみ。これでは再攻撃は無理でしょう。それに攻撃隊が帰投するのは辺りが薄暗くなる頃でしょう。艦隊が敵艦隊方向に向けて進んできますから多少は早くなるでしょう。ですが攻撃隊を再び放つとなると完全に夜間になってしまいます」

「そもそも帰投出来るのが21機とは……あまりにも少なすぎる」

向かった攻撃隊の2/3が撃墜されるとは思っていなかった。

戦闘機からの迎撃はそれほどでは無く落とされたのも2、3機との事だがそうすると対空砲火でその殆どが撃墜されたことになる。これは数を揃えて飽和攻撃をするのが効果的なんだろうがそんな余裕は無いからな……あまりにも強烈すぎる。

「参謀長、敵戦艦は無事と言う事だな？」

「その通りです。恐らく我が艦隊とパレンバン間に滑り込んで夜戦を仕掛けてくるでしょう」

「そうすると、金剛達の出番か」

「はい。ですが、もうここまで来ては形振り構ってられません。潜水艦隊に直接雷撃を命じましょう。空母は確実に仕留めておかなければ」

「確かにその通りだが。別に今更空母はどうでもいい。狙うべきは戦艦だ。航空機を飛ばせない空母など態々狙う必要も無い。ならば今現在最も脅威がある戦艦2隻を確実に仕留めねばならん。輸送船団を狙われたら一溜まりも無い」

「ですが空母を放置しておけば修理されて再び脅威になります」

ここで艦橋内の意見が分かれた。

空母に止めを刺すと言う意見と、損害の少ない敵戦艦を仕留めるべきだと言う意見。

俺と艦長は戦艦を仕留めるべきだ、と主張していて、参謀長と飛龍は空母に止めを刺してから戦艦を狙うべきだと主張。

「敵空母が現海域を最短で離脱するにはマラッカ海峡を通過しなければ」

ばならない。修理をするにはトラックかニューカレドニアに向かわなければならぬ。コロンボでも出来なくはないが本格的な修理ともなるとニューカレドニアだ。そうすると損傷していること、途中で補給を受けなければならぬ事を考えればニューカレドニアに到着するまで丸々1か月は掛かるだろう。そんな空母に二の矢は必要無い。それに、速度も遅いから戦艦を仕留めた後でも十分機会はある」
「分かりました。提督がそう仰るのなら潜水艦隊には敵戦艦2隻を雷撃するように命じましょう。幸いにも既に夜間ですから昼間よりはずつとやりやすい筈です」

「そうだな。通信長、潜水艦隊各艦に連絡を頼む。それと敵艦隊の詳細な位置を知らせるように言っておいてくれ」

「は、了解しました」

俺の指示によって通信長は艦橋から通信室に向かう。

さて、少なくとも敵艦隊を追跡している伊403の報告を待たなければならぬ。

2時間後、伊403から報告が入った。

『我伊403。敵艦隊ノ詳細ナ位置ヲ報告ス。敵戦艦2、重巡3ヲ基幹トスル敵艦隊ハバンカ島スンガイリアトから西北西50海里ノ位置ヲ遊弋中。1930』

その15分後に続けて報告の電文を送ったのはジャワ海を偵察中の伊8からだった。

『我伊8。ブリトウン島ヨリ南東37海里ヲ随伴艦24隻ヲ伴イ敵空母航行中。1945』

「敵空母は連れていた随伴艦を丸々連れて逃げていた所と言う事か」
「恐らくはその通りかと。ですがこれは嬉しい誤算ですね。まさか随伴艦をそれだけの数を引き抜いてくれるとは」

「戦艦ル級の艦隊は随伴艦が12隻だけと少ないですから第1戦隊の駆逐艦5隻でも十分に対処可能です」

「よし、第1潜水艦隊全艦に敵戦艦へ雷撃を命じろ。機会があればで構わん」

「了解しました」

「それと金剛に移乗する。内火挺を用意してくれ」

「了解です。ですが砲雷撃戦の指揮を直接お取りになるとなると相応に危険です。どうか十分にお気を付け下さい」

「ああ、分かっているさ。第1機動艦隊は第1戦隊と分離後、第1護衛艦隊と合流するように。あとは何とかして敵との戦力差を埋めなければならんが……第1戦隊の鈴谷と第1機動艦隊の摩耶、那智と交代させろ。これで重巡洋艦は同数だ」

「参謀長、駆逐艦は何隻引き抜かれても問題無い？」

「は、3隻程度ならば問題ありません。それと駆逐艦だけと言わずに軽巡も1隻お連れ下さい」

「分かった。それならば軽巡矢矧と駆逐艦涼月、初月、若月も第1戦隊に組み込む」

潜水艦隊へ雷撃の指示と、第1戦隊へ戦力を割いて敵艦隊との戦力差を埋める為に指示を飛ばす。

第1戦隊

戦艦2隻

金剛

霧島

重巡洋艦3隻

古鷹 摩耶 那智

軽巡洋艦2隻

神通 矢矧

駆逐艦8隻

陽炎、雪風、浦風、萩風、村雨、涼月、初月、若月

俺の指示により第1戦隊は以上のようになった。

新たに編入した軽巡矢矧と駆逐艦涼月、初月、若月の4隻は纏めて

1つの水雷戦隊として動いてもらう。

矢矧以下を第1水雷戦隊とし、神通以下を第2水雷戦隊とする。まあどっちがどっちでも良かったんだが神通とその艦長達からどうしても第2水雷戦隊が良いと言うので今回ばかりは特別だ。

恐らく2水戦が切り込みを担当するんだろうが、まあなんといいか、神通達の喜び方が異常だったからな。大丈夫だろうか？

少しばかり心配だが大丈夫だろう。

そして飛龍から内火挺に乗り、金剛へ移乗した。

「へーイテイトクー！お久しぶりデスネー！金剛へようこそ！歓迎シマス！」

金剛は俺が内火挺をクレーンで引き揚げ、それから降りると場所と状況からか流石に何時もの様に飛び付いてきたりはしないが挨拶の意味を込めてハグをしてくる。

慣れた事とは言え、好意を無碍にする訳にもいかないから軽く抱き締め返し離れる。

「ありがとう、金剛。皆も出迎えご苦労。持ち場に戻り即座に合戦準備」

「了解！聞いたな！戦艦の本来の仕事の時間だ！」

艦長がそう叫ぶと駆け足で持ち場に戻っていく。

その様はとても良く訓練され、洗練されていると言っていいだろう。

「テイトク、艦橋に案内シマス。付いて来てクダサイ」

「ああ、案内を頼む」

艦橋に上った頃には既に戦闘準備が整い後は戦うだけとなった。

「全艦に速力を25ノットへ上げるように打電」

俺がそう指示を出すと第1戦隊全艦にその命令が打電される。

すると金剛を含めて艦首が切る波の飛沫の大きさが増した。
続いて針路を命令する。

「艦長、針路をバンカ島近海の敵艦隊へ」

「了解、針路バンカ島近海の敵艦隊へ向けます」

第1戦隊の隊列順は以下の通り。

涼月
初月
若月
矢矧
金剛
霧島
古鷹
摩耶
那智
神通
陽炎
雪風
浦風
萩風
村雨

念の為に前路警戒に1水戦を置き、それに金剛と霧島が続きその後ろに重巡洋艦3隻が並ぶ。更に後ろには2水戦が続いている。

「提督、対水上電探に感あり。左舷に大型艦5、及び他多数。敵艦隊です」

「主砲左舷方向に向け」

「了解。主砲左舷方向に向けます」

そう命じると、大きな駆動音を立てて主砲塔が旋回する。

敵艦隊とは同航戦。

既に敵艦隊は射撃を開始していてあちらこちらに水柱が乱立している。

我々は射程、威力ともに負けているのだから出来るだけ近づかなければならない。

幾ら砲弾が降り注ぐとも今は我慢するのだ。

暫くすると電探員が声を上げた。

「敵艦隊との距離20km」

予め、この距離になったら報告するように、と電探員に伝えておいた距離だ。

よし、この距離ならば十分に命中弾を期待出来る。

そう思った俺は命令を出した。

「各艦、主砲射撃開始」

「了解、各艦主砲射撃を開始します」

すると艦長は伝声管に向かって言った。

「主砲、撃ちー方ー始め」

その号令により、後に第2次バンカ島沖海戦と呼ばれることになる海戦の火蓋が切って落とされた。

第11話

萩風	浦風	雪風	陽炎	神通	那智	摩耶	古鷹	霧島	金剛	矢矧	若月	初月	涼月
八級	二級	二級	へ級	へ級	リ級	リ級	リ級	ル級	ル級	へ級	へ級	イ級	イ級
								イ級	イ級				

村雨

八級

敵艦隊はどうかやられル級を雷撃から守るために俺達より2隻多い駆逐艦を我が艦隊とは反対側の2000〜2500mほど離れた側面に配置しているようだ。

確かにその効果は大きく、第1潜水艦隊や第2潜水艦隊の各潜水艦はル級を狙っているようだが駆逐艦が邪魔で上手く狙う事が出来ないようだ。

まあ魚雷を撃つことが出来たとしても既に彼我の艦隊の速力は27ノットに到達していて命中させることは困難だろう。

金剛と霧島はそれぞれ1隻ずつ敵戦艦を相手取り、重巡も同様だ。

金剛と霧島が主砲を撃ち始めて20分が経った。

だが未だに命中弾を与えられず試射の段階だ。だが敵戦艦の射撃精度は高く始まった時はかなりの外れな所に着弾し爆弾や魚雷とは比較にならない巨大な水柱を立てていただけだったが……

「敵弾、来ます！」

見張り員の報告によつて敵戦艦の砲弾が降り注いでくる事を知る。もう何度目になるか分からない報告だが、その度に艦の周囲には巨大な水柱を乱立させている。

ズドン!!

重い着弾と爆発音と共に艦首前方50m程に着弾、爆発する。

金剛はそのまま水柱の中に突っ込む。基本的に同じ場所への着弾は有り得ない。だからこそ水柱に突っ込んだ方が安全なのだ。

「徐々に精度が上がって来ているな……不味いぞ、このままだと撃ち負ける」

「テイトク、心配ご無用デース。私達はこれぐらいじゃ終わりません！」

と、金剛は言っているが実際はかなり厳しいだろう。

恐らく向こうは射撃専用のレーダーを装備していると思われる。イージス艦などに搭載されている物とは精度は比べ物にならないとは言っても射撃レーダーは射撃レーダーだからな。事実、何度も言っているが射撃精度はどんどん高くなって行っている。

未だに敵弾の命中は無いが直撃するのは時間の問題だろう。

しかし金剛と霧島もとんでもない連中の集まりだ。

レーダー射撃をしていないのにも関わらず狭叉とは行かないまでもかなり近い位置に砲弾を落としている。これを人力の計算などで行っていると言うのだから恐ろしい物だ。

対水上電探を射撃レーダー替わりに使えない事も無いがそうすると全艦の情報を集めて統合し、そこから導き出さなければならぬ。

だがお世辞にも我々が使用している電探は対空、対水上に限らず深海棲艦の使用している物よりも精度は数段低い。それを元々の用途とは違う方法で使用すると言うのだから更に精度は落ちるだろう。期待は出来ない。

「砲術長!!命中はまだ得られんのか!？」

「申し訳ありません!ですが未だ命中弾は得られません!」

痺れを切らした艦長が砲術長に向かって怒鳴るが意味は無い。

すると漸く朗報が飛び込んできた。

「!!霧島が敵戦艦に命中弾を叩き出しました!!」

「よーし!良くやったぞ霧島!」

霧島の放った砲弾が敵戦艦の艦首付近を捉えたようだ。

すると霧島は試射から斉射へ切り替える。35.6cmの砲弾が装填されると同時に発砲炎と共に敵戦艦に降り注ぐ。だが敵戦艦も

黙ってはいない。

「霧島被弾！後楼塔の根本付近に直撃したようです！」

「クソッ！損害は!？」

「主砲の射撃に支障は無し！ですが副砲4門が吹き飛ばされて使い物にならないと！死傷者も相当数出ています！」

霧島が5発目の命中弾を与えた次の瞬間、霧島の後楼塔に直撃弾を食らった。根本付近に食らったらしく、大きな爆発と共に吹き飛んだ後楼塔は爆発が収まると既にそこには無かった。

40cm砲弾の破壊力はこちらよりずっと大きい。

こちらが数発の命中で漸く、しかも命中箇所によっては装甲で弾き返されるのに向こうはどこに命中しても装甲を貫通して最悪だったの1発で致命傷になりえる。

「我々はどうなっている？」

「中々命中弾を得られません。一式徹甲弾だから水中に落ちても幾らかは進んで命中を期待できるケド……」

「駄目か」

「提督、敵戦艦の主砲が3基中2基しか稼働していません。どうやら昼間の急降下爆撃によって何らかの不具合が発生し使用が出来ない状態にあるものと思われまます」

「ふむ。だがそれが現状を打開する程には至るまい。何とかして先に命中弾を与えなければ」

「重々承知しております」

そう、艦長や金剛と話す状況は膠着したままだ。

そしてその数分後、漸く事態が進み始めた。だがこちらには宜しくない方向でだ。

ズガン!!

大きな音を立てて艦中央付近に大きな爆発が起こる。

「艦中央に被弾！損害不明！」

「ダメージコントロール急げ！副砲群や機関部への被害は!？」

「分かりません！」

「左舷第3副砲塔沈黙！連絡途絶！」

「副砲の弾薬に引火する前に注水しろ！急げ！誘爆したらシャレにならないぞー！」

被弾してすぐに艦長が矢継ぎ早に指示を飛ばす。

それに従い各所でダメージコントロールが行われる。結果的に副砲の弾薬庫に対する注水は正解だった。

実際にその時、副砲の弾薬庫付近で火災が発生していて弾薬庫まで寸での所まで迫っていた。もし注水が行われなかったならば砲弾に誘爆し取り返しのつかない事になっていただろう

「テイトク！怪我は!?」

「ああ、大丈夫だ。これぐらいじゃ何とも無い」

金剛が心配して声を掛けてくるが俺はどこにも異常は無い。
それよりもだ。

「金剛、敵戦艦への命中弾は？」

「スミマセーン……まだ命中弾は……」

「そうか……」

命中弾は未だに得られず、敵は命中した砲弾を頼りに斉射を始めている。

金剛の周囲には巨大な水柱がこれでもかというぐらいに乱立しては海水を金剛に降らせてくる。

「砲術員！どうなっている!?何故命中弾が出ない!!」

艦長が大声で怒鳴るがそれに返答する者は誰もいない。

霧島の方は既に敵戦艦へ多数の命中弾を出しているが同時に敵弾も食らっている。

第2砲塔の砲身1本に上手く当たってしまったのかひしゃげて射撃なんて出来る状態じゃない。まあもう1本の砲身は無事で弾薬庫への誘爆の危険も無いから射撃を続行中だ。

重巡の方も同様だ。報告によれば那智が第3砲塔に被弾し誘爆を防ぐ為に注水して使い物にならなくなった。

古鷹はカタパルトに直撃して炎上中。

その灯りを頼りに敵は砲撃を撃ち込んできているから古鷹が大きな被害を被るのも時間の問題となる。

摩耶はこれと言った被害は無く、砲撃を続行している。摩耶が狙っているり級はかなりの痛手を被っているらしく、遠目からでも分かるぐらいに大きく燃え盛っている。

かなり厳しい状況であると言わざるを得ない。

すると漸く金剛の主砲弾が敵戦艦を捉えた。

「我が金剛の砲弾、敵戦艦に命中！これより斉射に移ります！」

砲術長が上ずった声で叫びながら報告してくる。

斉射に移った金剛は、今までの鬱憤を晴らすかの如く砲弾を叩き込む。

だが嬉しい報告ばかりではない。

「霧島の第4砲塔に敵弾が直撃したとの事！即座に注水し誘爆の恐れは無しとの事！」

霧島からの報告に続いて金剛にも大きな衝撃が連続して襲う。

「艦首付近に直撃弾1と至近弾1！」

「爆圧で浸水が起こっています！」

「応急修理員を向かわせろ！何が何でも浸水を食い止めるんだ!!」

続々と届けられる被害報告。

だがこつちも負けてはいない。なんだかんだで既に4回斉射を実施している。その内の9発が命中し炎上させている。

幸いな事に主砲は全て射撃可能だ、まだまだ負けては居ない。

だが霧島の損害が大きい。

報告によれば既に主砲の内、1基が使い物にならなくなっていて更に先程の主砲1本がひしゃげている被害もある。射撃可能なのは5門だけだ。

後楼塔は完全に吹き飛んで根元から無くなっているしそれ以外にも多数の被害が報告されている。浸水も各所で発生しているらしく中破の損害を被っている。金剛はまだ大丈夫だがこれ以上霧島に損害が出てしまうと不味い。

だが、ここで最大の朗報が飛び込んできた。

「摩耶が敵重巡2番艦を撃沈しました！」

その瞬間、艦橋内が大きく沸いた。

漸く艦隊にとつて良い方向に進み始めた。

続いて更に報告が入る。

「古鷹が敵重巡1番艦の主砲を2基使用不能に追い込みました！」

「矢矧が敵軽巡1を仕留めました！」

漸く敵艦を2隻仕留めることが出来た。これで漸く艦数の差は0になった。

既に敵艦隊との距離は当初20kmだったのが15kmにまで接近していた。それに良い報告ばかりではない。

「那智の艦尾付近に直撃弾3！機関部に浸水を起こし速度低下！」

「初月、被弾により3番砲塔が吹き飛びました！」

金剛と霧島はもう何度目か分からない斉射を行い、命中弾を出すと同時に敵戦艦からの砲撃の直撃を食らっている。

霧島は機関部は無事だが攻撃面において主砲塔の根本付近に直撃弾を食らい注水、使用出来るのは前部第2砲塔と後部の第4砲塔だけとなった。

金剛も副砲は全て吹き飛ばされて使用不能、カタパルト付近にも直撃弾が数発、火災が発生して収まっていない。主砲が全て使えるだけまだマシな方なのだろうか。

「……艦長、2水戦に突撃命令。接近して敵戦艦に肉薄して雷撃を敢行させる。駆逐艦や軽巡には構うな。敵戦艦さえ仕留められればこちらの勝利だ」

「了解しました」

流石にこれ以上同航戦でただ砲撃戦を、となると厳しい。

確実に今すぐ戦果が出せるのは水雷戦隊の近距離からの雷撃だ。

炸薬量もさることながら、どんな船も喫水線下は弱点だ。いくら装甲が厚いと言っても魚雷程の炸薬量で吹き飛ばされてしまうと容易にその自慢の装甲に穴を開けられてしまう。それは輸送船の様なものから戦艦大和だろうが何だろうが同じだ。

それだけに、我が海軍の駆逐艦や軽巡洋艦、重巡洋艦に搭載されて

いる酸素魚雷は本当の意味での一撃必殺となりえる。当たり所によつては1本だけでも轟沈させられる。

その命令を受けて2水戦は速度を32ノットまで一気に増速すると敵艦隊に向けて突っ込んでいった。文字通り突撃と言い表せるだろう。

艦橋の中の人間だけでなく艦隊全員が、このまま敵戦艦のどてっ腹に酸素魚雷を叩き込んでくれる、そう思った。そう思い描いた。

だがそう上手くはいかなかった。

2水戦の突撃を察知した敵駆逐艦と軽巡が阻止する為に出てきたのだ。

そりや当然だろう、主力である戦艦に魚雷を叩き込まれたら堪らないからどうやっても阻止するために動く。

その時までには2水戦だから、神通が率いているのだから問題無く突破出来るだろうと思っていた。だが敵も死に物狂いで阻止をしようと動いてくる。

お陰で敵の出てきた6隻と2水戦の交戦距離は5000mを切り超至近距離での砲撃戦となった。

「提督、2水戦は敵駆逐艦に阻まれて敵戦艦に魚雷を撃ち出せません」「クソ……こうなったら戦艦は戦艦同士で決着を付けなければならぬ」と言う事か」

「どうやらその様です。どういたしますか?」

「……敵戦艦で被害の大きい方はどっちだ?」

「は、霧島が担当している2番艦ですが、それがどうかしたのでしょうか?」

「敵戦艦1隻に攻撃を集中して叩く。射撃諸元は変わるが霧島から諸元を送って貰いそれを元に再計算をすれば時間は短縮出来るだろう」

「了解しました。霧島に射撃諸元を送る様に打電します」

「頼む。流石に霧島はあれ以上持ちそうに無い。戦力の喪失は出来るだけ避けなければならぬ」

それからすぐに霧島から射撃諸元が届いた。全部主砲は後ろを向いてしまうような状態だがなりふり構ってられない。

直ぐにその送られてきた射撃諸元を元に敵戦艦2番艦へ狙いを付ける。

「計算完了しました。射撃開始します」

砲術長がそう言った次の瞬間、金剛の主砲が全門一斉に火を噴いた。

その計算が正しかったのか初弾で命中弾3を数えた。

だが敵も黙っていない。

金剛と撃ち合っていた戦艦がここぞとばかりに撃ってくる。

飛んできた砲弾の1つが喫水線ギリギリの所を思いつ切り撃ち抜いて大きく浸水を始めた。

しっかりと水密扉を閉めていたと言ってもそれすらを吹き飛ばして広範囲に海水が流れ込む。無事だった水密扉も流れ込んだ海水の水圧によってひしゃげたりして浸水が広がる。

「ダメージコントロールはどうなっている!?このままだと艦が傾いて精密射撃が出来なくなるぞ!」

「それが、命中した敵弾のせいであちこちで火災や艦内で寸断が起きて最短距離で進めなくなりました!今現在向かっています時間が掛かります!」

攻撃力は保っているとは言っても、もう既に金剛はボロボロだ。

後楼塔のマストは中ほどから圧し折れてあちこちに張り巡らされたワイヤーに絡まりギリギリぶら下がっている状況だ。

艦首付近の甲板には敵弾の炸裂によって空いた大穴が出来ている。まあそこに限らずあちこちに大穴は出来ているんだが。

応急修理要員があちこちを駆け周り、必死に被害を食い止めようとしているが手が回りきらない。

だがそんな状況でも戦闘は進む。

金剛が更に斉射を行う。

2回、3回と打ち込んでいきその度に命中弾を出す。霧島も撃てる砲は全て撃ち、生き残っている対空用の12.7cm砲まで撃っている。

る。

するとすぐに集中して狙った効果が出たのか、元々かなりのダメージを負っていて追い打ちを掛けたからか、敵戦艦の速度が急速に落ち始めた。

恐らく機関部か煙突に直撃弾を得られたのだろう。

どんどん置いて行かれるその敵戦艦は捨て置き、未だに速力を保っている敵戦艦1番艦に狙いを変更。

「艦長！浸水が食い止められません！」

「手の空いている人員を全て回せ！何が何でも食い止めろ！」

「被弾！第3主砲大破！」

「注水を始めろ！誘爆させるな!!」

艦橋内も、それ以外も怒号が響き渡る。

金剛は遂に第3主砲に敵弾の直撃を食らって大爆発を起こした。幸いにも弾薬庫や揚弾筒まで火は回っていないかったのか第3主砲が天蓋（砲の上面を覆っている装甲の事）を吹き飛ばしただけに留まった。砲身はだらんと海面に向かって垂れ下がる。

敵戦艦も唯では済んでいない。

撃てる主砲はもう1つだけになり速力も明らかに低下し始めている。火災も激しいのか真っ暗闇の中にくつきりとその陰を映し出している。まあそれはこちらも同じだが。

そして、漸く敵戦艦を仕留める決定的な一撃を加えられた。

霧島の放った砲弾の1発が命中した瞬間に敵戦艦が大爆発を起こ

したので。それは一度だけではなく複数回連続して起こる。
どんだんゆ行き足は止まり、遂には停止した。
遠目から見ても分かるぐらい艦体は大きく傾いている。
戦艦同士の決着は着いた。

だが未だに2水戦と重巡の戦いは続いている。

だが金剛と霧島が突っ込んでいくわけにはいかない。魚雷を撃たれるリスクがあるからだ。精々できる事と言えば重巡の支援をするぐらいだ。

「1水戦に2水戦の支援を命じろ。あのままでは戦艦の側面支援についていた駆逐艦が合流すれば拮抗状態が崩される」

「了解しました。我が艦と霧島は敵重巡洋艦に照準を向けて宜しいでしょうか?」

「ああ、頼む。だが損害の大きい霧島には無理をさせないように。金剛も無理はするな」

そう命令したが、既に敵艦隊は戦艦2隻を沈められて戦意を喪失していたのか十数分程抵抗しただけで撤退をしようと針路を変えてジャワ海方面に向かって遁走を始めていた。

「敵艦隊、撤退を始めました」

「ならば追撃戦に移行する。打電しろ。全艦、最後まで気を抜くなど言う文もだ。ここで反撃を食らったらシヤレにならん」

「了解しました」

そう命令をして艦隊は追撃戦に移行し、損傷している艦を庇いながら逃げる敵艦を後ろや2水戦がここぞとばかりに暴れまわっていた。

戦果としては戦艦2隻、重巡3、軽巡4、駆逐3を撃沈。

敵艦隊の生き残りは5隻で全て駆逐艦という事で再び敵艦隊が攻撃を仕掛けてくる事は無いだろうと判断されて追撃を打ち切り。敵残存艦隊はジャワ海方面に向けて撤退した。

朝を迎えると、艦隊の被害の全容が判明した。
詳細は長くなってしまっているので小、中、大破で表す。

大破	金剛	霧島	那智
中破	古鷹	矢矧	神通
小破	涼月	初月	若月
		雪風	萩風

12隻が大小関わらず被害を被っていた。

特に酷いのは大破した金剛、霧島、那智の3隻だった。

先ず金剛は主砲は3基が無事だが、1基が吹き飛んで跡形も無くあちこちから浸水を起こして浮いているのが不思議なくらいだ。機関4つの内2つに浸水を起こして出しえる速力はたったの19ノットにまで大きく減衰している。

霧島は主砲4基全てが使用不能、機関の損傷は比較的軽微で速力も23ノットを出せる。

だが艦上構造物の被害が酷く、後楼塔は完全に崩れ機銃や対空砲は軒並み吹き飛び、副砲も左舷側は全て破壊されている。

那智は喫水線上の艦首付近を吹き飛ばされてそこからの浸水により艦が前のめりに傾いている。主砲も使い物にならなく、煙突が吹き飛ばされて速力の低下。他にも金剛同様あちこちに浸水が確認されている。

更に浸水によって機関部に大規模な浸水を起こして速度がたったの7ノットにまで低下している。

金剛、霧島はどうか自力航行が可能だったが那智が問題だった。艦首付近からの浸水により艦尾がかなり浮いてしまっている為に操舵が困難になっていたのだ。

しかもそれだけではない。速力も大きく低下し、7ノットに低下していたところ、突然水密扉が破損し完全に機関全てが浸水、自力航行が出来なくなった。

なので必然的に曳航をするしかなくなったのだがそこで白羽の矢が立ったのが航空魚雷を1本食らっている鈴谷だった。

既に注水によって傾斜は復元されて速力も2ノットほど低下しただけで曳航するには特段問題は無かった。鈴谷には那智を曳航するように命令を出し、第1戦隊は第1機動艦隊に先んじて日本に向けて燃料補給後、針路を取った。

俺は飛龍に移乗し再び艦隊の指揮を取り始めた。

「提督、お疲れさまでした」

「何、まだまだ気を休める訳にはいかない。日本に帰ってから漸くだ」
「それでも夜の間ずっと起きてたんだから少しは仮眠を取った方が良いよ」

飛龍にそう言われて、最初は断ったが押し切られ無理矢理飛龍艦内の自室に押し込まれ寝るまで飛龍の見張り付きという状況になり説得を試みたが、頑として譲らず結局俺が根負けするに至った。

そして仮眠から目覚めると、既に丸々1日が過ぎていて輸送艦隊は石油の積み込み状況はかなり進捗していた。

「すまないー寝すぎた！」

慌てて制服に着替え制帽を被って艦橋に上ると、そこには全員が勢揃いしていた。

「提督？もう起きていいの？」

「ああ、だが寝すぎてしまった。適当なところで起こしてくれれば良かったのだがな」

「いや、初めて戦闘を経験して、航空戦から砲雷撃戦まで直接指揮を執ったんだから疲れてて当然。寧ろもっと寝てて良かったんだよ？」

「いや、そんなわけには行かないさ」

「提督、お食事はどうされますか？」

「頼む。流石に腹が減った」

もう既に昼頃になっていて色々と慌ただしく動いていたから2日間食事を摂っていなかった事になる。

寝起きとは言っても流石に腹が減る。

そして給糧員が持って来たのは何時もと変わらず、握り飯と沢庵に味噌汁だった。

握り飯は何時もは3つなのだが今回は6つも付いていた。空腹の俺には最高に旨かった。

「提督、タンカー及び輸送船への石油、ボーキサイトの積み込み完了しました」

「よし、別動隊はどうなっている？」

「第1護衛艦隊以下は順調に積み込みを終えて既に我が第1機動艦隊と合流する為に出航、我が艦隊に向けて針路を取っております」

「異常は無いか？」

「はい、今現在問題無く進捗しています」

「合流は何時頃になる？」

「明後日には合流出来るそうです」

「ならば今現在我が艦隊のいるバンカ島沖にて合流せよ、と電文を打て」

「はっ、了解しました」

今現在、第1機動艦隊はバンカ島から10海里の位置を遊弋し、積み込みの終わったタンカー25隻とボーキサイトを積み込む為に残った輸送船2隻の合流を待っている状況にある。

第1護衛艦隊は輸送船14隻を率いて鋼材の材料となる鉄鉱石を積み込むために分離していた。だが今は既に積み込みを終わらせて我が艦隊と合流する為に針路を取っている。

索敵機を飛ばしているが敵艦隊発見の報告は無く、潜水艦隊からの報告も無い。

そう言えば敵艦隊に対して潜水艦隊に雷撃を命じたが機会が無く、雷撃をする事は出来なかった。

それから2日後、第1護衛艦隊以下と合流し日本へ向けて針路を取った。

第12話

日本へ戻って来てからの話だ。

まず輸送船団は全て無事。しっかりと最後まで送り届けることが出来た。

損傷艦については飛龍は10日もあれば修理を完了出来る。

だが鈴谷や金剛達が問題だった。

鈴谷は1か月近くの修理期間を必要とし、それ以外の小破艦も艦種と損傷具合によるが大体10日から一か月程度。

中破艦に関しては艦種、損傷具合によつて凡そ1か月〜2か月とかなり幅がある。

だが金剛と霧島、那智は大破、それもかなり手酷くやられてしまい、どれだけ急いでも完全に修理を終えて水密検査などの各種検査を終わらせるのに半年以上、失った乗組員の補充から訓練などが3か月程度。合わせると軽く9か月以上も掛かる。正直稼働出来る戦艦3隻の内の2隻を9か月以上も戦列から離れさせるのはかなりの痛手だ。予定していた次回の大規模輸送作戦にも艦隊の再編成などに時間をとられ、時期がズレたりするなどの影響を与える程。

まあ艦を無事に連れて帰つて来ただけまだ良いか。

ドック自体は修理が進み、既に呉のみだが6つのドックを使用可能にするまでになっている。2週間後に更に2つのドックが修理を完了する予定だ。なので一度に修理出来る艦艇の数は増えるだろう。

今現在、ドック入りしているのは金剛、霧島、那智、鈴谷、涼月、初月、若月、雪風の8隻だ。

金剛と霧島、那智、鈴谷は大型艦なのでドックを丸々1つ占領することになるが、駆逐艦6隻は船体が小さいので2隻ずつ入渠が出来る。

出来るだけ損傷の小さい艦同士でドックに入渠させている。

涼月、雪風、萩風の3隻は13日ほどで修理を完了する予定だ。残りの損傷艦はドック近辺に偽装を施して投錨させている。ドックが空き次第、神通、矢矧、古鷹の順番で入渠させる予定だ。

輸送してきた鉄鉱石は大急ぎで精錬され、損傷艦の修理に回される。

戦艦の装甲なんかは特殊装甲なので様々な金属が混じっている合金と言うやつだから作るのに時間が掛かるが、元々排水処理など時間が掛かるのでそこまで問題は無い。

そして問題は他にもある。

母艦航空隊の補充だ。戦闘機隊の損害は大したことは無く、撃墜された機の搭乗員も脱出したりして殆どが無事だった。

だが流星隊は違っていた。確かに脱出した者も居るにはいたが殆どの者が機体と運命を共にした。

補充自体は直ぐに行われる。事実日本に帰って来た3日後に流星隊の補充要員+拡充の為の人員が送られてきた。だがそれら全てを実戦で通用出来るようにして更に空母で運用するうえで必要な発着艦訓練も行わなければならない。それらを行うのに最低限の期間でも2か月。完全にするためには3か月必要だ。

無事、損傷を負わずに帰って来た艦艇の点検なども行いそれら諸々の必要書類などをしたためたりと、かなり忙しく動いていた。

そして予定されていた次の大規模輸送作戦だが、実施された。

実施されたのは日本へ帰国してから20日後。

第1機動艦隊と第1護衛艦隊のみで護衛を担当することになったがそこから両艦隊の損傷艦と第1戦隊が丸々抜けるので戦闘艦艇の実際の規模はかなり小さくなる。

修理が完了した艦は補充要員を載せて訓練もままならないが組み込むことにした。と言っても長門と駆逐艦4隻だけだが。

第1機動艦隊

航空母艦3隻

第1航空戦隊

飛龍（旗艦） 搭載機 烈風37機、流星8機 彩雲9機。計54機。

蒼龍 搭載機 烈風36機、彩雲9機。計45機。

瑞鶴 搭載機 烈風 24機 流星21機 彩雲12機 計47機。

艦載機数 計146機

戦艦1隻

長門

重巡洋艦2隻

摩耶

鈴谷

軽巡洋艦2隻

能代

天龍

駆逐艦11隻

秋月、照月、宵月、満月、花月、涼月、初月、若月、霜月、春月、雪風

鈴谷に関してだが、本来1か月掛かるはずだったが金剛、霧島に振り分けられていた工員妖精を鈴谷の修理に無理矢理振り分けて修理期間を短縮、ギリギリ大規模輸送作戦に間に合わせた。

流石に重巡洋艦1隻だけだと不安が残るから、かなりギリギリになったがなんとか間に合った。昼夜問わずの突貫作業だ。工員はその後、交替で1日の休暇を挟み金剛、霧島それぞれの修理作業に取り掛かった。

こちらにも出来るだけ修理期間を短縮する為に昼夜問わず突貫作業

を交替で行なっている。

1か月程度の短縮は見込めるかもしれない。

航空母艦

隼鷹（旗艦） 搭載機 烈風28機 流星16機 彩雲8機 計5

2機

重巡洋艦1隻

愛宕

軽巡洋艦1隻

龍田

駆逐艦5隻

時雨、響、朧、初雪、浦波

タンカー 12隻

輸送船 29隻

輸送船団 計41隻

以上のようになった。

艦載機については戦闘機隊は人員及びの機体補充、訓練も問題無く行われた。

だが流星については対潜警戒に若干の不安があった為、隼鷹の流星24機の内、8機を飛龍に移した。

タンカーの数を減らし、輸送船の数を多くしたのは理由がある。損傷艦艇の修理を行う上で鉄鉱石が圧倒的に不足していたのだ。だからそれを多く持ち帰るために輸送船を増やした。

この陣容で最後の第4次大規模輸送作戦を実施。

潜水艦隊からは敵艦発見の報告は無く、今回は敵との戦闘は一度も無く成功。

帰り道は潜水艦隊も共に日本へ帰投した。

そして潜水艦隊は3日間の休暇の後、再び南シナ海やマラッカ海峡、リンガ泊地等の監視任務に就いた。その際、日本本土と同海域を何度か往復してマラッカ海峡の出入り口とスマトラ島、ジャワ島間に機雷を大量にばら撒いた。

これで敵艦隊が戻って来ても多少は足止めになるだろう。

そして、俺達は漸く一息付く事が出来た。

その際に、市木大将に呼び出されて何事か、まさか海戦で損傷艦を出したことで怒られるのか？と身構えたが寧ろとても褒められた。

轟沈艦を1隻も出さずに4度に渡る大規模輸送作戦を成功させたことを称えて、階級は中将に。勲章も新たに4つ叙勲される事になった。

そして、大規模輸送作戦を4度成功させた我々の次の目標は南西諸島の奪還である。

理由としては南方方面のパレンバンを含む各地の資源地帯を奪還するべく、橋頭保として南西諸島をどうしても奪還せねばならないのだ。そうすることで南方海域との海路を確保し、輸送任務をやり易くするという狙いがある。

そうすれば敵艦隊の目を盗んでコソコソとやらずに済む。

勿論情報の隠蔽などは重要だが、今よりもっと諸々の事が楽になると言う意味でだ。

そう言う訳で進められる南西諸島奪還作戦だが、その前に誰もが思い至らない一波乱起きるなんて誰も想像出来やしなかった。

南西諸島奪還作戦

第13話

日本へ帰国後、市木大将からの命令を受けて南西諸島奪還作戦の準備に取り掛かっていた。具体的には艦隊の再編と母艦航空隊の再建及び錬成だ。

と言っても343空の戦闘機隊の方は補充機体と拡充の人員の訓練だけだったので問題無く終わった。整備班の妖精達も母艦航空隊が大きくなるにつれて人員は増やされて来て、問題無く全機を整備したりできるまでになっているし、新米と言われる妖精達も毎日毎日整備訓練用の機体を烈風、流星に限らず何機分か確保していたからほとんど腕が上がって行っている。

だが流星隊の方は全くと言っていい程に再建が進まなかった。そもそも先の海戦で甚大な被害を被りほぼ壊滅したと言っていい具合だった。

そこに輪をかけて工場で生産される流星の数が少なかった、と言う事も再建が進まない理由の1つだ。先ず流星の生産工場は愛知県と栃木県山中の大本営と併設された合計2か所しかない。

だがここ最近、関東や東海方面への空襲が激しくなってきたのか愛知工場が空襲に晒されたのだ。愛知工場の生産ラインは5つあり、それらをフル稼働させれば月産50機は数えるであろうと予想されていた。

栃木県山中の工場は生産ラインが1つしかなく、未だに工場施設の建設や移管が進められているが進んでいない状況だ。

そんな中愛知工場の5つの生産ラインの内、4つが空襲で破壊されたのだ。

幸いにも開設されたばかりで生産施設への被害のみで資材などの被害はなかった。だがお陰で月産10機にまで生産能力が低下し、母艦航空隊へ送られてくる流星は合わせて月に20機だけというかな

り危機的状況だ。お陰で工場から送られてくる流星の数が少ない。人員は居るのに機体が無いと言う状況が続いた。漸く機体が揃っても搭乗員が未熟で空母どころか陸上の基地での離着陸すらままならないと言う者までいる始末。

—これでは母艦航空隊の再建どころではない。

流星を全ての空母に完全に行き渡らせるにはこのままだと10か月は掛かる。だがそんなに長い時間は待ってられない。

大急ぎで工場の再建が進められている。

現在主力級の空母は全部で飛龍、蒼龍、瑞鶴、隼鷹、飛鷹の5隻だ。

鳳翔は練習空母として母艦航空隊の錬成を行っている。と言っても烈風や流星では無く零戦52型や天山と言った旧式機を使つての発着艦訓練だ。

更にその後、それぞれの空母へ配属された後に自身の操ることになる烈風や流星での地獄の訓練に身を置くことになる。

だがそれでも母艦航空隊の練度や充足率はまだまだ。もし今、敵の空母機動部隊なんかと正面からの航空戦となれば先の海戦と同じ結果になる。それだけは避けなければならない。機体は作れるが搭乗員の育成は簡単じゃないからどうにかして被害を抑えなければならぬのだが、一番手っ取り早いのが搭乗員の練度向上、と言う訳だ。

艦の乗組員の訓練の方は問題無く進んでいる。

それと航空戦艦である日向は戦艦に戻されることとなった。と言うか航空戦艦にしておいても意味が無い。搭載予定であった晴嵐の生産は潜水艦隊と水上機基地分のみとなり日向へ回される分がなくなった。更に言ってしまうえば潜水艦隊と水上機基地分だけを生産しておけばいいので生産機数が大幅に減少している。元々搭載していた瑞雲は既に生産が打ち切られ、残った瑞雲も解体されて他の航空機の生産に回されてしまっている。配備されているのは極少数の訓練用だけ。それも新たに訓練用に配備される晴嵐が完成し、練習航空隊に回されればお役御免となる。

ついでに言えば南西諸島奪還作戦において沖縄本島上陸に際し艦

砲射撃を実施する予定だから長門1隻だけじゃ足りない。

一応、予定としては金剛、霧島の訓練は南西諸島奪還作戦には間に合うらしいが、実際の所どうなるか全く分からない。

と言うのも思いの外、艦内の損傷が酷くその修理の為に甲板を引っぱり剥がしたりかなりの大修理になってしまい、それが影響して修理に手間取り時間が掛かった。

修理自体は終わっているから後は訓練だけだが……

もし参加出来なくなるとすると艦砲射撃を担当する戦艦が1隻だけになってしまう。だが日向を戦艦に戻して運用すれば2隻、35.6cm連装砲を6基12門となつてかなりの火力となる。これを使わないで搭載機の無い航空戦艦にしておくのは勿体無いだろう。

まあ日向自身はかなり航空戦艦から戦艦に戻されると聞いてごねられたが、日向の艦長妖精達にも協力してもらつて説得し、無理矢理納得してもらつた。と言うかそもそも搭載するための航空機が無いのに飛行甲板と格納庫をくつつけていてもしょうが無いだろう。空母は別問題だが。

と言うか俺に対して瑞雲の素晴らしさを延々と話して来た時は本当にどうしようかと……俺の中で勝手にだが日向は変人、と言う印象が出来てしまった。

だが日向艦長から聞いた話だが、あれでも剣術や剣道の腕は途轍もないらしい。確かに日本刀を持っているから事実なのだろう。

戦艦に改装される日向の搭載砲は35.6cm連装砲になる。予備の主砲塔と砲身を引っぱり出してきて改装工事を実施。ここでも突貫工事になってしまつて1か月程で改装が終了した。

更に海軍だけじゃない。

陸軍も南西諸島奪還作戦に備えて各種の準備を進めている。

先ず南西諸島奪還作戦に投入されるのは第23歩兵師団と第39歩兵師団及び第3機甲師団になる。合計3個師団だ。

更に海軍からも海軍特別陸戦隊2500名を先発揚陸部隊として組み込み、橋頭保の確保を担当する。

選ばれた当初、一番装備の充足率が高い師団を選び、その師団に武器弾薬を優先的に送っている。

着々と上陸作戦準備を進めている。当然海軍の揚陸艦である神州丸も参加する。

陸戦隊は神州丸に乗り込む。

それだけでなく、陸軍籍の揚陸艦も数隻、参加予定だ。

今は呉のあちらこちらで損傷艦の修理やそれに使うための鉄鉱石の製錬、装甲の製造などで響いてくる機械音と、空を飛んでいる烈風や流星が陸軍32飛行戦隊の疾風と模擬空戦を繰り広げる。更に海は練習航海中の（と言っても瀬戸内海だけだが）鳳翔達が居る。

俺が着任した頃じゃ有り得ない光景だ。

そうして南栄諸島奪還作戦に向けて妖精や艦娘達は訓練をして、俺は書類仕事をこなす。

気が付けば最後の大規模輸送作戦が終わってからかなり時間が経っていた。年が明けてもう桜が咲き始め、葉桜に移り変わる時期だ。

そうして毎日をごしていた時だった。

唐突にプレハブ執務室のドアが叩かれる。

「入れ」

「失礼します」

入って来たのは本日の秘書艦である熊野だった。

彼女は手に幾つかの書類を持っている。追加の書類だろうか？そこまで量は多くないからげんりすることも無いが。

「提督、大本営から緊急電ですわ」

「大本営から？どういう事だ」

「どうやら、欧州諸国が深海棲艦の手に落ちたようです」

用件は、大本営（と言うよりは市木大将からと言った方が良いでしょう）からで、欧州方面に関する事だった。

恐らく深海棲艦の猛攻に晒されていて、救援艦隊の派遣は可能かとかだろうか。

だが市木大将は艦隊の現状を良く分かっているはずだ。面子や見栄なんかで派遣しようなんて言うような人じゃない。だとするともつと別に用件あるのか？

「……それで、大本営は何と？」

「かなり微弱な電波で、ですがどうにも脱出した合同艦隊が存在するらしく」

「その艦隊の救援は可能か、と」

「そういう事ですわ。救援要請のあった艦隊は北極海を渡ってくるらしく、时期的にも海に張った氷が溶けており航行は可能です。比較的深海棲艦の数が少ない北回り航路を取ったのでしょう」

北極方面からか……

確かに今の時期は氷も解けていて、大きな流水ぐらいなら残っているかもしれないが十分に航行は可能だ。

更に言えば、深海棲艦は南半球よりも北半球の方が数が少ない傾向にある。まあ南半球に比べれば、と言うだけで我々からするとずっと数は多い。

「だがなあ……救援しろ、と言われてもそう簡単に出来るものではないぞっ。」

「仰る通りです。ダッチハーバーは放置しておくとしても最低、アリューシャン列島沿いの棲巢を一時的に使用不能にしなければ困難です。ユーラシア大陸寄りに航行してくれていればまだ敵陸上機の航続距離の関係で相手取るのは敵艦隊のみなので多少は楽ですが……」

「敵艦隊の規模が問題だ。今の我々の母艦航空隊は流星の数が定数分揃っていない。これじゃあ満足に敵艦隊を攻撃出来ないぞ」

「それに敵艦隊の正確な規模なども分かっていますから……」
「せめてそれぐらいわかっていればやりようはあるんだがな」

熊野が言った通り、合同艦隊を追撃している敵艦隊の正確な編成や規模すら不明。そうすると作戦の立てようも無い。その場その場でどうこう解決出来るほど余裕は無い。

今までの海戦も事前の潜水艦隊の偵察ともたらされた情報によって紙一重で轟沈艦が出ていなかったに過ぎない。

戦いに置いて重要なのは彼我の戦力なども確かに重要だが、敵の情報と敵にこちらの情報をどれだけ与えないか、と言う事も重要だ。敵の情報が無ければどこにどれだけだけの戦力で攻めてくるのか、こちらはどれだけの戦力で迎え撃てばいいのか。

そういう事が一切決めることが出来ないのだ。

例えば今、合同艦隊を追撃している敵艦隊が空母や戦艦を主力とした艦隊ならばこちらもそれに対抗するために空母と戦艦を繰り出せばいいがこれが潜水艦隊だったらガラツと編成内容が変わってくる。

そんな情報も無いのに闇雲に、あれこれ詰め込むのは愚策であると言えるだろう。

「ですが見捨てる訳にも行きません。どうするのですか?」

「北海道の航空基地に連絡して一式陸攻を偵察に出すぐらいしかできんだろう。一式陸攻ならば航続距離が6000kmもあるからベールリング海の中程辺りまでなら行ける」

一式陸攻は偵察任務の際に航続距離が6060kmにまで達する。これほどに偵察任務に向いている機体は無いだろう。

今現在、陸海軍合同で4発重爆撃機の開発が行われているが未だに試作段階で、飛行に成功してはいるが速度が遅い事、機体の安定性に欠ける事など問題が山積みでどれだけ早くても量産段階に扱ぎ付けるのは早くても1年以上は掛かる。

少しばかりこの4発重爆撃機の説明しておこう。

何故開発が進められているのか、と言う理由についてはまず、本土

を爆撃してくる敵爆撃機は基本的にマリアナ諸島か硫黄島から飛んでくる。

これを直接爆撃するにはどうしても往復で4700kmの航続距離が必要なのだが一式陸攻だと爆撃するために爆弾を装備するとなると航続距離が2500kmしかなくなる。

東京くサイパン間は往復で約4700km。

これじゃ爆撃できたとしても片道切符の特攻と変わらない。だからこの敵の爆撃機が発進する敵飛行場を爆撃するために新型爆撃機が必要となってくるのだ。

二式大艇も8223kmと偵察ならば航続距離的には問題無いが爆弾を搭載するとやはり短くなり不可能だ。

奪還、占領、維持は今の我々には不可能だ。

無駄に戦線を広げるべきではない。資源地帯である南方方面は奪還、占領、維持をするに足りるが正直言って現段階で我々にとってマリアナ諸島や硫黄島などを奪還したとしても利点や旨味が無いのだ。

長い目でみればあるのかもしれないが、今の我々が必要としているのは即座に利点が無ければならない。更に言えば我々に今一番求められるのは早期戦力回復と言う初步的な物で、海域などの奪還は二の次、三の次だ。

南方方面は、その戦力回復をする上で必要不可欠となる各種資源の産出があるから奪還するのだ。それが無かったら奪還作戦なんて行わない。

そんな何のところを無理に占領して維持できる余裕が無い。

だから一時的にでも使用不能に出来る方が良いのだ。

話を戻そう。

「潜水艦隊が居れば偵察に出せたのですが……」

「呼び戻すにも時間が掛かるし、出来たとしても簡単じゃないだろう。ベーリング海はまだしもチュクチ海の海図が無いからな……」

熊野の言う通り、潜水艦隊が居れば偵察などが出来ただろう。

だが北方方面なんぞ完全に盲点だったのだ、南方方面に潜水艦隊は全て回して偵察任務中。

呼び戻したとしても日本に帰ってくるのには10日は掛かるし、更に整備などの準備を含めると2週間はかかるし、偵察を実施する海域へ向かうのに更に10日以上かかる。

丸々1か月もあつたらとつくに合同艦隊は全滅しているか日本にたどり着いている。

「やはり、困難ですね。どうされますか？」

「……今は人情論で動くべき時ではないのは確かだ。確実な情報も無いのに艦隊を動かせる気にはならない。せめて合同艦隊を発見さえできれば良いんだがな」

本当は助けてやりたい気持ちはある。

更にその合同艦隊を海軍の指揮下に置ければ戦力が増える。

だが南西諸島奪還作戦を控えている我々にそちらに回す事の出来る戦力は、はつきり言ってしまえば無い。

「ですが良い面を見れば、戦力が増えると言う面もありますよ？」

「そうは言っても、損傷していたのなら損傷艦の数が増えるだけだぞ？ドックの空きも無い。損傷状態で係留させてしまう羽目になる」

熊野も戦力が増えると言う点を指摘してくるが、もつと考えると指揮下に入れた合同艦隊が損傷を負っておらず直ぐに作戦投入が可能なお状態であるのなら構わないがそうでないとすると、俺が言った通りに損傷していて入渠待ちとなつて係留されるだけになる。

まあ、浮いていればそちらを優先して修理するからどうかは分からないが。

ドックをフル稼働で、新規に増設したりもしているが係留されていた艦は大破が殆ど。

戦艦や空母は損傷が酷く大破着底している艦も少なくない。

それらを修理するにはまず破孔を塞いで引き揚げて、排水処理を施して……これ以外にも多くの作業工程がある。

と言う訳でかなり作業工程が多く完全修理に至るまで軽く1年は掛かるなんてざらだ。

戦艦になると、大和を例に出すがどれだけ急いでも2年は掛かる。そんな中、更に損傷艦が増えると本当にドックで働いてくれている工員妖精達が過労で死んでしまう。

「それはそうですが……」

熊野は納得がいかない、と言った顔をしているが現実を見ているからそれ以上は何も言わなかった。

「取り敢えず、市木大将には一式陸攻の偵察を具申しておいてくれ。もし発見出来たのなら救援に向かうと言う旨も伝えておいてくれ」
「了解しました。それと、こちらの書類に目を通してよろしければサインを下さいな」

取り急ぎの指示を出して追加の書類を受け取った。

本当は偵察機も余り飛ばしたくないのだが……

そんなことをすればこれから何か仕掛けますよと言っているようなもんだ。特に今の今までそんな事をしてきていなかったのだから絶対に何かあると感づかれるに決まっている。寧ろそれで何も思わないんだつたらそれはただの無能だ。

潜水艦ならば隠密性も高く偵察に始まり、色々な運用方法があるが航空機はステルス性なんて皆無だからレーダーには確実に引っ掛かるし目視だつて双眼鏡を覗いていれば見つける事は容易だろう。

まあ、それは置いておこう。

目の前の書類を片付けてしまわなければ。

書類の内容は、鳳翔達からの訓練の報告書に始まり各種の備品申請書などなど多岐に渡る。

その日の書類仕事は夜中の12時過ぎまで行われていた。

それから4日後。

まさかの報告が飛び込んできた。

今日の秘書艦は熊野だ。射撃訓練によって擦り減った砲身交換の為に艦体はドックには入っている。普段は礼儀正しくお嬢様然としている彼女だが……

その熊野が慌ててノックもせずにドアを開け放った。

「提督！先日の欧州を脱出した合同艦隊の件で偵察に出ていた一式陸攻から報告が！」

「慌てるな、落ち着け。それでどうしたと言うのだ？そこまで慌てる事か？」

俺に指摘されてコホン、と咳払いをする熊野は居住まいを正して頭を下げて報告してきた。

「申し訳ありません、少々取り乱してしまいました」

「構わん。それで、どんな報告だ？」

「合同艦隊が発見されました。位置はベーリング海シルチヨフ海嶺です。シルチヨフ海嶺の真ん中辺りを航行している、との事です」

「シルチヨフ海嶺か……」

「速度は？」

「17ノットで日本に向けて航行しているそうです」

「艦隊を出せば、10日程の距離か。向こうもこっちに向かって来ているから来て上手くいけばベーリング島辺りで合流出来るが……大本営は何と言っている？」

「可能ならば艦隊を出して救援に向かって欲しい、と」

「そうか……敵艦隊は？」

「まだ発見されておりません。ですがほぼ確実に近海に存在するかと思われれます」

「だろうな……」

難しいところだ。救援艦隊を出せなくもないがそうすると南西諸島奪還作戦の実施時期に大きく響いてくることになる。

空母だけなら戦艦が居るよりもずっと楽に戦えるのだが、戦艦も絶対にいるだろうな。

「どうされますか？」

熊野が聞いてくる。

今現在、母艦航空隊の方は飛龍、蒼龍搭載の343空に加えて瑞鶴と隼鷹、飛鷹搭載の353空と363空が新設されている。

343空	烈風74機	流星64機	18機（飛龍、蒼龍）
353空	烈風74機	流星64機	18機（瑞鶴、隼鷹）
363空	烈風36機	流星32機	9機（飛鷹搭載）

戦闘機の数は合計184機、流星は160機、彩雲45機、合計で389機に達した。その練度も今日までの訓練で十分だ。

363空はこれから稼働することのできる空母が増えた時に規模は大きくなる。もっと増えれば更に新設されるだろうがまあそのことは置いておこう。

343空は353、363空の模擬空戦相手として基本は毎日訓練を行っている。

343空の原田大佐以下、エース・パイロットに扱かれまくって353、363空は熟練クラスの腕前を持っている。問題と言えば新米達の実戦経験が飛来する敵爆撃機の迎撃戦ぐらいしか無い事だろうか。

これだけの機数が揃っていれば問題無いように思えるが深海棲艦の正規空母は100機搭載できるなんて普通だ。それがこちらと同数の5隻も居れば500機になる。こちらより120機程度多い計算になる。まあ軽空母だったりする可能性もあるので一概には言えないが今回は分かりやすいからと言う事で。

気合が、根性が、精神がなんてものじゃどうにもならない差だ。戦闘機隊に限れば練度はこちらが勝っているだろうが数で叩かれればどうにもならない。

敵艦隊の有無が一番の問題だ。

敵艦隊が居ないのであれば我々は艦隊を送る必要は無いだろう。まあ損傷艦が居るのならばそれを曳航するぐらいの艦隊を派遣する

ことも視野に入れるが……あとは先導するための軽巡洋艦と駆逐艦
1、2隻の派遣ぐらいか？

「……どうにかして敵艦隊の有無だけは確認したい。合同艦隊との通
信は可能か？」

「分かりません。と言うのも合同艦隊へ繰り返し電文や無線を送って
いますが返信はありませんわ」

まあ、そうだろうな。

深海棲艦の攻撃によって無線装置なんかが壊れていたりしていて
もおかしくは無い。となれば合同艦隊から敵艦隊の情報を得るのは
無理だろう。

「偵察の一式陸攻から情報を得られる事は？」

「今現在、追加の一式陸攻を放って情報を掻き集めていますけどそれだ
け早くても12時間は掛かりますわ」

「その情報を待っている時間は……」

「恐らく無いですわ」

「ならば今決めなければならぬ、と言う事か……」

今決めないといけないとは何とも面倒な事態になったものだ。

まあそこまで大規模でなければ派遣出来るが、空母は3隻が限度
だ。多くても4隻。戦艦である長門や伊勢は連れて行けないな。

……よし。

「熊野」

「はい」

「飛龍、蒼龍、瑞鶴、隼鷹に出撃準備」

艦隊を派遣することに決定した。

出来るだけ少数精鋭にしなければならない。

「はい。分かりました。随伴艦隊はどういたしますか？」

「重巡摩耶と愛宕、軽巡能代、矢矧。駆逐艦は秋月、照月、宵月、雪風、
萩風、浦風を。それと補給用のタンカーを4隻加えてくれ」

合計で18隻の今までを考えるとかなり小規模な艦隊だ。

と言うよりも、動かせるのはこれぐらいなのだ。先のバンカ島沖海
戦での損傷艦の修理は完了している。だが金剛と霧島、那智の3隻は

最後の方に修理が完了しているが先程も述べた通りだが、未だに乗組員の訓練が完了していない。

と言ってももう2週間程で完了するので南西諸島奪還作戦には一応、間に合う予定だ。(なんらかの不具合があった場合は伸びてしまうが……)

だが俺が着任する前に既に損傷していた艦艇の修理は全く進んでいない。理由としては先ずサルベージが必要な艦が多い事。大型艦は大破着底、駆逐艦は沈没しない様に柱島泊地や四国、呉鎮守府の近くにある小さな島やその海岸に無理矢理座礁させていたりするし、何よりそう言った艦は海に浮かぶだけの浮力が無い艦が多かった。ドックに運び入れる為にも浮力を確保しなければならぬのだがその作業が難航している。

と言うのも浮力を得る為には海面下に沈んでいる艦体の破孔を塞ぎ、流れ込んでいる海水を排水し……とかなりやらなければならないことが多く、その作業に必要な専門機材や専門妖精が少なく同時に複数の艦を、と言うことが出来ない。

今現在、この作業を行って入渠しているのは駆逐艦が2隻だけで、それ以外に作業に着手しているのは早急に航空戦力の拡充をしなければならぬと言う事で航空母艦天城の1隻だけだ。

それ以外は未だに大破着底、座礁状態のままだ。

これらの作業を行うための妖精の育成も行ってはいるがまだまだ先になる。

話を戻すが艦隊が小規模になった理由は、南西諸島奪還作戦の準備もあるが何よりもそれに備えて順次、整備点検を実施していたりかなり間が悪い。

それが無ければ重巡と駆逐艦をもう何隻かぐらいは付けられたのだがしようがない。

「了解致しました。燃料の積み込みなどで明日の朝には出撃準備が整

います」

「ああ、ありがとう。準備が出来たら呼びに来てくれ」

「はい、それでは失礼します」

そう言って熊野は退室した。

さて、俺も準備を整えなければなるまい。明日までに出来るだけ書類の整理を終わらせておかなければならない。

翌日、出撃準備の整った艦隊は呉軍港や柱島泊地を抜錨、豊後水道を抜けて瀬戸内海を出た。

そのまま沿岸部沿いに北上していき、偵察に出ている一式陸攻からもたらされた情報を元に合同艦隊が存在すると思われる海域に向かう。

どうやら合同艦隊はベーリング海からまだ出ていないらしくシルチョフ海嶺を超えた辺りで留まっているらしい。

どういう事だ？

我が艦隊の現在位置はカムチャツカ半島にあつた港町跡のペトロパブロフスクーカムチャツキーから凡そ30海里の沖合を航行している。

彩雲を放つて偵察を実行しているが、カムチャツカ半島には深海棲艦の根拠地となる棲巢のようなものは存在していない。

一番最後にこの辺りの偵察等を行ったのは何年も前の話だったから念の為に飛ばしたが寧ろ人間が居なくなつたことによるインフラ整備が行われなくなり元々道路だつたと思しきものは木や草に覆われていた。

合同艦隊に関しては彩雲によつて発見、その規模や陣容、損傷程度を把握することが出来た。

先ず規模に関してだが主力艦は空母2隻、戦艦11隻の合計13隻

に加えて重巡や軽巡、駆逐艦が含まれる。

だが主力艦の数は比較的多いのだが随伴艦となる軽巡や駆逐艦クラスが圧倒的に少ない。

理由は分からないが偵察によると損傷している艦も多く、空母2隻は飛行甲板に大穴が空いている状況らしく、戦艦も余り速度を出せそうにない、だそうだ。

それと気になるのがどうしてか輸送船を10隻程度、伴っている事だ。まあ確かに日本までの距離を考えればタンカーの1隻や2隻居てもおかしくは無いだろう。だが輸送船と言うのはどう言う事だろうか？タンカーが存在しないから俺達がやった様にドラム缶に燃料を積んでいるのか？

「飛龍、彩雲を合同艦隊に向けて飛ばす事は出来るか？」

現在位置は捨子古丹島より東60海里だ。

ここから合同艦隊までの距離なら偵察は容易な筈。早ければ2時間で合同艦隊に到達出来るだろう。

「可能だよ。何機飛ばす？」

「合同艦隊に向けて2機、それ以外の8方位に向けて1機づつ頼む」

「分かった。何か偵察員に言っておく事はある？」

「合同艦隊を発見したら、一度艦隊上空を偵察高度のまま通過してから高度を下げて日の丸が見える様にしてくれ。機体をバンクもさせろ。そうすれば我々の存在を無線などが故障していたとしても察知出来る」

「分かった。準備は整っているから発艦させるだけだよ」

「よし、彩雲を飛行甲板に上げたら艦首風上」

「了解」

飛龍はそう言うのと艦長達に指示を出して行く。

10分後、艦首を風上に向け、合図で彩雲が次々に飛び立って行く。

最後の彩雲の発艦が終了して艦隊は再び合同艦隊に向けて進路を取る。

「提督、最後の彩雲が発艦完了しました」

「ああ。それと一応、敵艦隊とその攻撃隊に備えて置いてくれ」
「了解しました」

念の為に戦闘機隊の準備をしておく。
流石にまだ敵艦隊や敵攻撃隊と会敵したり来襲することは無いと思うが……まあ念を入れておくに越したことは無い。

それから2時間後、合同艦隊に向けて放った彩雲2機から指示された事をやり、艦隊へ戻ると言う旨の電文が送られてきた。

それと同時に北東方向、合同艦隊より110海里ほど行った辺りに敵艦隊を発見したと言う報告が入った。

『我彩雲3号機。合同艦隊ヨリ北東110海里地点ニテ敵艦隊発見ス。空母又級2、戦艦7、他随伴艦多数。速度25ノットデ急速ニ合同艦隊ヘ向ケテ航行、接近中。1039』

陣容は戦艦7隻の明らかな洋上打撃艦隊だ。

空母は又級が2隻だけ。恐らく直掩目的で随伴しているのだろう。ならば艦載機の数は全部合わせて100機前後か。

精々、対潜哨戒の雷撃機か艦爆を十数機ずつ搭載して残りは戦闘機だろう。

となれば戦闘機の数には70〜80機程。だが合同艦隊との戦闘を考えれば幾らかは少ない筈。となると60〜70機程の戦闘機を抱えているはずだ。

こちらは戦闘機の数だけで148機。

倍の数を誇っている。予想外だったのは空母の数が少ない事と正規空母が1隻も含まれていない事だ。最低正規空母は2隻は居ると思っただがな……

ただ戦艦が7隻と言う事が気がかりだ。これほどに戦艦が集まっていると当然対空砲火も厳しくなる。それを突破出来るか、突破出来たとしてもどれだけの数が生き残れるか……

攻撃隊を放つのも少々躊躇われるが、敵艦隊の速度と合同艦隊の速

力を考えると追い付かれて戦艦同士の砲撃戦に発展するだろう。しかも合同艦隊の戦艦11隻も数こそ勝ってはいるが損傷などを考えれば間違いない撃ち負ける。

「提督、攻撃隊を放ちますか？」

「いや、もう少し接近してからだ。出来るだけ距離を縮めて確実に仕留めたい。こちらには戦艦が存在しないからな、接近できれば合同艦隊諸共終わりだ」

「了解しました。ですが準備の方は進めても宜しいですか？」

「それは構わん。それと彩雲を追加で敵艦隊に向けて放ってくれ。確実に動向を探り掴んでおきたい」

「了解しました。それでは準備に取り掛からせます」

「頼んだ」

すると、格納庫で艦載機の発艦準備が進められる。

その1時間後、艦隊の速力を25ノットに増速し更に敵艦隊に接近した艦隊は追加で発艦させた彩雲から情報もたらされる。

『我彩雲11番機。敵空母艦載機ノ迎撃ヲ受ク。機種ハF6Fヘルキヤット、ト思ワレル。シカシ速度ガ遅ク我ニ追イ付ケズ。1103』

うん？ヘルキヤットが彩雲に追いつけない？

それはおかしい。確か彩雲の最高速度よりもF6Fの方が最高速度は速い筈だ。それなのに追いつけない？エンジンの調子でも悪かったのだろうか？

「提督、そろそろ攻撃隊を発艦させても問題は無いでしょう。F6FであればF4Uよりも手強いですが問題無く対処出来ます。どうされますか？」

航空参謀がそう意見具申をしてくる。

山田参謀長も同様の意見なのか頷いて俺を見ている。

確かに攻撃隊を放つても問題無いだろう。

出来れば合同艦隊に接敵される前に可能な限り叩いておきたい。

「……よし、攻撃隊を出そう。だが雷装よりも爆装を多めで頼む。敵

戦艦の艦上構造物を薙ぎ払っておけば後々楽になる」

「了解しました」

「第一次攻撃隊は何時出せる？」

「1145には出せます。燃料の搭載は完了しているので爆弾を積み込むだけですから」

「よし、第一次攻撃隊第一波の発艦時刻は1145。第二波はその30分後に発艦させる。それで構わないか？」

「問題ありません。それでは準備に取り掛かります」

「頼んだ」

その後、先ほどとは比べ物にならない程に大忙しになる。

弾薬庫から爆弾や魚雷が運び出され流星に装着されていく。

1145になると予定通り第一次攻撃隊の第一波が発艦を始めた。

先陣を切るのは何時も通り原田大佐だ。

待避所や艦橋、機銃座から大きく帽子を振るって攻撃隊を見送る乗組員達は第一波攻撃隊が発艦し終わると第二波攻撃隊が飛行甲板に並べられ、完了後に飛び立っていく。

第一次攻撃隊

第一波

飛龍	烈風20機	流星16機	(爆装12機)	雷装4機
蒼龍	烈風20機	流星16機	(爆装12機)	雷装4機
瑞鶴	烈風20機	流星16機	(爆装12機)	雷装4機
隼鷹	烈風20機	流星16機	(爆装12機)	雷装4機
烈風80機	流星64機	(爆装48機)	雷装16機	

第二波

飛龍	烈風17機	流星16機	(爆装12機)	雷装4機
蒼龍	烈風17機	流星16機	(爆装12機)	雷装4機
瑞鶴	烈風17機	流星16機	(爆装12機)	雷装4機
隼鷹	烈風17機	流星16機	(爆装12機)	雷装4機

烈風66機 流星64機（爆装48機 雷装16機）

計272機になった。と言うか全力出撃だ。

第一波の烈風の数を多くしたのは敵戦闘機の迎撃を予想しての事だ。80機も居れば特に問題無いだろう。

艦隊の防空には烈風を1機も残していないが敵機の航続距離の關係上、空襲を受ける事は有り得ない。

だからこそその全力出撃だ。

あとは、吉報を待つのみだ。

第14話

———— side 原田 ————

現在高度5000m。

飛龍を飛び立って2時間程進むと、敵迎撃戦闘機が姿を現した。

数は60機程とそれなりに多い。報告ではF6Fだと言う。正直言ってしまえばF4Uの方が相手取り易い相手ではあるが零戦よりも烈風は旋回性能以外ならば高性能なので特に問題は無い。

と言うか零戦の旋回性能が化け物染みていたのだ。寧ろ烈風も旋回性能ならば深海棲艦の戦闘機と格闘戦をしても余裕がある。

それに数で勝っているから特に問題は無い。同数の60機で十分だろう。

攻撃隊の総隊長は山田に任せている。その山田から敵戦闘機を抑えるようにと言う命令が来た。俺はその命令を受けて蒼龍隊、瑞鶴隊、隼鷹隊に敵戦闘機を抑えるように命令を出す。

まあ本来は階級的には俺が上なのだが、将来的な事を考えて山田に任せているのだ。

敵戦闘機を抑えに行った蒼龍隊長から無線連絡が入る。

こいつもラバウル防衛線から共に長い事戦ってきているエース・パイロットだ。気心知れた仲だ。

腕も信頼しているし判断能力なんかも良い。

そんな奴が驚きの事を言い始めた。

『原田、こいつらF6Fじゃないぞ』

「何?どういいうことだ、新型機か?」

『こいつら全部F4Fだ。久しぶりに見たが間違えるはずも無い』
「F4F? そんな骨董品何処から持ち出して来たんだ? 深海棲艦がそこまで追い詰められているわけがないしな」

『分からん。彩雲の偵察員はF4Fを見たことが無いからな、F6Fと見間違えたんだろう。どちらにせよ2対1でも余裕がある。機体性能差もだがそこまで腕は良くない。まあ一般的に言えばそれなりだろうが俺達からすればなんて事は無い』

「そうか……まあ分かった。取り敢えずそのまま敵戦闘機を抑えてくれ。油断して落とされんようにな」

『分かっている。そっちも伏兵とかに気を付けろよ』
「勿論だ」

そう最後に言って通信を終える。

その方向を見てみると、幾つもの機体が黒煙を吐いてクルクルと落ちていく。

それを見守りながら敵艦隊目指して進んでいく。

10分程、進むと大きな雲が見える。それを迂回しながら進むと、一気に雲が晴れる。すると眼下に何本もの航跡があり、その先には敵艦隊が存在した。

報告通り軽空母が2隻居るがそれを戦艦が7隻ぐるつと取り囲んでいる。その中には重巡り級が居るが脅威度で言えば戦艦7隻が一番だ。

すると、流星が突撃態勢を即座に作り雷撃隊は低空へ、急降下爆撃隊はそのまま敵艦隊直上へ進む。

我々戦闘機隊は対艦攻撃に関して言えばやる事が無い。

まあ機銃掃射ぐらいなら出来るが……

我々戦闘機隊は戦果確認をする仕事もあるから出来るだけ高い場所で見ている方が良いのだ。必要ならば流星隊の支援に入るが、周りを見渡しても敵戦闘機は存在していないし問題無いだろう。

と、ト連送が発せられたな。

その瞬間、急降下爆撃隊が敵戦艦目掛けて機体を反転させて一気に

急降下を始める。

飛龍、蒼龍、瑞鶴、隼鷹のそれぞれの急降下爆撃隊が1隻ずつ狙いを定めて爆弾を叩き込もうと突っ込む。

雷撃隊は8機ずつ戦艦2隻に狙いを絞って突っ込んでいく。

見ていると撃ち上げられる対空砲火はこの前のル級とは比べ物にならないぐらい貧弱だ。7隻集まって漸くあの時の戦艦2隻分と言ったところだろうか？猛烈な対空砲火を警戒していたが……

それに軽空母に合わせてなのか敵艦隊の速度は遅い。恐らくだが20ノットも出ていないんじゃないだろうか？

そんな敵艦隊に苦戦するような流星隊では無い。

急降下爆撃隊が雷撃隊に先んじて50番を次々と叩き込んでいく。邪魔をする対空砲火もずっと貧弱だからなんて事は無いのだろう、次々と火柱が上がる。

その次の瞬間、一瞬回避行動が無くなる。それを雷撃隊が見逃すはずも無くここぞと言わんばかりに魚雷を投下していく。

すると輪形陣の真ん中辺りとその後ろを航行していた戦艦のどつ腹に大きな水柱が2本、3本と立ち上る。

(爆弾は、それぞれの戦艦に最低6発は命中させた。魚雷も2隻に3本と4本。辺り所によつては撃沈もあり得る戦果だな)

頭の中で戦果を確認し、それを攻撃を終えた山田に送った。

我々戦闘機隊は念の為に敵艦隊上空に留まり続ける。

30分程すると更に第二波攻撃隊がやってきた。

第一波の攻撃で対空砲火は大きく減衰しており障害が無い様に突っ込んでいく。

手負いの戦艦には目も向けず、健在な3隻の戦艦に次々と攻撃を仕掛けていく。隼鷹隊の奴らは急降下爆撃隊だけだが軽空母2隻目掛けて突っ込んでいき、爆弾を次々に叩き込む。

最低5発ずつの爆弾の直撃を食らった軽空母は、たちまち大炎上し

始めた。軽空母に対して5発の500kg爆弾の直撃は致命傷だ。

あの様子じゃあ、どうやっても救いようは無いな。

戦艦3隻も5発以上の命中弾であちこちから黒煙を噴き出し、魚雷を食らった2隻は明らかに傾いている。

恐らくだが、7隻の敵戦艦は撃沈する事は出来ないだろうが戦闘能力を大きく削ったことに間違いは無い。

敵艦隊上空をグルッと旋回しそれらを確認した後、黒煙を吐きながら航行する敵艦隊を尻目に第二波攻撃隊と共に飛龍へ向けて針路を取った。

———— side out ————

第一波、第二波攻撃隊から戦果報告の電文が届く。

『我第一波攻撃隊、敵艦隊へノ攻撃完了ス。敵戦艦4隻ニ急降下爆撃、内2隻ニ雷撃ヲ敢行。ソレゾレ最低6発ノ50番ノ命中ヲ確認ス。雷撃ハ3本ト4本ノ命中ヲ確認。撃沈ニハ至ラズ。第二次攻撃ノ要アリト認ム』

『我第二波攻撃隊、敵艦隊へノ攻撃完了ス。敵戦艦3隻、軽空母2隻ニ急降下爆撃、内戦艦2隻ニ雷撃ヲ敢行。軽空母2撃沈確実、戦艦3ハ撃沈ニ至ラズ。再攻撃ノ要アリト認ム』

雷撃機を少なくして艦上構造物を薙ぎ払う事を主目的としたからか戦艦の撃沈には至らない。攻撃隊が帰投したら再度、今度は雷撃担当の流星を多めに編成すれば恐らくは何隻かは撃沈できるはずだ。

我が艦隊も敵艦隊に向けてそのまま直進していたから、攻撃隊の収容時間は早くなるはずだ。

「攻撃隊を收容したのちに、何分後に再出撃が出来る？」

「攻撃隊全ての收容時間、再出撃に耐えうる機体の選定と、整備、弾薬や燃料の補給、魚雷や爆弾の装備に1時間半頂ければ可能です」

敵艦隊との距離などを考えると……

「すると、第一波攻撃隊は15時頃か」

「はい、そうなります」

「よし、ならば第二次攻撃隊第一波攻撃隊は16時丁度に発艦を開始させる。構わないか？」

「大丈夫です」

早速、攻撃隊が帰還した時に備えて、準備が進められた。

攻撃隊を收容後、再出撃が可能な機体の選定が行われる。

「提督、再出撃可能な機体の選定が終了しました」

「それで、何機出せる？」

「烈風140機、流星101機です」

「それ以外は？」

「撃墜などは免れましたが、燃料タンクやエンジンに被弾して発艦予定時刻までに修理が終わりません」

「分かった。ならばその機数で出撃させる」

「分かりました」

第二波攻撃隊

第一波

飛龍	烈風18機	流星13機	(爆装4機)	雷装9機
蒼龍	烈風18機	流星12機	(爆装4機)	雷装8機
瑞鶴	烈風17機	流星12機	(爆装4機)	雷装8機
隼鷹	烈風17機	流星13機	(爆装4機)	雷装9機

合計 烈風70機 流星50機(爆装16機 雷装34機)

第二波

飛龍	烈風17機	流星12機(爆装4機 雷装8機)
蒼龍	烈風18機	流星13機(爆装4機 雷装9機)
瑞鶴	烈風18機	流星12機(爆装無し 雷装12機)
隼鷹	烈風17機	流星13機(爆装無し 雷装13機)
合計	烈風70機	流星50機(爆装8機 雷装42機)

第二次攻撃隊は、完全に敵戦艦を沈めるための編成にした。手負いの合同艦隊を引き連れている状態の時に敵艦隊に追いかけられるとかなり面倒だ。

今の内に出来るだけ戦力を削いでおきたい。

「提督、発艦準備完了しました」

「よし、艦首風上に立てろ」

艦隊は32ノットの高速で風上に向けて疾走する。

すると合成風力が作り出され、飛行甲板上には強風が吹く。

「攻撃隊発艦始め！」

大きく旗が振られると、再び原田大佐を一番に飛行甲板から次々と飛び立って行く。整備員は作業帽を、俺を始めとした艦長以下士官組は制帽を振る。

最後の魚雷を抱いた流星が飛び立つと、艦隊は敵艦隊から離れる針路を取る。と言ってもこの辺りの海域で遊弋するのだが、既に敵艦隊との距離は攻撃隊が1時間程で到達するまでに接近していた。

普通ならあり得ないのだが、まあ敵攻撃隊が来襲する危険性は無いから問題は無いだろう。

そもそも、敵攻撃隊が接近しているのなら第一次攻撃隊が発艦した後、とつくの昔に来襲して空襲を受けているはずなのだ。だがそれ

が無いと言う事は敵に戦艦以上の攻撃能力は無いと言う事だ。

一応、対空、対水上電探にソナーなどは全艦装備の上に稼働させているが今の所反応は無い。索敵距離はかなりあるから奇襲を受けるなんてことは全ての電探が故障なりしていない限りは有り得ないと言えるだろう。

そうして、暫くすると攻撃隊から電文が続けざまに届く。

最初に敵艦隊発見と言う報告から突撃隊形作れ、全機突撃開始、と続いた。

その20分後、更に戦果報告の電文が届く。

『我第一波攻撃隊、敵艦隊へノ攻撃完了。戦艦4隻二雷撃及び急降下爆撃ヲ敢行ス。撃沈確実3、撃破1。軽空母ハ既ニ艦隊カラ落伍。傾キ沈没ハ時間ノ問題ト判断、放置ス。再攻撃ノ要無シト認ム1723』

『我第二波攻撃隊、敵艦隊へノ攻撃完了。敵戦艦3撃沈確実、撃破1。航行可能ナ敵戦艦ハ2隻ノミ。ナレド速力大幅低下ニツキ脅威トハ成ラズ。再攻撃ノ要無シト認ム。1754』

その報告が読み上げられると艦橋内で大きく歓声が沸く。

まあ、元々鈍足で航行していた所に急降下爆撃と雷撃を食らい、損傷して更に鈍足になったところにトドメの雷撃で魚雷を何本も食らったのだ、普通はこうなる。上空直掩の戦闘機の重要性がこれで露呈したな。

今の今までは全力出撃をして、艦隊上空に戦闘機を残しておかなくても問題無い状況が続いていたがこれからはそうはいかないだろう。

寧ろ今までの状況がかなり幸運だった、と言える。

「提督！これで敵艦隊の脅威は無くなりました！」

大戦果に参謀長が紅潮した顔で俺に顔を向ける。

まあ確かに大戦果だろう。

「うむ、攻撃隊の皆には後でしつかりと労ってやらねばならないな」
俺もそう言ったが、何時までも喜んで居られない。

攻撃隊を早く收容し合同艦隊の下へ向かわなければならぬ。再攻撃はしなくとも問題は無い。と言うよりしたくても出来ない。もう既に日没が近く、收容後にどれだけ急いでも攻撃隊発艦準備が整ったその時には既に夜だからだ。

そう言う訳で取り敢えず、攻撃隊の收容を急がなければならない。
「艦長、急ぎ攻撃隊の收容準備を進めるように。最後まで気を抜くな。まだまだ先は長いぞ」

「はっ、少々騒ぎすぎました。急ぎ收容準備を整えます」

「頼んだ」

その指示に従って收容準備が進められた。

その50分ほど後に攻撃隊の收容が開始された。

途中、エンジンに不調を来した流星が1機、飛行甲板にたどり着く直前に失速し海面に突っ込むと言う事件が起きたが幸いにも搭乗員に命に関わるような怪我などは無かった。肩の脱臼と、足首の捻挫程度で済んだのは幸いだ。と言っても暫くは療養が必要らしいが。

「提督、攻撃隊の收容が完了したよ。これからどうするの？」

飛龍はそう聞いてくるが、当初の目的は合同艦隊の救助だ。その過程で敵艦隊と言う障害があったからそれを取り除いた、と言うだけだ。

「どうするも何も、合同艦隊の救助が主目的だからな、合同艦隊方面に向かう。通信参謀、通信はまだ繋がらないか」

「はい、今現在も電文を送っていますが返信はありません。こちらの通信機器などに不調は無いので恐らく合同艦隊側の通信機器の故障などが原因でしょう」

飛龍の質問に答えがてら通信参謀に合同艦隊との通信が繋がらな

いのか改めて確認したがやはり駄目なようだ。

まあ、偵察機の報告じや手酷くやられているようだし、輸送船も伴っているから仕方無い、と言えば仕方無い。だからこそ早く合流しなければならぬ。

救助が目的なのだからこれ以上損害が増えるのはこちらとしても都合が悪い。

自力航行が出来る艦が多ければこちらの負担は減る。曳航に割く艦が多いとそれだけ防備が手薄になる。

と、その前にやらなければならぬことがあるな。

「艦長、能代と秋月、雪風、浦風の4隻を墜落した機の搭乗員救助に向かわせてくれ」

「了解しました」

墜落した機の搭乗員もしつかりと救助せねばならない。

搭乗員の育成はそう簡単に完了させる事は出来ないからな、しかも今の練度まで鍛え上げるのには本当に長期間必要だ。南西諸島攻略作戦までにはどうやっても間に合わないから1人でも多く助けなければならぬ。

これからの時間は暗くなるから上空直掩は必要無い。

潜水艦からの雷撃にさえ注意しておけば問題無かろう。

その指示に従い、4隻は搭乗員救助に向かって行った。

こういう時に潜水艦が居ると搭乗員の救助が楽なのだが今回ばかりは仕方無い。稼働出来る潜水艦の数を増やしたい所なのだがどうにもならない。

まあ、この件は後々考える事にしよう。

俺達は合同艦隊と合流するべく針路を取った。

数時間後、合同艦隊と合流した。

もう辺りは真っ暗で艦種の特定は難しい。

すると見張員の1人が声を上げた。

「合同艦隊より発光信号」

「何と言っている?」

そう聞くが、返答が無い。

発光信号が終わり、少しすると彼は答えた。

「……はっ、申し訳ありません、どうやら我々の使用しているものと違
うらしく、即座の解読は困難です」

「どうやっても無理か?」

「少々お時間を頂ければ、メモを取っておりますので解読出来ますが
……」

「はっ、ありがとうございます。直ぐに取り掛かります」

この時、使用されていたのはどうやら日本で我々が使用している
モールス信号とは違う、欧州でよく使われている物だった。

そりや普段は日本で使うモールス信号しか使わない見張員も彼か
らすればも即座に解読するのは無理がある。

10分程すると、先ほど発光信号を見つけて解読に精を出していた
見張り員の下士官が解読結果を持って来た。

「提督、解読完了しました」

「ありがとうございます。読み上げてくれ」

「はっ、読み上げます」

『我ビスマルク。貴艦隊ノ救援ヲ心ヨリ感謝ス。我方艦隊ノ現状ヲ伝
エル。艦隊速力13ノット。輸送船11ヲ伴ウ。敵ノ攻撃ニヨリ戦
艦7及ビ空母1、重巡3、軽巡2、駆逐4大破』

合同艦隊の損害や現状等を報告してきたらしく、満身創痍と言う言
葉がそっくりそのまま当て嵌まるほどだ。

ビスマルクによると、大破した艦は全て合わせて17隻。

しかもその殆どが浸水や機関部への損傷等で最高速度は軒並み2
0ノット以下。艦上構造物も多くが破壊されて通信設備や電探と
言ったものは軒並み破壊されている。

まともに速力を出せる艦も速度が低下した艦に合わせているから艦隊速度が13ノットと極端に遅い。

大破

戦艦

クイーン・エリザベス

ラミリーズ

ネルソン

デューク・オブ・ヨーク

テイルピッツ

リットリオ

リシユリユ

空母

グラーフ・ツェツペリン

重巡

ザラ

ポーラ

キャンベラ

軽巡

アブルツツイ

ガリバルデイ

駆逐

Z3

グレカーレ

リベツチオ

ジャーヴィス

更に中破が6隻。

戦艦

ウォースパイト

ローマ
空母
アーク・ロイヤル
重巡
アドミラル・ヒッパ
ゴトランド
デ・ロイヤル

と、かなり手酷くやられたようだ。

しかも駆逐艦の数が6隻だけしか存在しておらず、しかもその内の4隻は大破、残りの2隻も燃料が底を着きかけているらしい。

まともに戦闘能力を保持しているのは

戦艦ヴァンガードとビスマルクの2隻に重巡洋艦のプリンツ・オイゲン。駆逐艦のZ1、マエストラーレの合計5隻だけ。

この5隻も通信設備が故障中、更に駆逐艦2隻は対潜兵装が機銃掃射により破壊され、魚雷発射管への被弾により魚雷は全て投棄、主兵装である主砲も度重なる射撃によって射撃不能、砲弾は撃ち尽くした。攻撃能力は皆無らしい。

潜水艦は速力の関係上、この合同艦隊には組み込まれず存在しない。何隻かが別航路で日本に向けて出発したらしいが連絡は取れず、恐らくは既に撃沈されているだろう、との事だった。

合同艦隊残存艦は今現在の残存艦艇は以下の通り。

戦艦

クイーン・エリザベス
ウオースパイト
ラミリーズ
ネルソン
デューク・オブ・ヨーク
ヴァンガード
ビスマルク

テイルピッツ
リットリオ、ローマ
リシユリユー

航空母艦

グラーフ・ツェツペリン

アーク・ロイヤル

重巡

ザラ

ポーラ

キャンベラ

アドミラル・ヒツパー

プリンツ・オイゲン

ゴトランド

デ・ロイヤル

駆逐艦

Z 1

Z 3

グレカーレ

リベツチオ

ジャーヴェイス

マエストラーレ

戦闘艦艇は全て合わせて26隻。そこに輸送船11隻が合わさり37隻になる。

欧州を出発したときはこの倍は居たそうだが此処に到達するまでに轟沈、または損傷甚大により自沈処分、囷として残ったそうだ。

輸送船には、それぞれ艦の整備や砲弾、主砲身などを作るための技師、機材、各種兵器の設計図などと共に技術者、既存の兵器が目一杯積み込まれているそうだ。

随伴していたタンカーは燃料を補給して空になった時に艦隊と分

離、囷として乗組員だけを移乗させて置いて来たと言っている。

「発光信号、準備」

「はっ、何と打ちますか？」

「俺の名前で、『貴艦隊ノ奮戦、及び犠牲ニ最大限ノ敬意ヲ表ス。我が艦隊ハコレヨリ貴艦隊ノ護衛ニ就ク。燃料ニ不安ガアル艦ニハ補給ノ用意アリ。曳航ガ必要ナ艦共々申シ出ヨ』。もし可能ならば欧州式で打ってやれ」

「了解しました。発光信号打ちます」

発光信号が打たれる。

それを受け取ってすぐさま返信が届く。

そしてメモを取り、すぐさま解読して報告してくる。

「報告します。『貴艦隊ノ心遣イ、感謝ス。駆逐艦ヲ優先シテ燃料補給ヲ要請ス。曳航ハ空母グラフ・ツエツペリン、駆逐艦グレカールヲ頼ム。交信終ワリ』との事です」

「よし、駆逐艦を最優先に給油を開始。救助に向かわせた能代以下はどうしている？」

「目下救助作業中であります。報告では5機の流星が海面に不時着したとの事で既に4機分の搭乗員の収容は完了しており、残る1機の搭乗員達を救助をするために報告のあった海域に航行中です」

「よし、暗号文でベリーリング島南西30海里にて合流せよ、と打ってくれ」

「了解しました。それでは」

「ああ、頼む」

その後、すぐさま合同艦隊の駆逐艦6隻へ我が艦隊に随伴していたタンカーから燃料の補給が行われ、その後に軽巡、重巡、空母、戦艦と順次燃料を補給。

グラフ・ツエツペリンは愛宕に、駆逐艦グレカールは宵月に曳航させることにした。

愛宕、宵月の2隻は曳航用のワイヤーを渡して引っ張っていく。

お陰で艦隊の速度は16ノットまで増速し、多少移動速度が向上し

た。

「提督、作業完了したよ」

「分かった。それでは針路を合流予定地点に向ける。4隻はどうしている？」

「収容は完了、の報告がついさっき上がったから、今頃は合流予定海域に向かっているんじゃないかな？」

「ならばいい。周囲への警戒を怠らせるな」

「勿論だよ」

飛龍とそう会話した後に俺は皆に言われ自室で仮眠をとることに。

今はもうとつくに夜で辺りは真っ暗だ。文明を感じられるのはそれぞれの艦が艦橋から漏れ出ている少しばかりのオレンジ色の灯りだけだ。現在の位置は敵の勢力圏内だから灯火管制を敷いておくに越したことは無い。

次の日、太陽が昇り始める前から直掩戦闘機隊を準備し、各空母から4機ずつ、計16機を上げている。

矢矧達とは既に合流して艦隊を組んでいる。今の所、対空対潜対水上警戒を厳としているが電探に反応は無く、ソナーにも敵潜水艦の反応は無い。

現在位置はペトロパブロフスクーカムチャツキーより北東に30kmほどの位置を日本に向けて航行している。このままの速度、調子ならば16ノットで航行すると10時間で165海里(300km)を進む。

丸々24時間航行するので単純計算だと400海里(730km)を進めることになるが、途中途中で給油等を行うため、呉までは16

50海里(約3000km)あるから順調に行けば7日程で到着出来る筈だ。

だが16ノットと言うのはな……せめて18ノットで航行したいが損傷艦が居るから無理だ。

「しかし、艦隊の移動速度がこれだけ遅いと何とも歯痒いな」

「まあしようがないって。見捨てるわけにもいかないし」

思わずそう漏らすと俺が座っている席の隣に立っていた飛龍が答えた。

「もう1隻、重巡を連れてくるべきだったか……そうすれば空母を2隻で引つ張る事も出来たんだがな」

「でも整備中だったんだからしようがないよ。今は我慢するしかないね」

「そうだな……」

そう飛龍と会話しながら時間が過ぎていく。

昼食を食べ終え、交代で仮眠を取りながら呉に向かった。

7日後、道中では何事も無く比較的平穏に進み、艦隊は日本本土近海へ到達。各地の陸海軍の航空隊の上空直掩を受けながら瀬戸内海へ入り呉軍港へ入港。損傷の軽いヴァンガードとビスマルク、プリンツ・オイゲン、Z1、マエストラーレの5隻は即座にドックへ入渠。各国の技師によって点検が行われた。

結果、戦艦2隻とプリンツ・オイゲンは問題無し、航行、戦闘どちらとも支障無しと言う判断が出た。

行った修理と言えば通信設備を取り換えただけで済んだ。

だが駆逐艦2隻はまず対潜兵装と魚雷の修理、機銃弾痕を塞がなければ戦線への復帰は出来ないとの事だった。

損傷艦で応急修理が必要な艦はそれを施し、係留。

損傷艦の一覧に彼女達が加わったが優先順位度で言えば上位になる。

と言うのも損傷しているとはいえ合同艦隊の彼女達は浮いている。要は浮力があり自力航行が最低限出来ると言う事に他ならない。

しかし我が海軍の艦艇などは大破着底をしている艦が多い。その艦艇を難しい作業の上、引き揚げてともなると以前に説明したとおりだが物凄く時間が掛かるのだ。

だが合同艦隊はそんなことは無い。修理に掛かる時間を考えると合同艦隊の面々を優先した方が良いと言う判断だ。

まあ南西諸島奪還作戦には間に合わないだろうがその次の作戦ならば間に合うだろう。

「失礼します」

「入れ」

ノックの後にプレハブ執務室に入って来たのは照月だった。

彼女は本日の秘書艦だ。その手には幾つかの書類の束が握られている。恐らくは報告書などだろう。

「提督、報告書です」

「ん、ありがとう。それで、合同艦隊の艦娘や妖精達の様子はどうだ？」

報告書を受け取りながら合同艦隊の艦娘や妖精達の様子を聞いてみる。

「全員、日本へ到達する事が出来た、と安心して大喜びしています。同時に失った仲間達を思つて泣いたり様々です」

「まあ、その辺は彼ら彼女ら自身に乗り越えて貰わなければならないな」

「はい。それと合同艦隊の艦娘ビスマルク、ヴァンガード両名が提督に面会したいと言っておりますがどうしますか？」

面会か……何を言われるのやら分からんがまあ良いだろう。

「構わん。今すぐにとは行かないが明日、予定を空けておこう。2人にもそう伝えて置いてくれ」

「分かりました。他に何か御用はありますか?」

「……いや、今の所は無いな。あ、いやある。あの書類の山を分別しておいてくれ。南西諸島攻略作戦関連の書類とそうでないもの、ぐらいの大まかな分け方で構わんから。頼んでも良いか?」

「勿論です。それじゃあ早速取り掛かりますね」

「すまん」

「いえいえ、お気になさらず」

照月は新しく俺と手先の器用な妖精数人で手作りした秘書艦用の机に書類の山を持って行って分けて始める。

それを見てから俺は報告書に目を通す。

ふむ、損傷艦は長くて4か月程で修理を終えるか。

金剛達に比べれば随分と早い。訓練を入れれば7か月程か。いや、日本の艦では無いから訓練はもつと掛かると見るべきか。

補充人員は我々日本海軍から抽出する事になるが、まあしようがない。

使える戦力は多い方が良いに決まっている。暫くの間は共同戦線となるだろうか?

現状、損傷艦を更に抱えると言う結果になったが得られたものも大きい。

まず、戦艦ヴァンガード、ビスマルクと重巡プリンツ・オイゲンの3隻が戦列に加わる事。これは大きい。

戦艦の数はこれで6隻にまで増えて大幅な戦力の向上となったし、プリンツ・オイゲンも数少ない重巡の一翼を担う事になる。特に戦艦の方は金剛、霧島が南西諸島攻略作戦に参加出来るかどうかと言う所で、長門、日向の2隻だけよりもずっと心強い。

ヴァンガードは主砲がMark 1 38.1cm(42口径)連装砲4基と強力だ。ビスマルクも38cm(48.5口径)連装砲4基

とこちらも強力だ。

長門の41cm砲よりも大きさは劣るがそれでも十分な破壊力を持つている。

貫通力では負けず劣らずだろう。まあ砲弾や砲身の製造、補給と言う面から見れば兵站到に大きな負荷を与えるだろうが……それを言えば切りが無い。

艦艇の戦力が増えるだけでなく輸送船の方も大きい。

積み込んでいたものには各艦艇の武装や砲弾の生産設備や各種機材が詰め込まれていた。

更には各種新兵器や、新技術、大馬力エンジンなどもあったし、他にも少数の部隊も乗っていた。

特にすぐに使える、と言う意味で大きいのは航空機や戦車だろう。

特筆すべきはドイツ陸軍の戦車と兵員輸送車、各国の航空機、そしてその技術などだろう。

彼らが我々に手土産、として持って来た目録だがまあ高性能な兵器が所狭しと並んでいた。

4号中戦車

3号戦車

3号突撃砲

6号重戦車ティーガー1、

ハノマーク兵員輸送車

75mm対戦車砲

フンメル自走砲

ケツテンクラート

車両関連だけでこれほどまでにあり、更に個人用の装備や対戦車火器も数多い。

パンツァーファウストやパンツァーシュレックと言った日本陸軍や陸戦隊が装備する個人用対戦車火器とは比べ物にならないほどに高威力のものがあつた。

我々が使うものは接近しなければ使えないだとかそういう物が多いからな、人的被害を考えるとかなり有効な兵器となりえるだろう。更にはこれ以外の兵器も数多く、

ティーガー2

5号戦車パンサー

実車や実物は無いものの色々な兵器の設計図なども数多い。

航空機はイギリスが、

スピットファイア戦闘機

ハリケーン戦闘機

をそれぞれ4機ずつ。

ドイツ空軍

Bf109戦闘機

Fw190戦闘機

地上襲撃型のBf110

スツーカー、

爆撃機Do217

など5機種を4機ずつ。

まあ正直言ってしまうはこの中で活躍出来るのは4号戦車や3号突撃砲ぐらいだろうか。

と言うのも欧州での戦場とは違い、太平洋の戦場は基本的に島嶼帯が多く、それらの島は小さいことが殆どだ。更に言えばこの島嶼帯は雨などが降ると地面はかなり泥濘と化す。そんなところに総重量55トンのティーガー1重戦車や、70トンを超えるティーガー2、中戦車なのに46トンもあるパンサーを投入すれば足回りや駆動系などの故障が頻発して全くの使い物にならない。

その様な戦場の特性上、活躍するのはどちらかと言えば重戦車などよりも比較的重量の軽い3号突撃砲や4号戦車、フンメルだろう。それでも3種とも20トン以上もあるのだから恐ろしい。

陸軍の機甲科や海軍特別陸戦隊の装備する89式戦車は精々が1

3トン程度だ。その2倍近い重量の戦車が果たして太平洋の島嶼帯の戦場でどれほど使い物になるか……

待ち伏せなどが出来る防衛戦では無くこれからは奪還作戦が主となるだろうから、運用方法などもしっかりと考えなければなるまい。

それでも4号戦車が12両、3号戦車、3突が合わせて12両、フンメルが12両とそれなりの戦力なので投入する機会はあるだろう。寧ろこれだけの戦力を飾り物にしておくのは勿体無き過ぎる。

ああ、そう言えば陸軍の連中が戦車を見て大喜びしていたな。

まあ陸軍に回されたのは3号戦車と3号突撃砲で4号戦車とフンメルは海軍特別陸戦隊に回されることになった。

まあ正直俺としては3号だろうが4号だろうがどちらでも良かったのだ。

だが陸戦隊の連中が我々は橋頭保の確保の為に陸軍よりも先に上陸することが多い。敵地に飛び込むのだから出来るだけ装甲の厚い戦車が欲しいとか何とか言っていた。

そして陸海合同の空技廠の面々が大きく興味を示したのは、Me 264と言う4発重爆撃機とJu 390呼ばれていた6発重爆撃機だ。

これは機体が大きく輸送船内に分解されていたのだが組み立てて飛ばしてみたところ、かなりの高性能を発揮したのだ。

それを見て驚いた空技廠は早速その技術を取り入れて開発を進めることにした。

以前にも説明したと思うが今現在空技廠はマリアナ諸島にある深海棲艦の飛行場を直接爆撃出来る4発爆撃機の開発を急いでいる。

だがその4発重爆撃機は最高速度、巡航速度が遅い、安定性が低い、爆弾搭載量が少ないなどの問題を抱えている。

それらの問題を解決するために技術を取り入れるとともに欧州各国の設計技師や技術技師らの協力を得て日夜開発に明け暮れている。

後は、新型の液冷エンジンや、パルスジェットエンジン、ターボ

ジェットエンジンなどの新技術が盛りだくさんだ。

対空、対水上電探やソナーなどの電子機器、光学機器なども数多く我々海軍が使用している電探などよりもずっと精度や信頼性が良い。

まあ纏めると最新兵器や強力な兵器、最新技術が盛り沢山で陸海軍の最前線で戦う妖精だけでなく技術者妖精の連中も狂喜乱舞するぐらいの沢山の新兵器、新技術などが盛り沢山、と言う事だ。

まあそれは置いておいて今進めるべきは南西諸島攻略作戦の準備だ。具体的な実施時期は決まっていないが早ければ1か月、もしくは1か月半ほどだろう。

あまり時間は無いが出来るだけ万全に近い状態で挑まなければならない。

この作戦の成功、失敗にこの国の、それだけではない。世界そのものの命運が掛かっているのだから。

第15話

合同艦隊救出から1週間後。
遂に南西諸島攻略作戦が発令された。

実施時期は今日より2週間後。

それまでに準備を完全に整えなければならない。

この実施日までの期間にもしつかりとした意味があるがそれは追々説明するでしょう。

さて、まずは参加戦力を記そう。

まず、空母を主力とした第1機動艦隊だ。

第1機動艦隊

航空母艦

飛龍（旗艦）

烈風37機 流星32機 彩雲9機 計78機

蒼龍

烈風37機 流星32機 彩雲9機 計78機

瑞鶴

烈風37機 流星32機 彩雲9機 計78機

隼鷹

烈風37機 流星32機 彩雲9機 計78機

飛鷹

烈風37機 流星32機 彩雲9機 計78機

天城

烈風48機 流星無し 彩雲無し 計48機

烈風233機 流星160機 彩雲45機

計438機

戦艦

金剛

霧島

ビスマルク

ヴァンガード

重巡洋艦

鈴谷

熊野

青葉

古鷹

プリンツ・オイゲン

第1水雷戦隊

軽巡洋艦

能代

駆逐艦

秋月

照月

涼月

初月

陽炎

雪風

浦風

萩風

第2水雷戦隊

軽巡洋艦

矢矧

駆逐艦

若月

霜月
春月
村雨
時雨
響
隴

第3水雷戰隊

輕巡洋艦

多摩

驅逐艦

宵月

滿月

花月

初雪

浦波

菊月

望月

第1航空戰隊

飛龍 蒼龍 瑞鶴

第1戰隊

金剛 霧島

鈴谷 熊野 青葉

矢矧以下第1水雷戰隊

第2航空戰隊

隼鷹 飛鷹 天城

第2戦隊

ビスマルク ヴァンガード

古鷹 プリンツ・オイゲン

能代以下第2水雷戦隊

第1機動艦隊は総勢40隻、速力の速い艦で固めている。

まあ隼鷹、飛鷹の速力は25ノットとそこまで速くは無いが主力なので組み込んでいる。

更にそこから空母3隻を基幹とする第1、第2航空戦隊に分かれ、その護衛に戦艦を2隻ずつと重巡、水雷戦隊が就く。

まあ行動は共にするが何かあった場合は別行動を取ったりと臨機応変に対応する事になる。

第1航空戦隊は飛龍、蒼龍、瑞鶴を基幹に戦艦と重巡で構成された第1戦隊の金剛、霧島と鈴谷、熊野、青葉が護衛に就く。更に1水戦が護衛に就く。

第2航空戦隊は隼鷹、飛鷹、天城を基幹としている。だが天城は烈風しか搭載していないので攻撃能力は1航戦より低い。だがそこに第2戦隊ヴァンガードとビスマルクの2隻と重巡古鷹、プリンツ・オイゲンが続く。そこに2水戦が護衛として就く。

第3水雷戦隊は機動艦隊として行動する第1、第2航空戦隊を護衛する。

今回、新たに編成に組み込んだ航空母艦天城だが、突貫工事に突貫工事を重ね何とか、修理を完了し南西諸島攻略作戦に間に合わせる事が出来た。

工廠の妖精達にかなり無理を言って頼み込み、どうにかして南西諸島攻略作戦の1か月前までには修理を終わらせて欲しい、と。

その要望に応え彼らは1か月前、とは行かなかったが20日前にはどうにかして修理を完了、各種検査も異常無し。

訓練も実施日までの34日のみとは言え、行った。他の空母の乗組員とは比べ物にならない練度だが、まあしないよりはマシだろう。

乗組員の訓練は完了しておらず、更に本来ならば天城は定数80機の艦載機を搭載することが出来るのだが烈風48機のみを搭載するだけだ。

戦闘機隊の面々は元々十分な訓練を行っていて、搭載する空母が無かったから実戦に出ることが無かったと言うだけだ。

だがそれでも数がずっと少ないのは事実である。

にも関わらず何故編成に組み込んだのか。

理由は空母5隻だけだと敵艦隊との航空戦力差があまりにも開きすぎるからだ。

戦闘機隊は訓練も完了しているからあとは飛び立つための空母が必要なのだ。

だが5隻以外だと鳳翔しかおらず、鳳翔には攻略部隊を載せた輸送船団の護衛に就いてもらう予定だ。速力は25ノットと隼鷹、飛鷹と大差無いが艦載機数が問題だった。

零戦ならばかなり詰めれば40機は搭載出来るのだが今回搭載するのは烈風だ。

更に言えば烈風は零戦より機体が大きいから必然的に搭載機数が減る。

鳳翔は烈風を20機、対潜警戒用に流星を8機、偵察用に彩雲4機を搭載するのだが魚雷を搭載して流星を発艦させようとすると飛行甲板が短く滑走距離が足りずに海に落ちてしまう。だから鳳翔には対潜爆弾と、25番(250kg)くらいだ。

だからあまり戦闘力としては期待出来ない。しかも安全のために輸送船団は第1機動艦隊の後方50海里に配置するので即座の連携は出来ない。

話がズレたが、航空戦力を出来るだけ多くするためだ。

なので天城はどちらかと言えば今回は補助空母的な意味合いが強

い。

戦艦4隻は全艦が30ノットを發揮する事の出来る高速戦艦だ。

長門と日向をこの艦隊に組み込まなかったのは速力が30ノットに達していないからだ。

それだと艦載機発艦の度に艦隊から置いて行かれると言う事に成り兼ねない。

だから長門、日向の2隻は別艦隊に組み込んだ。

金剛以下4隻には対空火器の増設を実施日までに行う事になっている。と言うのも南西諸島、とりわけ主目的である沖縄本島近海や慶良間諸島には偵察の結果、正規空母ヲ級4隻に加えて軽空母ヌ級2隻が確認されている。

ヲ級だけで400機、ヌ級を含めれば500機に達すると予想される。

これだけの数を対空火器の増設も無しに挑めば面白い様にやられてしまうだけだ。

更にそれだけでは無く戦艦ル級が4隻に重巡リ級が6隻と主力艦だけでこちらよりも多い。辛うじて戦艦の数が勝っている程度だが今回ばかりはこれぐらいじゃ今までの様に都合良く、そう簡単にこの戦力差を引つ繰り返せるとは思えない。

特に問題なのは航空戦力の差だ。

こちらは438機なのに対して向こうは500機。

60機もの差がある。下手をするとそれ以上だ。だから出来るだけその戦力差を埋めなければならない。

偵察は第2潜水艦隊と、航空機による強行偵察を行った。

どうやら敵艦隊は沖縄近海に配備されていないなかったのだが我々の南西諸島攻略作戦を感じてか、欧州から戻った南方方面の戦力から割いたようだ。

しかも更に増援を送り込もうとしているらしく、南方方面の偵察任務に就いている第1潜水艦隊からの情報だからかなり信用出来るだ

ろう。

具体的な戦力や、規模はまだ未確認だが少なくとも空母を4隻、戦艦も同数は間違い無い。更にその随伴艦も多数同時に派遣されるだろうから最低でも30か40隻は下らない大艦隊に達する。

沖縄近海に既に存在する敵艦隊を相手取るだけですら戦力的にはかなり厳しい、いや確実に劣勢だと断言出来る。

なのにそこに更に敵艦隊が増援として送り込まれて規模が膨れ上がったなら、それこそどうにもならない。挑んだとしても戦力差でゴリ押しされるに決まっている。幾ら原田大佐以下のエースクラスの搭乗員や熟練搭乗員が揃っていたとしても磨り潰されてしまう。

その増援敵艦隊が派遣されないギリギリの期間が2週間後、と言う訳だ。

敵の増援艦隊が到着するまでに攻略、と言うよりは敵艦隊の殲滅を完了しなければならぬ。それさえ出来れば合流されて圧倒的戦力差で戦わなければならぬと言う状況だけは避けられる。

そして上陸する陸軍師団や特別陸戦隊を載せた輸送船団とその護衛艦隊の説明もしなければならぬ。

先ず護衛艦隊だが、

輸送船団護衛艦隊

航空母艦

鳳翔（旗艦）

烈風20機 流星8機 彩雲4機 計32機。

戦艦

長門

日向

重巡洋艦

那智

初梅 楠 樺 楓 椿 桃 竹 清霜 沖波 藤波 霞 峯雲 江風 海風 有明 子日 狹霧 浦波 白雲 東雲 驅逐艦
神通 龍田 天龍 輕巡洋艦 摩耶 愛宕 羽黒

第2戦隊

鳳翔

長門 日向

那智 羽黒 愛宕 摩耶

第4水雷戦隊

天龍

東雲 白雲 浦波 狭霧 子日 有明 海風

第5水雷戦隊

龍田

江風 峯雲 霞 藤波 沖波 清霜 竹

第6水雷戦隊

神通

桃 椿 楓 樺 楠 初梅

計30隻

輸送船団護衛艦隊は以上の様になった。

鳳翔だけじゃ航空戦隊は組むことが出来ない。鳳翔は第2戦隊に組み込まれ同戦隊と4水戦と行動を共にする。

陸上部隊

上陸部隊先発隊（この部隊は橋頭保の確保を目的とし、本隊の陸軍3個師団の上陸地点を確保するものである）

神州丸

海軍特別陸戦隊呉鎮守府所属 第3歩兵連隊2400名搭載

第107号輸送艦

第3砲兵隊100名及び牽引用装備搭載改造を施した一式半装軌

装甲兵車（ハーフトラック、略称ホハ）

第109号輸送艦

各種弾薬、砲弾及び糧食、真水、燃料を合計200トン分、更に輜重中隊160名搭載

先ず、先発隊として上陸し橋頭保の確保を担う海軍特別陸戦隊は2000名での歩兵を主力としてそこに工兵、偵察、補給、整備中隊と構成される第3歩兵連隊と九十一式10mm榴弾砲（実際の砲口径は105mm）6門を装備した第3砲兵隊100名からなる。

戦車部隊は無し。

各部隊装備武器

第3歩兵連隊

三十八式歩兵小銃（各人に1丁ずつ）

九九式軽機関銃（分隊事に1丁）

九四式軽迫撃砲（各中隊事）

八九式重擲弾筒（各小隊事）

九八式装甲運搬車（弾薬等運搬目的で各中隊に3両ずつ）

以上を装備。（指揮官クラスが装備する拳銃は含まず）

第3砲兵隊

九十一式10mm榴弾砲6門及び、その牽引を行うためと弾薬、砲弾等の運搬任務を兼任する牽引用の装備を取り付けたホハ（2トン分の積載が可能）6両を装備する。

このホハには九二式重機関銃が取り付けられている。

ただし砲兵隊を守るのは1個小隊50名のみなので敵に接近されると不味い。が、まあ後方からの砲撃支援が主任務だから別段問題は無いだろう。そうなっている時点で我々の負け、上陸作戦は失敗だからだ。

砲弾の運搬は牽引担当のホハが兼務する。最大12名の兵員もしくは2トンの物資のどちらかを輸送出来る。

これ以外にも装備している物はあるが大まかな武器のみの紹介に留めておく。

続いて陸軍師団。

第23歩兵師団

上陸予定地点 沖繩本島南部安座間浜

第39歩兵師団

上陸予定地点 沖繩本島南部安座間浜

第3機甲師団

上陸予定地点 沖繩本島南部安座間浜

2個歩兵師団はそれぞれ13隻の輸送船に搭載される。

機甲師団は九五式中戦車48両と機甲師団所属歩兵連隊や偵察、工兵、防空、補給、整備などの各隊と機材等を輸送するための第101号型輸送艦が追加で20隻。

更に砲弾薬を輸送する為の輸送船を15隻、予備の武器、燃料を輸送する船が8隻。

糧食、飲料水等を輸送する船が12隻。

その他諸々の輸送船を全て合わせて68隻にまで膨れ上がる。

これを護衛するのに30隻の護衛艦隊が付くから全部で98隻の大艦隊だ。

これだけの艦や輸送船をどうやって集めたのか、と言うと各地で損傷状態で修理も出来ず放置されていた輸送船や輸送艦を掻き集めて瀬戸内海中の使えるドックを総動員して修理を1秒の休みも無く行った。

輸送船、輸送艦は比較的修理は早く終わる。

だが護衛艦隊に最も必要としていたのは護衛艦隊の大多数を占める事になる駆逐艦だ。

以前にも言った通り、戦闘艦艇は大破着底だったりとかかなりの大損傷を受けている艦が多い。だが南西諸島攻略作戦は刻々と迫る。待つてはくれない。

だから損傷の度合は事前に調べていたから損傷の小さい艦順に修

理を行っていった。

訓練は十分ではないが何とか数を揃える事は出来た。それでも単純計算で護衛艦隊の艦艇1隻辺り3隻ないしは4隻の輸送船を守らねばならない。まあこれでも戦力を揃えられた方だ。当初護衛艦隊は20隻程度になる予定だったんだからな。

しかしながら欲を言わせて貰えばもう10隻とは言わないが6隻は欲しかった。そうすればもう幾らかは余裕が出来たのだが。

まあ今どうこう言ってもしょうがない。

今ある戦力でこの作戦を成功させるのだ。

陸軍のそれぞれの師団は同地点への上陸を予定しており、沖縄本島南部の安座間浜と言われる砂浜だ。

候補には北部の伊江の浜や宇佐浜、同じく南部の新原浜などがあつたがかなり遠浅で戦車揚陸艇が通れそうにない、との判断から却下。

安座間浜は元々観光用として深海棲艦の手に落ちる前は「あざまサンビーチ」と言う名前が付いていたが今はもう面影も何も無い。直ぐ近くにホテルなどがあつたが瓦礫の山となつているし海水浴なんてとても出来そうな場所じゃない。

本島の間辺りへの上陸も考えられたが北部と南部にそれぞれ戦力を割かなければならなくなり、各個撃破の可能性が出てきてしまうと言う事から断念。

もつと戦力があれば可能なのだがそんなものは無い。

そうすると北部か南部のどちらかへの上陸、となつたが北部には密林が広がっておりいきなりそこに突っ込むのは部隊への負担が大きいのと言ふ訳で南部の旧市街地等に上陸することになった。

安座間浜はそれなりに大きいので上陸に支障はないと思われる。

さて、大まかな作戦を説明しよう。

この沖縄本島上陸作戦、及び攻略作戦は大まかに分けて5つの段階がある。

まず第1段階。

航空機による爆撃、戦艦、重巡洋艦による徹底砲撃にて敵の防御陣地を破壊、海岸線に展開されていると思われるPTボートの基地等も存在するので同時に破壊する。これらは戦艦や空母からするとかなり面倒で厄介な相手だからだ。

砲爆撃終了後、安座間浜へ先発隊として海軍特別陸戦隊が上陸。即座に浜から1kmほどまでを確保する。

歩兵連隊の上陸完了後、砲兵隊を揚陸して火力を確保して砲兵隊の支援砲撃の下で更に500m、浜から半径1.5kmを確保する。

確実に1.5kmラインで防衛線を敷き、そのラインを超えて占領を行った後に押し返されても確実にそのライン内だけは確保して置けるようにするのだ。

この時、戦艦や重巡の砲弾だと威力が大きすぎて支援砲撃を行えない。だからこそその砲兵隊なのだ。

ここまでが第1段階。

第2段階

一連の作戦が終了後、第2段階作戦として陸軍の各師団が上陸する。

まず最初に第23、39歩兵師団が上陸。続けて第3機甲師団が上陸する。それが完了後、志喜屋漁港から仲伊保漁港を結ぶラインまで前進、奪還を行う。

この時も事前砲撃を行う予定だ。可能な限り陸上部隊の負担は減らさないといけないが洞窟などに立てこもられて砲撃終了後に出てこられるとかなり面倒だ。

元来沖縄の洞窟などはかなり固い材質で出来ていたりするから効果が薄いことも十分にあるのだ。烈風や流星で可能な限り上空支援

を行うがその時その時に対処して貰うしかない。

第3段階

沖縄本島南部全域の奪還を行う。

この際予想される戦闘の多くが瓦礫の山となった市街地戦である。どれほど残っているか分からないがかなり厳しい戦いになると予想される。

南部奪還後に飛行場を早急に建設、俺の指揮下にある陸軍第32飛行戦隊が進駐、海軍と合同で航空支援を行う。

その為の滑走路の資材となるコンクリートなども後々輸送を行う。

第4段階

本島中部までの奪還を目指す。

ここまですれば当初の上陸予定地点から伸びる補給線が短縮出来る。

第5段階

本島北部の奪還を目指す。

これが完了すると沖縄本島全域の奪還が完了したことになるのだが、南部と中部とは打って変わって北部は完全な熱帯雨林だ。戦闘の様相はまるつきり変わるだろう。特に航空支援がやりづらくなる。

木々に隠れてしまつて敵の詳細な位置が分かりづらくなると予想される。

これで漸く沖縄本島奪還作戦は完了する。

更に言えば沖縄本島奪還と並行して北部の奪還が完了次第、慶良間諸島の奪還も行う。

この時、海軍特別陸戦隊を向かわせるが損害の大きさによっては陸軍から幾らか部隊を回してもらおう事になっている。

さてここまで説明したが沖縄本島だけでなく先島諸島なども奪還しなければならぬから掛かる期間は全てを通して2〜3か月を予定している。

深海棲艦の陸上部隊からかなり頑強な抵抗を受けると予想されている。念の為に予備の師団を2個用意しているが願わくば投入しない事を願いたい。

と言うのも武器の充足率が足りず、戦線投入が出来ない。にも関わらず予備師団とされているのはこの2個師団が他の師団と比べて比較的充足率が高いからだ。

だから配備しなければならぬ小銃や機関銃、車両の数が少なくて済む。と言う事は短期間のうちに実戦投入が可能になると言う事だ。

実戦どこの部隊もそうだが武器や航空機の充足率は未だに100%とは行かず、50%を切るなんて当たり前だ。もつと低い部隊もザラにあるしもつと低いと10%20%も。

だが予備師団に指定された師団は、指定された時点で充足率60%に達していた。

今現在の充足率は85%程。銃火器の生産は続けられているのであと2週間もすれば充足率は完全となるだろう。

まあ、それ以前に我々海軍が敵艦隊を撃滅できるかどうかにかかっているのだが。それが失敗すると今までの準備が水の泡、二度と立ち直る事の出来ない損害を負う事になるだろう。

陸軍の各師団は妖精達の本領を發揮するために俺の指揮下に入る。既に車両や戦車などの重量物は積み込みが進められ、全国各地の工場で生産された弾薬、砲弾が呉や神戸と言った瀬戸内海の港に集められ、輸送船や輸送艦に積み込まれていく。

それを俺は書類などで処理していく。

戦闘艦艇は来る2週間後に備えてギリギリまで訓練を行い、各部の点検や必要ならば部品交換を進めていく。

ああ、そう言えば今日はビスマルクとヴァンガードと面会をする予定だったか。

書類に追われてすっかり忘れていた。

今は……18時か。もう訓練はとつく終わっている頃か。もしかすると風呂にでも入っているのかもしれない。

……呼び出すか。一応仕事にも区切りは着いたしな。

————— side —————
ビスマルク

日本に到着して1週間が経った。

日本はドイツと比べると随分と暑いけれどそれにも慣れ始めていた。

今は失った私の乗組員を日本海軍から借り受けてこの艦に慣れる訓練を毎日毎日朝早くから太陽が完全に沈むまで行う。

と言うか1つ言わせてほしい。

ドイツ人も勤勉だとか言われるけど日本人、民間の人間も同じなのかどうかは分からないけれど私達ドイツ人以上に勤勉と言うか、働くとか自分の持てる技術を向上させるとか、と言う事に対して貪欲過ぎる。

朝早く、と言うか辺りが明るくなる前から起きて準備を始めて、明

るくなり始める頃にはとつくに訓練の準備を終えている。なんなら筋トレをしている。

初日はただ単に私、ビスマルクに乗組員として配属されたことが嬉しかったんじゃないの？とか新しい物にはしゃいでいるんだ、つて艦長達生き残った面々と笑っていた。

2日目になつてもそうだったから日本のコトワザ？の三日坊主、つてやつなんじゃない？つて微笑ましく思った。

3日目もそうだった。

4日目もそうだった。

と云うか何であいつら、あれだけ長時間訓練をしてから風呂に入つて更に反省会までやって、甲板を走り回つて体力錬成云々やって……睡眠時間が5時間とかなのに朝になるとリセットされたみたいにあんな元気に動いているの？教官役の私達が先に倒れるわよ！と思つた。

5日目もそうだった。

と云うか本当に何なの？

これだけ訓練をやっているからか、びっくりするほど私に搭載されている兵器全般の扱いが異常なほど上達している。と云うか寝不足だから寝かせて欲しい。けど助けて貰つて更に乗組員まで工面して貰つて、色々とお世話になつている手前あまりそう言う事は言いたくない。どうすればいいんだろうか？と考えた。

6日目もそうだった。

と云うか待機状態から戦闘準備完了までが5分を切るとかどんな神経しているの？

艦内の移動速度が私達じゃ考えられないくらい速い。聞いてみたら、日本海軍じゃこれぐらいは普通だ、って。しかも戦艦配属になると基本的にこれ以上厳しい訓練を連日、休日無しで行うらしい。今は戦時中だからあれだけど…… やっぱり普通じゃない。

7日目である今日もそうだった。

どうやらヴァンガードとプリンツの所もそうらしく、2人共疲れた顔をしていた。

今日は、私やヴァンガード、プリンツの合同艦隊の艦娘は一度日本海軍全体の練度を見る為に、空母ヒリュウやソウリュウ、同じ戦艦であるナガト、コンゴウ、キリシマ達に乗った。

まあ、結論から言えば尋常じゃない。

訓練1つ取っても訓練中とは思えないぐらいの気迫で、私達に配属された乗組員の数倍、動作が洗練されていた。

例えば、ナガトやコンゴウ達の砲撃。

射撃用レーダーを使わずにあれだけの精度の砲撃を繰り出せる事に驚いた。レーダーを装備したら本当にどうなるんだろう……と恐怖した。

空母に搭載されている艦載機の搭乗員達も驚くほどに練度が高い。発艦までに掛かる時間はたったの10分程度。しかも発艦自体も驚くぐらい正確で、空中集合して編隊を組んでいる時もあれだけ接近して何故衝突しないのか不思議なぐらいだったりする。

それをさも当たり前前の様にこなす彼らをもってしても深海棲艦の物量の前では苦戦させられる。

艦載機の性能もドイツ海軍で使用している艦載機型のBf109Tより総合的な性能は高く、特に格闘戦が異常なほどに強い。

ドイツから輸送船に乗せて運んできたBf109G型じゃ格闘戦になると歯が立たない。高高度飛行性能はこっちが完全に勝ってい

るから急降下一撃離脱に徹すれば何とかなるけど真正面から同高度、格闘戦と言う状況だと確実に負ける。速度面ですら若干負けているし航続距離も日本が上。

どのパイロットも高い技術を持つけど、特に精鋭なのはヒリュウとソウリュウの戦闘機隊だ。

ヒリュウに乗っている戦闘機隊の隊長なんかは4対1でも落とされない。なんでも何年も前から最前線で戦い続けて生き残っている歴戦のパイロットらしい。

それ以外の搭乗員も同じ歴戦で、最低2対1ぐらいになっても問題無いように訓練をしている。

丸々1日訓練の様子を見て、帰ってくる。

それと同時に提督に対して面会をしたいと言う旨を伝えてもらえるように言っておいた。

本国の首相から渡された手紙なんかも渡さなければならぬけど、大きな作戦を控えているからどこもかしこも大忙しで暇が無かった。

返って来た返事は、明日時間を取る、だそう。

何時になるかは分からないが呼び出すから、そしたら来てくれと言う事だった。

まあ本当は朝一にでも面会したいけど向こうにも都合だったりこんな時局だから仕事が山ほどあるだろう。そんな中無理を言っただけで面会時間を設けて貰うのだから引き下がる。

ああ、そう言えば今度の作戦に私とヴァンガード、それにプリンツも参加する事になった。所属する艦隊なんかは既に通達されていて毎日艦隊運動の訓練を行いながら対空戦闘や砲撃戦の訓練もやる。これがキツイ。滅茶苦茶キツイ。私もかなり長い事最前線で深海棲艦と戦ってきていたから甘く見ていた。

寧ろ配属された日本の妖精を見て思うべきだったのだ、訓練は絶対にキツイ、と。

それはさておき、なんでそんな急に私達も作戦に参加するのか。

理由は詳しくは聞かされていないけれどもどうやら戦力が足りていないらしい。

私達からすると日本海軍は今でも大艦隊を誇っているように見えるけれど実際はそうじゃない。彼女達が根拠地としている瀬戸内海は他の地域に比べると比較的安全で空襲に晒される可能性も低い。

だけど日本全国を見ればそうじゃない。例えば首都のトウキョウは瓦礫の山で人っ子一人いない廃墟地帯になっているし毎日の様に爆撃機が飛んできては被害を与える。

瀬戸内海のあちこちにも大破着底、浮かんでいられないから小島に座礁させた艦も多い。欧州でも大きな話題になったヤマトにムサシもそうだ。

そんな中で使える戦力が、例え別の国の艦であろうとあるのならばそれを頼らなければならぬぐらいに日本も追い詰められている。

ドイツやフランスの様に日本は、陸続きの大陸国家じゃない。

イギリスみたいな頼れる国も居ない。アメリカは太平洋を隔てた遙か東。

中国やロシアは内陸に引き籠っているし戦力も無いから使い物にならない。追い詰められている日本はこの国とも協力をすることが出来ず、援軍を乞う事も出来ない。

特に日本は周りの国と私達の感覚からすれば戦争になっただけでもおかしくはないぐらい仲が悪い。どうやったら手を組もうとすれば足元を見られるか。

だからこそ単独で戦い続けている。ドイツ以上に資源に乏しい国がここままでやれるか？

それなのに今の今まで島々を奪われても本土だけには絶対に上陸を許さない。

欧州じゃ北欧のノルウェーやスウェーデン、地中海方面にも深海棲艦の大攻勢以降に強行偵察で棲巣が確認されている。一番最近じゃフランスのブレストにも上陸されて棲巣が構築された。

イギリスもポーツマスに棲巣が出来てしまっただけで内陸部か大陸に逃

げた。

欧州は各地の要衝を完全に深海棲艦に抑えられて深海棲艦の手に落ちた。

だからこそ私達は何時か欧州を奪還して深海棲艦を叩きのめすために日本まで犠牲を払いながら逃げてきた。祖国を守ると言う事を捨てて。

夕方、18時頃に呼び出された。

提督である男はどんな人間なのだろうか？未だに顔合わせも出来ていないから少し緊張する。

そもそも私達は彼の事を日本に到着、と言うより救援に来てくれた時まで知らなかった。今の世界は陸続きでも無ければ連絡を取り合う事なんて出来ない。海底ケーブルは深海棲艦によつてとつくの昔に分断されている。確か日本と欧州が最後に連絡官を通して情報交換をしたのはスエズ運河防衛戦で撤退したときだったはず。だから2年以上前の話だ。

だから存在を一切知らなかった。まあどうやら日本国内でも機密扱い、それも最上位クラスらしいから民間人は一切知らない。

国家として知っているのは軍の妖精達と日本陸海軍上層部、それも元帥クラスとこの国のエンペラーぐらいかしら？

どうにかして情報を掻き集めてもこれだけしか知らない。そもそも下士官クラスにも徹底して箝口令が敷かれていて全然教えてくれない。上からの許可が無い限りは絶対にしゃべらないと言ったところだろうか。

しかし日本海軍に所属するから最低限の情報共有はしておきたい。

呼び出されて、案内の妖精に連れられて執務室に向かう。けどあの立派なレンガ作りの建物では無いのかしら？

「ねえ」

「はっ、何でありましょうか？」

「執務室ってあっちの建物じゃないの？」

「確かにあちらには執務室がありますが使われていません」

「どういう事？」

「と言うのも深海棲艦の爆撃で倒壊の恐れがあるからです。実際に補修作業も行われていません。それに使う資材があるならば修理などに回せ、と提督ご自身からの指示でした」

確かによくよく見るとあちらこちらにヒビが入っていてボロボロだ。

立て看板もあるし恐らく立ち入り禁止なのだろう。

「そうなの。ならどこに執務室があるのかしら？」

「あちらです」

何処にあるのか聞いてみると顔を向けたのは急造の、しかも何年も使っていると言った雰囲気があるプレハブだった。二階建てで装飾なんて施されていない建てられた時そのまま取った感じだ。

だけどその周りの防備が尋常じゃない。

完全武装の陸軍か海軍かは分からないけれど歩兵と思われる妖精が300人、防御陣地を築いているし、それだけじゃなくて対戦車砲や対空機関砲が置かれている。見張り台も四方を囲んでいるし鉄条網や塹壕が掘られて土嚢で作られた機関銃座もあちらこちらにある。

まあ確かに提督と言うその存在を考えればこれぐらいは当然なのだろうか？イタリアの戦死した女性提督はこれ以上の警護を引き連れていた。

まあ本人は面倒そうにしていたけれど。

多分こういうのって本人の意思とかに関係無しに付けられるものなんだと思うわ。

「面会予定の艦娘ビスマルクとヴァンガードをお連れしました」

衛門で案内の妖精がそう報告すると身体検査が始まる。

と言うか嚴重過ぎない？確かに深海棲艦が紛れ込んでいないなんて保障はないから嚴重すぎるなんてことは無いだろうけど……

それを終えて防陣地を抜けて漸く執務室であるプレハブに入る。執務室は1階にあるらしく、扉に執務室、と可愛い字で書かれた看板が掛けられている。

……提督が書いたのかしら？男性と聞いていたのだけれど……

案内の彼は執務室のドアをノックする。

「提督、ビスマルクさんとヴァンガードさんをお連れしました」

「入ってくれ」

中から聞こえてきたのは確かにまぎれも無く男性の声だ。

「どうぞお入りください」

案内の彼はドアを開けて私達に入るように促す。

よし、入ろう。隣にいるヴァンガードも普段は無口で喋らないけれど緊張しているのが分かる。

中に入ると提督と思われる男性に秘書の様な役割を持つ艦娘が1人、机に向かって仕事をしていた。

「ビスマルク、参りました」

「ヴァンガード、参りました」

私とヴァンガードは揃って敬礼をして挨拶をする。

「ああ、態々ご苦労」

そう言うのと立ち上がって答礼をする。

身長は恐らく180cmくらい？見た目は痩せ型で雰囲気は柔らかい。顔も優しい感じで少なくとも軍服を着こんでいるが軍人とは思えない。

「ただどここんな状況だから苦労が絶えず疲れている様子だし目の下に隈がはつきりとある。」

「お忙しい中、お時間を取って頂き感謝します」

「ああ、元々顔合わせはしたかったから気にするようなことでもない。それで、面会を希望した理由は？」

「こちらの手紙をお渡ししたかったのと、代表してご挨拶を申し上げます」

たかったからです」

「手紙？ふむ、今読んだ方が良いか？」

「出来ればお早めにお願ひします」

「分かった。良ければ座って待っていてくれ。照月、彼女達にお茶でも入れてくれ」

「はい」

そう言つて提督は手紙を読み始めた。

そして私達は椅子に座つて待つ。そんな私達に出されたのは緑茶と言うやつ。

一口飲んでみるとコーヒーや紅茶の苦みとは違つた苦さを持つている。うーん、美味しい？のかしら？初めて飲んだからイマイチ良く分からない。まあ不味くはないから良いけれど。

暫くすると、手紙を読み終えた提督は顔を上げた。

「……手紙の件、了解した。私が手紙と共に同封されていたこの書類にサインをすれば、君達合同艦隊の艦娘とその艦体、及び妖精は正式に日本海軍籍となる。本当に構わないか？」

「ええ。問題ありません」

「私も問題ありません」

「……そうか。分かった。ならばサインをさせて貰う」

そう言つて提督は万年筆でサインを書き込んでいく。

「……よし、これで君達は正式に日本海軍籍となつた。まあ正確には私の上司である市木大将のサインと認可も必要なのだがな」

「ありがとうございます」

「感謝します」

「ああ、堅苦しい話し方をしなくても良いぞ。話し易い物で構わん」

「そう？ならそうさせてもらうわ」

この提督、私達にはそういうけど威厳とかを出すために自分の本来の話し方をしてないのよね。

まあでもしようがないか。

私が提督に渡した手紙は欧州各国のトップ、いわゆる大統領や首相達の思いを書いたものだ。イギリスはエリザベス女王が直々に筆を執って書いたらしいけれど。

提督がドイツ語や英語、フランス語を話したり読んだり出来るかどうか分からないから全部日本語で書いてある。

内容としては、欧州や各国の現状など。

更には私達合同艦隊を正式に日本海軍籍とする事。

その辺にどんなやり取りとかがあったのかは分からない。

多分その辺の事は手紙に書いてあるんだろうけど機密扱いで私達には読む権限が無い。

やり取りが終わって、提督は言った。

「よし、これで用件は終わりだな。すまんが見ての通り仕事が残って
いてな」

「いえ、気にしなくて良いわ。邪魔しない内に私達はもう行くわ」

「すまんな」

「良いわよ。今度一緒にランチにでも行きましょう」

「ああ」

「それじゃあ失礼するわ」

そして私は執務室を後にした。

最後に食事に誘ったけれど普通は社交辞令なんだけど、人間性とか色々知りたいから今度本当に誘おうかしら。

と言うかヴァンガード、貴女何で一言も喋らないのよ。

全部私が受け答えしてたじゃない。

まあどうせ文句言ってもそれにも答えないだろうけど。

そう思いながら衛門の待機所に居る案内の妖精と共に自分の艦のところまで帰った。

第16話

ビスマルクとヴァンガードと面会してから2週間が経った。

今日は南西諸島攻略作戦の実施日だ。

今は昼間の午後1530だ。

出撃予定時刻は1600で既に前路哨戒の為に第3水雷戦隊が豊後水道、更にはそこを抜けて日向灘方面まで前に出ている。今回取る航路は太平洋に出ず、最初は九州沿岸を航行する。

都井岬に到達後、針路を若干太平洋方面よりに取りながら種子島、喜界島を通過して沖繩に向かう。

恐らく喜界島近海かそれを過ぎた辺りで敵艦隊の迎撃を受けるだろうと思われる。

喜界島には1200m級の滑走路を持つ飛行場が存在し、敵航空機の存在も確認されている。しかも規模が150機以上の敵機が存在すると考えられる。

さらに奄美大島にも飛行場が存在する。こちらも150機を超える航空戦力が存在していると考えられる。

もし敵艦隊の迎撃を受ければ敵基地航空隊と同時に相手取らなければならぬために苦戦は必須だ。

さて、これをどう突破すべきか？

これは出航時刻に関係する。

呉から奄美大島と喜界島までの距離は凡そ980km。

1600の出撃だと18ノットで航行する予定だから夜中の0200時頃に到達すると思われる。この時間帯ならば辺りは真っ暗で航空機を飛ばす事は叶わない。

と言う訳で戦艦の出番だ。

第1機動艦隊には4隻の高速戦艦を組み込んだのはこの為だ。4隻の戦艦の艦砲射撃をもってすれば最低1週間は使用が出来なくなる。しかもどちらの飛行場も海側に面していて狙い易い。

ただ1つ問題なのが喜界島と奄美大島の距離が20kmある事だ。太平洋側から喜界島、奄美大島と狙っていくと幾ら固定目標とは言っても長射程になればなるほど精度が落ちる。

出来るだけ接近しなければならぬのだがそうすると両島間を通り過ぎるのが一番手っ取り早い。

だがそうすると敵のPTボート（高速魚雷艇）に襲われる事になる可能性が高くなり厄介だ。駆逐艦ならばPTボート相手は楽なのでこれが戦艦や巡洋艦となると良いカモにしかない。

解決策は各個撃破、太平洋側の喜界島から先に叩き次に奄美大島、と言う事になる。

まあ正直これぐらいしか解決策が無いと言うのもあるのだが、敵艦隊との戦闘前に戦力が削られる事は避けたい。

そして出撃時刻を迎え、艦隊は一斉に錨を巻き上げる。

旗艦である飛龍には俺の将旗と共に乙旗が掲げられている。

乙旗には本来、国際信号旗として単独で航行している時に「私は引き船が欲しい」と言う意思と漁場で「私は投網中である」の意を示す信号旗として用いられることが通常だ。

だがスポーツでの応援、選挙・受験など負けられない戦いに挑む時などに「勝利」を祈願して用いられる場合があるが、意味としては国際信号旗の意味しか有していない。

だが海軍の、特に海戦において乙旗は特別な意味を持つ。

我々としてはかの有名な「皇国ノ興廢此ノ一戦ニ在リ、各員一層奮励努力セヨ」と言う意味がある。今回の戦いは文字通り負ければあとが無い戦いだ。俺達には相応しいだろう。

「提督、艦隊が豊後水道を抜けました」
「全艦に輪形陣形成を命じろ。同時に対潜対水上警戒を厳と成せ。無電封止も徹底させろ。ただし敵機、敵潜、敵艦発見等の報告は即座に知らせるように」
「了解しました」

秋月
能代 矢矧
照月 鈴谷 若月
涼月 熊野 古鷹 霜月
初月 飛龍 隼鷹 春月
陽炎 金剛 飛鷹 ビス 村雨
蒼龍
霧島
雪風 瑞鶴 天城 ヴァ 時雨
浦風 青葉 プリ 響
萩風 多摩 隴
宵月 花月 満月
花月 初雪
浦波 菊月
望月

輪形陣は以上の様になった。
基本はこれまでと変わらず空母6隻を中心にその周りを戦艦、重巡

と囲んでいく。

今は艦隊は各艦の縦横距離を300mで取っている。全長約5kmにもなるだろうかと言う陣形だ。

だがこれでもかなり密集している方なのだ。

何故距離を近く保っているのか、と言うと、これは対空戦闘の際に効率よく弾幕を形成出来るようにするためだ。

輪形陣と言っても菱形に近い形をしていて各艦からの対空射撃で十字砲火の形成も容易だ。

この陣形のまま、艦隊は進む。

艦隊は種子島沖30海里に到達。

種子島とその隣にある馬毛島には海軍航空隊の飛行場が存在していたが度重なる敵重爆や敵空母艦載機の空襲により同飛行場の航空隊は壊滅、撤退した。

幸いなのは敵に未だ占領されていない事だ。もしここまで占領されていれば日本本土までの上陸ルートが確保されて九州方面への上陸が有り得ただろう。

同地を未だ我々が保持しているのはこの2つの島を陸軍が死守しているからに他ならない。この島には計3個師団が配備されているが、武器の充足率は30%にまで低下しており、敵の大部隊が上陸してきたら負ける。

今回の南西諸島攻略作戦は、資源輸送ルートの確保、防衛線の前進等、ありとあらゆる意味で重要だ。

この作戦が失敗すれば、日本は二度と深海棲艦に対して反抗することとは出来なくなる。

何があっても成功させなければならぬ作戦なのだ。

「提督、能代が敵潜を捉えました」

「距離と位置は？」

「南南東7海里前方です」

「数は？」

「1隻のみです。恐らく哨戒かと」

「通報されたか？」

「いいえ、まだ通報はされていません。新月ですからこちらを視認していないか、それとも詳細な戦力を確認するまでは通報しないつもりでしょう」

「仕留められるか？」

「可能ですが、どちらにせよ敵主力艦隊に我々の動きは察知されます」

「後々、付け狙われるよりはマシだろう。やっつけてくれ」

「了解しました。向かわせる艦はどういたしますか？」

「任せる」

その後、浦波、菊月、望月の3隻が潜水艦狩りを始めた。

「提督、浮遊物を確認したとの事です。撃沈です」

「良くやった、と3隻に伝えて置いてくれ」

「了解しました」

どうやら敵潜水艦を仕留めたようだ。これで暫くは安心出来るだろう。

「どうだ、何か異常はあるか？」

「今現在各艦、各種電探、ソナー、逆探に反応ありません。目視でも異常無しです」

「これがどこまで続くかな……いつそのこと敵には撤退して貰いたいものだがな」

「そうはいかないでしょう。敵も死に物狂いで抵抗してくるはずですから」

「だろいな……なら俺達も死に物狂いで奴らに抗うしかない」

艦橋に残っているのは俺と副艦長、それに飛龍と艦橋要員の下士官だけだ。

副艦長と話ながら前を見据える。

「夕食をお持ちしました」

「ん、ありがとう」

席に座っていると艦橋に夕食の握り飯と沢庵、それに味噌汁を持って来てくれた。

艦に乗ると基本これだがこれがまた旨い。握り飯は少しばかりしょっぱいが汗をかいて動き回る事を考えたらこれぐらいが丁度良いのだろう。

食べ終わると、空になった皿と椀、それが乗っている盆を下げていく。

「提督、そろそろ艦隊分離地点です」

「……よし、無電封止解除。戦艦4隻と3水戦は分離。順次艦砲射撃始め」

「了解。打電します」

「深海棲艦の奴らに戦艦の砲弾をお見舞いしてやれ」

その後、金剛、霧島、ビスマルク、ヴァンガードは3水戦を引き連れて増速、喜界島の飛行場に向けて砲弾を叩き込むべく向かって行く。

その30分後、金剛から艦砲射撃開始の電文が届いた。

更に30分後、喜界島の飛行場の艦砲射撃終了、続いて奄美大島の飛行場の艦砲射撃に移ると言う電文が届いた。

「提督、艦砲射撃終了しました。金剛以下これより合流します」

「ああ。それで、戦果は十分か？」

「報告によれば最低2週間は使い物にならないだろう、との事です」
「確かにあの様子じゃあ、使い物にならないだろうな」

遠目に見える喜界島と奄美大島の飛行場がある場所は盛大に燃えている。爆弾や魚雷の倉庫か燃料タンクか何かに引火したのだろう、断続的に爆発が起きて火柱が上がる。

それから暫くすると金剛達が合流し再び輪形陣に加わった。

「提督、第2潜水艦隊より入電。敵艦隊が動き出したそうです」

どうやら沖繩本島近海で遊弋していた敵艦隊はこの艦砲射撃と、先の潜水艦の撃沈も相まってか俺たちの存在に気が付いたらしい。

大急ぎでこっちに向かって来ているらしく、第2潜水艦隊が通報してきた。

「了解した。日の出と共に偵察機と攻撃隊を出す。準備を始めてくれ」

「了解しました」

「それと第2潜水艦隊に可能であれば雷撃、敵戦力を削る様に送ってくれ」

「了解しました。優先目標は空母と戦艦ですか？」

「出来ればそれが一番だが戦力を削いでくれるのであればなんでも構わん」

「了解しました。直ぐに伝達します」

今更だが潜水艦隊に敵艦隊を雷撃するように命じる。

運が良ければ空母や戦艦を雷撃する地点や機会が来るだろう。

さて、どうするか。ここから敵艦隊までの距離は凡そ130海里(約237km)と言ったところか。

この距離ならば十分に攻撃隊の攻撃範囲内だ。

しかしもう少し手前で敵艦隊の迎撃を受けると予想していたんだがな。

そして日の出になった。

そしてすぐさま偵察機の発艦が始まる。各艦から彩雲を4機ずつ24機。8方位に3段構えの索敵だ。

万が一敵艦隊の索敵取りこぼしがあれば先手を譲る事になる。
そして続いて攻撃隊の発艦が急がれる。

今回は敵艦隊との距離が近く、彩雲が敵艦隊を発見したらその誘導に従って敵艦隊に向かう事になっている。

各空母の攻撃参加機は以下の通り。

第一次攻撃隊

第一波攻撃隊

飛龍

烈風 1 6 機 流星 2 0 機 (爆装 8 機 雷装 1 2 機)

蒼龍

烈風 1 6 機 流星 2 0 機 (爆装 8 機 雷装 1 2 機)

瑞鶴

烈風 1 6 機 流星 2 0 機 (爆装 8 機 雷装 1 2 機)

隼鷹

烈風 1 6 機 流星 2 0 機 (爆装 8 機 雷装 1 2 機)

飛鷹

烈風 1 6 機 流星 2 0 機 (爆装 8 機 雷装 1 2 機)

天城

烈風 1 6 機 流星無し

烈風 9 6 機 流星 1 0 0 機 (爆装 4 0 機 雷装 6 0 機)

第二波攻撃隊

烈風 1 2 機 流星 1 2 機 (爆装 6 機 雷装 6 機)

蒼龍

烈風 1 2 機 流星 1 2 機 (爆装 6 機 雷装 6 機)

瑞鶴

烈風 1 2 機 流星 1 2 機 (爆装 6 機 雷装 6 機)

隼鷹

烈風12機 流星12機(爆装6機 雷装6機)
飛鷹
烈風12機 流星12機(爆装6機 雷装6機)
天城
烈風12機 流星無し
烈風72機 流星60機(爆装30 雷装30機)
計烈風168機 流星160機(爆装70機 雷装90機)

流星は全機残らず攻撃に向かわせ、防空用に烈風を65機残しておく。

正直言ってしまうえば65機でもかなり不安が残るのだが、かと言って攻撃隊を手薄にする訳には行かない。

寧ろ攻撃隊には何が何でも第1次攻撃で敵空母を叩いてもらわなければならぬ。

敵空母をこの攻撃で3隻、とは言わずとも2隻は仕留めて貰わなければならぬ。

3隻、仕留めて貰えれば後々の戦いが有利になる。

まあそれはこちらが空母に一切の損害を負わなかったら、と言う前提の下で話しているのでこれは有り得ない。

敵の攻撃でこちらはどれだけ軽く見積もっても、2隻の空母が戦闘能力を損失するか、もしくは沈められるだろう。

500機以上の敵機が大半して襲ってくる。1回の攻撃隊で来襲するのは150機以上を超えると予想される。65機の烈風では守り切れないだろう。

攻撃隊の皆は敵戦闘機の迎撃を考えるとかなり厳しい戦いになるだろうが、そこは貰わねばどうにかして敵に損害を与えるべく頑張つて貰わねばなるまい。

攻撃隊が飛び立って行った。

敵艦隊との距離を考えれば1時間半ほどで到達出来るだろう。

「……参謀長、二航戦に三水戦を連れて退避するように命じろ」

「はっ!?退避ですか?」

「そうだ。我々一航戦で敵攻撃隊を吸収、受け止める。その間に二航戦には直掩戦闘機隊の収容と燃料弾薬の補給を受けさせるんだ。これだけで深海棲艦の攻撃が終わる筈がない。第二波、第三波に備えなければならん」

「了解しました。即座に退避命令を出します」

「ああ、戦艦と重巡はこちらに残して置け。その方が目立つ」

「はっ、分かりました」

最初は驚きと困惑の色を浮かべていた参謀長だが俺の考えを理解してくれたのか頷いてくれた。

確かにこの命令は今現在構築している輪形陣を崩す恐れもあるし飛龍以下3隻に攻撃が集中してリスクが高まる。だが、敵の第二波攻撃隊に備えて早急に直掩戦闘機隊を立て直さなければならぬ。

それを考えると6隻纏まって回避運動をして空母6隻に攻撃が集中するよりかはこちらの方が遥かにマシだ。

それに隼鷹と飛鷹は25ノットまでしか出せない。

これに合わせていたら回避出来るものも回避出来なくなる。

「提督、攻撃隊が敵艦隊への攻撃を開始しました」

「そうか……敵の攻撃隊はどうなっている？」

「電探に捉えてからすぐさま迎撃の烈風を上げ、戦闘中です」

この40分程前には、既に我々の電探は敵攻撃隊を捉えていた。

その数、なんと150機にも及ぶ。

烈風は空母から全機が飛び立ち、迎撃に向かって戦闘を始めていた。

同時に俺は艦隊に対空戦闘用意を下令し、何時でも戦艦の主砲は三式弾を放てる用意が出来ていた。だが金剛と霧島しか三式弾を装備しておらず、ビスマルクとヴァンガードは主砲の準備をしていない。

さて、どうにかして切り抜けなければなるまい。

一方その頃、敵攻撃隊迎撃に向かった烈風65機は敵戦闘機との戦闘に忙殺されていた。

この時に深海棲艦側の攻撃隊に随伴していたF6Fは40機程だった。

(戦闘機の数ならばこちらが勝っている。これならば十分に敵攻撃隊を撃退する事は可能か……)

迎撃隊の隊長は同数の40機を敵戦闘機との制空戦闘に差し向け、抑え込んでいた。

事実、戦闘機隊の腕もあり戦闘機同士の戦いに限っては烈風が勝っていた。だが雷撃機や爆撃機への攻撃は隊長の思いとは真逆で遅々として進まなかった。

と言うのも数が多すぎたのだ。

この時深海棲艦側の攻撃隊の数は146機に上り戦闘機の数も44機。それ以外の101機は雷撃機56機、急降下爆撃機45機。

それに対して25機の烈風は5機ずつ分かれて波状攻撃を仕掛けているが数が多い事と雷撃機と爆撃機の防御火器がこれだけ数が揃っているとかかなりの高威力を發揮する。

当初、25機の烈風は上下に分かれて挟み撃ちにしていただけだが防御火器によってそのやり方は直ぐに意味をなさなくなった。

「おい！下手に敵編隊の上に出るな！狙い撃ちにされるぞ！」

隊長が通信機に向かって怒鳴りながら注意を促す。

下方からの攻撃ならば防御火器は背面飛行でもしない限り向けら

れることは無いがその下方からの攻撃後に敵編隊の上に離脱しようと飛び出ると一斉に防御火器を食らうのだ。

それによって6機の烈風がたちまち落とされた。

出来るだけ下方からの攻撃を心掛けるがどうしても速度が乗っていたりすると機体を翻せずに出でしまう。

敵戦闘機との戦いに身を投じていた烈風の何機かが手隙になって敵攻撃隊の方に応援にやってくるがやはりどうにもならない。

それでも雷撃機を26機、爆撃機を27機撃墜していた。

更に何機かずつの深海棲艦機が爆弾や魚雷を投棄して逃げ帰っていた。

戦闘機隊の方は敵戦闘機を半数ほど撃墜して圧倒していた。

20mm機銃と13.2mm機銃の銃弾は命中すれば防御力が高い深海棲艦機とは言え致命傷になりえる。

が、それもここまで。

そろそろ艦隊の対空砲撃が始まる地点だった。

だから烈風はその場を退避した。後ろ髪を引かれる様ではあつたが同士討ちなんてしてしまつてはそれこそ堪らない。

この時、烈風の数53機にまで減っており更に燃料タンクに被弾している機体が何機か存在し、燃料に不安の残る機体が幾らか存在していた。

銃弾はまだ半分程度残している機が多く問題は無かつた事とエンジンへの被弾をしている機体が居ないことが幸いだらう。

だが彼らは空襲を受けている空母に戻る訳には行かない。かと言って敵機に攻撃を加える事も出来ない。今はただ見守るしか出来ないのだ。

そこへ二航戦を退避させたから即時そちらに着艦、次の敵攻撃隊に備えよ、と言う命令が入る。

戦闘機隊はその命令に従って二航戦を目指した。

烈風に迎撃をすり抜けて26機の雷撃機と16機の急降下爆撃機、合わせて42機が艦隊に迫って来る。

「敵機2群に分かれます！左舷より16機！左舷後方から26機！」

「敵機はどうやら雷爆同時攻撃を仕掛けてくる模様です。雷撃機は左舷後方から回り込んで急降下爆撃機の投弾で回避に移った我々を狙おう、と言う意図でしょう」

艦長がそう言う。今回は飛龍が舵を取る。

着物を白帯で襷掛けにし、じっと空を睨む。

「回避は出来そうか？」

「可能な限り努力はする。だけど雷撃機的位置が絶妙で取舵、面舵どちらに切っても命中弾の可能性が高いね。提督の将旗を掲げている私は間違い無く狙われるだろうから気を付けて。全弾回避を目指すけど、被弾するもの、として覚悟しておいて」

「ああ、頼んだぞ飛龍」

そう飛龍は言うが彼女の操艦の腕は確かだ。信じるしかあるまい。

艦隊は空母を中心に距離を取って空母が回避出来る様になっている。

元々舵を取っていた妖精は見張り員として立つ。

「見張り員！敵機的位置と投弾のタイミング、全部正確に報告して！」

「「「「了解！」「「「「」」」」」」

見張り員達は大声で飛龍に応えた。

金剛、霧島を始めとした各艦が主砲の射程に入り次第、三式弾を撃ち放つが撃墜出来たのは4機のみだ。

更に接近する敵機に対して対空砲が一斉に火を噴く。空は瞬く間に対空砲弾が爆発した時に発生する黒煙で覆われる。敵機の内は何機かが対空砲弾の破片か何かを受けて煙を吐く。だが撃墜には至らない。そのまま艦隊に向けて突っ込んでくる。

艦隊は30ノットで対空砲を撃ちながら海上を走る。

隼鷹と飛鷹、天城は攻撃隊発艦後に3水戦を引き連れて艦隊から離れ既に水平線の向こう側だ。空からは見えるかもしれないが空母3隻戦艦4隻と言う、目の前にぶら下がっている特大の餌に食いつかない訳にはいかんだろう。事実、敵機は全てこの艦隊に向けて突っ込んでくる。

「敵機、機銃の射程に入りました。撃ち方始めます」

艦長がそう告げると同時にあちこちから連続した射撃音が響いてくる。

「敵雷撃機1撃墜！」

その報告通り確かに敵雷撃機が1機海面に突っ込んで水飛沫を上げていた。

だがそれ以降敵機撃墜、と言う報告を見張り員がする事は出来なかった。

23機の雷撃機と14機の急降下爆撃機が飛龍、蒼龍、瑞鶴目掛けて突っ込んでくる。

狙われたのは飛龍と蒼龍の2隻だった。

飛龍

蒼龍 瑞鶴

この時、空母3隻は飛龍を先頭に三角形の形で進んでいた。

敵の雷撃機は左舷から突っ込んできていたので狙われやすい位置にいた。

「敵急降下爆撃機、我が飛龍に8、蒼龍に6！突っ込む！」

「方向と位置は!？」

「左舷10時方向からです!」

「敵機直上!急降下!」

急降下爆撃機が飛龍と蒼龍に向かって急降下を始めた。

投下されるであろう爆弾を避ける為に飛龍は思いつ切り右に舵を切った。だが舵が利き始めるのには時間が掛かる。

それから守るために周りの金剛達が機銃を撃つ。

この時、絶大な威力を発揮したのはビスマルクの装備する37mm機関砲と20mm機関砲、ヴァンガードが装備する40mm機関砲だった。

これらの機関砲は炸裂弾や榴弾多くを含んでおり命中せずとも被害を与えることが出来た。しかも発射速度がかなり速く飛龍と蒼龍の真上はあつ、という間に黒煙に包まれる。

どういう訳か我々日本海軍の使用している25mm機銃には炸裂弾などが含まれていない。確かに25mmと言う航空機にとっては命中すれば十分な脅威になるが、当てなければ意味が無い。

「敵機更に3機撃墜!」

見張り員の報告に一瞬、この様子だと無事切り抜けられるか!？と思つた束の間だった。

「敵機投弾!」

「続けて2機が投弾!」

すると漸く舵が利き始めた飛龍の艦中央右舷に敵弾が落下、炸裂した。

「至近弾!」

「大丈夫だ!至近弾程度では飛龍は沈まん!」

一旦舵が利き始めると弧を描きながら急旋回をする飛龍。急旋回によつて艦体は外側に傾いている。

次に見張り員の報告を頼りに飛龍は左に舵を切りなおしてそのまま左旋回に持ち込む。

そうやって左へ右へと避けていき2機目3機目の投弾も次々と避けていく。

その時、遂に雷撃機が突っ込んできた。

「雷撃機突っ込んできます！距離3000！」

「奴ら雷爆同時攻撃をしくじったな！この距離ならば別々の攻撃になる！」

「艦長！ビスマルクとヴァンガードには敵雷撃機を狙わせろ！」

「了解！」

俺の指示によってビスマルクとヴァンガードは一斉に雷撃機に向かって機関砲を撃ちまくる。

「敵機投弾！」

最後の2機が投弾する。

その敵機はかなりギリギリの高度で投弾して機体を引き起こしたのか海面すれすれで持ち直すとそのまま飛び去って行く。

「つ！！回避間に合わない！伏せて！」

飛龍が叫んだ。

次の瞬間、飛龍の飛行甲板に敵弾が続けて2発突き刺さり爆発を起こす。

爆風は艦橋のガラスを叩き、吹き飛ばされた飛行甲板の破片などが音を立てて当たる。

「ダメージコントロール！消火急げ！」

艦長が怒鳴り声を上げながら矢継ぎ早に指示を出す。

「雷撃機右舷より接近！我が飛龍に8機！蒼龍に8機！」

「もうひと踏ん張りだよ！」

「1機撃墜！更に1機撃墜！」

「敵機1500m！」

「このまま左舷を見せるまで旋回してから一気に取舵にするよ！」

その報告を受けて飛龍は右旋回を続けて敵機に対して左舷が丸見えになった時、先ほど言ったように今まで面舵で右に思いっ切り旋回していたのを飛龍は左に大きく取舵に取った。

「敵機距離900！2機投弾！」

「時間差をつけてか……………！」

「敵魚雷2接近！」

「大丈夫！これは回避出来る！」

「敵機更に6機投弾！」

「直撃針路です！避けられません！」

「総員衝撃に備えろ！」

最初に2本の魚雷は次々と飛龍の艦尾を抜けていく。

だが時間差をつけて投弾された魚雷6本は角度が絶妙に違っている。

俺は大声で衝撃に備えるように叫んだ。

すると飛龍の艦体をたて続けに3回、大きな衝撃が包んだ。

ズドン!!ズドン!!ズドン!!

それと同時に巨大な水柱が3本そそり立つ。

爆弾の命中で燃える飛行甲板に大量の海水が落ちてくるが消火の助けにはならなさそうだ。

「被害報告とダメージコントロールを急げ！もたもたしてると飛龍が沈むぞ！」

艦長が怒鳴る。

確かにその通りだ。爆弾2発に魚雷を3本も食らっては幾ら飛龍と言えども沈む可能性がある。

しかも魚雷は左舷にのみ集中して命中しているから尚更その危険性が高まる。

蒼龍の方を見てみると蒼龍も魚雷の命中の有無は分からないが少なくとも飛行甲板に被弾したのは分かる。実際にもうもうと黒煙を上げている。

そして被害報告が上がる。

「提督、被害報告がまとまりました。飛龍は飛行甲板に爆弾2発が命中。火災は消し止めましたが内1発が中央昇降機に直撃しており飛行甲板の使用は絶望的です。入渠して本格的な修理を受けなければならぬ、との事です。幸いにも格納庫内、飛行甲板上には可燃物が存在しなかつたので延焼することはありませんでした。そして左舷

艦首から艦尾にかけて3本の魚雷が命中、かなりの浸水が起こり10度の傾斜が出ています」

艦橋から飛行甲板を覗くと確かに昇降機が滅茶苦茶に破壊されている。

「航空機の運用は不可能か……」

「はい。戦闘行動は取れません。更に魚雷の命中で最大速度は25ノットに低下しております」

「蒼龍は？」

「魚雷は全て回避しましたが爆弾が2発命中。ですが速度の低下も無く1時間もすれば飛行甲板の穴は塞ぎ終わり戦線復帰は可能、この事です」

「……どうするべきだと思います？」

正直、かなり迷っていた。

飛龍を退避させるか、それとも敵攻撃隊の全てを凌ぎきるまで凌ぎ飛龍を艦隊と共に行動させるか。

「私としては退避したくないかな。でも航空機の運用が出来ないから退避した方がよいのは正解だと思う。足手纏いだし」

「私も退避させるべきかと。我々には飛龍を含めては1級線の空母は6隻しかおりません。飛龍も大切な空母であることは間違いありません。これからのことを考えればここで失う訳には行きません」

「退避に一票です。幸いにも飛龍は未だ27ノットを発揮できます。ならば今のうちに退避させるべきです」

「他の皆も同じ意見か」

飛龍を始めとして艦長や参謀長、副艦長は口々に退避させるべきだと主張する。

「電探は敵編隊を捉えているか？」

「いいえ、未だ敵の第二波攻撃隊の反応は無しです」

電探には敵編隊は映っていない。

「提督、艦隊司令部を移し、移乗するならば今しかありません。これ以上待っていると手遅れに成り兼ねません」

参謀長のその一言で俺は今、移乗する事に決定した。

「よし、今より司令部を移乗させる。蒼龍と瑞鶴のどちらが良いか？」
「それならば未だ健在な瑞鶴がよろしいかと」

「分かった。瑞鶴に移乗する。飛龍は2水戦の駆逐艦3隻を伴って退避。本土を目指せ。それと艦隊に今の内に陣形を整えるように伝達しろ」

「了解しました。それでは準備に掛かります」

そう指示を出すと艦橋内は慌ただしく動き出す。

将旗が降ろされ移乗に備える。

「了解。ごめんね提督。途中で離脱することになっちゃって……私がもっと上手く操艦出来たらこうはならなかったのに……」

「何、気にするな。飛龍の操艦があつてこそこうして飛龍は生き残つたし俺も生きているのだ。そう気を落とすな」

飛龍は申し訳ないと謝ってくる。

まあ気にしても仕方が無い。幾ら訓練しようとも当たる時は当たる物なのだ。寧ろ沈まなかつた事を今は喜ぶべきだろう。

俺としても今まで作戦中は飛龍を旗艦にして乗っていたからこうして飛龍が傷つくと心苦しいしな。まあ他の艦もそうだが艦娘が辛そうな顔をするのはあまり見たくない。

それから5分後、移乗の準備は整えられ飛龍に搭載されている内火挺で瑞鶴に向かう手筈が整った。

「提督、御武運を」

「ああ。飛龍達も道中気を付けろ」

最後に飛龍と艦長に見送られながら内火挺に乗り込んだ。

そして瑞鶴に乗艦する。

「提督、お待ちしております」

「ご苦労。態々出迎えんでも構わないぞ？」

「いえ、そのようなわけには行きません。では艦橋にご案内します」

艦長が俺を出迎える。

こんな時だから形式的な物はやらなくても良いんだがそうもいかないのが面倒な所だ。

「提督、艦橋に入られます！」

俺が入ると同時に皆が一斉に敬礼をする。

「休め。これからは敬礼を省略するように」

「提督、ようこそ瑞鶴へ」

「ああ瑞鶴、ご苦勞。早速で悪いが攻撃隊の様子などを教えてくれ」

「分かつてる。それじゃあ報告するね」

「頼む」

瑞鶴によると我々が放った攻撃隊は俺が丁度瑞鶴に移乗した時に終了したそうだ。時間にして、ほんの3分程前の事だ。

二波に渡る攻撃によつて見事に敵空母ヲ級を2隻撃沈確實、1隻を撃破したそうだ。

だが代償として攻撃隊として向かった流星は合計160機中50機もの流星を喪失。大打撃を被った。

烈風は比較的損害は軽かったらしく29機の損失で済んだそうだ。敵戦闘機の迎撃もかなり熾烈でこの時点で40機ほど撃墜された。更に戦艦の撃ち上げる対空砲火もやはりと言うべきか、猛烈だったらしく10機近い機数が撃墜されたらしい。

「手痛い損害だな……」

「うん。烈風は2航戦で收容した機体を入れればいいけど……」

「次の攻撃にかなり支障が出る」

「うん。多分帰ってくる途中でも不時着水したりする機も居るだろうから90機戻ってくれば良い方かな……それに損傷機とかも入れると攻撃隊に入れられるのは70機いればいい方かも」

「……厳しいな」

70機しか流星が居ないとなると残り4隻の空母を確実に仕留められるか、と聞かれると無理だろう。攻撃を集中させて2隻撃沈か撃破出来れば良い方だろうか。

「……そう言えば深海棲艦の第二波攻撃隊はどうした？まだ来ないのか？来ないに越した事は無いが」

「分かんない。でも電探にも反応は無いし2航戦の方にも反応は無いって」

「どうなっているんだ全く……まさか送り狼か？」

「だとしたら不味いよ。攻撃隊の收容中なんか狙われたら一溜りも……」

「急いで隼鷹に烈風の即時発艦は可能かどうかを確認してくれ。攻撃隊は二航戦で收容させろ。数が減っているから3隻でも收容出来る筈だ。戦闘機には先行させて燃料弾薬を補充させた後にこちらに向かわせるように。迎撃機はなんとかして80機は確保しておきたい」「分かった」

瑞鶴はそう頷いて通信参謀に電文を送るように命じた。

しかし送り狼だとすると……我々は攻撃隊を放った後も殆ど移動せずに同じ海域で留まっている。1時間半程で来るか。早ければ1時間。

迎撃戦闘機隊の方は間に合うだろうが、攻撃隊に随伴していた烈風はかなりギリギリだな。

「提督、隼鷹からです。即時発艦可能な烈風は46機との事です」

「それで構わん、大急ぎでこっちに出してくれ、と伝えてくれ。攻撃隊の烈風も出来れば即座に30機とは言わないから20機燃料弾薬を補給して寄こしてくれ、とも伝えてくれ」

「了解しました」

流石に46機だけでは不安が残る。

せめて60機あればなんとかなるだろう。最悪、瑞鶴と蒼龍が被弾しても二航戦が無事ならば作戦は遂行出来る。

「提督、電探に感あり」

「敵か!？」

「いえ、まだ分かりませんが規模的には我が攻撃隊の様です」

「ならいいが、気は抜くな。敵機かもしれん」

既に隼鷹達二航戦から発艦した烈風46機は艦隊上空を飛び去り、敵攻撃隊がやって来るであろう方向に向かっていた。

現在時刻は既に11時になるうかと言う頃合で、どうやらまだまだ戦いは終わりそうにも無いらしい。

「提督！電探に3つ目の編隊を捉えました！数凡そ150〜170！恐らく敵攻撃隊です！」

「やはり居たか！至急迎撃戦闘機隊に正確な位置と方角を知らせろ！」

「了解！」

「全艦対空戦闘用意！」

「対空戦闘用意！」

遂に敵の第二波攻撃隊を電探が捉えた。

しかも先程と同じかそれ以上にも及ぶ数だ。流石に46機の烈風では雷撃機や爆撃機に手出しをすることは厳しい。

早く追加の20機が到着してくれることを願うばかりだ。

「迎撃戦闘機隊、敵攻撃隊と戦闘開始しました！」

そう報告が入る。

だが状況はあまり芳しくないようだ。

「敵戦闘機の数がどうやら50機程、護衛についているようでそれと戦闘で精一杯だそうです」

「やはりか……追加で要請した烈風はまだ敵攻撃隊に到達しないのか？」

20分程前に艦隊の上を追加で要請した烈風22機が飛び去って行った。

だがまだ敵攻撃隊には到達していない。

「10分程で到達すると思われませう」

「10分か……ギリギリだな」

「敵攻撃隊の我が艦隊への到達は30分程後になります」

迎撃に使える時間は長くても10分程度。いや、主砲の射撃が始まる事も考えると5分と見積もった方が良いか。

このままでは殆どの敵機が無傷で突っ込んでくることになるじゃないか。

凡そ100機の雷撃機と爆撃機から到底無傷で切り抜けられると

は思わない。

想定したくない最悪を想定すべき、だな……

「後続の烈風が敵攻撃隊と戦闘を開始しました」

「先に敵戦闘機と戦っていた迎撃戦闘機隊はどうなった？」

「未だ敵戦闘機との戦闘に忙殺されているようです。ですがその内の何機かが敵戦闘機を振り切って雷撃機や爆撃機に攻撃を仕掛けていたようですが……」

「たったの数機じゃ殆ど落とせないな……」

だが20機が応援に加わったことで幾分か戦いは楽になるだろう。

金剛、霧島の主砲による対空射撃が始まるまでに70機、いや80機までに減らしてくれないだろうか……

「敵機凡そ70機が迎撃を突破、突っ込んできます！」

「方向は!？」

「2群に分かれます！左舷前方と、同じく左舷後方から回り込んできます！」

「金剛、霧島対空射撃開始します！」

続けて報告が上がる。

「頼んだぞ……」

艦橋にいる誰かがそう小さく漏らした。

その次の瞬間、金剛と霧島の合計16門の主砲が轟音と共に一斉に火を噴いた。

「敵機7の撃墜を確認」

双眼鏡を覗く見張り員がそう報告する。

続けて2隻は第2斉射を始めた。

「敵機4の撃墜を確認」

「合計11機の撃墜か」

「これで凡そ60機まで減らしました」

「雷撃機40、急降下爆撃機20が急接近！雷撃機は低空から接近してきますー！」

「雷撃機は左舷前方から！急降下爆撃機は左舷後方から一斉に来ます！」

見張り員の報告通り確かに敵雷撃機は海面付近まで降りてきている。

40機の雷撃機か……どう考えても全部を避け切る事は出来そうにないな。

「!!味方戦闘機隊が敵機へ襲い掛かっています！」

「何!?今すぐ退避させろ！同士討ちになるぞ!？」

「駄目です！退避する様子はありません！」

「何をしているんだあの馬鹿者どもは!？」

艦長や副艦長が怒鳴り即座に退避させるように言って戦闘機隊にそう伝えられるが一向に退避しない。それどころか雷撃機だけでなく急降下爆撃機の方にも襲い掛かり、護衛戦闘機がない今こそ好機だ、と言わんばかりに機銃を乱射している。

「艦長、全艦に対空射撃開始」

「提督!?それじゃ戦闘機隊と一緒に撃つ事になるよ!？」

「構わん。彼らはそれを望んでいるんだ。彼らの覚悟を無駄にするな」

「ッ……！了解しました！」

すると一斉に対空射撃を始める。

対空砲が一斉に火を噴いて空を黒煙で覆っていく。

敵機だけでなく戦闘機隊の周りにも砲弾が飛んで行き、炸裂する。

「雷撃機3撃墜！」

戦闘機隊が急降下を加えるとたちまち3機の雷撃機が火を噴いて海面と激突する。

その瞬間に艦橋内で大きな歓声上がる。

「急降下爆撃機4撃墜！」

「雷撃機距離5000!」

「機銃射撃開始!」

敵機が5000mを切ると一斉に対空機銃が雷撃機目掛けて弾を撃ちまくる。

敵機に向かって伸びる火箭は数多くとも中々敵機を捉える事は出来ない。

「戦闘機隊はまだ退避しないのか!？」

「退避する様子は一向にありません!まだ敵機に攻撃を仕掛けています!」

既に戦闘機隊の奮戦によって雷撃機は既に25機程までに減っていた。急降下爆撃機は10機ほどにまでなっていて確かに戦闘機隊の働きが無ければ今頃は無傷の敵攻撃隊に一方的にやられていただろう。

「我が瑞鶴に5、蒼龍に5、急降下爆撃機向かう!」

「雷撃機我が瑞鶴に13、蒼龍に12機が向かう!」

「敵機直上!急降下!」

「取舵一杯!」

瑞鶴は飛龍よりも全長も全幅も大きい。

だから飛龍よりも舵が利くのがずっと遅かった。

「敵機1番機投弾!直撃します!」

敵急降下爆撃機の1番機が放った爆弾は、どう見ても避けられるものでは無かった。

見張り員がそう大声を上げて数瞬の後に瑞鶴の飛行甲板に爆弾が命中。

ズドン!!

続けて2発目が命中し、3発目は舵が利き始めて回頭を始めたからか右舷艦橋付近の海面に落下。水柱を上げた。

「4、5番機続けて投弾!」

ズドン！

4発目が命中。

5番機が投弾したものは艦首を掠めて至近弾となり命中はしなかった。

だがこれで終わりはいらない。

「雷撃機来ます！」

次に攻撃を仕掛けてきたのは雷撃機だ。だがその数は戦闘機隊の働きによつて数をさらに減らし9機にまで減っていた。

「距離1000！」

「先頭の5機が魚雷投弾！」

「距離700で後続の4機が魚雷投弾！」

「面舵一杯！最初の4本を回避したら一気に取舵に切るぞ！」

艦長はそう指示を出すのが恐らく後から投下された4本の魚雷は避け様がない。

基本、魚雷に限らず砲撃も未来予測位置に向かって投弾する。それは速力などを全て合わせて計算した上で導き出す。

当然、投弾した後には魚雷の針路を変えられるわけではない。

今瑞鶴は32ノットで回避運動を取っている。ならばあの魚雷9本は32ノットで進む瑞鶴に目掛けて放たれたのだ。

ならばこの時速度を変えてしまえばどうなるか？

当然、狙いは外れるに決まっている。

これ以上速度を上げる事は出来ないがその逆、下げる事なら出来る。

俺はそう考えて艦長に指示を出した。

「艦長、全速後進！速度を落とせ！」

「全速後進！宜候！」

その指示の意図を瞬時に理解したのか艦長は一気に後進に入れるものだから艦全体がガクンと揺れた。

俺も座っている椅子からずり落ちそうになったが瑞鶴が支えてくれて尻を打ち付けることは無かったが。

だがそれのおかげで瑞鶴に向けて伸びる魚雷は明らかに外れる針路だ。

しかし慣性の法則と言うものはどれだけスクリューを逆回転させても存在する。

しかも瑞鶴は257.50mに基準排水量25,675トンもある巨艦だ。そんな艦がそう簡単に後ろに下がれるはずがない

「魚雷1、直撃針路！」

「総員衝撃に備えて！」

瑞鶴がそう大声で怒鳴った。

すると、丁度艦首付近に魚雷が命中した。

大きな音を立てて海水が降り注ぐ。

どうやらこれで敵の攻撃は最後の様だ。

上空には攻撃を終えて飛び去って行く敵機の姿と深追いはせずに艦隊の上空をどこか心配そうに飛ぶ烈風しか居ない。

「ダメコン急いで！何としても浸水を食い止めて！」

瑞鶴を始めとした面々が声を張り上げながら指示を出していく。

そして、30分後に漸く被害報告が纏まり俺に報告が上がってくる。

「提督、命中した爆弾は3発で至近弾2発。直撃した爆弾の内の2発が飛行甲板の先端部分を吹き飛ばしました。残りの1発は前部昇降機と中央昇降機の間命中しました。どちらとも火災が発生しましたが既に消火完了。前部昇降機と中央昇降機の間に出た爆弾孔は1時間ほどあれば塞げますので艦載機の運用は一部ですが可能です」「一部？どういうことだ？」

「と言うのも先端部分に命中した2発が問題です。これにより先端部分が吹き飛ばされて

飛行甲板そのものの全長が短くなってしまい、烈風の発艦は可能で

すが兵装を装備した流星の発艦は出来なくなりました」

「流星の発艦が出来ない、か」

「はい、軽い兵装、25番か6番(60kg爆弾)ならば機数によっては何とかなりそうですがほぼ絶望的と考えた方が宜しいかと」

「分かった。魚雷の方はどうなった?」

「幸いにも浸水はそれほどもなく、機関部など重要区画への浸水は認められませんでした。ですが艦首先端すぐの場所に命中し、破孔が発生、爆圧により反対側が少し盛り上がってしまっています。更に艦首が曲がってしまい速力が26ノットまでしか出せません。出そうと思えば30ノットを発揮出来ますがそうなると破孔付近の水密扉が破損し浸水が拡大する恐れがあります」

「26ノットを発揮出来るのなら十分だろう」

瑞鶴の被害は思ったよりも軽い方だ。

だが蒼龍はどうだろうか?遠目から見ても明らかに傾斜しているように見える。

「蒼龍はどうなった?」

「それが、かなり問題です。爆弾の命中は2発と少なかったのですが先の物と合わせて4発になってしまい……しかも当たり所が悪く航空機用燃料タンクから燃料漏れが確認されています。今の所、誘爆などの危険性は無いようですが油断は出来ない出来なそうです。更には魚雷が3本命中して右に20度近く傾斜しています」

「その内の2本は艦中央部に、もう1本が艦後部、推進軸付近に命中して歪んでしまい右側の推進器は完全に使い物にならなくなりました。機関部への浸水も認められており発揮出来る速力は16ノット以下となりました」

「随分と手酷くやられたな……間違い無く大破だな」

「今のうちに本土に向けて退避させた方が宜しいかと」

参謀長は蒼龍を退避させるように進言してくる。

確かにその通りだ。

「そうだな。通信参謀、蒼龍には駆逐艦3隻を伴って本土に向けて退避させるように言ってくれ。それと今更だが鹿児島にある陸軍、海軍

問わず航空隊に上空援護の為に戦闘機を回してもらえるようにも言っておいてくれないか」

「了解しました」

「上空援護の件については必要であれば俺の名前を使って構わん。何としても飛龍と蒼龍を呉まで到着させなければならん」

「重々承知しております。それでは失礼します」

通信参謀はそういうと艦橋から出ていった。

しかし、戦闘能力を持つ空母は3隻にまで減ったか……

「迎撃の烈風は二航戦に向かわせろ。収容数にはまだ余裕があるはずだ」

「了解しました」

10分後、その連絡を受け取った二航戦から電文が届く。

『我隼鷹。戦闘機隊ノ収容、了解ス。既ニ攻撃隊ノ準備完了。即時発艦可能ナリ』

攻撃隊の準備が整っている、か。

そんな命令は出していないが……こりや隼鷹の仕業だな。

飛鷹と天城はどちらかと言えば命令が出てから動くタイプだが隼鷹はそうじゃない。かなり奔放と言うか、まあ軍に属しているとは思えない感じだがあれで中々、かなり頭がキレる。

恐らく隼鷹が一航戦が敵を引き付けている間に、と言って準備を進めさせたのだろう。

「隼鷹へ攻撃隊即時発艦、敵艦隊を叩けと送れ」

「了解しました。我々はどうぞ致しますか？」

「どう、と言われても今は何も出来んだろう。二航戦と合流する訳にもいかんしな」

「では、このまま敵の攻撃を吸収すると？」

「まあそうなるな。……そう言えば潜水艦隊はどうした？攻撃許可は出しているからもし攻撃したとすれば何かしらの報告があっても良い筈だが」

「潜水艦隊からは何の報告も上がって来ておりません」

「そうか。現状、敵艦隊の空母は未だ4隻残っている。その内の1隻

は撃破しているが応急修理が完了していればこちらと空母の数だけで見れば同数……」

第二次攻撃隊は以下の通りになる。

烈風132機、流星75機（爆装32機 雷装44機）だ。

それを第一波、第二波で分ける。

第一波攻撃隊

烈風72機、流星38機（爆装12機 雷装26機）

第二波

烈風62機、流星37機（爆装11機 雷装26機）

正直なところ、烈風ならば問題無いだろう。

だが如何せん流星の数が少なすぎる。第一波の烈風が敵戦闘機を抑え込む為に留まれば確かに敵戦闘機は確実に抑え込めるだろう。

我が艦隊に来襲したのは凡そ300機だ。

約150機ずつでその内の50機程が戦闘機だったから敵戦闘機は全て合わせて敵艦載機中200〜250機ほど。

雷撃機や急降下爆撃機はかなりの数を撃墜し、こちらの烈風の被害は軽微。

だが流星の被害が大きい。

隼鷹の報告では第二次攻撃隊の流星は全て合わせて76機。

二波に分けたとしても38機と37機ずつ。40機に満たない数だから敵空母を確実に叩くには狙いを絞る必要がある。

しかも敵艦載機は未だ300機は居ると予想出来るから敵の攻撃もまだまだ続くはず。烈風はまだ修理して戦線復帰が可能な機体を含めれば200機程はあるから艦隊の直掩用に60機前後残しておくとしても攻撃隊には140機付けられる。

事実、第二次攻撃隊には烈風が132機随伴して攻撃隊をがっちり守っているからそう簡単に落とされる心配は無い。

直掩用に残している烈風は69機だ。今までと同じくらいの敵機

が来襲するとすれば何とかなるだろう。

そして攻撃隊が敵艦隊へ向けて飛び立った10分後、電探に反応があった。

「敵攻撃隊接近！距離80km！数凡そ150〜170！」

「直掩戦闘機隊を即座に向けろ」

「了解しました」

敵の第二次攻撃隊が来襲したのだ。

150機以上となると戦闘機の数は今までとそう変わらないだろう。

だが問題は一波だけでは終わらないだろうと予想されることだ。第二波までならばなんとか凌げるだろう。

だが第三波まで来るとなると無理だ。残っている敵機の予想規模通りだとすれば第三波は無いと思われるが確実性は無い。

直掩戦闘機隊は既に敵攻撃隊に向かっている。

26ノットの速度でどれだけ回避出来るか……

それから20分以上に渡って決して瑞鶴までもやらせて溜るかと言わんばかりに直掩戦闘機隊の死に物狂いや執念とも取れる程の猛攻を受けて敵攻撃隊は大打撃を被った。

事実、深海棲艦の攻撃隊は雷撃機72機、急降下爆撃機40機にも上ったが雷撃機17機、急降下爆撃機21機までに減っていた。

撃墜された、と言うよりは爆弾や魚雷を投棄して引き返した機の方が多かった。

まあ、それでも速度の低下した瑞鶴は全ての爆弾や魚雷を避け切る事は出来なかった。

急降下爆撃によって爆弾1発と魚雷が左右舷に1本ずつ命中した。

「提督、被害報告が纏まりましたので報告させて頂きます」

「頼む」

「まず、爆弾は1発が命中。前部昇降機がその時の衝撃によって歪んでしまい使用が出来なくなりました。火災も発生しましたが消火は完了しております。魚雷は右舷と左舷の中央部に1本づつが命中。ですが注水によって傾斜は復元済みです。最高速度は23ノットに低下してしまいました。今回は当たり所が良かったのでこれだけの損害で済みました。我が瑞鶴はまだまだ戦えます」

「1隻だけ狙われて寧ろこれだけの損害で切り抜けたのは、幸運だったな……瑞鶴の戦線離脱さえ覚悟していたのだが未だ戦闘力を保持しているとは、何とも驚きだ」

「戦闘機隊の奮戦あってこそ、ですな」

「ああ。この戦いが終わったら戦況が戦況だからそこまでは礼をしてやれないが、出来得る限り最大限何かしてやらねばな」

本当にそう思う。

酒を全員に振る舞う、なんてことはしてやれないが何か考えておこう。

「それは流星隊も同じですぞ？戦闘機隊だけで騒げば血の気の多い連中ばかりですから間違え無く掴み合い殴り合いになるでしょうなあ」

「違くない」

少しばかり艦橋内が明るくなる。

こんな絶望的な状況から三度も切り抜けた。多少は許されるだろう。だがまだまだ戦闘は続いている。油断は出来ない。

少し笑い、すぐさま気を引き締める。

すると30分程すると第二次攻撃隊第一波攻撃隊から敵艦隊発見、続けて攻撃開始と全軍突撃が発せられた。その15分後、更に第二波攻撃隊からの全軍突撃を受信。

20分に渡る攻撃の末に第二次攻撃隊は見事に空母1隻撃沈、1隻撃破を成し遂げた。

だが攻撃隊の被った被害は烈風11機喪失、流星隊が25機喪失と言うものだった。事実上、我が艦隊の流星は壊滅以上の打撃を受け

た。

だがこの後、潜水艦隊が空襲直後の混乱している敵艦隊を雷撃、見事空母1隻を仕留めた。

更に外れた魚雷が敵戦艦に命中し撃沈とは行かないまでも打撃を与える事に成功する。

総合戦果は空母4隻撃沈1隻撃破、戦艦1隻撃破、駆逐艦3隻撃沈破となった。

こちらは空母2隻大破、1隻中破。

撃沈した空母の数と言う結果から見ればこちらの圧勝であるが失った搭乗員や機体の数を考えると実際はギリギリの所での辛勝。痛み分けとも取れるギリギリの戦いだった。

我々は全空母合わせて流星160機を保有していたが今現在、たったの41機にまで大きく減少。烈風も233機から183機に減っており、169機を損失。実に3.5割にも上る機体を失った。

搭乗員も損失した流星搭乗員238名中203名が戦死。潜水艦によつて救助されたのはたったの36名に過ぎなかった。

烈風搭乗員も50名中23名戦死。

機体以上に搭乗員の喪失が大きすぎた。

これら全ての喪失機と搭乗員の補充と訓練は、最低でも半年以上は掛かる程の大打撃であり、その間は第一機動艦隊は作戦行動を取れないと言う事に他ならない。

今ここで撤退したとしても機動艦隊の再建には丸々1年を要するだろう。そうなれば深海棲艦は戦力を整えるどころか今回の倍以上の戦力を揃え、俺達はそれと戦わなければならなくなる。どう考えても不可能だ。ならばこそ、今ここで最終的な勝利を挽ぎ取らなければならぬ。

それに彼らの死を無駄にするわけには行かない。生かすも殺すも生き残った俺達次第、と言う事だ。

結局これ以降、敵艦隊が攻撃を仕掛けてくることは無く、敵空母の撤退を確認。

だが、さあいざ上陸予定地点周辺の偵察を、と意気込んで二航戦と合流し彩雲を放ち情報収集に努めていた時、こちらとしては現段階で予想されるであろう、いや予想すらしていなかった最悪の事が起きた。

「提督、敵戦艦と巡洋艦、更に駆逐艦数隻が沖縄本島に意図的に乗り上げました」

「なんだと？……クソツ、そう言う事か！やられた……ツ！」

「ええ、してやられました……まさか夜戦を捨てて地上砲台になるとは……しかも無傷の戦艦、巡洋艦を全てを座礁させるなんて思っていないませんでした」

「我々としては上陸船団を阻止するために夜戦を仕掛けてくると踏んでいたのですが完全に予想外です。こうなつては夜戦以上に一筋縄では行きません」

そう、敵艦隊の戦艦や巡洋艦が沖縄本島の各地に意図的に座礁させて固定砲台としてきたのだ。これには完全にやられた。

俺達は、敵艦隊が間違い無く戦艦を主力として輸送船団撃滅を狙って夜戦を仕掛けてくるだろうと踏んでいた。

さて、ここで敵戦艦の意図

今回の作戦目標は南西諸島攻略の攻略にある。

となれば空母同士の戦いは我々からすると梅雨払い、前哨戦という意味合いが大きい。

ここで勝利を勝ち得たとしても輸送船団さえ沈めてしまえば攻略、奪還は出来なくなる。だからこそ間違い無く戦艦同士の砲撃戦に持ち込もうとしてくるものだと思っていたのだが……

「まさか座礁しての固定砲台化するとは」

「少々予想外に過ぎますな。洋上に浮いているのであれば沈めてしまえば良いだけの話ですが、これでは敵戦艦そのものを完全に破壊しつくすか砲弾が底を着くのを待つしかありません」

「長期的に見れば砲弾が続く限り、沖縄本島全域がいずれかの敵戦艦

の射程範囲となり我が上陸部隊は出血を強いられる。砲弾が尽きても堅牢な要塞として使える。我々としては嫌な事ばかりだな」

敵戦艦の最大射程は35〜38kmにも及ぶ。

だがあくまでも最大射程と言うだけで目標に命中すると言う訳ではない。寧ろ当たらないと断言できるだろう。

大和の主砲最大射程は41.4km。狙ってこの距離の目標に直撃させることが出来ると言うのであればそいつは大嘘つきだ。それか頭のおかしい、おめでたい奴と言う事になる。

それは敵にも同じ事が言える。

だがそれでも1トンを超える巨弾は十分以上の脅威だ。いや、最悪上陸したとしても作戦は失敗する恐れすらある。

たったの1発だけで先発隊の海軍特別陸戦隊2500名が壊滅する事だつて有り得るのだ。

しかも先程も言ったが、砲弾が尽きてしまえばそれで終わりと言う訳ではない。

要塞としても十分に使える。地下要塞以上に厄介この上ない代物だ。

「提督、どういたしますか？ここで撤退すれば今までの犠牲が全て無駄になってしまいます」

「そんなことは分かっている。だがどうやってあれを完全に破壊する？」

「……空襲は？」

「まだ沖縄本島の敵飛行場は健在だ。下手に近づけばどうなるかは明白だろう」

艦橋内で色々と議論が交わされるが決定的な答えは出てこない。

しかし本当にどうしたものか。

このままのんびりしているわけにもいかない。

一応、幾つかの案はある。

先ず、1つ目艦載機での空襲だ。

流星は水平爆撃であれば80番（800kg爆弾）を搭載して爆撃することが出来る。陸用爆弾では無く、対艦攻撃用の徹甲爆弾であれ

ば潰せるだろう。

だが沖繩本島の飛行場はまだ健在で航空機も残っている。今のこの艦載機数だと如何な烈風、如何なエース、熟練搭乗員とはいえ数で囲まれて一方的にやられる事になる。

この案は難しいと言わざるを得ない。

そして2つ目。

戦艦6隻による夜間の艦砲射撃を持つて叩く。

昼間だと間違いなく飛行場から飛び立った敵機にやられてしまうが夜間ならばその心配は薄い。だがこれは上陸支援や沖繩本島、南西諸島各地の攻略を行う上で我々は戦艦が必要だ。ここでやられるのは宜しくない。

「提督、流星による夜間爆撃を具申します」

艦橋内で対応策が浮かばずどん詰まりしていた所に、今まで黙っていた作戦参謀がそう言った。

「夜間爆撃だど？流星は大型機ではないぞ。出来るのか」

「出来るか出来ないか、と聞かれると出来ると言えます」

「理由は？」

「まず目標が固定目標であることです。洋上ならば視界が利かず動き回り回避機動を取る艦目掛けて爆弾や魚雷を落とさねばなりません。今回は一か所から動くことはありません。夜間であろうと命中させる事は出来る筈です」

確かに固定目標であるならば可能だろう。

だが夜間となると辺りは真っ暗で、視界が無い状況ではどうすると言うのだ。

「では夜間の暗闇の中でどうやって目標を発見する？出来るとしても目標が分からないのであれば無理だぞ？」

「そこは戦艦や巡洋艦から水上偵察機でも発艦させて照明弾や吊光弾を投下させます。もしくは戦艦の主砲から星弾（主砲から撃ち出す為の照明弾。迫撃砲などから撃つ照明弾の艦砲発射型と思えばよい）でも宜しいでしょう」

「うーむ……」

確かに話を聞けば実行可能そうではある。

だが実行可能と実行して戦果を挙げる、と言う事では丸つきり意味が違う。やるのなら当然それに見合うだけの戦果が必要だ。

だが本当に夜間爆撃で敵飛行場や座礁した戦艦は撃破可能なのか？

どうしてもその疑問が拭い去ることが出来ない。これで何も戦果を挙げる事が出来なかつたとすると矢鱈に出撃させて搭乗員達にいらぬ負担を強いる事になる。だが他に何か解決案がある、これならば確実に何とかできると言う策も無い。

さて、どうするか……

「提督、搭乗員達は皆技量抜群です、未だに気力も十分です。小数機しか残っていないとはいえ彼らならば必ずや、やってくれますよ」
「提督、どうかご決断を。今決めなければ敵の増援艦隊が到着してしまい手遅れになってしまいます」

決断を迫って来るが確かに参謀長や艦長達の言う通りだ。
今ここで決めるしかない。もたもたしている暇は無いのだ。

「……よし、夜間爆撃を許可する。急ぎ流星隊から人員を選抜し準備に取り掛かれ」

「二はっ！了解しました！二」

俺がそう言うのと各々が自身の仕事に取り掛かる。

現在時刻はもう既に18時半を過ぎており、そろそろ日が沈もうか、と言う時刻だ。呉よりも随分と太陽が落ちる時刻が遅く感じる。

恐らく夜間爆撃隊が選抜され、攻撃準備が完了する頃には完全に太陽が落ち切って真っ暗になるだろう。

「提督、準備が整いました」

「ああ」

「出撃するのは山田中佐機以下16機32名です。武装は80番対艦用徹甲爆弾を装備します。流星16機は二波に分け、8機ずつの攻撃

を行います。彼らの誘導には金剛、霧島から零式水上観測機2機を第一陣に。鈴谷、熊野から零式水上観測機2機を第二陣として出します」

「まず一番最初に攻撃するのは最も上陸地点に近い米須海岸に座礁した敵戦艦です」

「うむ、頼んだ。万時抜かりなくな。彼らは昼間もあれだけ戦ったのに夜間まで戦おうとしてくれている。支援はしつかりと行うようにな」

我々は上陸地点より東に30kmの地点を航行している。

これだけ近ければ航法を誤ることは無いと思うが夜間爆撃を空母艦載機で行うなんて今の今までやった事の無い事だ。

入念に準備、とは行かないが可能な限りバックアップをする必要があるだろう。

「勿論、重々承知しております。現在発艦準備を整えており、発艦時刻は1920を予定しております。これで宜しいでしょうか？」

「ああ、それで頼む」

「提督、今更ながらですが旗艦を変更し移乗されては如何でしょうか？」

「……どういう事だ？別にこのまま瑞鶴でも構わんだろう」

瑞鶴艦長が唐突にそんなことを言い出した。

余りにも唐突過ぎて返答するのが遅れてしまった。

しかし、移乗して欲しい、か。瑞鶴は烈風しか発艦出来ないとは出来ない言え戦闘力を未だ保持しているから問題は無いと思うのだがな。

「いえ、瑞鶴は今現在損傷して烈風20機を收容するに留まっております。これ以降は隼鷹以下3隻が主力となって攻撃をするのですから指揮官たる提督が瑞鶴に乗艦していると、正直通信等が一々面倒です。それに即応性に欠けます。それらを考えると無傷の隼鷹か金剛に移乗された方が良いのではないかと」

その通りだろう。

事実、今現在の航空攻撃の主力となっているのは隼鷹以下二航戦

だ。それを考えれば一々通信をこちらに送らなければ判断を仰げないと言うのは面倒だし手間だ。

それには同意出来る。

それにどうやら参謀長達も同意見らしく頷いている。

「確かにその通りだが、今すぐに移乗する訳にはいかんだろう」

「何故ですか？即座に移乗して頂いた方が宜しいかと思いますが」

「今は発艦準備を急いでいるし、俺がこのタイミングで移乗するとなると余計な事で手間取らせて発艦予定時刻を過ぎるかもしれない。発艦が終了してからでも問題無いだろうし構わんだろう」

「了解しました。では移乗して頂けると言う事で宜しいですね？」

「ああ」

「では準備だけは進めさせて頂きます」

「うん、頼んだぞ」

そう言つて艦長は指示を出し始めた。

それからきつかり1920に一番機である山田中佐機が発艦した。

最後の機が発艦してから20分後に俺は隼鷹に移乗した。

その30分後、16機の流星は敵戦艦へ攻撃を開始。見事に命中弾7を叩き出した。

80番はその破壊力は絶大だ。完全に破壊とは行かないまでも大打撃を与える事は可能だろう。

そして米須海岸の次に目標となったのはホワイトビーチに座礁した敵戦艦。

ここも上陸地点に近いので優先的に叩く必要がある。

他に敵戦艦が座礁しているのは旧宜野座漁港付近と安田ヶ島、宇佐浜に座礁している。

巡洋艦はそれと共に座礁していることが多く、駆逐艦も同様だ。

米須海岸とホワイトビーチの二カ所には敵戦艦の他に巡洋艦が計2隻確認されている。これも徹底的に破壊しておかなければならない。

更には敵飛行場の問題もある。こちらは全くの無傷だからこれも破壊しなければならぬ。

でなければ上陸は夢のまた夢だ。

最終的に、敵戦艦への攻撃は4回行われ敵戦艦と敵巡洋艦は破壊されたとの報告が上がった。

距離が近いから数十分間隔での発艦となり隼鷹だけでなく飛鷹甲板上はてんてこ舞いの大忙しとなり、各要員は必死に兵装搭載や燃料補給作業を進めた。

結局、選抜された16機以外にも8機が追加で選抜されて爆撃に参加した。

その後、敵飛行場は島内に那覇、西原、嘉手納、読谷の4カ所に確認されているからそちらにも爆撃を実施。

同飛行場らを複数回に渡る反復爆撃によって数日間は無使用不可能と判断。

それに伴い、後方で待機していた上陸部隊を乗せた輸送船団の内の先発隊に前進命令を出し、遂に上陸のその時がやってきた。

第17話

上陸部隊先発隊である海軍特別陸戦隊に前進命令を出してから、俺は船団護衛に就いていた長門と日向を沖繩本島近海に呼び寄せ、上陸予定地点への戦艦6隻による準備砲撃を開始した。更に隼鷹、飛鷹から流星が80番を括り付け敵飛行場を爆撃しに行く。今はもう夜が明けて明るくなり、敵艦隊との戦闘中は感じなかったが南洋の熱帯の暑さが俺達を襲う。

実際には未だに戦闘中ではあるが敵艦隊の脅威は今の所少ないと言える。

対潜警戒や対空警戒は怠っているわけではない。事実、深海棲艦は飛行場の一部を修復し双発爆撃機であるB-25や戦闘機が数機、こちらに攻撃を仕掛けてきた。だが電探にはしっかりと捉えており、報告を受けた直掩に就いていた烈風が瞬く間に撃墜した。

「提督、朝飯だよ」

「ん、ありがとう隼鷹」

「なーに、気にしなさんな。お礼は提督秘蔵の日本酒で」

「何故知っているのかと言う事は置いておいて、まあ良いだろう」

「お、マジで？ やったぜ。いやー、言ってみるもんだね」

とまあ、隼鷹艦橋内では俺と隼鷹が共に朝食を取っていた。

会話で分かる通り隼鷹は酒好きで、かなり上下関係を吹っ飛ばしたような感じで接してくるタイプの艦娘だ。

以前にも言った通り、こんなんだが実際はかなり頭が切れる。秘書艦についた時も書類仕事では良く世話になる。しかもこれで料理が出来ると言うのだから驚きだ。まあ俺は仕事を優先させて食堂に行かず、缶詰やらで食事を済ませようとするタイプの人間だったらしく、俺が倒れたら本末転倒だと鳳翔によく怒られている。

その為に偶にだが彼女達が作ってくれることがある。

「それで、砲撃の方はどうなっている？順調か？」

「ま、今の所はね。金剛を先頭にして霧島、長門、日向、ビスマルク、ヴァンガードって並んで上陸予定地点に向けてバカスカ撃ち込んでいる。昼頃には終了して上陸を開始するから、あと4時間ぐらいは砲撃が続くのか。砲撃音、ここからでも聞こえるっしょ？」

「まあな。しかしあと4時間か……いよいよだな」

「これが反撃の一步、ってところか。何が何でも成功させなきゃね」

「ああ、失敗は許されないからな」

今、隼鷹と飛鷹は砲撃部隊の20海里後方で流星に爆装を施して飛び立たせている。

基本は飛行場の爆撃を行う為に陸用の80番や50番、25番、6番を装備しては爆弾の雨を降らせている。

鳳翔は上陸船団を守るために攻撃には参加させていない。それで輸送船がやられたら本末転倒だからな。

それから4時間後に砲撃終了の報告を受け、遂に先発隊に上陸開始の命令が下った。

—————

「上陸開始15分前!!」

神州丸から発進した大発動艇29隻の先発上陸隊第一波が安座間浜に向けて進む。

幸いにも波は穏やかで低く、問題無く進めている。

上空には支援の為に6番を4発を搭載した流星と、同じく6番を2発搭載した烈風が飛んでいる。

第一波で上陸するのは1450名で、大発動艇には50名ずつの小

隊と彼ら用の弾薬が載せられてる。

第二波で残りの950名と砲兵隊が上陸する。

本来ならば大発動艇には完全装備の兵士を70名載せられるのだが今回は迅速性と機動性を優先させて上陸する陸戦隊はそれぞれの個人装備である鉄帽や三八式歩兵銃と弾薬囊、水筒と携帯用円匙などのみに絞り、分隊事に九九式軽機関銃を装備していたり小隊事に八九式重擲弾筒を装備している。

そこに多少の継戦能力を持たせるために弾薬も載せている。

ただでさえそれらも重量物で揚陸に時間が掛かるのに、完全装備となると数十kgにも達し、しかも上陸直前は敵から狙い撃ちにされることが多く、素早く物陰に隠れることが出来なくなる。

そうならない為に完全武装ではなくなった。

「上陸用意！1分前！」

大発の操縦員が大声で怒鳴ると、確かに海岸との距離は目前に迫っていた。

「いいか!?上陸したらすぐ目の前にあるコンクリート製の階段まで走れ！間違えても砲弾孔に入るんじゃないぞ！」

「上陸したらすぐに散開しろ！纏まって動いているとただの的にしかならんからな！」

「姿勢は低く！だが銃は砂で汚すな！撃てなくなるぞ！」

「最初は反撃よりも物陰に隠れろ！呑気に撃っていたら直ぐに殺されるぞ！」

大発の上ではそれぞれの小隊長が大声を上げて改めて手筈を説明している。

全員の顔は緊張で強張っており、銃を握り締めたり水筒の水を飲んだりと様々だ。

上空を飛ぶ流星がトーチカに向けて爆弾を落とす。

爆発音とともにコンクリート片があちらこちらに撒き散らされる。

そして遂にその時が来た。

大発が浜に乗り上げた衝撃が伝わり、エンジン音が停止する。
操縦員が大声で叫ぶ。

「正面にトーチカー！左側に砲弾孔があるぞ！気を付けろ！」

そして船首についている道坂が降りた。

「行け行け行け!!」

小隊長が怒鳴り、散開しながら一斉に走り出す。

猛訓練中に何度も怒鳴られながら体に叩き込んだやり方でコンクリート製の階段を目指す。

正面のトーチカやあちらこちらから射撃音、砲撃音が響く。

「ガッ!？」

「ブッ！」

それにより何人もが撃たれて倒れていく。

銃弾の飛翔音が耳元を掠める者、体や腕に当たったのたうち回る者も居れば砲撃によつて四肢を千切られ、臓物をまき散らしながら吹き飛ばされる者。

「走れ走れ！止まるんじゃない！」

「クソ！戦艦は何をやった!?!まだトーチカも残っていやがる！」

「あ”あ”あ”あ”あ”!!!」

「衛生兵!!ちんたらしてねえで早く治療してやれ！」

「馬鹿言うな！こんな何の障害物も無いところでやったら良い的にしかならんだろうが！」

「流星は!?!爆弾を落とすんじゃないのか!?!」

「何のために爆弾を積んでやがるんだ!?!さっさと落として破壊しやがれ！」

あちらこちらで怒鳴り声上がる。すると漸く流星がトーチカに向けて急降下を始めた。

そして60kg爆弾を2発落とすと機首を引き揚げて去っていく。
落とされた爆弾は正確にトーチカを貫き、吹き飛ぶ。

更に続いて流星が急降下し、深海棲艦側の塹壕内にいた敵兵を吹き飛ばす。

「よっしやあー！」

「進め！一気に塹壕を抑えろ！」

その瞬間、分隊事に配備されている九九式軽機関銃が連射音を立てて制圧射撃を行うと塹壕を抑える為に走り出す。

「良し！塹壕を抑えたぞ！」

「このまま砲兵隊の到着を待っていたら死ぬ！通信兵、戦艦に砲撃要請をしろ！」

「ですがこれほど近いと巻き込まれる可能性が!!」

「構わん！どちらにしろ敵弾で死ぬよりかは砲弾を叩き込んで貰った方が良い！」

「了解しました！」

「急げ！戦艦に砲撃を要請したからそのまま外にいたら破片を食らって死ぬぞ！」

前方にはまだいくつかトーチカと塹壕が残っているらしく射撃を続けている。

本来ならば砲兵隊の到着を待ち、それに支援を行わせる予定だったのだが彼らの独断により戦艦へ砲撃支援を要請した。

確かにこのまま砲兵隊の到着を待っていれば敵弾によって殺されるだけだろう。

通信兵の言う通り、洋上では長門を始めとした戦艦6隻が砲身に向けて始めていた。

抑えた塹壕の中で銃を抱えながら鉄帽を抑え、ある者は携帯円匙で自身のいる場所を少しでも深くしておこうと穴を掘っている。

そして戦艦6隻から砲弾が放たれた。

歩兵銃や軽機関銃から放たれる銃弾とは遥かに重い飛翔音を響かせながら指示された場所に降り注いだ。

その後、陸戦隊は流星や烈風の上空支援や戦艦、巡洋艦の砲撃支援を受けながら予定されていた1km地点までを確保すると、大発に積んでいた弾薬等の荷下ろしを行った。

そしてすぐに大発は神州丸に引き返して残りの950名を載せて揚陸させた。

更に少しすると107号輸送艦と109号輸送艦が接岸。

九十一式10cm榴弾砲とホハが揚陸。

即座に200mほど内陸に陣地を構築、榴弾砲は前線支援の為に砲撃を開始。

ホハは揚陸艦から武器弾薬、燃料、水、食料等の荷下ろしに奔走した。

1.5km地点までを確保した時に陸軍3個師団の上陸開始が命令されると大挙して海岸に押し寄せ、付近一帯は陸軍妖精で溢れ返った。

翌日、深海棲艦側からの夜襲などがあったものの、橋頭保の確保に成功した彼らは陸軍師団を主力に志喜屋漁港と仲伊保漁港を結ぶラインまでを確保する為に進軍を開始。

敵の戦車やトーチカに対して苦戦させられたものの、5日後にはそのラインを確保した彼らは本格的に各種物資の揚陸を開始。

この時、第3段階に突入しようかとしていたが敵が陸上部隊の支援に注力していた隙について飛行場が修理されてそこから敵機が飛び立ち、陸上部隊を空から襲い始めると言う事態が発生。

本島南部の奪還前に飛行場と座礁した敵戦艦を再度破壊するため一時的に進軍を中断。こちらも体制を立て直す事になった。

鳳翔に搭載されていた流星もこれに参加。

丸々1週間の砲爆撃によって飛行場と敵戦艦は破壊された。

更に本島南部奪還を行う時、西原飛行場を最優先で奪還する事になった。と言うのもこの飛行場を奪還すれば、陸軍第32飛行戦隊が進出出来るからだ。

その命令を受けて各師団、部隊は西原飛行場目指し進軍するも敵も

飛行場周辺にはかなりの防御施設などを構築し守りは固かった。

塹壕などが張り巡らされ鉄条網、トーチカの替わりに戦車を砲塔のみを出した状態、ダッグインさせたりと猛烈な抵抗に晒された。

戦車は榴弾砲の集中砲撃により破壊する事は出来たが敵は地下陣地なども構築しておりそれらを潰すのにも時間が掛かった。

事実、攻略に参加した第23歩兵師団は1個連隊を、第39歩兵師団は1個連隊の計2個連隊丸々を喪失する事態に陥った。

最終的に空爆、砲撃とあらゆる手段を尽くして敵の防御陣地を突破。

西原飛行場を奪取したのは飛行場攻略が始まってから1週間が経ってからだった。

—————

先日、漸く西原飛行場を奪取することが出来た。

母艦航空隊の数には不安が残るから早めに32飛行戦隊の進出を図りたかった為に上陸地点から最も近い西原飛行場の奪取を命令したのだが、陸上部隊の損失が思いの外多かった。

まさか丸々2個連隊を喪失することになるなんて誰が予想できようか？

事前の準備砲撃や爆撃で破壊されているかと思っただが地下陣地が頑強に抵抗してきたのだ。流石にそれを素通りする訳には行かないから1つ1つ潰して回るしか無かった。

砲爆撃ではトーチカなどは破壊する事は出来ても地下陣地は破壊しきる事は出来ず、結局前線の彼らが地下陣地を潰すのに使ったのは所謂火炎瓶と言う物や直接ガソリンを流し込んで火を付けたりともう本当に様々な手段を使った。

現在、我々が奪還したのは西原飛行場周囲500mと、そこから大
体旧平和記念公園までを結ぶラインだ。

多少、前後したりして凸凹してはいるが概ねそのラインだ。

飛行場周辺には防御陣地を構築して、敵の反撃に備えている。

そして、思いの外損失が大きかったのでこれ以降の戦いも同じこと
が予想される。なので本土に予備師団の投入を要請した。

恐らく沖縄本島全土を奪還する前に今のままでは陸上戦力が枯渇
する事になる。そうなつては敵に反撃されて今まで奪還した場所ま
で再び奪われることになる。そうならないために今ここで予備師団
の投入を要請したのだ。

今現在、予備師団に指定した2個歩兵師団は、なんとか人員と武器
の充足率を整えることが出来た。最悪、予備として揚陸した武器を渡
して戦ってもらおう事すら覚悟していたのだがそうならず済んだ。

訓練の方は既に終了しているのであとは実戦投入を待つばかり。
上陸作戦の先発隊などの様にそういった訓練をしていないので使え
ないが普通に戦うだけならば問題無い。

既に上陸した各師団を載せた輸送船団は既に本土へ向けて帰った
から早ければ予備師団の投入は2週間後には可能だろう。

そして、本島攻略がある程度進み飛行場も奪取したため海軍特別陸
戦隊は慶良間諸島の奪還を行う為に本島攻略から事前の予定通り引
き抜いた。

107号輸送艦と109号輸送艦を使用して慶良間諸島渡嘉敷島、
阿波連浜に上陸。準備砲撃には重巡洋艦5隻と駆逐艦6隻を割いて
丸々1日を費やした。

そして9日後、渡嘉敷島全域の奪還に成功。続いて座間味島、阿嘉
島、慶留間島、最後に外地島を奪還。

2週間ほどで全島の奪還に成功した。

想定よりも敵戦力は少なく、想定の半分以下だった。どうやら本島

防衛のためはかなり引き抜かれたらしい。

防御陣地も本島程では無く、かなり順調に奪還することが出来た。外地島には元々慶良間空港があったが深海棲艦も使用していなかったらしく荒れ果てて雑草が生い茂っていたがそれらを取り除き、滑走路の修復さえ済んでしまえば問題無く使用出来る。それでも1週間程は時間が掛かるが。

800mもある滑走路なので本島の西原飛行場に比べると短いが陸攻などでは無く戦闘機の運用ならばかなり有効的に使える。

この時点で陸戦隊第3歩兵連隊は2000名程に減っていた。

砲兵隊の方は前線の歩兵支援についたホハの1両が破壊された。

これ以外に目立った被害は無く戦闘継続は可能。

彼らは続いて久米島へ上陸。5日間の激闘の末同島の奪還に成功した。

陸戦隊は久米島に守備隊200名を残し渡嘉敷島へ戻り部隊の再編を行った。

慶良間諸島、久米島などを陸戦隊が奪還しているその間、沖縄本島では毎日のように激戦が繰り返り広げられていた。

この時、西原飛行場には32飛行戦隊が進駐。母艦航空隊の烈風などに代わり制空支援や対地支援を行った。

32戦隊の装備機である疾風は25番を2発搭載可能だ。

まあ爆弾を運んでくる輸送船に遅れが生じているから使用は出来ないが。代わりに一式陸攻が12機追加で派遣され支援にあたっている。

激戦と言うのは、本島南部、旧那覇市街地に突入すると暫くは何の反撃も無かったが突然後方などあちらこちらから敵兵が湧いて出て分断孤立させられる部隊が続出した。

結果、旧那覇市街地を完全制圧するのに3個歩兵連隊と1個戦車中隊を喪失。

歩兵連隊の残存兵は纏めて1つの部隊として再編、継続して攻略に

あつた。

戦車中隊はかなり手酷くやられ、12両中10両が完全に破壊され残ったのは2両だけ。その内の1両も足回りをやられてしまい前線への復帰は不可能。最終的に残ったのは1両だけだった。

9日に渡る激闘の末、どうにかして旧市街地を奪還し那覇飛行場1km程まで前進。

だが旧赤嶺駅を超え、那覇飛行場に隣接していた旧自衛隊那覇駐屯地や自衛隊病院などの飛行場周囲の開けた辺り、国道331号線を超えて差し掛かると激烈な抵抗を受けた。

先頭を進んでいた2個連隊が瞬く間に壊滅。敵は331号線を射撃目安にしているらしく、そこに足を踏み入れるか超えると機関銃、迫撃砲などあらゆる武器の射撃を受けた。

敵はここにかかなりの戦力、想定1個師団を配備しているらしく野戦重砲も多数配備されており、砲撃は苛烈、更には地上撃破されたりした戦闘機などの機銃なども地上配備して抵抗している。

爆弾を投下したりして破壊を試みるがどうにもあちらこちらに坑道を張り巡らしているらしく、潰しても潰してもあつちこつちから出てきては攻撃を加えられ、前線部隊はかなり疲弊している。

未だに331号線を超える事は叶わず、飛行場を使わせない為に爆撃をするに留まつている。

陸軍の要請を受けて戦艦の砲撃を叩き込んだ。

慶良間諸島の攻略に戦艦が居なかったのはそのためだ。だが慶良間諸島の防御陣地はそこまで強力では無く、更に言ってしまうえば守備隊の数自体も多くなかった。地下陣地もごくごく少数しか確認されておらず対処も用意であった。なので戦艦の砲撃が無くとも重巡の砲撃で十分事足りたのだ。

さて、話を戻そう。

那覇飛行場の奪還だが、やはり遅々として進まない。

既に5日間、331号線付近で激戦が繰り広げられている。

この時、陸軍からの要請により海軍特別陸戦隊第3砲兵隊が砲撃支援部隊として本島に再上陸。

陸軍の今作戦に投入されている3個師団はそれなりに機械化が進んでおりホハなどの車両も多数装備しているが市街戦によつて多数が撃破されたり擱座してしまつたりとかなりの被害を被っている。

なので前線へ補給物資を運ぶ車両も少ない。

今現在、那覇飛行場を包囲している部隊は大まかに北部、中部、南部と分担して担当している。

まず補給線に關しては小禄補給陣地に一度集積を行いそこからそれぞれの包囲線に補給を行っている。

安座間浜から小禄陣地まではホハを始めとした車両からトラックなどの車両を用いて物資を運んでいる。

小禄陣地から包囲線の各部隊への補給は重量物や嵩張る物などを運ぶ車両以外で運ぶ物資は人力だ。

砲弾、弾薬、燃料は車両で運び、食料などの軽い物は人力だ。

その物資運搬の人力での運搬をどうにかして補うためと火力支援の為に榴弾砲を使わせてほしいとの事だった。

確かに毎日の様に砲弾や銃弾を消費しているのだからもつと前線に向けて大量の砲弾薬と食料などを運ばねばならない。でなければ包囲が崩される可能性が出てきてしまうからだ。

今は問題無く包囲は出来ているが我々が置かれている状況はその内小さな綻びが後々大きく成りかねない状況なのだ。全ての問題を解決する事は無理だろうが出来るだけ小さなものから大きなもので問題は潰していかなければならない。

今の所、一番の脅威になるであろう敵の増援艦隊は我々の上陸の報告を受けてか撤退を開始。我々のいる南西諸島方面への進出は無くなった。第1潜水艦隊からの報告だ。彼女達には引き続き南方海域での偵察任務に従事してもらっている。

既に3か月以上も何処の港にも寄港せずにいるがそれはしようがない。

寄港できる港がどこにも存在していないことも関係しているが、そ

もそも基本的に潜水艦は隠密行動を主任務にしている、と言うその特性上かなりの長期間の任務になる。しかも今回は南西諸島攻略作戦と言う大規模作戦が行われている為に南方方面からの敵の増援に警戒しなければならぬから特に今回は長期間になる。

特に第1潜水艦隊は伊400型潜水艦で構成されている。

この型の潜水艦は無補給で地球一周を行えるほどに作戦行動に長けている。だからどちらかと言うと第2潜水艦隊よりも長期間の任務が行えるために必然的に増える。

呉に戻って来た時は第2潜水艦隊よりも長期間の休暇を与えられているからそれは仕方が無いとして割り切ってもらうしかない。

今回は最低でも南西諸島攻略作戦が完了するまでは第1潜水艦隊はそのまま任務に就き続けなければならない。

第2潜水艦隊は我々第一機動艦隊と行動を共にしている。作戦海域近海での哨戒任務だ。既に命令を出している通り、彼女達には機会があれば敵艦隊への攻撃の許可を出している。

また話がズレたが一番の問題だった敵艦隊は撤退、脅威は無い。

今の我々、この第1機動艦隊には敵艦隊と正面からのぶつかり合いは不可能だ。だからこの報告は艦橋の参謀達が歓声を上げるほどの嬉しい報告だった。

まあそれは置いておこう。

今優先しなければならぬのは那覇飛行場の奪還だ。ここをどうにかして奪還しない限りは戦線を中部、北部へと押し上げられない。

西原飛行場から毎日の様に一式陸攻と疾風による爆撃を行っているが未だに抵抗は強い。しかも那覇飛行場周辺は開けている為に何度かの攻勢に分けて奪還することが出来ない。開けている、と言っても多少の小高い丘だったりが存在するがそんなものは大した意味をなさない。と言う事は一度の攻勢で全てを奪還するしかないのだが、それがかなり難しい。

各部隊は損害の確認、再編等を行っている。

早ければ3日後に攻撃を再開させることが出来るが陸上部隊には

入念な準備の下、再攻撃を開始するように言っている。すると陸上部隊から、

「ならば10日間欲しい。それだけあれば準備は整う」

との報告が上がって来た。

まあ構わない。被害を最小限に確実に奪還出来るのであればそれに越したことはない。

更には再編や準備が終わるまでの10日間、戦艦、巡洋艦、駆逐艦からの砲撃に加えて流星と進出した一式陸攻、更には輸送船によって届けられた爆弾を搭載して疾風も加わり烈風までもが6番を搭載し爆撃を行う事になった。

既に戦艦6隻と巡洋艦、駆逐艦は飛行場周辺に対して砲弾を叩き込み始めている。文字通り地形が変わる程だ。双眼鏡を覗くと、砲弾が大量の土を巻き上げながら炸裂する様子が簡単に見て取れる。

「凄いな……」

「だねえ……これを10日間も続けるんだろ？……深海棲艦の陸上部隊じゃなくて良かったって心の底から思うよ」

「これで、那覇飛行場を奪還することが出来れば良いんだがな。そう上手くいくものかどうか」

「あとは陸軍を信じるしかないね。あいつらならやってくれるさ」
「そうだな……」

本当は予備師団の到着を待っていても良かったんだが、報告によるとあと2週間は掛かるらしい。と言うのも物資の積み込みが遅れ気味で人員だけならば送る事は可能だが他の物資、特に弾薬がまだ積み込み終えていないから継戦能力に欠けるとの事だった。

確かにそれでは前線へは師団を送る事は出来ない。今現在本島に備蓄されている砲弾薬は戦闘中の3個師団の分でこれを更に2個師団に分け与えるとなると戦闘に支障を来す。

本土から輸送船で大量に砲弾薬を送り込んでいるがそれでも消費の方が多く、陸上部隊もだが我々海軍の砲弾や爆弾の消費量が尋常ではないぐらいの量なのだ。

既に戦艦、巡洋艦は今日までの支援砲撃や準備砲撃によって何度も

補給をしている。

那覇飛行場への準備砲撃前にも一度補給しているし、更にはその後も補給予定だ。

陸軍と海軍、どちらかと言えば海軍艦艇が使用する砲弾の方が明らかに多い。だから海軍艦艇用の砲弾の量を多めに沖縄近海まで輸送しているからだ。割合で言えば6：4と言ったところだろうか。勿論海軍が6だ。

陸軍や陸戦隊が使うのは小口径の小銃弾や迫撃砲弾が殆どで、それぞれの師団に配備されている一番火力を持つのは九十一式榴弾砲だ。

口径統一の観点からそれ以外は配備していない。

種類が増えれば増えるほど、補給線への負担は大きくなる。出来るだけ補給線と生産ラインへの負担を減らすために取った策だ。

砲兵師団ならば更に大口径の15cmクラスの大口徑榴弾砲を多数装備しているが今回は砲兵師団の参加は無い。

小銃や機関銃に使われる小口径弾であれば1隻でもかなりの数を運び込めるのだが迫撃砲や九十一式はそれなりに砲弾が嵩張る。だからこそ多数の輸送船で何度も何度も輸送しなければならない。

輸送船は一度に20隻で輸送船団護衛艦隊と共に日本本土と沖縄を行き来している。

輸送船団護衛艦隊は、長門、日向、那智、羽黒、愛宕、摩耶を第1機動艦隊に引き抜かれているが、鳳翔はそのまま船団護衛に就いている。

沖縄近海に来た時、物資の揚陸が終わるまでの間は地上支援任務に就いている。

しかし、ここ最近関東から東海にかけて空襲が激化し始めているらしく弾薬砲弾等の生産に影響が出始めている。

にも関わらず何故前線である沖縄に砲弾薬や燃料が大量に輸送出来ているのかと言うと元々、この作戦に備えて大規模輸送作戦終了時から凡そ1年半、備蓄を進めていたのだ。それを開放しているから

だ。

それでも限界はあるからその限界が来るまでに決着を付けねばならない。

周到に準備をしてきたつもりだったが、ここまで手古摺るとは……この間にも隼鷹と飛鷹の飛行甲板からは流星や烈風が爆装を施して飛び立って行き投下し終わると戻って来てはまた爆弾を抱えて飛んで行く。

それが毎日毎日続いている。

海軍陸戦隊は沖縄本島以外の小島の制圧に動いている。

慶良間諸島の奪還が終わり、再編が終了後彼らはまず、伊是名島と伊平屋島の奪還に動いた。

この両島には深海棲艦の守備隊は極少数しか配備されておらず3日ほどで奪還に成功。

続いて奪還目標となったのは与論島。ここは1週間ほど掛かった。そして今現在、奪還の為に上陸、戦闘が繰り広げられているのは沖縄永良部島だ。

こちらは敵の数は少ないながら、かなりの抵抗を受けているらしく未だに制圧の目途は立っていない。

種子島以南の島々は深海棲艦の手に落ちている。

だから種子島以南の島を全て奪還せねばならない。

更にこの方面への戦力増強は続いている。

先ず、追加で配備されたのは慶良間諸島に2式大挺が20機。

これは南西諸島の奪還が成功したときにはこの部隊が哨戒任務を担当するからだ。

今現在はその爆弾搭載量を生かして前線への爆撃任務に当たっている。

80番を2発も搭載出来るのはかなり大きい。と言うのも2式大挺1機で流星2機分になるからだ。20機だけで流星40機分の爆

装量になる。

他にも25番を8発、6番を16発と大量に搭載出来る。あとは対艦攻撃用に航空魚雷を2本搭載出来る。

これを活用しない訳には行かないだろう。

次に、西原飛行場に陸軍第42飛行戦隊だ。

この飛行戦隊は疾風36機を装備している。既に32戦隊と共に支援任務に就いている。

そして彼らの支援と前線で戦う陸軍将兵の働きもあって、10日の準備期間の後に各包囲線で全面攻勢を開始。3日間の激戦の末に漸く那覇飛行場を奪還。

同飛行場を奪還するのに、合計6個連隊が消滅、もしくは壊滅の大打撃を被った。

那覇飛行場の奪還後、それぞれの陸軍部隊は続いて嘉手納飛行場奪還の為に前進を開始。

まだまだ南西諸島奪還作戦は終わりそうにない。

第18話

那覇飛行場を奪還し終え、首里城辺りまで前線を押し上げ奪還に成功。だが未だに南部全域の制圧とはならず、南部全域の制圧ともなると旧うるま市のある真栄田岬を超え、旧前兼久漁港と旧石川石炭火力発電所を結ぶラインまでを奪還しなければ南部全域の奪還とはならない。

更に中部はそのラインから名護市全域を含むから北部全域と同じくらいの広さと面積を持つ場所を奪還しなければならず、北部に至っては完全に熱帯雨林。

最低でもあと2か月は掛かる見通しだ。

まず我々は嘉手納飛行場と読谷飛行場を奪還しなければならない。

北部制圧を完遂するうえでこの2つの飛行場はある種の要塞の様相を呈しており、これを素通りすることが出来ない。

しかも深海棲艦は沖繩本島に西原、那覇、嘉手納、読谷飛行場の4つしか整備していなかったから残りの2つの飛行場を奪還してしまえば深海棲艦側の飛行場は無くなり航空戦力の脅威が無くなる。

そこで先ず我々は嘉手納飛行場の奪還を目指して入念に航空偵察を行ったのだがこれがまたとんでもないことになっていた。

塹壕と鉄条網は5重に張り巡らされトーチカなども無数に設置されており、しかもどうやら地下通路で各塹壕やトーチカと通じているらしく一筋縄では行かない様になっていた。

ここに無策で突っ込めば2個歩兵師団なんぞ瞬く間に壊滅どころか消滅しかねないし機甲師団も簡単にやられてしまうだろう。

しかも読谷飛行場との距離は5kmほどしか離れていなく、相互支援が可能なように重砲などを配置しているから陸軍師団は2つの要塞を同時に相手取らなければならないと言う、真面目に戦えば地獄絵図が簡単に形成されるであろう。

そこで俺は陸軍の各師団長や参謀達と話し合いを行った。

結果的に我々が下した判断は、多少時間が掛かろうとも安全策を取ろう、と言う事だった。

安全策と言うのは今現在、我々は予備の2個師団の到着を待っている状況にある。だからこの2個師団の到着を待ち、攻勢に出る、と言う事だ。計5個師団もあれば流石になんとかなるであろう、と言う予想からだ。総勢4個歩兵師団に1個機甲師団がこれで揃い踏みになる。

歩兵師団だけで7万人に近い大戦力となる。

機甲師団は上陸当初、150両以上保有していたが度重なる市街地戦で深海棲艦側はゲリラ戦を展開、その数を80両にまで減らしていた。

損失した戦車全てを補充すると言う事は出来ないが20両は確保して送り込む、と言う返答がもたらえた。

更に追加で要請した1個砲兵師団と1個歩兵師団が1か月後に到着予定だ。

これらの前戦力が揃えば7個師団の大戦力となり沖縄本島の奪還も加速的に進むであろう、と予想されている。

この7個師団は今の日本が揃えられる全ての師団であり総力だ。

敵も死に物狂いで抵抗して来ているが、我々はそれ以上の意思と決意でこの作戦に臨んでいる。

何度も言っているが、負ければ日本はもう二度と深海棲艦に対しての反抗する戦力も何もかもを失ってしまう事になるのだ。

決して負けられない戦い、と言う事だ。

損傷の為に日本本土へ回航した飛龍と蒼龍の現状だが、2隻とも回航途中に水密扉が破損して浸水が広がったりと、かなり損傷甚大で機

関の浸水も酷かったりと総取り換えをしなければならなかったりと、完全に修理を終えるのに4か月。

更にこの機会だからと言う事で飛龍と蒼龍の2隻は修理に合わせて対空兵装の充実を図る事になった。25m機銃を合同艦隊の持つて来ていた40mm対空機関砲へ換装する事になった。

確か、性能試験を行ったときに25mm機銃よりも近距離での威力が高いことが分かったかららしい。確かに空母は防御力が低くそう簡単に防御力を上げる事は出来ない。やれるとしたらバルジを増設するぐらいだがそうなると速度が下がる恐れがある。

ならば対空火器の数と威力を上げるしかないわけだが、40mm対空機関砲は4連装だから単純な砲門数でもかなり増加する。

今回の改装は40mm対空機関砲を国産化し、配電系統の不具合の確認等なども含まれているらしい。

正直、一級線の空母を兵器実験に使うとはどうなのか、と思っただがそもそも話兵装実験の行える艦が居ないと言う問題があったのだ。まあ最悪南方方面奪還作戦までに間に合ってくれば特に問題は無いのだが。

まあそうでもしないとイケないぐらいに追い込まれていると言う事なんだが。

それ以外にも大なり小なり損傷を受けてる駆逐艦などもいるから、艦隊の再建には最低でも1年は掛かるだろう。

今現在、修理中の空母は大鳳、阿蘇、グラーフ・ツェッペリン、アイクロイヤルの計4隻。これらは来年までには修理を完了する予定で、全ての空母が揃えば10隻に増える。鳳翔は基本、本土近海での搭乗員訓練か船団護衛任務が主任務となる為に一級線空母として数に加えていない。

戦艦は合同艦隊の戦艦が全て修理中だ。

元々日本海軍の戦艦は全て大破着底状態、空母を優先して引き揚げを行っていた為に一切引き揚げ作業が行われていない。

そもそもの話だが、戦艦一隻を引き揚げるのに空母の3倍近い労力を要するのだ。

試算であるが、大和と武蔵の1隻辺りの引き上げと修理に掛かる時間は、2年半。

この期間とその分の資材を他に回した方が少なくとも現状では建設的だ。2年半もドックを占領されていては敵わない。

戦艦は14隻が揃い踏みになる予定だ。

南方方面奪還作戦時までには最低でも空母10隻、戦艦14隻が揃う予定ではいる。だがそれでも深海棲艦の物量は遙か上を行く。

南方方面で相対する敵空母の数は2倍ならばまだ良い方、最悪3〜4倍を覚悟しなければならないのだから絶望的としか言い様が無い。

戦艦だって同じ状況なのだから、南方方面奪還作戦はどうやって成功させればいいのか皆目見当も付かない。

しかし、それ以前に目の前の南西諸島奪還作戦を成功させなくてはならない。

前述の通り、予備師団の到着を待つてからの攻勢になるが、予備師団の到着は2週間後の予定だ。

その間、前線将兵の皆には幾ばくかの休息を取ってもらっているが航空隊の面々は寧ろ全くの真逆と言っていい程に大忙しだ。

何故か、それは幾ら予備師団が到着するまで2週間あるとは言ってもその間、何もしない訳には行かない。

だから陸海軍問わずに航空隊からの爆撃を続けているのだ。更には戦艦や巡洋艦も時折、艦砲射撃を加えている。

流石に常に行うわけには行かないから日に4回、戦闘機は各飛行隊から20機ずつ、一式陸攻で爆撃を行っている。

西原飛行場には32飛行戦隊疾風72機と海軍第703航空隊の一式陸攻32機が進駐しているが、追加で陸軍第43飛行戦隊が追加で進駐。疾風を32機装備している。

合計で138機だ。

那覇飛行場には陸軍第52飛行戦隊と第49飛行戦隊の疾風計7

2機と更に海軍第701航空隊と第704航空隊の一式陸攻64機が進駐している。

合計136機

これで沖繩本島の全航空戦力は274機になっている。

更に慶良間諸島には二式大艇が32機、外地飛行場に海軍第313航空隊の紫電改32機が進駐済み。

合計で338機にまで増えているが深海棲艦の機動部隊を迎え撃つには到底足りていない。だからこそ空母4隻とその母艦航空隊が留まっているのだがそれを合わせても500機程度。

やはり戦いは質と量で決まる様だ、と認識させられた。

さて、予備師団が漸く沖繩本島に到着した。

これで戦力は十分に整った。だが、直ぐに攻略を始めるわけには行かない。

先ず、各師団に配備されている九十一式榴弾砲の陣地構築から始められた。

と言うよりも、各師団の九十一式榴弾砲を集めて臨時の砲兵師団を編成。既に沖繩本島攻略、奪還に当たっていた2個歩兵師団分は、臨時第1砲兵師団として、予備師団の2個歩兵師団分を臨時第2砲兵師団として編成。

第1砲兵師団を旧前田高地に、そして第2砲兵師団を旧伊祖公園に配置。

嘉手納飛行場までの距離はどちらとも2km程なので十分に射程範囲内だ。

敵の防御陣地は周囲1kmに渡って張り巡らされている。この距離は直接照準射撃となるので静止目標ならば狙った的にどうやっても外す事は無い。

各臨時砲兵師団は150以上の九十一式榴弾砲を装備している。

臨時第1砲兵師団は157門、臨時第2砲兵師団は162門となっている。

これでも凡そ30〜40門ほど定数には足りないのだがそれは仕方が無い。そもそもの話だが砲兵師団は15榴弾砲が主装備なので攻撃力、破壊力ともかなり劣っている。

まあそれは幾ら何を言ってもしょうがない。

それでは嘉手納飛行場の奪還作戦の概要を説明しよう。

先ず、第23歩兵師団と第39歩兵師団、第17歩兵師団の計3個歩兵師団で飛行場を字新垣陣地と161・8高地陣地から旧嘉数高台公園を通って牧港漁港に至るまでの範囲で半包囲を実施。

飛行場周囲1km圏内には防御陣地が無数に構築されているので入れないから1・2kmほどのラインで半包囲線を構築する。左から第39歩兵師団、第23歩兵師団、第17歩兵師団の順番だ。

残った第59歩兵師団と第3機甲師団は防御陣地の突破の為に後方で待機。

半包囲線を構築している各歩兵師団は迫撃砲を装備しているので、砲兵師団と合わせて砲撃を実施する。

戦艦や重巡、空母艦載機も艦砲射撃、爆撃を実施。

今までにも実施してはいるが、更に徹底的に行う。

3日間の準備砲爆撃後に、第59歩兵師団を第3機甲師団が前進。防御陣地を一点突破を目指す。最初に右翼側の包囲線を構築している第17歩兵師団と合同で敵防御陣地を突破師団が完全包囲、撃滅。

その後、第17師団は右翼側面から、突破師団は第39歩兵師団、第23歩兵師団と相対している敵防御陣地後方から攻撃。左翼側には海しかないなのでこれで完全包囲が構築出来る。

これで嘉手納飛行場の奪還は成功するはずだ。

まあ、正直な所どれほどの被害が出るか全く想像も見当も付かない。

一応出した試算では5〜6個連隊分の死傷者が出る予想だがもつと増える可能性もあるし逆に少ないかもしれない。

既に半包囲線の構築は完了、あとは準備砲爆撃の指示を出せば奪還が始まる。

—————

準備砲爆撃が丸々3日に渡って実施された。

4日目の明朝、攻撃命令が下令された。

第3機甲師団と第59歩兵師団が防御陣地の突破を開始した。

上空では疾風と流星が爆弾を抱えて飛び回り支援要請に応じて投下する予定だ。支援要請は今か今かと待っている。

「第3防御線にぶつかった！塹壕と機関銃がまだ生きていやがる！」

「隊長！第3小隊が第2防衛線の敵のトーチカにぶつかって足止めを食らっています！」

「爆撃を要請しろ！海軍や航空隊、砲兵師団の連中は何をやっていやがった!?何が準備砲撃だ！丸々3日もやってこれじゃ意味が無いじゃないか！」

「200m間隔で塹壕とトーチカ、機関銃が構築されてて支援砲撃で迫撃砲弾も降ってきやがる！読谷から重砲の砲撃も飛んで来るしなんなんだ！」

「偵察機から敵戦車が多数読谷飛行場から出発、こちらに向かって来ているとの報告が入りました！」

「ふざけるな！こんな状況で敵戦車まで相手にしてられるか！艦隊に爆撃機を要請しろ！このまま敵戦車とぶち当たったら壊滅するぞ」

！」

「7号車がやられました！」

「敵戦車8両！」

「ええいクソ！対戦車戦闘！周りの敵は歩兵に任せて俺達は敵戦車を叩く！」

「主砲！目標敵1号車！」

「目標敵1号車！」

「撃て！」

ドンー！

「駄目です！弾かれました！」

「構わん！撃ち続けろ！」

「第2中隊！敵の側面に回り込め！横からなら貫通出来る！」

「4号車被弾！」

「構っていられるか！このまま敵戦車を引き付けろ！」

「正面敵歩兵40！迫撃砲もあります！」

「潰せ！こちらも迫撃砲で応戦しろ！」

「小隊長！敵2個小隊が応援に！」

「機関銃手！制圧射撃！敵に頭を上げさせるな！」

「ガッ!？」

「アア〃ア〃ア〃!？足が、足が無い！」

「そいつを後ろに下げろ！」

「正面に敵対戦車砲！」

「1門だけか!？」

「はい！ですが敵も死守しています！」

「支援爆撃を要請！あれを潰さない！後ろの部隊が続けないぞ！」

「隊長、敵が後ろに回り込み包囲されました！」

「クソつたれ！一度後退する！ここに留まっても前に進んでも意味は無い！」

「下がれ！全員一度後方の部隊と合流するぞ！」

あちらこちらで敵味方問わず銃声、砲声が鳴り響き断末魔が上がる。

負傷した兵士は担がれて後方に下げられていく。

深海棲艦も死に物狂いで抵抗し、決して防衛線を突破させてなるものかと言わんばかりだ。

実際、突破師団は防衛線を突破してはいるがその逆に押し返されるという事象が頻繁に起こっている。

それ故に突出してしまい分断包囲されてしまう部隊まで現れる始末。

空からは爆弾が要請によって落とされて、臨時編成の砲兵師団は防衛線突破を支援するために砲身が焼け付く事も厭わずに叩き込み続けているが、敵も重砲や対戦車砲、迫撃砲とありとあらゆる大砲を持ち出して激烈に抵抗している。

既に4個連隊が大打撃を負って後退し、別の部隊が穴埋めに入っていたりする。

敵は読谷飛行場に退避させていた戦車も持ち出して機甲師団にぶつけたり、こちら側の包囲線を突破しようと突っ込んでくる。

だがこちらも突破させまいと必死に戦い続けている。

恐らく、予備師団の到着を待たずに奪還に動いていたならば既にあちこちで戦線崩壊が起きて逆に包囲線を破られていたかもしれない。

だが予備師団が到着したお陰で包囲線を敷く3個師団はその分兵力に余裕が出来て交代をすることが出来ている。

そして4日間の激戦の末に遂に突破師団が飛行場に到達、右翼側へ方向転換し敵防衛線の完全包囲に成功した。

「完全包囲だ！今だ、行け！進め！好機を逃すな！」

「突っ込め！敵は包囲網が完成して戦意が衰えたぞ！」

「火炎放射器！横に避けずに真っ直ぐ突っ込め！その方が狙って撃つよりも敵を殺せる！」

完全包囲が完了すると右翼側では一斉に全面攻勢が始まり、あちこちで白兵戦まで置き始めた。

「おおおお！」

「ガッ！」

「ゴフッ！」

一応人の形をしてはいる物の、明らかに全く別物の姿形の深海棲艦の兵と小銃で殴り合い、銃剣で突き刺し至近距離で発砲する。

戦場は混沌とかせて既に敵味方入り乱れての殺し合いだ。

丸々2日の包囲戦によって右翼側は敵を殲滅。これまでに全体で予想の遙か上を行く6個連隊ほどの戦力を喪失していたが敵を突破した彼らの勢いは止まることは無い。

一気に身を翻し、休む暇も無く左翼側に突破師団と包囲線を構築していた部隊の一部が展開し包囲を始めた。

こちらは読谷飛行場に近いと言う事もあって突破師団が後方から攻撃されるなど、更に地獄の様相を呈した。

白兵戦では小銃を捨てて殴りかかり、そこらに落ちている石で殴り殴られ、両腕を失った兵士が敵の喉笛に噛み付き、引き千切る。

更には支援爆撃を超至近距離で要請し、敵諸共爆風で吹き飛ばされて悶絶するなど、もう本物の地獄だ。

「殺せ！敵はどうせ投降などしない！」

「死ねえええ！」

「支援爆撃を要請する！……何!?近いから出来ないだど!?そんなもん構わずに投下しやがれ!!」

そして遂に左翼側の敵を殲滅。

5日間に渡る地獄の戦いだった。

左翼側での戦いで5個連隊が壊滅的打撃を被った。

そしてそのまま各師団は前進し、左翼側の師団は嘉手納飛行場と読谷飛行場の丁度中間地点付近にある白比川付近まで前進。

右翼側師団は旧瑞慶覧小学校（z u k e r a n E S）付近の白比川から若松公園、中代城跡付近、旧沖縄電力吉の浦火力発電所を結ぶラインまで前進。

丁度宜野湾市と中代村までの辺りまでを奪還した事になる。

まあ正確には中代村は少し残っているのだがその辺は割愛する。

後年、右翼側での戦いを「普天間川の戦い」、左翼側での戦いを「牧野川の戦い」と呼称するようになる。

—————

嘉手納飛行場の奪還に成功した。

丁度宜野湾市と中代村までの辺りまでを奪還したのだ。

これで一旦一息つくことが出来る……と思いきやそうはいかない。

次に読谷飛行場の奪還を目指さなければならぬからだ。

更には伸びてしまった補給線の負担を減らすために、最前線への補給を担当する港の確保もしなくてはならない。

今でも旧与那原アリーナに最前線への補給港を設置してはいるが来るべき読谷飛行場や北部奪還を行うには長い。そこで目を付けたのが東シナ海側が旧宜野湾漁港、太平洋側が旧熱田漁港だ。

宜野湾漁港は既に奪還し、宜野湾補給港として使用開始。こちらは問題無いが旧熱田漁港が問題だった。

現在の最前線である火力発電所跡からは2kmほど離れててそこまで前線を押し上げなければならない。

そこで旧熱田漁港奪還を目指して3個連隊が編成されて進軍。半日で奪還が完了。

敵も我々がここを補給港として使うべく奪還に動くと思われていたのか1個連隊が守備に就いていたが嘉手納飛行場の失陥がかなり響いていたのか幾らかの抵抗を受けたが砲撃と爆撃を行いながら各連隊が前進すると2時間程、抵抗しただけで即座に撤退を開始した。

もつと嘉手納飛行場と同じぐらいの抵抗を受けるかと思っていたから、ある意味拍子抜けだった。

そして、1週間程整備期間に充てて旧熱田漁港を使用可能にした。名前はそのまま熱田補給港となった。

「提督、漸く嘉手納を奪還したね」

「ああ……本当に長かったがまだまだ先は長い。もう2か月近く経っているのに北部全域の奪還すら成っていない」

「ま、寧ろそこは敵の抵抗衰めると陸軍の活躍を褒めるべきだね」

「そうだな……だが幾ら何でも損失が大きすぎるな。これじゃあ本島全域を奪還するまでにどれだけの期間すが掛かってどれだけの部隊

が損失する事か」

「今の段階でも1個師団以上損失しているからね、甘く見積もっても今の半分ぐらいは減っちゃうかもね」

「嬉しくない報告だな……」

「でも敵は補給を受けられないからもう暫くすれば抵抗は減ってくると思うけど。そうなたら次はゲリラ戦か」

隼鷹と話ながら、沖縄本島奪還の真の意味での天王山は読谷飛行場の奪還になるであろうと俺は睨んだ。

事実、敵は北部や中部の兵力を読谷飛行場付近に集結させていることが偵察で判明している。

想定されていた師団は1個師団だったが、恐らく攻略開始時には2〜3個師団規模にまで増えていると予想されている。

そうなるは今現在の我々の戦力では奪還は難しいと言える。

となれば追加で要請した砲兵師団と歩兵師団の到着を待つしかない。

それまでは各部隊の再編や準備に費やすのだ。

その間、敵の陣地構築を妨害するためと出来る限り敵戦力を削る為に今まで通り、砲撃や爆撃を続ける。

そして、2週間後。

第4砲兵師団と第76歩兵師団が到着。

第39歩兵師団と第23歩兵師団は戦力がかなり減っていたがそのままそれぞれの師団として置いておき、予備師団として後方待機となった。

第4砲兵師団は嘉手納飛行場に展開。

この砲兵師団はライセンス生産であるラ式15糎榴弾砲を装備している。

1年程前までは取り敢えず数を揃える、と言う観点から野砲から歩兵砲、山砲、榴弾砲、対戦車砲、加農砲とありとあらゆる砲が装備さ

れていた。

だが南西諸島奪還作戦を見据えて全てをラ式15糎榴弾砲に置き換えたのだ。

そのために大規模輸送作戦で運んできた鉄鋼や希少金属類を陸軍砲兵廠の妖精達に提供し生産を行ってもらった。

全力稼働で生産をした結果、この師団分だけはラ式15糎榴弾砲を揃えることが出来た。

4門で1個小隊、これを3個で1個中隊とし更に3個で1個大隊。

1個大隊は36門のラ式15糎榴弾砲を装備している。

大隊が4つで1個砲兵師団となり、榴弾砲を計144門装備している。

これでも少ないのだ。本当ならばこれの倍は欲しいが無い物強請りは出来ないからこれで我慢するしかない。

嘉手納飛行場は読谷飛行場と距離が近く、砲撃に晒されるので航空隊の進出は今の所予定は無い。

臨時で編成した2個砲兵師団も嘉手納飛行場周辺に配置転換。

これで臨時が混じっているとさえ3個砲兵師団が揃い踏みになった。かなりの火力を發揮する。

第76師団は前述の2個歩兵師団の代わりに前線に配置。

全戦力では3個歩兵師団と1個機甲師団、1個砲兵師団が存在するが機甲師団は嘉手納飛行場での戦いで機甲師団の戦車は19両にまで減っている

歩兵師団も2個歩兵師団を合わせて漸く1個歩兵師団分となる。

唯一無傷なのは第76歩兵師団と第4砲兵師団だけ。これだけの戦力で読谷飛行場を攻略出来るか？

明日、陸軍師団長達と作戦会議があるから正直に聞いてみよう。

「それでは、作戦会議を始めます」

「早速ですが、陸軍には今現在どれほどの余力が残っていますか？現有戦力だけで読谷飛行場の奪還は可能ですか？」

山田参謀長が陸軍の師団長達に聞くと、彼らは一様に厳しい顔をする。

それを意味するのは難しい、と言う事だろう。

「……正直に言いたしましょう。これだけの戦力で攻略は現実的ではない、と断言させていただきます」

「やはり、今までで失った戦力が大きいと言う事ですか」

「その通りです」

「陸軍の皆さんは全力を尽くしてくれました。本当に感謝の念が堪えません。戦死した陸海軍将兵の犠牲が無ければここまで進む事は出来なかったでしょう」

そう俺が言うと、師団長達はありがとうございます、と言うとまた考え始めた。

「海軍は陸軍への支援を全力で行います。要請があれば艦砲射撃や爆撃も行います。現に陸軍の飛行戦隊と共に任務に就いています」

「それに関しては前線将兵の代わりに厚くお礼申し上げます」

「正直に言ってください。あとどれほどの戦力があれば読谷飛行場を奪還出来ますか？」

「海軍からの偵察結果などを考えても、機甲師団や砲兵師団も、とは言いません。あと最低3個歩兵師団は欲しいですな。でなければ読谷飛行場を奪還出来たとしてもその後の行動に支障が出ます」

「……だが本土にはすぐさまここに送り込める師団はもう……」

「はい。一応、2個師団が後1か月あれば武器の充足率は何とかなる様ですが……」

陸軍の師団長や参謀達はそういう。

確かにその通りだろう。

陸軍の銃や、銃弾、砲弾の生産工場は今もフル稼働しているがそれでも足りない。

これ以上望むのは酷だ。

それに2個歩兵師団が1か月後には戦線参加可能と言っていたが輸送を考えれば1か月と2週間は掛かる。

それだけの期間があれば敵はこちらの妨害の為に砲爆撃があるとは行っても防御陣地を完成させるどころか拡張するまでに至るだろう。

しかも海軍にも問題がある。

それは輸送能力、と言うものだ。

「海軍の輸送能力も、正直に言って限界寸前です。物資の輸送ですら限界ギリギリなのにこれを師団の輸送に転用するとなれば補給が滞ります。そうなれば前線へ銃砲弾や燃料を補給出来なくなり戦線崩壊を起こすのでは、と危惧しています」

「しかも現在の師団数での消費弾薬量を補給することですらかなり危ういの更に更に師団数が増えてしまつては満足に補給が出来ません」

「輸送船にも限りはありますからな……それは致し方無い事でしょう。ですがこのままでは読谷飛行場を奪還することは出来ませんぞ」

陸海軍は、共に必死になつてどうにかする為の策を考えたがやはり良い考えは浮かばない。

既に海軍の輸送能力はかなり限界がきており、動かせる輸送船を総動員して陸軍への燃料弾薬、食料医薬品等に加えて海軍の戦艦にも砲弾や爆弾を補給しているのだ。

これだけでもかなり限界に近いのにこれ以上消費量が増えてしまつては輸送が追い付かなくなる。

最前線ではあちらこちらで毎日の様に小規模な敵部隊が攻撃を仕掛けてきて弾薬を消費し、死傷者を出して負傷者の手当や治療の為に医薬品を消費している。

今はまだ白比川を挟んでの戦闘だったりとまだ負担は軽い方だが……

更に意外と、いや以外でもなんでも無く大きな負担になっているのがマラリアや赤痢などの伝染病の薬だ。

これはマラリアに関してマラロンと呼ばれる薬やキニーネなど

の薬剤を服用したりしていけば問題無いのだが、マラロンは毎日2回服用しなければならない。

全將兵に行き渡らせるだけで何隻分もの輸送船を専用にして運ばなければならない。かなりの負担になっている。

しかしそれを輸送せずに非戦闘損耗が拡大するのも地獄だ。

だからこそ必死に輸送し、備蓄も少しずつだが進めている。だがそれでもギリギリ。

これ以上消費量が増えれば本土の生産も輸送も追いつかなくなる。

解決策としては輸送船の数を増やせばいいのだがそれも、大した数にはならないしそもその話、増やすとすると修理をしたりしなければならぬので時間が掛かる。

ただでさえ大鳳などの戦闘艦艇の修理で地獄の忙しさとなっている。工場やドックは本当に妖精達が過労死してしまう。

確かに今の情勢はそんな事言っていられないのだが関係ないと言わんばかりに仕事量が増えてしまって、それで工員妖精達が過労で死んでしまつては本末転倒だ。

修理などを行えなくなり戦線への影響は遥かに大きく、損傷艦艇の修理が行えず修理待ちの艦艇が増えて影響が拡大する事になる。

そうなつたらそれこそ日本は終わりだ。

確かに前線で戦う兵士達も重要だが、それ以上に前線を支える為に働いている物の方が遥かに重要なのだ。

屈強な兵士が居たとしても銃が無ければ戦えないし弾が無ければ撃てない。

水や食料が無ければ飢えと渴きに苦しんで死ぬことになる。

燃料が無ければ船も飛行機も車も戦車も動かせない。

そう考えると補給などは本当に重要なのだ。だからこそ輸送船団には鳳翔を筆頭に3個水雷戦隊を護衛に就けているのだ。

過去の日本海軍が犯した過ちを繰り返してなるものか。兵站や補給線を維持しなければ戦いなど出来ない。

まず初めにやるべきは兵站の確保と補給線の維持なのだ。それが

あつて次に戦いが来る。

正直、艦隊の護衛を増やしたい気持ちもあるし護衛艦隊の規模も増やしたいが現状、これが限界なのだ。

だが、どうすれば戦力を増やし、尚且つ攻勢に出られるほどの輸送量を確保出来るのだろうか。

会議は解決策を出せないまま1時間が経った。

「現状では、読谷飛行場を奪還することは出来てもそれ以降、戦線の維持や中部、北部への攻勢が出来なくなりますそれを含めて海軍の考えを改めてお聞かせ願いたい」

「……補給に関しては現状の消費量ならば責任を持って輸送すると確約しましょう。ですがこれ以上師団数が増えるとなると、輸送船の数を増やす事も出来ないので全部隊へ満足に補給させられる、と言えません。沖縄本島に備蓄に回していた物を開放したとしても6日持つかどうか……」

「即座にそれらを解決出来る方法は何か無いのですか？」

「解決策としては、輸送船を増やせば良いだけです。その輸送船がもう無いのです。今沖縄に向けて輸送任務に就いている船で全てです。あと1か月頂ければ輸送船をどうにかして修理を行うか終わるから2、3隻増やす事は出来るでしょうが……」

「2、3隻だけでは焼け石に水、ですなあ……」

「現状、ドックの殆どは戦闘艦艇の修理に手一杯です。これ以上工期を遅らせると、想定外の事が起きて沖縄本島奪還が長期化してただでさえ作戦予定などが全体的にずれ込んでいます。空母などの修理工期を遅れさせるとなるとそれ以降の作戦行動にもっと遅れが生じて……」

「海軍が輸送してきた物資が底を着く、ですか」

「はい……お恥ずかしながら戦略物資輸送に関しては南方方面が完全

に深海棲艦の手中にあるため、輸送任務を行うとなると潜水艦を使うしか出来ませんが潜水艦隊はそれぞれ既に別任務に就いているので不可能です」

やはり、陸海軍の現状を考えるとこれ以上最前線への補給面、戦力面で考えても増やさなければならぬ。

戦力に関しては増やす事は出来るが補給を増やす事は出来ないと言ふ矛盾が生じてしまっておりこれを早急に解決する策は無い。

事実、最前線へ食料を回す事を最優先にして後方支援部隊や将校達の物資を切り詰め、更には海軍の一部艦艇からも食料を捻出して送り込んでいるのだ。

毎食握り飯が1つと水はその日その日で支給される水筒分だけだ。

事実俺も食事が握り飯3つだった所、1つになり味噌汁も沢庵も無くなった。

掻き集められるところから掻き集めてこれだ。

そして参謀達が話し合い、結果として

「陸軍は、先程読谷飛行場を現有戦力で奪還は可能、と申しましたか？」

「……まあ、何とかなるでしょう。海軍の協力は必要不可欠ですが」

「そこで提案があります。一度攻勢を取りやめ、物資備蓄に全力を注ぎませんか」

「物資備蓄に全力を注ぐ、か」

「はい。海軍には追加の2個師団、いえ1個師団だけでも良いので1か月後に送り込んでもらいたい」

「まあ、それに関しては責任を持って送り込むと確約しましょう。ですが補給に関しては一切の責任を担ってませんぞ？」

「いえ、構いません。1か月で備蓄した物資の量にもよりますが読谷飛行場奪還までは戦線をどうにかして維持させます」

「恐らく各部隊の損耗も大きくなるでしょうからその時は消費量が減少している筈。あまり喜べない事ですが」

「……分かりました。1か月間全力で備蓄の為に物資輸送を行いま

しょう。その後の師団もしつかりと送り込みます。ですがそれ以上の期間は何度も言っています。責任は持てませんぞ」

「はい。それで構いません。どうかよろしくお願いします」

結果、1か月間の各種物資の備蓄に時間を割いてその後、追加増強師団を送り込み読谷飛行場奪還に動く事になった。

それに合わせて次回以降の物資は備蓄に回した。

前線はなんとか各部隊の働きもあり戦線維持が出来た。

そして1か月後、かなりの量の物資の備蓄が出来た。

そして約束通り2個師団を送り込んだ。

1週間程の準備期間を経て漸く読谷飛行場奪還作戦が開始。

敵はやはり周囲700m程に何重もの防御陣地を構築していることが偵察で判明している。

まず準備段階として海軍陸戦隊を追加で投入した海軍特別陸戦隊第5歩兵連隊と第3連隊の計2個連隊動員して後方の仁禮浜(旧 Ni ra i b e a c h)に上陸、陸軍も大発や101号型輸送艦を使って同じ場所に上陸。戦線を押上げて前後から読谷飛行場を包囲。字御殿敷などの側面は元々墓があったが既に爆撃や砲撃により跡形も無く消し飛び存在しておらず、海側を残して完全に包囲完了。

これは3日ほどで完了した。

どうやら敵は飛行場周辺に戦力を出来るだけ集めたらしく、それ以外の場所は抵抗らしい抵抗も受けることなく進むことが出来た。

敵も攻撃を受けると幾らか抵抗はするが直ぐに飛行場方面に向かって後退していった、と報告が上がって来ている。

丸々4日の準備砲撃期間を経て陸軍の包囲していた師団は一斉に攻撃を開始。深海棲艦の読谷飛行場守備隊は押され始めた。

8日間の激戦の末に陸軍はどうかして飛行場手前400mまで前進。

更にここで陸戦隊2個歩兵連隊が読谷飛行場海側にある海岸に一

齊上陸。流石に敵は此処への上陸を予想していなかったのか、それとも陸軍の攻勢を受け止めるだけで精一杯だったのか対応は遅れ気味となり、各連隊事に北進、南進を開始して陸軍と挟撃。

6日間の戦闘の末に飛行場の海側200mまでを奪取するに至った。

そして更に準備砲爆撃を2日間行い、砲兵師団の支援砲撃の下、各師団は一斉に攻撃を開始。

20日間に渡る一進一退の攻防の末に飛行場全域を奪還。

夜襲を仕掛けたり、白兵戦による殴り合いもあちこちで発生して嘉手納飛行場奪還作戦時よりもずっと地獄の有様だった。

事実、何度も攻撃をはじき返されて漸く前進したと思ったら再び敵の攻撃によって奪われたり奪ったりと、陣地によっては日に10回以上持ち主が変わる程の激戦が繰り返られ、常に前線が前進と後退を繰り返して動き続けると言う状況だった。

だがそれでも最後の5日間は敵も補給も無く、弾薬などが底を着き始めたのか抵抗も散発的になっていたがそれでも夜間の襲撃などがあり、更には昼間でも砲弾薬が底を着きかけていると言うのに猛烈な抵抗をしてかなり手古摺った。

結果、44日間と言う1か月以上に渡る激戦の末に読谷飛行場とその周辺を奪還。

敵は読谷飛行場に2個師団と1個旅団を配備していたことが判明。そりゃあれだけの激戦が繰り返られる訳だ。

敵はその戦力を丸々喪失。夜間に幾らかの敵部隊が包囲の隙をついて脱出したらしいがそれも高が知れている。

だが我々も第23歩兵師団と第59歩兵師団が全戦力の6割以上を喪失、大幅に戦闘能力を失った。

第3機甲師団も戦車を全て喪失し全滅。

それに伴いこの機甲師団は次の輸送船団で本土へ戻されて再編が行われる事になった。

今現在沖縄本島に駐留しているのは第17歩兵師団と第76歩兵師団、第4砲兵師団の計3個師団のみになった。

それと臨時で編成した2個砲兵師団も健在だが2個歩兵師団に編入されることになり解体が決定した。

砲兵師団は未だ健在だが、第17歩兵師団、第76歩兵師団はどちらとも約3割を失っており戦闘能力は大幅に低下している。

本土にはもうこちらに回せる師団が残っていないのでこの戦力で何とかするしかない。

全体では凡そ2個歩兵師団分の戦力と1個砲兵師団分しか残っていない。

陸戦隊も第3歩兵連隊が慶良間諸島守備隊を含めて600人、第5歩兵連隊も当初2500人いたが1400人ほどまでに減っている。

これだけの数で中部と北部を奪還出来るか不安だがやるしかない。そもそも今すぐに攻勢に出られるわけではない。

全体的に再編を行って更に消費した弾薬等の補充を行わなければならず、次の輸送船団が到着するまではまともに行動を起こせないのだ。

「漸く、南部全域の奪還が完了したか……」

「ここまで2か月かあ……かなり時間が掛かったねえ」

「最初に上陸したのが南部と言う事も有るのだろうが、敵さんの抵抗が想定より遙か上を行く激しさだったからな。もう3個師団以上の兵力を失っているのがその証拠だろう」

「ま、こつちも十分とは言いがたい戦力だったからね、寧ろ失敗してない事を喜ぶべきだと思うよ」

「そうだな……」

「……提督、疲れてるだろ」

「いや、そんな事は……」

「何言ってるんだい、そんだけ疲れた顔してんだ、私ですら分かるぐらい

だよ」

「む、そうなのか……」

「それに2か月前とは全然比べ物にならないぐらい覇気と言うか生気が感じられないからね。ずっと睡眠時間は3、4時間だったんだから当たり前前つちや当たり前前なんだけど」

「俺なんかよりも前線の陸軍や陸戦隊の将兵の方がずっと疲労が大きいだろう。今ここでおれが弱音を吐くわけには行かないのだ」

「ま、それもあるけどさ、提督が倒れちや本末転倒だよ。まだ昼間だけど今日はもうあたしらに任せて寝な」

「いや、だからそう言う訳には……」

「鳳翔さんに言いつけるよ」

「……分かった、分かったから鳳翔に言うのだけは止めてくれ。最悪輸送船団と一緒に本土に帰されるかもしれん」

「なら寝る事だね。ほら、行くよ」

「む、付いてこなくても大丈夫だぞ」

「そう言って仕事する気じゃないかい？」

「いや、そんなことは無い」

「だめだ、信用できない。寝るまでは傍で見張ってるからね」

隼鷹と話していると、どうやら俺の疲れを見抜いて結局自室で寝る事になってしまった。しかも隼鷹の監視の目があるとなつてはこつそり書類仕事を片付ける事も出来ない。

まあ、確かに2か月前から睡眠時間を削って色々とあちらこちらに掛け合ったりとしていたから……平均的な睡眠時間は3時間半ほどだろうか？

思えばこの世界に来てから随分と俺も変わったものだ。あの時に撮った写真と今の俺の顔を見比べれば分かるものだが顔付きや雰囲気一つを取つてもまるつきり別人だ。

今、母さん父さん達にあつても俺だとは分からず疑うだろうな。

「ほら、提督行くよ」

「ああ……おっと」

「フラフラじゃないか。ほら肩貸しな」

「いや、大丈夫だ、一人で歩ける」

「倒れられても困るから問答無用ッ」

そう言つて隼鷹は俺を担ぎ上げるとそのまま俺の自室に向かった。

「何かあつたらすぐに報告するからゆつくり寝な」

「ああ、本当にすまん」

到着すると、俺は制服を脱いでベットに潜り込むと急に睡魔が襲つてきた。

完全に意識が落ちる前に隼鷹が、何かを言ったような気がしたがまあ気のせいだろう。

———— side 隼鷹 ————

沖縄本島の攻略が始まってから2カ月。

漸く南部一帯を奪還する事が出来た。

敵の抵抗が激しく、予備師団に加えて更に2個師団を投入して漸く。

その間、提督は陸軍との調整やら本土への増援要請、輸送船団やら色々と奔走して回っていた。そのお陰で私達は存分に戦うことが出来ている。

提督は、

「俺は前線に立って戦う事は出来ない。だからせめて彼らが補給などを気にせずに戦うようにしてやるのが精一杯だ。それでも補給はギリギリだな」

と疲れた顔で少し笑いながらそう言っていた。

私は、最初提督と会ったときに一般人に毛が生えた程度まだまだ子供だな、と思った。

だって身体はデカいが顔付きは幼いし纏っている雰囲気も弱つち

かったし。

だけど、根性だけは人一倍あったんだろう。

毎日毎日、仕事の合間を縫って私らに空母の事やら戦艦の事などそれぞれの艦種の事を学びに来て、更には航空戦や砲撃戦、雷撃戦なんかの戦い方もしっかりと学ぶ。

ノートに書き写した事を食事時なんかはずっと読んで頭に叩き込んでいるし。それで鳳翔さんに怒られてちゃ世話無いけどね。

しっかりと頭に叩き込んで色々と考えて、資源の輸送やらなんやらの書類仕事を必死にこなしている。

大規模輸送作戦の時は見事に護衛艦隊、輸送船団共に一切の被害を出さずに完遂する。

まあ敵空母と戦った時は損傷こそしたものの沈んだ艦は無い。

ド素人がここまで成長したのだ、しかも4度も大規模輸送作戦を成功させると言う大金星を挙げたのだから十分だろう。

艦隊の指揮もしっかりしているし今の今まで轟沈艦を出さずに来ているのだから誉めるべきだろう。

それから色々あって、南西諸島奪還作戦が始まって敵艦隊との戦いで飛龍と蒼龍が損傷して本土に向けて退避したりと色々あったけどなんとかやってている。

今は私に乗り込んで指揮を執っているけれど、毎日毎日睡眠時間をギリギリまで削って仕事をこなして疲労が色濃く顔に出ている。

この作戦での最高指揮官は提督だから陸海軍合わせて様々な要請やらが全部提督に届いてそれを一切の休みも無く捌き続けているのだ。

食事の時も食べながらだし休みと言う休みは寝るときとトイレに行く時ぐらい。

そりゃ疲れもする。

今の所、一段落付いたから私が言って漸くまともな休憩を取る事にしたのか部屋に向かう時も立ち上がればフラフラだしこれ本当に倒

れるんじゃないかい？

肩に抱え上げて部屋に連れて行き、着替えさせてベッドに放り込むとすぐに寝息を立て始めた。

相当疲れていたんだろうね、死んだように眠ってる。

ただの元一般人がここまでよくやるもんだよ。

「ゆっくり休みな、お休み提督」

少し提督のそばにいてやるか。

狸寝入りって訳じゃないだろうけど起きて仕事をされちゃ堪らないからね。

頭を撫でてやるとゴワゴワした感触が伝わってくる。

10分程して私は提督の部屋を出た。

さあーで、今まで提督が私達のために頑張ってくれたんだ、次は提督の為に暫くは私達が気張らないとね！

そう思いながら軽く伸びをして私は艦橋に戻った。

l l l l side out

第19話

沖縄本島南部全域を奪還してから3週間が経った。

この3週間は中部、北部への攻勢を行う上で読谷飛行場奪還作戦時に消費してほぼ底を着きかけた砲弾薬、食料、水、医薬品、燃料などのありとあらゆる物資を前線部隊の将兵一人ひとりに行き渡らせ、更には備蓄に務めていた。

輸送船団は、沖縄に向けて2日間航行し、そして3日間の荷下ろし作業の後、再び2日間駆けて瀬戸内海の各地の港湾施設に戻る。1週間に一度沖縄へやってくるのだ。

輸送船団は輸送船32隻から構成され、そこに鳳翔以下、3個水雷戦隊が交代で常に2個水雷戦隊が護衛艦隊として就いていた。

当初、輸送船団は40隻存在したのだが、敵は流石に座して見ている訳では無く、潜水艦による通商破壊に乗り出してきたのだ。

その潜水艦によつて輸送船5隻が沈められ、3隻が大破する事態に陥った。

当然、こちらも黙っている訳も無く、俺は鳳翔達護衛艦隊に潜水艦狩りを命令。

結果として7隻の敵潜水艦を撃沈、ないしは撃破したが、そこから計算された敵潜水艦の数は、最低でも2個潜水艦隊と言うかなり絶望的な状況だった。

勿論、幾つかの手は打った。

まず手始めに護衛艦隊を2個水雷戦隊ずつのローテーションにするのではなく3個水雷戦隊を全て張り付けた。

燃料の都合上、あまり好ましくないのだがそれで輸送船団に被害が広がってはここまでやってきた意味が無くなってしまう。

追い詰められている我々が出し渋っている訳にはいかない。

この報告を受けて市木大将以下俺の上官5人は当然直ぐに許可を出してくれた。

お陰で敵潜水艦による被害は無くなりなんとか今までやって来れ

ている。

読谷飛行場攻略の際に問題になった補給の諸々の事情も敵潜水艦による通商破壊によって撃沈や大破させられた輸送船があったこともこちらの首を絞めている。

これ以上やられては本当に戦線維持が困難になってしまう。

まあ護衛艦隊に鳳翔が居なければもっと被害も多くなっていただろう。

さて、3週間の備蓄期間によって多少は余裕が出来ている。

だがそれでもまだ十分とは言いがたく最低あと一回の輸送船団からの物資を備蓄しなければならぬ。

現時点で4か月以上も沖繩奪還に動いているのだが未だに南部のみの奪還に留まっているとは……

本来の予定ならば3か月程で完了する予定だったのだがまさかここまで長引くとは。最悪、あと2か月以上ここに縛り付けられる事を想定しておかなければならない。

物資備蓄が終わり、中部への攻勢が開始された。

第17歩兵師団と第76歩兵師団を最前線に配置し、その後方に第4砲兵師団を配置。

後詰に第23歩兵師団と第59歩兵師団を置いた。

だがこの2個師団は師団とは言っているが実際の戦力はそれぞれ3個連隊ほどしか有していない。

なのでこの2個師団はどちらかと言えば要請に従って部隊を派遣すると言った方が正しい。

中部攻勢は、先ず石川岳、恩納岳の攻略を目指して前進を開始。

この時、宮城島と伊計島の攻略も同時に行うために第23歩兵師団と第59歩兵師団は旧うるま市の飛び出ている半島方面へ前進。

だが読谷飛行場での戦闘で敵もかなり消耗していたのか1個連隊

程の規模が守っていただけに過ぎず、宮城島と伊計島の両島も精々1個中隊程度が守備に就いていただけだった。

しかも弾薬等も大幅に消費していたのか散発的な抵抗に終わり、3日程度で制圧完了。即座に後詰としての配置に戻った。

石川岳、恩納岳の攻略はそれぞれ1週間程掛かった。

そこを制圧して各師団は艦砲射撃や爆撃の支援の下、さらに前進。各地で散発的な抵抗があったものの、特にこれと言った被害を出す訳でも無く名護岳の攻略に取り掛かった。この辺りは元々熱帯雨林だったのだが艦砲射撃や爆撃によって木々は薙ぎ倒され、焼き払われていた。

名護岳の攻略は5日で終了。

それに伴い名護市全域を奪還して終了後、第23歩兵師団と第59歩兵師団は本部町方面、分かりやすく言うならば旧美ら海水族館がある方向に向かって前進を開始。

こちらは2週間程、掛かったが損耗は1個連隊程で収まり今までに比べると恐ろしく順調に進み始めた。

やはり敵は嘉手納、読谷の両飛行場の防衛に戦力の殆どを割いたのか抵抗らしい抵抗を受ける事が珍しかった。

中部全域の奪還は1か月程で完了。

残敵掃討も問題無く終わり、再び3週間の物資備蓄と北部攻略準備の為に時間を割いた。

その間に嘉手納、読谷両飛行場へ航空隊を進出させた。

陸軍の4個飛行戦隊144機の疾風を2個飛行戦隊づつそれぞれの飛行場に配置。

続けて海軍の一式陸攻装備の3個航空隊計108機が嘉手納飛行場に2個、読谷飛行場へ1個航空隊が進出した。

これで沖縄本島のみであれば600機近い航空機を配備することが出来た。

大規模輸送作戦で運んできた航空機生産物資がここに来て大きく活用され始めた。

関東や東海地方への爆撃が激化している状況で、山陽山陰四国は爆撃の脅威には晒されておらず、生産拠点を少しずつだがこちらへ移している。

九州へは移管をしていない。

と言うのも九州にある海軍九州航空廠が本土防空用の高高度迎撃戦闘機を開発しており、既存の主力機である烈風や流星、疾風の生産にまで手を回す余裕が無いからだ。

ここ最近の深海棲艦の爆撃機は今ままであれば5000m程度の高度で来襲してきたのだが、それがどういう訳か7000m、8000m以上の高度で来襲することが多くなってきたのだ。

正直に言ってしまうえば我々が使用している紫電改や疾風は高高度性能が深海棲艦の戦闘機や爆撃機と比べると格段に劣る。

そんなのだから高高度で飛来する爆撃機を迎撃することが難しくなってきたのだ。

最近では陸軍の飛燕の方が高高度性能が高いと言う事が分かり生産を打ち切っていた所を反転させて生産に乗り出したのだ。

だがそれでも敵爆撃機の高度にまで上がる頃には息も絶え絶え、と言った感じでフラフラと飛ぶことしかできず、一撃しか加えられないのだから迎撃とは言っているが毎回毎回撃墜出来る敵爆撃機はたったの数機程度。

寧ろ我々の方が迎撃戦闘機の被害が大きくここ最近では迎撃は鳴りを潜めてしまっている。確かに迎撃をしても戦力を擦り減らすだけしかできないのだから迎撃をしないとと言う手も有りだろう。

だが流石にそう言う訳にはいかず毎回十数機程度が迎撃に出ているが、結果は酷いものだ。

そこで激化し始めてから2カ月ほどたった頃に高高度迎撃用戦闘機の開発を市木大將は海軍航空廠に命令。その任を与えられたのが他でもない海軍九州航空廠だった。

現在略符号J7W1を与えられた戦闘機が開発中である。

途中、設計等で行き詰った事もあったが合同艦隊の救出で得られた技術妖精や技術を取り入れたり助言を貰ったりと大幅に前進。

機密事項であるためにこれを知っているのは俺を含めた海軍上層部と陛下だけだ。

報告では試作機が完成し飛行、問題点の洗い出しと修正中。早ければ年内にも量産段階に扱ぎ付けられるとのことだ。

最高速度は750km/h、武装も30mm機関銃を4門装備すると言う完全に対爆撃機戦闘を主眼に置いた機体となる。

残念ながらこの機体は空母での運用は出来ない。と言うのも離陸と着陸をするための距離が艦載機よりもずつと長く空母で運用したならばどうやっても海ポチャ待った無しなのだ。

しかも艦載機用に改造を施すとなれば重量増加などが起こり、最高速度などは低下するであろう。

一応、新規開発中のカタパルトと着艦制動装置が完成すれば運用は可能らしいが少なくとも現段階で、空母で運用することは出来ない。断言出来る。

更にはジェット戦闘機化も視野に入れておられるらしくそちらの開発も同時並行で行われている。ここでも合同艦隊が持つて来たジェットエンジンの技術情報が生きてきているのだ。

あの時は合同艦隊の救出のために艦隊派遣を渋りながらも派遣したが今考えれば派遣してよかったと思う。

でなければ今頃手詰まりになってしまつて一切の進捗は無かつただろう。

それはさておき。

遂に北部攻略が始まつた。

中部奪還と同じように各師団を配置、そして進んでいく予定だ。

1週間程経つた頃に津波山を奪還。

続けて与那覇岳の攻略に取り掛かつたのだがここで完全に油断を

していた我々は大損害を食らう事になる。

と言うのも敵がこの与那覇岳周辺に丸々1個師団と1個旅団を配備して守りを固めていたのだ。

事前の偵察では巧妙に木々に隠され、更に熱帯雨林の木々が発見することを許さなかったのだ。準備砲撃として艦砲射撃や爆撃、砲兵師団による準備砲撃を行ったが地下に隠された防御陣地は殆ど破壊されていなかった。

当然、そんな事を知らない陸海軍は今まで通り精々1週間程度で奪還が成功するだろうと足を進めたら斜面のあちこちから十字砲火を食らい、反射面陣地を構築した深海棲艦はそこから迫撃砲や重砲を撃ち込んで来て更に被害は拡大。

一番前を進んでいた2個連隊は瞬く間に全戦力の5割を喪失。

一度全部隊を津波山のほうまで後退させるに至った。

反射面陣地について少しばかり説明をしよう。

これは、丘や山などの敵が来るだろう、もしくは敵が進出してきている方向とは真逆の斜面に砲陣地を構築してそこから反対側の斜面へ向かって射撃を実行するための陣地だ。当然反対側だけでは無くそのままの方向のままのへも砲撃は実施出来る。

利点としては反対側を狙う時に限れば敵からの直接的な攻勢を受けなくて済む。

欠点としては直接照準射撃が出来なくなる。まあ反対側の斜面に観測班を置いてそこからの間接照準射撃を行えば済むだけの話だが命中精度は下がる。

まあ極論を言ってしまうえば敵の真つただ中に砲弾を落とせばいいだけなので味方へ撃ち込まなければいいだけの話だ。

さて、この反射面陣地がとんでもなく厄介だったのだ。

と言うのも確かに存在することは確認されているのに航空機での偵察を行う時には地下へ隠されてしまい正確な位置を把握して見つけられないのだ。

となると艦砲射撃や爆撃で破壊することが出来ないと言う事に他

ならない。

そこでこれをどうやって対処するかと聞かれると反射面陣地まで前線を押上げて直接歩兵が潰すしかない。

こちらは敵の反射面陣地側に観測班を置けないので当然砲撃では狙えない。

しかも砲兵師団が装備する榴弾砲では弾道特性上、どうやっても反射面陣地を狙えないのだ。

迫撃砲ならば撃ち込むことだけならば出来るが先程も言った通りこちらは観測班を置けないので撃ち狙うことが出来ない。これの意味をなさない。

そうなるとお手上げとなるのだ。

しかも陸軍の各師団は損耗が激しくごり押し事も出来ない。何かしらの解決策が必要になってくるのだ。

反射面陣地の攻略法が思い浮かばないまま1週間が過ぎた。

後方地域への海軍陸戦隊の強襲上陸も考えられたが敵も想定しているだろうし反射面陣地から直接照準射撃を行われて寧ろ被害が拡大すると予想される事から断念。

結果的に採用されたのは艦隊による反射面陣地へ向けて制圧射撃を行っている間に陸軍が前進するという、かなりごり押しに近い作戦になった。

しかも艦隊の戦艦、重巡を反射面陣地への砲撃に全て引き抜くから、陸軍が直接的に相手をする事になる。敵陣地へは航空機の爆撃のみを頼りとする。

一応、軽巡や駆逐艦がそちらの砲撃を担当する事になってはいるが、どれだけの効果を発揮出来るか分からない。

そして更に1週間に渡る準備砲爆撃と反射面陣地への制圧射撃と共に開始された与那覇岳攻略作戦は、1か月近い激戦の末に一応の成功を収めた。

作戦中、読谷飛行場での戦い以上に戦場は酷かった。

先発して攻撃を開始した2個連隊は反射面陣地からの砲撃が制圧射撃によって散発的だったとは言っても敵部隊の抵抗は凄まじく、与那覇岳を半包囲していた部隊が食い破られ逆に包囲されてしまう事もあった。

更にはあちらこちらから十字砲火を食らって先発した2個連隊は瞬く間に壊滅。

大慌てで救援に派遣された各部隊も押し込まれ気味になりながらも支援爆撃のお陰でどうにかして山頂までを奪還、そこで攻勢を止める事は出来ずにそのまま反射面陣地を下った。

そして制圧完了。漸く奪還が成った。

しかしながら陸軍はこの作戦で第17歩兵師団と第59歩兵師団が全戦力の内の9割以上を喪失。

生き残ったのはたったの1個中隊程度。

更に残りの2個師団も大打撃を被り残存戦力は全て掻き集めて5個連隊程しか存在しなかった。

しかも備蓄した物資の殆どを使い切り、あちこちで食料弾薬が足りないと言う事象が発生。

弾薬が足りず戦闘継続困難になる連隊も出てしまい大騒ぎどころではなくなった。

最前線に配置された2個連隊へ後方へ配置された3個連隊の弾薬を掻き集めて送り込みどうか戦線崩壊は防ぐことが出来た。

食料に関しては緊急措置として海軍艦艇や飛行場から全てとは行かずとも集めて前線に送り込むという事すらやった。

俺も3日間に渡り1日の食事が1食だけになった。

実際に前線で戦う部隊に出来るだけ物資を送らねばならない。

艦橋で座って指示を出しているだけの俺の飯なんぞ1日ぐらい抜いても問題は無い。

と言ったら隼鷹に殴られた。お陰で頭に大きなたん瘤が出来てしまったが、俺にも非があるのだから咎める事は出来ない。

一式陸攻による物資の空中投下だったりともうありとあらゆる手を尽くして前線を維持。

そして奪還完了1週間後に漸く輸送船団が到着。前線へ食料弾薬医薬品を揚陸と同時にピストン輸送を行った。

お陰で5個連隊はしっかりと補給を受けることが出来、艦隊へも物資の補給が行われた。

そして宮古島の攻略準備に取り掛かっていた海軍陸戦隊は作戦を中止、急遽沖縄本島へ回される事になった。

次の輸送船団を待ってそれら全ての連隊を動員して残った北部地域の攻略を開始。

戦力が少ないので慎重に進まざるを得ず、時間は掛かったが奪還完了。

敵は与那覇岳を最終決戦と定めていたのか残った地域には大した数の敵は存在しておらず10日程度で制圧が完了。

これで漸く沖縄本島全域の奪還が完了した。

5個歩兵師団10万人中、残存したのは5個連隊9000人までに減少しその殆どを喪失。

機甲師団は全戦車を失って消滅。

砲兵師団は144門中21門を喪失するに留まった。

その後、与那国島に至るまでを奪還する予定であったが作戦を変更。

宮古島を含む以南の島は今回の奪還は見送る事になった。

結果的に沖縄本島以北の島々の奪還を行い、奄美大島や喜界島を海軍陸戦隊を追加で派遣し奪還。

これらの島は守備隊の数自体が少なく航空機が多いと言う感じで

あつた大して手間取らずに奪還をすることが出来た。

そして沖繩本島に陸軍の残存戦力全てを、そして残りの島々には陸戦隊が守備を担当。

後日、補充の人員がそれぞれ送り込まれる事となった。

「漸く奪還作戦が終了、か。長かったな……」

「半年だもんね、そりゃ長いさ」

隼鷹と話ながら参謀長に今後の予定を聞く。

「まずは本土に戻って艦隊と航空隊の再建を行わなければなりません。と言つても艦隊の方は飛龍、蒼龍共に修理は完了しておりますのでそれ以外の損傷艦の修理と航空隊の再建に留まるでしょう。ただ、最低半年は再建に掛かりますので次の作戦行動を取るとなるとその準備も含めて今後1年はまともに艦隊、特に空母を動かせません」「やはりか……大鳳と阿蘇、合同艦隊の修理は？」

「こちらもあと1か月程で全艦の修理が完了します。グラフ・ツエツペリン、アークロイヤルの2隻は烈風を運用するために着艦制動装置を換装しておりますが空母に関しては既に航空隊の錬成と艦の運用に必要な人材の訓練が開始されております。早ければ大鳳と阿蘇は3か月もあれば実戦配備が可能です」

「やはり、合同艦隊の方は訓練に手間取っているか」

「はい。乗組員の殆どが我が海軍が提供しておりますが慣れない外国の機材故に手間取っているようです。ですが半年以内には実戦配備は可能との事です」

南西諸島奪還作戦が開始したのは3月。

そして今は9月だから来年の3月までには4隻の実戦配備が可能と言う事になる。まあその時期にもなれば全空母が実戦で使えるまでに航空隊の再建は進んでいるだろう。

なんならもう何隻か空母を修理完了出来るかもしれない。

戦艦は流石にどうしようも無いが空母とその随伴艦隊分までは何とかなる。

「はあ……これだけの期間ともなれば報告書の作成が地獄だな」

「ま、そんな時はアタシも手伝ってやっからさ。そう気を落とさなさんな」

今後の予定やら報告書に始末書を考えて俺に休みは無いらしい。当然と言えば当然だしなんならこの世界に来てから休日があった記憶が無い。

休日も返上して仕事に充てていたから仕方が無いのだがそれでもしないと本当に終わらない量の仕事なのだ。

それもしょうがない。

艦隊の指揮をしているのが俺だけなのだから当然仕事を分担できない。

だから全部の仕事を俺がこなさなければならぬのだ。

市木大将達も毎日毎日徹夜をしたりと究極的に忙しい。

どうしようもないとはいえ、如何ともしがたい。

取り敢えず、全域ではないとは言え南西諸島の奪還が言え成功したことを今は素直に喜ぼう。

仕事の事は帰ってからだ。

第20話

日本に帰って来てからの話だ。

先ず大なり小なりの損傷艦は全てドックに入れられ修理を行った。と言うよりも全ての艦がドック入りしなければならぬ。

それ以外の妖精達は戦闘訓練が行えない状況であつたりするためその間は休暇と言う事になった。

瑞鶴は飛行甲板と被雷した箇所の修理等を行わなければならない。その時に試作である空母艦載機用の艦発促進装置、所謂カタパルトと言う物を飛行甲板へ装備する事になったのだがこれがとんでもない曲者だつた。

と言うのも驚いたことに通常、空母艦載機を発艦させるのに用いるカタパルトは蒸気式や油圧式が普通だ。

元々技研の連中は、水上機発艦用の火薬式カタパルトを空母用に改造したものを搭載しようとしていたらしい。

だが火薬式は搭乗員への負担が余りにも大きすぎると、機体強度が弱いと射出時に冗談抜きでバラバラに分解しかねないのだ。

その点、水上機の方が機体強度が高く、烈風や流星では少なくとも耐えられそうにないと言う結果になった。

当然、そんなものを搭載する事を上が許可を出す訳も無く。

その結果として開発されたのが蒸気式の物なのだが前述の通りとんでもなく面倒な代物なのだ。

と言うのも蒸気式と言う事は、専用の機関を追加で搭載するか、元々艦に搭載されている推進用の機関からの蒸気を使うか、の二択になる。

まあそんな事を想定して艦が設計されている訳が無いので専用機関を搭載するスペースなどある訳も無く。

そうなれば二択の内の後者になる訳だがそれに伴い瑞鶴は配管やらなんやらを機関から引つ張つてきて……と大工事になった。

が！ここで大きな問題が発生した。

このカタパルト、全くの使い物にならないのだ。

そもそも動作にすら不安が残り、誤作動を起こして作業中に発艦させてしまうなどの事故が多発。

お陰で3名の死者が出るほどの大騒ぎ。

そんなもん搭載していられるかと速攻で撤去が決まった。

当然である。

お陰で瑞鶴は1か月掛けての修理兼工事を終えてドックから出たと思つたら3日後には再び入渠することが決定。

また1か月かけて配管やカタパルト本体の撤去を行った。

平時であれば技術発展と言う事でそのまま搭載するだろうが今は戦時だ。

しかも貴重な空母をそのせいで前線から引かせる事なんて出来る訳も無い。

そのまま搭載して戦闘に参加したとしよう。

そんな最中に信頼性皆無の物で貴重な搭乗員と艦載機を発艦させられるか、と言う話である。事故でも起こつたらそれこそ目も当てられない。

そんな結果を残した技研の妖精達は当然上からこっぴどく叱られて相応の罰が下つた。

それでも優秀であることは変わらず即座に研究に戻された。

だがカタパルトの研究は重要だ。

発艦時間の短縮など様々な利点がある。やらない理由にはならない。

結果としてはカタパルトの研究はそのまま続行する事になった。

と一悶着あったが空母はこんな感じだ。

飛龍と蒼龍は既に修理を完了し配属された新兵の習熟訓練を行っている。

戦艦や巡洋艦クラスは半年間に渡る支援砲撃によって摩耗した砲

身や砲塔そのものを交換したりしなければならず、それは駆逐艦や空母の対空砲なども同じだ。

更に全艦、機関部の点検やあちこちのオーバーホールで艦隊全ての修理が完了したのは日本に帰国してから4か月後の事であった。

次に航空隊だが、こちらは搭乗員と艦載機の数だけは揃えられた。ただし、練度は最低限である。

当然、そんな状況が許されるわけも無く3か月に渡る猛訓練を実施。

原田大佐曰く、

「私の中では最低ラインですが、一応は実戦で通用するレベルにまでは仕上げました。ですがまだまだ訓練は必要です」

との事だ。当然、引き続き訓練である。

呉鎮守府付近の上空では毎日の様に熟練搭乗員相手に模擬戦を行い、3対1で数で勝る新兵が翻弄されながら操縦する機体が飛び回っていた。

それ以外、特に補給に関しては沖縄へ向けて引き続き鳳翔以下護衛艦隊が物資と共に各師団への補充人員を送り込んでいる。

機甲師団は送り込まずに歩兵師団のみとなっている。

例外的に、合同艦隊が持つて来た戦車の島嶼帯での使用に耐えられるかと言う実験を行うために、

ケツテンクラート、ハノマーク兵員輸送車、Ⅲ号戦車、Ⅲ突、Ⅳ号戦車、フンメル自走榴弾砲、Ⅵ号ティーガー重戦車を4両ずつ送り込んで試験を実施。

結果は、フンメル自走榴弾砲までの比較的軽量の戦車などは十分使用出来る。

75mm対戦車砲も十分使用に耐えられる、との事だったが、だが問題はティーガーだった。

これは重量がⅣ号の2倍以上もあり、当然、雨が降ったりすれば泥濘と化す南洋の島々では使用出来ないと言う事だった。

舗装された市街地などであれば問題無いのだがそこから外れると酷い有様だった。

雨が降らず快晴、地面もしっかりと乾いている状態であればそこそこ使えるのだがひとたび雨が降れば一切使い物にならなくなる。

試験中、何度も泥に嵌り抜け出せずIV号戦車やIII号戦車に引つ張り出して救助される光景が当たり前。

南洋の島々はスコールであつたりとよく雨が降る。

そういう状況下でも問題無く使えなければただの足手纏いにしかない。

結果的にティーガーは太平洋戦線では使い物にならないと言う判断が下され、本土の倉庫行きとなった。

結果、南洋の島々での使用に耐えられるとしてIII号戦車とIII突、IV号戦車、フンメル自走砲が少数生産され沖繩へ送り込まれる事になった。

陸軍の戦車はどれも深海棲艦の戦車に対して無防備であり、撃破するには側面か背後へ回り込まなければならぬが、こちらは何処を撃たれても撃破されてしまう事から、陸軍としては機甲師団全てとは行かないまでも前線へ送る戦車は最低限III号戦車にしたいらしく、海軍へ資材の融通を求めてきている。

が、損傷艦の修理等も行わなければならないので現段階では出来ず、幾ばくかの資材を回したに過ぎなかった。

75mm対戦車砲は元々対戦車兵器の不足していた陸軍が大規模に生産を行う事が決定。初期生産としてまず15門が沖繩へ送られた。

ケツテンクラートは速度、搭載量が意外と多い事や密林の中での機動性の高さと言う、その利便性から偵察部隊と工兵隊へ配備が決定。牽引用の荷台も大雑把ではあるが作成して同じく沖繩へ送り込んでいる。

陸軍の兵装に関してはこれぐらいだろうか。

ああ、航空機だがBf109、Fw190などの戦闘機を高高度迎

撃用戦闘機として生産してはどうかと言う意見が出たが、これ以上航空機製造ラインへの負担が掛かる事はあまり望ましくなく、更に言えば合同艦隊の戦闘機のエンジンは液冷式なのだ。

見分け方としては、空冷式、零戦などの機体は機首がずんぐりしているのに対して液冷式の機体は機首がどちらかと言うと尖がっている、と言う感じだ。

代表例を挙げればスピットファイア系列やBf109系列の戦闘機だ。

日本には飛燕以外に液冷エンジンの製造経験は無く、なんなら整備が空冷式の疾風などに比べると格段に難しい。

一応飛燕のエンジンはBf109のエンジンのライセンス生産なので作れない事も無いがドイツと同レベルのエンジンを作り上げられるとは言えない。

しかもその整備兵を養成しなければならず時間は相当掛かる。

新米整備兵がただでさえ神経を使う航空機エンジンの整備、しかも液冷式エンジンの整備を毎日の様に行うともなれば当然稼働率が下がるわけだ。

しかも取り扱った事の無い機体とエンジンだ、最悪事故による損失すらあり得る。それを考えると忍び腰にならざるを得ない。

と言う訳で整備性や生産性等を考慮した結果、Bf109の生産、実戦配備は見送られた。と言っても合同艦隊が日本に持ち込んだ分の機体の補修パーツと1個中隊分の機体を生産する事になっている。当然、実戦に参加させる。

4機では流石に厳しいからだ。元々の4機とそこに追加で12機の生産予定だ。このうちの4機は予備機となる。

これは遊ばせておく戦力など無いと言う事だ。

搭乗員については引き続き元々の搭乗員が引き続き行う。

戦闘機相手の戦闘となると烈風や疾風に軍配が上がるがそれ以外の低中高度の爆撃機迎撃ともなるとBf109やFw190などの戦闘機はその機関砲の威力もあつて猛威を振るう。

単発機相手ならば当たり所によっては一撃で爆散、そうでなくとも

撃墜は出来る。

これが爆撃機と言うデカい的に向かって射撃をすれば何十発も命中するのだからとんでもない。

配備されているそれぞれ12機の戦闘機は、対爆撃機戦闘にのみ投入されて戦闘機は相手にしない。制空に関しては疾風や紫電改が担当するのだ。

役割分担を行えば効率的に迎撃を行える。

ああ、そうだ。

航空関連での話がもう一つ。

鳳翔での烈風や流星の運用に関してだ。

これは鳳翔自身からの意見であるのだが、どうにも鳳翔の飛行甲板だとこの2種類の機体はサイズが大きく発艦にかなり難易度が高いらしいのだ。

事実、今回の船団護衛中の対潜戦闘で流星を発艦させようとしたときに対潜爆弾を抱えていたり、爆弾などを抱えて飛び立とうとすると海面ギリギリ、搭乗員によつては主脚が海面についてしまうと言う事態が多発。

烈風ならばまだ何とかなるらしいがそれでも厳しい事には変わらない。

なので烈風や流星では無く、従来の零戦を搭載してはどうかとの意見を出してきたのだ。

確かにその意見には一理ある。

機種統一と言う事ばかり考えてその艦での運用面での障害等を考えていなかった。

この意見は寝耳に水、と言えるだろう。

まあ零戦であれば予備機として倉庫に保管してあるのがあるからそれを引っ張りだしてくれば良いだけの話なので問題は無い。

当然、許可を出した。

搭載する零戦はどれにするかと言う話になったが、零戦62型と5

2型丙のどちらかとなった。

こちらとしては正直言つてどちらでも良いのだが、爆戦型である62型であれば制空と爆弾を搭載するための懸架を標準装備しているので対艦、対潜戦闘もこなせると言う利点がある。

52型は純粋な戦闘機なのでそれらは出来ないことも無いが戦闘機を相手する方が余程簡単だろう。

結果として、62型を12機、52型を20機搭載する事になった。役割を出来るだけ分担しておこうと言う事だ。

62型には元艦爆隊の搭乗員が選抜され、万が一の時には戦闘機を相手に出来るという形に落ち着いた。

さて、凡その説明はこんなものだろうか。

あ、俺の近況報告になってしまいが少しだけ。

作戦終了後、日本に戻つて俺を待ち受けていたのはありとあらゆる種類の仕事の山だった。その仕事を捌く為に毎日ではないが徹夜が続き、数日程前にぶつ倒れてしまった。しかも今後の作戦や方針を決める為に市木大将達との会議と、陸軍との会議が控えている中だ。

一応、陸軍との会議までは終えたのだがそこで緊張の糸が途切れたのか何なのか、さて呉に帰ろう、と言う時の出来事。

護衛として付いて来ていた海軍特別陸戦隊第1連隊の20名はそりや大慌て大騒ぎとなったらしい。

先程までは元気とは行かないまでもしつかりと自分の足で立ち、色々をやつていた上官が倒れたのだから当然と言えば当然だ。俺でも慌てるだろう。

そして倒れた原因は言わずもがな、過労である。

当然、仕事など出来る状態では無かったが仕事をしなければならなのでやろうとしたら無理矢理入院させられた。しかも2週間。

原田大佐達妖精陣や艦娘全員からとにかく休め、休んでくれと病院に押し込まれたのだ。

と言うか同時期に市木大将と西村中将が過労で倒れた。

この2人ならばまだ分かるが俺が倒れるとはどういう事なのか、と思っただが結局市木大将以下5人と俺は仕事を全て取り上げられ暫くぶりの休暇を部下である妖精達から強制的に取らされた。

彼らの言い分は、

「前線で戦っている我々ですら休みがあるのに指揮官たる提督達が休みが無いとは何事か。確かに貴方が居なければ我々は戦う事が出来ないが倒れられて、それこそ死なれては困る」

だそうだ。

いや、確かにその通りだ。今回ばかりは納得せざるを得なかった。そこで2週間の入院生活と2週間の休暇を取る事に。

結局、1か月以上の療養生活とは言うものの実質的な休暇を貰ってしまった。

仕事に関しては艦娘達が代理でやってくれる事になったが機密性の高い、例を挙げるとすれば開発中の高高度迎撃用戦闘機の件であったりと言う物に関しては、元々書類自体に機密だのなんだの赤文字でデカデカと書いてあるのでそれは流石に任せられない。

なので機密扱いや機密性の高い書類に関しては俺の所に持って来て貰う事になった。

そういう書類は基本的に早急な判断を必要とする場合が多い。

一応、長門、隼鷹に中身の確認程度はやってもらう事にした。

この権限を与えているのは2人だけだ。

本来ならばこれもやりたくなかったのだが重要書類と機密性の高い物、という定義はかなり曖昧なのだ。

封筒にそのように書かれている事も有れば無い時もある。

そんなのどうやったって見分けがつかないではないか、と言う事でこの2人にだけは権限を与えた。

2人は1日ごとに交代でその役割をこなす事になっている。

訓練もあるしその辺の兼ね合いを考えれば3人は欲しいが機密を知る人間は出来るだけ少ない方が良いと言う事だ。

本来ならば隼鷹の代わりに鳳翔を、と考えていたが彼女には航空隊

の搭乗員育成と言う現時点で最も重要な任務に就いているのだ。

そんな時にこんな仕事を押し付けてしまつては負担になるだろう、と考えて鳳翔に代わりの人員は誰かいらないか？と聞いてみた。

するとかなり意外な人選を行ったのだ。

鳳翔がこの時に推薦してきたのが他でもない隼鷹である。どうにも彼女は酒が入ると確かにダメ人間になるがそれ以外、酒気を帯びていなければ誰よりも優秀、との事だった。

確かに沖繩近海でも彼女の意見には大いに助けられたし、事実なのだろう。

そう言う訳で許可を出した。

一応、候補に挙がっていたりする艦娘もいたんだが……

金剛はポロツと漏らしてしまいそうだし、天龍は確かに能力的には優秀だが機密保持云々と言われると信用が無い。

重巡組も那智ならば、と思つたが青葉と言うおしゃべりマシンが居るのだ。

流石に機密は話さないだろうが念の為。

駆逐艦達は論外だ。

別に人間性等に問題があると言う訳では無く、見た目もそうだが中身が幼い子もいる。そんな子に機密がどうこうなんて無茶だ。

まあ、軍に所属しているのでその辺はしっかりしているだろうが。

休暇云々に関してだが、本来俺は休んでいられる立場でも無ければ状況も許されないものなのだ。特に俺は前線での指揮とに加えて南から南西諸島方面の陸海の航空隊に加えてさらに陸上部隊も指揮下に入っている。

海軍に関しては全国中の妖精とその部隊が直接的な指揮下にあり、更に陸軍の最前線である南西諸島方面に派遣される師団や部隊を丸々指揮下に入れているのだ。

一応、負担軽減のためにそれ以外は指揮下には無いがこれだけでもとんでもない数と量になる。

そう言う訳で南西諸島奪還作戦の前線指揮に加えて諸々の仕事もあったのだからと2か月丸々休暇を取れと言われたが流石にそんなわけには行かない。

そこまで休んでしまうとこれ以降の行動に支障が出かねない。

病院からはつい2日前に退院し、鎮守府にあるプレハブの自宅に今は居る。

と言っても入院するまでは毎日の様に暇無く仕事に追われていたので、休みと言われても何をすればいいのかさっぱり分からない。いや、分からなくなってしまうと言うべきか。

この世界に来る前は学生だったから、正直な話毎日が遊びの連続だったのだがなあ……

娯楽なんて大してない。

そもそもインターネット回線は深海棲艦の攻撃によって使い物にならないし無線通信は今軍でしか使用されていない。それも機上無線とかの短距離無線だ。一応艦隊から艦載機へは無線を送る事は出来る。だが距離が離れば離れる程にその精度は低下する。

当然、スマートフォンやiPadなどの電子機器や、テレビゲームなんてものも存在しない。そんなものを生産する余裕などある訳も無くそんな資源があるぐらいならばそれらは全て軍に持って行かれる。

と言うか戦略資源を輸入に頼り続けていた日本がいきなりこんな状況に追い込まれたのだから当然と言えば当然である。

まあ妖精と言う存在が作った武器しか深海棲艦に効果が無いという特性上、民間企業は軍需関連に参入出来ないのも元来そういう方面に参入していた企業は全て撤退、リソースを別分野に向ける事を余儀なくされた。

深海棲艦との戦争で大中小に限らず企業は倒産、もしくは休業が殆どだ。

民間用の車の製造販売で有名な企業なども戦況悪化に伴い何社かが倒産。残った会社も大打撃を受けた。資源が無く生産が出来ない

のだからしようがないと言えましょうがない。

今の日本は、と言うよりも国民はその殆どが食料生産の為に従事している。

軍は軍でその国民が生産した食料を徴発して戦争をしている状況だ。お陰で国全体で飢餓が広がり、1億2000万もいた国民は、年寄りや小さな子供と言った体力の無い者や持病を抱えている者から餓死や治療が受けられずに死んでいき、その国民総数は3000万人を切ったとの報告すらある。

一応、軍には優先的に食料が回されているが、第1憲兵師団ですら1日2食か1食が普通。

俺達には最優先、それも大部分を回してもらっている状況でなんとか南西諸島奪還作戦を成功させて維持しているのだ。

国民の数が減ったと言う事は必然的に生産能力が低下すると言う事だ。

縁の下の力持ち、とはよく言うが今の日本はその縁の下の力持ちである国民から様々な物を搾り取って漸く戦線維持が出来ている状況。勿論、陸海軍の妖精や艦娘達がそれぞれ命を捨てても国を守っているから深海棲艦による本土侵攻は防げているが、それを更に支えているのは国民であると断言できる。

何時の時代も国力を全て戦争に向けた総力戦と言う物は国民への負担が尋常ではないが第1世界大戦、第2次世界大戦の比ではない。

そもそも人間同士の戦争ならば幾らでもやりようはあるがそれが未知の生物となれば何もできない。しかも対抗手段が艦娘と妖精、そして彼らが操る航空機と艦だけと来た。

そんな中で、国民に負担を強いて、国民が一番苦しい思いをしているのに休んでなぞ居られるか、と言う話である。

そうは言っても鳳翔や長門、隼鷹達や原田大佐達が言った通り俺が倒れたらそれこそ国の未来が無くなるという事なんだがどうにも、
なあ……

せめてもの救いは日本に限れば食料などを巡って暴動や内戦が起きていない事だろうか。

それでも不満は大きく溜っている事だろう。元々の文明レベルが高かったところに7、80年前の生活だ、大人であればあるほどその利便性を知っているから不満は大きい。

小さい子供などは知らないから、とは言っても意見を言える年齢ではないのであれだが。

他国では寧ろ食料を巡っての政府と国民や富裕層と貧困層での内戦が勃発する事が普通だ。

ビスマルクから聞いた話では欧州全域で大小の内戦状態であったらしい。

日本は配給制になって各家庭（子供や働き盛りの若者がいる家庭を優先してはいるが）に平等に分け与えられているからだろうか。あとは毎日の深海棲艦からの爆撃も要因だろう。

深海棲艦の爆撃などで国民の団結が高まっているとは、何とも皮肉なことだ。

そんな状況の中で俺はどうやって休暇を過ごそうか、と罪悪感と共に過ごしているのだ。

これが本職の軍人であれば割り切れたのであろうが、生憎と俺は最低限の座学以外まともな軍事訓練を受けていない元一般人、はつきり言ってしまうば守られる側だ。

まあ戦うと決めた以上、その意思決定を曲げることは無いが、割り切れないものは割り切れないのだ。

『提督、隼鷹だけど入っていいかい？』

そう考えながら自室の椅子でどうやって休暇を過ごすか考えていると隼鷹が扉を叩いた。

恐らく重要書類と共に時間的に昼頃だから昼食を持って来てくれたのだろう。

「入ってくれ」

「失礼しまーす。昼飯と重要書類と機密書類を持って来た」

「ん、ありがとう。早速目を通すとするか」

「駄目。昼飯が先だ」

「いや、だがな」

「昼飯が先」

「……分かった。分かったからそう睨むな」

「睨むのも当たり前さ。その仕事優先の生活のせいで今回ぶっ倒れたんだよ?」

「すまん……」

「飯を食い終わるまでは書類は渡さないから。だけど早食いたら許さないよ」

「分かった分かった、そうとやかく言ってくれるな全く」

「とやかく言われるだけの事が提督の身に起きたんだ、当然だよ」

隼鷹に睨まれながら、と言うよりも殆ど早食いしないように監視されながらの食事だ。とはいっても無言と言う訳では無く、艦隊の状況とか新兵の様子、合同艦隊との訓練状況を話す。

隼鷹はこの会話も仕事に入るだろ、と言いたげな顔だがこれぐらいは許してくれているようだ。

お陰で休暇が終わった後の予定が立てられる。

「提督、仕事の事、考えてる?」

「いや、そんな事は無いぞ」

「嘘付け。難しそうな顔してたからね、すぐに分かるよ」

「……そんなに顔に出てるか」

「少なくともトランプじゃ勝てないね」

「そんなに……」

「今は休みなんだから仕事の事考えないで居りゃいいのに。つつてもそれが出来れば倒れたりなんかしないか」

隼鷹にそう言われて、俺はバツが悪くなりどうするかと頭を搔く。

それから昼食を食べ終えるまで隼鷹と話ながら過ごした。
因みに昼食はご飯と味噌汁、そして焼き魚だった。

魚は艦隊の連中が訓練の休みの日に甲板から糸を垂らして釣ったものだそうだ。

海に流す残飯に魚が集まってくるらしく、それを狙って釣りをしているんだとか。上陸して休暇を過ごせない妖精達の少ない娯楽らしい。

「そんじゃ、書類をどうぞ提督」

「ありがとう」

「読み終わったら言ってくれよ、外で待ってるから」

「ああいや、外はまだ暑いだろう、向こうの椅子に座っていてくれれば出なくても構わん。茶葉も幾らかあるから好きにするといい」

「そうかい？それじゃお言葉に甘えて」

そういうと、隼鷹は湯を沸かして茶を入れ始めた。

機密書類の数は2つと、重要書類が5つ。

さて、今日は重要書類から目を通すか。

「あちち……」

隼鷹が何か言っているがそれを聞きながらぺらぺらと捲る。

重要書類を読み終えて、機密書類へ移る。

その内の1つは、南方方面奪還作戦に備えて準備を進める事と、作戦の詳細を詰める為に後日軍令部へ出向せよとの事だ。

これに関しては前々から市木大将にそれとなく言われていたので問題無い。

既に海軍は訓練等、作戦に向けて動いているし陸軍にも戦力の抽出を依頼、現段階で作戦投入が決定しているのは、

第16歩兵師団

第18歩兵師団

第21歩兵師団

第26歩兵師団

第33歩兵師団

の計5個歩兵師団だ。

恐らくこれだけでは足りないので最低この2倍は作戦投入される事になるだろう。

沖縄に進出している師団は全てそのまま守備隊として置くことが決定されている。

あの激戦で土地勘を得ているのだからそこから別の戦地へ転用する事はあまり望ましくない。

すでに補充の人員が輸送船団と共に送り込まれ続けており、2個歩兵師団は戦力が回復、あとは訓練のみとなっている。

残りの2個歩兵師団も半分程度に回復しており、砲兵師団は損害が少なかった為に後回しにされている。

陸戦隊も元々の人数が最大2500人なのですぐに補充が完了。

と言うより陸軍とは違い1つの連隊をあちこちの島に分散して配置せざるを得ない状況のために一番最初に補充されたのは陸戦隊だったりする。

次のは……高高度迎撃用戦闘機に関することだ。

これは確かに機密事項だな。

どうやら開発は既に最終段階になっており、テスト飛行も終了し最終的に試作機では無く量産に向けて機体各所の最終調整中らしい。

試作機と量産機は、その量産性が違う。

試作機は一つ一つの部品や機体を丁寧に丁寧に作るが量産機はそうはいかない。

そこで試作機にどのような改造を施すのかと言うと、簡単に言えば量産性を向上させる為に多少の再設計を行う。

武装は30mm機関銃が4門で1門あたり60発の携行となり240発となる。

最高速度は8700mで750km/hを記録し巡航速度も425km/hと高速だ。更には実用上昇限度が12000mと高高度

で飛来する深海棲艦爆撃機の上を取れる高さだ。

航続距離は最大2000kmとなっている。

上昇力も750m/minと十分だ。

通常であればこれは最初期の設計段階で行われるが今回は初の高度迎撃用戦闘機の開発となり、さらにはターボジェットエンジンの搭載による後々の性能向上も視野に入れられているので特例として今回はこのような方法になった。

既にジェット機化する計画の物には略符号J7W2が与えられた。

既に設計改修により搭載されるターボジェットエンジン開発は同じく海軍九州航空廠の担当が決定しており、エンジン選定は幾つかの案がある。

まず、「ネ20ターボジェットエンジン」を搭載するという第1案。

次に、「ネ130ターボジェットエンジン」を搭載するという第2案。

ただこれはどうやら後者の「ネ130」に決定が下されそう、と言うのが殆どの開発陣の意見である。

と言うのも前者の「ネ20」は、多数の致命的欠陥を持っているのだ。

その一つが稼働時間、耐久時間とも言うがたったの数時間しかない。これでは数回の出撃すらままならない。

元々、耐久時間の問題はかなり前から指摘されていたことだ。

理由としては、エンジンの各部で使われる耐熱材料、これはニッケルやコバルトなどを主成分としている。

これが不足している事が原因だったのだ。

と言うのもその殆どを陸海の戦闘機と海軍の流星や一式陸攻の生産に完全に振り分けてしまっている為に、確かにそれが原因となっていた。

だがその原因が突き止められた時点で研究開発班には相当量の耐熱材料を回したのだがそれでも駄目だった。

それ以外の原因として日本の工作精度が低い事など様々な問題が挙げられる。

ニツケルやコバルトを主成分とする耐熱材料は豊富であるがそれでもあまり稼働時間は宜しくない。

更にはタービン（回転式の羽。思い浮かべて欲しいのはジェット旅客機のエンジンを正面から見た時に見えるもの）取り付け部に亀裂が生じるなど、他にもあちらこちらに問題が見つかり稼働時間以外の問題は解決出来そうではあるがそれに掛かる期間はまさかの年単位。

それに比べ、やはり稼働時間と言う壁はあれど「ネ130」は比較的安定した性能を発揮出来ているのでこちらが採用されるであろう、との事だ。

この「ネ130」は、「ネ20」の経験を元に1から設計され直された完全に別物だ。

普通ならば派生型として開発されるのであろうが、前述の通りネ20の各問題が解決するには年単位の時間を要する事になっている。

そこで、本土防空に間に合わないのでは本末転倒と言う事であれば最初から別物のエンジンを再設計してしまえと言う事だ。そして開発されたのがネ130と言う事だ。

稼働時間は通常のエンジンとは比べ物にならない、たったの200時間程度ではあるがそれでも大きく前進したと言えるだろう。

元々、ネ20を搭載したジェット攻撃機なども開発すると言う予定があったがネ20の開発は頓挫、中止となり搭載エンジンが無い。

しかも元々ジェット攻撃機に振り分けられる予定であったリソーは全て高高度迎撃用戦闘機に回される事になった。

結局、このジェット攻撃機開発計画は中止、凍結に至った。

軍令部はジェット機化ではない方、レシプロエンジンを搭載した方であるJ7W1に対して正式名称「震電」と命名。

この震電は搭載エンジンが「ハ―43―42」を搭載する予定で既にエンジンに関しては量産に備えて体制が整えられており量産開始命令を待つのみとなっている。

現段階では未だ量産に至らないが細かい問題が解決すれば早ければ2か月後には量産が開始され、本土防空の任に就く予定だ。

やはり爆撃は日に日に激化の一途を辿っており、市木大将と黒川中将は無駄だと分かっても急げ急げとせっついている。

まあその気持ちは分からなくも無いがせっついても何ともならないものはしょうがない。

そしてその書類には、震電装備の本土防空戦闘機隊を組織するに当たり、それを俺の指揮下に入れる事、そして同時に搭乗員の選抜をせよ、と書かれている。

まあ、指揮下に入れると言う事であれば問題無いが、搭乗員の選抜の方が問題だった。

これが空母が動かせるようになる前であれば原田大佐やそうでなくとも部下の誰かを推薦していたであろうが今は彼らは貴重な熟練母艦搭乗員だ。

そう易々と引き抜く訳には行かない。

かと言って新米を放り込めば目も当てられないだろう。さて、どうしたものか。

取り敢えずこの問題に関しては搭乗員の皆に意見を聞かねばならない。最低でも原田大佐と各空母の戦闘機隊長に意見を聞かねば事は進められない。

俺の一存で決められる事では無いな。

しかしながら最低限のリストアップ程度は行っておくべきだろう。

と、考えていると隼鷹に書類を取り上げられた。

まあ読み終えていたから良いんだがな。

「……まだ読んでいたんだが？」

「ほーん、書類を机に置いて腕組んで目を瞑って考え込んでいるの？」

一応、そう言ってみると隼鷹にぐうの音も出ない程に論破されてしまった。

いや、確かにその通りなんだが。

「ほら、今日はもう終わり。休暇を存分に味わっておくんだね」
「分かった」

これ以上どうこう言っても仕方が無い。
隼鷹が出たら搭乗員のリストアップを行うとしよう。

それから、隼鷹が2階の執務室に戻ったのを確認して机から用紙とペンを取り出し早速始めた。

流星に原田大佐を引き抜く訳には行かない。

震電の部隊長には蒼龍戦闘機隊長である西中中佐か瑞鶴戦闘機隊長の井原中佐のどちらかで良いか。

彼らも原田大佐程では無いにせよ、歴戦中の歴戦だ。そもそも原田大佐がぶっ飛んでいる訳でそれと比べるのも可笑しな話なんだが。

他の搭乗員に関しては、練度の高低を入り交ぜた感じで良かろう。ただなあ、人数の指定が無いのが困り物だ。本来ならこういう物には人数の指定などがあるのだが如何せん、量産段階寸前とはいえド不透明なことが多すぎるのがな……

取り敢えず、20人を選抜しよう。

これだけあれば1個攻撃中隊に加えて指揮小隊を1個持たせる事が出来る。

これ以上多いと流星に母艦航空隊の方に支障が出る。

だが少なければそれこそ部隊としての意味を成さない。

この人数であれば丁度良いだろう。

一応のリストアップは終了、あとは原田大佐達に意見を聞いて見なければな。

しかし、終わったら暇になってしまったな。

残りの休暇をどうやって過ごすかが俺としては一番の問題だな。

どうするか……

仕事が無くなった俺は個人的な目下一番の問題に頭を悩ませるしかなかった。

第21話

過労で倒れてから3か月。

仕事にも復帰して再び、毎日仕事に追われる日々だ。

何故か、仕事に戻ったときに最高に安心した自分が居たのに驚きだ。

まあ、復帰してから1週間ほど以前の様な感じで睡眠時間を削って仕事をしていたら艦娘始め、参謀長達全員にしこたま怒られた挙句、軍令部まで話が行ってしまったお陰で市木大将からも大目玉を食らった。

あの人も過労で倒れたがまあ、そこは別問題と言う事らしい。学習しない俺も悪いのだがそうでもしないと本当に終わらないと言うか、各所で様々な事が滞る。

と説明したら更に怒られた。挙句、強制的に2日間の休暇を取らされてまた仕事が出来ないと言う状況になってしまい、流星に俺は学習した。

ちゃんと休まないと言事をさせて貰えない、と。

今の所、毎日遅くても11時頃には終了して風呂に入り寝る事になっている。

起床時刻は7時だから最低7時間は寝る事が出来る。これだけ寝れば文句は言われんだろう。今の所文句は言われてない。

と言うか何故本当に仕事をしていないか、と監視が付けられるのか。

そこまで信用が無いか。

とまあ、俺の事は置いて、実務の方に移ろう。

まず艦隊と航空隊の方だが再建完了、あとはそれぞれの訓練で練度向上を行う段階だ。

これに関しては特筆すべき事は無いのでこれで終わりにしよう。

次は高高度迎撃用戦闘機、震電について。
まず搭乗員について。

隊長は蒼龍戦闘機隊長が務める事になった。

それ以外の搭乗員に関しては俺がリストアップした人員を多少入れ替えたりしたが概ねそのまま配属を変更。

隊長含め20名が、新設された本土防空戦闘機隊に配属された。

本土防空戦闘機隊は、正式名称「本土防空第323局地戦闘機隊」と名付けられた。

だがそのままでは長つたらしいので略称「第323戦闘機隊」となった。

更にはもう1つの戦闘機隊を編成予定で、そちらは未だに機体は全く揃っていないが「本土防空第324局地戦闘機隊」として設立。

既に母艦航空隊では無く各地の航空隊から人員を選抜している。

ただ早くても3か月先までは震電の配備が始まらないのでそれから訓練を行うとなると半年はまだ実戦に出せない。

将来的にはどちらも全てで60機程までに増やす予定だ。

配備されたのは入間飛行場。そして次の部隊が配置されるのは新たに建設された筑波飛行場となっている。

更には東海地方と関西、四国、九州にも同様に防空戦闘機隊を配備し本土の守りを固める事になっている。

そして震電の量産に関して。

つい15日前に量産が開始したと言う報告が入った。

第1段階の量産でまず25機が生産される予定で早いもので量産第1号機から6号機までを既に新設した迎撃戦闘機隊が受領。

整備兵養成も行わなければならないので25機中5機を整備訓練用に回される事になった。

整備に関しては一時的の間は開発などを担当した妖精達が行い、そし

て整備兵の教育も彼らが担当する。

海軍九州航空廠は既に震電の量産を開始しており、続いて海軍関西航空廠と海軍広島工場でも生産予定で既にそのための工場建設が進んでいる。

どちらとも2か月後に運転を開始して、全ての工場を合わせれば月産60機を予定している。

ただ、搭乗員の習熟訓練や整備兵の育成が完了するまでは実戦には出せないのも、一応の予定としては3か月先の実戦投入を目指している。

それに伴い震電の戦技研究、戦い方の模索も同時進行中だ。

今日はそれに伴い部隊の視察を行っている。

隊長である西中中佐と共に飛行場を歩いて今は機体を見ている。

「それにしても、烈風や疾風とは違って随分と奇怪な形の飛行機だな……」

「前翼型、俗にエンテ形と言われるものですから確かに見慣れないですな。私も実際に配属されて受領した時は本当に飛ぶのかと驚きました」

「どうだ、操縦性などは？」

「良好ですね。かなり思った通りに動いてくれます。零戦や烈風に比べるとやはり格闘性能や運動性能は劣りますが、上昇性能や速度性能、高高度性能は圧倒的です。それに急降下耐性も高く、零戦や烈風であればとつくに空中分解していてもおかしくない速度でもビクともしません」

「優秀な機体、と言えるか」

「そうですね、主装備である30mm機関銃の装弾数が少ない事が問題ですがそれを差し引いても、総合的に見れば優秀であると言えます。ですが実際に乗って訓練すれば分かりますが速度が向上した弊害なのでしょう、一度の攻撃時間、照準器に敵機を収められる時間が

極端に短くなっています。今まではそんなことは無かったのですが」

「なんとも贅沢な悩みだな」

「はい、まさか速度が速すぎて悩むことになるとは思っていませんでした」

「それで、戦技研究の方はどうなっている？ 順調か？」

「そちらは段々と形になって来ています。高速であり尚且つ敵機よりも格闘性能で負けているので完全に急降下一撃離脱専用、と言ったところですね。今の所は急降下一撃離脱を徹底して行う事で固まっております。あとはその急降下一撃離脱戦法の訓練と言ったところです」

「やはり難しいか」

「かなり難しいですね。一度敵機の上を取れば殆ど無双出来るのですが敵機の上を取ってから急降下しなければならず、その時の速度が余裕で時速900kmを超えますから2000m上空を取ってもたったの数秒しか攻撃時間がありません。その間に如何に正確に敵機に命中させるか、というのがかなり難題です」

そう西中中佐は言う。

そして続けて話し始めた。

「それに、訓練で相手をする敵機役が一式陸攻なのも問題です」

「そののどこに問題が？」

「敵の高高度爆撃機は最高速度が時速550kmとかなり高速でその速度を簡単に発揮します。ですが一式陸攻はどれだけ頑張っても時速450km程度しか発揮出来ないので速度差が余りにも大きすぎるのです。これでは実戦に出たときに敵機の数に戸惑う隊員も出るでしょう。提督、何とかありませんか？」

「なんとか、と言われてもな……時速500km以上を発揮出来る双発機なんぞあったか……？」

腕を組んで考える。

単発機であれば陸軍の疾風や海軍の烈風、流星でも可能だが双発機となると……

いや、確か海軍が少数配備している銀河が時速550km程を発揮出来なかったか？

「……銀河を使ってみてはどうだ？」

「は、銀河でありますか。どのような機体でしょうか？」

「海軍が開発して少数配備に留まっている双発爆撃機だ。確か速度も時速550kmとは行かないがそれに近い速度を発揮出来た筈だ」

「おお、それは凄いですね。しかし何故一式陸攻に代わって配備を進めないのですか？」

「深海棲艦の爆撃のせいで生産工場が軒並み吹き飛ばされてな。しかも1機作るのに烈風や流星数機分だから、母艦航空隊や各地の航空隊へ送るための航空機生産を優先しているからだ。月産は確か7機程度だった筈だ」

銀河は元々、一式陸攻の後継機として海軍が開発したのだ。

勿論海軍での運用が視野に入れられているので魚雷も搭載可能だ。

しかしながら烈風や流星の開発や生産を優先し、今現在でも同じ状況が続いている中で生産工場が深海棲艦の爆撃によって破壊されて残った工場はたった1つだけと言う有様。

しかも母艦航空隊の航空機や紫電改の生産を最優先にしている為に工場は再建されず、その分の資材は全てそちらに回されてしまい極少数の生産に留まっている。

しかも銀河1機で烈風や流星が数機分生産することが出来るぐらい資材を使うのでそれも要因の一つだろう。

なので極少数が配備されるに留まっている。一式陸攻を置き換える事は叶わず未だに一式陸攻は主力機として使用され続けているのが現状だ。

だが性能を見れば決して悪い機体では無く、寧ろそれなりに優秀であると言える。

速度面でも一式陸攻より100km/hは勝っているし80番を抱いての急降下爆撃も可能、しかも雷撃まで出来るとききた。

これを優秀ではないと言うのならそれは恐らく無能だ。

恐らくこの機体ならば深海棲艦が日々飛ばしてくる高高度爆撃機の代わりを務める事も十分に可能だろう、と思って名前を出してみた

ののだがどうやら存在を知らなかったようだ。

まあ少数しか生産されていないから仕方が無いと言えば仕方が無い。

「それはまた、昨今の情勢のせい、と言う事ですか」

「そうだ。だがまあ、実際に仮想敵機としてここに配備されるかどうかは分からないが俺が市木大将に話を付けることぐらいなら出来る。どうする?」

「勿論お願いします。出来るだけ実戦に近い方が好ましいので何としても、とは言いませんがどうかして1機だけでも良いので回していただけますか」

「分かった、視察が終わったらそのまま軍司令部にも顔を出す予定だからその時に直接市木大将に話を付けに行ってくる」

「ありがとうございます」

こうして視察は終了。

その後、俺は約束通り市木大将の下を訪れて理由と共に何機かの銀河を、1機だけでも良いので工面して貰えないかと話した。

すると市木大将はそういう話ならば喜んで銀河を回そう、と領いてくれた。

「本土防空は今我らが一番に直面している大問題の1つだ。それを解決出来るのであれば幾らでも協力は惜しまないから、何か困ったことがあったらすぐにでも言いに来い」

そう俺に言ってくれた時は少しばかりウルツと来てしまった。

そして市木大将は配備されている部隊に銀河を4機回すように言って早ければ3日後には到着するであろう、との事だった。

俺はそのことを西中中佐に電話で連絡し、その後黒川中将達とも顔を合わせて今回の視察は終了。

呉への帰路についた。

南方方面奪還作戦

第22話

震電が量産体制に入ってから2か月。

海軍九州航空廠では毎日の様に震電が作られているが1か所だけの生産だと、どうしても月産機数は少なくなる。

しかもジェット機化の方も同時に担当しているのだからしょうがない。

それでも彼らは毎月20機の生産を行い、そしてしっかりと第323戦闘機隊へ納めている。

最初に母艦航空隊から配属された西中中佐以下20名は既に震電の習熟訓練を完了しており、今はそれぞれが後から配属された妖精達の教官役を行っている。

人数だけならば20名の教官を含めて80名が居るが機体がまだ足りていない。

なので第323戦闘機隊分は既にあるが第324戦闘機隊の分は用意できておらず、来月からの配備となる。

彼らは、敵高高度爆撃機役の銀河を使って毎日急降下一撃離脱訓練や各種座学等を行っている。

震電は高高度での戦闘を主目的としており、酸素ボンベを搭載しているので搭乗員はそこから酸素を供給してもらおう。

でなければ戦うことなど出来ない。

そこまでに10000mという超空は過酷な環境であるのだ。

第323戦闘機隊は全搭乗員の習熟訓練が完了していないので実戦配備とは至らず、現在も搭乗員育成に努めている。

ただ、操縦訓練の方は終了しあとは急降下一撃離脱戦法を徹底して習熟する段階なのであと1か月もあれば戦線投入が可能、との事だ。

そしてジェット機化に関して。

こちらにも順調に進んでいる、と言えるだろう。ただ問題なのが燃料だ。

このジェット機化する震電が搭載するネ130エンジンは、その燃料に灯油を使用する。この灯油、民間に回されている数少ない化石燃料なのだがそれすら回さず軍が使うとなると最悪、問題に成り兼ねないのだ。

まあそれは仕方が無いので何とかして納得して貰うしかないのだが、それで納得出来ないのが人間と言う生物だ。

既にジェット機化した震電の戦線配備に備えて灯油の備蓄を開始している。

更には早期警戒に備えて海軍と陸軍が共に防空司令部を設置。

対空電探基地を三宅島と大島、静岡県須崎と千葉県館山市の山頂に設置。

本当は八丈島辺りにも設置したかったのだがあの辺りまでになると深海棲艦の活動がかなり活発な地域に近いので断念する事に。

既にその4つの基地は稼働して毎日飛んで来る敵爆撃機を捉えている。

さて、そんな訳で本土防空に関しては着々と進んでいる。

2つの防空戦闘機隊は東海地方までの迎撃を担当する事になっており、搭乗員が完全に実戦参加が可能なレベルになり、関東で幾らかの実戦を経験してから、時期を見てその内のどちらかが関西方面に転用される事になっている。

さて、艦隊の話しよう。

正規空母は飛龍以下、10隻が揃い踏みとなりそして護衛空母である海鷹も訓練中だ。

第1航空戦隊

飛龍、蒼龍、瑞鶴 葛城

第2航空戦隊

大鳳、阿蘇、グラフ・ツェッペリン アークロイヤル

第3航空戦隊

隼鷹 飛鷹

第1、第2航空戦隊は4隻の編成になっているがこれは30ノットを超える速力を発揮する為に完全に高速空母艦隊として編成。

第3航空戦隊は隼鷹と飛鷹だけだが、これは速力30ノットを出せないと言うだけなので戦闘には勿論参加して貰う事になっている。

そして、合同艦隊の残りの戦艦や巡洋艦、駆逐艦は戦線投入可能となっている。

既に艦隊運動訓練を行っており、それに伴う合同艦隊の妖精達（日本海軍から補充された妖精を除く）への日本語教育も同時に施している。と言うのも流石に毎回毎回別々の信号や言葉でやり取りしていたのでは迅速な判断なんぞ出来るわけがない。

そこで日本語を教育する事になった。これは最初期の段階で始まっていたので既に十分に日本語を話せる状態になっている。

あらかたの想定される問題は片付けたと思う。

そして沖縄の防衛体制について。

沖縄本島に限らず奪還した島々には大小の守備隊を配置し、地下防御陣地の構築を命令している。

深海棲艦相手に水際防衛線なんて1日も持たないに決まってる。最悪数時間で水際防衛線を突破されると予想するべきだ。

そこで基本的な防衛方針としては地下防御陣地を島中に張り巡らして防衛すると言う物だ。これは深海棲艦も取っていた方法だ。

元々深海棲艦が掘った坑道などを拡張、拡充する。

そのために鉦山技師など穴掘りの専門家を派遣して掘らない方が
良い場所、掘つても大丈夫な場所、更には坑道の強度設計などもやっ
てもらっている。

輸送船団で運ぶ物資の中には陣地構築や地下防御陣地の構築に必
要なコンクリートや鉄筋なども含まれている。

一番に建設したのは砲弾薬を備蓄しておくための弾薬庫を各地に
建設しまくり、燃料タンクは全て地下に設置し分厚いコンクリートで
覆った。水や食料、医薬品を備蓄しておくための倉庫も全て地下に建
設し、更には腐つたりしないように空調設備も設けた。

最低でも全力で3か月間は戦闘が継続出来る量を備蓄して深海棲
艦の侵攻に備える事になっている。ついでに言うと、沖縄以南の奪還
や攻略の補給拠点としても使用する予定なのでそちらの備蓄施設も
並行して建設中だ。

奪還成功当初から構築を進めて入るが如何せん沖縄本島は広いの
で全域に地下防御陣地を張り巡らせるとなると時間が掛かる。

なので本島全域を防御するのではなく、重要であるとされる地域や
飛行場などに地下防御陣地やトーチカを建設する事にして、その陣地
を地下坑道で自由に移動出来る様に繋ぐ、と言う方針を取った。

そこで防御陣地を構築する事になったのは西原飛行場、那覇飛行
場、嘉手納飛行場、読谷飛行場の飛行場周囲2 km。

そして石川岳と恩納岳を繋ぐ一帯、名護岳、安和岳を含む八重岳と
嘉津字岳周辺、ネクマチヂ岳、与那覇岳と照首山を繋ぐ一帯。

大きくするとこの9か所となる。

これでも本島全域をカバーするよりはずっと楽なのだ。

そして4個歩兵師団と1個砲兵師団をそれぞれ振り分けるのだ。

沖縄防衛司令部からの要請で追加で1個歩兵師団を送れないか、と
上がって来ているが現状厳しいと言わざるを得ない。

と言うのも5個師団の維持だけでもかなりキツイのだ。

弾薬に関しては訓練に使う分で問題無いが食料や飲料水などが問
題なのだ。

これは備蓄に回す分と消費する分で輸送船団をフルで使用しても

なんとか、と言ったところだ。

そこに更に師団数が増えれば維持が出来なくなる。

本土に近いのに、補給が足りずにそれこそガダルカナル島の二の舞になる恐れがある。

一応、輸送船の修理、建造を急いでいるがそれでも足りない。

しかも海軍はとにかく戦力を増やさなければならぬので損傷戦闘艦艇の修理を最優先に行っているからそう多い数を建造出来ない。出来るとしても数隻程度。これでは焼け石に水だ。

補給面でもまだまだ問題を抱えているし、更に言えば深海棲艦が南西諸島方面へ来襲する恐れが大きくそれを考えると未だに気を抜ける状況では無い。

他の方面でも十分敵艦隊の来襲が想定されるし、なにより毎日の空襲もあるのだから前線の事を考えると心苦しいが現状で何とかやっけて貰うしかない。

今更だが、艦隊の編成を。

先ず第1機動艦隊だがこちらは空母10隻と戦艦7隻を基幹としている。

第1機動艦隊

第1航空戦隊

飛龍、蒼龍、瑞鶴 葛城

第1戦隊

戦艦

金剛 霧島 リシユリユ一

重巡洋艦

鈴谷 ザラ ポーラ

第1水雷戦隊

軽巡洋艦

能代

駆逐艦

秋月 照月 Z3 初月 陽炎 雪風 浦風 萩風

第2航空戦隊

大鳳、阿蘇、グラフ・ツエツペリン アークロイヤル

第2戦隊

戦艦

ビスマルク テイルピッツ

重巡洋艦

熊野 アドミラル・ヒツパー プリンツ・オイゲン

第2水雷戦隊

軽巡洋艦

矢矧

駆逐艦

若月 霜月 春月 村雨 時雨 響 朧

第3航空戦隊

隼鷹 飛鷹

第3戦隊

戦艦

リットリオ ローマ

重巡洋艦

青葉 古鷹

第3水雷戦隊

軽巡洋艦

多摩

駆逐艦

宵月 満月 Z1 初雪 浦波 菊月 望月

となっている。

戦艦は全て空母に随伴させる為に30ノットを發揮出来る艦に限定してある。

続いて、他の艦だ。

第4戦隊

戦艦

長門 日向 クイーン・エリザベス ウォースパイト ラミリーズ
ネルソン デューク・オブ・ヨーク

重巡洋艦

那智 羽黒 愛宕 摩耶 キャンベラ ゴトランド デ・ロイヤル

駆逐艦

花月 涼月 グレカール リベッチオ ジャーヴィス マエスト
ラーレ

第4戦隊は戦艦7隻を有しているが、どの艦も26ノットや低いと23ノットや21ノットなんて言う速度すらあるのだ。だから一纏めにし攻略作戦の時は輸送船団の護衛を行う予定だ。

それでもこの7隻の戦艦の中に入ると長門、日向は早い方なのでそれだけ遅いと言う事だがまあ、幾ら言っても変わらない事なのでしようがない。

そして護衛艦隊は以下の通り。

第1護衛艦隊

航空母艦

鳳翔 大鷹

軽巡洋艦

天龍 龍田 神通

駆逐艦

東雲 白雲 浦波 狭霧 子日 有明 海風 江風 峯雲 霞
藤波 沖波 清霜 竹桃 椿 楓 樺 楠 初梅

この艦隊で沖縄への輸送任務を行っている。
鳳翔と大鷹はそれぞれ零戦62型を12機、52型を20機搭載している。

ここに奪還作戦や攻略作戦の時に第4戦隊を組み込む。
こうして見ると、護衛艦隊の方が手厚いと思うかもしれないが、それが輸送船団の総数が40隻や50隻だ、と言われると妥当だ、と思える。

なんなら少ないとすら思える。
南方方面奪還作戦は試算で輸送船を70隻以上投入しなければならぬのだ。

護衛艦隊と第4戦隊を丸々使って護衛をしても隙が出来てしまうぐらいにその数が多いのだ。

さて、艦隊の説明はこんなものだろう。
本土の防衛を担当するのは各地の航空隊と、修理が完了した艦艇だ。

本土防衛艦隊

重巡

最上

軽巡

名取 鬼怒

駆逐艦

白雲 有明 長月 荒潮、親潮、黒潮

以上の9隻で行う。

だが本土防衛艦隊とは聞こえの良い言い方をしているが実際の所は修理完了しているが元合同艦隊の艦艇に人員を回してしまったが為に彼女達へ回す人員が全く足りず実戦に参加出来ないというのが実情だ。

しかも人員が居ないのだから訓練も当然出来ておらず、配属されているのは最低限艦を動かし戦闘が出来る程度。

最上に至っては1000人以上の人員が必要なにも関わらず、200人程度しか配属されていない。

人数的に艦橋要員や機関員などの様々な要員を引いて、さらに応急修理班も引くと主砲を動かす人員はたったの70人程しかおらず、実際に稼働出来るのは前部の2基だけという有様だ。

他の艦も殆ど似たり寄ったりで航行させるのが精一杯、訓練も満足に行えないと言う状態で戦闘なんぞとても行えないという状態。

先ほども言ったが人員が補充されるまでは到底実戦に参加させることが出来ない。

空母艦載機は12隻も居るのだから当然今までよりずっと多い。

飛龍

烈風37機 流星32機 彩雲9機 計78機

蒼龍

烈風37機 流星32機 彩雲9機 計78機

瑞鶴

烈風37機 流星52機 彩雲9機 計89機

隼鷹

烈風37機 流星32機 彩雲9機 計78機

飛鷹

烈風37機 流星32機 彩雲9機 計78機

天城

烈風37機 流星36機 彩雲9機 計82機

(彩雲9機を露天繫止)

阿蘇

烈風37機 流星36機 彩雲9機 計82機

(彩雲9機を露天繫止)

大鳳

烈風37機 流星32機 彩雲9機 計78機

(彩雲9機を露天繫止)

グラーフ・ツエツペリン

烈風37機 流星20機 彩雲6機 計63機

(彩雲6機を露天繫止)

アークロイヤル

烈風37機 流星24機 彩雲6機 計67機

(彩雲6機を露天繫止)

鳳翔

零戦52型丙20機 零戦62型12機 彩雲4機 計36機

(彩雲4機を露天繫止)

大鷹

零戦52型丙20機 零戦62型12機 彩雲4機 計36機

(彩雲4機を露天繫止)

烈風370機 流星328機 彩雲92機

零戦52型丙40機 零戦62型24機

第1機動艦隊 790機

護衛艦隊 72機

合計862機となっている。

瑞鶴は母艦航空隊の数が増えたりして10機前後増えている。

大鳳、天城、阿蘇、グラーフ・ツエツペリン、アークロイヤルの5隻は新たに航空隊を編成、そして配属されている。

グラーフ・ツエツペリン、アークロイヤルは元々艦載機の搭載数が50〜60機と少なかったが彩雲を露天繫止することで多少の艦載機の数を増やしている。

実際に敵艦隊と戦うのは第1機動艦隊の790機だが、深海棲艦は10隻の空母ヲ級で1000機を超える艦載機数を誇る。これが15隻だとしても1500機、凡そ2倍近い戦力差となる。数だけで見

れば多いと感じるが深海棲艦の物量の前では大して意味が無い。

まあ、又級も15隻の内に含まれるので若干少なくなるだろうが、気休めにもならない。

さて、取り敢えずの所は艦隊の説明はこんなものだろうか。

あと損傷して引き揚げられて修理が必要な艦は戦艦や空母に限ればそこまで多くは無い。

戦艦5隻

大和

武蔵

比叡

榛名

山城

空母5隻

信濃

加賀

生駒（浮揚作業中）

龍驤（浮揚作業中）

千代田（浮揚作業中）

これら9隻に加えて巡洋艦や駆逐艦が存在する。

重巡洋艦3隻

足柄

筑摩（浮揚作業中）

加古

軽巡洋艦4隻

大井（浮揚作業中）

阿賀野（浮揚作業中）

酒匂

由良

駆逐艦19隻

磯風

時津風（浮揚作業中）

山風

江風（浮揚作業中）

初春

若葉

初雪（浮揚作業中）

綾波

夏雲

暁（浮揚作業中）

雷（浮揚作業中）

電（浮揚作業中）

夕雲

長波（浮揚作業中）

大波

涼波

柿

梨

雄竹（浮揚作業中）

潜水艦9隻

伊154

伊158（浮揚作業中）

伊174

伊175

伊176（浮揚作業中）

伊178

伊179（浮揚作業中）

伊183 (浮揚作業中)
伊185
海防艦7隻
占守
国後 (浮揚作業中)
石垣
松輪
佐渡
対馬 (浮揚作業中)
三宅
給油艦6隻
神威
速吸
鷹野 (浮揚作業中)
龍舞 (浮揚作業中)
塩瀬
高崎 (浮揚作業中)
給料艦1隻
間宮

以上のようになっている。

他にも敷設艦などの他艦種も複数存在しているが、それらの艦は損傷度合いがかなり酷く修理順位は下の方だ。

浮揚作業中の艦は相当数いるが、空母信濃は元々大和型戦艦を空母に改装した艦なので戦艦並みに時間が掛かるので後に回している。

加賀も艦体が浮揚作業中の3隻よりも大きく、作業に時間が掛かる為に戻す。

取り敢えず、艦隊を1つ編成出来るだけの数を行っているが優先的に空母3隻へ工員を回しているので他の艦は遅れ気味だ。

この空母3隻は早ければ来年の8月頃にドックに入ることが出来る。

完全に修理が完了し戦線参加が可能になるのはどれだけ早くても12月か再来年の1月となるだろう。

残りの浮揚作業中の艦も再来年の秋か冬までの戦線参加を予定している。

それよりも早く戦線復帰を望めるのは駆逐艦江風、初雪、暁、長波の4隻だ。

この4隻は浮揚作業を空母よりも早く開始し2か月後にドックに入り、修理が開始される。終了後は乗組員が足りず、練度も圧倒的に低いので本土防衛艦隊に配属されそこで訓練を積む事になっている。

本土防衛艦隊の各艦はそれぞれ早ければ来年の春には乗組員の補充を受け、本格的に訓練を開始する予定だ。

夏には実戦参加が可能だろう。

取り敢えずそれまでは現有戦力のみで戦うしかない。

これらも喪失してしまうと大打撃になってしまうために出来れば損傷しないことが望ましいが最悪損傷しても本土へ帰らせる事さえ出来れば何とでもなる。

とにかく、現有戦力を喪失させずに保持し続け、南方方面の奪還を行い、更に再び戦力が整うまでの間、本土近海及び資源地帯の維持を行わなければならないと言う、控えめに言ってしまうえば不可能極まらない。

これが深海棲艦相手でなければ何とかなるが深海棲艦だ。

完全に物量で負けている。南方方面の偵察任務に就いている第2潜水艦隊によれば確認されている空母の数は大小15隻に戦艦が12隻。

それに随伴艦が就くので総数は100隻は下らない。

しかも同じくバンド海方面からアラフラ海以西のビスマルク海方面の偵察任務に就いている第一潜水艦隊によれば同海域にも空母が11隻。戦艦は17隻確認されている。

大してこちらは空母10隻に戦艦14隻。どうやったってその戦力差は埋まらない。

遅くとも来年の冬頃までには南方方面の奪還をしなければ大規模輸送作戦で運んで来た各種資源が枯渇し始めてしまう。

そうなれば艦隊は動かせなくなり、終わりだ。

それまでに南方方面を奪還して資源の輸送を最低限確立させ、更には同海域の深海棲艦を出来る限り殲滅しケリを付けなくてはならないが、さてどうしたものか。

これだけの戦力では流石にどうにもならない。

いつその事、本土近海にまで出張って来てくれれば各地の航空隊と連携すれば、やりようはあるんだがな。

本土とは言わずとも沖縄近海にまで出て来てくれれば……と思うが流石に希望を見るのが過ぎる。

しかし本当にどうしようか。

流石に南方方面まで基地航空隊を飛ばす事は出来ないし、飛ばしたとしても意味が無い。

精々が潜水艦による偵察か、通商破壊ぐらいしか出来ない。

通商破壊をするにしても、こちらがその方面に俺達が攻勢に出ると言っているようなものだ。当然、奴らは備えるだろうな。

そうなれば潜水艦隊の行動に大きく制限が掛かる。そうなればこちらは潜水艦による事前偵察が出来なくなる。

敵戦力を確認出来ない状態で艦隊を派遣して、倍の数の空母を相手取るとなった時は地獄にしかない。

空母を半分失うだけならば御の字、最悪空母全てと戦艦も半分以上失う結果に成り兼ねない。ならば南方方面へ攻勢を仕掛けるのはそこまで敵空母の数が少ない今しか無いのだ。

深海棲艦の通信を傍受した結果、南方方面への増援艦隊の派遣はこの先1年以上は無い。

どうにも深海棲艦はそれぞれ担当管区のようなものを決めているらしく、そこから基本的に出て支援をしようと言う事は無いらしい。

北方に関してはそのような事は薄く、各地で連携を取ってくるらし

いが南方に行けば行くほどその傾向は強くなるらしい。

欧州方面への大攻勢に関しては欧州だけの深海棲艦だとヨーロッパそのものを脱落させるには足りないと考え、南方、ニューギニア方面から戦力を丸々根こそぎ引き抜いて確実に、と言う訳らしい。

南方方面の敵艦隊は南西諸島方面までを担当している。

それにフィリピン海からマリアナ諸島一帯を超えた辺りまでを担当する敵艦隊。

千島列島からアリューシャン列島以北からチュクチ海までを担当する北方方面。

ミッドウエー諸島からハワイ方面。

アラフラ海を含むビスマルク諸島、ソロモン海、フィジー、サモア、ニュージージーラント一帯の珊瑚海方面。

パラオ、トラックなどのマリアナ諸島以南、ニューギニア以北の間
の方面。

アラスカとカナダ除いて北米、特に西海岸と東海岸で分けられるアメリカのみを担当する2つの方面。

パナマ運河のあるパナマからメキシコまでを担当する方面。

南米大陸太平洋側を担当するものと大西洋側を担当する方面。

大アンティル諸島、カリブ海方面を担当する方面。

他にもインド洋方面、大西洋方面、北海、地中海、黒海、ロシアの
極北方面とかなりの数がある。

幸いなのは、先程も言った通りそれらの各方面艦隊が余り連携を取らないと言う事だ。

これは我々が各個撃破を狙えると言う事だ。だがそれでもこちらの戦力よりも最低1.5倍は存在する。

全艦が全て修理を終えて戦線投入が可能になったとしても、だ。

敵は恐らく、南西諸島を我々が奪還したところでそれ以上は大して反抗する戦力も残っていないだろうとか、燃料が無いとか思っているんだらう。

だからこそ敵は増援を派遣しないし潜水艦隊の被害も一切出てい

ない。

ならば今の内に南方方面、特に資源地帯の奪還を行わなければならない。
ない。

遅くとも8〜9カ月以内、早ければ半年以内に仕掛けるのが最良。
作戦を練り、作戦実施時期と作戦、方針さえ決まってしまうえば何時でも出撃可能だ。

目下、中代中将が作戦を立てているがやはり戦力差と言う壁が大き
く立ちはだかっており作戦立案は難航していると聞く。

事実、既に4か月前から作戦立案を始めているのに全くと言ってい
い程に進まない。

俺も前線の最高指揮官として関わるがやはり良い作戦は思い付か
ない。

奇策でなくともいい。とにかく敵艦隊を撃滅しえるだけの策は無
いものか。

それから1か月後。

1か月前半に漸く作戦が決定しそれに伴い艦隊に出撃準備命令が
市木大将の名前で正式に下令された。

3か月後に呉を出港、南方方面へ進出後、作戦開始となる。

作戦は、この際なりふり構っていられないと言う事で潜水艦隊にも
敵艦隊攻撃を命令。

作戦時に敵艦隊攻撃をするので偵察任務からは潜水艦隊を外し、代

わりに陸軍妖精の内から選抜され潜入偵察に重点を置き訓練、特化された60名を6名10班に分け潜水艦隊によってリアウ諸島に1班、カリマンタン島に3班、スマトラ島に3班、セレベス島に3班と派遣。南方方面の各島へ秘密裏に忍び込ませ上陸、作戦実施から終了までの期間は潜水艦隊の代わりに偵察任務を任せる事になった。

半月前に派遣して既に任務に就いている。

補給に関しては潜水艦隊が交代で2週間事に行っている。

ただし作戦開始から4週間前に一度、纏めて物資を運び以降の補給は無い。

補給に関しては、60人分を3食で4か月分なので21600食分。

そこに予備として2000食分を送り込む。

合計23600食分となるが缶詰1個で米は200g、おかずが統一で150g。

米だけで4720トン、おかずだけで3540トン。

計8260トン。

更に飲料水を1人1日2リットル×1か月60日で120L。

これを1人辺り4か月分で480L。

60人分で28.8トン。

さらにはこちらにも予備を4000リットル入れて合計32800Lとなる。

全て1L、1kg換算で総重量は32.8トン。

後は塩も送り込む。

炎天下での行動にはどうしても塩が必要だからな。最悪海水をくみ上げて濾過し、蒸発させて塩を取れ、と言っている。

火を使わせないのは彼らのいる場所がばれてしまう恐れがあるからだ。

そこに嗜好品として甘味である果物のシロップ漬けを幾らか送る。

これは各人に2週間で3缶ずつ。

計1440缶。

甘味に関しての缶詰の総量は1つで200g。

中身はそれぞれの果物によって個数は変わるがさくらんぼであればMサイズなのでだいたい20〜30個程度は入っている計算になる。

計288トン。

少ないと感じるかもしれないがこれでもかなりの大盤振る舞いなのだ。そも、俺の話を引き合いに出す事になるが菓子などの甘味なんぞこの世界に来て最後に食べたのは2年だか3年ほど前だ。記憶すら曖昧になつて来たな……

果物の甘いと言う味覚すら覚えていないぞ。

米とかは噛んだりすれば甘みを感じる事も有るので完全に忘れていると言う訳ではないがな。

それを2週間で3缶、となればどれだけ敵地潜入偵察任務に就いているとは言えマシな事か。

まあ俺は要らないからその分前線に回してやれと言っているのが直接的な原因なのだが。別に今更文句は無いし、戦時中でのんびりと週1日の休暇を貰っている俺が甘いものが食いたいから寄せなぞ言える筈も無い。

流星に酒と煙草は却下した。

理由としては、酒は任務中に飲むな、と言う話だ。

煙草に関しては夜間に限らず喫煙をすると位置を悟られる可能性があるがあると言う事で却下となった。

なにも全部が全部駄目だ、と言う訳では無く、許せるものは許している。事実、甘味は許可を出したし。

却下するのにもそれなりの理由がある、と言う事だ。

何故、纏めて最初に運ばないのかと言うと、先ず食料に関しては保存の利く缶詰を中心に更にそこに幾らかの生鮮食品を入れるので纏めて運んでしまうと熱帯の気候では幾ら缶詰と言えども腐り兼ねない。しかも4か月となるとほぼ確実に腐ってしまうだろう。

だからこそ2週間ごとに送り込むのだが、流石に作戦開始1か月前は纏めて運び込むことにした。

でなければ作戦に向けての整備点検や必要ならば部品交換などを行えないからだ。

その際には生鮮食品は送り込むが恐らく半分ほどの2週間で尽きるだろう。

それぞれの物資の総重量は約8580.8トンになる。

そこに弾薬をそれぞれの班に12kgを加えればさらに増える。

いつその事、輸送船を使った方が良いと思うだろう。

なんならこれだけの物資にもなると普通に輸送船団を使う案件だ。

だが送り込むのは敵地、しかも完全な支配地域で何なら敵泊地に近い班すらある。そんなところに輸送船団を送り込めるか、と言う話である。

そこで潜水艦の出番なわけだが。

今回は必要のない物は全て降ろしてありとあらゆるスペースに積み込んで送る。

更には魚雷も搭載しないし仮設ではあるが機銃や砲を撤去しそこに潜水艦の甲板に鉄製のコンテナを幾つか溶接してそこにも物資を入れて送る。

2個潜水艦隊をフル動員し、送り込み続ける。

勿論、戦闘なんてできやしないしなんなら潜航は出来るがそこまで深い深度に潜る事は出来ない。

移動の殆どが水上で、敵勢力下であれば昼間も勿論進むが夜間を主に航行する。

敵艦隊に見つかれば、勿論只では済まない。だから敵艦隊に発見さ

れた場合は甲板上のコンテナ全てを捨てても構わないと言っている。
だが今のところは問題無く進んでいるようだ。
問題があったと言う報告は受けていない。

取り敢えず、次は南方方面攻略艦隊と陸軍部隊を輸送する船団を護衛する艦隊を記そう。

攻略部隊主力艦隊

第1機動艦隊

第1航空戦隊

飛龍 蒼龍 瑞鶴 葛城

第1戦隊

戦艦

金剛 霧島 リシユリユ一

重巡洋艦

鈴谷 ザラ ポーラ

第1水雷戦隊

軽巡洋艦

能代

駆逐艦

秋月 照月 Z3 初月 陽炎 雪風 浦風 萩風

第2航空戦隊

大鳳 阿蘇 グラフ・ツエツペリン アークロイヤル

第2戦隊

戦艦

ビスマルク テイルピッツ

重巡洋艦

熊野 アドミラル・ヒツパー プリンツ・オイゲン

第2水雷戦隊

軽巡洋艦

矢矧

駆逐艦

若月 霜月 春月 村雨 時雨 響 隴

第3航空戦隊

隼鷹 飛鷹

第3戦隊

戦艦

リットリオ ローマ

重巡洋艦

青葉 古鷹

第3水雷戦隊

軽巡洋艦

多摩

駆逐艦

宵月 満月 Z1 初雪 浦波 菊月 望月

第1機動艦隊は以上だ。

艦載機数も変動しておらず戦艦が7隻しか組み込まれていない理由も同じだ。

輸送船団護衛艦隊

第1護衛艦隊

航空母艦

鳳翔 大鷹

軽巡洋艦

天龍 龍田 神通

駆逐艦

東雲 白雲 浦波 狭霧 子日 有明 海風 江風 峯雲 霞

藤波 沖波 清霜 竹桃 椿 楓 樺 楠 初梅

第4戦隊

戦艦

長門 日向 クイーン・エリザベス ウォースパイト ラミリーズ

ネルソン デューク・オブ・ヨーク

重巡洋艦

那智 羽黒 愛宕 摩耶 キャンベラ ゴトランド デ・ロイヤル

駆逐艦

花月 涼月 グレカール リベッチオ ジャーヴィス マエスト

ラーレ

上陸部隊輸送船団

輸送船 130隻

陸軍第16歩兵師団

陸軍第18歩兵師団

陸軍第21歩兵師団

陸軍第26歩兵師団

陸軍第33歩兵師団

陸軍第44歩兵師団

陸軍第49歩兵師団

陸軍第51歩兵師団

陸軍第63歩兵師団

陸軍第78歩兵師団

各師団10隻ずつ計100隻

物資輸送専用30隻

第101号型輸送艦 25隻

海軍横須賀鎮守府所属特別陸戦隊 第6歩兵連隊

海軍横須賀鎮守府所属特別陸戦隊 第8歩兵連隊

海軍大湊警備府所属特別陸戦隊 第9歩兵連隊

海軍佐世保鎮守府所属特別陸戦隊 第13歩兵連隊

海軍呉鎮守府所属特別陸戦隊 第5砲兵連隊

海軍横須賀鎮守府所属特別陸戦隊 第11砲兵連隊

歩兵連隊は3隻づつ、砲兵連隊は4隻づつ。

戦闘艦艇計95隻

上陸部隊輸送船団155隻

攻略部隊主力と輸送船団護衛艦隊は以上の通りだ。

これらの艦艇はそれぞれ作戦実施日の1週間前までに対空兵装の大幅な増設を行う。

飛龍と蒼龍に搭載した40mm対空機関砲は、問題無く稼働しその威力を十分過ぎる程に発揮した。

他の艦艇にはそこまで多く搭載することは出来なかった。

鳳翔を除く空母と戦艦は何とか間に合ったが重巡洋艦については鈴谷、熊野、古鷹、那智、摩耶、アドミラル・ヒッパーとプリンツ・オイゲンまでしか搭載することが出来なかった。

全体の3割程度だ。

まあそれでも元々搭載されている艦は数を大幅に増やしている。それこそ戦艦1隻で駆逐艦数隻以上に匹敵する対空火力だ。

だがこれでも深海棲艦の対空火力は上を行くのだから恐ろしい事極まらない。

まあそう言ってもどうしようもないが、とにかくこれで多少は効果効果はあるだろう。

無かつたら困るが。

陸軍の上陸部隊に関しては10個師団を揃えた。

それを輸送するのに戦時緊急増産型の大型輸送船を緊急で25隻建造した。

ただ、この輸送船は極端に船体の鋼板厚を削ってギリギリの薄さしかないので爆弾1発でも余裕で沈められてしまう。

魚雷なんて論外だ。

命中したときには一撃で木端微塵、陸軍妖精や乗組員である海軍妖精諸共海の藻屑だ。

だからこそ長門以下の戦艦までもを速度の関係上とはいえ護衛に就けたのだ。

被害を0にしようと言う事は出来ないだろうが最低限に抑えられると思う。

船団で送られる10個歩兵師団だけでなく輸送船の数の関係上、本土には3個歩兵師団が待機しており、10個師団を上陸させた後に本土へ輸送船を送り後から送られる予定だ。

陸軍第81歩兵師団

陸軍第87歩兵師団

陸軍第92歩兵師団

それぞれの師団は本土からの出航になるが弾薬等の物資を輸送する輸送船は沖縄本島からの出撃となる。

理由としては沖縄本島が今回の作戦の最前線補給拠点となっているからだ。

それに伴い以前から作戦に使用する物資の備蓄を沖縄防衛の際に使用する物資とは別に行っている。

こんな状況だ。

南方方面の奪還は、全域を奪還するわけでは無い。

奪還目標はリング泊地とスマトラ島、カリマンタン島、パラワン島に限る。

流石に全域の奪還ともなれば13個師団だけでは絶対的に兵力が足りない。

だから4か所に限定して奪還を行い、輸送船団の航路を確保するのだ。

この4か所を結ぶと各方面からの深海棲艦の進行や通商破壊を防ぐ壁となる。

各地には陸海軍の航空隊と2式大挺の哨戒部隊などが進出予定だ。リング泊地は深海棲艦の南方方面の拠点であり、そこさえ落としてしまえば深海棲艦はインド洋方面もしくは珊瑚海方面、ニューギニア方面へ撤退しなくてはならない。

修理を行うのであればトラックかニューカレドニアまで一旦戻らなくてはいけないし深海棲艦にとっては日本本土へ上陸する際に大きな障害と成りえる。

なんなら日本本土へ直接手出し出来るのは中太平洋方面か北方方面だけとなる。

そうなれば日本も少しばかりは現状の改善が見込めるだろう。

だが、各国の支援が無い中でこの作戦を行うのは難易度が高い。

カンボジアやベトナム、タイなどの東南アジア諸国は国があった土地を捨てて内陸へ避難してしまった。しかもミャンマーやインドなどから深海棲艦の爆撃機や戦闘機が飛んで来るので内陸も決して安全とは言えず、唯一の抵抗手段である艦娘や妖精は居ないからただやられるだけだ。

この作戦は日本が単独で、しかもその土地にあった国の了承を得ずにやると言う事で政治家連中はならば南方方面全域を占領して云々

色々横槍を入れてきたが今、そんなことを言っていられる現状か？
言っておくが、俺は出来るならば他国へ救いの手を伸ばしたいが自
国の維持すら出来ない国がそんな事出来るわけがない。

しかもその防衛を担当するのは日本だぞ？出来るわけあるか。

今回の4か所の奪還ですら命綱無しで綱渡りをしている最中に
ジャグリングをしながらアクロバット演技をやるようなもんなんだ、
一歩間違えれば艦隊は全滅、輸送船団も全て海の藻屑だ。

正直、あまり言いたくは無いが黙ってる。

現状で他国を救うと言う事は自国が滅びる事を歓迎していると言
う事だ。

指揮に従わないとか云々言う前に自国の現状をもっと理解してほ
しい。奴ら国民に節制をとか言っているがその陰で一番贅沢をして
いるのはあいつらだぞ。

……作戦以外の事が入ってしまった。

まあ気にしないで欲しい。

作戦に備えて各地で準備が進められている。

この作戦の重要度で言えば南西諸島奪還作戦よりもずっと上を行
く。

資源輸送ルートの確保、と言う日本の命運そのものを分ける。

3か月後の作戦開始は、刻々と迫っている。

用意周到に周到を重ね、万全の体制で挑まなければ。

第23話

現在、南方方面攻略作戦の2か月前。

攻略部隊の準備は着々と進み、これと言った問題は起きていない。それとは別に、深海棲艦の日本本土に対する爆撃の方が問題だった。

震電配備の戦闘機隊は既に5個戦闘機隊までに増設されている。

関東、入間と筑波の飛行場に第323戦闘機隊と第324戦闘機隊は本来、どちらかを関西方面に転用予定だったがそれを変更し、引き続き配備されている。

理由は当初、想定されていたよりも敵高高度爆撃機の数が増えた事と、震電の生産が軌道に乗って3か所の工場で月産50機を数えるまでになったからだ。

九州海軍航空廠と海軍関西航空廠と海軍広島工場の3工場合わせて月産60機の予定であったが、九州海軍航空廠は震電のジェット機化にリソースを多く割く為に月産10機に減らし、その分をジェット機化計画へ振り向けた。

エンジン製造は九州海軍航空廠が担当しており、それも考えると生産機数を減らしてジェット機化計画にリソースを向けるのはある意味正解だとも言える。

残りの3個戦闘機隊は関西の姫路飛行場（旧関西国際空港）、鳴尾飛行場、第一鈴鹿飛行場の3か所に配備。

それぞれ既にばらつきはあるが30機前後を装備しており、震電の操縦訓練の為に海軍土浦航空隊から派生させた、熊谷航空隊、下館航空隊を編成、震電の専門教育に当たる事となった。

更には陸軍へも震電の配備を決定、陸軍明野飛行学校から派生させた震電専門の教育飛行隊が関西の佐野飛行場に新設。

これらの陸海軍の練習航空隊や教育飛行隊は初等教育期間中に震

電配備の戦闘機隊へ配属されることが決定する。

初等教育が終わるとそれぞれの練習航空隊などに再配属され、最初に練習機である零戦を使って各種飛行訓練、戦闘訓練の教育を徹底して行い、その後には震電専門教育を開始する。

これらの期間は全て合わせて3年となっており、本来ならば戦時下と言う事でその半分の日数で他は行っているが、震電に関しては完全に別体系として扱う。

専門教育の中には通常の母艦戦闘機隊などでは使われないような酸素ボンベからの酸素供給量等などの訓練なども含まれており訓練期間が延びるのは必然である。

寧ろ3年でも短く、なんならもう1年は欲しい所だが戦況がそれを許さない。

第1期生の卒業までは各地の航空隊などから搭乗員を引き抜いて間に合わせる事になっている。

それとは別に震電のジェット機化計画について。

現段階で、ジェット機化計画はかなり進んでおり来年の春までに試作機を製造、試験飛行などを終わらせて再来年の3月、もしくは7月ごろには各種調整を終わらせて量産体制に入れれば、と開発陣は言っている。

エンジンはネ130が選定され、搭載が決定。

既に全力運転などの試験を終了、問題点の修正を行っている段階だ。

どちらかと言えば震電の機体のジェットエンジンを搭載するに当たって修正しなければならぬ点よりもネ130を搭載した時の問題の方が多かった。

エンジン自体には特段問題が起きたりはしなかったが振動によって機体側の部品に亀裂が入ってしまったりと問題が発生。

しかも後方にジェット気流を排出する部分が、想定以上の高温になったことによりその部分が融解してしまったりとかなりの大問題が発生した。

まあこれらに関しては解決の目途が立っているので大丈夫だが、機体とネ130の製造をどうするかと言う方が問題だった。

と言うのも九州海軍航空廠は機体と通常機用のエンジンの製造を担当しており、ここに更にネ130の生産も入ってくるとなれば、効率の面で余り宜しくない。

そこで、J7W2の機体とそのエンジンの生産を九州海軍航空廠に担当させて、元々の震電の方を海軍関西航空廠と海軍広島工場の2か所に担当させることになった。

それに伴い九州海軍航空廠は後々、生産ラインをJ7W2用に完全移行。

海軍関西航空廠と海軍広島工場は生産ラインを増設する事になった。

これにより震電は月産60機を目指し、J7W2は月産25機を目指す事になっている。

一応、これで計画は進んでおり問題が無ければこのまま進める。

ここ何カ月か、それこそ高高度爆撃機（陸海軍はこれを「B-29」と断定）の爆撃は激化の一途を辿っていた。

ここ最近は何日毎日、300機近い数の編隊で毎日の様に来襲してくるものだから、震電による迎撃も一定以上の戦果を挙げてはいるがやはり数が多いと言う点で迎撃を突破されて爆撃を許してしまっている。

多い日には300機を超える事すらザラだ。

関東担当の2個航空隊で、毎回20〜30機ずつ出撃して何十機と撃墜するがやはり30m機関銃の装弾数が少ない事と急降下一撃離脱が主戦法なので2回、良くて3回攻撃を行えば弾薬切れ、もしくは上手く位置取りが出来なくなり攻撃は終了。

毎回の出撃で全機が1機は撃墜しているがそれでも数の差は覆すことが難しく、なんなら夜間空襲すら行われ始める始末。

機上電探を装備していないので夜間迎撃は困難を極める。

迎撃に出るが、暗闇の中で敵機に攻撃を命中させて撃墜させることはかなり難しい。

一応、一八試空2号無線電信機(機上電探。以降FD-2と記す)を銀河に搭載させているが、試作段階なので性能は安定しているとは言い難い。

なんなら飛ばしても使えなかったり故障したりで使用不可能な状況も多発している。

それを補うために増加試作を行い、銀河も何とかして20機を揃えて全てに装備させたがそれでもFD-2の稼働率は悪く、全体の2・5割ほど。毎日の出撃で2〜3機分稼働していれば良い方、最悪1機も稼働しないなんて時もある。

現状、開発陣の妖精達が必死に性能を安定させて、実戦で十分に使用出来るよう努力しているし更には飛行場に技師妖精を派遣して直接整備に参加しているがそれでも現状が精一杯。

しかも深海棲艦は昼夜2回の爆撃を敢行してくる為に震電のエンジン部品や弾薬の消耗も激しい。搭乗員の疲労も大きいのも無視できない。

他にも何か攻撃方法は無いかと色々と模索しているがこれといった案は無く、どん詰まりの状況だ。

ドイツからもたらされた航空機搭載用のロケット弾を小型化して複数搭載出来ないか?ともなっているがそうなると重量が増加して迎撃が困難になる。

なので解決策は震電の配備数を増やして一度の迎撃で繰り出す震電の数を増やすしか他無い。

それにも限界はあるし、そのために震電配備戦闘機隊を増やしたいが搭乗員が足りないなのでこれもそう簡単に出来ない。

今の所はどうにもならない、と言うのが現状だ。

そんな状況の中、彼らは良くやってくれている。

今日も深海棲艦の高高度爆撃機が飛来してくる。

その報告を受けた俺は、愛機となった震電に飛び乗って高度を上げていく。

防空総司令部の話によれば敵爆撃機の数には250機を超えるところだ。

11000mまで上昇して、敵編隊を待ち構える。

俺達の部隊名は323空だが323空が荒鷲、324空が護鷲とコールサインを決めてある。

迎撃戦闘機隊の総隊長を務めるので各機に指示を出す。

すると防空司令部から無線が入る。

『こちら防空総司令部。荒鷲、護鷲、聞こえるか?』

「ああ、問題無く聞こえる」

『よし。そこから南200km、高度9500m辺りに敵編隊が飛んでいる筈だ』

「了解」

通信を切る。

今回は323空24機、324空28機ずつ、52機が迎撃に上がっている。

それぞれ、荒鷲1〜24、護鷲1〜28となっており、4機1編隊で攻撃を仕掛ける。

で行く。

射撃時の反動は20mmや13mmとは比べ物にならない大きさだが何ともない。

2連射分を敵機の翼に叩き込むとあっさりと翼が押し折れて落ちていく。

敵機も機銃をばら撒くがこちらの速度が速いので全て追い撃ち、震電が通り過ぎた後に銃弾が飛んで行く。ただ1発も命中しないと言う訳では無く何発かが機体とコックピットに音を立てて命中するがなんてことは無い。

烈風や零戦であれば撃墜されかねないが震電は防弾装備が十分に確保されており、コックピット自体も防弾ガラスがしっかりと張られており、敵機の防御火器は12.7mmなのでこちらのコックピットを貫くことは出来ない。

燃料タンクや翼内にも防弾ゴムや消火装置を装備していて容易に出火することは無い。

後ろを振り向くと10機程の敵機が落ちていくのが分かる。

30mm弾は榴弾を使用しているので貫通力は劣るが破壊力は折り紙付きだ。

そんなものを10発、20発と食らえばいかな深海棲艦の重防御が施された爆撃機と言えども木端微塵だ。

一応、急降下での上昇離脱後に目視確認と計器での確認をするが問題は無い。

恐らく燃料タンクに命中した銃弾は貫くことが出来なかったか、穴を開けたとしても防弾ゴムで塞がれたのだろう。

これならば第2次攻撃は十分に可能だ。

「全機、まだ行けるか？異常は無いか？」

「『『『『異常無し』』』』」

「ならばもう一度行くぞ。先ほどとやり方は同じだ。かかれ」

「『『『『了解』』』』」

すぐさま護鷲隊が増速して敵編隊の前に出ると再び反転、急降下を

開始。

再び30mm弾を叩き込んでいく。その内の1機が運悪く30mm弾が爆弾倉にでも命中したのか派手に爆散して周りの爆撃機を巻き込んで木端微塵に消し飛んだ。

勿論、攻撃を加えた震電も巻き込まれる。

とにかく今は一度攻撃を加えることが優先だ。

荒鷲隊も続けて反転、急降下。

敵の1機の翼に狙いを定めて射撃をする。

狙い通り、綺麗に翼を貫いて叩き折った。

そのまま敵編隊の下に抜けて行って再び上昇する。

そして一度全機を集めて異常の有無を確認する。

「全機、どこか異常はあるか？さつき爆発に巻き込まれた機は大丈夫か？」

『こちら護鷲8。エンジンに損傷を負っています。飛行には支障無しですが戦闘は困難です』

「分かった。1人で飛行場まで戻れるか？」

『可能です』

「ならば今すぐに飛行場に戻れ。良いか？」

『了解しました。御武運を』

そういうと、護鷲8は飛行場へ戻って行った。

だがまだ俺達は戦闘を止めるわけには行かない。

40機以上を撃墜しているがまだ200機は残っている。

あと一度は攻撃を加えられるだろう。

その後更にもう一度、攻撃を行い撃墜数は62機を数えたが190機以上が迎撃を突破。爆撃を許してしまう事になった。

やはり敵機の数に対して迎撃に向かう震電の数が少ない。これでまた夜間に深海棲艦の奴らは爆撃に来るのだ、冗談じゃない。

損失機を出していない事が幸いだが銃弾はたった240発しか携行出来ないのので3回の攻撃で殆ど撃ち尽くした。

残弾は12発しか残っておらずもし攻撃をもう一度加えられたとしてもこれではよほど上手く弱点に命中させなければ撃墜出来なかつただろう。

機体を翻して、飛行場に戻るために本土上空に向かった。

これからまた夜間爆撃に備えなければならない。

本当に、頭が痛くなる状況だ……

l l l l side out

毎日の様に323空、324空から報告書が届く。

そこには敵機の数が多く、取り逃がすことが多いので早急に新しい攻撃手段、もしくは震電装備の戦闘機隊を増設しなければ本土防空の任を完遂する事は出来ない、との事だった。

毎日200機以上、多い日には300機と言う数の敵爆撃機が昼夜2回飛んで来るのだからその気持ちは分かる。

だが搭乗員の確保が困難な以上、増設は第1期生が卒業するまではほぼ不可能だろう。

南方方面奪還作戦が成功したならばそちらにも陸海軍の戦闘機隊を送らなければならないしそうなる所これ以上引き抜くことは出来ない。

南方方面奪還作戦の準備に関しては以前と変わらず問題無く進んでいる。

まあ戦力不足は常に問題だがそれは今に始まった事では無い。

とにかく、艦隊の戦力をどうやって増やすか、だがそもそもの話だ。艦娘とその艦体ってどこから来たのだ？と、今更ながらふと疑問に思った。

最初期に艦娘とその艦体が現れたときの報告書によれば海上にて唐突に出現した、としか書かれていない。

その出現原因や要因は判明しておらず報告書には書かれていない。

妖精に関しては、本当に突発的にどこからか現れるらしく毎日現れているらしい。

そして妖精はそれぞれの適正、例えば戦闘機の搭乗員だったり爆撃機の搭乗員、水雷、砲術、炊事と適正を見てそれぞれ陸軍、海軍に配属されて訓練を受ける。

そして各地の部隊へ配属となるのだが。

艦娘と艦体は聞いたことが無かった。

そもそもの話だが、深海棲艦の事だけでなく妖精と艦娘、艦体の事も分かっていない事ばかりで寧ろ分かっていることが少ないのだ。

一応、妖精に関しては多少の研究、勿論非人道的な事はしないが身体検査やMRIなどを使ったりしてみたが、実際の身体構造は人間となんら変わらない。

排泄器官や各種臓器も人間の物と同じ。

ただ、血液やDNAなどがどういいうわけか分析出来なかったらしい。

どうして妖精は妖精足り得るのか、とかそう言う事は結局一切分からない、と言うのが結果であった。精々、血液や遺伝子は恐らく違うんじゃないか程度の事しか予想出来なかった。

結論として、

「艦娘が操る艦体に乗ることが出来るが提督にはなれない。血液や遺伝の分析が出来なかったら妖精である」

と言う何ともまあ、曖昧過ぎる結論が出された。

個人的には報告書を取り寄せて読んだ時に、これは本当に調査をしたのか……?と思ったぐらいだ。

そうすると妖精は何故提督になれないのか?と言う疑問が沸いてくるのだが沸いてくるそれに関しても一切分からず。

男女の区別は無く全員男性と来たもんだし、筋肉モリモリの男共が艦体に乗って込んで機関を動かし、機銃や砲を動かしたりと。

本人達にも聞いてみたらしいが全員声を揃えて分からないと言う回答しか得られなかった。

本人達も分かっているのだからしようがない。

まあ、他人に自分の体の仕組みを聞かれても確かに分からない、としか答えられないな。俺だってそうだ。

寧ろ聞くのが馬鹿々々しい。

艦娘についても同じで、身体構造は普通に女性と変わらない。

見た目も一般の女性そのもの。まあ見た目は比べ物にならない美人だから多分、街中で見れば分かる。

艦娘に関しても内臓などは人間と変わらず、その他器官も変わらない。

勿論女性特有の臓器である、子宮と言われる臓器も存在している。

ただ人間の女性にある月経はどうしてだか存在していない。本人達は多分、無いと思うという曖昧な答えを返している。

と言うのも、そもそも子供を産めないとかそういう事ならば子宮など存在しているか?と言う話だ。

だが身体構造やホルモンなどの分泌などの関係を見る限り恐らく妊娠することも出産することも出来るのではないか、と検査をした人間は言ったらしい。

だがそんなこと実践しよう！なんて馬鹿はどこにも居ないので本当なのかどうなのか確かめることが一切出来ない。

まあ、男目線から言えば確かに美人揃いではあるが、手を出せるか？と聞かれるとしり込みする。

1人の女性として尊重しているし何よりも現有戦力、と言う事を考えるとそれは出来ない。

一応、艦娘が乗っていないなくても艦体を動かす事は出来るがその性能は落ちる。

そのまた逆、妖精無しの艦娘のみで艦体を動かす事は出来るが性能は落ちる。

うーむ、本当に考えれば考えるほどおかしい話だな。

それが解明出来れば多少なりとも戦力増強の手立てが見つかりそうではあるんだがなあ……

彼女達と、艦体は普通の軍艦と違って建造することが出来ない。

だから現状、一度沈んでしまえば終わり、普通の軍艦と同じと言う事だ。

いや、正確には普通の軍艦は量産が可能だが艦娘と艦体はかの大戦の時に戦った艦船だけと言う有様だ。

修理も妖精が行わなければならない。

輸送船は人間が建造出来るし妖精が操る事もあるが、艦娘が存在している神州丸などを除いて輸送船には艦娘が存在していないのだ。

だから人間も乗れる。これが大きな違いだろう。

一応、101号型輸送艦、と名前は付いているがただ単にそっくりそのまま設計図を流用して建造しているからに過ぎない。

多少、対空火器などの増設と言った変更点はあるが船体は人間が建造し、武装は妖精達が作ったものだから効果がある。

これも可笑しい話なのだが、かの大戦で戦い建造した艦船と同じ船体にしか妖精の武器は搭載出来ないと言う制約がある。

簡単に言えばイージス艦に25mm機銃を搭載する事は出来ないし原子力空母に烈風などを搭載することは出来ない。

そして、最後に人類が追い詰められた原因。

これが一番大きいのだが、深海棲艦、妖精、艦娘、艦体全てに対してミサイルなどは一切効果が無い。

妖精が製造し、操る武器でなければ効果は無く、そして更に艦娘が居る事で十全な性能を発揮することが出来る。

航空機相手であれば多少の効果は見込めるが撃墜には至らない。

だからこそ人類はここまで追い詰められているのだ。

寧ろ、最初の1年を良く深海棲艦の攻撃を凌いだものだ。

まあそれは置いておこう。

丁度今は秘書艦である那智がいるから聞いてみるか……

「那智、聞きたいことがあるんだが良いか？」

「ん、どうした？」

「いやな、ふと君達はどうかやって出現したりしているのだ？と思ってな。報告書を読んだが全員が全員、海域に唐突に現れたとしか書いて無くてな。気になったんだが」

「ふむ、私達の出現原因はなんなのか、と言う事か」

「ああ、話せないとか話したくないと言うのなら別に構わないんだがな。もしかすると戦力増強の手立てにならないか？と思ってるな」

「そう言う事ならば構わない。茶を入れるから少し待ってくれ」

「ん、すまないな」

那智は空になった俺の湯呑を持ってお茶を入れてくれる。

これが金剛だと紅茶、摩耶だとコーヒーになる。

紅茶は緑茶と生産方法が違うだけで日本国内でも製造されている。

まあ民間に流通しているものが殆どなので買えなくもない。ただ、平時よりもずっと高くなっている。

コーヒーも日本国内で生産されている代用コーヒーだ。

俺に支給されているコーヒーは頼み込んで仕事用にカフェインを多く含んだやつだ。

この代用コーヒーも民間に流通しているので買える。が、やはり値段は平時と比べるとずっと高い。

殆ど俺も要求しないが、本当に仕事が大忙しな時、それこそ倒れる

前はよく飲んでいた。そうでもしないと意識を保っていられなかったからな。

そして、お茶を入れ終えて俺用に水を少しいれて温くしてくれたものを渡してくれる。

有難い。猫舌だから熱いままだと飲めないんでな。

……俺、彼女達艦娘に猫舌だつて話した記憶無いんだがどうして知られているんだろうか？いや、それは別に構わないんだが。

那智は椅子を執務机の前に持つてくるとそこに腰を下ろして対面する形になった。

そして話し始めた。

「さて、私達の出現原因はなんなのか、と言うことだがはつきり言おう。私達にも分からないと断言出来る」

「その根拠は？」

「まず、私の記憶は海の上で艦体とだけ漂っていた所から始まっている。それ以前の記憶は一切無い。と言つてもその時の事は私しか知らないし、艦には妖精は1人も乗つていなかったから証明出来る存在は居ないが」

「いや、信じよう。それで？」

「報告書に書かれていないか？海域奪還、もしくは攻略成功後に艦娘とその艦体が出現したと。まあ例外もあるが9割9分以上はそうだな」

那智はそう言うが報告書にはそんなこと書かれていなかったぞ？

どういうことだ？

幾ら記憶を掘り返してもそんな記述はされていなかった筈だ。

今日までの出来事が鮮烈過ぎて覚えていないだけかもしれないが、確かそんな記述は成されていなかった。

「……いや、そんな事は書かれていなかったと思う」

「ふむ、おかしいな……私は確かに書いた筈だが……まあ、いい。それでだな、私達は何処かの海域や島を奪還した際に現れる事が殆どなんだ。実際私もそうだった。私は確か、初期のフィリピン奪還が成功した後だな。ルソン湾の丁度私があの大戦の時に戦没した辺りで」

「ふむ……」

話を纏めると、だ。

・艦娘とその艦体は彼女達自身にもどうやって現れるのか分からない。
い。

・現れた時以前の記憶は無く、現れた当初は妖精を1人も載せていない状態である。

・海域奪還、もしくは攻略成功した時に現れる事が殆どである。
これを考えると、どうやら運試し的な要素があるのか。

必ずしも現れると言う事では無い。それならば沖繩奪還が成功した時に艦娘と艦体が現れなかったと言う事にも領ける。

「那智、同じ艦娘と艦体が現れたことはあるか？」

「いや、そんな話は一切聞いたことが無いな。少なくとも日本に関してはそのような報告は無い筈だ」

「ふむ、そうなる存在していない艦に限り現れると言う事だな……」
「そうなる。これ以降どうなるかは分からないがな」

那智はそう言うと言を組んでお茶を飲むとふう、と一息吐いた。
なんかやたらと色気があるが、気のせいかな。

俺は腕を組みながら天井を仰いだ。

色々と考えてみるがやはり、これと言った結論は出る訳でも無く結局俺はこれについて俺が考えたところでどうにかなるものではないと諦めた。

それよりも、目の前の午後の分の仕事を片付けなくてはな。

でなければ今日は徹夜になってまた皆に怒られてしまう。目の前の那智も怒らせると怖いんでな。

「……ありがとう、那智。知らなかったことを知ることが出来た」
「ん、役に立てたなら何よりだ」

那智に礼を言った。

それに対して那智はふっと笑って椅子を戻して、秘書艦用の机に戻った。

うーむ、聞いたのは良いが殊更謎が深まっただけだったな。

いやはや、結局戦力増強に繋がる情報は何も得られず、か。

駄目なものはとつと諦めると言う訳ではないが現状では考えるだけ無駄の様だな。

それよりも今ある艦隊の1隻1隻をどうやって強化するかと言う事を考えた方が建設的だな。

しかしながら今からでは流石に南方方面奪還作戦に間に合わないので終わってからになるが、出来る事と言えば対空火器の増設くらいだ。

駆逐艦などであれば同時に対潜装備を増設するぐらいか。

戦艦の主砲を全て41cm砲に換装することは出来ないしな。砲塔旋回リングの大きさがどうやったって合わないのだ。

そりや金剛に41cm砲を搭載出来れば大幅な戦力向上になるだろうがそれを実行に移すにはそもそも41cm砲の設計をそっくりそのまま変更しなければならぬ。

大幅に小型化しなければ搭載するのは夢のまた夢だ。

それか金剛の方を大規模に改装する必要がある。

主砲を搭載している場所の穴を大きくする必要がかなり、ギリギリになる。なんなら搭載場所の装甲を全て取っ払う必要すらあるかもしれない。

そんなことをすれば金剛は1年は戦線離脱を余儀なくされる。

そんなこと出来るわけがない。

主砲などは据え置きで対空砲や対空機銃、対空機関砲を増やすぐらいしか戦艦には改装の余地は無さそうだ。

それかカタパルトを搭載している場所があるので、カタパルトと飛行甲板を全て外してそこに対空機銃か対空機関砲を搭載する事も出来るだろう。だがそうなると弾着観測が出来なくなり主砲での砲撃が困難になる。

恐らくこの改装はやらないだろうな。

そこまでの大改装を施せるだけの期間は無いので置いておこう。

今更、作戦が迫っているので出来ないから幾ら言ってもしょうがない。

作戦準備は、前述の通り問題無く進んでおり、2か月後の作戦実施にまで問題無く終わる。

瀬戸内海のあちこちで妖精達が忙しく動き回り準備に奔走している。

そして俺は彼らから上がってくる書類を読んで、良ければ判子とサインを書き込み認可をする。

他にも様々な指令書を書いてあちこちの工廠やドックに送ったりと、とてもではないが1人で捌き切れる量ではない。那智は書類を分別したり、俺が見る前に一度目を通したりと忙しくしている。

うーむ、これならば秘書艦をもう1人ぐらい追加しても良いかもしれないな。これほどまでに業務量が多すぎると俺と秘書艦1人だけではキツイ。

真面目に検討しなければな。

俺は構わないが、秘書艦に就いた彼女らに無理をさせたくない。

なんなら俺1人で全部やって、皆には訓練に集中してもらおうと言う形を取っても良いのだがそうになると、また皆から休め休めと怒られる。

ならば我慢するしかない。

とにかく、各方面へ送るための書類を作成したりと大忙しだ。

人員、資材、機材の各種補充要請から何から何まで俺に送られてくる。

元々、艦の修理、改装は西村中将、航空隊などは黒川中将、補充などは広野中将が担当して分担されているのだが、面倒なことにそれらは一度俺に

「ごうごうごういう事があって、艦を修理します。許可を下さい」

「あれこれそういう理由があって艦を改装します。許可を下さい」

「ごうごうあれこれ理由があって物資が不足しています。補給を申請します」

と一度、妖精達は書類を作成し、それを俺に持って来て俺はそれには許可を出して更に西村中将、黒川中将達に送って許可を貰って、更に市木大将からの許可を貰ってから漸く補給や修理、改装に至る。

まあ緊急性を要する場合は俺の判断などで指示を出し、西村中将達を通さなくても出来るがそうでない場合は上記の様に手順を踏まなければならぬ。

しかも前述の通り、前線指揮官が俺なので特に海軍は全ての書類を一度俺に送らなければならぬと言う遠回りで面倒なやり方になっている。

しかもそこに陸軍の各師団や飛行戦隊などのものも入ってくる。

俺は海軍だけでなく陸軍にもそれぞれ書類を送って受け取ってとやり取りをしなければならない。

多分、仕事量で言えば俺が一番断凸で多いのだ。

だが文句は言っていられない。

俺が一日仕事を休めが書類は市木大将に渡されるまでに4日滞り、全体が遅れが生じるのだ。だから休暇は要らんと言っているのだ。

毎日ちゃんと寝ているんだから構わんだろうに。

と思うが声に出しては絶対にいけない。

そんな風に作戦開始日までを忙しく働くのだった。

第24話

2か月後。

漸く南方方面攻略作戦の実施日2日前を迎えた。

既に全ての準備は終わり、あとは出撃するだけとなった。

さて、俺はと言うと最後の種類仕事に勤しんでいた。

こんな大作戦の前だと言うのに書類仕事は尽きる事は無い。

各地の部隊の行動に支障を来たさない様に俺が今出来る事をやらねばならない。

もう幾つ目の書類の束を片付けただろうか？

次の束に手を掛けたその時執務室のドアが叩かれる。

相変わらずプレハブ執務室で、なんなら他の場所よりも居心地がずつと良い。まあ、自室が2階にあると言う事も関係しているんだろうが。

執務机も皆が作ってくれたものをそのまま使い続けているし、駆逐艦の艦娘達、特に小さい子達が訓練の合間を縫って花瓶に挿す花を取って来てくれる。

だから机の上には季節ごとに様々な花が挿されている。

「提督、隼鷹です。入っていいかい？」

ドアを叩いたのは隼鷹だった。

「入れ。……なんだお前達、そんな勢揃いして。どうした、何か緊急の要件か？」

顔を上げて見ると、そこには隼鷹だけでなく那智、飛龍と蒼龍の姿もあった。

4人が揃ってここに来るなんてどうかしたのか？

「いやいや、こんな時までお仕事を頑張っている提督にちよつとばかり息抜きを、と思つてねー」

そう言つて隼鷹が取り出したのは日本酒の酒瓶だった。

……まさかここで飲む気じゃなからうな？

「そうだぞ、仕事熱心なのは良い事だが提督は働き過ぎだ」

「だがな、また何カ月も帰って来れないかもしれないんだ、出来るだけ減らしておかないと……」

「それで、私達や妖精達には半休を出して自分はお仕事って？提督、この前私達が言った事忘れちゃった？」

「い、いや忘れたわけでは無いがな？」

皆にそう詰め寄られて俺はどうするかとしどろもどろになりながら答える。

く、原田大佐が居てくれれば味方して貰えそうだったんだが……いや、彼も休めと言ってくる側だった。

「いいじゃないか、少しばかり私達に付き合ってくれ」

那智にそう言われて、多分俺が頷くまで皆は引き下がらないと言う事を悟った。

「はあ……分かった。1時間だけだぞ……。流石に執務室で飲むわけには行かないから俺の自室で構わないな？」

「ああ、それで構わない」

「書類を片付けるから少しだけ待っていてくれ」
しょうがない。

こうなつては取り敢えず彼女達に一度、付き合えば満足してくれるだろう。

走すれば仕事に戻れるだろう。

自室に戻って一応、汚さない様に制服の上衣を脱いでハンガーにかける。

「適当に座ってくれ。今コップを出すから」

そう言つて人数分のコップを取り出して渡していくと、隼鷹が言った。

「そんじゃまあ、提督、あの時の約束の日本酒出してくれよ！」

「な、お前覚えていたのか」

「当ったり前じゃん！ほらほら、早く出しなつて」

「分かった分かった、落ち着け。全く……」

隼鷹め、覚えていたのか全く……

一応、これ市木大將達に貰った物なんだがなあ……

まあ、いつ飲めるか分からなかったから良いか。

4本ある日本酒を持って行く。

これだけあれば流石に全部飲ませれば潰れてくれるか？

そうすれば仕事に戻れる。

「おっほー！いいやつ揃ってんねー!!」

「わかったから少し静かにしろ、全く。好きに飲んでくれ」

「何を言っているんだ？提督、ここに座れ」

「ん？何故真ん中なんだ。別に端でも構わないだろう」

「いや、そう言っただけで逃げられては敵わないからな、一応休息と言う意味

も含めているんだ」

「いやそう言ってもな、仕事が残っているから……」

「だあああ!!はつきり言わせてもらうけど提督、アンタ本当に働きす

ぎなんだって！休暇返上で提督もう1カ月半も働き詰めじゃんか！

一応言つとくけどアタシ達夜中にこっそり起きて仕事やってんの

知ってんだからね!!」

「なっ!?!何故ばれた!?!」

「提督、執務機の電気を付けてたら流石に誰だって分かるよ」

「ばれない様にしていたんだが……」

「そう言う訳で今日は提督に酒を飲んで眠って貰うぞ」

「いや、それだと……」

「提督、私達に手伝って、って言えば良いじゃん。なんで言わないの

？」

「まあ私達には訓練に集中して欲しいから、って言う理由なんだろう

けどさ、前にも言ったけど提督が倒れちゃったらそれこそ本末転倒な

んだよ？」

4人は口々に言う。

まあ、確かにここ1カ月半は色々大詰めだったから休日は返上していたし、バレない様に（いやばれていたが）夜中に起きて書類を片付けていた。

4人の目を見る限り、これは俺が折れなければ駄目そうだ。

「はあ……分かった。今日は付き合おう」

「そう来なくっちゃーそんじやグラスに注いで乾杯と行こう！」

結局根負けした俺は4人に付き合うことにした。

隼鷹は何故そんなにテンションが高いのか不思議だがまあいい。

その言葉を受けてそれぞれグラスに日本酒を注ぐ。

「」「乾杯」「」

そして全員でグラスを鳴らす。

正直、俺は今の今まで酒を飲んだことが無かった。

既に成人をこの世界で迎えてから既に何年も経っており25歳になつているが毎日毎日それどころでは無かったのな、貰った日本酒も仕舞い込んだままだった。

仕事優先の生活になつてしまつているので流石に自分でも不味いとはおもつているのだがどうもこの生活から抜け出せないでいる。

それから5人で飲み明かした。

隼鷹は確かに鳳翔が言つていた通り酒が入ると駄目人間になつていた。

酔つ払つて俺に絡んで来て、まあ色々身の上話をして同情されてやたらと優しくなつたり、今の今まで飲まず吸わずで生きてきたと言つたら真顔で怒られた。

結局、俺は初めての酒と言う事もあつて早々に潰れてしまった。

と言うか隼鷹と那智、酒に強すぎる。

楽しかったと言えば楽しかった。

出来れば次は平和になつてから他の皆も加えて飲んでみたいものだ。

翌朝、変わらず普段通りの時刻に起床し、俺の自室でだらしない恰好で眠っている4人を起こし朝食を済ませて早速仕事に取り掛かつ

た。

明日の2100の出航に向けて最終準備段階だ。

止まっていた機関部に火を入れる。戦艦や空母、巨艦であればあるほどに機関部を暖めるのに時間が掛かる。

だから遅くとも12時間前には缶に火を入れておかなければならない。

戦艦組と空母組は既にその作業を開始して暖め始めている。

出航前に最後に、妖精達には半舷上陸、と言っても数時間だけだが。これを許可したのは、今回の作戦で多数の妖精達が戦死するだろうからだ。

余り言いたくはないが最後になるかもしれない、と言う事で昨日、各人5時間ずつ上陸を許している。

そして、艦隊が出航する時刻、2100になった。

俺が座上するのは飛龍。

「提督、出航時刻です」

「ああ」

飛龍の艦橋で、この作戦一番最初の命令を出した。

「艦隊、抜錨。これより南方方面攻略作戦を開始する」

その指示が各艦に伝達されると、錨を巻き上げていく。

そして暖まっている機関を動かし始める。

艦隊は豊後水道に向けて微速前進。

前路哨戒として第3航空戦隊が前進。それに続いて第1、第2航空戦隊が続く。

豊後水道を抜けて、宮崎県都井岬沖30kmで前路哨戒に出ていた第3航空戦隊と合流。

種子島沖に差し掛かった時に上陸部隊輸送船団と護衛艦隊が出航。

上陸部隊輸送船団と護衛艦隊は第1機動艦隊の後方110海里(約200km)を進む。

どちらの艦隊も無電封止中であり、緊急事態でなければそれが破られる事は無い。

第1、第2潜水艦隊は既に20日前に出航して南方方面海域に進出、敵艦隊の動向を探ると共に機会があれば敵艦隊を雷撃するように言っている。

南方方面まではだいたい15〜20日程度で到着出来る。

だが敵艦隊の迎撃を受けるのは恐らく呉とシンガポールの凡そ中間地点か、それよりも少し手前のバシー海峡を超えた辺りかその手前だと思われる。

「提督、潜水艦隊からの暗号文です」

「なにかあったか」

『我伊168。敵艦隊リング泊地出航ノ兆シアリ。空母12隻他随伴艦多数。戦艦12ト軽母又級3ノ存在確認出来ズ。注意サレタシ。2314』

喜界島を過ぎた辺りで潜水艦隊から報告の暗号文が送られてきた。

情報を掴んでいるのは我々だけでは無い様だ。当たり前と言えは当たり前なのだが……

「敵艦隊も我々の動向を察知してか動き出したようです。どうしますか？」

「いや、敵の空母は動向が掴めているから構わない。問題は戦艦12隻、又級3隻とその随伴艦の動向が掴めていない事だ」

俺が今言ったように、確かに空母も十分に脅威であるがまだ動向が掴めているから問題は無い。いや、あるにはあるが俺が言いたい問題とは別の意味での問題だ。

数日前まで確認されていた敵戦艦が丸々何処かへ消えた、と言う事の方が問題なのだ。これがただ単に別の方面へ転用された、とかであるならば相手取らなければならぬのは空母のみになるので寧ろ好

都合だが、それ以外の意図で何処かに行ったと言うのであればそれは大問題だ。

「本土への直接砲撃ならばまだ良いほう。想定出来る中で一番最悪だと言えるのは上陸船団を伴い沖繩へ向かったか、或いは我々の輸送船団の撃滅を狙っているのか……」

「本土直接砲撃ならば、各地の航空隊が共同しての逆に敵艦隊の撃滅が狙えます。ですが戦艦12隻に軽空母3隻を伴う艦隊が沖繩へ来襲すれば……」

「結果は目に見えています。攻撃戦力の一式陸攻と二式大艇の数は十分ですが主力である陸軍の各飛行戦隊は洋上航法になれておらず、よしんば敵艦隊へ攻撃を仕掛けたとしても飛行場に戻れるかどうか……それに上陸船団の有無も重要です」

「我々の輸送船団を狙われる方がもっと問題だ。輸送船団の護衛には戦艦7隻しか就いていない。敵の1/2しか存在しておらず方が一砲撃戦にでもなれば負ける」

「航空戦力も負けていますし……」

「今の所、我々に動向を探る手段は無い。本土、沖繩、輸送船団に警戒するように送れ。奇襲を受けたらそれこそ洒落にならない」

「了解しました」

一応、そのように指示を出しておく。

ただ、何処に敵艦隊が来襲してもおかしくは無い。

一番可能性があるのは輸送船団への攻撃だが、我々が本土に居ない時を狙って沖繩を含む南西諸島を奪い返しに来るかもしれない。

だが、ここで立ち止まる訳には行かない。

日本の現状や、各種資源の備蓄量を考えればこのまま進むしかない。

最悪、輸送船団の戦艦を全て敵艦隊の足止めとして沈められようとも、だ。心苦しいが、そうしなければならぬ状況に近づいているのは確かだ。

すると、潜入させている陸軍部隊の内、カリマンタン島に潜入する班から通報が入った。

『敵艦隊、空母艦隊ヲ2分ス。針路ハ南シナ海ヲ進ム艦隊トパラワン島、カリマンタン島間ヲ通過スル艦隊ニ分カレル。0612』

どうやら敵艦隊は空母艦隊を2つに分けたらしい。

前者の動向は、恐らく南シナ海をそのままバシー海峡の方へ向かってくるだろうと思われる。

だが後者の動向は全く分からなくなる。

セレベス島方面へ出て、近海を航行してくればそこにいる班が報告を上げてくる筈だが、流石に島の近海を航行しはしないだろう。

しかもどこに現れるのか全く分からなくなる。

と言うのも後者が進んだ方向にはスールー海を隔ててフィリピンがあり、そこにはフィリピン海に出る事の出来る水道や海峡が点在するのだ。

しかもセレベス海へ出てしまえばより一層動向が掴めなくなる。

だが、現状どうしようもない。

そのまま艦隊は南方方面へ向けて針路を取り続けた。

2日後、艦隊はバシー海峡より東に300海里(約560km)の地点まで艦隊は進んだ。

輸送船団は現在、第1機動艦隊より北東へ110海里を航行している。

第1機動艦隊各艦からは特に異常、潜水艦発見などの報告は上がって来ておらずそれは輸送船団も同様だ。

「偵察機を出せるか？」

「可能です」

「ならば18方位に1機ずつ、2段索敵を行う。アークロイヤルを除いた各空母から4機ずつ出して1500kmまで前進したら折り返させろ」

「了解しました」

俺は敵空母艦隊の迎撃をバシー海峡付近で受けると考えていたの
でここで索敵を出す事にした。

彩雲の航続距離は落下式増槽を装備していれば5308km。
往復3000kmであれば問題無く行える。

何故全方位へ偵察機を出したのかと言うと、一応、敵戦艦部隊が居
ないかと言う事を確認する為と、敵は何処から現れるか本当に分から
ないからだ。

警戒しておくに越したことは無い。

俺の出した指示に従い、格納庫内から出撃準備を整えた彩雲が飛行
甲板に上げられ、露天繫止している艦の彩雲は固定してあるワイヤー
などを外されて主翼を広げる。

エンジンの暖機運転が終わり、彩雲搭乗員が駆けて乗り込んでい
く。

「提督、発艦準備完了しました」

「艦首風上に立て」

「艦首風上に立て、宜候」

全空母が艦首を風上に向けて合成風力を作り出す。

甲板上にはごうごうと音を立てて風が吹く。

「発艦始め」

「了解。発艦始め、繰り返す発艦始め」

その号令が出ると発艦始めの合図である旗が振られる。

すると彩雲が飛行甲板の上を走り出す。

「総員、帽振れ！」

彩雲が大きなエンジンを響かせながら飛び立った。

彩雲の巡航速度は388km/h。

この巡航速度で凡そ4時間後には1500km先の限界線に到着
するはずだ。

発艦時刻は0900。何かあった場合、0100までには何らかの
報告が入るであろう。

それまで我々艦隊はバシー海峡方向へ艦隊を進める。

3時間後、彩雲から報告があつた。

『我、彩雲4号機。南沙諸島ヨリ北ニ50海里ニテ敵艦隊発見ス。空母ヲ級3、又級3、巡洋艦5。他随伴艦多数。速力ハ凡ソ15ノット。戦艦ハ見エズ。1216』

やはり敵艦隊は出てきている。間違いない。

だが距離的にはまだまだ双方共に攻撃隊を出せる距離ではない。

だが敵艦隊の空母の数が明らかに少ない。

恐らく報告にあつた通り、別行動をとっているんだろう。

敵は、戦艦主力の火力艦隊と空母を主力とする打撃艦隊に分けて行動している。

そして更に打撃艦隊を分けている。恐らく南沙諸島、南シナ海方面ではないどこか、フィリピン方面に敵空母を含む艦隊が要る筈。

となれば、それを警戒しなければならぬが現状、彩雲が限界線に到達するまであと1時間はある。

これ以外の方向へ放つた彩雲の報告を待つしかない。

とにかく、先に発見した敵艦隊の動向は何が何でも掴んでおかなければならない。

だが、潜水艦隊は速力の関係上、振り切られてしまっているしそうなるに彩雲だけが頼りなのだが敵艦隊を発見した彩雲は既に折り返してこちらに戻ってきている。

そうなれば、追加で彩雲を送り出すしかない。だが既に敵艦隊は彩雲を察知して迎撃戦闘機を上げて守りを厚くしているに違いない。

そうなるに彩雲の危険性が増す。

危険性、と言うのは偵察に出した彩雲が当然撃墜されると言う事だ。

さて、敵艦隊の位置からすると、ほぼ間違はなくバシー海峡を目指している。このまま進めば遠からずこの空母艦隊と戦闘になる。

問題は、やはりまだ発見できていない敵空母艦隊のもう1つの方だ。

これが、先に発見している空母艦隊との戦闘中にでも横槍を入れてくることがあれば大惨事に成り兼ねない。

「どうするのが最善だと思う?」

「そうですね……まず現在発見している空母艦隊を第1群、未発見の艦隊を第2群、敵戦艦群を第3群としましょう。そして第1群ですが、まだ攻撃を受けると言う心配は無いので警戒するに留めておきます。今急ぐべきは第2群を発見する事が最優先事項かと」

「どちらかとの戦闘中に横やりを入れられては敵いませんから出来るだけ各個撃破を狙うべきです。幸いにも敵艦隊は2つどころか3つに艦隊を分けると言う愚策を犯してくれましたから願っても無い状況です。ですが我々は各個撃破を狙う事は出来ませんが同時に我々は2個空母艦隊を相手取らなければならないと言う事でもあります」
確かにその通りだ。

敵は1つの艦隊を3つの艦隊に分けると言う、兵力分散と言う名の愚策中の愚策を取ってくれた。

「ただ现阶段であれば第2群の敵空母を索敵しつつ、第1群を攻撃すれば宜しいかと。少なくとも第2群が我が艦載機の攻撃可能範囲である400海里内にはまだ入らない筈。それならば既に彩雲によって発見されている筈ですから。それならば第1群の攻撃に暫くは注力しても問題無いと判断します」

数的有利を持っているからか、それとも他に何か別の理由があるのか。

何故空母艦隊を2つに分けたのか、恐らくは我々第1機動艦隊を2方向からの挟撃を狙っていると見て間違い無い。

何故輸送船団に向かわない、と言えるのか。

と言うのも彼我の戦力差を考えると、どう考えても戦艦12隻に軽空母3隻だけで十分過ぎるからだ。

戦艦を比べると、輸送船団に張り付いている第4戦隊が長門以下7隻。

対して深海棲艦は12隻、それも全部16インチ砲（40cm砲）だ。

これだけでも魚雷を搭載出来る流星などを艦載機に含んでいない鳳翔と大鷹では対艦攻撃能力と言う点で余りにも不安が大きい。と言うよりも一切役に立たないと言い切れる。

そりゃ、ダメージを多少なりとも与えられることには変わらないが精々が艦上構造物を破壊するぐらい。主砲などの主兵装にダメージを与えられるとは到底、思えない。

空母戦力を見比べても、こちらは2隻で64機。

対して深海棲艦の空母は又級1隻で50機もの艦載機を保有するのだ。たった1隻でこちらと拮抗状態。

しかも1隻では無くそれが3隻もいるのだ、凡そ150機は下らないだろう。

それに鳳翔と大鷹の搭載機は全て零戦で機体の性能差で完全に負けている。優勢なのは搭乗員の腕と格闘性能や旋回性能ぐらい。速度性能や上昇性能で完全に負けているから一撃離脱を仕掛けられては手も足も出ないだろう。

そうなれば敵戦闘機との戦いに精一杯となった零戦隊は、敵の艦攻や艦爆に手出しが出来なくなる。

これだけ護衛艦隊と敵の戦艦群の戦力差が懸離れているのだ、そこに更に正規空母を含む艦隊を分けてまで輸送船団に攻撃をする必要は無い。

それこそ、「牛刀で鶏を割く」と言う諺そのもの、いやそれ以上に戦力の過剰投入と言う物だ。

ならば空母艦隊で我々第1機動艦隊を叩いて、戦艦群で輸送船団を、とこのぐらいの役割分担で良からう。

何れにせよ、深海棲艦の奴らは慢心していると言える。

ならば我々はその慢心故に出来る隙を突く。

敵は12隻でヲ級が6隻、ヌ級が6隻の半々ずつ。それを2つに分けている。

航空戦力差は、深海棲艦約900〜950機。

こちらは790機。最大で110〜160機程の差だ。

そのまま敵空母が12隻全て行動を共にしていれば丸々空母1隻分の差があるが、これを半分に分けると450〜470機にまで減る。

こちらが少なくとも320〜340機、倍以上の有利となる。

そう、15隻で最大1200機近い深海棲艦の空母艦載機は兵力の分散と言う手段を取ったせいで絶対的な数的有利を自分から捨ててしまったのだ。

この現状を見て余程の愚か者ではない限り、「こちららも戦力を2つに分けよう」だとか「2つの艦隊を同時に相手取ろう」なんぞ考えはしない。

普通に考えれば、どう考えても各個撃破を狙いに行くべきなのだ。となれば、どうにかして各個撃破を成功させる事が出来ればこちらに圧倒的有利になり、勿論戦況もこちら側に有利に働くであろう。

しかも、相手は空母15隻を二つに分けたのでは無くヌ級3隻を戦艦群に引き抜いて、更に2つに分けたのだから十分以上にやれる。

流星にまだ勝った気にはなれないが、丸々15隻の空母と12隻の戦艦との正面对決が無くなったと考えれば少しばかり心に余裕が出て来る。

ただ、やはり気掛かりなのは戦艦12隻の行方だ。

先程も言ったが、恐らく輸送船団の方へ向かったのではないかと予想される。

実際、山田参謀長達艦隊司令部の面々も飛龍以下艦長達も同様の意見だ。

だが、何が気掛かりなのか、と言うと、

『その動向を一切掴めない』

『輸送船団の撃滅を狙うにしても過剰戦力である事』

大体、この2つだ。

軽空母を3隻も引き抜くと言う時点で怪しい。

こちらの戦力を確実とは行かずともそれなりに把握していれば、又級を2隻程度でも多いぐらいなのだ。

確かに戦艦の数は輸送船団に長門以下7隻が張り付いてるから送り込むのは納得できる。だがそこまで多い数を殴りこませようとするか？

……駄目だ、幾ら考えても予想が出来ない。

しようがない、兎に角目の前の空母艦隊の撃破を優先すべきだ。

第3群に気を取られて敵空母に先手を取られる事だけは避けたい。

「攻撃隊の発艦は何時にすべきか？」

「そうですね……どれだけ急いで距離を詰めても、今日中の攻撃は不可能だと考えます。まだ距離があるので明日の明朝直ぐに発艦させれば先手とは行かずとも敵艦隊と同時刻に発艦させる事が出来るでしょう」

「ふむ。ならばそれで行こう。各空母に準備を進めるように言ってくれ。明朝、日が出たら即座に発艦開始出来るようになる」

「は、了解しました」

「それと、今すぐに彩雲の発艦準備を行ってくれ。出来るだけ敵艦隊の情報を集める。多少危険を冒してでも今は出来るだけ情報を集めて明日の攻撃に備えるのだ」

「了解しました。機数はどうされますか？」

「敵艦隊方向へ5機、放射線状に15度の角度ずつで頼む恐らくこれで十分に索敵可能な筈だ」

「了解しました。それでは準備を進めます」

指示を出して、遅めの昼食を皆で摂った。

結局、ファイリピン方面へ偵察に出た彩雲は、第2群を発見する事は出来なかった。

翌朝、追加で発艦させた彩雲の情報を元に敵艦隊の予想針路へ向け
て攻撃隊の発艦を行う。

一応、彩雲を先に発艦させて索敵を行いつつ誘導機としての役割も
兼ねている。

夜明けより50分前に彩雲5機を昨日と同じく放射線状に15度
の角度で放った。

更に、5機を放った方向を除き、18方位へ彩雲を飛ばした。昨日
と同じく1500kmで折り返してくる様に言っている。もし何か
敵艦隊に関する情報が、得られれば即座に報告が入るだろう。

その1時間後、日の出より10分後に攻撃隊の発艦を開始。
攻撃兵力は以下の通り。

第一次攻撃隊

第一波攻撃隊

飛龍

烈風12機 流星16機 (爆装8機) 雷装8機 計28機

蒼龍

烈風12機 流星16機 (爆装8機) 雷装8機 計28機

瑞鶴

烈風12機 流星20機 (爆装8機) 雷装12機 計32機

隼鷹

烈風12機 流星16機 (爆装8機) 雷装8機 計28機

飛鷹

烈風12機 流星16機 (爆装8機) 雷装8機 計28機

天城

烈風12機 流星16機 (爆装8機) 雷装8機 計28機

阿蘇

烈風12機 流星16機 (爆装8機) 雷装8機 計28機

烈風12機 流星16機（爆装8機 雷装8機） 計28機
大鳳

烈風12機 流星16機（爆装8機 雷装8機） 計28機
グラーフ・ツエツペリン

烈風12機 流星8機（爆装無し 雷装8機） 計20機

アークロイヤル

烈風12機 流星12機（爆装無し 雷装12機） 計24機

烈風120機

流星152機（爆装64機 雷装88機）

計272機

第一波攻撃隊は以上の様になった。

やはり敵の大型艦を仕留めなければならぬので必然的に魚雷装備の流星が多くなる。これだけの機数を揃えての攻撃だから3割、とは言わないが2割の魚雷命中率を期待出来るだろう。

余り言いたくはないが、魚雷の命中率に関しては運の要素も大きく絡んでくるのではないかと俺自身は思っている。

確かに訓練も超が付くほどに重要だが、それに敵艦がどうやって動くのかとかの運も絡んでの命中率だと思っている。

だがその運を向上させるのは搭乗員1人1人の弛まぬ訓練があつてこそでもあるのだ。

極論を言ってしまうえばそんなもの、運が良ければどれだけ下手糞でもともと飛行機も飛ばせないような新米搭乗員ですら命中させられるが、それでも訓練をしているのとしていないのでは雲泥の差がある。

なんなら月と鼈ほどもある、と言ってしまったてもいいかもしれない。

まあそれは置いておいてだ。

次に第二波攻撃隊について。

第二波攻撃隊

飛龍

烈風 1 2 機 流星 1 6 機 (爆装 8 機) 雷装 8 機 計 2 8 機

蒼龍

烈風 1 2 機 流星 1 6 機 (爆装 8 機) 雷装 8 機 計 2 8 機

瑞鶴

烈風 1 2 機 流星 2 4 機 (爆装 8 機) 雷装 1 6 機 計 3 2 機

隼鷹

烈風 1 2 機 流星 1 6 機 (爆装 8 機) 雷装 8 機 計 2 8 機

飛鷹

烈風 1 2 機 流星 1 6 機 (爆装 8 機) 雷装 8 機 計 2 8 機

天城

烈風 1 2 機 流星 2 0 機 (爆装 8 機) 雷装 1 2 機 計 3 2 機

阿蘇

烈風 1 2 機 流星 2 0 機 (爆装 8 機) 雷装 1 2 機 計 3 2 機

大鳳

烈風 1 2 機 流星 1 6 機 (爆装 8 機) 雷装 8 機 計 2 8 機

グラブ・ツェッペリン

烈風 1 2 機 流星 1 2 機 (爆装 4 機) 雷装 8 機 計 2 4 機

アークロイヤル

烈風 1 2 機 流星 1 2 機 (爆装 4 機) 雷装 8 機 計 2 4 機

烈風 1 2 0 機

流星 1 6 8 機 (爆装 7 2 機) 雷装 9 6 機

計 2 8 8 機

こちらにも雷装の流星が多いが理由は先に説明したとおりだ。

全体的に流星の数は第二波の方が多いが、理由としては第一波をと

にかく早く発艦させるために流星の数を削り第二波に回したのだ。

その他にも第一波の攻撃で陣形が乱れた敵艦隊へ第二波が突撃しより大きな戦果を、と言う意味もある。

流星にこれだけの機数を揃えれば、全空母撃沈とは行かなくとも4隻はやってくれるに違いない。

最悪沈めなくてもいい、空母の飛行甲板に50番を叩き込んで空母としての能力さえ奪ってくれればいいのだ。

それさえ成してくれば損傷した敵空母は留まり続けて遊兵となり撃沈されるのを待つか、インド洋方面かトラック、ニューカレドニア方面へ退避すると言う選択肢ぐらいしかない。

まあ、命中弾数によつては応急修理で戦線復帰される事もあるだろうが……

二波に渡る攻撃で敵艦隊へ向かう総機数は、

烈風240機

流星320機（爆装136機 雷装184機）

計560機

以上の様になる。

第一波の烈風は燃料が許す限り敵戦闘機を第二波攻撃隊の烈風と共に抑え続ける。

よつて燃料は多く搭載しての出撃となる。長ければ、第二波の烈風と20分は共に戦えるであろう。

艦隊防空には130機の烈風を残す。

烈風130機は、

飛龍隊、蒼龍隊、瑞鶴隊、隼鷹隊、飛鷹隊の13機づつ。

これを第1戦闘機群と呼ぶ。

天城隊、阿蘇隊、大鳳隊、グラーフ隊、アーク隊13機づつ。

これを第2戦闘機群と呼ぶ。

65機づつにそれぞれ分かれて敵機迎撃を行う。

まず最初に第1戦闘機群が敵戦闘機を抑えて後の第2戦闘機群が攻撃隊本体を叩く。

敵戦闘機の数によっては戦闘機を抑える烈風の数が上下するかもしれない。

瑞鶴は流星の数が8機余るが、飛行甲板の広さと発艦時刻の都合上致し方なかった。

その分、第二次攻撃隊が必要になったときに加わってもらおう予定だ。

大体の説明はこんなものだろうか。

敵艦隊との距離は約300海里（凡そ556km）なので流星の速度に合わせると約2時間前後で到達すると予想される。

彩雲は既に自慢の高速性能を生かして敵艦隊と接触し、報告をしてきたので約300海里の距離である、と分かっている。

この距離ならば燃料満載で、魚雷を抱いている流星であろうと余裕で往復、戦闘が可能だ。烈風も同様に往復と敵戦闘機との戦闘も十分に可能だ。

既に各空母の飛行甲板からは発艦が開始されていて飛龍も同様に飛行甲板に所狭しと並べられた、未だ発艦していない烈風と流星、そして搭乗員達がエンジン音を響かせながら発艦はまだなのか？早く飛び立たせろ！と、文句を言っているのではないかと錯覚する程に待ち侘びている。

順番つつ飛行甲板から、烈風、爆装の流星、雷装の流星と敵艦隊へ、その爆弾と魚雷を叩き込んでやろうと息巻いているかのように飛び立って行く。

そして、最後の魚雷を抱いた流星が飛行甲板を蹴って飛び立って行くのを、俺は敬礼をしながら見ていた。

どうか、敵艦隊を叩いて来てくれよ……

そう思いながら同時に、不可能であると分かっているながら全機が無事に帰投してくれる事を強く願った。

第25話

攻撃隊が発艦して、1時間ほど経った。

輸送船団は、一度沖縄の方へ退避させている。流石にそのまま第1機動艦隊に付いて来て敵戦艦の攻撃を食らったら堪らないから、せめて航空支援が受けられる沖縄本島近海に退避させたのだ。そこであれば鳳翔と大鷹の艦載機だけで敵艦隊の攻撃を凌ぐ必要が無くなる。

陸軍航空隊は洋上航法が余り得意ではないがこの際だから攻撃を仕掛けるとかになった場合は海軍の一式陸攻などに誘導して貰えば何とかなるだろう。

そんな中、対空電探に反応があった。

「対空電探に感あり！南西より敵機多数接近！数は凡そ180機！」

「提督、敵攻撃隊です。直掩戦闘機隊をすぐさま向かわせてそれ以外の烈風も向かわせましょう」

「勿論だ。戦闘機隊を迎撃に上げるぞ。準備急げ」

「はっ」

すると、格納庫内はにわか慌たしくなり始める。

既に銃弾、ガソリンを満載して即時発艦可能とはいえ、格納庫から飛行甲板に烈風を全機上げなければならぬのだから13機とは言えど、忙しくなる。

次々に飛行甲板に上げられて並べられていく烈風は、13機が揃うと直ぐに飛行甲板から飛び立って行く。

13機だから飛行甲板へ並べるのもそれほど手間取らず、多少間隔を広めに並べても十分に発艦は可能だ。10分で飛行甲板に並べられると搭乗員達がばっ、と自身の愛機に飛び付くと、ものの5分と経たずして全機が飛び去って行った。

この光景は、日々の訓練で洗練された一連の動作で、惚れ惚れする

ほどの物だが現実はどうさせてはくれない。

「電探に感あり！南西より敵機多数接近！数は凡そ180〜230！」

電探員が大きな声で報告するそれは、敵の第二波が接近していると
言う事に他ならない。

だが、戦闘機隊は既に敵第一波攻撃隊に向かって行ってしまっているし、今ここで第2戦闘機群を敵第二波攻撃隊に振り分けてしまつては第一波への攻撃が不十分になる。

手頃な所で攻撃を切り上げさせて第二波に向かわせるしか無いが彼らもそれは十分に承知しているだろう。

だから敵第二波攻撃隊接近中、と同時にその旨を伝えてやれば彼らは十分以上に働いてくれる。

「艦長、3航戦を退避させて戦闘機隊の収容に充てろ。空襲直後の我々で戦闘機隊を受け入れるのはリスクが高い」

「了解しました。即座に退避させます」

「それと瑞鶴の流星8機も3航戦に預けておけ。出来るだけ飛行甲板上や格納庫内の可燃物を減らしておきたいからな」

「はっ、承知いたしました。直ぐに指示を出します」

その指示を出してすぐに瑞鶴からは流星8機が飛び立って、3航戦は後方へ退避していく。

沖繩でやったやり方と同じだが単純故に敵に破られやすいが、効果も大きい。

このやり方ならば確実に2隻の空母が生き残れる。そうすれば、迎撃戦闘機隊130機を即座に収容して、再び迎撃に送り出す事も可能だ。

今更だが艦隊の陣形を記そう。

輪形陣で、中央に空母8隻、その周りを戦艦と重巡洋艦がぐるっと取り囲む形だ。

能代

秋月

照月

ポー

Z3

金剛

初月

鈴谷

瑞鶴

葛城

ザラ

陽炎

霧島

飛龍

蒼龍

リシュ

浦風

飛龍

蒼龍

リシュ

浦風

飛龍

蒼龍

リシュ

ビス

大鳳

阿蘇

テイ

若月

熊野

グラ

アー

アド

春雨

プリ

アード

村雨

春雨

プリ

アード

村雨

矢矧

時雨

響

隴

1 航戦、2 航戦の陣形は以上の様になっている。

基本は8隻の空母を中心に、回避運動が取れるように間隔を広めに取っている。空母同士とその周りそれぞれ500mの距離を開けており、1. 5 kmにもなる。

それ以外の戦艦や重巡、軽巡、駆逐艦は出来るだけ間隔を狭く取り、弾幕を張りやすくしている。

回避運動を取るのは空母8隻に絞って、あとは狙われた艦に限る、と言う事にした。

そうすれば陣形が必要以上に乱れる事も無いだろう、との意図からだがこれが良い方に転ぶか悪い方に転んで行くかは分からない。

宵月 満月

多摩
リット
隼鷹
ローマ
望月
飛鷹
古鷹
青葉
Z1
初雪 浦波

3航戦は以上の通りだ。

随分と守りが薄く感じるかもしれないが、随伴艦の数が少ないのだからしょうがない。

一応、敵攻撃隊は1航戦、2航戦で吸収するので3航戦には行かないと思われるが……

万が一もあるので戦艦はそのまま張り付けてある。
とにかく、これで敵攻撃隊を迎え撃つのだ。

戦闘機隊が敵攻撃隊と戦闘に入った。

敵戦闘機は凡そ60機程だから第1戦闘機群だけで十分に対処が可能だった。

そして肝心の攻撃機の数だが、雷撃機が70機前後、急降下爆撃機が50機程だそうで敵戦闘機の妨害も無く、機体後部から撃ち上げられる機銃にさえ気を付けて置けばなんて事は無いそうさ。

そして、敵攻撃隊を迎撃中の最中に偵察に放った彩雲から報告が入る。

『我彩雲5号機。ミンダナオ島、シアルガオ島沖135海里(250km)にて敵空母艦隊ヲ発見ス。空母ヲ級3、又級3、重巡4、他随伴艦多数。敵艦隊ハ北西方向ニ向ケテ航行中。警戒サレタシ。0834』

どうやら敵の第2群はセレベス海を抜けて遠回りをしているらしい。

どういう意図があつてなのかさっぱりだが、セレベス海を通つて来たとなると昨日の索敵ではそりや発見出来ない筈だ。

「第2群は未だ距離があるのでこれと言つて脅威には成り得ないと思われます。先ずは第1群を確実に叩きましょう」

「ああ、勿論だ。だが警戒をしておく事に越した事は無いからな。電探手、しっかりと見張つて置け」

「はっ、了解しました」

今の所、電探に他の反応は出ていない。

しかも距離がかなり離れているから、攻撃隊を飛ばしてくることも無いだろう。

第2群の速力の速さにもよるが、どれだけ早くとも昼過ぎ以降になつてからの敵攻撃隊の発艦となるだろう。

こちらと同じで昼を過ぎてからにならないければ攻撃隊を送り出す事は出来ないし、なんなら第1群の攻撃で流星を消耗してしまえば攻撃隊を送り出す事も出来なくなる。

どうなるか分からないが兎に角、第2群に対して1度だけでも良いから攻撃隊を送り出さなければならぬ。

でなければ作戦を続行出来ない。

今は、攻撃隊が戦果を挙げて更に無事に戻つて来てくれる事を祈るばかりだ。

—— side —— 西北 ——

今回初めて攻撃隊総隊長を任された。

原田大佐には、今まで通りにやればいいと言われたが……

そうこう考えているうちに、敵の迎撃戦闘機が上がって来た。数は……70〜80機程だ。

こちらの高度は4500mだが向こうは5000m以上の高度だ。高度有利は取られているが、すぐさま護衛に就いている烈風80機を差し向けて抑えに掛かる。

速度を上げた原田大佐以下が一斉に敵機に飛び付いていく。

瞬く間に敵戦闘機は格闘戦に引き摺り込まれて我々攻撃隊本体に手出しが出来ない。

この分なら、運が良ければ無傷で敵戦闘機の迎撃を切り抜けて敵艦隊を攻撃出来るだろう。

だがそうは行かなかった。

今日は、雲が幾らかあるのだが高度6000mに大きな雲の塊、入道雲があるのだが、敵戦闘機と護衛戦闘機隊が戦っている空域を避ける為に迂回してその下を通過しようとした時、雲の中に隠れていた敵戦闘機が20機ほど一気に急降下して来た。

慌てて回避するように指示を出そうとしたが間に合わず、一撃を受けて瞬く間に流星13機が撃墜されてしまった。

3機程が、煙を吐いて高度を落とし始めている。更には2機程が燃料タンクに被弾したのか燃料漏れを起こしている。

あの漏れ方ではそう長くは飛んでいられないだろう。良くて帰りの距離を4/1程度飛べるかどうか……

その敵機は我々の編隊の周りをグルグルと飛び回り、流星各機から機体後部に装備されている13mm機銃に当たらないように上手く飛んでいる。

その間に24機の流星が落とされてしまった。漸く烈風が敵戦闘機に食らい付いても敵戦闘機は烈風と戦うのではなく流星を執拗に狙ってくる。

敵戦闘機は全部で24機。烈風がそれを全て撃墜した時には流星は41機も撃墜された後だった。

敵戦闘機は我々の編隊の中に潜り込み、烈風が下手に攻撃出来ない

ように立ち回っていた。しかも敵戦闘機はどれを狙っても構わないのだから敵が有利だ。

「152機いた流星は102機にまで減っている。

「クソ、かなり手酷くやられたな……」

思わずそう呟いてしまった。

更に20分程進むと漸く敵艦隊が見えてきた。

「全機突撃隊形を打電！」

「了解！」

突撃隊形を組む様に全機に送ってから攻撃隊の振り分けを行う。

先ず、ヲ級3隻に対しては、飛龍、蒼龍、瑞鶴、隼鷹、飛鷹、天城隊がそれぞれ2隊ずつ攻撃に向かう。

残りの3隻のヲ級には阿蘇、大鳳、グラフ・ツエツペリン、アークロイヤル隊が担当する。

それを打電する。

「ト連送を送れ！全機攻撃開始、攻撃開始！」

ト連送を受信すると一斉に全機が突っ込んでいく。

雷撃隊は高度を落として、急降下爆撃隊は高度を上げる。

敵艦の対空砲は既に火を噴いて我々の周りに爆炎と共に黒煙を立てる。

更に接近すると、対空機関砲や対空機銃が一斉に放たれる。

「3機落とされました！」

「怯むな！進め！」

木下がそう声を上げるが振り向いてられない。

そのまま雷撃隊は突き進む。

敵空母との距離は既に5000を切っている。

敵空母に突き進む間も、何機かの流星が落とされる。

今、更に3機落とされた。

「距離2500！」

「まだまだ！まだ遠い！」

ヲ級は30ノット以上で疾走しており、そう簡単に当てられなさそうだ。

だがそんな泣き言は言っていられない。

「2000！」

「まだまだア！」

機体に、立て続けに敵の対空機銃が当たる音がする。

生暖かい感触が腕を伝う。

チラリと見てみれば右腕が千切れかかってだらんと垂れ下がっている。

翼を見てみれば火を噴いている。

もう駄目だな。機体は持たないし帰れたとしても二度と航空機に乗る事は出来ないだろう。

腹を括って後ろに乗っている木下に大声で怒鳴る。

「木下ア！このまま突っ込むぞ！」

だが返答は無かった。

後ろを振り向くと胸部と腹部に対空機銃弾の直撃を受けて木下は既に事切れていた。

畜生！ならこのまま突っ込んでやる！

男が命の捨て場所を見誤ってどうする！捨てるべき時に捨てないでどうする！

「どんどん敵艦が近づいてくる。

1000。

800。

600。

500mを切ったところで投下ボタンを押す。機体がふわりと浮き上がる感覚がした。

すぐさま操縦桿を押し倒して低高度を維持したまま、ヲ級目指して

突っ込む。

なんなら艦橋に突っ込んでやろう。
そうすれば暫くは反応が鈍くなる。

————— 皆、あとは頼んだ…… —————

少し高度を上げて調整しながら艦橋に突っ込んだ。

————— side out —————

敵攻撃隊が迎撃に出た烈風の攻撃をすり抜けて凡そ50機が突っ込んでくる。

迎撃に出た烈風全機はそのまま、敵第二波攻撃隊に向かって行った。

報告では烈風は17機が撃墜されたが被害はそれだけで留まっている。

「雷撃機21、急降下爆撃機32！雷撃機は降下！」

見張り員が次々と報告を上げてくる。

既に雷撃機は低高度へ降りてきて突っ込んできているし、急降下爆撃機も5000mの高度を進んできている。

敵攻撃隊に狙われたのは、大鳳と飛龍だった。

中央を航行していて、大鳳は他の艦よりも巨大で目立つからだろう。

大鳳は、全長260.60mと飛龍よりも33.27mも長い。瑞鶴よりも3.1m長いと言われればピンとこないだろうが、少なくとも現在の空母戦力の中では動かせない信濃を除いて最大級となる。

更に言えば飛行甲板の長さも40.6mも飛龍より長く、しかも飛龍や瑞鶴が木製の板を張ってある甲板であるのに対して、飛行甲板に700mの高度から500kg爆弾の急降下爆撃に耐えられるように装甲が施されており、2種類の装甲を合計95mm施されている。しかも木製甲板では無く、ラテックス（ゴム）を張っているのが灰色のような感じになっているから洋上では物凄く目立つ。

装甲に関しては、主要各部でそれぞれ違ってくるが、16mm高張鋼と32mmのCNC鋼板による水平防御、更には160mm×55mmのCNC鋼板による垂直装甲が施されている。

しかもこれだけでは無く魚雷に対する防御も厚く、重油層、空気層及び装甲を組み合わせた5枚4層構造で守られておりTNT換算300kgの炸薬量を持つ魚雷を防御できる。

だが、深海棲艦の魚雷はこれよりも幾分か強力で、実際に鹵獲などをしたわけでは無いが最低でもTNT換算で400kgの炸薬を有しているから万全とは言えない。

だがそれでも装甲空母の名に恥じない防御力を誇っていると言える。だからこそ巨艦で、目立って敵に狙われやすい。

飛龍が狙われた理由は艦隊旗艦で、更に俺が乗っているからだろう。

2隻に攻撃を集中して確実に叩こう、と言う魂胆なのだ。

「我が飛龍と大鳳に敵攻撃隊が向かってきます！」

見張り員が怒鳴り声で報告してくる。

「敵雷撃機、左舷真横と左舷後方より急速接近！距離6000！」

既に各艦の対空砲は射撃を開始し始めていて、駆逐艦は主砲を撃っている。

6000mを切った敵機に一斉に対空機銃と対空機関砲が火を噴く。

新しく空母と戦艦に装備された40mm対空機関砲は、途轍もない弾幕を張りながら敵機に火箭が伸びていく。

「2機撃墜！続いて1機！」

「敵急降下爆撃機、3機撃墜！」

飛龍と大鳳の横はがちりと霧島とビスマルクが守りを固めている分、対空砲火は比ではない。

飛龍から見て左舷側、空母8隻の内の瑞鶴、飛龍、大鳳、グラーフ・ツエッペリンを並んでいる側だが4隻を含めてそちらを守っている艦は雷撃機を、右舷側の艦は急降下爆撃機を狙って対空射撃をしている。

お陰で対空機関砲や機銃の爆煙は二分されたかのようなうだ。

だが、それでも敵機の勢いは凄まじく、雷撃機13機、急降下爆撃機25機が突っ込んでくる。

「敵雷撃機、投弾位置に付かれました！」

「敵機急降下開始！大鳳に17機、我が飛龍に8機突っ込んできます！」

「面舵45！」

「面舵45！宜候！」

艦長が突っ込んでくる急降下爆撃機に対して回避行動を指示して怒鳴り声を上げ続ける。

飛龍は回頭し始めたが、大鳳は飛龍を軽く凌ぐ巨艦だ。舵の利きは遅くまだ回頭を始めていない。

そして漸く舵が利き始めた頃に、敵急降下爆撃機が続けて投弾を始める。

「敵機投弾！」

「舵戻せ！取舵30！」

「舵戻せ、取舵30宜候！」

既に最初に投弾した2機の爆弾は、既に外れるだろう。

だが問題は、その後に続いた6機だった。

「続けて2機が投弾！直撃針路です！」

「クソ！避け様が無い！総員衝撃に備えろ！」

艦の動きを読んでいたのかの様に、針路上に落とされる爆弾は1発、2発と立て続けに飛龍の飛行甲板を貫いた。

火柱を上げながら、飛行甲板先端部とその少し後ろに命中する。

そして更に後から投弾した4機の爆弾は、遅れて突っ込んできたからか、黒煙に邪魔をされて外れた。

だがこれで終わりではない。

次に飛龍を襲ったのは雷撃機の猛攻だった。

「敵雷撃機、大鳳に7、我が飛龍に6機突っ込んできます！」

「煙が視界を遮って良く見えません！」

「雷撃機、2機撃墜！」

「面舵一杯！」

「面舵一杯宜候！」

黒煙によつて視界が遮られている中で、艦長が必死に指示を飛ばしながら飛龍は回避を続けるが、流石に全てを回避することは出来なかった。

「敵雷撃機4機投弾！」

「舵戻せ！取舵一杯！」

グググ、と飛龍は再び艦首の向きを変える。

だが、4発の魚雷はスルスルと伸びて、その中の3本が飛龍の右舷艦首から艦中央部にかけて巨大な水柱と共に、大量の浸水を起こした。

1本はギリギリ艦首すれすれで避けられたものの、3本の命中は飛龍にとつて致命的だった。

大量の浸水を起こしたからか、それとも機関部への浸水を起こしたのか、分からないが速力がどんどん落ち始めた。幸いにも攻撃はこれで終わったのか敵機は見えない。

「全員、無事か……？」

「はい、一応艦橋要員全員の生存確認が取れました」

「被害状況はどうなっている？」

「爆弾2発と魚雷3本が命中しました。爆弾1発が飛行甲板の先端部分を丸々吹き飛ばして、前部昇降機に直撃、使用不可能。魚雷3本は、艦首から艦中央部にかけて命中して大量の浸水と同時に機関に浸水が発生、速力は11ノットにまで落ちました。一応、2時間もあれば速力だけは20ノットほどまで回復させられますが、艦が右舷に23度傾いており、復元は絶望的です。他にも爆弾の破片などで通信設備がやられてしまい、迅速な通信が出来ない状況です。端的に言えば我が飛龍は、完全に戦闘能力を喪失しました」

「報告ありがとうございます」

「そうか、飛龍は戦えないか……」

それならばここに留めておく理由も無い。ここで飛龍を失うわけにはいかないのだ、護衛を付けて本土でなくとも沖繩に向けて退避させるべきだろう。

ここからならば、少しばかり沖繩に向けて針路を取って進めば駐留している陸海軍の航空隊の上空援護も受けられるし、問題無い。

疾風の最大航続距離は2500kmだからこの位置でも往復出来る。

まあ往復するのと直掩をするのでは訳が違うからあれだが、それでも援護を受ける事は出来ると言う心理的に幾分か軽くなれる利点がある。

敵潜水艦対策には二式大艇を何機か寄こしてもらっても良い。

取り敢えず、飛龍から他の艦に移乗して退避させなければ。

「……さて、それならば今すぐにも飛龍に護衛を付けて退避させ、司令部を移さねばなるまい」

「仰る通りです。どの艦に致しますか？」

「以前と同じで瑞鶴で良いだろう」

「了解しました。直ぐに準備に取り掛かります」

「頼んだ」

それからものの5分で移乗の準備を終わらせ俺は飛龍を後にした。

護衛には萩風、浦風、陽炎を引き抜いた。3隻いれば対潜戦闘ならば十分にこなせる筈だ。

敵機は確認されていないが、念の為に沖縄を經由して本土へ回航させる事にした。

対潜警戒には慶良間諸島から二式大挺を派遣してもらい、直掩には海軍の紫電改と陸軍の疾風に兼任してもらい、洋上航法の苦手な陸軍には取り敢えず二式大挺か紫電改に付いていけと言う事に。

戦闘の場合は、通常通り戦闘を行い、戦闘終了後に二式大挺が発する電波を頼りに集合する事になった。

だがまあ、台湾に至るまでの付近ならば島伝いに沖縄に戻れるので方角さえ分かればそこまで問題は無かろう。

飛龍から瑞鶴に移乗した俺は、先ず大鳳の被害状況の報告を受けた。

「大鳳ですが、爆弾の命中は6発と多かったです。飛行甲板に張られた装甲によって弾き、被害はありません。空中線が爆風や破片によって何本か切られました。左舷に魚雷が1本命中、浸水を起こしましたが被害は小さいとの事で航行、戦闘ともに問題無しとの事です。速力も未だ最大33ノットを発揮出来ます」

やはり、大鳳はその防御力を遺憾無く発揮してくれたようだ。

爆弾を全て弾いてしまうなど、飛龍や蒼龍、瑞鶴などの他の空母ではそうはいかなかっただろう。

6発も命中していれば今頃は良くて飛行甲板がそっくりそのまま吹き飛ばされるか、最悪沈んでいる事も有り得たかもしれない。

「分かった。艦隊は戦闘を続行、敵第1群を撃滅する」

「了解しました」

俺がそう言うのと参謀長以下、慌ただしく動き始める。

迎撃に出た烈風全機は隼鷹と飛鷹で收容して既にその内の何十機かが上空の守りを固めている。

それから20分後、第一波攻撃隊から攻撃終了の電文が届いた。

「提督、第一波攻撃隊の攻撃が終了しました」

「戦果は？」

「ヲ級1隻撃沈確実、2隻撃破確実。又級1撃沈。更に駆逐艦3を撃破。敵艦隊は壊滅しました」

「そうか、よくやってくれた」

「だが参謀長の顔色は暗い。」

「何があつた？」

「どうかしたのか？」

「攻撃隊総隊長の西北中佐が、戦死しました……」

「……分かった。即座に第一波攻撃隊の収容準備を」

「了解しました」

「参謀長、西北中佐の最後は分かるか……」

「は、電文によれば『西北総隊長機、被弾炎上スルモ魚雷投下、敵空母艦橋ニ突撃サル。魚雷ハ見事敵空母ニ命中セリ』との事です」

「そうか……その電文、俺に出来ないか」

「は、構いません。どうぞ」

「そうか……西北中佐が、戦死したか……」

母艦航空隊を再建させる為に、俺が呉に着任した時から世話になったがまさか彼が死んでしまうとはなあ……

「すまない、西北中佐。」

「お前の死は悔しいし悲しいがここで俺は振り向いていられないのだ。」

戦争が終わったならばとは言わないが、情勢が幾らか落ち着いたら手を合わせるからそれまでは待っていてくれ。

俺は目を瞑って少しばかりの黙祷を捧げてから再び俺は指示を飛ばす。

上空直掩に就いていた烈風は、損傷機を含めて104機に減っているが戦闘には問題は無く、そのまま空母上空を守っている。

攻撃隊から、攻撃終了の報告が上がってから1時間半後に攻撃隊が帰投、収容開始。

即座に損傷機各機の修理を開始している中、電探に反応があった。

「電探に感あり！数凡そ160〜180機！距離300km！」

「敵の第二波だな。戦闘機隊に迎撃に向かうように言ってくれ」

「了解しました」

命令を受けて、艦隊上空を守っていた34機の烈風は即座に敵攻撃隊へ向かって行つた。

その10分後に隼鷹と飛鷹から即座に発艦した70機が敵攻撃隊に向けて艦隊上空を飛び去つて行つた。

「攻撃隊に随伴していた烈風の内の飛龍、蒼龍、瑞鶴、隼鷹隊は3航戦へ着艦。出撃準備を整えて迎撃に参加させる」

「はっ、即座に送ります」

その指示に従つて4隊は3航戦に向かつて飛んで行き、それ以外の機は即座に1、2航戦の艦で収容、兎に角艦上で撃破されるのを防ぐ為に修理も損傷の軽い機体を優先させてそうではない機体はそのまま格納庫内、それ以外は空中退避させた。

その40分後に敵攻撃隊が艦隊上空に來襲。

烈風による迎撃と対空砲火によって170機以上いた敵攻撃隊はその数を60機程までに減らしていた。

だが、烈風も先の迎撃と攻撃隊に随伴していた事もあつて疲労が溜り思うように戦果を挙げられなかったがこれでもかなり頑張つてくれた方だろう。

突破した60機は、大鳳に集中攻撃を加えた。

その内の16機ほどが瑞鶴へ向かつてきたが、爆弾は全弾回避したものの魚雷を2本食らつた。

だが機関部等への浸水は無く、浸水によって最大速度が30ノット

に低下しただけに留まった。

だが大鳳はそうもいかなかった。

40機以上の敵機に集中攻撃を加えられた大鳳は爆弾9発が命中。飛行甲板に命中した8発の爆弾はその装甲で弾き返して無傷だったが、1発が煙突に飛び込んで炸裂。

出しえる速力は20ノットにまで大幅に低下。

更に右舷に魚雷が3本命中して右に18度傾いてしまった。

幸いにも、左舷に1発命中していたから沈むような事は無いし傾斜の復元も可能ではある。だが速力の方が問題だった。

しかしながら速力こそ大幅に低下しているものの、空母としての機能はまだ有しており戦闘は可能。

そこで大鳳を3航戦と合流させて退避させる事にした。

3航戦にはこれで3隻の空母が揃う事になる。

これで攻撃隊を一波分ならば収容可能だ。

1、2航戦はその分狙われる艦が増えるが、直掩戦闘機隊を隼鷹と飛鷹だけで行っていた収容、補給や整備、修理が3隻に分担されるのでそれらの作業を今までよりも早く終えることが出来、そして即座に発艦させやすくなる。

大きく見れば艦隊全体の負担が大きく減る。

3航戦は既に40海里後方に退避している。(約74km)

早々、敵の攻撃に晒される事は無いだろうと思われる。だが航空機からすれば74km、100kmだとしてもほんのひとつ飛びだ、全力でエンジンを回せばほんの30分かそれ以下の簡単に辿り着ける。

大鳳は命令を受けて駆逐艦隊の護衛を受けながら3航戦と合流すべく退避していった。

20ノットで航行して、早ければ2時間程で合流出来るだろう。

その間、我々は第二次攻撃隊の発艦準備を急いだ。

着艦、収容した流星は第一波が元々152機も存在していたのに、今ではたったの91機に過ぎず、更には損傷機も存在しており再出撃

に耐えられるのは77機。

第二波攻撃隊の流星は損害が軽く、168機中26機が撃墜されるに留まった。

損傷機が17機で再出撃が出来ないので、再出撃に耐えられるのは残ったのは125機。

結果として、敵艦隊への第二次攻撃隊は、第一次攻撃隊第1波を丸々と、追加で第一次攻撃隊に参加しなかった8機の瑞鶴の流星隊、そして24機の流星を追加で送り出す事にあつた。合計で流星109機。

そこに烈風80機を護衛に就ける。

この数になつた理由としては敵空母6隻の内、2隻を撃沈し2隻を撃破しており健在な空母は又級が2隻となつているからだ。

損傷しているヲ級を確実に仕留める事を主目的として、又級2隻は戦闘力を奪う程度で構わない。可能であればその2隻も仕留めて欲しいが、第1群の戦闘力を確実に全て奪い去る事を優先する事にした。

第一次攻撃隊を全て收容後、40分で全ての出撃準備を整え、きつかり1時間後には烈風と流星は銃弾と燃料、そして50番や魚雷を抱いて飛行甲板から飛び立って行った。

その1時間半後、攻撃隊は敵艦隊への攻撃開始。

『我第二次攻撃隊。戦果ヲ報告ス。ヲ級2、巡洋艦1、撃沈確實。又級2、巡洋艦1、撃破。戦闘力完全喪失ト認ム。再攻撃ノ要無シト認ム』

戦果は見事ヲ級2隻にそれぞれ爆弾を5発づつ、魚雷を4本と3本

叩き込み撃沈。

残りの又級2隻にも爆弾2発と3発、魚雷を2本ずつ命中させた。上手くいけば撃沈となるだろうが、魚雷2本ではどうか分からない。しかしながらその戦闘力を完全に奪ったと言える。

更には余った攻撃隊の流星26機で敵巡洋艦2隻に対して攻撃を実施、その内の1隻を撃沈確実、1隻を撃破。

こちらの損害は烈風13機、流星17機が撃墜されるに留まった。

この報告を受けて第一群に対する攻撃はこれで打ち切りとなった。少なくとも残存艦隊が戦闘力を保持するには第2群か第3群のどちらかと合流する必要があるが距離的に見ても不可能だろう。

もし合流しようと思えば我々が攻撃隊を差し向けて妨害する。

直掩戦闘機による守りが無い艦隊なんて攻撃隊からすれば良い的だろう。

そう言う訳で敵第1群との戦闘は終了。

だがこれで一息つけるわけでは無い。第二群との戦闘もまだ残っており、更には第3群も発見してこれに攻撃を加えて撃滅しなければならぬ。

幸いにも第2群の位置は掴んでいるから問題は無い。

既に第二次攻撃隊を收容して損傷機の修理を大急ぎで行っている。

第2群と戦闘になるのは翌日になる。

流星の現時点での出撃可能な残存機は全て合わせて162機。

しかしながら翌日の出撃までに修理を終える事の出来る流星は56機にも上り整備妖精達が格納庫内で、てんてこ舞いになりながら修理を行っている。

そこに彩雲の発艦作業も加わるのだから地獄の様な忙しさだろう。だが今は頑張って貰うしかない。

彩雲の偵察によれば第2群は我が艦隊へ向けて航行しているらしく、その速力は15ノットと遅い。

第1群を完全に撃破するまでは25ノットの高速で航行していたが報告を受けたからか速力を落としようだ。

我が艦隊は18ノットで向かっているので、攻撃可能範囲に入るのは夜中だが攻撃隊を放つのは翌日の日の出と共に予定だ。

それに合わせて流星の修理を急ピッチで進めている。

翌日、まだ日が昇らない内から彩雲を発艦させ、日の出と共に攻撃隊を放った。

内訳は以下の通り。

第一次攻撃隊

第一波攻撃隊

蒼龍

烈風12機 流星12機(爆装6機) 雷装6機 計24機

瑞鶴

烈風16機 流星12機(爆装6機) 雷装6機 計24機

隼鷹

烈風12機 流星12機(爆装6機) 雷装6機 計24機

飛鷹

烈風12機 流星12機(爆装6機) 雷装6機 計24機

天城

烈風12機 流星12機(爆装6機) 雷装6機 計24機

阿蘇

烈風12機 流星12機(爆装6機) 雷装6機 計24機

グラーフ・ツエツペリン

烈風 1 2 機 流星 1 2 機 (爆装無し) 雷装 1 2 機 計 2 4 機

アークロイヤル

烈風 1 2 機 流星 1 2 機 (爆装無し) 雷装 1 2 機 計 2 4 機

烈風 1 0 0 機

流星 9 6 機 (爆装 3 6 機 雷装 6 0 機)

計 1 9 6 機

第一波攻撃隊は以上の様になった。

烈風、流星共に損害を負っているので昨日よりもずっと少ないが致し方ないと言う物だ。

第二波攻撃隊

蒼龍

烈風 1 2 機 流星 1 2 機 (爆装 6 機) 雷装 6 機 計 2 4 機

瑞鶴

烈風 1 2 機 流星 2 4 機 (爆装 6 機) 雷装 1 8 機 計 3 6 機

隼鷹

烈風 1 2 機 流星 1 6 機 (爆装 6 機) 雷装 1 0 機 計 2 8 機

飛鷹

烈風 1 2 機 流星 1 4 機 (爆装 6 機) 雷装 8 機 計 2 6 機

天城

烈風 1 2 機 流星 1 6 機 (爆装 6 機) 雷装 1 0 機 計 2 8 機

阿蘇

烈風 1 2 機 流星 1 6 機 (爆装 6 機) 雷装 1 0 機 計 2 8 機

グラーフ・ツエツペリン

烈風 1 2 機 流星 1 2 機 (爆装 6 機) 雷装 6 機 計 2 4 機

アークロイヤル

烈風 1 2 機 流星 1 2 機 (爆装 6 機) 雷装 6 機 計 2 4 機

機) 計機

烈風96機

流星122機(爆装48機 雷装74機)

計218機

第二波攻撃隊は以上の様になった。

それぞれ合わせて、

烈風196機

流星218機(爆装84機 雷装134機)

計414機

となった。

流星は出撃可能な全機を全て攻撃に参加させる。

烈風は、昨日の迎撃と攻撃隊の随伴で63機を喪失、27機が損傷により出撃が出来ない。

残存している280機の烈風の内、196機が攻撃隊に随伴するが艦隊の防空には84機を残している。

これを40機と44機に分けて迎撃を行ってもらおう。

攻撃隊の総隊長機は蒼龍の流星隊隊長が務める。

昨日の敵艦隊の攻撃で西北中佐が戦死しているから彼の代わりとしてだ。

攻撃隊の数だけみればまだまだ多い様にも感じられるだろう。

だが出撃時には第1機動艦隊は合計790機の航空機を有していたのだ。

実に4割近い機体と、搭乗員を失っている。普通ならばまともに戦闘が出来る筈が無いのだが撤退は出来ない。

搭乗員に関しては脱出した者もいるので一概には言えないがそれでも2割以上は失っていると考えられる。

作戦終了時には、少なくとも流星のみに限れば機体は5〜6割喪失で済めば良い方、搭乗員も4〜5割喪失で済めば御の字。

そういう状況だ。

しかも空母は飛龍が撤退、大鳳も戦闘力はあるものの速力が大幅に低下して最前線では戦えない。

第2群との戦闘で、最低空母2〜3隻がやられるだけで済めば良い、最悪、半分以上の5隻が戦闘力を喪失する事を覚悟しておかなければならない。

しかもこれは『第1機動艦隊が敵空母との戦闘をした場合』に限った話で、護衛艦隊が敵第3群と戦闘になった場合、戦闘艦への損害は戦艦全滅で防げればいい。

だが輸送船団に手出しを許してしまった場合、その被害は未知数だ。

だからこそ今の戦力全てで第2群を叩き、第3群を早急に見つけて攻撃を加えなければならぬのだ。

だがその第3群は未だ発見出来ず、輸送船団は既に沖縄本島近海に避難、留まっている。

慶良間諸島の二式大挺をも使って索敵を行っているが全くと言っていい程に足取りはつかめていない。

兎にも角にも、第2群を叩くことが現在は最優先事項。

戦艦ならば、航空機や潜水艦、最悪戦艦同士の砲撃戦で何とかなるが敵の空母はそうもいかない。

流星を全力出撃させた方がいいが、どれだけの数が無事に帰って来られるか……

敵は空母の数こそこちらが勝っているが今まで一切戦闘をしていない、無傷で万全な状態だ。

しかしながらこちらは第1群との戦闘で少ない犠牲を出して半日ほどの休息があったとはいえ、それは搭乗員達に限った話だ。

整備員達は全くの休憩無しに今の今まで働き詰めで疲労はかなり

の物だ。

彼らに休みは無く、攻撃隊の収容に備えて準備をしなければならず更には必要になった場合に攻撃隊の準備も行わなければならないのだ。

少なくともあと数日は戦闘が続くと予想されるから、その間は碌な休憩は無いと思っただ方がいい。

「提督、第二波攻撃隊の発艦完了しました」

「分かった。敵も攻撃隊を放っているだろうから対空警戒を怠るな。対潜警戒もしっかりな」

「勿論です」

「3航戦はどうなっている？」

「は、既に直掩の為に8機ずつの計24機を上げております。敵攻撃隊の接近報告があれば即座に発艦可能との事です」

「ならばいい。烈風の援護が間に合わなくてやられる事だけは避けなければならぬ」

参謀長達とそう話してから1時間後。

電探に敵攻撃隊を捉えた。

「電探に感あり！南西より敵機多数接近中！数凡そ150〜200機！」

電探手がそう報告してくる。

その報告を受けて即座に防空に残しておいた残りの烈風を上げるよう、指示を出す。

「即座に残りの烈風を上げろ。何としてでも阻止するんだ」

「はっ、3航戦には既に報告してあるので問題は無いかと思われませう。ただ、数が多いので防ぎきれるかどうか……」

「そこは、何としてでも頑張って貰うしかない。今我々が艦の上でどうこう話してもなんの力にもなれやしない」

「そうですな……」

その30分後、敵攻撃隊の第二波を電探で捉えた。その数、100
〜150機。

しかしながら烈風は既に敵第一波攻撃隊との戦闘で精一杯で一切
手出しが出来ない状況だ。

第一波攻撃隊の敵戦闘機は60機にも上り、敵攻撃機へ手出し出来
ている烈風はたったの20機程。

それでも奮闘しているが、やはり数の差はどうしようもない。

更に1時間後。

攻撃隊から敵艦隊への攻撃開始との電文が艦隊に届いた。

どうやら敵は防空を捨てて攻撃隊へ戦闘機を多く就けたらしく迎
撃は散発的、確認出来ているのはたったの50機程度。

第一波攻撃隊の烈風だけでも圧倒出来る数だ。

クソ、そうなると思っていたら防空用にもう30機は烈風を残して
おいたのだが……

まあ、今更どうこう言えない。

「提督、対空射撃開始します」

「ああ。戦闘機隊は退避させたか？」

「はい、既に敵第二波の迎撃に向かいました」

「ならばいい」

その直後、戦艦5隻から三式弾が撃ち出された。

元合同艦隊の戦艦分の三式弾は防空能力を向上させる為に生産ラ
インを圧迫すると分かっていたが無理を言って生産ラインを確保し
て製造して貰った。

お陰で防空能力は大幅に向上し、5隻から撃ち出される三式弾の破
壊力は絶大だ。

「敵機、凡そ20機を撃墜しました」

「第二斉射、始めます」

2回の斉射で30機に上る敵機を撃墜。

やはり、集中運用をすればするほど効果は大きいらしい。

烈風の迎撃で160機程居た敵機は100機程までに減っていたがそれでも70機程の敵攻撃機が突っ込んでくる。

「敵機、二手に分かれました！右舷と左舷に分かれて攻撃してくる模様！」

対空砲の射程に入ると各艦から一斉に撃ち出されるが、それでも撃墜出来るのは10機以下。

更に突っ込んでくる。

「右舷、雷撃機20！急降下爆撃機15！急速接近中！」

「左舷、雷撃機20！急降下爆撃機20が急速接近中！」

どうやら敵機は挟み撃ちを狙っているようだ。

機銃や機関砲を一斉に撃ち始めると流石に右舷、左舷で10〜15機程を撃墜することが出来たがそれでも勢いは止まらない。

「取舵一杯！」

「取舵一杯、宜候！」

瑞鶴は舵を握って艦長達からの報告で舵を切る。

「敵急降下爆撃機、12機が突っ込んできます！」

「敵機直上！急降下ア！」

漸くその大きな艦体が動き始めたと思ったら、一斉に急降下爆撃機が突っ込んできた。

「敵1番機投弾！続けて2、3番機が投弾！」

「直撃針路！」

「総員衝撃に備えろ！」

その報告通り、3発の爆弾が立て続けに飛行甲板に命中し炸裂する。

その後から投弾した5機の爆弾は全て外れたものの、その後に4機が投弾し、その内の2機の爆弾が命中。

瑞鶴の飛行甲板は物凄い勢いの火災に包まれて視界が全く利かない。

そこに待ってましたと言わんばかりに雷撃機が一斉に突っ込んで

くる。

「舵戻せ、面舵一杯！」

「舵戻せ、面舵一杯宜候！」

一度舵が利き始めると幾分かは回避しやすいがそれでも瑞鶴程の巨艦ともなればやはり鈍い。

そこへ4機の雷撃機が瑞鶴へ向かつて突っ込んで、投弾する。

残りの雷撃機は対空射撃に妨害されて目標を変更、手前の鈴谷と瑞鶴と蒼龍の前を航行していたポーラへ狙いを定めた。

「敵雷撃機投弾！」

「面舵40！」

「2本直撃針路！避けられません！」

「総員衝撃に————」

ズドン！ズドン！

艦長が大声で警告を発しようと言い切る前に魚雷が2本、艦中央部と艦後部へ命中する。大きな水柱を立てて、その海水が飛行甲板に降り注ぐ。

命中したのは左舷だ。

被害はそれだけに留まらなかった。

まず、狙いを変更して狙われた鈴谷とポーラは1本づつ魚雷が命中、右舷から突っ込んできた敵機によって阿蘇とアークロイヤルが被弾。

阿蘇は爆弾2発と魚雷が2本命中。

右舷に艦体が傾き、速力も低下している。

アークロイヤルは爆弾3発の命中に留まったが火災の勢いがかなり強く黒煙で覆われている。

だが敵の攻撃はこれで終わらない。

第二波が来襲、損傷していた瑞鶴、阿蘇、アークロイヤルの3隻に狙いを絞って集中攻撃を加えてきた。

迎撃に出た烈風の奮闘によってその機数は70機程に減っていたがその70機からの攻撃を避けられる力は3隻には無かった。

第二波攻撃によって瑞鶴には爆弾2発、右舷に3本の魚雷が命中。飛行甲板は7発の命中によって格納庫までズタズタに破壊されてしまっている。

幸いにも方舷に集中せず両舷に分散して命中していたから戦闘力を完全に損失してはいるが何とか沈没は免れられそうだと報告が上がっている。

右舷に命中した魚雷の1本が推進軸付近に命中、それにより右舷推進軸の1つが破壊されてしまった。

そこから機関部へも浸水してしまい、故障。それにより最大速度はたったの6ノットという有様。

阿蘇は魚雷の命中こそ、阿蘇の右舷で展開していたテイルピッツが身を挺して身代わりとなって魚雷と阿蘇の間に艦を滑り込ませて1本の魚雷を受けたから無かったものの、急降下爆撃機によって釣る瓶打ちにされて爆弾5発が命中。

飛行甲板は完全に破壊され、命中した爆弾の内の1発が格納庫などを貫通、機関部付近で炸裂。

速度が大幅に低下し出しえる最高速度は13ノットにまで減ってしまった。

アークロイヤルは比較的、被害は少なく爆弾2発と魚雷1本の命中に留まったが爆弾の辺り所が相当悪かったらしく、艦橋の直ぐとなり命中し炸裂、艦橋要員である妖精達は爆風などによって海に投げ出されたり破片によって戦死、重症を負った。

艦娘であるアークロイヤル自身は、艦長達に庇われて左腕にかすり傷を負うに留まったが庇った艦長以下は戦死。

轟沈艦が出ていないのが不思議なぐらいの被害を負った。

これで4隻の空母が完全に戦闘力を喪失、俺は3隻に瑞鶴の曳航の為にアドミラル・ヒツパーと、阿蘇の曳航の為に矢矧、そしてその護衛に時雨と響を引き抜いて沖縄方面に撤退させることにした。

更に沖縄近海に退避している護衛艦隊に、何隻か駆逐艦を回しても
らえないかと打診。結果、

海風 江風 峯雲 霞 藤波

の5隻を派遣して貰える事となった。

その5隻は既に瑞鶴以下7隻を迎えに出ており、それぞれのその上空直掩には対潜目的と誘導任務を兼ねた二式大挺2機と、陸軍から疾風が32機つつ就くと言う大盤振る舞い。

だがこれでも深海棲艦に襲われれば一溜りもない。

兎に角、彼女達が無事に呉へ辿り着いてくれる事を願うばかりだ。

俺は、瑞鶴から蒼龍に艦隊司令部を移乗。

同時に俺も蒼龍へ乗り移った。

我々が放った攻撃隊は、味方空母が大打撃を負ったと言う報告を受けて一矢報いろうぞ、とばかりに敵空母ヲ級3隻撃沈と言う大戦果を挙げた。

更には残りのヲ級3隻にも急降下爆撃を加えて2発ずつと、魚雷を1本ずつ叩き込んで空母としての能力を完全に奪った。

敵戦闘機の迎撃も烈風が全て食い止めて被害は無く、撃墜された流星は27機に留まった。烈風も11機が撃墜されたがその戦果と被害を見比べれば明らかに大勝利だと言える。

烈風185機

流星191機

計376機

空母に向けて戻ってくるのは以上だ。

だが、損傷機の数が多く途中で脱落するかもしれない機もいるので数はもう幾らかは減るだろう。

そこから再出撃に耐えられる機は、流星が140機ほどいれば良い方か。

2時間後、無事攻撃隊を收容した艦隊は敵艦隊への再攻撃を行わずに第3群の索敵、そして撃破を最優先事項にした。

この生き残った3隻の又級に対しては第2潜水艦隊に機会があれば雷撃し、撃沈せよと命令してあるので心配は無いだらう。

「提督、彩雲が索敵限界線に到達しましたが敵第3群は発見出来ませんでした」

「敵の第3群はどこにいるんだ？もう既に4回も彩雲を放ってその全てが空振りとはどう言う事だ……」

「少なくともフィリピン海方面とスールー海、南シナ方面には敵艦隊は存在していないようですが、第3群がどこへ消えたのか皆目見当も付きません……」

我々は、敵第3群を発見すべく、索敵の為に彩雲を既に4回も放っているのに未だ発見することが出来ないでいた。

と言うのも、我々が第2群と戦ったのはフィリピン海で、先ずその方面を索敵したのだが、見つからず。

念の為にもう一度放ったが見つからなかったので次はスールー海とスールー海以南を索敵。こちらも発見出来ず切り上げてバシー海峽からの南シナ海、南沙諸島、リアウ諸島までを索敵するも見つからず。

どういう訳か、敵艦隊はこれほどの広範囲を索敵しているのにも関わらず一切の痕跡すら無い始末。

各島の飛行場を輸送船団の為に流星で爆撃するぐらいしかこの数日行っていない。

参謀長達と話し合うが、何処に行ったのか全く分からず俺は参謀長達と頭を悩ませるばかり。

まさか空母がやられたから撤退したのか？とも考えたが少なくともそれは有り得ないと言える。なぜならば南方方面を我々に奪われてしまうと各種資源が日本本土へ輸送されてしまい、更には戦力を大幅に回復されてしまう。これは深海棲艦としては絶対に防ぎたい筈なのだ。

なのに防衛を諦めて撤退するか？

色々な事を加味して考えると撤退の二文字を深海棲艦は選択しない筈なのだ。

だが、現に敵の第3群はどこにも居ない。

本当いどういことなのか全く分からない。

結局、結論が出ないまま我々はさらに3日と言う貴重な時間を消費してしまい、結局その3日間も索敵を行ったが発見出来なかった。

そこでこれ以上長引かせることも出来ないので輸送船団に前進を命令。

万が一敵艦隊がらわれた場合はその時に対処すると言う事になった。

我々第1機動艦隊は輸送船団とバシー海峡で合流。

一息付く間も無いままに最初に上陸、奪還を行うのはパラワン島だ。ここに前進基地と飛行場を建設して最低限の上空援護を受けられるようにする為だ。

まだまだ戦いは終わらない。

第26話

輸送船団を伴って、先ずパラワン島を攻略すべく我々は進んでいった。

第1機動艦隊は護衛艦隊と共に輸送船団の守りに付いていた。

先ず一番に目標としているのはベロン飛行場とアプラワン飛行場、そしてイスゴッド飛行場だ。

この3つの飛行場は同島の凡そ中間地点にあり、そして海に面している。

海からの距離は300mかそこらで、最短ともなると精々250m程度しかない。

イスゴッド飛行場だけは海から1kmほど離れているが問題にはならない。

偵察で確認された敵戦力もそこまで強力な敵部隊は配備されておらず、それぞれ精々1個連隊かその程度しか確認されていない。敵は旧プエルト・プリンセッサ国際飛行場周辺に戦力を集中しているので奪還は容易だ。

しかもベロン飛行場から北西に約23km進むとアプラワン飛行場があり、距離も近い。

逆に南東に進めばイスゴッド飛行場が存在する。

元々イスゴッド飛行場は、固定翼機などの所謂、零戦や烈風、疾風の様な戦闘機や一式陸攻などが離着陸するための飛行場では無く回転翼機、ヘリコプターの離着陸が専門だったらしいのだが深海棲艦がそれを固定翼機の離着陸が出来る様に拡張したらしい。

飛行場の規模はかなり大きく、700mの滑走路が2本、X状に重なっており幅も40mはある。4発爆撃機ですらその気になれば離着陸が可能な飛行場へと大きくその姿を変えていた。

それぞれの飛行場は我々が運用する烈風や疾風、紫電改だけでなく一式陸攻の運用も十分に可能であり当然南方方面攻略に使わない手は無い。

だから一番最初に奪還してここに陸海軍の戦闘機と爆撃機を配備しようと言論んでいるのだ。

パラワン島の攻略には3個師団を投入する。

それぞれ1個師団づつが飛行場の目の前の海岸に上陸。

第16歩兵師団 アプラワン飛行場担当

第18歩兵師団 ベロン飛行場担当

第21歩兵師団 イスゴツド飛行場担当

それぞれが先ず攻略を担当する飛行場を奪還。

奪還が完了したならば部隊を再編等してから島の北部攻略を目指して進む第16、第18歩兵師団と南部攻略を目指して進む第21歩兵師団二手に分かれる。

南部はそこまで大規模な敵部隊は確認されていないので1個師団での攻略となる。

予想では南部の総戦力は最大でも1個師団かそれ以下。妥当な所では1〜2個旅団規模と言ったところだろうか。

と言うのも戦力の大部分を北部そのものと北部にある旧プエルト・プリンセッサ国際飛行場周辺の旧市街地方面に引き抜いて守りを固めているのだ。

事実、数か月前の偵察では旧プエルト・プリンセッサ国際飛行場周辺の防御陣地は3重程度だったがつい先ほどの偵察では6重にまで増えている。

海側に面している方は防御陣地は2重程度しかないが市街地側では6重の防御陣地が築かれており攻略は容易ではない。

比較的な朗報は南西諸島攻略ほどは手間取らないであろうと言うことぐらいか。

というのもその地質や植生から、余程の大規模な工事を行って地下

工事などを行わなければならない。

コンクリートを運び込んで、なんなら周辺の木々を全て根こそぎ引っこ抜くなり爆薬で吹き飛ばすなりしなければならぬほどに面倒なのだ。

偵察ではそのような痕跡は確認されていないので問題無いと思われる。

北部、南部問わず密林が広がっているので敵のゲリラ戦には注意しなければならないが最悪、進軍路全てに戦艦や重巡の砲撃、航空機から爆弾を投下して木々を薙ぎ払う手も有る。

言っておくが、自然破壊がしたいわけでは無い。勿論自然保護も重要だとは思いますが戦争中にそんなことを言っているのは本当に勝てる戦も勝てなくなる。

そう言う事は勝ってからまたゆつくりと、着実にやればいいのか。「急いで事は仕損じる」と言う諺がある様に、その方が結果は残る事も有るのだから。

さて、遂に上陸となった。

第4戦隊の戦艦が分かれて上陸地点へ一斉に艦砲射撃を実施している。

彩雲での観測では海岸線に防御陣地は敷かれていないが念の為だ。

2時間たつぷりと砲撃を行い、遂に陸軍の各師団が上陸を開始。

海岸線での敵の抵抗は無く無血上陸。

だが流石に飛行場周囲ではそれぞれ敵が守りを固めており多少の出血を強いられたが失った戦力は1個小隊と少し分だけであり、たったの2日の攻防で飛行場を奪取。

どこの飛行場も同じ様な状況であり敵は散り散りになって北部、南部へと逃げて行った。

その後、それぞれの師団に随伴している工兵隊が5日間掛けて飛行

場を修復。

そしてすぐさま沖縄経由で陸軍の第71飛行戦隊の疾風36機がベロン飛行場に、海軍の紫電改36機がイスゴッド飛行場に送り込まれ、1週間後には一式陸攻36機がアプラワン飛行場に進出する予定だ。

これで母艦航空隊だけで制空権を維持する必要が無くなった。

この間にも旧プエルト・プリンセス国際飛行場（長いので以降パラワン飛行場と命名）から複数の敵機が飛び立って襲撃をしてきていた。

いままでは海軍が烈風で防いでいたが疾風と紫電改、そして一式陸攻が進出してくれば大規模な爆撃を加えてし破壊、使用不可能にすることが出来る。

流星は対潜警戒任務と対地支援に引き抜かれており、飛行場攻撃には参加していない。それでも幾らかは機数に余裕があるのだが、全機を動かしてしまうと搭乗員が休息をとることが出来なくなってしまうから諦めている。

1週間後、一式陸攻が進出。

3個師団を運んできていた輸送船を使って爆弾を運び込んできており、一式陸攻24機が陸用25番4発を搭載して疾風24機、紫電改24機に守られてパラワン飛行場を爆撃。

敵戦闘機20機ほどに迎撃を受けたが数で圧倒しているので瞬く間に敵戦闘機は壊滅、こちらの被害と言えば被弾によって疾風3機と紫電改が2機飛行場に引き返したぐらいだ。

爆撃の効果は大きく、100発近い爆弾の雨を降らされたパラワン飛行場は立ちどころに使用不可能となり駄目押しとばかりに更に12機の一式陸攻が80番を抱えて爆撃。

飛行場はこれで1週間はまともに使用出来なくなった。

その間に北部、南部共に前進を開始。

南部はやはり敵の戦力は少なく各地で散発的な抵抗を受けはした

ものの1週間ほどで攻略が完了。

損害は1個大隊規模を失うに留まった。その後第21歩兵師団は北部攻略の2個師団と合流して共に前進。

パラワン飛行場に到達後、攻略を開始。

既に戦艦からの砲撃で防御陣地は壊滅しており奪還に要したのは4日間。

更に3個師団は北部へと前進。

勢いそのままに12日で全島を奪還するに至った。

全体での損害は1個旅団ほどを喪失したが正直、沖縄での戦いを経験しているからもつと手古摺るかと思っていたがここまでだと幾らか拍子抜け感は否めないが被害は少ないに越したことは無い。

更にはパラワン飛行場の奪還をした時点でカリマンタン島へも上陸を開始。

第26歩兵師団

第33歩兵師団

第44歩兵師団

以上、計4個師団が一斉に旧コタキナバル国際空港（以降コタキナバル飛行場）周辺に一斉に上陸。同飛行場をまず最初に奪還。

流星に敵戦力は多かったが戦艦と重巡洋艦からの艦砲射撃と更には進出した一式陸攻からの断続的な爆撃でこちらも1週間程で攻略完了。

このコタキナバル飛行場には陸軍の第72飛行戦隊と第73飛行戦隊の疾風が計72機進出。

既に支援に当たっている。

一式陸攻は2週間後に到着する予定だ。

カリマンタン島はその面積が本州以上に広大で、攻略には少なくとも2か月は掛かるであろう、との見通しだ。

以外にも順調に攻略が進んでいる、そんな時だった。

「提督!!敵第3群と思われる戦艦群がバンダ海より急速接近中との報告が!」

「なっ!?!ここにきてか!?!」

敵の、結局発見することの出来なかった第3群と思われる戦艦15隻と軽空母又級3隻を含む大艦隊が急接近してきたのだ。

しかも数が増えている。

どうということだか分からない。

「全く、どういう事だ!なんだって今頃になって戦艦を出してきた!?しかも数が増えているではないか!」

参謀長が艦橋の中で怒鳴る。

確かにその通りだ。

何故、今頃になって戦艦を、しかも増強して繰り出してきたのか。

皆目見当も付かない。なんなら、軽空母3隻で守られているとは言っても我々第1機動艦隊の艦載機数であれば問題無く叩ける。

いや、戦艦と言う大きな障害物さえなければの話だ。

「提督、今立てられる予想ですが……」

「構わん。言ってくれ」

「恐らく、敵は一度アラフラ海方面に後退したのだと思われます。この方面ならば完全に敵の勢力圏内であり我々の偵察は困難であると言う理由から偵察を行っていませんでした。その隙を突かれたのでしよう。敵の狙いは恐らく我々を直接叩くことではありません。輸送船団を叩くつもりなのでしょう」

「この際、敵がどこに隠れていたとかそういうのはいらん。問題は、敵戦艦の狙いが輸送船団である、と言う事だ」

「はい、敵艦隊の位置と速度からすると、輸送船団に到達するのは今日の夜、凡そ8時〜10時頃であると思われる。夜闇に紛れて輸送船

団と、更には上陸済みである各師団と航空隊を艦砲射撃によつて撃滅する腹積もりなのでしよう」

「完全にしてやられたな……これでは我々が取れる選択肢は一つしかない」

「はい、ここから第1機動艦隊全空母を30ノットで向かわせたとしても艦載機による攻撃はギリギリ間に合いません。となれば我々も戦艦で応戦するしかありません」

「だが、戦艦の数では負けているし重巡洋艦の正確な数すら把握出来ていないであろう」

「はい。ですがせめてもの救いは随伴艦の数が軽巡が3隻程、駆逐艦が10隻程度である事です。が慰めにもなりません」

「幾ら随伴艦の数で勝つていても戦艦同士の戦いで負ければ意味は無い。だが、ここでむざむざやられるのを待つ訳には行かん」

「はい、となれば我々もすぐさま戦艦を、いえ重巡洋艦から軽巡洋艦、駆逐艦も出来るだけ差し向けなければなりません」

「勿論だ」

艦隊司令部は俺を含んで大騒ぎ、大混乱となったがここで引ける状況では無いと言う事は誰もが分かっていた。

方針は直ぐに決まり、俺は艦を移乗して率いている戦艦全てと重巡洋艦、軽巡洋艦、駆逐艦を幾らか引き抜いて前進。

編成は以下の通り。

第1戦隊

戦艦

金剛（旗艦） 霧島 リシユリユー

ビスマルク テイルピッツ

リットリオ ローマ

重巡洋艦

鈴谷 那智 羽黒 キャンベラ ザラ ポーラ

第1水雷戦隊

軽巡洋艦

能代

駆逐艦

秋月 照月 Z3 初月 雪風

第2戦隊

戦艦

長門（旗艦） 日向

クイーン・エリザベス

ウォースパイト ラミリーズ

ネルソン デューク・オブ・ヨーク

重巡洋艦

熊野 プリンツ・オイゲン

青葉 古鷹

第3水雷戦隊

軽巡洋艦

多摩

駆逐艦

宵月 満月 Z1 初雪 浦波 菊月 望月 若月 霜月 春月

村雨 隴

戦艦14隻は、7隻ずつの2群に分けた。

第1戦隊は、高速艦で固めている。

この第1戦隊は速力こそ最大30ノットを發揮出来るが、打撃力である主砲の威力は全艦が

40cm以下のビスマルクやリットリオが搭載している最大38

c m 砲が最高火力だ。

2 c m の砲口径の違いではあるが、艦砲の 2 c m と言うのはその威力の違いは大きい。金剛は 35・6 c m 砲と 38 c m 砲ではやはりその威力の違いは大きい。

だがその火力不足は速力で補う事になっている。

逆に第 2 戦隊は速力が遅いが打撃力のある艦で固めている。

長門が搭載する 41 c m 砲が一番火力と打撃力があり、その破壊力は、命中さえすれば折り紙付きだ。

急所、例えば弾薬庫などに命中すれば如何な深海棲艦の戦艦であろうと一溜りも無い。深海棲艦の装甲を貫けるだけの火力を持っているのが第 2 戦隊の彼女達だ。

しかしながら速力は最大 25ノットと遅い。

だが装甲は分厚く、そう易々とやられるような艦は居ない。かなり打たれ強い。

俺は、金剛に再び乗り込んでいる。

長門達には申し訳ないが今回は金剛達に旗艦を譲ってもらった。

「第 2 戦隊が敵戦艦を引き付けている間に、我々第 1 戦隊はその速力を生かして敵戦艦を殴る」

「分かりマシタ。でもものんびりしては居られなさそうですネ」

「ああ、幾ら長門達と言えど我々が手間取ってしまえばやられてしまうだろう。我々に求められるのは迅速に敵戦艦を叩くことだ」

そう、幾らビックセブンの 1 人である長門やネルソンとは言っても砲弾を何発も何発も食らっては一溜りも無い。

こんな事ならばヴァンガードが居てくれればまだ幾らかは楽な戦いが出来たのだが、彼女は残念ながら今回の作戦には参加していない。

と言うのも、未だ話していなかった事なのだが作戦開始直前である2週間前、主砲の射撃訓練中に主砲内で砲弾が暴発し第2主砲塔を丸々吹き飛ばしてしまったのだ。

それに伴い大規模な修理を行わざるを得なくなった。

しかも詳細な検査によると、暴発によって搭載していた砲弾の数が少なかったから良かったものの揚弾筒内で更に1発が爆発。

それによって艦体に亀裂が入るなど、戦闘後であれば大破判定間違い無しの損傷だった。

理由は未だに原因不明だが、ただの事故である線と人的ミスの両方で捜査を進めている。

その原因が分かるのは少なくともまだまだ先であろうと思われる。

そう言う訳でヴァンガードは作戦に参加していない。

参加していれば15対15で同数の戦いが出来たのだがそれを行っている暇も、時間も余裕も何もない。結局はたられればの話になってしまうのだ。

「提督、長門以下第2戦隊は敵戦艦に向かって進んでいます。このままであれば日没1時間程前に戦闘に突入するものと思われれます」

元々、我々はカリマンタン島、ザラワク沖を航行していた。

敵艦隊はジャワ海を通ってくるらしく、それならばこちらもジャワ海方面へ進出、急行して途中で二手に分かれると言う策を取った。

分離地点はブリトウン島沖で、第2戦隊にはそのままジャワ海を進ませて我々第1戦隊はスンダ海峽（スマトラ島、ジャワ島間）を抜けて遠回りをして、ロンボク海峽（バリ島、ロンボク島間）を通過してバリ海に進出。

目の前にはカンゲアン諸島があるからそこで背後から第1戦隊が奇襲、これで敵艦隊を迎え撃とうと言う事だ。

速力に関しては第1戦隊は26ノットで、第2戦隊は20ノットで進む。

この速力差であれば第2戦隊が会敵、戦闘が始まってすぐに第1戦隊も戦闘海域に突入することが出来ると踏んでいる。

なので第1戦隊は26ノットの高速で海上を進んでいる。

「烈風と流星はどうなっている？」

「はっ、既に敵艦隊に対して全力出撃、攻撃を加えました。ですが戦果は芳しくないようで……」

「構わん、報告してくれ」

「はっ、流星全機136機は全機、提督の指示通り爆装で出撃しました。結果としては敵戦闘機の迎撃は烈風が抑えたので敵戦闘機による迎撃は大したことはありませんでした。ですがやはり15隻もの戦艦が集中している中に突っ込んだこともあってか49機が撃墜され、残りの流星は3隻の戦艦に対して集中攻撃を実施しましたが対空砲火が余りにも濃密だったようですが、それでも命中弾はそれぞれ6発以上を出した、との事です」

「そうか、分かった。それでは次は我らの番だな」

「急げば何とか日没前までには収容が出来る、と言う事で攻撃隊を放ったのだ。」

魚雷を装備した流星を1機も送り出さなかったのは、雷撃を行う方が被弾、撃墜率共に多いからだ。

単純な出撃機数の問題でもあるのだろうが、同数だとしてもやはり低空で侵入する方が危険が大きいらしい。

しかも今回は戦艦15隻もいるのだ、そんな中に突っ込めばどうなるかは歴然としている。

そこで今回は全機爆装で敵の艦上構造物を薙ぎ払う事、そして兎に角、足止めを目的としての出撃だった。だがやはりその対空砲火は凄まじかった様で49機が撃墜されると言う結果に至った。

だがそれでも6発以上づつの命中弾を出してくれた。

最低6発だとしても、艦上構造物への被害は大きいだろう。

特に25番では無く50番であるところが大きい。50番の急降

下爆撃ともなれば戦艦であろうと無傷では済まされない。

願わくば、その内の1発だけでもいい、急所を捉えていてくれれば戦艦同士の戦いは幾らかは楽になるだろう。

「提督、第2戦隊が敵戦艦とカンゲアン諸島沖にて戦闘状態に入りました」

「よし！第1戦隊はこれより敵戦艦15隻に対して攻撃を仕掛ける。諸君、この戦い負けるわけにはいかない。ここで負ける事は祖国、人類そのものの破滅と心得よ」

俺はそう言つて、艦隊全艦の速力を29ノットへ増速。

一気にロンボク海峡を通過。遠目には既に発砲炎と思われる光が何度も起きています。更には戦艦の発砲音と思われる低い雷の様な音も聞こえてくる。

どうやら双方の艦隊はカンゲアン諸島の北西で衝突した様だ。

お陰でカンゲアン島の島影が発砲炎によって少しだけ確認出来る。既に太陽は水平線の向こうに沈み始めている。

いや、姿はもう見えず、遠くの空だけが茜色に染まっているばかりだ。

「艦隊、30ノットに増速。背後を突くぞ」

「はっ、艦隊、30ノットに増速。背後を突きます」

そう、命令を出すと艦隊の速力は30ノットにまで増速。

30ノットの高速で進んでいるから時速にすれば55.56km進むことが出来る。

1分間では926mも進むことになる。これだけの高速で進んでいれば射程に入れられるのも直ぐだ。

艦列を今更だが記そう。

第1戦隊

雪風
初月
鈴谷
金剛
霧島
リシユリユ一
ビスマルク
テイルピッツ
リツトリオ
ローマ
那智
羽黒
キャンベラ
ザラ
ポーラ
能代
秋月
照月
Z3

第1戦隊は雪風と初月を前路哨戒の為に配置、その後ろに重巡鈴谷を置いてその後ろに戦艦が続く。

第2戦隊

隴
村雨
古鷹
長門
日向
クイーン・エリザベス

ウオースパイト
ラミリーズ
ネルソン
デューク・オブ・ヨーク
熊野
プリンツ・オイゲン
青葉
多摩
宵月
満月
Z1
初雪
浦波
菊月
望月
若月
霜月
春月

こちら先頭に駆逐艦2隻と重巡を出してその後ろに戦艦が続く。
駆逐艦の総数は敵の凡そ2倍、第2戦隊の方向によれば敵重巡洋艦
の数は6〜8隻程。

戦艦の数は言わずもがな、15隻。
1隻分負けているが、深海棲艦の戦艦は全て艦砲は40cm砲なの
に対してこちらは先程も言った通り長門とネルソンしかない。

火力に関しては最低でも2倍以上の開きがあるがそんな事は関係
無い。

今は、持てる力を全て使って敵戦艦を叩くのだ。

こんな事になると知っていれば、大和か武蔵のどちらかを修理して

実戦に出せるようになっていけば……

いや、これこそ「たれば」も過ぎる。

今は、目の前の事に集中しなければならぬ。

「提督、射程に入りました」

「まだまだ、まだ撃つな。もっと引き付けてからだ」

射程に入ってもまだ撃たない。

30ノットの高速で進んでいるのだから3万メートルの距離では絶対に当たらない。

「全艦、最後尾の敵戦艦に1万で狙いを付けろ。1隻つつ集中砲火を浴びせてやれ」

「了解しました」

既に距離は1万7千をきっているが撃たない。

出来るだけ近づいて至近距離で叩き込んでやるのだ。

「提督、距離1万になりました」

「よし、全艦試射は無し、一斉射。砲撃開始」

「撃てー！」

そう俺が言うと、戦艦7隻と重巡、軽巡、駆逐艦全艦が一斉に単縦陣で進む戦艦の最後尾に向けて砲撃を行った。

戦艦58発の主砲弾が一斉に敵戦艦へ落下。

更には重巡、軽巡の放った61発の砲弾も一斉に降り注ぐ。

駆逐艦に至っては速射を行って何発撃ち込んだのかすら分からない。

合計、119発の大口径の砲弾の中で命中したのはそれでも試射をせずに行ったから命中率は良くないものの、下手な鉄砲も数撃ちや当たるとはよく言ったもので少なくとも爆発が20回は起きた。

「命中弾多数！」

そう、見張り員が報告すると艦橋内で歓声が上がる。

それは当然だ、20発全てが戦艦の放った砲弾だとすれば轟沈すらあり得る。

幾ら深海棲艦の戦艦と言えども20発の命中の損害は大きい。

炎上を始めており、周りの艦の影すら見える。

「次、目標敵戦艦10番艦。測距急げ」

「次目標、敵戦艦10番艦。測距急ぎます」

次に目標としたのは敵の10番目に進んでいる戦艦だ。

敵艦隊は1隻事の距離が300mは空いているように見える。

そのすぐ12か13番艦でも十分に狙えたがそれではしつかりと狙いを定められない。だから10番艦を目標とした。

「全艦、砲撃準備完了」

「撃て」

「撃エー！」

金剛の艦体が一斉射によって大きく揺れる。

他の艦も命令に従って砲撃を行う。

重巡と軽巡は既に各個射撃に移らせた。

距離は1万mなので先程の測距と大きく変わらない。

それぞれの巡洋艦は目標を付けては手あたり次第に砲弾を叩き込み命中弾を出している。

再びの全戦艦の一斉射によって同じく命中弾は10発を数えた。

今回、我々がやった砲撃方法は全艦の測距データを纏めて再計算、そして再び数値を出すと言う物だ。

一種の統制射撃、と言われるものでレーダー射撃とは違う。

レーダー射撃は、射撃用レーダーや対水上電探を用いての射撃だが統制射撃は全ての艦が同じ目標に向かって砲撃を行う。

計算時間を稼ぐ為に目標の艦を大きくずらしていると言うのもある。

10発の命中ともなれば、一溜りも無い。

やはり、当たり所によつては轟沈すら有り得る。

だが見た感じ、速力の低下はあれど沈む様子は無さそうだ。

だがまあ、いい。

次の目標に狙いを付けよう。

次は敵の5番艦だ。

あれから統制射撃を2回実施した。

お陰で敵戦艦4隻に大きな損傷を与える事に成功した。

その内の2隻は明らかに速度が落ち始めて艦隊から落伍し始めて
いる。

だが第1戦隊の活躍はそれまでだった。

敵艦隊の1番艦を3回目で砲撃した後、速力を敵艦隊に合わせて2
0ノットに落としたのが失敗だった。

これによつて敵艦隊と並んでしまい速力に物を言わせた殴り合い
が出来なくなつてしまった。その気になれば30ノットに戻せなく
もなかったが各艦の損傷によつてそれは出来なくなつてしまい諦め
て同速力による同航戦になつてしまった。

幸いにも4回目の統制射撃は成功したものの、流石に敵艦隊も黙つ
てはいなかった。

15隻の戦艦の内、7隻をこちらの対応に向けてきたのだ。

お陰で20分間の砲撃戦によつて双方共に多数の命中弾を叩き出
し、

敵戦艦は既に7隻が炎上しているがそれはこちらも同じで霧島が
多数の命中弾により速力低下、艦列から大きく落伍している。

更にはリットリオが被弾によつて後艦橋が大炎上している。

だが戦意はまだ衰えていないのか砲撃は続行中だ。

それ以外にもリシユリユーは前部第1主砲塔が敵弾の直撃によつ
て使用不可能。

テイルピッツは後部第3主砲に命中弾が出て注水、使用不可能。リシユリユーはあちらこちらから火の手が上がってきながら松明の様に燃え盛っている。

金剛とローマは被弾数は2、3発と少なく十分に戦えるがそれも時間の問題。

第2戦隊は長門とネルソンが集中砲火を浴びてネルソンに至っては殆ど廃艦寸前で既に撤退。

長門も速力こそ未だ20ノット未だを發揮しているが副砲は全て破壊されて第1、第4主砲塔が緊急注水によって使用不可能。

長門とネルソンに狙いが集中したお陰かそれ以外の戦艦は未だ健在、戦闘を続行しているが戦闘それ以下の巡洋艦や駆逐艦の被害がかなり広がっている。

プリンツ・オイゲンは速力が大幅に低下、報告によれば4ノットしか出せないし、長門の前を進んでいる古鷹は艦橋に直撃弾を食らって艦橋下部が大きく抉れている。

他には駆逐艦初雪、望月、春月が落伍し戦闘不能。

それ以外にも大小様々な被害を被っている。

我々は第2戦隊と敵艦隊を左右から挟むような形で戦っている。

全体を見れば最初の第1戦隊の統制射撃の影響もあつてか我々が優勢に事を運んでいるが何時、それが引つ繰り返されるか分からない。

それでも砲撃を続けている。

「ビスマルクの放った砲弾が敵4番艦に命中、大爆発！」

「ううむ、どうにもビスマルクとテイルピッツの命中率が高いな」

「恐らく、我々と使用している光学機器の性能差によるものでしょう。ですが嬉しい誤算です。このままいけば……」

「いや、油断は禁物だ」

俺がそう言った途端に金剛に直撃弾が発生、艦が大きく揺れる。

「クツ……敵も中々どうしてやってくれるではないか……」

「提督、敵弾は艦中央部に命中、副砲の幾つかが使用不可能になりました」

「なんとかしてもう2隻敵戦艦を削れば勝機は十分になるのですが……」

「その2隻が難しい。兎に角、目の前の目標戦艦を叩かなければ話は始まらない」

とは言った物の、そう簡単には行かないか。

あれから20分後。

戦闘の様相は大きく変化していた。

と言うのも、重巡以下の水雷戦隊に突撃を命令したのだ。

それに伴い第2戦隊は大きく右へ舵を切り、艦首を敵艦隊に向けさせた。

そして重巡以下水雷戦隊は敵駆逐艦などを強行突破、距離2500まで接近して酸素魚雷を一齐に放った。

しかもそれを2回。

お陰で敵艦隊はその必殺の酸素魚雷をどてっ腹に4隻の敵戦艦へ命中。

それぞれ2〜4本と少なかったがその2〜4本が決定打となった。

速力を大きく落とした敵戦艦は艦隊から次々に落伍していき、気が付けば8隻が艦隊より落伍、7隻にまでその数を減らした。

そこに第1、第2戦隊の全艦が集中砲火を食らわせて4隻が大炎上中、残りの3隻も航行はしているが稼働出来る主砲は少なく、1つの砲塔が何とか射撃を行っているという状況だった。

「提督、敵戦艦5番艦の行き足が止まりました！」

「よくやった。だがまだまだ戦闘は続くぞ。気を引き締めろ」
「はっ、勿論です！」

そして今、敵の戦艦がもう1隻艦隊から落伍していった。
だがこちらも手酷くやられている。

霧島、リットリオ、リシユリユ、テイルピッツ、リシユリユ、長門、ネルソンは大破。

金剛とローマも大破寄りの中破。
ビスマルク、テイルピッツが中破。

残りの戦艦もその殆どが中破以上の損害を受けており、巡洋艦なども同じような状況だ。

だがそれは敵戦艦も同じで炎上、各砲塔使用不可能、速力低下など様々な損害を負っている。

そして、漸く決着の時がやってきた。

水雷戦隊が一度離脱し、魚雷を再装填して再び敵戦艦6隻に魚雷を叩き込んだ。

速度の大きく落ちた戦艦など彼らからすれば良い的でしか無く次々に水柱を上げる。

「提督、敵戦艦4隻に魚雷4本が命中。完全に行き足が止まりました。残りの2隻にも2本ほど命中していますが沈む気配は無く、針路反転、撤退していきます」

「そうか……良くやってくれた」

「追撃いたしますか？」

「いや、我々も手酷くやられたからな、深追いは禁物だ」
「では……」

「現時刻を持って戦闘は終了したものとする」

「はっ、全艦に通達します」

その俺の一言により、敵艦隊へも追撃を行うことは無く戦闘は終了了。

それから1時間後、各艦から被害報告が上がり、それらの集計が終わった。

大破

金剛

霧島

長門

ローマ

ビスマルク

ティルピッツ

リットリオ

リシユリユ一

ティルピッツ

リシユリユ一

ネルソン

鈴谷

那智

ポ一ラ

能代

秋月

熊野

プリンツ・オイゲン

青葉

多摩

宵月

満月

中破
日向
クイーン・エリザベス
ウォースパイト
ラミリーズ
デューク・オブ・ヨーク
羽黒
古鷹
キャンベラ
ザラ
初雪
浦波
菊月
望月
若月
初月
照月
Z 3
村雨
霜月
春月

以上となった。

無傷とは行かないが雪風、朧、Z 1の3隻は比較的損害は少ない。
特に大破艦で酷いのは長門、ネルソンであり、この2隻に関しては
どうして浮いていられるのか不思議でしょうがないぐらいになって
おり、はつきり言ってしまうえば廃艦同然の有様だった。

それでもまだ自力航行が可能だ。

と言つても2隻とも3ノットを發揮するのがやつとの有様だ。
なんとか修理をして7ノットを發揮出来るまでにはなつたがそれ
でも酷い有様だ。

それ以外にも速力を10ノット以下しか發揮出来ない艦は数多く、
即座に日本本土へ向けて回航。

だが日本本土へ到着するのはこの速度だとはつきり言つて1か月
以上掛かる。

まあ、急げ急げと言つても速度が出せないのだからしょうがない。

確実に、1隻も欠けることなく呉に到着するよう厳命。

道中では紫電改や疾風、一式陸攻などが直掩に就く。

そして俺は再び蒼龍に移乗、指揮を執り始めた。

第27話

「提督、お疲れ様」

「ああ、ありがとう、蒼龍」

蒼龍に移乗すると蒼龍と艦長達が出迎えてくれた。

艦橋に上って俺が席に着くと朝飯が運ばれてくる。そう言えば、今の今まで金剛の艦上で被害の集計やらを行っていたから何も口にしていなかったな。

「提督、早めではありませんが朝食をどうぞ」

「ん、ありがとう。すまんな」

「いえ、これが私達飯炊きの仕事ですので」

礼を言うと給糧班長が敬礼をして艦橋から降りていく。

取り敢えず、先ずは腹ごしらえだ。あれだけの戦艦同士の砲撃戦を指揮したのだからかなり腹が減っている。さっきから腹の音がずっと鳴り響いているが周りの蒼龍達には気が付かれていないだろうか？

朝食は何時もと変わらず握り飯に味噌汁、沢庵だがこれがまた塩味が利いていて旨いのなんの。握り飯なんか5つも置かれていたのに沢庵と共に物の5分で平らげてしまったし、味噌汁も具は無いとは言ってもそれだけで十分に感じられる程に旨い。

一息で飲み干すとふう、と息を吐く。

よし、腹ごしらは終わった。

ならば次にやるべき事は決まっている。

「蒼龍、陸軍の方はどうなっている？」

「そうだね、進軍速度以外は概ね順調かな。ただ補給が若干滞っている部隊もあるようだけど少なくとも今すぐに戦闘が出来なくなるとか非戦闘損耗が増えるって状況でも無いらしいよ」

「進軍速度？どういうことだ？何か問題でもあったか」

「ジャングルっていう地理的特性だから進軍速度が必然的に遅くなっちゃうんだ」

「だがそれは想定済みの筈だ。それを踏まえた上での攻勢計画を立てたのだが」

「どうにも、想定してたよりもずっとジャングルが深いらしくて、ただ歩くだけでもかなり手間取るらしいんだ。そこに工兵隊が補給用の道も作りながらだからそれと合わせなきや補給が出来なくなつて戦えなくなつちやうでしょ？そうすると余計に進軍速度が落ちてて。今は進軍速度が1日に6〜7km進めれば良い方らしいし」

「そんなに酷いのか」

「うん、ジャングルでの戦闘経験がある陸軍妖精なんて1人も居ないしね。ジャングルでの戦いに慣れていないっていうのもあつてか損耗はそうでもないけど疲労の方が凄くて。とてもじゃないけど1日15〜20kmなんて進めないって。」

「うーむ、見通しが甘かつたと認めざるを得ないな……今までは少数精鋭の偵察班だったから迅速な移動が出来た訳か……それを元に考えたのが悪かつたか」

「それにジャングルでの行軍とか戦闘に習熟してる兵士が一人も居なくて慣れていないからあちこちの部隊が道に迷つて、予定してない良く分からない場所に出てちやったりしててこういうのも進軍速度が遅い理由の1つかな。ただ、各小隊事に無線機を配備してたお陰で連絡が取れなくなつて孤立するっていう事態も今の所起きてないみたい。町の攻略も部隊が全部揃つて、準備を万端に行つてから攻撃を開始するようにつて提督が厳命したでしょ？」

「確かにそうだな。その命令が裏目に出たか」

「ううん、それは違つよ提督」

「ん、どういう事だ？」

「提督がその命令を出したお陰で戦力の逐次投入を避けられてるんだ。だから進軍速度こそ遅いけど被害が想定よりもずっと少ないんだよ？」

「そうなのか……」

「まあ、沖縄の時の抵抗を予想していたからね。その想定が良い意味で外れたっていうのもあるんだろうけど」

ふうむ……

確かに嬉しい誤算も幾つかあるにはあるが全体的には宜しくない誤算の方が大きい。

まず、進軍速度の問題だ。

これは予定よりも大幅に作戦完了時期がずれ込むという事に他ならない。

今回は確実に小隊以上の部隊で行動する様に、と命令してあるからバラバラになるなんて事は無いらしい。それに無線機も小隊事に持たせているからそれなりに連絡も取れている。

だがジャングルと言う未開の地を進む以上どうしてもそれらの対策を講じて問題も出て来る訳だ。

しかもただ探検隊の様にガイドが居て、その案内通りに進めばいい、と言う訳ではない。彼らにはガイドなんて立派な物は居ないし、しかも敵のゲリラ戦も予想されている事から余計に慎重に進まねばならない。

しかも一歩、人工の道を離れてジャングルの中に入れば右を見ても左を見てもジャングルの中はどこもかしこも同じような光景が延々と広がっているのだ。

そりや当然迷子になる部隊も出て来る。

しかもGPSなんて便利な代物は無い訳だから当然だ。

そんなもの、深海棲艦の妨害電波で使えないしそもそも通信機器が無い。

酷い小隊だと、丸々1週間彷徨った挙句に部隊の合流地点とは十数kmも離れているなんて事もあるらしい。

だが幾ら無線機があるとは言ってもそれぞれの正確な場所は伝えられないから取り敢えず連絡を取るだけとなってしまっているのも解決策を考えなければならぬ。

一応、コンパスなども使っているが迷うのだ。

補給や迷子、各部隊での通信と言った、それらの事を無視すれば恐

らく1日で10km以上は進めるだろうがそうなれば部隊は孤立、戦わずして死んでいく将兵が続出するだろう。そんな状況だけは絶対に作ってはいけない。

でなければ彼ら陸軍妖精達が何のために毎日の訓練に励み、そして今命掛けて戦っているのか。

それに意味を持たせるのは俺の役目なのだ。

俺が居る内は絶対に補給が出来なくて餓死者や病死者を出してなるものか。

そして次に問題なのは補給だ。

即座に影響が出る訳ではないが補給が滞ることがある事。

これは短期的に見れば大したことは無いのだろう。だがそれが何度も何度も起きたらどうなる？心理的にも大きな影響があるだろうし、そもそも戦わなければならぬ、戦わざるを得ない場面で戦えなくなるかもしれない。

それを考えれば、進軍速度以上に即座に解決しなければならぬ問題だ。

部隊の損耗は想定よりもずっと少なく沖繩の時の様に作戦行動に支障を来たすレベルには到底及ばない。これはかなり嬉しい誤算であつたと言えるだろう。

それぞれの中隊規模での損耗率はどれだけ高くても1割程度。

沖繩であればとつこの昔に中隊規模の部隊は最悪消滅していたのだからそれを考えれば遥かに軽い。戦闘力も十分に保持しているから問題は無い。

「何か、解決案は無いものだろうか……」

「補給に関しては、案があります」

「何？説明してくれ」

「まず、陸軍の疾風は最大で500kg分の爆弾を搭載出来ます」

「それは知っているとも。それがどうかしたのか」

「疾風に、500kg分の食料弾薬医薬品などの補給物資を搭載させて空中投下を行えば良いのです」

「ほう……」

「これならば前線の部隊へ少ないとは言っても滞ることなく補給を行います」

「ふむ……」

「軽便鉄道を敷設するという方法もありますが、そうになると本土から線路を敷設するための資材を運び込んで、更に前線が進むごとに線路を伸ばさなければなりません。輸送量では絶対的に軽便鉄道の方が多いですが敷設までに時間が掛かる事などを考えれば空中投下の方が今現在は効果的であると考えます」

参謀長が提案してくれた案だが……

考えてみる。

確かに疾風を使えば十分に補給が出来るだろう。

何故海軍の烈風や流星ではないのか。

というのも烈風は積載量が6番を2発程度しか搭載出来ない。

流星は80番を詰めるし、なんなら魚雷1本、1トン分までならば問題無く搭載出来る。

だが海軍が航空機による空中投下での補給を担当するとなると一度、補給物資を空母に乗せなければならぬ。この手間はかなり面倒なのだ。

ならば陸上にある飛行場に駐屯している陸軍の疾風か、最悪海軍の紫電改でも500kg分は搭載出来るからそっちで行った方が絶対に良いに決まっている。

「よし、その案を採用しよう。各飛行隊にその旨を伝えると共に担当する師団や部隊の割り振りを行ってくれ。それと、戦闘機だけでは足りない事もあるだろうから一式陸攻もや二式大艇も使ってはどうか

？」

「そうですね……確かに戦闘機には制空もやつてもらわなければなりませんから、そうしましょう。一式陸攻20機と二式大挺12機で数は十分だと思います」

「よし、それならばそうしよう。コタキナバル飛行場とヌヌカン飛行場が運用可能状態にあるからそこを拠点としよう。タラカンとマリアウの両飛行場はまだ使えないのだったな？」

「はい、タラカンは8日前、マリアウは3日前に攻略が完了したばかりですから。タラカンはあと1週間もあれば使用可能となる様ですがマリアウにはまだ工兵隊が到着しておらず、2日後に到着予定ですから、2週間後には使用可能となる予定です」

「そうになると、航空隊の進出も考えるところでしょう出来るようになるのはまだ先だな」

と言う訳で、紫電改と疾風、一式陸攻、二式大艇の4機種で各部隊への空中投下による物資投下を行う事となった。

軍艦や航空機での500kgや800kg、1tと言う重量は確かに重いがそれでも少ない方だ。

だが陸上部隊からすると500kgの物資と言うのはかなりの量になる。

それを送り込んでもらえるというのは物資補給が滞る心配無く、困らないという事だ。

そして、それによって幾らか進軍速度の問題が改善された。

今現在、我々はカリマンタン島北部の沿岸部であるタラカンからマリナウ、バカララン、ロン・スリダン、ロン・ラマ、ミリと言う沿岸部の町に至るまでのラインまでを奪還完了している。

今現在、北カリマンタン全域の奪還を目的としてそのまま東カリマンタン、南カリマンタン、中カリマンタン、西カリマンタンと時計回りでの攻略を目指している。

だが進軍速度の問題もあり、完全にカリマンタン島全域を制圧するにはまだまだ掛かるだろう。

それにリング泊地、正確にはリング島とシンケプ島から始まりシンガポール海峡までの島々の奪還に海軍陸戦隊4個歩兵連隊と2個砲兵連隊が。

スマトラ島に残りの陸軍師団、第51、63、78、81歩兵師団が奪還を開始。

残りの第92歩兵師団はカリマンタン島へ増援として送られた。

何故、一か所の奪還に注力しないのか。

というのも、仮にカリマンタン島へ全師団を投入したとしよう。そして奪還が終わったとする。そうすると再び輸送船に師団を積んで、消耗した物資やら人員を補充しつつスマトラ島やリング泊地を奪還しなければならぬ。

そうなると作業は複雑になってしまう。それならば損害の無い状態の師団を送り込んで早々に奪還を成功させてしまった方がいいのだ。

上記の問題はスマトラ島でも発生しているが飛行場の奪還が未だ1つも出来ていないのでスマトラ島では出来ない。というのも沿岸部に飛行場が存在しないのだ。

パレンバンには飛行場が1つ存在しているがそちらの方までまだ部隊は侵攻出来ていない。

リング泊地には飛行場は存在しておらず、奪還完了後に建設予定だ。

リング泊地に関しては順調に奪還が進んでいる。

というのもカリマンタン島やスマトラ島のように広大な土地を有しているわけでは無いし、更には面積が狭いからそれぞれの歩兵連隊と砲兵連隊での相互支援が楽という側面もある。

上陸から2週間でリング島、シンケプ島、及び周辺の島々の奪還完了了。

続けてガラン島、レンパン島、バタム島と島伝いに攻略をしていき、カリムン島、ビンタン島までを2か月以内で奪還するという計画を見事に果たして見せた。

海軍陸戦隊はリアウ諸島攻略へ向かい、リアウ諸島の完全制圧も時間の問題だと思われる。

そして、更に1か月後。

リアウ諸島奪還完了。海軍陸戦隊はバンカ島、ブリトウン島の2島の奪還を開始。

カリマンタン島では南カリマンタンの攻略に取り掛かり、他より比較的ジャングルの薄いこの地域はまあ、妖精達の慣れもあつてか進軍速度が今までの2倍、1日に10kmを進めるまでになっていた。

バリクパパンの奪還も完了し、同地にはバリクパパン飛行場が建設されて陸軍の疾風36機と海軍の一式陸攻24機が先発して送り込まれ、物資空中投下任務と制空任務に就いている。

スマトラ島では南スマトラの奪還が完了してパレンバンも奪還。

同地の飛行場は第1スマトラ飛行場として運用すべく整備されている。

更に潜水艦隊はマラッカ海峡とスンダ海峡に多数の機雷を敷設任務に従事しており敵艦隊の侵入を防ぐべく奔走している。

輸送船団は、訓練が終了した空母神鷹を加えた護衛艦隊と共に物資を運搬。バリクパパンとパレンバンなどの油田地帯には戦闘で破壊された施設復旧のために技術妖精が派遣されて石油採掘施設を大急ぎで建設中。

他にも鉱石資源やゴムなどの各種資源も奪還した地域で採取できるため、そのための設備の建設を急いでいる。

これらの設備は早ければ1〜2カ月ほどで運転を開始出来る見通しだ。

そうすれば本土へ原油を運び、精製、燃料を蓄えられる。

今までは大規模輸送作戦で得られたものを切り崩して使っていたが、それも作戦の時には惜しみなく使用した。だがやはり艦艇用の重油の消費はどうしても多くなる。

母艦航空隊訓練の為に空母を動かす時と新兵の訓練の為の時、そして点検のために艦を動かす以外は一切動かさなかった。

そうすれば、何とか今日の南方方面奪還作戦にまでどうにかなる予定だった。

実際に燃料の備蓄量は今現在、ギリギリ保っている。

もしこの作戦が失敗していたならば潜水艦隊を動かす分の燃料さえなくなり、俺が着任した時以上に追い詰められていただろう。

だが幸いにも敵空母艦隊をも打ち破り、更には戦艦群との砲撃戦も、どちらも大きな損害はあれど轟沈艦を出さずに切り抜けた。

これほどに上手く行って良いのだろうか、と考えてしまうぐらいには順調だ。

陸軍の方も想定されていたよりもずっと少ない被害で戦い、無事に各島の奪還を進めている。

だが、やはり気を抜けないのは確かだ。

一歩間違えれば綱渡りの綱を踏み外すかの如く、底の無い谷を真っ逆さまに落ちていく事だろう。

今日も今日とて、護衛艦隊に守られながら各島へ輸送船団が物資を運んで揚陸させている。

我々第1機動艦隊は護衛艦隊と共に輸送船団の守りにについている。

今回輸送船団は、各種物資の他に軽便鉄道敷設の為の資材を運んできた。

というのも、カリマンタン島とスマトラ島はその島の大きさ故に各地の港湾施設を奪還してそこを補給の拠点としても直ぐに補給線が伸び切ってしまう、島の内陸部へ進むほどに補給が困難になってくる。

今の所は工兵隊が切り開いた細い道をホハなどの各種車両を全て前線部隊の物すら使用して何とか補給出来ているような状況だ。

そこで、当初案として出て来ていた軽便鉄道の敷設を実行に移す事にしたのだ。

先ず、敷設するのはカリマンタン島だ。

バリクパパンから敷設を開始する事になった。

理由としては、今後、バリクパパンは原油の採掘を行う重要拠点の一つであり、ここに軽便鉄道を敷設しておけば後々何かと楽になるであらう、との見通し空だった。

軽便鉄道の敷設は物資の輸送だけでなく、敵が反抗作戦を実施した場合に迅速に部隊を移動、展開が可能になる。

これは大きな利点だ。

しかも軽便鉄道の敷設が完了すれば航空隊が物資の空中投下を行う必要は大きく減り、その分敵機との戦闘に注力出来る。

というのもカリマンタン島もスマトラ島も敵と接する最前線であり、今現在も毎日の様にファイリピン、スラウエシ島、ジャワ島、マレー半島などから敵機が来襲してきてはその都度迎撃を上げている。

今の所、全体では敵の投入戦力もそこまで多いと言う訳ではないので凌げて入るがこれがもつと大規模になれば防ぐことは出来ない。

深海棲艦も、今回の上陸に際して各地に大急ぎで飛行場を建設し始めたらしく、スラウエシ島に潜入している班からは敵飛行場建設の前兆あり、との報告が何度か上がって来ている。

だからこそ奴らの戦力が整い、攻勢に出られる前に何とかしなければならぬ。

スマトラ島はカリマンタン島への敷設が終われば続いて行う予定となっているのでまだ先の事だ。

「提督、輸送船団の物資揚陸完了しました」

「ん、報告ありがとう。問題は無かったか」

「はい、問題無しです。輸送船団は本土へ向けて出港しました」

「そうか……今回も無事に輸送が成功して良かったな」

「はい」

3か月後。

漸く西カリマンタンの攻略に終わりが見えてきた。

スマトラ島の方も残すはメダン以西となってる。

カリマンタン島の軽便鉄道はこの3か月間、急ピッチで敷設が進められて全体の凡そ7割ほどが敷設完了、運転している。

残りの3割も敷設が進められており2か月も有れば使用出来る。

更にはバリクパパンやパレンバンと言った資源を産出する場所の設備も整い、タンカーや資源を運ぶ輸送船が新たに輸送船団に組み込まれて日本と各地を行き来している。

バリクパパンにはそこを守るべく3つの飛行場を新たに建設、第1から第3バリクパパン飛行場と命名。

パレンバンにも新たに2つの飛行場が建設された。

漸く、ここまで来ることが出来た。

資源輸送ルートを確保する事が出来れば日本は、十分に戦うことが出来る。

それぞれの飛行場には戦闘機を陸軍が、爆撃機を海軍が進出させて

いる。

それらの航空隊は毎日の様に来襲するスラウエシ島などからの敵機を迎え撃っている。

兎に角、終わりが見えて来たとは言ってもまだまだ戦いは続く。

気を抜くことは出来ない。

第28話

あれから更に2か月後。

漸く南方方面、カリマンタン島とスマトラ島の攻略を完了した。

攻略を担当した陸軍師団と海軍陸戦隊はそのまま守備隊として守りにっている。

ジャングルと言う特性上、戦後処理が終了次第、即座に訓練に移る予定だ。

戦後処理と言うのは、各地での防衛体制の確立に加え島内に張り巡らせるように敷設している軽便鉄道敷設の支援、飛行場設営支援など多岐に渡る。

島内に張り巡らせている軽便鉄道はあちこちの陸軍駐屯施設と通じており、物資輸送や人員の輸送が迅速に、かつ安全に行えるようになっていた。

特に、重要施設であるパレンバンやバリクパパンなどにはそれぞれ4つつつの飛行場が稼働中だ。更には増援として2個師団を送り込み丸々2個師団が防衛に就いている。

飛行場には陸軍の疾風を主力として、海軍が一式陸攻や二式大挺などの攻撃兵力を送り込んでいる。

紫電改も送り込んでいるが、日本本土の陸軍飛行戦隊を引き抜いて疾風を送り込んでいるからその穴埋めとして日本本土各地に配備を進めている。

何故陸軍を主力としているのか、と言うと陸軍で固めた方が連携が取り易いであろう、との事からだった。

しかしながら哨戒任務に就くのは海軍の二式大挺、もしくは一式陸攻であり敵機迎撃や敵艦隊攻撃任務になれば陸軍の疾風は海軍の誘導に従って行動する予定だ。

現状、問題らしい問題と言えば敵艦隊が進出してきた場合、どのように防衛を行うかという事が残っている。

というのもリンガ泊地を奪還したは良いがマレー半島からの敵航空戦力の来襲があるので投錨が出来ない状況にある。

マレー半島上陸も考えたがこれ以上戦線を広げるのは現有戦力全てを投入しても困難であるとの結論に至った。

そも、奪還したパラワン島、カリマンタン島、スマトラ島、リンガ泊地の維持を行うので精一杯なのだ。

というのも輸送船の数自体は戦時緊急として建造された輸送船を多数保有しているがその護衛を行うための戦闘艦艇が圧倒的に不足しているのだ。

輸送船団だけで送り出せば間違いなく深海棲艦の餌食にしかならない。

沖縄からスマトラ島に至るまでの飛行場から疾風などが上空直掩に就いているが万全とは言い難い。

恐らく通商破壊艦隊が出張ってくれば殆ど抵抗らしい抵抗を行わずに殲滅されてしまうだろう。

戦線の拡大は好ましくない。

その気になれば奪還、占領は可能ではある。

だが維持が出来ないという問題があるからこれ以上の攻勢に出られないのだ。

更に問題とされていた衛生環境の整備だが、そちらに関しては沖縄と同じく医薬品を大量に送り込み、万が一発症した者が居れば新型輸送機を使用して沖縄に建設した陸軍病院に後送するようになっていく。

そして俺はというと、先ず本土に帰国後に待っていたのは幾つかの勲章の授与と、大量の書類仕事だった。

というのも、南方方面での功績を称えるという事で勲章を幾つか授与された。

まあ、この勲章はプレハブの自室の棚の中に突っ込んである。正直、式典の時以外は身に着ける気は更々無い。あれ、じゃらじゃらして気に入らない。と言うか、物凄く邪魔だ。

で、大量の書類と言うのは俺が南方方面に出張っていた時に溜まり

に溜った物と今回の作戦における各種の報告書と損害を出した事に対する始末書の山。

正直言って報告書ならば分かるが始末書は戦闘を行えば必然的に被害は出るのだから書く必要はあるか？と甚だ疑問ではある。

だが書かなければならないと言うのが現実ならば仕方が無い。

文句を言って仕事を滞らせるくらいならばちやっちやと書いて別の仕事を進めた方が良い。

さて、攻略を行ったスマトラ島、カリマンタン島だが。

両島には資源が数多く眠っており、既にパレンバンやバリクパパン、それ以外の場所からも石油を始めとした各種資源が日本へ向けて送られている。

行きは補給物資を積んで、帰りは各種資源を持ち帰って来る。

その様な感じだ。

マリアアや赤痢などの患者は船だと時間が掛かるので航空機で運んでいる。

毎回の輸送船団は、タンカーが20隻に輸送船が30隻づつの計50隻だ。

勿論、護衛艦隊も付いている。ただ、輸送船団の規模としては明らかに少ない。

護衛艦隊の規模は、

第1護衛艦隊

航空母艦

大鷹 神鷹 海鷹

重巡洋艦

最上

軽巡洋艦

名取 鬼怒 天龍 龍田 神通

駆逐艦

東雲 白雲 浦波 狭霧 子日 有明 海風 江風 峯雲 霞
藤波 沖波 清霜 白雲 有明 長月 荒潮 親潮 黒潮 竹 桃
椿 楓 樺 楠 初梅

計34隻

空母神鷹と本土防衛艦隊丸々新しく組み込み、鳳翔を母艦航空隊錬成の為に引き抜いた。

神鷹の搭載機数は鳳翔、大鷹と同じく36機で零戦52型丙20機、零戦62型12機、彩雲4機となっており合計で108機になっている。

数で見れば多いと感ずるだろう。

だが108機と言う数は決して多くは無い。寧ろ少ないとすら言える。

迎撃に専念すればまあ、何とかなるかもしれない。

それが烈風であったのなら、だが。

彼女達が搭載しているのは全て旧式の零戦。旋回性能こそ深海棲艦機に勝てはするがそれ以外の最高速度、急降下耐性、防弾性能、武装、全てにおいて負けている。

まあ、居ないのと居るのでは大きく違う。

事実、何度か深海棲艦機による攻撃を受けているがそのすべてを撃退、更には敵潜水艦を3隻撃沈するという成果も挙げている。

だが逆もまた然り。

輸送船団にも被害は出ており、今までに輸送船の被害は21隻に上っている。対潜警戒を疎かにしているとと言う訳ではないがそれでも隙は出来てしまうし、バリクパパン方面への輸送船団が一番危険度が高い。

と言うのもスラウエシ島から敵機が襲い掛かって来ており、母艦航空隊の零戦や陸軍の疾風が迎撃に就いても突破されることが多

い。

二段構えの防空によって被害は抑えられているがそれでも毎回の輸送船団で2〜4隻ほどの被害が出ている。

しかも戦時緊急造船型なので爆弾1発ですら致命傷、機銃掃射ですら沈められる可能性が極めて高い。

敵もそれを分かっているのか毎回毎回、多数の機体を送り込んで来て戦闘機にすら噴進弾を搭載して襲い掛かってくる始末。

噴進弾は戦闘艦艇、それこそ大型艦からすれば何ともない物だが小型艦である駆逐艦や防御力の極端に低い戦時緊急造船型の輸送船からすると十分以上の脅威になる。

だから護衛に就いている空母2隻の零戦や上空直掩任務を共に行っている疾風にバタバタと落とされるが深海棲艦の物量からすれば大した事の無い、痛くも痒くも無い。

しかもその内の何機かが突破して輸送船に被害を与えているのだから、失わう物資の量を考えれば我々の方が痛手だ。

現状の解決策としては出来るだけ沿岸部を航行して各地の航空隊の支援を受けやすい様にするぐらい。

防御力を向上させた輸送船も設計されてはいるが兎に角、輸送船の数を揃えなければならぬ我々は防御力を向上させるならば、単純計算で2倍3倍の防御力とするとその分1隻か2隻作れるので防御力向上型の建造は見送られている。

要は、

防御力は低くとも数を揃えるか。

防御力は高いが数を揃えられないか。

この2択となる訳だ。

だが戦時緊急造船型は防御力が低いとはいえ何の利点も無いわけでは無い。

その防御力と引き換えに量産性があり重量が軽いので物資満載時でも20ノットを発揮することが出来る。

という事は機動艦隊程ではないにせよそれなりに速力を出すこと

が出来るのだ。

だが防御力を向上させたら、先ず使用する鉄鋼の量が増えるので量産性が下がる。

そして速力も当然落ちるわけだ。

どうやっても速力が出せないし敵機に襲われたときに回避し辛くなるし逃げる事も出来ない。

それを考えれば、戦時緊急造船型でも十分にやれるという話だ。

21隻も失っているとはいえ、それでも航空隊や護衛艦隊の皆は頑張ってくれているからこそ各地の陸軍師団や陸戦隊に行き渡らせるだけの物資は何とか輸送出来ている事が幸いか。

しかもそれだけじゃない、軽便鉄道敷設用の資材も送り込まねばならないので分かつては居るが輸送船団と護衛艦隊の負担は大きい。

事実、軽便鉄道の敷設は諦めた方が良いのでは？と言う意見もあった。

だが軽便鉄道を張り巡らせて運用出来るようになればそれこそ利点が多い。

何度も言っているが、敵の上陸があつた場合に各地の部隊を迅速に移動、戦線投入が可能となるし、物資の運搬の手間や労力が格段に減る。

それ以外にも多数の利点があるのでそれを無視してすぐさま敷設を中止するほどか、と聞かれるとそれは違う。

だからこそ補給を圧迫していようと敷設を進めているのだ。

さて、補給面に関して言えばこのぐらいだろうか？

続いて損傷艦についての話に移ろう。

まず、今回の一連の海戦で損傷した艦は日本本土へ回航後に即座にドック入り。

修理を進めている。最優先で修理を行っているのはやはりと言うべきか、空母だ。

大鳳、飛龍、瑞鶴、阿蘇、アークロイヤル

以上の5隻は本土到着後、即座に修理を開始。
既に全艦が修理を完了し訓練中だ。

尤も早く修理を終えた飛龍と阿蘇はあと1か月で戦線復帰が可能。
瑞鶴と大鳳、アークロイヤルはまだまだ訓練途中であり、2か月以
上は掛かる。

そして夜戦に置いて損傷した艦も入渠中。

大破
金剛
霧島
長門
ローマ
ビスマルク
テイルピッツ
リットリオ
リシユリユ
テイルピッツ
リシユリユ
ネルソン
鈴谷
那智
ポーラ
能代
秋月
熊野
プリンツ・オイゲン
青葉
多摩
宵月
満月

中破
日向
クイーン・エリザベス
ウォースパイト
ラミリーズ
デューク・オブ・ヨーク
羽黒
古鷹
キャンベラ
ザラ
初雪
浦波
菊月
望月
若月
初月
照月
Z 3
村雨
霜月
春月

以上の内、中破艦及び手酷くやられていた長門とネルソンを優先しての修理となった。

全中破艦は既に小型艦に置いては修理完了。訓練も大詰めだ。大型艦に関しても訓練は1か月ほどで終了。

大破艦は全て入渠中。

早いければ1か月から2か月で修理が完了、訓練に入れる。

次に母艦航空隊だ。

こちらの再建はかなり時間が掛かる。

というのも今回の戦闘で脱出し救助された者も多かったがそれでも少なくない熟練搭乗員を失った。

流星搭乗員の損耗率は高く、撃墜された流星の搭乗員はほぼ、脱出することは出来ずに機体と運命を共にし、南洋の空に散って行った。

特に一番痛手であったのは西北中佐の戦死だろう。

確かに熟練搭乗員を失ったのは大きな痛手だ。

だが、熟練搭乗員であることに加えて部隊指揮を任せられるほどの搭乗員の喪失は更に大きい。特に西北中佐は原田大佐からしても優秀な指揮官である、と言わせる程だ。

それを失うというのは海軍全体に大きな影響を与えている。

それでも各空母の流星隊は懸命に再建に向けて懸命に歩みを進めているが、俺が着任した当初程の力はやはり存在しない。

それこそ数多くの実戦を積み、尚且つ生き残らなければ精強な母艦航空隊の再建にはならないがこれ以降は今まで以上に辛い戦いを強いられる事になるだろうからそれはもう無理であろう。

せめてもの救いは戦闘機隊の損失が少ない事だろうか。

彼らは技量抜群で毎回毎回少ない被害で切り抜けている。新しく配属された新兵もその原田大佐以下、熟練搭乗員に毎日の様に揉まれながら大きく成長を遂げている。

撃墜された機の搭乗員も脱出し、潜水艦に救助された者が殆どだ。

生きて帰ってこそ、真に一人前。

それが我々の合言葉だ。

兎に角、死んでしまつては意味が無い。もし負けたとしてもまた、何とかして立ち上がれば良いだけの話だ。

確かに任務や作戦を成功させなければならぬのも確かだし、そうでなければ日本は、いや人類は深海棲艦との戦争に負けてしまう。

だが搭乗員や艦の乗組員を失ってもまた、負けるのだ。

今現在、懸命に母艦航空隊の再建は進められており、烈風戦闘機隊に関しては一か月で戦線投入が可能になるとの事。

しかし流星隊は最低でもあと4か月は欲しい、との事だ。

理由としては流星は水平爆撃、急降下爆撃と雷撃のどれも行える。だからこそ、それら全ての訓練を行わなければならない。

習熟するまでに3か月、更に練度向上に3か月。都合6カ月は必要であり我々第1機動艦隊はカリマンタン島やスマトラ島の攻略が完全に成功するまで海域に留まっていたからその分訓練は遅れ気味だ。という事は、空母があっても艦載機が使えないという事に他ならない。

だからなんらかの作戦を行えるのは最低でもあと4〜6カ月先の事だ。

だが嬉しい報告もある。

浮揚作業中であつた空母3隻の生駒、龍驤、千代田が修理を完了し訓練中である。

この3隻は早ければ3か月以内に母艦搭乗員の訓練も完了し、戦線投入が可能だ。

その内の生駒は第1機動艦隊に配属され、龍驤と千代田は輸送船団護衛艦隊に配属される。

生駒は烈風と流星を、龍驤と千代田は零戦52型丙と62型の搭載が決まっており毎日の様に空母艦上で訓練が行われている。

更に、浮揚作業中であつた全艦が既に修理中であり半年以内に全艦が戦線復帰が可能だ。

戦艦5隻

大和

武蔵

比叡（浮揚作業準備中）

榛名（浮揚作業準備中）

山城

空母2隻

信濃（浮揚作業中）

加賀（浮揚作業中）

重巡洋艦2隻

足柄（浮揚作業中）

加古（浮揚作業中）

輕巡洋艦2隻

酒匂（浮揚作業中）

由良（浮揚作業中）

駆逐艦1隻

磯風（浮揚作業中）

山風（浮揚作業中）

初春（浮揚作業中）

若葉（浮揚作業中）

綾波（浮揚作業中）

夏雲（浮揚作業中）

夕雲（浮揚作業中）

大波（浮揚作業中）

涼波（浮揚作業中）

柿（浮揚作業中）

梨（浮揚作業中）

潜水艦5隻

伊154 (浮揚作業中)
伊174 (浮揚作業中)
伊175 (浮揚作業中)
伊178 (浮揚作業中)
伊185 (浮揚作業中)
海防艦5隻
占守 (浮揚作業中)
石垣 (浮揚作業中)
松輪 (浮揚作業中)
佐渡 (浮揚作業中)
三宅 (浮揚作業中)
給油艦3隻
神威 (浮揚作業中)
速吸 (浮揚作業中)
塩瀬 (浮揚作業中)
給料艦1隻
間宮 (浮揚作業中)

更に、南方資源地帯から各種資材を輸送し幾分か余裕が出ているので戦艦を除く全艦艇の浮揚作業を行っている。

ただし、信濃と加賀の2隻に優先して作業員を回しているので信濃と加賀は年内中に修理を開始、それ以外の艦艇は来年の春から夏にかけて入渠予定だ。

戦艦の浮揚作業はそれ以外の艦艇の浮揚作業が終了次第、順次取り掛かる予定だ。

早ければ来年の夏頃には浮揚作業を開始出来るだろう。

既に比叡と榛名は、必要となる物資の計算や人員、その他諸々の計算を行い準備を進めている。

残りの3隻はもう少し時間が掛かるがそれでも着実に準備は進められていると言つていい。

そして人員不足が理由で本土防衛艦隊に配属されていた艦だが漸く人員の確保が出来たので手薄になっていた輸送船団護衛艦隊に新しく組み込んだ。

これで、艦艇に関する話は粗方終わったのだろうか。

続いて、かなり以前から開発されていた新型の4発重爆撃機について話そう。

当然、これも震電同様機密だ。

元々、この新型4発重爆撃機は深海棲艦の一大拠点であるマリアナ諸島、更に言えば毎日の様に来襲する敵爆撃機の拠点となっているサイパンに対する爆撃を行う為に開発が進められていた。

だが数多くの問題があり開発は難航。

そこに合同艦隊救出で得られた技術を取り入れたり、技師妖精に助言を貰うなどしてようやく開発の目途が立った。

そこで開発されたのが略符号G5N。機体名称「深山」であった。この機体は全長、全幅だけであれば日々日本本土に爆弾の雨を降らせ続けているB-29に匹敵した。だが、匹敵したのはそれだけだった。

全長	31.02 m
全幅	42.14 m
全高	6.13 m
自重	20.100 kg
全備重量	28.150 kg
最大時速	392 km/h
航続距離	3528 km
武装	

20mm機銃2門

7.7mm機銃4挺

爆装量最大3000kgまたは魚雷2本

はつきり言ってしまうえばデカいだけで最大時速も航続距離も到底、要求性能には届かず、更には爆装量も多いとは言えない。

正直言ってこんなのが魚雷を抱いて雷撃を行うなんて只の自殺にしかならないので魚雷の搭載はほぼ有り得ないのであれだが……

しかも運動性能は4発重爆だとしても劣悪としか言えず、搭載予定であった護エンジンは出力不足に加えて振動が激しく信頼性に大きく欠ける。

機体重量も重く離陸にはかなりの距離を必要とする。

更に機体自体も電気系統を始めとした各所で問題が多発。

生産性も複雑な機構が多数あるので低かった。

複雑な機構故に整備性に大きく欠けており本土だけでなく前線の飛行場へも配備を考えている陸海軍としては大きな問題だった。

テストパイロットになった妖精に話を聞いたが、

『あれは本土上空ならばともかく前線で使用なんて到底出来ない。エンジンの振動が激しく操縦性も酷い。それならば少ないが一式陸攻に6番1発を括り付けて敵の飛行場に向かった方がマシだ』
『あれと一式陸攻どちらを選ぶかと聞かれたら迷わず一式陸攻のを選ぶ』

『これで爆撃任務なんて到底出来ない。確かに爆装量は一式陸攻よりも多いがそれを差し引いても問題が多すぎて空の上でそれが起きる事を考えたら飛びたくない』

と散々な酷評だった。

一部の搭乗員や整備兵では、「馬鹿鳥」だとか飛び方を忘れたんじゃないかという事で「アホウドリ」だなんて呼ばれているらしい。

しっかりと飛ぶことの出来るアホウドリからすれば良い迷惑なのだがその話は置いておくとしよう。

更にはその防御力も防御機銃も凡そ強力とは言い難く、護衛戦闘機を付けられないマリアナ諸島への爆撃任務では相当数が失われると予想できる。

まあ、総評からすれば陸海軍がともではないが正式採用をする事は出来ない機体だった。

護エンジンは、開発の遅れがあつたので最初に試作された4機はそれまで一式陸攻などに搭載されていた火星エンジンの搭載をしていたのでエンジンだけに言えばマシンだった。

整備員も一式陸攻で火星エンジンの整備には慣れていたので問題無い。

だが護エンジンを搭載した試作機4機は上記の振動問題が酷く、信頼性に欠けておりどうやってもその問題は解決出来ないので生産はたったの16基のエンジンだけになった。

そこで陸海軍は、これ以上改良を施しても成果の見込めそうにない深山の正式採用を断念。

試作された8機は輸送機に改造されることが決定。

護エンジンを搭載した機体は火星エンジンへと載せ替えた。

更に機体を大幅に改造。

胴体下部に貨物搬入用扉、胴体内部には貨物積み下ろし用の手動クレーンを取り付けた。

更に南方方面での重病を患った妖精や諸事情により内地へ向かう人員を載せる為に8名を載せられる客室の設置も行った。

先程、航空機で病人を運ぶと言ったがその担当が深山だ。

深山は、沖繩に建造した陸軍病院まで病人を運び、そこでの治療が困難である、不可能だと判断されれば本土へ更に後送される。

深山はその気になれば空挺作戦に落下傘部隊を搭載して参加することも可能だ。

貨物室に改造を施せば、の話だが。

この8機は既に輸送任務に従事しており、各地の飛行場はそれに伴い飛行場を拡充、滑走路をコンクリート製にするなどの大規模な工事を実施。

配備基地は第1大和飛行場だ。

本来ならば那覇飛行場にでも配備したかったのだが整備性に欠けるので本土配備となっている。

第1大和飛行場から飛び立った深山は、那覇飛行場で一度補給を受けてからまた南方方面に向けて飛び立つ。

主に運んでいるのはエンジンや落下式増槽などの重量物などではなく、軽量の医薬品や小口径弾などが殆どだ。

エンジンなどの重量物は輸送船団に任せて日々消費する医薬品や小口径弾を優先して運び込むという事だ。

搭載量は3000kgもあるので8機ともなれば24000kg(24t)にもなるので医薬品に限ればかなりの量を運び込むことが出来る。

ただ、医薬品と言っても運び込んでいるのはマラリア対策などの毎日飲まなければならぬ薬では無く、鎮痛剤などだ。流石に毎日消費する物資を運ぶのは備蓄用も考えれば8機だけでは無理があるからな。

その様なわけで深山は正式採用されなかった。

そして、深山の正式採用が見送られる前から、深山の見通しの暗さから海軍は既に別の機体を開発することを決定。

そうして開発が進められたのが略符号G8N正式名称「連山」で

あつた。

この連山は正式名称を与えられる前までは十八試大攻と呼ばれていたのだがその辺は割愛しよう。

この連山は、深山の設計、製造などで得られた経験を元に開発が進められた。

深山で問題となった生産性、整備性、信頼性を向上させるべく、特殊加工を行わなければならない部品を極力抑えて、彩雲で採用されている厚板構造を採用。

この厚板構造の採用により縦通材やリベット数を削減。

また、深山での速度が遅いという経験から空力的に洗練、主翼を小さくしたりと詳しくは専門ではないので分からないがかなり徹底して設計した。

離着陸時に使用する高揚力装置も二重フラップの採用だったりと深山での経験を大きく生かしている。

更には1.5tや2tと言った爆弾を搭載し長距離に進出して攻撃を行う事を想定しているので高高度飛行性能や防御力も重視。排気タービン過給機を搭載して速度を向上させた。

しかも防御銃座は、動力銃座を搭載し、更には一式陸攻などではお世辞にも高いとは言えない防弾装備も施すなど高速かつ重武装を施した機体となった。

防御銃座の配置も日本本土に來襲するB-29や前線での防空戦で戦うB-17などを参考にして視界、射界は良好、空力的にも優れている。

降着装置、所謂ランディングギアも前輪式を採用している。

性能は以下の通り。

型式 4発中翼単葉陸上攻撃機

構造 前金属製 モノコック構造

引き込み足 前輪式

全長 22.93m

全幅 32.54 m
全高 7.20 m
自重 17.4 t

正規全備重量 26.8 t

攻撃荷重重量 32.14 t

最大速度 593 km/h

(1 t爆弾を搭載した状態で高度8000 mなので搭載しない場合はもう幾らか速度の向上があるだろう)

巡航速度 370 km/h

実用上昇限度 10200 m

航続距離 3700〜7470 km (装備の重量によって変化)

乗員 7名

武装

20 mm機銃6門

(胴体前方上方旋回2門、胴体後下方旋回2門、尾部旋回2門)

13 mm機銃4門

(機首旋回2挺、胴体両側旋回各1挺)

爆装

60番 18発

25番 8発

80番 3発

1500 kg 2発

2000 kg 2発

最大爆装量 4000 kg

と以上の様になった。

大きさは深山よりも一回りか二回り程度小さい。

重量は深山よりも軽量であり最大速度、巡航速度はどちらとも我々が運用する攻撃機の中ではトップクラスに速い。

しかもそれでいて最大爆装量は4000kgもあり、航続距離も爆装量によって変化するが最大7470kmと十分にマリアナ諸島を爆撃可能だ。

武装も深山の7.7mm機銃を廃止し20mm機銃を増設、それ以外は13mm機銃と強力。

操縦性はやはり4発機だから他と比べると悪いがそれでも深山よりは優秀、生産性や整備性、信頼性も高く整備時間は機体が大きいので時間が掛かるのは致し方ない。

この連山の性能は陸海軍の要求に見事応えて見せた。

そして当然、正式採用となった。正式採用となったのは僅か16カ月前の事。

だが、今の今まで残念ながら本格的な生産は行われず、月産1機と言う細々とした生産に留まっていた。

なぜ大規模な生産を行わなかったのか。

というのもここでも資源問題が出て来るのだ。

この連山、零戦10機分の資材を使用して漸く1機を製造できるのだ。

零戦10機分の資材を使うのだ、母艦航空隊や各地の航空隊へ機体を行き渡らせるだけで精一杯だったのだから大規模な製造をしている余裕など無い。

それでも月産1機を製造していたのだ。

まあそれも資材不足に拍車を掛けていたので余り乗り気では無かったが、来るべき時に1機も無い、あってもたったの2、3機だけとなれば実戦投入が遅れる。

そこで、月産1機の実産は行うがそれ以上は行わなかった。

現在連山は試作で製造された3機と合わせて18機が配備されており搭乗員の訓練用に4機が引き抜かれている。

なので実戦部隊に配備されているのは14機でありその14機も十分な数が揃っていないという理由で爆撃任務では無く日々訓練に

励んでいた。

だが、南方の資源地帯との輸送ルートを確保出来、生産に必要な各種資材に余裕が出て来たのだ。

そこで大規模生産を開始。

生産工場は3か所とし、それぞれの工場の月産は15機となっている。

既に45機が引き渡されて搭乗員は前々から訓練を行っていたので存在している。

1機辺り7人が必要となるが32機分の搭乗員は訓練を終了し確保済み。

連山が配備されている飛行場は第1大和飛行場へ全46機と搭乗員の居ない3機が予備機として配備されている。

ただし予備となっている3機も搭乗員が確保出来次第即座に配備となる。

残りの10機は訓練用として先の4機と合わせて14機体制での第2大和飛行場での搭乗員訓練に使われている。

第1、第2大和飛行場は連山配備という事だったが深山の運用も行っているのです。当初に飛行場の滑走路を大規模に拡充。それぞれの飛行場には全長1500m幅100mの滑走路が2本ずつ整備されており問題無く運用が出来ている。

ただし、今だに配備数は十分ではない。

全機が1t分の爆弾を装備したとして凡そ50t程の搭載量しかない。なので敵飛行場爆撃ともなれば十分とは言いがたいし、敵戦闘機も当然迎撃に上がってくると予想されるがこちらは護衛戦闘機を付けられないので丸裸。

防御機銃での応戦しか出来ない状態で少ない機数で送り込んでも被害と戦果は見合わない。最低でも40機で1つの梯団を3つ、計120機は揃えなければならない。

そうすれば各機の防御機銃で濃密とは行かないだろうがそれなり

に効率的な弹幕を形成することが出来る。

さて連山に関してはこんなものか。

それ以外には、烈風と流星の改良が試みられていることだな。

これに関しては、艦上戦闘機である烈風も流星も零戦や天山同様、深海棲艦機にいずれ対抗出来なくなってくるだろう、との予想から考案されているものだ。

今現在、主力として配備されている烈風は試作型をそのまま主力機として使用している「A7M1」だ。まあ、あえて呼称するならば試製烈風と言ったところだろうか。

改良に関しては幾つかの案がある。

先ず単純にエンジンを強化するもの。

これはエンジンをハ43-11型（以降11型と呼称）に換装したもの。

エンジン以外には改良したものは無く、量産機では翼内に装備されている13mm機銃2挺を20mm機銃に換装、20mm機銃4挺（装弾数各200発）とするというものだ。

ただし、エンジンに関してはハ43-12型（以降12型と呼称）に換装した方が良いのでは、という声もある。このエンジンは高高度性能に前述の11型よりも高い。

ただ、空母で運用するのだからそこまでの高高度性能は必要としないのだから要らないのでは、という意見もある。

略符号「A7M2」。

次に烈風の性能を大幅に向上させたものだ。

こちらも高高度型で、エンジンを一段三速過給機付きのハ43-51型に換装し、武装を20mm機銃6挺（各200発）にしようと言う物だ。

略符号「A7M3」。

次ので最後だが、こちらは完全に高高度戦闘機使用となっている。エンジンを排気タービン過給機付きのハ43—11型ルに換装、武装を20mm機銃では無く震電にも搭載されている30mm機銃4挺（装弾数各60発）に換装して、胴体に斜銃30mm機銃2挺を装備させたものだ。

ただし、こちらはエンジン換装、排気タービン、武装強化の為に操縦席と尾翼を除く機体の大半を改設計しなければならず、しかも烈風は艦上戦闘機として運用するのでここまでくると支離滅裂な物となってしまうっているからこの案は却下された。

そもそも本土防空の為の高高度迎撃戦闘機は震電が存在しておりネ130ターボジェットエンジン搭載型の震電の設計や試験も大詰めの段階であるから必要が無い。

流星に関しては、発動機を誉23型に変更したものだ。こちらは既に略符号「B7A2」、正式名称「流星改」を与えられ量産に向けて各種試験中だ。

更に流星のエンジンをハ43に変更し、性能向上が図られている計画もある。

こちらは試製流星改一と呼ばれている。

烈風の改良型や流星に乗せようとしているハ43型エンジンは既に震電で実戦配備をされている。

なので新しく開発すると言う訳では無いのでそこまで時間は掛からない。

ただ、各種試験を行わなければならないので来年にならないと量産は出来ないそうだ。

資材不足による強度不足などの問題は起きていないので順調に進んでいる。

震電のターボジェットエンジン搭載型の開発だが、先ほども言った通り既に大詰め段階にまで来ており、略符号「J7W2」正式名称「震電改」が与えられている。

設計に関しては量産に関するものの修正だけで、あとは各種試験結果が良ければ量産が開始される。エンジンのネ130は、以前話した稼働時間の問題はあれどそれ以外の性能は好調で問題無く運用可能との事だ。

ただし、前線への配備は出来ないだろう、との事だ。

と言うのもネ130は稼働時間の問題があるので、かなりの頻度でエンジンを交換しなければならぬのだが、前線へ配備すると今現在の輸送能力では間違いなく支えきれず、破綻してしまうからだ。

敵の通商破壊もあるしそれを考えれば前線配備は出来ない。

だからこそ安定してエンジンやそれ以外の部品の供給を受けられる日本本土への配備に留めておくのだ。

量産開始と、部隊への配備時期はあと2〜3か月あれば可能との事なので、そうなれば既存の震電はターボジェットエンジンを搭載するべく改造を行うか、こちらを前線配備する計画だ。

航空機関連であともう1つ。

烈風に代わる新型艦上戦闘機の開発が始められた。

まだ開発がスタートしたばかりなので殆ど何も決まっていないうが海軍が出した要求性能は以下の通りとなる。

形式 低翼

乗員 1名

全長 10～11 m
全幅 12～13 m
全高 4～4.5 m
脚間隔 凡そ4 m
主翼面積 26～27 m²
全備重量 5 t以下
エンジン 既存のエンジンを流用する事。
離昇出力 2100～2200馬力
プロペラ 定速4翅
最大速度 660 km/h以上
実用上昇限度 10000 m以上
上昇時間 13分30秒で10000 m到達
航続距離 2000 km以上
武装 20 mm機銃4ないしは6挺(各200発)
折り畳み翼を採用する事

以上の様に要求した。

まあ、正直言つて俺がこれを決めたわけでは無いので何とも言えないが実用上昇限度が10000 m以上で、しかも上昇時間が13分30秒で10000 m到達とはかなりの高性能だぞ？

エンジンに関しては、まあ確かに既存の物を流用すると書かれてはいるが最高速度が660 km/h以上となっている時点で使えるエンジンに限られてくるが、その辺は技術妖精の腕の見せ所だろう。

結構ふわふわしている様に感じられるかもしれないが、初期の段階では大体そんなものだ。

まだまだ設計すらされていない状態だ。

これと言つて符号が決まっている訳でも無く、機密でもあるので今の所はこれを知っているのは設計、開発を担当している技術妖精達に海軍上層部の俺を含めた6人だけだ。

最低でも2～3年は開発に掛かる見通しなので、烈風の改良はその繋ぎと言う意味もある。

まあ、大体こんなものだろう。

兎に角、技術面ではこのぐらいだ。

今の所、大規模作戦の予定は無く兎に角資源備蓄に努めつつ南西諸島から南方方面の維持を当面は行う事になっている。

というのも、マリアナ諸島方面や未だに攻略を行っていない南方方面への攻勢に出れないというのが現状だからだ。

現有戦力ではなんとか南方方面への維持が精一杯であり、これ以上の攻勢に出る事が出来ないのだ。

まあ、攻勢に出るだけならば問題無いが占領、維持となると無理だ。断言出来る。

消極的云々では無く、以前にも話したが奪還しても意味が無いのだ。

本土爆撃を防げるという意味はあるが、正直言って震電の配備も進められているし震電改も実戦配備間近なのでそこまで躍起になる必要は今現在の所無いのだ。

無理に奪還を進めて、それこそ各地で戦線崩壊を招いたら目も当てられない。

言っておくが南方方面の攻略作戦を行え、成功させろ、と言われても俺は二度として成功させられないぞ。あれはある意味で運が良かったからであり、敵が戦力分散の愚を犯してくれたから勝てた訳であつてそんな状況がもう一度起きるわけがない。

だからこそ今現在は攻勢に出ずに維持に留めておくのだ。

それに何のために連山を開発したのだ？マリアナにある敵の飛行場を爆撃する為であろう？

ならば長距離爆撃と言う局所的な攻勢に出れば良いだけなのだ。これならば搭乗員や機体の喪失はあつても各地の戦線への負担は少ない。

兎に角、我々の方針はこのように決まっている。

あとはそれを支える為に俺が必死に働くのみだ。

中部太平洋方面迎撃戦 第29話

南方方面での作戦から半年が経過した。
その間に幾つか大きな変化があった。
まず一つ。

中代中将が大將となり、軍令部総長と作戦本部長の兼任となったこと。

同じくして俺も階級が大將に昇進し、連合艦隊司令長官の役職に就いたことだ。

これには幾つかの理由がある。
まず一つ目の理由は西村中将が90歳目前である高齢であり、長年の激務が祟ってか最近では歩くことも辛くともではないが軍務をこなせるような体調では無くなった事。

ここ最近では車椅子無しでは移動が困難なほどになってしまっており本人からもその旨と共に、
「万が一の時に判断を誤ることがあつては取り返しが付かない。そうなる前に職を辞させて頂きたい」

と直筆の文が添えられて俺を含めた市木大將以下に送られてきた。
確かにその通りであつた。

事実、ここ最近はその視力すらも低下し始めていて見えているかどうかとも怪しいらしい。本人は、まだ幾らか見えていると言っていたが、それも何時まで続くかどうか……

それだけでは無く、市木大將も寄る年波には敵わず最近体調をよく崩すようになった。

そこでその時、軍令部総長と連合艦隊司令長官と言う役職を兼任していた市木大將には海軍内での人事も担当していたので、これ以上そ

それぞれの役職に座って致命的な判断ミスを起こす前に引く決断をされた。

しかしながら自分が完全に退役してしまうと支障を来すだろうから、何処か別の席に着いて穴埋めを行い、その椅子に座っていた者に自身の席を譲るという事だった。

そして中代中将に軍令部総長の役職が回ってきたという事だ。

中代中将は作戦本部長も兼任しているので二つの役職を兼任する事となった。

市木大將は階級はそのままに海軍艦政本部長の職に就いた。

俺はと言うと、元々前線部隊を指揮していた俺では無く市木大將が連合艦隊司令長官職を兼任しているのはどうなのか、それならば俺に与えた方が良いのではないか、という意見もあつたし市木大將も賛成はしていた。

だが状況がそれを許さずに、常に前線での指揮を執っておりそんなことをしている暇も時間も余裕も無かった。

だが南方方面での作戦が成功して、資源が運ばれて幾らかの余裕が出始めたのでそれならば、という事で人事発令書、通称人発と呼ばれるものが出され俺は連合艦隊司令長官職を拝命。

それぞれの職は以下の通り。

軍令部総長、作戦本部長兼任 中代美咲大將

連合艦隊司令長官 湯野勝則大將

海軍艦政本部長 市木重尚大將

海軍航空本部長 黒川村治中將

補給、諜報や測量等 広野拓司中將

黒川中將と広野中將の役職は変わらずそのまま。

ただし、二人の仕事量は当初よりも遥かに膨大になっている。

というのも、航空本部長である黒川中將はそれまで日本本土や沖縄

までの航空隊を纏めるだけに留まっていたのだが南方方面への航空隊進出と共にそれらの穴埋めとして新設された航空隊を含めるとその数は数倍なんて数では利かない。

それらは全て直接的な指揮を執っているのは俺だが、更にその上となると黒川中将だ。

となれば各種書類は全て黒川中将に上げる必要がある。俺で止められる書類なんて無いのだ。

広野中将も各種補給計画の策定などに奔走しているし、被害が出た時などの補填を計画するのも広野中将だ。

護衛に関して担当しているのは連合艦隊だが実際の所、輸送船団の指揮は広野中将が執っている。

まあ、そうなると色々と指揮やらなんやらが煩雑になるので、実質輸送船団も俺の指揮下にある。

その辺の話をする、とんでもなく面倒になるので割愛させて貰うが。

そして以前持ち上がった、俺の存在を公表する、と言う話が見送られた。

現状、深海棲艦からの攻勢を凌ぎ切れるほどの戦力は整っていない。

何よりも、敵は深海棲艦だけじゃないのだ。

こんな時でさえ、人類は人類同士でいがみ合い、牽制し合い、利権を奪い合うのだから手に負えない。

提督になったのは6年前だが俺がこの世界に来て、既に7年以上。

当初より戦局はマシになったとは言っても、良くない。いや、全体を見れば悪いとすら言える。

現状の説明となるが、南方方面での作戦に参加した損傷艦全艦は既

に修理を完了しており残すは訓練のみとなっているのが現状だ。駆逐艦などは既に訓練を終えて前線復帰を果たし、圧倒的に手が足りていない輸送船団の護衛艦隊に臨時で駆り出されている艦も何隻も居る。

加賀と信濃は修理を優先していた為に予定よりも修理期間が短く、あと1か月で修理を終えて訓練に移ることが出来る。

訓練用の燃料に関しては輸送船団によつて大量に運び込まれているので少なくとも直近半年は訓練などには支障は無い。

なんなら現在、訓練もすべて完了し戦う事の出来る艦を全力出撃1回か2回分ならあるかもしれない。

第1航空艦隊の空母全艦は既に戦線復帰、継続して訓練を行っている。

生駒、龍驤、千代田の3隻は訓練中ではあるが生駒は第1航空艦隊に、龍驤と千代田は護衛艦隊に組み込まれた。

龍驤と千代田を護衛艦隊に編成した理由はここ最近深海棲艦による通商破壊が激化の一途を辿っているからだ。

護衛艦隊からは再三に渡つて戦力増強を、と言う打診が届いておりその戦力増強の一環として2隻に加えてそれぞれの随伴艦として4隻の駆逐艦と共に新しく編成した。

4隻づつの駆逐艦は臨時なので、第1航空艦隊が完全に整えば再びそちらに戻される。

今現在必要なのは前線で戦うための一級線の戦力では無く、補給面でそれを支えるための護衛戦力だ。

第1護衛艦隊

航空母艦

大鷹 神鷹 海鷹 龍驤 千代田

重巡洋艦

最上

軽巡洋艦

名取 鬼怒 天龍 龍田 神通

駆逐艦

東雲 白雲 浦波 狭霧 子日 有明 海風 江風 峯雲 霞

藤波 沖波 清霜 白雲 有明 長月 荒潮 親潮 黒潮 竹 桃

椿 楓 樺 楠 初梅 初雪 浦波 菊月 望月 Z3 村雨

霜月 春月

計42隻

以上となった。

全空母の艦載機数は空母5隻でそれぞれ36機、零戦52型丙20機、零戦62型12機、彩雲4機つつを搭載、計180機となっている。

鳳翔は搭乗員の訓練のために元の任務に戻した。

瀬戸内海を新兵と練習機である零戦を乗せて日夜訓練に励んでいる。

毎回の輸送船団の規模はタンカー25隻、輸送船30隻となっている。

だがその内の5〜10隻は毎回行き帰りの航路で沈められるか、大きな損害を被って自沈処分か近くの我々が奪還した島に座礁させることになっている。

この半年で輸送船には既に60隻を超える被害が出ており、毎月10隻程度が沈められている計算になる。

ただしこれでも少ない被害で、毎回の輸送船団の被害は2〜3隻に抑えられている。

だがはつきり言ってしまうえば、補給面は常に全力運転状態で息切れ

寸前だ。

本土の造船所では毎日戦時緊急増産型の輸送船が作られているが損傷艦の修理も行い、尚且つ浮揚作業が完了した艦の修理も舞い込んできると、戦艦5隻の浮揚作業も控えているとあって昼夜を問わず24時間、交代で造船所、工廠、ドックはフル稼働中。

妖精以外がこれらの作業に携われないというのが大きすぎる問題だ。

しかもこれだけ全力稼働状態なのにも関わらず、民間に回せる燃料や資源は少ない。

艦艇の修理、各種航空機生産、南方方面での防衛体制確立など様々な方面に使用しなければならぬ。

航空機燃料に関しては使用する航空機が無いから良いとしても各地の航空隊に母艦航空隊錬成、備蓄などを考えるとギリギリだ。

車両用の燃料も南方方面と沖縄へ最優先で送り込み、備えているから碌に回せないし漁船用のガソリンなども同様。

というよりも民間に回せる燃料は、最低限度の発電用のみ。

それでも海軍と陸軍はそれぞれ必死で何とかこの状況を打開しようとする策を考えているのだが少しでも何か歯車が狂えば立ち直れなくなってしまう、という状況に追い詰められている。

〔補給計画の失敗は敗北への第一歩〕

護衛艦隊将兵にはこの事を再三言い聞かせて任務に当たって貰っている。

今現在、前線へ出たいなどと彼らから不満の声は無い。

というより不満の声を上げる暇すらない、というのが現状だ。

何故かというと深海棲艦の通商破壊が、先程も述べた通りに激化の一途を辿っており少なくない数の輸送船が沈められている。

航空攻撃が主で、戦闘機隊は迎撃を行うし、その迎撃も敵戦闘機はロケット弾を装備して機体性能が下がっているとはいえ零戦ではF6FやF4Uを相手取るとなると侮れない。

それに潜水艦の脅威もあるしそれらだけでなく、未だに被害と言うよりは攻撃を仕掛けてきていないがここ最近では夜間の洋上打撃艦隊の姿すら確認されている始末。

こんな状況で漏らす不満と言えば、手が足りないからもっと兵力を寄せぐらいなものだ。

「輸送船団への被害が大きい……だがこれ以上護衛艦隊の数を増やせる訳でも無いし洋上打撃艦隊の姿すら確認されている」

「提督、洋上打撃艦隊にはどうやら戦艦とまでは行かないものの巡洋艦が多数確認されています。もし、夜戦を挑まれたら一溜りもありません」

「分かっている。だが解決策が無いのが現状ではないか」

「一番簡単な解決方法は護衛艦隊の数を増やす事ですが……」

「それが出来ていれば、こんな会議を開いて頭を悩ませる必要なんて無いだろうさ」

俺がそう言ったのを最後に、それからは誰一人として発言出来なくなった。

誰も彼も、必死に考えているのだ、今の物言いは良くなかったな。

「少々言い過ぎた。すまない。少し休憩を入れよう、15分間休憩を取る。解散」

「「「はっ」「」」」

そう言うとは皆は思い思いの休憩を取る為に会議室を出ていく。

会議室と言っても新しく、執務室と俺の自室があるプレハブの隣に大急ぎで立てた掘っ立て小屋なのだが。

椅子に深く座り込んで、息を吐く。

すると、今の今まで艦隊を支え続けてきた山田参謀長が声を掛けると同時に緑茶を差し出して来た。

「提督、お気になさらず。一番尽くしているのは貴方だと誰もが分かっております」

「参謀長……いや、それは言い訳にしかならんよ」

「そう考えるのは自由ですが、少しは休んでください。最近はまだ徹

夜が増えていると噂になって艦娘の皆さんが怒っていましたから」「そう言われると、弱るな……全く、連合艦隊司令長官とも言えども体調を気遣ってくれて、食事も作ってくれる彼女達には頭が上がらんよ」

事実、艦娘の皆は秘書艦だけでなく毎日代わる代わる俺の食事当番をやってくれて体調やスケジュール管理なんかもしてくれている。

そんな彼女達に、どうやって強く出られようか。

「ならば、早々に休んで怒りを買わない事ですな」

「全くだ」

二人で笑いあう。

以前はそんな余裕すら無かったのだから、幾らかはマシと言えるのだろう。

その後、参謀長は一服してくると言って出て行った。

俺は未だに酒も煙草もやっておらず、毎日仕事仕事仕事の日々だ。だがそんな日常に生き甲斐を感じているのだから、そろそろ俺も末期かもしれない。

しかし、輸送船団の護衛をどうするか……

敵洋上打撃艦隊の件もあるし、無視出来るものではないのは確かだ。

……この際、形振り構っていられんか。

「諸君、それでは会議を始めよう。まず、輸送船団の護衛に関してだが……この際形振り構ってられない。そこで、戦艦を投入しようかと思う」

「戦艦ですか!？」

「それは流石にやりすぎなのでは……」

「だが実際、これ以上駆逐艦の数を増やせない。それに洋上打撃艦隊の件もあるのだから、それしか方法が……」

流石に、俺の意見には誰もが困惑して紛糾した。

そりやそうだろう。

輸送船団護衛に、戦艦まで引つ張り出すとなれば誰だつて困惑する。

通常ならば輸送船団の護衛には主に海防艦から始まり駆逐艦、軽巡洋艦、あとは精々が軽空母までが就く。

1隻だけとはいえ重巡洋艦が護衛に就いている時点で既に異例と言える。

しかも軽空母の数は5隻にまで上っているのだから異例中の異例だ。

そこに戦艦まで付けるとなれば確かに普通ではない。

だが、普通に留まっていたは到底深海棲艦には勝てないのだ。

そも、普通では対処できないからこそその現状であるのだ。

敵洋上打撃艦隊の規模がどれほどのものか、まだ正確には分からないが戦艦は確認されていない。とすればこちらは戦艦を護衛に入れて置けばもし襲われたとしても、無傷とは行かないが守れる筈だ。

「提督、仮に戦艦を護衛に出すとしてもどの戦艦を？」

「そうだな……金剛達巡洋戦艦で良からう。彼女達は航続距離も9000海里を超すから単純な往復に一度の戦闘ぐらいならば問題無く行える筈だ」

「ですが、全巡洋戦艦を出す訳には行かないのでは？」

「そんなこと分かっているとも。だから、第1戦隊を戦艦4隻づつ交代で出す。ヴァンガードも加えて8隻居るから半々で十分だろう」

「4隻も、ですか……」

「いいや、4隻しか、だ。考えて欲しい。深海棲艦の物量はどれほどのものか貴官らも十分に以上に分かつてくれている筈だ。深海棲艦の通商破壊は日に日に激化して被害も無視出来るものではない。戦艦4隻しか組み込めないのだ、最悪戦艦は出張って来なくとも洋上打撃艦隊の重巡洋艦が10隻、20隻と出てきたら戦艦4隻でも不味い」

「流石に20隻と言うのは……」

「有り得ない、と言い切れるか？深海棲艦だぞ？」

「……いいえ、寧ろ20隻であれば少ない方ですな。下手をするとその倍は考えなければなりません」

「だろう。であれば戦艦4隻でも少ないぐらいだ」

結局輸送船団護衛に第1戦隊の戦艦8隻を4隻づつ就けることになった。

金剛、霧島、リシユリユ、ヴァンガードの4隻とビスマルク、ティルピッツ、リットリオ、ローマの4隻づつ。

リットリオやローマは航続距離が他と比べると短い、輸送船団の被害が抑えられるのならば燃料は惜しくない。

輸送船団を守り切れればその十数倍の資源や燃料を持ち帰ることが出来るのだから。

ここで出し渋って輸送船団だけでなく、護衛艦隊にまで被害が拡大するとあつてはそれこそ一大事だ。

取り返しが付かなくなる前に手を打たねばならない。

次に連山について話そう。

と言つてもこちらは大きく話せることは無い。

機数が揃っていないのでマリアナ方面への爆撃任務に出る事は出来ない。

ただし、その機数は大きく数を増やしておりこの6か月で270機が製造されているが搭乗員配の数が揃わないので実戦に出せる機数は以前の32機に30機を加えた62機となっている。

搭乗員が今現在の270機分が完全に揃うのは半年は掛かる。それまでは辛抱だ。

本土防空に関して。

こちらは震電が活躍しており、爆撃を許してはいるものの抑えられている。

だがやはり震電の絶対数は少なく完全に防ぎきるといふ事は出来

ない。

そして遂に震電のターボジェットエンジン搭載型が実戦投入され始めた。

まず最初に配備されたのは西中中佐率いる本土防空第323局地戦闘機隊で現在は習熟訓練中だ。

続いて配備されたのは本土防空第324局地戦闘機隊でこちらも習熟訓練中。

どちらの部隊もあと2か月で実戦に出られるとの事だ。

もしこれらが実戦に出られるようになれば、防空に関してはもつと戦果が上がり完全に防ぐことも夢じゃないだろう。

本土上空では毎日の様にジェットエンジン特有のエンジン音が響いている。

323、324戦闘機隊にターボジェットエンジン搭載型、J7W2に置き換えられた通常エンジン搭載型の震電、J7W1はお払い箱になったと言う訳ではない。

南方方面での毎日スラウエシ島やフィリピンから飛んで来る敵爆撃機の迎撃任務に充てる為にその方面の航空隊を一度本土へ呼び戻して訓練を行っている。1か月もすれば南方方面へ配備可能となるだろう。

大体これで粗方の変わったことは終わりだろう。

「全く、また見合いの話か……そんなことをしている暇があるなら働けと言うのだ」

「おっ、また見合いの話かい？モテるね」

「茶化すな隼鷹……本当に迷惑してるんだぞ」

「いや、ごめんごめん。でも今週に入って3件目だっけ？」

「14件目だ……」

「ありや、全然違った。毎日2件は来てんじやん。暇なの？」

「俺に聞くな。他にやる事、やらなければならぬ事は幾らでもあるだろうに、こんな事をしているからイザという時に碌に動けないんだ」

今週の秘書艦は隼鷹で、仕事を手伝ってもらいながら見合いの話を断るべく適当に手紙を書く。と言うか、これすら手間なんだが。

最近は何倒だから同じ言葉と文面を用意しておいてそれを写し書きしてるだけになってきた。一応、コピーなどよりも幾らかは謝意が伝わるだろうと言う事で手書きにしている。

「そーいやさ」

「なんだ」

「提督って結婚しねえの？」

「なんだ、藪から棒に」

隼鷹は、ふと、と言った顔でそんなことを聞いて来た。

脈絡が無いのは何時も通りだが今回は随分と突発的だな。

「いやだって確か提督が着任したのが19だか20の時だったろ？したら提督もう26歳じゃん？そろそろ結婚とか考えても良い頃じゃねえのかなあ、って」

「ふん、そんな暇も相手も無い。それに結婚したとしてもこんな生活だからな、相手に迷惑掛けるだろうよ」

「でもさ、中代大将も結婚したんだろ？流石に不味くない？」

痛い所を付いてくるな……

確かについ先月、中代大将は幼馴染だったか、の男性と結婚した。と言っても式を挙げたわけでは無く籍を入れただけで、嫁入りでは無く婿入りという事で苗字もそのままだ。

だが中代大将は既に30歳を過ぎて34歳だか35歳になっていたのだから寧ろ当然とも言える。

ただ、兩人ともこんな情勢である事、中代大将が職務に追われて忙しい事など理由はいくつかあるが、子供を儲けるつもりは無いらしい。

確かに、中代大将が産休なりで抜けるとなると回らなくなる。

そこは俺達で支えれば良いのだが、支えられるような仕事量では無いから仕方が無いと言えそうなのだ。

「……中代中将はもう30過ぎだからな、当然だろう。俺はまだ何年か猶予がある。もし結婚するとしても焦る必要は無い」

「いや、でも相手も居ないってのは不味くない？」

「外に出る機会が無いから仕方が無いだろう。出たとしても護衛として陸戦隊が付いてくるもんだから到底見つける事なんぞ出来やしない」

「それもそうか。でもこのままだと毎日毎日見合いの話が入ってくるよ？どうすんの？」

「見合いはしないと公言している筈なんだがなあ……お構いなしという事だろうよ」

俺はこんな情勢であることなど色々理由はあるが見合いも結婚もしないとはつきりと言って断っている筈なのにこうして毎日見合いの話が届くのだ。

しかも同じ家から来ることも多々あり、本当に迷惑しているのだ。毎度毎度、断る文面を手書きで書くことも時間を取られるし、なんなら何度も送ってくる家もあるから腹が立ってくる。

確かに、秘書艦の皆を通して艦隊全体に見合いの話で色々広まっているらしいが概ね哀れみの目で見られているのとどうでもいい、というのが大方の意見らしい。

金剛辺りは、

「なら私と結婚しますカー？」

とか言ってきたが本気なのか冗談なのか分からん。

どうしたものか。

とはいえ、相手がいないのも事実。

そもそも鎮守府の外に出る事もそれ以外の飛行場や航空機製造工

場などを視察したりするときに出るぐらい。

一応、休日には外出する事も出来なくはないんだがそうなると普段の視察と変わらず俺の護衛と鎮守府警備についている海軍特別陸戦隊第3連隊の中から1個大隊規模が護衛に付いてくるので、女性相手にどうこうとかとてもではないが出来ないのだ。

何度か外出した事があるが、周りの人間が凄い勢いで避けていくのだから、結婚相手を自分で見つけるなんて出来やしない。

まあ、完全武装の兵士が俺を守る為に眼光鋭く周囲を警戒しているのだから当然と言えば当然だが。

だがこのままだと見合いの話が止まることは無く、寧ろもつと激化してくるだろう。

と言うか、何故俺は深海棲艦相手では無く見合いの話で頭を悩ませているんだ、馬鹿馬鹿しい。

もうやめだ、考えるのは止そう。

「この話はこれで終いだ。それよりも仕事を手伝ってくれ」「へーい」

そう返事をした隼鷹は、テキパキと手を進めていく。

全く、これで酒癖の悪ささえなければ文句無しなんだがなあ……

時折、俺の自室に殴り込んで来て酒盛りするのは止めて欲しい。

嫌と言う訳ではないんだが、酔っ払うと色々と見えそうになったり絡んできた時に当たったりとで気を使って疲れるのだ。

ただ、彼女達も気を使ってくれているのか俺に無理に飲ませようとはしないし、次の日が必ず休みの日に限ってだから良い意味でリフレッシュ出来ているのかもしれない。

最近の休日と言えば、自室で昼まで寝ているか誰かに付き合ってもらったのトレーニング、後は釣りぐらいだ。

この辺りは艦から出される残飯を狙って様々な魚がやって来ている。

それこそ停泊中の艦に乗り込んで釣り糸を垂らしてみればもの十数秒ぐらいでその日1匹目の釣果が上がるのだ。

当然、訓練が休みの艦を選んでるし出来るだけ気にしない様に私

服、と言っても無地の半袖短パン程度の物を着て行く。

最近は何も休日はある程度の節度を持って、しかしながら砕けた態度で接してきてくれるから嬉しいものだ。

先週は那智の所で釣り大会を開催したな。

アジやらなんやらが大量に釣れて幾つかの艦にお裾分けに行ったぐらいだ。

勿論俺も釣れたからその日の食事当番だった羽黒に頼んで捌いてもらった。普段はおどおどしているが戦闘になれば頼りになるし以外と料理も出来るのだ。

まあ、特に何も無ければそんな日常を過ごしてはいるが、深海棲艦と言う連中はこちらの都合なんぞ一切聞いてくれる訳は無く。

3か月後、深海棲艦の有力な艦隊が中部太平洋方面、マリアナ方面から北上を開始。

戦力は空母10、戦艦7、その他随伴艦多数と言うものだった。

第30話

あれから更に3か月が経った。

今現在の所の問題とえば、深海棲艦の通商破壊と敵機動部隊の動きが活発化している事だろう。

輸送船団に関して言えば、戦艦4隻づつを編入したのはかなり効果が大きかった。

というのもその対空火力の大幅な増加にある。

戦艦4隻の対空砲火はそれこそハリネズミが並んで歩いているのでないか？、と思える程だ。しかも敵機が来る方向はスラウエシ島方面からと限られているので、バリクパパンに向かうにしろパレンバンに向かうにしろ、どこかに向かう時は艦隊の左側に集中配備して、日本本土へ戻る時は艦隊の右側に集中して配備すれば良い。

更には思いがけない効果と言うか、完全に見落としていた効果が大きく発揮されている。

それは対空電探による敵機編隊の早期発見と、通信設備の向上によって陸軍への応援要請が迅速に行えるようになったことだ。

それまでは一番余裕のあった最上が通信を担当していたのだが、それだと護衛艦隊旗艦である龍驤から最上を一度経由しなければならぬので時間が掛かったのだが、戦艦4隻はそんなまどろっこしい事をしなくて済むようになった。

何しろ、対空電探も艦隊で一番強力な物を搭載しているし通信設備も一番整っている。

それが4隻、艦隊の右舷か左舷に集中配備されているのだからその効果は推して測るべし、と言ったところだろう。

お陰で母艦航空隊の零戦と艦隊上空を直接守っていた疾風だけでなく、応援として疾風を数十機どころか100機程を呼び寄せての迎撃が可能になった。

合わせて300機を超える迎撃機なのだから、陸上に配備された雷撃機や急降下爆撃機、ロケット弾を満載した戦闘機などの単発機であ

れば全滅とは行かないものの、かなりの数を撃墜する事が増えた。

そこで敵は単発機だと迎撃機にやられるという事で、双発爆撃機であるB―25や4発重爆であるB―17、B―24を集中して投入してきたのだ。

それも毎回200機を超える機数で、だ。

この数は爆撃機の数だけでありそこに護衛の戦闘機を加えるとなると400機は下らない。多い時であれば500機、600機なんて事も有り得る。

本当に、深海棲艦の奴らの物量はどうなっているのか不思議でしようがない。

ただ、こちらもただやられるばかりではない。

震電が南方方面のバリクパパン周辺にある飛行場へ配備され始めたのだ。

既に2か月前からその任務に就いており、戦果も挙げている。

基本戦術としては零戦と疾風、紫電改が主に敵戦闘機を引き付けている間に震電が敵爆撃機編隊に突っ込むと言うものだ。

敵爆撃機編隊はどれだけ高度が高くとも、精々6000mか7000m程度の高度までしか上昇出来ない。

実用上昇限度は10000mを超えているのでやろうと思えば出来るのだろうが、これほどまでに高くなると色々と不都合が出て来る。

そもそも、B―29の様に高高度爆撃用の重爆撃機では無いのでそこまで高度を上げられないというのが実情だ。

しかも爆撃目標が陸上にある飛行場などであればそれでもいい。

だが奴らが目標としているのは、洋上を最高速度20ノットで航行する艦隊だ。

6000mだろうと10000mだろうと高高度から行われる重爆撃機の水平爆撃は固定目標であればその効果は絶大だが移動目標に対しては効果は薄い。

というよりも殆ど無いと言っていい。

照準器の違いなど色々な理由もあるが、例として6000mからの

爆弾投下だとしても、狙う場所と投下する位置は全く違う。

それを15〜20ノットで航行する艦船に対して行っても、100発落としてその内の1発でも至近弾になれば御の字、最悪その5倍、10倍の量を投下しても命中弾はおろか至近弾の1発も出ない事が殆ど。

ここ最近の輸送船団への被害はもっぱら潜水艦が殆ど。

ただし、投下した爆弾が命中した時の破壊力、貫通力などは急降下爆撃なんぞ目では無いぐらいだ。

重力による自由落下の加速やら細かいことは分からないが、高度6000mから800kg爆弾を投下して命中したでしょう。

輸送船や駆逐艦ならば木端微塵、大型艦である空母ですら艦底部まで到達して炸裂、撃沈されるだろうし戦艦だってただでは済まない。

それほどまでの破壊力があるのだ。

だが、先程も言った通りだが命中率は低い。

高度を下げて狙えばいい、というかもしれないがそうなれば護衛艦隊の対空射撃の餌食になるだけだ。

単発機と比べると的はデカイし速度は遅い、挙句に疾風や零戦が上空から襲い掛かってくる可能性もある。

しかも震電までもがいるのだから、高度を下げるなんて事をすれば戦艦の主砲でだって3式弾の一斉射でかなりの数かの撃墜出来るだろう。

だが、敵爆撃機編隊は殆どが6000〜7000m、高くても8000mで侵入してくるので震電ならば敵爆撃機の上を取る事も容易。

零戦と疾風が敵戦闘機を引き付けて、震電が爆撃機狩りを行う。

敵戦闘機の殆どは零戦と疾風が絡めとってしまっているので爆撃機は丸裸も同然。

もし震電を追いかけたとしても急降下一撃離脱を徹底して行っている震電は急降下の勢いを利用して一気に高度を上げているのだ、振り切られてしまう。

その間に零戦か疾風がその敵機を撃墜するか追い掛け回している。当の震電は次の獲物を物色している頃だろう。

30mm機銃は対B—29用とされていたのだからその破壊力は折り紙付き。

主翼に命中すれば一連射で撃墜確実、胴体であつても当たり所によつては致命打となりえる。

我が物顔で敵編隊上空をグルグル飛び回り、突っ込んで獲物を仕留めるその様はカツオドリにも見えるそうだ。

次に敵機動部隊の動きが活発化していることだ。

これに関しては、諜報関連も兼ねている広野中将と南方方面と中部太平洋方面での偵察、哨戒任務に就いている3個潜水艦隊からの情報だ。(浮揚作業と修理によつて戦線復帰を果たした潜水艦で持つて編成された第3潜水艦隊を含む)

これには既に第3潜水艦隊も同様に任務に就いており、3個潜水艦隊を北方から、中部太平洋、南方方面の3方面をそれぞれ担当させている。

北方方面、正確には北知床岬から千島列島の中程、大体プロリフ・ナデシユデイ辺りまでを結ぶラインとプロリフ・ナデシユデイから円を描くように襟裳岬までを指している。

北方方面に関して言えば哨戒と言う意味合いが強い。

ただし今現在この方面での深海棲艦の動きに変化は見られず。通信量が若干ながら増加している程度だ。

恐らく通信量が増えたのは中部太平洋での活発化した動きが影響しているのだろう。

担当は第3潜水艦隊。

中部太平洋方面は小笠原諸島から大体、マリアナ、パラオ、そして深海棲艦の一大根拠地、棲巢が構築されているトラック諸島までを指

す。

基本的には本土からの航空機哨戒が主な哨戒方法だがマリアナまで進出するととなると偵察を担当している二式大挺が危険にさらされ過ぎるのでマリアナからトラック、パラオは潜水艦隊が偵察、哨戒を行っている。

この方面へはマリアナの敵飛行場偵察によってB-29が飛び立った時の情報やトラック、パラオの偵察任務が含まれている。

パラオを含む理由としては、あそこにはバベルダオブ島とペリリュー島の二か所に長さが1200m以上、幅は凡そ70〜100mの滑走路がバベルダオブ島に1本と

ペリリュー島に十字に交差するように2本、更に補助滑走路が1本とかなり整備されているからだ。

情報によればこの二か所がマリアナ諸島や南方方面への航空機の中継地点となっているらしい。

担当は第1潜水艦隊。

南方方面はカリマンタン島とスラウエシ島間からジャワ海、セレベス海、そしてスラウエシ島までは航空機による哨戒に任せて潜水艦隊はバリクパパンを拠点としてバンドラ海、アラフラ海を超えてビスマルク海やソロモン海方面へ進出、偵察を行っている。

担当は第2潜水艦隊。

と以上の様に偵察や哨戒を行っている。

その結果、中部太平洋方面の深海棲艦の動きが活発化していることを掴んだ。

南方方面とトラック、ウルシーなどの投錨地間での通信量が激増しており、偵察によればトラック、ウルシーなどの投錨地の艦船の動きがかなり活発化している事。

はつきり言えば、深海棲艦が何らかの作戦行動を行う前兆である事

は確かだ。

ただ、暗号文であることが殆どであり、深海棲艦の暗号を解読出来ていない我々は正確な敵の目標が分からない。

というのも、中部太平洋方面は広大でありそのどこから日本本土近海へ深海棲艦が現れても何らおかしくも無いのだ。

しかも中部太平洋を北上、日本本土やB-29迎撃において活躍している三宅島電探基地などを狙うと見せかけて沖繩方面へ転身、攻略を目論んでいる可能性もあるのだ。

今現在我々は北海道から南方方面にかけての凡そ北東から南西に縦に長い地域の防衛を行わなければならず、何処に敵艦隊が現れて上陸作戦が展開されていてもおかしくはないのだ。

戦略上で最優先となるであろう、と考えられているのは南方方面だ。

というのも通常、深海棲艦の作戦行動から考えれば恐らく南方方面を攻略した後に沖繩、日本本土と攻めてくるもの、と予想出来るのだがその予想の裏を搔く可能性もある。

というのも沖繩を叩いて、あわよくば占領することが出来れば南方方面と日本本土の資源輸送ルートを分断出来るからだ。

それを考えれば、沖繩と言う事も有り得るのだ。

はつきり言えばどこに敵艦隊が来襲するのか、そして来襲時期は何時なのか、というのがさっぱり分からないのだ。

念の為に全艦隊、及び全部隊に警戒態勢を敷いているが敵艦隊が来襲した場所への救援は間に合わないだろう。

「提督！ 広野中将より緊急電です！」

執務室でいつも通り書類仕事に専念していると、ノックも無く呉鎮守府の通信士官の1人が勢い良く入って来た。

「おい、失礼だろう！ノックぐらいしたらどうだ」

「はっ！失礼しました！ですが火急の要件でしたので！」

「長門、構わんさ。で、緊急電と言うのはなんだ？」

ノック無しに入って来た士官を今週の秘書艦である長門が怒鳴りつける。

だが、緊急電という事だからそれも仕方が無い。

「敵艦隊が動きました！」

その報告は、事前から警戒していたとしても俺も長門も驚かざるを得ないものだった。

『敵艦隊、ウルシー環礁ヲ出航。戦力ハ空母10隻、戦艦7隻ヲ含ム有力ナル艦隊ナリ。連合艦隊ハ至急敵艦隊迎撃ヲ行ワレタシ』

広野中将から送られてきた緊急電は、そのままの通りの内容だった。

何故分かったのか、と言うと深海棲艦の暗号を全く解読出来ていなかった訳では無い。

局所的な物である、よく使われるものなどは分かっていたし、出撃時などの重要符号もある程度は分かっていた。

だが深海棲艦側に暗号を変えるような動きは無い。

だからこそ、深海棲艦の出撃が今回分かったのだ。

俺は、艦隊に出撃準備命令を下令。すぐさま出撃準備に取り掛かった。

早ければ明日の日の出前には出撃出来るだろう。

そして今現在、我々は会議室で敵の目標はどこなのか、目的は何なのかという事を議論していた。

「中部太平洋での敵艦隊の動きで、以前からウルシー環礁に向けて艦隊が動いていることは掴んでおりました。実際、潜水艦隊からも報告は上がって来ていました」

「問題はそこでは無かろう。敵の目標は何なのか、と言う事だ」

参謀長と情報参謀がそう言い合う。

「兎に角、敵艦隊の動向は探っておかねばならない」

「そこは問題ありません、第1潜水艦隊が追跡を行っております」

「ならばいい。だが、連中は何を考えているのだ？今現在までの行動を見ても全く掴めんど」

「はい、小笠原諸島を北上したかと思えば西に舵を切って沖縄方面に針路を取りました。そして今現在は南方方面に向けて針路を取っております」

「全く、どうしてこんな針路を取っているのか……」

敵艦隊はウルシー環礁を出撃、小笠原諸島を北上して電探基地か日本本土を狙うかのような動きを見せたと思ったら、舵を沖縄方面に取った。

沖縄を攻略して、楔を打ち込むのか、とも思われたが上陸船団を伴っていないのでそれは有り得ないがどちらにしろ攻撃目標は沖縄か!?!と思っていた矢先に再び舵を別針路に取った。

次は南方方面に向けて針路を取ったのだが、どうにも敵艦隊は南方方面への攻撃と言うものでも無いらしい。

仮に攻撃を行うとすればもつと早く艦隊を進めるだろうが敵艦隊の速力は15ノットと遅い。これではどう考えても南方方面への攻撃とは考えられない。

それにそんな無駄に針路を取るよりもウルシー環礁から直接出撃した方が各地の深海棲艦の飛行場の支援も受けられるのだから態々日本本土や沖縄に接近して各地の航空隊の攻撃を受けるかもしれない、なんて危険を冒す必要は無い。

だからこそ、敵の目的がはつきりとしなくこちらもどう対処すべきか決めかねていた。

「まず明確にすべきは敵艦隊の意図と、その最終的な目標が何なのかという事だ。これが不明瞭なまま出撃すれば良い様にやられてしまいうだろうし、時間を無駄にするだけだ」

「それに出撃時刻も迫って来ております。それまでに何とかしなければなりません」

「提督、発言しても宜しいでしょうか？」

そう、俺達が頭を悩ませていた時に手を挙げて発言の許可を求めて来たのは次席作戦参謀の田原中佐であった。

「構わん、好きに発言してくれ」

「敵の、目標は我が艦隊を誘引する事にあるのではないのでしょうか」

「誘引するだと？」

「はい」

「どうしてそのように考えたのだ？」

「まず、敵艦隊の行動にあります。あたかもこちらが出撃してくる事を誘っていると言えます。本来、欺瞞航路を取ると言っても限度がありますから、これほどまでに針路を大きく変えて各方面へ接近しては攻撃も仕掛けずにまた針路を変えるのは、我が艦隊を誘っている、と考えるのが妥当でしょう」

「では、本来の目的は何だ？」

「そこが問題です。幾つか考えられるのですが、我が艦隊をもう一別の艦隊を用意して挟撃、撃滅を狙っているとも言えますし、どこかを占領する為にそれを防がれないための陽動なのか。これがはつきりしません。どちらもあり得ると言えるでしょう」

彼は、そう説明する。

確かにその説は有り得る。深海棲艦からすれば我々はかなり大規模になった、下手をすると世界で唯一の対抗戦力だ。

それを殲滅することは出来なくとも大打撃を与えて行動が出来なくして、その間に南方や北方の各方面から大攻勢を仕掛ければ、我々

は成す術無く良い様にやられてしまうだけだろう。

幾ら各地の航空隊があるとしても、空母を含む機動部隊と言うのはその名の通り機動力が高く、深海棲艦の空母ヲ級は100機に達する艦載機を搭載する事が出来る。

これを10隻でも揃えれば各方面の航空隊を全て合わせても敵わない数になる。

バリクパパンの様に飛行場同士が近く、相互連携が取り易いならばまだ良いが殆どの場合は距離が離れているから不可能だ。

そうなった場合、各個撃破されるのは目に見えている。

だからこそ第1機動艦隊と各地の航空隊が連携して、敵艦隊を迎撃するという方針を固めていたのだが、現状、敵艦隊の目標、もしくは攻略目標がはつきりとしなない為に艦隊を出撃させようにも何処に出撃させるのか？と言うのが一番の問題なのだ。

以上の事を考えると田原中佐の言う事は、的を得ていた。

であるならば、敵の本当の目標はどこなのか。

それをはつきりすればこちらとしては敵機動部隊を放って置いても構わない。

深海棲艦の本当の攻略目標さえ我々は防衛に成功すれば敵は引かざるを得ない。

「田原中佐の言う事が、事実なのだとしたら敵はどこを本当の攻略目標としているのか、と言うのが問題だ」

「提督、それならば暗号解読によって不確実ではありますが恐らくここなのでは無いか？と言う場所を割り出しています」

「なに？それは何処だ」

「小笠原諸島のどこか、です」

「小笠原諸島だと？あそこに何がある？」

小笠原諸島には本当に何も無い。

撤退する時に、硫黄島の飛行場は徹底的に破壊しつくしたとの事だし今の今まで深海棲艦は見向きもしなかった。

現状、最前線となっているのは八丈島だが連隊規模の陸軍部隊が駐屯しているだけで八丈島の飛行場は使用が出来ない。

そんな所を攻略するのか？

「いくつかの島は飛行場を作るのに適しています。恐らくは本土爆撃を行う際に震電の迎撃を阻む為に戦闘機をその飛行場に進出させるつもりなのでしょう」

「となると、硫黄島や八丈島が挙げられるがどちらとも深海棲艦の勢力圏内だ。辛うじて八丈島は陸軍が駐屯しているが硫黄島は兵は1人もおらんだぞ？態々機動部隊を出して来るものか？」

「震電の迎撃の成果はとんでもない数になっております。護衛戦闘機も無くただ300機のB-29を送り出しては毎回毎回150機を超える損害を出しているのですから、幾ら深海棲艦の物量と言えども無視出来るものではなくなった、と言う事でしょう」

確かに、震電での迎撃は毎日行われていてB-29との戦闘は苛烈だ。

大体、B-29は300機単位で爆撃を仕掛けてくるがその半数を撃墜、若しくは撃破している。

今までの戦果を全て合わせればどれだけになるか分からない。

夜間爆撃にしても、技術妖精達の頑張りのお陰で機上電探の性能が向上しており少なくとも最初期と比べれば天と地ほどの差がある。

お陰で夜間の迎撃も一定の戦果を出せるようになってきた。

だが一連の戦果はあくまでも、護衛戦闘機が1機もない爆撃機だけの敵編隊だったからであつてもし護衛戦闘機が登場してしまえばそれこそ今までと同じように戦果を挙げ続ける事は出来ない。

本当に深海棲艦の物量はどうなっているのか、と怒鳴りたいような話だが確かに、昼間爆撃も夜間爆撃も効果が出ない、戦果よりも被害が大きくなれば何らかの対策をするのは妥当だ。

まず考えられるのは、爆撃そのものを中止する事。

一番手っ取り早く被害を食い止められる方法だ。

だが中止をすれば我々は工場や市街地を爆撃されることは無くなり航空機生産など軍需物資の生産は今よりも大規模になるだろうし、

国民の生活も爆撃に怯えて生活しなくて済むし様々な物が作られるようになるだろうからずつと楽になる。

そうなれば我々が前線に投入する兵力は今までの倍に膨れ上がるだろうし深海棲艦としてはそれは避けたい筈。

となればとつてくるであろう対策は二つ目の今までいかなかった護衛戦闘機を就けること。

これを実施出来れば爆撃機への迎撃による被害もずつと低く抑えられるだろうし何よりも日本本土へ対する爆撃効果が格段に上がるからだ。

もし二つを選択肢として並べても、深海棲艦がどちらを取るかは歴然だ。

後者を取るに決まってる。

「……………分かった。それでは深海棲艦の攻略目標が小笠原諸島八丈島、及び硫黄島への飛行場建設を前提として作戦を練って欲しい。時間は少ないがやれるか？」

「可能です。それではすぐさま取り掛かりますので失礼させていただきます」

そう言うって作戦参謀と次席作戦参謀の二人は敬礼をすると会議室から出て行った。

「正確な出撃時刻は何時になる？」

「はっ、現時点ではどれだけ早くとも全艦艇が出撃可能となるのは明日の午後6時から8時の間になるもの、と思われます。訓練航行中であった信濃と加賀を呼び戻して燃料の搭載、航空機燃料、各種弾薬、食料の搭載にどうしても時間が掛かります」

「タイミングが悪いな……………」

「はい、しかも両空母の流星隊は未だ訓練途上です。発着艦は行えませんが戦闘に参加させるのは難しいかと」

この時、信濃と加賀は1か月の母艦航空隊錬成及び訓練航海を行っ

ており2隻には食料はおろか訓練なので最低限の弾薬などしか積まれていなかった。

しかも両空母に搭載予定の流星隊はまだまだ訓練途中で、戦闘にはとてもではないが参加させられる練度では無かった。

恐らく搭載して出撃させたとしても敵戦闘機や対空砲火によつていとも簡単に落とされてしまうだろう。

幸いな事は戦闘機隊の方は万全の体勢となっている事ぐらいだろうか。

戦闘機隊は元々は信濃と加賀に配属される予定では無く、他の各空母へ損耗を負った時に補充するための補充要員だったのだが、その補充要員が資源などに余裕が出始めて訓練もより大規模に行えるようになったことで数が増えていた。

そこで、一部の補充要員を引き抜いて信濃と加賀に配属させてしまおうとなったのだ。

元々、両空母の戦闘機隊は未だ訓練途上であつたのでそれよりも戦闘機だけでも搭載して前線に出せた方が良く、という事だったので結果的にそうなった。

前線に出せる空母は1隻でも多い方が良いのだから。

だが、お陰でそれによつて第1機動艦隊の空母は12隻、護衛艦隊と鳳翔を含めると18隻になる。

着任当初とは比べ物にならない大戦力だが、深海棲艦はこの倍は余裕で揃えられる。

第1機動艦隊

第1航空戦隊

飛龍、蒼龍、瑞鶴 加賀

第1戦隊

戦艦

金剛 霧島 リシユリユ一

重巡洋艦

鈴谷 ザラ ポーラ

第1水雷戦隊

軽巡洋艦

能代

駆逐艦

秋月 照月 Z3 初月 陽炎 雪風 浦風 萩風 初梅 初雪

浦波 菊月

第2航空戦隊

大鳳 信濃 阿蘇 葛城

第2戦隊

戦艦

ビスマルク テイルピッツ ヴァンガード

重巡洋艦

熊野 アドミラル・ヒツパー プリンツ・オイゲン

第2水雷戦隊

軽巡洋艦

矢矧

駆逐艦

若月 霜月 春月 村雨 時雨 響 隴

第3航空戦隊

隼鷹 飛鷹 グラーフ・ツェツペリン アークロイヤル

第3戦隊

戦艦

リットリオ ローマ

重巡洋艦

青葉 古鷹

第3水雷戦隊

軽巡洋艦

多摩

駆逐艦

宵月 満月

Z1

初雪

浦波

菊月

望月

望月

Z3

村雨

霜月 春月

以上の3個航空戦隊で敵機動部隊迎撃を行う。

この3個航空戦隊は今回、行動を共にして全力を挙げての迎撃となる。

もし今回負ければ、かなり不味い事態なる。

敵輸送船団攻撃艦隊

第4航空戦隊

鳳翔 大鷹 神鷹 海鷹 龍驤 千代田

第4戦隊

戦艦

長門 日向 クイーン・エリザベス ウォースパイト ラミリーズ

ネルソン デューク・オブ・ヨーク

重巡洋艦

那智 羽黒 愛宕 摩耶 最上 キャンベラ ゴトランド デ・ロ

イヤル

軽巡洋艦

名取 鬼怒 天龍 龍田 神通

駆逐艦

花月 涼月 グレカール リベッチオ ジャーヴィス マエスト

ラーレ

東雲 白雲 浦波 狭霧 子日 有明 海風 江風 峯雲 霞

藤波 沖波 清霜 白雲 有明 長月 荒潮 親潮 黒潮 竹 桃

椿 楓 樺 楠

そしてこの第4航空戦隊以下で、もし本当に飛行場設営を目的として硫黄島や八丈島に來襲するといふのであればその攻略を担当する上陸部隊輸送船団撃滅の任を担う。

この艦隊は戦艦7隻を基幹として艦隊防空を6隻の軽空母が担う。

6隻の空母は敵艦隊攻撃は行わず対潜と防空に専念し、戦艦7隻と重巡8隻の大火力を以て輸送船団撃滅を行う。

そこで忘れてはならないのが軽巡5隻以下水雷戦隊である。

この水雷戦隊は魚雷を全て合わせると100では利かない本数、軽巡組は方舷連装2基ずつなので一斉射は出来ないが、もしそれらさえも一斉射することになれば240本に達する。

これを輸送船団に向けて発射、命中となれば、大打撃を与えられる事は間違いない。

全艦には酸素魚雷発射管を装備させているのでその破壊力は絶大だ。戦艦ですら1本の命中が命取りに成り得るのだから、輸送船に1本でも命中すればたちどころに轟沈は免れないだろう。

「取り敢えず、信濃と加賀は流星隊を載せずに烈風のみ艦載する事にしよう。最悪、両空母の流星隊には再建の先駆けになって貰わなければならなくなる可能性すらあるのだからな」

「分かりました。その様に手配させます。両空母に艦載するのはそれぞれの烈風隊のみで宜しいですか？」

「いや、防空能力を出来るだけ底上げしておきたいから載せられるだけ載せてくれ」

「了解しました。満載させます。彩雲は露天繫止で宜しいですか？」

「ああ、それで構わない」

そう言う訳で次に各空母の艦載機の内訳を記そう。

飛龍

烈風37機 流星32機 彩雲9機 計78機

蒼龍

烈風37機 流星32機 彩雲9機 計78機
瑞鶴

烈風37機 流星52機 彩雲9機 計89機
隼鷹

烈風37機 流星32機 彩雲9機 計78機
飛鷹

烈風37機 流星32機 彩雲9機 計78機
天城

烈風37機 流星36機 彩雲9機 計82機
(彩雲9機を露天繫止)

阿蘇
烈風37機 流星36機 彩雲9機 計82機

(彩雲9機を露天繫止)
大鳳
烈風37機 流星32機 彩雲9機 計78機

(彩雲9機を露天繫止)
グラフ・ツエッペリン

烈風37機 流星20機 彩雲6機 計63機
(彩雲6機を露天繫止)

アークロイヤル
烈風37機 流星24機 彩雲6機 計67機

(彩雲6機を露天繫止)
信濃
烈風70機 流星無し 彩雲6機 計76機

加賀
烈風98機 流星無し 彩雲6機 計104機

鳳翔
零戦52型丙20機 零戦62型12機 彩雲4機 計36機
(彩雲4機を露天繫止)

大鷹
零戦52型丙20機 零戦62型12機 彩雲4機 計36機

零戦52型丙20機 零戦62型12機 彩雲4機 計36機

(彩雲4機を露天繫止)

神鷹

零戦52型丙20機 零戦62型12機 彩雲4機 計36機

(彩雲4機を露天繫止)

海鷹

零戦52型丙20機 零戦62型12機 彩雲4機 計36機

(彩雲4機を露天繫止)

龍驤

零戦52型丙20機 零戦62型12機 彩雲4機 計36機

(彩雲4機を露天繫止)

千代田

零戦52型丙20機 零戦62型12機 彩雲4機 計36機

(彩雲4機を露天繫止)

烈風538機 流星328機 彩雲120機

零戦52型丙120機 零戦62型72機

航空戦力は以上となった。

合計で1178機を数える。

加賀の艦載機数は随一であり、その気になれば100機超える艦載機を搭載する事も出来るのだが流石にそこまで搭載してしまうと艦載機の運用に支障が出てしまうのでギリギリの艦載機数である98機となっている。

この機数にまで増えた理由は烈風が折り畳み翼を採用しているからだ。

烈風よりも機体の大きさが小さい零戦は折り畳み翼を採用していないので、烈風と比べると結果的に艦載機数が少なくなるのだ。

信濃の艦載機数が飛龍や蒼龍に比べて少ないのには訳がある。

と言うのも信濃は元々は大和型戦艦を空母として流用したもので飛行甲板の走行は大鳳に負けず劣らず、それ以外の防御も元大和型戦艦3番艦に恥じない重装甲重防御となっている。

そしてその重防御は信濃そのものの運用想定が従来の空母とは違ったものになったが故に艦載機数が少ないのだ。

本来ならば信濃は50機程度の艦載機数に留めて、本隊とは別行動を行い前進、味方攻撃隊の中継基地や補給基地、損傷機の收容、敵攻撃隊の吸収などだ。20機も増えたのはやはり折り畳み翼の影響と俺が満載する様にと指示を出した事が大きい。

だがそれでも70機に留まっているのは、中継基地、補給基地としての役割を發揮する為に爆弾や魚雷を他の空母よりも遥かに多く搭載しているからだ。

信濃は大和型戦艦譲りの重防御は急降下爆撃機の爆弾程度ならば容易に弾くし魚雷だって数本程度の命中ならば余裕で耐えられる。

だが艦載機数が多いと引火の恐れが高まるし味方攻撃隊の中継基地として機能出来ない。

だから艦載機数が少ないのだが、今回はその様に運用する事を考えず、第1機動艦隊に随伴させての行動だ。

1178機を数える、これだけの一大戦力だ。

失えば再建にどれだけ早くても2〜3年以上は掛かる。

それこそ、深海棲艦への対抗手段を失う事を意味するのだから国家存亡、人類存亡が関わってくる。

しかしながら、こちらが揃えられる最大戦力を全て掻き集めてこれなのに、我々よりも少ない数の空母10隻で1000機もの航空機を保有し、輸送船団に張り付いている護衛空母をも合わせれば1500機は下らない。

しかも防空能力が高い戦艦7隻が護衛に張り付いているのだから、今回我々が負う事になるであろうこちらの被害は想像も付かない。

兎に角、本土防空など様々な面から見ても今回は負けるわけには行かない戦いとなるだろう。

「提督、出撃準備が全て整いました。ご命令さえあれば抜錨、出航が可能です」

「ありがとう。それでは、全艦錨を上げろ。艦隊抜錨」
「はっ！」

翌日、日が沈んでから1時間程経ってから艦隊の出撃準備が整った。

抜錨を下令して艦隊は一斉に瀬戸内海を出撃。それに続いて敵輸送船団攻撃艦隊が出撃した。

それと時を同じくして敵機動部隊は針路を我々に向けた。

恐らく、潜水艦が豊後水道付近かどこかで行動を監視していたのだろう。

当然だ、我々も敵艦隊の動向を監視しているのだから相手だって同じことをするに決まってる。

更にはウルシー環礁から輸送船だけでも50隻を超える大艦隊だ。護衛艦をも合わせたら100隻を超える。

全く、次席参謀の言う通りだったな。

ああ、そう言えば今回の座乗艦も飛龍だ。

当然、将旗も飛龍に掲げている。

「提督、それでは作戦を説明させて頂きます。と言っても作戦と呼べるようなものかどうか分かりませんが……」

「構わんさ。今回ばかりは受け身だ、出来るだけ被害は少なく勝てればさえすればいい」

「勿論です、それを念頭に考えましたから」

そう言う与会議室の長机に地図を広げた。

「我が艦隊は敵艦隊の攻略目標が硫黄島か八丈島、と言う事を前提に艦隊を進めています。敵艦隊も我々から輸送船団を守る為に我が艦隊に一直線に向かって来ております」

「今回、我々は敵艦隊に向けて攻撃隊を放ちません」

「なに？どういふことだ」

「以前、提督が実施された迎撃に徹する、という事です」

「なるほど」

「今回、我々が勝利する条件は敵輸送船団攻撃艦隊が敵輸送船団を撃滅する事です。ですからこちらに注意を徹底して引き付けておくことが重要なのです。ですから最初の内は流星隊には出番はありません。兎に角、敵機動部隊を引き付けて引き付け続けることが重要なのです」

「敵攻撃隊を徹底して叩いた後、迎撃戦闘機をも上げられない位に疲弊したところに攻撃隊を放ち一気に突き崩します。敵戦艦の対空砲や対空機銃が懸念事項ですが急降下爆撃隊が先行して敵戦艦を爆撃、沈黙させる予定ですので多少はその火力を減らせるでしょう」

「わかった、それで行こう。敵艦隊と戦闘状態になるのは何時頃になる？」

「明日の0600から0700の間に掛けてと予想されます」

「分かった、その時間に合わせて戦闘準備を進めてくれ。対潜、対空、対水上警戒は決して怠るな」

「はっ、勿論です」

艦隊は針路を硫黄島に取って進んだ。

第31話

艦隊が呉を出港し、豊後水道を抜けて硫黄島に向けて針路を取り始めてから五時間が経った。艦隊速度は20ノット。

この速度ならばあと二十時間ほどで硫黄島近海に到達出来る見込みだ。

恐らくはその手前で敵艦隊との戦闘になると思われるから、あと十五時間程の猶予はあると考えられる。

ただし、十五時間と言う時間はあまり長くはない。

格納庫で艦載機の最終点検を行っている整備妖精達は右へ左へ駆け回り整備や出撃命令に即座に応えられるように艦載機へ銃弾や燃料を搭載しているし、作戦参謀や航空参謀、参謀長達も大忙しだ。

勿論俺もその中に含まれている。

とはいえ、十五時間もの長時間を一睡もせずにより切るのは難しい。しかも敵艦隊との戦闘が控えているともなれば余計だ。だからこそ交代で仮眠を取ったりしているのだが。

今回俺が乗艦しているのは、例に漏れず飛龍だ。艦隊の配置はそれぞれ、

2 航戦

1 航戦、3 航戦

と2航戦を幾らか突出させる様な形になっており、1航戦と3航戦は共に輪形陣を構築している。

なぜ2航戦を突出させているのか、と言う理由に関しては、信濃と大鳳と言う一番目立つ空母が居るからだ。

この二隻は空母としては破格の防御力を持っており、両空母とも5

00kg爆弾の急降下爆撃ならば容易に弾くことが出来る。

しかも信濃に関しては大和型戦艦の船体をそのまま流用しているからただでさえ防御力が高い。

それに加えて合同艦隊救出の際に得られた電気溶接技術のお陰で装甲を溶接することが出来るようになった。

元々、大和型戦艦は溶接技術が追い付かず装甲同士を繋ぐのにリベット工法を採用していた。

このリベット工法と言うのは、簡単に言ってしまうえば釘打ちだ。

木と木を繋ぎとめるのに一番最初に思い浮かぶのが、釘を打ち込むやり方だが、あれの金属版とでも言えば良いのだろうか。

ただし、使用される釘の大きさは比較にならない。

和釘（東大寺などの仏閣、船等の昔の建築物などに使われる）と言われる日本古来の釘ですら30cmもあるのに大和型戦艦に使われたリベットの大きさは場所によっては650mmにもなる装甲厚なのだから（とはいえ650mm厚の装甲は主砲防楯なので信濃にはそこまでの装甲は無い）どれだけ大きなりベットが使われたかは想像するのに苦労はしない。

ただ、問題なのはリベット工法は大きな装甲板同士を繋ぎ合わせた場合、魚雷命中時の水中防御にかなりの難点がある、という事だ。

衝撃を受けたときに、戦艦の主砲弾であればその装甲で弾き返すことが出来るのだが、物理学やらはてんで分からないから詳しい事は説明出来ないのだが、魚雷命中時の爆圧は主砲弾の物とは比べ物にならない。

と言うのも炸薬量が九一式航空魚雷であれど合計558kgにも達する。

それに比べて大和の主砲弾である九一式徹甲弾ですら炸薬量は33.85kg。

爆発したときの威力は比べ物にならない。

水中防御の場合、約560kgの炸薬の爆発にはさしもの大和ですら耐えられない、と言うよりはリベット止めをした装甲が、命中箇所のリベットが吹き飛び船体内側に捲れてしまうのだ。

そうなつてはもう浸水は止められない。

分厚い装甲を重機無しに人力ではどうやっても応急修理は不可能なのだ。

精々が防水布を当てて、添え木をしておくぐらい。

しかも装甲1枚が衝撃で丸々捲れるのだから、これでは細かく区画分けした水密防御だって意味を成さなくなる。

だが溶接だと話が変わってくる。

リベット止めとは違い、命中箇所のみ破孔だけで済む。

なによりも水密防御がしっかりと役割を果たし最小限に留めることが出来るのだ。

話を戻せば、信濃は溶接技術の向上のお陰で元々防御力の高かった大和型戦艦の船体をそっくりそのまま流用しているから遥かに防御力が向上。

爆弾や魚雷の命中ももそれこそ普通の空母、飛龍や蒼龍、瑞鶴では轟沈しているであろう4、5本の魚雷命中程度では沈まない、と言う訳だ。

爆弾に関しては装甲甲板で問題無く弾き返せるし、実験では500kg爆弾の急降下爆撃を難無く弾き返して飛行甲板の表面が煤けた程度だったという。

大鳳も防御力は信濃程では無いにせよ、装甲空母の名に恥じない防御力を持つ。

爆弾は信濃同様で魚雷も数発程度ならば戦闘力を奪われる事にはなるだろうが轟沈にまでは至らない。

信濃の全長は266.0mと共に並んで航行している阿蘇と葛城が軽空母に見える程でかい。

しかも全長だけでなく全幅も馬鹿でかいからビスマルクも全長250.5mあるというのに全幅に関しては何となく戦艦に見えるから何となく戦艦に見えるほどだ。

飛行甲板は最大幅40mもあり、烈風であれば2機並んでの発艦が出来そうに見えるほどなのだ。事実、熟練搭乗員ならば可能だろう。まあ、危険なのでやらないが。これだけデカくて目立つ彼女は当然、敵に狙われやすくなる。

今回2隻を含めた第2航空戦隊を前面に出したのには、この防御力の高さが理由だ。

ハッキリ言ってしまうえば、被害担当艦と言う訳である。

この2隻が攻撃を吸収している間に1、3航戦が迎撃機の準備を整える、と言う手筈だ。

それに伴い、2航戦にはリシユリユーとザラを臨時で配属させて直掩に当たらせる。

という事は空母1隻につき戦艦が1隻、がちちりと張り付くのだ。敵からしたら、さぞかし厄介な事この上ないだろう。

二航戦配置図

	熊野	アト
矢矧		
若月		霜月
ビス	大鳳	信濃
テイ		
ヴァ	阿蘇	葛城
リシ		
春雨		村雨
プリ		ザラ
響	隴	
時雨		

基本的に二航戦の4空母は信濃、もしくは大鳳に敵の攻撃が集中す

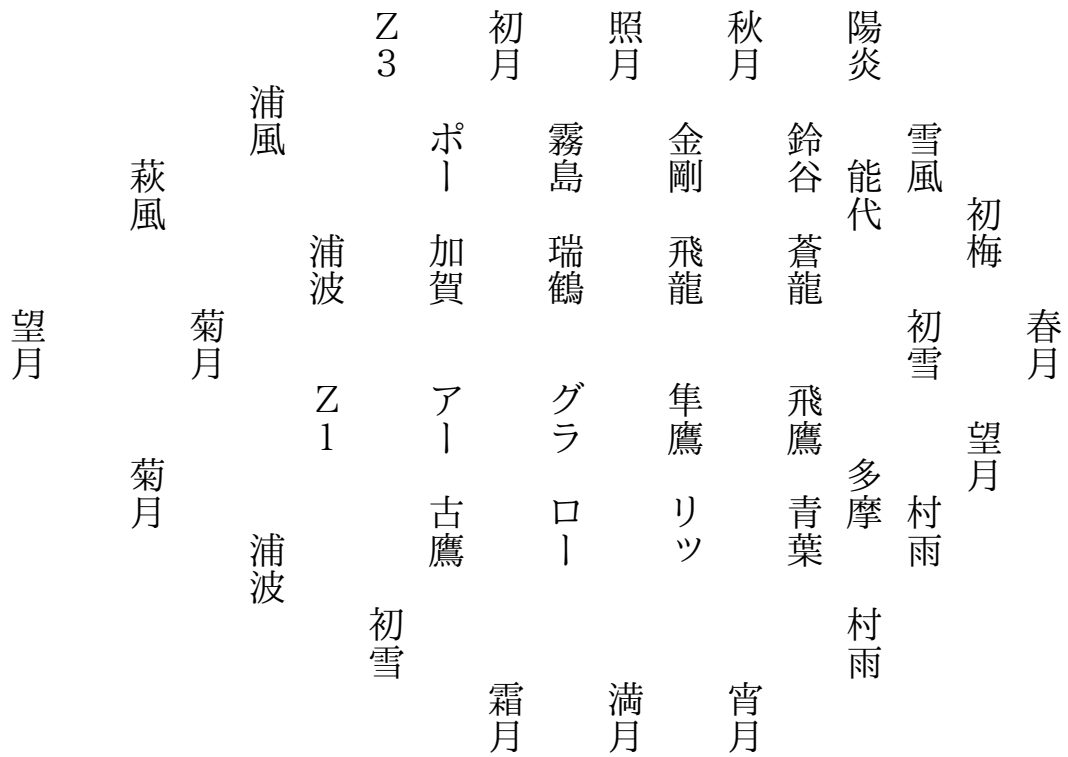
ると予想されるから基本的にはその2隻の上空及び左右の舷側に火力を集中する事となっている。

戦艦4隻分全ての火力とは行かないが、それでも出来る限りの火力を集中する事になっている。

まあ、どの空母に攻撃が行っても良い様に臨機応変に対応するように、とは言っているので大丈夫だろうとは思われる。

そして、この二航戦の11海里後方(約20km)に1航戦及び3航戦が進む。

一航戦及び三航戦配置図



こちらは真ん中で割る様に左右で一航戦、二航戦と分けている。空母の横には戦艦と重巡ががちり守っており、しかも空母は回避機動が行えるように左右で幅を取っている。

これならば、どれほどの敵であろうとも勝てる！そう誰もが信じて疑わなかった。

偵察任務に就いている第1潜水艦隊からの報告が上がってくるまでは。

暫くすると、一人の下士官が艦橋に勢い良く入って来た。

「提督、偵察任務中の第1潜水艦隊から入電！」

「聞かせろ」

「はっ！『我敵輸送船団ノ護衛戦力ヲ確認ス。空母6、戦艦10、巡洋艦20、駆逐艦多数ヲ認ム』。以上です！」

その報告を上げた士官はそのまま艦橋から降りていった。

艦橋内は俄かに騒然となった。それはそうだ。

ほぼ、陽動艦隊に匹敵する深海棲艦隊が敵輸送船団の護衛に就いているのだ、誰だつて驚いて騒ぎたくなる。

飛龍に乗艦している将兵は当初と比べて随分と実戦経験が無い新兵が多くなった。

唯一の救いは艦長などの指揮官クラスが未だ戦死していない事、艦橋要員などの重要役職の面々がまだ生き残っている事、俺を支えてくれる司令部要員が健在である事だ。

だが幾ら脳みそがあつてもそれに付いて行って、下された命令を十分以上に熟せる下士官達が居なければ駄目だ。

事実、空母はまだマシだとしても何度もの夜戦における砲撃戦で大損害を負った戦艦や巡洋艦、駆逐艦の熟練乗組員はかなり激減しており艦長以下艦橋要員が全員戦死した、なんて事もザラにあるのだ。

そちらの方が人的損耗は激しい。

先の海戦及び夜戦で大破した戦艦以下の乗組員損耗率は激しく、ビスマルクに至っては乗組員の凡そ5割以上が戦死、または重症によって艦を降りざるを得なくなった。

5割と言えばビスマルクの乗組員は2092名なので凡そ1000名程だ。

1000名程度が生き残ったとは言え、半分が新兵と言うのはかなりの問題だ。

過度な訓練を行って戦う前に兵を失うなんて馬鹿な事は出来ないし基礎教育と、その後の訓練を合わせても十分な訓練とは言い難い。

こっちはそう簡単に交代が利かないのに深海棲艦は無尽蔵とも思える物量で、兵器も兵士もそれなりの練度でポンポン戦線投入出来るのだ。そりゃ我々人類や艦娘、妖精が追い詰められるのも頷ける。

しかも将官ともなればその教育に余裕で数年は掛かるし更に実戦を経験した経験豊富な将官を育成するにはどれほどの時間が掛かるか……

それでも将兵諸君は良くやってくれている。

文句もあるだろうに、不満もあるだろうにそれを表に出さずに訓練に邁進しているのだ。

いや、話を戻そう。

艦隊司令部がある飛龍艦橋は大騒ぎだ。

それに比べて、どうも俺の頭は自分でも少しばかり驚くほどに冷えている。

「空母6隻に戦艦10隻とは連中、随分と大盤振る舞いだな……」

「提督、そんな呑気に言ってる場合じゃ無いよ!？」

「それもそうだが、冷静さを欠いてもなんら解決案も出ないだろう。皆、少し落ち着け」

俺がそう言うのと艦橋は幾らか静かになり、それぞれの顔にも幾らか冷静さが出来たようだった。

「さて、この案件はかなりの急を要する。急ぎ対策を練らなければならぬ。が、その前に第1潜水艦隊に暗号文を打電。敵護衛艦隊の空

母及び戦艦の正確な艦種を出来るだけ、無理の無い範囲で確認せよ、と送れ」

「はっ、了解しました」

その後、俺の命令通り、

『我飛龍。第1潜水艦隊ハ可能ナ限り敵護衛艦隊ノ空母及び戦艦ノ艦種詳細ヲ知ラセヨ。タダシ、決シテ無茶ハスルナ。提督命令デアアル』と打電された。その返信は短く、

『命令、了解ス。我、コレヨリ敵艦種ノ測定任務ニ就ク』

との事だった。

我々司令部要員以下は会議室に集まり緊急会議を開いた。

「問題は、敵護衛艦隊に相当数の戦力が就いている事です。この戦力ですと四航戦以下の敵輸送船団攻撃艦隊は大損害を負います。戦艦の数でも空母の数でも負けており、十中八九は敵艦隊の空母はヲ級を含みます。航空戦力でも圧倒されており、戦艦の数でも負けておりません。どちらをも相手するのは現状、得策ではありません。例えば各個撃破だとしても相当厳しい戦いになるでしょう」

作戦参謀がそう提言してくる。

確かにその通りだ。

航空戦力方面でも夜戦における砲撃戦から見ても連戦出来るだけの戦力は存在しない。

航空戦力でも最悪、倍近い差が出来る事になる。

戦艦の数だけならば15隻になるがそれでも敵戦艦とは2隻の差がある。

しかも相手は全戦艦が40cm砲を装備しているのに対してこちらは長門とネルソンのみ。

砲火力でも圧倒されている。

ビスマルクやティルピッツ、ヴァンガードなどは38cm砲を搭載しているからまだ太刀打ち出来るかもしれないが金剛や日向などでは厳しいだろう。

恐らく、正面からのぶつかり合いともなれば巡洋艦や駆逐艦の数でも圧倒されているだろうから負けるとは言いたくないが……

「提督、第1潜水艦隊より入電！敵輸送船団護衛艦隊の詳細な情報です！」

「読み上げてくれ」

「はっ！『我敵輸送船団護衛艦隊ノ護衛戦力判明。詳細ヲ知ラス。空母ヲ級6隻、戦艦ル級4隻、戦艦棲姫3隻、重巡リ級15隻、艦種不明ノ重巡5隻、艦種不明駆逐艦15隻、他駆逐艦多数。輸送船ヲ級58隻ヲ確認ス。報告ハ以上。続ケテ偵察ヲ続行ス』以上であります！」

その報告を受けて、今度こそは誰もが声すら出せなくなった。

それもそうだが、空母は全てヲ級、本来ならば深海棲巢にしか存在しない筈の戦艦棲姫が3隻も出張って来た挙句、それだけには飽き足らず未確認の艦種である重巡が5隻に加えてこれまた艦種不明の駆逐艦が15隻も存在しているのだから。

誰だつて言葉の一つも出てこなくなるのは当然だった。

戦艦棲姫はその特徴として、物凄く燃費が悪いという事が挙げられる。

それ故に棲巢近辺での、十分に補給を受けられる場所でなければ行動が制限されると言う事だ。

だがどういふ訳か、今回はその戦艦棲姫までもが出て来たのだ。

恐らくは、こちらからすれば想像も付かない程の補給量で無理矢理ここまで進軍してきたのだろう。

これを考えるに、今までの行動距離の長さを考えても主力艦隊にも戦艦棲姫は存在すると考えた方が良さだろう。

それを踏まえた上で会議室での話し合いを続けた。

「……諸君はどう考える？」

「正直に言いますと、我々は敵輸送船団への攻撃はほぼ不可能、と考え

ざるを得ないでしょう。敵輸送船団と戦う前に敵主力艦隊とも戦わなければなりませんし、もし敵輸送船団へ攻撃を集中したとしてもその背後や側面から敵艦隊に突かれる事になります。そうなれば我が艦隊は殲滅される、とは言い難いですが相当数の艦載機と艦を失う事になるでしょう」

「そうなれば、我々は深海棲艦に今後一切の反抗が出来なくなると言う訳だな……」

正直に言うと、我々は詰んでいる。

敵主力艦隊を先に相手をしてから、敵輸送船団と戦うとなると、敵主力艦隊を叩く事は可能だろうが敵輸送船団へ攻撃を加えたとしても護衛艦隊に阻まれて輸送船に手を出す事は出来そうにない、と言うのが全員の意見らしい。

確かにそれには俺も同意見だ。

ここで蛮勇を發揮してもそれこそ碌な事にはならないだろう。

「……我々は、どうするべきだと思う？」

「悔しいですが、ここは撤退すべきでしょう……今、我々は戦力を失うべきではありません。硫黄島を奪われれば喉元に刃を突き付けられる事にはなりますが、奪還の方が幾分かは楽でしょう。補給面を考えればそのまま敵艦隊が駐留する事は恐らく無いと思われまますから我々が先ず優先すべきは、戦力の保持と拡大であります……」

参謀長がそう言う。

その意見には大多数の者が同意なのか、難しく、悔しそうな顔を示しながらも頷いたりとそれぞれ意思を示した。

だが、中には不満を持つ者も居るようで。

「提督、敵艦隊と一度も砲火を交えずに、撤退なさるおつもりなのか!？」

「……」

「我々ならばやれます！」

「山原、失礼だぞ！弁えんか！」

そう叫ぶのは、先の海戦で戦死した飛龍の士官の後任として配属された『山原』と言う若い士官だった。

まだ実戦経験も無く、逸る気持ちを抑えられないのだろう。

「落ち着け、今戦つても我々は負ける」

「そんなことはありません！誰もが日々厳しい訓練を積んできました！その我々が負ける筈が！」

「ただ一度の戦術での勝利は望んでいない。戦略での勝利をしなければ、我々が深海棲艦に勝つことは出来ないのだ」

「ですが！」

「ですがも何も無いのだ……今ここで、貴重な艦や乗組員や搭乗員を失う訳には行かんのだ」

「悔しくないのですか!?!」

「悔しいに決まっていますだろう!?!我々が！俺が！どれだけの想いでここまで戦ってきたと思っっている!?!どれだけの戦友の死を飲み込んで進んできたと思っっている!?!」

思わず、そう怒鳴ってしまった。

俺は、各艦にそれなりに顔を出して、下士官達ともそれなりに顔見知りだった。

特に母艦搭乗員の連中とは仲が良かった。

共に、何度も飲み交わした事だつてある。まあ、俺は殆ど飲まずに酔ってどんちゃん騒ぎをする皆を見て笑っただけだったんだが。

飛龍と蒼龍の戦闘機隊の連中や、陸軍の戦闘機隊の、俺が着任する前からの付き合いの奴だつて数多い。

その面々が、海戦を終えるたびに少ないとは言っても必ずと行って良い程に一人、また一人と戦死して、身体どころか肉片一つすら帰つて来ずに、ただその戦死の報告を受けて聞く事ばかり。

遺品も殆ど無く、精々がそれぞれの支給品の一つあるか無いか。

彼らは妖精だから肉親も無く、桐箱に苗字だけが書かれた紙切れが一枚入れられて帰る場所は無く、簡素な慰霊祭を開いて碑に名前を刻むことも出来ずに名簿に記載されるだけ。

これのどこが悔しくないと言える!?!

「ッ!?!……だつたらー！」

「ただ戦うだけでは、彼らの死に報いる事は出来ないのだ……!?!」

グツ、と歯を食いしばり拳を握ってそう言った俺を見て山原は黙った。

「すまない、取り乱したな……」

そう言ってから一息吸って、吐いてから指示を出す。

「我が艦隊はこれより呉に向けて針路を取る。帰ろう、帰ればまた来られるのだから……」

「はっ！針路を呉に取ります！」

そう命令を復唱して駆けて行った参謀長は艦橋に登って行った。

「それでは解散。各員それぞれの持ち場に戻れ」

「」「」「はっ！」「」

その俺の命令によって全員が会議室から出て持ち場に戻った。

「提督、手を出して」

「ん……どうした」

「手から血が出るよ。強く握りすぎ」

「ん、ああそうだったのか。すまん」

「ううん、気にしないで」

そう言うと飛龍は救急箱から消毒液を取り出して血を拭うと包帯を取り出して巻いてくれた。

それを両手に施すと、俺の手を握って言った。

「提督、ありがとう」

「なにがだ」

「私達の事、皆の事忘れないで居てくれて」

「いいや……」

「ん、これで大丈夫。提督はちよつと自分を蔑ろにしすぎだよ。いい？これからは自分の事もちゃんと顧みて。死んだ皆だけじゃなくて、ちゃんと自分の事を心配して。良い？」

「……分かった。ちゃんと自分の事を顧みる事にするよ」

「絶対に約束だからね？じゃないと鳳翔さんにまたお説教して貰うか

ら」

「ああ、分かった」

それから艦隊は一度も敵艦隊と戦う事無く呉に帰投。

俺は軍令部へ出頭を命じられた。

当然だ、一度の砲火を交えることも無く、ただ占領されるのを見ていただけなのだから。

「今回、君を召喚した理由は分かっているな？」

「勿論であります。如何なる罰をも受ける所存であります。ですからどうか硫黄島への今すぐの反抗作戦を行う事だけはどうかお考え下さるようお願いします」

言うべきことは言った。

最悪、軍法会議に掛けられて銃殺刑でも構わない。

未だ俺の指揮下にある将兵達を無駄死にさせるわけには行かない。今までで死んでいった戦友達の死を無意味にする訳には行かない。

市木大将達がそんな愚行を犯すとは思えないが、それでも言うべきことは言わなければならない。

俺の代わりは居ないと皆言うが、それこそ彼らの代わりも居ないのだ。

彼らは俺の大切な部下であり戦友なのだ。むぎむぎ死ぬと、負けると分かっている戦いに送り込むことだけは、絶対に避けねばならない。

「脅し文句を言った手前で悪いが、どうやら君は幾つか勘違いしているようだが君を裁くためにここに出頭を命じたわけでは無いよ」

「では、何故私は此処に呼ばれたのでしょうか？」

「今回の敵艦隊の戦力と、今後の攻勢計画の策定の為だ。確かに今ここで硫黄島奪還に動く訳には行かないだろうがそれでは国民も政治家連中も納得しない。陛下は理由を説明して、納得して頂いたから裁かれる事も罰を受ける事も無いだろう」

思わぬ返答に、かなり驚いてしまった。

裁かれると思って覚悟を決めて来てみればそうじゃないと言われたんだ、誰だつて驚く。

少し啞然としてしまったが何とか返答する。

「それは……ありがとうございます」

「……どうした、何を何時まで突っ立っているんだ？会議をするんだ、早く座りたまえ」

「は、失礼します」

確かにそう言えば、直立不動のまま頭を下げていたから椅子に座っていないかった。

椅子が一席空いていたからどうしてだろうかと思っていたが、俺の分だったのか。

「司令長官職を担う大将で、今日まで必死に戦線を支えて海域の奪還と南方からの資源輸送を確立した君をそう簡単に軍法会議にかける事も、職を追う事も出来る訳無いじゃない？今君を解任したら本当に終わりよ」

中代大将がそう言った。

「身に余る評価です」

「私達しか居ないんだからそろそろ元の調子に戻ったらどう？」

「公式の場ですから」

「そう。それじゃあ、話し合いと行きましようか」

その言葉を皮切りに、先ず話し合ったのは敵戦力の事だ。

戦艦棲姫が前線に投入された事、艦種不明の艦が多数いた事などだ。

これに関しては戦っていないからその性能もまだ分からないが、第

1潜水艦隊が潜望鏡越しに撮った写真を元にある程度の性能を仮定した程度だが。

後日、その艦影を元に識別表に新しく追加し、識別名を与える事となった。

そして、今後の攻勢計画に関して。

こちらは南方方面に対する攻勢を延期して中部太平洋、具体的には硫黄島奪還とマリアナ諸島に対する攻勢を加えた。

と言うのも本来ならば中部太平洋に対する攻勢は行わずに連山の爆撃に留める予定だった。

だが硫黄島が深海棲艦の手に落ちたという事は喉元に刃を突き付けられているのと同じだ。硫黄島には恐らく敵戦闘機が配備されてB―29の護衛に就くだろうと思われる。

そうなる的今天まで震電で挙げてきた程の戦果を挙げられることが出来なくなる。

そこで、今の今まで温存していた連山を投入して硫黄島を爆撃、飛行場を稼働状態にさせる事を先ず防ぐ。

その間に八丈島に深海棲艦の上陸に備えて部隊増強、及び航空隊の進出を図りそれらの戦力が整い次第、艦隊と共に上陸部隊を編成、硫黄島奪還に動く。

そして硫黄島を前線基地としてマリアナ方面への攻勢を行う、と言うものだった。

攻勢と言っても奪還を行う訳では無く連山による爆撃でB―29の駐留する飛行場やその他の深海棲艦の軍事施設に対する爆撃を行うだけなのでもし被害が増加すればこれに関しては取り止め、という事になる。

兎に角、我々が最優先目標としたのは硫黄島奪還という事だ。

それに伴い、連合艦隊及び各地の航空隊などはその準備に取り掛かった。

まず、工兵隊と資材を搬入して八丈島飛行場整備及び増設。

十字に重なるように2本の滑走路を整備したのちに陸軍飛行戦隊と海軍航空隊の戦闘機のみがそれぞれ2個ずつ前進。

更にはもう1つ飛行場を建設し、こちらにも上空から見ると十字に見えるような形で整備した。

こちらにも陸海で2個ずつ航空隊を前進させた。

飛行場名はそのまま第2八丈島飛行場、と何の捻りも無い名前だ。これらの作業を3か月で終了させた。

そして艦隊はというと、硫黄島奪還に備えて全員が戦わずして退いた、と言う事に相当根に持っていたのか、それとも俺が戦力差を理由に撤退したことについて、戦力差を引つ繰り返すだけの技量が無いと悔しがったのか分からないが物凄い勢いで訓練を行っている。

特に、戦艦の乗組員達は搭載している砲の大きさをモノともしない、戦艦棲姫なぞ我々が初弾命中で葬り去ってくれる！と叫びながらの訓練らしい。

俺はと言うと作戦に向けた各種手配などの書類仕事に追われている。

それもそうだ、作戦開始は僅か2か月後なのだから猶予なんて殆ど残されていない。

なんなら深海棲艦は今にでも八丈島や大島に来襲してもおかしくはないのだから、一秒でも早く準備を終えなければならぬ。

そのような様々な思いの元、誰もがそれぞれの職務に邁進している。

硫黄島奪還作戦まで、残り2カ月。

第32話

硫黄島奪還作戦発令まで残すは1か月となった。

既に1か月前から連山による爆撃が連日行われており、一度の出撃機数は200機を軽く超える。

4機一編隊、それを10個40機の梯団を構成し、その梯団を5〜7個で毎日出撃を行い硫黄島に対しての爆撃を行っている。

その効果は大きく、艦船に対する爆撃は一切禁止、硫黄島に建設されている飛行場とその他物資集積所などの重要施設にのみ狙いを絞っているから飛行場は2つが確認されているがそのどちらとも連日の爆撃で徹底的に破壊されて如何な深海棲艦と言えども修理やその資材、物資の補給が追い付いていない様だった。

連山は最大爆装量である4000kgと言う途轍もない量を一機毎に満載しては飛び立っている。

2000kg爆弾2発を装備したり、1500kg2発、800kg3発、250kg爆弾だったりと出撃の度によって結構まちまちではあるが、理由としては目標によって爆弾の大きさを変えているのだ。

ある時は飛行場だから出来るだけ広範囲に被害を与えるべく25番だったり、デカイ穴を作ってやろうと2000kg（以降200番と表記する）であったり。

ある時は集積所の物資を焼き払うのが目標だから焼夷爆弾だったり。

そしてある時は新しく開発されたタ弾（クラスター爆弾の一種）であったりする。

タ弾は、対地攻撃用に新しく開発された、正式名称『二式25番三号爆弾』と言うもので、簡単に言えばクラスター爆弾の一種である。

親爆弾の内部に子爆弾を内蔵しており、基本は25番が親爆弾とされているのだが200番や150番用も開発されて実戦投入されて

いる。

25番は黄燐、を主剤とする弾子を1086個を内蔵しており弾子の形状は全長10cmのパイプ状、内部にチオコールテルミット（多硫化系人造ゴム）を内蔵した。

親爆弾の尾部に安定尾翼とは別にプロペラ状の尾翼を付けており、投下後に風圧で回転し、螺子状に1本の棒を本体の真ん中を貫通しておりそれが回転して抜けていくと、外殻を固定している螺子が外れるように設計されている。

元々は少量の爆薬を使用して外殻を吹き飛ばして散布する方式を取っていたのだが、それだと弾子が誤作動を起こして着火、空中で燃え尽きてしまうという事象が多発したので螺子方式になった。

25番であれば有効範囲は半径100m、高さ50〜70mの円柱状範囲内で有効であり飛行場爆撃にかなり有効である、と実際に投下した搭乗員や偵察を行った連山の搭乗員からは報告が上がって来ている。

夕弾だけでは無く陸用の200番なんかは飛行場のど真ん中に命中すれば艦砲射撃で受けた炸裂孔以上の大きさの穴を作る。

何せ200番は大和型戦艦の主砲弾よりもずっと重く、そして炸薬量も桁違いなのだから高度8000mから投下された場合の重力加速による運動量も絶大だし、炸裂した時の破壊力も驚きのものだ。

ある連山搭乗員は、対空砲火の中に混じって地上の建造物の破片が8000m上空まで飛んできた、なんてことを言う者も居るらしいが本当かどうかは分からない。

まあ、実際の話をしてしまうと、確かに目標事に爆弾を変えているという事情もあるのだが何よりも、爆弾の生産数が追いつかないという本当の実情があるから毎回爆弾の大きさが違うのだ。

連合艦隊に供給する分と、日本各地の航空隊に供給する分、沖縄と南方方面に供給する分と結構な量を消費しているのだ。

日本本土の航空隊にはそこまでの量を供給せずとも消費していないので問題無いのだが、兎に角、南方方面の物資の消費量が尋常じや

ない。

と言うのも、迎撃ばかりに努めている訳には行かず、こちらから敵飛行場に対して爆撃を実施する事もあるし、何よりも敵の爆撃によって爆弾薬庫であったり燃料タンクに爆弾が直撃すると諸共に吹き飛ばされてしまうのだから、その分を運ばなければならぬ。

そして、一番の影響だと言えるのが本土の工場が爆撃によって吹き飛ばされてしまう事だろう。どうかして再建して稼働し始めても再びの爆撃によって吹き飛ばされてしまうという、ある種のイタチごっこの様な有様である。

航空機製造工場に加えて、各種火砲や砲弾薬、燃料精製プラント、艦艇を修理をする為に必要不可欠である鉄鋼の製錬所などありとあらゆる軍需工場が標的とされていて、関東、関西、四国、九州の各地の工場のどこかが毎日爆撃を受けている。

せめてもの救いは、連合艦隊の根拠地である呉を含む瀬戸内海沿岸部が我々日本海軍の反抗戦力が駐留しており、後続する人員を育成したりするために関東よりもずっと分厚い迎撃網を構築されているから深海棲艦の連中もそう手出しをしない事ぐらいだ。

それでも瀬戸内海沿岸の工場だけでは各地の部隊へ補給する分だけの物資を製造する事は到底不可能だ。

どうかして地下に工場を移管するために工事を進めてはいるが、そもそも工員である妖精の殆どが陸軍所属であるために最前線へ配備されてしまっていて、更には沖縄と南方方面の各島々の要塞化のために技師妖精も殆どが引き抜かれているから遅々として進まない。

地下工場建設計画は深海棲艦が現れた当初の10年以上前から行われているというのにそのすべての軍需工場施設を移管する事が出来ていない。

全体の割合としても予定していた数の28%しか移管する事が出来ていない。

兎にも角にも連山による爆撃は絶大な威力と効果を発揮してはい

るが、敵も黙ってやられているばかりでは無く、連山に対する迎撃も当然行われている。

飛行場が使用出来ないので空母艦載機による迎撃を受けるのだが、これがまた厄介だった。

連山には八丈島の第1八丈島飛行場（先日このように改名された）と第2八丈島飛行場の両方から陸軍の疾風や海軍の紫電改が護衛に就いているが流石に迎撃機の数が多い。

連山は高度8000〜9000mを飛び進むのだが、疾風と紫電改は高高度性能が連山ほど高いと言えず、その3000m下の5000〜6000mを飛ぶ。（これだけ高度差があつて果たして本当に護衛と呼べるのかどうかは別としてだが）

連山の高度に辿り着く前に深海棲艦機は疾風及び紫電改と戦闘をするのだが何しろ数が多い。

こちらも両飛行場に更に陸海で1個ずつ、計4個航空隊を送り込みその戦闘機の総数は陸軍は疾風1個飛行戦隊32機が6個なので192機。

海軍は紫電改1個航空隊48機が6個なので288機。

計480機にも達する戦闘機を毎回200機以上送り出しているのに敵はその1.5倍や2倍の迎撃機を送り出してくるのだから苦戦は免れない。

陸海の機数差に関して説明すると、陸軍は主に南方方面と沖縄にその飛行戦隊の大部分を配備して、今現在も連日に渡る南方方面での迎撃戦で失った補充の機体と人員を送り込んでいる。

ざっくりとしたものではあるが、日本本土の防空は海軍が、沖縄を含めた南方方面までの防空は陸軍が、と役割分担している訳である。

まあ南方方面にも海軍航空隊は存在するし、本土にも震電装備の陸軍飛行戦隊や疾風装備の飛行戦隊も存在するので完全に役割分担をされている訳では無い。

あくまでも、陸軍は南方方面や沖縄に部隊を多く派遣しているから本土の部隊はその補充うや交代の為の物で出来るだけ消耗するのは避けたいから海軍に本土防空の大部分を任せているというだけの話

だ。

それに海軍も海軍で母艦航空隊に回すための烈風や搭乗員を優先しているからどうしても完全に本土防空を全て任されるわけには行かないのだ。

特に海戦が終わった直後は母艦航空隊の消耗が激しく、新兵だけでは補いきれずに各地の航空隊から少なくとも人数を引き抜いて再編している状況なのだから、これで海軍に本土防空はお任せを！などと言える訳がない。

連山による爆撃だけでなく、深海棲艦の補給艦隊に対する通商破壊作戦も行われている。

第1、第2、第3潜水艦隊全てを中部太平洋方面に集結させての作戦だ。

北方、南方両方面の哨戒と偵察任務は海軍の二式大挺や一式陸攻に全て任せている。

中部太平洋の3個潜水艦隊による通商破壊作戦の戦果は、輸送船215隻にも上っている。

毎回の深海棲艦輸送船団の数は精々が30隻程度で、ドイツ潜水艦隊がやっていたように、群狼作戦（ウルフ・パック）を展開している。

深海棲艦の輸送路はたったの一つだけであり、トラック諸島やウルシー環礁を一度経由して、そこからマリアナ諸島経由の輸送路だ。

南方方面からの輸送も考えられるのだがそうになると二式大挺による長距離索敵による哨戒網に引掛かる事になるので深海棲艦からするとこちらの方が危険だ。

となると先程のトラック諸島もしくはウルシー環礁及びマリアナ諸島経由の輸送路しかなくなるわけだ。

群狼作戦と言うのは簡単に言ってしまうえばその一つの輸送路に3個潜水艦隊を展開させて、1隻が敵輸送船団を見つけたら周辺にいる友軍潜水艦に報告して叩く、と言うものだ。これが驚くほどに効果を発揮する。

しかしながら深海棲艦も輸送船団の護衛も相当な物で戦艦や重巡こそ居ないが、駆逐艦や護衛空母が数十隻も張り付いている。

と言っても、基本的に雷撃を仕掛けるのは夜間だけなので航空機の脅威は無い。

駆逐艦の爆雷攻撃こそ脅威ではあるが歴戦の潜水艦乗り達が航空機の脅威が無い夜間雷撃で早々にしくじる様な事は無い。

今の今まで損傷を受けた潜水艦こそあれど、撃沈された潜水艦は無く、日々戦果を挙げ続けている。

ただし、この戦法は自軍の暗号文や電文が傍受されていない、解読されていない、と言うさも当たり前のような大前提の下で最大限の効果を発揮する。

以前まで、我々の暗号文は深海棲艦に100%、と言うほどでもないがそれなりの確立で解読されていた。

事実、南西諸島と南方方面に対する作戦は深海棲艦に読まれていたし、相応の戦力をこちらにぶつけてきた。

こちらは勝つことは出来たし奪還する事も出来た。

だがお陰で艦隊も航空隊も轟沈艦こそ出やしなかったがボロボロにもなった。

我々の暗号は深海棲艦に解読されていた、と言う訳である。

まあこちらも広野中将以下諜報部のお陰もあつて完璧ではないにせよそれなりに解読することは出来ていた。

兎にも角にもこのまま我々の暗号文が解読されている、と言う状況は100%では無いにせよ好ましくないのだ。

そこで我々は暗号に使われる符号を変えたのだ。

と言っても戦時下で、時間も無く緊急性の高い物だったから凝ったものを作成する事も出来ない。

だから我々が暗号文に使われる符号を変えた方法と言うのは、至極簡単である。

要は、符号をずらしたのだ。

と言っても、とても簡単な物で例えば連合艦隊を表すGF、と言う

符号であれば頭のGをずらしてHF、IF、と言ったようにだ。

流石にそのままただ単に横に一文字ずらしただけでは簡単に分かってしまうので、1か月事に右へ幾つずらす、左へ幾つずらすと言った形であっちへこっちへずれるようにしたのだ。

例えば、1月は右に4文字。

そうするとKFになる。

そして2月は左に3文字ずらす。

そうするとHFと言うようになる。

以上の様に、その月の頭文字を次の月になったら俺や中代大将達の決定に従ってずらすのだ。

こうするだけで、毎月毎月暗号文の符号が変わるのだから解読する側としてはとんでもなく厄介だろうと言う事はそこまで深く考えなくても分かる事だろう。

その符号の伝達は電文で行うなんて馬鹿な事はしない。

毎月と言うよりも、沖縄や南方方面に対しては毎日毎日深山による物資運搬が行われているからそれに積んで、そこから各部隊へ送ればいい。

日本本土の部隊には陸路、ないしは空路で送ればいい。

ハッキリ言ってこれだけの手間でこちらの情報が漏れないのだから楽なものである。

ただ、問題なのはその幾つずらすと書いてある文書が深海棲艦の手に渡ってしまったら、少なくとも1か月の間はこちらの情報がだだ洩れになってしまうという事だ。

何故1か月なのか、と言うとこちらの文書が深海棲艦に渡ったとしてもこちらはそれを知る術が無いのだ。

そりゃ深海棲艦にスパイでも工作員でも送り込めれば良いのだがそんなことは到底、出来る事じゃない。

と言うよりも人間同士の戦争ならいざ知らず、今の戦争相手は碌に敵の情報が丸つきり分かっていない深海棲艦が相手なのだからどうしようもない。

まあ、そう言う訳で潜水艦隊による群狼作戦は1か月に一度更新さ

れる暗号符号のお陰で多少の損傷を負う事はあれど、轟沈艦も出さずに大成功を収めているのだった。

これにより、幾ら大規模な護衛を就けていると言っても潜水艦隊の通商破壊作戦によって慎重にならざるを得なくなっているのか、何度も何度も偽装航路を取っているが結局目的地は同じなので大して意味は無い。

第1潜水艦隊が一番最初に雷撃を仕掛けたら、その暗号文を受け取った第2潜水艦隊のが敵輸送船団の予想航路に先回りして雷撃を仕掛ける。

そして次に第3潜水艦隊が先回りして雷撃を仕掛ける。

そして機会があればまた第1潜水艦隊が先回りして、と出来る限り雷撃を仕掛けつつ敵輸送船団の損害を増やしてやるのだ。

まあ殆どの場合、一度仕掛けたら終わりなのだが。

「提督、今月の潜水艦隊による戦果よ」

「ん、どうだった？」

「第1潜水艦隊が21隻、第2潜水艦隊が17隻、第3潜水艦隊は19隻になっているわ。合計で57隻よ」

「これで、合計276隻になるのか。これまた随分とんでもない数だな……」

「ええ、潜水艦隊の皆は良くやっているわ」

「確かに潜水艦隊は良くやってくれている。だがそれ以上に、276隻も輸送船を沈められているのにも関わらず未だに前線に物資を届けられる事に、恐怖を通り越して口を開けて啞然とするしかないな」

「深海棲艦の物量は、誰もが良く知っている事よ。私だって欧州で嫌と言うほど思い知らされたもの。それに、太平洋の戦いははつきり言って欧州以上に地獄ね。欧州はまだ各国が近い距離にあったから一緒に戦えたから幾分か楽だったし、イギリスって言う大艦隊を持つてる国もあつたからこつちと比べるとまだ楽ね」

今週の秘書艦であるビスマルクと共に一時補給の為に呉に帰港した潜水艦隊からの報告書を提出してくる。

ビスマルクも随分と日本語が上手くなった。難しい日本語も操るし、読むこともできる。

最初は彼女達海外艦の面々は秘書艦業務を行わせる予定は無かった。

だが、どうやらプライドが高いビスマルクやリシユリー達は自分達に仕事を任せられていないという事がどうやら、お気に召さなかったように直談判しに来たのだ。

「私にも秘書艦とやらをやらせなさい!と言うか他の皆が出来ているのにこの私に仕事が任せられないと言うの!?!」

だそうだ。

まあ、はつきり言つて機密云々と色々とおったから洩っていたのだが……

「この私が、命の恩人である貴方達に不利益な事をするとも?そのぐらい守るわ」

との事だった。

正直、信用したいのは山々だったんだが連合艦隊司令長官の職を任せられている以上、幾ら共に戦っている仲間だとしてもそう簡単に信じてしまうのは避けなければならぬ事だった。

だが、彼女達の意味も相当に堅いらしかったらしく頑として譲らなかつた。

そこで、俺が海外艦達や日本艦娘達に説得される形で妥協する事になった。

流石に全員を認める訳には行かないので、各国から1人ずつ出す事にした。

ドイツはビスマルク。

イタリヤはリットリオ。

フランスはリシユリー。

イギリスはウォースパイト。

以上の4名が海外艦の内の秘書艦となった。

スウェーデンやオランダ所属のゴトランド、デ・ロイヤルなどは別にやらなくても、と言う感じだったので本人達の自由意思に任せたところ、訓練等も行わなければならぬので辞退する、との事だった。彼女が言った、欧州の方がまだ楽な戦いが出来たというのもしょうがない話なのだ。

イギリスと日本の艦娘保有数はイギリスの方が多し。元々艦娘とその艦体はかの大戦中に戦った艦や建造、計画されていた艦などだ。

それは、簡単に言ってしまうえば当時の艦艇保有数が直結するということだ。

当時、日本海軍はロンドン海軍軍縮条約などの影響もあって、世界第3位の規模を誇る海軍ではあったがその実、アメリカとイギリスとの間にある差は大きかった。

開戦してからと言うもの、開戦初期こそ優勢ではあったが徐々にアメリカはその圧倒的過ぎる工業力に物を言わせて駆逐艦だけでなく正規空母や戦艦を大量産してその数に圧倒的な差があった。

イギリスだつてロイヤル・ネイビーの名に恥じない規模の艦隊を保有していた。

欧州での戦いが主だったから太平洋での戦歴はそこまで聞かないが、規模だけならば日本よりも上だ。

それが直接、この深海棲艦との戦いに艦娘とその艦体数に直結しているのだ。

しかも欧州は各国が陸続きで、イギリスは島国だがそれでもドーバー海峡はその気になれば鍛えた人間ならば泳いで渡れる距離にある。だからこそ地中海も十分に守れたし、北海油田なども維持し続けられた。

アメリカは大西洋を渡って欧州戦線に戦力を派遣する事はしなかった。

と言うのもアメリカは東西の長い海岸線を守らねばならないし、それに加えてグアムなどの南洋に広がる島々も幅を利かせていたから守らねばならなかった。

ハワイ奪還作戦で大規模な戦力を失ったアメリカにも日本にも到底、出来る事では無かった。

まあ、この話は関係無いので止めよう。

兎に角、潜水艦隊による通商破壊によつて276隻にも上る輸送船を沈められているのに、今だにこうして送り込んできているのだからその物量には閉口するしかない。

だが、それでも影響はある様で偵察によると深海棲艦隊の行動はかなり制限されているらしい。

それもそうだ、燃費も何もかもが悪過ぎる姫級に加えて新種の深海棲艦まで引つ張り出して来たのだから輸送船団を全て無事に送り届けなければ到底維持することは出来ない。

それに加えて潜水艦隊がついでと言わんばかりに、まあ命令したのは俺なんだが、機雷を硫黄島近海にばら撒いて、ばら撒いて、ばら撒きにばら撒いた。

それによつて硫黄島近海に到達した輸送船も機雷に触雷して沈む艦もある様だった。

深海棲艦の姫級を始めとする戦闘艦艇も機雷に加えてこちらの潜水艦隊の動きもあつてそう易々と動く事も出来ず、基本は硫黄島から10km程度の辺りで停泊しているのが現状だった。

硫黄島の航空基地も運び込まれる資材よりも爆撃で出来る損害の方が大きく、しかも最大240機の連山から落とされる爆弾は最大960t。

確かにこれほどの量の爆弾を一度に落とされれば復旧に必要な期間は如何な深海棲艦と言えども1カ月は必要だ。

連山による爆撃を迎撃しない訳には行かず、潜水艦隊による通商破壊も無視出来る損害では無く、このままいけば、硫黄島奪還作戦開始時の1か月後には相当に疲弊した深海棲艦隊と戦う事になり、空母艦載機もそこまで脅威にはならないだろうと思われる。

今までの戦いを考えれば、幾らかはマシな戦いをすることが出来る

かもしれない。

「ほら、提督！今日はもう仕事終わりよ！」

「いや、まだこの書類が……」

「駄目よ。もう8時よ？良い子は晩御飯を食べてお風呂に入って寝なさい」

「いやだがな？」

「この書類だけとか言つて、まだ30cmも高さがある書類の束よ？こんなものやってたら日を跨いじゃうじゃない。それに、また倒れたいの？ハウシヨウ達に怒られたい？」

「……分かった、分かったから」

「それなら良いわ。ほら、食堂はまだやってるはずよ。行きましょう？」

「ああ、分かった」

「全くもう、日本人はワーカーホリック過ぎよ。訓練でも何でもかんでもそう。全く、少しは息抜きする事を覚えたらどう？」

そう言つてビスマルクに無理矢理、お小言を頂きながら仕事を終了して食堂に揃つて行った。

と言つてももう誰も彼もがとつくの昔に食事を終えており、たった2人だけの食事となったが。

どうやら、食事を取りに来ないから今の今まで待っていてくれたんだそうだ。

本当に申し訳ない。

「それにしても、良い子なんて年齢じゃないんだがな？」

「あら、私からしたらまだまだまだお子様よ？あまり言いたくないけど私、あの戦争の時から数えたら80歳越えよ？」

「……すまんかった」

「別にいいわよ。でも他の子達の前では考えるのは止めた方が良いわね。金剛なんて余裕で100歳超えるし」

「分かったから、もうわかったからそれ以上言わないでくれ……」

どうにも、ビスマルクに良い子と子供扱いされたので少しばかり反論して見たらとんでもない反論が返って来た。

いやもう、頭を下げるしかなかった。

硫黄島奪還作戦まで残り1か月。

第33話

漸く、硫黄島奪還作戦の実施日がやってきた。

既に艦隊は抜錨を完了して第2航空戦隊、第1航空戦隊、第3航空戦隊、第4航空戦隊の順で柱島泊地を出発、前路哨戒に出た2航戦が豊後水道を抜けている。

それに続いて1航戦と3航戦が合流。

その後を追って4航戦が続く。

以前の陣形と同じで2航戦を11海里前方に突出させている。

そして、1航戦と3航戦の20海里(約40km)後方に4航戦を配置している。

2航戦

1航戦、3航戦

4航戦

空から見ると大まかにこのような形で、前衛、本隊、後衛と言うように分かれているように見える。

実際、2航戦は敵攻撃隊を吸収する前衛部隊であるし、1、3航戦はその間に敵に二の矢、三の矢をつがえる役割がある。

そして4航戦はそれらの支援。

確かにそれぞれの役割は分担されていた。

4航戦配置図

荒潮

						花月			涼月				
						レ					リベ		
	ジャ		那智	長門	羽黒	鬼怒					マエ		
	名取												
東雲	日向	鳳翔	海鷹	クイ	峯雲								
親潮	愛宕			キャ	桃								
白雲	ウオ	大鷹	龍驤	ラミ	霞								
黒潮	摩耶			ゴト	椿								
浦波	ネル	神鷹	千代	デユ	藤波								
竹					楓								
狭霧	天龍	最上	デ	龍田	沖波								
子日		樺	神通	楠	清霜								
	有明				白雲								
	海風			長月									
	江風												

陣形は4航戦以外は丸つきり以前と同じなので割愛しよう。

さて、次に深海棲艦の状況についてだ。

どうやら、こちらの潜水艦隊による通商破壊作戦によって物資の補給が全てでは無いにせよ相当量の物資を沈めてやったからか、行動にかなりの制限が掛かっているらしい。

燃料にせよ、弾薬にせよ、だ。

硫黄島に建設が進められていた飛行場2か所は連山による爆撃と、通商破壊による資材不足によって幾らかの再建は進んでいるようではあったが、どうやら連日の爆撃で全く使い物にならない状態らしい。

これで、我々は基地航空隊と敵母艦航空隊の両方を相手取らなくて

済むという事だ。

まあ、敵艦載機も動けるかどうかは怪しいものだが、動けるという前提で行動するべきだろう。

「提督、彩雲からの入電です」

「聞かせろ」

「はっ。『我彩雲4号機。敵艦隊ヲ発見ス。位置、硫黄島南5kmノ海上ニテ停泊中。低空テノ近距離偵察ヲ決行スルモ迎撃機無シ、対空砲火モ無シ。敵ハ行動不能ト思ワレル。1032』。以上です」

「敵さん、どうやら相当疲弊しているようすな」

「潜水艦隊からは？」

「硫黄島へ向かう輸送船団は無いらしく、報告はありません」

「……攻撃隊の発艦準備は？」

「あとは魚雷と爆弾を装着させるだけです、ご命令さえ頂ければ」
「よし、直ぐに始めてくれ。どれほど時間が掛かる？」

「30分も頂ければ装着は完了しますので、飛行甲板に並べるのに更に20分程ですので50分も頂ければ十分です」

「いや、今の整備兵たちの練度だと50分では不安があるから1時間後に発艦開始だ。構わないか？」

「問題ありません。それでは1135発艦開始とします」

正直に言つて、発艦時刻は出来るだけ早い方が良いのだが、度重なる海戦によって損傷を受けた各空母の整備兵や、信濃、加賀の整備兵ははつきり言つて当初と比べるとやはり練度不足が目立つ。

訓練を積んでいるとはいえ、今回が初めての实战と言う新兵も多い。

そんな彼らに45分や50分で出撃準備を整えさせるとするのは彼らの心理的状况を考えれば厳しいと言わざるを得ないだろう。

だから1時間と言う多少多めに時間を取った。

「整備兵達には、興奮を抑えて確実に正確な仕事をするよう、言っておいてくれ」

「分かりました。怯えている者には何と？」

「怯えている分にはまだ良いさ。興奮して周りが良く見えなくなる事程恐ろしい物は無い。だがそうだな。怯えなくとも航空隊の皆がやってくれるからどっしり構えて置けば問題無い、とだけ言っておくように」

「はっ」

艦内放送で出撃準備始めとの命令が下令された。

その命令に従って格納庫内で慌ただしく流星に爆弾と魚雷が取り付けられて行き、きっかり1時間後に各空母の飛行甲板には第1次攻撃隊の第1波が並べられた。

50分では出撃準備完了の報告が上がってくるのが遅れていた事は確かな事であった。

「提督、発艦準備完了しました」

「よし、艦首風上に立て」

「はっ、艦首風上に立てます」

飛行甲板に合成風力がごうごうと吹き荒れる中、暖機運転も済ませた烈風と流星がエンジン音を響かせながら発艦開始命令はまだかまだか、と待っている。

「艦首回頭完了。いつでも行けます」

「攻撃隊発艦始め！」

「攻撃隊発艦始め！繰り返す、攻撃隊発艦始め！」

その号令がそれぞれの母艦に伝えられると同時に、発艦開始の合図である旗が振られる。

その瞬間に車輪止めが外されて、ブレーキも解除された先頭の烈風、原田機がスロットルを名一杯押し込んでぐんぐんと加速しながら走り出す。

「総員、帽振れー！」

その合図と共に、整備兵から艦橋要員の皆が帽子を頭上で振り回

す。

俺や参謀長達は敬礼を行う。

そして最後の魚雷を抱いた流星が発艦し終わると、周りの空母から続々と全機発艦完了、第2波攻撃隊の発艦準備作業を開始するという旨の電文が入ってくる。

飛龍も既に昇降機で烈風と流星が飛行甲板に続々と上げられて行き、並べ始めている。

空を見て見ると、第1波攻撃隊は空中集合の途中であり、肉眼ではもう胡麻粒程度の大きさにしか見えなくなってきた頃に編隊を形成し終え、段々と見えなくなってきたものだから双眼鏡で覗いてみると高度を上げ始めていた。

各空母から送られてきた電文の通り、第2波攻撃隊を飛行甲板に並べ始めた各空母はその15分後に再び艦首を風上に立てると15分程で第2波攻撃隊全機の発艦を終えた。

今回、この作戦に参加している空母は第1、第2、第3航空戦隊を構成する12隻の正規空母に加えて、鳳翔以下6隻の軽空母で構成される第4航空戦隊の大小合わせて18隻の大艦隊と言っても差し支えない規模だ。

第1機動艦隊

第1航空戦隊

飛龍（旗艦） 蒼龍、瑞鶴 加賀

第1戦隊

戦艦

金剛 霧島

重巡洋艦

鈴谷 ポーラ

第1水雷戦隊

軽巡洋艦

能代

駆逐艦

秋月 照月 Z3 初月 陽炎 雪風 浦風 萩風 初梅 初雪

浦波 菊月

第2航空戦隊

大鳳(旗艦) 信濃 阿蘇 葛城

第2戦隊

戦艦

ビスマルク テイルピッツ ヴァンガード リシユリユ

重巡洋艦

熊野 アドミラル・ヒツパー プリンツ・オイゲン ザラ

第2水雷戦隊

軽巡洋艦

矢矧

駆逐艦

若月 霜月 春月 村雨 時雨 響 隴

第3航空戦隊

隼鷹(旗艦) 飛鷹 グラーフ・ツェツペリン アークロイヤル

第3戦隊

戦艦

リットリオ ローマ

重巡洋艦

青葉 古鷹

第3水雷戦隊

軽巡洋艦

多摩

駆逐艦

宵月 満月 Z1 初雪 浦波 菊月 望月 望月 Z3 村雨
霜月 春月

編成は以上の通り。

幾らか変わったことはまず、リシユリユーとザラを正式に2航戦に編入させたことだ。

それ以外は特にこれと言った変更点は無い。

次に4航戦の編成だ。

第4航空戦隊

鳳翔(旗艦) 大鷹 神鷹 海鷹 龍驤 千代田

第4戦隊

戦艦

長門 日向 クイーン・エリザベス ウォースパイト ラミリーズ
ネルソン デューク・オブ・ヨーク

重巡洋艦

那智 羽黒 愛宕 摩耶 最上 キャンベラ ゴトランド デ・ロ
イヤル

軽巡洋艦

名取 鬼怒 天龍 龍田 神通

駆逐艦

花月 涼月 グレカール リベッチオ ジャーヴィス マエスト
ラーレ

東雲 白雲 浦波 狭霧 子日 有明 海風 江風 峯雲 霞

藤波 沖波 清霜 白雲 有明 長月 荒潮 親潮 黒潮 竹 桃
椿 楓 樺 楠

護衛に就いている駆逐艦や重巡の数が多し理由としては、先ず航空戦力が明らかに力不足である事、そしてこの4航戦は後方20海里に

位置しておりその主任務は1、2、3航戦の支援だからだ。

そののどろが繋がってくるのか、と言うと4航戦に所属している零戦52型は、1航戦達が防空用に烈風を少数しか残さない穴埋めと、対潜哨戒の手間を流星に任せるのではなく零戦62型に任せるためだ。

1、2、3航戦の空母は敵艦隊に出来るだけ多くの攻撃兵力を送り込むために対潜哨戒と防空の任務の殆どを4航戦に任せる形になっていると言う訳だ。

それ故に自分達の空に対する守りが薄くなることは、どう考えても必定だ。

だからこそ空母を守る戦艦や重巡、軽巡、駆逐艦の数が1、2、3航戦と比べるとずっと多いのだ。

そしてそれぞれの艦載機は以下の通り。

飛龍

烈風37機 流星32機 彩雲9機 計78機

蒼龍

烈風37機 流星32機 彩雲9機 計78機

瑞鶴

烈風37機 流星52機 彩雲9機 計89機

隼鷹

烈風37機 流星32機 彩雲9機 計78機

飛鷹

烈風37機 流星32機 彩雲9機 計78機

天城

烈風37機 流星36機 彩雲9機 計82機

(彩雲9機を露天繫止)

阿蘇

烈風37機 流星36機 彩雲9機 計82機

(彩雲9機を露天繫止)

大鳳

烈風37機 流星32機 彩雲9機 計78機

(彩雲9機を露天繫止)

グラーフ・ツェッペリン

烈風37機 流星20機 彩雲6機 計63機

(彩雲6機を露天繫止)

アークロイヤル

烈風37機 流星24機 彩雲6機 計67機

(彩雲6機を露天繫止)

信濃

烈風70機 流星無し 彩雲6機 計76機

加賀

烈風98機 流星無し 彩雲6機 計86機

鳳翔

零戦52型丙20機 零戦62型12機 彩雲4機 計36機

(彩雲4機を露天繫止)

大鷹

零戦52型丙20機 零戦62型12機 彩雲4機 計36機

(彩雲4機を露天繫止)

神鷹

零戦52型丙20機 零戦62型12機 彩雲4機 計36機

(彩雲4機を露天繫止)

海鷹

零戦52型丙20機 零戦62型12機 彩雲4機 計36機

(彩雲4機を露天繫止)

龍驤

零戦52型丙20機 零戦62型12機 彩雲4機 計36機

(彩雲4機を露天繫止)

千代田

零戦52型丙20機 零戦62型12機 彩雲4機 計36機

(彩雲4機を露天繫止)

烈風538機 流星328機 彩雲120機
零戦52型丙120機 零戦62型72機

これと言った変化は無く、信濃と加賀には引き続き烈風のみを搭載している。

彩雲は代わる代わる敵艦隊の動向を探る為に上空に張り付いているのだがどうやら敵空母はこちらに向けて攻撃隊を放った様子もなく、迎撃機を上げた様子も無い、との事だった。

第1次第1波攻撃隊

飛龍
烈風12機 流星16機 (雷装8機 爆装8機) 計28機
蒼龍
烈風12機 流星16機 (雷装8機 爆装8機) 計28機
瑞鶴
烈風12機 流星26機 (雷装8機 爆装18機) 計38機
隼鷹
烈風12機 流星16機 (雷装8機 爆装8機) 計28機
飛鷹
烈風12機 流星16機 (雷装8機 爆装8機) 計28機
天城
烈風12機 流星18機 (雷装8機 爆装10機) 計30機
阿蘇
烈風12機 流星18機 (雷装8機 爆装10機) 計30機
大鳳
烈風12機 流星16機 (雷装8機 爆装8機) 計28機
グラフ・ツエッペリン
烈風12機 流星8機 (雷装無し 爆装8機) 計20機

アークロイヤル
 烈風 1 2 機 流星 1 2 機 (雷装無し 爆装 1 2 機) 計 2 4 機
 信濃
 烈風 2 4 機 流星無し 計 2 4 機
 加賀
 烈風 2 8 機 流星無し 計 2 8 機

烈風 1 7 2 機
 流星 1 6 2 機
 計 3 3 4 機

爆装の流星が多いのは、敵戦艦の対空砲火が激しいと予想されるから、先ずは爆装の流星が突っ込みその対空砲を破壊する事が主目的だからだ。

第1波は敵戦艦を、敵空母を沈めるのは第2波攻撃隊に任せている。

第1次第2波攻撃隊

飛龍
 烈風 1 2 機 流星 1 6 機 (雷装 8 機 爆装 8 機) 計 2 8 機
 蒼龍
 烈風 1 2 機 流星 1 6 機 (雷装 8 機 爆装 8 機) 計 2 8 機
 瑞鶴
 烈風 1 2 機 流星 2 6 機 (雷装 1 8 機 爆装 8 機) 計 3 8 機
 隼鷹
 烈風 1 2 機 流星 1 6 機 (雷装 8 機 爆装 8 機) 計 2 8 機
 飛鷹
 烈風 1 2 機 流星 1 6 機 (雷装 8 機 爆装 8 機) 計 2 8 機

天城			
烈風	12機	流星18機	(雷装10機 爆装8機) 計30機
阿蘇			
烈風	12機	流星18機	(雷装10機 爆装8機) 計30機
大鳳			
烈風	12機	流星16機	(雷装8機 爆装8機) 計28機
グラブ・ツェペリン			
烈風	12機	流星8機	(雷装8機 爆装無し) 計20機
アークロイヤル			
烈風	12機	流星12機	(雷装12機 爆装無し) 計24機
信濃			
烈風	24機	流星無し	計24機
加賀			
烈風	28機	流星無し	計28機
烈風	172機		
流星	162機		
計	334機		

第2波攻撃隊は第1波と数は全くの同数である。

信濃は烈風22機、加賀は烈風42機をそれぞれ艦隊上空の守りの為に残してある。

なので艦隊の守りは、

烈風 64機

零戦52型丙 120機

零戦62型 72機

以上の計256機に任せる事になる。

役割分担としては主に烈風と、場合によっては零戦52型丙が敵戦闘機の相手を行う。

その隙に零戦62型が敵雷撃機や急降下爆撃機を撃墜する予定と

なっている。

ただ問題なのは、零戦の20mm機銃の弾数だった。

烈風ならば20mm機銃の弾数も計400発に加えて攻撃力の高い13mm機銃を600発携行しているから継戦能力も高い。

だが零戦52型丙は20mm機銃が計250発、13mm機銃が機首に1挺と翼内に2挺の計3挺で670発のみだ。

深海棲艦機は総じて防御力が高く、F6FやF4Uと言った戦闘機だと20mm機銃でも火を噴かない、撃墜しきれないという事が多い。

母艦航空隊の戦闘機隊の面々は原田大佐以下のエース・パイロット達や熟練搭乗員が数多く存在するからこそ敵機の弱点箇所やコックピットをぶち抜いてあかも簡単に撃墜しているのであって、それ以外の搭乗員からするとそんな芸当は早々出来るものではない。

4航戦の零戦隊は、原田大佐以下の1航戦、2航戦の戦闘機隊と比べると機体性能は勿論の事だが、搭乗員の技量はお世辞にも高いとは言いがたい。

それでも輸送船団護衛任務で敵機との戦いで相当に腕を付けているからそこまで悲観的に見る必要は無いと思う。

ただやはり継戦能力の面で見ると、敵の攻撃隊を2波、3波と防ぎ続けるのは無理だろう。どこかのタイミングで補給をせねばならないが戦闘中にその様な余裕は、はっきり言ってないのだ。

2つに分ければ良い、と言うかもしれないがそうになると予想される敵機の数からして敵戦闘機の数も相当数になると予想される。

なので分けてしまうと、敵戦闘機との戦闘に忙殺されてしまい、攻撃隊本隊に手出しをすることが出来なくなってしまう。

何よりも兵力の逐次投入と言う愚かな事をする訳には行かない。

それを考えると全機を全て迎撃に上げるのが一番良いのだ。

そして最後に、硫黄島に上陸し奪還を担う陸軍師団だが、これは残念ながら用意が出来なかった。

と言うのも余りにも急すぎて、上陸作戦を行うための上陸作戦訓練を受けている師団が存在せず、訓練中の師団こそあれど未だに訓練途上でどうやっても実戦投入が出来るほどの練度は備えていなかった。そこで硫黄島上陸及び奪還の任を与えられたのは、海軍特別陸戦隊だった。

投入されるのは4個陸戦隊歩兵約1万人と

海軍特別陸戦隊第11歩兵連隊

海軍特別陸戦隊第12歩兵連隊

海軍特別陸戦隊第17歩兵連隊

海軍特別陸戦隊第21歩兵連隊

海軍特別陸戦隊第4戦車大隊

海軍特別陸戦隊第7戦車大隊

海軍特別陸戦隊第7砲兵隊

海軍特別陸戦隊第2工兵隊

それぞれの陸戦隊は歩兵2500人から構成されており、工兵隊などは一切含まない。

それぞれの歩兵連隊には支援車両としてホハが15両ずつが含まれる。

そして第4戦車連隊は太平洋戦線で初めての実戦投入となる4号戦車を装備してる。

5両1小隊として、それを3個で1個中隊15両。3個中隊で1個大隊45両。

それぞれの戦車大隊は45両の4号戦車を装備している。

なので計90両となるが、この4号戦車の搭乗者の選抜がこれまた苦勞の連続だった。

と言うのも、何と言うかこれはもう仕方が無いとしか言えない事なのだが日本陸軍戦車兵の身長が足りなかった。

何が言いたいのかと言うと、日本人の平均的な体格には4号戦車の大きさが合わないという事である。

八九式中戦車と比べても4号戦車は中戦車に分類されるが重量は

20tを超えており相応に車体自体も大きい。

という事は登場する人間の身長なども相応に大きくなければならない。

余談ではあるのだが、軽戦車、中戦車、重戦車と言う括りはあくまでも1国間でのみ通用する概念であつて国際的な基準などがある訳では無い。

例を挙げるならば、日本の八九式中戦車も重量は形式によつて上下するが概ね11〜12t程の重量ではあるが名前の通り中戦車である。

それに比べて同じ中戦車である4号戦車はどうだろうか。

重量25tと八九式の2倍以上である。

イタリアの重戦車であるP40の重量が26tなのでそれよりもたったの1tしか変わらない中戦車なのだ。

5号中戦車に至つては約45tもあるのだ。

重戦車であつてもドイツは段違いである。

6号重戦車、所謂ティーガーに至つては57tと破格である。

以上の様に比べれば分かる事なのだが各国で戦車の区分と言うのはバラバラであり、日本で重戦車や中戦車として運用されていたとしても必ずしも別の国で重戦車や中戦車となるわけでは無い。

話を戻そう。

なるほど、確かにドイツ戦車兵の面々は皆170cmを超す身長を持ち主であつた。

彼らからの話によると170cmほどの身長が無いと4号戦車の操縦や主砲弾装填などの各種動作に支障を来たす、との事だつた。

合同艦隊と共にやつて来たドイツ陸軍戦車兵の体格と日本陸軍、海軍陸戦隊戦車兵の体格差が30cmも離れて居たりすることがあつたのだ。

実際に実験してみたところ、確かにあれでは無理がある。

戦えなくも無いのだがあれでは負担が大きすぎる。

実戦では休息を満足に取れるとは限らないので、無駄に体力を使うわけには行かないのだ。

平均身長が175cmのドイツ戦車兵と、平均身長165cmの日本戦車兵では10cmもの身長差がある。どうやってもその差は埋められない。

そこで海軍陸戦隊歩兵連隊や砲兵隊、工兵隊の中から身長170cmを基準として戦車兵を再募集したのだ。

これによってどうにかこうにか2個大隊分の戦車兵を集めることが出来た。

他にも幾つかの戦車大隊分は集まっているのだが、あちこちの部隊、それこそ輜重部隊（補給部隊の事）などからも掻き集めたから訓練が終了しているとは言えないので投入される事は今暫く無いだろう。

元々、陸軍の方で八九式中戦車の後継車両である三式中戦車や四式中戦車、五式中戦車などの開発が進められてはいたのだが、難航していた。

と言うのも三式中戦車は鋲接（リベット止め）だった。

そこで問題となったのが、鋲接だと対弾性能が良くないという事だ。

いや、はつきり言おう。対弾性能が鋲接だと低いのだ。

被弾時には敵弾の命中時の衝撃によって鋲が飛び散るという事だった。戦車内にそれらが飛散すると戦車兵を巻き込んでたつたの一撃で戦闘不能、という事も有り得た。

確かに溶接よりも楽ではあるし量産性も高い。

だが、それだけでは駄目なのだ。何よりも搭乗員を守らねば装甲なんて意味は無い。

主砲は性能は良好で、数値上ならば深海棲艦が使うM4中戦車の正面装甲を800mの距離から貫徹、撃破する事が可能であった。

側面からであれば2000mからでも撃破可能、との事だった。

だが開発が完全に終了した、とは言えずそれは四式も五式も同じ

だった。

反抗作戦を控えているこちらとしては早急に強力な戦車、最低でもM4中戦車に対抗しえる戦車を必要としていたので、開発完了と量産体制を整えて数が揃うのを待っていられる時間は無かった。

そこで白羽の矢が立ったのが4号戦車、と言う訳である。

こちらならば既に実戦での活躍もあるし、何よりも沖縄や南方方面での実地試験も終えていたから実戦でも使える事が十分に判明していた。

なので開発が完了していない戦車よりも欧州だけとは言え既に実戦経験もあり実績もあり太平洋戦線での試験結果も良好な戦車を、と言う訳である。

そう言う訳で、沖縄や南方方面、そして海軍特別陸戦隊に配備が進められたと言う訳である。

そして砲兵隊だが、ラ式十五糎榴弾砲を5門1小隊として、それを3個小隊で1個中隊15門。それを更に4つで60門を装備している。

沖縄で活躍した九一式十糎榴弾砲よりも破壊力が段違いだ。

それを各中隊ごとに歩兵連隊の支援を行う。

元々、海軍特別陸戦隊は陸軍の各部隊よりも装備の質は上だった。と言うのも、陸軍はその師団数が膨大であり全ての部隊に充足するのはかなりの時間が掛かる。

それに比べて海軍特別陸戦隊は、師団規模での編成は無く、最大で連隊規模であり尚且つ今でこそ部隊数は増えているが以前まではそこまで多い数では無かった。

だからこそ陸軍部隊よりも先に装備が回される事が多かった。

今でこそ工場が爆撃によって大打撃を被っているとはいえ、生産も

軌道に乗っているから本土の陸軍師団を除いて前線配備されている師団にはラ式十五糎榴弾砲や4号戦車などが最優先に配備されつつある。

歩兵師団に関しても、三十八式歩兵銃ではジャングル内での取り回しにかなりの難があるとの事で、ドイツからの技術供与によって生産可能になったMP40だったりStg44を試験的に配備し始めている。

何故なのかと言うと、三十八式歩兵銃だと、銃剣を取り付けた時の全長がまさかの1.6mを超えるのだ。

これでは確かに平原などの開けた場所であればその長射程などを有効活用出来ただろうし、ボルトアクション方式だとしても何百mも離れた距離を詰めるのはどれだけ俊足の兵士だとしても数分は掛かる。しかも物陰に隠れながらだとすると余裕で十数分以上の時間が掛かるのだ。

だが今現在我々が主戦場としているのは、太平洋の小さな島々でありカリマンタン島などは面積が広いと言っても我々の駐屯する基地などを除けば開けた場所なんて存在しない。沖繩や南方方面のその殆どがジャングルに覆われているのだから、平原と同じような戦い方はどうやっちゃって出来ない訳である。

三十八式歩兵銃を装備している各部隊の話なのだが、

「目の前の敵よりも周りの木々や蔦が一番の敵だ、何よりも用心しなけりやならないのは深海棲艦の奴らじゃない、細い木の枝や木の幹、蔦、蔓だ」

とまで言われるほどにジャングルでの取り回しが劣悪だ。

木の幹にぶつけて音を出そうものなら、近くに敵がいた場合はすぐさま蜂の巣になるし、蔦や蔓に引っ掛かるものなら反撃なんて出来る訳がない。

九九式軽機関銃などならばまだしも、三十八式歩兵銃ではどうやってもジャングルと言う、木々が鬱蒼と生い茂った土地では明らかに不

利なのだ。

事実として深海棲艦の陸上部隊も全長が短い短機関銃などを多用していた。

そこで陸軍参謀本部と海軍軍令部は、検討の結果、南方方面でMP40やStg44を試験運用して結果が良好であるならば全面的に装備の更新を行う事となった。

結果的に南方方面での各部隊へ少数配備し、試験を行った結果、その土地柄故の湿気の多さなどで錆び付いたりする事、木製銃床が湿気にやられて腐り易いなど幾つかの問題が発覚したが概ね良好、何よりもジャングル内での取り回しの良さが評判だった。

錆などの問題であれば普通に防錆処理を行えば良いだけの話だ。

木製銃床ならば金属製に変える事も出来るし特に運用面での重大な欠陥、と言うほどの問題は無かった。

前線の幾つかの部隊からは、端的に言えばさっさと配備を始めろ、とまで催促し始める始末だった。

陸海軍でも確かに短機関銃の開発は進められていた。

一〇〇式短機関銃である。

ただ、問題なのが弾倉を挿入したときに通常ならば下方方向に弾倉が突き出るのだが、この一〇〇式短機関銃は横に突き出る形になるのだ。

それでも確かに使えるのだが、横に飛び出ているから薦などに引っかけやすいと言う時に反応できないことがあるのだ。

それを考えると、どちらが優秀か、と聞かれるとやはり前者であるMP40やStg44に軍配が上がった。

そこでMP40はそのままに、Stg44は使用弾薬を7.92mm弾では無く日本陸海軍で使用されている6.5mm弾を使用するために若干の設計変更を行った。

理由としては、7.92mm弾を使用するために設計されていたS

t g 4 4 の薬室であったりとたったの 1. 4 2 m m の違いとは言え、それは兵器の設計上では大きな違いとなる。

なので新しく 7. 9 2 m m 弾を生産するならば、設計を変えて 6. 5 m m 弾を使用出来るようにした方が圧倒的に補給面や生産面の兵站面の事も考えると設計を幾らか変更した方が良いのだ。

拳銃弾を使用する M P 4 0 の採用も兵站面で見ると負担が増えるのだが、それでも 3 種類の弾薬を生産して輸送するよりも 2 種類の弾薬に限定した方が良いのだ。

何よりも、6. 5 m m 弾と 7. 9 2 m m 弾は差が 1. 4 2 m m しか変わらないので前線での使用に際して混乱を招きかねない。

最悪、大して大きさが変わらないのだからと言って混同しごちゃごちゃで使用してしまうとそれこそ事故が起こり兼ねない。

その様な面から見て改造したのだ。

他の改造としては三十八式歩兵銃などでも問題であった木製銃床が湿気によつて腐る事がある、と言う問題を解決するために木製銃床を金属製の中が空洞である銃床や折り畳み式銃床などに設計を変更し完了、生産可能となるまでは木製銃床にコーティングを施して取り敢えず急場凌ぎを行う事となった。

折り畳み式銃床にした場合に反動制御などの問題が起こったが、そもそも話、ジャングルでの戦いと言うのは 1 0 0 m なんて距離で戦う事すら稀であり、殆どの場合が 5 0 m 以下の距離での戦いとなる。

酷い時ならばたったの 1 0 m やそれよりもずっと短い 5 m なんて超至近距離での銃撃戦すらあり得るのだ。

なんなら敵と擦れ違つても双方共に気が付くことなくそのままどちらにもジャングル内を迷うなんて事もザラだ。

事実としてカリマンタン島などに配置されている陸軍の各部隊が対抗演習を行つたり、ゲリラ戦術の演習を行つてはいるのだが、かなり狭い範囲、1 k m 四方に 2 個大隊約 9 0 0 名を対抗演習させても敵の位置が分からず演習期間中に一度の戦闘状況も起きずにただ迷子になつただけ、なんて報告も上がって来ている始末だ。

そんな視界が全く利かない距離では命中精度よりも、圧倒的に連射速度及び個人でも面制圧が行える方が強く、圧倒的に優先される。

そして部隊全体の置き換えともなると相当に時間が掛かるから取り敢えず、一番に作戦投入されて実戦に近い海軍特別陸戦隊に、という事になった。

事実、今回投入されている海軍特別陸戦隊4個歩兵連隊はStg44とMP40を装備させている。

機関銃は九九式軽機関銃などが引き続き使用されている。

MG42を採用してはどうか？と言う話も上がったのだが、発射速度が余りにも速過ぎる上に弾薬の消費速度が異常なほど速い。

そんなものを配備してしまえば、前線への補給事情に支障を来たす。

なので見送られた。

三十八式歩兵銃は本土で1線級で配備されているし、狙撃銃として未だに現役だ。

狙撃が得意だという兵士はどういう訳かそのままStg44やMP40と共に携行している者も居るのだとか。

流石にそこまで俺が管理する事も出来ないし、戦果を挙げてくれるのならばそのぐらいならば問題無い。

今回、これらの部隊を輸送するのに、1個歩兵連隊に付き2隻の輸送船と2隻分の燃料弾薬、食料を輸送する輸送船と、ホハの輸送の為に100号型輸送艦1隻で1個連隊に付き5隻の輸送船を使用する。

なので4個歩兵連隊だと20隻の輸送船を使用する。

そこに砲兵隊が砲弾の輸送に輸送船5隻と牽引用のホハとラ式十五榴榴弾砲本体と人員の輸送に100号型輸送艦6隻と工兵隊が輸送船で各種必要な資材を3隻分に工兵隊本隊の輸送に2隻の100号型輸送艦を用いる。

全て合わせると計36隻になる。

全人員を合わせると約2万人ほどだ。

これらの輸送船団は今回、行動を共にしていない。
第1機動艦隊が完全に硫黄島近海の敵艦隊を撃滅したら出航となる。

理由としては、硫黄島上陸準備のために戦艦での砲撃を丸々3日行う事と、南方方面ほど距離が離れていないからだ。

1日もあれば硫黄島近海に到着できるので、態々行動を共にして沈められる危険性を高める必要は無い、という事だ。

往路の護衛には4航戦が就く。

場合によつては1、2、3航戦のいずれかも護衛に就く予定だ。

「提督、予定通りであれば間もなく攻撃隊が敵機の迎撃を受ける頃です」

「分かった」

参謀長がそう言うが、待てど暮らせど敵機の迎撃を受けた、と言う報告は上がってこない。

どういう訳だろうか？

流石に艦を動かすだけの燃料が無いとしても迎撃機の1機飛ばしてこないというのか？

「提督、攻撃隊より敵艦隊発見が打電されました」

「……敵機の迎撃を受けずに敵艦隊を攻撃となったわけか」

「敵さん、どうやら私達の通商破壊作戦がかなり利いてるみたいだね」「艦艇はどうしてもその大きさ故に莫大な量の補給を必要とするからな。それが全てとは行かなくとも沈められたとなれば相当に疲弊はするだろう。俺が着任する前の飛龍達だってそうだったろう」

「そうだね。弾があっても燃料が無くて動けない。すつごく悔しくてもどかしかったなあ……」

「ま、兎にも角にも出来るだけ被害が少ない方がこちらとしては望ましいのだがな……」

さて、敵はどう出て来るのだろうか？

その10分後にト連送が送られてきた。

――

第1波攻撃隊が第1機動艦隊の各空母を発艦してから1時間半。空は晴れ渡っており、何処にも敵機の姿は見えなかった。

攻撃隊は4000mの高度を進んでいた。

「隊長、そろそろ敵戦闘機の迎撃を受ける頃合です」

「了解した。全機警戒を怠るな」

今回攻撃隊を率いるのは、南方方面での作戦で戦死した西北中将（戦死により2階級特進）に代わって本山大佐だった。

実戦経験とそれなりの部隊指揮の素質こそあるが未だ部隊の指揮を完全に任せられるほどの技量は持ち合わせていない。

そこで原田大佐がその補佐に就く。

今回が初めての实戦と言う新兵も数多い。

正直に言って技量面では猛訓練を積んではいるがやはり不安が残る。

訓練と実戦と言うのは大違いなのだ。

「どうだ、敵機は見えたか？」

「いえ、全く見えません。怖いぐらいに平和です」

「だな……奴ら何を考えている？」

本山大佐が偵察員として共に流星に乗っている福本飛曹長に聞いてみるが、敵機はどこにも居ない。

同じ感想を抱いていたのは彼らだけでは無かった。

「随分と静かだな……」

ぼつりとそう漏らしたのは原田大佐だった。

原田大佐は周囲を見回しながら警戒を続けるが、何時もならば襲い掛かってくる敵戦闘機の姿はどこにも無く、遠くの方に雲が幾らかあ

るだけの快晴で、眼下には戦場とは到底思えない、似つかわしくないぐらいの波が穏やかな海が広がっていた。

「隊長、敵艦隊発見！2時方向！」

「よし！周辺に敵機は!?」

「いません！」

「西田！艦隊に敵艦隊発見を打電！」

本山大佐は頭の中でそれぞれの敵艦に対してどう攻撃を振り分けるかを大急ぎで考えていた。

「飛龍、蒼龍、瑞鶴、隼鷹、飛鷹、天城、阿蘇、大鳳、グラーフ・ツエツペリン、アークロイヤルのそれぞれの攻撃隊は奥の戦艦から順番に時計回りで攻撃を仕掛ける！良いか!? 姫級は魚雷の数本程度じゃ沈まん！攻撃力を削ぐことだけを考えれば良い！」

本山大佐はそう無線に向かって怒鳴ると、ト連送を放った。

「行くぞ、全機突撃！」

それに従って雷装の流星は低空に、爆装の流星は高度を上昇させた。

だが、何時まで経っても対空砲が火を噴いてくることは無い。

「艦爆隊、先に突っ込みます！」

「よおし！そのまま対空砲を黙らせてやれ！」

そうこうしている間に爆装の流星が一気に反転、機首を下げた。

そして、対空砲も対空機銃の何の妨害も無く投弾を開始した。

停泊した敵艦への爆撃を外すような機体は1機も存在しなかった。

3度、4度と立て続けに爆炎が立ち上る中、魚雷を叩き込まん！と雷装の流星が一気に速度を上げて突っ込む。

姫級を含む、10隻の敵戦艦に次々と魚雷が命中する。

「戦果確認！」

「少なくとも魚雷5本命中です！」

「姫級ならば沈むか怪しいが、それ以外の戦艦なら撃沈か若しくは大

損害だ、砲撃戦を挑もうにも碌な抵抗は出来やしない！」

そう口々に各機からの歓声上がる。

そして、全機が攻撃を終えた後に母艦に向かって針路を取った。

第1波攻撃隊はたったの1機も失わず、損傷も受けずに攻撃を完了した。

その後の第2波攻撃隊も同じく1機の損害も損失も無く攻撃を終えた。

「迎撃機も無く対空砲火も無し、か……」

「いささか拍子抜け、と言うような感じがしますな……」

「いや、寧ろこの無抵抗さには脅威すら感じられる程です」

作戦参謀が言ったように、拍子抜け等よりも敵が何かを企んでいるのではないかと疑いたくなるほどだった。

「戦果としては空母6隻撃沈確実、戦艦6隻撃沈確実です」

「姫級はそこに含まれるか？」

「いいえ、含みません」

「流石は姫級と言ったところか……」

「第波2攻撃隊からは再攻撃の要有りと認むとの電文が送られてきております。どういたしますか？」

「どういたしますも何も、第1波と第2波を收容しなければならん。今の我々には攻撃兵力は無いのだからな」

「そうしますと、攻撃隊收容時刻は凡そ1時間後になります」

「分かった。準備を整えておいてくれ。すぐさま二の矢を放てるようにな。それと搭乗員達の為の食事も準備しておいてやれ」

「了解しました」

その命令に従い、各空母内では次の攻撃隊出撃準備を進めるとともに食事（と言っても握り飯と味噌汁しかないのだが）の準備を進めさせた。

その後、攻撃隊を收容して原田大佐と本山大佐を呼び出した。敵艦隊の状況を聞きたためだ。

「早速だが、敵艦隊はどうだった？」

「はっ、正直に申し上げますと全くの無抵抗でした。今までの戦いからして敵戦艦の対空砲火を相当に覚悟していたのですが……」

「上空から流星隊の攻撃を見ましたが、あれでは釣る瓶撃ちも良い所です。いつそ哀れに感じました」

「はい、原田大佐の仰る通りです。爆炎や黒煙の方がよっぽど雷撃や爆撃を邪魔されました」

「そんなにか」

二人の話を聞くに、恐らく燃料も相当乏しいらしい。

だが完全に動けないと言う訳では無い筈なのだが……

敵艦隊は何が狙いなのだろうか？

兎にも角にも、第2次攻撃隊の出撃準備を整えさせて敵艦隊を確実に叩かなければならない。

その1時間後に第2次攻撃隊を2波に分けて出撃。

残った姫級3隻とル級1隻に集中攻撃を加えた。

それによって流石の姫級と言えども流星162機の集中攻撃は凌ぎ切れなかつたらしい。

爆装よりも雷装が殆どを占めていた第2次攻撃隊の雷撃によって海に没した。

余った流星は周辺にいた随伴艦である重巡以下の艦艇にも攻撃を加えた。

どうやら敵は本当に燃料が無いらしい。

我々は結局一切の無抵抗の敵艦隊を文字通り殲滅する事となった。

その2日後、海軍特別陸戦隊を乗せた輸送船団が硫黄島近海に到着。

3日間の上陸準備砲撃を加えた後に上陸を開始。

誰もが、敵艦隊の様子からして陸上部隊の抵抗もそこまで激しくは無いだろうと予想していた。

だが、その予想は最悪の形で引つ繰り返る事となる。

第34話

硫黄島に上陸してから早2日。

当初、敵艦隊の抵抗が全く無かったことから硫黄島の深海棲艦守備隊の抵抗もそこまで強力ではないと、俺も含めて上陸した陸戦隊の将兵諸君すらも思っていた。

だがその予想は最悪の形で引つ繰り返ってしまった。

先ず橋頭保確保の為に第17陸戦隊と第2工兵隊が上陸する事になっていた。

その前に機雷などの障害物が無い事を確認するために第21号掃海艇と第24号掃海艇、第25号掃海艇、第34号掃海艇、第38号掃海艇の計5隻が前進し、艦砲射撃の支援の下で掃海任務に就いた。

機雷原と言うほどの数は無かったが、上陸用舟艇などが進んだ時にそれなりに被害が出る事が予想される数があった。

なのでそれらの機雷を掃海艇5隻が除去した。

そして、追加で2日間の艦砲射撃を上陸地点に実施。

満を持して上陸と言う訳だ。

先ず最初に第17陸戦隊が上陸用舟艇に分乗して2500名全員が無事に上陸を完了。

上陸が可能な地点は摺鉢山の麓辺りから伸びる、二か所の浜のみで我々はその西側の浜から上陸した。

東浜、西浜と呼称している。

どうしてここ以外に上陸地点が無いのかと言うと、地図を見て貰えば分かるのだがこの2か所の砂浜以外の場所は岩だらけの場所でも荒く上陸できるような場所では無いからだ。こんな所に輸送艦や大発を近付けようものなら直ぐに座礁してしまう事だろう。

上陸から5時間後程は敵の抵抗も全く無く、工兵隊の上陸も問題無く、火山灰によつて足元が覚束ない砂浜を穴の開いた鉄板を敷き詰め、足元を確保。それに続いて第7砲兵隊が上陸。

続いて第12陸戦隊が上陸。

即座に各員用、砲兵隊用の掩体を構築して橋頭保の確保が完了。

それに続いて残りの第11、第21陸戦隊が上陸を完了。

即座に内陸部に向けて各歩兵連隊は前進を開始した。

先ず我々が進んだのは摺鉢山とは反対方向である平野部だ。

平野部と言つても飛行場を除いては小高い丘が連なつていたりするので到底平野部とは言えないが、区別しやすい様にそう表記しているのだ。

硫黄島には2つの飛行場が存在する。

摺鉢山の近くにあるのが南飛行場、その反対側の北側にあるのが北飛行場だ。

まず最初に北飛行場の奪還を目指した。

こちらを先に奪還すれば飛行場が使用出来るようになるからだ。

そうなれば我々海軍だけで航空支援を行わなくて済むようになる。

そう考えての事だったのだが、これが最悪の選択だったと言える。

上陸して、島を分断した後はその分断するべく東浜に向かつて前進を開始。

砲兵隊と艦砲射撃の支援を受けつつ散発的な抵抗こそあれど4個陸戦隊連隊は被害は少なく死傷者は27人に過ぎなかった。順調に進んでいたかに見えた。

「こちら第4中隊！敵の猛攻撃に晒されている！至急応援と爆撃支援

を求む！繰り返す！敵の猛攻撃に晒されている！大至急応援と砲爆撃支援を求む！」

「こちら第1大隊！敵に包囲された！あちこちから銃弾が飛んできて何処にも逃げられない！どこの部隊でも良い、誰か助けてくれ！」

西浜と東浜のちょうど真ん中の辺りにまで進んできた頃、唐突に摺鉢山、周りを囲む小高い丘の裏側などあちらこちらの砲撃に加えて何処からともなく敵兵が現れたのだ。

一番前を進んでいた第17陸戦隊は瞬く間に砲撃と銃撃によって大打撃を被った。

連隊の約5割が死傷する事となった。

それにより、前線を維持することが出来なくなった彼らは戦線を放棄して後退、後方に展開していた第21連隊と合流する事となるが、2000名程度まで戦力が減少してしまった第17陸戦隊は、弾薬も個人で携帯していた分を除いて撤退の際に放棄してその殆どを喪失、ホハも全車両が破壊されてしまった。

第17陸戦隊には既に継戦能力など残っておらず、海岸の橋頭保まで後退させた。

そして連隊長の話を聞くと、どうやら深海棲艦の奴らは艦の乗組員を陸揚げして守備隊として配備していたようであるらしい。

この連隊長は沖縄奪還作戦時に陸戦隊の隊長を務めていたのだが今回は上陸作戦の経験がある連隊長が居なかったために急遽、彼を第17陸戦隊の連隊長として着任させたのだ。

その彼曰く、

「どうにも、敵の射撃は命中精度はそれほど高くなかったように感じます。射撃練度不足を数で無理矢理補った、と言う感じでしようか。実際に我々が居た場所とは懸け離れた場所に弾着する砲弾などもあるぐらいでした」

「そして最も気になったのが、敵の陸上部隊の中に明らかに陸上部隊所属ではない奴がいたことです。恐らくは艦の乗組員と思わしき連中です。こいつらは射撃は死ぬほど下手糞でしたが何よりも数が多

すぎます。予測ですが我々第17陸戦隊を襲撃したのは1万前後の兵力かと」

との事だった。

彼の言葉が事実だとするすならば、敵は艦の乗組員全員を硫黄島に陸揚げして守備隊に組み込んだ、という事である。

そうするならば、戦艦10隻分の乗組員の数だけでも途轍もない事になる。

戦艦ル級1隻の乗組員は大体2500名ほどでそれは姫級も同じだ。

仮に2500名だとすると10隻分なので25000名となる。

1個師団以上の陸上戦力となる訳だ。

空母も25000名以上となるが25000名で考えとしても6隻で15000名。

先の戦艦と合わせると丸々2個師団になる。

巡洋艦も12000〜20000名の乗組員が居るからそれが20隻となると最大40000名。これまた2個師団規模だ。

そして駆逐艦の乗組員も加わるからこちらも最低でも1個師団規模。

全てを合わせると5個師団計10万と言う途方も無い数字だ。

恐らくこれらは全て歩兵として戦うであろうと推測される。

元々の陸上部隊の数が戦車、砲兵隊など全て合わせて1個師団と仮定すると6個師団12万人にもなる。

この規模は沖繩の守備に就いている全師団の合計数とほぼ同数だ。

これ程までの戦力をたったの12分の1にしかない歩兵1万名、全部隊を合わせても2万名程度の戦力で戦おうとしていたのだから、どうやったって勝てるわけがない。

全陸戦隊は前後左右、あちこちから銃撃を受けて頭上からは迫撃砲や榴弾砲の猛砲撃を加えられて瞬く間に戦力を失い、上陸地点の横1km、奥行き500mほどの地域に押し込められてしまった。

この間、たったの2時間程度だ。

この2時間程度の戦闘によって4個陸戦隊は1万名中1461名

が死傷。

各連隊は500名ほどづつを失ったことになる。

しかも損害はこれだけでは無く、砲兵隊も60門中7門を失う事となった。

特に被害が酷かったのは工兵隊で、全体の約4割にも達する死傷者を出した。

幸いな事は2個戦車大隊が未だ上陸しておらず無傷であった事だろう。

死傷者はすぐさま輸送艦に後送された。

艦隊司令部に各陸戦隊の隊長達を集めて作戦会議を開いた。

作戦会議と言っても、撤退するか否かを決める会議なのだ。

「増援さえ、頂ければ作戦遂行は可能です」

「そんなこと誰だつて分かっている。だがその増援が直ぐに用意出来ない事が問題なのだ」

「予備の部隊を用意していなかった事が仇になりましたな……」

確かに増援部隊があれば作戦は幾らでも遂行できるだろう。

だが問題なのはその増援部隊がすぐさま用意出来ない事にあつた。

しかも予備部隊すらない状況なのだ。

これではどうやったつて奪還は不可能である。

用意するにしても奪還に向いている適切な師団の選定、輸送船の準備、各種物資の調達などを全てやらなければならぬために最短でも1か月は掛かってしまう。

しかも12万と言う大軍を相手するには最低でも同数、もしくはそれよりも多くなければどうやったつて奪還を完全に成功させるのは不可能だ。

確かに橋頭保こそ確保して、そこに防衛線を敷いているからそう易々とは海に追い落とされることは無いだろうが、12万の大軍の波状攻撃を受けてしまえば幾ら最新装備である精鋭が多い部隊だとしても負けてしまう事は必須だろう。

しかも最悪な事に、橋頭保としている砂浜は全くの遮蔽物が無いから銃撃からも砲撃からも逃れる術は無いのだ。

個人の掩体を掘ろうにも火山灰や軽石などで出来ている砂浜では穴なんて掘っても掘っても埋まってしまう。

それでも工兵隊が陸揚げした使用用途が無くなってしまった各種資材や土嚢袋を用いてどうにかこうにか掩体を構築、防衛線を維持している。

だがこれでは隠れる場所が無いに等しい。

しかも初期に陸揚げした弾薬の殆どを失ったことが大きく響いている。

輸送船にある砲弾薬を必死になって陸揚げしているがそれでも前線では弾薬不足が目立っている。

「撤退するというのならば早急な決断をお願いします。このままでは陸戦隊将兵が無駄死にしています！」

「分かっている。だが撤退するにしても相応の準備が必要なのだ。撤退するにしても順番を決めて、その間輸送艦に部隊が乗っている間に背後を守る部隊も決めなければならぬ。それを何処の部隊に担当させるのか？」

「それは……」

「それに、敵の砲撃は輸送艦や大発も狙っているからそう簡単に近づくことも出来ない」

確かにその通りだった。

敵の重砲は摺鉢山に存在しているらしいのだが、どうにも敵重砲は摺鉢山内に線路を引いて1発か2発、多くても3、4発撃つと直ぐに引っ込んで隠れてしまうのだ。

しかも扉も取り付けているらしく、そこまで分厚い訳では無いらしいが偽装がしてあり、これでは艦砲射撃を加えて黙らせる事は出来ないし、流星で爆撃を加える事も隠れてしまつて位置が分からなければどうしようもない。

それらが数十門の重砲に留まらず様々な口径の砲弾が降り注いで

くるのだ。

輸送艦や陸戦隊に向けて絶え間無く撃ちこまれる。

今も砂浜に落下した砲弾が炸裂して砂を巻き上げたり、輸送艦や大発を狙って海に落下した砲弾が水柱を上げている。

「ともかく、敵の重砲だけでも何とかして頂きたい」

「それに関しては艦砲射撃と撃ち込んで砲撃の暇を与えない様にする予定ですから問題ありません。ただ、各艦の配置を変えるのにもう少しだけ時間を頂きたい」

「あとどれほど掛かるのですか？」

「2時間から3時間程です。それだけ頂ければ十分です」

「分かりました。約束ですぞ、必ず砲撃を行ってください」

「それと航空機による支援も出来るだけ絶え間無く行って頂きたいのです」

各隊長達の必死の懇願も当然だ。

自分の部下達が今も戦い続けているのだから。

「それと戦車大隊を一刻も早く寄こして欲しい。敵弾を遮るものが何もない状況は全くと行って良い程好ましくありません。掩体だけでは不十分なのです」

「それも、艦砲射撃が始まってからとなります。今上陸をさせようものなら敵に狙い撃ちされてしまう。撤退するにしろ、艦砲射撃を叩き込んで摺鉢山の敵重砲を黙らせないと何も出来ません」

「分かりました、それではそのようお願いします」

結局会議では、撤退するにしろ増援を待つにしろ艦砲射撃を始めてから、という事になった。

少なくとも摺鉢山からの砲撃だけは何とかしなければ何も出来ないのは事実であった。

「参謀長、流星に爆弾を装備させて摺鉢山を爆撃させろ。艦砲射撃を始めるまではそれでなんとかして凌ぐ。烈風には6番を装備させて陸戦隊の支援だ」

「はっ、了解しました」

その命令に従って、流星は爆装して飛行甲板から飛び立ち続け爆弾の雨を降らせた。

烈風は6番2発を装備して敵の部隊に投下し続けて投下が終わったら機銃掃射によって陸戦隊に対する敵兵力の圧力をどうにか減らす事が成功した。

その間に陸戦隊は部隊を再編し、前線をどうにかこうにか立て直した。

そして2時間半後に各艦の配置が完了。海側に面している摺鉢山を狙って展開していた艦を全て反対の陸地側に移動。

艦隊の戦艦から駆逐艦に至る主砲は全て摺鉢山斜面に向けられており、戦艦と重巡は3式弾を装填して対地攻撃能力を上げている。

「提督、砲撃準備完了しました。何時でも行けます」

「よし、艦砲射撃開始！」

その俺の号令によって一斉に射撃が開始された。

戦艦の装填時間の長さは重巡や軽巡、駆逐艦で補うので問題無い。

耳を塞ぎたくなるほどの轟音が一斉に鳴り響いたと思ったらその数秒後に摺鉢山が炸裂した砲弾の光に包まれた。

双眼鏡で覗いてみると、幾らか砲弾とは違う爆発をしているからもしかすると敵砲が隠れている場所を直撃した砲弾があったのかもしれない。

流石に最大41cmの戦艦の主砲は防げなかったようである。

「参謀長、戦車大隊を上陸させて歩兵の支援に当たらせる」

「はっ」

散発的に敵砲が反撃しようとして射撃したが着弾した場所は的外れも良い所だった。

それによって隔壁を開けていたから3式弾の灼熱を浴びて砲弾が誘爆を起こしている様子が見られた。

それによって敵の砲門は一切射撃を行わなくなった。

艦砲射撃によって敵の砲撃が止んだ頃合を見計らって2個戦車大隊を上陸させて歩兵の支援に当たらせる事とした。

戦車大隊を上陸させた理由としては、撤退するとなった場合に戦車を放棄、障害物としておくためと砲弾は即席爆弾として設置して出来るだけ敵の侵攻を遅らせる為である。

勿論乗員は撤退させる。

放棄するのは戦車と砲弾だけだ。

南方方面の資源地帯との輸送ルートが確保されている間は無尽蔵とは行かないが戦車も砲弾も作ることが可能だ。

それを考えれば放棄する事なんて厭わない。

上陸した戦車は歩兵と協力して掘った戦車用の掩体に車体下部のみを隠して敵兵に向かって榴弾を撃ち込んだ。

どうにかこうにか一連の行動によって敵の攻撃にも陰りが見え始めたようで、前線では敵からの攻撃が止んだ、もしくは弱体化したとの報告が出始めた。

結局、上陸してから1週間が過ぎた。

撤退するか否かの会議は紛糾したが敵の陸上部隊と言う問題こそあれど敵艦隊と言う何よりも脅威と成り得る存在が居ない事、橋頭保を確保している事などいくつかの理由によって作戦は続行する事となった。

当初、俺は撤退をするべきだと考えていたのでこの決定に異議を唱えるべきか、と考えもしたのだが本土にいる中代大将達が陸海軍のあちらこちらに手を回して海軍特別陸戦隊を新たに3個連隊を即時投入可能状態で本土で待機させており、そして陸軍4個師団8万人を1か月の準備期間さえあれば用意することが出来るとの事だった。

中代大将達も、B-29に護衛戦闘機が就いて震電での迎撃が有効にならなくなる事態はどうしても避けたいらしく硫黄島の奪還は今回どうにかして成功させたいらしい。

確かに、敵艦隊の脅威も無い今こそが好機なのだ。

こちらは制空権と制海権を完全に握っている。

確かにマリアナ諸島から飛来するB-29やトラック、ウルシー環礁からの敵艦隊の脅威こそあるかもしれないが今現在は硫黄島近海の制海権及び制空権を握っている。

しかも敵の陸上部隊はこちらの通商破壊によつて疲弊していると思われるし今後、少なくともこちらが潜水艦隊や連山に至るまでの攻撃兵力全てをこの方面から撤退させる、もしくは攻撃を行わせないという命令を下さない限りは一切の補給を受ける事も出来ない状況で、しかも艦隊の乗組員を陸揚げして陸上戦力に加えているのだから銃弾、燃料から食料水に至る備蓄してあつた物資も長期間持つとは思えない。

少なくとも、それら全部を加味して考えてもこちらの圧倒的兵力不足という事はあるが一番の好機であるのだ。

その圧倒的兵力不足も本土に部隊が用意されているのだからその差も縮まるだろうし、何よりも陸戦の訓練を受けた敵は少ない。

海戦ならば侮り難い、強力な敵だと言えるだろうが、陸戦においては侮れると言う訳では無いが陸戦専門の戦闘訓練を日々積んで来た陸軍兵士や陸戦隊兵士からすると敵の陸上部隊を相手するよりはずっと楽だろう。

その様な理由から作戦を続行する事となつた。

投入されるのは、

海軍特別陸戦隊第23歩兵連隊

海軍特別陸戦隊第24歩兵連隊

海軍特別陸戦隊第27歩兵連隊

となつている。

以上の3個連隊計7500名は既に輸送船と輸送艦によつて運ばれてきており上陸完了、正面と砂浜の両側面をそれぞれ1個連隊づつが応援として守備に就いている。

陸軍師団は、

第46歩兵師団

第51歩兵師団

第55歩兵師団

第62歩兵師団

と以上の様になっている。

絶え間無い爆撃と砲撃によって敵は顔を出すことが出来ないらしく、摺鉢山からの砲撃は既に無く、なんなら戦艦による砲撃のせいで地形がまるつきり変わってしまったている。

陸軍の4個師団は準備が整い次第、輸送船によって師団毎に輸送されてくる。

予定では2週間後にまず第46歩兵師団が出航、その1週間ごとに残りの3個師団が続く予定だ。

護衛には4航戦が就くが戦艦は艦砲射撃の為に引き抜いている。

硫黄島には連山による爆撃も行われており、はつきり言つて地獄の様相だ。

昼夜問わずの砲爆撃なので空母は硫黄島近海を遊弋しており、飛龍の艦上にいる俺は常に砲撃音を聞いている。

「これだけ砲弾を撃ち込んでも爆弾を落とすとしても敵戦力を殆ど削れていないのだろうか……」

「地下坑道を張り巡らしてららしいからね、一つ一つの穴を全部潰して回らないと無理だと思うよ。それか余程運良く行動の入り口に命中でもしなきゃ潰せないし、空からじゃ偽装されてるから見つからないしされてなかったとしても人1人が出入りできるぐらいの穴なんてどれがどれだか区別なんて付かないよ」

「持久戦に持ち込まれるとやはり厄介だな……沖縄でもそうだったがあの時は島の大きさがあつたからまだ一度に戦う事になる敵の数が限られていたからまだマシだったが今回はこの狭い島に12万と言う敵が潜んでいるのだから比じゃないな」

そう俺は飛龍と共に昼飯を食べながら話していた。

今回の戦いの辛い所は、沖縄本島での戦いの時と違い、硫黄島と言う太平洋に浮かぶ小さな島に敵が12万もの大軍で潜伏していることだ。

硫黄島は、どれだけ北から南方向で広い幅でも精々が4 kmほどしか無く、西から東の距離は広い所でも3 km程度。

面積にして23・73?。

それに比べて沖縄本島は幅こそ狭いが100 km程の長さがある。面積だつて1207・00?もあるのだ。

硫黄島の凡そ50倍だ。その面積に12万人と言う数の兵士が居ても何らおかしくは無いのだろうが、硫黄島と言うたったの約24?しかない狭い島に12万人と言う数ははつきり言つて異常だ。

このぐらゐの島ならば精々2個か3個師団くらいを駐屯させておくのが普通だ。

兵站面から考えれば1個師団か2個師団が限界だろう。

にも関わらず、12万と言う兵力が潜んでいるのだから驚愕だ。

俺が指揮官だったら絶対にそんな場所で碌な戦闘を行えるとは思えない。

敵は今までの輸送船で運んだ物資を全て陸揚げしているのだろう。そうでも無ければこれだけの数を食わせて、戦わせることは到底できない。

武器ならば予備を引つ張り出して来ればいいが水や食料、弾薬はそうもいかない。

飲んで食べる事が出来なければ餓死、弾薬が無ければ戦えない。恐らく元々艦に積んであった対空砲などの砲弾は即席爆弾として使用する気だろう。

艦の燃料などは運ばず、水や食料、小銃などに使うための銃弾や榴弾砲の砲弾に限定して輸送していたと容易に予想出来る。

兎に角、兵力が揃うまでは戦う事は出来ない。

作戦としては陸軍の第46歩兵師団が到着し次第、前進を開始して島を分断する。

恐らく敵の兵力の殆どは摺鉢山と飛行場に集中していると思われるから、それを各個撃破するのだ。

北飛行場、南飛行場、摺鉢山の順番での攻勢だ。

均等に分けているのならば4万つつになるが今までの戦いで敵の夜襲などを撃破してその数は大体5000〜6000程を撃破しているから精々38000つつほどになるだろう。

こちらは1個師団後方の防衛のために引き抜いて残りの75000を奪還に投入できる計算だ。

3倍とは行かないが2倍ほどの兵力を用意出来たのだから良しとしよう。

同数での戦いでは無いだけマシだ。

そして1週間後、漸く46師団が到着した。

これにより作戦を開始することが出来る。

だが我々の予想とは大きく違って沖縄以来の激戦が繰り広げられる事になる。

第36話

46師団到着後、すぐさま上陸を開始し武器弾薬の揚陸、そしてホハなどの支援車両の揚陸が完了し攻勢準備が整うと陸戦隊と共に前進を開始した。

先ず、予定通り北飛行場の奪還を目指すべく、正面と左側面は陸戦隊に任せて右側面から

第11陸戦隊と第23陸戦隊と共に46師団は前進を開始。

だが第11陸戦隊と第23陸戦隊は今までの戦闘で手酷く、という訳では無いが損害が出ている。

硫黄島と言う狭い島内を1個師団と2個連隊が進むと言ってもその狭さゆえに全ての部隊を前面に押し出す事は出来ない。

なので46師団は2個連隊づつを前面に出して、その2個連隊づつが交代で前進を行う。

先ず、北飛行場の南端を目指して前進した。

そして南端に到達したら陸戦隊と共に左右に連隊を回り込ませて包囲、攻撃という流れだ。

だがこの南端に到達するまでが地獄の道のりだった。

先ず、この北飛行場に到達するまでに無数とは行かないがかなりの数の小高い丘とそれらよりも高い標高を持つ4か所の小高い丘がある。

この丘陵は精々が5mかそこらしかないし4つの丘も精々20〜30mかそこらの高さしか無いのだが、この精々5mそこらの丘陵と、4つの丘が問題だった。

まず5mそこらの高さしかないとっても人間の身長がそんなに巨大になる事はまずない。成長したとしても2mぐらいだしそのよな者は全世界見渡しても極々少数だ。

兵士達の平均身長は165cmほどなのでどうやったって隠れてしまう訳だ。

確かにこちらとしては敵重砲などからも身を隠せるし願っても無

い事だ。と言っても敵重砲の脅威は艦砲射撃によって殆ど無いのだが。

ただそれは、敵も同じことだった。

こちらの砲爆撃から身を隠すことが出来るし、何よりも丘に囲まれているものだからもの丘の斜面しか見えないのだ。

これでは敵が後ろから湧いて出てきても、横から襲い掛かって来ても咄嗟の対応が困難となる。

しかも丘によっては切り立った斜面によって完全に一本道になっている箇所すらあるのだから、正面に敵の銃座があつた時には最悪と言つて良い。

しかもその様な道は戦車が入り込めないことが多く、戦車を前面に出して敵のトーチカや銃座を潰して回ることが出来ないのだ。

そして何よりも酷いのは、先程も言ったが敵の姿が攻撃されるまで見えないという事だった。沖繩同様、地下陣地を張り巡らしているらしく、潰したはずの入り口から敵が湧いて出て、攻撃を食らうなんて当たり前的事だった。

しかも丘の間には砲爆撃を受けることが無かつた、防御陣地が無数に存在していてそこには機関銃だけでなく迫撃砲などの火器も数多く存在し、しかもその命中率が高かつた。

恐らくはどこからか監視していて位置情報を伝達しているのだろうと思われる。

お陰で防御陣地を突破する前から損害を被り、何よりもその防御陣地を突破するのにもかなりの時間と兵力を要した。

1個小隊の半分死傷して壊滅するなんて事もしょっちゅう。

酷い場合だと防御陣地を突破するのに丸々1個小隊が消えて、更にもう1個小隊が壊滅するなんてこともある。

流星に流星も戦艦もそんな小さな的を狙えるだけの精密性は無い。しかも上空からは偽装されていて全く分からないらしく、爆撃支援を要請をしても流星は上空から見えないのだから投下しようにも何処に落とせばいいのか全く分からずお手上げ状態だった。

だからこそ歩兵で防御陣地を1つずつ潰して回る以外に方法は無

かった。

「ちきしょう、また敵の防御陣地に当たっちゃった！」

「つい50m後ろで1つ潰したばかりだぞ!? それにもう小隊は半分以下
の人数しかいないのにあれをどうやって叩けばいいんだ!？」

「伝令を出す! おいお前! 後続の部隊に敵防御陣地発見、応援を寄こ
すように急いで伝えろ! それと銃弾の補給を要請してくれ! このま
まじゃ白兵戦を挑むことになる! お前も帰ってくるときに銃弾を持
てるだけ持つて帰って来い!」

「了解しました!」

「援護射撃!」

隊長が伝令に兵を送り出した。

その間も敵の機関銃や小銃からの射撃は止まらず、援護射撃を行う
のに頭を出した兵士が1人、運悪く鉄帽に直撃を受けて甲高い音を上
げながら貫通、即死した。

だがその甲斐あって伝令に出た兵士は無事に後ろに下がることが
出来た。

「サンパチならこんなに早く弾切れの心配をする必要は無かったって
のに!」

「小隊で持って来た予備の弾薬は!？」

「あと3箱分しかありません!」

「それを均等に分ける! 怪我人や死んだ奴のも掻き集めるんだ! 通信
兵! 大隊本部に弾薬の補給と応援要請! それと迫撃砲でも爆撃でも

何でもいいから火力支援も要請しておけ！復唱はしなくていい！」

「了解！こちら第2中隊ッ！敵の防御陣地にまたぶつかつた！このままじゃ全滅します！弾薬も残り少なくて死傷者も多い！至急応援を求む！繰り返す、至急応援を求む！」

『先程補給部隊を送つたが途中で連絡が途絶えた！今現在大急ぎで補給部隊を新たに編成しているから今しばらく耐えて欲しい！』

「ならば増援だけでも寄こしてください！我々の後続の第3小隊はどうなつたんです!？」

『貴君らの突破した陣地の手前20mほどで敵の猛攻撃を受けている。なので大隊からか若しくは連隊、最悪師団本部の予備部隊の投入を待たなければならぬ！今現在我々大隊本部も敵の奇襲を食らって戦闘中なのだ、撤退して第3小隊と合流しても構わない!』

「撤退だど!?!こっちは報告が正しいなら前も後ろも敵に挟まれていてしかも弾薬も人員も不足しているんだぞ!?!怪我人も居るんだ、見捨てるだけでもいいのか!?!」

『こちらも前線への応援と補給をどうにかして成功させようとしているんだ、耐えー!』

唐突に大隊本部との通信が切れた。

通信兵は何度も呼びかけるが、出ることは無かつた。

「聞こえますか!?!クソ、切れやがった!隊長!」

「どうした!?!大隊本部は何と言っていた!?!」

「どうやら大隊本部も敵の奇襲攻撃を食らって戦闘中の模様!補給部隊を護衛と共に送り出したようですが途中で敵部隊と交戦の報告が入ったきりでそれ以降は通信が途絶えているとの事です!最悪の場合、撤退をしても構わないとー!」

「我々の後を進んでいた第3小隊は!?!」

「我々が突破した防御陣地の20mほど手前で敵と交戦中!」

「クソ!撤退するにしても前にも後ろにも敵がいて補給が受けられない、応援も来ないで怪我人を担いでどうやって撤退すりゃいいんだ!」

小隊長は、沖縄での戦闘も経験し生き残つた精鋭だったがこの状況

を切り抜ける考えは浮かばなかった。

――――

前線に対して満足に補給が行えていない。

このままじゃ何処の部隊も全滅してしまう。

それぞれの兵士はMP40は32発入り弾倉を6本、Stg44は30発入り弾倉を6本ずつ携行していた。

だがそれでもMP40は192発、Stg44は180発と言う数だった。

三十八式歩兵銃の時は各員が120発ずつと今よりも少ない数を携行していたのだが、ボルトアクション式のライフルであったためにそこまでの連射は出来なかったし、何よりも1発撃ったならば即座に身を隠さなければ蜂の巣だった。

だからこそ、そこまで直ぐに弾薬切れの心配をする必要も無かったのだが、MP40やStg44は違った。たった1秒引き金を引いただけで型式にもよるが最低でも8発もの弾丸が飛んで行くのだ。

セミオート射撃、フルオート射撃の切り替えができるが、基本的にセミオート射撃で撃っているとしても三十八式歩兵銃よりもずっと射撃速度が速いのは明らかだ。

だがこれは問題としては余り大きなものではない。

恐らくこちらが直接的な一番の原因となっているのだが、小隊や中隊と言った規模の部隊と敵防御陣地や敵部隊間での戦闘回数が他の戦線、沖縄本島を含めた南西諸島や南方方面奪還作戦よりも遥かに多いのだ。

30mも前進しないうちにまた敵防御陣地などにぶつかる事なんてザラにある事だし、なんなら敵防御陣地を突破しても後方からいき

なり現れる事もあるのでそちらとの戦闘も行わなければならない。

それを考えると弾薬の消費が激しい事も必然と言える。

どうにかこうにか補給をしようにも、敵部隊が後方の、海岸にある橋頭保付近にまで現れては水食料弾薬などの集積所を襲って爆破したり、火を放つたりしてくるし、前線部隊に届けようと出発した補給部隊が護衛に就いていた部隊共々、丸々連絡途絶、なんてことも多々起きている。

どうにかこうにか、小隊規模での各隊長は小隊単位で持ち込んでいた予備の弾薬をやり繰りしながら必死に戦っている。

だが実際、殆ど弾薬が尽きかけている部隊も数多く、時間の問題だ。

補給部隊を送ろうにも補給部隊が護衛部隊と共に攻撃を受けて戦闘中、連絡途絶、なんてことも報告で上がって来ている。

これでは前線にどうやったって補給が行かない訳だ。

しかも大隊本部や連隊本部が奇襲攻撃を受けている部隊も存在してそちらでの交戦に精一杯でとても増援部隊や補給部隊を送り出すことが出来ない状況さえ生まれつつある。

撤退しようにも、後方を敵部隊に遮断されてそもそも撤退がどうやっても不可能であったり、遮断したその敵部隊が後続の味方部隊と交戦中、挟み撃ちを狙おうものならこちらも正面の敵に挟み撃ちにされるという、過酷な状況に何処の部隊も陥っていた。

「提督、前線の各大隊中隊規模の部隊から矢継ぎ早に大至急応援と弾薬の補給の要請が届いております」

「分かっている。輸送艦にある弾薬はあとどれほどだ？」

「そちらはまだ十分な数があります。ですが問題なのは最前線に補給が届かない事です」

「送っても敵部隊からの奇襲攻撃を受けているらしいからな……」

「はい、数で押そうにもこちらは敵よりも数において負けておりますからそんな事を

すれば忽ち負ける事になります」

「……この際、空中投下による補給も検討せねばならないな」

南方方面などでもやったように弾薬や食料を空中投下で補給を行う方法だ。

だが問題なのは、未だに我々は飛行場の奪還に成功していない、という事である。

南方方面ならば奪還した飛行場に陸軍の飛行戦隊を進出させて、疾風に500kg分の物資を積み込んで空中投下出来たが、今回はそれを行うのが海軍の、しかも洋上に浮かぶ空母であるという事だ。

そうなるとう輸送船に乗っている弾薬や食料を一度空母に乗せるという作業を行わなければならない。

この手間ははつきり言つて物凄く面倒なのだ。

と言うかそうなるとう空母を1隻丸々それ用に転用しなければならぬという事だ。

そうなるとう方が一敵艦隊が現れたときにただでさえ少ない攻撃兵力が減るということを表す。

だがそんな事を言つて前線の将兵達を飢えさせ武器弾薬が無く戦えずに死なせる訳には行かない。

「参謀長、空中投下による補給を行うに当たつて適任となる空母は？」
「そうですね……信濃など如何でしょうか？」

「理由は？」

「まず、装甲空母であり、物資を満載した状態でも装甲甲板を突き破られるほどの攻撃ともなればそれこそ戦艦クラスの主砲弾か1tクラスの爆弾でもなければ早々やられることは無いでしょうから。それに艦載機の数も70機で全てが烈風と多少格納庫内に余裕がありますからその内の28機程を他の空母に移して代わりに流星を着艦させてしまえば十分に可能かと思われます。流星の数は16機ほどで構わないかと。最悪露天繫止しておいても問題ありませんから」

「ならばそうしよう。信濃にその旨を伝えてすぐさま任務に当たらせてくれ。前線将兵に一刻も早く食料弾薬を送り届けねばならぬ」

「了解しました、直ぐに作業に掛からせます」

「輸送船にもそれを連絡しろ。物資の積み込みにどれほど時間が掛か

る？」

「そうですね……計3時間ほど頂ければ問題ありません。2時間で最低限の水食料弾薬を輸送船から受け取り積載完了、1時間で流星に搭載します。爆弾や魚雷では無いのでそこまで時間を頂く必要は無いかと」

「分かった、それで進めてくれ。もし早く終わったのならこちらに簡易的な報告のみで順次流星を発艦させるように。ただし、事故だけはやってくれるなよ」

「勿論です。即座に作業に取り掛からせます」

「それと全部隊にこれより3時間後に空中投下による水食料弾薬、医薬品等の補給を行う事を無線にて通達、それまで耐えてくれと伝えるんだ」

「了解しました」

その命令に従って師団本部にまずその連絡が行くと連隊本部、大隊本部、中隊本部経由で各小隊に至るまで連絡が成された。

元々信濃所属の烈風で対地支援任務に就いていた機は飛龍他の空母に着艦、そして飛龍達は流星を4機ずつ信濃に派遣した。

それらが完了した後に輸送船から物資の受け取りを始めた信濃は2時間で銃弾154t、食料53t、水28t、医薬品35tを受け取った。

それらは各部隊、兎に角戦っている部隊に投下される事となった。

正直に言って、前進と後退が激しすぎて何処が正確な前線なのか？司令部も前線部隊も把握出来ていないからこのような曖昧な命令となってしまうた。

それも仕方が無いと言えれば仕方が無いのだ。

報告だけでも既に各部隊は合計して100回以上前進と後退を繰り返し、更にはあちこちで分断されたり包囲されている部隊もあちらこちらで生じているからこれで前線がどこかを判断するのは誰にだって無理な事だった。

しかも戦闘をしているものだから混乱も生じていて情報があつちへ来たりこつちへ行つたりの錯綜状態で正確な情報を掴むことは俺

を含めた司令部の面々でも不可能な事だった。

そしてきつかり3時間後に1機目の流星が物資を投下するべく飛行甲板から飛び立った。

「……………」

「隊長！補給物資が3時間後に空中投下で補給されるそうです！」

「本当か!？」

「はい！提督からの指示で空母から流星を使って行うそうです！」

「何時だ!?!いつ来る!？」

「早ければ3時間後に発艦して始まるそうです！」

「よし！それならば補給が来るまで耐えるぞ！」

空中投下による補給が行われるとの報告が各部隊に伝えられるとあちこちから銃声や怒号に混じって歓声が響いた。

それもそうだ、酷い部隊だとかれこれ2時間以上にも渡る敵防御陣地との戦闘で各員の所持する弾薬数が弾倉1本分30発しかない部隊も存在していたし、何処の最前線で戦っている部隊はその殆どが弾薬の欠乏に悩まされ、ただ隠れて時折撃ち返す事ぐらいしか出来ないでいたのだ。

今の今まで、大隊本部などに必死に補給と応援を！と叫び続け、どちらかだけでも構わないから寄こしてくれと懇願していたのだ。

今の今まではそれすらも困難な状況だったのだ。

そんな状況の中で空中投下による補給と言う、制空権を握った者し

か出来ない、確実に補給が受けられるやり方で補給を受けられるのだから誰だって歓声を上げたくもなる。

どうあれ前線の、戦っている兵士達全員の士気が上がった事に間違いは無かった。

—————

流星による一度目の空中投下任務が開始された後。

各部隊は一度前線を立て直すために少なくとも後続の部隊と合流。

そして消耗している部隊はそのまま予備部隊と後退して再編、可能ならば再び前線に投入される事となった。

「提督、最前線で戦ったほぼ全ての部隊が損耗率5割を超えており戦闘継続は困難です。指揮官を死傷した部隊も少なからず存在しており、到底これらの部隊を投入する事は出来ません」

「ですが兵力不足は明らかで、それらの部隊を投入できないというのはさらなる兵力不足を招きます」

「……損耗率の高い部隊を統合、1つの部隊として再編しろ。指揮官が不在な部隊とそうでない部隊同士をなるべく組ませるんだ。もし指揮官が居る部隊が被ってしまった場合は先任を優先して上級指揮官とする様に。これで多少は軋轢を減らせる筈だ」

「了解しました。後続の陸軍師団は何時頃到着しますか？」

「予定通りだ。それまでは46歩兵師団に頑張って貰うしかない。到着したら46歩兵師団を一度後退させて再編を行う。本土に帰せる程の余裕は無いし兵力不足を何としても補うのに被害が大きいから

と退かせるわけにもいかない」

「承知しております。それでは、これからの空中投下による補給任務計画を策定してまいりますので失礼します」

そう言うのと作戦参謀や次席参謀は艦橋から降りて行った。

自室に飛龍と共に戻り椅子に座ると、俺の口からは大きなため息と共に自責の言葉が漏れた。

「はあ……俺は、前線将兵からすると無能な指揮官なのだろうな」

「そんなこと無いよ。提督は自分が出来る事以上に頑張ってるでしょ？」

「だが、今やっている作戦は何だ？敵の想定戦力は12万、大して現在のこちらの戦力はたったの4万。敵の3分の1だぞ？それらも度重なる戦闘で大きな被害を受けて壊滅寸前。前線へは空中投下でなければ満足に補給を行えない。こんな作戦を中止する事も出来ずに続けている辺り、無能でないとと言えるか？」

「でもそれは軍令部からの指示でしょ？提督はそれに従ってるだけだし、何よりも硫黄島を深海棲艦に奪われる訳には戦略上どうしても見逃せないんだから。それにこれ以上の好機は無いんだし」

「それも分かっているさ。だが、死んでいく兵士達を考えるとどうしてもやり切れない」

俺がそう言うと、飛龍は今度こそ何も言わなくなった。

代わりに座っている俺の頭を母親が子供にする様に頭を撫でた。

「提督はこの前も言ったけどちょっと気にしすぎだと思う。指揮官なんだからもつとどっしり構えてないと。参謀長達も心配してたよ？」

「そうか……迷惑掛けたな。いや、今更か」

「何言ってるの。提督の今までの苦勞に比べたらなんてことは無いって。本心を少しは口に出した方が良いよ？その方がすっきりして以外と解決する事もあるかもしれないし」

「……そうだな。機会があったら頼むよ」

「ん、その時は抱き締めてあげる」

「いや、それは遠慮しておく」

「それじゃ、取り敢えず今は仮眠をちゃんと取る事。すつごく疲れてる顔してるから」

「ああ、分かった。4時間後に起こしてくれ」

「りよーかい。それじゃあね」

そう言うのと飛龍は俺の部屋から出て行った。

全く、情けない事だ。

部下に色々と気を遣わせた挙句に心配まで掛けた。

指揮官としては、碌でも無い奴なんだろうがそれでも皆付いて来てくれている。

いや、やめだやめだ。

これ以上ネガティブ思考をするのは止そう。

兎に角、戦いはまだ続くのだから仮眠を取らなければな。また怒られる。

そう思いながら、俺はベットに潜り込んで目を閉じた。

第37話

空中投下による補給が功を奏して、前線の兵站状況が幾らか改善された。

水食糧、弾薬、医薬品を信濃から飛び立った流星が投下していく。

「提督、補給に関しては空中投下もあってかなり改善されて来ております」

「それぞれの連隊本部などからの部隊による補給は行えているか？」

「いえ、それに関しましては殆ど成功していません」

「やはりか……」

「はい。それぞれの連隊、大隊本部規模の本部も敵の攻撃を受けており戦闘を行うだけで精一杯でとても補給部隊を編制して、応援に向かわせる事は出来ないそうです。全ての部隊が、と言う訳では無いのですがほぼ全ての部隊がそのような状況です。手あたり次第に物資を投下している為に補給要請がされる事は少なくなりましたが、応援要請が激化しております。このままでは前線の各部隊が全滅するのは時間の問題かと」

敵は、地下坑道を通ってあちこちから湧いて出て来るものだからその都度その都度対応せねばならず、しかもその坑道の入り口を塞ぐだけの資材は用意しておらず、爆薬を使って吹き飛ばすぐらいの対応しか出来ていなかった。

しかも爆破して塞いだとしても、何処からともなく現れてくるのだ。

恐らく、こちらが確認していない坑道の入り口が無数にあるのだろう。

流石に全ての入り口を塞ぐことは出来ない。

戦艦や重砲による準備砲撃や支援砲撃があるとはいえ、丘陵地帯なのだから間に上手く着弾すれば防衛陣地ごと吹き飛ばせるんだがそんな上手く行く事は殆ど無い。

だからこそ、一つ一つの防御陣地と入り口を潰して回らなければならない。

だが防御陣地の数は無数、坑道の入り口はそれ以上。

防御陣地を突破するだけでも一苦勞なのに、更に坑道を爆破して、何処から現れるか分からない敵部隊に警戒しなければならぬ。

これだけでも疲労は凄まじいのに、更に複数回の敵部隊との交戦が入ってくるのだから異常だ。

砲爆撃でも敵の地下坑道や地下陣地、地上陣地は全くと行っていい程に無傷なのだ。

そんなのと戦わなければならないのだから、現状の兵力では到底足りる訳がない。

「本土から第51、55、62歩兵師団があと2日で順次到着予定だ。3個陸戦隊も既に到着して戦線参加しているが……」

「恐らく、それでも足りないでしょう。最低でもあと3個歩兵師団は必要です」

「……軍令部に電文を送る」

「はっ、内容は？」

『最低3個歩兵師団ノ更ナル増援ノ要有リト認ム』。『セメントヲ含ム大量の建築資材及ビ火炎放射器ヲ大至急送り込マレタシ』と打電してくれ」

「了解しました」

通信参謀に増援及び建築資材と火炎放射器を送る様に打電させる。

セメントは敵の坑道入り口に流し込んで塞いでしまう為の物であり、最悪爆薬で事足りるのならこのセメントはこちらの防御陣地構築にえば良い。

土嚢で作る陣地よりもセメントで作る防御陣地の方が、誰が考えても強固だ。

もし大隊本部などがそれらのセメントで構築されたとなれば、今よりもずっと戦いやすいだろう。

火炎放射器、百式火炎発射機は元々陸海軍、特に海軍陸戦隊に配備

されていた。

何故陸軍部隊に大規模に配備されていなかったのか。

理由としては燃料タンクに被弾すると周りの兵士も巻き込んで吹き飛び、火の海にするという事から、殆ど使用されていなかったのだ。

南西諸島奪還作戦の時に、少数の火炎放射器が投入されたのだがその時は市街地戦と敵防御陣地、地下坑道の入り口に対する攻撃では高威力を発揮した。

だが山岳部などでの戦いの時はあまりの激戦故に火炎放射器を使用するタイミングも無く、援護射撃を行えるだけの十分な兵力が存在しなかった事から使用されていなかった。

だが今回は、敵の防御陣地などに対してかなり有効的に使用出来るのではないかと考えた。

どうにかして、敵の坑道の出入り口だけでも潰さなければ幾ら兵力をつぎ込んでもただの消耗にしかない。

しかし、現状の兵力で前進、飛行場の奪還は困難だろう。

「参謀長、全部隊に通達。現時刻を以て増援部隊が本土より到着するまでの間、前進を中止、防御陣地を構築して防衛に務めよ。もし単一の部隊での防衛が戦力的、立地的に困難な場合は後方の部隊と合流、もしくは連隊本部等までの後退を許可するものとする。以上を知らせてくれ」

「了解しました」

一度、攻撃を中止させて本土からの師団が到着するまでは防戦に努めた方が良い。

何よりもこの現状のまま攻撃を続行するのは、兵力を無意味に擦り減らすだけだしこれ以上の損害ができれば、橋頭保の確保すら危うい。

なので現時刻から各部隊の再編などを行うべきだ。

あと2日待てば第51歩兵師団が到着する予定だし、その5日後には第55歩兵師団が、その1週間後に第62歩兵師団が続々と硫黄島に到着する。

そうなれば8万近い兵力を揃えることが出来るので、敵との戦力差

は以前としてある事には変わりなく厳しいだろうが少なくとも今よりはマシで楽な戦いをする事が出来る筈だ。

俺の命令を受けて各部隊は前進を中止。

防御陣地を構築してその場での防戦に専念する事となる。

防戦と言っても敵の数はこちらの遙か上を行くのだから厳しい事に変わらないが、それでもコンクリートを運び込んだ事により、土囊での土壁越しで戦うよりはずっと良い。

何よりも敵は航空戦力を持っていないし、もし保有していたとしても飛行場は戦艦による艦砲射撃と連山による絨毯爆撃で碌に使えない。

滑走路だった場所は掘り返されて滑走路の面影は全く無く、爆弾孔と砲弾孔しかない。

恐らく、完全に復旧するのに最低でも2か月は掛かるだろう。

本来ならばこちらが奪取した時に備えてここまで徹底的にやる予定では無かったのだがそもそも話、飛行場を奪取する事が出来なくなったのでそれならば敵に使用されるかもしれない可能性を完全に潰してしまおう、という事になった。

それぞれの飛行場には丸々1日間に渡る戦艦15隻全てからの艦砲射撃は熾烈を極め、その砲撃音や炸裂音が聞こえてくるほどだ。

しかもトドメとばかりに連山による爆撃が行われた。

それによって飛行場修理のために持ち込んだコンクリートなどの資材が行き場を無くした。

先ず、その資材は最前線の各部隊に送られてコンクリート製の防御陣地を構築するに至った。

まあ、コンクリートが固まるまでの2日程度はその辺に掩体を掘って隠れなければならなかったのだがそれが過ぎれば少なくとも航空機を除いた火器に対してかなりの防御力を有する陣地が前線やその後方に位置するほぼ全ての部隊で使用されるに至った。

続いてその上位部隊である大隊本部や連隊本部の陣地をコンクリートによつて構築。

流石にトーチカなどを作る暇は無いので高さ1.3 m程度のコンクリート製の壁や掩体が作られている。

これだけの資材を持ち込めた、もしくは送り込む事が出来る理由としては沖縄本島や南西諸島の島々の要塞化が完了しているからに他ならない。

地下陣地やそれらを結ぶ地下通路には鉾山など使われるような軽便鉄道の線路が張り巡らされている。

それによつて物資や兵員の移動が迅速に必要な箇所を送り込める。地下陣地及び地下通路は全て鉄筋コンクリート製、空調設備を完備しておりそれぞれの物資の備蓄状況は全力を出して戦つても3か月、徹底して持久戦に徹すれば最低でも半年は持ち堪えられる程の備蓄状況だ。

今でも物資を備蓄するための倉庫を増設中だがほぼ完成状態なので、万が一敵の上陸があつたとしても戦える。

兎に角、今現在の硫黄島で戦っている部隊はコンクリート製の陣地に守られているという事だ。

お陰で、移動が激しくなくなったので部隊の位置が殆ど固定されているから空中投下による補給が幾らかやり易くなった。

流星は超低空飛行によつて100 kg単位の物資を投下する。

以前にも言つた事があるかもしれないが、艦船に対する攻撃で100 kgと言う重量は正直に言つて、攻撃力は低い。

我々の戦時緊急増産型の防御力が低い輸送船でも無ければ1発でやられる事は早々無い。

煙突に直撃して爆炎が機関部を、とかでもない限りは駆逐艦ですら耐えられる。

だが考えてみて欲しい。

それが食料100 kg分、弾薬100 kg分、水100 kg分、医薬品100 kg分とするとだ。

水食料は言わずもがな、医薬品だって100kgもあればどれだけの将兵の命が助かる事か。

弾薬だって相当数になる。

Stg44に使用されている6.5mm弾で考えてみよう。

これの重量は21gなので、1kg辺り凡そ47〜48発。

これが100kgになると4700〜4800発程にも膨れ上がるのだ。

Stg44を装備している歩兵1人当たり180発を携行するので、4800発分を投下したとすると26人以上の弾薬数になる。

だが、100kgなんて数量で投下する訳では無い。流星は爆弾であれば最大800kg、魚雷であれば1t以上の重量があるが搭載可能。

爆弾の重量である800kgで考えてみよう。

単純に計算したとしても1機当たり3万8400発。

1人当たり180発携行で計算しても、213人分+ α となる。

今の損耗した中隊規模ならば十分に行き渡らせる事が出来る弾数だ。

小隊に送り込むにははつきり言って過剰過ぎる弾数ですらある。

ただここで問題となるのは、最大積載量が幾ら多くとも最大積載量を積むだけのスペースが流星には存在していないという事だ。

爆弾を吊架する爆弾倉のスペースにはどうやっても限りがあるし、800kg分の弾薬と言うのは、積み重ねたとすると相当の面積になる。どうやつても搭載不可能だ。

ヘリコプターのように垂直離着陸が可能な機体ならば輸送は可能だろうが、少なくとも今現在は配備されていない。

陸軍には力号なる垂直離着陸機が少数あるのだが、砲兵隊の着弾観測のために開発されたのであって、到底800kgを吊るして飛ぶことなど出来る筈も無い。

流星で送り込める重量は精々が200kgが良い所だろう。

だが先程も言った通り、100kgで最大4800発なので、200kgともなると10600発。

52人に行き渡らせられるし、なんなら余る。

だが小隊の最大満数は50人なので、確実に2人以上が余る数だ。

たかが50人分ちよつと、などと馬鹿にできない。

何しろ今の各部隊は兵員を消耗していて50人の満数なんて何処の部隊も存在していないからだ。

どれだけ兵員が生き残っている部隊でも30人か35人ほど。

しかもこれはあくまでも生き残っているというだけであつて実際に戦える兵員としての実数は小隊の半分程度、25人以下が殆どだ。

それ以上の兵員数を保持している部隊は、どこにも居なかつた。連隊は基本満数2500名で構成される。

純粋な歩兵連隊ならば歩兵のみでそこに幾らかの工兵や砲兵が混じる。

だが今現在の各連隊は、特に最前線を構築している連隊に言える事だが小隊単位の被害が大きく、先程も述べた通りに戦闘可能な兵員数は半数以下。

それらを全て合わせても2500人の半分1250人以下。

酷い連隊だと全部隊の戦闘可能兵員数を全て合わせても僅か800名程度にまで減っている連隊もある。

たったの3割しか、生き残つて戦える状況でないという事だ。

沖縄本島全てを奪還し終わるのに投入した陸上兵力約10万の内、9割を失う戦いだつたが、今回はそれ以上を覚悟しなければならぬかもしれない。

ともかく、補給面に関しては嬉しくない事だが消耗しているお陰で幾らか改善していると言える。

輸送船団によって運ばれてきた陸上部隊用の物資は信濃に次々と積み込まれ、流星によってピストン式に送り込まれている。

南西諸島、南方方面への輸送に関しては細々とだが続けられており、その輸送航路は護衛艦隊を付けられないので出来るだけ安全を期すために南西諸島までの航路は今までと変わらず、島嶼帯の近くを航空支援の元に航行して、バリクパパンへ向かう航路を修正、カリマンタン島とスラウエシ島間のマカッサル海峡、見た感じから言えば奪還した地域の外側付近を進むのではなく南沙諸島、リアウ諸島方面の内側を通るのだ。

こうすれば、もし敵が攻撃隊を送り出したとしても陸上にある各部隊の駐屯施設に発見されて迎撃隊が大挙して押し寄せるだろうし、潜水艦の脅威も外側よりは随分と低い。

硫黄島に対する物資輸送を最優先としている為なのだが、やはり護衛艦隊を付けられないというのは不安だ。

それでも輸送船団に対する被害は最小限に抑えられているので各将兵は良くやってくれている。

硫黄島や艦体に対する補給の為の輸送船団は規模こそ未だ展開している兵力が今までと比べると少ないが半面、各種物資の消費量は尋常じゃない。

南西諸島以上である。

それでも維持出来ている理由は、単純に展開している陸上戦力が少ないという事だからだ。

合わせても4万程度しかおらず、先程から何度も述べている通り兵員を消耗している

ので実際の所は戦える兵員数は2万か2万5000程度が良い所だろう。

1個師団規模の兵員を賄う事は大変な事だが、今までの戦力に比べるとずっと楽だ。

南方方面に関しては12万人以上が作戦に従事したのだから、その

6分の1と言えば分かるだろうか。

だがそれでも弾薬の消費量は沖縄での戦いに匹敵、もしくはそれ以上となっている。

敵は常に波状攻撃を仕掛けてきてこちらの物資を消費させてくるし、それによって少くない死傷者が出ている。

水食糧はまだ良いとしても、砲弾薬と医薬品は改善されたとは言っても足りていない。

兎に角、増援が到着するまではどうにかして持ち堪える、持ち堪えてもらうしかない。

あれから、どうにかこうにか第51、55、62歩兵師団が順次到着。

陸上総戦力は6万程度になった。

それにより、前線を構築していた第46歩兵師団と第11陸戦隊と第23陸戦隊は第51歩兵師団と交代。

予定ではそのまま作戦に参加させる筈だったが、想像以上に被害が大きかったので本土に後退、再編する事となった。

第46歩兵師団は当初2万名の兵力を有していたが、交代した時には戦える者は2300名にまで減っていた。

凡そ9割の約1万7700名が死傷した事になる。

第11陸戦隊2500名は600名程までに、第23陸戦隊も同様に550名程度しか戦える者はいなかった。

この事態を受けて中代大将以下軍令部及び陸軍参謀本部は更なる増援を練りこむことを決定。

投入兵力は、

第79歩兵師団

第83歩兵師団

以上の様になった。

到着するのは2週間後の予定となっているので十分に作戦には間に合う。

2個師団が到着すれば10万名の兵員を揃えることが出来るので、敵も物資的にも兵員数的にも疲弊している筈だからそれなりに戦える筈だ。

そうになると、我々は総勢14万名程の陸上戦力を注ぎ込んだことになる。

南方方面奪還作戦と同規模の戦力がこの太平洋にある小島に投入された事になるというのだから驚きだ。

そして、増援の3個師団が到着したことによって、こちらは再び北飛行場奪還に向けて進軍を開始。

既に我々が硫黄島上陸から2か月も過ぎた頃だった。

「提督、敵部隊は今までの戦いによって疲労しているようで抵抗が今までと比べると弱くなってきました。防御陣地にぶつかっても今までの場合は死に物狂いで敵も死守して猛攻を加えてきましたが今では以前ほど敵から銃弾が放たれる量は少ないようです」

「幾ら深海棲艦とは言え、1カ月もこちらの防御陣地に波状攻撃を仕掛けて来ていたのだから戦力的にも物資的にも追い詰められるのは、当然だろう。守りに徹されれば敵兵の消耗も物資の消耗も少なくこちらの勝利はかなり危ういものとなっていただろうが、ここで敵は愚策を踏んでくれたな」

深海棲艦の陸上部隊はこちらが構築したあちこちの防御陣地に対

して毎日毎日波状攻撃を仕掛けて来ていた。

実際、前線が幾らか後退した場所もある程にその攻撃は苛烈であったし、兵員と物資の消耗も大きかったと思われる。

だがこちらはひたすら守りに徹してこちら側から攻撃を仕掛ける事は一切しなかった。

お陰で弾薬の消耗こそ激しかったが兵員の損耗はかなり最小限に抑えられていたし、前進をしていた時の死傷者の数と比べると天と地ほどの差がある。

各部隊は飛行場奪還に向けて物資の備蓄を進めてきていたので、それなりに余裕がある。

だが敵も余力は未だある様でこちらの後方に現れて奇襲、強襲はまだまだ続いている。

一応、陸路での補給部隊も頑張ってくれて入るのだが今でも補給は流星からの空中投下頼みだ。

飛行場周辺では、かなりの抵抗を予想しておいた方が良かったろう。兎にも角にもどうにかこうにか、漸く我々は攻勢を開始した。

「提督、北飛行場周辺に到達したって」

「漸く、第一歩と言う所か……前線將兵達は良くやってくれたな……」

飛龍がそう、報告してくる。

報告によれば、最前線に展開していた部隊が1時間前に最初に到達したそうだ。

飛行場周囲500mほどの地点で各部隊はそれぞれの連隊や大隊ごとに集結、準備完了次第奪還を始める予定になっている。

飛行場に到達するまでに結局丸々1週間を費やした。

これほどまでに早く到達出来た理由としては常に前線で戦う部隊

を入れ替え続けて昼夜問わずの攻撃を仕掛けたのだ。

それによつて深海棲艦部隊は昼夜問わずの攻撃によつて疲弊、物資的にも補給が間に合わず後退を余儀無くされた。

飛行場周辺にどれほどの戦力を配備しているのか偵察中なので不明だが撤退していった部隊の針路を予測して見ると、どうやら摺鉢山方面に撤退しているらしいのだ。

「どうやら敵は航空機も無く、畑よりも深々としっかり耕されている
どうやっても使用が出来ない飛行場を守るよりも、守り易い摺鉢山と
その周辺に戦力を引き抜いた様なのだ。」

それでも全ての部隊を引き抜いたと言う訳では無く最低でも連隊以上の規模を配備しているらしいのでそう簡単には行かなさそうではある。

「2日後に飛行場に対する総攻撃を開始します。偵察の結果では多数の陣地が確認されていますが、数時間の監視を行つても一切の動きが無かつた事からその陣地の殆どは無人であり、言つてしまえばハリボテであると予想されます」

「やはり摺鉢山とその周辺に戦力を集中させているか」

「はい。敵兵力の移動などは地下坑道を使用しているので把握しきれませんが、上陸地点である東浜の摺鉢山側付近ではここ最近、敵からの物資集積所や部隊への奇襲、夜襲、強襲などの攻撃がかなりの増加傾向にあり、2週間前と比較すると半日に1程度だったのが今ではいえ1時間に1度にまで増えていきます。恐らくは集結させた部隊を使つてのものだと思われれます。でなければ今までの戦力や摺鉢山に対する砲爆撃を考えると到底出来る事ではありません」

「……摺鉢山が、天王山か」

「恐らくは。北飛行場と南飛行場の奪還は恐らくそこまで時間を掛けずに成し遂げられるでしょう。ですが摺鉢山の攻略は、現有戦力だけで事足りるかどうかわかりません。足りたとしてもかなりの苦戦を強いられる事は間違いありません」

「飛行場奪還の被害をどれだけ抑えられるかが鍵だろうな。それに、飛行場を奪還したとしても使用出来るまでにするには最低でも2か月掛かるのだから陸軍の航空支援は望めないな」

「飛行場は私達が徹底的に破壊しつくしたからね。あそこまで徹底的にやらなかったらもつと早く修復可能だったんだけど」

「まあ、それで無駄な被害を被るよりはずっと良い」

元々、飛行場に対する攻撃は徹底的にやるか、それともある程度で留めて置き奪還後に修理を短期間で終わらせて陸軍飛行戦隊を前進させる、と言う2つの案があった。

前者は我々が実際に実施したものだ。

後者の利点としては、述べている通り飛行場の修理に掛かる期間が短くなり陸軍飛行戦隊を進駐させて支援に当たらせることが出来るという事だ。

そしてもう一つ。

これには少しばかり説明などを入れなければならないのだが、深海棲艦の心理を分析した時に驚いたことに我々人類とそう変わらないのではないか？と言う研究結果が出されたのだ。

何故そのような事をしたのか？

と言うのも戦争を行う上で戦っている相手の心理状況を読む事はかなり重要となってくる。

兎に角簡単な例えをすれば戦意旺盛か、そうでないか。

これは戦い、特に防衛側に言える事だが戦う意思が無ければ最後の最後まで戦う事は出来ない。

我々にでさえそれは言える事であるし、それはもしかすると深海棲艦もそれに当て嵌まるのではないか？という事だった。

何しろ深海棲艦に関する情報は全く持って存在していないのだから、持ち得る情報を兎に角、ありとあらゆる角度で分析する事は無駄なんて事は無い。

寧ろ有益な情報がある可能性すらあるのだから。

そこで実施されたのが、深海棲艦の行動パターンや戦闘時や長期戦下での心理状況进行分析するという事だった。

そこで得られたのが深海棲艦の精神構造などは人類や艦娘、妖精とかなり類似していると思われる、との事だった。

直接捕虜等を尋問したわけでは無いので確かな事は言えないが少なくとも、我々人類と同じ視点から見た限りではあるが殆ど同じらしいのだ。

要は、奴らも我々と変わらない生物である可能性が高いという事だ。

ただし、決定的に違う事もあるにはある。

まず、それを話すならば深海棲艦の現段階で予想しうる目的を説明しなければならぬ。

深海棲艦の目的は未だ謎が多く、確かな事は言えないが一貫して人類に対する攻撃だ。

これを唱えるには理由がある。

まず、深海棲艦は捕虜を取らない。

戦争勃発時にハワイ諸島で戦闘を行ったアメリカ軍のいくつかの部隊が降伏する旨を伝えて来たのだが深海棲艦は白旗を無視、最後の1人を殺すまで銃を撃ち続けたのだそう。

これには我々日本陸海軍も同様の事態が各地で報告されている。

事実、ラバウル防衛戦において守備隊からの電文の中に、

『我、降伏ス。食糧弾薬ハ底ヲ突キ将兵達ハ戦ワズシテ飢工死ヌヲ待ツバカリ。食糧無ク最早立チ上ガル事モ満足ニ出来ズ。餓死スルナラバ戦イ死スルヲ望ムナリ。ナレド祖国ノ為ニ無駄死ヲスル訳ニモ行カズ。サスレバ敵情ヲ探ルベク降伏スルナリ』

と、届いた後に降伏先遣隊として20名が深海棲艦に降ろうとした。しかしながら深海棲艦は白旗を上げ、武装も無く上半身裸の完全な丸腰状態の降伏先遣隊に対して銃弾の雨を降らせたのだ。

当然、戦う術を持たない彼らは瞬く間に全滅。

この事は後方から見守っていた複数の部隊から証言があるので確かだ。

『我降伏シヨウトスルモ先遣隊、白旗ヲ上げテイルニモ関ワラズ敵発砲。我ヲ受ケ入レル氣ハ無シト認ム。斯クナル上ハ死スルマデ戦イ抜ク覚悟也。祖国ト友軍ノ武運長久ヲ祈ル』

この電文が届いた6日後、敵の総攻撃を受けた旨の電文を発してから連絡が途絶えた。

防空戦で撃墜した敵機のパイロットを捕虜として捕らえようとしても、携帯している拳銃を乱射、弾切れになっても死ぬまでこちらを攻撃し続けるのだ。

これらを鑑みるに、敵はこちらを殺す事しか考えていないのではないか？と推論出来る。

しかしながらこちらは少しでも情報を得る為に機会があれば捕虜を取るように、と前線各部隊に通達している。

しかしながら戦闘中にそんな余裕は全く無く、敵は降伏すらしないのだからどうやっても捕虜を今の今まで捕らえられないままだ。

しかし、心理的に類似する部分も確かにある。

長期戦、特に深海棲艦が防衛側として戦っている場合によく見られるのが戦意の低下だ。

2つ目の作戦はその結果を元に敵の戦意を挫けるのでは？と考えた作戦だ。戦意を挫く事ができさえすれば戦いにおいても抵抗の弱体化は必然であるし戦いは幾らか楽に進むだろう。

そう考えたのだが、大前提と言うか根本的な問題としてどうすれば奴らの戦意を挫けるか、と言う大問題にぶち当たった。

確かに長期戦になれば戦意の低下はするだろうが、それはあくまでも戦闘を行なっていないなければならない、と言う前提がある。

誰だって連日連夜戦闘が続けば戦意は低くなるに決まっている。

反対に戦わなければ戦意は低くならないと言う事だ。

まあ、戦わなさ過ぎると戦意が低くなる事もあるのだがまず戦闘が起こらないなんて有り得ない話だ。

特に深海棲艦相手なら尚更に言える事だ。

こちらが攻撃を仕掛けるにしろ、防衛側にしろ奴らは確かに戦術戦略を練ってくるが姿を見れば確実に殺しに来る。

それが、拠点防衛などに

例えるならば、知性ある獣、とでも言い表せるだろうか？

いや、野生動物の方がまだ本能とは言え旨味の無い戦いで怪我をするぐらいなら戦わなければ越した事は無い、と理解しているだけ利口かもしれない。

兎に角だ。

我々には戦わずして深海棲艦の戦意を挫く方法は全く思い付かなかったのだ。

兵糧攻めなども考えられるが、それこそ何ヶ月待てば良いのか分からないし、人類にそんな時間は残されていない。

だからこそこの作戦案は没になった。

そうになると、正攻法として戦闘を交えて戦うしかないのだ。

だがそうになると必然的に犠牲が大きくなる。

特に摺鉢山での攻防戦は、今現在の戦闘よりもずっと過酷で凄惨なものとなる事は間違いない。

それでも我々だって黙ってやられている訳では無く、今までの戦いで敵戦力を少なくとも2個師団規模の敵兵力を撃破している。

最初の侵攻中はこちらの被害が極めて大きかったが防衛に転じてからは深海棲艦の被害の方が圧倒的に多かった。

なにせコンクリート製の防御陣地に馬鹿の一つ覚えとでも表せられるぐらいに波状攻撃を仕掛けて来ていたのだから、それは当然と言えば当然と言える。

まあ、それは攻勢側であった時の我々にも言える事なのだが、そもその立ち位置が違うのだ。

先ず我々は攻撃側だから当然常に攻撃を仕掛けて一刻も早く奪還地域を増やさなければならぬのだが、防衛側である深海棲艦が態々俺達に戦いを挑むことなどしなくていいのだ。寧ろ、ひたすら自軍の防御陣地や地下坑道に引き籠って、我々が再び攻撃を開始するまで待つていれば良いだけなのだ。

それをせずに態々攻撃を仕掛けて来ていたのだ。

まあそれが意味が無かったと言う訳では無い。

少なくとも数の死傷者が出ているし、補給も圧迫されていた。

それによつてこちらの将兵達は精神的にも体力的にも追い込まれては居たしかなり激しく前線部隊が交代していた。

だが、深海棲艦が被った被害と我々が被った被害を比べると割に合わない。

それを考えると、どちらかと言えばまだ我々がかなりギリギリではあるが一応の戦術的勝利を収めた事になる。

まあ、ただ一度の戦術的勝利を得たとしても硫黄島奪還の全体からすれば微々たるものになる。

それでも特になんの戦果も得られていない事を考えてみれば戦術的敗北をしていたのは我々だ。

だがまあ、12万と言う大軍の内の4万にも上る敵戦力を削る事が出来た、と考えればまだ幾らかはマシだろう。

北飛行場に対する総攻撃が開始された。

未だに1時間ほどしかたっていないが飛行場のほぼ半分程度の奪還に成功している。

やはり敵は摺鉢山とその周辺に分散していた戦力を集中させているらしい。

それでも全くの無戦力と言う訳では無く、最低でも1〜2個連隊を北飛行場周辺に配備しているらしい。

だがこれだけの戦力では丸々2個師団の全面攻勢には到底耐えられないものではない。

残りの1個師団は飛行場を攻撃している間に敵に挟撃されないように支援を行う。

飛行場の奪還が完了すれば、この3個師団は南飛行場から摺鉢山、と攻略をして行く。

――

「今までの戦いが馬鹿らしく感じる程に静かですね……」

「ああ、ここまで進んできているというのに敵は1発も撃つて来ていないし俺達も撃っていない。敵さん、何処に行ったんだ？」

先頭を進む部隊はどの部隊も一度として戦っていないかった。

今までの戦いが嘘であったかのような、夢でも見ていたかと言うほどに辺りは静かだった。

「もう飛行場200m手前だぞ……？戦いたいというわけじゃないが余りにも不気味過ぎるな……」

「隊長、左翼と右翼の部隊が敵と交戦状態との連絡が入りました」

「とすると、こちらもそろそろ敵部隊と当たるかもしれないな。各員、警戒して進め」

「了解」

「敵部隊の規模は？」

「それぞれ大隊程度の規模だそうですね」

「そうになると、こちらがぶつかるとも1個大隊規模が妥当な所か。合わせて1個連隊ほどか」

「はい。事前の偵察では摺鉢山と周辺に戦力の殆どを集めているそうですから、南飛行場の奪還までは今の様な感じかもしれません」

「どこの部隊も敵と戦う事が無く、あつたとしても今の戦闘がお遊びに感じられる程だった。」

「事実、この時北飛行場を守っていた深海棲艦部隊の数は僅か1個連隊のみ。」

「砲爆撃で徹底的に破壊された飛行場周辺には隠れられる場所も限られており、到底2個師団を押し留める事など出来る筈も無かった。」

「今までの戦いが嘘の様に、飛行場をたつたの2日で奪還し終わるとそのまま続いて南飛行場に向かって側面支援を担当していた師団と共に前進開始。」

「こちらには2個連隊が配備されていたが2日程であつさりと殲滅、奪還をするに至った。」

「-----」

「何と言えばいいのか……」

「あまり言いたくはありませんが、敵はやはり残存戦力の殆どを摺鉢山と周辺に掻き集めたようですね……」

「やはり、摺鉢山での攻防戦が天王山になるな」

「はい。飛行場奪還に置いてこちらの損害は128名と少ないですが」

……」

「残存戦力全てを以てしても、やはり摺鉢山を落とすには足りないか」
「はい、今までの砲爆撃によって敵重砲などは殆ど沈黙しておりますのでそちらの脅威はほぼ無いと言い切って問題無いでしょう。ですが地下坑道などは恐らく健在と思われまます」

「それらを一つ一つ潰して、更に戦闘も行うとなると現状の3個師団では、地の利も敵に在り、戦力でも負けております。制空権と制海権はこちらが握っていますがそれでも壊滅的打撃を被り失敗する可能性があります」

2つの飛行場を奪還するのに、我々は128名の死傷者を出した。今までの被害と比べると、驚くほどに低い数ではある。

だがあまり喜んでも居られない、と言うのが実際の所だ。

と言うのも、たったの1個連隊や2個連隊程の敵戦力を2個師団や3個師団と言う圧倒的大差がある戦力で引き潰して行ったのだから。勝ったという事と飛行場を奪還したという事は確固たる事実ではあるが、圧倒的戦力差であった事もまた変わらない事実だ。

本当の事を言ってしまうえば、この2つの飛行場奪還で合計1個師団ほどの敵戦力を削っておきたかったのだ。

そうすれば敵戦力は6万程にまで減っていたらろうし8万を相手するよりもずっと楽だっただろう。

だが敵はそう、何度も愚策を繰り返してくれる訳も無かった。

「現有戦力での摺鉢山攻略は、現実的では無いな。そうなると本土から新たに師団を呼び寄せないといけなくなる訳だが……」

「第79、83歩兵師団は未だに準備段階ですのでどれだけ急いでも出航まであと2週間は必要です。到着してしまえば10万を数える事になるので数的有利は我々のものとなりますが……」

「以前、厳しい事には変わりない、か」

「はい」

それでも推定1個師団ほどの戦力差はあるのだから硫黄島上陸時と比べると随分とマシになったのだ。

ただ、この5個師団だけで摺鉢山に潜む8万の敵兵を殲滅しえる

か、と聞かれると恐らくはかなり厳しい。

なにせ、攻城戦に置いて通常ならば3倍の兵力を用意しなければならぬ。

それを考えるとこちらは最低でも24万の陸上戦力、師団数にして12個師団と言う数を用意しなければならぬのだ。

そんなもの、用意出来る出来ないの問題以前にこんな太平洋の小島に全て上陸させられる訳がない。

よしんば上陸出来たとしても戦えなどしない。

そうなると増援を含めた5個師団かもう1個師団程度が恐らく限界だろう。

「兎に角、増援が到着するまでは攻撃準備を進めるしかないな」

「はい。今攻撃をしても無駄な損耗を増やすだけです。艦砲射撃と爆撃を行うほかありません」

「戦艦組の残砲弾数は？」

「昨日の夜のうちに補給を済ませておりますので問題ありません。ただ、連日連夜に及ぶ艦砲射撃によって砲塔内の乗組員達が熱中症などを発症しております」

「戦艦組には休憩無しの艦砲射撃だから……重巡組と艦砲射撃を交代させる。重巡組は今の今まで参加していなかったから思う存分にやらせてやれ」

「了解しました」

実の所、重巡組は砲撃に参加していなかった。

というのも、戦艦15隻の艦砲射撃だけでも明らかに過剰なのにそこに重巡までもが参加してしまうと、明らかにやりすぎなのだ。

そんなわけで今の今まで戦艦に変わり空母の護衛と周辺海域警戒に就かせていたのだが……

以前からの問題として、砲塔内は完全な密閉空間だ。

砲撃を行うとそりや砲炎などで砲身は熱されるし砲塔内は当然、灼熱地獄となる訳だ。

俺の元生きていた世界の熊谷市でだって精々40度かそこらなのに、連続して砲撃を行っている砲塔内は驚きの50度を超える。

下手をすると60度に達する。

しかも現代の高性能なイージス艦などの様に冷却装置も冷房設備なんて搭載されていないものだから、そんな中での重労働だ。

当然熱中症にもなる。

まあ、大和と武蔵の2隻は冷房完備なので幾らかマシだろうがそれでも灼熱である事に変わりはない。

熱中症になると、最低でも数日間は休まねばならない。

これでも交代で休息を取らせていたのだが疲労が溜っている事に変わりは無く、熱中症患者が出ている。

そうなれば、艦砲射撃に加われなくて鬱憤の溜っている重巡組の出番という事だ。

少なくとも1〜2週間は重巡組が砲撃をする事になる。

そうすれば、その頃には戦艦組も戦線復帰が可能だろう。

しかも丁度その頃になれば増援が到着、最低でも出航する事になっているから丁度良いタイミングだろう。

ともかく、それまでは艦砲射撃で敵に圧力を掛けて置くしかないな。

第38話

あれから、南飛行場の奪還も完了した。

こちらもこれと言って大きな被害は無く死傷者は100名以下だった。

それに伴い、漸く摺鉢山への攻勢準備を進めるに至ったのだがここで問題となってくるのはやはり以前から問題となっていた摺鉢山周辺にほぼ全て集結した敵部隊と徹底的に防御を固めた敵陣地だった。「航空偵察では確認出来ませんが、相当の防御陣地と火力が集中しているものと思われます。こちらの戦艦や重巡の艦砲射撃に耐えうる防御陣地ですから頑強とただ一言で言い表せられるものではないでしょう」

「もし攻略に取り掛かったとして、どれほどの時間が掛かると予想される?」

「正確な事は申し上げられませんが、確実に陣地や坑道入り口を一つ一つ潰して回るしか方法は無いので最低でも2〜3カ月は掛かるかと。損害を無視すれば1か月ほどで攻略出来るかと思われます」

「いや、損害を無視して強行突破は無理だ。それはあくまでも予備の部隊や師団が潤沢にある場合にしか通用しない」

「損害を無視して強行突破する、と言う戦術は確かに有効となり得るだろう。」

なにしろ敵には補給も無いし増援も無い。

こちらは潤沢とは言えないが補給があるし、時間が掛かるとはいえ増援も見込める。

ただこの戦術は、戦線崩壊を起こさない程の潤沢な補給と圧倒的な増援があつてこそなのだ。

圧倒的な増援が無い我々がもしこの戦術を実行すれば、間違い無く補給が行き届かなくなり前線でありとあらゆる物資が枯渇するだろう

う。

しかも増援の準備と到着にも時間が掛かるのだから、兵力不足による戦線崩壊も起こすだろう。

そうなたら橋頭保の維持すらままならなくなり、海に追い落とされるという結果に成り兼ねない。

ここまできると我々は再び上陸して橋頭保を築いて2つの飛行場を奪還しなければならぬ。

今までと同等、若しくはそれ以上の損害を被る事は确实だし、そんなことをしてしまえば今までこの硫黄島で戦死した将兵はただの無駄死にしかならない。

それだけは避けねばならない。

戦術、戦略面のどちらから見ても強引に押し進めると言う戦術はどうやっても取る事は出来ない。

となれば、取れる戦術はただ一つ。

「確実に一つづつ敵陣地や坑道入り口を潰して、進んで行くしかないだろう。摺鉢山とその周辺は標高こそ高くないが斜面はそれなりに急だし我々の砲撃で地形も大きく変わっている。無暗に突っ込めば結果は火を見るより明らかだ」

「となれば、どのような方法で進むか、という事ですが、今まで通り消耗しきるまで前線に師団を張り付けると言う事は避けた方が宜しいでしょう。今までは致し方ない状況だったとはいえ、これは用兵の観点から見ても褒められたものではありません」

「常に攻撃を掛け続けるが2日ごとに前線を担当する師団を交代させ続ける。こうすれば十分な休息も取れるし、後続の師団が入念に敵陣地を破壊したり坑道入り口を潰して回る事も出来る。それに万が一に備えての防御陣地構築も十分出来るだろう」

「分かりました」

そう言って攻略の詳細を詰めていく。

今回の攻略の手順は至極簡単だ。

兎に角、2日交代で攻撃を繰り返す事。

そして後方配置になった場合、休息を取る師団ともし敵の反撃を受

けた場合に備えて防御陣地の構築を行わせる師団に分かれる。

戦闘を行った師団は最後尾まで後退して休息を取る。

2日と言う期間の意味もすっかりとある。

防御陣地に使うのは今回も同じくコンクリートだ。

このコンクリート、基本的に一般的な物であれば厚さによって変わる人が乗って歩ける程度の物であれば凡そ24時間で硬化するのだ。

高強度などになると専門外なので分からないが、少なくとも今現在軍で使用されているのは通常のコンクリートだ。

となれば、2日もあれば少なくとも歩兵が携行している銃弾ぐらいならば十分に防ぐ事の出来る厚さの防御陣地を構築出来る筈だ。

しかも単純にその防御陣地はそれで構築を終わりとするわけでは無い。

続いてその防御陣地に入った部隊が増強を行うのだ。

ともすれば、3回それを行えば砲弾でも小口径であれば十分に防ぐ事が出来る厚さにまでなる。

これほどの防御陣地となれば単純に小規模な部隊だけで攻略するのは困難を極める。

大規模な敵の攻勢であったとしても十分に押し留める事が可能だろう。

そして最前線に立つ師団は敵の防御陣地と坑道入り口を徹底的に潰しながら前線を押し上げるのだ。

ただ、無茶はさせない。

戦場に置いて行き過ぎた慎重と言うのは、時として愚となり得るが今はどれだけ慎重になっても足りないくらいには油断が出来ない状況だと言える。

攻略の詳細を詰めてから4日後の朝早く。

「提督、準備完了しました」

「よし、それでは現時刻を以て摺鉢山攻略を開始する」

俺のその声に続いて各部隊に作戦開始が伝えられた。

命令が下された後、戦艦からの砲撃が行われた。
各戦艦の主砲からは1門につき5発ずつ、戦艦15隻が存在する。

金剛 霧島 80発
ビスマルク テイルピッツ 80発
ヴァンガード 40発
リシユリユ 40発
リットリオ ローマ 90発
長門 40発
日向 60発
クイーン・エリザベス ウォースパイト 80発
ラミリーズ 40発
ネルソン 45発
デューク・オブ・ヨーク 50発

以上のようなので、合計すると645発にもなる。
これほどの砲弾数が摺鉢山とその周辺に叩き込まれるのだ。
普通ならば、敵に同情するのだが敵の地下要塞はこれぐらいではビクともしない頑強さを誇る。恐らくだが砲撃は殆ど意味を成さないだろう。

各部隊が前進を開始した5分後。

一番最初の戦闘開始の報告が上がって来た。

敵はどうかやう摺鉢山周辺の防御を完全に固めているらしく、敵防御陣地は相当に堅固らしい。

各部隊が携行している迫撃砲程度では崩すのに相当時間が掛かるだろう。

「敵の防御陣地を1つ突破するのに1日掛かるとは、敵も最後の総力戦という事か……」

「凄まじいまでの抵抗を受けているようです。あちらこちらで白兵戦まで発生しているらしく……」

前進を開始してからとつとつに1週間が過ぎていると言うのに、前進出来たのはたったの200mそこらだった。

なにしろ防御陣地を無数に構築してあるし、全戦力を集めているものだから深海棲艦部隊からの抵抗と言うのは、筆舌に尽くしがたいほどの猛烈な抵抗らしい。

しかも白兵戦を仕掛けてすら来るのだ。

通常ならば弾切れを起こしたり人員の消耗が激しい場合は後退して他の部隊と交代する。

しかも敵はまだまだ兵力的には余裕がある筈なのだ。

そうなれば、こちらと同じように部隊を交代させながら戦えば恐らくだがもつと長期間戦い続けられる筈なのだ。

だがそれをしないという事は何かしらの理由がある筈。

「どうして敵は、後退して補給を受けない……？ どうして態々白兵戦を仕掛けてまで戦う……？」

「何が理由で、こんな戦い方をするのでしょうか？ 敵の戦力的に考えて普通ならば、消耗したら交代するなりすればいいのに……」

あまりにも無茶苦茶な戦い方を仕掛けてくるものだから、異常なのでは？ という事で陸軍の指揮官達も集めての会議を開く。

だがどうやったって結論は出ることは無くただただ平行線を辿るだけだった。

会議から更に1週間後が過ぎたが、未だに前進出来たのはたったの500mほどだった。

それでも前線將兵達が命を懸けて、自身の命と引き換えに進んだ500mだ。

決して馬鹿には出来ない。

「やはり、相当の抵抗が続いていますね。このままでは摺鉢山に到達するまでどれほどの時間が掛かるか……」

「まだまだ余力はある様だな。寧ろこっちの部隊が疲弊している。流石に2週間もぶっ続けで戦闘と陣地構築を続けてはしようがないとも言えるが……」

既に、こちらは余りの抵抗によってかなりの損害を負っていた。

なにせ各師団は最低でも連隊規模の死傷者を出しているほどののだ。

それでも慎重に進んでいるお陰で今までよりはずっと被害は小さい。

今までは師団の殆どが死傷する戦いだったのだから比べるまでも無い。

それから更に1週間が経った。

前進と後退を繰り返しては進む。

3週間で凡そ650mほど前進したがそれでもまだ摺鉢山の麓に到達するには至っていない。

麓まであと300mはある。

しかしここで、思わぬ敵の総攻撃が開始された。

「提督ッ！前線部隊から急報です！」

「どうした？」

「敵の主力部隊と思われる大部隊が総攻撃を開始した模様です！」

「なっ!?!ここにきて総攻撃だ?!」

「どういう事だ!?!」

何故このタイミングで総攻撃なんて掛けて来るんだ!?!

普通なら最後の最後まで徹底して防御に務めた方が絶対こちらの戦力を削る事が出来るしあちらも無駄な兵力消耗をせずに済むのにどうしてなんだ!?

「攻勢中止だ!一時防御陣地に後退!防御に務めろ!何としてもその陣地を守れ!押され始めたらそのままそこを突破口に総崩れになるぞ!」

「兎に角情報を寄せせ!前線に後方の師団を回せ!」

指示を飛ばす。

後方で陣地構築を行っていた師団を大急ぎで最前線に回す。

だが全部隊が移動を完了するのに最低でも数時間は掛かる。

それまでは最前線の師団だけで踏ん張って貰うしかない。

「各空母に無線を送れ!大急ぎで流星に6番を括り付けて支援に当たらせろ!烈風もだ!」

「は、はっ!」

そう指示を飛ばすと信濃を除いたそれぞれの空母の格納庫内で流星を優先し6番(60kg爆弾)の装着作業を大急ぎで進めていく。

「飛龍!発艦は何時になる!?!」

「一番機は10分あれば発艦出来るよ!」

「急がせろ!後方の師団が前線に到着するまでは航空隊の支援で何とか持たせるのだ!」

飛龍に母艦航空隊の指揮を任せ、出来るだけ出撃を急がせる。

俺はと言うと兎に角対策と総攻撃を行った理由を考える。

「どうして、ここに来て総攻撃なんかを仕掛けてきたのでしょうか?」「分からん……。前線から情報が回ってこない限りはどんな判断も下せん。兎に角前線崩壊を防ぐ為に補給と増援を送り込まねばならん。艦砲射撃は……。無理か」

「はい。前線の部隊と敵部隊の距離が近すぎます。戦艦にしる巡洋艦にしるこれでは友軍を巻き込んでしまいます。戦艦にしる巡洋艦

艦砲射撃と言うのは、陸軍部隊や海軍特別陸戦隊が装備する野戦砲であるラ式15cm榴弾砲と比べると威力は段違いだ。

この15cm砲と言うのは通常ならば艦艇に搭載される中口径砲

だ。

しかも海の上ならば艦艇に搭載されているから移動に苦労はしない。

だが陸上ともなるとそうはいかない。

だからこそ歩兵師団はそれよりもずっと小口径の砲を装備しているのだ。

艦艇に置いて、駆逐艦の装備している12.7cm砲と言うのは大したことは無い。

駆逐艦同士の砲撃戦ならばそんなことは無いのだが、駆逐艦と戦艦で戦った時、12.7cm砲では艦上構造物を破壊することは出来ても弾薬庫にある砲弾全てを使っても沈める事は叶わない。

だが、12.7cmと言う大きさの砲は陸戦において絶大な威力を発揮する。

何しろ戦車に搭載されている砲ですら6号戦車の8.8cm砲が精々だ。

12.7cm砲を戦車に積もうなんてしたら自重で地面に沈みかねない、機動力もへったくれも無い超重戦車になる。

だが海の上では、浮力と言う概念が存在する限りはデカイ主砲を積むことが出来る。

最たるものは大和型戦艦の46cm砲や、どうして研究しているのか分からない51cm砲なんてものである。

凄まじい物だとドイツが80cm砲搭載戦艦を計画していたらしいなんてものすらある。

これらの砲は対艦攻撃と言う観点に置いては最低でも複数発の命中弾を得ないと敵艦を撃沈させるには至らない。

だが、陸戦では全く違う。

陸地を沈めるなんてことは出来ないが、戦艦の様に分厚い装甲で覆われているデカイ艦に向かって撃つのではなく、精々が個人で携帯できる小口径弾を防ぐ程度の鉄板しか装備することが出来ない。

そんなもので最大46cm砲の砲弾片や爆発の威力を防ぐことなんて到底出来ない。

12・7cm砲弾だって無理だ。

そんな、陸戦では通常使用されることが無い大口徑砲をポンポン撃ち込めるのは敵しかいないからだ。

砲弾の殺傷有効範囲内に味方が存在する場所なんかは威力が高く、殺傷範囲が広い砲弾を叩き込めばどうなるかは火を見るより明らかだ。

そうなる可能性が確実な以上、戦艦に砲撃支援を頼むことは出来ない。

唯一の頼りになるのは、前線部隊が装備している迫撃砲などだがそれでは広範囲を一気に吹き飛ばして敵を一網打尽にすることは出来ない。

だが、航空機ならばそれが違ってくる。

砲撃よりもずっと正確に狙った場所に爆弾を落とせるし、機銃掃射を加えられる。

爆弾にも種類があるから適切な威力の爆弾を選ぶことが出来る。

しかも今回使用する6番だとしても対艦攻撃を行う上では不足だが対人攻撃と言う観点から見れば侮り難い威力がある。

その気になれば密集した小隊程度ならばたった1機の烈風か流星で殲滅する事だって十分に可能だ。

使わない手は無いだろう。

「提督、一番機が発艦準備完了したよ！」

「艦首風上に向け！」

「艦首風上に向け！宜候！」

飛龍から報告が上がって来た瞬間に艦種を風上に立てさせる。

それが終わるとすぐさま次の命令を下す。

「発艦始め！」

発艦始めの旗が振られると、飛行甲板に上げられた流星が1機飛び

立って行く。

「そのまま準備が完了した機から発艦させろ！空中集合は無し！爆弾を落としたらそのまますぐに母艦へ帰投！次に備えさせろ！」

矢継ぎ早に指示を飛ばして行く。

これで、なんとか凌ぐことが出来れば良いんだがな……

第39話

深海棲艦の大規模な、それこそ総攻撃と言っても良い程の攻撃が始まってから既に一時間が経っている。

継続的な烈風と流星の爆撃支援や物資の空中投下によってどうかこうにか前線は持ち堪えてはいるものの、それもやはりギリギリ、一歩間違えれば戦線崩壊を起こす可能性がある。

一か所でも防御陣地を食い破られれば、橋頭保の確保すら危うくなるほどだ。

「提督、現状を説明させていただきます。先ず、敵部隊の規模は凡そ6万から8万程度で敵の残存兵力のほぼ全てがこの総攻撃に参加しているものと思われます」

「全戦力を投入して、最後の賭けに出たという事か」

「いえ、それがどうにも賭け、と言うにはおかしいのです」

「おかしい？何がだ？」

「敵の発砲する回数が極端に少ない、と報告が上がって来ております」
「発砲回数が少ない、だと？こんな大規模な攻撃を仕掛けてきてか？そんなこと有り得んだろう。何かの間違いではないのか」

「はい、前線のほぼ全ての部隊から連絡を密に、と言う指示に従って上げられてきた報告ですので、間違いはないかと。1つや2つの部隊ならばまだ間違いの可能性の方が大きいと切り捨てる事も出来ましょう。ですが交戦中の部隊のほぼ全てからの報告、となるとそれはもはや疑いようも無い事実です」

「……そうだな。では、何故そこまで敵の発砲が少ないのか、理由を予測出来る者は居るか？」

そう、俺が問いかけたとき次席参謀が手を挙げた。

本来であれば主席参謀が発言をするべきではあるのだろうが、そん

なまだるっこしい事をする必要は無い。

人にもよると思うが、俺は上下関係にとらわれず思った事を口に出して意見を述べてくれる部下こそが真に必要なだと考えているからだ。

俺は直ぐに次席参謀に意見を訪ねた。

「次席参謀、意見を聞かせてくれ」

「はい、私としてはかなり確証を持っていますが皆様はあくまでも推論である、と言うだけに留め置いてお聞き下さい」

「分かった」

「恐らく、敵は弾薬を殆ど使い切ったのではないか、と考えます」

「ふむ、その理由は？」

「理由は今までの敵の、我々に対する攻撃の激しさと頻度です。幾ら無尽蔵と言えるほどの戦力を有する深海棲艦と言えども砲弾薬や燃料の補給、と言うものからは今までの戦いを通して見ても逃れられませんが。それを考えると補給も無く今まで、一時とは言え橋頭保の確保すら危ぶまれるほどの攻勢を仕掛けて来ていたのですから寧ろ砲弾薬が底を着いている、と考える方が極々自然なのではないでしょうか？」

「ふむ……」

確かに今までの攻撃の激しさと頻度を考えると次席参謀の意見には確かな説得力があるだろう。

本来、防衛側は水際での防衛を捨てた場合徹底した持久戦、ゲリラ戦を展開すべきだ。

理由としては防衛をしなければならない、という事はその辺り一帯の支配権、制海権や制空権を完全にとは行かずとも大陸での戦いならばまだしも太平洋の島々での戦いではそれら支配権を奪われている状況が殆どだからだ。

そんな状況下の中で、友軍艦隊や航空隊の援護や補給は到底望めるものではない。

上陸を許した状況である事を考えると、既に友軍艦隊は敵艦隊と戦闘を行い、そして負けている。

必ずしも、とは言えないがそんな艦隊がすぐさま救援に来られる筈

が無い。

損傷艦の修理、新兵の訓練や再編などの艦隊の立て直しに要するのは我々で考えれば最短でも半年は掛かる。

それら諸々の事を考えれば、どうやったって防衛側が積極的攻勢を仕掛けるのは明らかに間違いなのだ。

確かに攻勢を掛けるべき時もあるだろうが、そんな機会は99.9%やっつて来ない。

ならば、味方の救援を信じて1分1秒でも長く持久戦を組織立って継続し、敵に出血を強いるのが最良の策と言えるだろう。

特に、島嶼帯で戦う事が主な太平洋戦線はどの方面のどの島で戦うにしても海を渡らなければならぬ。それは深海棲艦であっても同じだ。

陸地であればまだ幾らかの補給を行うために敵の目を欺く手段はあるだろうが周りを海に囲まれた孤島ばかりの敵に囲まれた島に補給を、それも全部隊が満足に食って戦える物資を送り込むのは殆ど不可能だ。

潜水艦や爆撃機による夜間強行補給であったとしても、運べる量は1隻当たりの輸送船と比べると高が知れる。

何より、制海権も制空権も奪われていては夜間と言えども困難だ。しかも、潜水艦による補給が成功する為の絶対条件として、最低でもすぐに身を隠す事の出来る場所があり物資を揚陸するに支障無い面積の海岸、若しくは河口から島の奥まで通じる河川がある事が条件だ。

これらさえあれば、潜水艦と言えど極貧も良い所だが最低限、持久戦を行うだけの物資は運び込める。

河川があれば島奥地に撤退した部隊に、夜間と言えどもジャングルの密林内よりは断然危険だが小型の機械動力にしても人力で扱ぐにしてもボートの様なもので徒歩と比べればずっと迅速に安全に運び込むことが可能だ。

輸送機や爆撃機による空中投下も制空権が握られていては夜間でも相当危険が付き纏う。

なにせ、投下するのは結局の所、島の上空なのだから電探には察知されてくる方角は丸分かり、深海棲艦の電探ならば凡その高度ぐらゐまでなら探知出来る。

そうなれば後はもう簡単だ。

島の上空にタイミング良く吊光弾なり照明弾なりを投下、探照灯を撃ち上げたり灯火してしまえば大した面積の無い太平洋の島々の上空など簡単に照らすことが出来る。

昼間よりも明るいかもしれん。

そうなれば物資の投下地点の目印も下から照らされては光で照準が付けられなくなるだろうし一時的に視力を奪われるだろう。なんなら失明の可能性すら有り得る。

攻撃を加えるのは簡単だ。

照らされた敵機に目掛けて対空砲を撃つもよし、戦闘機を事前に発艦させて下から突くような形で迎撃するでもよしとなってしまう訳だ。

それらの包囲された島への補給の難しさを考えれば実行するほどのものではない。

だからこそ、徹底して持久戦やゲリラ戦を展開してこちらの損耗は最小限に留めつつ敵に最大限の出血を強いるのだ。

鼠輸送？

あんなもの、確かに前線将兵からすれば数少ない恵みではあるだろうが到底、補給計画も考える事のある俺としては輸送、などとは言えない。

結局のところ鼠輸送とは正規の手段、輸送船が無く護衛艦艇も無い、状況で輸送が出来ないからやらざるを得なかった苦し紛れの策ではない。

今後俺がそれを行わざるを得なくなる状況が必ずしも無い、とは言えない。

それを言うのは余りにも連合艦隊を預かる前線最高指揮官として現状、戦況を理解せずに放つ無責任な発言だからだ。

それら考えると、本土の政治家や陛下の傍で甘い汁ばかりを吸っている奴らは本当に邪魔でしかない。

無駄に前線を押し上げる、他国に艦隊の派遣を、などと声高らかに叫ぶがそんな余裕は無い。

作戦にも口出ししようとするし、『餅は餅屋』と言う諺を知らないのか？無知な奴が立てた作戦なんぞどんな奇跡が起きようとも成功するわけがない。

よしんば成功したとしても、それは作戦が良かったのではなく前線将兵がどうかこうにか腕ぎ取った勝利だ。

作戦を立てるならば、如何に兵の損失を少なく、そして敵にどれだけ多くの出血を強いりつつも勝てるか、という事を念頭に考えなければならぬ。

本当に怒りで殴りそうになったのは、無茶苦茶な作戦を立てて、俺が補給計画はどうするのか、と聞くと、

「そんなものお前達でどうにかしろ。それが仕事だろう」

となんとも思わずに言い放たれた事だ。

流石の市木大将も相当頭に來たのか、俺が怒鳴る前に怒鳴っていた。

それで、作戦を成功全責任はする事が出来なかった全責任は軍にあると言われたら溜ったもんじゃ無い。

今の日本陸海軍には、先に説明した作戦立案すら出来ない程に余裕がないのだ。

確かに南方方面を奪還したことで資源は日本本土に送ることが出来る。

だが、どれだけ資源があつたとしても兵士が居なければ艦は動かせず、砲も撃てない。

作戦を成功させたとしてもこちらが被る被害は甚大で、立て直しが可能なのも辛うじて、と言うだけで薄氷を踏み進めるほどなのだ。

それを理解もせず間断ない攻勢を、と言われても無理に決まっ
てる。

確かに文民統制、所謂シビリアン・コントロールは必要不可欠であ
ろう。

軍とはどこぞの誰かが言ったように国家が有する絶対的な暴力装
置であるからだ。

狂暴な犬、それこそ狼やライオンを枷や鎖無しで檻から解き放つ大
馬鹿者がこの世界のどこにいたと言おうのだ。

まあ、非常識な連中はするだろうが……。

それが満足に行えなかったからこそ、かの大戦で軍部が暴走したの
だ。

軍とは、国家の独立と平和を保つ為の手足であると同時に、理性あ
る脳みそともいえるべき制御機構が無ければそれはただの殺戮マシー
ンにしかない。

一流の権力者の目的とは、その持てる権力で何を成すか、という事
を考えるものだ。

自称一流の奴らは何処まで行っても権力を保持し続ける事自体が
目的であって、そしてその手段しか考えない二流でしかない。

いや、無意味な犠牲を払ってまで権力を保持したいと考えているの
であれば三流以下の害悪、そもそも権力者に値しない。

当然、現在の日本の権力者と言える人間は明らかに、三流以下の害
悪である。

俺は俺の事を一流とは絶対に言えない。

何故ならば海軍に入ったのだから結局はこの世界における戸籍も
身分も無い自分の保身の為だったからだ。

それに下手に俺が海軍を離れば馬鹿どもがどんな暴走をするか
は目に見えているからだ。

それでも中代大将や広野中将が居てくれればまだ、マシンではあるだ
ろうがそれでも悪夢でしかない。

そうなれば地獄を見るのは、深海棲艦に対して全く戦う術を持たな

い国民と、そして俺の部下達だ。

そんなことになるぐらいならば、最低でもこの連合艦隊司令長官の席を離れる訳にはいかない。

軍は政治家の私兵ではないのだ。

話を戻そう。

補給が出来ないのであれば、深海棲艦ならば艦隊がその無尽蔵ともいえる戦力で攻撃を仕掛けられるだけの準備を整えるまで持ちこたえればいいのに、確かに硫黄島の敵兵は死に物狂いともいえる程に毎日毎日攻撃を仕掛けて来ていた。

そう思えば、明らかにおかしい。

それに、あれほどの攻撃を仕掛けて来ていたのならば各種物資が尽きていてもおかしくはない。

12万もの兵士を戦わせるだけの物資の備蓄があつたとすれば、それが8万〜7万に減つたと考えると、その失つた兵力に回すはずだつた物資を回せるから1、2か月は更に持ち堪えられる。

態々兵力も物資も無駄に使う、あんな無茶苦茶な攻撃を仕掛ける必要性が無いのだ。

それがただ一、二度程度ならばまあ出来なくもないかもしれないが毎日毎日昼夜問わず攻撃を仕掛けているのだから当然、物資は尽きるに決まつてる。

更に付け加えて言えば、あくまでも予想でしかないが我々が行つた艦砲射撃や爆撃によつて敵の物資集積所を吹き飛ばされていた、と考えると更にあれほどの攻撃を毎日行つていては遠からず全ての物資が底を着く。

「理由も大事だが今一番に大事なのは兎に角、敵の攻勢を凌ぐ事だ。航空隊には交代で支援に当たらせる。夜間は照明弾を撃ち上げて視

界を確保するのだ」

「照明弾は敵にも視界を与える事になりますが」

「敵は発砲してきていないのだろうか？ならば一番に恐れるのは白兵戦に持ち込まれて泥沼にされてしまう事だ。近づかせずに撃破出来るのならばそれに越したことは無い」

「了解しました。直ぐに全部隊、全艦隊に通達します」

俺の命令により、徹底的に支援を行う事となった。

後方にも現れてきているし、対応は難しいが勝たなければ硫黄島から追い出されてしまう。

「隊長！新手です！」

「なんだと!? ついさつき一個大隊を殲滅したばかりなんだぞ!」

「敵戦力、一個大隊と見積もられる！」

「弾薬の補給は!?!」

「まだ終わっていません！」

「クソ！仕方が無い！総員着剣、白兵戦用意！」

「敵、前方60mに接近！」

「撃てる奴は撃て！出来るだけ近づかせな！」

とある前線ではつい数十秒前に最初の敵部隊を撃破したばかりだと言うのに新たな敵部隊が、それも先程と同等程度の部隊が現れた。

つい先ほどまで戦っていたから当然、弾薬は消費してしまっているし、それぞれの兵士は空中投下による補給で送られてきた簡易物資備

蓄所から補給を待っている状態だった。

中にはこの間に食事を済ませてしまおうと缶詰に手を付けようと蓋を開けたばかりの者すらいた。

そこに新手である。

当然、混乱する。

それでもどうにかこうにか戦闘準備を整え、迎え撃つ。

元々、Stg44は銃剣を着剣出来るようには設計されていなかったが元来白兵戦を行う陸軍としては余り宜しくなく、着剣出来るように強度設計を見直し、着剣出来るように改造を施した。

とはいえ、三十八式歩兵銃ほど強度は無い。

三十八式歩兵銃は、刺突を行う上であの形状はとても理に適っている。

Stg44は最初からそう設計されたわけではないので仕方が無い。

それでも改造を施されたのには、白兵戦になった場合に、態々ナイフを取り出す、なんて余裕は無くしかも面倒、と言う理由がある。

最初から着剣しておいてしまえば少なくとも白兵戦の初動に置いて決定的な遅れをとる事は避けられる、と言う理由でこのように改造された経緯がある。

あちらこちらでは、戦闘の様相は様々だ。

「これで最後の弾倉だ！」

「弾が無い！弾が無い！」

「補給係の奴、何やってやがんだ!?!このままじゃ本当に白兵戦をしなけりゃならなくなるぞ！」

「遅れました！」

「遅せエ！早く寄せせ！」

紙一重で補給が間に合い白兵戦を避けられた部隊もあれば。

「クソ！全員白兵戦用意！突っ込んでくるぞオ！」

「うおおお!!」

「畜生！補給係の奴ら戦闘が終わったら一発殴ってやる！」

「ガア!?!」

「死ねッ！このバケモンが！」

補給が間に合わず白兵戦を挑まれる事になった部隊もあった。

—————

敵の大攻勢が始まってから、丸々2日が経った。

それでも硫黄島と言う狭い場所での8万もの大軍を投入した総攻撃だ、そう1日2日程度で終わるわけがない。

寧ろ、これほどの規模ともなれば最低でも5日は続くだろう。

「提督、一部の防御陣地が突破されています！」

「すぐに後方の防御陣地に後退させろ。兎に角、耐え続けて貰わねばならん」

悲鳴のように上げられてくる報告に対して指示を飛ばす。

前線の状況は、敵が殆ど発砲しないとはいえ敵の数に押されて芳しくない。

空中投下による補給は行き届いてはいるが、戦闘の混乱によってそ

それを適切にそれぞれの兵に行き渡らせることが出来ていない状態が
あちこちの部隊で問題となっている。

その問題によって白兵戦に持ち込まれてしまっている部隊が数
多い。

白兵戦になれば数の差がモノを言う。数の暴力、とはよく言ったも
のだ。

それでも、何とかして持ち堪えて貰うしかない。

さらに3日が経った。

未だに敵の攻勢に陰りが見える事は無く、前線のあちこちで爆撃、
銃撃戦、白兵戦問わず激しい戦いが繰り広げられている。

8日目になった。

前線の補給係も、慣れて来たのか弾薬の補給が遅れる、間に合わな
いと言う事態が減ってきたようだ。

それに伴って白兵戦の頻度が大きく減少しつつある。
ただ、未だに敵の攻勢に陰りは見えない。

14日目。

漸く敵の攻撃に陰りが見えて来た。

そろそろ戦力に限界が来ているのか、それとも息切れを起こし始め
ているのか。

どちらにせよ、今はまだ徹底して防戦に努めているが、この敵の勢
いの落ち込み方であれば数日以内にこちらから打って出ても問題無
いかもしれない。

19日目。

撃破した敵の数が、凡そ7万5000ほどにまで登った。

それでも敵は攻撃を仕掛けてきてはいるが今では敵との戦闘は殆ど戦闘と呼べるものでは無く、こちらが一方的に射撃をして殲滅をしているような状態だ。

それに伴い、こちら側が攻勢に転じる事を決定。全部隊に通達をした。

その命令が出たのは朝8時頃の事であったがその日の内に、敵の殲滅が完了した、との報告が上がって来た。

その報告と同時に残敵掃討に移る事になった。

あれだけ苦労していたのに、こんな終わり方をするとは思っても居なかった。

何しろ、こちらは最低でもあと2、3か月は猛烈な抵抗を受けるだろうと予測していたのにこんな終わり方をすれば肩透かしを食らったような気分である。

まあ、早く終わり、想定よりもこちらの損害が少なかったから喜ぶべきなのだろう。

戦闘終了後、2個師団を硫黄島の守備に置き、飛行場の修理と整備を行って連山がマリアナ諸島に対する爆撃に行く途中や帰りに何らかの故障や損傷によって不時着しなければならなかったときのために不時着が出来る程度にまでは仕上げるつもりだ。

それに伴って工兵隊を送り込み、北飛行場を優先して修理を行っている。

と言うのも、南飛行場は摺鉢山が近く、飛び立つ方向や着陸する方向によっては連山だと摺鉢山に激突、若しくは掠る可能性があるから

だ。

それを鑑みて、硫黄島の飛行場は戦闘機専用となり、北飛行場のみ連山の不時着滑走路を兼ねる事となった。

硫黄島に配備されない残りの師団は日本本土で再編と訓練を実施、次の作戦に備える事となった。

艦隊は数カ月ぶりに日本本土へ戻り、全艦艇が長期間の作戦行動で、簡易な整備はしていたとはいっても機関部などは碌な整備が行えていなかったので大至急、整備を行う事になっている。

必要とあらば入渠して機関や主砲などを総取り換えする事も視野に入れていたのだが、敵艦隊との戦闘行動が全く生起しなかった為に全力で機関を回す事が無かったからそこまでやらなくても済みそうだ。

そして、俺は相変わらず膨大な量の書類に追われている。

しかも、この書類とも格闘しなければならぬのにこの4週間後に南方方面と南西諸島方面、特に沖縄本島に対する視察が入っているのだ。

その際に、第三航空戦隊丸々と第二戦隊の戦艦3隻が態々俺を護衛する為に出張る事となっている。

選ばれた理由としては、一、二航戦が俺の視察を行うその期間に対抗演習を行うからである。

万が一、俺が指揮を執ることが出来ない状況下である事と、敵よりも戦力が劣っている、と言う想定で演習を行う事、となっていたのであるならばちょうどこの期間に入れてしまおう、という事だった。

第二戦隊の戦艦4隻に関しては、戦力が敵よりも少ない状況を創り出すために引き抜かれた事と、もう一つ理由がある。

それは、遠洋航海訓練を行うためだ。

確かに南方方面や今回の硫黄島奪還に置いて長期間遠隔地で経験を積んだとはいえ、元合同艦隊所属の艦全てに言えるがその経験は元々日本海軍所属の艦娘や妖精達に大きく劣っている。

そこで日本本土の防衛や各地に対する防衛の為に全艦とは行かな

いまでも、戦艦4隻だけでも連れて行くことになった。

俺の予定としてはこんなものだ。

ともかく、硫黄島奪還作戦が成功して良かったものだ。

第40話

硫黄島奪還から早いもので既に一週間が過ぎていた。

その間、俺は何をしているのかと言うと相変わらずと言って良い程に書類仕事に延々と追われ続けている。

そして、その書類の中でひとときわ厄介と言えるものが一つ。

新たな泊地を構築するもの、と言う書類だった。

これには理由がある。

寧ろ何の理由も無く泊地を新たに作るなどある訳が無いのだが。

と言うのも、現在軍艦やタンカーなどの全長が250mを超す大型船舶が停泊、使用可能な大規模港湾施設は残念ながら呉鎮守府辺港と、パレンバン、バリクパパンだけだ。

それ以外の港は、資源や物資の積み込み荷下ろしこそ出来るが恒久的に停泊が出来る場所かどうかと聞かれると頷けるものではない。

神戸港や大阪港は空襲によって打撃を受けており、復旧こそ進めてはいるが実際は石油や資源を運ぶためのパイプラインや道路程度だ。

護岸工事の方は最低限、積み込み荷下ろしが出来る程度にしか復旧が進められていない。

そして、泊地として軍のみが使用出来るものは柱島泊地のたった一か所だけしかない。

この、泊地がたった一つしかないと言うのは大問題だった。

言ってしまうえば、泊地と言うものは陸軍で言う所の駐屯地や、前線基地の様な意味合いがある。

そして、太平洋と言う複数の戦線がどうやっても発生してしまう戦場を主としている我々日本海軍にとってそれは余りにも大問題過ぎるのだ。

柱島泊地しか艦艇の停泊場所がない、という事は出撃の都度、毎度

毎度日本から2000kmも離れた場所に行って戻って来なければしつかりと腰を落ち着けて休憩を取ることが出来ない、という事だ。今現在、日本陸海軍が主戦場として戦力を集中しているのは南方方面、インドネシアやフィリピン方面などだ。

北方は殆ど脅威らしい脅威と言うのが棲巢程度しか無く、こちらの深海棲艦の積極的攻勢と言うのは全くと行って良い程行われ無い。

理由として推測できるのは、冬の北太平洋やアリューシャン列島に面するベーリング海などはそれはもうとんでもないぐらいに荒れる。

ベーリング海でのカニ漁と言うものを知っている人ならば分かるだろうが、台風並みに荒れる海がほぼ毎日続くのだ。

駆逐艦ならば最悪、高波に横から押されて転覆する可能性すらあるし、何よりも恐ろしいのは極寒の暴風によって波や巻き上げられた海水が凍り付いて船の重心を簡単に崩してしまう事だ。

氷と言うものは恐ろしく重量があるので、柵などに凍り付いてくっ付いてしまうと、大型艦ならばまだいいが駆逐艦などともなると簡単に重心が崩れる。

想像しやすいのは魚雷攻撃だろう。

あれは喫水線下に穴を開けて海水の流入によってバランスを崩す事によって沈める戦法だ。

そのの喫水線上と考えてくれればいい。

魚雷攻撃を食らって艦の水平を保つ事は、解決するのは注排水によってバランスを保つ事が出来る。

ただ、喫水線上の、それも氷となるとどうすれば良いのかなんて聞かれると人力によって砕く、と言う方法しかない。

これが漁船程度の大きさならば十分に可能だろう。

だが、軍艦、それも日本海軍の特型駆逐艦ほどにもなるとはつきり言ってしまうえば乗組員全員を動員したとしても満足に出来るものではない。

全員が全員参加出来る訳でも無い。

機関、艦橋、砲術などは少なくとも戦闘にすぐさま直結する部署であるから氷砕きなんて事はさせられないし、それ以外にも通信なども

無理だ。そうになると動員できるのは艦の3分の1の人数居るかどうか。

これで、特型駆逐艦や秋月型ほどの大きさを誇る駆逐艦であつたとしても、不眠不休で続けるのは無理だ。

しかもその後には戦闘が控えていると来れば、到底出来る訳が無い。

よしんばそれらが無い、アリューシャン列島以南の海域だつたとしても荒海を渡る事になる。

大型艦はまだ良い。だが小型、中型艦になると荒波にさらわれて引つ繰り返つてしまう危険性が余りにも大きい。

電探はそもそも大嵐で碌に機能しないし、なんなら故障の危険性がある。

通信だつて気象があれいては困難を極めるだろう。

更に言つてしまえば流氷、と言う問題もある。

タイタニック号、と言えばその危険性がどれほど大きなものか分かつてもらえるだろうか。

向こうは客船で、こちらは軍艦。

防御力に雲泥の差があると言つても、総重量数千トンほどの流氷とまともに衝突をしては戦艦と言えどもただでは済まない。

駆逐艦や巡洋艦であれば逆に潰されてしまうかもしれない。

大嵐のせいで緑な視界も確保出来ないし、そんな状況下で敵艦隊と戦闘、となつたら最悪の一言に尽きる。

それを考えると北太平洋戦線からの侵攻、と言うのは幾ら深海棲艦と言えども出来るものではないのだ。

だから海軍も陸軍も南方方面を主戦線と考えていてそちらへの攻撃や攻勢を行っている。

そして泊地の話に戻るとすると、確かに我々が奪還した領域内の南方方面には泊地が一つだけ存在する。

それが、リング泊地だ。

だが、現状このリング泊地は使用出来ない。

理由は以前にも説明したことがあると思うが、リング泊地に隣接するマレー半島やインドシナ半島を含む東南アジア全域を、我々は一切奪還出来ていない。

これが意味するのは、深海棲艦の支配地域である事。当然、艦艇が停泊するような場所は無いが飛行場などは数多く存在する。

そんな目と鼻の先にあるリング泊地に艦隊を停泊させようものなら連日連夜、時間を問わずの空襲に晒される事は必然だ。

そうなつては作戦もクソも何も無い。だから使用出来ないのだ。

バリクパパンやパレンバンの港湾施設だつて、スラウエシ島などから出撃してくる敵機の空襲を連日受けている。

震電や疾風による迎撃でその殆どを防げているとはいえ被害は0ではないし、艦隊を停泊させた場合に被害が無い、とは言いきれない。それらを考えると作戦前に無駄に精神を摩耗させる事になるから南方方面にある港湾施設やリング泊地は現段階では使えない。

だからこそ、それ以外で何処かに泊地を作らなければならなくなつた。

問題なのは、制約として南方方面には作れない事。

となると、南西諸島しかない訳なのだが、場所が問題だった。今現在、候補として挙がっているのは慶良間諸島だ。

ただ、これまた問題がある。

この慶良間諸島は今現在二式大艇を主力とする水上機を装備した部隊が配備されておりその数は二式大艇だけで52機を数える。

それ以外の水上機も居れば150機以上。

しかもこの慶良間諸島は条件が良く水上機の搭乗員などの訓練地にもなっている。

そんなところに艦隊を停泊させられるスペースがあるか、と聞かれると恐らくない。

となると、他に何処があるのか。

泊地として使用するには条件が幾つかある。

- ・海象条件が良く、静穏である事（波や海流が穏やかであること）。
- ・十分な面積と大型艦の停泊も出来得る程度の水深が確保されている事。

・海底の地質は錨が掛かり易いこと。

凡そこれら三つが要求される。

これら三つを概ね満たす事は相当厳しいものだ。

例を挙げるとすれば、コンスタンティノープル（イスタンブール）に面している金角湾やビクトリア・ハーバー。

日本であれば東京湾や大阪湾が条件を満たしている。

そして、南西諸島にこれらを求めるとなると相当限られてくる。

と言うのも珊瑚礁の存在があるからだ。

基本的に沖縄近海は遠浅である事が殆どで、そうでなかったとしても突出した大きな珊瑚礁がいきなり現れていたりする場合もある。

そうなる座礁の危険性がかなり高い。

と考えると沖縄本島近海にも適した場所は無い。

そして、別の候補地を探すべく会議を行っているのだが……。

「最低でも3個航空戦隊が停泊できるだけの面積を有していて、尚且つ水深もあつて波や潮流が穏やかな場所か」

「そんな場所があるとは、到底思えません……」

「俺だつてそうだ。だが探さなければならん。誰か、候補地を上げられる者は居るか？」

そう、聞いてみるが流石に今回ばかりは戦いの事では無いから誰も手を挙げられなかった。

調べているとはいえ、流石にそう直ぐに見つかる物ではない。

南西諸島の拡大地図を卓上に大きく広げて見ているが、どこか良さそうな場所はないものか。

探していると、ふと目が留まった。

「……………なんてどうだろうか」

「大島海峡、ですか」

俺が目を留めて指刺したのは奄美大島と加計呂麻島の間にある大島海峡。

この大島海峡は、典型的なリアス式海岸だ。

リアス式海岸という事は、それなりに水深がある筈なのだ。

恐らく、40m以上の水深は最低でもあると思われる。

戦艦や信濃ほどの大型艦でも停泊は可能だろうと思われる。

「ああ、ここならリアス式海岸でそれなりの水深もありそうだ。潮流は後で調べる必要があるだろうがそれは海上保安庁の過去の記録にある筈だ。それと比べれば容易だろう」

「調べてみる価値はありそうですね」

「となれば、早速調査を行いまししょう。測量船などの手配をしてしまっても宜しいですか？」

「ああ、頼む」

その後、すぐさま大島海峡の測量を行う事となった。

担当するのは海軍測量部。

本来であれば海上保安庁に依頼してもいいのだが、海上保安庁の所有する船は最低限沿岸警備が行えるだけの小型船しか存在しない。

過去、艦娘とその艦体、妖精が現れる前に圧倒的な兵力不足故に海上保安庁の巡視船を徴用、かなり無理な改造を施して戦闘艦艇として戦線投入を行った過去がある。

当然、無理矢理な改造に戦闘訓練をまともに受けた事が無いから無残な結果、となったのだが。

それ以降、海軍の艦の修理や資源を運ぶための戦時緊急増産型輸送船やタンカーを最優先で建造していたため今日まで大型の巡視船クラスは1隻も建造されておらず、海上保安庁は完全に沿岸警備を主眼としている組織に変わっている。

今更だが沿岸警備隊と言われた方が納得出来るほどだ。

当然、外洋航行が出来るわけではない。

しかも海上保安庁に勤務しているのは妖精では無く人間であるために深海棲艦に襲われた場合、一切の対抗手段がない。

となると海軍が護衛を出さなければならぬ訳だがそんな面倒な

事をするぐらいなら元々測量部も持っているし自前で護衛を用意出来る海軍が測量をやればいいだけの話だ。

測量部の担当である広野中将に連絡をして、測量部を出してもらう。

護衛に就くのは南方方面に輸送船団護衛を行うために丁度出航予定の第一護衛艦隊だ。

測量を行う測量船は出来るだけ早く測量を終わらせ、可能うならば泊地としてすぐに使用出来るようにしたので27隻ある内の20隻を測量船を投入する。

何しろ、大島海峡は長さ20km、幅2〜6kmもあるから1隻でチマチマ進めていたらいつ終わるか分かつたもんじゃない。

20隻で1kmごとの長さを担当するのだ。
そうすれば、早ければ数日で測量が完了するだろう。

一週間後。移動に3日ほど掛かったが測量自体は4日ほどで終了している。

結論から言ってしまうえば泊地として使用する事になんら問題無い、との事だ。

水深は50〜70mほどと十分な深さが確保されているし、潮流も海上保安庁の資料と照らし合わせても相当穏やかだ。

深海棲艦が現れる前は台風の際に避難海域としても用いられていたほど波や潮流が穏やか、と言えれば分かってもらえるだろうか。

しかも長さ20km、幅2〜6kmと十分な面積もある。

そして資料を幾らか漁ったときに判明したのだが、1920年から1945年までの25年の間、旧日本海軍の軍港として大島海峡内に存在する薩川湾が用いられていた、との事らしい。

しかも、戦艦大和や武蔵の停泊記録もあった。

とすると、かなり好都合な場所である、と言える。

この大島海峡が使用出来るとなると、相当好都合だ。呉からの距離は凡そ900km。

この距離を何らかの作戦時に南方方面までを短縮出来る、とする往復で1800kmもの短縮が可能だ。

となれば大体速力にもよるが数日の航海短縮となる。

作戦行動時に洋上生活を送らざるを得ない我々としてはその数日の短縮はかなり大きい。

その分、消費する燃料も抑えられる。

早速、資材を運び込んで護岸工事と燃料タンクなどの設備を建設する事となった。

流石に全てを、とは行かないから薩川湾と奄美大島にある瀬戸内町の港を使用する事に決定。

楽だったのは、戦時という事もあって島民が一人も居ない事だ。

居たとしたら島民を納得させるところから始めなければならぬし、自称平和主義者の反戦団体と言う面倒な連中の事もある。そうするとどれだけの時間が掛かる事やら。

今はそれぞれの島に守備隊として陸軍妖精が駐屯しているぐらい。

本土に近い島ならばまだしも、南西諸島を含む日本領土全域の島からは守備隊などの軍の妖精を除いて誰も居ない。

後々、とやかく言われそうではあるが戦時中なのだ、しかも同じ人間を相手にしている戦争ではなく深海棲艦と言う全くの未知の存在を相手にしている戦争だ。何よりも優先すべきはまず、勝って人類が生き残る事だ。

戦争が終わってからでも自然は幾らでも取り戻すことが出来る。

完璧なまでに破壊されない限りは自然と言うものは人間の手を借りずとも再生するものだ。

もし、破壊の原因が人間にある、と言うのならば再生の手伝いを少しばかりすればいい。

全てを手伝う、と言うのはそれは違う。

それはビオトープや植物園、動物園と何ら変わらない。

あくまでも俺の個人的意見だが。

さて、件の泊地だが名称としては特に変わった名前を付けられる事は無かった。

泊地の名前は、『大島海峡泊地』と名付けられた。

既に南西諸島と南方方面に対する即応性を高めるべく、そして輸送船団護衛任務に就いている第一護衛艦隊が進出している。

基本的な母港はどの艦隊も呉軍港、及び呉鎮守府と柱島泊地だが。燃料タンクなどが建設されるまではタンカーや輸送船を前進させて燃料補給や食料、水等の補給を行う。

第一護衛艦隊

第4航空戦隊

大鷹 神鷹 海鷹 龍驤 千代田

第四戦隊

戦艦

長門 日向 クイーン・エリザベス ウォースパイト ラミリーズ
ネルソン デューク・オブ・ヨーク

重巡洋艦

那智 羽黒 愛宕 摩耶 最上 キャンベラ ゴトランド デ・ロ
イヤル

軽巡洋艦

名取 鬼怒 天龍 龍田 神通

駆逐艦

花月 涼月 グレカール リベツチオ ジャーヴィス マエスト
ラーレ

東雲 白雲 浦波 狭霧 子日 有明 海風 江風 峯雲 霞

藤波 沖波 清霜 白雲 有明 長月 荒潮 親潮 黒潮 竹 桃

椿 楓 樺 楠

前進したのは以上の艦隊だ。

基本、護衛艦隊は大島海峡泊地で輸送船団と分離する。

それ以降は奄美大島や喜界島、それ以北にある航空隊が護衛を担当する。

ただ、輸送船団の規模によっては護衛艦隊の数が上下するし、豊後水道付近まで護衛を行う事もある。

理由としては、たった数隻の輸送船の為に戦艦を4隻も出してしまふと採算が合わないからだ。

例えば5隻の輸送船団だとしてしよう。

これでは、護衛中に被った被害と、消費した重油や航空燃料の採算が合わなくなってしまふのだ。

ここまで少ない数の輸送船団ともなると、護衛に就けるのは空母1隻と軽巡を1隻、駆逐艦を8隻。

空母の護衛の3隻と軽巡を旗艦として駆逐艦5隻を擁する水雷戦隊が1個。

これで十分なのだ。

ただ、我々が送り出す輸送船団は襲われたときに出来るだけ被害を少なく、分散させるために30隻以上の輸送船やタンカーとなる訳だ。最大で50隻を超える大規模輸送船団になる事も、極稀にだけあるのだ。

それを、たったの十数隻の護衛艦隊だけで守るのは困難だと言えるだろう。

硫黄島を奪還したことによって、南方方面とそちらに向かう航路に対する深海棲艦の圧力が大きく減少している。

理由は、潜水艦隊による偵察で得られた情報を基に推測しただけなので確証はないが、どうやら深海棲艦はマリアナ諸島と我々が奪還していない南方方面の島々の防備を固めているようなのだ。

事実、定期偵察任務で出撃した二式大挺や連山が、撃墜されて未帰還となる事もここ最近数多くなってきた。

偵察で得られた情報によると、陸上戦力の増強や飛行場の増設、部隊の増援がかなり目立って来ている。

マリアナ諸島は連日のB―29の損害+防空用の戦闘機などの増援だ。

よくもまあ、毎日300機を超えるB―29を送り込んでこられるものだ。

しかも損害は護衛戦闘機が居ないから200機を毎回超える。震電による迎撃はほぼほぼ一方的な戦果を挙げている。

ただ、こちらも無傷とは行かない。防衛火器によって十数機程度の撃墜機と、それに伴う戦死者が出ている。

しかも、ここ最近になって来て大陸方面から九州や中国地方、四国地方にB―29が襲来し始めたのだ。

それを意味する事は、深海棲艦がB―29が日本本土を射程に収めつつこちらが手を出せない場所まで占領したという事。中国政府や軍が更に奥地に撤退したという事だ。

正直当てにしていなかったとはいえ、これは何でも予想外過ぎる。しかもどちらからも毎日送り込まれていて、日に2度の迎撃を行わなければならない。

搭乗員は勿論、整備兵や関連する将兵全体に疲労が広がっており早急に震電装備の部隊を増設しなければならない。

出撃部隊を交代制にしようものなら、幾らターボジェットエンジン装備の震電と言えども今の様に大戦果を挙げ続ける事は出来なくなるだろう。

マリアナ諸島に対する連山からの爆撃も、増援として送り込まれた敵戦闘機の数有余にも多すぎる為に見送られている。

200機の連山を用意しても、迎撃に上がってくる敵戦闘機は同数かそれ以上に上るのだ。

— どうやったって全滅は免れない。

我々は深海棲艦の様に無尽蔵に戦力を生み出せる訳では無いから1機の機体、1人の兵士を大切にしなければならぬ。

勿論、無尽蔵に生み出せるからと言って大切にしないと云う訳では無いが。

もし作戦として実行すると言っているのであれば、空母をマリアナ諸島近海まで前進させて護衛戦闘機を就ける必要がある。

ただ、そうなるともう空母機動部隊でマリアナを叩けばいいではないか、と言う話にもなつて来てしまう。

マリアナ諸島を占領する作戦ならばまだしも、ただ一度の作戦の為に空母どころか艦隊そのものを轟沈の危険に晒す訳には行かない。

我々の最終目標は、深海棲艦に勝つ事。

提督と言う立場になれる人間が今後現れる確証も無く、寧ろほぼ0と言って良い程の低確率だ。それを考えると、少なくとも俺が生きている間に勝たねばならない。

100歳まで生きる事が出来ると考えても、あと72年ほど。

実際に前線に出て戦えるかどうかを考えると、あと50年ほどだ。

お世辞にも長いとは言えない。

ただ、俺達にも何も手立てが無い、と言う訳では無い。

と言うのも、深海棲艦の太平洋戦線における戦力の立て直しや補充戦力、補給物資を生み出していると考えられるのが、ハワイ諸島だか

らだ。

これもただの憶測では無く俺がこの世界に来る前の偵察や、来た後の潜水艦隊による長距離偵察から得られた情報だ。

このハワイ諸島を落としてしまえば、戦力の補充が利かなくなった深海棲艦は大西洋方面に撤退するか、我々と決戦を挑まなければならぬ。

ただ、問題なのはそのハワイ諸島をどのようにして陥落させるか、と言う問題だ。

太平洋の棲巣を一つ一つ潰して回ってもいいのだが、流石にそれでは時間が掛かり過ぎる。

一つの棲巣を落とすのに兵糧攻めから初めて、艦隊戦、上陸してからの陸上戦を考えれば硫黄島程とは言わずとも数カ月は掛かる。

そして艦隊の再建などを含めば、大規模作戦を行えるのは1年に1度が限界だろう。

それに、ハワイ諸島を攻略する前に最低限、戦争を安定して継続させるためにフィリピンを攻略しなければならぬ。

と言うのも、現状は問題が無いのだがフィリピンを深海棲艦の支配下に置かれていると日本本土と南方方面の資源地帯を結ぶ輸送航路が脅かされるからだ。

現在はスラウエシ島などからの敵機が殆どなのだがフィリピンからも少なからず襲来してきているし、本格的にフィリピンを拠点として通商破壊をされてしまうとスラウエシ島などからの敵よりもずっと甚大な被害を負う事になってしまう。

フィリピンには艦隊の停泊地として使える湾が数多くあるから航空機を使わずに夜間の水上打撃艦隊にやられてしまう事も想定される。

しかもフィリピンは過去に有人であった島や元々無人であった島を問わずに数えると凡そ7107と言うとんでもない数の島が存在する。

流石に部隊が展開できない程小さな島などもあるので全ての島に敵の守備隊が展開している訳では無いが、主要な島だけでも43島も

存在する。

それに加えて部隊の展開が行える島などを入れると、到底100などでは事足りない。

しかも推定される展開している陸上部隊の敵師団は5〜7個師団、最大14万人にも上る。

それらすべてを攻略するのに要する期間は軽く見積もっても2〜3か月。

こちらが投入しなければならぬ師団数は、それぞれの島を一つ一つ攻略して回る事を考えてもこちらでも最大で同数の7個師団は必要だ。

望めるならば10個師団20万人を投入したい所なのだが、流石にそこまでの戦力を用意出来ない。

南方方面や南西諸島に駐留している師団を引っ張って来ても、こちらの防備が薄くなるし、その間に深海棲艦が攻めてこないとは限らない。

更に言えば、この投入戦力の想定はあくまでもこちらがそれまでに艦隊や陸上部隊の損失が無かったと想定した場合だ。

もし、空母1隻でも失おうものなら攻略の難易度は跳ね上がる。

空母は第一護衛艦隊を入れても18隻しかないし、そのうちの6隻は搭載機数が30〜40機の軽空母だ。

鳳翔に至っては零戦を搭載していて、深海棲艦の機体性能差と考えると船団護衛任務は行えても、積極的な戦闘は行えない。

しかもこの4航空戦隊は上陸船団の護衛を行わなければならない。は第1、2、3航空戦隊の3個航空戦隊で戦わなければならない。

フィリピン防衛に出て来るであろう敵艦隊と敵飛行場の戦力を考えると、2000機なんて馬鹿げた数が冗談抜きで現実として立ち塞がってくるのだ。

こちらはパラワン島の基地航空隊の動員できると考えても1300〜4000機を投入出来るかどうか。

フィリピンを攻略しなければならぬ理由は、艦隊が全て作戦で出払ってしまうと輸送船団に就ける事の出来る護衛艦隊が無くなって

しまうからだ。

そんな丸裸の輸送船団を昼間の航空援護のみだけで日本から送り出せばどうなるか目に見えて明らかだろう。

更に言ってしまうえばフィリピンを奪還したとして、ハワイ諸島攻略に取り掛かれるわけでは無い。

まず、北回り航路を取るとすればミッドウェー諸島は確実に攻略しておかなければならず、南周り航路だとしたらマリアナ諸島、ジョンストン島を攻略しなければならぬ。

この2つの島、諸島はハワイ攻略を行う上で絶対的に必要となる。ミッドウェー諸島もジョンストン島も野放しで進めば途中でハワイに通報されるから奇襲も何も計画できなくなってしまうし、輸送船団が攻撃される。

そして確保しておく利点として、ハワイ攻略の後方支援基地、中継拠点としてどちらとも活用出来るからだ。

日本から、ハワイまでの長大な距離を中継拠点も無しに行えない。最低でも、ジョンストン島は放って置いて良いとして、ミッドウェー諸島だけは確保しておかなければならないのだ。

ミッドウェー諸島からハワイ諸島までの距離ならば連山で偵察、爆撃が可能だし事前に情報を集めやすいのだ。

解決する手段こそあれど、その手段を取るには最低でも2カ所の攻略を行い奪還を成功しなければならぬ。

ともかく、今は南方方面と南西諸島の視察を行わなければならないからそちらに注力しよう。

足りないものが無ければ送り込まねばならないし、地下陣地の構築が足りないとなれば増設しなければならない。

どちらとも、最低でもそれぞれの島で6カ月は持久戦を行えるようにしておかなければならない。

この6カ月さえあれば、一度艦隊戦に負けたとしてももう一度だけならば戦いを挑むことが出来る。

はあ、また帰ってきたら大量の書類仕事をこなさなければならぬのか……。

溜めさえしなければ楽なんだが数週間分ともなると尋常じゃ無い量だからな。

また、怒られないようにしないと。

第41話

つい先日、陸海軍の大まかな攻略、奪還地域の優先度の策定、今後の作戦方針などが決定された。

第一優先目標は、フィリピンの攻略、奪還だ。

理由としては、南方方面の資源地帯と日本本土を結ぶ資源輸送ルートへの安全を確保なものとするためだ。

目下、フィリピン、厳密にはフィリピンのバタン諸島と台湾の間にあるバシー海峡を通る航路だ。

このバシー海峡を通過する理由としては台湾海峡を通るルートだと、台湾海峡には深海棲艦の機雷敷設によって複数の機雷原が確認されているからだ。

下手に通れば触雷して、その混乱が更なる被害を被る可能性がある。

掃海をしようにも、平時であれば時間を掛けて一つ一つ確実に、安全第一で実施出来るのだが、戦時ともなるとそうはいかない。

機雷を除去するにはそれなりの手順があるし、ただ単純に見つけてそこに機銃弾を撃ち込めばいいと言う訳では無い。

そんな楽に出来るんだったらとつくの昔に台湾海峡は航行可能になってる。

しかも大陸方面には当然だが深海棲艦の飛行場が存在するし、沿岸砲台も確認されている。

ここを、何の護衛も無く掃海艇を送り込めばどうなるかは想像に難くないだろう。

ともかく、どちらの海峡を通るにしてもフィリピンからの通商破壊が本格的に行われるようになれば、どうやっても被害は拡大する。

それを防ぐには、一番手っ取り早いのがフィリピンの攻略、奪還なのだ。

大陸に兵を出すととなると今までの様に10個師団などと言う数の師団数では到底足りるわけがない。

今現在、各方面に展開する陸軍師団の数だが。

南西諸島が12個師団。

元々、攻略完了時から暫くは5個師団が駐屯していたのだが、南方方面との資源輸送ルートが出来たことにより各師団への装備の充足率や予備等が行き届き始めており、今現在は沖縄本島の守備を担当する5個歩兵師団と1個砲兵師団の計6個師団以外の6個師団は訓練中の師団だ。

と言うのも、通常の師団としての訓練は完了しているのだが、所謂上陸作戦などを行うための訓練を行っている師団、と言う訳だ。

南方方面、パラワン島3個師団、カリマンタン島12個師団、スマトラ島13個師団、リアウ諸島に2個師団
となっている。

全て合わせても精々が42個師団だ。

だが、大陸方面に兵を出すともなると、この倍、1000個師団では利かない数の師団数が必要になってくるし、その予備師団やそれら師団、各方面の師団や部隊、航空隊を維持するために必要な食料燃料武器弾薬を輸送する為には1000隻を超える数の輸送船が必要になってくるし、そもそもそんな数を揃える事は不可能、我々の輸送能力を超えているなんてレベルじゃない。
どう考えたってすぐに破綻する。

第二優先目標はミッドウエー諸島だ。

会議によって陸海軍はハワイ諸島攻略に置いて、北回り航路を取る事を決定。

だからこそそのミッドウエー諸島だ。

このミッドウエー諸島を中継拠点や後方支援基地、連山を配備などを行い足掛かりにしてハワイ諸島攻略に取り掛かる算段だ。

ミッドウエー諸島に配備されている敵師団は、島の大きさも相まって1個旅団から1個師団以下の守備隊しか配備されておらず、しかも

高低差の殆ど無い兵站な島だ。

防御陣地を築こうにも無理があるだろうし、増援を送り込んでも隠れられる場所などたかが知れている。

こちらは2個師団ほど送り込めば早々に決着が着くだろうと思われる。

それ以外にも、

第三優先目標 スラウエシ島

理由

今現在の輸送船団の航路は場所にもよるがバリクパパンに向かう航路はマカツサル海峡を通る。現状敵機はスラウエシ島から来襲してきているが輸送航路の安全を確保する為に、という事だ。だが最悪、マカツサル海峡を通らずともリアウ諸島経由の遠回りとはなるがそちらを航行すればいいので、第三優先目標となっている。

第四優先目標 マリアナ諸島

理由

そもそも、以前説明した通りこちらからの敵の圧力が減少して目下、本土に来襲するB-29のみであり、震電の迎撃で防げているから優先度は高くないとなった。

連山での爆撃を行おうにも護衛戦闘機もつけられない事も理由の一つだ。

第五優先目標 スラウエシ島以東の地域

理由

確かにこちらを奪還すれば南方の資源地帯に対する圧力が殆ど無くなるだろうが、そもそも奪還をしたとしても殆ど意味が無い。

日本本土からの距離はとんでもなく遠いし、これと言って資源がある訳でも無く部隊の維持を行う為の物資を輸送するだけでも大変だ。

寧ろ、こちらの力を大きく削ぐだけとなる。

ただ、オーストラリア大陸を解放することが出来れば、最低限の連携が取れるだろうし艦隊は日本が派遣するとしても島々の守備に關してはオーストラリアに任せられる。

と言う理由があるので第五優先目標となっている。

それぞれの攻略期日など具体的な事は決められていない。

ただ、フィリピン奪還とミッドウェー諸島、ハワイに關しては出来るだけ早く実施する、と決められた。

こちらの力だつて無限ではないのだからな。

そして、次に損傷艦艇についてだ。

戦艦5隻

大和

武蔵

比叡

榛名

山城

重巡洋艦3隻

足柄

筑摩（浮揚作業中）

加古

輕巡洋艦4隻

大井（浮揚作業中）

阿賀野（浮揚作業中）

酒匂

由良

驅逐艦19隻

磯風

時津風（浮揚作業中）

山風

江風（浮揚作業中）

初春

若葉

初雪（浮揚作業中）

綾波

夏雲

暁（浮揚作業中）

雷（浮揚作業中）

電（浮揚作業中）

夕雲

長波（浮揚作業中）

大波

涼波

柿

梨

雄竹（浮揚作業中）

潜水艦9隻

伊154

伊158 (浮揚作業中)

伊174

伊175

伊176 (浮揚作業中)

伊178

伊179 (浮揚作業中)

伊183 (浮揚作業中)

伊185

海防艦7隻

占守

国後 (浮揚作業中)

石垣

松輪

佐渡

対馬 (浮揚作業中)

三宅

給油艦6隻

神威

速吸

鷹野 (浮揚作業中)

龍舞 (浮揚作業中)

塩瀬

高崎 (浮揚作業中)

給料艦1隻

間宮

以上の艦艇が浮揚作業中、または浮揚作業待ち、と言う状況だった

が、

戦艦5隻を除いてその全艦が浮揚作業を終了し修理中、或いは訓練途上と言う状況だ。

戦艦5隻

大和（浮揚作業中）

武蔵（浮揚作業中）

比叡（修理中）

榛名（訓練中）

山城（修理中）

重巡洋艦3隻

足柄（訓練中）

筑摩（訓練中）

加古（修理中）

軽巡洋艦4隻

大井（修理中）

阿賀野（訓練中）

酒匂（訓練中）

由良（修理中）

駆逐艦19隻

磯風（修理中）

時津風（訓練中）

山風（訓練中）

江風（修理中）

初春（修理中）

若葉（訓練中）
初雪（修理中）
綾波（訓練中）
夏雲（訓練中）
暁（訓練中）
雷（修理中）
電（修理中）
夕雲（修理中）
長波（修理中）
大波（訓練中）
涼波（訓練中）
柿（訓練中）
梨（訓練中）
雄竹（修理中）

潜水艦9隻

伊154（訓練中）
伊158（訓練中）
伊174（訓練中）
伊175（訓練中）
伊176（訓練中）
伊178（訓練中）
伊179（訓練中）
伊183（訓練中）
伊185（訓練中）

海防艦7隻

占守（修理中）
国後（修理中）
石垣（修理中）

松輪（修理中）
佐渡（修理中）
対馬（修理中）
三宅（修理中）

給油艦 6 隻

神威（訓練中）
速吸（訓練中）
鷹野（訓練中）
龍舞（訓練中）
塩瀬（訓練中）
高崎（訓練中）

給料艦 1 隻

間宮（訓練中）

潜水艦と給油艦、給料艦『間宮』の修理を優先的に行っていた為に海防艦や駆逐艦の修理は若干遅れ気味だ。

少なくとも訓練中の艦に関してはフィリピン奪還作戦に参加する事が出来るが、参加させるかどうかはまだ未定だ。

人員不足であった本土防衛艦隊にそのまま配備するか、護衛艦隊に配備するか。はたまたそれぞれの航空戦隊に配備して空母の守りよりも強固にするか。

いずれにせよ、どこも人手不足ではあるので配備を求める声は大きい。

ただし、どの艦が、とはまだ決まっていないが軽巡 1 隻と駆逐艦 5 隻分だけは配備先が決まっている。

これは後々説明しよう。

給油艦 6 隻と給料艦『間宮』に関しては訓練終了後の配備は既に決

定している。

先ず給油艦に関しては第一航空艦隊に4隻、第一護衛艦隊に2隻が配備される予定だ。

理由としては、外洋での作戦行動が多く、今まではタンカーに燃料補給を頼っていたが元々タンカーは艦艇に燃料補給を行うために設計されていない。

ある程度は考慮されてはいるのだが、タンカーと言う名前がある通り石油を運ぶことが主任務であって機動艦隊などに追隨しての長期間の作戦行動は余り視野に入れられて設計されていなかった。

それならば、設計を変えて建造すればいいではないか、と簡単に言うかもしれないがこれがまたそうもいかない。

元々の設計に手を加えるという事は、燃料補給を行わせるためという事を考えてもそれ専用の設備や装備を新たに備え付けなければならず、そうなるで一から艦のバランスなどを考えなくてはならないし、よしんばそこまでが簡単だったとしても艦を建造する工程が増える。

という事は1隻当たりの建造日数が増えて損失や損害で戦線を離脱しなければならなくなった艦の穴埋めが間に合わなくなる可能性が出て来る。

しかも修理に日数が掛かる事でもあり当然、修理待ちの損傷艦の数がどんどん増えていくという事だ。

そうなれば戦闘艦艇の修理もままならなくなるし、戦争どころではない。

だったら新しく一から給油も念頭に置いたタンカーを設計、建造した方が良い。

それらの手間を考えると給油艦の存在というのはとんでもなくデカイ。

そして間宮だが、こちらは第一護衛艦隊所属になる。

理由は、言わずもがな、給料艦だからだ。

間宮は驚くことに、たった1隻で1万8000人分の食料を3週間

分貯蔵が可能であり、艦内には巨大な冷蔵庫や冷凍庫も完備されており肉、魚、野菜を新鮮なまま送り届けることが出来る。

これの何が重要なのか、と言うと基本的に本土以外の前線基地では確かに冷蔵庫などはある。

だが、間宮ほど巨大でも無く、入れてあるのは本当に冷蔵庫に入れておかなければならないものだけだ。

例えば肉だったり。

米に関しては湿気にさえ気を付けておけば南西諸島や南方方面でも十分に保存が可能だ。

なんなら稲作を行う事すらできる。

だが、食事としては確かに十分だろうが嗜好品、いわゆる甘味であつたり酒と言うのは極々限られた量になる。

それぞれの駐屯地に一月に配分される砂糖の量は、たったの100 kg。

これでは連隊2500人が駐屯しているのだから月に一度、現代人感覚で言えば相当味の薄い甘味しか食べられない。

しかも甘味を製造しなければならぬ材料と言うのは総じて腐り易く常温での保存などもつてのほか。最悪、一日程度で腐る可能性すらあるのだ。

それを考えると冷蔵庫が必須なわけだが、そんなスペースに余裕は無い。

だからこそ嗜好品などの数は大きく減らされている訳なのだが、この問題を解決出来得るのが間宮と言う訳である。

間宮は、1万8000人分の食料を3週間分も貯蔵できるが、通常の食料の輸送ならば他の輸送船でも事足りている。

となると、何を運ぶのか。

答えは簡単だ、酒、甘味などの嗜好品を輸送するのである。

食事と言うものは、驚くことに単純な戦況よりもずっと兵士達の戦意に直結するものだ。

確かに訳の分からんほどクソ不味い飯ばかり出されてこれで戦え、

と言われても戦意が上がる訳もない。

だからこそその間宮である。

間宮には嗜好品の輸送のみを行ってもらい、前線の将兵にそれらを送り届けるのが任務だ。

戦意に直結するゆえに、間宮専属のエスコートとも言うべき専属護衛艦の枠がある。

先程軽巡1隻と駆逐艦5隻の配備先は既に決定している、といったがそれがそうだ。

基本は日本本土と各方面までの航路は輸送船団と行動を共にするが、各方面に到着した後は間宮だけが分離して各地の港などに帰港していく、と言う形になる。

万が一、独航ともなると狙われやすくなる。

毎回旨いものを運んできてくれる艦と艦娘が沈んだ、となれば戦意はガタ落ちするに決まっているしそんな時に攻められたら目も当てられない。

そうならない様に、専属の護衛を付けるのだ。

それ以外にも艦隊そのものに補給を行う事も想定している。

そして、修理が行われていなかった戦艦5隻について。

まず、5隻の戦艦の内の3隻、『比叟』『榛名』『山城』の3隻はあと半年ほどで修理、訓練をすべて完了して実戦投入が可能になる、と言う段階だ。

この3隻に関してはフィリピン奪還作戦に投入される予定だ。

ただ、問題なのは残りの2隻である『大和』と『武蔵』だ。

と言うのも、この2隻に関しては未だに浮揚作業中なのだ。

艦体そのものが他艦と比べるとずっと巨大だ。

それゆえに敵からもよく狙われる。戦闘を行った際に徹底して狙われるのだ。

そりゃあ、夜戦になった場合の砲撃戦などを考えるとどの戦艦、巡

洋艦、駆逐艦と比べてもずっと脅威度が高い。

しかも、駆逐艦が搭載している魚雷を食らわせてもたつた数本程度では到底沈まず、注排水装置のお陰もあつて艦の傾きもあつさりと復元されてしまう。

だからこそ、戦鬪が長引くと判断された場合、特に夜戦に突入する可能性が高いとなるとこの2隻が狙われるのだ。

人類が追い込まれて、日本が最後の大規模反抗作戦を行った時、深海棲艦の機動部隊は徹底的に全艦に対して攻撃を加えた。

特に狙われたのが、大和と武蔵だった。

現代を生きる人間であつたとしても武蔵はまだしも、戦艦大和、と言う名前は一度ぐらいならば聞いたことがある程に有名だ。

それゆえに人類にとつて対深海棲艦、と言う観点からするとその2隻が健在であるという事は、

「未だに人類は深海棲艦に対して反抗の術を持っている」

と考えてもおかしくはないからだ。

それを考えると深海棲艦が、どうしてこの2隻が執拗に狙われたのか理由は分かつてもらえるだろう。

人類側の、戦意を挫くためだ。

事実、この2隻がボロボロの姿で帰つて来たことを新聞がスクープしたときには大騒動になつたらしいし深海棲艦の意図が成功したという事だ。

ともかく、この2隻の損傷は相当酷かつた。

魚雷による破孔はそれぞれ20を超え、爆弾の命中によつて艦上構造物はその殆どが薙ぎ払われ、辛うじて艦橋が残っている程度。

機関は全て水浸し、主砲も弾薬庫に注水したり旋回装置や砲塔内揚弾設備なども軒並みぶつ壊れている。

艦内設備に關しても戦鬪時の損傷に加えて数年間に渡り海水に浸されていたお陰でまともな有様ではない。

それら全てを修理しなければならず、まず修理を行うのに砲塔内や弾薬庫、揚弾筒内に残っている砲弾や機銃弾をまず取り除かなければ

ならない。

ただ、甲板上にまで海水が浸っていて歩こうものなら膝程まで浸かってしまう。

当然、海面よりも下にあるのだから艦内は全て水没している。

そんな中、爆発の危険がある砲弾を運び出さなければならぬ作業、と言うのは物凄く危険で大変だ。

しかも戦艦の中でずば抜けた破壊力を持つ46cm砲弾だ。

例えその1発だけの爆発で済んだとしても被害は絶大だし、誘爆したともなれば辺り一帯が吹き飛ぶ。

艦の跡形が残るかどうかわからないレベルだ。

1門辺り120発の砲弾を搭載しており、それが9門で1080発。

砲弾除去作業開始時、艦内に残っていた砲弾の数は凡そ1000発。

それら2隻分約2000発を取り除かなければならないのだ。

東日本大震災における福島第一原発ほど危険とは言わないがそれに準ずるぐらいには危険だ。

まあ、周りを放射能で汚染しないと考えればまだマシだ。

だが、周辺に与える被害は想像を絶するだろう。

だからこそ慎重に慎重を重ねての作業だし、周囲10kmは作業に関係する艦を除いてありとあらゆる艦船、航空機の侵入が連合艦隊司令長官、俺と中代大将の連名で禁じられている。

だが考えて欲しい。

大和型戦艦の砲弾は重量が約1.5tもあるのだ。

それを、甲板や砲塔を取り除いたとはいえ水中での撤去作業となると過酷を極める。

それを昼夜問わずに行ったとしてもたったの数か月で完了させるには無理がある。

万全に安全を確保しつつ慎重にやるとなると確実に半年以上は砲弾の撤去作業に掛かる。

さらに艦体の穴を塞いで排水、曳航して入渠させるとなると単純な

修理だけでも、艦内の設備を丸々全て新しいものに変えなければならぬから修理にも1年半は掛かるだろう。

いや、言ってしまうならもう建造そのものだ。

まだ艦体がある分時間は掛からないが、それでも大きく時間が掛かる事には変わりはない。

修理が終わったとしても、訓練を完了するのに3か月以上は掛かるだろうから、前線に配備しても問題無い程に戦力化するには2年は掛かる。

修理の進行具合によってはやはり2年半は掛かってしまうだろうし、下手をすると3年は掛かるだろう。

修理の方は急がせれば1年程度で終わられるだろうがフィリピン奪還作戦は間違いなく間に合わないだろうし、恐らくミッドウエー諸島攻略作戦に参加出来るかどうか、と言ったところだろう。

と、だいたい以上の様な感じだ。

そして俺は、来週から各方面への視察任務だ。

虫の良い話だとは分かっているが俺の視察中は平穩である事を願おう。

視察任務 第42話

三日後に視察任務が迫っている。
と言つてもこれと言つて何か差し迫った問題と言うものは無い。
強いて言うとするれば、視察任務に訓練中であつた、

戦艦
榛名

軽巡洋艦

阿賀野

駆逐艦

時津風 山風 暁 若葉 初雪

給油艦6隻

神威 速吸 鷹野 龍舞 塩瀬 高崎

以上の艦が随伴、遠洋航海訓練が繰り上げで実施、それに伴つて訓練課程全体が短縮されたことぐらいだろうか。

理由としてはそれまでの訓練を粗方終えているからだ。

残すは遠洋での長期間、長距離航海訓練だけだからだ。

そして、実地での補給訓練を、三航戦相手に行うことも予定されている。

今回の視察について来れば、それらの訓練を丸々行えるから、これ幸いという事で連れて行くことに。

もし戦闘になつたとしても参加はさせず、退避させる事になつてい

給油艦6隻

神威 速吸 鷹野 龍舞 塩瀬 高崎

ついでだから、この6隻に関して少しばかり説明しよう。

神威は、燃料だけを艦隊に補給するわけでは無い。

正確には、燃料や潤滑油などに合わせて、肉、魚、野菜、水、水も運ぶことが出来る。

これは殆どの給油艦に当て嵌まる事なのだが。

神威は元々、水上機母艦として改装される予定であったのだが、それは結局中止となっている。

というのも俺がこの世界に来る前、輸送作戦に置いて深海棲艦の通商破壊によって多数の輸送船や給油艦が沈められた。

それによって艦隊に随伴して補給任務が行える艦が大きく激減した。

だから、神威を水上機母艦にしてしまえば艦隊に随伴しての補給任務を行える給油艦の数がさらに減ってしまう訳で、そうなると作戦行動を取る、若しくは指揮する側からすると大きな問題だ。

輸送船やタンカーから受け取る事も可能なのだが、本来の目的は補給では無い。

それなりに手間も掛かるし、専門の訓練も施さなければならぬ。

それらのタイムロスなどを考えると、当時の追い込まれつつあった陸海軍には到底存在しえない余裕だったのだ。

だから神威はそのまま給油艦として存在する事となったのだが、結局、南西諸島からフィリピンに至る最後の反抗作戦に置いて深海棲艦の機動部隊に神威含む補給部隊が補足され、護衛に就いていた艦隊含めて殆ど壊滅的な被害を負った。

輸送船20隻、タンカー含む給油艦25隻。

この内、輸送船は間宮も含んでいたが17隻が轟沈、給油艦25隻の内、生き残ったのが上記の6隻、と言う訳である。

神威の性能諸元を記す。

全長	152.18 m
総トン数	10222 総 t
速力	19ノット
燃料	2000 t
航続距離	17140 海里 / 11ノット
乗組員	約200名 (上下あり)
搭載能力 (補給用)	
重油	11398.2 t
潤滑油	15000 ガロン (3.8 L 計算で57000 KL)
貨物庫容積	500 t
内訳	牛豚鶏肉を含む獣肉、魚肉、野菜、氷の各冷蔵庫約7000 立方フィート
缶用清水	359.5 t
雑用清水	368.78 t
飲料用清水	103.75 t
兵装	40 mm 4 連装対空機関砲 2 基 25 mm 3 連装機銃 4 基 20 mm 4 連装対空機関砲 4 基
搭載艇	内火艇 1 挺 カッター 3 隻 通船 (はしけ船とおもっ てくれればよい) 1 隻
その他	6 t デリック 1 本 1.5 t デリック 3 本

おおまかな性能諸元は以上だ。

本来、石炭と重油の併用であったが今回の修理によって機関を重油専燃缶に変えたため重油のみとなっている。

それに伴い、載炭装置の取り外しなどがあつたりする。

重油専燃缶、と言うのは、重油のみで動かす事の出来る蒸気タービン機関の事だ。

これを神威は2基搭載している。

それによって神威の速度が4ノットほど上昇、巡航速度も1ノット上がっている。

補給用燃料に関して言えば、流石に戦艦への補給ともなると流石にそう何隻も補給は出来ないが、それでも艦種によるが戦艦2〜3隻への補給が可能な量だ。

秋月型駆逐艦だと、10隻分ほどの補給量になる。

潤滑油、と言うのは主砲の旋回装置や砲閉鎖機、機関部のギアなどに挿す潤滑油の事だ。

これが無いと砲撃も航行も出来なくなるから、重要なものだ。

それに加えて食料を500t分の搭載が可能。

ただ、艦隊への食料補給は基本的に間宮とその他の輸送船頼りなので、あくまでも補助的な意味合いがある。

それらの事を考えると神威は戦艦や空母などの大型艦艇では無く、駆逐艦などの小型艦艇への補給がメインとなるだろう。

次に速吸だ。

全長	・	約161.10m
水線長	・	約157.25m
垂線間長	・	153.00m
最大幅	・	20.10m
ボイラー主缶		簡易重油専焼缶2基
補助缶		円缶2基
主機		艦本式タービン1基
速力	・	18.5ノット
燃料	・	重油2,000トン
航続距離	・	9,000カイリ / 16ノット
乗員	・	乗員約300名
兵装		40mm4連装対空機関砲2基

25mm機銃3連装4基
20mm4連装機関砲4機

搭載艇・9m内火艇2、9mカタマー2 13m特型運貨船1

補給物件

重油 9,800トン

軽質油(航空機用ガソリン) 100KL(92トン)

機関用潤滑油 100kL(92トン)

真水 750トン

10cm高角砲弾薬 7000発

40mm機関砲弾 30000発

25mm機銃弾薬 90000発

20mm機関砲弾 30000発

野菜 2,800人分/2週間(20トン)

糧食 1,100人分/1ヶ月分(57トン)

糸屑 10トン

5tデリック 2本

3tデリック 2本

以上の様になっている。

速力は、今回の修理の際の機関部の変更によって2ノット向上。

兵装に関しては、神威同様、対空能力を向上させるべく、25mm
3連装機銃と20mm4連装機関砲をそれぞれ4基つつ装備してい
る。

元々は12.7cm連装高射砲が装備されていたのだが、遠中距離
の対空射撃は護衛艦に任せ、同高射砲を取り外してそのスペースに上
記の機銃と機関砲を搭載。近距離対空火力に絞った。

基本的に対空射撃、と言うのは遠距離から始まり中距離、近距離と

なっていく。

さらに、近距離を遠中近と分けることが出来る。

遠距離を担当するのは戦艦や重巡などの大口徑主砲。

中距離を担当するのは軽巡や駆逐艦などの小口径主砲に加えて、戦艦、重巡、空母に搭載されている高射砲。

近距離を担当するのは各艦に装備されている対空機銃や機関砲。

以上の様に各艦が持ち得る火力をそれぞれの距離を担当し、区画を振り分けて敵機に対応する。

そりゃ、戦艦の主砲を近距離での対空射撃に使おうなんて奴は普通居ない。

ここで日本海軍が40mm機関砲や20mm機関砲を採用した理由がある。

と言うのも、25mm機銃や13mm機銃だと、射程の問題があるからだ。

先程、近距離を更に遠中近距離に分けられる、と言ったが正にこれが理由だ。

元々、海軍で使用していた25mm機銃は、炸裂弾が無いとは言え、航空機相手に25mm弾を撃ち込むのだ、当たればただじゃすまない。

それに13mm機銃だって優秀だ。

7.7mm機銃ははつきり言って現状の航空機相手だと豆鉄砲だろう。

辺り所によつてはまあ、落とせるかもしれないがそれでも何百発と撃ち込まなければならぬしそれならば25mm機銃を満載した方が良い。

だが、そうすると25mm機銃では近距離の中での近距離、分類的には極近距離に対応する事が難しいのだ。

13mmだって、優秀といえば優秀だが25mm機銃と比べるとやはり威力の面で見劣りしてしまう。

そこで海軍は極近距離に対応するために実績のある20mm機関砲と、25mm機銃では対応できない、近距離の中での遠距離を対応するために40mm機関砲を採用した、と言う経緯がある。

現在、海軍艦艇にはそれぞれの対空機銃や対空機関砲が深海棲艦の航空機の脅威に対応するべくそれこそハリネズミとでも言えるほどを装備させている。

以前、25mm機銃を廃止した、と言ったが結局のところ、対空兵器の密度の問題で25mm機銃も引き続き使用される事となった。

ただし、以前の25mm機銃とは全く別物の改良を施してある。

まず、弾薬の給弾方式だが、こちらはベルト給弾式に改造された。元々25mm機銃は弾倉給弾式、アサルトライフルなんかと同じようなやり方での給弾だったのだがこれだと一つの弾倉に装填されているのは20発だけ。

元々、15発弾倉だったのだがこの弾数だと射撃効果を最も上げられる時点で一弾倉15発を撃ち尽くす事が多く、弾倉容量を25発程度に増やすように前線からの指摘で増やしたのだ。

だが、25発を弾倉に満数装填してしまうと、どういう訳か給弾不良、所謂ジャム、と言われる状態や排莖不良、弾倉のバネ部分などお破損と故障が起こり易いことが分かっていた。

事実、海軍の教本には、

最大装填数25発。

ただし、満数の装填を行うと給弾不良や排莖不良等の故障を来す恐れがある。

解決策は、25発以下、理想としては20発程度の装填が望ましい。

と書かれているのだ。

これでは25発装填出来ても意味は無いし、前線からの報告である25発程度に増やして欲しいと言う要求を満たせていない。

そこでどのように改善すれば良いのか、と言うと単純な解決策として30発程までに装弾数を増やせばいいのだ。

そうすれば25発ほど装填しても問題は無いだろうし、射撃効果を上げられるだろう。

だが、考えてみて欲しい。

25mm弾と言うのは、単純な直径だけで2.5cmとなる。

それを30発ともなると弾倉一つの大きさが75cmとバカげたことになるのだ。

しかも1発当たりの重量が700gもあり、30発計算で21kgになる。

弾薬だけでこれだけの重量になるし弾倉自体の重さも加えると2kg以上となる。

これらの重量を考えると30発弾倉と言うのは、運用面からすると明らかに宜しくない。

弾薬運搬係は、木箱に複数の弾倉が入っている状態で運ぶのだ、5つだと考えれば100kgを軽く超える。

これでは迅速な給弾はどうやったって不可能だ。

台車の様なものを使うと言う解決策もあるにはあるが、それ以外にも搭載しなければならぬものがあるので、台車は野晒し状態でしっかりとした手入れを行わなければ錆び付いてイザと言う時に使えない。

それを考えると精々が20発ほどが限界なのだ。

それでも弾倉合わせて15kgを超える重量になるのでアレだが、それでも22kgを超える弾倉を扱うよりはマシだろう。

結局、これらの事情から30発弾倉を採用するという事は見送られていた。

そして、もう一つの解決方法がベルト給弾式にすると言う方法だ。

これは、弾倉を一々交換せずとも50発長さ125cmのベルトを打ち切るまで交換する必要が無い。

弾倉5つ分の射撃を休まずに行えるのだから、効果は圧倒的だ。

それに、給弾係の負担も減る。

ただ、一度行う負担は35kgのベルトを交換しなければならない

ので大きくなっているが、1人では無く2人での作業となるので17。5kgづつの重量負担となるから30発弾倉を1人で交換するよりはまだ楽だろう。

そして特に際立った改造と言えるのが、ジャイロスコープを応用しての機銃の水平を保てるように改造したことだろう。

艦の揺れなどが起きると当然、固定されている機銃などでは当然だが狙いが狂う。そこでジャイロスコープをヒントに水平を保てるようにしたのだ。

ジャイロスコープと言うのは、何と云えばいいのか、船や航空機、ロケットなどの自律航法に使用される装置の事だ。

これをヒントに水平を保つ事が出来るよう応用した、と言う訳だ。ただし、あくまでも水平を保つだけなので当然それ以外の用途では使用出来ないだろう。

しかしながら改造の効果は大きかった。

これによって艦の揺れなどがあっても水平に保たれる事になり対空射撃を行う際に、狙いが付けやすくなり命中精度も向上。

極端な話をしよう。

例えば、紙の上で誤差が1度、2度と言う程度であれば、その先に広がる幅はたかが知れているだろう。

だがこれが、航空機の運用や砲撃、射撃という事になってくるとその幅はとんでもなく広がる事になる。

2度の角度で開いて飛んで行くとして零戦で考えてみよう。

折り返し無しで3000km以上を飛べるのだから、3000km先では凄まじい誤差になる。

砲撃戦であっても、30kmや40kmで考えれば最小で150mや大きくても250m程の艦艇を狙う事を考えれば誤差と言う言葉では片づけることが出来ない差となってくる。

ただし、これらは修正が容易だ。

照準の付け方も、光学機器を使って照準を付けるし、何よりも戦艦の大口径主砲ともなると主砲自身がデカいから波の影響を受けにく

いのだ。

だが、対空機銃ともなるとそうはいかない。

同じ戦艦の艦体に乗っているのにどういう訳か艦の揺れの影響を受けると言う、素人からすれば訳が分からん。

小さい分、光学機器を装備させることも出来ず、という事は25m機銃であれば有効射程3000mの距離を目視だけで狙いを付けなければならぬという事だ。

まあ、そんな最大有効射程で撃つても当たりはしないので大体は2500〜2000m程度で撃つ事が殆どだ。

ただし、これらの距離の判定は難しいのだがそれらの話は止しておこう。

どちらにせよ2000mなんて言う、対物狙撃銃で考えても光学機器であるスコープを覗いての射撃だし、一発一発をしつかりと狙つての事だ。

人間を狙うのではなく航空機なのだから、的がデカいから問題無いだろう、と言う考えは甘い。

航空機と言うのは確かに的人体よりもデカいが、移動速度が遙かに早いという事を考えて欲しい。

それを、ただの人力で狙って撃つのがから命中精度なんて数千発撃つて1発2発程度しか当たらないだろう。

だが、それを今までは弾幕、と言う形で補ってきた。だがそれにも限界がある。

だからこそ効率化を図らなければならないという事だ。

元々、20mm機関砲や40mm機関砲はベルト給弾というよりも、弾薬クリップのような形のものを給弾していく、と言うような感じだ。

機関砲上部に給弾口がありそこにドンドン入れていく、と言う形の給弾だ。

どちらとも海軍内での正式名称は決められていない。暫定的にだが、

20mm機関砲の方を、『五式二十耗対空機関砲』
40mm機関砲の方を、『五式四十耗高射機関砲』
と呼んでいるが、殆どの場合20mm機関砲、40mm機関砲と略
称されている。

話を戻すと、給油艦各艦は近距離での対空射撃のみを担当させる、
という事だ。

本来、速吸は対潜用に爆雷と流星の搭載出来るのだが、それらは護
衛艦に任せるし、補給艦は補給艦としての任務に専念せよ、という事
でそれらに類する装備を全て取り外している。

そして空いたスペースに機銃と対空機関砲を、という事だ。

それに、空母に対する流星の補給は後述の鷹野型給油艦3隻に任せ
る事になっている。

次に鷹野、龍舞、塩瀬について。

この3隻は同型艦なので説明は一括とする。

全長	160.00m
最大幅	20.20m
機関	
主缶	二号乙一型口号2基
補助缶	2基
主機	二号丁一型タービン1基、1軸19000馬力
速力	20.0ノット
航続距離	18ノットで10000海里
燃料	重油3240t (満載)

兵装

40mm4連装機関砲4機（片舷2基ずつ）
 25mm機銃3連装4基（片舷2基ずつ）
 20mm4連装機関砲4機（片舷2基ずつ）
 カタパルト 一式二号11型射出機2基
 航空機 流星14機（補給物件として）
 乗員 計365名

補給物件
 重油 6800t
 軽質油 290トン（400KL）
 潤滑油 103トン（飛行機用95KL、機関用65KL）
 真水 300トン
 10cm高角砲弾薬 3000発
 40mm機関砲弾 30000発
 25mm機銃弾薬 30000発
 20mm機関砲弾 30000発
 爆雷 60個
 爆弾 50番14個または25番28個
 野菜 17t（2,000人2週間分）
 糧食 22t（550人1ヶ月分）
 糸屑 10t

鷹野型給油艦は、装備を見て貰えば分かる通り完全に空母と、そしてその護衛の駆逐艦に対する補給を目的としている艦だ。
 流星14機をカタパルト射出して空母に着艦させるのだ。
 3隻で42機となるが、これだと空母2隻分の流星にすら満たない。

だが、戦闘で消耗したときの事を考えると、42機と言う数は馬鹿

にできない。

この42機が居れば、攻撃を1隻に集中させれば空母の撃沈だって夢ではないからだ。

という事は、この42機が海戦の勝敗を決める事にも十分に成りえる、という事に他ならない。

あとは、搭乗員の練度がモノを言うが、それを考えずに数だけで見ただけの場合はそのような訳だ。

速吸は、どういう訳か流星を搭載して軽空母みたいに扱おうという設計思想だったので、それならば空母に任せておけばいいじゃないか、という事である。

しかも流星を出撃させると、速吸には飛行甲板が無い。

という事は、その流星は味方の空母か飛行場に着艦するしかない訳だ。

ならば速吸も補給用として載せれば、と言うかもしれないが、鷹野型と比べて搭載出来る数は6機と半分にも満たない。

この数ならば、載せないで自艦の防御能力を高めた方が良く。

確かに、先程言った事と矛盾するかもしれないが、運用観点からするとある程度の纏まった数が欲しいのだ。

でなければ無理して搭載する程の価値が無い。

しかも、航空機と言うのは燃料搭載状態でなくとも、状況によってはかなり燃える。

しかも、給油艦と言う性質上、多量の燃料や銃砲弾を満載している訳だから、小さな火災、それこそボヤ程度でも致命傷、轟沈の可能性すらあるのだ。

考えても見て欲しい。

機銃弾、機関砲弾だけでも10万発近い数を搭載していて、更に10cm砲弾と燃料に爆弾や爆雷だぞ？

1発の機銃弾でもそれらが積載している場所に命中して見ろ、結果はどうなるか分かり切っている。

しかも給油艦と言うのは、輸送船よりは防御力があるとは言ってもマシ程度。

駆逐艦と同等かそれよりもあるかないかぐらいなのだ。

戦闘機にですら沈められる可能性がある、と考えるとどれだけ防御力が低く、これらの可燃物を満載している状態が恐ろしい事か分かってもらえるだろうか。

本当は、安全面を考えると鷹野型3隻にも流星を搭載させずに対空機銃や対空機関砲を搭載させたかったのだが、現場レベルの戦術面で考えると補給用の流星だけでもあれば頼もしいのが確かなのだ。

どちらを取るか天秤に掛け、中代大将達と考えた結果が、速吸には搭載せず、鷹野型には搭載する、と言う何とも中途半端な結果になった。

今後の作戦での状況を見て、搭載を止めるか、続けるかを決定する事にはなっているのでまだマシだろう。

次に高崎について。

全長・	108.50 m
最大幅・	15.00 m
ボイラー	艦本式重油専燃缶2基
主機・	艦本式タービン2基
速力・	16.0ノット
燃料・	重油 240 t
航続距離	4000カイリ / 14ノット
乗組員	168名
搭載能力	補給物件
軽質油	1500KL

機関用潤滑油 150KL
真水 50t

対空機関砲

対空機銃弾

計200t分

各種航空機材

5t

野菜

8トン(500人、10日分)

兵装

40mm4連装機関砲3基

(艦首1基、艦前部方舷1基、づつ

25mm機銃3連装3基

(艦尾1基、艦後部方舷1基、づつ)

20mm4連装機関砲4基

(艦前部、後部それぞれ方舷2基、づつ)

搭載艇・9m内火艇1隻、9mカッター2隻、6m通船1隻、13

m特型運貨船1隻

その他

20トン・クレーン1基

5トン・デリック1基

この給油艦は、艦艇用の重油では無く航空機用の軽質油、ガソリンと機関用潤滑油の補給が主な任務だ。

それに加えて真水や40mm、25mm、20mmと言った各種対空機関砲弾、対空機銃弾の補給を行う。

対空兵装は他の給油艦と比べると弱いような印象を受けるかもしれないがそうでもない。

給油艦としては割と強い方だろう。
なんなら駆逐艦と比べても強力かもしれない。

それぞれの給油艦の配属は、

速吸、鷹野、龍舞、塩瀬の4隻を第一機動艦隊に配属。

神威 高崎の2隻が第一護衛艦隊に配属する。

それに伴って、第一補給艦隊と第二補給艦隊が編成される。

護衛には修理中、若しくは訓練中の駆逐艦と軽巡を付ける。具体的な数は決まっていないが、軽巡1隻と駆逐艦6隻ほどをそれぞれ護衛に就ける予定だ。

間宮に関しては何かしらの作戦行動の際は第一補給艦隊所属となる。

ただ、護衛の手間を省く為に殆どの場合は第一護衛艦隊と行動を共にする。

ともかく、給油艦に関してはこんなものだろうか。

「ほいじゃ、視察に行くとしましようかねー」

「護衛、頼むぞ」

「あいあーい、任せといて」

視察任務で、出航する日。

艦隊旗艦である隼鷹に乗り込み、将旗を掲げる。

相変わらず、隼鷹は軽い感じだが固つ苦しくなりがちの軍務だ、これぐらいの感じで付き合える方がこちらとしては有り難い。

規律の話をしてしまうと俺も納得しなければならぬのだが。

それでも参謀達とも良好な関係を築けているだろう。

先ず、視察を行うのは硫黄島だ。

飛行場などの復旧状況と、防御陣地などの構築状況を見る。

飛行場が使えないので、内火挺などで上陸せざるを得ないのは仕方が無い。

その際は普段着ている二種軍装を脱いで、三種軍装に着替える。

一種軍装

冬服であり真っ黒で遠目に見た感じ帽子をかぶっていないければ学ランを着た学生の様にも見えるものだ。

近くで見れば階級章などがごちゃごちゃしているから丸わかりなんだが。

個人的には一々季節で衣替えするのが面倒なので別に俺としては二種軍装のままでもいいと思っているのだが、どうにもそれだと格好がつかないという事で毎回鳳翔が態々出してくれるのだ。

なんだか、俺の中で鳳翔の立ち位置がどんどん母親になっているのは気のせいじゃない。

二種軍装

所謂夏服で、恐らく海軍の軍服と言うとこれだ、と思う人も多い真っ白な軍装の事だ。

こいつの難点は、飯を食う時に上着を脱いでおかないと跳ねて汚してしまう可能性がある事だろう。

書類仕事を中断するのが時間的に勿体無くてそのままペンを握りながら食事をしていた時に、手元が狂って味噌汁を思いつ切りぶちまけたことがある。

いやもう、悲惨だった。

真っ白の軍服が味噌汁の茶色で染められて、まあ大変だった。

そのあと、結局また鳳翔に食事の時は仕事を中断して食事に専念しなさい、と怒られたのはいい思いい出である。

三種軍装

所謂、陸戦隊指揮官でカーキ色の、陸軍で使われている戦闘服の様な感じのものだ。俺の指揮下には陸軍師団と陸戦隊もあるために渡

されているのだろう。

でなければ、艦隊指揮官なのに渡される必要があるか？という話である。まあ、こういう物は全部纏めて渡されるものなんだろうな。

艦隊は第三航空戦隊に加えて第二戦隊の戦艦3隻が随伴する。

第三航空戦隊

隼鷹 飛鷹 グラフ・ツエツペリン アークロイヤル

第二戦隊

戦艦

ビスマルク テイルピッツ ヴァンガード

第三戦隊

戦艦

リットリオ ローマ

重巡洋艦

青葉 古鷹

第三水雷戦隊

軽巡洋艦

多摩

駆逐艦

宵月 満月 Z1 初雪 浦波 菊月 望月 Z3 村雨 霜月

春月

第五戦隊

戦艦

榛名

軽巡洋艦

阿賀野

駆逐艦

時津風 山風 暁 若葉 初雪

給油艦

神威 速吸 鷹野 龍舞 塩瀬 高崎

となっている。

第五戦隊は暫定的な編成なので、今後解体される可能性がある。

特に、給油艦は今後の配属が決まっているから、間違いなく編成から外されるだろうからな。

個人的な意見としては編成などの手間を考えるとそのまま第五戦隊として存続させるか、この編成のまま第一補給艦隊、第二補給艦隊としてもいいんじゃないか、と思っている。

理由としてはこのままの編成でも高速艦隊として運用出来るからだ。

給油艦6隻はそれなりに速度が出るし、戦艦が1隻護衛に就いていれば、戦力的な不安こそあれど将兵達の心理的な安心感は居ると居ないでは天と地ほどの差と言ってもいいぐらいには、全く違う。

そうしないにしても、比叡と駆逐艦を追加で5隻ほどここに編成すれば高速艦隊としてしっかりとした体を成しているからそれなりの戦力として使えることが出来る。

独立した打撃艦隊として運用してもいいし、どこかの航空戦隊に空母の護衛として入れても良い。

ただ、主砲の打撃力を考えれば、空母の護衛に就けると言う方が現実味があるだろう。

打撃力と言う面で見れば、山城の方が主砲搭載数が多く上。そこに長門か日向を加えた方がまだ火力がある。

もつと言ってしまうえば大和と武蔵の2隻の方が圧倒的な火力を発

揮出来るのだから、この2隻を主力とした打撃艦隊とすれば態々引き抜いてまで打撃艦隊を編成する必要は無いしな。

大方、空母の護衛として編成するという事で落ち着くだろう。

どこの航空戦隊に配属するかはまだ分からないが。

陣形は、何時も通り輪形陣となっているが少し変わった形をしている。

多摩

浦波 リツ ロー 菊月

宵月 隼鷹 飛鷹 Z1

満月 グラ アー 初雪

望月 青葉 古鷹 Z3

村雨

霜月 春月

阿賀野

榛名

時津風 神威 速吸 山風

鷹野 龍舞

暁 塩瀬 高崎 若葉

初雪

以上の様になっている。

瓢箪をさかさまにしたような感じだ。

これならば、万が一戦闘となった場合でも榛名以下第五戦隊を分離する事は簡単だ。

そうしたら、霜月と春風を前進させ。青葉と古鷹の斜め後ろに付けて村雨を下がらせればしつかりとした輪形陣がすぐに出来上がる。

陣形についても、これと言って説明する事は無いので、このぐらいだろう。

「しかし、こう平穏な海だと何と言うか、気が抜けそうになるな……」

今まで、誰かしらの艦体に乗りに込んで海に出ると言うのが基本的な作戦であったり、迎撃戦であったりと戦闘になる事が多く常に気を張り巡らしていたのだが、今回は視察任務と言う今までに無かったタイプの任務だから、戦闘を前提に動いている訳では無いからどうも気が緩みがちになる。

それでも念の為に偵察機を飛ばしてはいるし、警戒しなければならぬのだが。

今の発言は指揮官としてあるまじき発言だな。

まったく、階級が高くなればなるほどおいそれと下手に発言すら出来るのが辛い所だ。

「ああ、駄目だ駄目だ。書類仕事の一つでもあれば気が引き締まるんだがな」

「書類は全部取り上げられちゃったもんねー」

「鳳翔に飛龍と蒼龍のやつ、これ見よがしに視察任務ついでに書類仕事から離れて少しは休めと言って来てな。その分の書類の決裁は重要なもの以外は飛龍に裁量を与えて来たから溜まる事は無いと思うが、書類を相手にしている時は訓練に参加させてやれないのが申し訳ない」

「なーに、提督が隠れて徹夜するのが悪いんだよ。バレないでも思ってたんのかい？」

「……何の事だか分からんな」

「おっ、白を切るとは良い度胸してるね。帰ったら鳳翔さんに報告だな」

「悪かった。悪かったから鳳翔に言いつけるのだけは止めてくれ。まあ同じことで怒られたら今度こそは許してもらえそうにないんだ」

「それじゃ今は大人しくその椅子に座ってるこつた」

隼鷹は、本当に酒さえ入らなければこうして気を使ってくれたり周りをよく見ていたりと優秀なんだがなあ……。

どうして酒を飲むとあそこまで人が変わるのか不思議でしょうがないぐらい酷くなる。

流石に本人も、動けなくなるほどは飲んだりしないがそれでも俺からすればとんでもない量を飲んでいる。

あれだな、口を開かせると駄目な残念美人ってやつだ。

他にも那智とかが該当するか？あいつもあいつで結構酒癖と言うか、飲むとダメダメになるタイプだからな。

隼鷹に言われた通り、艦橋にある指揮官席に大人しく座っているのだがどうもやる事が無いと落ち着かない。俺も立派なワーカーホリックという事か。

「……隼鷹、何かやることは無いか？どうにも落ち着かん」

「はあ？つたくこの社畜根性の凄まじい提督殿は仕方ないねえ……。本当は隈も酷いし寝ろよ、って言いたい所なんだけど流石にこんな真昼間から戦闘も無いのに寝らんないとか言われそうだし。そうだねえ……。それじゃ、艦内でも見てきたらどうよ？それなら身体動かし色々を見たこと無いもんあるかもよ？」

「イザってときはどうする？俺が居なかったら大事だろう」

「そんな時は私に対応するよ」

「分かった。ある程度見て回ったら戻ってくるからそれまでは頼む」

「あいよ。副長、提督を案内してやって」

「はっ、了解しました」

と言う訳で隼鷹の提案により艦内を回る事にした。

思えば、ちゃんと艦内を見て回ったことが無いから良い機会かもしれない。

艦橋は何時もいるから、勝手知ったるなんとやら、だが飛行甲板に出してしまうともう全然違う。

普段は艦橋から見下ろしているだけだったから、待避所や高射砲、機銃座に行くと丸つきり違う様相だ。

今日も今日とて訓練に励んだり、それぞれの銃砲座の整備を行ったりしている様子を見ることが出来る。

「お疲れ様ですー」

基本的に、こうやって集団でいる場合に階級が高い者が現れると、一番最初に挨拶をするのは一番最初にその階級の高い人間を認めた者、となっている。

艦橋に一番近い、と言うよりも艦橋そのものに設置された4基の40 m対空機関砲座と25 m単装機銃2基と、

艦橋横（第一罐室強圧通風孔と第三罐室強圧通風孔の間）に増設された2基の40 m対空機関砲座が一番近いのだ。

この艦橋周りの機関砲座、機銃座の操作に関わる兵士とは割と顔を良く合わせる。

何せ外に出ればすぐそこにあるのだから、艦橋周りだけなら把握しているからな。

「ご苦労。そのまま作業を続けて構わんぞ」
「はっ」

答礼をして、態々手を止めて敬礼をしてくれる彼らに気にせず続けるように、と促す。

やはり、俺が居ると緊張するのかさつきよりも動きが硬いような感

じがする。

だがそれでもよく訓練しているのが分かるぐらいには慣れている動きだ。

ほう、あんな風に銃身を掃除するのか。

何となく、座って操作してみたい、と言う気持ちもあるがこれ以上邪魔をするわけには行かないな。

さつきから配属されて、実戦を経験していない新兵が緊張して俺が気になるのかチラチラ見てくる。

あ、今班長に小突かれたな。

「おい、失礼だろ！盗み見るんじゃないやねえ！」

「す、すいません！」

いや、このままここに居たら本当に邪魔になるな。

「班長、邪魔をして悪かったな」

「いえ、なんら問題もありません！」

「そうか。それではな。北浜もだが皆も頑張れよ」

「はっ！」

最後に新兵の北浜（名札を見た）含めて軽く激励をしてその場を去る。

いやはや、戦闘中にぶつ放すところは何度も見たことがあるが整備をしている場面は見たことが無かったな。

あるかもしれないが、頭の中で作戦を考えたり戦術を練る事に集中しすぎていて全く記憶にない。

基本的な、軍艦の一日を軽く書いて行こう。

0500 「総員起こし」のラップで起床（冬季は0600に変更される）

それから体操、「両舷直、露天甲板洗方かかれ」の号令で甲板を皆で掃除するのだ。これが慣れるまでは思ったよりも辛いのだ。それが終わると朝食となる。

午前中は主に各科ごとの日課手入順行を行ってから昼食。

午後は配置教育（訓練の事）、武技や体技（剣道、柔道、相撲）もしくは整備作業を行って1600～1700の間に課業終了。

この課業終了時刻がバラバラなのは、風呂に入ることが許されている日の場合、訓練終了後にすぐに入るからなのだが、一斉に終わらせてしまうと艦内の風呂の数は限られているから当然、血気盛んな兵士達が多い空母、特に搭乗員や機関員達が騒動、主に喧嘩や乱闘騒ぎを起すのだ。

だから時間をずらして訓練を終わらせるのだ。

停泊している時は、許されたものに限り上陸が許されているから上陸する。兵は四日に一度、下士官は二日に一度外泊を許されていた。勿論許された、と言うだけでは上陸が出来ないので書類を書き込んで許可を取らなければならぬのだが。

もっぱら上陸すると、風呂に入る機会が限られている艦体勤務の妖精達は鎮守府などが所有する浴場に真っ先に向かつて汚れを落とし、後々別の事をするらしい。

この上陸に関しては停泊している時は、門限を多少過ぎてもまあお咎めなしとなるのだがこれが何かしらの作戦や、そうでなくとも出航する予定があるときに一秒でも遅刻すると大事になる。

最悪、軍法会議に掛けられるぐらいの重罪なのだ。

そりゃ、遅れる事で航海予定や作戦そのものが遅れを来す事になるのだからしょうがないと言えましょうがない。

俺は停泊している時は、執務室兼自室のプレハブに籠りつきりだからな、風呂とかは毎日入ることが出来る。と言うよりも威厳を保つとかなんとかで毎日入る事、と仕事優先で四日ほど風呂に入らなかつたらこれまた鳳翔達に説教を食らった経緯があるんだがな。

まあ、こんな感じだろう。

訓練内容はその日ごとに違うし、停泊している時は付近の飛行場に艦載機は全て降ろしているからそちらから飛び立つての戦闘訓練になる。艦自体の戦闘訓練は基本的に一斉に行われるものだし。

「副長は艦内を巡検したりするから、艦内に詳しいんだつたな」

「はい、誰よりも詳しいと自負しております」

「巡検は大変だろう?」

「はい、上から下まで隅々ですから骨が折れます」

基本的に、副長の仕事と言うのは艦長や艦娘の補佐だがそれとは別の重要な役割もある。

その前に艦長と艦娘の待遇について話さなければならぬ。

艦娘についてだが、階級は艦種にもよるが大体大佐程度の扱いを受けているのが殆どだ。

この大佐、と言う階級は戦艦や空母などの大型艦の艦長を務める事になる階級だ。

基本的に何かしらの例外が無い場合、戦艦や空母の大型艦の艦長は大佐、副長は中佐と決まっている。

例外と言うのは戦闘中に艦長が負傷、または戦死した場合だ。

この時に副長が生き残っていた時は艦長の命令か、若しくは自動的に指揮権を継承する事、となっている。

副長も負傷したり戦死したりした場合は副長の下、各科の科長である少佐か中佐に更に引き継がれる。

で、話を戻すがそこに艦娘が入ってくると、大佐程度の階級を持っているのだがそうになると艦内に同じ大佐階級が二人もいる事になる。そうになると指揮系統などが面倒になるのだがは問題無い。

艦娘が先任として扱われるから同じ階級の艦長が居ても、序列的には艦娘<艦長となる訳だ。

基本的に、艦長と艦娘には執務をを行う公室以外に専用の私室、寝室、浴室が与えられている。

食事ももっぱら艦長室などで摂る事が殆どだ。

対して副長と言うのは士官室で他の士官達と共に食事を摂っている。

艦長や艦娘のこうした高待遇は、威厳を保つ為のものだとおもってくれればよい。

俺の場合、作戦などで参謀長達と共に乗艦している時は彼らと共に食事を摂るから、乗艦している時は余程の事が無ければ一人で食事を摂ると言う事は無い。

陸上で執務をしている場合は、艦娘達と食堂で摂る事も多いし一人での食事、と言うのは意外と少ないものだ。

ただ、先程の説明の通り艦長や艦娘は違う。

そこで一歩間違えると艦娘と艦長は艦内で孤立する事になる。

その孤立を防ぐ、役割を持つのが副長という事だ。

艦娘は艦そのものの指揮があるし、艦長だつて同じようなものだからおいそれと艦橋などから降りる事は出来ない。

この二人と接するのは艦橋に務めている者達や二人に食事を運ぶ給糧員ぐらいなものだ。

そう考えると、かなり繋がりは限られる。

しかも、艦長はまだしも艦娘は彼ら妖精達からすると、相当恐れ多い存在、のような感じで扱われているらしく、艦長以上に接する機会が無い。

と言うか周りが避けていくような感じを考えると貰えればいいかもしれない。あれだ、モーゼのような感じだな。

そんな状態だから、艦娘と艦長の意図を伝えるには相当手間がかかる。艦娘や艦長自身が動くというのものもあるが、物凄く多忙なのだ。

艦長が艦内で必要な物などの書類を作成して艦娘はそれをチェックしたり、と結構忙しい。

そんな暇は無いし、あるんだつたら休みたい、と言うのが本音だろう。

それらの忙しく、自分達の意図を伝えられない二人に代わって、乗組員達に意図を伝えるのが副長の役割だ。

それとは別にもう一つ、重要な役割がある。

その多忙な艦娘と艦長が落ち着いてそれぞれの仕事に専念できるようにするには、当然騒ぎなんていうのはあつてはならない。

簡単に言うと、艦内を纏め上げて『軍規、風紀の維持』を行う事が最も重要な仕事だ。

先程説明した課業の采配は副長が決める事であつたし、訓練後も副長は多少前後するが2000〜2030の間に『巡検』と呼ばれる仕事もしなくてはならない。

巡検とは言つてしまえば、艦内に異常が無いかを見て回つて確認する仕事だ。

特に気を付けるべきは火の管理だ。

軍艦に限らず、殆どの艦船は火災が起けると最悪轟沈、と言う事態になり兼ねない。

特に軍艦に関しては、弾薬などの爆発物を扱う事もあつて、弾薬庫や空母であれば航空機用燃料タンクなんかには火が回るともう手が付けられない。

資源輸送任務で攻撃を受けた輸送船で火災が発生、必死に消火作業をしても収まらず、結局自沈処分、となる輸送船も少なくは無い。

それは当然軍艦にも言える事で、何よりも細心の注意を払つて神経を使わねばならないことだ。

また、海と言う塩水に囲まれた場所を行き来する艦船にとって、飲料水や雑用水と言うのはとても貴重だから、それらの管理をするのも副長の仕事だ。

航海中にこれらの真水が不足すると任務業務に重大な支障を来すからだ。

水を飲まねば生きていけないし、雑用水は装備の手入れに必要な不可欠。

潮風に晒され続ける艦と言うのは一瞬でも手入れを緩めると直ぐに錆び付いて動かせなくなるのだ。

そんな状態で戦闘が始まったとなれば、目も当てられないだろう。海上では真水と言うのはとても貴重なのだ。

特に軍艦は装備を満載しているから、水を搭載出来るスペースに限りがあるから特に貴重だ。

だからこそ雨が降るとバケツなどを使って雨水を掻き集めるし、その際に身体を洗う事もあるのだ。

以前飛龍に聞いたことだが、どの艦でも変わらない。

あとは、出航前に上陸した乗組員が全員居るかを確かめ艦娘と艦長に報告するのも副長の仕事だ。

それらの艦の運用維持に関わる仕事を副長は一手に引き受けて管理するのだ。

艦内のあちこちを上から下へ向かって見て回る。

艦橋周りから始まり、飛行甲板、艦に装備されている対空機関砲、対空機銃座、対空砲座を見て回って艦内に入る。

食堂や機関室は勿論見て回ったし、普段下士官や兵卒たちが寝泊まりする部屋も見て回った。

何と言うか、どこもかしこも男ばかりだから、むさ苦しい思ったが、新鮮な体験だったな。

隼鷹の全長は219・32mと他の空母と比べると小さいが、艦内を歩いて回るともつともつと大きいのではないか、と思うぐらいには大きく感じられる。

これ、俺が一人歩き回ったら間違いなく迷子になるぞ。

「お、お帰り。どうだった？」

「まあ、初めて見るものばかりで楽しかったし学ぶことも多かったよ。発艦作業を見ることが出来たのも良い経験だったな」

艦橋に戻ると隼鷹が出迎えてくれる。

艦長はどうやら仕事をする為に公室に行ったらしい。

「だろ？私の体の中堪能してくれたようで何よりだ」

「お前、言い方つてもんがあるだろう」

「いやいや、実際の事じゃん？」

「はあ、まあいい。何か異常はあったか？」

「いや、これと言って何も無いね。穏やかなもんだよ」

「それならばいい」

ふう、と提督用の席に一息付いて座ると直ぐに食事が運ばれてくる。

「ほら、提督、晩飯だよ」

「なに？もうそんな時間なのか」

「提督、結構長い時間見て回ってたからね」

「そうすると、昼飯の後からだから4時間以上見ていたという事か」

「そうなるね」

「いや、すまないな。迷惑掛けた」

「なーに言ってるの。こんぐらい別にいいさ。今の提督にはこれと言ってやらなきやならない仕事も無いからね」

「なんだか、そう言われると複雑な気分だな……」

まあいい、今回は大人しくしておこう。

第43話

硫黄島の視察をする為に、隼鷹の内火挺に乗り移る。

既に三種軍装の陸戦隊指揮官用の軍服に着替えて、腰に軍刀を指している。

本当は軍刀は置いて来てもいいかな、とは思っていたのだが隼鷹始め全員から却下された。

普段作戦の時に俺と共に行動している参謀長達も、今回は本土で留守番中だが居たら間違いなく却下される、と言われたら納得するしかない。

「それでは行ってくるから戻るまで頼むぞ」

「あいよ。しっかり見てきな」

隼鷹に後の事を任せ、内火挺に乗り移る。

「お待ちしておりました。それでは、少々揺れる事もあるかもしれませんが、なので何処かにしっかりとお掴まり下さい」

内火挺の操縦員に案内されながら硫黄島の南浜（以前の作戦の時に我々が上陸した地点）に作られた仮設の栈橋に内火挺を近付けていく。

栈橋には、10人ほどが待っている。

栈橋に足を掛けて上陸すると、待っていた10人が一斉に敬礼をしてくる。

それに答礼すると、自己紹介を始めた。

「硫黄島守備隊総司令の片浜陸軍少将であります」

「態々出迎え、ありがとうございます」

「いえ、それでは守備隊司令部にご案内します」

「ああ、司令部に荷物を置いたらすぐに視察を始めよう。じっくりとも見て回りたいが生憎と時間が押していてな」

「了解しました。お荷物を持たせましょう。山下、閣下の荷物をお預かりしなさい」

「はっ、閣下、お荷物失礼します」

山下と呼ばれた少尉が俺の荷物を受け取って運んでくれる。

因みにだが片浜少将も山下少尉も妖精だ。

陸軍では中将ぐらいの階級までであれば妖精が務めている。

残念ながら、陸軍の上級将校はたったの2人だけしかおらず、その二人も第1憲兵師団とそれ以外の憲兵隊の指揮を執る為に前線の指揮は一切取っていない。

その代わりに俺が指揮を執っていると言う訳だ。

と言うのも、警察組織などは機能しなくなって久しいからだ。

それに伴って各地の治安維持は軍の憲兵隊が警察の代理という事で受け持っている。

深海棲艦との戦いによって、警察組織は瓦解し、艦娘と艦体、妖精が現れるまでは戦力不足を補うべく時の内閣は憲法を強行改正、それによって徴兵を行えない筈であったものを行えるようにした。

優先的に徴兵されたのは、所謂公務員、それも治安維持等に関わる警察、消防などの人間からだった。

警察署、消防署内の約半数、署長から始まり年齢問わずに徴兵されて行き、挙句の果てには市役所職員から各省庁の人間までもが徴兵対象として前線に送られて行った。

年齢問わず、それこそ60歳を超える老人達までもを送り込んだと言うのだから正気の沙汰では無い。

それによって、国内の人口は深海棲艦の攻撃と合わせて低下の一途を辿り、それに伴いありとあらゆる生産能力が低下。

因みにだが現時点での日本の人口は未だに減少の一途を辿っており俺がこの世界に来た時は3000万人ほどいたのが2500万人ほどにまで減っている。

食料問題、衛生状況の悪化など幾つもの理由が挙げられるが様々な理由による。

出生率が高いものの、生まれてきた赤ん坊が成長する前に死んでし

まうと言う、俺の居た世界でのアフリカなどと似たような状況になっている。

これを解決するためには早急に南方との輸送航路の安全を確保して、国民にも行き渡らせることが出来るだけの資源を運ばなければならぬ。

話を戻そう。

当然、警察官や消防士なども徴兵されて行ってしまう訳だから国内での治安状況は悪くなる一方。

警察消防から優先的に徴兵されたものだから、治安を取り締まる人手が足りず、深海棲艦の砲爆撃によって沿岸部は軒並み廃墟。

内陸部ですら爆撃によって官民間わずありとあらゆる施設が吹き飛ばされたのだ。

当然、警察消防署なども消えた。

治安低下と言うのは、想像よりもずっと全ての物事に影響を与える。

で、足りない人手を補うために軍が動員された、と言う訳である。

その当時、既に日本本土近海の制空権、制海権すら奪われており各地での守備に就いていた軍の師団は軒並み深海棲艦との戦闘で消滅。

それでも徴兵は続けられ、軍の師団は沿岸部防衛に引き抜かれて毎日の戦闘で消耗、若しくは大打撃を負って解体されていた。

軍には憲兵隊、と呼ばれる民間での警察と同じ役割を担う部隊があるが、憲兵隊を各師団に配備していたところを全て引き抜いて役割を果たせなくなった警察の代わりに充てた、という事だ。

刑法などは、軍のものでは無く警察のものを取っているのだがな。

現在の憲兵隊は妖精では無く人間で構成され総員数は27000人ほど。

ただし、入隊するには軍の法律と警察の法律、それに民法なども学び、守らねばならない為に学力面だけでなく体力面においても相当優秀でなければ入る事は出来ない。

よしんば入れたとしても、体力無しでは直ぐに値を上げて止める事になるだろう。

まあ、現状の日本ではまともな収入を得られる仕事と言うのは軍の憲兵隊に入るぐらいしか方法は無いので意地でも食らいつくのだろうが……。

徴兵されなかった者達も本土に対する爆撃は苛烈で、戦争、しかも本土が直接戦火に晒されるとは思っていなかったから避難するため施設なんてある訳も無く、逃げまどいながら機銃掃射に撃たれない様に祈るぐらいしか出来なかったのだが。

平和主義を掲げる奴らも軒並み深海棲艦の攻撃によって死んだのだから、ザマア見ろ、と言うよりもいつそ哀れに感じるほどだ。

お陰で平和主義、なんてのを掲げる奴は殆ど居なくなった。

共産主義に迎合しようとする事や、他国に国を売り渡す事のどこが平和主義なのか全くの疑問なのだが。

指揮権について話をしよう。

基本的に各地の、陸戦においての守備隊の指揮権に関しては、俺と言う例外を除いて陸軍優先となっている。

そりゃ陸で戦うための軍隊だからな、「餅は餅屋」という事だ。

海に関しては海軍優先となっているので指揮権のバランスは保たれているだろう。

「守備隊の司令部は、ご存じかと思いますが地下にあります。未だに工事中なので快適とは言えませんが最低限の空調は整っておりますので視察中の間はどうか我慢して頂けると幸いです」

「なに、前線で本土と同じような環境を望む方が酷と言うものだ。なんなら外で寝袋に包まって、と言うのもアリかもしれない」

「ははは、御冗談が上手ですね」

「そうだ、土産として日本酒を幾らか持って来ているからあとで渡そう」

「はっ、ありがとうございます」

「それでは早速行こうか。さっきも言ったがあまり時間は無いからな」

片浜少将と、司令部で幾らかの話し合いをした後、片浜少将と共に俺の護衛として山下少尉以下1個小隊が付いて来てくれることになってる。

硫黄島には3日滞在する。

今日は朝9時頃に予定通り到着したから、3日後の昼までは硫黄島に滞在する。

それまでの間に硫黄島全域の視察と問題点を洗い出さなければならぬ。書類を書いて俺が居る本土まで送ると言うのが普通の正規手段なのだが、それだと物資輸送でやってくる定期輸送船団がくるまでこれらの書類を本土にいる俺の元までやって来ない。

まあ、こちらからの書類なども同じような事なのだがな。

「すまん、俺に付いてくるから車に乗って楽が出来ると思っていただろう?」

「正直な事を言ってしまうえば多少は期待しておりました」

「歩いて見て回る方が、しっかりと見れるからな。それにこの人数だとトラック一台じゃ足りんだろう?燃料は一滴でも惜しい状況だからな、節約できるところで節約せねばならん」

「勿論分かっております」

片浜少将と会話しながら、島内を巡る。

各地の防御陣地から、海岸線の地雷敷設地域、上陸までの機雷原なども見た。

「飛行場は2箇所、ただし、北飛行場の修理を優先しているために南飛行場は手付かずです」

「……やはり、人員不足と資材不足か」

「はい。それに島内のあちらこちらに艦砲射撃の穴が空いていて、最低限それを塞いで道を確保しない限りは資材の運搬もままならない状況です」

「徹底的にやり過ぎた、という事か。島内の道路修理状況は？」

「先程の説明の通り、全く進んでいません。浜からの道路を順次修復していますが地下陣地上陣地構築などにも人手を回さなければならぬ為に人手不足と資材不足の両面からありとあらゆるものが足りていません」

「……弾薬等の備蓄状況は？」

「そちらも、到底足りているとは言い難いかと。現状の備蓄では地下陣地の構築が間に合っていない為に野外に掘っ立て小屋を建てての備蓄ですが、もし敵の来襲と上陸があつた場合、地上防御陣地もまだ未完成ですので敵の上陸があつた場合は2週間持つかどうか、と言つたところでしよう」

「せめて、飛行場だけでも何とかなつていれば航空機でのピストン輸送が可能なのだが、難しいか」

やはり、島内の状況は数週間前とほとんど変わっていない。

片浜少将が無能、と言う訳では無い。全ての修理を満遍なく行えるほどの余裕が無いという事だ。

しかも、硫黄島への資材輸送は未だに行われておらず、資材だけ送り込んだとしても人手不足だから資材が余ると言う状況になる。

送るのならば、人手も送り込まねばならない。

「……よし、出来るだけ早い内に工兵隊を幾つか送り込もう。それまでは、道路修理と陣地構築を7：3の割合で進めるように。道路さえ

あれば資材の搬入も今よりは迅速に行えるだろう。そうすれば、島内全域に資材と人手を行き渡らせられる」

「はっ、了解しました」

ともかく、道路だけでも修理をしなければ資材があっても運べないし、人手があっても迅速な移動が困難だろう。

インフラ整備を優先しないとならない。

恐らく、先の硫黄島で失った艦艇の補充もまだだろうし戦力を揃えるにはどこからかの方面から相当数の戦力を引き抜かない限りはまだ暫くは時間が掛かるだろう。

詳しい事はまだ分析中だから分からないが、最低でもあと1年は掛かると思われる。

それまでは深海棲艦連中も攻勢を掛けられないだろうし、防御陣地を構築する余裕はあると思われる。

ならば、その前に島内の道路などを優先的に修理しても問題は無いだろう。

本当の事を言えば、この1年の間に出来るだけ攻勢を掛けたい。

出来るならば、敵艦隊が出てこられない内にフィリピン攻略、奪還を成功させたいところだがそう上手くはいかないだろう。

こちらだって艦隊こそ無傷ではある。

ただ、陸軍師団はそうもいかない。

硫黄島奪還作戦で大打撃を被ったし、フィリピン攻略に投入予定の師団も半数が訓練中だ。

この状態で攻略作戦を強行しても碌な事にならない。

フィリピンだって島の殆どを密林に覆われた熱帯雨林のジャングルだ。

ちゃんとジャングル内でも戦えるように訓練を行わなければならないし、そのジャングル内での物資輸送を円滑に進める為に工兵隊も数を揃えて準備をしなければならない。

必要数の師団や各部隊を揃えるのにどうやっても時間が掛かるし、輸送するための輸送船を揃えるのだって簡単じゃない。

10個以上の師団を輸送して、尚且つその師団を飢えさせず、そして尚且つ戦わせられるだけの物資を送り込む兵站の維持だって楽ではない。

ただ食料や弾薬を運ばばいいだけじゃない。

あの地域はそれ相応に伝染病、感染症などの危険もある。

赤痢、アメーバ赤痢、マラリア、結核、チフス、ジフテリア、破傷風、コレラ、などなど。

薬など医薬品とすっかりとした治療さえあれば助かる伝染病や感染症だが、その医薬品を運ぶのだって大変だし20万を軽く超える将兵全員に行き渡らせるのだって並大抵の事じゃない。

フィリピン攻略には予備師団を含めて、16個師団程の規模になる。

中には工兵とその護衛のみで構成された工兵師団や砲兵師団もあるが

歩兵師団10個、砲兵師団3個、工兵師団3個の内訳になるだろうと試算されているが、陸軍師団だけで32万に上る。

そこに陸海軍の航空隊、飛行戦隊に第一機動艦隊や第一護衛艦隊などを含めると総兵力は陸海空合わせて35万を超えるだろう。

それらの将兵全員に健康を維持させ食わせなければならぬいし備蓄も行わなければならぬのだから、一か月で必要になる物資の量は輸送船100隻分を軽く超える。

しかもただ送り込めばいいと言う訳じゃない。

必要な時に必要な量を送り込めないのならば、数があっても無用の長物になる。

既に南西諸島、南方方面、硫黄島までの小笠原諸島への兵站維持だけでも輸送船の数だって足りていない。

それぞれに大規模輸送船団単位で送り込んで漸くなのだ。

何よりも輸送船の数以上に、護衛の数が足りていない。

輸送船は本土で大増産されているから、来月になれば月10隻単位で竣工、就役されるだろう。

乗組員の問題は付いてくるがまだ良い。

だが輸送船団に就けるための護衛の問題は解決出来そうにない。

こちらはただでさえ追い込まれているのに、常に護衛を行う艦の数が少ないと言うハンデまで背負って戦わなければならぬのだ。他の問題を解決しなければ、到底フィリピンを始めとしてミッドウエー諸島、果てはハワイ諸島の奪還維持など不可能だ。

ともかく、今は硫黄島を前線基地として使えるようにしなければ。

初日の視察を終えて司令部の俺に充てられた部屋に戻ってくる。

一息ついて、軍刀を置き、鞆の中にあるペンと紙、それに書類を取り出して早速硫黄島に必要な物資と工兵隊、それ以外の部隊を送って貰えるように申請書類を書く。

「閣下、山下少尉であります」

「入れ」

「お仕事申失礼します。食事の時間でございますのでお迎えに参りました」

「ん、ありがとう。これを終わらせたら向かうとしよう」

仕事に区切りをつけて、迎えに来てくれた山下少尉と共に片浜少将の待つ食堂、とは言い難い食堂に足を運ぶ。

その際に土産として持って来た日本酒を一本持って行く。

地下陣地の食堂は未だ完成していないから、地上に出て食事を摂る。

「すまない、待たせた」

「いえ、そんなことはありません」

「それじゃあ、早速食べよう」

「はい」

前線という事もあって食事は質素だ。

保存の利く干物が一匹に、麦飯、それとみそ汁。

この干物は硫黄島守備に就いている兵士の一人が休暇中に釣った物を態々俺の為に、と言って干物にして寄こしてくれたそうだ。

あとでその兵士には礼を言つて、酒の一杯でも振る舞つてやらねばならんな。

「申し訳ありません、土官用の食事を用意する事も現状ではままならず……」

「いや、気にするな。こちらが満足に補給をしてやれないのが悪い。それに本土や艦隊に居る時の俺が恵まれているのだ。これが普通という事だろう。俺はこういう食事の方が好きなのでな、気にする必要は無い。それに、今回は少しばかり華を添えられる」

そう言つて、持つて来た日本酒を机の上に置く。

「おお、久方ぶりの酒ですな」

「ああ、遠慮せずに飲んでくれ」

日本酒を見た片浜少将は目を輝かせて喜ぶ。

そんな少将を見て少しばかり笑みが零れた俺は、一升瓶の栓を開けて少将のコップに注ぐ。

「ありがとうございます。つと。それでは私も注がせて頂きます」

「ああ、ありがとう」

それぞれ、互いのコップに日本酒を注いで、音頭を取った。

「それでは、乾杯」

「乾杯」

談笑しながら食事を進めた。

片浜少将は、固つ苦しいと言うよりも結構朗らかで人に好かれるタイプらしい。

部下達からもよく慕われているし、末端の兵卒達からも好かれているようだ。

それに軍略の面においても優秀だ、と言える。

彼ならば、硫黄島の守りを任せられる。

食事が終わった後、自室に戻り先程の干物を作つて寄こしてくれた兵士を呼び出す。

「岩田一等兵、入ります！」

「入れ」

「失礼します！私をお呼びとの事ですが、どうかしたのでしようか？」
岩田一等兵、と名乗った彼はいきなり上級士官に呼び出されて大きな声を出して入って来たりはしているがビクビクしている。

俺だって同じ状況に立たされたら、何かやらかしたのかと怯える。
「そう怯えるな。今日の夕食に出された魚の干物、岩田が釣り上げた魚を使ったんだそうだな？」

「はっ、そうであります。お気に召しませんでしたか？」

「いやいや、寧ろ嬉しかった。ありがとう。お陰で旨い飯が食べた」

「は、はっ！ありがとうございます！」

「それで、何か礼をしなくては、と思つてな」

「い、いえ、そんな……」

「いや、気にするな。それで、礼をすると言つても手持ちには酒ぐらいしかないものでな。これをやる」

そう言つて俺は持つて来た日本酒を一本彼に渡す。

それを受け取ると、嬉しそうに抱えて頭を下げてくる。

「あ、あ、ありがとうございます！一生大事にします！」

「いやいや、飲んでくれよう？」

「はい、勿論であります！」

「すまん、態々呼び出してしまつて。用件はこれで終わりだ。重ね重ね言うが干物、ありがとう。美味しかったぞ」

「はっ、自分も喜んでもらえて光栄です！それでは、失礼します！」

「ああ」

そう言つて、岩田は部屋を出て行つた。

本当は一緒に飲んでも良かったのだが、そうすると流石に彼が氣を使い過ぎる事になるだろうしそうなつては申し訳ない。

だから渡すだけにしたのだ。

ともかく喜んでくれたようで何よりだ。

三日間の視察を終えた。

「少将、三日間世話になった」

「いえ、こちらこそご足労頂き、感謝しております」

「要請のあった物資と約束した物資、部隊は今すぐに、とは行かないが必ず送り込む。それまでは現状のまままで頑張つて欲しい」

「はっ、勿論であります」

「それではな」

「はっ、閣下の視察道中の安全をお祈りしています」

「ありがとうございます」

片浜少将と最後に握手を交わし、硫黄島を離れる。

迎えの内火艇に乗り込んで隼鷹に戻る。

「お帰り」

「ああ、ただいま。すぐに次の視察に向かわなければならん。出航だ」

「あいよ。つつても遊弋してたから針路を向けるだけなんだけどねー」

隼鷹艦橋に登り、指揮を執っている隼鷹と会話して次の視察地である南西諸島に針路を取る。

硫黄島近海から沖縄本島までは大体3日から4日程度で到着出来る。

南西諸島は、正確には九州南端の島々から始まるのだが、今回は徳之島を含めて徳之島以南の視察を行う予定だ。

徳之島2日。

沖永良部島1日。

与論島1日。

伊平屋島と伊是名島はそれぞれ1日。

沖縄本島及び伊江島などを5日。

慶良間諸島3日

久米島1日。

宮古島1日。

石垣島1日。

西表島1日。

与那国島1日。

全ての島を18日の日程で全て視察しきる予定で、これ以上の日程を組むことは出来ない。

そうすると、燃料の問題などが出てきてしまうからだ。

もし、これで足りないとなったら後日、また視察をするしかない。

ただ、自分で言うのもあれだが俺はかなり忙しい。

海軍実働部隊全ての指揮に加えて陸軍の指揮も執らねばならないし、それに付随して一切の書類が一度俺の所に上がってくるからそれを全て、秘書艦の誰かの手助けがるとはいえ捌かねばならないし、他にも幾つもの仕事がある。

だからこそ視察に割ける時間と言うのは、早々取れるものではない。

いやもう、何で俺はこんな馬鹿みたいな量の仕事を殆ど一人でやっつてんだ？と一時期考えたりしたが、今じゃ仕事をやらせて貰えないと手持無沙汰だし、滞ることがあるのは事実だからどこか不安な気持ちが出てきてしまう。

だから寧ろ仕事をさせて欲しいと言う、なんともまあ見事な社畜根性が養われてしまった。

うーむ、今更だが末期なのでは？

とは思うがもう手の施し様が無いから俺自身は諦めているのだがどうにも皆は違うようだ。

事あるごとに休め休めと大合唱するもんだから、俺は肩身が狭い。

話を戻そう。

視察を行い、時間的な余裕が足りないと判断した場合は一応書き込んで後日何処か時間を見つけて、という事になる。

しかし、先程も言った通り時間的余裕が仕事の都合上あまりないのでこの視察期間中に強行軍とはなるだろうが無理矢理にでも、それこ

そ睡眠時間を削ってでもやるしかない。

さて、南西諸島までの道中はこれと言ってやる事が無い。

硫黄島への物資や人員の手配に必要な書類は向こうで全部終わらせてきたし、後はこれを軍令部の中代大将や広野中将達に上げて許可を貰うだけだ。

実質的な陸軍の指揮権も持っている俺は、陸軍の方で必要な書類は全て許可を出したし、海軍の方で必要な俺の許可である判は押してあるので、後はそれぞれの必要な部署の長の判だけとなる。

うーむ、こう考えると俺にだけ矢鱈と権力と言うか、そう言うのが集中しすぎている気がする。

どうにかしたいが、任せられる人間がいなからどうしようもないと言うのが実情なのだ。

艦娘と艦体、妖精を指揮下に置けなければならないと言う前提条件がある以上仕方が無いのかもしれないが、仕方が無いで片付けていい問題じゃないだろう。

まあ、今すぐに解決出来ない問題に頭を悩ませてもしようがない。

そう言えば、陸海軍の飛行機乗り達などは空を飛んでいる時に食事などはどうしているのか、と言う疑問を一度ぐらいは持ったことがあるだろう。

実際、俺もどうしているのか気になってはいた。

そこで、どうしているのか聞いてみたところ、結構驚きの答えが返って来た。

そもそも、軍隊やそれに類する組織と言うのは総じて肉体労働、それも戦場を命懸けで駆け巡り戦わなければならないと言う、全職業中屈指の過酷さを誇る。

それゆえに栄養価の高い食事が常に求められる。

しかも、軍隊、陸海空全ての兵士達を上から下まで数えるととんでもない大所帯になる。

少なくとも国内単位で考えれば他に肩を並べることが出来ないぐ
らいの社員を抱えた超大企業、とも言い表せる。

我々日本陸海軍で考えれば、各方面に展開している陸軍の42個師
団84万人に加えて日本本土で防衛や訓練を行っている師団が38
個師団76万人。合わせて160万人。

そこにあれやこれやの職種を加えていくと陸軍だけで220万人
を数え、更に海軍全体でも陸戦隊や艦隊勤務、陸上で働いている各部
署、工廠などの作業員などを含めて20万人を数える。

合わせて180万人。

ただ、多いと感じるかもしれないが俺がこの世界に来る前のハワイ
諸島奪還作戦前時点が全盛期だったのだが、その時は2〜3倍ほどの
人数が軍務に就いていた。

人類が深海棲艦を押し返し、ハワイ諸島奪還作戦失敗の後から各地
の部隊は軒並み消滅していったのだからこの数にまで減ってしまった。
た。

ともかく、これだけの数を食わせなければならぬのだから国内の
食糧事情が良くなるはずも到底有り得ない。

それでも軍への食料供給を圧倒的に優先しているのは前線が崩壊
すれば、食料事情の改善、などと言える状況では無くなるからだ。

と、言う訳で軍隊と言うのは今でも優先してありとあらゆる物資が
送り込まれている訳だ。

軍隊に必要な食事と言うのは、特に前線に進出した部隊があればあ
るほど栄養価が高く、量があり、そして指揮を保つ為に旨いものでな
ければならない。

更に付け加えて輸送に手間が掛からず保存が利くものでなければ
ならない。

これを満たせる食事、と言うのはかなり難しい。

ただ、戦闘ともなるとそんな食事を作っている暇もないので、その
時はまた別の物を食べるのだ。

例えば、^{ほし}糲いと言うものがある。

これは、聞いたことがある人もいるかもしれないが具体的にはどんなものなのか知らない人も多いだろう。

簡単に言えば、蒸した米をカラツカラに乾燥させたものだ。

そのまま齧る事も出来るが、お湯に入れて戻せば湯漬の飯として食べる事も出来る。

大昔の、戦国時代の物であるがこれが意外と馬鹿に出来ないぐらいの保存食なのだ。

しかも米と言うのは小麦に対して高カロリー、エネルギー源として優れている。

基本的に今の日本で小麦を使った食事、と言うのはうどんぐらいしかない。理由としては先程の説明通り米の方がエネルギー源として優れている事。そして小麦よりも米の方が日本は生産されているし、調達するのも容易、余程料理をしたことが無い奴ぐらいでなければ米を炊けない、なんてことは無いからだ。

軍ではそもそも飯はんごうすいさん盒炊爨が必修科目なのだから、下手糞な奴は居たとしても出来ない奴と言うのは居ない。

これが出来ないと言う事は前線で飯が食えないという事に他ならないからだ。

米は洗って適切な量の水を入れて、あとは火にかけるだけ、と言うざっくり行つてしまえばこの程度の作業工程しかない。

ただ前線では真水は貴重だから洗わないとか、洗つても1度だけと言うのが普通だ。

実際は飯盒炊爨と言うのは意外と難しいのだが、その辺の話は割愛しよう。

それに比べて小麦、と言うのはまず砕いて粉末状にしなければならぬし、それに水などを加えて捏ねて形を整えてうどんならば切つて茹でるで済むがパンともなるとそうはいかない。

前線では常に、敵に脅かされている状況なのにそんな悠長な事をしているのか、と言う訳である。

軍隊における、特に前線の部隊にとっての食事と言うのは、

栄養価が高い事。
量の確保が容易である事。
輸送に手間を掛けなくてもよい事。

の3つの条件に付け加えて、野営で無い場合は以下の条件が加わる。

美味しい食事である事。

調理に時間を掛けずともよい事。

長期保存が可能である事。

など大まかな感じで言えばこの2つも併せて考えなければならぬ。

パン、と言うのはこれの調理に時間を掛けずともよい、と言うのに思いつ切り引っ掛かる。

長期保存、と言う面から見れば炊いてしまった米もパンも腐り易い事には変わらないが小麦は米よりも保存が難しい。

正直言って、米は常温でも炊く前であれば割と保存が出来るのだ。

だが小麦はどういう訳か常温で保存しようとすると黴カビが生えたりしてしまう。

そうなる冷蔵庫に入れなければならないのだが、スペースを取るから余り好まれない。

本土であれば問題無いのだが前線の限られた冷蔵庫だと大問題になる。

前線に送られても直ぐに、その日の内か次の日ぐらいまでに使われてしまうのが実際だ。

他にも肉や野菜など絶対に保存しておかなければならないものが多く、主食は二つも要らん、と言う訳である。

他には、インスタント味噌汁に当たる、粉味噌と言うものもある。

あとは乾燥醤油などだ。この二つは簡単に言えば、乾燥させて粉状にしたものだ。

味噌汁にする事も出来るし糰を湯で戻し、振り掛けて食う事も出来る。

乾燥醤油は水を少し加えて戻して使ったりも出来る。

この二つはタンパク質と塩分の補給が出来る。

ただ、この2つの食品はあくまでも野営や戦闘中に食べるものであつて常日頃から食べている訳では無い。

糰と粉味噌、乾燥醤油などは保存性と輸送に掛かる労力、そして運べる量を求める為に味に関してはあまり美味しくないと言うのが実際の所だ。

俺も食べたことが何度かあるが、お世辞にも美味しいとは言えない。ただ、これでも戦闘中、それこそ長期の戦闘になればごちそうだ。食えるんだったら何でも食わなければ戦闘なんてやってられないからな。

と、軍隊と言つても常日頃から前線で野営をしている訳では無い。後方や、前線と言つても陸上戦が行われていない場所であれば炊いた米におかずと汁で一食を摂っている。

メニューとしては、主食であるご飯のほかに、

魚のフライ。

ただし、現地で釣り上げるか補給があつた近日に出る事が殆ど。

肉うどん。

肉は現地調達が出来ないので、もっぱら補給で送られてきたものが無くなれば次の補給が来るまで出ない。

味噌汁。

冷蔵庫が機能している間は誰もが思い浮かべる味噌を使つての味噌汁が出る。

ただし、南方方面など高温多湿な地域だと、冷蔵庫が故障などして使えなくなると、すぐに腐るのでその際には大量の味噌を毎日毎食、

食べる事になる。

たくあん。

まあ、これと言って説明する事は無い。

強いて言えば味噌と同じで冷蔵庫が使えなくなるとたくあんフルコースになる。

一番最悪なのは味噌と沢庵が同時にフルコースになる事らしい。それでも食材と組み合わせているからマシだが。

これ以外にも様々なメニューが出るので、砂糖などがあれば味は薄いものの月に1、2度程度は甘味が提供される事もあるから想像しているよりもずっとメニューは豊富だ。

だが、野営を行うとなるとそうもいかない。

野営中に食事を用意するには、米を飯盒炊爨で炊くのだがやはり「米を炊く」と言う作業は手間がかかる。

しかも何度も言う通り、炊いた米と言うのは一気に保存性が悪くなって暑い地方、南西諸島や南方方面だと炊いた米は1日も持たずに腐るし、冬の北海道など寒い地方では凍ってしまって食えない。

だから後方で一気に炊いて前線に運ぶと言う手段が使えないのだ。

だが、これらの問題を解決する方法が2通りある。

一つは飯盒炊爨で米を現地で分隊ごとに食べる直前に炊く方法。

二つ目は飯以外の保存の利く糧食を携帯しておくことだ。

前者については、確かにこれもあるのだが米を自力で運ばねばならず重量のある装備もあるのだから兵士達からするとあまり嬉しい事では無い。

しかも火をおこしたりしなければならず、そうなると煙などで敵に位置を悟られる可能性も大きい。

などと理由が幾つかあるが前線ではあまり飯盒炊爨というのは思いの外行われていないのだ。

では2つ目はどうなのか、と言うとだ。

先程説明した、粉味噌や乾燥醤油なども、保存が利いてあまり嵩張らない糧食を持ち運ぶのだ。

戦闘中であると糧食で食事を済ませるのが殆どだ。

具体的な物で言うと、乾パンだ。

乾パンと言うのは、ビスケットを元に開発されたもので、言ってみれば日本版の軍用ビスケット、と言う訳である。

味が薄く、飽きにくい反面、味気なくて食べにくいと言う点も存在するが金平糖を付属させて味に変化を付ける工夫もされている。

他にも、圧縮口糧と呼ばれるポン菓子に似たシリアルや、各種缶詰、マリモ羊羹と同じようにゴムで封入されたゴム玉羊羹もあるし先程から出てきている粉味噌、乾燥醤油など意外と種類がある。

あとは、飲み物としてインスタント甘酒もあるから意外と種類がある。

それでは漸く、飛行機の搭乗員達の食事について話そう。

そもその前提として、陸軍や海軍陸戦隊の歩兵などの陸で戦う彼らなどと違って進出した先で野営をするという事は殆ど無い。

出撃しても、空母や飛行場に戻ってくるのだから当然と言えば当然だ。

基本的に飛行場や空母で出される食事を食べるだけである。

現地で野営をするとなったらそれは、撃墜されたときぐらいな物だろう。

戦闘時に配給されるメニューは握り飯とおかずの組み合わせが殆どで、艦隊直掩任務に就いて敵機と戦う迎撃機であればこれが適用される。

勿論だが俺もこのメニューを食べる。

もっぱら握り飯にたくあんと味噌汁の組み合わせが殆どなのであまりレパートリーがあるわけでは無いが、戦闘中の飯、と言えばこれ

である。

だが迎撃などでは無く、敵艦隊への攻撃に向かう搭乗員や、陸上の敵飛行場攻撃を行うために出撃した陸軍飛行戦隊の搭乗員達はどのようにしているのか。

飛行時間が長時間に渡る場合には機内で食べる事の出来る弁当が支給される。

メニューは巻き寿司や稲荷寿司、サンドイッチなどだ。

これらの共通点は、操縦桿を握りながらも片手で食べられるもの、という事だ。

サンドイッチも皆が思い浮かべる様な三角形などでは無く、巻き寿司の様にパンで具を巻いた状態になっていて乾燥を防ぐ為にパラフィン紙の包装紙に包んで支給される。

パラフィン、と言うのは何と言えば良いのか、簡単に言ってしまうば石蝋の事だ。

それをグラシン紙と言う、紙風船に使われる紙に塗布、浸透させたものがパラフィン紙だ。

見た目は透けて見えるほど薄く、そして茶色のような感じで多分見た事は一度ぐらいならばある筈だ。

弄ってみた感触などは、トレーシングペーパーなどに似ているかもしれない。

因みにだがパラフィン紙を作るのにはグラシン紙だけでは無く模造紙やクラフト紙なども使われるのでどちらかと言うと総称、と言った方が正しいかもしれない。

巻き寿司は通常の切り分けたものを弁当に詰めたほか、細巻きを切らずにそのまま携行して喫食時にはそのままかぶりつくのだ。

稲荷寿司はシャリのみだけでなく、多少の具材を入れた五目御飯の様なものもある。

あとは寒い上空でも暖かい飲み物を飲めるように魔法瓶などを携行している。

南方では、サイダーが人気の様で瓶をそのまま積んでラツパ飲みし

ているらしい。

ただ、味は元いた世界のサイダーよりもずっと薄いが。

これらを考えるに、飛行機の搭乗員と言うのは他兵科と比べると随分と優遇されているように見えるが、それだけ存在が重要であり、任務が過酷という事だ。

なにしろ肉体労働と頭脳労働を同時に行わなければならず、加えていつ死んでもおかしくはない。

陸上であれば、まだ即死でも無い限り現代医学によつて治療は可能だ。

だが航空機に乗っていると、病院からは遥か数百km先を飛んでいるし被弾したときに無事である保証なんてどこにも無い。

職務もどの兵科よりも最前線を飛ばねばならないし戦闘機隊は制空権が取れなければ艦隊全滅、陸上部隊は皆殺しになってもおかしくはないからだ。

流星は敵艦を沈めると言う、対空機銃をぶつ放してくる奴らに突っ込まねばならない。

それらの過酷さを考えればこの待遇は当然と言える。

不時着したときはどうするのか、と言うとそれもちゃんと対策されている。

機内にアルミで作られた非常食を詰め合わせた「不時着用非常食箱」なる携帯食料があり、その隣に最低限必要となるであろうサバイバルキットも載せられている。

不時着用非常食箱の中身は基本的に数食分の缶詰が入れられている。他にも飲料水が幾らか。

サバイバルキットには、

ナイフ

釣り糸と短めの折り畳み釣り竿

コンパス

飲料水を確保する為の簡易な脱塩装置

発煙筒（昼間に使う煙が出るものと夜間に使う光を発するもの）

マッチ1箱（防水袋に入れられている）

などが入っている。

南方方面では不時着した場所ば海である可能性も高いが救命ボートを積載するほどの余裕は無いので省かれている。

ただし、島が群島状になっているか、スラウエシ島の様に広大な島である事が殆どなので特段問題は無い。

海軍では着衣状態での遠泳が必修科目なので、搭乗員でもそれは変わらず、搭乗員用の服装でひたすら泳がされるのだ。

正直言つて地獄であるが、命が懸つているとなれば誰だってやるだろう。

まあ、敵奥地にでも不時着すればこれらを使うが、基本的に作戦などを行う場合には潜水艦隊を墜落した搭乗員達の收容の為に近海に配備しているので早々起こりえないことだ。

太平洋のど真ん中で撃墜されたら最寄りの島まで1000kmなどあるのだ、泳げと言う方が無理である。

まあ食糧事情に関してはこんなものだな。

日本軍と言えば、『飢餓と餓死』と言うイメージが付いてくるが糧食などん研究はよく行っていた。

問題なのは、そのせつかくの糧食を兵士達の元に届けるための『兵站』に極めて欠陥があったことだ。

海上輸送路はアメリカ軍に容易に断られてしまったし、中国大陸はそもそも広大過ぎて現地まで運べなくなった。

日中戦争、太平洋戦争は日本と言う国の国力を大きく逸脱した戦争であったために物資の準備、輸送が物理的に不可能になったことも大きく関係しているだろう。

兵站と言っても食料弾薬だけでなく、現地の気候に合わせた服装や医薬品（例えば南方方面で言えばマラリアやアメーバ赤痢などに対する医薬品）、雑多な生活用品、スコップからツルハシ、ブルドーザーなど建設機械、燃料、それらを輸送するためのトラックや輸送船が必要だ。

更に言えばそのトラックや輸送船を動かすための燃料と人員もいるのだ。

物資を入れる箱も必要だ。

それを考えると、数万人規模の戦闘や生活に必要な物資を送り出すとなると相当な大仕事だ。

品目の書かれた書類と睨めっこをしながら適切な場所に適切なタイミングで適切な物資を送り込まねばならない。

これに失敗すると、欲しい物資は弾薬なのに食料が届いた、と言う事態ならばまだ良い。

最悪なのは前線では物資が欠乏しているのに港には物資が山積みと言う悪夢になる事だ。

これらを行うには高度で専門的な知識と専門の将校が指揮を執らねばならない。

大元の指揮は俺が執っているが、基本は補給将校に任せている。俺が口出しをしても碌な事にならないからだ。

我々も補給将校と言う専門将校が補給に関して担当しているぐらいなのだから素人が手を出せばどうなるかは目に見えて明らかだろう。

旧日本軍でも少なくともエリート将校は兵站の重要性をしつかりと理解していたし補給を行うための手立てや、輸送航路を維持するための努力をしていた。

ただ、理解を示さない人間の殆どが兵站の重要性を理解している人間よりも階級が高かった、だからこそ意見を聞き入れられるという事は

早々無かつたし、上級将校に理解を示している人間がいたとてそれら兵站の重要性を説いたところで多数決で必要が無いと言われてしまえばどうしようもなかったのが実情だ。

これはやはりどの軍隊でも言えることだから一概に日本軍が酷いとは言えないが、それでも兵站に関する欠陥の大きさは他国軍と比べると致命的だろう。

これらの兵站を無視して行われた作戦の代表的なものはインパール作戦だろう。

現実的な輸送力の無さを精神力と言う言葉で誤魔化して強行、破滅していくこともあった。

兵站を断たれた南方の部隊の多くは餓死者が出る程の飢餓状態に置かれ弾薬も無く、当たり前と言えば当たり前だが戦闘どころの話では無い。

餓島、なんて当て字をされるぐらい酷い状況だったのだから、少なくとも俺の様に艦隊を指揮して前線の陸戦に参加しない俺には到底分かりえない辛さである。

余談ではあるがアメリカ軍はそんな日本兵の上に豪華な寿司の画像が印刷されたチラシをばら撒いて降伏勧告をしたそうだ。

今の我々陸海軍は、それらを省みて教訓として生かすことが出来る。

陸海軍は兵站の重要性を理解しているが故に満足とは行かないが護衛も就けている。

深海棲艦による通商破壊がよほど苛烈にならない限りは「現状の維持」だけならば可能だ。

ただ、やはり輸送船団に就けられる護衛艦隊の数は少ないだろう。深海棲艦の奴らが本腰を入れて通商破壊作戦を実行してきたら、とてもではないが現在の輸送量を保つことは出来ないだろう。

その前に、どうかして輸送航路の安全を確保しておかないといけないのだが、それは後々の事だ。

と相も変わらず隼鷹艦橋の椅子に腰掛け、指揮を執る隼鷹の横顔や
ら駆けていく乗組員達を眺めながら南西諸島近海に到着した。

徳之島から伊平屋島、伊是名島の視察はこれと言って問題は無かつ
た。

南方方面や硫黄島と違い本土から近く、物資輸送も余り手間が掛か
らない事も要因だろう。

地下陣地は既に予定されていた分は建設が完了し、今は強度などの
面から見て許される限りの拡張などを行っている状況だ。

そして、沖縄本島の視察が本日から開始される。

よし、気合を入れなければな。

第44話

今日から沖縄本島の視察を行う。

と言っても、今までの視察と変わらずに防御陣地の構築状況などを見て、必要な物資などがあれば随時リストアップ、それを本土に送ると言うだけの話だ。

沖縄本島へは隼鷹から流星に乗って那覇飛行場に向かう。

「提督、お待ちしておりました。沖縄本島と南西諸島全域の防衛司令官の桑原陸軍中将であります」

「出迎えご苦労。湯野だ。早速だが視察を始めよう。あまり、時間が無いものでな」

「承知しております。島内はそれなりに広い故、ジープと坑道内に通っている軽便鉄道を利用しましょう。その方が時間を無駄にせずに済みます」

「分かった」

沖縄本島を含む南西諸島全域の防衛司令官をしているのは桑原中将だ。

彼は、勇猛果敢と言うよりも冷静に戦況を分析して作戦を決めるタイプのも、いわば参謀タイプの司令官だ。

臆病とはまた違って、攻める時は攻めるが必要が無ければ攻撃を加える事もせずにやり過ぎず事すらする。

因みにだが、彼は南西諸島奪還作戦において師団長を務めていた経緯がある。その時は少将だったのだが。

その際に師団長クラスの上級将校が戦死が相次いだのだが桑原中将は一連の沖縄本島での戦いを生き残った士官だ。

他にも2人生き残った上級将校も居るには居たのだが、戦傷によつ

て戦線復帰は困難と判断された。

そのために2人は療養後に陸軍士官学校と陸軍大学にそれぞれ校長として赴任している。

桑原中將は沖繩本島奪還が成功した後、師団長から方面防衛司令官に昇進。

そのまま本土に戻らずに南西諸島防衛の指揮を執り続けている。荷物を預けて、すぐさまジープに乗り込んで視察を始める。

硫黄島などは島自体の面積が小さかったから歩きでも問題無かったが、沖繩本島はそうもいかない。

何せ沖繩本島の地下には総延長100kmを軽く超える地下坑道が張り巡らされているのだから。

主だった防御陣地を構築しているのは西原飛行場、那覇飛行場、嘉手納飛行場、読谷飛行場の飛行場周囲2km。

さらにそれぞれの飛行場を繋ぐ地下坑道が3本と軽便鉄道用の地下坑道が2本。

そして石川岳と恩納岳を繋ぐ一帯、名護岳、安和岳を含む八重岳と嘉津字岳周辺、ネクマチチ岳、与那覇岳と照首山を繋ぐ一帯。

上記の主要防御陣地を全てコンクリート製の地下坑道で繋ぎ、更にあちらこちらの小さな防御陣地を繋ぐと100kmを軽く超える。

各主要陣地には野戦重砲などが運搬軌条に載せられて即座の移動を可能とした状態だし、砲撃を行う場所は30cmの装甲扉で守られている。

現在も、食料弾薬の備蓄用倉庫が増設、拡充されており更には小規模ではあるが砲弾薬などの生産設備も送り込まれそれらの生産に必要な資材を入れておく倉庫。

航空燃料、戦車やトラック、ジープ、沿岸防衛用の魚雷艇などに使う燃料の燃料タンクも地下に作られている。

燃料タンクは厚さ6mの鉄筋コンクリート及び25cmの鋼鉄の装甲板に守られている。

地下坑道自体も鉄筋コンクリートの厚さが平均20cm。

防衛司令部にもなると鉄筋コンクリートと鋼鉄板を合わせて50

c mもある。

それだけの防御を施して漸く深海棲艦の攻撃を凌げるのだ。

防げる、と言う訳では無く凌ぐことが出来ると言う時点で深海棲艦の物量などがどれほど凄まじいものか分かってもらえらるだろう。

更には、主要な地下坑道には軽便鉄道が敷かれており、もし深海棲艦の上陸を許した場合は主要防御陣地や各地の防御陣地が陥落する、となった場合はその防御陣地から後方の防御陣地への迅速な移動と最前線への配備を可能としている。

更には北部、中部、南部と3カ所に防衛司令部施設を備えている。理由としては敵がどこに上陸するか分からないからだ。

例えば北部に上陸された場合、北部に防衛司令部施設を置いたままだと、そこが陥落した瞬間に沖縄本島の組織的抵抗が終了してしまう。

基本は中部に存在するのだが上陸した地点によって防衛司令部を移すのだ。

我々の想定としては、恐らく南部に上陸してくるのではないかと考えている。

理由としては基本的な主要施設、飛行場や我々が利用する港湾施設が集中している。

そこを陥落させると、補給や航空支援などを守備隊が受けられなくなるのだ。

そう考えると、恐らくだが上陸するとなると南部なのではないか、と言う推測が立つ。

我々も南西諸島奪還の際には南部へ上陸をしたわけだし、その推測の信憑性と言うか、その可能性が高い。

だから、南部の守りが最も固いのだ。

機甲師団の大部分が南部に配備されていて、機甲師団はIV号中戦車H型を主力として配備されており、機甲師団とは別に市街地戦闘における戦車運用の様々な事を想定したりするために試験的な意味合い

も含めてVI号ティーガー重戦車も一個中隊が配備されている。

ティーガー戦車大隊は本来、配備されずに本土の倉庫でお蔵入りだったのだが一つ問題が上がった。

IV号中戦車だと、深海棲艦の戦車に対抗して撃破する事は出来ても、こちらも然りだったのだ。

双方共に75mm戦車砲を搭載しているのは良い。

射撃精度で言えば、比べて見たことが無いので分からないが恐らくIV号中戦車の方が射撃精度は良い。

工業精度によって変わるので、一概には言えないが。

少なくとも、現在の日本の工業精度は以前と比べるとずっと高いので問題無かろう。

ただ、IV号中戦車の防御力はお世辞にも75mm砲を防ぐのに十分とは言えない防御力なのだ。

当たりさえしなければ良い、と言うが欧州の広大な戦場ならまだしも沖縄本島などの島嶼帯の防衛となると、基本的に近距離での戦闘になる。

しかも熱帯雨林が広がっていたりする訳だから、必然的にエンジン音が聞こえてくる距離になると数十mと言う近距離だ。

そうなる、如何なIV号戦車と言えども撃破されるのは必然だ。とすると、防御力が高い方がいいのだ。

しかしIV号戦車の防御力をこれ以上向上させるのは無理がある。シウルツェンと呼ばれる増加装甲を施してはいるが、どちらかと言

うと対戦車ライフルや個人用対戦車火器、所謂パンツァーフアウストや榴弾などに対する防御が主目的だ。

欧州戦線だと、対戦車ライフルが猛威を振るっていたが、少なくとも太平洋戦線において対戦車ライフルと言うのは使われない。

深海棲艦もパンツァーフアウストの様な歩兵対戦車と言う構図の場合に有効な個人携帯用対戦車火器を有しているからだ。

対戦車ライフルは基本、20mmクラスであればIV号戦車の車体側面を容易に貫通する。

だが、シウルツェンを装備すると驚くことにそれが出来なくなつて

しまうのだ。

対戦車ライフルの弾丸と言うのは、軽量でも貫通力を高くするために通常の物よりも炸薬が多い。

つまりは、

「運動エネルギー（＝スピード）で装甲を貫通させる」

という事だ。

なので弾丸は硬く質量があるものに弾かれやすい。

更に言えば角度を付けられてしまうとより弾かれやすくなってしまふ。

しかしながら、何故太平洋戦線では対戦車ライフルが使われていないのにシュルツェンを？

と疑問に思うだろう。

理由としては、シュルツェンが榴弾に対しても効果を発揮するからだ。

榴弾と言うのは目標物体に接触した瞬間に信管が炸裂する。

シュルツェンと車体の間には隙間があるのだが、そうすると榴弾はシュルツェンに防がれて車体本体にダメージを与えられない、と言う訳である。

シュルツェン自体の厚さは5mm～8mm程度と装甲車でももつとマシな装甲だろう、と言うレベルなのだが。

因みにだがこれが発展したのがMBTなどに使われている複合装甲である。

IV号中戦車の側面装甲は型にもよるが30mmとお世辞にも厚いとは言えない。

そうなると榴弾でも容易に貫通する事が出来る。

だがシュルツェンがあるとその榴弾は意味を成さない。

ただし、シュルツェンは徹甲弾などに対しては丸つきり無意味なので榴弾など限定だ。

更に言ってしまうえば遅延信管でシュルツェンを貫通させてしまえ

ば、まあ効果はあるのかもしれない。

とすると、シウルツェンも万能と言う訳では無い。

これらを解決するのに、もつとも手っ取り早い方法が装甲を厚くすればいい訳だ。

だが前述の通り、IV号中戦車の装甲を厚くするのは無理がある。

となると、子の戦車よりも装甲が厚い戦車を使えば良いと言う訳だ。

そして白羽の矢が立ったのがVI号ティーガー重戦車だ。

雨が降った熱帯雨林の泥濘では無く、市街地などの土とはいえしつかりと固められたり舗装された道路ならば十分以上に使えることが分かっていった。

ならば使えが良いではないか、と言う訳である。

確かに熱帯雨林の中などで、正直言えばティーガー戦車なんて使えないしそもそもIV号戦車ですら木々が密集している場所では使えない。

砲身が木に引っ掛かって絶対に碌でもない事になるに決まっている。

沖縄本島などの熱帯雨林ではケツテンクラートがギリギリ使えるぐらい。

地上での活動となると徒歩が基本だ。

大規模な物資の移動や部隊の移動は地下坑道や地下を走る軽便鉄道を使えば良い訳だし、無理して地上を行く必要が無い。

切り開けば、まあ使えなくもないがそこまでしてやる理由も無いし、切り開いた道路の維持にとんでもない労力が掛かる。

しかも森の中だと、戦車内からでは周囲を探る事が上手くできない。

南方方面の面積の大きな島ならば密林の中でも狙撃などの危険が高いが車長が身体を出して周囲を見渡すことが出来る。

だが、沖縄などの面積がそこまで大きくない島だとそうもいかない。

車内から見るのが精々だ。

だが、歩兵を随伴させれば話は別だ。

万全とは言えないが、歩兵が居る居ないで周囲の状況を知る事が十分に出来る。

だが常にそれらが出来ると言う訳では無いし、そうなるとやはり、と言う訳だ。

元々、徹底した持久戦を想定している我々海軍としては、ティーガーの前線配備を渋っていたのだが。

なにせディーゼルエンジンではなくガソリンエンジンを使っているからIV号戦車にも言える事だがエンジンに被弾した場合、ディーゼルエンジンと比べると圧倒的に燃えやすいし重すぎる重量故にこちらこちらの部品、特に足回りの部品の損耗が激しいから1個中隊規模とは言っても兵站到与える影響は大きい。

運転にも色々と気を使わなければならず、操縦者が無茶な運転をしようとするとはほぼ確実に足回りに何かしらの故障を起こすのだからとんでもない「整備士泣かせ」である。

だが陸軍から防衛上、IV号戦車やIII号突撃砲などだけでは不安が残る、と言われてしまうと強引に突っぱねる事も出来なかった。

陸軍側としてもティーガー戦車の運用上の欠点を理解していたのか、

「別に機甲師団全部を置き換えるわけでは無く、あくまでも試験的に中隊程度での運用を行う」

と海軍、と言うか俺に打診があった。

まあ、陸軍の憲兵師団を除いて陸軍は俺の指揮下にあるから当然なのだが。

中隊ぐらいならばまあ、良いか……？という事でティーガーの配備を沖繩本島に限り許可した。

戦闘になった場合、どれほどの威力を發揮するか分からないが、物は試し、と言う訳である。

流石に南方方面は無理がある。

陸軍側も当然承知していたから、試しに聞いてみたら、

「あんな馬鹿デカくて重い戦車を密林の中で運用出来ない。木に砲身が引つ掛かって戦闘どころではない。沖縄でも南部での運用を主眼に置いているから北部の熱帯雨林での運用は恐らくしない」と真顔で言われた。

良識があつて良かった、と心の中で安心したのは内緒だ。

ただ、今回の視察でティーガーの運用状況を見て、説明を聞いたが北部の舗装されていたり固められた道路であれば丁寧に運転すれば十分以上に扱えるのだ。

問題なのは、その重量に耐えられる道路を整備する事だったのだが、一度整備してしまえば爆弾なんかで吹き飛ばされない限りは数年に一度修理をしておけば問題無い。

何と言うか、戦車と言えばこんな感じのシルエット、と言うイメージがティーガー戦車だから動いている所を見たとき、年甲斐もなくはしゃいでしまった。

坑道に関しては先程説明した通り、軽便鉄道などを含めて総延長100kmを軽く超える地下坑道が作られている。

しかも、爆撃でも戦艦による砲撃でも被害が出ない様に地下20m以下に作られている。

山岳部では、各所の砲台や防御陣地には地下エレベーターを中央に設置し各階層に運ぶ形になっている。

ただし、電力がある場合にのみ使えるので電力が無くなった場合は自分で運ばねばならないと言う地獄が始まる。

そのための訓練はしているのだがやはり長期間の、それこそ想定しているのが半年レベルでの持久戦だ。

最初から発電用の燃料が使えなくなったとしたら丸々6カ月間の間、15cmの数kgもある砲弾を高低差数百mを往復して運び続けなければならぬ為に余りにも実用的では無い。

ただ、燃料が尽きるという事は早々無いだろうからこれと言って問

題無いだろうからそこまで心配している訳では無いのだが。

理由としては、もしここが深海棲艦の攻撃、それこそ上陸に晒された場合、沖繩本島に対しては間違い無く砲爆撃が行われるであろうと容易に予測出来るからだ。

そうなれば飛行場はたったの十数分で使い物にならなくなるだろうし、精々迎撃を行うので精一杯。

敵艦隊に攻撃を加えることが出来たとしても、1度が限界だろうか。

そうなった場合は、燃料を満載し敵艦隊を攻撃するか迎撃を行った場合は近隣の飛行場のある島に退避する手筈になっている。

一番近いのは沖永良部島や徳之島、奄美大島あたりだろう。

これらの島に機体の燃料や損傷状況、搭乗員の健康の有無でそれぞれ降りる場所を決めるのだ。

こうする事で、無理に損傷した飛行場に着陸する事を防ぐ。

現在、沖繩に駐留する陸海軍の航空機は水上機などを含めて既に1000機を超える。

流星などの攻撃機はほとんど存在しておらず、二式大挺などが慶良間諸島を根拠地に存在するぐらいだ。

連山の配備は未だ本土に留まっているのみで、配備するとしたら恐らくは南方方面の方が先になるだろう。

あちらなら攻撃する敵飛行場などには困らないからな。

だが南西諸島は精々が大陸方面の敵飛行場ぐらいなものだ。

しかし大陸方面の飛行場は沿岸部には存在しておらず、ある程度行ったところにしかない。

その間に監視所なんかは幾らでもあるだろうから迎撃機を整えるのにはそう手間取る事じゃない。

現状の我々陸海軍の方針としては、大陸方面には手出ししない、と言う認識で一致している。

以前も説明したが、手を出したが最後、底なし沼だからだ。

幾ら物資があろうとも、幾ら兵力があろうとも大陸へ手を出すのは自滅行為でしかない。

話を戻そう。

沖縄本島や各島の1000機を超える航空機と搭乗員を一つの島に退避させるのは不可能だ。

どう考えてもキャパオーバーも良い所である。

余り考えたくはないが迎撃や敵艦隊攻撃に出た時の損耗も考える
と恐らく先の3島で事足りるものだと思われる。

兎に角だ、沖縄本島の防御陣地構築は計画通り以上に進んでいる。
拡張工事も順調に進んでいるし、予定通りに計画を完了することが
出来るだろう。

恐らくその後にもまた拡張計画が出て次々と進められていくのだら
うが、現状これと言った問題は起きていない。

このまま順調に事が運べば、特にいうことは無いのだがなあ……。

と思っていたがそうもいかないのがこの世の常と言うものだ。

沖縄本島に俺が上陸して3日目。

視察中で今日もまたそれぞれの防御陣地や設備、施設を見て回って
地上をジープで移動していた時。

突如として島全域に空襲警報が鳴り響いた。

「何事だ!？」

「閣下! 深海棲艦の連中の空襲です!」

空襲警報が鳴り響くと、共に同乗していた桑原中将共々近くの防空
壕に押し込められる。

そのまま空襲警報が鳴り響き始めてから20分ほど経った頃。

ズドン！ズドン！ズドン！

と連続して重々しい爆発音があちらこちらで鳴り響く。

「中将、爆撃を受けるのは初めてではないな？」

「はい。本土の様に毎日ではありませんが週に一度程度です」

「で、丁度今日がその日だった、と……」

「それで片付けることが出来れば、どれほど楽だった事でしょうか……」

「十中八九、俺がここに視察に来るといふ事を掴んで居たんだろう。とすると、暗号が漏れたか、偵察の潜水艦か何かが普段の輸送船団護衛とは違う事を通報して、そこから俺が居る事を推測したか。可能性として高いのはこの二つだが……」

「一番可能性があるのは、暗号が漏れた、でしょう。閣下が仰った後者の説はそれだけで動くには余りにも賭けが過ぎるかと思われます」

「他に考えられるのは、南西諸島方面への攻勢に出る為に本島の威力偵察も有り得る。防御陣地などの偵察、確認とそれらの破壊。そう考える事も出来るが……」

「そうであるならば、一式大挺の哨戒線に上陸船団などが発見されている筈です。その報告が無い、という事は暗号漏れ、と考えるのが妥当な所では？」

「そうすると、すぐにでも暗号を変更するか、新しいものに変えなければならぬ……」

「しかし、何処から漏れたのでしょうか？月ごとの変更された暗号は水に簡単に溶けるものだったり、そうでなかったとしても確認後すぐに焼却処分する事が義務付けられている筈なのですが……」

「分からん。ランダムに変更しているから簡単だからこそ、そう簡単に解読は出来ない筈なのだ。こちらが幾つずらすのかを完全に把握しておかなければ解読するのは不可能とは言わずとも無理難題に近い」

「……スパイ、と言うのは？」

「有り得る。現在まで深海棲艦の連中のスパイは確認されていないが居てもおかしくはない。寧ろ奴らならそれぐらいの事をやってのけ

るだろう」

爆撃を受ける中、桑原中将とそう話す。

俺達が言ったように、恐らく暗号が漏れた、と言う説が濃厚だろう。偵察の潜水艦の情報だけで俺が視察している、と断定するのは余りにも無茶苦茶過ぎる。

将旗を掲げてはいるが、潜望鏡で将旗が見えるほどの距離に近づいたらこちらからも目視で確認する事が出来る。

なんならその前に水中聴音機などに引っ掛かって「敵潜発見」の報告が上がってくるはずなのだ。

故障していたら無理だが、全艦が一斉に故障を起こさない限りは水中聴音機などが全く使えなくなると言う状況にはならない。

という事はだ。

その問題が無かったという事に変わりなく、その範囲内に敵潜は居なかった、という事になる。

とすると2つ目の説は全く無いとは言わないが限り無く低いだろう。

ならば暗号が漏れた、と考えるのが自然だ。

だが問題なのは、その暗号の漏れ方だ。

単純にこちらの文書が深海棲艦に渡った、と言うのなら別にその月の暗号を変えてしまえばいいだけの話だ。そもそも輸送船を撃沈されているから有り得る話ではあるだろう。

ただ、これがスパイだったりこちら側に内通者がいる、となると話はまるつきり変わってくる。

平時、それも人間のスパイであれば警察が捕まえてればいい。

だが深海棲艦がスパイをしているとなると、当然そんな簡単にはいかない。

先ず対抗できるのが妖精や艦娘、そしてその艦体だけなのだから憲兵師団は全戦力を投入しても捕縛は不可能。

捕縛するならば妖精で構成された部隊の派遣が必須、1人だけとは

限らないから徹底的に炙り出さなければならぬ。

その手間は、単純に戦うよりもずっと掛かるし面倒だ。

だがこの2つはまだマシな方。

一番最悪なのは、深海棲艦がスパイを送り込んだのではなく人間側に内通者が居る事だ。

こうなつては誰も信用する事が出来なくなる。

軍の誰か、となると海軍は俺を除けば中代大将達という事になる。

陸軍は憲兵師団の2人だけ。

妖精は除外される。

理由としては何と云うか、深海棲艦と妖精と云うのは似ているようで全く違う存在なのだ。

突如として現れると云うのは共通している。

だがそもそもの相違点として、

深海棲艦の兵士は、現界するに当たつて一定の実力、技能を伴う。

歩兵、航空機の搭乗員、艦の乗組員全て。

しかしながら妖精は現界しても、一般人に多少毛が生えた程度の実力しかない。

もつと簡単に言つて多少鍛えている程度の人間と大差無い。

だからこそ訓練によつて実力を付けなければ実戦に参加させる事が出来ないのだ。

基本的な訓練期間として6カ月、それぞれの兵科の専門訓練を更に6カ月の都合12か月間の訓練を経て漸くそれぞれの師団や部隊に配属される。

だが新兵なので実戦で使えるかどうかは疑問が残る。

それに比べて深海棲艦は、最初から戦線投入しても十分に戦える実力を持っているのだからポンポン送り込める。

まあこれが人類が艦娘や妖精と云う味方がいても追い詰められたことの大きな要因の一つでもあるのだが違う話なので割愛しよう。

見た目もまるで違うから、妖精と深海棲艦の区別はあっさりと付

く。
夜間も妖精は人間と大差なく、訓練しなければ夜目が利かないのに、深海棲艦の連中は夜でも問題無く昼間と変わらず見えているらしい。
だがどういう訳か、航空機の搭乗員や艦艇乗組員はそうでも無いらしい。
こちらは実際に確かめたことが無いのでアレだが、こちらと同様、専門訓練や夜間用機上電探を搭載していないと航空機は運用出来ない。

砲撃戦は監視員の視力や水上電探があるから大丈夫なのだが。

まあ、話を戻そう。

人類側に内通者がいたとなると、話はそう簡単に終わらない。
内通者をとっ捕まえて裁判即刻なんらかの対策をしなければならぬ。

現状の日本にはスパイ防止法などが存在していないので、厳罰に処する事は出来ないが何らかの罪に問われるのは間違い無い。

国防に関する事なので一生牢屋生活も有り得る。

ともかく、一刻も早くこれを中代大将達に伝えなければ……。

いや、あまり考えたくはないが中代大将達も内通者の可能性があるから、出来るだけ伝える事は避けたい。

……連合艦隊司令長官と言う立場と力で独力でなんとかするしかない、か……？

俺が内通者では無い、と言う証明は出来る。

先ず、基本的に鎮守府外に出る事が無く外界の人間に接触する機会と言うのは皆無だ。

出たとしても護衛の陸戦隊兵士が見ているから下手な事は出来な

い。

もし仮に何者かと接触したとなると、全員が全員見ていた、という事にはならないだろうが単純に考えると最大で小隊や中隊単位での目撃者がいるという事になる訳だから、到底言い逃れが出来るわけがない。

それに完全武装の兵士を連れていけると言う時点で一步鎮守府の外に足を出して町中を歩こうものなら、幾ら俺が普通の恰好をしていたとしても誰も彼もがモーゼが進む大海が如く民衆が冗談抜きで避けていくのだ。

好き好んでこんなご時世に、軍関係者に関わりたくないと言うのが基本的な感情だ。

しかも、今の軍は旧陸海軍や自衛隊時代と違って民間への恩恵は限りなく少ない。

運んで来た資源の殆どが戦争遂行のために使われているから、企業は何かしらの製品を作ったり、工業機械を動かす事も出来ない。

以前までは供給されていた灯油などの暖房用燃料や最低限の発電用燃料すらターボジェットエンジン搭載型の震電が計画、開発されていた段階から備蓄に回され始め、戦線投入され始めるとマリアナ、大陸方面からのB-29襲来が激しく消費量は減るところか増加の一途を辿るばかりで実戦配備される震電が多くなればなるほど民間に回せるだけの灯油すらなくなった。

拳句の果てに、あれだけ派手に作戦やB-29迎撃戦を実行しているのにも関わらず、新聞では南西諸島奪還成功！南方方面奪還成功！と軍は触れ回っているのにも関わらず、期待していたほど生活は良くならない。

それどころか食料の徴発量がどんどん増え始め、もつと辛くなる一方。

今では配給された食料で一日一度の食事です。

お陰で老人や小さな子供と言った体力や免疫力が低い者からどんどん死んでいく始末。

以前に話した通り、日本の人口は既に2500万人にまで大きく減

少。

そんな事態を招いた軍や政府の人間に関わりたくない、と言うのは至極当然な感情であろう。

今時、そんな軍部や政府に関わるのは精々新聞記者ぐらいなものだ。

誰だって、こんな状況になっている元凶とは関わりたくないと思うだろう。

話を戻せば、現状俺と密接な関わりがあるのは妖精達や艦娘だけだ。

ここしばらくは中代大将達とも連絡こそ取るが直接会う事は殆ど無い。

鎮守府にいる時は、風呂と睡眠以外は常に艦娘の誰かが傍にいるし外には護衛の陸戦隊が完全武装でプレハブ執務室兼自宅をがっちり防御陣地を作って守っている。

外から強行突破で入るのはほぼ不可能、内側から崩すのも難しい。

ここまで来れば、俺が外部の誰かと接触する事がどれだけ難しいか理解してもらえらるだろう。

ただ、暗号がスパイや内通者によって漏れたのならば内部を掃除すれば良い。

だが口にはしていないが、もう一つだけ可能性があるものがある。この爆撃を陽動に、深海棲艦がどこかしらに攻勢を仕掛け、上陸してくる事だ。

手っ取り早く俺達の息の根を止める事を考えると、資源地帯である南方方面が最有力だろう。

あそこを抑えられてしまうと、日本への資源輸送はまるつきり出来なくなってしまうし、無理に輸送船団を艦隊と共に派遣しても碌な結果にはならんだろう。

それ以外にもジワジワと、だが確実に干上がらせられる方法としては輸送航路を断絶する事だから、中継拠点や空中援護の為の戦闘機を送り出している南西諸島への攻勢も考えられる。

そうなれば、南方方面を抑えていても輸送航路が滅茶苦茶になるので深海棲艦からすると輸送船を沈め放題、と言う訳だ。

何よりも、南西諸島を拠点として本土上陸と言う最悪の一手を掛けられる可能性が高くなる。

南西諸島の失陥は、喉元に刃物を突き付けられるどころか刃先が刺さっている状態に等しい。

どちらとも取られてしまうと日本は深海棲艦に対して慎重にならざるを得なくなる。

一応、国内に全力を以てしても最低3年間は戦えるだけの各種資源などを備蓄してはいるが、その3年間だけで失った南方方面か南西諸島を奪還し、更に防衛体制を構築する事は相当難しいだろう。

その間は艦隊による防衛を主として行わなければならず、燃料の消費量も馬鹿にならない。

どちらが先に息切れするか、と言うチキンレースをすれば負けるのは確実にこちらだ。

恐らく攻勢を仕掛けて来るならばこの二方面が最有力だ。

それ以外に可能性があるか、とすると、逆に何処か？と言う質問をしなければならぬ。

「提督、空襲が終わりました。今の内に司令部壕に向かいましたよ」
「分かった。歩きで行くか？」

「車が破壊されてしまったので途中まではそうなります。ここから南に3km先進んだところに車を呼んでおいたのでそちらまで」

「よし、今すぐ行こう。万が一、敵艦隊との戦闘が起こり得る場合や上

陸が現実味を帯びて来ているとしたら指揮を執れないのは不味い」
俺のその言葉を最後に、南に3km先の合流地点まで全員で歩くこととなった。

「被害報告が纏まりましたので、報告させて頂きます。先ず飛行場ですが、

那覇、西原飛行場に爆撃が集中し損害甚大。修理に2週間を要します。

航空機の損失は迎撃に出た震電6機が被弾、損傷。搭乗員に怪我などは無し。

地上破壊された航空機は、疾風139機、紫電改117機、流星26機、二式大挺21機、彩雲23機、零式水偵24機。計350機です。

損傷機を修理していますが、廃棄される機体も出て来るので恐らく400〜450機程にまで増えると予想されます。

燃料タンクなどの資源備蓄施設や主要防御陣地への被害は皆無ですがそれ以外の小さな防御陣地などが複数破壊されていますので、こちらの完全復旧に2〜3週間程度。

それ以外の地下施設への被害は無し。

魚雷艇などにも被害はありましたが、飛行場への爆撃でしたので2挺失ったのみです。

死者は145名です」

「……4割強の航空機を喪失、か」

「こちらの戦果はB―29、78機撃墜。以上です」

防御陣地への被害などは特に目立ったものは無く、上陸してきても計画通りに防衛出来るだろう。

だが、航空機への損害がデカすぎる。

1000機を超える航空機の内350機を丸々失ったのだから相当だ。

しかも更に損傷機などで出撃不可、廃棄する機体が出てきてこれが4割以上になると考えると、まともに敵艦隊からの攻撃隊を相手取るかどうか……。

三航戦の艦載機全てを合わせても900機程度。

深海棲艦の戦力は最低でも大小合わせて空母は10〜20隻程度と見積もってもヲ級10隻いれば対抗されてしまうしここに又級が加わるとなると、最大倍の数の敵機を相手にしなければならぬ計算になる。

一、二、四航戦と合流すれば、1700機程度にまで増えるから十分に戦えるだろう。

だが合流するには最短でも5日は掛かるから、敵艦隊と今すぐにも海戦が始まるかもしれないと考えると望み薄。

期待せずに我々だけで戦う事を考えた方がいい。

「手痛い損害ですな……。これではもし敵艦隊は来襲したとなると防空も満足に出来るかどうか……」

「被害が大きくなった原因は？」

「迎撃機である震電を離陸させる事を最優先にし、それ以外の疾風や紫電改を後回しにし丁度滑走路に並び始めたところに爆撃を食らったのです。燃料などは空中退避のために最低限だったので引火などは殆ど起きませんでした」

「駐機していると真ん中に爆弾が降ってきた、と言う訳か」

「はっ」

爆撃機の投弾タイミングと、駐機が運悪く重なってしまった、という訳か。

本来なら、敵機の投弾タイミングを見極めて駐機を始め、滑走路に並べたりするのだが今回は震電による迎撃を最優先に作業してしまったために滑走路に並べるタイミングがズレてしまったのだろう。「来襲した敵機の機種と機数は分かるか？」

「B-29が凡そ300〜400機が来襲しました。迎撃によって内60機を撃墜、撃破するも数的劣勢は覆す事が出来ませんでした」「いや、震電隊は良くやってくれた。その60機が居たら被害はもっと広がっていたに違いないからな。礼を言っておいてくれ」「はっ」

「それと、二式大挺を索敵に出してくれ。艦隊が下手に動いて飛行場戦力と艦隊が各個撃破されるのは出来るだけ避けたい」「分かりました」

その指示を出した後、俺は嘉手納飛行場に向かい迎えの流星と護衛の疾風、烈風と共に艦隊へ戻った。

この様子では視察は中止だろう。早急に本土に残してきた飛龍達と合流して、万が一に備えなければならぬ。

その後、空中退避が出来た機体は読谷飛行場と嘉手納飛行場、外地島飛行場、与論飛行場の4カ所の飛行場に間借りする事となった。

艦隊に戻って、二式大挺の報告を待った。

艦隊からも彩雲を発艦し、索敵に務めたが少なくとも二式大挺の索敵範囲内である凡そ半径4000kmに敵艦隊は存在しなかった。

艦隊への被害は全くなく、完全に飛行場などを狙った爆撃だと断定された。

しかもB―29だから高高度の1万mと言う高空を飛んでいたから陸海軍の紫電改や疾風では迎撃する事が困難だ。

震電であれば問題無く迎撃が出来たが、常に激戦が繰り広げられている南方方面に補充などで優先的に配備されているから南西諸島に配備されているのは精々50機程度。

日本本土にはターボジェットエンジン搭載型震電が各方面に合計で1000機程度が配備されている。

だから迎撃ともなると一度に2000〜3000を超える震電が一斉に迎撃をするのだ。だからこそ本土への爆撃を完全に防ぐことは出来ていなくても被害を大きく軽減しているのだ。

だが50機程度の震電で数百機のB―29を迎撃して大戦果を挙げるのは到底、不可能と言っている。

しかも日本本土防空戦と違って連日連夜では無いから、震電搭乗員の練度差も大きい。

こんな状況であるにも関わらず78機ものB―29を撃墜したこのの方が驚きであり、称賛に値する。

この報告を中代大将達軍令部に上げると即座に視察は中止、敵の攻勢に備えよ、との命令が下った。

命令受領後、すぐに艦隊は呉へ針路を取った。

呉に戻ってすぐに報告書を書き上げつつ、艦隊に即座の出港に備えさせた。

半舷上陸などで艦に居ない者は直ぐに呼び戻し、何時でも出港が出来るよう機関には24時間体制で火が灯された。

第45話

沖縄本島で、深海棲艦の攻撃に遭ってから3週間が過ぎた。

だが今のところ、どの方面からも敵の艦隊と輸送船団の発見どころか攻撃があった、という情報すら入っていない。

ただ、慢性的に各方面への深海棲艦の圧力が増えているのは確かだろう。

何せここに来て連中の通商破壊が激化、今までは護衛艦隊の働きもあつて被害は相当抑えられていたのだが、南方方面だけで毎月20隻程の撃沈、撃破と言った損害を出し始めている。

しかも潜水艦隊だけでなく戦艦を主力としてそこに航空援護用の空母を4隻程度含めた洋上打撃艦隊も進出してきていると言う情報も入ってきており、段々と手に負えなくなってきている。

まだまだ深海棲艦の奴らは本気では無かった、という事だ。

これにより、石油はまさしもそれ以外の資源、特に航空機生産や艦艇の修理、主砲身の製造に必要なボーキサイト、クロム、ニッケルなどの希少鉱物の輸送に不安が出始めている。

備蓄分があるとは言っても、僅か3年分だし大規模作戦によって艦載機を消耗してしまうと3年分も無い、と言うのが現実だ。

考えてみてほしい。

現状、護衛艦隊を合わせて1000機を超える艦載機を保有し、尚且つ各方面や日本本土の陸海軍航空隊の総数を合わせると10000機に達する。

その艦載機1000機分を失ったと考ええると、消費するボーキサイトや各種希少鉱物資源の量はとんでもない量になる。

現在艦載機の主力である烈風で考えると、自重だけで3000kg以上になるから、この重さ全てにジュラルミンを使用していると考え

よう。

本当は各種装備でまったく違ったりするのだが今回は解りやすくするために、と言う事だ。

ボーキサイトには、おおよそ52ないし57%の酸化アルミニウムが含まれる。

正確にはボーキサイトは岩石であつて鉱物ではないのだがその縁の説明は関係ないのですつ飛ばすことにしよう。

単純計算で1kgのボーキサイトに520gの酸化アルミニウムが含まれているとしよう。

本来ならば精錬などを行った上で酸化状態を還元させたりするのだが、そうすると話が小難しくなってくる為に、還元した時の酸素が無くなった時の重量と精錬を行った時になくなる不純物の重量も込みで計算をすることにする。

烈風の重量は3100kgなので、それを満たすには1kg辺り500gの含有量で考えたとしても6.2tのボーキサイトが必要になつてくる。

とすると、1000機分の艦載機を揃えるのに、6200t。

これに加えて超々ジュラルミンに合成する為に銅、亜鉛、マグネシウムなどの金属、クロムニッケルコバルトといった希少金属も合わせると、どう考えたつて3年分もあるわけがない。

しかも母艦航空隊だけでなく各地の陸海軍航空隊の分も含めるとその数字は到底、現実的なものでは無い。

石油に関しては、現状日本国内でも生産されているからまだ多少なりとも自活出来る。

意外と知られていないことだが、日本にも油田が存在する。

日本国内で石油を生産しているのは少ないので知らないのも無理はない。

なぜ知られていないのか、と言うと産出量そのものが到底ではないがこの戦争以前の日本国内での需要量を満たせるだけのものでは無いからだ。

ただ、それでも日本が資源地帯を失ったあとでも戦い続けられたのはこの2箇所の油田によるところが大きい。

だが、燃料があつたとしても航空機を作るための資材が無かつたのだが。

日本国内の油田全ての年間算出量54・6万キロリットル、表現を変えれば5億4600万リットル。

仮に自動車1台あたりの満タン量を50リットル、原油から精製されるガソリンの割合を3割とすると約328万台の自動車を満タンにさせるだけのガソリンが供給できることになる。

正確には原油からガソリン・重油などさまざまな石油派生物を精製する際において、原油の種類によつて精製比率が異なるので一概には言えないが、大体こんなものだろうと思つてくれればよい。

これを見るに、日本国内の産出量だけでも賄えるのでは？と思うかもしれないがそんなことは全くない。

国内生産原油量と輸入原油量のグラフというものがある。

あくまでも、深海棲艦との戦争になる前のものだが、グラフを見ると国内生産量原油量と書いてあるのに何処にもそんなグラフが見当たらない。

これはどういうわけか。

記載のし忘れでもなんでもない。

というグラフを大きく引き伸ばしてみるとその答えがわかる。

というのも、縦軸の区切り値がグラフと数ヶタ違うこと。あまりにも国産と輸入量の差が大き過ぎ、通常、教科書などに載るサイズでは「国内生産」分がグラフ上に反映されなかった、見えないほど小さいと言るのが実情なのだ。

このグラフを縦に引き延ばしてようやく、ほんのわずかにグラフ上に「国内生産」が現れる。それでもまだまだ小さくて見辛いものだ。いかに日本が大量の原油を輸入していたか、そして国産原油量だけでは到底足りないかの実情が分かる。無論ガソリンだけが原油の使用道では無く、多様な方面に使われるので当然、必要な量も増える。

艦艇に必要な重油、航空機用燃料、車用燃料、飛行場修理用のアスファルトなどなど。

これら全てを合わせて必要量を算出すると1年間の国内生産分の数十倍、数百倍の値になるのが現実なのだ。

艦隊を作戦行動出来るだけの燃料を集めるのに20年30年掛かっていたらその間に人類は滅亡だ。

そうならない為に南方の資源地帯を解放したのだが、通商破壊作戦によって資源輸送に大きな影が見え始めている。

元々、被害はあつたしそのために護衛艦隊を就けていたのだがそれでは輸送船団を守り切ることが難しくなっているのだ。

これに対する対抗策としては、まず徹底的に敵艦隊の駆逐を進める、というのが真つ先に思い浮かぶ。

だが、洋上を動き回って敵艦隊を探し、見つける度に攻撃に向かうと言うのはあまりにも効率が悪い。

無駄に燃料を消費し、兵達の士気を下げるだけで実際に得られる戦果は少ないだろう。

となれば他にどんな手段があるのか？

答えは敵艦隊の根拠地、もしくは通商破壊艦隊の前進基地を叩けばいい。

あまりにも被害が拡大していることから潜水艦隊とおよび連山による高高度偵察によって南方方面の敵艦隊前進基地を探していた。

それによるとどうやら敵通商破壊艦隊は、オーストラリアにあるバン・デイーメン湾に前進基地と根拠地を置いていることが分かった。

ここはテイウイ諸島とコーバーク半島に周囲を囲まれており、尚且つ付近にビーグル湾も存在する。

水深も適度に浅く、大型艦艇の停泊も可能だ。詳細な偵察結果は本日行われる連山による高高度航空偵察任務によって判明するだろうが、ここを叩けば少なくとも南部オーストラリアには艦隊が駐留することが出来る場所がカーペンタリア湾しか無くなる。

だがここは潜水艦隊の偵察によって、少なくとも大規模な艦隊が停泊、駐留出来るほどの大規模港湾施設が整備されておらず、精々が軽巡や駆逐艦からなる警備艦隊が駐留出来る程度。重巡ぐらいならば停泊、駐留出来るかもしれないが大型艦艇である戦艦や空母は無理だろう、との結論が出ている。

それに航空隊の数も十分ではないし、何せ東西の長さは湾口において590 km、最大となる南緯15°付近では675 kmであって、湾口から湾奥までの長さはおよそ700 kmである。かなり面積が広いから攻め込まれた時に共同作戦を取るとなると、洋上航法に慣れていない陸軍の航空隊では如何な深海棲艦と言えども梃子摺るだろう。

ここを整備するならばニューギニアのラエやラバウルに根拠地を置いたほうがいい。

そちらならばすでに設備も整っているし強力な航空隊の援護もある。

それを考えると、最低でも1000 km以上は敵艦隊の前進基地が後退することになる。

1000 kmと言うと、18ノットで航行したとして1週間程度は掛かる距離だ。それだけの期間があれば、こちらだって十分に迎撃の準備を整えられるだろう。

翌日、高高度偵察によってバン・デーメン湾が敵通商破壊艦隊の泊地であることが確認された。

これによって、軍令部はバン・デーメン湾と敵通商破壊艦隊撃滅を行うべく作戦計画を立案。

作戦実施期間は7月24日に攻撃開始とされた。

今回は当然であるが上陸作戦ではない。

作戦の段階としては艦隊による攻撃の前にカリマンタン島に前進

している陸軍の連山装備の第5航空師団以下が爆撃を行うことになっっている。

陸軍の連山はもっぱら前線に配備されており敵飛行場に対する爆撃などを行い、何かしらの上陸作戦がある場合は爆撃支援を行う。海軍の連山は日本本土に配備、本土防衛を担う。

と以上のように役割分担をしているのだ。

これには海軍としては母艦航空隊や震電および搭乗員の補充や訓練で精一杯であり、出来るだけ連山を失ってそちらにリソースを割きたくないという考えがある。

この点に関しては陸軍も空母を含む友軍艦隊の支援がなければ敵からの攻撃を跳ね返せず、攻撃における最尖兵がひつようであることもわかっていた。だから海軍はとにかく母艦航空隊をしっかりと訓練して揃えて、その分各方面の防空に関しては陸軍が受け持ちましよう、と言うわけだ。

だが日本本土までは流石に手が回らないから日本本土防空に関しては海軍に任せる、となっっている。

「金剛、艦隊出撃準備。敵泊地を叩く」

「ハイ、分かりマシタ」

秘書艦である金剛に艦隊の出撃準備を下令、母艦航空隊を飛行場から空母に呼び戻し、燃料の足りない艦には燃料を積み込んでいき、食糧、水、弾薬も次々と積み込まれ始める。

3日ほど出撃準備を行い、途中駆逐艦など燃料に心配が出てくるであろう艦の為に給油艦4隻に加えてタンカー4隻を伴う事になっっている。

これで少なくとも1ヶ月程度の連続した航海が可能だ。

「テイトク、出撃準備全部整ったヨ」

「ん、ありがとう。それじゃあ金剛も艦に戻って出撃命令を待つように」

「ハイ」

金剛と別れ、俺は飛龍に座上する為に港に出て内火艇に乗り込む。

飛龍に乗り込むと、飛龍と艦長、それに参謀長達が出迎えてくれる。

「なんだか提督が私に乗るのって久々かも」

「視察任務じゃ隼鷹に乗っていたからな」

会話をしながら全員で艦橋に上がる。

そしていつも通り、椅子に座る。

「提督、艦隊出撃準備整いました。いつでも出航可能です」

「分かった。艦隊抜錨、出撃する」

「はっ、艦隊抜錨します」

命令が伝えられ、飛龍を皮切りに次々と錨が揚げられていく。

「艦隊速度18ノット、三航戦は前路哨戒に就け」

ゆつくりと艦隊が動き出すと、まず三航戦が前路哨戒の為に前進していく。

それに二航戦、一航戦が続く。

「艦隊、豊後水道通過しました」

「二、三航戦に艦隊集合、輪形陣形成を送れ」

「はっ」

豊後水道を抜けて、直ぐに輪形陣を形成させる。

そのまま艦隊は一路、敵通商破壊艦隊と泊地を叩く為に進んだ。

北海道防衛戦

第46話

艦隊がを呉を発つてから既に十日が経っていた。

カリマンタン島のバリクパパン湾に入港、一度休息を挟んでいる。

この間に給油艦やタンカーから燃料に不安がある艦は燃料補給を済ませ、次いで食糧などの積み込みも済ませておく。

これから戦闘を行うので各艦各部の点検もこの機会に入念に行っている。

今の所、これと言って問題は起きていない。

今回の作戦には第一護衛艦隊は参加しておらず、通常通りに輸送船団護衛任務に就いている。

バリクパパン湾停泊三日目の夜、艦隊は最後の出撃準備を整えている最中で、俺は飛龍艦内会議室で飛龍や各艦の艦娘、艦隊司令部要員の面々達と最後の作戦詳細を詰めている時だった。

突然、慌ただしい足音と共に、通信科の当直将校の少尉が顔を真っ青に青ざめて駆け込んできた。

この時、飛龍通信科の科長である石木少佐は艦橋で作戦詳細を共に詰めているところだった。午後一時頃から始められたこの会議は既に9時間以上にも及んおり、10時を過ぎていたが、未だに会議終わる気配は無い。

それでも足りない部分などを徹底的に洗い出し、各科の科長などから一つ一つのその時その時の状況に応じた対応の説明などを要求されその説明、作戦の微修正などを行っていたらこの時間だ。

各科の科長は、基本的には少佐、もしくは人員などの確保が難しい場合や科長の戦傷、戦死などの状況であれば大尉、中佐が務めるということになっている。

中佐という階級は、基本的には大型艦であれば副長を務めている階級で、科長にも中佐がいると、指揮系統に混乱が生じる恐れがある。

基本は先任の指揮権が優先されるのだが、それでも軍隊と言う組織

において階級というものは絶対であるから、出来るだけ違う階級である方が良いのだ。

そんな事情で科長は少佐が基本は務めるという事になっている。

そして、その科長がなんらかの事情、例えば上陸中であつたり休息中であつたりした場合は当直将校である大尉や中尉と言つた階級のもものが務める。

誰だつて、不眠不休で延々と働けるわけでは無いのだから当然だ。

俺や艦娘、艦の艦長、艦隊司令部要員などは基本的に全員で交代制の当直を行っている。

だから俺が当直に就く事も極々稀ではあるがある事だ。

本来であれば、俺は当直に就かなくていいと言われているのだが、それでも偶には良いだろう、と無理を言つてやらせてもらっている。まあそういう時は大体仕事をなんとしてでも進めたい時なのだが。

それはともかく、通信科の当直将校であつた少尉はかなり慌てた様子で敬礼をして連絡事項があるのだろう、報告を始めた。

「報告します！本日日本時間午後11時30分に知床岬より270海里（凡そ500km）の地点に深海棲艦艦隊を発見！規模、戦艦10、空母12、巡洋艦20、他随伴艦多数！大規模な輸送船団を後方に伴う、との事！」

その報告が上げられた瞬間、会議室内は大混乱となった。

それはそうだ、深海棲艦の侵攻は常に南方からだったのだから俺を含めて誰一人として予想していない事態だ。

確かに北方にも棲巢は確認されていたがこちらに対する活動もまるで無く、こちらからの侵攻なんて想定もしていなかった。

北方方面の活動と言えば精々アラスカやカナダに対する圧力や攻勢だったし南方方面の想定される敵総戦力と比べても1/5程度であるの見積もられていた。

しかしながら実際はどうだ？

しかも北海道に配備されているのは僅か4個歩兵師団のみで、装備

も未だ歩兵、機甲科、砲兵科に至るまで旧式装備である三十八式歩兵銃や八九式中戦車など。

南方、南西諸島方面の部隊や次の奪還作戦に投入する為の師団や陸戦隊、作戦に参加して統合された師団の再編などにその装備の殆どを回してしまい、残った数少ない新装備も九州や四国、中国、関西、東海地方を中心に装備を送ってしまったために北海道には全く送られていない。

唯一、陸海軍の航空隊は疾風や紫電改を装備しているが数は本州や南方方面などと比べると少なく、合計しても500機に足りるかどうか。到底敵陸上部隊どころか敵艦載機を相手取るので精一杯で敵の爆撃機などの足を止めることは出来ないだろう、

防御陣地も資材や工作機械を南方、南西諸島に送り込んでしまっているために数が全くと言っていいほど無いから遅々として進んでいない。

言い訳のように、いや、言い訳になつてしまふが説明させてもらおうと本来であれば、北海道に関してはそれでも問題はなかったのだ。

何せ深海棲艦の攻勢は南方方面からである、と想定していたし、こちららも資源問題をなんとかしてでも解決するために、資源を確保しなければならなかったからこちららへ兵力の殆どを投入していた。

奪還にも成功し、その後の防衛優先順位も明らかに高い。

そもそもの話、北海道の要塞化は後回しの後回しで資材を優先すべき方面が他にあるので計画そのものがかなり長期間に及ぶように計画されていた。

何せ、こちらは南方方面から南西諸島へと攻勢を仕掛けて来るものだと想定していたし、連日の敵機による攻撃などは明らかに激しい。それに比べて北海道はどうだ？

軍需工場など全くと言っていいほど存在していないから空襲の被害も受けておらず、殆ど無傷。

工場があるとすれば、北海道で生産された食糧の加工工場程度で戦時だから平和とはいかないが殆ど唯一の疎開先でもある。

爆撃に晒されることも少ないし、今まで侵攻作戦の兆候すら無かった。

通信量の増加なども確認されておらず、部隊の大規模な移動も確認されていない。

冬は海が荒れるし流氷もある。

上陸作戦を実施して兵站を維持し続けるのは到底、現実的なものは無い。

深海棲艦の連中だって、飯が無ければ餓死するし、燃料が無ければ車も戦車も飛行機も動かせない。

だからそんな補給面においてあまりにも負担が大きすぎる作戦なんて我々からしたら実施するだけ兵力の無駄。

あらゆる理由や事象に基づいて考えた結果、北方方面からの侵攻は無いと考えるのが普通なのだ。

寧ろこれで侵攻作戦があるだなんて言い始めたら、頭がおかしい奴、というレッテルを貼られる。

だからこそ北方方面からの侵攻作戦なんて全く想定していなかった。

だが、それが完全に裏目に出ってしまったている。

そりゃ誰だって混乱するだろう。

「諸君！一旦落ち着け！」

俺が大声で落ち着きを促すと、どうにかこうにか全員が席に着くことができた。

それでもいまだ混乱は収まっていないのか誰も彼もが落ち着き無い。

「通信長、軍令部の中城大将達はなんと行ってきている？」

「はっ、第一機動艦隊ハ急ギ本土へ戻リ敵輸送船団ヲ撃滅セヨ、との事です」

「だろうな。北海道が陥さければ我々がここにいる意味が丸っ切り無くなってしまう」

「提督、ではどうするのですか？」

「艦隊、進路反転。日本本土へ戻るぞ。停泊期間を四日から八日に延

長、各部の点検を入念にしておくように。各艦の整備点検が終了次第、急ぎ日本へ戻る」

「今すぐでは無いのですか!？」

「日本に戻ったら呉に停泊している余裕など無い。恐らくは、敵艦隊とすぐさま戦闘になるだろうからそれを考えると今ここで出来るだけ万全の状態にし、敵艦隊との決戦に挑むべきだ、と私は考えたのだが」

「……分かりました。すぐに各艦に伝えます」

「頼んだぞ」

とにかく、指示を飛ばす。

まず、先ほども言ったが今すぐに出航はしない。

敵艦隊は輸送船団を守るために必ず出て来るだろうから、戦闘はどうやっても避けられない。

敵艦隊と戦闘をせずに撃滅するなど、魔法でも使わなければ無理だ。

そうなる、呉に停泊しているところを狙われては堪ったものではない。

ならばここで体勢を整えて行くべきなのだ。

更につまれば、上陸を許した場合、北海道の4個師団では到底守りきれるとは思えない。

そうなる増援部隊をも送り込まねばならないために、その増援部隊を載せた輸送船団の護衛には第一護衛艦隊だけでは手が足りないだろう。

そう考えると、今ここで日本に戻ってもなんら良い事は無いのだ。

出来れば、敵の上陸をなんとかして防いでくれればまだ勝機はある。だがどうやってもそれは無理だろう。

北海道全域の航空隊だけでは早々に壊滅させられるのがオチだろうし、本州の航空隊を集められるだけ集めて送り込んでも、震電装備の部隊ならまだしも疾風や紫電改を装備した航空隊は母艦航空隊や南方方面ほどの練度も無い。

陸軍だって、圧倒的な数の差の前では碌な防御陣地も無いのだから

成す術もない。しかも装備は未だ更新されていないときた。これでは、どうやっても防衛出来るわけがない。

それならば、早々に水際での防衛を諦めるほかない。

島嶼帯の防衛とは違って北海道は広大な土地を有しているから、水際での防衛が失敗してしまうと敵の大部隊が押し寄せて来ることになる。

そうなれば、たった8万の兵力では深海棲艦が送り込んでくる兵力には対抗出来ない。

「北海道の地図はあるか？」

「あります」

「今すぐに持ってきてくれ」

航海科の科長がすぐさま北海道全域の地図を持って駆けてくる。

「お待たせしました」

「ありがとうございます。諸君、地図が小さいから申し訳ないが出来るだけ寄って見て欲しい」

俺がそう言うと、参謀長や各艦の艦長達が俺の目の前に広げた1m四方の地図を一齐に覗き込む。

「言い辛いことだが、恐らく水際での防衛は間違い無く失敗するだろう。航空隊も倍の数で来られては太刀打ちできまい」

「ですが、そうなるとうやうやって北海道を守ると言うのですか？」

「敵が上陸してきた北海道東部は、平原が広がっていて兵力差の観点から見て我々が圧倒的に不利だ。そこでこの北見山地と日高山脈で防衛線を構築しようと思う。ここならば高台から撃ち下ろせるし、兵力差も完全にとは行かないが多少なりとも埋められるだろう。ここで防衛線を形成し、増援部隊の到着と体制を整えたら攻勢に出る」

「ですが、民間人はどうなさるおつもりですか？」

「4個師団の内、東部の防衛を担当している師団に殿をさせる。この師団が耐えている間に無茶は承知の上でなんと少しでも民間人を北海道西部に逃す。幸いにも収穫した作物を輸送する為の鉄道が各地に敷設されているから撤退は速やかに行える。輸送船団は行きは物資や兵力を輸送船で送り込み、帰りは民間人を載せて函館や室蘭から

本州に逃す」

「それではその師団は見捨てる、と言うことではありませんか！」

「その通りだ」

「そんな……！」

「言いたい事は分かる。諸君の気持ちもよく分かる。だが全ての師団を防衛線まで一齐に後退させてしまつては敵軍は撤退速度以上の速度で追い付き、民間人諸共皆殺しにされてしまうのだ。それだけは絶対に避けねばならん。民間人を死なせてはならないのもそうだが、何よりも北海道を守る為には、こうするしかないのだ」

「ならば今すぐにも艦隊を出航させて敵艦隊を撃滅すれば！」

「敵が、それまで攻撃を待ってくれると思うか？寧ろ我々が居ない時に仕掛けて来たのだから航空隊を打ち負かして嬉々として上陸して来るに決まつている。もう既に、我々には時間が無いのだ。今ならばまだ夜間だから敵機の襲来も無く撤退の際の危険も少なくて済む。だが上陸されてからでは遅い。今すぐにも手を打たなければならぬのだ。どうか分かつてくれ」

俺がそう説得すると、意見して来た大佐は悔しそうに拳を握りしめ歯を食いしばり、震える小さな声で「分かりました」と呟いた。

それは此処にいる全員の気持ちを代弁したかのようだった。

その後、すぐさま民間人と殿の第96師団を除いた3個師団は防衛線を構築する北見山地、日高山脈まで撤退するように命令。即座に撤退を開始。

第一護衛艦隊には、敵艦隊への攻撃はせずに待機するように伝えた。

まず増援部隊として送られることが決定したのは、

沖繩本島駐留

ティーガー1重戦車装備第35戦車隊15両（5両1小队×3小

隊)

富士演習場駐屯

V号パンター戦車装備の第2実験戦車大隊30両(15両1中隊×2中隊)

新田飛行場駐屯

Bf109G型装備陸軍第244飛行戦隊72機(12機1中隊×6中隊)

熊谷飛行場駐屯

Fw190A-7型装備第245飛行戦隊72機(同上)

八日市飛行場駐屯

地上襲撃型のBf110装備第1航空襲撃戦闘団48機(12機1中隊×4中隊)

そして輸送船に乗り込んでいたドイツ軍歩兵を中心に構成された富士演習場駐屯第1歩兵教導旅団(旧名ドイツ国防軍第356歩兵連隊)だ。

第35特別戦車隊は以前説明したので投入理由と隊長名のみ記載で残りは割愛する。

投入理由としてはまず、北海道には深海棲艦の機甲部隊に対抗する対戦車装備は殆ど無く、辛うじて少数が配備されているパンツァーファウストやパンツァーシュレック程度であり、対戦車砲なども装備はしているものの、配備数は各師団に数門ずつと言うかなり絶望的な状況なのだ。

しかも戦車に限ってはまともに対抗出来るほどの戦力では無く、新砲塔チハもあるにはあるがやはり旧砲塔の方が多く、そもそも多いと言っても北海道全体でたったの27両だけと言う有様だ。対歩兵戦闘に関していえばまだ十分に活躍できるのだろうが、流石に対戦車戦に投入するのは無理がある。

そこで、機甲戦力をどうにかして補うべく戦力抽出を考えると、地形的に本来であれば不向きなティーガーの名前が上がる。

と言うのも、以前にも説明したが島嶼帯での戦闘と言うのは欧州などの戦闘と違って交戦距離が極端に短い。そもそも戦っている場所の面積が小さいのだからそうなるのは当然なわけなのだが、これが北海道になると丸っ切り違って来る。

北海道は面積自体が大きく、本州のように山脈などが連なっている平地が少ないわけでも無い。

北海道は本州と違って山越えをしなければ別方面に展開できない、と言うことがないのだ。

殆どの場合、戦車でも容易とは行かないが無理だ、と言うほどの場所を通らずともどこかしらの平地などに展開することが出来る。

しかも、深海棲艦の戦車には少なくとも正面からであれば撃破される心配が無いレベルの強力な戦車であるし、それが増援として送られて来た、となったら戦意も大きく上がることになるだろう。

そのような理由で転用、投入が決まったのだ。

更に、随伴歩兵用として15両のホハ（5両1小队×3小队）と150名の歩兵が行動を共にする。

専属の整備補給大隊も後方で待機、修理などを行えるようになってくる。

隊長はツエーザル・ベルガー大佐。

それぞれの部隊を説明する。

まず、第2実験戦車大隊は、簡単に言えば戦車の性能試験などを行う部隊だ。

まず、パンター戦車は設計図にのみ記されていただけで実物が直接送り届けられて来た訳では無い。

陸海軍の技術廠は取り敢えず、設計図のみの兵器を試作を行い、完成した物を問題点を洗い出し、改良を加え続けた。

そして合同艦隊救出から5年後にパンター戦車は少なくともその時点であげられる問題点を全て解決。

そしてその段階で既に合計で6両ほどを試作車両として生産していた。

そこでパンター戦車をそのままにしておくのも勿体無いから取り敢えず部隊として編成してしまおう、と言う事でこの部隊が編成された。

当初、6両だけで編成される筈だったのだが、それでは部隊として碌な機能は無く万が一戦線投入をすることになった場合に不都合である、となった。

結果としてティーガー同様、大規模な生産は行わずこの部隊に行き渡らせるだけの生産を行う、と決定された。

結果的にどれほどの部隊規模にするかはかなり紆余曲折があったが取り敢えず、1個中隊分を生産しておこう、となった。

そしてパンターを富士演習場や平地で運用試験した結果、走攻守全てがバランス良く纏まっており、しかも足回りの問題も度重なる改良によつて何ら問題無く運用出来る様になっていた。

しかしながら、島嶼帯の戦闘では幾ら脚が速くともそれを活かせるだけの場が無く、ならば大規模生産を行い始めて生産が軌道に乗り始めていた4号中戦車でも十分、と判断され、大隊規模になると流石に部品などの生産量も増えてしまうし、追加で生産するとしても1個中隊が限度だろう、と言う事で設立された部隊だ。

元々、説明にある通り開発当初は足回りなどに問題はあったが長期間戦線に投入されることも無く只々問題のある箇所改善や改良を行なつて来た結果、足回りのトラブルは大きく改善。

特になんら問題も無く運用する事に出来る。

稼働率は整備兵の練度向上や部品の高品質化などもあつて常時8割を超える。

いざとなれば全車両を問題無く動かせるというレベルだ。

ただ、第35戦車隊にも言えることだが絶対数が少なく稼働率で補わなければならぬので車両そのものも各所の部品などの消耗も激しいという面もある。

投入される理由としては第35戦車隊と同じだ。

防御力に関して言えば寧ろこちらのパンターの方が傾斜装甲を有しているから高いかもしれない。

更に随伴歩兵部隊として各戦車に10名ずつ、計300名がホハに分譲。

こちらも専属の整備補給大隊が就いており、後方での修理などが容易だ。

どちらの戦車部隊も、機甲師団を送り込める時間的余裕は無いのでとにかく少数でもいいから機甲戦力を補うべく送り込まれる。

隊長はマルクス・ランゲ大佐。

第244飛行戦隊はかなり前に説明した事があるだろう。

遊ばせておく兵力は無い、と言う事で戦線投入された部隊だ。

ドイツのBf-109戦闘機を元々装備していた部隊で、各種改良を重ねたりエンジンを馬力の強いものに換装したりしてきた。

高高度性能が日本の戦闘機などと比べると高く震電が完成するまではB-29迎撃の任務を行っていた部隊でもある。

投入理由は、この戦隊はB-29の爆撃によって出撃待機命令中に爆撃を受け、それによって戦隊の72機の内の13機を喪失。搭乗員も7人が戦死していた。

その為に新しく配属された搭乗員の錬成などを行ってついで二週間ほど前に訓練終了、実戦投入可能、との報告を受け取ったのだ。

しかも、陸軍としては機体の生産数が少ないから余り消耗させたく無いと言う理由でB-29の迎撃すら震電が投入されてからはまるで実戦を経験させて貰えなかった。

それでも練度自体はしっかりと維持しており、少ないながらも実戦は経験している。度重なる戦闘や南方方面の部隊への補充で引き抜かれたりして人員に欠がある部隊よりも纏まった数を送ることが出来ると言うことで今回実戦投入が決まった。

現状補充人員待ちの日本本土各地の航空隊を引き抜くよりもこちらの方が部隊として連携も取れるだろうと言う事だ。

隊長はカール・ベツカー大佐。

第245飛行戦隊も244戦隊と同様の経緯で設立された。

投入理由も同じだ。

Bf-109と比べると確かに高高度性能は劣っているが、中低高度においては高性能だ。

反面、Bf-109は高高度性能は高いのに対し中低高度での性能が低いという問題があった。

Fw-190は旋回性能も日本軍機と比べると劣りはするが高く、深海棲艦機相手ならば問題無い。

日本軍機の旋回性能が良すぎるだけでFw-190も高性能に分類される。

今回の北海道防衛においては敵艦載機と爆撃機の両方を相手取る事になると予想出来る。

そうなると244戦隊だけを送り込んでも中低高度における艦載機との戦闘は疾風や紫電改が居たとしても244戦隊単体で考えた時に不利になってしまう。

ならばそれを補えるこの部隊も送り込もう、と言う訳だ。

敵爆撃機よりも敵艦載機などを相手取る、言わば制空隊だ。

隊長はヴァルター・ヴァーグナー大佐。

第1航空襲撃戦闘団は、Bf-110を装備している、対地支援を主任務とした部隊だ。

元々、Bf-110は双発重戦闘機だ。主な任務は敵爆撃機の迎撃で欧州ではB-17などが主な迎撃目標であったのに対し、日本本土ではB-29という超高度から飛来する超重爆撃機が相手だ。

流星にそこまでの高高度性能は無く、迎撃に上がったとしてもB-29の防御機銃座から滅多撃ちにされることは目に見えていた。しかも地上襲撃型ということもあって敵爆撃機迎撃には向かない。

地上襲撃型、と銘打っているだけあって対地攻撃能力は陸海軍が保有しているどんな爆撃機よりも戦闘機よりも高かった。

連山は爆弾搭載量こそ多いが、地上から近距離の場所で爆撃を行うものなら的が大きいから簡単に対空砲火の餌食になってしまう。

だがBf-110は双発ではあるが機体は小さく、爆弾などの搭載

量もそこそこ。

主翼下に爆弾を懸架する為のラックが50番用2つと60番4発の搭載が可能で、この爆弾は全てタ弾となる。胴体部にも25番4発もしくは50番を3発搭載出来る搭載能力を有しており、攻撃能力は相当高い。

隊長は、デイトリヒ・アルブレヒト大佐。

第1歩兵教導旅団は、Stg-44やMP-40などのドイツ軍由来の装備の扱い方を教える部隊だ。

歩兵旅団と銘打って入るが、砲兵なども含まれる為に混成旅団の方が表し方としては正しい。

規模は6500人で、その内2000人ほどが元ドイツ軍人で構成されており普段は各種銃火器の扱いなどを下士官、士官問わずに教えている。

構成としては、機械化歩兵部隊で部隊にはケツテンクラートや一式半装軌装甲兵車(通称ホハ)、ハノマーク兵員輸送車などがごちゃ混ぜ感はあるが多数装備されており、砲火力も88mm対戦車砲を4門1小隊×4で16門、それを連隊ごとに1小隊ずつ担当している。

対空機関砲にベルト給弾方式に改造した20mm4連装機関砲を各連隊に20門装備。

歩兵装備もStg-44やMP-40を主装備として個人対戦車火器もパンツァーフアウスト、パンツァーシュレックをそれぞれどちらかを分隊ごとに2門装備している。

おそらく、兵器の質や兵員の練度を見ても間違いなく日本で最高レベルだろう。

元ドイツ軍人、と言う表記については今は日本陸軍に籍を置いているので、元、となっている。

隊長はクルト・ミュラー少将。

以上のようになっている。

本当ならばスツーカーG型装備第2航空襲撃戦闘団も戦線投入して

はどうか？という話が拳がっていたのだが、スツーカーは防御力、航続力、空戦能力、速度など全てにおいてお世辞にも高いとは言えないレベルで、制空権を確保している状況でなければ敵戦闘機に容易に撃墜されてしまうことが知られていた。

北海道上空の制空権はどう考えても深海棲艦側の物となるのは明らかであり、そんなところに投入してしまつては無駄に消耗するだけだ。

最悪、1機残らず撃墜されてしまうかもしれない。

なので現時点での投入は見送られた。

第二陣にはイギリスのスピットファイア、ハリケーンやイタリヤのG・55チェンタウロやMC・205を装備した戦闘機部隊を主戦力として送り込み、防御陣地構築の為の資材と燃料弾薬食料水を送り込む。次に送り込むための師団の為の弾薬なども纏めて送り込んでしまう手筈だ。間に合えば1個歩兵師団も送り込む予定なのでここまで持たせることが出来れば勝機は十分以上にあるだろう。

第三陣で反抗戦力の要となる5個歩兵師団と砲兵、機甲師団をそれぞれ1個づつ送り込む。

歩兵師団はStg44を主装備としており、個人対戦車火器なども充実させている。

砲兵師団にはラ式15cm榴弾砲を主力装備としていて、牽引用にホハを多数装備している。

機甲師団の主力戦車は4号中戦車H型で、そこに3号突撃砲などが組み込まれている。

これほど早く手筈を決められたのは艦隊司令部の参謀長達が居たからこそだ。

段階で分けて戦力を送り込む理由としては、まず輸送船の数が足りない。

資源輸送や、各方面に物資を送り込む必要もあるし、それらを全てカットして北海道に注力する事はできない。

でなければ兵士が飢えてしまうからだ。

そうなったら北海道を占領されるなんて事態よりもずっと不味いことになる。

今考えると、何故北海道に上陸して来たのか段々と分かって来る。

北海道は現状の日本の食糧生産の、米を除いたジャガイモなどの生産量がダントツで一位なのだ。

米はまだ日本各地で生産されているが、それ以外の農作物などはどうやったって大規模農業を行っている北海道の方が生産数は多い。

肉、魚に至っても生産数は圧倒的だ。

と言うことは、軍民問わずに日本は北海道という食糧生産地域に依存しているという事に他ならない。

その食料供給が途絶えてしまつては、2500万人の国民どころか軍に属する兵士達に満足に飯を食わせられなくなる。

そうなつたら、幾ら戦略資源であろうと終わりだ。

以前にも話したが食事というものは、どんな戦果よりも戦意に直結するものだ。

例えば、我々は一日3食食べている。

これが一日2食や1食に減らされたと考えよう。

元々そういう生活をしていたという話は抜きにして、だ。

誰だつてやる気は無くなるだろう。

しかも量だつて満足では無いのだから、これが毎日命懸けの戦場である、ということを含めて考えても士気も戦意も軒並み急降下する。

北海道内での部隊や民間人の移動は、幸いにも鉄道が機能している為に迅速に行える。

これを活用しない理由は無い。

撤退命令から二日後、驚きの速さで軍民の撤退が完了。

殿として残った第96歩兵師団は防御陣地構築などの時間を出来る限り稼ぐべく水際防衛を命令通り諦め、網走、斜里町を放棄。屈斜路湖南から雌阿寒岳、阿寒富士、旧阿寒摩周国立公園辺りで遅滞戦

闘をするべく後退。

雌阿寒岳、阿寒富士、旧阿寒摩周国立公園の高地には数少ない重砲や迫撃砲などが運び込まれ、敵部隊を待ち構えた。

北海道東部の飛行場に展開する航空隊は南部の飛行場に後退。

96師団援護の為に戦闘準備を整えている。

沿岸部には敵の動向を探るべく少数精鋭の第544偵察中隊が身を潜めて随時報告を送る手筈だ。

敵の上陸が開始された場合、戦闘することなく96師団と合流、戦闘を行うように命令してある。

96師団が展開した場所に至るまでは出来る限り地雷や手榴弾を用いたブービートラップが少しでも敵の足を止めるために仕掛けられている。

敵艦隊発見から3日後の早朝、544偵察中隊から沿岸部に対する爆撃と敵艦による艦砲射撃が加えられた、という暗号文が各部隊に発せられた。

そして更に2日後。

「報告します！深海棲艦、北海道網走市、斜里町、根津町、別海市に上陸を開始！規模は4個師団8万を超えると予想されます！」

艦隊が日本本土に向けて進路をとっている時、その報告が上がってきた。

遂に来たか！という思いで俺を含めて皆の顔に緊張が走る。

艦隊はこの4日後、沖縄本島に立ち寄り日本本土から派遣された101号型輸送艦10隻に載せられた第35戦車中隊と合流。

続いて2日後に四国沖で10隻の輸送船団と合流。その日の内に浜松沖で第2実験戦車大隊と第1歩兵教導旅団を載せた25隻の1

01号型輸送艦と合流、進路を北海道苫小牧港に向けた。

第47話

千歳飛行場から敵艦隊偵察任務の為に出撃した一式陸攻から、新たな情報が入った。

『我偵察3号機。新島島東方約50海里ニテ新タナ敵艦隊ヲ発見ス。規模ハ戦艦7、大型空母5、軽空母5、巡洋艦11、他随伴艦大凡60隻。及び輸送船ヲ100隻以上ヲ伴ウ。1423』

と緊急電が送られてきた。

その数十秒後には、

『我敵迎撃機ノ迎撃ヲ受ク。コレ以上ノ偵察ハ困難也』

との電文が発せられたが電文が途中で途切れているので恐らく撃墜されたものだと思われる。

ただ、これが本当だとすれば間違い無く敵空母は20隻にも膨らむと言うことだ。

北海道近海にいるであろう第一群の敵空母と艦載機数を合計したら1800機に達するものと思われる。

しかも敵艦載機だけで無く、更には千島列島や北海道に進出した敵の戦闘機や重爆を考えるとどう見積もっても2000機は下らない数になるのだ。

それを、北海道西部に退避させた北海道全航空隊と我々第一機動艦隊の機数を合わせてもその差は500〜600機以上。

しかも敵機は陸上に配備されるのは恐らく戦闘機の割合が大きいだろうから、どう考えたって現状では勝ち目は無い。

「……やられたな」

「ですが今ならばまだ機会はあるのでは？」

「いいや、無理だ。よしんばどちらかの敵艦隊かを撃破したとしても、戦闘で疲弊し消耗しては手も足も出まい。それに、我々は敵艦隊だけでなく敵の陸上機すらも相手取らねばならなくなったのだ。連中の建築能力は我々よりも圧倒的だからとつくに飛行場も戦闘機程

度の運用ならば可能だろう」

「ですがそれでは……」

「分かっている、分かっているとも。このままでは、北海道陥落は時間の問題だとな」

「ではどうなさるおつもりですか？今のままでは、国民どころか将兵達にすら十分な食糧供給が行えませんぞ」

「北海道の食糧生産量を考えればその通りだろうな。だがやられているばかりは性に合わん」

「それでは……」

「作戦計画を練るぞ。艦隊司令部上級将校はすぐに飛龍会議室に集合。それと航海科にはアリューション列島とアラスカまでの地図を持ってくるよう伝えろ」

「はっ、了解しました」

確かに現状では敵艦隊を叩くのは、確かに正攻法どうやったって無理だろう。

ならば正攻法を使わなければいい、正面から戦わなければいいのだ。

「諸君、急だが集まってくれた事感謝する。早速だが、既に新たな敵艦隊が発見された事は聞き及んでいるだろう」

「勿論です。ですが、どうなさるのですか？恐れながら申し上げますが、正面からではどう考えても戦力差故に敗北は必須かと思われませんが……」

「そんなもの、単純な計算が出来る子供だって分かっているに決まっている」

「では、敵の各個撃破か後方の破壊活動、と言う事でしょうか？」

「正解だ。敵艦隊の根拠地と思われるのは恐らく棲巢のアンカレッジと思われる。だがアンカレッジだと後方拠点として扱うには余りにも距離が遠い。そうなるともう一箇所、可能性がある場所がある」

「アリューション列島に確認されている、棲巢、ですか」

「その通り。恐らく、アンカレッジが後方の本拠点であることに間違いはないだろう。だがそこから態々物資を運んでくるには北海道は遠すぎる。だから一度物資を集積するか、輸送船団の護衛を交代する筈だ」

「ならば、狙い目はそこであるということですか」

「ああ。だが敵艦隊を相手取る必要は無い」

「それは、どう言う事でしょうか？」

「今回の侵攻時期を考えてみてほしい」

「夏、ですがそれがどうかしたのですか？」

「考えてみる、北太平洋は確かに夏ならば比較的穏やかだが冬になれば荒れに荒れる。ベーリング海は夏でも大型艦艇ですら転覆の危険性があるのだぞ？そんな海域を通ってくるのだ。だが冬と夏、どちらの方が航行に適していると思う？」

「当然夏ですな。物資を満載した輸送船が荒海をとでもではありませんんが航行出来るとは思えません」

「だろう？そうなると、深海棲艦の奴らは今夏中に北海道を落とすつもりでいると言うことだ。それだけならば通常の輸送計画でも十分事足りる。だが作戦を考える上で長期化した場合の事も考えている筈だ。真冬での北海道への補給は困難を極める。とすると物資の備蓄を行う筈だ。そして、その物資が備蓄されているであろうと予想されるのが、アリューシャン列島の島のどれか、と言うことになる」

アンカレッジから北海道までは札幌で考えても4829kmもある。

今回の上陸地点で考えたとしても、大凡4600km程はあるのだ。

それほどの長大な距離を毎回毎回輸送船団と共に護衛艦隊が航行するわけが無い。

あまりにも効率が悪すぎる。

だとすれば、どこかアンカレッジよりも北海道に近い場所に前線拠点と物資集積所を置いて作戦に挑んだ方が兵站到与える負担も少なく出来る。

何より、北海道の攻略に手間取った場合、早ければ10月頃には初雪が観測される北海道はそれから5ヶ月以上は道全域が雪に閉ざされる事になる。

そんな場所に越冬装備も何も無い状態で過ごすには、余りにも無茶苦茶だ。

だとするならば、その越冬装備や冬の間戦い、食っていくためだけの物資をも備蓄している筈。

それを燃やしてしまえば、敵は補給に苦しむ事になり冬を越せる兵の数は極端に少なくなるだろう。

夏と同じ装備で生き残れると思ったらそれは北海道と言う地を舐めすぎだ。

シベリアやロシアの土地の方が生き抜くのに厳しい環境であると思われているが、確かにその通りだがそれを言えばそもそも、一年中とは言わずとも半年に及んで雪が降り積もる場所で生き残るのは、どこであろうと生き抜くのは厳しい。

現代においては、生活環境が整い暖房などが使用出来るからこそ冬を余裕で越せるのであって、現状の日本においては暖房こそ冬の間だけは民間に燃料が回されているからまだマシだが、食料に関しては相当厳しい。

冬という季節は実りが少ない。

春や夏の間食料を備蓄していたとしてもそれは備蓄しているだけの分しか無くそれが尽きてしまえばどうにかして食料を調達しなければならぬ。

だが前述の通り冬に得られる食料というのは少なく、麦を育てはするがすぐに収穫出来るわけもなく殆どの農作物は軍に徴発されてしまい腹を満足に満たせるだけの量はほぼほ存在せず、魚介類や野生動物の鹿などに頼るしかない。

だが魚介類と言ってもそう毎日豊漁である訳でも無く、不漁である時の方が多いかもれない。

そんな、現代日本においても生き残るのが厳しい環境で、しかも野外で寝泊まりし食事をとり、更には戦闘をしつつ生き残らなければな

らない事を考えても物資を焼かれては深海棲艦の陸上部隊に生き残る術はそう残されてはいない。

「棲巢ではないのでしょうか？」

「確かに可能性としては大いに有り得るだろうが、そんな誰だって予想が付けられる場所に備蓄するだろうか？確かに防衛力の観点から見れば一番なのだろうが襲われた時点で少なからず物資に被害は出る。ならばそれ以外の場所に隠したりするのではないか、と考えたのだ」

先程の説明から考えるに、北方方面の深海棲艦だって冬になれば北海道以上の極寒の地で生活していたのだからそれぐらい分かっている筈。

となれば簡単に予想が付く場所に物資を集積しているはずが無い。俺だって、本拠地を囿にして別の場所に隠しておく。

「では、我々はその集積された物資を焼き払う、と言うことですか？」
「そうだ。だがその集積所として使われている島がどこなのか、と言う肝心な事が分かっていない。そこで先ず潜水艦隊による偵察を入念に行ってから、敵集積所を叩こうと思うのだが」

「……現状、それしか手段は無さそうです。提督が仰った通り敵艦隊との戦力差は明らかに劣勢です。ここで戦つてもなんら戦果を得られる事も無いでしょうし、既に敵に橋頭堡を築かれた後となつては敵艦隊を撃破したとしても既に上陸が確認されている15万を超える敵軍を殲滅するには相当時間が掛かるでしょう。それに、それほどの大軍を食わせ戦わせるのには兵站に相当の負担が掛かっている筈。一箇所でも突き崩してしまえば此方に有利が傾くかと」

参謀長がそう発言したのを皮切りに、活発に議論が交わされ始めた。

結果的に、予想が立てられたのはアンドリアノフ諸島の何処かだった。

理由としては、

・大量の物資を集積しておくに十分な面積を有している島が幾つかある事。

・北海道とアンカレッジの大凡中間地点に位置している事。

・更にはアダック島には2400mの滑走路が2本ある飛行場が存在している。

ここを活用すれば、運用する機体にもよるがB-29であれば物資満載状態であっても往復が可能だしB-17でも片道ではあるが空中投下による補給なども可能である事。

・万が一敵の攻撃に晒されても飛行場からの戦闘機や爆撃機による反撃や防衛が少なからず可能である事。

などが挙げられる。

ただしこのアンドリアノフ諸島周辺は一年の約半分の日数において霧に覆われることが多いということだ。

しかも風が強く荒れる事も多い。

だが、ここを補給拠点として運用出来るならば兵站到掛かる負担は相当軽減されるだろう。

と大凡の目標を決定したところで、先ず俺は第一潜水艦隊伊400以下にアンドリアノフ諸島を含めたアリューシャン列島の偵察を命じた。

アリューシャン列島全域を偵察する理由としては確かにアンドレアノフ諸島と定めたは良いがそれ以外の場所であるとも限らないからだ。

それならば他の潜水艦隊も、と思うかもしれないが多方面において同時多発的に侵攻が起こらないとも限らない。

それを警戒するために潜水艦隊がどうしても必要不可欠なのだ。

航空機よりも隠密性が高く航続距離があり活動限界も長い。

そうなれば確かに索敵範囲は航空機よりも小さいだろうが航空機よりも索敵に割くことの出来る時間が多く、結果的に航空機が偵察でききない場所の偵察が可能ということだ。

そして、一式陸攻や二式大艇を使っていたのにどうして敵艦隊発見が遅れたのか、という理由を説明しよう。

この敵艦隊発見の報告が上がる丁度5日ほど前から千島列島の南端辺りから北海道の全域に掛けて天候が崩れていて哨戒のために航空機を飛ばすことが出来なかった。

その隙を突いて敵艦隊は接近してきたということだ。

幾ら訓練しようとも悪天候の中では航空機は飛ばせない。

現代のジェット戦闘機ならば全天候型と呼ばれるありとあらゆる天候に対応し飛行が可能な戦闘機もいるが、それとは違うしなにより全天候型と言っても、極端な話をしてしまえば台風やハリケーンの時には飛ばせないだろう、とそういう事だ。

確かに飛ばせば敵艦隊を発見出来たかもしれない。

だが視界が不明瞭であるならばそもそも発見は出来ないだろうし、何よりも事故によって搭乗員が失われる可能性が高い。それを考えると、哨戒機を飛ばさなかったと言うのは当たり前前の措置なのだ。

戦時中であるが故にそんな事言っていないで行かせればいいと言う奴が居るならば、俺はそいつが共に行くと言うのなら喜んで出そう。

だがそうでは無いのならば絶対に行かせはしない。

何よりも戦時中だからといって無駄に損耗を重ねれば先に人的資源が底を付く。

そうなつては戦争もクソも無くなってしまうのだ。

人命を優先すると言うことは、長期的に見て大きく戦況などに影響を与えうる事なのだ。

それを軽んじて戦争をするなんて、そんな発言をするなんて部下の命を預かり戦わせ死ねと命令する指揮官の立場に値しない。確かに犠牲が必要である時もあるだろう。

だがそれを限りなく低くしてこそ、指揮官たるのだ。

それを考えれば、俺は間違い無く指揮官足り得ない人間だろう。何せ敵の侵攻を丸つ切り予想していなかった挙句、その責任のために脅かされる民間人と友軍を撤退させ防衛の準備を固める為に2万人も

の将兵の命を捨て駒にしたのだから。

それから五日後、艦隊は101型輸送艦や輸送船に乗せた増援第一陣を苦小牧港に送り届けた。

増援第一陣が無事揚陸完了するまで近海を遊弋。

その間に敵からの攻撃は一度も無く無事作業は完了。

その三日後に第一陣増援部隊の全てが前線に配備完了、との報告を俺は受け取った。

第48話

突如として始まった深海棲艦による北海道侵攻による戦闘は既に始まっていた。

空においての最初の戦闘が始まったのは、深海棲艦が発見されてから次の日の事である。

矛を交えたのは第244戦隊と第245戦隊だ。

増援部隊第一陣の飛行戦隊が先遣隊として送り込まれたのは、派遣が決定したその次の日の早朝のことで、まず戦闘を行なったのはこの増援飛行戦隊で、就いていた任務は撤退する民間人と3個師団の援護だった。

北海道そのものに駐屯していた陸海軍の航空隊は、未だ撤退が完了していない部隊も多く、この時は特に航空隊の戦闘機などでは無く各航空隊の整備部隊や補給部隊の撤退がまるで進んでいなかった。

何しろ移動手段が陸路か輸送機、輸送船に頼るしか無いのだ。

人だけならば徒歩でも問題無いのだが、撤退するにしても最低限、整備を行う上で必要な機材ぐらいは持つて行かなければならない。

予備部品などは後々本土から運び込んで来れば良いが、整備機材までもなると幾らなんでも手間が掛かり過ぎる。

いや、迅速な撤退を、と命令されていたので整備機材の放棄もやむなしではあるだろう。

だが、これから予想される戦闘の事を考えると、整備機材どころか予備部品ですら放棄するのも惜しまれる事なのだ。

最低でもアリュウシヤン列島のどこかにあると想定した敵後方の物資集積所、後方拠点を艦隊が破壊しない限りは戦闘が続くと考えられるからだ。

合計期間を考えれば、最低でも3ヶ月以上。

霧の濃いアリュウシヤン列島を潜水艦で探さなければならぬのに加えて、艦隊による爆撃、砲撃のどちらかを行うにしても濃霧との

相談になるし天候によっては攻撃予定日を延期しなければならない。

それらの事を考えると予備部品や予備のエンジンは放棄するとしても、整備機材だけは共に撤退しなければならない。

整備機材がなければ機体整備が出来ないし、そうなると撤退場所となる千歳飛行場などに元々駐屯している航空隊の整備部隊から機材を借り受けるしかない。

だがそうなると同時に整備を行える機体の数が必然的に大きく減少すると言う事になる。

それは稼働率の大幅な低下を招くと言うことになり、ただでさえ人類側は航空戦力も陸上戦力も少なく敵との戦力差が歴然なのに、下手に消耗してしまうとその差が更に広がることを意味する。

それを最低限に抑えるためにも、整備機材だけでも持って行かなければならない。

「急げえ！撤退する鉄道は次と次で最後だぞ！」

「班長！こいつはどうしますか!?!」

「予備部品は各中隊で2機分ずつだけでいい！それ以外は全部放棄する爆弾で吹き飛ばす！飛行場の決められた場所に置いてこい！」

「班長！こいつも連れて行っていいですか!?!」

「ああ!?!置いてくのが嫌ならお前エが乗って連れていけ！お前に一番懐いてんだろ！」

「了解です！」

この中隊では、整備班長の下置いていくものを持っていくものを大急ぎで仕分けていた。

この時、北海道防衛司令部から

「予備部品などを2機分のみ持つて撤退、それ以外は全て破壊せよ」と命令が出ていた。

その命令に従い、各中隊は飛行場に隣接されている鉄道路線に到着した列車に積み込んでいた。

だが例外と言うのはどこにでもあるもので、女満別飛行場に駐屯し

ていた航空隊は敵の上陸予想地点の海岸からたったの十数キロしか離れていないと、最も近い場所にあり取るもの取らず、兎に角載せられるものを列車に放り込み航空隊の全部隊と飛行場守備隊も弾薬なども個人で持てるだけ持って、食料も各人三日分のみを持つての後退となった。

この部隊も、近いと言うわけではなかったがそれでも一刻を争うと言うことで、今止まっている便と残り2本の便を残して最後だった。

まずこの便で整備機材と予備の部品やエンジン、物資、それとそれから機材や物資を管理する為の1個小隊分の整備部隊を出発させる。

そしてその次の便で全整備部隊と飛行場守備隊を乗せられるだけ乗せる。

最後の便で、放棄する機材や燃料弾薬を処理する為に残った飛行場守備隊を乗せていく。

機材の処理には、置いて行かざるを得ない爆弾や弾薬に燃料を掛けて火を放ち爆破、書類などは燃料を撒いて燃やすのだ。

その際に機材の破棄と同時に滑走路を使えなくするべくそこで爆破するのだ。

地下に設置してある燃料タンクなども同様だ。

爆弾は、戦闘機主体の部隊が多いからそこまでの数は無く、250kg爆弾が各飛行場に100発前後があるだけであった。

この数は空母一隻分の搭載量と同程度、と言えばそこまで多い数では無いと分かるだろう。

しかも一つの飛行場には幾つかの航空隊や飛行戦隊が一緒になって駐屯しているのだから、それぞれに振り分けられているのは精々が20発前後。紫電改は25番爆弾を2発つつ装備出来るので、10機分ほどの数しかそれぞれの航空隊には無いのだ。

それを、大量にある機材の爆破に使うのだから、余り多いとは言えない。

飛行場の規模にもよるが120機を超える航空機が駐屯している飛行場が殆どなのでそれらの予備部品だけでもとんでもない量だ。

「急げ！早く積み込みを終わらせろ！出発時刻まであと30分だぞ！」

「第313航空隊は1〜3号車まで！327航空隊は4〜6号車！330航空隊は7〜9号車！362航空隊は10〜13号車だ！ペイントしてあるとは言え、間違えるんじゃないぞ！」

「乗っていく奴は急げ！置いて行かれるな！」

「313航空隊準備完了！」

「313完了、了解！」

「327航空隊準備完了！」

「327完了、了解」

次々と部品などが積み込まれていき、完了次第同乗する整備小隊も乗っていく。

「全航空隊準備完了！よし、出発しろ！」

全航空隊の準備が完了し、そして鉄道が出発していく。

そのような光景が各飛行場で見られた。

話を戻して、一番最初の戦闘が起こったのは244飛行戦隊と245飛行戦隊が撤退する各歩兵師団や航空隊を載せた鉄道、それでも乗り切らなかった兵員は徒歩移動によって後退するので、それら部隊を掩護するべく上空を飛んでいた時の事だった。

会敵時244飛行戦隊は高高度を、245飛行戦隊は中低高度をカバーしていた。

『!!左前敵爆撃機！数70〜80！戦闘機もいます！30機前後！』

「了解、これより敵機と戦闘を開始！まずは敵よりも高度を取る！シュヴァルムで一撃を加えた後に散開、ロツテで戦うぞ！」

『『『『了解！』』』』

高度5000mにおいて飛行中であった244飛行戦隊は、敵編隊発見後すぐさまその敵編隊を押さえ込むべく高度を大きく上げ6000mまで上昇。

敵戦闘機も爆撃機を守るべく高度を上げて突っ込んでくる。

この深海棲艦爆撃機は4発重爆で樺太方面から来襲してきたものと思われる。

千島列島の北海道に近い島に4発重爆が離着陸出来る飛行場は存在しない。

カムチャツカ半島では距離が遠く、B-29ならば問題無いがB-17では航続距離が足りない。

しかも、あの機影は244戦隊の隊長であるベツカー大佐が欧州で何度も迎撃し撃墜してきたB-17だ、見間違える筈も無い。それにB-29ならばもつと高高度を飛んでくるに違いないからだ。

ただ護衛についているのは敵艦載機らしく、F6Fだけだ。

「245飛行戦隊は!？」

『別の敵編隊と交戦中との事！我々だけで戦うしかありません!』

「クツ、流石に数が多いな……!よし、コイツらをサッサと片付けて245戦隊と合流するぞ!」

この時、245飛行戦隊は中高度で飛行し各陸上部隊を直接掩護していた。

ただし、高度を落とし過ぎると敵機に対応出来なくなるために高度3000mで飛行中でありその際に敵艦載機の戦爆連合と既に戦闘状態となっていた。

こちらは120機を超える敵機を同時に相手しなければならず、しかも戦闘機の数と同程度とあって244戦隊よりも苦戦を強いられていた。

『245戦隊から連絡!敵機多数により苦戦中、至急救援を求む、と!』

「他に出撃出来る海軍航空隊は居ないのか!？」

『居ません!未だ撤退中である事と弾薬などの殆どを破棄しての撤退の為に今出撃すると次回の出撃が出来なくなるので今はなんとか耐えてほしいと!』

「クソツタレめ!撤退するのは戦力差故に致し方無いが、それによって戦闘が出来なくなるとは!大将閣下には大急ぎで物資を送り込ん

でもらわねばならん！」

ベツカー大佐は通常通り敵爆撃機迎撃を行うことにする。

「第1中隊、敵戦闘機を抑えるぞ！第2、第3中隊は敵爆撃機を落とせ！」

『『『『了解!!』』』』』

ベツカー大佐率いる第1中隊24機が一斉に敵戦闘機に襲い掛かる。

通常の日本陸海軍機であれば格闘戦に持ち込んでもこれといって問題は無いのだが、Bf-109は一撃離脱を念頭に置かなければならない。攻撃力や速度性能においては深海棲艦の艦載戦闘機よりも優っているのだが旋回性能という面においては負けていた。

欧州でも深海棲艦の主力であるスピットファイア相手では下手に格闘戦を挑むと負けるという事が数多く見られていた。

244飛行戦隊は、特に格闘性能が良い深海棲艦の艦載機を相手取るべく、深海棲艦機よりも格闘性能が良い日本陸海軍の戦闘機隊相手に模擬戦を続けてきたのだ、その戦術は確立されていた。

敵戦闘機相手には格闘戦は厳禁、高度有利を常に取りつつ一撃離脱に徹する事。

これが244、245飛行戦隊の戦術であった。

急降下時、速度は軽く850km/時を超えるのだ、高度有利を取られているならばまだしも、こちら側が高度有利を取っている状況で尚且つ数でも優っているとなれば早々負けるわけもなかった。

最初の一撃で敵戦闘機の内、10機をあつさり撃墜。

Bf-109やFw-190の搭載するMG151/20mm機関砲には薄殻榴弾（一般的にミーネンゲシヨスと呼ばれる）が含まれており、弾薬ベルトの種類にもよるが基本は5発に1発の割合で含まれておりその破壊力は幾ら防御力が高い深海棲艦と言えども当たりどころが悪ければ一撃で爆砕される可能性すらあった。

ただ、生産設備が少数であり生産量が244戦隊と245戦隊の分を生産するだけで精一杯だった。

それに態々MG151/20mm機関砲を烈風などに搭載せずと

も元々日本海軍や陸軍で使用されている九九式二号20耗機関銃や二式20耗固定機関砲（ホ5）は攻撃力という観点から言えば確かに薄殻榴弾に劣るがそれでも十分な威力を持つていたのでこれといって特に換装する必要性は無かった。

だが、逆に244飛行戦隊や245飛行戦隊の機体武装を換装するならば生産設備があるのだからそのまま使えば良い、という事だった。

因みにだが、弾薬ベルトの弾薬を全て薄殻榴弾にすることも可能だが生産数の都合上、それは出来ないでいる。

『敵機撃墜！』

「散開、ロツテを組んで一撃離脱に徹しろ！格闘戦だけは決して挑むのも厳禁、挑まれて乗るのも厳禁だぞ！」

そう言われた瞬間に2機編隊を組み高度を回復した第1中隊各機はそれぞれ手頃な獲物を見つけてつつ敵戦闘機に襲い掛かって行った。

その頃第2、3中隊は護衛戦闘機も無く精々が防護機銃程度に守られたほぼ丸裸同然のB-17を一方的に撃墜していた。

一番端から削り落とす様に1機、また1機とB-17を叩き落とすていく。

翼を根元から押し折られてクルクルと切り揉みしながら落ちていく機体や爆弾槽の爆弾に20mm弾や13mm機銃弾が直撃し爆散する機体もあった。

「よし、また1機撃墜！」

「ははは、敵戦闘機さえいなけりやこつちのもんだ！」

「しかしMG151の火力はやっぱり凄まじいな！」

それぞれが感嘆の声を上げながら次々と爆撃機に襲い掛かってはその度に撃墜戦果を上げていく。

基本的に敵戦闘機相手の戦闘ならばロツテで対応し、敵爆撃機が相

手ならばシュヴァルムと呼ばれる4機編隊で攻撃を仕掛けると言うことになっていた。

2機だと単発機や双発機であれば問題無いが流石に重爆撃機相手となると防御力は格段に上なので仕損じる事もある。なので4機による集中砲火で敵爆撃機を確実に一度の攻撃で撃墜するのだ。

その頃、245飛行戦隊は前述の通り苦戦を強いられ続けていた。というのも、敵戦闘機の数と同数程度であることと高度有利を敵側に取りれていた為を受け身に回らざるを得なかった。

「244戦隊はまだか!?!」

『未だ戦闘中との事!』

「このままでは敵攻撃機に手出しが一切出来ないぞ!」

『隊長!我々2中隊と3中隊で敵戦闘機を抑えます!1中隊は攻撃機を!』

「だがそれではお前達が危険だぞ!」

『大丈夫でさあ!こちら前線にいた時はこの数倍の数をもっと少ない数で相手した事だつてあるんだ、このぐらいなんともありません!』

「……分かった!任せたぞ!」

『了解!』

ヴァーグナー大佐は部下の第2、第3中隊長からの進言を受けて決断。

敵戦闘機の相手を任せ自身と第1中隊は敵攻撃機の攻撃に向かった。

「そんじゃまあ、大見え切った手前だからな、無様な姿は晒せんよな、お前ら!」

『中隊長、敵機来ます!』

「散開しろ！ロツテを忘れるな！特に坊主！」

『大丈夫です！』

第2中隊長は第3中隊長と共に戦力差がある中、善戦。

結果として第2第3中隊のみの戦果として撃墜24、被撃墜6機となりキルレシオ4倍という大戦果を上げる事となった。

245戦隊全体の戦果としては敵戦闘機31機撃墜。敵攻撃機67機撃墜となった。

被撃墜は13機。

自軍の被害の7.5倍の戦果を挙げるに至った。

だが結果としては、護衛任務を完遂することは出来なかった。

迎撃をすり抜けた攻撃機によって徒歩による撤退中の部隊が幾つか襲われたのだ。

その被害は、攻撃が分散した事もあって大きくは無かったのだがそれでも戦う前に陸上戦力を失う事となったのは大きい。

だがこれはまだまだ始まりに過ぎなかった。

敵の上陸があったその日の内に第96歩兵師団が守る防御陣地と衝突。

96師団は3週間に渡る絶望的とも言える戦闘の火蓋を切った。

第49話

陸戦で、一番最初に戦闘状態に入ったのは屈斜路湖南岸に急造の防
御陣地を築いていた第96師団所属第74歩兵連隊だった。

この時、第96師団は屈斜路湖南から雌阿寒岳、阿寒富士、旧阿寒
摩周国立公園辺りで防御陣地を構築、増援が到着し3師団が防御陣地
を構築し終えるまでの間遅滞戦闘を展開するべくそれぞれの連隊は
割り当てられた場所に防御陣地構築を進め、544偵察中隊と連携
し、迎撃体制を整え進めていた。

屈斜路湖南岸を担当していたのは第74歩兵連隊。

雄阿寒岳、阿寒湖と雌阿寒岳に続く辺りの旧阿寒摩周国立公園一帯
までを第157歩兵連隊が担当。

残りの第187歩兵連隊と第285歩兵連隊は遊撃や応援要請に
応じて戦力を抽出する事になっており、基本は第157歩兵連隊と行
動を共にしていた。

先ず戦闘に突入したのは74歩兵連隊で、上陸してきた敵歩兵2個
師団の前衛部隊約4個連隊を相手取る事となった。

この時の防御陣地構築は、準備期間がたったの三日程度であったの
に加えて資材不足により塹壕程度を構築したに留まっていた。

場所によっては機関銃座を構築した部隊もあるにはあったがやは
り極少数だ。

各兵科には携帯円匙の他に斧やツルハシなどと言った陣地構築な
どに必要な装備を携帯している者が大多数だった。

と言うのも、基本的に工兵隊と行動を共にする事が大前提としての
作戦であるのだがそうで無い場合、例えば緊急性が高く工兵隊の準備
を待つてられない状況などが、どうしても想定される。

その様な時に歩兵科や砲兵科、機甲化など各兵科だけでも最低限工兵がやらなければならぬ仕事をやれるよう、各部隊にはそれらの道具が用意されていた。

理由としては陣地構築の際にコンクリートなどの建築用資材を運び込んでくる事が困難である場合などの際にはその資材を現地調達しなければならぬ時があるのと、工兵部隊が随伴出来ないと云う時があるからだ。

今回はそれが当て嵌まるのだ。

何せ建築用資材も時間もまるで足りておらず、なんなら全くない。そうすると即席で構築する他無いのだが、そうなるも最も汎用性に優れているのが木材だ。

特に北海道は一度山に入ればそこかしこに陣地構築をするのに十分な木が生えており、幹の部分や太い枝はそのまま塹壕の壁面を補強出来るし、それに使えない細かったり長さが足りないものは火に焚べるでも良い。

コンクリートは固まれば確かに強固ではあるが固まるまでに数日は掛かるし、そもそも枠組みを立てなければならず固まったとしても攻撃を受けて損傷を負ったからすぐに補修して、とはいかない。

補修箇所や度合いによつてはまた数日は乾かさなければならぬ。それに比べて木材は強度こそ劣るが、汎用性に富み伐採後即座に使用可能、壊れたとしても交換自体は行えるし交換した木は薪などとして再利用が可能ときた。

建築資材の無い前線においてこれほど防御陣地の構築に向いている資材は存在しないだろう。

因みにだが、硫黄島にはそのような防御陣地に使えるほどの木材は存在しない。

あつたとしても十分な数では無いのだ。

今回は、特に理由として後者に該当する。

96師団にも本来ならば工兵大隊が属していたのだが防衛線構築を最優先とする為に96師団司令部は指示を出す役割の工兵科兵士

10名を残して構築しなければならない範囲や箇所が多い日高山脈に抽出を決定。

それぞれの師団には大隊規模の工兵隊を有しているのだが、今回の北海道防衛において増援が到着するまでに北海道を南北に縦断した距離をたつたの3個師団で防衛しなければならず、しかも面積で表せば日高山脈と石狩山地、北見山地の3つをそれぞれ1個師団で防衛しなければならぬから3個師団で防衛するには余りにも広大過ぎるのだ。

それをそれぞれの師団の工兵隊だけでは余りにもカバーしきれない。

そこで、96師団司令部は師団が保有する工兵大隊の抽出を決定した、と言う背景がある。

故に陣地構築や地雷設置などの本来ならば工兵が行う作業も各歩兵小隊などが兼務しなければならなくなった。

だから地雷の敷設作業もあまり進められないから、戦う前に敵戦力を少しでも削る事が難しくなっている。

となると、96師団は個々人の火力のみで敵からの攻勢を耐えなければならぬ。

96師団のそれぞれの部隊は敵が来襲するその時まで、懸命に体を動かし続ける。

自分が死ぬかもしれない塹壕や機関銃座を掘り、伐採した木で壁や屋根を作り簡易的なトーチカを作る者もいる。

救護所を天幕でそのまま設置するわけにも行かないから地面を掘り下げてその周りを木で囲い土を盛り偽装を施す者もいる。

単純に構築しただけで配置がバレて事前砲撃などで破壊されてしまう可能性があるから念入りに偽装を施さなければならぬ。

敵の陸上部隊からも欺かねばならないのもそうだが、敵偵察機からも欺かなければならぬのだ。

なにせ陸からの敵の目というのはあくまでも双眼鏡を除いたとし

ても見えない場所なども数多いし偵察取り零しというのも多い。

だが航空偵察ともなると、その脅威度は跳ね上がるなんてレベルじゃない。陸ではあくまでも見える敵しか見えませんが空からならば地中などに隠れていない限りは部隊の全容すら把握する事が出来るし、多少おかしいところがあればそれは報告として上げられてしまう。

そのような理由で、斧で木を切り倒し陣地構築を進め偽装を施し視界や射界の確保も同時に行う。

携帯円匙とツルハシで塹壕を掘り進め土を盛り、伐採した木を適当な長さに切り揃え幹の部分は壁として、それ以外の太い枝などは隙間を埋めるなり杭として使用する。土嚢には限りがあるから必要な箇所においていく。

そのように出来る限り、たった数日とは言え自分達の命が掛かっているのだから兵士達は全力で構築を進める。

最低でも数人で入れる穴を掘り、それを塹壕で繋いでいる。

射界の確保について少しばかり説明しよう。

野戦において射界というのは様々な場合があるが今回の事例で説明するとすると、以下の様な手順で決まる。

まず師団司令部から各連隊が守る場所を指示される。

これは屈斜路湖南岸を担当している第74歩兵連隊、という様な形だ。

次に師団司令部からどこを担当せよ、という命令が来た連隊本部は各大隊にまたどこを担当させるのかを連隊長以下参謀達と決め、決まり次第下令する。

そして、実際に射界と言う事を意識し始めるのはこの時だ。

連隊は大隊単位で考えた時に理想を言えば、

「射界が通しやすく、敵からの射界が通り難い」

と言うことが最も理想である。

だがこれはあくまでも理想であってそんな場所は数える程も無いだろう。

それに加えて他の大隊と十字砲火を構成しやすく相互支援が可能である事も射界を考える上で重要な事柄だ。

単独で戦って勝てるのであれば良いがそうではない、今回の場合などの防衛側として戦う時は上記の事を意識して射界の確保をしなければならぬ。

付け加えて言うならば、敵の攻撃に耐え切れなくなった時に出来るだけ敵の砲火に晒さず安全に各部隊や兵員を後退させられる場所である事が望ましい。

これに該当するのは、山や丘の山頂で後退する側が降り斜面になっている場所だ。

ここならば山頂から高所有利を取って撃ち下ろす事ができ、後退するとしたら敵は斜面を登らなければならぬからその間に十分な足止めを行いつつ、斜面を下るだけでこちらは後退出来る。

もっと言うならば鉄条網や地雷などを射界側の斜面に出来る限り、後退の妨げにならない様に配置する事が出来ていればもっと効率良く敵への攻撃、足止め、後退が可能となる。

話を戻そう。

大隊に担当防衛場所などが連隊から指示されると、大隊本部はさらに所属している1〜3中隊に担当防衛場所を決定次第伝える。

この段階になれば殆どの場合よほど訳の分からない場所であれば、この時である程度の射界は通っている。

大隊長や中隊長が大アホで、どう言うわけか高所有利を最初から放棄して丘や山の谷間などに展開するとか、担当せよと言われた場所に射撃を行う上でどうやってもすぐに排除困難な障害物があるなどの場合も無いわけではないのだ。

そう言う場合、前者であれば連隊本部などから配置場所の変更命令が出るのが殆どだ。

なにせ配置を変えなければ防衛が出来ない、と言うことに変わりないからでそう言う場合に備えて準備時間に余裕があるならば次候補の場所を備えておくのだが今回はそんな時間は無い。

ただ幸いな事にもそういった問題は起きていないから心配する必要は無いのだが。

そして、中隊本部から各小隊に更にどこを担当するのか指示が出る。

それぞれの小隊長は分隊単位での射界を伝達し、分隊長である軍曹や伍長は分隊員各個人の射界を決める。

分かりやすく例えると、

「お前の射界右限界はあの木で左限界はあの木」

「貴様の射界右限界はあの岩で左限界はあの木まで」

「左限界のあの川から概ね35〜40度で射界を取れ」

といった様な形で指示される。

機関銃手だとカバーする射界は三八式歩兵銃を持つ小銃手よりも広くなる。

それぞれの蝟壺は各人で掘るのが通常だが、時間が無い為に二人でペアを組み二人用の蝟壺を掘り、早めに終わらせて防衛の要ともなる機関銃座や塹壕に費やす時間を多くした。

各小隊や大隊は休憩を交代で取らせつつ昼夜問わずの陣地構築を行った。

理想を言えば、全ての部隊同士を塹壕で繋がったのだが時間の都合上、大隊ごとで繋げるのが精一杯。

各掩体（蝟壺の事）には機関銃座には弾薬箱が運び込まれ継戦能力を向上、手榴弾なども多めに置いてある。

対戦車用のパンツァーフアウストやパンツァーシュレックは敵戦車の侵攻が予想される場所を担当している部隊に出来る限り回された。

対戦車砲も、殆どが旧式の37mm砲や47mm砲のみで敵戦車の正面装甲を貫くことは出来ない。

極々少数の75mm対戦車砲もあるにはあるが、それでも数は北海道全域で数えると13門、96師団には3門が配備されているに留まり74歩兵連隊には1門も配備されていない。

その分、パンツァーフアウストなどを優先して配備されている。

それでも数は少なく万全とは言い難い。

因みにだが掩体の中には弾薬置き場なるものがちやんと作られるので、土の上にそのまま弾薬や砲弾をポンとおくと言うことはない。

そんな防御陣地構築をしている最中だった。

第544偵察中隊が緊急電で敵上陸開始、規模4個師団8万以上、と全軍に知らせた。

それに伴い、544偵察中隊は後方に敵部隊の動向を探りつつ後退。

敵部隊進路は96師団が守る防御陣地へ向けて旧釧網本線沿いと芝桜花街道沿いに進軍を開始。

それぞれ2個連隊が進軍してきており、その進軍速度は速く上陸から僅か5時間で74歩兵連隊と戦闘状態に入った。

「連隊麾下に戦闘準備命令！弾の無駄遣いはするな！一分一秒でも長くここで耐える事が我々の任務だ！」

「はっ！」

連隊長が矢継ぎ早に指示を飛ばし、大急ぎで戦闘準備を整える。

平野だと、戦力差で押し潰されてしまう為に、部隊は全て山中に展開していた。

74歩兵連隊は中央を第1大隊が守り、その両翼を右から第2大隊、第3大隊が守りを固めていた。

「敵部隊距離4500m！」

「師団本部に砲撃支援要請は可能か!？」

「距離が遠く不可との事！」

「それならば、我々が敗走した時のために屈斜路湖陣地と阿寒陣地の

間に照準を付けておいて貰えるよう打電！」
「了解！」

「敵瑠美和原野に到達、後続はサワンチサップ周辺に到達しました！」
「まだ撃つな！よく引き付けてから撃て！狙撃手、敵の部隊長らしき存在があったら迷わず撃て！指揮系統を混乱させろ！」

瑠美和原野に到達した敵部隊は、若干の小休止の後に再び進軍開始。

国道243号線沿いの山中に展開していた第2大隊は、大隊長の命令により照準を付けていた。

鏡の間と呼ばれている森の中を進む敵部隊を狙うことは出来なかったが、その南側の開けた畑の辺りを通ろうとした深海棲艦部隊は鉋路川を渡って100m程進んだ時だった。

「撃エ!!!」

大隊長の号令により、軽機関銃や重機関銃、三八式歩兵銃からの一斉射を受けた。

しかも頭上からは迫撃砲弾が自分達の退路を塞ぐかの様に降り注ぎ前進することも撤退する事も出来なかった。

それでも敵部隊は前進を続け連隊全部が川を渡り切った頃、敵の被害は大きく膨れ上がりほぼ半壊状態となっていたが、その後方から応援要請を受けて駆け付けた敵歩兵連隊が、装甲車を全面に押し出して強引に進んでくる。

「敵装甲車！」

「だめだ、歯が立たない！」

「迫撃砲、敵装甲車に照準！」

「左二度、上げ角三度！照準良し！」

「装填用意！」

「用意良し！」

「撃ッ！」

迫撃砲によって敵車両に向かって砲撃が叩き込まれるが、至近弾と

言えども直撃では無いから頭を出して機関銃を撃つ乗員には過剰な威力を発揮するが、車両本体には丸でダメージが与えられない。

「敵装甲車未だ健在！歯が立ちません！」

「迫撃砲の照準を敵歩兵に！対戦車砲、敵装甲車に照準を付ける！準備が整い次第射撃開始！」

大隊長は47m対戦車砲に攻撃命令を出す。

この時、北海道に配備されていた数少ない対戦車砲の内9門を96師団は委ねられ、96師団司令部は師団麾下の各連隊に3門づつを渡していた。

74歩兵連隊は各大隊に1門づつを配備させていた。

防衛司令部が対戦車砲を96師団に委ねたのには、同情なども確かにあったのだろうが、最も大きな理由として機甲戦力を有する敵師団に対し個人携帯用対戦車火器だけでは野戦において敵機甲戦力の撃破は難しいと判断したからだ。

市街地戦闘ならば、確かに入り組んでいたりするし遮蔽物も数多くあるから撃った後もすぐに逃げる事が出来るし兵士の損耗を最小限に抑える事が出来る。

だが野戦ではそうはいかない。

なにしろ、森の中だとしても隠れられるものといえはその辺に生えている木しかないが、小火器相手なら十分だろうが戦車砲や重機関銃相手では隠れるには不十分だし何より当たり前と言えれば当たり前だが隠れた木と諸共に吹き飛ばされる。

しかもパンツァーファウストは射程が100mしかなく、確実に敵戦車に命中させ撃破させるとなると少なくとも射程の半分、50m以内には接近しなければならぬ。

これでは、歩兵の支援がない敵戦車相手ならばまだやりようは十分以上にある。

だが歩兵の支援を受けている戦車にこれを撃ち込むとなれば、撃つ前に射手が殺されてしまい殆どが無意味になってしまう。

パンツァーシュレックは使用する弾頭によって前後するが最大でも200m程、しかも使い捨てのパンツァーファウストと違い使い捨て

てでは無いために後退時に持つて後退しなければならず、重量も10kg程と迅速な後退も無理だ。

しかも撃った時に飛び散る破片などから射手を防護するべく取り付けられている防盾も素早い行動を阻害する。

それを差し引いてもかなり重いし、それに加えて自分の歩兵銃や弾薬なども後々の事を考えれば、特に予備武器が乏しい現状の96師団どころか北海道全域で考えると置いていくわけには行かないから持つて行かなければならず、そうになると武器弾薬だけで軽く20kgを超える。そんな状態で迅速な後退を、なんて言うのは土台無理な話なのだ。

配備数の観点から言ってもパンツァーフアウストの方が圧倒的に多い。

と言うのもパンツァーフアウストは、碌に訓練していない新兵でも扱える代物のだが、パンツァーシュレックはそうではない。

しっかりとした訓練を受けてからで無いと扱うことが出来ない。

だから、パンツァーフアウストの方が配備数は圧倒的に多い。

どちらを使うにせよ、かなりの至近距離まで接近せねば敵機甲戦力の撃破は望めない。

そうになると、必然的に96師団が持ち堪えられる期間が短くなると言うことに他ならない。

96師団全体では、パンツァーフアウストを150門を超える数を装備しているが、各連隊に配備出来るのは50門程度。

これでは機甲師団に攻め込まれては一溜りも無いだろう。

深海棲艦の機甲師団は1個だけで軽く数百両を有しているし、例え全弾命中をしたとしても撤退させる事は出来ても撃破は敵わない。命中しない弾数の事を考えると、よくて50両撃破出来ればいい方。

そうになると、通用するしないは置いておいて対戦車砲を預けておいた方がより長く、より確実に96師団は敵からの攻撃に対して持ち堪える事が出来る。

その判断は、間違いでは無かった。

「47mm砲準備よし！」

「装填！」

「撃エツ！」

「くそつ、外したッ！」

「照準修正！左3、上げ4！」

「左3、上げ4！……ッ！よし！」

「撃エツ！」

「命中命中中ッ！」

対戦車砲小隊は初弾を外すも、次弾で敵装甲車の破壊に成功。

しかしながら数が多く突破を許してしまうが、第1大隊と第3大隊も連絡を受けて既に照準を敵に向けており、部隊の配置的に真ん中に行けば行くほど敵に十字砲火を食らわせやすくなっていた。

第2大隊からの突然の射撃で混乱した敵2個連隊は、第2大隊に向かって進むのでは無く第1大隊の目の前、畑が広がり視界が開けた場所（地図アプリ等参照）に出てしまった。

お陰でそこに突っ込んだから、左からも右からも真正面からも銃撃砲撃の雨霰を喰らった。

しかも畑だから遮蔽物となる様なものなんて精々が農業用水が流れる用水路や盛り上げられた道の若干の斜面しかなく事前の下見や地図でその位置を知っていた74歩兵連隊からすれば遮蔽物に隠れてはいるが数が少なくそこに迫撃砲弾を落とせば簡単に敵兵を撃破出来てしまうとと言う、簡単に言えば動かない良的にならなかつた。

だから深海棲艦の兵士達はどうかして遮蔽物を確保しようと、あっちこっちを見るが森や林は畑の開墾により先程通過した鏡の間の森以外無いから、装甲車や極小数の支援の為に随伴していた戦車を盾にしようとするが、それはそれで集中砲火をあちらこちらから喰らって寧ろ用水路などよりも危険だった。

「敵戦車を対戦車砲は狙え！撃破出来なくとも周りに隠れてる敵兵はやれる!!」

「迫撃砲、用水路と道の斜面にありっただけ叩き込め！」

「敵指揮官らしきのをやった！これでもつと混乱するぞ！」

戦車を盾に集まった敵兵は、瞬く間に集中砲火を喰らい、戦車は対戦車砲の集中砲火で擱座または撃破されてしまいそこに遠慮するなと言わんばかりの迫撃砲。

更には状況を確認しよう度頭を出した指揮官を狙撃手が撃ち抜きただでさえ混乱していたのに指揮官を殺されたものだから余計に混乱するばかりで深海棲艦は事態の収集が付かなくなっていた。

深海棲艦は、この時屈斜路湖の東西に分かれて進んでいた。

西側を進んでいた2個連隊は東側を進んでいた2個連隊よりも迂回気味の進路であったために行軍距離が長く、到着までに時間が掛かっていた。

大急ぎで救援に向かうも2時間近く掛かってしまい、その時には戦闘は終わっており日本軍側は既に544偵察中隊からの敵部隊接近中との情報により迎撃体制を整えていた。

流石にそんな場所に突っ込めばどうなるかは明白であったし、それは深海棲艦部隊も理解していた。

だから攻撃では無く、後方の友軍と合流し再度攻撃を仕掛ける事にした。

結果的にこの戦闘は第74歩兵連隊の完勝とも言える勝利に終わった。

96師団司令部はその報告を受けてお祭り騒ぎになる。だが勝てたのはこの戦闘だけだった。

翌日明朝に、544偵察中隊から敵部隊確認との報を受けた第74歩兵連隊は昨日と同じ様に迎撃体制を整えて返り討ちにしてやる！と息巻いていた。

だが、

『敵部隊、1個師団規模が戦車三十数両を伴い前進中。迎撃準備を整えられたし』

との無線を受けた瞬間に、絶望感が溢れ出る。

昨日は歩兵が大多数を占めていて戦車の数もたったの10両と少

なかつたから勝てたと言うだけで、これが30両を超えてくると勝てる予想すら立てられないほどだ。

昨日の10両だって、一斉に攻めて来なかつたなどの理由が重なり、重なり撃破する事が出来た訳で、一斉に攻められては昨日の時点で負けていただろう。

それらを考えるに、今回ばかりは撃破どころか撃退すら難しいと言わざるを得ない状況だった。

先の戦闘時間はたったの3時間程度ではあつたがただ運動するのと、命懸けで戦うのとは全く異次元レベルでの疲労だ。

一日程度で癒えるほどの疲労では無く、しかも敵の砲撃などで破壊された箇所もありそちらの修復を夜通しやっていた小隊や分隊などもあつた為に万全とは言い難い状況だった。

そこで74歩兵連隊の連隊長は師団司令部に応援要請を送り更に独断で北海道防衛司令部と航空隊防衛司令部に双方に、

「敵戦車多数が我に向かつて侵攻中也。少数でもよいから戦闘機や爆撃機での航空支援は可能なりや？物資補給は可能なりや？」

とどうにかして航空支援を受けられないか、物資の補給は受けられないか、と打診。

師団司令部への応援要請は通つた。

しかし残酷な事に航空支援は現状厳しいとの返信が返つて来た。

この日から244飛行戦隊と245飛行戦隊が撤退中の部隊の支援に既についていたのだが、それでも北海道に元々駐屯していた航空隊が予備部品や燃料の乏しさ故に出撃が困難であつた事など理由が重なりそちらからの支援も期待出来そうにない。

と言うことは、96師団は孤立無援の中で敵の大部隊からの攻勢を耐え続けなければならない。

しかしながらそれでは余りにも酷であるし報告通りの敵戦車が侵攻していると言うならば96師団はそう長く持ち堪えられない、と言うことで、海軍航空隊の紫電改16機と一式陸攻8機による支援が決定。

これでも数は十分とは言えないし、敵機が出て来た場合抵抗することも難しいだろう。

それでも96師団からすれば喉から手が出るほどに、いやそれ以上に渴望していた出来ないと言われている航空支援が少なからず来てくれるのだから大盛り上がりだ。

「やった！海軍の戦闘機が来てくれるぞ！」

「これで敵戦車も怖くねえ！」

「勝てる！勝てるぞ俺達は！」

そう口々に叫ぶ彼らとは別に、師団司令部では重い雰囲気漂っていた。

確かに友軍機の派遣は大変嬉しいものであったがそれでも、74歩兵連隊は持つてあと1週間現在の場所を守り切れればいい、と言う考えだったからだ。

何せ敵との戦力差は圧倒的すぎる。

今ですら1個歩兵師団に加えて戦車が30両以上も同時に侵攻して来ているのだから最悪、今日74歩兵連隊が壊滅して陣地を放棄、後退してもなんともおかしくも不思議でもないからだ。

上陸当初は4個師団と言っていたが今ではその数倍に膨れていると考える方が当然だし今日勝ったとしても明日や明後日には倍の数で攻めてくるだろう。

師団司令部はそう考えても、友軍と戦う術を持たない民間人達の為にここで戦わねばならないのだ。

(とはいえそれで諦める訳にもいかん。どうにかして勝つとは言わんでも持ち堪える術を考えねば)

師団長は自身を奮い立たせた後にどうすれば敵部隊を撃退出来るか、と思考の海に沈んだ。

敵部隊発見の報告があった1時間後には第285歩兵連隊が応援

として到着。

その5時間後、敵師団が屈斜路湖の東西の道を戦車を前面に出して進軍、視界に捕らえた。

その1時間後、74歩兵連隊と第285歩兵連隊は敵師団は戦闘状態に突入。

そこからは両連隊にとって地獄の3時間だった。

「クソオツ!!敵戦車の野郎パンツァーフアウストやパンツァーシュレックの射程外から撃ってきやがって!」

「止せ!頭を出したら死ぬぞ!引っ込めてろ!」

敵野砲や迫撃砲、戦車砲の砲撃で顔を出しての射撃どころか機関銃座も位置が露呈した瞬間に戦車砲などが雨霰と降り注いでくるから射撃出来ずにいた。

「不味いぞ!敵戦車が突っ込んでくる!」

「パンツァーフアウスト、パンツァーシュレック!接近してきたら敵戦車に食らわせてやれツ!!」

「各員、撃つ時に援護射撃をしてやれ!」

「撃つぞオツ!!」

「援護射撃!撃て撃て!」

前進してくる敵戦車に対して、パンツァーシュレックが最初に火を吹く。

命中弾もあるにはあったが、外す方が多かった。

1回目の射撃で撃破出来た敵戦車は2両だけで再装填中に前進される。

その間にも後方から迫撃砲や対戦車砲が撃つがそれでも戦車を止めることは叶わなかった。

しかし、ここで紫電改と一式陸攻が到着。

敵戦車に対して紫電改は急降下爆撃を、一式陸攻は低空での水平爆撃を行った。

戦果としては敵戦車14両を完全破壊、3両を擱座させるに至った。

更に敵歩兵やトラックなどの非装甲車両や走行の薄い車両、敵歩兵に機銃掃射を繰り返した。

その混乱に乗じて両連隊のパンツァーフアウストやパンツァーシュレック射手は敵戦車に接近、叩き込んだ。

これによつて戦車への被害が増した敵師団は撤退。

この日はどうかこうにか96師団側が防衛に成功した。

それから三日間に渡つて断続的に敵部隊からの攻撃は続いたが、それを全て跳ね返した2個連隊は大きく沸いた。

それから四日ほど攻撃が一切無く、その隙に一式陸攻や二式大艇によつて水食料弾薬などの消耗品を空中投下によつて補給。

体勢が整つた96師団は敵部隊を待ち構えたが、最初の戦闘から十日目の朝。

太陽が登つてすぐに敵空母艦載機からの猛烈な爆撃が行われ、更に敵野戦重砲からの砲撃も加えられた。

それが丸々四日間に渡つて繰り返された。

その間、防御陣地への被害も甚大で砲撃が止んですぐに敵2個歩兵師団が前進、攻撃を開始。

2時間に及ぶ激戦の末に、両連隊は屈斜路湖南岸陣地を放棄、後方の師団司令部のある阿寒陣地まで撤退。

この戦闘で74歩兵連隊と285歩兵連隊は5000人いたが1300名が戦死、もしくは撤退中に行方不明となった。

残りの3700名の内1000名ほども重軽傷を負つており実質的に両連隊の戦力は半減するに至つた。

第187歩兵連隊と第157歩兵連隊は未だ無傷で防御陣地も継続して構築していたが、それでも圧倒的な火力の前ではいつまで持つか分からなかつた。

しかも撤退の際に歩兵銃などは持つて撤退したが、それ以外のパンツァーフアウストやパンツァーシュレックは撃ち尽くし、対戦車砲や迫撃砲は重量がありそれらを持つての撤退は困難であると判断、爆破処分と余つた砲弾をブービートラップとして活用する程度だつた。

火力も大きく減衰してしまい、師団司令部はもってあと十日、と判断。

しかしながら幸いしたのは、阿寒陣地は山中であり戦車の侵入は困難では無くともかなり阻害されるから敵戦車の撃破が容易であることと敵歩兵は戦車の援護をしたり受けるために足並みを揃えざるをえず、比較的防衛が容易であることだろう。

しかしながらそれでも絶望的な状況には変わりなく、更に絶望のどん底に突き落とされるような情報が544偵察中隊からもたらされる。

「阿寒陣地、敵3個師団に包囲される」

この情報によると三方から完全に囲まれており脱出などはほぼ不可能であることを意味した。

しかしながら96師団は戦闘を止める訳にはいかず、何よりもまだ防衛司令部から最低限の陣地構築完了の報告を受けていなかったから持ち堪える他無かった。

そしてこれより12日間に渡る戦闘が展開されることになり、その戦闘によって96師団は残存戦力の殆ど6500名を喪失。

残った700名ほども負傷者が300名ほどと自分の足で歩いて戦うことができるのは僅か400名となった。

しかしながらギリギリ北見山地、石狩山地、日高山脈の防衛線の体勢は整った。

武器弾薬や水食料までもが底を尽き、これ以上の戦闘継続は既に困難であったために、その報告を受けてすぐ400名を防衛線へ撤退させる事を師団長は命令する。10名ずつの班に分かれて夜間に闇夜に紛れての脱出となった。

負傷者300名はその場で400名を逃すべく最後まで戦う事となり負傷者の中には師団長が含まれており、指揮を継続。

400名を撤退させる旨の伝聞が発せられた二日後、300名の指揮を執っていた師団長の名前で、

『我勇猛果敢ニ戦ウモ、既ニ弾ハ無ク皆負傷。コレヨリ敵ヘ一矢報イ

ルベク最後ノ攻撃ヲ行ウ。友軍ノ武運長久ヲ確信ス』
と発した。

これにより、96師団は残存戦力400名を残し全滅。
この地での戦闘は終わった。

撤退した400名は、内132名が無事に防衛線まで撤退する事が
出来、残りは戦死したものと思われる。

544偵察中隊は、継続して敵部隊の偵察や後方破壊工作を行う事
となった。

第50話

96師団の壊滅後、次に戦闘が始まったのは十勝平野に進出してきた深海棲艦の機甲部隊と、先発していたティーターガ―戦車装備の第35戦車隊の15両とホハ15両に分譲している随伴歩兵150名及び第2実験戦車大隊とホハ30両に分譲した随伴歩兵300名だった。

この時、十勝平野に両部隊が展開していた理由は面積が広く、平坦で見通しが利きやすく戦車の展開が容易であったこと、隠れようと思えば隠れられる場所が複数箇所あったこと、そして何よりも敵機甲戦力の展開も同時に容易であることが予想された為に、両戦車部隊が展開し敵機甲戦力の撃破、及び日高山脈に築いた防衛線に対する砲撃を行うために前進して来るであろうと予想された敵砲兵隊の撃滅任務を帯びていた。

北見市と、南側の海沿いを同時に侵攻してきた深海棲艦の機甲部隊はそれぞれ別の機甲師団所属で、本隊では無く前衛として各30両のシャーマン戦車が10両ずつで少しばかり間隔を空けて前進して来ていた。

この時、第35戦車隊とその随伴歩兵の第35歩兵中隊、第2実験戦車大隊の面々は、展開し戦闘するのに不向きである日高山脈の斜面などでは無く、十勝平野の、それも日高山脈の麓辺り、南北36kmに渡る地域をたった45両で守らざるを得なかった。

それ以外の、北海道に元々配備されていた八九式などの戦車は各地の守りを固めていた師団にそれぞれ配備され、トーチカや砲台として使われていた。

と言うのも、北海道に配備されていた戦車は対歩兵戦闘という観点からすれば威力を発揮する。

そもその話としては戦車対歩兵という時点で戦車側は圧倒的に有利だ。個人携帯用対戦車火器を持たない歩兵からすれば撃破の手段と言うのは無いに等しい。あったとしても撃破できる可能性としては極低確立だろう。

それに比べ、対戦車戦闘という観点からこの戦車を見ると、圧倒的というほどでは無いが、どう考えても走攻守全てに置いて力不足であった。

唯一拮抗出来るのは速力と、上回っている点は搭乗員の練度ぐらいであったが、いくら砲弾を命中させても貫通させる事は出来ないし、撃破というのは夢のまた夢、と言ったところか。

背後や側面に回り込めればまあ、可能性はあるだろうがこちらが深海棲艦の戦車の装甲を貫通出来る距離に近づく前に相手の砲はこちらの装甲を簡単に貫通するのだからそれも難しいだろう。

山や林、森の中に隠れられれば、と言う人もいるだろうが、確かに相手からの視認性も下がるし機動力も下がるが、それは結局の所、それはこちらも同じなのだから、そう大して変わるかどうかと聞かれると首を傾げざるを得ない。

しかしながら、ティーガーやパンターに比べ遥かに軽く、この2車種が登れない様な坂であつてもわりかし登れることが多かった。

そこで、北海道防衛司令部は不向きな対戦車戦闘に無理矢理参加させて消耗するよりも、足りていないトーチカなどの代わりに使用した方が良い、と判断。

それにより確かに、防衛線の防御力は少しばかり向上したものの、第35戦車隊と第2実験戦車大隊は総兵力戦車45両、ホハ45両、歩兵450名のみという状況だった。

それでも装備自体は、北海道に展開しているどの部隊よりもずっと良い。

戦車は言わずもがな、ティーガーとパンターという少なくとも日本陸軍が保有している戦車の中ではずば抜けた能力であることは間違いない。

それに車載機関銃もMG34と、射撃速度において圧倒的な機関銃

を装備している。

何故、車載機関銃はそのままなのか、という疑問も最もであるだろう。

と言うのも、九十二式重機関銃を搭載しようとする、両戦車の銃眼部分を直径などを大幅に改造しなければならぬ事が分かったのだ。

それは、両戦車が届いた時点や製造段階で判明していたのだが、それよりも解決しなければならぬ問題、駆動系やエンジン出力不足などと言った問題が山積していた。

それらの問題を解決しなければ、太平洋線域で運用するにはただでさえ重過ぎると言う、ハンデがあるのだからそのままでは万が一本格的に運用を行うとなったら目も当てられない惨状になるのは明白であった。

それらの問題と比べれば、扱う銃が違うなど、些細な問題に過ぎなかった。

何よりも、合同艦隊と共に運ばれてきた生産設備だけでも当時も現在も変わらずに十分に供給が可能であったから、態々生産設備を新たに作る必要も無く、寧ろ生産設備を全て稼働させると逆に供給過多にすらなる。

と言うのも、弾薬や本来ならばMG34、MG42、Kar98kなどの各種装備用に、弾薬や部品を製造する為に多数の工作機械や生産設備を輸送船に乗せた。

しかしながら乗せたは良いものの、工作機械や生産設備を乗せた輸送船を残して兵器の多くが深海棲艦の攻撃によって沈められてしまったのだ。

そうなると必然的に、本来必要となるであろう数量を生産する以上の生産能力が生まれてしまった訳だ。

しかしながら、実戦に投入される訳でも無く、精々が訓練分が必要な程度であった。

それは、各種戦車の台数が増えても変わらない状況であり、生産設

備は確かに若干の増設はしたものの、実戦自体が少なく多量の弾薬を消費したとしても、十分に供給は可能なレベルであったし、MG34の使用弾薬である7・92×57モーゼル弾を使用している他の兵器が存在しない。

Stg44も、元々弾薬は違うしなんなら今では改造を施されて6・5mm弾を使用しているから使う機会は無いです。

それらの理由故に、戦車の車載機関銃としてしか7・92×57モーゼル弾を使用しておらず、しかも機銃弾の搭載量もパンター戦車ですら、機銃手用に3〜4つの弾薬箱と、砲塔同軸機銃用に更に4箱か5箱を乗せている程度で、それぞれの弾薬箱には250発入っており、どれだけ多くても2500発。

第2実験戦車大隊の30両だけでも、最大満数75000発あれば十分に事足りる。

75000発、と言う数は確かに数字上では多く感じるだろうし、740tを超す重さだ。

陸路で運ぶには、確かに手に余るだろう。

しかしながら、太平洋線域の物資の移動手段は基本は海路、船を利用するのだから、第101号型輸送艦4隻もあれば十分だ。

なんなら、戦時緊急増産型輸送船に弾薬を満載させれば1隻で4回分の補給量にも及ぶから2隻か3隻程度の輸送船だけで数回分の戦闘は十分にこなせる。

生産量も、昼夜問わずにフル稼働させれば1日に12万発の生産が可能であるから、4日もあれば十分以上の弾薬数を生産可能だ。

寧ろ、供給過多にすら陥りかねない。

現在は、北海道だけでなく、各方面に振り分けなければならぬからフル稼働状態だ。

備蓄分の50万発と合わせて考えると少なくとも今年中に7・92×57モーゼル弾が枯渇する事は無い。

先んじて、両戦車部隊と共に多数の弾薬砲弾を送り込んだが、次の補給が行われるまでは持ち堪えられる量だ。

それらの点を考えるに、態々九十二式重機関銃を車載機関銃として

扱う為の改造を施す理由が無かった。

なので、戦車の車載機関銃はMG34のままだ。

ホハには九十六式重機関銃や九九式軽機関銃などを装備しており、両部隊合わせてそれが45両、弾薬や手榴弾も満載とは行かずとも一回か2回分の戦闘はこなせる数を搭載しているから、無茶苦茶な戦い方さえしなければ早々に弾薬切れに陥る事は無い。

それに、以前は書かなかつたが、偵察や伝令用に陸王と言うオートバイや、ケツテンクラートが配備されている。

陸王は完全に偵察専門であるが、ケツテンクラートは多少の弾薬や燃料の運搬ならば問題無く行える。

と言うのも、ケツテンクラートには日本に来てから新たに物資運搬用の、所謂トレーラーの様な牽引式の荷台を新たに開発し、路面状況などにもよるが最大1t程度の重量ならば問題無く行えるようにしてあるからだ。

まあ、舗装されていない道や荒地などを走行するから流石に1tも積めないがそれでも500kg程度ならば問題無い。

それぞれの車両を第35戦車隊に20両、第2実験戦車大隊に25両ずつ配備している。

2車種を同時に配備している理由は、陸王だと路面状況が雪や雨などで悪化すると、泥濘に嵌ったりして身動き取れなくなる事がある。

その点、ケツテンクラートは半装軌車両だから泥濘であろう雪であろうと、よほどの場合でなければ走行可能だ。

そのような場合に備えてのものだ。

基本は、陸王が偵察を担い、ケツテンクラートが前線への補給。

そして道路状況が悪化すればケツテンクラートが偵察に加わる、と言った形だ。

歩兵は、基本は個人用にStg44、分隊毎にパンツァーシュレックと九十九式軽機関銃を1門ずつ。

パンツァーファウストは小隊ごとにそれぞれが装備している。

狙撃手は九十七式狙撃銃や三八式改狙撃銃を装備。

他にも、対空用にベルト給弾式の20mm4連装機関砲などもあ
る。

攻勢を仕掛けるには、数は少ないが防衛に徹するのであれば十分と
は言えないが、それなりの兵力であると言えよう。

話を戻そう。

戦闘開始前、第35戦車隊が北側、第2実験戦車大隊は南側を守つ
ていた。

第2実験戦車大隊は、2個中隊で構成されており、第1中隊と第2
中隊に分かれて中部と南部の防衛に就いていた。

両戦車部隊は、それぞれ第544偵察中隊と連携し、敵部隊の早期
発見に努めており、まず敵部隊を発見したのは第544偵察中隊の第
1中隊だった。

第544偵察中隊は第1小隊を白糠町に、第2小隊を陸別町と足寄
町の境辺りに、第3小隊をそれぞれの間が存在する白糠丘陵に配置し
ていた。

第2中隊長は、敵部隊発見を受けて戦闘準備を下令。

「敵機甲戦力30両が、白糠町を通過した！第2中隊戦闘準備始め！」
戦闘準備を進める傍ら、随伴歩兵隊長や偵察隊長、各戦車の車長を
集めて作戦会議を開く。

第1中隊もこの時既に自身の先発偵察によって敵部隊の状況を把
握しており、第2中隊と合流、援護すべく向かっている途中であった。
「敵戦車の数は30両、それを10両づつに大凡100m程度の間隔
を空けて海沿いを進軍してきている。このままの進軍速度であれば、
渡河を考慮してもあと1日程で先頭部隊と戦闘開始となるだろう。
第2中隊はこれより現地点、十勝平野南部、日高山脈に近い高台に陣
取って防備を固める。偵察隊、陸王を偵察に出して敵状を逐次報告せ

よ」

「「「「「了解」」」」」」

「各自作業にかかれ。解散！」

第2中隊は即座に、高台に陣取って偽装を施す。

偽装を施す間も歩兵の手を借りて、ダグ・イン、所謂穴を掘って車体部分を隠し砲塔のみを出した状態にするべく穴を掘る。

歩兵は歩兵で、急造ではあるが戦車を起点とした各自の掩体や塹壕を掘り進め、陣地を構築していく。

「防衛司令部に航空支援を受けられるかどうか確認しておいてくれ。それと補給大隊の奴らに忙しくなるぞ、と言っておけ」

「了解」

中隊長は、無線手にそう伝えて地図を見る。

(このまま敵が進んでくると言うのであれば、取ってくるであろう進路は豊頃町かそのまま南下して大樹町に侵入してくるルートとの2箇所。今現在の位置は、大樹町の境辺りだ。ここならば十分に守りを固めやすい)

中隊長が守りやすい、と判断したのには幾つか理由がある。

まず第一にこの辺り一帯、十勝平野全体が畑である事だ。

見通しが良く、他よりも少しばかり高い位置に陣取ってしまえば辺り一帯を簡単に見渡せるので、戦車砲の射界確保に苦労しなくて済むこと、そして敵戦車に対して有効射程ギリギリからの砲撃を仕掛けられること。

まあ中隊長は、遠距離での撃ち合いは命中率が低く砲弾薬を無駄遣いする、と判断して出来る限り引き付けてからの砲撃をする、と決めていたので遠距離での撃ち合いは早々起こらないだろう。

なににせよ、敵の早期発見が可能であり、第一撃をこちらが得られるだろうと判断したからだ。

それと敵が侵入してくるルートは2箇所しか無く、その片一方は十勝平野の真ん中辺りに出る豊頃町という町を通るルートか、海沿いをそのまま南下してくるルートの2つしか存在しない。

トンネルなどもあるにはあるが、基本は鉄道用であり、しかも撤退が完了した時点で一斉にトンネルなどは全て爆破して通れなくなっているので問題は無い。

この2箇所ルートと、十勝平野の太平洋沿岸地域への敵部隊の強襲上陸さえ警戒しておけば、航空機という脅威を除いてほぼ間違いなく奇襲を受ける心配はない。

なんなら豊頃町のルートを通ると十勝平野の丁度真ん中あたりに出ることになるので、敵部隊は第2実験戦車大隊の第1、第2中隊から挟まれる可能性もあったし、最悪陸別町の敵部隊を殲滅した第35戦車隊も参加して、3方向から挟まれる可能性すらある。

それを考えると、敵が進軍してくるであろうルートは海沿いをそのまま南下してくるルートしか、恐らく存在しない。

さらにもう一つ。

敵は、十勝平野に至るには十勝川を渡河しなければならぬ。

この川には、いや、十勝川に限らず北海道東部全域の橋は部隊撤退の際に同時に全てが爆破、破壊されている。

十勝川河口橋が河口付近に通っていたのだが敵の進軍が予想されたためにトンネル同様、この橋も破壊されている。

という事は、敵は川幅が200mはあるこの十勝川を渡らなければならず、かと言って迂回するルートはずっと北に行った陸別町の方しかない。

十勝平野に侵入するにはどちらにせよ南側を通る部隊は十勝川を越えなければならない。

橋を架けようにもそう簡単には行かないし、となれば戦車を乗せられる上陸用舟艇が来るのを待つしかない。

さらには歴舟川と言う、もう一つの川があつてそこも越えなければ敵戦車は自身の有効射程範囲に第2中隊を収められない。

ただし、この時中隊長は、というよりも第2実験戦車大隊全体が大きく間違えていたことがあつた。

それは、敵の進軍速度だ。

この時深海棲艦部隊は、既に十勝川の橋が使用できないということを知っており、戦車や部隊渡河の為に舟艇を派遣していた。

中隊長やマルクス大佐は、渡河の準備に後一日は掛かるだろう、と想定していたために比較的時間の猶予があると判断したのだがその予測は大きく外れていた。

なので、海沿いを侵攻していた深海棲艦の戦車は、早ければあと3〜4時間程度で第2中隊の目視距離に入る事になる。

しかも敵は歴舟川は水深が浅く、戦車ならば橋や船を使わずとも渡河可能、と判断しており実際にその判断は間違っておらず、歴舟川には舟艇を派遣していなかった。

歴舟川には偵察に行く部隊が渡るために小さな、幅2m程度の橋が幾つか架けられているが戦車は重量の関係で乗る事は出来ない。

それにより敵の十勝川での動きは未だに察知されておらず、第544偵察中隊もその後方に続くであろう敵の主力を捕捉するべく敵地深くに足を進めていた為に、この事が第2実験戦車大隊が知る事になるのは偵察に送り出した陸王を操る兵士が発見するまで、時間にしていえば戦闘準備命令が下ってからきっかり2時間後の事であった。

どちらにせよ、想定された時間的余裕は無く、陣地構築もあまり進められなかった。

「中隊長ツ!!敵部隊は十勝川に舟艇を派遣して既に渡河したとの事です!!」

「何ツ!?敵の進軍速度は!?!」

「時速20kmほどとのこと!」

報告を受け取った中隊長は大急ぎで地図を確認する。

「不味い、このままではあと1時間ほどで歴舟川に到達するぞ……。敵部隊急速接近中、各員作業をもう30分ほど続けたら臨戦態勢!急げ!」

中隊長は声を張り上げてそう指示を出す。

その声を聞いた兵士達は、動かす手をより速くし、最低限自分が隠れられる掩体だけは掘り進める。

最悪塹壕で繋げられなくとも、それさえあれば、戦車の支援で後退出来るからだ。

忙しなく、全体が作業を完了した十数分後。

水やりをされなくなり、乾いた畑を進む敵車両が巻き上げる土煙を視界に捉えた。

「総員戦闘配置、総員戦闘配置！急げ！」

隊長が双眼鏡を覗くと、そこには報告通り敵機甲師団が隊列を組んで進んでいた。

「距離は……、おおよそ4500といったところか……」

「どうしますか？」

「当初の予定通り引き付けてから叩く。どうやら敵戦力は報告以上の数は存在しない様だ。至近距離での撃ち合いになっても正面から抜かれる事は先ず無い。引き続き合図待て」

「了解」

そして、敵戦車が距離1000mを切った瞬間。

「攻撃開始、繰り返す。攻撃開始！」

その命令と共に、一斉にパンター戦車の砲身から砲弾が撃ち出される。

1000mと言う人間で置き換えれば離れた距離だが、発射された砲弾からすればほんの1秒程度の事だ。

現代戦車と違って、自動照準装置や自動装填装置なんてものはパンターに限らずティーガーやIV号戦車、III号戦車に至るまで装備されていない。

と言うことは、砲撃の精度は砲手に完全に委ねられている。

確かに製造過程での砲身の品質なども大きく関わってくるが、このパンター戦車やティーガー戦車は量産車両とはいえ、少数生産に留

まっておりますその製造は多数の熟練工によって丹精込めて作られたものだ。

砲身一つとっても、大量生産を行なっているⅢ号Ⅳ号戦車とはレベルが違う。

いや、その2車種も確かに命中精度は良いのだが、何しろ数を揃えることが最優先とされて製造されているからどうやったりって熟練工のみで構成された製造チームの手によって製造されたパンターやティーガーとは比べる方が間違いである。

ともかく、それ以降の砲弾の命中率は、それぞれの車両に乗り込んでいる砲手達に完全に委ねられているということである。

その点、日本陸軍は全体的にかなりレベルが高かった。

先ず行進間射撃、移動しながらの射撃についてだがこれに関しても現代戦車、所謂MBTと呼ばれる戦車とは単純な命中精度なんて比べるまでもない。

砲身を自動で安定させる為の装置なんて当然、現在日本陸軍で運用している戦車には搭載されていない。

しかしながら、その自身が移動しながら砲撃した場合の命中率はおよそ3割に達していた。

本来であれば、

走行<停止>砲撃<再走行>停止<砲撃>再走行……

を繰り返しながら砲撃をする為に、常に動きながら停車せずに砲撃と言うのは難易度が前述の装置が搭載されていないこれらの戦車からすればとてつもなく高い。

しかしながら、何故命中率が高いのか。

理由は単純、物量戦を常に仕掛けてくる深海棲艦相手に、一々停車してから砲撃しては集中砲火を喰らい立ち所に撃破されてしまうからであった。

これは、アジア太平洋戦線だけでなく欧州戦線でも同じこと。

だからこそ止まらずに撃ち合う、と言う手段が取られたのだ。

日本陸軍における戦車兵の訓練は、元々低速域に於いては行進間射撃、機動・停止・機動の合間に行う躍進射を徹底して訓練していた。

それを全ての速度域において出来るようにした、と言う訳である。ただし流石に低速、中速域ならばまだしも高速域では無理がある。何せパンター戦車は整地であれば最大で60km以上を優に発揮出来る。

ティーガー戦車ですらエンジン出力不足を改善され整地で50kmを出せるのだ。

なので、緊急時以外は最大でも30km程度まで、とされていた。さて、この様に説明したが彼ら日本陸軍戦車兵達が最も得意としているのはこれでは無い。

実は、移動目標に対する砲撃が最も得意なのだ。

こちらに関しては、状況にもよるが好条件であれば8割、悪条件であつても5〜6割の命中率を叩き出している。

そして、今彼らが置かれている状況は、自分達はダグ・インし動いておらず、敵のみが動いている。

彼らからすればこの上無い状況だった。

元々、隊長はそれを狙って現地点に陣取つたのだ。

初戦だけでも、と言う訳である。

そんな状況に置かれてしかも碌に回避機動も取らず真っ直ぐ進んで来る敵に、彼らからすれば外せ、と言う方が難しかった。

一度の砲撃で瞬く間に半数を撃破された敵戦車は、訳も分からず停車。

この停車は、砲手達により狙いを付けやすくしただけだった。

僅か4度の砲撃で瞬く間に敵戦車を見事葬り去つたのだ。

隊長は、3度目な砲撃を行う前に第二小隊の5両と歩兵50名をホハに分譲させ迂回し敵後方に回るよう指示。

正面からの榴弾の雨により敵歩兵は回り込まれているなんて考える暇も無く、降らせ続ける。

撃破された戦車や、側溝、畑の畝などに隠れて小火器を撃つも戦車相手には通用しない。

それどころか信管を遅延にした榴弾が、地面で飛び跳ねて空中で炸

裂するものだから碌に動き回っていないからただの的当てゲームに近しくなっていた。

しかも、この時既に第1、第3小隊は歩兵を伴ってゆっくりと、横隊に並び広く間隔を取って前進してきていた。

漸くその事に気が付いて撤退しようとした頃には、既に後方に回り込んでいた第2小隊が戦車だけでなく歩兵もホハも展開し、猛烈な射撃砲撃を浴びせて来ていた。

横に逃げようにも間隔を広くとって横隊に並んで来ていた第1第3小隊が陸側を押さえ込み、海の方へ退くしかなくなっていた。

包囲が完成した、と認識した隊長は、

「全隊、総攻撃開始」

そう無線機に向かって指示を出した。

海を背に包囲された深海棲艦歩兵は成す術もなく一方的に狩られていき3時間後には消滅。

第2実験戦車大隊の損害は怪我人が23名のみであり、完全勝利と形容してもなんら間違いの無い戦果となった。

その頃すでに他の戦車部隊も敵部隊を撃退し終えていた。

被害は比べると大きかったがそれでも大勝と言って差し支えないものであった。

第51話

北海道での戦いが始まってから既に1ヶ月と1週間が経つ。刻々と戦争をするには厳しい冬が近づいて来ている。

潜水艦隊による敵補給中継拠点の偵察任務は芳しくない。

正確にはアンドレアノフ諸島に存在する、と言うことは確証を得られたのだがそれ以上の情報、例えば、どの島にあるのか、どの島にどの物資を備蓄するための施設があるのか、と言うのが分からない。

沿岸部であろうと内陸部であろうと、どちらにせよそれを発見するのは困難を極める。

何故なら海面からしか偵察が出来ない潜水艦は、基本的には確かに何も無い洋上であれば隠密性を高く保ったまま偵察が可能だが島を偵察するには、より接近しなければならない。

しかし、目標物が窪地や周りを少しでも小高い丘などに囲まれているば、その発見は困難だ。

しかもそれ以外にも天候や敵部隊など様々な要因も加わって偵察を困難たらしめている。

以前も説明したがこのアンドレアノフ諸島近海は一年を通して大凡その半分の日数が霧に覆われる。

これでは視界なんて無い。下手をすると1〜20m先を見ることも出来ない、なんてものだから下手に近付けば座礁の危険性もある。であれば天気の良い日に、とも行かない。

当然、天気が良ければ敵だつて攻撃などを想定して哨戒機を飛ばしたりするだろう。そうなつては潜水艦なんて碌に対空装備も持たないから良いのだ。

しかも島には対水上電探や対空電探の配備もされているだろう、と

されているからよしんば上手く接近出来たとしても浮上してしまえばアウト、伊号四〇〇型潜水艦に搭載されている水上攻撃機である晴嵐を飛ばそうにも電探に引っかかって此方が攻撃を企図していると悟られて陸海空全ての防衛部隊の規模を増やされてアウト。

だからまるで対策を打つ事が出来ないでいる。

とまあ、そんな状況だ。

「第一潜水艦隊での偵察では、手詰まりだな……」

「提督、第一潜水艦隊から晴嵐の発艦許可が来てるけど……」

「却下だ。何度申請しても変わらない。今彼女達を失うわけには行かない」

「了解」

飛龍艦橋で、そう報告してくる飛龍は苦笑しながら頷く。

偵察任務に手詰まり感が出てきて早1週間。再三に渡る晴嵐の発艦許可を求められているが許可はしない。

現状艦隊は、敵艦隊との衝突を避けており襟裳岬から南南西に30kmの地点で北海道へ向けて物資輸送や部隊輸送、民間人を乗せた避難船が通る航路を敵航空機と敵艦隊から守っている。

専ら、北海道へ向けて部隊や物資を輸送する輸送船団は10〜20隻ほどで纏まって航行し日本各地の航空隊の援護を受けつつ室蘭港、函館港、苫小牧港の3箇所に向かっている。

室蘭港、函館港へ運ばれるのは主に各航空隊用の予備機体や予備部品などの航空隊用物資が殆どだ。

苫小牧港には前線の陸軍師団用の武器弾薬燃料食料、医薬品類、他には陣地構築用のコンクリートや鉄筋などの建築資材を荷上げしている。

増援の部隊も苫小牧港から上陸し、そこから鉄道を使って前線へ送られる。

第35戦車隊と第2実験戦車大隊も苫小牧港から陸揚げされ、前線配備されているし補給もそこからだ。

苫小牧港は前線への補給拠点なのだ。

民間人を乗せた避難船は函館から出発し、青森県陸奥湾の各港湾施

設に向かっている。

なので我々は襟裳岬を境界線にその航路近辺を遊弋し守っているのだ。

現状、壊滅した第96師団や今でも戦闘状態の真つ只中にある第35戦車隊や第2実験戦車大隊、第1歩兵教導旅団や第244飛行戦隊、第245飛行戦隊と言った増援として派遣された先発部隊の活躍によって辛うじて防衛線の維持が出来ている。

彼らと第96師団が時間を稼いでくれたお陰で北海道駐屯の各師団や航空隊が準備を整える時間と余裕を作れた。

輸送船団は、先ず第一に各航空隊へ回す為の燃料弾薬、エンジンや各種予備パーツを輸送、北海道西部の先の両飛行戦隊が命懸けで守った、守っている鉄道で千歳飛行場など稼働状態にある飛行場全てに送られた。

それにより無事に避難することができた各航空隊は全力を以って戦うことが出来るようになった。

それによって陸上戦力では圧倒的に差を付けられては居るものの、航空戦力だけで見れば艦隊と合わせて拮抗状態に持ち込むことが出来た。

これにより制空権を確保とまでは行かないが、維持する事が出来、各北部戦線、中部戦線、南部戦線の航空機による地上支援も雀の涙程度かそれより少しマシ程度ではあるが出来ている。

補給が足りないならば空中投下で武器弾薬燃料食料水を落とし、突破されそうになれば紫電改や一式陸攻で爆撃や機銃掃射を行う。

そんな状況だ。

だがそれでも現状は押され気味、一歩間違えれば防衛線を突破されそのまま食い破られて北海道陥落、となるほどに危うい極細の綱を渡る綱渡り状態だ。

「どうしたものか……」

飛龍艦内の自室で一人そうぼやくが、偵察任務も含めて良い案は浮かばない。

パンター戦車ティーガー戦車も確かに改良などで故障なども抑え

られているし部品の剛性や設計の見直し、必要ならば変えると言った改良などを積み重ねに積み重ねて十分以上にその能力を発揮出来るようになってはいるが、整備性に難があるのも確かだ。だからこそ強力だが四号戦車や三号戦車のように大規模な量産に踏み切れず少数の生産に留まっているのだ。

既に増援部隊の第二陣のスピットファイア、ハリケーンやイタリアのG・55チェンタウロやMC・205を装備した戦闘機部隊や防御陣地構築の為の資材と燃料弾薬食料水、次の第三陣で送り込む師団の為の弾薬なども既に輸送し終わっている。

しかしながら残念な事に、一個師団を送り込む事は出来なかった。防衛線に展開している3個師団と各航空隊などに補給したり、送り込むための物資輸送で手一杯だったからだ。

流星にそこまでの余裕は無かった。ただし準備は整っていたのでそれが終了次第、送り込み始めた。

ここで少しばかり説明しておきたい事がある。

と言うのもこの第二陣で送り込んだ各戦闘機部隊

スピットファイア装備 第212飛行戦隊

隊長 アーサー・ヒル大佐

ハリケーン装備 第271飛行戦隊

隊長 ジャクソン・ターナー大佐

G・55装備 第258飛行戦隊

カルロ・アンドレオーニ大佐

MC・205装備 第204飛行戦隊

アントーニオ・アニヱッリ大佐

以上の4個飛行戦隊はそれぞれ72機を装備しており陸軍所属だ。

この4個飛行戦隊、連日の戦闘で搭乗員が疲弊したり搭乗員は脱出して生きていたが機体を失って数を減らして疲弊していた第244飛行戦隊、第245飛行戦隊と丁度交代するような形で千歳飛行場に前進したのだ。

と言っても出撃を控えさせる、と言うだけで補充の人員と機材が届くまでの間両飛行戦隊は千歳飛行場にそのまま駐屯しているのだが

まあいい。

元々多数の航空隊が駐屯していて手狭になりつつあった、いや手狭と言ってしまった方がいい状況だった千歳飛行場は現在滑走路や格納庫、エプロン帯など拡張工事中だ。

突貫工事を重ねて既に1200m級の新しい滑走路と格納庫などがの施設が丸々1セット運用状態に入っている。

それでもまだ狭いので新たにもう1本建設中で早ければあと2週間で稼働状態に入れるとの報告が上がっている。

それが終了したら更にもう1セット建設予定だ。

だが、敵の戦爆連合や進出してきた双発爆撃機B-25などから爆撃を受けつつの建設だ。

幸いなのは、敵が進駐した飛行場から千歳飛行場の距離が近く4発などの重爆を飛ばして来ないと言う事だろう。

何故なら4発重爆を出撃させるとなると高度が全く取れずに迎撃に上がった友軍戦闘機の格好の獲物でしかなくなるからだ。だからそれを承知している敵は双発爆撃機や単発爆撃機を主戦力として爆撃を行ってくる。

そのお陰と戦闘機隊の活躍もあってか、千年飛行場はそこまでの復旧に1ヶ月など長期間の修理を有するほどの大打撃を被っていない。

お陰で想定よりも早く飛行場の拡張を進められている現状だ。

とまあ、設備を拡張している千歳飛行場だがそこに他の海軍航空隊と共に駐屯しているのが上記の6個飛行戦隊だ。

話を戻して、第244飛行戦隊と第245飛行戦隊と交代するような形で配備された4個飛行戦隊は他の海軍航空隊よりも倍の数を有していると言うのもあり、大活躍だった。

迎撃となれば単一の戦隊で纏まった数を迎撃に上げられる事や、搭乗員達が単純に戦果に貪欲である事など多くの要因が絡んでいる。

何せ元々、6個飛行戦隊は機体や部品などの生産数の関係上前線に出す事は難しく、あったとしても本土への敵空母艦載機によるゲリラ的に行われる小、中規模な爆撃の迎撃に上がるばかりでその回数も片手で数えるほどだ。前線へ配備されるでも無く、かといって本土防空

は1万mを超える超高度から飛来するB-29を相手にすることは難しく、改良を重ねたジェット戦闘機の震電改が主戦力だから出る幕は無い。

訓練ばかりで機体性能だけでなく搭乗員の練度も高かった。

故に、どの海軍航空隊よりも遙かに戦果を挙げ続けている。海軍航空隊は、母艦航空隊へ引き抜かれることが多く若年搭乗員の割合が高い。

先ずは海軍航空隊で経験を積み、そこから母艦航空隊へ引き抜かれるという形だから本土を守る海軍航空隊は必然的に練度が低下し易くなっている。

と言っても震電改を装備している部隊からは引き抜いていない。

しかしながら海軍航空隊も、母艦ではまだまだだが基地航空隊としては十分な実力を持つものが多い。

そもそも母艦航空隊の面々は皆、原田大佐を筆頭に化物揃いの腕前だから比べるのもおかしい話だ。

空母に配属されると大体のヤツが揺れながら前進している空母への発着艦訓練に手間取るのだ。それに比べ動かない土の上に着陸する事と比べるとどうしても、と言うわけだ。

制空権の奪い合いを海軍航空隊と共に、押し寄せる大量の深海棲艦機相手に繰り広げ爆弾を積んだ一式陸攻や紫電改の護衛などを務める事も多くそれと共に地上支援任務も数多くこなしている。

既に各飛行戦隊で60機つつ以上の撃墜、撃破報告が上がっている。

第244飛行戦隊と第245飛行戦隊が立て直すとより一層航空戦力の勢いは増した。

何せ6個飛行戦隊だけで432機に及ぶ戦力だから、元々の北海道に駐屯していた海軍航空隊と合わせれば戦闘機だけで約1000機、攻撃兵力である一式陸攻などを含めれば1150機は下らない。

敵は空母艦載機を含めると2500機を軽く越す戦力になるがその全てが戦闘機という訳では無いから、守るべき攻撃隊の居ない迎撃

にだけ集中すればいい、足枷の無い状態の彼等からすれば到底遅れを取る相手では無いと言うことだ。

だからこそ現状拮抗状態にまで持ち込んでいるのだ。

それでも、有り余る物量に物を言わせて毎日毎日攻め込んできて、漸く拮抗状態だから本当に深海棲艦の物量は凄まじい。

が、それも無限というわけでは無いだろう。

無限に感じられるほどの物量なのであって底が無い訳では無い。

事実、南方方面での戦闘において深海棲艦は多数の艦艇を失いその補充に梃子摺っていた、と言う事も確認されている。

底はあるが底が見えないほどの圧倒的な物量と、それに加えて一定以上の質がある。だから人類は負けに負け続けている。

しかし押し寄せる波にも何処かしら切れ目がある筈なのだ。

それを巧く利用すれば、勝つことができる。

ともかく4個飛行戦隊の活躍が無ければ第244飛行戦隊と第245飛行戦隊が立て直すことも出来なかつただろうし、とつくに防衛線は崩壊していただろう。

第三陣の反抗戦力ともなる第三陣で反抗戦力の第一陣である5個歩兵師団と砲兵、機甲師団をそれぞれ1個づつ送り込む手筈だが、まだ開始されていない。

未だ各部隊の準備、輸送船への積載や港湾への移動が今少し時間が掛かるので今送り込んでいる1個師団の移動が完了次第、順次送り込む手筈だ。

幾ら拮抗状態とは言え日に日に防衛線への圧力は増すばかりで早い事どうにかしないと本当に手遅れになり兼ねない。

正直、北海道陥落程度で済めばまだ良い方である、と考えている。確かに食料生産の多くを担っている北海道を失えば戦線や国民への食料供給が滞ってしまうのは避けられない。

だがそれでも、本州で生産量を増やせばいいだけの話だ。それでも必要生産量に達するまでに数年は掛かるだろうし達したとしても飢

えに苦しむことになるのは間違いない。

だがそれよりもずっと最悪なのはなし崩し的に本州にまで上陸を許してしまう事だ。

そうなつては現状南方方面へ撤退するしか方法は無く、武器弾薬燃料の生産設備は勿論の事だが持ち出せるものは出来る限り持ち出し、更には国民を避難させなければならぬ。

そうなつてはまともな食糧生産の為の田畑や牧場がない南方方面ではかの戦争と同じ飢餓地獄に陥るのは間違いない。

そうなれば戦争どころの話では無く、どう考えたつて深海棲艦に滅ぼされるよりも先に、人間同士の戦いで滅亡待った無しだろう。

それを考えると、早いこと手を打たないとならないのだがその手段が無い。

敵の補給拠点であるアンドリアノフ諸島を攻撃しようにも正確な備蓄倉庫や燃料タンクの位置を手に入れなければただ無駄に砲弾や爆弾、燃料を消費するだけでない、大損害を食らってそれこそ年単位で作戦行動が出来なくなる恐れもある。

このままでは間違い無く、冬までに戦闘が終わる事はないだろう。早くても来春、長引けば来年の秋や冬にまで掛かる事は間違いない。

「提督、取り敢えず今はどうする？このままだ遊弋していてもしょうがないよ」

「分かっている」

自室に態々食事を持ってきてくれた飛龍と話す。

既に太陽は落ちて辺りは暗い。窓から確認出来る明かりは艦隊のそれぞれの艦艇が放つ最小限の明かりだけだ。

さて、どうするか……。

敵に対する有効な手立てが見つからない以上、戦闘が長引くのは覚悟せねばならない。

となれば、先ず考えるべきは戦っている各部隊の状況だ。

今は夏で、深海棲艦が現れてから人類は衰退するばかりで、気候変動なども大きく収まり平均気温も大きく下がってきているから北海

道は涼しい。

本州でも、40度になるなんてこの数年ありえないしどれだけ暑くても35度程度だ。

夏はまだ良い。

だが問題は冬だ。

今の日本は全国雪が降るところは降るし積もる。

関東ですら雪が降れば降雪するのが当たり前なのだから冬が厳しい北海道がどうなるかは想像に難くない。

となれば、それに備えなければならぬ。

幾らか考えた後に答えを出す。

「飛龍」

「うん？」

「各兵器廠に連絡だ」

「なんて連絡するの？」

「防寒具や不凍液などの各種冬季装備の生産を順次開始するように。冬季迷彩用の塗料などの生産も忘れない様に、と」

「分かったけど、でも早くない？」

「いいや、寧ろ遅過ぎるかもしれない。このままなんの手立てもなく時間が過ぎれば今年だけの話じゃない、来年再来年も戦うことになるだろう。それを考えると今から生産して、冬の到来に備えないとならない」

「そう言うことか。分かった。そう連絡する」

「ありがとう。それと、寒冷地担当の第513偵察中隊を呼び出してほしい。場所は北海道千歳飛行場」

「了解」

そう言っつて、形式的に頭を下げて部屋を出ていく飛龍を見届けてから伝え忘れた事を態々飛龍を呼び戻すのもあれだから、艦内電話で艦橋に居る艦長に電話する。

『こちら艦長』

「湯野だ」

『提督でしたか。何用でしょうか？』

「参謀長達司令部要員の主要幹部に私の部屋へ来るよう伝えてくれ」
『了解しました。他に用件は？』

「これだけだ」

『分かりました。それでは』

「ああ、ありがとう」

そう艦長に伝えてから大凡10分後。

司令部要員、参謀長以下の面々が艦長室に集まる。

今回は飛龍や艦長達は居ない。

呼び出していないからだ。

「提督、司令部要員山田参謀長以下集合しました」

「突然の呼び出し、申し訳ないな。まあなんだ、取り敢えず珈琲でも飲

んでくれ。本物の珈琲豆だ」

「おお、珈琲ですか。それも本物の豆と！」

「ああ、この前呉の街に出た時に立ち寄った商店に置いてあつてな。

購入してみたのだ。取り敢えず飲んでみてくれ」

「ですが、宜しいのですか？かなり高かったのでは……」

「なに、飲んでこそだろう。買った方がいいが結局飲まなかったからな。

それぐらいならば皆に飲んでもらった方がいい。是非飲んでくれ」

「そう言う事ならば、有り難く頂戴します」

皆が集まるまでに、どうせ俺が持つていても飲む機会も無いのだから、と珈琲を淹れた。

代用珈琲では無く、本物の珈琲だ。

それを聞くとやはり皆、驚く。

俺だつて売っているのを見た時は驚いたものだ。

実は今回艦隊が中止となった敵通商破壊艦隊撃滅の為に出港する

少し前にまたもや皆に言われ、ほぼほぼ強制的に取らされた休暇の日

に、本当にやる事が無く呉の街に出向いたのだ。

艦隊は出撃準備で忙しくいつもの様に何処かの鑑に乗り込んで釣

りをする訳にもいかず、どうしたものか、と考えて久々に街に出たの

だ。

いまだ、物資不足はあれど以前よりも幾らかは活気が戻った呉の街

を、数十人の護衛の陸戦隊と共に装甲車に乗って、インクや鉛筆などの必要なものをリストアップしたメモ帳片手に商店やらを巡っていた時の事だ。

俺が忙しい時に、部屋で食事を作ってくれる艦娘の皆が調味料があれば、と時折声を漏らしていた事があるな、と思い出したのだ。

それを思い出してから、少しばかり調味料も調達するか、と胡椒などの調味料の他に海軍伝統の海軍カレーを作る時に必要なターメリックなども纏めて購入しておいた。

殆ど使う事が無く、精々釣り用具や生活用品を買う程度で貯まるばかりの給料をここぞとばかりに使ったのだ。

そこである商店で品探しをしていた時の事だ。

今や珍しい、本物の珈琲豆が入荷されていたのだ。

店主の御老人に聞いてみると、どうやら売れると思って買ったわけではなく、完全に自分の趣味で買い店先に並べている、との事だった。確かに今の世の中、珈琲豆なんて馬鹿みたいに高い物など買う人間は居ない。

何せこの戦争が始まる前の値段は種類にもよるが100g辺り精々150円から180円だった。

今の豆の値段は、50倍にも跳ね上がっており100g辺り9千円から1万円なんてのが普通、下手するとそれ以上なんてのが当たり前だ。

店先に並んでいた珈琲豆の値段は店の利益もあるから100g辺りまさかの1万5千円。

物凄く高い。1万5千円なんて今の時代、一般家庭において1ヶ月以上の食費になる値段だ。

店主本人もどうせ売れないが、まあ置いておこうか、と言うだけで最悪自分で楽しもう、と考えていたらしい。

それを聞いて、ふむ、と少し考えて思った。

別に珈琲好きでもないが、まあ買ってみるかな、と。

そこで取り敢えず500g買って見たのだ。

この職業柄、いくら給料があろうと下手に孤児院などに寄付しても

賄賂と取られ兼ねないのだ。

そうなると、今は毎月基本給で大凡170万円ほどの給料を貰っている。この職に就いて十年で、作戦や戦闘などに参加したりすると出戦手当、と言う手当が大体10万円ほど。

それに提督を務められると特別性、希少性故に言う事からプラス大体100万円ほどを上乗せで給料を与えられている。

他にも諸々の手当があったりするので結果的に合計で月給は大凡300万円。

階級にもよるのでこの職についてから少将、中将と階級を踏んできたからあまり細かくは無いが、大体3億6千万ほどの給料を貰っていることになる。

そこから所得税が457万6千円やらなんやら色々引いても、大体3億円ほどが手元に残る計算だ。

実際預金通帳には3億円よりもほんの少しばかり少ない金額が書かれている。

光熱費や水道費などは軍の敷地内の住居に住んでいて、国が負担しているから掛からない。

生活必需品などの必要なものを購入したとしても、そんな何百万も使わないし、と言うか使えないし、紙などの値段は高くなっていたとしても、だ。

そんな無駄に溜め込んでもしょうがないし、どうせ使うなら、と言うことだ。

下手に風俗などの性産業にも手を出せないし、そもそもそんな機会無い。あれだけ護衛を引き連れて堂々とそう言った店に入る勇氣は俺には無い。

それに前の世界のようにゲームなどもこのご時世だからそもそも生産されておらず恐らく民間人の家庭単位で考えれば元々所有していたなどで、あるのだろうか？ そう言った娯楽に生産コストを割くほどの余裕は無いから結果的に全くと言っていいほど生産されていない。

現状生産されている電子機器と言うのは、俺や中代大將達が仕事で使用する為のノートパソコンやスマートフォンなどの通信機器が

極々少数。

そもそもこれらの電子機器は深海棲艦が発している妨害電波のよ
うな物によって極短距離、それこそ数百m程度ならばまだしも遠距離
通信、軍事作戦で最低限必要である数km単位ではまるで使えない。

正確に言うならば、現代のハイテク機器に分類されるものは全て妨
害電波の影響を受ける。

だがそうではないかの大战期に使われていたものは通常通り使用
可能だ。

ネットワーク回線も無いから、基本的にはノートパソコンで書類を
書いたとしても直接送る、と言うことはできない。

基本は印刷して、それを直接軍の者が運ぶのだ。ただしそれらの書
類を運ぶ事ができるのは肉体的にも勿論だがその他にも幾つもの特
殊な訓練を受けており尚且つ機密情報の扱いを許された佐官クラス
の人間で無ければ手にすることすら許されていない。

実際、俺や中代大将達が書いた書類はその許された者が運んでお
り、その仕事量は常に呉と栃木県山中の司令部を行ったり来たりが多
忙なものだ。

まあ、航空機を使用しているので幾らかは楽だろう。

基本的には電話などは使用出来る。

有線回線に限ってだが。ただ、現代の様なものではなく、昔の黒電
話だ。

話を戻そう。

趣味を見つけようにも、このご時世だから今のところ釣りぐらいし
か趣味が見つけられない。

そんなわけで金を掛ける趣味は無くただ貯まっていけばかりだか
ら、金銭的余裕はある。

しかしまあ、なんとと言うか、買った方がいいが自分で豆を挽くのも面
倒だしそもそも執務に追われて時間は無いしで結局豆を挽く為の
コーヒーマルなどと一緒に棚に飾っておくだけになってしまったの
だ。

なんとなく、勿体無い気がしていたのだ。

一応珈琲は支給されるのだが、なんと言うかまあ、支給される珈琲は多分珈琲好きで無い人間でもこれは違う、と思うようなものだから久々に飲みたくなつたのかもしれない。

そもそも代用珈琲だから珈琲では無いのだが。

勿体無いな、と思いつつ作戦で艦に乗り込めば多少は時間があるか、と思つて持つて来たのだが正解だった。

「旨くは無いだらうが、勘弁してくれ」

「いえ、とても美味しいです。我々でも珈琲など飲める機会は滅多にありませんので。それで、今回はどの様な理由でしょうか？」

「少しばかり、策を思い付いた」

「!!それならば、艦長達も呼び出した方が良いのでは？」

「いや、今回は秘匿性の高い作戦と考えている。だから出来るだけ知る者を限定しておきたい」

「なるほど、そうでしたか。失礼しました」

「いや、構わん」

「それで、策とはどの様な？」

「第513偵察中隊を使ってアンドリアノフ諸島を偵察させる」

俺のその発言で、皆が静かになった。

ある者は珈琲が入ったカップを片手に固まっていたり、カチャンとカップを置いて思考したり。

それぞれ反応がバラバラだ。

「その手がありましたか……」

「ああ、俺も今さつき思い付いたと言うか、気が付いたのだがな」

「潜水艦で偵察することばかり考えていてまるで思い付きませんでした……」

「俺も、どうすれば潜水艦で見つけられるか、と固執してしまっていたのだ。それで、漸く思い付いたこの案だが……、どう思う？」

「……現在取れる方法としては、最良であり、最も損害が小さくて済むと考えます」

「ですが、問題が山積みです。第513偵察中隊を現地まで輸送する手段と目標物の伝達方法、作戦が終了した後の同中隊の撤収、そして

回収方法、上陸方法などはどうなさるのでしょうか？よしんばそれらが解決出来たとしても、あの海域の霧の状況を考えれば、敵に悟られずに上陸するのは難しいかと考えますが」

「輸送手段は伊号400型潜水艦のどれかに任せる。上陸方法は格納庫の中の晴嵐を全て下ろせば各艦で必要装備等によって変わるだろうが2個分隊は輸送出来る。上陸はゴム製のボートでなんとかかなるだろう。空挺降下だと間違い無く悟られる。伝達方法は陸軍砲兵のやり方と同じで無線を使って弾着観測を行う。回収は天候が良ければ航空機の援護の下で潜水艦までゴムボートを漕いで行ってもらいしかあるまい」

「では、霧はどうなさるのでしょうか」

「寧ろ、霧がある時に上陸を行う」

「それは、危険過ぎませんか？」

「いや、霧に紛れることが出来れば察知されずに上陸出来るだろう。上陸地点の選定は作戦を執行する第513偵察中隊に任せる」

参謀長などと色々と話しながら、問題点を洗い出し、会議を続ける。大凡の作戦計画が定まり会議が終わったのは、夜が明けてからだった。

翌日。

飛龍から第513偵察中隊が千歳飛行場に到着した、との報告を受けて流星に乗り込んで千歳飛行場へ向かった。

そこでは防衛戦でてんてこまいの忙しさになりながら動き回っている妖精達がいた。

流石に俺を出迎えるために作業の手を緩めろ、なんて言わないしなんなら事前に出迎えなくていい、と言ってある。

しかし出迎えに、人数は多くないが12名が待機している。

「提督、お待ちしております。防衛司令部副司令の石田中将であります。司令の永田大將は指揮を執られていますので私が代わりに」

「ああ、ありがとう」

前へ出てそう名乗ったのは、北海道防衛司令部副司令の石田中將だった。

それに続いて、カール・ベツカー大佐、ヴァルター・ヴァーグナー大佐、ジャクソン・ターナー大佐、アントーニオ・アニエツリ大佐の4名と、第513偵察中隊隊長浅田弘光中佐、そしてそれぞれが一人づつ部下を連れている。

「お久しぶりです。閣下」

「お元気そうで何よりです、閣下」

「ベツカー大佐、ヴァーグナー大佐、久しいな。変わりないか？」

「ええ、毎日とは行きませんが出撃して敵機を落としてやっています」

「私はこの前着陸して機体から降りる時、足を滑らせまして思いつ切り尻を打ち付けましたな」

「そうかそうか、だが元気そうじゃないか」

「ええ、そこまで柔じゃありません」

軽く握手をしながら、話す。

この二人は、と言うより元ドイツ軍の面々は俺の事を提督ではなく、閣下と呼ぶ。

閣下なんて仰々しいが、閣下は閣下だと言われてしまったから納得するしかない。

「ターナー大佐、少し顔色が悪いか？」

「いえ、太陽の当たり方の問題でしょう。私も至って元気です」

「それなら構わないが、無理はするな」

「提督ほどでは。部下に怒られるまで仕事はしません」

「これは一本取られたな」

ターナー大佐と握手をしながら、笑いながら話す。

「提督」

「アニエツリ大佐、どうした？」

「小麦を下さい」

「いきなりだな……」

「いえ、確かにパンを態々我々に補給して頂けるのは有り難いのです

が、我々イタリア人はパスタを食べたいのです。ピッツアを食べたいのです」

「まあ、それは分かるが生産量の関係上そうも行かんだろう」

「ですが、飛行場の周りを全て小麦や大麦畑にしようと思いの分らない事を言い始めている者も出て来ている始末です。このままだと本当に悪夢に成り兼ねません」

「ああ、分かった分かった。小麦の補給は確約は出来ないが検討はしてみよう」

「ありがとうございます」

ベツカー大佐とターナー大佐は、生粋の軍大学出の士官といった感じだ。

ヴァーグナー大佐、アニエツリ大佐は叩き上げで大佐に上り詰めたタイプの軍人だ。

この4人を含めた、欧州軍人の指揮官とは少数部隊であるなどの特異性故に頻繁とまでは行かないが、それなりに顔を合わせていた。

実際、これらの部隊への補給などは国内駐屯と言うのもあつて他の部隊とは事情が違う。

アニエツリ大佐が言ったように、これらの部隊には米とパンを半々で供給している。と言うのも元々パン食であつた彼らに米を供給していたのだが、パンが食いたい、と不満が出始めたのだ。

普通ならば我慢しろ、と言いたいところだがそうも行かない。

戦意や士気の維持の為に、全てとは行かないがまあ、半々程度なら、と言うことで幾つかの種類のパンを送っているのだ。

始めた時はそれはもう、狂喜乱舞と言う様な喜び方だったらしい。日本人の兵士は別に米でいいしパンを出されたらそつちを食う、と言うスタンスのためにそうでもないらしいが。

それぞれ4人と握手して、浅田中佐の前に立つ。

「急な呼び出しにも関わらず、来てくれた事、感謝する」

「いえ、それが仕事ですので。用件は？」

「それは後々話す。取り敢えず、他の兵士がいる宿舎まで案内して欲しい」

「分かりました。それでは行きましょう」

「それでは皆、用件が終わったら部隊ごとに現状を把握するために呼び出すと思うから、そのつもりで頼む」

「」「はっ」「」

「では、失礼するよ」

「敬礼！」

浅田中佐と、従卒の兵士と共に防衛司令部の一室を借り受けて案内してもらい、向かう。

第513偵察中隊は、あらゆる兵科から志願して選抜された総人員150名で構成されている。

歩兵砲兵は勿論だが戦車兵、工兵、衛生兵、参謀科、要塞参謀科、憲兵科、工兵科、輜重兵科、航空兵科と様々な兵科の兵士で構成されている。

果ては経理から志願して部隊に属している者もいる。

因みにであるが騎兵科は、現在機甲科として統合された為に存在しない。

主装備は歩兵装備だが、中にはある程度の火力を出すべく口径の小さな野砲が幾つか装備されている。

空挺降下など、偵察などに限らず特殊戦に必要な技能は一通り必修科目として収めており、舟艇の操縦や航空機の操縦、戦車の操縦までもを行う事が出来る。

そんな彼らに本作戦で活躍してもらおう、と言う訳だ。

集めた彼らを前に作戦概要を説明する。

簡単に言えば、

アンドレアノフ諸島にある敵物資集積所その他重要施設の位置情報を艦隊に送り、弾着観測を行い、必要と判断すれば中隊も施設破壊任務に従事せよ。

と言うものだ。

「はつきり言って、かなり困難かつ危険極まりない任務である。諸君らが出来ない、と言うのであれば我々は別の方法を探る」

「閣下、質問宜しいでしょうか」

「構わん。この任務に関わる事であれば誰でも何でも聞いて構わない」

「もし我々中隊が任務困難を理由に首を縦に降らなかつた場合、別の方法を探ると仰いましたが、方法の目処は付いているのでしょうか？」

この質問に正直に答えてしまえば彼らは軍人、やると言わざるを得なくなる。

上官として、この姿勢は褒められたものでは無いだろうが、プロたる彼らが出来ないと言う事を無理矢理やれ、とは言えない。

「……はつきり言つて、全く付いていない。爆撃しようにも距離が遠過ぎて、二式大艇が偵察装備で燃料満載状態で漸く往復出来るかどうか、と言つたところだ。連山は航続距離不足で動かせない」

「艦隊は？」

「あの辺りの海域は霧がよく発生する。視界が儘ならないし、艦載機での空襲は霧があれば、まず飛ばせないから不可能。アンドレアノフ諸島自体の航空兵力は大した事は無いから問題は駐留艦隊が現状北海道近海に進出していている艦隊と最低でも同規模、と言う事だ。となればまず間違い無く艦隊同士の戦闘が生起するだろう。しかし、北海道近海の敵艦隊撃滅をする為には、アンドレアノフ諸島で戦闘した後では無理だ」

「空母は間違い無く、使い物にならないと」

「その通りだ。だからこそ高速戦艦数隻と随伴艦隊でアンドレアノフ諸島を艦砲射撃によって叩こう、と言う作戦だ」

「分かりました。その任務、我が中隊が謹んでお受け致します」

「ありがとう、感謝する」

「どうやら彼らは俺の答えを聞く前から既に腹は決まっていたらしい。」

中隊員全員が既に覚悟を決めている表情だ。

それを見て、俺の心配は杞憂であつたと思う。

とまあ、作戦自体を行うことは決まったが具体的な決行日は決まっていない。

何故なら、アンドレアノフ諸島を叩いたとしても北海道で攻勢に出る事が出来なければ意味が無いからだ。

その点、未だ陸軍の師団は準備が整っておらず漸く増派が始まったばかり。

少なくとも、第一陣の各師団が配置完了をしなければならぬ。

何故なら、攻勢に出ずにそのまま居たら復旧されてしまう。

ただし、問題の解決策が無い訳ではなく、既に師団増派の準備は中代大将以外の面々を取り掛かってきている。

早ければあと一ヶ月で整えられる、と言われている。

さて、我々艦隊も準備を進めなければ。

第52話

作戦を決行するに当たり、北海道へ全投入予定師団を輸送しなければならぬ。

そうすると、本土近海で輸送任務に従事している輸送艦隊では足りない。

であるなら、南方方面へ向かう輸送艦隊から輸送船と護衛艦隊を丸々引き抜かなければならぬ。

しかし、そうすると南方方面に展開する第3、第4、第5軍が干上がらぬ。

現状陸軍は、本土防衛を担う第1軍集団、第4、第5、第7、第8軍集団。

南方方面に展開する第2軍集団。

フィリピン奪還に投入する予定である第6軍集団。

その他攻勢作戦や奪還作戦に動員する為の第3軍集団。

の8個個軍集団構成される。

1個軍集団は10〜15万人程度を擁し、それら軍集団がそれぞれ3〜4個軍を有する。

南方方面を例に挙げれば、

カリマンタン島、パラワン島 第8軍6個師団12万人

ジャワ島 第12軍3個師団6万人

スマトラ島 第15軍4個師団8万人

となっている。

陸軍総兵力は160万ほどなので、南方方面だけで飛行戦隊など諸々を含めると陸軍だけでおよそ26万人以上を数える。

実に1割以上の陸軍将兵が展開している事になる。

規模は差があるが、本土防衛の軍集団が最も多く、ここから師団を引き抜いて増援などを送り込んでいく。

フィリピン攻勢に投入する第6軍集団は今回は投入しないと決まった。代わりに第5軍集団から引き抜いて北海道へ送る。

と、南方方面だけで陸海合わせて約30万人以上に膨れ上がる兵士達を食わせなければならぬ。

莫大な量だ。

軽く150隻を越す輸送船が入れ替わり立ち替わりで護衛艦隊が随伴して輸送している。

今の日本が保有する輸送船の数は1300隻。

その内の1000隻余りが南西諸島、南方方面への輸送に従事しており残り300隻が日本本土や硫黄島への輸送に従事している。

しかし南方方面や南西諸島の航路は勿論だが本土近海にも敵潜水艦が通商破壊に出て来ている。

毎月の被害は総トン数で100万t以上の輸送船が沈められている。

戦時急造型だから、毎月50隻ほどが就役しているが輸送の度に多い月だと20隻以上が撃沈されている。

しかし輸送船の数が維持出来るのには理由がある。

単純な話であるが輸送船の造船数が増えたのだ。

と言うのも明らかに必要輸送能力と、損失に対する補填数が軍の建造能力だけでは到底、足りない事は明らかであった。

当初は出来る限り民間人には食料生産に従事してもらおうべく軍が全てを建造するべく采配をしていたのだが、はつきり言えば直ぐに限界が来てしまった。

軍は輸送船の建造だけではなく戦闘艦艇の修理や維持の為の整備、更には航空機や戦車、野戦重砲と言った各種武器に使用する砲弾薬、予備を含めた必要部品の生産をも行わなければならず、到底輸送船建造に回せるだけの十分なりリソースが無かった。

しかも戦闘艦艇の修理や整備ともなると、整備だけで艦種にもよるが戦艦や空母と言った大型艦艇にもなると短くても2週間、長期航海後になれば1ヶ月以上なんて当たり前だ。

毎回の輸送船団護衛任務で第一護衛艦隊は常に重整備状態。

海に出た艦艇は、余り知られてはいないが防錆塗装などを施されているとは言ってもかなり錆が浮き出る。艦全体が錆色に見えるぐらいには。

それら錆を全て落とし、必要ならば装甲を張り替える、なんて事もしなければならぬ。

装甲張り替えまで行くと流石に修理扱いだが。

しかも今現在海軍は、多数の浮揚作業を完了した艦艇の修理をしており、更には戦艦大和、武蔵の超弩級戦艦2隻を浮揚作業中でもある。

この作業には、とんでもない金と労力が費やされていることは以前話したが、具体的には大和だけで建造費約3兆円の凡そ2倍。

2隻合わせて12兆円にもなる金額と、海軍浮揚作業要員や各種作業員がそれぞれ2000人以上が従事している。

これに加えて艦艇の修理、整備、生産が加わるともなればどう考えても建造能力が低くなるのは仕方が無い事だった。

故に、軍は政府、簡単に言えば現状日本のトップである天皇陛下にその旨を伝え輸送船建造のための労働力として国民を募集し、建造を進める事の許しを頂いたので。

現在、20万人を超える人員が昼夜問わず入れ替わり立ち替わりで輸送船建造に従事している。

ただ、それによって弊害も起きている。

賃金が低いだとかそう言う問題はどこの世の中でもある問題だし、この国の経済状況を考えれば今すぐに改善する、なんて事は到底出来る事では無いので置いておこう。

問題は、医薬品が不足するのではないか、と言う事だ。

まず第一に痛み止めなど、手術に使う為のモルヒネや南方方面などのマラリア対策のキニーネなどの麻酔薬を含めた各種医薬品の備蓄量が低下し始めていることだ。

これが意味する事は単純に生産量よりも消費量が大きく備蓄に回せていない、と言う事に他ならない。

最も多く使用されているモルヒネの話だ。

このモルヒネの原料はケシ、分かり易く言うならばアヘンやヘロインと言った薬物と同じ原料だ。

このケシの栽培と言うのは戦前ならば少なくとも表のルートだけならば日本、インド、中国、北朝鮮のみにモルヒネ用としてケシの輸出が認められていた。

しかしながらこの4カ国の中で国内消費量を合わせて国外輸出を行えるだけの生産量を持ち合わせていたのはインドのみ。当然シレーン頼みの日本はすぐさまその供給が絶たれたのだ。

当然、日本も生産していたのだから問題が無い、と言う訳では無かった。

何しろオーストラリアなどでは比較的大規模な生産が行われていたがそれでも国内需要の一部しか満たすだけの生産量が無いのだから日本だって同じだ。

となればどうしていたか？

答えは明白、インドからの輸入である。

しかしシレーンどころか各国との連絡すら完全に分断状態である昨今ではどうやったって輸入する事は不可能。

それでも戦線が広がり戦争が激化する度にその必要量はどんどん膨れ上がる。

国内生産量を増やしはしたが、それでも足りないのだ。

現在日本国内で最も生産量があるのは和歌山県なのだが、この和歌山県、太平洋側に面している。

と言うことはその生産施設などが深海棲艦の爆撃などの被害をもろに受けている。

それでも全国で六割の生産量を誇る。

今では生産したケシを日本海側に移された生産施設に鉄道輸送で送り込んでいるのだが足りない。

流石に違法薬物の原料ともなる為に無闇矢鱈に生産させる訳にも行かず、政府の許可が必要になってくるからおいそれと生産量を増やせなのが現実だ。

と言ってもモルヒネだけならば備蓄量を考えればあと一年ほどは

問題無いだろうがそれ以上になると各地への補給が次第に困難になっていくだろう。

今も北海道が戦場となり消費量が爆増、南方方面も毎日の敵爆撃機などの迎撃や対空戦闘で一定以上の消費量がある。

本土だつて爆撃や迎撃に出た搭乗員、兵士、民間人が怪我をして治療が必要となつたら必要だし、それが毎日だ。

どれだけあつても足りない。

モルヒネだけではない、先ほども言ったが南方方面で発生するマラリア対策にキニーネが必要不可欠、その他の伝染病にも治療薬が必要だし、一応南西諸島や南方方面に配属される兵士達には予防接種を受けさせているがそれだけでは足りない。

輸送船建造に従事する民間人が多くなればなるほどその生産を担う人間の数が低下し、結果的にそれ以外の必要物資の生産が大幅に低下しているのだ。

その問題を解決するにはやはり人口増加が最も望ましいのだが、この日本の状況ではそれは望めないし今すぐに、と言う訳にも行かない。

まあ、ともかくだ。

輸送船の数は増えたは良いが、次は護衛するための艦艇がとにかく不足していて、しかも増やせないときた。

流石に南方方面への輸送航路は未だ安全とは言い難く、その証拠が毎月の輸送船損失数だ。だから第1護衛艦隊を戦艦込みで丸々張り付けている。しかし足りない。圧倒的に足りない。

戦艦を組み込む事で足りない数を質で少しでも補おう、と言う意図もあつて長門達を護衛艦隊に編成している。

アンドレアノフ諸島攻撃を行うには、北海道での反抗作戦を実施し得る陸上戦力を揃えてからで無いと出来ない、と前述したがその解決策が無い訳ではない。

ただ、かなりの博打、賭けになってしまう。

まず第一に、南方方面への補給を一ヶ月に限定して止める。

何故ならば日本本土近海の輸送船だけでは北海道での反抗に必要であろう十数個師団の一斉、もしくは大規模輸送に足りないからだ。

しかも中には機甲師団、砲兵師団と歩兵よりもずっと嵩張るものが多い師団も複数存在している。

少なくとも歩兵1個師団を輸送するのに、完全装備の歩兵を2万人で考えても歩兵のみで輸送船の大きさにもよるが人間だけで10隻は下らない。

そこに車両や迫撃砲、重迫撃砲、擲弾筒、重擲弾筒、対戦車火器、燃料弾薬食料を積み込みで考えれば間違い無く最低でも20隻以上は必要になる。

戦車師団ならばもっと増える。

何せ戦車などの重機材を大量に運ばなければならぬのだからどう考えたって1個戦車師団辺りを輸送するには規模が大きくなるしその分手間やコストが掛かる。

1個戦車連隊で100両以上の戦車を有している。

基本的に戦車師団は4号戦車ないし3号戦車どちらかを4個戦車連隊+2個機械化歩兵連隊を中心に、

駆逐戦車大隊

4号駆逐戦車ないし3号突撃砲装備。

補給大隊

本来の正式名称は輜重大隊なのだが、分かり易さの為補給と記述している。

4号給弾車及び一式半装軌装甲兵車（通称ホハ）をそれぞれ2個中隊。

対空大隊

4号対空戦車ヴェルヴェイント2個中隊

低空から侵入する敵機を担当
防御力向上為に天蓋を設置、機銃座は完全に装甲板で覆われている。

装弾方式を弾倉方式からベルトリンク方式に変更、50発ベルトリンクを各門750発づつ、3000発。

それに伴い狭くなった砲塔を広くするべく、砲塔リンクをティーガー戦車と同じ直径、同じものに変更。

88mm高射砲2個中隊

高高度から侵入する敵機を担当

偵察大隊

オートバイ及びケツテンクラフトを主装備とし、ホハ、S d. k f z. 251ハノマーク装甲兵員輸送車を少数装備

1個大隊く連隊規模の砲兵

弾着観測等に使用するべく、オートバイを装備した専門家一個偵察小隊を独自に保有

工兵大隊

4号架橋戦車、各種爆薬、地雷、測量機器等。

整備大隊

4号戦車回収車、ガントリークレーン等整備機材一式多数。

とまあ、あげたらキリがないのでざっと主要なものだけだが、それでもこれだけの数になる。

各種部隊を少なくとも大隊規模で保有し、それら全てを纏めて戦車師団となる。

これによって1個戦車師団のそう人員数は3万人にまで膨れ上がるのだ。

戦車師団よりも小さい旅団や連隊と言った規模の部隊もあるにはあるが、そちらはどちらかと言うと単体で動く事はほぼ無い。普通なら敵の規模によって投入戦力を大きくしたり小さくしたりするのだが、そもそも深海棲艦の敵部隊の規模が、最低でも師団規模だから、旅団や連隊規模での投入なんて自殺行為にも等しい。

まあ、もしかすると有り得るかもしれないし、と言う事で編成はしている。

この部隊らは大抵が本土駐留で師団規模の部隊のみが南方方面などに展開している。

単純に人員だけで3万人。

そこに戦車などの各種重機材を大量に、となると必要となってくる輸送船の数は歩兵師団輸送の比じゃない。

戦車揚陸を最も簡単に行える101号型輸送艦で輸送することを考えると積載量の関係で4号戦車ならば1隻辺り5両しか輸送出来ない。

師団で400両を超す戦車を輸送するには戦車だけで80隻の101号型輸送艦が必要だ。

その他に駆逐戦車、対空戦車、対空砲、ホハ、ハノマーク、ガントリークレーン、戦車回収車、架橋戦車等々……、と全てを込み込みで考えたら200隻の101号型輸送艦、それに戦時急造型輸送船を20隻ほど。

しかもこれを3個機甲師団分用意しなければならない。

まあ、一つ分用意して繰り返し送り込めばいいのだがそれだと兎に角急がなければ時間が掛かる。

まあ機甲師団だけならばまだいい。

101号型輸送艦は作戦の時以外は本土近海でしか活動していないから集めるのに苦労しない。

問題は輸送船の方だ。

一応、本土近海にもあるだけ掻き集めればそれでも300隻ぐらいはある。

1300隻ある内の300隻だから多い様に感じるが、砲兵師団の事も考えると足りない。

一度では無くとも、せめて2回程程度で全ての部隊を輸送し切ってしまいたいのだ。でなければアンドレアノフ諸島攻撃作戦が間に合わない。

足りない輸送能力をどうするか？

新たに建造される輸送船を待っている時間は無い。

ならば答えは簡単、南方方面への輸送に従事している輸送船を引き抜くしかない。

1000隻が入れ替わり立ち替わりで南方方面へ向かっているの、その内の250隻ぐらいなら引き抜いても問題は無いであろう、と判断。

無理をさせてしまう事は重々承知の上だが、それでもやらねばなるまい。

「通信長」

「はっ」

「中代大将に連絡。輸送船250隻を南方方面へ向かう輸送船の中から引き抜いても良いか聞いてくれ。返信は早急に」

「それと長門以下第1護衛艦隊に次の南方方面への輸送は常時の2倍の輸送船を伴わせる。何がなんでもこの作戦には第1護衛艦隊が必要だ」

「あとは全国の北海道増援に向かう各師団や部隊に準備を1週間で終わらせ、指定された港湾に直ちにに向かう様に命令。全て暗号で送る事を忘れるな」

「了解しました」

通信科長に急ぎ送るよう、言うのと駆け足で通信室に走って行った。

「提督、反撃の時間ってこと？」

「そうだ」

飛龍に聞かれ一言、頷くと艦橋で歓声が上がった。

すぐに作戦会議を始める。

作戦の準備に取り掛からねばならないからだ。

「さて、では作戦説明をするが、今回の作戦は秘匿性が高く皆に詳細に知らせる事は出来ない」

騒つく会議室の皆を手で制し、言葉を続ける。

「申し訳ないと思うが、これが必ず勝利へと繋がると思っていて耐えてほしい」

頭を自然と下げてしまう。

頭を軽々と下げるのは良くない、と鳳翔に散々言われたがやはり尊大な態度って言うのは慣れない。

「提督、頭下げちゃダメって鳳翔さんにまた怒られるよ?」

「分かっている。だが下げる時に下げて何が悪い」

「今は下げる時じゃ無いでしょ。今は、提督が私達に命令を下せばいいだけ。違う?」

「……そうだな、その通りだ」

「ほら、なら作戦説明して命令出さないと。じゃないと誰も動けないって」

飛龍に後押しされる形で作戦説明が始まる。

「諸君らには、囿になつてもらいたい」

「我々一航戦が、ですか」

「いいや、一部を除いて第一機動艦隊全てだ」

「なつ……」

「それは……」

「提督、詳細な説明をしてもらつても良い?」

「あまり詳しくは言えないが、深海棲艦の連中に主力がここに居ると誤認させ、大規模反抗作戦を企てていると思ひ込ませたい」

「この作戦は、アンドレアノフ諸島の件を伏せて説明せねばならない。い。」

それらを省いて説明したとしても少なくともここにいる面々は、(は)はあ、なるほど。提督は何処か別の場所、恐らく敵の後方拠点への

攻撃をする為にこの作戦を練ったのだな？」

「と感づいている筈だ。」

「でなければ艦隊の参謀なんか選ばれたりはしない。」

「第一機動艦隊には、俺の将旗を掲げて第一護衛艦隊共々、敵艦隊をどうにかして引き付けておいて欲しい。方法はなんでも構わん。出来るだけ受ける被害を少なくしてくれればいい」

「将旗を掲げるのは納得ですが、提督は何方へ？」

「それは言えん」

「失礼しました」

「構わん」

「提督、一部と仰られました、その一部とは？」

「金剛、霧島、リシユリユ、ビスマルク、ティルピッツ、ヴァンガードの6隻を主力とした高速艦隊だ。空母は防空と対潜目的で隼鷹のみ。随伴艦は一水戦。以上だ」

「戦艦主力、ですか」

「我が艦隊の防空は？」

「第一護衛艦隊を穴を埋める形で付ける。艦隊速度は遅くなるだろうが敵を引き付けるだけなら問題あるまい」

「第一護衛艦隊を引き抜いた艦の代わりに防空に当てるのだ。」

「単純にただ引き付けるためだけなら数が多い方がより目を引く。」

「艦隊の最高速度は一番遅い艦に合わせるとしても、回避運動の為に陣形内で増速する分には問題無い筈、と判断したのだ。」

「要は、本来の目的さえ悟られなければ構わない。」

「なるほど、気を引きつけさせれば良いのだから単純に数を増やす、と言う事ですか」

「そうだ。陸軍師団の輸送護衛は作戦決行までに終えるもの、とする。そうすれば輸送船団の事を気にせず戦える」

「提督、なんで隼鷹なの？」

「どうした、不満か」

「ああ、えつと不満とかじゃなくて単純に空母一隻だけなら搭載数の

多い瑞鶴とかそれこそ信濃の方が適任なんじゃないの？」

「隼鷹を選んだ理由は単純に大きさの問題だ。流石に陽動してくれ、と言っているのにそこから信濃や瑞鶴と言った大型空母を引き抜いたら少なからず不審に思われるかもしれない。本来なら空母も付けずに戦艦のみで行きたいが流石にそれは不味いからな」

「なるほどねー……。了解。ごめんね、変な質問しちゃって」

「構わんさ。他にも疑問があるなら聞いてくれて構わん。答えられる範囲で答えよう」

会議はその日の真夜中まで続くことになる。

作戦名アンドレアノフ諸島攻撃作戦をホ1号作戦、陽動作戦はホ2号作戦、とされた。

編成は以下の通り。

アンドレアノフ諸島攻撃ホ1号作戦参加艦艇

戦艦

金剛 霧島 リシユリユー

ビスマルク、ティルピッツ、ヴァンガード

空母

隼鷹

1 水戦

軽巡洋艦

能代

駆逐艦

秋月 照月 Z3 初月 陽炎 雪風 浦風 萩風 初梅 初雪

浦波 菊月

ホ2号作戦参加艦艇

第1機動艦隊

第1航空戦隊

飛龍 蒼龍 瑞鶴 加賀

第1戦隊

戦艦

無し

重巡洋艦

鈴谷 ザラ ポーラ

第2航空戦隊

大鳳 信濃 阿蘇 葛城

第2戦隊

戦艦

無し

重巡洋艦

熊野 アドミラル・ヒツパー プリンツ・オイゲン

第2水雷戦隊

軽巡洋艦

矢矧

駆逐艦

若月 霜月 春月 村雨 時雨 響 朧

第3航空戦隊

隼鷹 飛鷹 グラーフ・ツェツペリン アークロイヤル

第3戦隊

戦艦

リットリオ ローマ

重巡洋艦

青葉 古鷹

第3水雷戦隊

軽巡洋艦

多摩

駆逐艦

宵月 満月

Z 1

初雪

浦波

菊月

望月

望月

Z 3

村雨

霜月 春月

第4航空戦隊

鳳翔 大鷹

神鷹

海鷹

龍驤 千代田

第4戦隊

戦艦

長門 日向 クイーン・エリザベス ウォースパイト ラミリーズ

ネルソン デューク・オブ・ヨーク

重巡洋艦

那智 羽黒 愛宕 摩耶 最上 キャンベラ ゴトランド デ・ロ

イヤル

軽巡洋艦

名取 鬼怒 天龍 龍田 神通

駆逐艦

花月 涼月 グレカール リベツチオ ジャーヴィス マエスト

ラーレ

東雲 白雲 浦波 狭霧 子日 有明 海風 江風 峯雲 霞

藤波 沖波 清霜 白雲 有明 長月 荒潮 親潮 黒潮 竹 桃

椿 楓 樺 楠

以上の様になった。

一航戦は二、三と行動を完全に共にして引き抜かれた艦艇の不足を第一護衛艦隊の各艦が補う形になる。

何故一航戦から丸々一水戦を引き抜いたのか、と言う疑問に關しては単純に各戦隊から引き抜くと個艦単位での連携などに不安が残る

からだ。

水雷戦隊単位ならば今までの作戦で何度もやってきたから問題ないだろうが、それぞれから引き抜くとなると不安なのだ。

本来ならばそうした方がいいのだが今回は連携訓練が出来ない。

ならば水雷戦隊単位で引き抜いてしまった方が手っ取り早く尚且つ確実なのだ。

こちらは常に余裕の無い戦いをせざるを得ない状況だから、致し方無くと言う訳だ。

これらが決まってからは兎に角早かった。

中代大将からの許可も得て、長門達は通常の2倍の数の輸送船を伴い次の船団護衛任務で本土を出港。

既に輸送船を引き抜き部隊や機材の大規模な積み込みを始めていた陸軍師団は翌月頭には出港可能となるだろう、と連絡を受け取った。

さて、その前に。

第35特別戦車隊長ツエーザル・ベルガー大佐

第2実験戦車大隊隊長マルクス・ランゲ大佐

両名からの要請である補充機材を先に送り込まねばならない。

この両名とは、電話によって話をしたただけだが部隊の状況を把握するべく各部隊長と面談をした時の事だ。

はつきり言って、この両部隊は酷い有様だった。

深海棲艦からの度重なる侵攻を何度も食い止め続けた彼らは消耗し、辛うじて戦車搭乗員や歩兵の損害は少なかったものの失った機材があまりにも多すぎた。

第35特別戦車隊はティーガー15両中11両が行動不能状態、戦車回収車に引っ張られこの部隊の防衛戦である場所にまで撤退したは良いが駆動系をやられてしまい野戦整備ではどうしようもなく本格的な整備をせねばならない状況に陥っている。

戦闘によつて3分の2以上が行動不能になつてしまつたと言ふことだ。

第2実験戦車大隊はパンター30両中13両が擱座、ないし撃破されて行動不能。

現在修理中の車両が4両なので現在動かせるのは僅か13両のみ。両部隊とも大幅な戦力低下を強いられてしまつている。

しかしだからと言つて撤退することも出来ない。

幸いなのはどの車両も非戦闘時の損耗が無かつた事だろうが慰めにもならない。

そこに俺から電話が掛かつて来たのだから、補充機材を兎に角大至急寄越して欲しい、と泣き付かれたのだ。

このままでは防衛線の維持どころか戦闘すらままならない、人員、機材全てを兎に角早く寄越してほしい、と。

あんな悲壮な声で言われてはこつちも堪らない。

元々補充の人員や機材を送り込む手筈は整つていた。

ただ、生産が追い付いていなかった事、戦車兵達の練度が若干不足気味であり戦線投入が憚られた事などが重なつて出来なかつたのだ。

しかし流石に前線の指揮官からそこまで言われてはどうしようもない。

取り急ぎ、人員はともかく失つた分の戦車だけはなんとか数を揃えて送り込むことに。

戦車兵達は脱出するなりして生き残つているから、戦車さえあれば戦える、と言う状況だからだ。

増援のパンターとティーガーは訓練をあと二週間施せば前線投入しても問題無い、と聞かされているからそれまで保たせればいい。

今現在、それぞれ30両ずつが訓練中なので、訓練が終わればティーガーとパンター、30両ずつ増える事になる。

整備兵も纏まつた数を育てているし整備機材の方も数は揃えてある。

他には防衛線に展開している3個歩兵師団へ武器弾薬を大量に送り込んだりすればいい。

兎に角防衛に努めよ、と命令してあるのと、前述の両戦車部隊が進軍中の敵部隊を航空戦力と共同して攻撃して減らしているのもあって確かに損害は負っていたが、それでもまだ戦える状況だ。

兎に角、あと最低でも半月程度は彼らに何とかして防衛線を維持し続けてもらわねばならない。

第53話

北海道での反攻作戦二週間前。

陸海軍共に着々と準備を進めていた。

海軍はホ1、2号作戦に向けて、陸軍は投入される第5軍集団の準備に追われている。

連日、可能な限り第5軍集団の部隊を送り込みつつ、戦線維持のための補給も同時に輸送船団を用いて行っているが、作戦決行日まではギリギリだろう。

それでも南方方面への輸送に従事している輸送船を引き抜き、第5軍集団と必要となる各種物資の積み込みを既に開始し、3割程が積み込みを終えている。

積み込みさえ終える事が出来れば、あとは北海道に送り込み、陸での反攻作戦である北号作戦の準備を進めるのだ。

陸軍の作戦は海軍の勝利が大前提であるから、先ずは海軍が勝たねばならない。

作戦の準備は当然進むが、他の事でも次々と報告書などが届く。

ホ1号作戦に参加する艦艇は一度呉に戻り、北太平洋の荒波を耐え抜くべく点検整備を行なっている。

ホ2号作戦参加艦艇も順番だが呉で点検整備をしている。

今現在、表向きは将旗を飛龍に掲げ旗艦としているが、今回俺が作戦中に座乗する艦はビスマルクとなっている。

金剛でない理由は、単純に通信、電探、光学照準器などの各種設備が他艦と比べ充実しているからだ。

話し始めたらキリが無いが、我々が攻撃を行うアンドレアノフ諸島近海はよく霧に覆われる。

下手をしたら、数m先すら見えなくなるのが霧だ、目視での戦闘は

どう考えても無茶がある。

霧が辺りを覆った、と仮定した場合、射撃に置ける測距、照準、射撃は全て電探頼りになる。

発光信号も意味を成さない可能性もある。

であれば、他艦に比べてそれらが充実しており、尚且つ金剛よりも攻撃力、防御力が高いビスマルクを旗艦として置いた方が指揮を継続して取り続ける事が出来たりと、何かと都合が良いのだ。

ヴァンガードでは駄目なのか、と言うが実は場合にもよるが防御力、特に水雷防御が他艦に比べて高いとは言えない。

更に補助機関がはつきり言って発電量がビスマルクどころか改装済みの金剛にすら劣っているのだ。

これでは主機関が使えなくなった場合、補助機関のみで運用すると考えると揚錨機やクレーンの動力など日常で使用する多くの動力を蒸気機関に頼っているから電探などに回す電力が不足し十全な性能を発揮し得ないと考えた。

しかも、恐らく作戦実施海域は潜水艦が最も能力を発揮し得る場所である為に、それは不味い。

水雷防御と補助機関を合わせて考えた場合、下手をすれば魚雷一本だけで戦闘力を全て喪失する可能性がある。

しかし、その攻撃力は金剛や霧島に比べ高く、全長や全幅も大きく対空兵装が金剛のように無理矢理積めるだけ積んだ感が無く（それでもヴァンガードも機銃などを積める場所に積められるだけ積んだが）、装備している対空砲、対空機銃の数も多く、増加に伴う運用問題も金剛や霧島に比べればマシだ。

しかし、水雷防御が低いのは如何ともし難い。

基本的に、戦艦や空母と言った大型であり一定以上の防御力を持つ艦を沈めるには対艦爆弾だけでは普通ならば無理だ。

誘爆を狙ったり、艦橋に直撃させたりしなければ殆どの場合、確かに損傷を与える事は可能だが撃沈となると話が変わってくる。

例えば、我が海軍最大かつ最強クラスの大和、武蔵の2隻で考えた場合、爆弾で機銃や対空砲を破壊する事は出来たとしても、装甲を貫

き艦内部で爆弾を炸裂させる事は出来ない。

艦橋は場所によるが最大500m、艦橋などに配置されている操舵室なども装甲で覆われているから先ず破壊は無理であろうし、砲塔に至っては防盾部分は650mm。

40cm砲を正面から受けて弾き返す厚さだ。

どう考えても、深海棲艦が急降下で投下する250kg爆弾や500kg爆弾では装甲を貫通どころか凹ませたり傷を付けることすら叶わない。

しかしこれが魚雷になってくると全く話が違ってくる。

と言うのも、基本的にどの船、どの軍艦でも喫水線下は弱い。

いくら重防御で固めようと、艦全体の防御力と相談して決めねばならず、更には艦の重量問題などで限度がある。

確かに他戦艦と比べると破格と言つていい水雷防御を誇る大和や武蔵でも、結局装甲を破られれば弱い事には変わらない。

では喫水線下が何故弱いのか？

答えは単純、艦にとって最も脅威となるのが浸水だからだ。

極論を言つてしまえば、火災が発生したとしても周りに水が幾らでもあるから迅速に消火を行えば問題無い。

掛けた水は甲板上であれば海に流れて行くし、艦内に溜まったとしても浸水による水量に比べれば大した事は無い。

排水ポンプを使えば簡単に艦外に排出出来る。

しかし浸水、特に喫水線下からの浸水となるとまるで話が変わってくる。

喫水線下と言うのは、水の下にあるものだ。

と言う事はここに攻撃を加えられたらどうなるか？

穴を開けられた箇所から、海水が際限無く入り込んで来るのだ。

確かに排水ポンプなどを使い浸水量を少なくする事も有用であるし、隔壁を閉じて浸水する区画を少なくする、艦の予備浮力が高ければ良い、などやり方はある。

しかし、海水の浸水と言うのは兎に角厄介極まりない。

浸水する中でダメコンをしなければならぬし、防水布などが足り

なくなれば応急措置すら出来なくなる。

魚雷一発の被弾ならば、よほど辺りどころが悪くなければ大和や武蔵はおろか金剛などでも沈む事も無い。

だが艦である以上、それらのダメコンに必要な物資は戦闘を行う艦である以上、多くはない。

航空魚雷は、駆逐艦から発射される魚雷と比べると、我が軍で広く使われている酸素魚雷は比べる魚雷にもよるが、海軍艦艇に使用されている九三式魚雷三型にもなると炸薬量は780kg、九一式航空魚雷の実に凡そ7倍の炸薬量を誇る。

しかも、欧州からの技術の中には、酸素魚雷の弱点の一つであったジャイロスコープが含まれており、30ノットを超える高速力下での魚雷を投下すると迷走する、と言う弱点が解消されている。

炸薬量を減らし、音響誘導方式や無線誘導方式を導入しては、と開発はしているが今現在結果は芳しくはない。

ともかく、無誘導方式ではあるがそれほどの破壊力を有すると言う事だ。

深海棲艦の武器などの詳細な威力が未だ不明な為に我が軍の魚雷で考えたが、自軍兵器が自分に向けられた事を想定しないなど馬鹿の極みであるから特に問題は無い。

魚雷に関しては深海棲艦側よりも高性能であるからな。

我が海軍の潜水艦用魚雷は炸薬量400kgで300kgほど炸薬量は少ないがそれでも航空魚雷と比べると破格と言っている。

それが、霧が発生しやすく、海が荒れ易い敵潜水艦を発見しにくい場所自分達に向けられ、命中したらどうなるか？

喫水線下を吹き飛ばされて轟沈待った無しである。

装甲を繋ぐ方法をリベット止めから溶接方式に変え、防御力と重量軽減による速力増加が期待されている大和型戦艦ですら、駆逐艦や潜水艦の魚雷を喰らったら一溜まりもない。

であるのに、それより水雷防御が劣るヴァンガードが魚雷を喰らったらどうなるか、結果は明白だ。

それらを加味して考えた結果、ビスマルクを旗艦に据えた方が良いでしょう、と言う結論に至った。

と、作戦に向けて準備が進められる中、俺もその為の書類仕事やそれ以外の溜まりに溜まった仕事と戦っている最中である。

なんとまあ、ここまでの書類の山は何時以来であろうか。

旗艦であるビスマルクは点検整備中。

駆逐艦は魚雷発射管を一基残して全て対潜及び対空装備に換装。

能代及び秋月、照月、初月の秋月型3隻は本作戦実施に伴い搭載していた魚雷発射管、自発装填装置など魚雷に関わる装備を全て撤去。

対空機銃や機関砲をその分の空きスペースに2cm4連装機関砲や25mm3連装機銃、40mm2連装、4連装対空機関砲を許されるだけ積み込んでいる。

艦尾には爆雷投射機を2基増設。

その分の弾薬も魚雷関連装備撤去のお陰で搭載出来るスペースは十分にあるからな。

今回の作戦で何よりも恐ろしいのは、敵艦隊では無く敵潜水艦だ。

霧が発生さえしてしまえば此方としては敵哨戒機に見つかり敵機や敵潜の攻撃に晒される事は無く、あつたとしても早々命中はしない。

タイミングを合わせて敵艦隊が居ない時を狙うから、敵艦隊との殴り合いが発生する可能性は低いだろう。

しかし霧が無い場合、潜水艦や敵飛行場から飛び立った敵機の攻撃を受けるは必須だ。

ならば魚雷を積んで誘爆の可能性を高くするよりは対空機銃や対潜爆雷を積んで置いた方が良い。

万が一敵艦隊との戦闘になつたとしても、残りの艦が魚雷発射管を

一基つつ搭載しているから全くの無力というわけでは無い。

今回、艦隊に随伴する空母は隼鷹1隻だけだから、幾ら対潜哨戒用の流星を最低限度しか積まず戦闘機が殆どを占めるとは言え、

烈風64機 流星8機 彩雲6機 計78機

この陣容ではもし敵機との戦闘になった場合、迎撃をすり抜けてくる敵機は多いだろう。

そうなれば艦隊での対空戦闘は激しくなると予想される。

突貫工事になったが、作戦までには間に合うだろう。

更に艦隊に最大速度25ノットを発揮出来る高速タンカーを2隻、同じく25ノットを発揮出来る高速補給船を1隻随伴させる事に決定した。

アンドレアノフ諸島までの道のりは長く、帰り道も途方も無く長い。

潜水艦や敵機との戦闘になれば燃料を多く消費してしまう。燃料切れで動けなくなったらそれこそ大事であるからな。

「ふう……」

連日連夜の座り仕事で肩凝りが酷く、頭が痛くなってきた。

頭痛から来る吐き気もしている。

かと言って休める余裕は無い。

「提督、ちよつといいかい？」

「ん、どうした？」

「はあ……、あのさ、ちよつと休みなつて。酷い顔してるよ」

お茶と共に、昼食を作って持って来てくれる隼鷹に、呆れ顔で何度目になるか分からない、休めと言言葉を掛けられた。

「休んでも居られない。作戦決行までそう時間は多く無いのだ。一日休んでしまえばそれ以上に準備などが滞るからな」

「その顔色で言っても説得力無いし、なんなら仕事の効率、凄く落ちてるけど」

そう言われると、反撃する言葉が思い付かない。

「まったく、鳳翔さんに言い付けられたくなかったら取り敢えず今日の午後は休みなつて」

「ううむ……、分かった」

「そう少々頷きなさんなつて。大方、肩凝りが酷くて頭痛とか吐き気が凄いんだろ？」

「まあ、そうだが……、なんで分かった？」

「そりやさつきから自分の肩をグリグリゴリゴリやってたら誰だつて分かるさね。顔色も悪いし、普段なら良く飲むお茶も飲まない。肩凝りほつとくと死ぬよ？」

「いや、まあその通りだとは思う」

「だから昼飯食つたら今日の午後は取り敢えず休み。休暇申請書は書いてやるから部屋で待ってな」

「それは分かったが、部屋で待っているとはなんだ？」

「軍医呼んで、診てもらった後にマッサージしてやんよ。これでも提督にはでっかい恩があるからね、こんぐらいどつてこと無いよ」

「なんだか、悪い事をしてしまった気がする。」

「しかしここで謝るとまた怒られるだろうからな。」

「ありがとう、隼鷹」

「おつ、謝罪じゃなくてお礼が言えるようになったのは良い傾向だね」

「どうやら見透かされているらしい。」

「そんなに分かり易いだろうか？」

そして言われた通り、昼食後になると休む事になった。

鎮守府に居る時に良く俺の事を診てくれる、世話になっている軍医が来てくれた。

「随分と、無理をされたようですね。相当疲労が溜まっておられるようだ」

「まあ、な」

「何時も言っているでしょう、無理をしては逆だと」

「すまん……」

彼曰く、疲労が溜まり過ぎている、数日の休養が必要である、との事です。そう診断書を書かれてしまった。

彼も隼鷹や鳳翔達と同じで、仕事のし過ぎである俺に対して休養を取らせようとする強硬派であるからな。

まさか嘘を書けと言えるはずも無く（そもそも言ったところで無視されるのだろうか）素直に怒られて、謝っておいた。

因みに隼鷹の手によって午後一杯どころか翌日も、

「どうせ軍医には数日の休養が必要だって言われるだろうと思ってたからね」

と休暇申請が出されており速攻で受理されていたのは言うまでもない。

部屋で肩凝りによる頭痛と吐き気と戦いながら待っていると。

「おーし、そんじゃやるぞー！」

勢い良くプレハブ玄関を開けて入ってくる隼鷹。

一応ノックはしたが、此方の返答を聞く前に入ってくる。曲がりなりに軍人としてそれはどうなのか、と思うがもう今更であろう。なんだかんだと気心許せる相手というのは、中々いない。

隼鷹は気心のある程度許すことが出来る数少ない者の一人だ。

破天荒で酒豪、実際酒豪だが、それでも相手の事を気遣って心配してなんだかんだと世話を焼いてくれる所謂姉御肌なのが隼鷹だ。

俺に対しても恋愛感情というより、手の掛かる弟とかそんな感じだろう。

「ぐお〃お〃お〃お〃お〃お〃お〃お〃……！」

「ったく、そんな声上げるぐらいまで我慢したりするなって。なにこの肩、酷過ぎ」

「あででででででででで」

首から肩や背中、腰に掛けて揉まれると、凝りを解される時の痛みが襲う。

隼鷹からのお小言を貰いながら、たつぷり2時間、マッサージを受

ける事になったのであった。

翌々日。

休暇が終わりいつも通りプレハブ執務室に出向くと書類が減っていた。

しかも分類までされている。

さてはマッサージを終えた後に隼鷹がやってくれたな？

「おーっす」

「隼鷹、仕事片付けてくれたのか」

「ま、その権限を貰ってっからね。ちよつとばかりはアタシらの為に必死に働いてくれてる提督への恩返しってやつ。機密書類は一切触れてないよ」

「迷惑を掛けた。ありがとう」

「気にすんなって。あ、それと報告書が大量に来てるからそつち片した方がいいよ」

執務室にやって来た隼鷹に聞いてみると頷いた。

本当に、皆には頭が上がらない。

取り敢えず、仕事を始めよう。

朝食はまだだし、それまでは問題あるまい。

「……石炭液化燃料の量産目処が立った、か」

今読んだ報告書は、石炭を液体燃料にする事に成功し量産の目処が立った、と言う報告書だ。

所謂代用燃料、とでも言うべき代物だ。

この技術の研究には、日本という国の事情が大きく絡んでいる。と言うのも、日本、石油が全く取れない。

極小ではあるが算出はしているものの、その産出量では到底賄いきれない。

そこで南方方面からの石油に頼っているわけだ。

しかし日本、実は豊富に取れる資源がある。

それが石炭である。

この石炭、今では艦艇の燃料として使われなくなって久しいがそれでも未だ、深海棲艦による爆撃の危険性により使用が出来ない原子力発電に変わり、民間向けの風力、太陽光、水力発電に加えて石炭を使った火力発電で使われているのだ。

元々、この技術は1900年代初頭から研究されていた技術であるが、あまり有名ではない。

それは何故か？

理由は技術面での問題よりも、兎に角コスト面での問題が大きいからだ。

なんせ「石油が不足・高騰したときだけ一時的に注目されて研究・開発されるが、不足・高騰が解消すると忘れ去られて研究・開発は停滞する」傾向がある、とまで言われるぐらいなのだ。

石炭を液化燃料にするならば普通に石油を買った方が良い、というのが普通であるし、事実その方が安上がりだ。

では何故それらを研究したのか？

日本は石油が取れない。

もしまた深海棲艦に資源地帯を奪われた時、艦艇はおろか航空機ですら運用出来なくなる。

その局面になった場合に備えての、と言うわけだ。

ただ、技術があつて生成可能ではあれど兎に角コストが掛かるし、しかも民間での発電の大部分を担う石炭までもを軍が持つていってしまう、と言う事で反発されている。

ただ、備えないわけにもいかず、技術開発だけは進めていた。

そして、漸く量産の目処が立ったと言うことだ。

これにはやはりドイツやイギリスと言った、石炭の自給は可能だが石油の自給が出来ないと言った国々からの技術が参考にされている。

欧州は元々、北海油田やルーマニアにあるプロイエシュティ油田、中東などから石油の供給を受けていた。

しかし北海油田は制海権が維持出来ずにすぐに破綻、中東の油田も地中海の通商破壊や油田そのものへの攻撃や爆撃によって使い物にならず、欧州全域はプロイエシュティ油田に頼らざるを得なくなつた。

ルーマニアは確かに黒海に面しているが、海軍は最高でも駆逐艦が5隻しか居らず、石油の供給の見返りにイギリスから重巡1隻、駆逐艦3隻を派遣された上で、更にイギリスやドイツの陸海軍の航空隊を派遣され、自国の陸軍の殆どを沿岸防衛に割っていた。

これにより守るべき範囲が200kmほどの沿岸部に200万近い陸軍を貼り付けていた。

単純計算で一キロ当たり1万人が防衛に就いていたことになる。

石油は特に制海権を維持せねばならない関係上、欧州どころか世界第2位の海軍力を持つイギリスにその大部分が送られ、残りの国は少ない石油でやりくりせねばならなくなつた。

アメリカも大西洋を隔てた遙か海の向こう、しかも欧州よりも遙かに海での激戦が続く太平洋方面に石油に殆どを振り向けていたし、やはり深海棲艦の爆撃などによって各地の油田の産出量は低下していた。

となれば、イギリス以外の国々の石油の使い道の殆どは大量の石油を必要とする海軍に向けられ、航空機や戦車などに回ってくる燃料は皆無に近かつた。

海を守り沿岸部を押さええている間は陸での戦いは起きないと言うのも理由の一つだ。

しかしそうは言っても陸軍を疎かに出来るわけもない。

戦車や航空機がなければ陸での作戦が出来ないし、上陸を許した後では手遅れだ。

そこで、それらの燃料不足を少しでも解消するべく、石炭の液体燃料化技術が注目されたのだ。

これならば自国で石炭しか産出出来なくとも、燃料供給の目処が立

つし他国と熾烈な奪い合いをする必要もなくなる。海軍と石油を取り合わずに済むし、航空機や戦車などには供給出来る。

ロシアの石油は政治上の理由から供給されていない。

なんせロシアは既に各地に無理矢理陸海軍を派遣してはその都度損害を受け、しかも艦娘も艦艇も妖精も大幅に失っていた。

石油の供給をする代わりに艦娘と艦艇、航空機、そして陸海軍妖精を寄せと言った来たのだから、どこの国も深海棲艦に押されて少しでも戦力が欲しい時にそんな要求を呑めるはずもない。

しかもそんな時に限ってコーカサス地方の大油田であるコーカサス油田やバクー油田を深海棲艦の攻勢によってあっさり喪失、かなり内陸部まで押し込まれてしまい、しかも各地の油田もやはり爆撃で壊滅、復旧の目処が立たなかった。

それどころか北極海からの深海棲艦上陸でロシアは欧州と東西に分断されてしまい、ウラル山脈を使って辛うじて防衛には成功したものの、いつ防衛線が崩壊してもおかしくない状況になった。

自国の供給すら危ういのに、他国に供給出来る事も到底出来ず、である。

ルーマニアの東欧諸国も同時に失陥していたから石油供給は絶たれたも同然であった。

これを皮切りに不幸は続いた。

この時期になると欧州を分断する事に成功した深海棲艦が勢い付き、大攻勢を各地で繰り広げ欧州は戦禍によって火だるまになって行った。

中東からの石油やアジアからの天然ゴムなどを運ぶのに必須であるスエズ運河の失陥。

イタリアの女性提督の戦死。

地中海の制海権喪失。

シチリア島の失陥に続きイタリア本土上陸からの態勢の整わないままイタリア半島を失う。

アルプス山脈を天然の要害にしてドイツ、イタリア軍が防衛に成功するも、息をつく間も無くロシア方面からの大攻勢、フランスへの上陸、フィンランドの北欧喪失と立て続けに負けて後退して行った。

しかも各国の避難民が溢れており、冬には凍死、餓死者が億単位で出るほどにまで追い詰められていた。

それでも、イギリスフランスドイツを中心とした国が幾つか、戦線を押し留める事に成功した。

イギリスは海を、フランスドイツは陸を主に担当する事で負担を軽くしたのだ。

しかし石油が無ければ何も出来ない。

それによって、石炭の液体燃料化が大きく進む事になる。

石炭を液化燃料にするには主に二種類の方法がある。

ベルギウス法（IG法）とフィッシャー・トロプシュ法の二種類だ。

この方法を使って、石炭を液化燃料にし、航空機や戦車を飛ばすのだ。

価格や大量供給と言う点においてはバイオ燃料よりも優れているが、二酸化炭素の発生が多かったりする問題点はある。

これによって各国は30前後の工場から一日当たり約200000バレル、年間約3180万トンの量を作り出すことに成功した。

艦隊を十全に動かすには足りないが、航空機や戦車を動かすには十分な量だし、沿岸防衛や船団護衛ならば規模にもよるが十分に果たせるだろう。

が、やはり爆撃によって工場は破壊されるし、鉄はあるがそれ以外の金属、特に希少金属に乏しいから燃料があつたとしても航空機や戦車を作る事が困難であったり、艦艇の修理もままならなくなっていたのだ。

とまあ、石炭の液体燃料化を図ることは少なくとも必要不可欠であり、最悪海軍の艦艇すらもそれで運用せねばなくなる事を考えれば、今ですら燃料不足なのだからそれらを解消する為に、明らかに今

すぐにも工場建設、燃料の生産を始めた方が良い。

「隼鷹、これについて何か大本営などから通達はあったか？」

「今のところ、結構揉めてるみたいよ？野党政治家は国民に死ねと言うのか、与党と軍は死ねも何も燃料不足で負けたら皆殺しだろう、って感じで」

「やはりか……」

やはり話は上手いこと纏まらないのが常らしい。

今現在の日本は政治機能が全くとっていいほどに機能していない。

戦争最初期に首脳陣がまさかの国外逃亡を図ったりと国民が政府を全く信用出来ない状態に陥った。

しかもその後の政権も戦線の後退に次ぐ後退、兵力不足を補う為の憲法改正による徴兵令、本土への空襲などによる本土攻撃、更には残った投入し得る最大戦力を投入した沖縄戦での敗北と沖縄失陥。

様々な要因によって政府と軍に対する不満が高まりに高まった結果、所謂共産主義者の暴動、としているが事実上の内戦に突入しかけたりした。流石に見過ごす訳にも行かず、それを抑えるべく強行鎮圧。

主犯格ら及び参加者は全員が最前線送りの実質的な死刑判決を受けた。

事実、彼らは参加した南西諸島での一連の戦いで全員が戦死している。とは言え犯罪を犯した上での前線送りだったので家族らには一切の金銭が払われていない。

それらの騒動によって完全に政府が機能しなくなってしまったのだ。

政府の要人は軒並み空襲などで死亡、もしくは責任を取る形で総辞職。

それが長くとも1年、短ければ数ヶ月と言う極短期間の内に何度も繰り返されれば機能しなくなるのも無理は無い。

そこで、機能しなくなった政府を立て直すべく憲法を改正、陛下を国家元首とした。

明治憲法との違いは、
神聖不可侵であること（第3条）
統治権を総攬すること（第4条）
が無い事だ。

まあその辺りは訳が変わらないぐらいややこしいと言うか、難しいので割愛しよう。

現状の日本は、陛下を国家元首として辛うじて成り立っている程度の危うい状態だ。

それも、下手をしたら簡単に崩れるほどのもの。

更に言ってしまうえば、元いた世界では生前退位がどうこうと話題になっていたがこの世界はそんな余裕も無く、生前退位は行われていない。

取り敢えずこの話は話すと長くなり過ぎるから終わりにしよう。しかし、よくもまあこんな状況なのに味方同士で争えるものだ。

「各地方に工場を3箇所建設し、製造を開始する予定か」

「燃料は幾らあっても足りないからね。製造された燃料は陸海軍の航空機と陸軍の車両に回されるらしいよ」

「予想される製造量では海軍艦艇の需要は到底満たせないからな。妥当な判断だろう」

各種報告書を読み、書類を片付けていく。

陸軍第5軍集団を輸送する準備が整った。

予定通り、船団を組み第1護衛艦隊と各地の航空隊の護衛の下で北海道を目指した。

1週間後。

函館、室蘭、苫小牧港に上陸。

それぞれの港に第5軍集団を構成する第3軍は函館、第10軍が室蘭、第13軍が苫小牧港に振り分けられた。

第5軍集団は各軍集団から戦力を抽出し総兵力26万に達している。

第3軍 2個機甲師団約6万人

第10軍 2個砲兵師団と1個歩兵旅団約5万人

第13軍 7個歩兵師団、1個歩兵旅団約15万人

以上の様になっている。

それでも深海棲艦の陸上総兵力は此方の最低でも倍になっている。

これで攻勢に出るのは無茶苦茶もいいところだが、兵糧攻めをして弱体化してしまえばそれが覆る。

念の為、更に1個軍を送る手筈を整えているが、作戦が失敗したら焼け石に水だろう。

「霧島、艦隊出港準備」

「了解しました。提督は早く寝てくださいいね」

霧島に命じて艦隊の出港準備を開始させる。

しかしそうすぐに出港出来るわけではない。

なんせ釜に火を入れたりと同様な準備を終えて艦を動かせるようになるまで駆逐艦ですら半日、巡洋艦や戦艦や空母と言った中、大型艦に至っては丸々一日以上掛かるのだ。

現在時刻は19:36なので出港準備完了の報告が上がってくるのはどれだけ早くとも翌日の20:00だ。

それならば余裕を持って24:00を出港時刻としておいた方が良いだろう。

その時間帯ならば辺りは暗く、対潜哨戒さえしつかりやっておけば出港を悟られる事も、魚雷で奇襲を喰らう事もない。

さて、と。

今も早く寝ろ、と目を光らせている霧島に怒られる前に寝るとしよう。

霧島は怒ると恐ろしいからな。

ここは素直に従っておこう。

どうせ北太平洋に到達したら寝ていられないだろうからな。

第54話

翌日。

艦隊の出港準備が整った。

旗艦であるビスマルクに乗艦し、呉を出港。

進路偽装の為に明石海峡、鳴門海峡を通過する進路では無く南方方面などへ向かう時に使用する豊後水道側からの進路を取り、最短距離で向かうのではなく、そこから真南へ南下しそこから更に小笠原諸島方面、正確には硫黄島経由で各地の航空隊の支援を、硫黄島駐屯の航空隊を最後に途中まで受けながらアンドレアノフ諸島へ進路を取る予定だ。

硫黄島の航空隊哨戒圏内以降は艦隊は空の守りを隼鷹のみに頼る事になる。

秋月	能代	照月	初月	雪風	萩風	初雪	菊月
隼鷹	ビス	金剛	リシ	隼鷹	隼鷹	輸送	
初梅	テイ	霧島	ヴァ	浦風	初梅	浦波	
陽炎	Z3						

陣形は普段とは違い、輪形陣を取らずに縦に長く各艦は500mの距離を保っている。

アンドレアノフ諸島まで硫黄島経由で凡そ7000km。

艦隊速力20ノットで航行しても10日は掛かる距離だ。

天候によつては15日程度、と見積もつて居た方がよい。

その進路の前半、硫黄島に駐留している航空隊の航空支援下以降は隼鷹艦載機にのみ頼るしか無くなる。

もし敵機動部隊と戦闘になったら目も当てられなくなるだろう。

そこでホ2号作戦の出番という訳である。

作戦決行時期は陽動艦隊旗艦の飛龍に任せているが、タイミングを見誤れば双方ともに壊滅で済めば御の字、最悪文字通りの全滅だ。

陽動艦隊には、北海道近海を遊弋する敵機動部隊撃滅及び敵輸送船団撃滅が任務である、としている。

しかしながら本当の作戦目的は、以前説明した通りであるが、遊弋艦隊と輸送船団護衛艦隊の誘引である。

この二艦隊さえ誘引してしまえば、あとはこちらがアンドレアノフ諸島へ艦砲射撃を実施、敵中継補給拠点を吹き飛ばせば良いだけだ。

しかしそう上手くいかないのが世の中である。

砲撃を実施するのに、大前提として第一に砲撃観測を行うために第531偵察中隊が無事に上陸出来なければならぬ。

これがなければ弾着観測が出来ず撃つても当たらない。

第二にアンドレアノフ諸島近海に霧が出ること。

確かに531中隊の上陸も重要であるが、こちらも重要だ。

敵機と敵潜からの脅威を受けない事が我が艦隊にとつて何よりも優先すべき事項であり、それがあつた中で対地艦砲射撃は速力を落とさざるを得ない都合上危険極まりない。

霧が出てくれれば、敵潜は視界が奪われ戦艦みたいに高い艦橋やレーダーを装備していないから、聴音機で此方を捉えるしかない。

そうなればこちらの秘密兵器の出番である。

航空機は飛ばないし使えなくなる。

次にどうやって正確な砲撃位置を531中隊が此方に伝えるか。

これに関しては前二つの問題とは違い、解決している。

今まで砲撃を行う、となると師団事の砲兵や砲兵師団に砲撃要請を送らなければならない。

ただ、その手順に問題があった。

砲撃を行ってもらいたい部隊は、例えば第1中隊第3小隊正面へ砲撃要請を、と送る。

そこから要請を受けた砲兵部隊が砲撃を行うのだ。

一見なんの問題も無さそうである。

しかし問題しかない。

と言うのも、第1中隊第3小隊、と言うのは展開している砲兵部隊の担当地区の部隊の中に幾つもある。

だから第1中隊第3小隊と言われたらその部隊のところに砲撃を行おうが、実はその砲撃が全く別の同じ第1中隊第3小隊のところに砲撃しているなんて普通だ。

要請した部隊のところへはいつまで経っても砲撃が来ないなんてのは日常茶飯事。

砲撃が来ないぞ、と文句を言ってまた別のところを撃つたは良いがまた違う。

比較的マシなのは地形的目印や名称が分かる場所への砲撃やその近辺への砲撃だがそんな状況なんて一つの戦線においてそう多くはない。

ならいつその事全ての当て嵌まる部隊全面に砲撃を落としてしまえ、そうすれば要請した部隊の前面に落とせるだろうと無茶苦茶な状態だったのだ。

それを如何にかして解決しなければならなかった。

無駄に砲弾を消費してしまうし、必要な時に砲弾が無いとかもあった。

しかもそれぐらいで済めば攻勢を遅らせたりで、対処すれば良かった。

だが、酷い時は当て嵌まる部隊全ての前面に落としたり、前進していた味方部隊のど真ん中を砲撃してしまい同士討ち、死者が出たなんてのもあった。

はつきり言ってその次元のレベルだったのだ。

陸戦ですらこの有様なのに、それよりも火力が高く精密な情報が無ければならない艦砲射撃は実施困難だ。

観測機を上げれば済む話なのだが、今作戦のように観測機が使用出来ない状況であるとやはり実施困難である。

今までは観測機からの情報からや、事前に詳細な地図を作成し目標の位置が分かる状況だったから良かったものの、今回のような何かしらの障害物を挟んでおり艦の直接照準が困難であり、更には霧による弾着観測機による間接照準が出来ない場合はどうしようもない。

どうにかして解決して正確な砲撃支援を出来る様にしなければならぬ。

そこで簡単な方法であるが、地図上に格子状の線を引き、そのマス毎に番号を振り地図上の各地点を区別するようにしたのだ。

簡単な方法ではあるが、効果自体は絶大である。

既に北海道の各戦線で試験的に導入されたが、砲兵だけでなく支援要請をする側からも、友軍誤射の危険が低くなり、確実に砲撃支援が来るとあって好評である。

これを用いて艦砲射撃を行うのだ。

観測機が使えなくとも詳細な地図の無い陸地への精密な艦砲射撃が可能となる。

あとは電探で島を確認し、そこから凡その距離を算出してしまえばよい。

出港から40時間。

「提督、そろそろ変針するわ」

「了解した」

ビスマルクからの報告後、艦隊はアリューシャン列島へ進路を取る。

「無電封鎖に問題は無いな？」

「無いわ。全艦無事進路変更完了。タンカーが若干手間取ったぐらい」

「531中隊の方はどうなっている？時刻的には既に潜入しているもおかしくは無いが」

531中隊は作戦開始に先んじてアンドレアノフ諸島各島に上陸する手筈となっている。

理由は簡単で秘密裏に地形的情報や目標情報を得る為だ。

可能ならば敵物資集積所内に侵入、どこになんの物資が集積されているかまでを突き止めらる事を求めているが、流石にそこまでやるのは厳しいだろう。

他には弾着観測をし易く、敵に見つかりにくい場所を見つけ潜伏が予定されている。

水食料は余裕を持って2週間分、弾薬は各自で300発、分隊毎に新しく開発した1000発入りの弾薬箱を1つ。

それと作戦が失敗した時に備えて爆薬も。

他に観測用機材などを持って行くから、かなりの重量になる。

ここまでの量を持ち込むのには単純な話、作戦が予定通り進められるか分からないからだ。

もし天候に恵まれず、快晴が続いたらそれだけ潜伏期間は伸びる。ならば余裕持つて物資を持ち込まねばならない。

艦隊による作戦が失敗した場合は、531中隊が敵基地に侵入、爆薬を仕掛けて物資集積所を少なからず吹き飛ばすことを目標としている。

砲弾薬、もしくは燃料集積所であればやりようによっては十分な痛みを被らせる事が出来るかもしれない。

彼らに全てを任せて艦隊は囨に徹すべき、との意見もあった。

しかしそれだと敵の物資を全て焼き払えることは無理だし、深海棲

艦の物量を考えればその程度の損害は損害にならないと判断したからだ。

それで成功し、奴らの侵攻を挫くことが出来るならば今までにもやっている。

しかしそれでは効果が薄いのだ。だから艦砲射撃を実施するのだ。

「連絡無し。何があったら緊急電が入る筈だから、無いって事は無事上陸したんじゃないかしら」

「それならば良いが、彼らが上陸出来なければ作戦そのものが頓挫するからな」

艦隊は出港と同時に無電封鎖を敷いており、発信は位置を知らせてしまう為に一切行わない。

「敵潜水艦は？」

「探知してないわ。もし発見されているならとつくに電文を打たれた後よ」

「それならばいい。引き続き、対空対潜警戒」

「了解よ」

このまま何事も無く進んでほしいものだ。

八日後。

アリューシャン列島近海に到達。

アンドレアノフ諸島は目前である。

天候は雨、雲量10、海上は荒れている。

戦艦はそうでもないが、駆逐艦達は艦が小さい故に上下に揺れている。

舳先が沈み、海水を掬い上げ真っ白な飛沫を上げ、また沈む。それを繰り返している。

霧は発生していないとは言え、航空機が飛ばせず、潜水艦の視界も限定されるこの天候は、この上無い状況と言える。

敵機の心配をせずとも良いが、此方も哨戒機を飛ばせないから敵潜には細心の注意を払う必要があるが。

しかしそのまま順調に、とは行かないのが世の常だ。

「照月より入電。敵潜探知、これより攻撃に向かう、です」

「方位と距離は？」

「方位240。距離21km」

「了解した。艦隊対潜戦闘用意、艦隊各艦に向け発光信号、対潜警戒
厳」

「了解！」

ビスマルク艦上だけで無く、艦隊全体が俄かに慌ただしくなる。

敵潜水艦を発見した照月は隊列を離れ攻撃に向かった。

1隻だけでは対処が難しいかもしれない。

「菊月を援護に向けてやれ」

「了解」

菊月を援護に向かわせる。

一時間後。

「照月より入電、爆雷投下」

照月が敵潜に対して攻撃を開始した様だ。

上手いこと沈めてくれればよいが。

「照月より入電、残骸及び重油の浮遊を確認、撃沈と認む、以上です」

「良くやった。急ぎ合流、隊列に戻れ」

「提督、撃沈前に敵潜が電文を発しました。それに伴い敵無線量増、敵に悟られた可能性大です」

だろうな。

寧ろ敵艦に襲われてそれを報告しない訳が無い。

「分かった。艦隊無電封鎖解除、対潜警戒厳。敵潜発見の場合は各艦の判断により攻撃を許可する」

「対空警戒は如何致しますか？」

「普通ならば、この天候で航空機は飛ばさないが、念の為警戒しとおくように。対空対潜共に電探を付けておけ。逆探にも気を付けろ」

「了解」

「隼鷹、初梅、初雪、浦波、菊月はタンカー及び輸送船を伴い速力そのまま。その他艦は速力30ノットに増速、敵潜が集まる前に一気に方を付けに行くぞ」

正直迷ったが、ここでこのままの速力で進んでいても敵潜に囲まれて魚雷の嵐である。

ならば、足の遅いタンカーと輸送船にこの天候では直掩機を上げられない隼鷹達を護衛に就けて分離、こちらは速力を上げて一気に接近した方がいい。

艦砲射撃時は速力を最低でも10ノット以下に落とすから変わらないかもしれないが、意味はあるだろう。

「隼鷹より発光信号、『我敵潜陽動ス、偽電文発信許可ヲ求ム』」

「伝令、返信。許可する。ただし、決して自分を囮にする事は厳禁とする」

それを最後に艦隊は分離。

二時間後、第一目標であるアンドレアノフ諸島タナガ島全域を射程に収めた。

「艦隊、速力3ノット、一水戦対潜警戒厳。戦艦砲戦用意。目標、タナガ島敵物資集積所」

敵はどうやら、タナガ島、カナガ島、アダック島、カガラスカ島、リトルタナガ島、アトカ島、アムリア島に集積所を分散し作つたらしい。こちらの想定よりも遥かに多い。

リスクマネジメント、と言うわけか。

他にも幾つかの島があるがそちらには上陸し偵察した結果存在せず、と判断された。

7つの島に対して艦砲射撃を実施、物資集積所を破壊する。それと同時に敵飛行場や港湾施設の破壊も重要任務だ。

これらを破壊しておかないと、航空機のピストン輸送で物資を焼いても資材を運び込み修繕されてまた集積されてしまうし、集積所を再建されてしまう。

「提督、砲撃指定座標が送られて来ました」

「砲術、射撃諸元を砲撃指定座標に合わせ。仰角取れ。砲塔旋回始め」
「射撃諸元を砲撃指定座標に合わせます」

死神の鎌の如く、ビスマルクの主砲が動く。

ビスマルクとティルピッツの主砲塔は、他の戦艦と比べて幾らか旋回速度が速い。

だから金剛達が未だ主砲旋回中であるのに、既に主砲は向きを整え、仰角を取り終えている。

「提督、射撃準備完了です」

「全艦射撃準備完了、何時でも撃てるとの事」

ビスマルクの砲術参謀と通信参謀からそれぞれ報告を受け取る。

「……奴らに、我々の恐ろしさ、とくと味合わせてやろう」

「主砲一斉撃ち方、初発から次発撃ち方まで1分、射撃諸元修正後、射撃間隔30秒で各門3発ずつ斉射。……用意、撃エツ」

俺の合図から、一瞬遅れて巨大な砲撃音と、辺りを真っ白にするほどの発砲炎、そして重量1トンに迫る巨弾が撃ち出された。

遅れてティルピッツ、金剛、霧島、リシユリユ、ヴァンガードが砲撃を開始。

斉射だから、艦に伝わる衝撃は凄まじい。

艦そのものが反動でガクンツ！と揺れ動く。

艦同士の砲撃戦ならば交互撃ち方なのだが、動かない目標であり、しかも他にも複数目標があるから一つ一つの目標にかけられる時間が少ない。

そんな事情で斉射となっている。

各艦からそれぞれ1門につき4発、計32発が撃ち出され、全艦で見れば192発になる。

その投射される鉄量たるや、一式陸攻200機以上分にもなる。

連山であれば50機分。

一式陸攻であれば数個航空隊が合同で、連山でも機数だけでは航空隊の戦力の約3分の1に当たる。

現状、連山装備の航空隊は152機を4機1個編隊として38個編隊で構成されるが、その1機辺りの最大爆装量4000kgで考えてもやはり鉄量だけであれば約3分の1に相当するだろう。

それがただ1箇所の集積所に集中して撃ち出されるのだから、命中した辺り一帯は地面ごと抉れ返り、掘り起こされ焼き払われと凄惨極まりないだろう。

しかも対艦攻撃用の91式徹甲弾では無く対地攻撃能力が高い三式弾だ。

無事で済むはずが無い。

至近弾ですら、陸上であれば辺り一帯を吹っ飛ばすし延焼だってする。

火が燃え移るだけでも軍需物資の殆どが火気厳禁で危険なのに、それらが大量に積まれた物資集積所のだ真ん中に目掛けて戦艦6隻からの砲弾が200発近く撃ち込まれたら、どうなるかは想像に難くない。

正直過剰ではあるが、立て直されたらまずいからそれぐらいはやっておかないとならない。

少なくとも北海道から敵を殲滅するまでは修復されたら困る。

あわよくば、北海道の防衛体制が完全とは行かずとも6割ほどまでに整えられた状況までは、敵に北方戦線での攻勢意図を断念させておかねばならない。

「電文、主砲弾命中。艦隊効力射されたし、以上です」

「よし。艦隊、効力射を行う。諸元修正後、射撃指定数まで各砲門は各個撃ち方始め」

最初の斉射はどうやら集積所を直撃したらしい。

確かに霧の向こうから微かに炸裂音が聞こえて来る。

「砲撃終了、偵察隊より砲撃効果大、再攻撃の要無しと認む。これより撤収準備に掛かる、以上です」

「了解した。次目標の座標は？」

「既に送られてきております」

「よし。座標の再設定および照準を行え」

「了解」

その後、各島にある物資集積所を砲撃によって焼き払い、艦隊は進路を南西へ。

各島の偵察隊によれば、いくら深海棲艦と言えども厳しく見積もっても最低三ヶ月は使用不能、飛行場に関しては4ヶ月、港湾施設に関しては1年ほどの復旧を要するだろう、との事だ。

その報告を聞き、ビスマルク艦上どころか艦隊中が歓声に包まれた。

艦隊はそのまま北海道へ向けて進路を取ると、速力を20ノットに上げて一気に南下した。

天候に恵まれた我々は十日後、北海道沖に到着。

それと時を同じくして、海軍基地航空隊と母艦航空隊が一斉に反撃を開始。

深海棲艦は連日艦隊を殲滅せん、と攻撃を繰り返したが基地航空隊と母艦航空隊が共同で守りに徹した艦隊は、旗艦である飛龍とその巨大故に攻撃が集中した信濃、大鳳の3隻が大破をしたのみで、他は小破程度に留まった。

艦載機の損失も100機程度に抑えられており、自分たちの領域で戦えた事から搭乗員も半数以上が無事に帰還し即座に戦線復帰、残りも確かに戦死者は居たものの怪我人の大多数が早ければ年内、遅くとも来年の春頃までには戦線復帰が可能、と言う余りにも、出来過ぎているのではないかと疑うぐらいの出来であった。

艦隊同士の攻防で艦載機を擦り減らした深海棲艦に、母艦航空隊、

基地航空隊の決死の大規模攻撃を防ぐ力は到底残っておらず、先んじて突っ込んだ戦闘機隊によって空の守りは簡単に瓦解。

烈風と流星が敵艦隊の頭上を我が物顔でぐるぐると飛び回る事になった。

敵艦隊は一部を残し文字通り全滅。

残った一部、と言うのは戦艦棲姫一隻のことである。

未だ浮力を残し浮いている状態だった為に、駆逐艦に魚雷攻撃を命じたものの、主砲などの火器は沈黙していたがなまじつか耐久力が異常なほど高く、4本もの魚雷を叩き込んだのに沈む様子がまるで無かった。

どうやら火器と動力系をやられているだけで艦体としてはほぼ無傷で残っていたらしい。

そこでこれは絶好の機会である、と言うことで艦隊司令部の中代大將達と協議した結果、海軍陸戦隊の臨検に特化した第225臨検中隊を完全武装で投入。

実際艦内には多数の深海棲艦の乗組員が残っており苛烈な抵抗をされたが、どうにか自沈させる前に艦内を全て制圧。

225中隊は半数が戦闘不能に追い込まれるも見事任務を果たしてくれたのだ。

やはり降伏する存在は一体としておらず、最後の最後まで、それこそ死に物狂いで抵抗していたようだ。

ただし、戦艦棲姫の艦娘、と呼べばいいのか分からないが、艦娘と同じような存在はどうかこうにか捉えることが出来た。

一応、女性体らしいのだが扱いが分からず彼女としているが、如何なものか。

艦体に225中隊を残し、長門、クイーン・エリザベスの2隻で呉へ曳航。

その際方が一に備え周りをウォースパイト、ネルソンの2隻で囲み、三水戦が護衛に就いた。

225中隊には戦時国際法に遵守し戦艦棲姫の扱いに関しては注意を払え、とし方が一抵抗した場合は武力行使を許可する、とした。

ただ、今のところ抵抗する様子は無く、大人しく従っている様子らしい。

それらの処理が済んだ三週間後。

占領された地の奪還の為に大規模攻勢を開始。

第35特別戦車隊と第2実験戦車大隊も補充機材と人員を受け取り攻勢に参加、その攻撃力を持って先鋒を務めている。

幸いにも深海棲艦の抵抗は物資不足などにより激しくなく、撤退を繰り返すばかりだ。

順調に進めば今年中には北海道全域の奪還を成せるだろう。

第55話

北海道での反抗作戦が開始して一ヶ月。

実を言うと反抗作戦の進捗状況はあまりよろしくない。

と言うのも幾つか理由がある。

第一に予想されて居た兵力よりも敵が多かったこと。

これは単純に偵察の際敵兵力の見積もりを見誤ったことに加えてどうやら敵輸送船団は補給物資に加えて大規模攻勢に出る為の戦力の配備を着々と進めて居たらしい。

当初20万程度と見積もられて居た敵兵力はそれよりも7万以上も多く、各町などに師団規模での守備隊を置き重点防御戦術、そして7万ほどの機械化歩兵と装甲師団の遊撃部隊を以ってして機動防御戦術を取っている。

どこか1箇所へ攻勢を仕掛ければ機械化された歩兵とそれを守るための戦車部隊が大挙して押し寄せてくるのだ。

それによつて既に二度、攻勢に失敗している。

第二に正面攻勢を仕掛けている我々の兵力が敵より同等、もしくは劣っていること。

こちらの全戦力はどれだけ掻き集めても26万。本土からの応援を加味しても30万が良いとこだ。

定石であれば守備隊に対し攻撃を仕掛けるならば3倍の兵力を以て挑むべし、と言うところだがそれだけの兵力は無い。

フィリピン攻略に投入する兵力を引っ張ってくれば何とかなるだろうが、冬季装備が未だ不足していること、それだけの大兵力を支える補給を行えないことなどが原因で投入出来ない。

これでは機動防御によつて最大で10万に達しかねない敵軍守備隊相手では一点突破以外に取れる戦術が無い。

今現在、敵後方補給線に対して破壊活動を行なっているが効果が出

始めるのはもう暫く後になる。

第三に敵が新型戦車を投入してきたこと。

その数は決して多くはなく、10両に1両程度のものであるが前線においてその威力は凄まじく、長らくティーガー戦車やパンター戦車の正面装甲で弾くことが出来ていた敵弾が、此処に来てティーガー戦車の正面装甲を易々と貫通してみせたのだ。

この時はパンター戦車の機動力に物を言わせ叩いたが、問題はそうではない。

この戦車に対抗し得る戦車が前線に殆ど存在しないことだ。

確かにティーガーやパンターであれば撃破はされるが十分に戦える。

しかし前線主力であるIV号戦車とIII号戦車はそうではない。

火力、装甲共に劣っており辛うじて機動力が互角ないしは幾らか優勢であるぐらいだ。

この両戦車を配備している部隊は当初相当な恐慌状態に陥った。

その時はティーガーとパンターが応援に間に合い大損害を被ることは無かったがどう考えてもティーガーとパンターの絶対数が足りない。

しかも鹵獲した敵新型戦車を調査したところ、火力、装甲共にティーガーと同等。

機動力に関してはパンターに分があるが火力ではパンターの傾斜装甲を貫く威力を持っていると判断された。

と言うことは現状新型戦車に対しての有効な対策は無いに等しい。戦えはするが負ける可能性が十分にあり、そして前線において脅威であると言う判断が下された。

防御、火力をどうにかして底上げせねばならずこのままでは兵力的余裕のない我が軍には前線突破は難しい。

しかもここにきて敵が反転攻勢まで仕掛けてきたのだ。

このままでは前線突破どころかこちらの前線が突破されてしまう。とは言え解決策が無いわけでも無かった。

現状、ティーガーとパンターは十分に対抗出来るのだが、I V号戦車I I I号戦車は側面ないしは背面を取らないと撃破は難しい。

そこでまず提案されたのはティーガーとパンターの増産及びI I I号戦車から順次置き換えを進めることだった。

敵新型戦車は重量が42tに迫るほどでパンターと同程度の重さがある。

南方戦線の雨が降り、泥濘と化した戦場に投入するには些か無理がある。

投入しようと思えば出来るのだろうが、運用面からすれば現実的ではない。

そこで北海道に限ってだが戦車をティーガーとパンターに置き換えてしまえば良いのではないかと提案されたのだ。

確かにそれならば十分に戦えるであろうが、コストや生産数の問題がある。

現状、ティーガー戦車の月産数は全力で稼働させたとしても僅か15両であり、どうやっても間に合わない。

第一、生産数を上げるならば生産工場そのものを拡張、もしくは増設せねばならず、工場の建設から始めた場合、どれだけ短くとも生産開始までに二ヶ月は掛かる。

更には生産に必要な資材や完成した戦士の輸送を行うのに鉄道まで建設しなければならぬ。

単純に今ある工場を拡大増設するにしても、輸送能力が無ければ港まで運ぶ事が出来ないから増設新設どちらにせよ鉄道の新規敷設はやらねばならない。

パンター戦車はまだマシで、全力稼働すれば50両は生産出来る。

とは言え、北海道に展開する戦車は1000輜を超えておりそれら全てを置き換えるには今のままでは15ヶ月以上を要する。

それだけ時間が掛かってしまったら敵に反抗の機会を与えてしまう。

しかしそれ以外に有用な手立ては無く、今現在工場の新設や増設をしているのだが、満足のいく数が揃うには四ヶ月は掛かる。

そして第二案が、こちらにも新型戦車を投入する、と言うものだった。陸海軍は欧州からもたらされた各種技術を放っておくのは勿体ない、ならば少しでもいいから研究を進めようと言うことで様々な研究を進めていた。

その中には当然戦車もある。

今現在、主力として研究している戦車が二種類ある。

ティーガーIIとセンチュリオンである。

この二種は重量が現状運用している戦車よりも重い。

なんせティーガーIIは70tとティーガーより13t、パンターより25tも重い。

こんな重量、本土ですら扱いに困るほどだ。

確かに砲威力や防御力ははずば抜けて高いが運用出来ないのであれば意味が無い。

センチュリオンもティーガーより軽いとは言えパンターより7tも重く、密林の中で動かすにはパンター戦車の重量が限度であると実地試験で判明しているため南方方面への投入は難しい。

故に今までは主戦場が南方方面であり両戦車は試験目的に3輜ずつが生産されただけで試験が終われば倉庫へ送られシートを被され埃を被っていた。

一応モスボールはしてあるのでちゃんとした整備を行い必要であれば部品交換などを行なった上で戦線投入が可能ではある。

結局陸海軍合同会議において、両方の案を8:2の割合で採択することになった。

北海道や来るべきオーストラリア奪還、欧州奪還に備えて生産しておくべきであり、事実敵新型戦車は豪州や欧州に戦線が広がった場合遭遇する頻度は多くなり、そしてさらなる敵新型戦車の投入も予想されるからだ。

とはいえ今現在新しい戦車を大々的に生産する余裕は無く、既存のティーガーとパンター戦車を増産し戦線に送り込むことにした。

「提督、緊急電です！」

「どうした」

「十勝平野にて敵軍攻勢開始、帯広市街地防衛中の我が守備隊包囲さる、です！」

「連中、こちらよりも数が多く物資が多いうちに方を付けるつもりだな……」

恐らくはまだ余力のある内に勝負を決めようと言う腹積りなのだろう。

確か帯広市街地の守備には2個歩兵師団が当たって、その支援に2個戦車連隊がいたはずだ。

この戦力であれば通常なら守り切れるだろう。

それに北側と西側は十勝川と札礼川に接しているから防御がしやすい。

それ以外の場所に多めに兵力を割いて防御が出来る。

「敵兵力は？」

「包囲している敵軍は3個師団6万を数え、更に側面支援に2個師団4万が確認されているとの事です。後詰めにもう1個師団ほど確認したと」

「……厳しいな」

「敵兵力の凡そ三分の一が集結しています。後方支援部隊を除いても敵は各戦線を十分に維持が可能です」

どうするべきか。

このまま帯広市街地の防衛に固執すれば間違い無く友軍は全滅するだろう。

「撤退は出来ないか？」

「既に全包围されており困難かと。撤退するにしてもどれだけの増援を割けるか分かりません。下手に増援を送れば手薄になった場所を突破されてしまいます」

参謀が地図を棒で指し、説明する。

「このまま、見捨てるわけにもいかん」

「では、どうなされますか？」

「制空権は維持しているか？」

「戦線上空の制空権は今現在のところ拮抗状態です。掌握は出来ておりません」

「制空権が拮抗しているならいい。空中投下で補給を行う。それと空挺部隊も投入して増援としよう」

我が軍お得意の空中投下による補給を行いつつ、陸路での増援が難しいならば空路によって増援を送ればいい。

「分かりました。深山に出撃を命じますか？」

「いや、連山を使え。ただでさえ輸送船を引き抜いて輸送量が足りないのに今、深山を南方方面への輸送任務から外す訳にはいかん」

「分かりました」

「最初に物資を落としてから次に空挺部隊だ」

「了解しました」

ビスマルク艦上で指示を出す。

それについて出されたのは所謂合戦飯であった。

飛龍では合戦飯は塩味の効いた握り飯と味噌汁に沢庵であったがビスマルクでは握り飯の他にパンが出ることもあるし汁物も味噌汁でなくアイントプフと言う野菜スープが出る事もある。

それにソーセージが偶に出る事もあった。

艦、と言うより元の国によって合戦飯は違うらしい。

さて、空挺部隊に関する話をしよう。

空挺部隊は正式名称を挺進隊と呼び、各挺進隊は連隊規模で編成されている。

今現在、6個挺進隊が編成されており、更に4個挺進隊が訓練途上である。

実はフィリピン攻略に投入する予定だったのだが北海道侵攻によってその予定は延期されていた。

フィリピン攻略を考えるならば投入は避けるべきであろうが、そんなことは言っていない。

連山は輸送用に改造すれば最大で五十人の兵員を乗せて運ぶことが出来る。

他にも4t分の物資を運ぶことも可能だ。

まあ積載面積の関係でそれよりは少なくなるだろうが鉄道輸送を使えない事を考えると輸送量は馬鹿に出来ない。

最大積載量でも駐屯する飛行場がある近畿地方から北海道へ飛ぶことができる。

最悪、燃料不足に陥ったら千歳飛行場などに不時着してしまえばいい。

それを活かさない手は無い。

連山の初任務が輸送任務とは思っていなかったが、まあ良いだろう。

1個挺進連隊の輸送に50機必要だが、今現在連山は生産を続けて400機にまで数が増えている。

帯広市街地の中に空挺降下が可能な面積があるのが帯広飛行場くらいしかない。

となると連隊ごとでしか送り込めないだろうな。

街中への降下は建物や瓦礫と言った障害物への衝突の危険があるからやるべきではない。

「帯広飛行場は確保しているな？」

「はい、帯広飛行場の周囲1kmは我が方のものです」

「着陸は出来そうか？」

「出来なくはないですが、敵部隊が間近にいることから離陸は困難、着陸後は機体の破棄が前提になります。それに第一陣以降は着陸不可となるでしょう」

「ならば予定通り空挺降下によって増援を行う。降下地点は帯広飛行場に設定、緊急時は帯広競馬場でも構わん」

ビスマルク艦上で様々な報告が上がってきては次々に指示を飛ばす。

休む暇など無く、朝から晩まで指示を出し続ける。

挺進隊は5個連隊を投入し、残り1個連隊を帯広包囲戦終了後の作戦に投入する予定だ。

それぞれの連隊毎に50機の連山に分かれて搭乗。

更にその支援を行うために16機と迫撃砲や野砲などの重装備を運ぶ為に4機の連山を投入する。

護衛には海軍から36機、陸軍から32機を出すことになった。

翌日、各空母から4機ずつの烈風が飛び立ち制空権を一時的に確保。

まず最初に連山による敵包囲部隊に対して爆撃を実施。

爆撃から二十分後、第一陣の降下が始まった。

5機編隊2列が先頭を務め、4機編隊8列がその後ろを進む。

編隊幅は最大で230mほど。

飛行場周辺は切り開かれているから降下からの着地は用意だ。

元々ここには陸軍第48飛行戦隊と第61飛行戦隊、それと第98

歩兵師団司令部、98師団所属第355歩兵連隊と第54砲兵大隊、

第63高射大隊が置かれていた。

周囲1km四方には柵と壁、鉄条網で囲われており更には市街地側の反対にある森は幾らか見渡しがし易いように切り開かれている。

しかしながら深海棲艦侵攻に伴い撤退しており、帯広奪還後は前線飛行場として活用するべく整備を進めていた。

飛行場周辺には防御陣地が構築されており今現在、防御陣地として十全に能力を発揮している重要な前線基地である。

この増援を送り込む作戦は、航空支援から爆撃、包囲網突破までを含めて「る号作戦」とされた。

まず帯広飛行場全面部に展開する敵部隊への圧力を加え降下を少しでも楽にするべく第35特別戦車隊が展開する。

第2実験戦車大隊は引き続き十勝平野最前線にて敵機甲戦力に対する遊撃任務を行う。

第一陣から第四陣に渡る空挺降下により兵員を送り込み、その次に敵の電波妨害により断絶気味である通信網の確立を行う。

随時、空中投下により物資補給を行いつつ、帯広市街地で防御戦闘を行う。

輸送船団からの補給の無い敵は、今ある物資のみしか無く最終的には長い間包囲を出来ない筈だ。

それに加えて包囲への補給も航空攻撃などによって妨害する。

こちらの予想では厳しく見積もっても2ヶ月で敵は補給切れを起こし始めるであろう、としている。

その間、友軍に対して補給せねばならない物資量は武器、弾薬、燃料、水、食料を引括めて、戦車連隊含め一日辺り最低50tは必要になる。

それを維持するには2t分の物資を積んだ連山25機が連日補給を行わねばならない。

余裕を持つて30機を充て、足りなくなった場合や撃墜機が出た時に備えて予備に20機を待機させておく。

これだけあれば、小火器の弾薬は勿論、戦車、重砲の砲弾も十分に運ぶ事ができる。

単純計算だが、2t分の重量換算をするとIV号戦車用砲弾を1400発は運ぶ事が可能だ。

とは言え積載面積の関係上、そこまでの発数を運ぶ事は出来ないだろうが、兎に角それだけ沢山運べると言う事だ。

「提督、時間です」

「これより、る号作戦を開始する」

その言葉を皮切りに、作戦が始まった。

紫電改とBf109が制空権を奪取する為に突っ込む。

次に爆撃機による爆撃が開始された。

砲兵隊や流星も攻撃に参加し、1時間たつぷりと砲爆弾の雨を降らせた。

それらの準備攻撃が終わると同時にBf109に守られた連山が編隊を組み侵入する。

先ず最初に各種物資や重機材を投下していく。

次に挺進隊の兵士達が搭乗している連山が降下地点である飛行場上空に差し掛かると、兵士達が次々と飛び降りる。

落下傘が次々と開き、速度を落として開けた飛行場敷地に降り立つ。

五点着地を行って衝撃を和らげると共に先ず最初に武器の点検を行う。

彼ら挺進隊が装備しているのは通常の歩兵連隊と同様でStg44を主装備としている。

落下傘は適当に丸めて回収し次に降下してくる挺進隊の邪魔にならないようにしておくのだ。落下傘は通常敵地への降下を行なった場合破棄するのだが今回は回収し、恐らくもう1ヶ月ほどで降雪、積雪が始まるであろうことを考えて防寒素材として使用することになっている。

簡易的なテントなどをこれで作ることも出来る。

MP40は装備しておらず、殆どの兵士がStg44を装備している。

そして通常の歩兵連隊とは違って全員が拳銃を装備している。

分隊につき九九式軽機関銃1挺を装備しており、パンツァーシュレックも1門。

とは言え軽機関銃とパンツァーシュレックは重機材として纏めて最初に投下されている。

他には弾薬、手榴弾など。

装備に異常が無いことを確認し、次に身体に異常が無いかを確認する。

次に重機材が包まれた木箱を開封し先ず最初に通信機器を引つ張り出してそれぞれの小隊は通信機を使って中隊司令部、大隊司令部、連隊司令部へと順繰りに通信を確立させた。

それが終わると小隊毎にそれぞれ指示された防衛区画へ各種機材や予備の武器弾薬を持って移動を開始した。

軽機関銃、パンツァーシュレックを担当の兵士が担いでいく。

予備の武器弾薬は軽機やパンツァーシュレック担当の兵士以外が全員で分担して持ち、必要ならば往復して持っていく。

支持された区画へ到着すると、連日攻撃を受けておりすぐさま戦闘が開始された。

「提督、第一陣、無事損害無く降下完了しました」

「分かった。引き続きる号作戦を実施せよ」

「どうやら第一陣は上手いこと行ったらしい。」

「作戦はまだまだ始まったばかりであり、気は抜けない。」

「提督、食事よ」

「ん、ああ」

「少しは休んだらどうなの？またハウシヨウに怒られるわよ」

「いや、挺進隊が全て降下し終えるまでは寝ていられない」

「仕方が無いわね、分かったわ。でもそれが終わったなら休んで貰うわよ」

「ああ。心配してくれてありがとう」

「いいのよ」

「どうやらビスマルク艦上でも俺は休め休めとせつつかねければならないらしい。」

「その日の内に3個挺進隊が降下を完了した。」

「それぞれの連隊は無事降下を終え、指示された区画で防御戦闘を既

に展開しているとのことだ。

翌日、早朝から残りの2個挺進隊が降下を初め、全挺進隊が降下を終えた。

その後、予定通り連山による補給物資の投下が連日行われ、防衛線の維持に成功。

1ヶ月後、雪が降り始め北海道と言う厳寒の大地が牙を剥き始めた。

第56話

十一月。

平時ならば雪が降り始め子供達がはしやぎ、ウインタースポーツが花咲く頃合いであろう。

しかし今は戦時である。

連日連夜本土は敵爆撃機の爆撃に曝され、荒廃の一途を辿るばかり。

国の空には敵の爆撃機が飛び、祖国への狼藉を阻み鉄槌を下すべく迎撃機が飛び回る。

それだけならば、まだ多少は秋、冬と言う季節を楽しむ事が出来たであろう。

しかし最悪な事に敵に北海道への侵攻を許している。

当然そんな中で子供がはしやいだり、ウインタースポーツをやる余裕など欠片も無い。

食糧生産の半数以上を担っていた北海道が戦場になり、このままではそう遠くない内に最優先で食糧を送られている軍ですら、食糧不足に陥る。

と言う事は、民間では既に食糧不足が顕在化しつつある。

厳しい話だが、軍でも沖縄、南方方面での食糧の現地生産、例えば米やサトウキビ、野菜類の自活を試みているがどうやっても南方方面軍を全て賄うほどの生産量には到底足りない。

南方方面への圧力も以前より遥かに増大し、小規模ながら空母を擁する機動部隊がカリマンタン島沿岸に出没し沿岸部に空襲を仕掛けている。

戦力的には空母2隻と随伴艦が20隻ほどと南方方面軍が有する航空戦力を考えれば脅威たる脅威では無い。

やはり南方方面での我が軍が展開した作戦での損害が相当尾を引

いているらしく、何年も前の事だと言うのに戦力回復は芳しく無いらしい。

陸軍の百式司令部偵察機によると、空母自体は推定で3〜4隻。スラウエシ島を前哨基地に、母港は我々が攻撃を計画していたバン・デーメン湾、正確にはポート・ダーウィン。

バリクパパン第二飛行場に進出した連山36機を有する陸軍第121飛行戦隊がジャワ島経由で強行威力偵察を行った結果、判明した。

現時点で、陸軍が1隻を撃沈しているが、それでも最大で4隻が稼働状態にある。

確かに空母の数は少なく、我々が機動艦隊を出せば完膚無きまでに叩く事は出来るが、現状では北海道の敵をなんとかせねばそれは無理だ。

仮にヲ級以上が4隻となった場合、一筋縄では行かない。

数の差で押し潰す事は可能だろうが被る被害は馬鹿にならない。

それ相応以上に策を用意し、予備の策を幾つか用意しておかねばならないほどには驚異である。

しかし真に脅威たる所以はそこではない。

敵空母が脅威たり得るのは陸上基地とは比べ物にならないほどの圧倒的な機動力、その神出鬼没で何処にいつ現れるか分からない。

その2点だ。

なんせ空母に全速力で移動されたら衛星なんかないから補足するには地道に探すしかない。

攻撃隊を出した後ならば、航続距離を考慮してある程度の移動範囲を絞ることが出来るがそれでも正確な居場所を突き止めるには至らない。

索敵に関しては地上の電探基地と航空機による機上電探と目視による索敵網を張り巡らせてはいるのだが、それも十分とは言い難い。

それに夜間は機上電探の配備が遅れている事もあって地上の電探基地頼りになってしまいうから確実に穴が出来る。

それを突いて艦載機を十分な攻撃範囲に収めて太陽が昇ると同時

に攻撃を仕掛けてくるのだ。

だから我々が攻撃に勘付いた頃には敵攻撃隊は間近、艦隊も別の場所に移動している。

航空機にとって200kmや300kmなんて距離はほんの十数分程度。

電探の性能的に、敵編隊を捉えてから迎撃をすると猶予は殆ど無い。

敵重爆ならば、昼間だろうが夜間だろうが物量は正義であると嫌と言うほどに実感させられる数で押し寄せてくるものだから探知自体は機上電探だろうが陸上電探だろうが、かなり早い。

B-17やB-24と言った重爆による爆撃も激しさを増し続けている。

バリクパパンに4つある飛行場も三ヶ月前の大空襲で一時的にバリクパパン第一、第三、第四飛行場が使用不可能に陥った。

幸いにも第二飛行場と近郊のサマリンダやボンタンの飛行場は損害軽微であったから事が最悪な方向に転がらなかったが、もしそれらも使用不可能になっていたらバリクパパンの精油所や採油地帯が丸々壊滅し、軍に限らず燃料事情が相当逼迫していた。

あそこには、石油の採掘施設だけでなくそれを火力発電などに用いられる天然ガスから艦艇の燃料である重油などの各種石油精製物にするための精製施設もある。

態々原油を日本本土へ持って来ずとも現地で必要になる、航空燃料や艦艇用重油、飛行場や道路の舗装に必要な残油を精製し賄う事が出来る。

だからバリクパパンやパレンバンは直接十分な燃料を供給することが出来るから、駐屯する機甲師団や機械化歩兵師団、航空隊は十分な訓練を行える。

特に航空隊は連日の深海棲艦の爆撃機を迎撃したりその護衛戦闘機と戦うから陸海軍の中でも本土防空を担う震電改を装備した航空隊と並ぶ精鋭揃いだ。

下手をしたらそれを凌ぐかもしれない。

今はブルドーザーなどの土木用重機をフル稼働させ、被害を被る前までと同じ程度に復旧しているが、地上破壊された航空機の補充は済んでいない。

南方方面に限らず、土木工事などには重機を用いている。人力よりも早いし、何より掛ける労力を遥かに減らせる。

単純な話だが、1000人の工兵がいたならば、1000人に重機を行き渡らせ作業させた方が遥かにいいのは誰だって分かる話だ。

実際は一人一台なんて無理なので、小隊ごとに1両とか2両だがそれでも作業効率はあるまでも無い。

人が一週間掛けてやるものを、重機を使えば一日で終わるからな。しかし飛行場が復旧したとしても失った航空機は簡単には補充出来ない。

震電103機、疾風98機を地上破壊によって失ったのだから早々簡単に補充出来る数では無い。

幸いにも、搭乗員や整備員を含めた兵士達は防空壕に逃げ込み被害は少なく済んだから良かったものの、機体が無くば職務を全う出来ず、と言うわけだ。

そんなことが続けば将兵達の指揮にも影響が出るし、何よりフィリピン、更にはスラウエシ島以东の奪還をするに当たってもし、作戦前に飛行場や港湾施設が破壊されては作戦そのものを延期、下手をすれば再び作戦を練り直す為に中止になりかねない。

そうなることを防ぐために、バン・デーメン湾を攻撃する作戦を企てていたのだ。

話を北海道防衛戦に戻そう。

やはり一ヶ月前と変わらず、劣勢であるのは我々だ。

動員出来る兵力も足りず、しかもその内の幾らかが脱出も出来ない包囲戦の最中。

敵は極少数ながら新型戦車を投入してきて我が陸軍の対戦車戦能力が圧倒的に足りていない事も見せつけられた。

幸いなのは各戦線や包囲下にある師団全てに対して十分とは行かずとも防衛戦を続けることが出来るだけの、最低限の補給と攻勢に備えて物資備蓄を少しずつながら行っている事と、地の利などを活かして必要ならば撤退も止むなし、戦線を後退させる覚悟で被害を最小限に食い留めていることだろう。

どちらかが駄目だったならば、今頃北海道は防衛線を食い破られ深海棲艦の手に落ちていたに違いない。

既に降雪が始まり、瓦礫の山になった市街地や広い平原の撃墜された敵味方の航空機の残骸や、砲弾痕、爆弾痕と言った戦争を感じさせる物を雪が全て覆い始めている。

そしてその上に、更に戦争の痕が毎日積み上がっている。

「提督、現在の補給状況ですが――」

「提督、輸送船団が室蘭港と苫小牧港に到着しました――」

「敵が包囲を強めており、現状の航空兵力では補給に支障が――」

連日、様々な報告が上がってきては、それに対応する毎日だ。

冬季装備は辛うじて、若干足りないながらも最低限必要な数は揃えられた。

特に歩兵用の冬季装備、防寒具などが予備を用意する時間は無かったが兎に角全員に行き渡って良かった。

戦車はエンジンの熱があるからそれを回せばまだマシンだが、歩兵はそうも行かない。

暖房器具をそこまで大量に送れないから、結局現地で焚き火を起こすか防寒具で凌ぐしかない。

凍死で兵士を死なせるなど、俺からしたら最悪以外の何物でもない。

暑さより寒さのが死人が出るのだ。

他には燃料が凍らないように不凍液などを優先して生産したから車両用の冬季迷彩塗料が明らかに不足している。

そこはまあ、雪を塗りたくったりして凌げるからこれから冬季装備と並行して生産量を増やせば良い。

今優先すべきは武器弾薬水食料、それと冬を越す為の暖房器具をもっと送り込むことだ。

「ああ、寒い……っ」

艦橋に詰める一等兵が小さな声で震えながらそう漏らす。

実際、まだ十一月半ばだと言うのに艦隊が行動している十勝平野沖は雪が降るほどに寒い。

しかも強風によって波は高く、駆逐艦は流木と見間違うぐらいには荒く揉まれている。

戦艦故にどつしりとした安定感はあるものの、やはり荒波に揺さぶられ上下に揺れているビスマルクは、舳先で数mは余裕であろう波を被り砕き、白い飛沫をあげて航行している。

元より北大西洋や北海などの、ここよりも寒さ厳しい戦場で戦っていたビスマルクを始めとした欧州組の艦娘や乗組員達からすれば慣れっこなのだろう。

平然としている。

寒さで窓に付いた海水が凍り始めている。

これでは視界が悪い。ワイパーも凍り付いて動かせそうもない。

「艦長、湯を沸かして窓を拭いてくれるか。これじゃ、何も見えん」「了解しました」

長年ビスマルク艦長を務めているエツケハルト・フィツシャー大佐が生来の厳つい顔をしながら頷く。

カイゼル髭を生やしているから余計に、初対面では厳しい印象を受けるだろう。

接してみれば確かに厳格だが、ユーモアある、平時ならば好々爺と

までは行かなくとも中々に親しみやすい人物であるに違いない。

普通ならば艦長職などの士官職は二年ほどで、長くても三年で入れ替わる。

しかしながら士官を育てるのには下士官とは違い、数年は掛かる。新任の士官に司令部要員などの重要職を任せなければならぬ。らしいには陸海軍共に人員不足が激しい。

やはりと言うべきか、沖縄と南方方面作戦での損失が未だに大きく響いている。

航空隊への損害もそうだが、艦の乗組員への被害も相当だった。

あれらの戦いは確かに成功し、戦略的意義はあったものの、その後の作戦を行うのに十年程度の時間を要しなければならぬほどには、酷い戦いだった。

海軍はまだマシな方で、陸軍は沖縄奪還の際に戦闘で師団長クラス中将が当たり前に死ぬほどの激戦に次ぐ激戦であった。

予備兵力が無く、損耗した師団を交代出来ずそのまま作戦を行わなければならなかったと言うのも大きな原因であるが、やはり投入した師団数の内、たつた二人しか師団長が生き残れなかったと言う事実は衝撃、だなんてものではない。

はつきり言って異常である。

南方方面作戦では師団長クラスの戦死こそ無かったもののやはり小、中隊長レベルでは戦死が相次いだ。

シヤングルと言う、足を踏み入れたことのない地での戦闘に加え、道から一步外れればどこか分からなくなるほどの密林でゲリラ戦への対応、と言うのも損耗が大きくなった大きな原因だ。

しかも今現在も貴重な航空機搭乗員達や北海道と言う地で損耗が続いている。

ただし、それらの10年と言う期間は全くの無駄だったと言うわけではない。

新任の士官達だけで無く、兵士達に密林戦や対ゲリラ戦、市街地戦の十分な訓練と経験を積ませることが出来たし、航空隊だって損耗を

最小限に抑えながらエースパイロット、と呼ばれる腕利き達が勢揃いしている。

南方方面の奪還に成功した島々には地上を走る鉄道を守るべく分厚いコンクリートと、土が被され艦装された鉄道網が縦横無尽に駆け巡り物資兵員の輸送が迅速に行えるように出来ているし、いざ上陸を受けた場合に備えて相互支援が可能な様に無数のコンクリートで構築された防衛陣地がある。

地下鉄はなんせトンネルを何千kmにも渡って掘らねばならないし、そうなる何十年掛かるか分かったものではない。

雨が良く降るからメンテナンスコストの面から考えても割くことのできる人員も無いから現実的ではない。

飛行場はあちこちにあるし、港だって十分な広さや設備を備え、採油施設、精油施設を整備することも出来た。

戦闘艦艇こそ増やすことは出来ないが、輸送船の数は1500隻を超える。

犠牲は多かったが、決して無駄では無かったと、そう断言出来る。

「しかし、一昨日からこの調子だと流石に参るな……」

「気象班の予想では、明日の深夜頃には雪は止むようですが風は暫く吹いたままだそうです」

気象班の腕は良く、その報告は信頼出来るだろう。

軍事作戦において気象と言うのはかなり重要だ。

誰もが嫌がる雪や雨も場合によっては絶好の作戦決行日和になり、それらの予報があれば何時迄にどんな装備をどれだけ揃えれば良いかが分かる。

戦争をするに当たり、何より重要視すべきはありとあらゆる情報だ。

正しい情報があればあらゆる物事に対する策を練ることが出来るからな。

「兵達に何か不調は？」

「艦外勤務の兵士が危うく低体温症になりかけたこと以外には問題ありません」

「そうか、それは災難だったな。温かいお茶、とは行かないが湯を沸かして飲ませてやれ。必要なら暖を取るために風呂を沸かしても構わん」

「了解しました」

この寒さは、本当に厳しい。

海軍にも防寒具は支給されているが、海の上を吹く突き刺さるような冷たい風や、場合によっては海水を被らざるを得ない艦外勤務者からすれば気休めにもならないだろう。

艦橋も扉などで密閉されているが、周りは全て金属だ、暖房があったとしても温度を奪われる方が早く、寒い。

今も参謀長は答えて指示を出しながら寒さで震えて時折手に息を吹き掛けている。

「提督、珈琲が入りました」

「ありがとう。ここにいる全員に振る舞ってやってくれ。他の者には言うなよ、羨んで暴動を起こされたら堪らんからな」

烹炊係に言つて、俺が持ち込んでいた珈琲を淹れさせて艦橋にいる面々に振る舞う。

人数が人数だから味は薄い、無いよりは遥かに良い。

一口含むと、寒さで冷えた舌が火傷したように熱く感じる。

しかし身体が温まる。

少なくとも、明後日までは我々艦隊が大きな仕事をする機会はない。

これだけ風が吹いて雪も降っているのは陸地に近づいての艦砲射撃も流されて座礁したりする危険があるから出来ないし、航空機も飛ばせない。

航空機を飛ばせないのは相手も同じだから、警戒するとすれば潜水

艦だが、此処まで波が激しいと攻撃はしてこないだろう。

したとしても、魚雷は狙いから逸れるし下手をすれば信管が作動して目標に到達する前に吹き飛ぶ。

それから暫くすると、波がより激しくなった。

船酔いしないのが不思議でならないが、しなくて良かったと喜んでおこう。

「固定するものはしっかりと固定しておけ。空母は艦載機の固定を再確認するようにな」

「既にやらせております」

「そうか、ありがとう」

しっかりと動く物は固定しておかねば、艦内はスクランブルエッグよりも良く混ぜられて、それは酷い有様になるだろう。

そんなになったら戦うどころではない、最悪艦が沈む。

二日後。

波は未だ高いものの漸く天候が回復した。

艦載機が飛ばせないほどではなく、艦隊上空には直掩の烈風と対潜警戒用の流星が飛んでいる。

「艦隊の状況は？」

「艦隊は襟裳岬南東150kmを遊弋中、今現在問題はありませぬ」「陸軍は？」

「降雪によって補給路が断絶気味です。線路の上に降られては列車も走れません。除雪を急いでおりますが、全体を満足に稼働させるには

数日掛かるでしょう。道路は舗装されていないので、もし気温が上がれば泥濘と化します」

「取り敢えず、早急に鉄道を使えるようにしてくれ。これ以上は航空機の補給を頼れない。雪が溶けて道路が使えなくなるのを防ぐ為に、穴あき鋼板を多く手配しておこう。あれがあれば雪の上でも幾らかはマシンになる筈だ」

穴あき鋼板とは、建設現場などの足場に使われているやつを軍用に大きくし、繋ぎ合わせて丸めてあるものだ。

想像しやすいのは風呂の蓋の、丸められるやつの穴が幾つも開けられているやつだ。

これが作られた切っ掛けは、元々上陸作戦などで砂浜にタイヤを取られないように金網を敷いていたのだが、二枚だとうやつても物資を満載しているトラックでは場所や場合によつては沈んでしまうと言うことがあった。

だから何枚も重ねて使わねばならなかったのだが、それを改善するために開発された。

効果は十分で、砂浜だけではなく泥の上や、それこそ必要になれば簡易的な飛行場の滑走路の役目まで担えるほどだ。

冬季戦に備えて、生産数を増やしてはいたが見通しが甘くこの様子では足りそうもない。

生産自体は鋼板に穴を開けて繋ぎ合わせるだけなので簡単だが、道路を全て覆うのは現実的ではないにせよ部分部分で使うことを考えてもやはり足りない。

幾つもの報告に対し、それぞれに指示を出していく。

四日後。

連日連夜の帯広市街地に対する攻勢を凌ぎつつ、一日辺りに必要な物資の投下を終えたと報告を受け取り、交代で昼食と休憩、仮眠を

取っていた時のことだった。

その時俺は、中々休息を取らない俺に業を煮やしたビスマルクが鳳翔へ報告し、懲りない奴だとお叱りを喰らい自室で軍医に見張られながら仮眠を取っていた。

一人にするとこそそこそ休息を取らずに仕事をするからと、見張りが付くのが当たり前になってしまったのだ。

なんとも情けない話であるが、自らの行いが招いた結果である。

そんな時であつた。

ドアをノックすらまどろっこしいと言わんばかりに勢い良く開け放たれる。

艦内と言えども中々に冷える冬の洋上は、小さな自室を一気に冷気で満たす。

別に咎める必要は無い。

こうして伝令の兵士が慌てて入ってくると言う事は、何か重大な事態が起こったということである。

ならばそれにめくじらを立てても仕方が無く、怒鳴ってはいち早く情報を伝えようと駆けて来た彼が不憫である。

実際、彼の顔色は青く、余程の事態であることは報告を聞かずとも分かることだ。

「どうした、そんな慌てて」

「本土より緊急電！」

「読み上げろ」

取り敢えず、何時も通りに声を掛け報告するよう促す。

そして、彼は大きく少し震えた声で言った。

「関東にて巨大地震発生、関東壊滅！以上です！」

報告を受けた後、伝令に走って来た兵士にまず、

・陛下と中代大將達を始めとした陸海軍司令部要員の安否確認

・該当地域の陸軍部隊は早急に救助活動を始める事

・鉄道、道路等輸送インフラの早急な確認

・陸海軍の飛行場の被害状況

など、幾つかの指示を出してから制帽と上着を引っ掴んで艦橋まで走った。

「提督、ご報告は受け取られましたか？」

「ああ、通信科の兵が走って伝えに来てくれた。状況は？」

「未だ情報収集が始まったばかりですので、全く詳しい事は申し上げられません」

山田参謀長がはつきりと、分からないと言う。

分からなければ分からないと、取って回った言い方や憶測混じりの情報を言わずにはつきり伝えて来るところは彼の実に良いところであり、参謀長に任命した理由でもある。

確かに憶測を立てる事も重要であるが、それは信用出来る情報がある程度揃っている時のことである。

それすら全く無いのにただ憶測を並べ立てるのは、フェイクニュースなどと大して変わらない。

ならば分からないなりにきっぱりと分からない、と言われた方が惑わされずに済む。

「分かった。現地との通信に問題は？」

「辛うじて確保されております。通信の復旧を急がせておりますので明日には問題無く行えるでしょう」

「工兵を動員して、第一に飛行場、第二にインフラを優先し修理させるようにしてくれ。このままでは陸路が駄目だった時に空路で救援物資を運べなくなる」

「提督、三航戦を被災地に派遣しては？」

「ふむ」

「今現在、三航戦を始めとして第一護衛艦隊の一部が交代で整備を具

で行っております。彼らにこちらへ戻ってくる際に輸送船を伴って救援物資と陸軍兵士を送り届けさせては？」

「なるほど……。よし、そうしよう。整備に掛かる日数は？」

「全艦が整備を終えて出港するまでにはあと四日は掛かります」

「構わん、今すぐに輸送船に救援物資の積み込みを始めさせて、三航戦の整備終了次第輸送船を伴い被災地へ向かい、送り届けたら艦隊に合流せよと伝えろ」

「はっ」

結局、三航戦に加えて第一護衛艦隊の海鷹、千代田、長門、日向、那智、愛宕、鬼怒、天龍、東雲、浦波、狭霧、有明、海風、江風、沖波、更にあきつ丸を加えて共に派遣されることとなった。

輸送船は10隻を数え、それぞれに港湾施設が使えないことを予想して大発と小発を1艇づつ乗せることとした。

三日後。

被災地の偵察部隊や先んじて派遣された偵察隊によつて様々な情報が収集され、丸二日経つた後に被害を徐々に把握出来るようになった。

被害は文字通り関東壊滅と言つて差し支えなく、インフラは全地域に渡つて寸断。

被災者は600万人を超える。

死者行方不明者も相当な数で、未だ把握しきれないほどである。

幸いにも津波は発生しなかつたらしく、それでの死傷者は居ないらしいが、代わりに火災があちこちで発生してそれによる死者が相当多いと予想された。

陛下を始めとして中代大将以下陸海軍司令部要員は無事が確認されたが、地下司令部の入り口が半壊し閉じ込められてしまった為に緊急救助が行われている。

地下司令部に併設された生産工場は念の為、地下工場の安全が確認されるまでは稼働停止となった。

地域の飛行場はほぼ全てが程度の差はあれど損害を負っており、陸軍工兵隊が不眠不休の復旧作業を行っている。

既に軽微な損害で済んだ飛行場は稼働を再開しており、防空に加えて手隙の連山や南方方面に配備された連山に変わり内地へ送り返され解体を待っていた一式陸攻が急遽復帰、救援物資を運び込んでいく。

陸路については寸断状態、橋なども落ちたりと交通インフラは壊滅したと言っている。

こちらでも工兵隊が交代で不眠不休の復旧作業を行なっている。

現地部隊は各地で救助活動を地震発生当初から開始しており、人手が足りないから急ぎ増援を、とせっつかれているが交通インフラが使えなくては送り込めない。

徒歩による増援も送っているが、やはり時間が掛かる。

三航戦以下については明日の0900には出港出来ると報告が上がってきた。

輸送船も積み込みを終え、出航を待つばかりである。

四日後。

今は夜中の13:00を過ぎた頃だ。

不眠不休とは行かず、艦橋要員、司令部要員から各部の兵士全員が現在交代で休憩を取っている。

三航戦は昨日、既に被災地に支援物資を送り届け、一昨日の内に艦隊に向けて出発した。

早ければ明け方ぐらいには合流出来る筈だ。

今の時間は俺も休まねばならないのだがどうにも色々と考えてしまつて寝付けない。

艦橋に上がると、十人ほどの下士官とフィッシャー艦長が詰めてい

た。

「閣下、どうされましたか？今はご休憩のお時間の筈では？」

「いや、どうも寝付けなくてな。どうだ、様子は」

「これと言って変わりありません」

フィツシャー艦長が俺に気が付いて敬礼して出迎えてくれる。

敬礼はどこかの部署に上級者が現れた場合、その部署の代表者が行う。

態々全員が敬礼をする必要が無いからだ。

艦橋の椅子に腰掛け、幾つかの報告書と地図を見る。

報告書にはこれと言って特筆すべきものは無かったが、俺が対応出来る物は対応しておく。

地図には陸軍がどこにどれだけの部隊が展開しており、どれだけの敵兵力と対峙しているかなどが事細かに書かれている。

やはり全戦線で圧力が強くなっている

帯広市街地は完全に敵の包囲下にあるが、今すぐに陥落すると言う事は無さそうだ。

補給も万全とは言えないが、かと言って最低限の必要量を満たしていない訳でもない。

鉄道と道路が積雪で使用不可になっているから、連山による空輸で輸送を行わねばならなくなった。

数日後には解決するだろうが、少なくともそれまでは連山に頼らなければならぬ。

しかしかと言ってこれ以上連山頼りの補給を行うのも難しいのが現状だ。

連山には他にやらねばならない任務もある。

これ以上補給に投入出来る連山を増やせないのだ。

今ですら敵軍への爆撃と、補給の為に1日に飛行場と前線を何回も往復して、搭乗員や整備科の兵士達がてんてこ舞いで過労死寸前なのにこれ以上となれば機体、搭乗員、整備兵共に破綻する。

だから早急に陸路での補給を安定させる必要があるのだ。

それでも各戦線や帯広市街地を防衛している各部隊に必要な1日

辺りに必要な50〜60tの物資は確実に輸送出来ている。

他にも、どんな物資がどれくらい足りないだとか様々な報告が多数上がってきている。

それらに対し、必要な対処を指示した命令書を書く。

大地震への対応も行わねばならない。

これから先、救援物資を送り込む手筈を整えたりあちこちの本土駐屯部隊からどれだけの災害派遣の兵士を送り込むように命令するかなど、挙げればキリがない。

中代大将達がまだ救出されていないから、指示を出せるのが俺しかないのだ。

もしこのまま大将達に怪我などがあって指示を下せない状況になったならば、俺が指揮を取り続けるし引き継げるのであれば中代大将達に被災地対応を指揮してもらい、俺は戦争の指揮に専念する。

被災地への対応と戦争指揮を同時に熟るほど、俺は出来た人間では無い。

「少しお休みになられては？」

「そう思ったんだが、熱中していたら目が覚めてしまった」

どうも何か物事に集中すると眠気が消えてしまうらしい。

艦長に声を掛けられて3時間も経っている事に気が付いた。

軽食として二つのサンドイッチとお茶が傍に置かれていた。

恐らくは艦長であろうが、はたまた烹炊長が気を利かせて作ってくれたのだろう。

中身は葉野菜一枚と焼いた薄いベーコンが一枚のものだが、時勢を考えれば随分な贅沢品である。

噛み締めて味合わねばなるまい。

「艦長も食うか？」

「良いのですかな？」

「ああ、楽しみは独り占めするものでは無いからな。共有してこそだ」

「では、有り難く」

「皆の様子は？」

「やはり気温が低いので、活動が思う様には行きませんな。低体温症などの危険がある故、短時間で見張りなど艦外勤務は交代せねばならないのが、場合によっては十分な休息も得られ辛い状況ですな……」

「せめて、風が止めば良いんだがなあ……」

「確かにそうですね。ですが、閣下もご自愛なさって下さい」

「分かっているとも」

そう頷くが、艦長は訝しそうに俺を見て言った。

「……私はホウシヨウ殿に怒られるのは勘弁ですぞ」

「なんだ、共犯だろう」

「その時は私は逃げさせて頂きます」

「なんだ、酷いやつだな艦長は」

はっはっはっ、と笑いながら後ろ手に手を組んで髭を震わせる。

「私は海軍一恐ろしい女性に怒られたくはありませんのでな」

「なんだ、鳳翔はそんな風に思われているのか」

「ええ、なんと言つても実質的な軍のトップである閣下を何時も叱つ

ておりますからな。しかも海軍母艦航空隊の母とも言えるお方だ」

「まあ、俺も鳳翔には頭が上がらんからな……。どうにも叱られると

母親に叱られている様な気分である……」

本当に、鳳翔には頭が上がらないと言うか、残してきた母親に叱ら

れている様な気分であるのだ。

だから叱られると申し訳なさで頭が上がらなくなる。

しかも本人は叱る時以外は常に一步引くような、決して前に行

くようなタイプでは無い。

必要な意見は言うが、それ以外は全くである。

前へ出ることを好まないと言うのだろうか。

加賀で釣りをしていた時に隣に座って一緒に釣りをしていた航空隊の士官や下士官が「理想の良妻賢母だ」と言っていたが確かにその通りだろう。

「閣下、三航戦から通信です」

「どうした」

「艦隊への合流許可を求めています」

「随分と早いな……。良かろう、許可する。夜間だから気を付けろ」
「承知しております」

一時間ほどすると、暗闇の中に発光信号が放たれた。

「南西5kmに発光信号を確認。先頭に隼鷹を確認、隼鷹以下空母が艦隊中心輪形陣内に侵入します」

「見張り、対潜警戒厳、各艦距離に注意。何があつたらすぐに知らせろ。ぶつかるなよ」

合流を見守りつつ、暫くすると全艦が所定の位置に就いた。

「三航戦、合流完了しました」

「よし、ぐ苦勞」

まさかここまで早く、それも夜間に合流するとは。

夜間合流自体は問題無いが到着時間が早いのが気になる。

「三航戦に燃料を確認するように言え。もし速力を上げて合流を早めたのであれば、補給の必要があるかもしれん」

「了解」

三航戦の隼鷹に聞くと、どうやら救援物資の積み下ろしが想定よりも遙かに早く終了したとの事だった。

まあ、それならば良いのだが一応次からは一言連絡を入れるように言っておいた。

翌朝。

現地部隊から、艦隊の派遣と救援物資の輸送を感謝する、と言う一文とその時の状況が簡潔に電文に書かれていた。

どうやら三航戦以下が被災地港へ訪れた際、かなり盛り上がったそ

うだ。

空母に加えて、長門や日向と言った戦時下だからこそ誰もが名前を聞いた事のある戦艦までもが助けに駆け付けて来てくれたから、らしい。

ともかく救援物資は無事送り届ける事が出来たようで何よりだ。

食料なども重要だが、今の季節何よりも大事なものは暖房器具である。

寒さを越すには必要不可欠であるのは間違い無く、もし無ければどうやっても凍死者が続出する。

朝になる。

司令部要員の皆が起きて艦橋に上がってくる。

すぐに参謀長や輜重長、補給将校達を集める。

「軍の暖房器具用の燃料備蓄と食料備蓄は、どれぐらいだ？」

「燃料は全国で6年分、食料は2年あるか無いか、と言ったところで」

事前に確認させていた備蓄状況を聞いて、顔を顰める。

「……燃料はまだしも、やはり食料が圧倒的に足りないか」

「はい。被災者に解放するにしても、人数が人数です。全て解放したとしても、5ヶ月保つかどうか……」

「南方方面に送る食料に問題は無いな？」

「ありません。今のところ、向こう1年はなんとかなるだろうと」

「ならば、軍の備蓄を解放しよう。燃料は4年分、食料は最低でも半年は保つように配分しろ」

「了解しました」

まずは救援物資をどうするか。

はつきり言って我々には余裕が無い。

食料だって毎日ギリギリであるし、燃料こそ産油地帯や石炭を液化燃料化しているから幾らかは余裕があるが、それでも綱渡りに等しい

状況だ。

ただ、補給を担当する将校達から一年はどうかすると言質を取ったのならば、この冬を乗り切りつつ食料生産をするしかない。

無茶苦茶であるし、被災者には酷な事であろう。

俺だって同じ立場ならば、激怒する。

しかしそうでもしないと立ち行かないほどに追い詰められているのだ。

食料生産の大部分を担う北海道が戦場になったのは、それほどに我々に大打撃なのだ。

「医療体制は？」

「民間の医師や看護婦、看護師達が懸命に働いておりますが人手は絶望的なまでに足りておりません」

「被災地に陸海軍の軍医を送るんだ。必要なら九州、山陰山陽、四国の軍病院や民間の医療機関に航空機を使って後送しても構わん」

医療体制も逼迫している。

傷病者の中には緊急を要する者も数多い。

東海地方や関東地方の軍病院は空襲や、迎撃に出た搭乗員の治療で忙しく、東北地方の軍病院は今現在北海道戦線の傷病者を受け入れており地獄が如く駆け回っている。

しかし近畿以西は空襲も余り無く、比較的手隙である事が多い。

だから北海道戦線へも軍医や看護婦看護師達を送っているし、確認したところ今も病床数には空きがある病院が多かった。

ならば受け入れが可能な程度で構わないから被災地の傷病者を受け入れるよう、言ったところ歓迎すると返答が返って来た。

今の医療技術ならば、即死でも無い限り病院に後送して治療を受ければ命はまず助かる。

戦争前の各種技術は失われずにしっかりと受け継がれているし、戦

争が落ち着いて民間への被害がなくなりつつあれば其方を復興させる準備もある。

ただ、今はその段階に無いだけだ。

そも、復興したところで空襲で破壊されるのは目に見えている。

俺が書類作成に使うパソコンや印刷機なども極々少数、官用に生産は続けられているからな。

ただ、インターネット回線が使えないから送受信が出来なく、書類に起こして人を使って手渡しするしかないだけだ。

まあ、この世界に来るまではインターネット漬けの生活であったがインターネットが無くともなれてしまえば不便に感じないものだ。

物事を決めていると、伝令が走ってくる。

「提督、統合参謀本部より電文です」

「読み上げろ」

「陛下、中代大将以下全員の無事が確認されました。既に病院へ向かい治療中との事です」

「怪我の程度は？」

「広野中将が骨折をされましたが、他の方々は擦り傷程度であると」

「宜しい。見舞いの電文を送っておくように。2、3日はお休みして頂くよう手配しておけ」

「了解しました」

無事で良かった。

広野中将は災難であったが、特に高齢である陛下や市木大将が無事であるのは何よりだろう。

二日後。

中代大将からこちらはこちらでやっておくから、戦いに集中して構わない、と連絡が来た。

これで兎に角戦う事、前線の指揮に専念出来るようになった。

俺は幾つもの物事、それも国難と呼ぶに相応しい物事を同時に対応

出来る人間では無い。
有り難い。

ならば、一刻も早く北海道から敵を殲滅しなくてはならない。

第57話

一月半ば。

未だ雪が降り積り、寒さ衰えぬ北海道の大地では友軍が敵軍と命を懸けて戦っている。

海軍の方は陸軍の支援の為に艦載機を飛ばす程度であるが、陸軍は連日敵の猛攻を受け、そして防いでいる。

補給が切れてから暫く立つと言うのに未だ敵の勢いに翳りはない。余程備蓄をしていたのだろうか。

しかし前線への補給は航空隊によつて断絶気味の筈。

となると前線近くに後方からの補給が出来なくなつたことを想定して別の場所に多数の集積所を設けてあるか、夜間に運んでいると見て間違いない。

何にせよ、まだ我々が把握出来ない補給線があるのだろう。

夜間は航空機を飛ばすのが難しいから、どうしても見落としてしまふ。

陸軍の搭乗員ならば戦闘機から爆撃機に至るまで夜間飛行に慣れているから問題無いのだが、海軍は陸上配備されている紫電改と飛行艇や水上機、あとは爆撃機しかやらない。

艦上機である烈風や流星は先ずやらない。

第一、母艦に夜間の着艦制動灯などの装備がないからな。

夜間の洋上は、本当に暗い。

月明かりがあれば別だが、新月ともなると艦の灯り以外に周りに光を発するものは何もないから真っ暗闇になる。

そんな中を、何処にいるか分からない敵艦隊に向けて暗視装置やGPSが無いのに飛ぶのは無理がある。

陸上機ならば、夜間爆撃を行う敵爆撃機は編隊を組んで爆音で飛んでくるし進行方向上にある各地の電探が捉えているから誘導出来る。

それに機上電探を装備した銀河がいる。

迎撃の網を張っておけば良い。

陸上機が夜間目標にするのも飛行場などの固定目標。

方向さえ合わせてあとは自機の数でもって距離を割り出せば可能だ。

しかし艦上機はそれらが全く出来ない。

潜水艦に敵艦隊を後を付けさせて電波を発する手段もあるが、夜間は敵艦も此方と同じで潜水艦には厳戒態勢だし、見つければタダでは済まない。

駆逐艦から爆雷の雨を降らされるに違いない。

陸上機である紫電改や一式陸攻、陸軍の百式偵察機を使って夜間偵察を試みているが、やはり目視では限界がある。

高度2〜3000mからの夜間偵察だ、無理もない。

とは言え実を言うと一式陸攻はあまり夜間偵察などで失いたくない。

一式陸攻は1機につき7〜8人の搭乗員がいる。

撃墜されると一気にそれだけの訓練された搭乗員を失うことになるのだ。

烈風や流星などの単発機は多くても二人だがそうも行かないのが陸上攻撃機だ。

だからあまり被害が拡大するのならば中止すら全く疑問無く行うだろう。

本当ならば一式陸攻を全て足の速い銀河、もしくは防衛力が2機種に比べ高く生存性の高い連山に置き換えたいのだが、まずもってそれは叶わないだろう。

銀河はまだ良いが、連山はなんせ零戦10機分、烈風7〜8機分以上の資材を必要とする。

ただでさえ南方方面での連日の激戦で失われる機体を補充するのに単発機生産ラインははてんでこ舞い、そこに北海道侵攻で普段は少数生産の各国機体に加え紫電改の生産を増産しなければならぬのだ。

どうやっても生産は増やさねばならない。

爆撃機生産ラインは連山、銀河を生産するのに手一杯。

工員の数の関係上、これ以上の生産ラインの増設は今すぐに、と言うのは無理だ。

だから激戦が続く南方方面への配備を優先せざるを得ない状況が続いている。

今日は北海道北部から南部それに洋上に掛けて、端的に言えば戦線全域で吹雪いているらしく最前線への航空支援は行えない。

物資は前以て送り込んであるので、最低四日は無補給でも戦える。

艦隊は悪天候を避けるべく岩手県久慈沖南西300kmの地点まで南下。

北海道近海に比べれば波は穏やかで風も余り吹いていない。

とは言え18ノット(時速約33km)で進む艦上では無風だろうと余り関係は無いのだが。

向かい風の時など台風か、見間違うぐらいの風が吹くからな。

お陰で、洗濯物をしたならば気候や地域にもよるがすぐに乾く。

中代大将達が大震災の対応をしてくれる事により、俺は北海道防衛に専念出来る。

「提督、大雪山で敵の攻勢が始まりました」

「規模は？」

「2個連隊程度ですが、質、装備はかなりのものです。それと新型戦車も中隊以上の規模がいます」

「守備に就いているのは？」

「1個連隊のみです。ですが諸兵科連合連隊として編成にナースホルン対戦車自走砲中隊、四号戦車が1個中隊、後方にフンメルを装備した1個砲兵中隊がおりますので、戦力的には互角かと」

「ならば、今まで通り防御に徹するように。航空機は出せないが、天候

が回復次第向かわせる。防衛が困難ならば後退を許可する」
「了解しました」

恐らく、この吹雪に紛れて防衛線の一部を食い破ってそこから雪崩れ込もうと言う算段のつもりだろう。

しかし、我々は1個歩兵連隊に対して対戦車自走砲1個中隊、自走砲1個中隊、戦車中隊を付けた諸兵科連合として部隊を運用している。

上級単位である師団でもそれは変わらない。

実は北海道に展開している部隊はこの方面よりも諸兵科連合化が進んでいる。

北海道侵攻に際して、色々と議論された。

その中には「本土防衛に割ける戦力はどの程度か」と言うものも勿論あった。

本土防衛を手薄にする訳ではないが、実際問題奪還地域は広大で本土の倍はある。

となるとやはり奪還地域を維持し敵の侵攻を阻むには相応の戦力が必要だ。

更には今後奪還作戦が行われ、成功したならばその地域にも防衛戦力を置かなくてはならない。

となると本土から戦力を引き抜く他無いのだ。

しかしそうなる则ち奪還地域どちらともがどうしても単純な数での戦力が手薄になる。

であればどうするか。

簡単な話、部隊の質を向上させるのだ。

質、と言うのは兵士の質も確かにそうだが所謂攻撃能力、単純に歩兵だけでなく砲兵などの様々な兵科を混ぜ合わせた諸兵科連合を基本編成として数的不利を同等、もしくはそれよりも少し劣る程度に底上げするのだ。

そうすれば今以上に奪還地域が広くなっても少ない戦力で応援が到着するまでの防衛が可能である、と言う訳だ。

実際、確かに運用上の問題は幾つかあったものの、それらの解決に

はさほど時間は掛からずに済んだし、何より防衛、攻勢共に明らかに向上していた。

兵科ごとにバラバラに運用するより、一つに纏めて運用すれば指揮系統やらが混乱しにくい。

他にも諸兵科連合にする事で、攻防両方に置いて戦闘能力が遥かに上がる。

師団規模でなくとも単一の諸兵科連合連隊で行える作戦遂行能力が向上し、更には柔軟性も上がった。

挙げるとキリがないが、諸兵科連合に編成を変えた事でプラスに働いている。

とは言え補給が煩雑になったりしたが、それもじきに解決するだろう。

しかし、やはりナースホルンとフンメルはかなり強力だ。

元々I V号戦車の車体を流用しているから大量生産が可能だし、コンポーネント的にも余裕がある。

必要ならば砲口径を大きくする事も可能であり、しかも両車とも自走が可能だ。

他の対戦車砲や榴弾砲は移動や陣地転換をするには動力を持つ他の車両に牽引されなければならない。

しかし前述の2車種は必要になれば容易に陣地転換を素早く行えるし、何より輸送などをする際に単純計算ではあるが、牽引車が必要としないから自走が出来ない砲を輸送するよりも倍の数を輸送出来る。

砲弾や給弾車の兼ね合いもあるからそこまで差が大きくなったりはしないだろうが、やはり輸送に掛かるコストは此方の方が低い。

とは言え全てを置き換えられる訳ではない。

生産数の問題もあるが、単純な話、運用における違いがあるからだ。

基本的にフンメルやナースホルンは機械化部隊への追従を主としているから機動力がなければならない。

しかし牽引式の榴弾砲や対戦車砲は確かに自走こそ出来ないから

機動戦には向いていないが、それ以外での場面でよく活用されるからだ。

牽引車の分の生産コストを加味すれば置き換えた方が良いのは間違いない。

流石にそれは生産数の問題もあって現実的では無いが、いずれは順次置き換えて行くつもりではある。

荒れる太平洋の波頭を割って艦隊が進む。

とは言え昨日よりは波風共に収まり、空に雲が広がっている程度だ。

しかし未だに艦載機を飛ばすのは困難だ。

航空機自体は飛ばせるのだが、荒波に揺られる母艦に、しかも強風に吹かれながらの発着艦は無理である。

それこそ原田大佐辺りの、海軍母艦航空隊の中でも特にトップクラスの操縦技量を持つ搭乗員でもなければ無理だろう。

現状何よりも、一番怖いのは敵潜水艦だ。

対潜戦闘は軽巡と駆逐艦頼りである。

今はまだ夜明け前、0214。

陸上機による支援は最低でも辺りが明るくなる5時間は無理だろう。

「菊月より入電。敵潜探知、距離26km。追跡します」

「浦波より入電。我菊月支援ス。以上です」

この天候ならば敵潜が狙ってくるのも当然だろう。

俺が潜水艦隊を直接率いていたならば同じ様に狙うからだ。

「航空支援は、やはり望めないか」

「夜間、それもこの時刻では望めぬでしょう。この様子だと、敵潜は集まって網を巡らせている筈」

「唯一の救いは第一護衛艦隊が合流している事か」

「この手数なら、多少の損害は覚悟せねばならないのは確かですが十

分防ぎ切るのは可能でしょう」

参謀長はそう言つて息を吐く。

ビスマルクは艦長と交代し今は休息中、寝ていることだろうか。

仮にも軍人とは言え女性、何か邪な考えを持つ者も出てくるだろう。

艦娘には護身用に拳銃の所持が認められており、自室の扉前には完全武装の兵士が2名、警備に当たっている。

「初雪より入電。我敵潜探知、距離24 km。コレヨリ追跡ス。以上です」

「マエストラーレより入電。敵味方不明電波探知。距離36 km」

「橘より入電。敵潜探知。距離19 km。コレヨリ追跡ス。以上です」

艦隊外周を守る駆逐艦達から次々と敵潜発見の報告が上がってくる。

恐らくマエストラーレのも敵潜と見て間違いないだろう。

「長いこと、北海道沖で遊弋していたから敵潜が集まったんだな……」

「大西洋で何度も経験した連中の作戦、群狼作戦でしょう」

ビスマルク副艦長ゲッツ・トspan中佐が言う。

艦長は休息中だから今はトspan中佐が艦の指揮を取っている。

艦長より背が高く、細身の男だ。

艦長、と言うより参謀職の方が合っているタイプらしく、自らも艦長職は合わないと零していた。

暫くして、更に敵潜探知の報告が相次ぎその数なんと27。

恐らくまだまだいるだろう。

「第一種戦闘配置を下令。隔壁全閉鎖。対水雷防御を固めろ」

「了解」

「総員第一種戦闘配置。繰り返す、総員第一種戦闘配置」

戦闘配置を下令し、敵潜の攻撃に備える。

更に時間が経ち、徐々に敵潜の数や攻撃が激しくなるが水雷戦隊の活躍もあつて10隻を撃沈破しているが、まだまだ数は多い。

「おかしいですな……」

「うむ、どうにも……」

「何か別の意図があるのかしら……？」

何やら艦長と副長、それにビスマルクまでが何か首を傾げている。

「どうかしたのか」

「ああ、いえ……」

「構わん、言ってくれ」

「は、それでは申し上げます。どうにも我々が経験してきた群狼作戦とは

違うと言いますか、なんと言いますか……」

「と言うと？」

「どうにも連携が全く取れていないのよ。私達が大西洋で嫌と言うほど経験した群狼作戦は兎に角連携が凄まじかったわ。報告が上がって来てる隻数を考えれば、今頃多数被雷していてもおかしくないわ」
「だが、現状1隻の被害も無いぞ。まあ、強いて困る事と言えば爆雷の減りが速い事ぐらいか」

「だからこそ、おかしいのよ」

「ふむ……」

「提督、宜しいですか？」

「参謀長」

「私が考えるに、敵は連携を取れる状況に無いのでは？」

「どう言う事か？」

「敵潜は取り敢えず数を集め一斉に攻撃しただけである可能性が高い、と考えます」

参謀長が発言し、ビスマルク達も頷いている。

「確かに通信機器の故障も有り得なくは無いですよ、30隻を超える敵潜が一斉に通信機器の故障を起こすとは考え難い。欧州軍の電子対抗戦なるものであれば可能ですが、我々はそんな事は一切やっておりません。故に数を集めただけ、と考えます。事実、攻撃タイミング等全てがバラバラ、回避運動を見越した発射もありません」

「なるほど……。で、あればそこに付け入る隙があると言う訳か」

「はい。現状、全方位に敵潜は存在しますが、距離も中々に離れており

ますし、同時攻撃もされておりません。ならば十分に対処は可能。それどころか各個撃破を十分に狙えるでしょう」

「分かった。ならば十分に警戒した上でこのまま対処を続行する。水雷戦隊各艦は艦隊陣形20kmに侵入した場合に限り各個判断で遊撃を許可する。ただし魚雷を回避する際は全艦に通達せよ。この暗闇だ、衝突事故の危険が高い。それだけは避けたい」

「了解しました」

深海棲艦の魚雷射程は7～10kmと過去の戦訓から見積もられている。

と言う事はそこに侵入されてしまうと敵魚雷の射程に収められてしまった事になる。

この荒波で、測距が難しいとは言え被雷は十分な可能性を持っている。

下手に遊撃の為に艦隊から離れてしまうと不味いが、かと言って近い場所で遊撃してしまうと振り切られて陣形内に侵入、十分な距離で雷撃されてしまう。

しかもこの暗闇に荒波では魚雷の発見は遅れるだろう。

小型艦ならば回避出来るだろうが、大型艦は舵の利きが遅い。

だから急に回避を命じられて舵を切っても艦体が動き始めるまでは、魚雷に対して全くの無防備なのだ。

しかし、今はまだ防げているが無音潜航をされたら探知が難しい。

夜明けがもうすぐの時。

『敵魚雷航走音探知！方位028、距離10！^{ヒト・マル}（1000m）』

「副砲、照明弾用意！」

「二番副砲、五番副砲用意良し！」

「撃てー！」

艦内無線から、その報告が上がった瞬間に艦橋の皆の顔が強張る。

すぐに照明弾を副砲に込めていち早く装填が完了した二番、五番副

砲に射撃を命じる。

すると空に光源が出来る。

「見張り員！」

「魚雷見えない！」

波間に隠れているのか、魚雷を目視するのは出来ない。

太陽が海面を照らすのはまだ少し掛かる。

「射線上の全艦に警報！艦首を魚雷に向ける！艦隊進路030！」

艦隊全艦に警報を上げ、舵を切る。

「魚雷見えた！本艦真横、距離01を航走！」

「周囲警戒厳！他の魚雷を見逃すな！」

「魚雷通り抜けます！」

本艦は運良く回避出来たが、更に後ろに続く艦が回避出来るかは分からない。

どうにかして位置を知らせなければならぬ。

無線では詳細な位置が分からない。

ならば。

「探照灯、魚雷照らせ！急げ！」

命令を飛ばし、探照灯に魚雷を照らさせる。

「後続全艦に急ぎ無線！探照灯照射位置に魚雷あり、避けられたし！」

「了解！」

するとその射線の真上にいた艦が次々と回避をする。

「艦隊最後尾より、魚雷回避成功。以上です」

「取り敢えず、被害無く回避出来たか……」

荒波と艦隊のスクリーン干渉音によって魚雷だけでなく敵潜の位置を掴む事すら難しい状況で、良く回避出来たものだ。

しかしこの回避をしたタイミングを敵潜は狙っていたのだろう。

この強い波風の中でも分かる、確かに炸裂音が聞こえた。

「何事か!？」

「長門より入電、魚雷1本、右舷艦後部に被雷！被害状況確認中！」

最悪の事態と言って間違いない。

「長門速力低下、落伍します！」

「機関に浸水したか……！」

「駆逐艦を6隻、長門の護衛に就かせろ。何としてでも呉に回航するんだ。太陽が登り次第烈風と対潜装備で流星上げる。準備急げ」

沿岸部を航行して、航空支援があれば辿り着けるだろう。

問題は長門を追う敵潜がいるかどうかだ。

被害状況によっては振り切るのが難しいかもしれない。

「長門より被害状況報告です」

「読み上げる」

「田幡機関長以下戦死103名、重軽傷者47名。

艦被害は右舷艦最後部、1番2番推進機付近に被雷。傾斜12度、艦首が少し持ち上がったようです。同推進機二つは大破。3、4番推進機は被害無し。

右舷罐室に大規模な浸水発生。すぐに運用を停止し水蒸気爆発等の危険性は無いようです。発揮可能な最高速度は11ノット。

隔壁閉鎖により被害は抑えられているようですが装甲が海中側に捲れ上がり速度を上げると更なる浸水に繋がると」

「大破か……」

「当たり前どころが兎に角最悪でした。どてっ腹に被雷していれば被害は大した事は無かったのですが……」

罐室に被雷したから、機関兵達が浸水から逃げ遅れたのだろう。

機関兵は艦の一番奥で勤務する。

それは戦闘時も変わらず、艦が沈んだ際に一番生存率が低いのは機関兵なのだ。

機関兵は艦と運命を共にする、とはよく言われる。

「呉まで回航するのは可能か？」

「速力が遅いので、敵潜に追跡されれば振り切るのは困難でしょう。曳航しようにも、捲れた装甲が邪魔をしますし、八方塞がりしか言えない状況です……」

「……海鷹と千代田、それと駆逐艦を更に6隻護衛に就けよう。今ここで長門を沈ませるわけには行かん。それと各地の航空隊に戦闘機

と対潜哨戒機を出すように言ってくれ」
「了解しました」

長門を無事に呉まで送り届けるべく、手を尽くすしかない。

3週間後、長門はようやく呉へ帰港。

途中何度も危うくなったが、乗組員達の必死のダメージコントロールのお陰で沈む事は無かった。

すぐさま入渠し、修理が始められた。

その際に速力不足で計画され準備が整っていた機関を新しいものにする事が決まった。

どちらにせよ浸水で艦後部は丸々甲板や装甲を剥がさなければならぬからついでに、と言うわけだ。

修理と機関改装に2ヶ月、新しく配属される乗組員の訓練に3ヶ月。

都合5ヶ月長門の前線離脱を所要せざるを得なくなった。

いや、寧ろ早い方だ。

本来なら長門の損傷は半年は修理に時間を必要としてもおかしくはない。

しかし今回は損傷艦が長門しかない事から、他艦の点検整備を行う事を除いても工員妖精の大部分が比較的手隙であった。

だから交代で休み無く修理を行える状況にある。

恐らく、長門が訓練を終了した頃には北海道戦線に決着が付いているか、趨勢は決まっている事だろうと予測出来る。

そうになると、南方方面へ向かう輸送船団護衛任務が再開される。

やはり激戦が続いている南方方面は、輸送船団も狙われるから十分な護衛を挙げなければならない。

長門は41cm砲を装備する数少ない強力かつ機動部隊に随伴は出来ないにしても比較的速力の速い戦艦だから船団護衛任務では重要だ。

それを見越し、更には来るべきフィリピン、スラウエシ島、ジャワ

島以東の島嶼帯、そして豪州奪還作戦に備えなければならない。

フィリピンは日本本土と南方方面を結ぶ航路の安定化の為に奪還を企図している。

スラウエシ島は資源地帯であると同時に敵軍の最前線基地や飛行場が多数存在する。それを叩かない限りは確実な船団航路の安定化は望めない。

ジャワ島以東の島嶼帯も同じ様な理由である。

日本本土と南方方面とを結ぶ船団航路の問題点は、別航路が存在しない事にある。

なんせ台湾とフィリピン間のバシー海峡く南シナ海もしくはセレベス海を通らなければパレンバンやバリクパパンの両主要港には辿り着けない。

そこに各種資源が集められ船積みされるから行かないわけにはならない。

新しく港を建設しては、と言う案もあるにはあったが何せ真反対側の南シナ海に建設しようとする訳だから大変だ。

候補地が絞れなかった事や奪還した島々に飛行場や防御陣地などを優先して整備しなければならなかった事、大船団を入港させられるほどの場所が無い事など課題が山積みで頓挫したのだ。

沖合に船団を停泊させるわけには行かないからな。

豪州は民間、軍共に内陸部へ後退したとの記録がある。

ならばもし豪州を奪還し、豪軍を整えたならば南方方面に対する我が軍の防衛の負担が多少は減るし、更には南太平洋での積極的攻勢が豪州と言う補給拠点を活用する事で可能になる。

遠隔地に守備隊を多数送り込まなくとも、豪州軍にある程度でも任せれば攻勢に際して我が軍が投入出来る戦力が増える。

それに豪州は世界有数の資源産出地だ。

鉄、銅、鉛、クロム、ニッケル、アルミニウムの原料であるボーキサイト、アンチモン、コバルト、グラファイト、ベントナイト etc
……。

実に60種類を超える鉱物資源が産出される。

南方方面では産出量が少ない資源も数多い。

仮に南方方面の資源が枯渇し始めた場合、それらに頼らなければならぬ事は確かだ。

中露韓と言った敵性国家と違い、豪州とは戦前、戦中共に連携関係にあつたから作戦等での連携なども円滑に進むだろう。

何故、3国を仮想敵国ではなく敵性、と断定して呼ぶのか。

理由も無く呼んだりはない。

並々ならぬ確固たる理由があるから敵性国家と呼ぶのだ。

それは別の機会に話すとするが、少なくとも国を守る責任ある立場の者からすれば到底許し難い行い、信じ難い行いがあつた、とだけ言つておこう。

何にせよ、豪州と作戦上の連携を取ることが出来れば、我が軍の負担は大なり小なり減ることを意味する。

だから大陸への攻勢では無く南方方面の防衛、攻勢を主張しているのだ。

何も利になる事がなければそもそも南方方面への更なる攻勢計画など練りはしない。

大陸に攻勢を仕掛けるぐらいなら、こちらはこちらで難しいが、さっさと敵の本丸であるハワイを叩いて一時的にでも使用不可能にしてから北太平洋方面で時期を限定した攻勢を仕掛けアラスカ、カナダと奪還して行つた方がまだ良い。

確実に友軍、と言える存在があるからな。

北海道で戦いが始まってから3ヶ月。

そろそろ北海道戦線が決着が着く。

第58話

北海道で戦端が開かれて早三ヶ月。

未だ雪は降り積り、補給や部隊の行動に支障は来しているものの、補給が途切れたりだとか戦闘に影響のある障害は出ていない。

今日は前線視察をする為に、輸送用の鉄道に相乗りしている。

札幌の物資集積所から乗り、名寄、土別、旭川、富良野と向かい、十勝平野を日高山脈沿いに回る。

全部で三日間の予定だ。

今の前線は十勝川沿いにあるから、どれだけ前線に近くとも40kmは後方だ。

確実に安全とは言えないが、それでも前線よりはマシだ。

敵の火砲の射程外、航空機か46cm砲でもない限り届く事は無いし、第一狙い撃たれること自体がレーザー誘導などをしない限りは有り得ない。

今輸送しているのは、陸軍第241連隊と聞いている。

十勝平野が最も激しい戦いが続いており、同連隊も十勝平野南部に送られる。

この連隊も諸兵科連合で編成されている。

元々は歩兵連隊と付いていたが、諸兵科連合にする上で歩兵の二字を取り、連隊のみの表記へと変更したのだ。

これは他の連隊や師団級でも同じだ。

この車列は前線への補給物資も幾らか運んでいるから、歩兵だけを運ぶより車列は長い。

100両近い貨車に、241連隊の兵士達に装備する戦車、自走砲、

兵員輸送車、武器弾薬水食糧、燃料、不凍液などを載せている。

更に自衛用の20mm4連装対空機関砲24門、37mm単装対空砲6門がそれぞれ3両、2基ずつ載せられ空を睨んでいる。

空には紫電改が8機、直掩任務に就いているがいざとなったら自分達は自分達で守らねばならない。

ストーブが焚かれているとは言え、貨車の中は寒い。

配管が天井に通されて熱を放っているが気温が低いから温まる事は無い。

それでも外よりは随分とマシだ。

昨日の内に気象班に聞いた今日の最低気温は―20度を軽く下回ると予想されていたから、寒く無い訳がない。

貨車の中で待つ俺達は良いが、対空機関砲に張り付いて対空警戒をしている兵士達は列車が吹く風も相まって堪ったものでは無い。

一応、風避けがあるにはあるが大して効果は無さそうだ。

俺の服装は野戦服に防寒着や手袋、中にファーが貼られた防寒靴を着込んでいる。

この辺りは支給されるものだから皆と違いは無い。

精々階級章が違うとかその程度だ。

それに加えて自前のコートなどを着込んでいる。

軍刀を腰の左側に、護身用に拳銃を右側に、拳銃の予備弾倉を三つ入れている弾薬嚢を左斜め前にそれぞれ腰に身に付けている。

この位置が一番取り出しやすいのだ。

コートの下だからすぐに取り出すのは難しいが、もし素手で持つことになって冷えて持てなくなるよりは良い。

こう言った寒い地域で、気温が低い時に素手で金属類を長時間持つとくっついて凍ってしまうのだ。

剥がすのにも湯を持ってきて少しずつかけて解かさなければならなくなる。

下手したら凍傷で指を切り落とさねばならなくなるというのだからな。

共に来ているのは陸軍の方で参謀をして、手助けをしてくれている馬場弘吉大佐である。

前線叩き上げの大佐で、現場のことを良く知っている人物だ。

参謀になったのはつい1年前の事で、それまではカリマンタン島で連隊を率いていた。

ガツチリとした体格で、参謀だと言われても信じられない。

普通、前線指揮官から参謀になると言うのはあまり無い事なのだが、馬場大佐は相当優秀で参謀本部から直々に引き抜きが掛かるほど。

カリマンタン島攻略に際し、実はいち早く作戦中にも関わらず問題点や解決すべき点を報告書に纏めて提出したのが彼だ。

お陰でジャングルにおける戦闘訓練が効率的に行えるようになった。

海軍には海軍の、陸軍には陸軍の参謀達がそれぞれ存在し、俺を補佐してくれているのだ。

洋上で作戦指揮を取る事が多いから直接顔を合わせて指揮を執る事は少ないが、連絡は良く取り合っている。

他に直接の護衛として待機中だった513中隊の10名。

513中隊は、アンドレアノフ諸島での任務終了後、潜水艦に回収され北海道へ戻った。

そこで二日間の休養を挟んでから、今は1個小隊を待機、要は休暇状態にしてそれ以外は敵地後方の偵察や索敵、破壊活動を行なっている。

得られた情報は数多く、敵部隊の詳細な配置や転換、補給線、補給量等々、作戦を立案するに当たり重要なものも多い。

そんな中で態々休養中であつたのにも関わらず、護衛を買って出してくれたのだ。

分隊長は永寛二少尉が務めている。

全員がもし何かあった時に、走って逃げ出せるよう完全装備である。

俺の手荷物と言えば、背嚢に余裕を持って五日分の着替え、それに歯ブラシなどを小さく纏めて詰め込み、小さい肩掛け鞆にメモを取る為のノートと鉛筆、万が一の備えとして水と戦闘糧食が一食分である。

増援の兵士達と一緒に乗車しているものだから、皆の緊張が良く分かる。

本来ならば、視察ともなると鉄道を貸切にするとかが安全面の観点からは通常である。

しかし今の鉄道にそんな余裕は無い。

輸送で手一杯なのだ。

だから相乗りになった。

なんなら彼らと共に居る方が遥かに安全な気もするからな。

自分で言うのもアレだが、普通なら大将なんて階級のやつとは、下士官は会わない。

精々何かの観閲式典で遠目に見るぐらいだろう。

だからか皆、やたらと緊張している。

これは、なんとも申し訳ないことをしてしまった。

ストーブから一番遠い場所の隅にいたのだが、気になって気になって仕方がないらしい、さつきからチラチラと皆が覗いているのが分かる。

「すまないな、いきなり乗ってしまった」

「い、いえー！」

「そう緊張するな、と言っても無理か」

「申し訳ありません！」

海軍ではドイツ軍の皆を除いて提督と呼ばれるが、陸軍だと殆どの

場合閣下と呼ばれる。

呼び方に違いはあるが、それだけだ。

旭川に先ず向かう。

そこで降りて、旭川軌条集積所に駐屯する陸軍第25鉄道連隊を視察するのだ。

旭川には北海道に幾つかある軌条集積所が存在する。

軌条集積所とは、簡単に言えばとても大きな駅である。

各地を結ぶ線路が旭川に集まっており、そこから物資や人を各地へ運ぶのだ。

実は富良野にも旭川より規模が3分の1程度の軌条集積所がある。では何故旭川に軌条集積所が新しく作られたのか。

戦争が始まり北海道が食糧生産の大部分を担い始め、更には武器弾薬の生産施設なども建設されそれらを輸送する為に丁度北海道のど真ん中にある富良野に先ず最初に富良野軌条集積所は作られた。

しかし戦争の激化や長期化に伴い富良野軌条集積所では輸送しなければならぬ物資の量は桁違いに跳ね上がり続けた。

当然、キャパシティ以上のことはどうやっても出来ず、やったとしても保つわけがない。

結果、集められる物資が捌き切れなくなり人、物問わず様々なものが停滞する事態が頻発した。

そこで富良野軌条集積所を拡張する事が提案されたのだが、増設分の建設面積、土地が無かったのだ。

鉄道が近くにあるから輸送が面倒な重量物である戦車や野砲などを生産するのには適していたし、他にも缶詰やレトルト食品、その他諸々の食品加工工場や縫製工場等々が周りに区分けされていたとは言え密集していたのだ。

流石にそれを退かしてから新しく作るような資材や時間は日本には余り無い。

そこで新しく別の場所を探したのだが、すぐ近くに広大な土地が空いている場所があった。

それが旭川である。

そこに新しく旭川軌条集積所を建設したのだ。

富良野軌条集積所と結んで、2箇所を併用する事で輸送の円滑化を企図した訳である。

旭川軌条集積所、富良野軌条集積所の他に札幌、帯広、北見、釧路、中標津に軌条集積所があるが現在は帯広は激戦続く戦闘地域、北見、釧路、中標津が敵の手に落ちている為に稼働状態にあるのは3箇所だけだ。

鉄道連隊はその名の通り鉄道専門の陸軍部隊であり、本来ならば戦地での鉄道の建設・修理・運転や敵の鉄道の破壊に従事する。

鉄道の運用をも行っており、彼ら無しでは日本の陸路輸送は成り立たない。

陸路での輸送を司る鉄道の、謂わば血管や心臓を診たり維持したりする、生命線を守っていると言っても過言ではない。

なんせ鉄道連隊が駄目になったら陸路での前線への輸送、補給が全く機能しなくなる。

輜重兵やその士官も数多く在籍し、鉄道の建設・修理・運用だけでなく輸送や補給をも担っている。

元々日本の鉄道は各民間企業に委ねられていたのだが戦争勃発当初などの戦局の悪化により民間企業は規模に関わらず大打撃を受けた。

敵が行ったインフラへの攻撃はモロに企業へ影響が出たのだ。

利益を産むはずの鉄道が爆撃によって使い物にならなくなれば収入が無くなる。

社員に払う給与も得られず鉄道会社に限らず倒産、又は休業が相次いだ。

当然、その企業に属していた社員達は路頭に迷わざるを得なくなつた。

しかしそんな余裕の無い軍は鉄道に限らず運用に少なからず専門知識や技能が必要になる職種に彼らを軍属として雇い入れたのだ。

雇用を作る、と言う目的もある。

規模は1個鉄道連隊1000〜1500名程度で、連隊によって差がある。

沖縄や南方方面の鉄道網を建設、構築したのも彼ら鉄道連隊でその重要性は高い。

旭川鉄道基地に到着し、降りる。

駐屯している鉄道連隊の連隊長など20名ほどが出迎えてくれている。

「閣下、遠路遙々御足労して頂き、ありがとうございます」

「何、大した距離じゃない。南方方面に比べたら隣近所だ」

「違いありません。では、こちらへどうぞ」

連隊長に案内され、雪が降り積もる軌条集積所を歩く。

施設設備としては問題無い。

陸上輸送の全体物流を担っていると見える鉄道連隊は、他の部隊と比べて比較的施設や設備が優遇されている。

なんせ鉄道連隊が行動出来なくなると言う事は、前線への物流が全く止まり、補給が出来なくなる事を意味するからだ。

集積所全体の視察を終えて連隊本部へ入って行く。

基本的に、鉄道連隊の施設は鉄道に併設される。

だから軌条の幾らか離れた、距離的にはすぐ隣と言える位置にある。

「閣下、早速で申し訳ありませんが、説明に入らせて頂きます」

「頼む」

「現状、閣下をご覧になられた通り設備面での負担などはございません。しかし、やはり如何ともし難いのは人員不足です」

「やはり、人手が足りないか……」

「はい。北海道戦線の激化に伴い、あらゆる面で鉄道が必要な場面が増えました。それだけでは無く、補給量の増大、反攻作戦や停滞した

戦線の維持、来る敵前線の突破に備えた物資備蓄諸々を含め、今の鉄道連隊にはそれら全てをカバーし得る能力はありません」

連隊長が言う様に、今の鉄道連隊に全ての輸送量を賄えるほどの能力は無い。

航空隊による物資の航空輸送を行なっているのも、ただ単に敵に包囲されているからだとかだけでは無く、実は鉄道輸送だけでは必要輸送量を満たせないからに他ならない。

航空輸送は確かに鉄道輸送よりも迅速にピンポイントでの輸送には長けているが、その実、コストパフォーマンスが悪い。

鉄道輸送に比べ燃料代は高く付くし、整備などの諸々を含めて考えると一度の輸送量に掛かる値段は高価だ。

しかも輸送出来る量は鉄道輸送に比べその日一日を凌ぐ程度ではない。

だから航空輸送で輸送出来る量は本当に最低限度の輸送量でしか無く、備蓄に回せる量を輸送出来ない。

しかも航空機だから一度飛んだら整備をしなければならないからローテーションを組んで毎日違う機体を輸送任務に就かせているとは言え30機もの機体を一日程度で完璧に整備し切らなければならぬ整備兵は毎日地獄の様な忙しさである。

整備兵は基本的に単発機であれば1班3〜5人、双発機は6〜8人、4発機は10〜12人程度で構成される。

しかし1機につき1班とは行かないから、数機を纏めて担当する。陸軍はまだマシで、海軍母艦航空隊の整備兵ともなると、艦内と言う限られた場所に限られた人数しか乗せられないから陸軍よりも多い機体を担当せねばならない。

単発機や双発機の整備は4発機に比べて区分訳がし易く、発動機、機体、銃火器、電装系と少ない区分を少ない人数で多少の分担を出来る。

しかし4発機は、いくら整備性を向上させているとは言え発動機は4つ、機体も大きく、更には電装系も多く防御火器の数も桁違いに多い。

故に4発機は整備性をどれだけ向上させようと、整備に時間と人手、金が掛かるものである。

飛ばさない日でも異常が無い点検もするし、あつたらあつたで即整備、修理。

担当する機体を出撃が無い日にただ点検、整備するだけならば大した事は無い。

課業時間よりも早めに終わる事もあるぐらいだ。

しかしそれが連日出撃となると丸で話が変わって来る。

自分の班が担当でない機体だったとしても整備作業に参加せねば間に合わないし、それに加えて出撃していない機体の点検業務に加えて整備、敵機の銃弾を受けたらその箇所の修理や交換なども発生するのだ。

それは鉄道連隊も同じで、機関車や貨車を幾つかの班がそれぞれ受け持っている。

平時ならば、その内の幾つが稼働することになり、他は点検整備、予定によっては重整備を行う。

しかし現在は、連隊長が言う通り、北海道で戦端が開かれたことにより一日辺りの必要輸送量が激増した。

本来ならば、北海道に駐屯していた鉄道連隊全てを合わせれば、戦時であつたとしても6個師団程度ならば十分に輸送量を確保出来た。

しかし今北海道に展開する友軍は増えに増え、1個軍団に加えて更に数個師団とが展開している。

どう考えても、キャパシティーオーバーである。

あとは航空隊と同じで、皺寄せが整備兵や運用面で直撃する、と言う訳だ。

やはり鉄道連隊に配属され得る人員も南方方面に数多く配属していたから平時ならば問題無い人員数でも、戦時には圧倒的に足りない。

結局のところ、どれだけ優秀な兵器や武器、道具を揃えようとマンパワーが無ければどうにもならないと言う事だ。

「確かに機関車や貨車はあります。ですが、それを動かし整備する事が出来ずにいるのです。部下達も頑張ってくれておりますが、これ以上負担を増やし部下達の負担も増えるとなれば、どれだけ長く見積もっても1週間が鉄道連隊を機能させる限度でしょう」

「そのままで逼迫しているか」

「はい。機関車を動かす為には運転手や整備兵と言った人手が必要ですが、現状不足しており、一度の輸送で牽引限界ギリギリの量を運ばざるを得ないのです。閣下がお乗りになられていた車列もそうです。そうなれば機関車や貨車に掛かる負荷が重くなり、頻繁に重整備が必要になってくるのです」

整備にも幾つか種類がある。

運用整備は到着から出発までの間に行う、点検程度のものだ。

必要になったら部品交換等を行う。

通常整備は一日の終わりに行う点検整備。

潤滑油の交換や補充、清掃などに加えて運用整備よりも点検程度を上げつつ行う。

次に重整備。

これは二つと違い、兎に角丁寧に確実にやるものだ。

艦艇や航空機で言うところのオーバーホールだ。機関室や車体を分解し、全て点検整備を行うのだ。

その重整備の頻度が月に一度程度であったのに対し、今は週に二度。

それほど逼迫している。

常に限度ギリギリの牽引量を引っ張り、それを一日に何度もである。

そうでもしなければ、何度も言うが一日辺りの必要輸送量を満たせないのだ。

しかも今の季節は輸送に加えて除雪作業までもが入ってくる。

別の専用車を使ってはいるが、数が少なく広範囲の軌条全てを数台で賄わねばならない。

ならば丸々一日以上を軌条の除雪作業に当たらねばならない。

雪で遊んだ事があるならば分かるが、雪と言うのは降り積もると兎に角重い。

雪質によつては除雪車一台ではどうにもならない事もある。

機関車を追加で出したりと更に人員を酷使することになる。

除雪車は北海道全域をたつた数台でカバーしている状況だ。

降雪が酷いと全く除雪が進まず仕方無く物資を集積している旭川軌条集積所や前線近辺を優先し、それ以外の場所は後回し、だなんてザラだ。

「すまないが、今この場で人員の増員などは確約出来ない。貴官も分かっていると思うが深海棲艦の圧力が高まっている南方方面や震災が起こったり兵器武器弾薬を生産している本土などからそれらを輸送する為に引き抜く事は正直言つて、難しいだろう」

「……承知しております」

責任ある立場故に、そう易々と増員などをやろうとかは言えない。どこも人員不足なのだ。

南方方面はいつ敵が上陸して来てもおかしくない状況だ。

流石に艦隊戦力が整っていない現状では敵の上陸は無いだろうが、断言は出来ない。

物資や部隊の輸送を担う鉄道連隊の人員を引き抜いては、敵上陸部隊迎撃の作戦に支障が出かねない。

「しかしこの状況は、憂慮すべき事だ。取り急ぎ、比較的余裕がある九州方面から何人か引き抜けないか聞いてみよう。ただし、ここに配属されるかは分からんがな」

「ありがとうございます。それだけで十分です。どこか一箇所の負担が少しでも軽くなれば全体で微々たるものですが、余裕が出来ますから」

話を終え、部屋を出て行くこうとすると、何やら部屋の外が騒がしい。

「どうかしたか」

「閣下」

部屋から顔を出して見ると、永大尉達が鉄道連隊の整備兵を一人取り押さえていた。

「離してやれ」

永大尉に離すよう言って、部屋に彼を招き入れる。

彼の軍隊手帳を預かり中を確認する。

軍隊手帳には、

所属連隊の証明印影

軍人番号

本人証明写真と指紋

軍人としての心構え

誓文

戦時国際法

生年月日、血液型や疾患

経歴（入隊から除隊までの経歴や賞罰などの詳細）

部隊号、兵科、階級、得業、戦時着装被服のサイズ（帽、衣袴、外套、靴）、本籍、住所、氏名、生年月日、身長等

が事細かに書かれている。

だから分厚めだ。

出征、戦地へ出撃と言う軍隊手帳を紛失する可能性がある時は師団本部で軍隊手帳を預かり、代わりに簡易手帳を支給する。

簡易手帳には軍人としての心構え、誓文、戦時国際法を除いて書かれており、ページ数も4ページだけとペラペラだ。

因みにこの軍隊手帳が無ければ除隊後の年金を受け取る事は出来ない。

一応証明写真と指紋の照合、軍人番号の確認さえ取る事が出来れば軍隊手帳の再発行、年金受給が可能だが戦地へ出征し、余程の状況で戦死、師団丸ごと壊滅、とでもならない限りは紛失と言うのは中々無い事だ。

しかしそれが実際に起きたのが沖縄奪還戦の時である。

出征した兵士全員の名簿などを作成しておかなかったら、今でも身元を探す事になっていただろう。

何故軍隊手帳を師団本部で預かるのか。

と言うのも遺族年金もこの軍隊手帳が必要になるからだ。

別に結婚などを禁じている訳では無いので普通に世帯持ちの兵士達は多い。

ただ単に妖精と人間の間は今現在に至るまで子供が誕生していないと言うだけである。

もし誕生したら直属の上官で一番高い階級の者に即座に報告するようになっている。

そうするとすぐさま俺の元へ報告が飛んでくる。

そうする事で、例えば無理矢理産ませる為に、だとか言う良からぬ事を企む連中から守る意図がある。

法令を作れば、と思うだろうがこの国では前例が無いから、この事だけで法令を作ることが難しいのだ。

他国がどうかは知らないが。

軍隊手帳は俺も持っている。

だから仮に軍が検問を行なっている場所を通る時は俺もちゃんと提出しなければならぬ。

何はともあれ軍隊手帳を無くすと大変なことになる、と言う事だ。

法規に関して記載されているのは戦時国際法、ハーグ陸戦条約、ジュネーブ条約などだ。

これについては長々とは書かれておらず、兎に角最優先で守らねばならないものだけを抜粋し記載してある。

まあ、深海棲艦相手には適用したくとも適用出来ないのだが。

理由は以前話したと思うが、深海棲艦は降伏をしない。

文字通り武器弾薬が無くなるうと拳や脚を使ってまで死ぬまで戦うからだ。

更には此方が降伏しようとしてもそれすら受け入れない。しかし北海道沖で戦争が始まって以来初となる捕虜を得た。因みに収容場所は我が家のすぐ近くである。

と言うか隣近所、プレハブの30m離れた場所にある。

収容所、と言つても慌ててコンクリートの板を並べて壁にし、その上に鉄条網を張った程度だが。

まさか捕虜が発生するとは思って居なかったから、収容所が無かつたのだ。

正確にはあつたが無い、だな。

元々建設されていた収容所は航空機生産工場になつてしまつてい

る。5年10年と捕虜が出なかつたら仕方が無い、と言うか。

仮に使えたとしてもたった一人の捕虜に対して数千人を収容出来る施設を使うのは無茶苦茶も良いところではある。

簡単な話、そんなでかい施設をただ一人の捕虜の為に稼働させる金が無い。

だつたら新しくプレハブの隣に作つてしまつた方が安上がりで、尚且つ安全だ。

では何故プレハブのすぐ隣になつたのか。

理由は今までの戦争に置いてやはり皆が皆、法規を守るほど人類は理性的では無いからだ。

故に捕虜虐待を防ぐために俺の目が届く場所である必要があつた。

しかも敵とは言え女性体である。

結局のところ、野放しにしたらどうなるかは分かり切つた話だ。

国民にはこの事実を伏せてある。

国民の殆どは深海棲艦によつて命であれ家であれ、様々なものを失っている。

中代大将達ですら難しい顔をしていたのだ、もし国民が知つたらその感情は爆発するだろう。

そう言うものから守る為にも秘匿する必要があつた。

それに、脱走を企てても周りは俺を守る為に配置された海軍陸戦隊

1個連隊が陣地を敷いている。

余程の事がない限りは、可能性が無いとは言いつれぬが普通は無理だろう。

法規に関するそれ以外の条文は中隊長以上の者のみに記されている。

士官が知っていればいざと言う時に下に判断を任せる危険が無くなる。

護衛に取り押さえられたと言う事態が起きたから一応、確認する必要があったのだ。

「さて、貴官は第25鉄道連隊の整備科長で間違い無いな？」

「はっ、そうであります。先程はお騒がせしてしまい、申し訳ありません」

階級章を見て改めて中尉であると確認する。

「構わん。しかし、中々に優秀な様だな」

「はっ、ありがとうございます」

「特別技能徽章は置いておくとしても、柔道、銃剣道は段持ち、射撃も一級射撃徽章を持っていると」

特別技能徽章は大抵の場合、後方支援職種であれば科長になる前に取らなければならない。

しかし整備が主任務であるのに柔道に加えて銃剣道、更には射撃の徽章を取ると言うのは中々無い事で彼がそれほど優秀であると言うことだ。

直立不動で羽太中尉は立っている。

顔は強張っており、タイミングから見て俺に何か話があったのは間違いない。

「それで、俺になにか用件があった様だが……、何かね」

「はっ、意見具申をしたく参りました」

「意見具申、か。この行為は決して許される程度の物事を逸脱している。それも、承知の上だな？」

「勿論であります」

「何故直属の上官である連隊長を通さなかった？」

「一度、連隊長に意見具申をしました。しかし却下された為、今回直接閣下の元へ来た次第です」

「連隊長、事実か？」

「事実であります」

「まあ、一応聞いてみようか。で、どんな意見具申だ？」

話を聞くぐらいなら構わないだろう。

「はっ、今余っている機関車を除雪車として活用したくあります」

「機関車を除雪車に？」

「はい。はつきり言って今の除雪車では馬力不足で場所によっては除雪作業が出来ません。ならば人員不足により運用が出来ていない機関車を除雪仕様に改造して活用しては、と考えた次第であります」

「ふむ。しかし貴官が言う様に鉄道連隊は人員不足だろう」

「それについても、一つ案があります」

「言ってみろ」

「機関車を除雪車に改造する、と言いましたが除雪と輸送を同時に行ってしまえば良いと考えます」

「どう言う事か？」

「機関車に除雪をさせつつ貨車を引つ張らせるのです。そうすれば、除雪車と機関車に人員を分けずとも何ら問題ありません」

「ふむ……。機関車の馬力は足りるか？」

「除雪を行う場合のみ牽引する貨車数を減らせば問題ないかと。除雪と輸送を別個に行っていたものを同時にやるので輸送量の低下も最低限に抑えられます」

「とのことだが……。連隊長、どう思うか？」

「……やはり、難しいでしょう」

「そんなっ」

「理由を聞かせてくれるか」

「まず第一に、今も必要輸送量は増え続けている事。この量は備蓄分を含みません。1日辺りに必要な最低限度の物資を輸送するだけで精一杯です。仮に備蓄分を加算したとすると、最低でも貨車数を少な

くするならば今の本数を運行するぐらいでなければ要求量は満たせません」

「現状ですら備蓄分の輸送量を削っているのですから、もし大尉の意見を採用したとなれば、まず備蓄は出来なんでしょう。確かに積雪による障害は排除出来ませんが、リターンが少ない」

雪が降ると、降雪量によっては何度も除雪を繰り返して行わなければならぬ。

一度ならばまだしも何回もとなるとやはり輸送量の低下は無視出来ないものになる。

「第二に人員不足。これは大尉も指摘していましたが、やはりもう一車列を運用出来る程度の人員が居なければまず無理です。休ませる事も視野に入れば、それぐらいは無いと除雪と輸送、この二つを同時に行わせるのは危険です」

「第三に、仮に実行したとして馬力が本当に足りるのか。今は北海道全域が戦時、それもここは輸送の要です。実験に回す余力は欠片もありません。丸二日、輸送を停止しても構わないと言うのであれば実験ぐらいは行えるでしょうが、そうなれば前線部隊が戦えなくなりま

す」

「だ、そうだが大尉、何か言いたいことはあるか？」

「……いえ、ありません」

「気落ちするな。貴官の提案は平時ならば可能であっただろうが、今は無理と言うだけだ。タイミングが悪かったと言うのだろうか」

「とは言え、この意見は後々役に立ちそうだ、持ち帰ろう」

そこで区切り、話は終わった。

後日、大尉の処分だが発想自体は良しとされ、北海道戦線が落ち着く、もしくは解決するまでは人手不足も相まって保留とされた。

余力が出たならば、来たる欧州反攻などに備え開発を進める予定である。

第59話

各地の視察も順調に進み、残るは前線視察のみとなった。
ビスマルクからは艦隊は特に問題無し。

あるとすれば高波で駆逐艦達が苦勞している事と補給に手間取る
ぐらい、と送られてきている。

移動は初日から変わらず物資輸送を行なっている鉄道に相乗りで
ある。

今回は部隊輸送ではなく、補給用物資の車列なので機関車を動かす
兵士と対空機関砲を扱う兵士以外には物品管理の輜重兵が数名だけ
である。

輜重兵が詰める車両に間借りし、12人で暖房ありとは言え寒い寒
いと耐える。

身体を動かせれば話は変わるんだが走り回る訳にはいかない。

壁に備え付けてある折り畳み式の小さな机を出し、書類を何枚かづ
つ片していく。

今まで視察し得られた意見を纏めて後日検討しやすいようにして
おく。

やはりどの鉄道連隊も人員不足に悩んでおり、早い段階で人員を配
属せねばならないのが最優先課題であろう。

取り急ぎ、出向と言う形で九州と沖縄から若干名を引き抜いて送る
しかない。

連隊毎に一人づつでも九州7個連隊、沖縄本島だけで5個連隊だか
ら少なくとも十二人の派遣が可能だ。

南西諸島全体で考えると、奄美大島、喜界島、徳之島、沖永良部島、
与論島を統括する第41鉄道連隊もいるから十三人に増える。

他の島には鉄道連隊は無く、地下陣地はあるが島自体が小さく狭い
為に鉄道は敷設されていない。

他には娯樂を増やして欲しいとかなどがある。

これも、真面目に検討しなければならぬ事案だ。

なんせ娯樂は士氣に直結する。

誰だつて英氣を養いたいのは当然だ。

兵士達の娯樂と言へば、戦場であれば精々がタバコか酒ぐらいなもの。

他にはトランプや花札と言つたカードゲームぐらいしかない。

あとは毎日の食事。

者によつては本だとかがあるが、陸戦の場合、特に歩兵は持ち歩けない。

戦車などの車両であればまあ、可能だろうがそれでも限られたスペースに最大限武装を詰め込んでいるからスペースは余りない。

持ち込めても二、三冊が関の山だ。

まさか弾薬や燃料を減らして乗せる訳にもいかないからな。

大抵スペースや重量的な負担の少ないカードゲームで暇を潰しているが、逆に言えばそれぐらいしか戦闘以外でやる事が無い。

3食の食事で出される献立だけで丸一日を語れる訳もない。

語れるとしたら余程の食い意地が張っている奴か、それとも変態ぐらいなもの。

歩兵は自分の持ち歩く装備の手入れを済ませてしまえば他にやらなければならぬ事が無い。

念入りにやつても手慣れていけば一時間もあれば済んでしまう。

場合によつては陣地の修理や構築もあるだろうが毎日じゃないし、それも警戒を担当する兵を除いても全員でやるから数時間あれば終わる。

歩哨だつて交代制だから自分の番が回つてこなければ立つ事は無い。

一番忙しいのは整備兵だろう。

毎日整備をしないとならないから、休む間も無い。

それが終わつてしまえば先に言つたことしか暇を潰せることが何もないのだ。

まさか戦場で女遊びなんて出来ようもない。

それは後方も同じで、確かに整備などはあるが休みの日ならばやる事が無く無駄に時間を浪費するかやり飽きたカードゲーム、何度読んだか分からない、下手すれば暗唱出来るレベルまで読んだ本を読むか。

流星にこれが続けば士気も下がる。

だから娯楽を増やして欲しいと懇願が来るのだ。

定期的に本や雑誌を入れ替えているが、それでは一度読んでしまえば終わりである。

しかしそう簡単に戦地で持ち運び出来る程度の新しい娯楽なんぞ思い付かない。

人員不足よりも頭を悩ませる問題だ。

がたごとと、揺られながら進む。

物資や補充用の武器などを満載しているから速度はゆっくりで片道四時間掛かる。

二時間ほど経った頃。

車列の警報機が鳴り響く。

何事か、と窓の外を見ると直掩のスピットファイアが踵を返すような、鋭い動きで翼を翻す。

高度を上げ、車列を直接守る2機以外の14機が一目散に同じ方に向け速度を上げて飛んで行く。

その光景は、艦隊防空戦で何度となく見たものだ。

「敵機だな」

「敵機ですか!？」

「ああ、直掩のスピットファイアが高度を上げた。敵機が車列を襲いに来たんだらうな」

「では今すぐ安全な場所へ……」

「木製壁で出来た車両の中だぞ、ロケット弾どころか機銃ですら防げ

ん。下手に動いて邪魔するより、大人しくここにいた方がいい」
馬場大佐と永少尉と話す。

装甲列車じゃないのだ、どこに逃げても安全な場所はない。
すると、機関車を動かしている兵士の一人が駆け込んで来た。

「閣下！敵機が来ます！」

「分かっている。俺が出来ることは無い。最善を尽くしてくれ」

「はっ、勿論であります。ですが、万が一の場合は車両から飛び降りる覚悟もなさって下さい。雪が深いので大怪我を負う可能性は少ないはずですから」

「ああ」

今直掩に就いているのはアーサー・ヒル大佐が直接率いる16名だ。

腕を考えての選抜ではなく、如何に連携をとる事が出来るか、で直掩隊は選ばれている。

機数も普段とさして変わらない。

下手に機数を増やして何かを勘繰られるよりは、何時も通りの列車だと思わせた方がよい。

それに少なからうと彼らなら、無事に直掩任務をやってくれる。

「……敵機はどうかやら戦爆連合のようです。機数は、戦闘機を合わせて40機と言った所ででしょうか。戦闘機の方が多く見受けられますが……」

「大方列車を狙うからには戦闘機にもロケット弾を搭載しているだろう。あれを載せると機動力が低下する。アーサー大佐達なら問題無い」

双眼鏡を覗いた馬場大佐が言う。

今日の天候は気温は低いが快晴であり、雲量1と視界も良い。
かなり遠くまで見通せる。

万が一接近されてもこれならば対空機銃が威力を發揮出来る。

「直掩隊と無線が繋がっております。閣下、何か話されますか？」

「いや、いい。下手に話して緊張させたく無いからな。このまま見守

る」

双眼鏡を受け取り、覗く。

既に戦闘中らしい、スピットファイアが敵機を追い回している。敵戦闘機の翼下にはやはりロケット弾がぶら下がっている。

投棄したらしい機体が殆どでスピットファイアに応戦している。

急降下爆撃機が20機に、残りは全てF4Uのようだ。

半々と言ったところか。

にしても車列を狙うにしては随分と数が多い。

恐らくは、俺がいる事を察知しているな。

我々が発する電文の数から察知されたのだろう。

覚悟はしていたし、不思議なことじゃない。

「敵の艦載機だな」

「空母がいると?」

「いや、あれは海戦で沈んだ空母艦載機の生き残りだろう。もし空母がいるならとつくに艦隊が見付けて報告が上がってくる」

反攻作戦の一番最初に生起した海戦で沈めた空母の生き残りが陸上にある飛行場に降りそのまま戦い続けているのだろうな。

感服するが、よくもまあ機体を戦える状態に維持出来たものだ。

ただ、練度差もあってか友軍が優勢なようだ。

落とされる機体は敵ばかりで、迎撃の手を逃れようと必死になって
いるが此方にはまだ直掩機が2機残っている。

「警戒するに越した事は無いが、あれでは突破は無理だな」

「閣下は、航空戦に精通なされているのですな」

「いや、俺は精々齧った程度だ。まだまだ」

話していると、無線から声が。

『此方アーサー機!誰か居ないか!』

「此方馬場。どうした?」

『どうしたも何も無い!何機かが迂回して迎撃をすり抜けた!注意しろ!』

「了解。直掩機には伝えたか?」

『伝えたが2機で押さえられるかどうか分からん！Over！』
通信を切る。

40対14だ、仕方がない。

寧ろ数機を取り逃がしただけで、よくあれだけ粘っていられる。だがこれからは2機だけで車列を守らねばならない。

恐らくは、機銃の出番だろう。

「永少尉、伝令を一人走らせ機銃要員に警戒厳を知らせ」
「了解」

すぐに一人に命じて走らせる。

数分すると、20mm4連装機銃と37mm機銃の独特な射撃音が聞こえて来る。

射撃間隔が短い20mm機銃と、射撃間隔の長い37mmが絶え間無く撃ち続けている。

20mmは上下で発射のタイミングをずらす事が出来ることを利用して上段が銃身交換や弾切れで撃てなくなると下段が撃ち始める。

それを繰り返す事で、絶え間無く射撃を行えるようにしている。

緊急時は全てを射撃することも出来るが余程のことが無い限りは早々やらない。

ベルト給弾方式にしたことで弾倉式の場合に比べ装填時間が長くなったからだ。

4門全て撃ち切ってしまうと5人で操作しているから、装填に30秒は掛かる。

そうなつては暫くの間は全くの無抵抗になってしまう。

「窓からは離れておけ。いると分かったらすぐに襲ってくるぞ」

幾つかの爆音が響く。

恐らく音からしてロケット弾と爆弾の着弾音であろう。

「列車に異常は？」

「ありません。戦闘機に襲われて狙いが狂ったのか見当違いの場所に落ちています」

『敵機1機突っ込んでくる！迎撃間に合わない！』
通信機からそう怒鳴り声が聞こえた。

スピットファイア2機と対空機銃だけではやはり回避行動を取らない列車を守り切ることは出来ないか。

それでも皆は良くやった。

「全員衝撃に備えっ」

ほんの少しして、列車に大きな衝撃が走る。

すると列車がバランスを崩して更に大きな衝撃が身体を襲う。

脱線したのだ、思いつ切り列車が横倒しになり始める。

「何かに掴まれ！横転するぞ！」

そう叫んですぐに列車が横転した。

列車の瓦礫から這い出し、全身に付いた泥と雪を払う。

「随分と派手にやられたな……」

「閣下！ご無事ですか!？」

「ああ、俺は無事だ。馬場大佐は？」

「見ての通り無傷です」

馬場大佐がすぐに駆け寄ってきて心配してくれるが、馬場大佐は頭から血が出ている。

俺より余程重症だろう。

「永少尉！無事か！」

「問題ありません！全員集まれ！点呼を取るぞ！」

どうやら俺達一向は全員無事のようにだ。

瓦礫を退かし、自分達の荷物を全て引っ張り出し武器などを点検する。

「閣下、申し訳ありません。見ての通り列車は敵の攻撃で横転してしまいました……」

「気にするな。それより、列車の状況は？」

「機関車の爆発などの心配はありません。ただ、脱線してしまっているので走らせるのは不可能です」

「分かった。列車に乗っていた全員を集めて、武器と弾薬を拾おう。それと使えそうな暖房器具と天幕、燃料食料水を急いで集めてくれ」
「はっ、了解しました」

顔を青ざめて必死に頭を下げる車掌を落ち着かせ、列車から武器弾薬、暖房器具と天幕を幾つか、それと燃料食料を掻き集める。

「永少尉、連絡は取れたか？」

「いいえ、無線機が故障したようでウンともスンとも言いません。孤立しました」

「直掩隊が知らせてくれていたから心配は無いだろう。あとは、攻撃を受けた際に救助が来るまで持ち堪えられるかどうかだな」
「敵機が大挙して押し寄せたら無理ですな。蝟壺を掘って耐えることぐらいしか出来ないでしょう」

「なら、全員で穴を掘るぞ。墓穴にならんように全力でな」
「了解です」

全員で近くの林の中に隠れ、そこで穴掘りと天幕を立てる。

俺もStg44と弾薬、弾倉を背負って円匙で穴を掘る。

今は人手が欲しい時だ、俺だけボケっとしている訳にはいかない。

銃の扱いは心得ている。

皆と比べると大した事は無いだろうが、教育の時に中代大将や射撃教官役から叩き込まれている。

それでも射撃は得意なんだ。

まあ、あくまでも的に撃つことならば、だが。

戦車の交換用であるMG34や九九式軽機関銃も対空三脚と一緒に配置してある。

簡易的ではあるが陣地のようなものは出来た。

小隊規模の人員がいるから時間はあまり掛からずに済んだ。

久々だな、こんなに身体を動かしたのは。

「閣下は我々がお守りします。武器を持たれなくとも……」
「何、万が一の時の為にな。流石に拳銃だけじゃ心許無い」

「分かりました。ですが我々の後ろに居て下さい」

「ああ」

骨折などの重症を負った者もいるが全員の命に別状は無いことが確認された。

応急的に全員を俺の直接指揮下に入れ、万が一の場合戦闘になつたら永少尉に指揮を任せることに。

全員で隠れるための掩体を掘り、天幕を立て、暖房器具に火を入れる。

これで取り敢えず寒さは凌げる。

偽装用に他に幾つもの天幕を立てて暖房を焚く。

「閣下、直掩隊がまだ上空を飛んでいます」

「満載で来たからまだ燃料に余裕があるんだろう。これで敵機に一方的にやられることは無くなったな」

「しかし……、閣下は随分と樂觀的ですね」

指摘されて頷く。

「艦内で焼け死ぬよりはマシだ。海の上は逃げ場が無いからな。それに比べてここは木に隠れられるしいざとなったら走って逃げられる」
「そういうものでしょうか」

「そういうものだ。俺がこんなことで怯えていたらんしな」

馬場大佐と話ながら林の中で身を隠す。

他の皆は俺の護衛を除いて全員で弾薬や食料を出来るだけ運びつつ、敵に備えた。

翌日。

漸く救助が来た。

軌条の修理を行うクレーン車やブルドーザーを乗せた列車が5両、装甲列車に守られてやってきたのだ。

俺達はそれに乗って富良野へ戻りそこから一式陸攻と次こそはと燃えるアーサー大佐いか30機に守られ千歳飛行場へ。

すぐに病院に担ぎ込まれ検査を受ける事になり異常無しと軍医に判子を貰い、念の為入院してはというのを躲しつつ室蘭へ。

そこから水上機でビスマルクへ向かうこととなった。

艦隊に戻る。

ビスマルク艦上は相変わらずであり、寒風と荒波に揉まれている。乗っている水上機をクレーンで回収され、甲板に降ろされてから機体を降りる。

あ、小銃を持ってきてしまった。

後で返さないとならないな。

「提督ー！」

「ビスマルク、どうした」

「どうしたもこうしたも無いわよ！貴方自分がどんな目に遭ったか分かっているの!？」

「勿論。遅かれ早かれ、ああ言う目に遭うのは重々承知の上だ」

「それでもよー！」

ビスマルクに心配したと怒られながら出迎えられる。

参謀長達も気が気でなかったと口を揃えて言うもんだから肩身が狭い。

心配掛けたとは言え、この様子なら入院を断らなければ良かったか……？

その方が絶対に大丈夫とお墨付きを貰って堂々と出来たんだがな。

天候は回復したが、未だ波が高く風は強い。

艦載機を飛ばすには、幾らか注意を払う必要があるな、この様子だと。

前線の問題と言えば、補給などぐらいなもので戦力的には現状問題無い。

やはり敵の有力な戦車の出現と言うのは如何ともし難く、I V号戦車やI I I号戦車では敵新型戦車（パーシングと確認された）にはど

うしても抵抗は難しい。

走攻守、全てにおいてまるで歯が立たない。

辛うじてIII号戦車が走の部分で拮抗出来るか、と言った程度で後方に回り込むなどの自分達の戦車砲弾が貫通可能箇所を狙える位置取りを行うのも難しい。

正面からの撃ち合いは、まず勝てない。

となると伏撃か、ナースホルンの眼前に誘導して対戦車砲による撃破ぐらいしか対抗戦術が、戦車対戦車戦において存在しない事になる。

とは言えナースホルン自走対戦車砲ならば撃破出来るが、やはり機動力と防御力の面では劣る。

ティーガーやパンターであればやられはするが戦える。

それでも貫通力、防御力共に完全ではない、との報告が相次いでいる。

そも、二車種は配備数自体がまだまだ少ない現状であちこちの戦線を駆け回っているのが現状だ。

擱座したパーシングを徹底的に解析したところ、やはり今のままでは敵の装甲が少しでも強化されたら主砲は威力不足になるであろうとされた。

そこで、ティーガーIIIの車体と砲塔生産が間に合わず余剰になっていた71口径砲身に換装し、二車種の砲身長を長くし取り急ぎ攻撃力だけでもの強化を実施すると言う手段が取られた。

多少の改装は必要であるが、必要経費であろう。

決定が下された翌日から、前線にいるティーガー、パンターから直ぐ様改装が行われた。

これにより初速が上がり貫通力が増す事になり、余程加速度的に敵戦車の装甲が分厚くならない限りは、当面の間は問題無いようになった。

元々造兵廠では有力な戦車が敵に出現した場合に備えて、対抗する事が難しい、もしくはは実力が拮抗するなどの事態になっても良いように予め設計などは進めさせておいたのが功を奏した。

これで攻撃力の面においては問題が無くなったが、防御力はどうにもならない。

ただでさえティーガーは戦闘重量57tと言う重量故に馬力不足であった二車種を度重なる改良でエンジン馬力を向上させたのに、これ以上装甲厚を増やすのには無理がある。

急激に装甲を厚くしてしまうと馬力不足に泣く羽目になる。

エンジンの大幅改善によって最高速度は51km/hを発揮出来るが、砲身を71口径にし、それに伴う改装で重量は増加しているのだ。

下手をしたら馬力不足を理由に保管倉庫に眠っている栄エンジンを引っ張り出して戦車用に改造して載せなくてはならなくなる。

流石にそれは現実的では無い。

少しぐらいの装甲厚を増やすぐらいなら話は別だが、0.5mm増えたからと言って敵戦車の砲弾は防げない。

しかしこれでも急場凌ぎでしかなく、早急にティーガーII、センチュリオンの数を揃え、部隊編成を完結しなくてはならない。

倉庫に入れられていた3両ずつは既に同一部隊として編成され、北海道の各地で戦っている。

ティーガーIIは機動戦に向かないから、所謂支援役でセンチュリオンが機動戦を担当する。

車両自体は大して変わらないが機銃だけはMG34に置き換えられている。

対歩兵の制圧力を上げる為に実施され、現状弾薬倉庫に積み上げられている古い7.92mm弾を使う意味もある。

流石に足りなくなると予想されたので生産数を増やさなければならぬが、それでも使用しているのが車載機銃と少数の航空機などだけの為、簡単な話だ。

生産ラインの内の幾つかが生産過剰になる為に停止させ、定期的に稼働させるぐらいだったからその生産ラインを再稼働すれば良い。

2日ほど整備点検をした後に、問題があれば解決する。

それでも4日もあれば工場が吹き飛ぶぐらいの事が無い限りは全

生産ラインをフル稼働させることが出来る。

戦車の生産ラインも順次パンターとティーガー、ティーガーII、センチュリオンに切り替えている。

南方方面に展開する部隊の戦車も全て豪州奪還までにはパンターに置き換える予定である。

豪州奪還には主力としてパンターとセンチュリオンの二種を、拠点防衛にティーガーとティーガーIIを用いる予定だ。

拠点防衛には二車種に加えて1〜2小隊程度のパンター、もしくはセンチュリオンを組み込む予定だ。

理由は単純に、前者は長距離の行軍に機械的信頼性があるからだ。後者も度重なる改装により機械的信頼性は十分であり、運用する事になんら問題はない。

しかし、豪州は今までのどの戦場よりも広大であり敵新型戦車戦車の数も配備数も高いものと予想される。

となると、広大な戦場ならば鉄道を敷かねば移動は困難だ。

しかし進軍と敷設を同速度で行えないし、何より敵よりも単純な数字上の戦力が劣った我が軍が敵軍に対して打ち勝つには機動力や練度で補うしか無い。

となると鉄道敷設を待ってられないのだ。

ティーガーとティーガーIIは、その重量故に長距離の移動に向いていない。

重過ぎる余り、各部の部品の摩耗が激しいからだ。

機械的信頼性が高いから、よほど、それこそドリフトだとかそんなレベルの荒過ぎる運転でもしない限り故障は少ないが、部品の摩耗は動かす以上どうにもならない。

もし長距離行軍をしたとなったら頻繁に交換しなければならぬし、そうなる各戦車部隊に就く整備大隊の負担は計り知れない。

しかしパンターとセンチュリオンはそういう事は無く、長距離の移動が可能だ。

だからこの様な担当訳に決まった。

ティーガーはまだしもティーガーIIならば敵新型戦車に対しても機動力でこそ同格であるが、攻撃力防御力に関しては絶大な威力を発揮する。

しかし何よりも問題なのはやはりティーガーIIの問題は重量に見合ったエンジン馬力でない事だろう。

ティーガーは改善されたがティーガーIIともなると、それこそ本当に1000馬力級以上のエンジンが必要になる。

馬力不足はエンジンに所用出来る以上の負荷を与え、頻繁な整備や交換を必要とする。

戦前のレオパルド2戦車など欧米現代戦車が軒並み1500馬力級のパワーパックを搭載している事を考えても、どの戦車より10tは確実に重いのであるから、当初700馬力から向上したとは言えその半分程度の830馬力で70tもの重量を動かしているのだ。

明らかに馬力不足である。

二車種は機動戦には全く向いていない。

だから防衛用にする事で十分な運用が出来るようにしたのだ。

置き換えられるIII号戦車とIV号戦車は初等操縦訓練用を除き全車両が退役、もしくは博物館行きである。

「提督、報告書よ」

「ありがとう。今日はもういい、休め」

「貴方がベッドに入って寝たのを確認したら私も寝るわ」

「……脅しか？」

「あら、提督の身体を思っていることなのにそんな酷いことを言うのね」
にこりと笑いながらビスマルクは言う。

皆、俺の扱い方を理解しているからこう言われる。

そう言われると弱る。

バツが悪くなつて頭を搔きながら降参するしかない。

「はあ、分かった。重要なものと早めに片付けないとならないものを片付けたら寝る」

「本当は今すぐにも寝て欲しいのだけど、まあそれぐらいなら許すわ」

「すまん」

「提督の仕事熱心で、部下思いなのは良いところだけどそれで自分を犠牲にして身体壊したら意味無いわよ」

「ご忠告、痛み入るな」

「他の皆からも散々言われているでしょうに、なんで直らないのかしら?」

「何年もこんな生活だ、今すぐ止めろと言われて止められたら皆からしこたま説教を食らったりはしない」

「ま、貴方が終わるまではここに居させてもらうから。何かあったら手伝うわ」

「ありがとう」

「Gern geschehen (どういたしまして)。それよりも、身体の調子は?大丈夫なの?」

「この通りピンピンしている。怪我や体調不良を隠したりはしない。流石に学んだよ」

「それならいいけれど、何か変化があったらすぐに言いなさい」

「ああ、心配掛けてすまん」

再び仕事を片付けていく。

量は大したことない、すぐに片付けてしまおう。

「終わったかしら」

「ああ、終わった。それじゃ寝るか」

「貴方が寝るのを見届けたら私も部屋に帰るわ」

「俺は子供か?」

「夜更かししようとする子供と大して変わらないでしょ」

多分、何を言ってもビスマルクは動かないであろうな……。
観念してさっさとベッドに潜る。

「Gute Nacht、提督」

「ああ、おやすみ」

思っていたより疲れていたらしいのか、すぐに寝てしまった。

第60話

我が軍の北海道戦線における反攻作戦は、突如として一気に加速し始めそうな、様子を見せている。

3月になり、あと1ヶ月もすれば雪が完全に溶け消えるであろうと予想され、雪解けと共に予定されている攻勢作戦に備えて準備を進めていた時。

敵の攻勢に翳りが見え始めた。

と言うよりも、敵は戦線を大幅に縮小し屈斜路湖辺りまで全軍を後退させ始めたのだ。

偵察によると網走から釧路を結ぶライン上に防衛線を構築し始めているのが確認されており、我が軍と対峙していた前線から敵が新たに構築している防衛線までの間には数多くの遅滞防御陣地が新たに確認されている。

敵の備蓄量を算出した結果、あと二ヶ月は保つであろうとされていたのだが、どうやらこちらの防衛線を食い破ろうとした為にこちらが想定していたよりも物資の消費が激しかったらしい。

しかもそれに加えて物資集積所や輸送車両の車列を見つけ次第、航空機や敵地後方の偵察や破壊活動に従事していた513偵察中隊が破壊して回っていたのも敵の物資消費に拍車を掛けたようだ。

とは言え問題はそこではない。

「確かに物資の備蓄量は反攻時に算出し要求された最低限度である6割ではある。しかしそれを理由に機会を逃し、敵に防衛線や陣地構築の時間を与えるのは如何なものか」

「しかしその6割は過去の話だぞ」

「私とて補給を軽視している訳では無い。しかしそれで敵に時間を与えて余計な損害を食らうのはどうなのか。今ならばそれを押さえられるのだぞ」

「実施すれば、少なくとも敵の防衛線構築は阻害出来る」

「仮に出来たとしても補給に問題が出てからでは意味が無いのでは

ないか」

「そこは……、今のようには航空機を使えば良からう」

「これ以上航空隊に負担を強いると？今でも限界に近いのか？回らなくなるのは目に見えて明らかだ」

出向している陸軍参謀数名を加えて議論が繰り広げられている。

議論の主題は、今すぐに攻勢に打って出るべきか否か、である。

考えるべきは、我が軍の攻勢に必要な物資の備蓄量である。

今現在我々が備蓄出来ているのは算出された必要備蓄量の5割程度、作戦を行う為に必要最低限度である、とされている量だ。

しかしそれはこの戦いが激化の一途を辿る前に算出されたもので、部隊の増強などが行われた今では必要最低限量は6.5割。

可能ならば7割は備蓄するべし、とされている。

最低でも1.5割も足りない。

これは作戦を実施する上で重大な意味を持つ。

補給が厳しくなるのは勿論だが、何より前線部隊に戦闘に関わる関わらない問わずに何かしらの制限が掛けられる可能性が高い、と言う事だ。

例えば食事の配給量を減らしたり、1両当たりや一人当たりに配られる砲弾薬や燃料、手榴弾などが少なくなる、とか。

正直に言って短期間であればなんとかなるだろうが、戦いの長期化をも視野に入れた場合かなり厳しいものになる。

必要摂取カロリーを満たせなければ、腹が減っては戦はできぬ、となってしまうし何より弾薬が無ければ持っている小銃は穴が開いた鈍器ぐらいにしかない。

極論になってしまいが、兵士1人当たり10発しか弾薬を配らなとか、戦車1両に20発しか砲弾が配られないとか、そうなってはどうかやってもまともに戦闘を行うのは無理である。

まだ冬だ、燃料が無ければ寒さは凌げないし、当然車両も動かさない。

今の備蓄量で攻勢を始めるとそうなる可能性が無いとは言いきれない。

だから陸海軍で、敵が防御を固める前である今すぐに攻勢を始めるべきか、それとも今暫く待ち備蓄量が最低限度に達するまで準備を念入りに整えるか、で意見が割れに割れているのだ。

実際問題、どちらにも理がある、と言わざるを得ない状態だ。

まずすぐにでも攻勢に打って出るべき、との意見の理由としては敵が構築する防衛線がどれだけ強固な物になるか分からない、という理由から来ている。

敵は確かに兵力が擦り減り、勢いに翳りが見え始めているとは言えそれでもまだまだ兵力的に言えば展開する我が軍と同等程度には残っている。

これが意味することは、敵は我が軍と直接対峙している前線よりも半分以上短い防衛線に全ての戦闘兵力を注ぎ込める、と言う事に他ならない。

流石に後方地域の防衛などが絡んでくるから全てを配置するのは無理だろうが、極論を言ってしまうえばそう言う事だ。

城攻めには、籠る敵軍の3倍の兵力を用意せよ、と言うが、これを考えた場合どうやって3倍なんて用意出来ようもない。

正直それは何時でもそうなので、仕方がないと言える。

今の陸海軍は自軍より敵軍のが圧倒的兵力差で優位に立たれているのは重々承知の上で戦略や戦術、作戦を練っている。

ただ、敵が全力で防御に徹した場所を現有戦力で突破出来るかと言われると、言葉を選ばずに言うならばかなり厳しい。

不可能に近いだろう。

そうなると損害は増えるばかりであるのは確実だ。

戦争だから損害は仕方が無い、ではないのだ。

我々は深海棲艦より人的資源で劣っている。

だから人命軽視をしようというのは必然的に自分で自分の首を絞めるばかりか、破滅の道に突っ走っているようなものなのだ。

損害を出来うる限り押さえ、敵に出血を強要する。

作戦の大前提だ。

敵に時間を与えて大きな損害を食らう戦いの場を態々用意してやる必要はない、と言うことだ。

備蓄に努めるべき、と言う主張も良く分かる。

今の軍は余程の事が無い限り陸海軍は共通して兵站を重視している。

勿論、元から軽視されていた訳では無いが過去の大戦からの教訓として俺が更に加速させたのも要因だ。

なんせとある一説によると、かの大戦における死者数の内、戦死者の割合は3割と見積もられ、残りの7割は飢餓や病気で死んだと言われている。

理由は軍部の極端な兵站軽視によるもの。

確かに後半の戦いはどうにもならない状況もあっただろうが、それでも輸送船を出せずに補給が全く出来ない、と言う訳ではなかった。

と言うか出せる兵力できちんとした護衛を就けそれに見合った輸送に押さえなければ10割では無いにしろ補給自体は可能であったと考える。

今の我が軍にも共通して言える事として、数多くの病魔が蔓延る熱帯地域が主戦場であることだ。

マラリアに始まりコレラ、熱帯アメーバなど治療には注意を払わねばならない伝染病や感染症が山ほどある。

それに加えて食料生産に不向きな気候もあって、適切な補給がなければならぬ。

それは北海道にも言える事であり、それらの病魔では無く寒さと言う別の大敵がある。

それに全く病気がない訳でも無く、若干数、それこそ全域で10人程度の感染症などに罹患した兵士達もいる。

更には北海道にはエキノコックスと呼ばれる厄介極まりない寄生虫の存在もある。

今では前の世界とは違い、駆除が進んで本州ではここ5年間未確

認、北海道でも一部地域を除いて暫くの間確認されていないが何時広がるか分からない。

これらの病気を駆除しているのは、単純に大規模な感染が起きた場合今の我が国にはそれらを対処出来る力が無いからだ。

だから病気をそもそも発症させぬ為に駆除などを、大規模感染になるより金の掛からないこちらを推し進めているのだ。

他の生物に影響を与えぬように駆虫薬を散布したり、撒き餌に駆虫薬を混ぜて媒介生物から対象を除いたりと様々な方法が採られている。

話を戻すが、北海道は今もまだ冬が続いている。

1ヶ月と言うのは短いようで長い期間だ。

寒さは暑さより命を奪う。

ましてや戦いもせねばならぬとなればより過酷であるのは間違いない。

補給が途切れた軍隊の末路を彼らは知っている。

この戦争序盤に友軍へ物資を送り届けられず、どれだけの苦しく悔しい思いであったかを知っている。

だから今度こそは補給を途切れさせるにはいかない、と思っっている。

どちらの意見にも筋の通った理由があり、悩ましい。

「仮に、今から攻勢に打って出た場合、どれだけの間補給を保たせられる?」

「あくまでも、推算でしかありませんが全部隊が全力で戦わねばならなくなると、厳しく見積もっても1ヶ月しか保たないでしょう」

「少ないな」

「その間ならば確実な補給を保証しますがそれ以上は補給に関して一切の責任は持てません」

「出来れば、あと1ヶ月分は欲しいところだが、1ヶ月分を備蓄するのにどれだけ掛かる?」

「2週間で、と言いたいところですが厳しいでしょう。敵もこの撤退

に際して我々に対する破壊活動を行っておりますので、概算程度ではありますがざっくり倍は掛かるかと」

「うーむ……」
長過ぎる。

それだけ時間があれば敵はとつくに防衛線を完成させ、それどころか拡張すら可能だろう。

時間的猶予も我々には無い、と言う事か。

「今、決断するべきだな……」

腕を組んで息を吐く。

苦しい決断だな、これは。

こういう役職をやっていると、度々苦しい決断を迫られる事があるが、慣れないものだ。

慣れたとは思わないが。

「陸海軍双方の補給参謀に聞く。確実に、1ヶ月は補給を保たせられるのだな？」

「はっ、1ヶ月は確実に保たせて見せます」

「海軍も、それは確約出来ます」

陸海軍の補給参謀が頷く。

それを聞いて、一度目を瞑り覚悟を決める。

「……分かった。これより2日間の準備期間を設け、3日後に全面攻勢に出る」

「閣下……」

「言いたいことは分かる。補給に不安が残る今攻勢に出るべきでは無いのは分かる。そこで、補給参謀が補給を確約した1ヶ月以内に敵防衛線の突破が不可能と判断された場合は攻勢を中止、物資備蓄に努め再度攻勢時期を見極めることとする」

何かを言いかけた参謀を抑え、彼らも納得出来る妥協案を出す。

今の備蓄状況では1ヶ月以上の全面攻勢は困難だろう。

攻勢に出たのならば、それを機にキツパリと止めるべきだ。

そう伝えると、渋々引き下がる。

「まだ言いたいことは数多くあるだろうが、今は押さえてもらいたい。」

もし失敗したならば俺を罵れ。責任も取る」

「ビスマルク、この全面攻勢に置いて全責任は強行した俺にある、そう書いておいてくれ」

「……分かったわ」

書記を担当するビスマルクに言つて、明記しておいてもらう。

これで皆が責任を追求されることは無いとは言えないが、罰が与えられたとしても軽いもので済む。

ビスマルクは何やら言いたそうな顔をしていたが、頷いてくれた。いずれにしろ、現場には大きな負担になるだろう。

「全軍に通達。今より、は号作戦を発動する。作戦を修正する必要があるれば明後日まで修正し再度全軍に通達。では始めよう」

「「「はっ」「」」」

元々敵前線の突破を企図する作戦は陸海軍で練られていた。

ただ、その作戦が敵防御陣地と防衛線の突破に置き換わっただけだ。

とは言え作戦を微修正する必要があるれば修正しなければならない。

きつかり3日後に、全軍が攻勢を開始した。

敵は縦深防御によつて時間稼ぎを目的としているらしく、あちらこちらにトーチカを主軸にした防御陣地を彼方此方に構築していた。

とは言え時間が無かつたのか、そこまで防御が硬い訳でも無く航空支援や砲撃によつてトーチカを破壊し戦車や装甲兵員輸送車に守られた歩兵が塹壕を制圧して行つた。

幾らトーチカとは言え、真上から爆撃を食らったり周りごと一気に砲撃で吹き飛ばされては一溜りもない。

砲爆弾で破壊出来ないトーチカや陣地を作るのには時間が必要だ。そんな時間の無い連中のトーチカは、簡単に破壊出来た。

敵が防衛線を構築していたラインに12日後に到達。

流石に頑強であつたが、海岸に近い場所に対して戦艦に始まり巡洋

艦までもが絨毯砲撃、連山や流星と言った機体による絨毯爆撃を実施。

幾ら頑強な防衛線とは言え、戦艦クラスの砲撃や1tクラスの爆弾を丸1週間に渡って受けたらどうしようもない。

2kmに渡って作られた防衛線を吹き飛ばした我々は、すぐに海軍陸戦隊をその更に後方にある海岸に上陸させ、陸軍挺進隊を上陸地点の近くに降下させた。

これによって穴が空いた防衛線を通過し迂回することも出来るようになった我々は防衛線を放置し他地域の奪還を進めることにした。無抵抗とは行かなかったが、防衛線に全力の8割を配置していた敵を次々に撃破し、遂に防衛線を完全に包囲することに成功した。

全方位から砲撃や爆撃を食らい、それでも抵抗を続けたが補給が完全に途切れ長くは保たず、包囲が完了し2週間後に敵を殲滅。

残敵掃討に丸々2週間の費やしたが、辛うじて補給は保たれた。残雪残る3月の終わりのことであった。

戦後処理は長期化すると予想された。

なんせ北海道は今の日本の食料生産の大部分を担う重要な地域だ。

不発弾は全て取り除き、再び田畑にするのだ。

民間人が不発弾を掘り当て爆死するなど、あつてはならない。

不発弾の処理は北海道に駐屯する師団や不発弾処理の為に応援として派遣された工兵隊に委ねられ、避難をした民間人を順次帰還させ始めた。

特に被害の少ない西部は既に各種の生産が始められている。

北海道の防衛は、4個師団から7個師団に増やされた。

段階的に兵力を増強し、最終的には10個師団を防衛に充てる予定だ。

装備の更新も今回の戦いで完了しているから、防衛用の施設を作ることに注力させられる。

そして、最後ではあるが時間稼ぎのために壊滅した旧第96歩兵師団の慰霊碑が雌阿寒岳の国立公園に建立された。

次に大震災について。

死者数は39万人にも上り、被災者は700万人に上った。

戦時中で疎開が進んでいるとは言え、未だに日本の首都は東京であり各種産業などが未だ盛んに行われているなどがあり、人口は集中している。

復興には、戦時中と言うこともありかなりの年数が掛かるとされている。

中代大将達や関係各所がそちらを引き続き担当してくれることになつており、俺は軍務に集中せよ、と言われていた。

聞いた話によると、どうやらこの際に煩雑で入り組んだ都内などを一気に区画整理することになっていたりとか。

確かに下町とかは訳が分からないぐらい道が細く入り組んでいたから焼け野原になりまっさらな今、やってしまおうと言う事らしい。

まだ爆撃は続いているが、やった方が良いのは確かだ。

他にも燃料不足による電力不足を補うために、水力、風力を中心に太陽光発電を大規模に進め始めた。

基本は農地開発やらで土地の少ない陸地ではなく、海上である。

発電を行う為に投入したエネルギーに対してどれだけの電力を回収し利用出来るか、と言うエネルギー効率と呼ばれるものがある。

普段我々が使っている火力発電は、エネルギー効率が石炭だと大体40%前後しかない。

簡単に言えば、6割ものエネルギーを利用出来ない。

ところが、水力発電は80〜90%、風力発電は60%ほどとエネ

ルギー効率が良い。

確かに火力発電も様々な方法で効率を上げてはいるが、そもそもの問題として燃料が無ければ意味が無い。

しかも燃料の輸送の関係から沿岸部に作らなければ輸送コストが掛かる。

それに比べて水力発電は取り敢えず設置が出来る場所があるし、風力に関しては洋上に設置すれば良い。

火力発電よりも爆撃を受けた時に安全であるし、修理に金が掛からない。

原子力発電は33%でしかないが、発電量が桁違いだから使われている。

今の日本は爆撃の危険があり全面禁止、燃料棒に使われる酸化ウラン、酸化プルトニウムが手に入らないから使われていない。

仮に運転したとして、爆撃を喰らったら広範囲に放射線物質が撒き散らされる。

どれだけの被害が出るか想像も付かないほどだ。

除染作業に掛けられる人手は無い。

予定されていたフィリピン奪還作戦は2年間の延期が決定され再来年の秋に実施を予定している。

長期間の任務でボロボロになった艦隊を全てドックに入れ、念入りにオーバーホールを行いつつ大規模な改装を行う予定だ。

改装の予定としては、速力向上を狙い全艦全てが機関部の大幅な改修、新型の機関に換装する。

更には対空兵装の増強、軽巡全てを防空用に改装する。

対潜装備の更新なども並行して行われる予定だ。

具体的には軽巡の主砲を全て長10cm砲に換装し、対空機銃を更

に増設。

他艦の高射砲も全て長10cm砲に換装が予定されている。

これによって艦隊の防空能力の向上を狙う。

先んじて、損傷の修理と同時に機関の換装を終えた長門が公試で叩き出した速力は30・7ノットと言う改装に入る前の金剛達に並ぶほどの高速力を叩き出した。

長門が受けた改装は他にもあり、主砲を45口径から50口径の長砲身に換装。これにより貫通力と射程が伸びている。

電探なども増設されている。

主砲の長砲身化は他の戦艦も同様に行われており、全体的な攻撃力の向上に成功している。

敵のル級や夕級、戦艦棲姫などを3ノット程度上回り、最も強力である戦艦水鬼より3ノット程度劣る速力を41cm砲を搭載しながら獲得したことで、大和と武蔵が未だ戦列復帰が望めぬ今、走攻守全てが揃った名実ともに日本海軍最強と言える。

空母も機関の改装に加え飛行甲板の延長、格納庫の拡張を進めている。

他にも開発中であつた艦載機用発射カタパルトが漸く完成し、実戦投入レベルになつたのでその設置も行っている。

火薬式から油圧式に改められている。

火薬式は死人が出る事故を起こしてからも開発は続けていたが、どうやっても必要な加速を得るためにはどうしても機体と搭乗員に過大な負荷を掛けてしまうことから中止。

同時に開発されていた油圧式カタパルトは当時、圧力不足や油漏れと言つた技術レベルの不足があつてどうしてもそれらを解決せねばならなかつたが、欧州の技術者の協力で解決。

実験や耐用試験も全て合格。

結果的に全空母が装備を予定しており、鳳翔以下軽空母にも搭載される。

これにより滑走距離の問題で搭載されていなかった烈風が零戦から機種更新されることが決定している。

ともかくカタパルトは技術協力が無ければまず完成しなかつただろう。

これにより運用上の制約、停止状態でも発艦が可能になったし艦首を風上に立てる必要も無くなった。

とは言え機体に負荷を掛けることになるので、今までより整備が必要になるがそこは整備兵を増やすことでどうにかする。

整備兵の教育もそれなりに進んでおり、若干名ならば増やすことが出来る。

軽空母の鳳翔以下は上記の改装に加えて、艦橋を島型艦橋に改められる事となった。

それにより艦載機の搭載数と飛行甲板が延長され、格納庫のスペースも広くなる。

とは言え折り畳み翼を装備しているが機体が大型化しているのと、十分なスペースを確保する為に搭載機は1個小隊分が増えた程度だ。

飛行甲板の幅の広さを確保するために隼鷹や飛鷹、大鳳、信濃と同じように海に迫り出した形の島型艦橋と煙突を一体化させている。

今は鳳翔と龍驤が軽空母の中では入渠中で、速力も大幅に向上が予定されている。

これで1線級の実力を有することになる。

船団護衛に限らず、いざとなれば艦隊戦に加わることも十分に可能だ。

まあ、防御力は相当低いので爆弾1発で致命傷に成り得るが、狙われるのは兎に角目立つ大鳳か信濃、それか旗艦である飛龍ばかりだ。

一航艦の後方においておけば被害を被ることはまず無いと思う。

改装のお陰で鳳翔に限らず軽空母は艦型が丸っ切り変わっている。

艦型を見ただけで名前を答えろと言われても分かるまい。

全艦を1年半以内に大規模改装を完了させ、半年間の訓練期間を設ける。

工廠には毎度のことながら面倒を掛ける。

それに加えて、修理中であつた艦や訓練中だつた艦が次々と艦隊に編成されている。

1 航艦と第1護衛艦隊のそれぞれに編成されたのは、
戦艦

比叡 榛名 山城

重巡洋艦

足柄 筑摩 加古

軽巡洋艦

大井 阿賀野 酒匂 由良

駆逐艦

磯風 時津風 山風 初春 若葉

綾波 夏雲 暁 雷 電 長波

大波 涼波 柿 梨 雄竹

潜水艦

伊154 伊158 伊174 伊175

伊176 伊178 伊179

給油艦

神威 速吸 鷹野

龍舞 塩瀬 高崎

給料艦

間宮

の以上が正式に編成された。

北海道戦線が始まり、編成出来ていなかったのだ。

まさか一緒に艦隊運動訓練をやっていないのに編成し、衝突事故なんて起こつたら目も当てられない。

今までは1航艦の代わりに本土防衛に就いていた。

既に修理と改装を終えており、1航艦と第一護衛艦隊の穴埋めをしている。

それが済んだならば、それぞれの正式な配置に戻る。

潜水艦は第4潜水艦隊として新たに編成され既にフィリピンの通

商破壊任務に就いている。

戦艦 2 隻

大和 (浮揚作業中)

武蔵 (浮揚作業中)

駆逐艦 3 隻

江風 (訓練中)

初雪 (訓練中)

夕雲 (訓練中)

海防艦 7 隻

占守 (訓練中)

国後 (訓練中)

石垣 (訓練中)

松輪 (訓練中)

佐渡 (訓練中)

対馬 (訓練中)

三宅 (訓練中)

それでもまだこれだけの艦が訓練中である。

理由は単純に、北海道戦線が始まったことで修理に充てられる筈だった資材が別に回されたからだ。

漸く修理が完了しても、乗組員不足で訓練もずれにずれ込み、まだまだ途上だ。

大和と武蔵に至ってはまだまだ浮揚作業が終わっていない。

来年の初めには作業が完了し、修理に入れるとのことだが修理には相当時間が掛かるらしく、大規模改装に掛かる人員以外を全て修理に充てる予定だが、それでも1年以上は必要だそうだ。

修理はまだしも、訓練はフィリピン奪還には間に合わないと思っただけの方が良いと言われている。

最悪、修理だけ終わってれば艦隊戦に参加させるのは無理でも対地攻撃に参加させるぐらいは出来よう。

対地攻撃とは言え実戦は実戦だ、良い経験になる。

艦隊の編成は以下の通り。

第一機動艦隊

第一航空戦隊

飛龍 蒼龍 瑞鶴 加賀

第一戦隊
戦艦

金剛 霧島 長門 リシユリユ

重巡洋艦

鈴谷 ザラ ポーラ 筑摩

第一水雷戦隊

軽巡洋艦

能代 阿賀野

駆逐艦

秋月 照月 Z3 初月 陽炎

雪風 浦風 萩風 初梅 初雪

浦波 菊月

第二航空戦隊

大鳳 信濃 阿蘇 葛城

第二戦隊

戦艦

ビスマルク テイルピッツ ヴァンガード

重巡洋艦

熊野 アドミラル・ヒツパー プリンツ・オイゲン

第二水雷戦隊

軽巡洋艦

矢矧 酒匂

駆逐艦

若月 霜月 春月 村雨 時雨

響 朧 綾波 夏雲 暁 雷

電 長波

|||||

第三航空戦隊

隼鷹 飛鷹 グラフ・ツエツペリン アークロイヤル

第三戦隊

戦艦

リットリオ ローマ 比叡 榛名

重巡洋艦

青葉 古鷹 足柄

第三水雷戦隊

軽巡洋艦

多摩 由良

駆逐艦

宵月 満月 Z1 初雪 浦波

菊月 望月 望月 Z3 村雨

霜月 春月

|||||

第一護衛艦隊

第四航空戦隊

鳳翔 大鷹 神鷹

第四戦隊

戦艦

日向 山城 クイーン・エリザベス

ウォースパイト

重巡洋艦

那智 羽黒 愛宕 摩耶

最上

第四水雷戦隊

軽巡洋艦

名取 天龍 龍田

駆逐艦

花月 涼月 グレカール

リベッチオ ジャーヴィス

マエストラーレ 東雲 白雲

浦波 狭霧 子日 有明 海風

江風 峯雲 霞 藤波

――

第二護衛艦隊

第五航空艦隊

軽空母

海鷹 龍驤

第五戦隊

戦艦

ラミリーズ ネルソン

デューク・オブ・ヨーク

重巡洋艦

キャンベラ ゴトランド

デ・ロイヤル 加古

第五水雷戦隊

軽巡洋艦

鬼怒 神通

駆逐艦

沖波 清霜 白雲 有明

長月 荒潮 親潮 黒潮 竹

桃 椿 楓 樺 楠

大波 涼波 柿 梨 雄竹

第一補給艦隊

軽空母

千代田

重巡洋艦

最上

軽巡洋艦

名取 鬼怒 大井

駆逐艦

白雲 有明 長月 荒潮、親潮、黒潮

磯風 時津風 山風 初春 若葉

給油艦

神威 速吸 鷹野

龍舞 塩瀬 高崎

給料艦

間宮

以上のように編成された。

新設されたのは第二護衛艦隊と第一補給艦隊だろう。

長い間本土防衛艦隊を務めていた、

重巡

最上

軽巡

名取 鬼怒

駆逐艦

白雲 有明 長月 荒潮 親潮、黒潮

以上の艦は新たに編成された第一補給艦隊の給油艦と給料艦の直接護衛を務める。

千代田を航空戦力の要として編成し、それによつて第二護衛艦隊の戦力低下が懸念されたが基本的には、第一、第二護衛艦隊と共に各地へ赴く為に変わらない。

第一、第二護衛艦隊はバラバラに動く、ではなく単純にリスクマネジメントの観点から分けた。

空母機動部隊の護衛を務める為に高速戦艦は一航艦に加えられ、山城は長門の代わりに第一護衛艦隊に編成されている。

全体的に戦力が向上し、幾らか余裕が出来たがそれでも戦力不足は否めない。

以上が艦隊編成などに関わることだ。

そして最後に、初となる捕虜の戦艦棲姫のことだ。

これはかなり厄介な問題だ。

まず扱いをどうするか。

捕虜と言つても、特殊過ぎる為にどうすれば良いか全く見当が付かないと言うのが正直なところだ。

中代大将に一任されている以上、無碍な扱いは出来ない。

「提督、彼女をどうされるおつもりですか？」

「それを今悩んでいるんだ……」

1日の執務を終えて、一息吐くためのお茶を淹れて来てくれた鳳翔に問われて、頭を抱える。

どんな処遇が正解なのか、まるで分からん。

「提督、もし宜しければ直接彼女に直接お会いしてみてもは？」

「俺がか？」

「はい。まだ捕虜尋問も行われていませんし、丁度良いかと。勿論、護衛は付けて安全を確実にした上で、ですが」

「珍しいな、鳳翔がそんなことを言うなんて」

「先ほど彼女と面会をしてきましたが、どうも敵意をらしい敵意を感じられませんでした。勿論警戒心はありますが……、なんとさえ良いか分かりません。ですが、それから処遇を決めても良いのでは？」
そう言う鳳翔は、堂々としている。

普段は自分を前面に出すようなことがない鳳翔が、こうまで言うのだから余程なのだろう。

「鳳翔が言うなら、そうなんだろう。お前は人を見る目がある」

「いえ、そんなことはありません。提督に関してはまるで見誤っておりましたので」

「……何の事か分からんな」

「提督、昨日徹夜されましたね？」

「……」

「しかも、ゴミ箱の中からこんなものを見つけました」

「気のせいだ」

「あら、おかしいですね。では誰が食べたんでしょう？」

不味い、完全に誘い込まれた。

何故だ？昨日徹夜したのが何故バレている？しかも腹が減って隠し持っていたレトルト食品を食べたことまでバレている。

ここを守る衛兵達にバレないよう巡回のタイミングなどは完璧に頭に叩き込んで電気を消したりしていたのに。

昨日、ついつい書類を整理していたら手が止まらなくなってしまったのだ。

それで夜食にレトルト食品を食いながらやっていたのだ。

これは不味い、非常に不味い。

鳳翔の目が全く笑っていない。これは本当に不味い。

明日は休みだから説教コースだぞ。

「申し訳ない……」

「全く、何度言えば分かるんですか！」

「はいっ！」

鳳翔の雷が落とされた。

暫くの間、入渠で鳳翔が俺の秘書艦を務めている。

艦の改装が終わり次第習熟訓練を開始するので、それまでは俺の秘書艦を務める。

鳳翔を隣に控えさせ、その前後に武装した兵士四人が控える。

プレハブ執務室のすぐ隣にある、収容施設へ向かう。

鳳翔に言われ考えてみた結果、戦艦棲姫と直接話し、尋問することにしたのだ。

はてさて、鬼が出るか蛇が出るか。

予想は出来んが、やってみよう。

第61話

収容施設へやってくる。

とは言えプレハブ執務室は目と鼻の先なので、やってきた、なんて程ではない。

「ご苦労、捕虜の尋問を行う予定だ。通してくれるか」

「お疲れ様です。それでは此方に名前と識別番号、階級を記入して下さい」

「手帳は？」

「お預かりします」

衛兵に軍隊手帳を渡し、クリップボードに挟まれた用紙に言われたものを書く。

俺以外の鳳翔、護衛4人もそれぞれ手帳を預け同じように書いていく。

「本人確認が完了しました。何か危険物をお持ちでしたら此処でお預け下さい」

「何も無いな。護衛もか？」

「万が一がありますので、拳銃ならば持ち込んで構いません。小銃は不可です」

「そうか。聞いたな、預けてやれ」

「「はっ」「」」

小銃を預け、皆を連れて収容施設内に入っていく。

建物自体はプレハブ平屋で、敷地面積もそこそこ広い。

施設内には厨房も用意されており、食材が手に入れば自分で食事をすることも可能だ。

内装はプレハブではあるが、ある程度は過ごしやすいよう裝飾されている。

プレハブの中に入ると、戦艦棲姫が椅子に腰掛け支給された服を着

て何やら本を読んでいる。

しかも軍事関係のものではなく、個人の趣向が色濃く反映される雑誌だ。

他にも料理に関するものやら多岐に渡っているらしい、本棚には様々な書籍が並んでいる。

此方に気が付いたらしい、ちらちらと警戒しながら本を読み進めている。

それを確認し、プレハブをぐるりと見て回る。

生活空間とは、基本的に他者から与えられたものだと思われ、者に對する待遇などが現れる。

パツと見るに、不当な扱いをされている訳では無さそう。

部屋の中をぐるりと見回り、鳳翔に聞いてみる。

「何か違和感はあるか？」

「特にはありませんね。汚れも毎日掃除をしている程度のものでし、プレハブですから何かあっても隠せる場所はありません」

「ならば、大丈夫か。それじゃあ、行こうか」

「はい。提督、捕虜とは言え女性ですから気を使うのはお忘れにならないで下さいね」

「分かっている。捕虜に對するセクハラ、セクハラになるかは分かんが、それで憲兵にしよう引かれるのは勘弁だ」

深海棲姫が座るテーブルへ近づく。

既に顔は知っている鳳翔が従っている事から、上位者である事は察しているらしい、立ち上がり敬礼をする。

答礼をして、座るように促して俺と鳳翔も椅子に腰掛ける。

しかし驚いた。

深海棲艦にも敬礼などがあるとは。

深海棲艦に付いて分かっている事は少ない。

しかし我々の常識である彼女らとは意思の疎通が全く出来ないものだと言う認識は、今ので丸っ切り覆るわけだ。

戦艦棲姫の見た目は、何とか随分と人間に近い。

違う部分もある。

顔立ちは、艦娘達同様端正なもので、もし街中に紛れたら紛れることなど目立って出来ない。

もし居たならば騒ぎになるだろう。

黒髪で、身体付きなどは凡そ人間の、スタイルの良い女性と大差ない。

まず違うところと言えばパツと見てすぐに視線が寄るであろう額から生えている角だ。

何なのかは分からないが、取り敢えず角だ。

他には瞳の色が人間とは違う。

真紅とも言えるような色で、まず人間ではあり得ない。

人間の瞳の色が赤になるには先天性白皮症、所謂アルビノと呼ばれる人々でなければ赤の瞳を持つことは出来ない。

カラーコンタクトを挿れれば、まあ可能だがどう見てもカラーコンタクトでは無いのは確かだ。

他には肌の色だろう。

何と言うべきか、色白なんてレベルではない。

生気が無い、と言うのだろうか、白のような、とても薄い灰色の様な肌色をしている。

身体の中に盗聴器などが仕込まれていないかを確認する意味合いも持っていた身体検査で異常無し、と言う結果を知っていなければ尋問とかよりも即座に軍医を呼んで、必要ならば軍病院に担ぎ込ませていたところである。

不躰にならないようパツと見るだけに留め、彼女の顔を見る。

「初めまして、私は日本陸海軍大将、湯野だ。貴官の名前や階級は、あるか？」

「戦艦第1137号、ト呼バレテイタ。捕虜番号、モ言ウカ？」

名前と言うより、識別番号のようなものか。

どうやら個々の名前などは無いらしい。

彼女の捕虜番号は1番である。

1人目の捕虜であるのだから当然である。

「いや、それは良い。では私と会話する意思はあるか？」

「……」

小さく頷いた。

「では、単刀直入に聞こう。君達は、一体何者だ？」

「何者、トハ？」

不思議そうに首を傾げ、聞いてくる。

まあ確かに俺でも何者か、と聞かれたらすぐには答えられない。

「どのような存在であるか、どこから来た、とかそう言う事だ」

「ワカラナイ。気が付イタラ私ハ居タ」

「君は、自分のことについてどれだけ知っている？」

「私ハ、戦艦第1137号。ソレ以上デモ以下デモナイ」

「なるほど……」

本当に、それぐらいしか知らないらしい。

「では、何故君は我々に投降した？ 話に聞くと、臨検をした際に君は一切の抵抗も無く、此方に投降したと聞く」

「貴方達ト、一緒。私達ハ戦ウ為ニ生マレタ。ダケド一枚岩ジャナイ」
「なるほど、そう言う事か」

要は、深海棲艦にも戦いが好きな奴と、戦いが嫌いな奴に別れている、そう言う訳だ。

「君は、戦いたくない、そう言うことだな？」

「ソウ」

「では、何故君達は我々の北の地に攻め込んで来た？」

「北ニハ戦イガ嫌イナ者ガ集メラレテイル。ダガ南デ大キナ損害ヲ食ラッタカラ補充ノ為ニ引キ抜カレタ。後カラ送ラレテ来タノハ戦イガ好キデ人間ヲ凄ク憎ンデイル者バカリダッタ」

「中枢カラノ命令デ、攻撃ヲ仕掛ケル事ニナツタ。最初ハ艦隊デ空襲スルダケダツタノニ、皆ハドンドン計画ヲ大キクシ始メタ」

「結果、北海道への上陸と言うことか」

「ソウ。私以外ハ皆戦イヲ好ンデ、人類ガ嫌イダツタ。命令ダカラ戦ツタケド、モウ戦イタクナイ。戦イハ凄ク怖クテ、嫌イ。私ハ、出来損ナイナノ……」

どうやら、我々が南方方面で実施した作戦で敵の艦隊を沈め続けた

結果、双方の主戦場である南方の戦力を穴埋めする為に北方から戦力を引き抜いたらしい。

それによって、北方に新しく送られた戦力はその殆どが交戦的な者ばかりで、最終的に北方の戦力は彼女以外は俺達が想像する深海棲艦そのものになったらしい。

恐らくだが、深海棲艦の中枢とやらには北方を戦うのを嫌がる連中を軒並み戦いで死なせ、自分の人類への攻撃と言う命令に忠実に従う部隊へと変える意図があったのではないだろうか。

それから話を聞き続けていると、色々と話してくれた。

部隊の入れ替えによって交戦的な部隊になった北方軍は、中枢からの命令で攻撃計画を練ったそうさ。

しかしその計画はどんどん膨れ上がり、当初はゲリラ的に空襲を行って打撃を与える程度のものであったのが、最終的に北海道全域の占領、本州侵攻の足掛かりとする橋頭堡の設置を行うと言うものにまで膨れ上がった。

戦力的な理由と、これまでの南方での負け続きに嫌な予感を感じていた彼女は反対したらしいが、全く聞き入れられるどころか艦隊旗艦すらも降ろされることに。

北海道侵攻が開始され、我々の反撃が始まると南方に行った仲間達と同じ運命になると悟ったらしい。

しかし海戦では彼女だけは残ってしまい、生き残って戦い続けるよりも死を選んだ。

自ら機関の火を落とし、動けなくして攻撃で沈むのを待っていたそうだが、攻撃を喰らっても何故か沈まず、そこに臨検隊が乗り込んできたと言うことらしい。

そして抵抗もせず捕虜となり、何の因果か彼女だけ生き残った。

そう言う事だそうさ。

「……なるほど」

「私ヲ、ドウスル？ 貴方達カラスレバ、私ハ味方ヲ殺シタ怨敵」

「いや、どうもしないが」

「へ？」

「君は、我が軍の捕虜である事は間違いない。申し訳ないが、君が捕虜を装った内通者を疑って電波の発信等の監視を今までやらせて貰っていたが、それも無い。君は、正当な手段と手続きを踏んだ上で我々の捕虜になっている」

「ドウイウコト……？」

「捕虜ではあるが、君を殺したりだとか、不当な扱いをするつもりはない、と言うことだ。話して分かったが、嘘をついているようでも無さそうだしな」

「私ハ、生キテイラレル？イイノ？」

「ああ、勿論だとも。日本陸海軍大将、湯野勝則の名に置いて君の生命、権利、捕虜と言う制限されたものではあるがその中に限り自由を保障しよう」

「……アリガトウ」

「良い。この敷地内であれば自由にして構わん。何か欲しい物があれば俺か、この鳳翔に言うといい。可能な限り用意させよう」

彼女は頷く。

理解して貰えたらしい。

よほど生きていられる、戦わなくて良いことが嬉しいのか泣き出してすらいる。

これで全て演技だったならば、大役者に間違いない。

「鳳翔、浜谷曹長」

「はっ」

「はい」

「俺の名で彼女の生命、権利、自由が保障されていることを通知したまえ。もしそれらが侵害された場合、厳罰を以て対処する」

「了解しました」

「それでは、話はこれで終わりだ。何か質問などはあるか？」

「ア……」

「どうした」

「ソノ、一人ダト、ソノ、寂シイ……。ダカラ、偶ニデイイ、話シ相手、欲シイ」

「成る程……。分かった」

確かに捕虜仲間が居るならば別だが、一人で暮らすには広いプレハブにたった一人だ。

人恋しくなるぐらいには寂しいのも分かる。

メンタル的な問題であるから頷く。

すると鳳翔がとんでもないことを言い出した。

「提督がやられては？」

「はっ？」

「終業した後に彼女の元を訪れて、話し相手になってあげるんです。そうすれば、提督が隠れて残業したり、徹夜したりとかありませんし」「絶対に後半が目的だろう、それは」

「あら、話し相手を欲しがっている彼女の為です」

「まあ、別に俺は良いが、問題は向こうだろう。良いのか？」

「別ニイイ」

「ほら、そう言っていますし」

「……分かった分かった。身から出た錆ということか」

今までの徹夜やらが巡り巡ってこんなことになるとは……。

嫌なわけではないが、まさかである。

「私や隼鷹ちゃん達も訪ねますから、宜しくお願いしますね」

鳳翔が言うのと、頷いた。

それから俺達は収容施設を出て、プレハブ執務室に戻る。

彼女の報告書を作成し、敵意等無く協力的であること、俺の庇護下に置くことで最悪の事態を避けることなどを書き連ねた。

そして彼女の事は機密条項であり、全兵士が口外を厳禁とすることとした。

もし存在が外部に知られれば、どうなるか分からない。

国民感情が爆発して襲撃されたりしたら、生命の保障は無い。

翌日から、持ち回りで彼女の元を訪れることになった。

しかし名前が無く呼び辛いとのこと、名前が考えられた。

形式上、鹵獲艦ということなので戦艦の艦名である旧国名から引張ってくることになった。

結果、安芸^{あき}となった。

これならば呼びやすく、そして普通の名前っぽいとのこと決定された。

対話から3ヶ月。

安芸は問題を起こすでもなく、ごく普通にして過ごしている。

生活としては、労働が無いので差し入れられたりした本を読んだり、料理をしたりと一日を収容施設の中で過ごし、夕方5時になると俺や皆が話をしに行く、と言うルーティーンになっているらしい。

俺達が行くと嬉しそうにする。

一日誰とも口を聞かずにいるというのは中々に辛いものらしく、話すのが何よりも楽しみだと言っていた。

フィリピン奪還 第62話

1年が過ぎた。

艦の大規模改装は順調に進んでおり、4分の3程度が終了して訓練に移っている。

時間が掛かる大型艦の改装は全て終えており、残りは一部の軽巡と駆逐艦、それに給油艦と間宮のみである。

この調子であれば全艦が4ヶ月ほどで改装を完了し、訓練に移ることが出来る。

フィリピン奪還までには、8ヶ月もある。

訓練をして練度を高めるには十分な時間だ。

各方面に対する輸送船団の護衛は第一護衛艦隊が順次改装に入り続けている為に、空いた穴を埋めると遠洋航海訓練の為に一航艦の各艦が変わる変わる入っている。

防空戦闘なども発生するから新兵達の訓練にはうってつけだ。

護衛艦艇には一切目もくれずに輸送船を執拗に狙う敵機は、確かに狙わないと言う油断は出来ないにせよ対処しやすい。

改装した結果、戦艦は軒並み速力を30ノット程度に向上。

金剛	32・3ノット
霧島	31・7ノット
長門	30・7ノット
リシユリユー	33・4ノット
ビスマルク	32・6ノット
テイルピッツ	33・1ノット
ヴァンガード	32・2ノット
リットリオ	32・9ノット

ローマ	33.0ノット
比叡	32.4ノット
榛名	31.8ノット
ラミリーズ	28.2ノット
ネルソン	28.5ノット
デューク・オブ・ヨーク	30.9ノット
日向	30.5ノット
山城	29.2ノット
クイーン・エリザベス	29ノットノット
ウォースパイト	30.3ノット

金剛など、元々速力が速い艦は、全てではないが最高で33ノットを超える速力を叩き出している。

空母も軽空母を含めて全て30ノットを超える速力を有する事になり、速力不足による回避などの困難を避けることが出来る。

瑞鶴に至っては全力運転で37ノットもの、小型艦艇で特別製とも言える機関を載せている島風を除けば、海軍最速の速力を発揮し俺達の度肝を抜いた。

軽空母は、鳳翔同様に島型艦橋と煙突を一体化させ甲板下に艦橋があった時よりも比べるまでもないほどに視界を確保出来る。

これにより艦橋にいる見張り員が直接操舵手に敵機の情報を伝えられ、回避などを容易にする。

空母は飛行甲板の長さ、幅を確保しつつ格納庫も大きくしている。

軽空母の搭載機数は4機増えた程度であるが、全体では24機、空母1隻分の戦闘機が増えたことになる。

34機程度の艦載機で、12機を流星、残りを全て烈風と言う艦載機であるが目的が対艦攻撃ではなく、船団護衛であるのでまったく問題ない。

対空機銃や対空砲も全て更新され、より強力な対空射撃をすることが出来るようになった。

油圧式カタパルトの装備により、発艦に掛かる時間が大幅に短縮された。

攻撃隊の規模にもよるが、空母1隻が一度に出せる最大規模の攻撃隊だと、全機の発艦と空中集合に30分以上掛かるがカタパルトを使えば加賀の100機を超える艦載機全てを発艦させても30分程度で済む。

半分程度の機数と、全機で同じ時間だ。

今までは飛行甲板に一々艦載機を並べてから風上に向かって航行しなければならず、運用上の制約があった。

しかしその様なくなることになる。

停泊状態でも発着艦訓練が行えるから、より訓練がやり易くなった。

態々艦を航行させる必要も無く、燃料消費が抑えられその分敵潜に狙われる危険性が低くなる。

軽空母の艦載戦闘機が全て烈風に置き換えられたことで、零戦で問題になっていた敵機に対しての速力不足や攻撃力不足は改善され、より輸送船をしつかりと守ることが出来るようになる。

既に効果は表れており、烈風は20mm機銃4艇を搭載しているから一斉射撃を喰らえば幾ら頑丈な深海棲艦機と言えどもタダでは済まない。

単発機ならば撃墜は免れないし、4発重爆でもしつかり狙えば撃墜出来る。

切り替えによって全門射撃と2艇つつの射撃も可能で、継戦能力も高い。

それだけで長い間敵機の邪魔をすることが出来るから爆弾の命中率にも影響してくる。

被弾損傷した時にはより速く、より遠くに逃げることも可能だ。

今までは追撃されればまず逃げられないと言う危険が伴っていたが、30ノットもあればまず逃げられる。

逃げられなくとも、距離を詰められ難いしその間に応援が駆け付けられることだって出来る。

ただ、消費燃料が多くなったりとメリットばかりではないのは確か

だ。

フィリピン奪還の準備も着々と進んでいる。

フィリピン奪還には12個師団を擁する陸軍第23軍が編成され、参加部隊はカリマンタン島などで上陸戦、ジャングル戦を訓練している。

今回は海軍陸戦隊が先発隊として上陸を行うのではなく、最初から陸軍が上陸し確保、海岸堡を構築する。

海軍陸戦隊は6個連隊を投入予定だが、その目的は強襲上陸や河川遡上などによる作戦行動だ。

フィリピンには大小様々な川が流れている。

それを使わない手は無い。

そこで河川を大発などを使って遡上し、戦闘地域の敵地後方を脅かすなどと言った作戦を全体の作戦の中に組み込んでいる。

なんせ馬鹿正直に平押しなんてまず出来ないし、態々戦力で確実に優勢な敵と正面から戦う理由も無い。

対ゲリラ戦の教育も行なっている。

対ゲリラ戦は、兎に角地道だ。

敵の拠点などの情報を収集し、偵察、索敵を行いつつ敵の拠点、構成人数、地形に関する情報を更に集める。

哨戒などで敵のゲリラ行動や移動を発見追跡し、強襲と伏撃で敵の後方拠点などの戦略上、必須である場所を徹底的に破壊していく。

本来、これらを行うには現地住民の協力が必要不可欠であるのだが、それは無いのであらゆることを我々だけでやらねばならない。

攻撃には航空機と地上部隊を連携させ、拠点攻撃には爆撃を行った後に地上部隊が確実に敵兵力を撃滅、拠点を破壊する。

ジャングルを丸々焼き払うなど、現実的ではない。

補給の問題もある。

ジャングルでの補給は兎に角厄介で、道を作りながらだと進軍が遅くなって仕方がない。

そこで、前線部隊には進軍戦闘を行わせ補給は、最早我が軍のお家芸ともなっている航空機による空中投下で実施する。

その間に補給拠点や道路を工兵隊や輜重兵隊が構築し、点を繋ぐようにしていくのだ。

補給線が一つだけだと、がやられてしまうとすぐに補給が寸断されてしまうので、主要な補給線を5つ構築していく。

そこから毛細血管のように各部隊に補給を行うのだ。

ただ、これだけ複雑だから補給が出来なかつたりと支障が出るのは簡単に予想出来る。

それに関しては各部隊に対して補給が行われない場合、やはり空中投下による補給を行う。

補給用に連山を30機、物資輸送投下用に専用化し専用の改造を施す。

輸送船は諸兵科連合科を進め、数多くの重機材を含むことから、戦時急造輸送船3隻＋戦車揚陸艦20隻の計26隻で1個戦闘団を乗せる。

1個師団につき、4個戦闘団を擁するから師団一つを運ぶのに104隻もの船が必要になる計算だ。

流石に全師団をいっぺんに運ぶのは輸送能力の関係上無理である。輸送船や輸送艦の数も限られているからな。

そこで、2個師団づつを輸送することになった。それでも208隻にもなるのだからとんでもない。

戦時急造輸送船が歩兵や工兵、輜重兵など重機材を持ち運ばない部隊を運び、第101号型輸送艦を拡大発展させた第200号型輸送艦を使用し戦車大隊や砲兵大隊と言った重機材を伴う部隊を運ぶ。

第200号型輸送艦は搭載能力

戦車 300 t
戦車用燃料 10 t
弾薬 10 t
糧食 20 t
真水 12 t
その他軍需品 12 t

と言う積載能力を持つ。

簡単に言えば戦車の輸送能力に極振りしたような艦艇だ。

他の物資の輸送能力が下がっているが、基本的にはこれだけの物資を運ぶことが出来れば10日間は戦う事が出来る。

その間にまた運べばいいと言う訳だ。

諸兵科連合連隊だと長つたらしく言い難い為に、戦闘団に改名された。

1個戦闘団は以下の戦力を有する。

1個パンター戦車大隊 第200号型輸送艦6隻

1中隊12両×3中隊 36両

V号弾薬運搬車 6両

兵員 約210名

1個歩兵連隊 輸送船1輸送艦2隻

装甲兵員輸送車 25両

トラック 20両

オートバイ 12両

ケツテンクラート 12両

兵員 2000〜2500名

1個砲兵大隊 輸送艦3隻

フンメル自走榴弾砲1中隊12両×3中隊 36両

砲兵観測小隊

オートバイ 12両

ケツテンクラート 12両

V号弾薬運搬車 6両

人員 約300名
 自走対戦車砲中隊 輸送艦3隻
 ナースホルン 24両
 V号弾薬運搬車 4両
 人員140名
 1個対空戦車大隊 輸送艦4隻
 ヴイルベルヴィント 12両
 オストヴィント 12両
 クーゲルブリッツ 4両
 V号弾薬運搬車 10両
 人員 140名
 1個整備大隊 輸送艦3隻
 整備機材多数
 100〜150名
 1個工兵中隊 輸送艦2隻
 V号架橋戦車 4両
 ベルゲパンター 8両
 ブルドーザー 5両
 トラック 20両
 70〜150名
 1個輜重小隊
 30〜50名

大体3700名前後が戦闘団に属する。
 全師団合わせて19万人ほどの戦力だ。

陸戦隊も合わせれば陸上戦闘戦力だけで20万人を超える。

他の支援部隊を含めれば更に増える計算だ。

陸戦隊は機動力が重視され、戦車などは装備せず、精々偵察用のオートバイやケツテンクラート、トラックや装甲兵員輸送車を装備するぐらいだ。

大まかな作戦の流れは決まっている。

作戦開始時、勿論こちらのの上陸を阻止する為に敵艦隊との戦闘になるだろうと想定される。

海戦に勝利したならば、上陸である。

まず最初にルソン島の奪還を目指す。

アパリと言う町があった場所と近辺の海岸線に対して艦砲射撃を実施した後に、カガヤン川を挟んで2個師団を上陸させる。

アパリを海岸堡にしつつ、速やかに内陸部へ向けて前進を開始。

勿論、陸戦隊がカガヤン川を10kmほど遡上した場所にある中洲を確保した後に、3個連隊が分かれて海岸から進軍する友軍と共に敵の後方を脅かして挟撃する。

敵を包囲殲滅したならば3個師団ほどの兵力だから前進はそこで一度停止し、後に続く師団を待つ。

とは言えここまで数日は掛かるとされているから、第二波が上陸する頃には再び前進を開始する予定だ。

ジャングルで戦わねばならないから、機動戦は出来ない。

フィリピン奪還は迅速性よりも確実性を優先する。

部隊の規模が規模がだから一箇所に集めておくことは難しい。あきつ丸や神州丸を含む、輸送船団をパラワン島と沖縄からの分散出撃になる。

沖縄からの部隊は太平洋側に展開し、パラワン島の部隊は南シナ海側を展開、担当する。

沖縄からの船団は一航艦が、パラワンからの船団は第一護衛艦隊と第二護衛艦隊が担当する。

アパリ上陸からタイミングをずらしてビガン、と言う場所に上陸する。

手筈は同じだ。

ビガンに上陸する陸戦隊はラグベン川を遡上する。

そしたらば、タヤバス湾に出るまでの奪還制圧を進める。

そこまでが第一段階だ。

第二段階

残ったルソン島南部とポリロ諸島、ミンドロ島含むカラミアン諸島、ボアク島、ブリアス島を奪還する。

第三段階

タブラス島、シブヤン島、パナイ島、ギマラス島、マスバテ島、ティカオ島、サマール島までを奪還。

第四段階

ネグロス、セブ、ボホール、レイテなどの島々を奪還する。

第五段階

最後に、ミンダナオ島含めた奪還地域以南を奪還する。

フィリピン奪還は、五段階に分けられて進められる。

上陸地点が分かれており、各個撃破されることを防ぐ為に敵艦隊との戦闘までは行動は共に行う。

最初にアパリへ、次にビガンへと上陸する。

海戦の結果次第だな、これは。

フィリピン奪還が成功した後に、少しの準備期間を再度設けてからスラウエシ島と小スンダ列島を奪い返す。

敵艦隊が出て来れない内にやるのだ。

我々のシーレーンの安全を確実なものにする為に2ヶ所の奪還は必要不可欠。

スラウエシ島や小スンダ列島自体が資源地である事も重要だ。

それ以上は奪還を進めない。

急激に奪還地域が増加しても防衛に割ける戦力の問題などがあるからだ。

小スンダ列島までを奪い返せば、オーストラリア北東部のダーウィンやダービーに直接上陸することが可能だ。

オーストラリアを奪い返す事が出来れば、豪州そのものを一大拠点

にする事も可能だし、豪州から直接航空攻撃で圧力を加えられる。そうなると南太平洋での作戦がやり易くなる。

もしオーストラリアと言う国がまだ、生きているのなら我が軍に掛かる負担が随分と減るんだが……。

補給も豪州で食料生産が出来るようになれば楽になる。

サトウキビや小麦と言った主食類、他にも牛肉などのタンパク質の生産が軌道に乗れば食料不足を解決する事だって可能だ。

3000kmも輸送しなくて済む。

カリマンタン島は無理にせよ、ジャワ島などどこでも良い、1箇所でもいいから補給を任せればこちらはその分負担が軽くなる。

しかし仮に生きていたとして内陸部、豪州政府と軍、民間人が撤退した中央部までの距離は1000kmにもなる。

今でさえ日本から4000kmもある補給線を維持するので大変なのに、更に1000kmも伸びるのは、かなり辛い。

それに初期投資にどれぐらい掛かるかと言うのも問題だ。

最初から頼れるような訳がない。

初期の段階は、間違い無く豪州政府から防衛の為の部隊派遣、武器弾薬の貸与や食料医薬品の供給を懇願されるだろう。

ただでさえ我々も兵力不足で頭を悩ませているのだ、どれだけの戦力などを抽出出来るか分からない。

予定では、ニューカレドニアの奪還も目指している。

やはり資源の問題で、ニッケル、コバルトの世界有数の産地だ。

他にもクロム、マンガン、ラテライト、銅、鉛、亜鉛、石膏、水銀、アンチモニー、金、石炭、褐炭など様々な資源を産出する。

豪州と、ニューカレドニアを奪還することが出来れば資源問題は解決する。

あとはそれらを利用する為の生産設備などを揃えればいい。だが問題がある。

まず第一に挙げられるのが、距離だ。

豪州までの距離は東京から6800km

カリマンタン島4654km

ジャワ島5786km

スマトラ島5627km

これだけの距離がある。

しかし豪州はそれより直線距離で1000kmも長く、ニューカレドニアも6851km離れている。

これはあくまでも、直線距離でしか無く、太平洋のパラオやトラックと言った要衝を奪還していない我々には、豪州へ向かうにはカリマンタン島などを經由する必要がある。

カリマンタン島を經由した場合、大体4500km離れている。併せて11300km。

フィリピン経由でもニューカレドニアまで7600km。

とんでもない距離だ。

しかし戦争に勝つ為にはやらねばならないと言うのだからなあ……。

トラック泊地やウルシー環礁、エニウエトク環礁、ウエーク島などが泊地として使えるならば随分と楽になるが、それらの場所には深海棲艦の一大拠点である棲巣が構築されている。

奪還にはそれを叩かねばならない。

トラックにせよウルシー環礁にせよ、奪還しても使えない。

理由はマリアナだ。

あそこは誰もが知っている通り、B-29の拠点だ。

マリアナを叩くか奪還しなければ本土と同じ様に連日爆撃をされて、艦艇の停泊など出来ようもない。

今の我が軍ならばマリアナやトラック泊地の奪還ぐらいなら出来るのだが、問題は果たして奪還をしたとして維持し続けられるか？だ。

ただでさえ補給線は南方方面に対する補給で、てんてこ舞いの大忙しなのに、別方面に対する補給の必要性が出てきたら破綻するのは判り切っている。

それでは本末転倒だ。

維持までを考えるなら、どちらかが精一杯だろう。

となると、基地として機能させるにはトラックは無理、マリアナも投入兵力不足の問題で不可能。

とは言えそれでは豪州奪還が進まない。

海軍だってそれは痛い問題であることは重々承知の上で豪州奪還の足掛かりに出来る場所はないものか、と探し続けている。

実を言うと、全く無いわけではない。

奪還と維持が出来なくも無い、と言う場所はパラオである。

ウルシー環礁でない理由は、まずマリアナに近過ぎること。

それに比べパラオはマリアナよりも遠く、他の泊地に比べ防衛が楽なのだ。

ウルシーなどは大きな島が無く、陸軍部隊一つ置くのにも規模を考えねばならない。

最大でも全体で連隊を置ければいいか、と言うぐらいだ。

しかしパラオは師団単位での纏まった戦力を単一で防衛に就かせる事が出来る。

しかもウルシーのように真つ平で隠れる場所が全くないのと違い、山などがあり防衛がしやすい。

それでも1個師団に旅団を一つ置くのが精一杯だろうが、たった1個連隊だけよりは遥かにマシである。

しかも泊地として使用出来る環礁が2箇所もあり、その気になれば合わせて1000隻ぐらゐは停泊出来ると過去の調査結果で出されている。

しかし現実的なところ、700隻ぐらゐが良いところだろう。

ぎゅうぎゅう詰めにしても艦の移動など、空襲を受けたりした時の避難もやり辛くなる。

更には奪還に必要な戦力も少なくていい。

どうやら敵はパラオを最低限の守備隊と航空隊を若干置いているだけで重要視していないらしい。

パラオにあった棲巢も無くなっている。

と言うのも、我々にとつても敵にとつても主戦場は中部太平洋では無く南太平洋であるとの認識が強い。

だから失った戦力を補う為に主戦力の殆どを、中部太平洋や北部太平洋から引き抜いていると潜水艦隊による偵察で判明している。

元々パラオには空母6隻、戦艦5隻、巡洋艦16隻を擁する大規模な守備艦隊が駐留していたのだが、今は空母2隻に戦艦2隻、巡洋艦が3隻程度であとは若干の随伴駆逐艦がいる程度だ。

我々の脅威たり得ない。

航空戦隊と護衛艦隊を一つずつ出せば十分足りる。

どうやら航空機の中継拠点ではあるらしいのだが、南太平洋の島々を経由すればいいから大して使われていない様子だ。

もし大規模に使われているとしたら、それこそ潜水艦隊に把握されている筈だが、月に2、3回しかないらしい。

これら全てが我々を誘き出す罫だとしたら、大したものである。

しかしそれ以外の場所の戦力は引き抜かれたとは言えまだまだこちらも全力で当たらねばならないほどの戦力がある。

フィリピンとスラウエシの奪還が終わったら、軍部で一応の準備を進めているから作戦決行自体は可能だ。

やらなくても別の島を奪還する為に回せばいい。

まあ、フィリピン、スラウエシ、小スンダ列島の奪還が成功したらパラオ奪還は実行される手筈になっている。

小スンダ列島の奪還まで進めば豪州は目の前だからだ。

まあ、いずれにせよ豪州の件は我々として言い方は悪いが、生きていたら良いな、ぐらいだ。

最初から期待はしていない。

「次期艦載戦闘機は、まだまだか……」

報告書を読み、息を吐く。

以前航空技術廠に対して開発を命令した新型戦闘機のことだ。

中々開発が進まずにいる。

出来る限り早い段階で実戦投入を行いたい。

理由としては、今現在の主力艦載戦闘機である烈風は確かにエンジンの強化などで性能自体は向上しているが670km/hを發揮出来る様にはなっていない。

しかし敵だって馬鹿じゃ無い。

速度性能では強化が続けられたF4Uには烈風は太刀打ち出来ない。

F4Uは今では約700km/hを發揮すると報告が出ている。

30km/hも速度差があるのだ。

航空戦にとって40km/hの差、と言うのは馬鹿に出来る話じゃ無い。

車で例えると分かり易いが、どちらが速く敵艦隊に到達出来るか、そう言う話だ。

攻撃機の速力もあるから一概には言えないが、それでもこちらの攻撃隊を守る烈風は流星と言う足枷がある。

大得意であり、やれば勝てる自信がある、と言える格闘戦に移りたくても攻撃隊を何よりも守らねばならないから深追いは出来ない。

しかも相手は迎撃だから足枷も何も無く、自由に飛び回るから追い掛けても振り切られてしまう。

それでも何故対抗出来ているか、と言うと単純な話で原田少将以下、母艦戦闘機隊の技量が並外れて優れているからだ。

簡単な話、搭乗員の技量に頼らざるを得ない状況になってしまっている。

これが意味することは、熟練搭乗員が軒並みやられてしまうと若年搭乗員ばかりになってしまい敵に歯が立たなくなってしまうと言うことだ。

今は戦いと戦いの間が長く訓練期間を十分に設けられているが、そうで無くなった場合、待っているのは地獄である。

確かに搭乗員の技量も重要だが、戦時にはそんな腕を磨いている悠長な時間は無い。

だから出来る限り早く、技量が無くても機体性能で対抗し得る新型戦闘機をロールアウトさせる必要がある。

震電を艦載機化出来れば良いのだが、そうなるとまず空母の飛行甲板をジェットエンジンの熱に耐えられる様に全て張り替えて重量に耐えられる様に強度を見直さなければならぬ。

カタパルトの射出性能は全備重量の流星を射出出来るよう、7tもあるから問題無い。

実際に射出出来るかどうかは分らんが。

滑走距離や加速が足りなくて海に落ちるとか、最悪だぞ。

カタパルトに射出された機体が海面に叩きつけられたら、搭乗員は間違いなく死ぬ。

しかし何よりも問題なのは、エンジンだ。

今の震電に載せられているエンジンの稼働限界時間は確かに伸びたとは言え稼働限界時間は600時間が精々である。

陸上では十分な整備とエンジンの交換が出来るが、限られた容量しかない空母の上では出来ない。

しかも基本的に作戦が長期に渡る我々は、どうしてもその補給を維持出来ないのが実情だ。

ジェット型の震電を艦載機とするならば最低でもエンジンの稼働限界時間を1500時間に伸ばさなければならない。

レシプロ型の震電ならば可能だが、空母の格納庫天井の高さを確認し、必要ならば増やしたり、着艦などに必要なアレステイニング・フックの搭載などやらなければならぬ改装はかなり多い。

しかも、まず最初に震電が母艦戦闘機としての任務を全う出来るのか、と言う疑問がある。

確かにレシプロ型の震電でも760km/hの最高速度を発揮出来るが、だからと言って流星と一緒にでは全力は出せない。

そもそも震電は、「高高度迎撃用戦闘機」として開発されたのだから、最初から艦載機として開発された訳ではない。

下手に艦載機として運用しようとすると間違いなく、性能がガタ落

ちするのは目に見えている。

「漸くモックアップが完成した段階ですから、これからですね」

「要求性能が、過大過ぎたか？」

「いえ、そんなことは無いかと思いますよ。寧ろ妥当かと」

「深海棲艦の戦闘機は、陸上機のP-51に至っては時速750kmを超えますし、艦載機も新型が出て来れば間違いなく時速700kmに迫る高速性能を備えているに違いありませんから」

「難しいところだな……」

本日の秘書艦である飛鷹が言う。

彼女も、隼鷹と言う破天荒な奴が隣にいて目立たないだけで優秀だ。

しつかり者だから、よく世話になる。

まあその分不摂生をするときよく怒られるんだが。

自慢でもなんでも無いが大体の艦娘に怒られたことがあるぞ、俺は。

「まあ、エンジンの性能もあつて700km/hは発揮出来るそうだからあとは完成を待つしかないな」

H43が2100馬力を発揮出来て本当に良かった。

エンジン性能だけで見れば、DB601やマーリンエンジン、グリフォンエンジンがあるが、液冷式のエンジンを空母では使えない。

いや、使えるのだがなんせ空冷に比べて空母艦上での信頼性が劣る。

これは機械的なものが2割、人手的なものが8割だ。

液冷は生産するにも整備するにも、専門的であり熟達した技量が必要だ。

その点、我が軍は液冷エンジンには全くの不慣れと言っても過言ではない。

殆どの者が空冷エンジンしか扱ったことがないのだ。

と言う事は液冷エンジンの整備生産をやらせたら地獄の始まりである。

今液冷エンジンの整備や製造を行えるのは文字通り小数精鋭の、専門教育を徹底的に、年単位での時間を費やして履修した者ばかりだ。それとは違い、前線部隊の空母にはそんな時間は無い。

採用されないのには他にも訳がある。空冷エンジンと違い、液冷エンジンの生産設備が極小数であること。

晴嵐なども含め、予備を含めても1000機ほどの生産を行えば現状は十分に足りる。

しかし空冷は陸海軍含めても常に1万機分は生産し続けねばならない。

でないと撃墜されたりエンジン交換などの補充分や新たに編成される航空隊の分を賄えなくなるからだ。

もし母艦艦載機全てのエンジンを液冷に変えるならば約1300機、予備などを込みで考えると1500機分の、現状生産分の2.5倍にも生産を増やさねばならない。

と言うことは単純な考えだが、余裕を持って生産設備の数を3倍に増設してからでないと生産が出来ないと言うことになる。

生産を行う人手も3倍、整備を行う人手も3倍である。

整備兵にも生産を行う者達にも、十分な教育を施さねばならない。資源不足もあつてどう考えても、現実的ではないのは確かだ。

頭を悩ませながら執務を熟していく。

フィリピン奪還作戦、スラウエシ奪還作戦、小スンダ奪還作戦の準備にも追われながらである。

作戦決行まであと1年。

第63話

作戦開始1ヶ月前。

準備は大詰めであり、残るは陸軍部隊の移動のみとなった。残る移動部隊は1個師団のみであり、それに加えて進出を予定している陸軍飛行戦隊が間借りする形で各地の飛行場に1週間前に移動する。

我々が相対することになるであろう、敵戦力は1個空母機動艦隊と見積もられている。

凡その戦力は今現在のところ、空母10〜15隻、戦艦10隻、巡洋艦20隻と判明している。

空母の数がかなり曖昧なのは、我々が流した偽の情報によるものだ。

実は北海道での事があったからその脅威を排除する為に北方方面で大規模攻勢を企てている、と言う情報を流したのだ。

流石にそのまま流しては敵だって偽だと分かるから、情報を集めて精査すれば辿り着くぐらいの程度で流し続けた。

深海棲艦も、北方で負け大陸まで押し込まれたらカナダやアメリカと繋がる恐れがあることから、我々に大敗して空母も戦艦も丸々失い、防衛の目処が全く立たないことから各方面の戦力引き抜きを余儀無くされたらしい。

事実、南方方面、豪州方面、中部太平洋方面全ての方面において空母、戦艦など主力艦の数がかなり減っている。

ただし、南方への攻撃もあり得ると読まれているだろう。どちらの方面も、通信量が増えている。

今のところ、北方方面で確認されている戦力は空母が20隻を超えると報告が来ている。

戦艦や巡洋艦を含めたらかなりの数だ。

しかしアンドレアノフ諸島の敵基地は未だ再建されておらず、ダッチハーバーに拠点を置いている。

潜水艦隊に命じてフィリピンと北方方面の通商破壊を強化している。

両方の通商破壊を強化したのは、やはりどちらが狙いか絞られないようにする為だ。

既に敵の輸送船をかなりの数を沈めており、潜水艦に限りブルネイ湾に建設されたブルネイ潜水艦基地を拠点としている。

本当なら一航艦もブルネイに移したいところなのだが出来ないでいる。

理由は幾つかあるが、最たる理由は一航艦を移すことにより、その分の補給量が増えることだ。

艦隊全体の人員数は陸軍の師団規模で、主力艦だけで10個師団に届きかねない。

軽巡洋艦や駆逐艦まで含めたら、とんでもない人数になる。

陸軍部隊と合わせたら何十万と言う数になる。

そんな補給量、今の我々には到底賄えるものではない。

だから本土から艦隊を前進させられていない。

補給状況は今のところは問題は無い。

海軍の新兵達は輸送船団の護衛任務によつて少なからず実戦を経験済みである。

実戦経験のある無しはかなり違う。

陸軍もジャングルでの戦い方をしっかりと履修し、練度は十分。

問題は戦車が道路以外の場所での移動が制限されることだろう。

Ⅲ号やⅣ号戦車とは違い、パンターは車体そのものが大きくなったことから木々に引掛かる。

ティーガーと違ってパンターは超信地旋回が出来ない。

まあ、通れると言えば通れるが、基本は道路を利用しないと足回り

やエンジンに与える負荷が所要範囲内であるとは言え多過ぎて故障の原因に繋がる。

しかもどんな地形なのか、偵察である程度把握しているとは言え段差から落ちるとかしたら最悪だ。

登れるなら良いが、登れない場所に落ちたら戦車は爆破して放棄するしかない。

未開とも言えるジャングルを進軍する為に、専門の工兵隊には木々を伐採しつつ進む為のデカイ丸型の電動鋸を装備したV号開削機と切り倒した樹木を退かすためのV号引揚機が新たに開発され配備されている。

作りは戦時で急造したのだろうなと分かる簡素なナリだが、開発にはかなりの年月が費やされている。

元々南方のジャングルを進軍するには、補給などのことも考えて十分な幅の道が必要だと考えられていた。

しかし資材が無かったことで脆い作りしか出来なかったこと、それを克服しても試作した車両が能力不足であった、などがあって配備には至らなかった。

開削機も引揚機も、色んな問題を抱えていた。

流石に回転する鋸の歯が欠けたり、外れたりして吹っ飛んでくなくて危な過ぎる。

吊り上げ自体は出来るがバランスが取れなくてひっくり返ったり、樹木の重さによっては吊り上げが出来ないとかもう散々だった。

幸い死傷者は出なかったから良いものの、実験的に配備した工兵隊からは非難轟々だった。

だから沖縄や南方方面などの防御陣地構築や鉄道建設には物凄い年数が掛かったのだ。

工兵どころか歩兵から戦車兵、砲兵に至るまで航空機搭乗員以外は根こそぎ建設に動員した、と言えどそれだけのものか分かるだろう。

しかし開発に時間を掛けたとあって能力は申し分ない。

車体のベースは部品などの互換性を考えてパンター戦車のものを流用。

砲弾や砲塔を載せなくて良い関係から重量増加は過大ではない。

一応の自衛用としてMG34車載機関銃を正面装甲部に1丁、左右に1丁ずつMG42を露天で載せているが、作業中は邪魔なので取り外され歩兵が護衛している。

付けるか付けないかかなり意見が分かれたが、護衛が歩兵しか居ないことからその中で自衛時に火力を上げるならば搭載した方が良いでしょう、と判断され搭載している。

開削機は円形の回転式電動鋸を1機装備している。

1両につき、4mの道を切り開ける。

2両並べれば8mになる、十分な広さだ。

引揚機は重量15tまでのものを吊り上げられる回転式のクレーンが乗せられている。

固定式なら25tまでを吊り上げられるのだが、そこまでのものになると戦車や自走砲などしかない。

建設資材を吊り上げるぐらいならば、15tで十分と判断された。

1個独立工兵大隊には、

歩兵 2個小隊100人前後

工兵 200人程度

開削機4両

引揚機16両

大型ハーフトラック 30両

整備兵 50〜70人程度

ベルゲパンター4両

ハーフトラック6両

大体最大で370人程度が属する部隊だ。

ハーフトラックには人員の他に、必要な資材やらを積んでいる。

実を言うと、我が軍で最も機械化が進んでいるのは独立工兵大隊だったりする。

部隊の人員がどれだけ車両移動を行えるか、という機械化率があ
る。

独立工兵大隊は部隊の性質上、100%である。
戦闘団の工兵も、工兵に限れば機械化率は100%である。

配備されている車両の特殊性が高い為に専門の整備兵が随伴して
いる。

しかし火器は精々自衛用の小銃や車載機銃のMG34、MG42、
数門のパンツァーシュレック、あとは全員が扱えるパンツァーフアウ
ストぐらいだ。

パンツァーフアウストやパンツァーシュレックが我が軍に多用さ
れる理由は、電池を必要としないからだ。

欧州軍の持ち込んだ技術の中にはM1バズーカと呼ばれる対戦車、
対物用のバズーカもあつたのだが、問題点の一つ。

電池が無ければ動作しない。

電池と言うのは小さくてもそこそこ重量が嵩む。

しかも、使用が想定されている南方方面は高温多湿で電池は腐食し
やすい。

と言う事は、電池を常に補給し続けなければならない。

ただでさえ補給線はギリギリなのに、電池が加わったらより負担は
増して圧迫するだけである。

しかしパンツァーフアウストもパンツァーシュレックも電池を必
要としない。

パンツァーシュレックは電池の代わりにダイナモで発電、点火す
る。

それに加えて、パンツァーフアウストは大量生産が容易であり、新
兵だろうが民間人だろうが大して訓練をしなくても扱える。

ついでに言っておくと型式にもよるが、10回程度は再利用も可能
だ。

だから二種が選ばれたのだ。

理由も無しに選んだりしない。

理由があるからこそ、選ぶのだ。

引揚機の数が多い理由は、架橋戦車ではどうやっても渡れない川や谷がある場所に橋を架けたりする為だ。

これだけの数があれば橋などすぐに架けられる。

資材は切り倒した樹木が幾らでもあるからな。

見た目はパンターの車体に、砲塔の代わりにクレーンが乗っかって
いるみたいなものだ。

俺は割と好きな見た目である。

開削機は、一両だけだと作る道の幅が足りなくて2両を前後に左右
にずらして走らせないとならないが、人力で道を切り開いたりするよ
りは遥かにマシだ。

こちらは引揚機と違い、無理矢理鋸を乗つけた、みたいな感じだ。

なんと言うか、こう、えも言えぬダサさがある。

一部マニアに人気が出るタイプだな、これは。

どちらもその性質上、出来るだけ簡略化や簡素化を施したとは言え
複雑な機構を備えている。

だから専門の整備兵が付き添い、基本的に整備点検修理を交代で行
わせる。

重量物を持ち上げたりなど、負荷の掛かる作業を担うから整備はお
ろそかに出来ない。

投入される独立工兵大隊は、4個大隊である。

主任務は、最前線で道を切り開いたり架橋を行うのが2個大隊。

後方地域で架橋や上陸地点に簡易的な港を作ったりなどするのが
2個大隊。

陸軍の部隊は全て準備が完了し、あとは作戦開始を待つばかりであ
る。

海軍は海軍の必要な残りの準備を進めねばならない。

にしても、やはり戦争と言うのは金が掛かる……。

艦一隻を維持するのにも、電力の関係で罐の火を落とすことは出来ないから、幾つかの罐を交代で常時焚いていることになる。

それだけで燃料代は嵩むし、それに加えて食事代、練時の訓練用弾薬や実弾。

艦や施設の維持費なども加わり、兵士達の給料も払わねばならない。

遺族年金だって馬鹿にならない金額だ。

そこに陸軍の分も加わるのだから、それはもうとんでもない金額である。

当然と言うべきか、国の財布を握っている財務省からは連日どうにかならないのかとせつつかれている。

どうにか出来ていたらとつくの昔に改善しているだろうに。

今はまだ、減らしても良いが、全ての奪還地域と本土を引き換えに出来るのならば、と言って押さえているが何時まで保つか……。

出来ることなら軍事費を半分程度に抑えて、抑えた金額を医療や教育、インフラ整備の為に民間に投資したいぐらいである。

今でも日本は医療、教育に関しては戦前と同様だが、やはり金が無い。

教育に関しては良いが、医療は特に酷い。

病院は軒並み閉鎖状態で、それを軍が軍病院として購入して医者などを軍属という形で雇っているような状況だ。

他の分野、製造業なども同じで鉄道に関して以前説明した通り軍属の人間は多い。

それだけで軍の予算が増え続ける。

では何故国では無く、軍なのか？だ。

理由はその方が国にとっても軍にとっても都合が良いからだ。

軍のものにしてしまえば、防衛に関して一々面倒なやりとりを挟まなくていいし、金勘定が楽である。

それに国家存亡どころか、人類の存亡を掛けた戦争中だ、軍の予算だと、そうしておいた方が議会を納得させやすい。

金が絡む書類を見ると、兎に角溜め息を吐いて頭を抱えてしまう。

海軍基準ではあるが、参考程度だとこれぐらいの金が必要になる。一番分かりやすい、と言うか誰もが知っている大和型戦艦で例えよう。

既に大和と武蔵の分の予算は、とつくの昔から海軍予算案に浮揚作業分と修理作業分予算が毎年組まれており、修理が終わって訓練が始まったら更に維持費等が掛かり続ける。

ここでは面倒なので信濃も纏めてしまおう。

大和、武蔵、信濃の3隻は停泊しているだけで1日辺り50〜60tの重油を消費する。

これは艦内に電力を供給する為のものである。

今の日本の物価は1円辺り、戦前の約700倍。

算出した値に700を掛ければ、戦前の値段が出る。

これを踏まえた上で、これから記される金額は戦前の物価の凡そ全て2倍程度になると思っておいて欲しい。

ただし、あくまでも全て軍のみのもので民間のものではない。

石油の値段は現在1t辺り、3000〜4000円。

その時その時で上下するので余り正確では無いが、平均的な値であれば3400円と言ったところか。

1日に消費される最大値である60tで考えると2万4000円。

年間で約750万円も掛かる。

それが3隻分で、約2千2百50万円。

次に艦の維持費だ。

艦体

約180万円

機関

約16万円

砲熯（主砲、副砲、対空砲、機銃等の火器全般）

約450万円

水雷

約10万円

航海

約50万円

電気

約130万円

無線

約100万円

約936万円。

信濃は戦艦ではなく、46cm砲や副砲を搭載していないから砲熯が除外されたり、各部の金額もかなり変わる。

とは言え空母に必要な専門の装備などもあるので結局のところ、値段は余り変わらない。

3隻で大体2600〜3000万円は掛かる。

因みにであるが、水雷、と言うのは水中聴音機や水中探信技儀などの事である。

決して魚雷だとかではない。

魚雷を載せていたらこれぐらいでは済まない。

なんせ酸素魚雷の維持などにはとんでもない金額が掛かるからだ。

燃料費と維持費を合わせると3隻で約5300万円。

ただし、ここに作戦行動をとった場合の燃料は含まれていない。

満載時6300tを換算し、半分の3150tの補給を1回受けたと仮定する。

合計で9450t、約321万円ぐらいだろう。

3隻で約963万円。

これを合わせたら約6263万円。

戦前の価値にして約440億。

これだけで地方都市一つぐらいなら賄える。
そこに人件費が掛かる。

司令部を乗せるか乗せないかで上下するが、司令部を乗せた場合乗組員の人数は大和、武蔵が約3400名。

信濃は3000名ほどだ。

准士官までの人員を除くと、大体3200人が大和型戦艦には乗り込む。

大体一番多い曹長から二等兵までの下士官や兵卒の給料は以下の通り。

曹長約300人

1等75人

1800円(126万円)

計13万5000円(9450万円)

2等75人

1680円(117万6000円)

計12万6000円(8820万円)

3等75人

840円(58万8000円)

計6万3000円(4410万円)

4等75人

768円(53万7600円)

計5万7600円(4032万円)

軍曹約350人

1等150人

720円(50万4000円)

計10万8000円(7560万円)

2等100人

624円(43万6800円)

計画6万2400円(4368万円)

3等100人

552円(38万6400円)

計5万5200円(3864万円)

伍長約800人

580円(40万6000円)

計46万4000円(3億2480万円)

兵長約800人

372円(26万4000円)

計29万7600円(2億832万円)

上等兵約800人

252円(17万6400円)

計20万1600円(1億4112万円)

二等兵約400人

216円(15万1200円)

計8万6400円(6048万円)

計588万3200円(41億1824万円)

1隻辺りの人件費だけでこれだけの金が掛かる。

3隻分になると、123億5472万円。

これに士官以上の階級者分が加わるのだ。

尋常じゃない。

維持費と燃料費、人件費の3項目を合わせたら563億5472万円にもなる。

ここまでの金額ならば地方都市の予算、都市によってはお釣りが来る。

大和型戦艦の主砲弾を1発撃つのに装薬などを含めて約2000円(140万円)掛かる。

長門が約14000円(98万円)であることを考えると1.4倍の値段が掛かる。

燃費の話もしよう。

まだ大和が試験などを終え、実戦配備をされていないから改装前の各艦と大和で比べるが、許してほしい。

空母	赤城	0.395 t/km
空母	瑞鶴	0.223 t/km
戦艦	大和	0.262 t/km
戦艦	扶桑	0.233 t/km
戦艦	金剛	0.349 t/km
巡洋艦	利根	0.145 t/km
巡洋艦	長良	0.135 t/km
駆逐艦	陽炎	0.067 t/km
駆逐艦	朝潮	0.068 t/km

実を言うと、皆から燃費が悪い悪いと言われたりイメージを持たれたりするが、大和は燃費が悪い、と言うわけでは無い。

寧ろ他の大型艦と比べても大差無く平均的、それどころか寧ろ良い方、と言ってもなんら問題無い。

朝潮型の排水量は2000t程度しかなく、72000tもある大和の約2.77%しかない、

排水量、要するに船の重量が大和の2.8%しかない朝潮型が、同じ距離をほぼ同じ速度で航行するのに大和の26%もの燃料を消費する。

赤城の燃費に至ってはなんと大和の5割増し。

皆曰く、艦娘の赤城も馬鹿みたいな大食らいだったらしいがうーむ……。

金剛は大和より約33%は高燃費。

金剛の排水量は大和の半分程度しかないのに、である。

このことを考えれば、大和の燃費がわりかし良い方である、と言う

のは明らかだ。

いずれにせよ、莫大な金が掛かるのは間違いない。
海軍と陸軍を合わせたら、恐ろしい金額だ。

提出される書類に書かれている金額を見るたびに性根が庶民だから、頭が痛くなる。

どうやって軍事費を減らすか、頭の痛い問題だ。

しかし多分、戦争が終わるまでは無理だろうなあ……。

欧州奪還なんてしようものなら膨れ上がるのは目に見えているし、減らすどころか増加するばかりだ。

勝利の為に奪還地域が増えるのは望ましいことだが、奪還をどんどん推し進めていないのは、金と言う問題があるからだ。

戦力不足以上に金が無いのは問題だ。

世の中は基本、資本主義である。

どれだけの大兵力を有していたとしても、金が無ければ武器兵器を作ることも出来ない。

何をするにしても、結局金が無ければ何も出来ない。

奪還地域の維持にも莫大な金が掛かる。

それは艦隊を維持し運用していく以上の金額が発生する。

だから下手に奪還地域を増やしたくないのが事実だ。

奪還するにしても、場所を選ばねばならない。

戦略的に奪還する価値があり、尚且つこちらに利益を齎し受けた損害などを補える場所でなければならない。

我々の問題点として、確かに兵站が弱いだとか金が無いだとか色々あるが、何よりも問題なのは戦争を行う上で協力者が居ないことだ。

もつと簡単に言うなら、共に戦える存在がいらない。

だから奪還も最優先であるが、何よりもまずは協力者、共に戦える存在を作ることが課題だ。

それを考えると、まずもって隣の国々は役に立たない。

それどころか敵対の可能性すらある。

実際、戦争が始まった初期の頃は事実上の紛争状態になったのだから。

戦争に発展していたら、間違いなく深海棲艦との戦いよりも先に人類同士の戦いで人類は、世界は滅んでいただろう。

そんな国々と共同戦線を構築することなど、少なくとも無理である。

しかも大陸に攻勢を開始したら常に陸続きで、敵と陸続きの前線を守り続けねばならない。

補給線は伸びるだけであり負担は重く、得られるものと言えば南方方面で賄える資源ぐらいでそれ以外は何もない。

となれば大陸への攻勢はまず有り得ない。

様々な問題に、頭を悩ませつつ解決策を探し、一つ一つ潰していく。銃を持って戦えない俺には、それが唯一出来ることだからだ。

――――

作戦決行日。

艦隊全てが罐の火を入れ終え、出港準備が整っている。

やはり出港は夜間になる。

昼間と違って夜間は視界が効かない分、それだけ悟られにくい。

「提督、三航戦から入電」

「読み上げろ」

「敵潜探知セズ。航路ノ安全確實ナリ。以上です」

「分かった。飛龍、艦隊の状況は？」

「準備万端、何時でも出港出来るよ」

飛龍の返答を聞いて、頷く。

「艦隊抜錨。第一護衛艦隊、一航戦、二航戦の順で出る」

「了解」

出港のラッパが第一護衛艦隊から鳴らされ、次々と豊後水道に向けて出ていく。

続いて我が一航戦が出港し、二航戦が出港する。

戦闘が厳しくなると予想され、各個撃破を避けるために第一護衛艦隊と敵艦隊を撃滅するまでは行動を共にする。

沖繩沖で輸送船団と合流し、第一護衛艦隊と輸送船団を一航艦の後ろに就ける。

敵艦隊の撃滅が終了したならば、すぐさま上陸を開始し、第一護衛艦隊はカリマンタン島へ第一次第二波上陸部隊の輸送船団を迎えに行く。

一航艦は到着までの間、第一次上陸部隊の支援を行い上陸が終わったら速やかに沖繩へ陸軍部隊を迎えに行く。

その間第一護衛艦隊は上陸支援を行い一航艦が第二次第一波上陸部隊を連れてくる。

それを繰り返すのだ。

豊後水道を艦隊が抜け、宮崎県沖に到達すると艦隊陣形を組み替える。

「艦隊輪形陣」

「艦隊輪形陣、宜候」

空母を中心とし、その周りを戦艦、重巡が囲んで更に周りを軽巡、駆逐艦が囲む。

「艦隊輪形陣に変更完了。全艦異常無し」

「艦隊進路240」

「進路240、宜候」

命令を下し、艦隊の進路がフィリピンへ向けられた。

第64話

沖縄沖で、輸送船団との合流も無事に終えた。

少し季節外れの嵐に見舞われたぐらいで、問題らしい問題は無い。索敵に関しても、潜水艦隊が敵艦隊を尾行しつつ逐次暗号文を送ってくるので、把握出来ている。

順調にフィリピン沖に到達し、各方面に索敵機を放つ。

潜水艦隊が振り切られ、動向を追えなくなったからだ。

最後の報告によると、ポリ口島沖東300km地点で見失ったらしい。

敵艦隊は太平洋側から我々を迎え撃つ腹積りのようだ。

規模は大型空母9、小型空母2、戦艦9、巡洋艦18、駆逐艦多数。引き抜かれたとは言え、かなりの規模だ。

艦載機は1000機に迫るだろう。

こちらの艦載機数のが200機ぐらいは多い計算になるが、陸上基地の敵機も問題だ。

ただ陸上基地の無力化に関しては策がある。

夜間爆撃である。

我々だってただ手をこまねいていた訳ではない。

以前から議論的であった夜間の敵基地や敵艦隊に対する攻撃を以下に実現するかなど、様々な技術的な物事を色々と試行錯誤していた訳である。

それにより対地、対艦、対空、あらゆる場面での夜間攻撃の方法は長いこと模索していた。

そして前々から研究していた機上電探を迎撃以外にも活用出来ないか、と言うのは当然の帰結であった。

とは言え機上電探は、初期段階では兎に角ともに作動させるのが精一杯であり、とてもでは無いが機体に載せるどころではなかった。

地上での動作が漸く安定してきて、双発機以上の機体に載せてさあ、と思つたら、これまた故障やら発火やらが起きるわけで、これまた小型軽量化どころの話ではなかった。

それらの問題が解決し、双発機以上の機体に載せても安定して使える、代物が完成した。

そこからは量産に向けて機構の調整やらなんやら、様々な改良や改修を施し戦力化と量産体制が整った。

しかし戦力化が叶ったがだからと言って小型軽量化が出来るわけではない。

あくまでも双発機以上の機体に乗せるために開発したのだから、小型軽量化は並大抵の事では実現出来ない。

小型軽量化、これがまた難題で技術陣営は連日連夜頭を悩ませるところに。

銀河や連山、二式大艇の様な中、大型機に搭載するならまだしも単発機で積載面積の限られている烈風や流星に載せるのは簡単な事ではなく、至難の業だ。

下手にでかく重いまま載せたら、機体重量が増えてバランスが悪くなり戦えなくなる。

飛ぶのがやつと、なんて辛うじて飛行機、と言うだけである。

戦闘機などでは決して言えない。

そこで、まずは取り敢えず載せられる程度まで小型軽量化と性能向上を分けて実行することになった。

同時にやるのは無理だと判断したからだ。

この時既に、カタパルトが形になり始めていたからカタパルトが射出出来る重量を超えない程度で取り敢えず小型軽量化を、一旦やってみる事になったのだ。

必死になって漸く小型軽量化が成功したのだが、更なる難題はこれからだった。

早い話が、性能不足に泣きに泣いたのだ。

当然ではあるが、小型軽量化をするとその分性能が落ちるのだ。同じ性能を求めるのは技術的に困難であるから、性能自体が低下しても単発機への搭載が目的だからそこは織り込み済みだ。

しかしその低下した性能が、余りにも低過ぎたのだ。幾ら分けてやるとは言え、話にならないレベルである。

最初は数kmどころか200m先までを探索するのも精一杯で、実際はただ無駄にレーダー波を垂れ流しているだけ、そんな状態からのスタートだった。

それも信頼性が低過ぎて、全く何も無い場所に大編隊が現れたり、そもそも機能しなかったりする始末。

拳句の果てには発火に出火、爆発までするのだからもう大変だった。

実際、試作19号機まで作られているが、その内の13機はなんらかのトラブルや事故が原因で失われている。

しかしそれで見切りを付けられるほど、機上電探の価値は低くない。

寧ろ物凄く高い。

機上電探の効果は震電による夜間本土防空戦においてその価値は分かっていた。

戦前のように、当たり前の様に飛行機に電探は載せられていないから、夜間の迎撃戦というのは、と言うより夜の空というのはおいそれと手を出してよい領域ではなかったのだ。

しかし機上電探が、震電と共に迎撃に上がり誘導を行う銀河に載せられるや否や、真つ暗な夜間でも当たり前の様に昼間と変わらない戦果を出し始めたのだ。

夜の空は、手を出さざる領域ではなくなったのだ。

流星に震電に載せることは叶っていないが、誘導を行う銀河に載せただけで効果抜群である。

それぞれの震電全機に載せることが出来たならば、とんでもないことになる。

先んじて搭載された震電改12機は、夜間での戦果が倍增。可能な限り早急に実戦レベルにし、陸海軍機全機に搭載すべし、と報告してきている。

既に銀河と連山、二式大艇には1編隊に付き1機の割合で搭載が進んでいるほどだ。

全機に搭載したいが、生産数の関係上叶っていない。

それは母艦艦載機の烈風や流星、彩雲に限らず紫電改、陸軍の疾風や百式司偵、全機種に同じことが言える。

夜間に飛べると言うのは軍事上では途轍も無く大きな意味を持つ

夜間飛行に加えて作戦可能となれば、それだけに戦術、戦略的価値は高く作戦の幅が広がる。

改良を重ねれば陸軍部隊の夜襲を、対地支援すら出来るようになるかもしれない。

ただ、問題は載せる場所が難しい、と言うことだ。

電探は、レーダー波を照射してその跳ね返ってきたレーダー波を受け取ることによって相手の位置を探る。

ここで問題になるのは、機上電探にするとなると基本的に指向性、ある一方方向にしかレーダー波を照射することが出来ないと言う事だ。

双発機や4発機ならば、左右の翼にエンジンがあるから機体のどこに電探を載せても機体の先端に照射装置や受信装置を纏めた送受機アンテナ、と言うのを載せられる。

しかし単発機は、機体の先端にエンジンがあり、そこに送受機を置く事は出来ない。

そんなスペースは無いからだ。

紙程度の厚さなら別だが、そんな代物戦前にすら無い。

結果、電探本体は機体後部のスペースに載せられるが、肝心の送受機アンテナを載せる場所に困ったのだ。

胴体上部に載せたら後方視界が悪くなり邪魔で無理、下部にぶら下げたら震電の様に脚を長くして地面や甲板から高さを取らないと離着陸が出来なくなる。

格納庫の関係上、それは出来ない。

と言うか胴体上部も下部への取り付けも、運用以前にレーダー波を照射すると、レーダー波が自分の機体に反射してしまい、画面にデカデカと自機が映ってそれどころではなかった。

結果、翼内に載せるのが一番現実的である、となった。

翼下や翼上には空気抵抗で吹っ飛んだり折れたりする可能性があるから無しだ。

そうなるとやはり小型軽量化を図って、翼内部に載せ、尚且つ機銃や弾薬の量を減らさず邪魔せず、としなければならぬ。

最終的に小型軽量化自体は時間を掛けたのもあって達成、信頼度もそこそこ、7割程度と中々。

しかしそこからがまた苦労の連続だった。

銃身や銃機関部の近くにおいてたら自身と銃の熱が放熱し切れなくなり翼が歪んだり装置がぶっ壊れたり、射撃時の衝撃でぶっ壊れたり。

胴体の近くに置いたらまた自機を映してしまう。

弾数を減らすのは継戦能力の観点から望ましくなく。

結果的に、機銃そのものを外側に大きくずらして、ずらした場所に装置を載せることになった。

機銃を下手に機体に近付けると、プロペラの回転と同調させなければならぬ可能性がある。

だから外側へずらす事になったのだ。

これなら弾数を減らしたりしなくて良いし、距離があるから装置や機銃が干渉して熱を持ってぶっ壊れたり、弾詰まりを起こしてぶっ壊れたりしない。

なんなら外側にずらした事で送受機アンテナ一式と燃料タンク以外のスペースが出来たことにより、逆に装弾数が1挺当たり15発、全部合わせて60発増えることになった。

詰め込めば100発は増えるだろうが、流石に故障のリスクを負ってまで増やせない。

そうして必死に改良を続け、漸く完成したのが9ヶ月前のことで、

量産型にする為の改良やらで量産が開始されたのが2ヶ月前。

機上電探の生産数は烈風71機、流星63機分だけであり、全く数が足りない。

とは言え載せられるだけ載せている。

で、この夜戦可能型の烈風と流星を使って敵基地に対する夜間爆撃を行おうと言う訳だ。

実験では島を捉えたり、山を捉えたり、大型艦程度なら探知出来るが流石に敵飛行場の正確な位置や滑走路、対空砲、格納庫の位置が分かるわけではないので、流星には特別に翼下に照明弾を左右4発ずつ、計8発搭載出来るように改造を施した。

これで照らせば敵飛行場のどこに爆弾を落とせば良いか分かると言う寸法だ。

ただ機上電探も万能ではない。いくつかの欠点がある。

第一に銀河などの機体に搭載されている機上電探とは違い、高度4000〜5000mになると空気が希薄になるために放電してしまい、それによりプレート電圧の低下やグリッド管と放電で繋がってしまふ。

解決策は、単純にそれ以上の高度で運用しないことだ。

それ以上の根本的な解決策は、電圧自体を下げるのだが改良はまだまだである。

第二に、飛行高度を高く取った時に1000〜1500m以内の近距離目標を映そうとすると、海面の反射波と目標の反射波がごっちゃになり、ブラウン管の画面上での区別が全くつかない。

これは高度を上げないことでしか今のところ解決策は無い。

第三に、第二の問題点から派生したようなもので下方向に機体を向けると地面や海面に反射してそれ以外が全く見えなくなること。

上方向には雲がない限りは問題無い。

そしてその問題点により、基本的に水平方向でしか機動を取れない

い、戦闘を行えないと言うこと。

簡単に言えば縦方向の機動が制限される。

電探画面に敵機を映そうとすると、真下を向く事が出来ないのだ。

これも解決策は無く、改良が待たれるばかりである。

結果、運用をするにはまず高度は1000〜3000mに限定し、水平方向の機動を主とする。

かなり制約が多いが、夜間に航空機を運用出来る、と言う利点の方が遥かに大きいから今回初めて実戦投入に踏み切った訳である。

夜間に航空機を動かせると言うことは、それだけ選択肢の幅が広がるからだ。

中、大型機用の機上電探なら多少デカくても積載には困らないし出力不足に泣くこともない。

それらの問題など起こらず、信頼性もあり、偶に故障すると言った感じなのだがまさか空母に銀河や連山を載せる訳にも行かない。

と言うかそもそも連山は論外として、銀河は載せることは出来ても発艦出来ないのだ。

単純な話、カタパルトの能力が足りないのである。

カタパルトの射出能力は魚雷をぶら下げた流星の6tを射出出来なければならぬから、余裕を持って7tの射出能力がある。

しかし銀河を射出するには、機体自重だけで約7.3tの銀河だ。

爆装しようものなら正規全備重量10.5t。

過荷重重量の場合13.5tにも達する。

仮に過荷重重量で射出するならば余裕を持たせるなら15tは欲しい。

と言うことは、倍以上の射出能力向上をせねばならないと言うことだ。

爆装せずに、偵察などを主目的にしても結局10tの射出能力はなければならぬ。

更には銀河の機体強度は射出に耐え得るほど足りるのか、という問題もある。

カタパルトでの射出は、空中で徐々に速度を上げたり、急降下で最
高速度や限界速度を発揮するのは訳が違う。

瞬間的に、0.1秒とかで100km/h以上に達する代物だ。

機体強度が足りなければ加速中に分解待った無しである。

烈風と流星は元々零戦とは違い、設計段階で機体を頑丈にしていた
お陰で多少の補強をするだけで済んだ。

エンジンも2100馬力と余裕があつたし、機体を補強する為に重
量が増えても最高速度が5km/h程度低下するだけあり、運動性能
の低下などは見られないと影響は少なかった。

銀河もエンジンが二つあり、最高速度も609km/hを出せるか
ら速度を幾らか犠牲にすれば機体強度は確保出来るだろうが、結局は
カタパルトの性能を上げなければ無理である。

少なくとも今の段階で銀河の艦載は無理である。

しかも、カタパルトの長さを延伸せねば加速が足りずに海に落ち
る。

仮に銀河を搭載するとしても、結局烈風や流星にも電探は載せるこ
とになる。

戦術的には銀河の空母搭載は、哨戒や索敵と言う意味、対地攻撃の
観点からは有効であるだろうが載せても飛ばせないなら意味が無い
ない。

単発機用機上電探とカタパルト、どちらも開発を進めていたが機上
電探のが先に取り敢えずの実戦段階になり、カタパルトは開発中と言
う訳である。

「提督、索敵機からは何の報告も無し」

「報告無し?どう言う事だ」

「敵艦隊は見つけられなかったみたい。索敵限界線に到達したから折
り返して帰ってくるって」

「おかしいな……」

「え？」

「敵艦隊は、ポリロ島沖東300kmで最後に確認されている、で間違い無いな？」

「そうであります」

「なら、そのまま北上して我々を迎撃するならとつくに会敵していてもおかしくは無い。しかし索敵限界線までの間に敵艦隊は居ない」

「どこに行った、となりますな」

「幾つか予想は立てられる。1、我々と戦うことを嫌がり逃げた」

「有り得ませんな」

「無いんじゃない？」

「俺もそう思う。敵の性質上、戦わずに逃げると言うのはまず有り得ない。では2、敵には別働隊がいて、それと我々を挟撃するか、もしくは合流を企んでいるか」

「仮に居たとして、どこに？」

「可能性があるのは、南シナ海側、セレベス海、スールー海のいずれかに居ることだが、事前の偵察でこれらには居ない。となると艦隊が停泊出来る近場にある場所は、パラオかウルシーぐらいだ」

「ですが、パラオ、ウルシー環礁のどちらにも艦隊は見つかっておりません。仮に居たとして、合流が間に合うかどうか」

「ならば、どこか別の場所に隠れているか3つ目の選択肢だ」

「3つ目？」

「輸送船団だ」

「輸送船団、ですか」

「そうだ。敵は我々の上陸を阻止出来れば良い。しかし一航艦と直接戦うにはリスクが大きいいし、勝ったとしても護衛艦隊ともやり合わねばならん。そうなれば消耗している状態になるから勝ち目は薄い。しかし輸送船団を最初から狙ったなら、話は別だ」

「……有り得る話ですな」

「一航艦と直接対決を避けつつ、上陸を阻止出来て尚且つ暫く我々が動けなくなる損害を与えられる目標となると、輸送船団しかない」

「本土への攻撃は？」

「先ず無い。あつたとしても哨戒線に引つ掛かるし、どこを攻撃しても間違いなく基地航空隊から反撃を受ける。そも、メリットが無い」
「それはどう言う……」

「北海道と違つて本州を守る部隊の規模は遥か上だ。陸上部隊、航空隊、いずれにせよ、だ。上陸するにしろ一過性の攻撃をするにしろ、用意しなければならぬ上陸戦力は数十万、艦隊の規模も足りない。上陸するとしてもそれだけの部隊を載せる様な大船団を見落とす訳がない」

「確かに……」

「多分、我々の索敵を避ける為に潜水艦隊の尾行を前提として一度北上したのだ。それで、適当な場所で振り切つて、大きく迂回、側背を突こう、と言う事かもしれない」

「では、どうなされるのですか？」

「このまま予定通り、敵飛行場に対する夜間爆撃を行う。昼間になつて、敵飛行場と挟撃されるのは避けたい。多分、敵の索敵機に接触されていぬから敵攻撃隊の射程には収まっていぬ筈だ」

「攻撃があるとしたら、迂回をしていたとして明日の日の出と共に発艦を行う筈。」

「航続距離の問題もあるから、日の出までに出来る限り近付いて来るだろう。」

「恐らくは200海里〜300海里程度にまで接近してから攻撃隊を出す筈。」

「300海里ならば最も足の遅いヘルダイバーに合わせると、ヘルダイバーの巡航速度2時間は掛かる。」

「仮に燃費を無視して突つ込んできても、1時間は掛かるだろう。迎撃の準備を整えるには十分な時間だ。」

「護衛艦隊には敵艦隊がそちらを狙う公算大、と警戒するように打電。暗号化を忘れるな」

「はっ」

上陸地点に近い敵飛行場はバスコ、バギオ、カガヤン、ラワグ、トウゲガラオにある。

5ヶ所の飛行場を潰さねば、上陸は出来ない。

まずはバスコとカガヤン、次にラワグとトウゲガラオ、最後にバギオを叩く。

戦力的に同時に叩くのは無理だからな。

「提督、攻撃隊の発艦準備は2030までに整えられます」

「よし、ならば発艦は2040とする」

「はっ」

戦力は全力出撃である。

夜戦可能型の烈風71機、流星63機を一航艦空母が烈風5機づつ、加賀は11機。

流星は6機、加賀は3機づつを載せている。

準備が終わり次第、即座に発艦を開始した。

最大でも16機の発艦だ、手間取りもしない。

胴体に25番タ弾を2発、6番タ弾を4発の機体と通常陸用爆弾2発、6番陸用爆弾4発の機がいる。

目標を航空機などと滑走路に分けているからだ。

烈風にも翼下に6番陸用爆弾を4発ぶら下げさせている、

流星には全機に翼下懸架で8発づつの照明弾を載せている。

2隊分の照明弾があれば、十分であろうが初めての夜間爆撃だから念の為である。

真つ暗な空を飛ぶ。

長いこと搭乗員としてやってきたが、夜の空を飛ぶというのは初めてのことだ。

周りは何も見えず、明かりと言えばコックピットの中の計器類を照らす為の小さな照明だけ。

僚機や攻撃隊の編隊のエンジン音は聞こえるが、それだけだ。

電探には今の所味方機しか映っていない。

電探を載せる改造を施された機体を渡されたのは、誰も彼もが母艦航空隊の中でも特に指折りの実力者である。

戦闘機隊にしろ、流星にしろ提督が着任された頃から生き残っている、文字通りの歴戦の搭乗員ばかりでその実力は疑いようも無い。

カガヤン攻撃隊と分かれてバスコ飛行場を目指す。

「攻撃隊長、敵飛行場との距離は？」

「あと20分ほどです。もし迎撃を受けるならとつくに歓迎されてます」

「迎撃機の心配は、無いか」

対空砲火も無く、出迎えもない。

多分電探の電源を落としているな？

結局俺達は迎撃に出迎えられることも無く、無事に全機が到達した。

『加賀隊、瑞鶴隊は照明弾投下初め。照明弾が光り始めたらすぐに爆撃に移るぞ』

無線からそう聞こえた少し後、間隔を開けて落としていく。

すると眼下に照明弾の強い光に照らされた敵飛行場が眼下に見える。

そこそこ大きな飛行場であるから、この機数ではたして敵艦隊との

戦闘が終わるまで使用不能になるかどうかは分からないが、少なくとも一日二日は使えなくなるはずだ。

それだけの日数があれば敵艦隊との戦闘は終わっているし、上陸が始まっているだろう。

夕弾の破壊力は普通の陸用爆弾とは違う。

通常の陸用爆弾はでかい穴を一つ開けるだけだが夕弾は小さな弾子をまき散らして広範囲に加害を加える。

滑走路などに与えるダメージは小さいが、航空機相手には抜群の威力を発揮する。

流星は飛龍と蒼龍隊合わせて12機。

夕弾を装備した7機が航空機などの軟目標を狙い、陸用爆弾を装備している14機が滑走路を狙う。

俺達戦闘機隊も翼下に6番陸用爆弾を4発装備しているから効果はより期待できるはずだ。

照明弾に照らされた滑走路目掛けて飛龍隊以外の流星と飛龍。蒼龍、瑞鶴戦闘機隊の10機が続く。

加賀と瑞鶴の25機は次に投下を行うので、今は流星が照明弾を落とし、烈風は周辺警戒を行っている。

流星のように爆撃照準器があるわけじゃないから、流星の後ろをついて行って同じコース上で爆弾を落とす。

タイミングを1秒ごとにずらして4発落としていく。

240kg分軽くなるから、少し機体が浮いたように感じる。

機体を傾けて下を見てみると投下された爆弾が次々と着弾して炸裂して火柱を上げていく。

「成功だな」

思わず言葉が漏れてしまう。

それだけ、夜間に攻撃できるといっなのは革新的なことだ。

これまでの作戦でもこれが出来たなら航空隊の被害は随分と減らせただろうに、と思ってしまう。

しかし、夕弾の直撃を受けた敵機の爆発の仕方が随分と派手だな。

もしかして、敵機は燃料と爆弾を満載していたのか？

次々と誘爆していった、物凄いことになっている。

『飛龍、蒼龍隊の投弾終了。瑞鶴、加賀隊は爆撃準備に入れ』
『了解』

すぐに周辺警戒を行いつつ、加賀隊と瑞鶴隊の爆撃を見届ける。どうやら夕弾のいくつかが燃料タンクを直撃したらしい、更に派手に燃えている。

照明弾なんて必要無いんじゃないかというぐらいに燃え盛り、辺り一帯を真っ赤に照らしている。

するとようやく対空機銃と対空砲が応戦し始めた。

燃え盛る火に照らされて位置が分かるらしいのか、一応狙いは定まっているが命中はしない

「隊長機、照明弾はまだ残っているか？」

『ちよつと待って下さい……。あと全機がまだ1発づつ残ってます』

「そしたら、敵の機銃と対空砲を潰しておきたいのだが、許可を貰えるか」

『……分かりました、許可します。ただ、無茶はしないでください』

「分かっているとも。そしたら敵の頭上に落とすしてくれ」

『了解』

『飛龍戦闘機隊、話は聞いていたな？全機、敵対空砲と対空機銃に対して機銃掃射を行う。ただし一度だけだ』

『』『了解』『』

高度を落として、照明弾が落とされると同時に攻撃を仕掛けた。

攻撃を全て終え、母艦へ無事帰投。

飛行甲板に並べられた誘導灯を目印にして着艦をする。

整備と兵装装備、少し休息と提督への報告を行う。

「原田、報告に参りました」

「ご苦労。で、早速だがどうだった、夜間爆撃は」

「取り合えずの問題はありませんでした。問題といえば初めてのことで、ですので円滑に爆撃態勢を取るのに少し手間取ったことでしょう」

「所要時間内で終わらせているが？」

「それはあくまでも流星隊の技量の高さからくるものでしょう。並みの搭乗員ではこうはいきません」

「飛行場への損害は？」

「機数が少なかったので、大した損害は与えられておりませんが、誘爆でかなり戦果は広がっています。それでも二日程度でしょう」

「それだけで十分だ。改めて言うが、ご苦労。次の出撃に備えてくれ」「はっ」

それらが終わったら再び別の飛行場を叩くべく飛び立つ。

全ての爆撃を終えて、朝を迎えた。

———— side out ————

夜間爆撃が無事に終わり攻撃隊の収容も問題無く終えることが出来た。

やはり機数不足があつて攻撃力不足であることは否めないが、それは追々解決されるだろう。

それでも敵飛行場5つは全て最低でも1日は使用不可能に陥れたので、これで敵艦隊との戦闘に注力出来る。

「輸送船団の方から何か報告は？」

「あと30分ぐらいで索敵限界線に流星が到達するそうだから、敵艦

隊がいるとしたらそこまでの間だね」

まだ敵艦隊は見つかっていないらしい。

これで索敵が空振りに終わって、その間に接近されてしまうのはかなりまずい。

念の為に彩雲26機全てが索敵に出ているらしいが、それでも運と
いうのもある。

特に護衛艦隊に載せられている流星は全て機上電探を装備していない。

もし運が悪ければ見逃してしまう可能性も大きいだろう。

仮に敵艦隊の攻撃範囲内に収められてしまったら逃げ切るのは難しい。

第一、第二護衛艦隊の艦隊速力は30ノットを出せるが、輸送船団はどれだけ頑張っても荷物や兵士を満載しているから20ノットを出すのが精一杯だろう。

満載でなければ25ノットは出せるが、そんな状態のところを襲われたら一溜りもない。

それでもヲ級も空母棲鬼や空母棲姫は軒並み30ノット以上を発揮可能だし、護衛艦隊のみでもじりじりと距離を詰められてしまうのは明らかだ。

「提督、これからどうされますか？」

「勿論敵艦隊を叩きに行く。だがその前に敵艦隊の詳細な位置を把握せねばならん。偵察機の準備は？」

「あとは燃料を補給して発艦するだけです、20分も頂ければ第一段索敵が可能です」

「分かった。それならばそうしよう。発艦が終わったらすぐに二段目と三段目の索敵を放つ。それでいいな？」

「問題ありません」

「戦闘機隊は？」

「直掩隊が各艦から4機づつ、48機が艦隊より100kmの地点を哨戒中です。そして万が一に備えて残りの全機も何時でも発艦可能状態で待機しております」

「ならいい。第一護衛艦隊と第二護衛艦隊には輸送船団の護衛を第一とし、敵艦隊と戦闘になった場合は防御に徹せよと伝えておけ」
「はっ」

護衛艦隊は、とてもではないが攻撃に転じられるほどの兵力を有していない。

迎撃に徹すればまだ勝機はあるだろうが、敵戦艦や随伴艦が撃ち上げる弾幕の前ではあの数の攻撃隊など瞬く間に落とされて、下手をすれば全滅の可能性すらある。

敵艦隊を攻撃するならば、一航艦と共同でやる必要がある。

少しして、新しい報告が入ってくる。

「提督、護衛艦隊の偵察機は全て空振りに終わりました」

「我々が放った偵察機が折り返してくるのはいつ頃になる？」

「巡航速度で、大体5時間といったところでしょうか。敵艦隊が何処にいるか分からないので索敵範囲をかなり広く取りましたので時間が掛かります」

「分かった。第一、第二護衛艦隊は輸送船団を伴って上陸地点近海まで前進。我々一航艦は予想される敵艦隊の位置と、輸送船団の間に入る」

「了解しました」

「第一、第二護衛艦隊には敵飛行場への攻撃を開始せよ、と送れ。復旧されないと言う保証は無い、確実に叩いておきたい」

「了解しました」

指示を飛ばして、艦隊は位置を変える。

カミギン島北西300kmの位置で艦隊は遊弋。

敵艦隊がいるであろうと想定されるのは輸送船団が出発した沖縄方面の方だと考えられる。

側背を突くにはそのあたりからが最も有効だからだ。

沖縄から挟撃を受ける可能性があるが、一番近い飛行場は石垣飛行

場か与那国飛行場だ。

どちらも規模が小さく、紫電改の2個航空隊72機が駐留するのが精一杯で、それでも手狭だ。

他には哨戒用の二式大艇が12機居るだけである。

戦力的にも、距離的にも挟撃されることはまずない。

「提督、敵飛行場の無力化が完了したとの報告が」
「分かった」

敵艦隊発見の報告は未だされず、時間が過ぎていくばかりである。

「提督、偵察機から入電！」

「報告せよ」

「敵艦隊発見、位置宮古島南西沖約450海里、艦隊より600海里！
空母11、戦艦10、巡洋艦17、他随伴艦多数！」

「報告ご苦労、下がって構わん」

「はっ、失礼します」

「提督、どうされますか？」

「どうするか……」

参謀達が困ったように俺に聞いてくる。

というのも、敵艦隊との距離が遠いのだ。

その地点からだとなが艦隊まで900km以上もある。

攻撃隊を放つには距離がありすぎるのだ。

攻撃隊を放つには最低でも300海里以内、欲を言うならば250海里にまで接近したい。

攻撃自体は可能だが、問題は敵艦隊近辺で迎撃を受けた場合敵艦隊上空で戦える時間が短いということだ。

それに被弾したり燃料漏れを起こした機が帰ってこれなくなる。

二式大艇に救助を行わせるのも、ほぼ間違いなく敵艦隊から妨害を受けるから搭乗員の生還はそれだけ難しくなる。

だから参謀長達もどうするべきか、困って判断を仰ごうとしたのだろう。

「しかし、何故そこまで離れている……？」

「分かりません……。これだけ離れていては敵も攻撃隊を放つことなど出来ないのに……」

皆で頭を悩ませる。

しかし悩んでいたところで、現状を打開出来はしない。

こちらから打って出ることも出来ない。

輸送船団を守るといふ何よりも優先しなければならぬ任務を果たせなくなるからだ。

別動隊がないと言う確証も得られていない現状ならば、いるかもしれないと仮定して動いた方が賢明だ。

「もしかすると、敵艦隊は増援との合流をしようとしているのでは？」

「しかし最も近い場所の敵艦隊拠点でも一週間は合流に掛かるぞ」

色々と考えてみるが、イマイチしつくりと来る回答ではない。

「提督、このままでは輸送船団の方が燃料などに不安が出ますし、陸軍の兵士達も士気が低下するばかりです」

「……仕方がない、輸送船団に対して上陸を開始するよう命令を発する」

「ですが、危険では？」

「どちらにせよこのままでは何も進まん。責任は取る。進めてくれ」

「了解しました」

命令が伝達された後、すぐに陸軍第71師団の上陸が開始された。

沿岸部の防御陣地は第一、第二護衛艦隊の戦艦と重巡洋艦全てが艦砲射撃を行い破壊。

まず歩兵を満載した大発が海岸を確保するために接岸、上陸。

二時間ほどの小規模な戦闘が何度か繰り返され、海岸から5kmの地点までを確保すると待つてましたと言わんばかりに第200号型

輸送艦が次々と海岸に接岸、上陸。

そのすぐあとに、独立工兵第14大隊が上陸を開始。

上陸が完了するとすぐさま道を切り開くべく前進。

予定通り第一、第二護衛艦艦隊はカリマンタン島へ輸送船団を迎えに行った。

陸軍の空の守りは陸軍飛行戦隊が到着するまでグラーフ・ツエツペリンとアークロイヤルの2隻に任されることになった。

ビガンへの上陸と、その飛行場を奪取するまでは、二隻は上陸支援に当たることになる。

それ以外の空母は全て敵艦隊に備える。

陸軍の方は至って順調。

旧アパリ市街の奪取に2日掛かったが、無事終了。

独立工兵大隊の手によってアパリに簡易的な港が作られ物資揚陸が簡単になった。

流石に重量物の揚陸は出来ないので引き続き海岸の砂浜を使わなければならぬが大した問題ではない。

それにこれで海軍陸戦隊が河川機動を行える。

それが完了すると、独立工兵第14大隊は内陸部への進軍を開始、道の建設を進めた。

それに続いて戦闘団は進軍していく。

敵部隊との交戦はあるが戦力差もあって問題無く撃破して進んでいる。

2日のうちに最初期の目標を達成することが出来た。

するとそんな時のことであった。

「提督、敵艦隊が我々向かって来ています！」

「今このタイミングでか!？」

「はい、接触を続けた潜水艦隊から報告ですので間違いありません!」「戦力に変化は?」

「ありません、当初の偵察の報告と同じです」

「……連中、これが狙いだっただのか」

「どういうことでしょうか?」

「敵は、我々が上陸をするまで待っていたのだろう」

「我々一航艦や護衛艦隊を撃破してしまえば、あとは無防備な輸送船団と孤立無援になる陸軍だけ、撃破は容易ということですか」

「恐らくな。クソ、判断を誤った」

俺達はこれで、敵艦隊と戦わないという選択肢は無くなった。

しかも護衛艦隊と言うところそのこの戦力を欠いた状態で敵艦隊と戦わねばならない。

艦載機の数995機。

敵との数的有利を失ったことになる。

「第一、第二護衛艦隊は？」

「輸送船団と合流してないので、呼び戻すことは可能です」

「今すぐ呼び戻してくれ。敵艦隊との戦闘に備えなければ」

幸いにも第一、第二護衛艦隊は呼び戻せる距離にいる。

「合流したら、第一、第二護衛艦隊の空母を2隻と随伴艦を上陸支援に残して敵艦隊に対して打って出る。それで準備を進めてくれ」

「はっ」

翌日の1800に第一、第二護衛艦隊と合流。

軽空母

海鷹 龍驤

重巡洋艦

キャンベラ ゴトランド

軽巡洋艦

鬼怒

駆逐艦

桃 椿 楓 樺 楠

大波 涼波 柿 梨 雄竹

以上を上陸支援に残して残りの艦は敵艦隊との戦いに向かった。

第65話

「敵艦隊との距離は？」

「凡そ350海里、十分に攻撃範囲内です」

距離は縮まっているが、まだ遠い。

搭乗員の負担を考えたらやはり300海里以内に敵艦隊を収めた
い。

それに今は夜だ、攻撃隊を放つのは難しいし、敵艦隊と付かず離れ
ずの距離を保たないとならない。

「夜明けと同時に敵艦隊に対して攻撃を行いたい。編成は第一次第一
波は爆装を多くして周りを囲む戦艦や巡洋艦の対空砲を沈黙させて
から魚雷を叩きこもうと思う。どうだろうか」

「それが被害を減らせる確実な方法でしょう。そのように準備を進め
ます」

「頼む。それと引き続き対潜、対空警戒を厳にするように」
「了解しました」

参謀長達と話を付けていると、航空参謀の石丸中佐が手を上げる。

「どうした？」

「提督、この際ですので敵艦隊に対する夜間攻撃を実施しては？」

「それは、出来るのか？」

「訓練では既に夜間の敵艦に対する攻撃も実施しております」

「だがそれはまだ一度しか行っていないと聞いているが」

「その通りです。ですが、実戦以上に得られる経験や戦訓は無いと考
えます。それに、今ならば確実に敵艦隊に対して先制を取れますし、
敵艦を沈めることは出来なくても提督が仰ったように対空砲や電探
などは破壊、沈黙させることが可能です」

「……原田少将と西寫中佐を呼んでくれ。彼らに聞いて可能かどうかを聞いてから決める」

「了解しました」

五分もしない内に二人が艦橋に上がってくる。

原田少将は前線部隊の指揮官としては有り得ない階級であるが、その実力故に余裕の無い我々母艦航空隊戦闘機隊の総隊長を務めている。

西寫中佐は戦爆全体の攻撃隊を直接率いて指揮する人物で、先の北海道沖海戦が指揮官としての初陣だった。

階級的には原田の方が上だが、指揮の序列としては西寫のが高い。

「提督、何用でしょうか？我々を呼んだということは、攻撃に関することなどは分かりますが」

「二人とも、今俺達は敵艦隊に対して夜間攻撃を仕掛けるか否かを議論している。率直に、自分の意見だけを言ってくれ。可能か？」

俺が聞くと、二人は難しい顔をする。

「どうでしょう……。やること自体は可能ですが、なにぶん夜間対艦攻撃は、夜間対地攻撃と全くの別物です。対地は事前情報と照明弾の明かりで十分撃破は可能ですが、動く目標に対してとなると……」

夜の海上は、本当に真っ暗だ。

明かりがあっても海面がどこなのかすら分からないし、距離感覚や時間感覚など、昼行生物の我々はあらゆる感覚が昼間に比べて鈍くなる。

「私は、西寫中佐の意見を尊重します。戦闘機隊は攻撃隊を守るのみですので」

「西寫中佐、雷撃無しで降爆だけならどうだ？敵艦は沈めなくてもいい、対空砲と電探さえ潰せればいいんだが」

「なるほど……。それなら、可能かもしれません。敵の対空砲を薙ぎ払うなら25番2発で十分ですし、機体にも余裕があります」

「であるならば、実行してくれるか」

「勿論であります。やれと言われたからには見事目的を達成してみせましょう」

「頼む。ただ、かなり冒険的なものだ、もし西寫中佐が実行不可能と判断したら攻撃を行わずに爆弾を投棄して帰投しても構わない。良いな?」

「はっ」

「であれば、攻撃隊の準備を進めてくれ。発艦は……、敵艦隊との距離も縮めることなどを考えて、余裕を持って一時間後の2100からでどうか?」

「ぶら下げるのは爆弾だけですが初めてのことで、それで問題無いでしょう」

「ではそれで進めてくれ。出来る限りの万全は尽くすようにな」

「了解しました」

「では、二人とも、頼んだぞ」

「はっ」

解散後、攻撃隊の準備は着々と進められた。

流星には、今回は25番を2発積むに留めておく。

敵艦を沈めるのが目的ではなく、対空砲を破壊、もしくは沈黙させる程度の損害を与えられればいいからだ。

目標は空母ではなく周りの戦艦や巡洋艦といった空母を守る護衛艦艇である。

空母に爆弾をねじ込んでもいいが、25番の損害だとすぐに修復されてしまうのは目に見えているので一次攻撃と二次攻撃の二回どちらとも護衛艦艇に狙いを絞る。

2100きっかり、甲板に並べられた夜間攻撃隊は順次発艦を開始した。

攻撃兵力は烈風71機、流星63機と以前の夜間対地攻撃と全く同じだ。

飛龍

烈風5機 流星6機

蒼龍

烈風5機 流星6機
瑞鶴
烈風5機 流星6機
隼鷹
烈風5機 流星6機
飛鷹
烈風5機 流星6機
天城
烈風5機 流星6機
阿蘇
烈風5機 流星6機
大鳳
烈風5機 流星6機
烈風5機 流星6機
グラフ・ツェッペリン
烈風5機 流星6機
アークロイヤル
烈風5機 流星6機
信濃
烈風5機 流星6機
加賀
烈風1機 流星3機
烈風7機
流星6機
計134機

以上が各艦の出撃機数だ。
攻撃兵力としては全く不十分に違いないが、今は仕方がない。
発艦する数が少ないから、ほんの5分で発艦を終えると、攻撃隊は

編隊を組んで敵艦隊へと飛び去って行った。

「2時間もあれば、攻撃の結果は分かるでしょう。戻ってくるのにもう2時間と見て整備と爆装にもう1時間。余裕を持って考えても0300までには再攻撃が可能になるかと」

「それは攻撃隊の被害状況と相談だな。軽微なら再度攻撃を加えて確実に敵艦隊の防空網に穴を開けておきたい」

「了解しました。準備を進めるだけ進めても宜しいでしょうか」

「ああ、進めてくれ。それと帰って来た時のために飯を用意しておいてやれ。気を使つて腹が減っているだろうからな」

「はっ」

攻撃隊の無事と安全を祈りつつ、艦橋で待つ。

2326、攻撃隊から敵艦隊発見の報告がされた後すぐにト連送が打電された。

2402、戦果と損害を報告する電文が送られてきた。

「読み上げます。『我、敵戦艦4ニ攻撃ス。命中ソレゾレ20発以上。艦上構造物ノ損害大ナレド沈没ノ見込ミ無シ。健在ナル敵戦艦5。我方方ノ損害無シニツキ再攻撃ノ要アリト認ム』以上です」

「大戦果だな……」

「まさかここまで上手く成功するとは思っていませんでした……」

「どういうことかは、攻撃隊を收容してから聞こう。收容準備だ」

「了解しました」

思わぬ大戦果に、逆に困惑してしまう。

帰ってきた攻撃隊に話を聞いてみると、どうやら完全に奇襲となつたらしい。

迎撃機も無ければ、対空砲もまばらに撃ち上げてくるだけで、巡航速度で動くばかりだったのだとか。

寧ろ対空砲や機銃を撃ってきたことで敵艦の位置が分かり易かったということらしい。

なるほど、敵はどうかやらこちらの夜間攻撃を予想していなかったらしい。

こちらの機が電探を積んでいるとは思っていないのかもしれない。本土上空の防空戦では、銀河が積んでいるだけで震電は積んでいないということもあって、単発機に積んでいないと余計に思わせたのかもしれない。

俺だったら単発機に搭載されておらず、どこかに大型機が居てそいつが電探を積んでいると考えているだろう。

「提督、第二次攻撃隊を出しましょう。この調子であれば敵戦艦全ての対空砲を沈黙させることも可能です」

「勿論だ、流星には再度爆装を行い、烈風にも爆装させよう」

「それは危険では？」

「なに、もし敵が機上電探を装備していたら同じように攻撃をしてくるか、そもそも迎撃を受けていたはずだ。それが無いということは敵に機上電探を装備している戦闘機は無いと考えていいだろう」

「なるほど……。ですが、用心するに越したことはありません、我が飛龍隊と蒼龍隊は爆装無しで出撃させましょう」

「それで行こう」

0240、第二次攻撃隊が発艦。

0353にト連送が発せられ、0412に戦果電文が発せられた。

『我敵戦艦4二降爆、敵戦艦1二烈風15機ガ攻撃ス。敵戦艦ノ対空砲ハ沈黙、炎上中。他、巡洋艦7二攻撃。対空機銃等破壊確認。敵機ノ迎撃受ケズ損害無シ』

どうやら予想は的中したらしい、敵艦隊に機上電探を装備している敵機はいないようだ。

薄暮に合わせて攻撃隊の準備も終わっており、0400きっかりに飛び立っている。

入れ変わりで敵艦隊に攻撃を加えることになる。

第一次攻撃隊 第一波

飛龍

烈風20機 流星12機

蒼龍

烈風20機 流星12機

瑞鶴

烈風20機 流星20機

隼鷹

烈風20機 流星12機

飛鷹

烈風20機 流星12機

天城

烈風16機 流星12機

阿蘇

烈風16機 流星12機

大鳳

烈風16機 流星12機

グラフ・ツエツペリン

烈風16機 流星無し

アークロイヤル

烈風16機 流星無し

信濃

烈風36機 流星16機

加賀

烈風32機 流星16機

鳳翔

烈風12機 流星4機

大鷹

烈風12機 流星4機

神鷹

烈風 1 2 機
流星 4 機

千代田

烈風 1 2 機
流星 4 機

烈風 2 9 6 機

流星 1 5 2 機

計 4 4 8 機

第一次攻撃隊 第二波

飛龍

烈風 1 2 機
流星 1 4 機

蒼龍

烈風 1 2 機
流星 1 4 機

瑞鶴

烈風 1 2 機
流星 2 6 機

隼鷹

烈風 1 2 機
流星 1 4 機

飛鷹

烈風 1 2 機
流星 1 4 機

天城

烈風 1 2 機
流星 1 6 機

阿蘇

烈風 1 2 機
流星 1 6 機

大鳳

烈風 1 2 機
流星 1 4 機

グラーフ・ツエツペリン
烈風12機 流星14機
アークロイヤル
烈風12機 流星18機
信濃
烈風25機 流星26機
加賀
烈風25機 流星29機
鳳翔
烈風8機 流星8機
大鷹
烈風8機 流星8機
神鷹
烈風8機 流星8機
千代田
烈風8機 流星8機

烈風202機
流星247機
計449機

攻撃隊は以上のようなになった。
夜間攻撃を行った流星は整備と再武装の時間がないので外されて
いる。

各空母から4機ずつの烈風と夜間攻撃を行った烈風を全て直掩に
残して、あとは全て攻撃隊に随伴させている。

135機の烈風と、流星63機の計198機が艦隊の上空を守る。
合計機数に差は無いが、第一波攻撃隊には烈風を多く随伴させ、確
実に制空権を奪取するために流星の数を減らしている。

300機も烈風が居れば確実に敵戦闘機の迎撃は抑え込める。
逆に第二波には流星を多くして敵艦隊に対する攻撃能力を上げて
いる。

その気になれば全機を一つの攻撃隊にすることも可能で、カタパルトのおかげで発艦も短時間に終わるが、準備の時間が足りないこと、収容作業が煩雑になること、二の矢をつがえることが難しいことなどから二つに分けている。

発艦には第一波が30分、第二波も同じく30分程度で終了させ、敵艦隊に飛び立っていく。

流石にこれだけの大編隊を組むとあって空中集合にたっぷり20分を要したが、順調に敵艦隊へ攻撃隊は飛んで行った。

—— side 西寫 ——

「壯観だな……」

「ええ、世界中どこを探しても艦載機だけで、これだけの大編隊は後にも先にも無いでしょうなあ……」

後ろに乗る矢田と、攻撃隊の大編隊を見て呟く。

右を見ても左を見ても、我が海軍の特徴的な濃緑色と濃紺の迷彩が施された機体が、4機編隊を組んで発動機の爆音を猛々しく響かせながら飛んでいる。

矢田が言った通り、空母艦載機でこれだけの大編隊は先ず無いことだろう。

しかしだからと言って油断はできない。

今回は原田少将以下の歴戦中の歴戦、超が付くほどのエースパイロット達が軒並み夜間攻撃を行ったことで戦闘機隊にしろ流星隊にしろ、攻撃隊に居ない。

他の者達も十分に腕が立つが、それでも実戦が初めてという搭乗員も少なくない。

沖縄奪還が俺の初陣だったが、まさかここまで長生き出来るとは思っていなかった。

それも提督のお陰だろう。

着任当初は自軍の状況から損害が拡大することもままあったが、今

では損害を徹底的に少なくしつつ敵に大損害を与えるという人だからこちらの損害は戦いを経ていく度に少なくなっていく。

撃墜されて海面に胴体着陸をしても機体後部に小型ゴムボートや非常食などが載せられていて、潜水艦や水上機、陸地への不時着ならば陸軍特殊部隊が救助に来るまで持ち堪えられるようになっていく。

それが意味するのは、ベテランや熟練搭乗員が数多く生き残って質が低下することを防いで尚且つ全体の攻撃能力の向上が図られる。

長い目で見ればそれがどれほど重要なことか分かるだろう。

特に深海棲艦との戦いは消耗戦である。

こちらの消耗を徹底的に抑えつつ、敵に出血を強要するのは当たり前前の戦略だ。

提督を慕う者は陸海軍問わず多い。

なんせ性格が軍人に全く向いていないんじゃないか、というぐらい優しく、それ故に俺達が死ぬのを兎に角嫌がる。

軍隊の指揮官は、部下に作戦で死ぬというのが本質であるが、それは相反するように損耗を前提とした用兵は嫌われる。

その点、提督は一人でも多くの将兵が無事に生き残れるようにあらゆる手段を尽くしてくれる。

海戦が起こると分かっていたら付近には敵艦隊を追跡する潜水艦隊の他に搭乗員を救助するためだけにもう一個潜水艦隊を配備して、尚且つ飛行艇や水上機を待機させる。

攻撃隊に随伴する戦闘機の数には普通なら考えられないぐらい多いし、戦力分散を極力避けて一つ一つの攻撃隊を分厚くしてくれる。

その分、戦闘機隊が敵機を追い払ってくれるから、攻撃隊が敵機に追い掛けられずに済む。

ということでは敵艦の対空砲や機銃にやられる以外での生存確率は飛躍的に上がる。

対空砲に撃墜されるか否かはかなり運の要素が強めだ。

ドイツからの技術には爆弾や魚雷を誘導するための技術があると、何処かの噂で聞いたことがあるがそれは運の要素を可能な限り低く

する、もしくは排除するための装置とも解釈出来る。

そんなものが搭載されない機銃弾や対空砲弾は、命中するとかはやはり運による。

運が悪ければ対空砲弾が思いっ切り直撃することもあるし、運が良ければ当たらない、至近距離で爆発しても破片が飛んで機体にぶつかって音を立てる程度に留まる場合もある。

爆弾を落したり魚雷を敵艦に叩き込むためには、今の段階では機体の進路を急激に変えることが出来ない。

極論を言ってしまうえば直進することしか出来ない。

だからその直線状に対空砲や機銃を撃ち込めば、まあどれかは当たるだろう、というのが今のやり方だ。

そりや当然運頼りになる。

そういった全てが絡んで戦場というのは構成されるが、提督はそれ以外の、我々の手で排除出来る損害の要素を出来る限り少なくしたりしてくれる。

兵士とて誰だって死にたくはない。

提督自身がどう思われているのかは推し量ることは出来ないが、それでも損害を減らす努力をして実際にその効果が表れているとなれば、誰だって慕いたくもなる。

しかも作戦上とか関係無く、気に掛けてくれる。

停泊中は許される限り妻帯者を優先して家に帰らせてくれるし半舷上陸なんかも多い。

そのくせして提督自身は、所謂ワーカーホリックだから困りものだ。

俺が結婚した時は提督から一升瓶が差し入れられ、短いながらも祝いの言葉を掛けられたのは記憶に強く残っている。

流星に下士官達にまで、とはいかないが普通に話し掛けたしているし、距離感は近い。

ただ、話し掛けられたりしても下士官や兵卒達は恐れ多くて固まる事が殆どだ。

食事も生来の気質故か、豪華なものは好まない。

合戦飯は食べ易いし美味しいで好物だ、と笑いながら語っていた。

確かに合戦飯で出される握り飯に味噌汁、沢庵の組み合わせは最強と言つてもいいだろう。

だが流石に三食レトルトや軍用缶詰はどうかと思う。

ちなみに俺の好きな合戦飯は、機上で食べる為に配給される巻き寿司である。

提督は威厳で引つ張る指揮官ではなく、人情や人望で引つ張るタイプの指揮官だろう。

威厳と言われても、艦娘の皆さんによく怒られているのを見るし、話しもやってくる。

今回は誰それに、これこれこう言う理由で怒られたらしい、だとか。艦の上の娯楽は多くないから、噂話なんかは恰好の娯楽だ。

艦艇勤務をしていると分かるが、噂なんてのはすぐに広まる。

もっぱらの話題は次の作戦だとか、嫌いな上官や先輩の悪口、艦内酒保、そして提督のやらかしである。

以前提督が霧島さんに叱られているのを見たことがあるが、艦上で時に戦艦同士の砲撃戦を指揮するような勇ましい姿は何処へやら、小さくなっていった。

申し訳ないと思うが、すぐに我々の話のタネである。

空の上は、発動機の爆音以外は静かであり、これが爆弾を抱えた攻撃ではなく遊覧飛行であったなと思うばかりである。

断続的に敵艦隊へ接触して位置を知らせている偵察機の情報によれば、そろそろ敵艦隊へ到達する頃合いである。

「隊長、敵戦闘機を護衛戦闘機隊が見つけたと。数は約100機」

「すぐに迎撃に迎え。烈風の半分もいれば十分だろう」
「了解」

案の定、迎撃に上がってきた敵戦闘機が、と報告が入ってくる。機数は100機ほどと少なく、すぐに戦闘機隊を向かわせて抑えにかかる。

150機の烈風で囲い込んで入れ替わり立ち代わり抑え、我々に手出しが出来ないようにしてやる。

攻撃隊は、全くの妨害を受けぬまま敵艦隊の上空へ到達。

雷撃組は高度を落とし、俺達降爆組は高度4500のまま進む。

まずは俺達降爆隊が敵艦に突っ込んで対空砲や機銃を沈黙させる。そのあとに雷撃隊が一気に突っ込んで魚雷を叩きこむ算段だ。

所謂雷爆同時攻撃と言うやつだ。

周りで対空砲が炸裂し、黒煙を上げるが、流星にこの距離では捕まらない。

しかし、撃ち上げられる対空砲があまり濃密ではない。

何時もなら空一面が黒煙で覆われるぐらいなのに、今日は天と地の差がある。全くと言っていいほどだ。

敵戦艦や巡洋艦が撃つてくる対空射撃は、山が火を噴いているが如くの激しさだが今日は殆ど撃ち上げていない。

これは、夜間攻撃が余程上手いこと成功したに違いない。

初めて実戦で初めて取られた戦術と言うのもあって多分、連中も対策なんかは無かったのだろう。

銃座や砲座だけでなく、これはもしかすると電気系統なども破損している可能性があるな。

下手したら電探がぶっ壊れていてもおかしくはない。

よしんば対空射撃をしたところで、闇夜で対空砲や機銃を撃つだなんて寧ろ目立ってしょうがないから、的になるだけだろうし、そもそも夜の真っ暗で何も見えない海上の、しかもより暗い上空を飛ぶ飛行機を捉える方法なんて早々思い付きもしない。

電探があったところで、反応があった辺りに撃つしか無い訳だか

ら、初めてやられた方としては全く驚き以外の何物でもなかったに違いない。

しかしこれで、随分とやり易くなったな。

大した妨害も無いなら、あとは俺達がしつかり仕事をして爆弾と魚雷を叩きこむだけだ。

機数は十分。

それぞれ、

飛龍隊、蒼龍隊

瑞鶴隊、隼鷹隊

飛鷹隊、天城隊

阿蘇隊、大鳳隊

信濃隊、鳳翔隊、大鷹隊

加賀隊、神鷹隊、千代田隊

に分けて1隻づつを狙う。

これで、上手くいけば7隻の撃沈波を望める。

こんな采配が出来るのも、機数が多いから可能なことだ。

「矢田、司令部に打電は終えたな？」

「とっくに」

「ト連送！」

「了ッ！」

それを合図に、すべての流星が敵空母に目掛けて次々と突っ込んでいった。

攻撃を終えた後には、甲板から黒煙と炎を噴き上げ洋上を漂うばかりの敵空母の姿があった。

第一波攻撃隊から電文が飛んでくる。

『我敵空母7隻ヲ攻撃ス。4隻撃沈確実、3隻撃破。航空機ノ発艦不可能ナリ。0530』

『敵戦艦、敵巡ノ対空射撃脆弱、脅威ナラズ。敵駆逐艦ノ対空射撃ハ未ダ脅威ニツキ警戒サレタシ。0535』

『被弾撃墜機、敵機ニヨルモノ無シ。敵戦闘機ハ壊滅ナレド、未ダ敵艦隊上空ニアリ。敵対空射撃ニヨリ28機撃墜破。内11機ハ不時着水、地点敵艦隊ヨリ40〜80kmニ分散、至急救助求ム。0551』
たつぷり30分以上に渡つての攻撃で、見事空母を7隻やつてくれたらしい。

戦果には誇張拡大が含まれることもあるから、全てを信じることは出来ないが、それを差つ引いたとしても大戦果には間違いない。

しかし敵もタダではやられない。

次は此方が攻撃を受ける番である。

『秋月より入電！』対空電探二感アリ。敵機大編隊接近中、約300〜350機！方位北東060、距離250km！』以上です！』

艦内無線により、敵機接近の報告が次々と上がって来る。

時間的に、我々の攻撃隊が発艦した少し後に敵攻撃隊が発艦したのだろう。

規模はかなりのもので、無傷で切り抜けるのはまず無理だろう。

「直掩隊を全て上げる、発艦急げ」

命令を下すと、ものの10分で烈風、流星が発艦を終えた。

「直掩隊には敵機の状況によっては流星隊は迎撃に加わらず退避せよ、と伝えろ。無駄死はさせるな」

「はっ」

「鳳翔、大鷹、神鷹、千代田を艦隊から分離、後方へ下げる。我々に損害が出たら着艦はそちらに、いざとなったら機体は捨てて構わん。搭乗員さえ収容出来ればよい」

「はっ」

鳳翔達に駆逐艦12隻を付けて後方へ。

恐らくは二波に渡って全力で攻撃を仕掛けてくるだろう。

敵の第一波が到達するまでは30〜40分はある、迎撃をして、艦隊が準備を整えるのには十分な時間だ。

「全艦対空戦闘用意。訓練を思い出せ、全機を叩き落とす勢いでやるんだ」

下令されると、弾薬を運んだり機銃の動作を確認したりと艦上は慌ただしくなる。

「全艦対空戦闘用意終わり！」

「宜しい」

すると、艦全体が戦闘を前にして静かになる。

誰だって、死ぬかもしれない戦闘を前にしたら緊張するのは当たり前だ。

艦橋にはこの戦いが初陣の新兵が十数人いるが、皆緊張しすぎて顔が引き攣っている。

落ち着きがなく、キョロキョロと首を回しているが仕方が無い。

「大丈夫、格納庫は空っぽだよ。爆弾の1発や2発食らってもへっちゃらへっちゃら」

それを見かねた飛龍が明るく言う。

艦そのものである飛龍が言つて、幾らか緊張が解れたらしい。

「直掩隊、敵機と戦闘開始。敵戦闘機約120機」

「機数では若干負けているか……」

「電探によると、流星隊は回り込んで烈風が引き付けている間に敵攻撃隊を叩く算段のようです」

「直掩隊からしたら、並の連中じゃ敵わない。上手いこといけば敵戦闘機は全て引き付けられるか」

烈風隊に遅れること10分、流星隊が迎撃戦闘を開始した。

やはり戦闘機隊に引き付けられ丸腰だったらしい、敵戦闘機の妨害も何も無く敵機を攻撃しているようだ。

上方から攻撃すると、自衛用の旋回機銃に捕まってしまうから下方からの攻撃に専念している。

翼内20mm機銃と後部の13mm機銃で次々と攻撃されては、防御力が高い深海棲艦機と言えど撃墜は免れない。

しかしだからと言って、全機を落とすことは叶わない。

『敵降爆約70、雷撃機90機が迎撃を抜けた！』

流星隊からの報告で、160機が迎撃を潜り抜けたことが知らされる。

「全戦艦、三式弾射撃用意。距離300(30000m)で別命無しで各艦一斉射。重巡は距離200(20000m)で一斉射。軽巡、駆逐艦は射程に入り次第射撃開始。訓練を思い出せ。敵機に狙われた艦は個艦での回避を許可する」

敵編隊との距離が300になった時、一斉に戦艦の主砲が咆える。

艦隊中に大音量の砲声が響き渡り、そして大気が震える。

「流石に18隻の戦艦が一斉に撃つと、凄まじいな……」

砲撃を行った爆圧で、海が凹む。

艦が海上を進む白波とは違う波が立ち、彼方此方へ波及していくのが分かる。

双眼鏡などで戦艦の砲撃を覗くなどよく言われるが、その通りだろう。

あんなもの覗いていたら目が潰れる。

それに続いて重巡達が一斉射を行う。

重巡は装填速度が速いから、二度の斉射を行う予定だ。

「戦艦主砲弾、弾着5秒前。4、3、2、1、今っ」

弾着を知らせる声を前に、双眼鏡を覗くと敵編隊の少し前方で派手な爆炎が幾つも炸裂する。

パツと見た感じ、先頭集団の敵機が十数機ほど落ちるか、速度を落として落伍していくのが分かる。

「報告、撃墜破19!以上です!」

「炸裂するのが少し手前でしたな」

「次、弾着5秒前。4、3、2、1、今」

双眼鏡を再び覗くと、今度は丁度敵編隊の中で炸裂する。

「報告、敵機撃墜破約20!以上です!」

どうやら合計で約40機程度の敵機を撃墜破出来たらしい。

それでも依然として約120機ほどの敵機が艦隊に向けて直進してくる。

「艦隊外縁、駆逐艦の主砲の射程に入りました、射撃開始しています!」

駆逐艦が主砲として搭載しているのは長10cm高角砲を対地対艦対空の汎用化した長10cm砲二型である。

これは防盾付きとして各戦艦から空母、巡洋艦に至るまで対空砲として搭載されている。

次々と撃ち出される砲弾は、敵機の侵入方向に対して黒煙で出迎える。

照準装置や測距装置を新型のに換装して色々と銃架を改造したりとかかなりの改造を施されているから命中率も向上している。

艦隊に近づくにつれて、駆逐艦だけでなく巡洋艦や戦艦、空母の対空砲までもが火を噴く。

絶え間無い砲声が次々と聞こえる。

砲弾が直撃して爆散する敵機、破片を食らってフラフラと海面に突っ込む機もあれば爆弾を途中で放棄して引き返す敵機もいる。

それでも敵機の数は多く、100機は突っ込んできている。

「機銃、射撃開始!」

艦隊により近づくとは次は機銃の濃密な弾幕が敵機編隊を出迎える。

40mm、37mm、25mm、20mmの4種類の機銃弾が恐ろしい投射速度でもって撃たれ、空一面を赤い火箭が覆う。

撃墜報告が上がってくるが、空母目掛けて突っ込んでくる敵機は8

0機を超える。

「敵雷撃機40、右舷より急速接近！」

「敵降爆30が右舷前方より接近！」

敵機に対する報告が次々と上がってくる。

「空母の直上に対して射撃！撃墜でなくとも言い、降爆を妨害しろ」

「敵機、信濃と大鳳に突っ込む！」

「狙いはやはりあの2隻か」

「はい、どうしても巨艦であり、甲板の色が別物なので目立ちますから集中されるでしょう」

「それに、兵力不足なので集中攻撃を加える算段なのでしょう」

信濃と大鳳はその巨大さと、飛行甲板の色が他の空母とは装甲を施しているとあって違うために目立つ。

だから敵機の攻撃を受けるとなると、どうしてもあの2隻が最初に集中攻撃を受けることになる。

だがそれは大きな誤りだ。

あの2隻は空母の中でもずば抜けた防御力を誇る。

飛行甲板は50番徹甲爆弾でも貫通出来ないし、水中防御も魚雷を1本や2本食らったからと言って簡単には沈まない。

信濃はより堅牢だ。

大和型戦艦の艦体を流用したから水中防御は大和型戦艦譲りのもので、普通の大型艦でも5本も食らえば確実に撃沈されるであろう、魚雷もその倍は持ち堪える。

流石に速度低下や戦闘続行不可能には陥るだろうが、沈みはしない。

飛行甲板も80番徹甲爆弾を持ってこなければ貫通は出来ない。

元々、信濃と大鳳は艦隊の盾としての役割も担っているから当然と言えは当然だが、心苦しいものがある。

次に狙われるのは、加賀や瑞鶴、そして艦隊旗艦である飛龍だ。

「信濃、大鳳に対して援護射撃。撃墜は出来なくとも進路の妨害で投弾をしくじらせればいい」

2隻を狙う降爆機や雷撃機に対して、物凄い勢いの弾幕が張られ

る。

それに絡め取られて更に20機ほどの敵機が撃墜されるか、攻撃を諦める。

しかしそれでも60機が2隻に向かって突っ込んでいく。

「敵降爆急降下！」

「敵雷撃機、射点に付いた！」

信濃が取り舵、大鳳が面舵を取ってそれぞれ回避にをすると無線が入る。

とは言え、あれだけの巨艦が進路を変えるのにはそれなりに時間が掛かる。

「大鳳被弾！」

ゆつくりと舵が聞き始め、艦首がぶれ始めたとき、敵の爆弾が2発、大鳳の飛行甲板に突き刺さる。

しかし装甲で弾いたらしく、全くの無傷であると報告が帰ってくる。

徐々に舵が利き始めると、右へ左へと2隻は避けていく。

あの2隻にはこうなることを予想して、手練れの操舵員を配置している。

そう簡単に食らったりはしまい。

「敵雷撃機投弾！」

ついに敵雷撃機が魚雷を投下する。

しかし30ノットを超える高速で疾走する空母を捉えるのは至難の業だ。

見守っていると、最初に大鳳の左舷に1本、遅れて信濃の左舷に1本の大きな水柱が聳え立つ。

「大鳳、信濃被雷！」

それでも速力を僅かに落とした程度で2隻は疾走する。しかし敵機の攻撃は続く。

逆落として敵機は急降下を仕掛け、大鳳に4回、信濃に5回続けざまに飛行甲板に爆弾が直撃して炸裂する。

それでも飛行甲板に穴が開くことは無く、多少火の手が上がった程

度で留まる。

「流石ですな、全て弾き返している」

「ああ、あの装甲が空母全部にあつたら、と思うが無理な話だ」

「ですな」

何時もならば真つ先に狙われるであろう、飛龍が全く狙われておらず緊張感はあるが、それでも心に余裕がある。

「他艦に向かう敵機はあるか？」

「今のところ認められません。大鳳と信濃だけがお祭り騒ぎです」

「分かった。くれぐれも警戒を怠らぬようにな。奇襲を食らつて大損害、だなんてことは絶対にあつてはならないぞ」

「了解です」

2隻を見てみると、再び爆弾を数発食らっているようだが、依然として健在だ。

「敵機全機投弾終わり、帰投していきます」

「対空対潜警戒厳、被害集計急げ」

「対空対潜警戒厳、被害集計急ぎます」

10分もすると、攻撃を受けた2隻から報告が来る。

「大鳳より入電。『我大鳳、爆弾10、魚雷2ヲ食ラウモ損害軽微。空中線、制動柵切レルモ復旧ノ見込ミアリ。浸水軽微、速力29ノット発揮可能』以上です」

「信濃より入電。『我信濃、爆弾13、魚雷1直撃ナレド戦闘行動支障無し。速力30ノット発揮可能。ナレド速力上ゲレバ装甲捲レル可能性アリニ付キ25ノットニ制限ス』以上です」

「かなり損害が少ないな」

「流石に無傷とはいきませんが、どうやら爆弾は装甲甲板で弾き返すので食らつて元々、魚雷の回避だけに専念したようです」

「現状なら敵急降下爆撃の爆弾ぐらいなら余裕で弾き返せる。それよりも遥かに脅威度が高い魚雷を避けるに専念するのは賢明な判断だろう」

信濃と大鳳が被害を受けただけで、それ以外の艦は一切の無傷であつた。

「提督、報告宜しいでしょうか」

「どうした？」

「第二波攻撃隊からの戦果報告です」

「報告してくれ」

「はっ。『我敵空母4、軽母2ヲ攻撃ス。空母3撃沈確実、軽母2撃沈確実。未ダ敵空母2撃沈ナラズ。ナレド戦闘不能確実。残ルハ敵戦艦ノミ也。再攻撃ノ要ヲ認ム』以上です」

「よし、時間の余裕も十分にある。攻撃隊を收容したならば、即座に再出撃を行い敵戦艦を徹底的に叩く。上陸部隊や船団に手出しされは敵わんからな」

「了解しました」

3時間後、全攻撃隊機を收容し終え、再武装と修理整備を行った後に第二次攻撃隊が1時間後に再出撃。

敵戦闘機の迎撃も無く、対空砲の妨害も大したものでは無かった攻撃隊は、雷撃機中心の編成により、敵戦艦9隻を徹底的に叩き潰した。

第一次攻撃隊で損傷したり、撃墜された流星は40機程度であり、350機にもなる流星の波状攻撃からは、直掩機も対空砲火も無い敵艦隊への攻撃は簡単なものだった。

全ての戦艦に魚雷を4本叩き込み、撃沈確実6隻、残る3隻もまともな戦闘能力は無く、それどころか、周囲の敵巡洋艦や駆逐艦にも甚大な被害を被った敵艦隊は早々に撤退を始めた。

敵艦隊の完全な撤退を潜水艦隊の追跡により確認した我々は、機動艦隊と護衛艦隊に分かれて陸軍部隊を迎えに向かうことになった。

既に上陸している師団は内陸部20kmほどにまで敵を押し込み、目的である橋頭堡を確保していた。

あとは増援を待つて内陸部へ更に進撃し、飛行場を奪って陸軍飛行戦隊を進められれば初期の目標を達成出来る。

第一段階が完了すれば、取り合えず一息つくことが出来る。

第66話

フィリピン奪還作戦が開始されてから2カ月が経つが着実に進んでいる、とは言い難い。

投入師団の上陸は全て完了しており、交代で進軍をしている。

既に第2段階を終了し、第3段階に取り掛かっている。

進行速度は予定より若干の遅れを生じているだけであるが、問題はそこでは無い。

敵ゲリラの対処に思ったよりも苦慮していることだ。

敵の抵抗はやはりゲリラ戦が主であり、奪還地域も含めてフィリピン全域が戦場で後方地域も前線も変わらない。

後方地域で休息中でも関係無しに、一過性の夜襲やら奇襲、強襲が仕掛けられる。

小銃や機関銃だけならまだ良い方で、酷い時には迫撃砲弾などが降り注ぐのだ。

これでどうやって気を休めろと言うのか。

それどころか歩哨の数を増やすぐらいの対処しか出来ないのだから負担が増えるばかりである。

とは言え前線に比べれば後方地域はまだマシだが、いつ襲われるか分からないと言う状況は、陸軍将兵達にとって宜しいものではない。

敵の何時来るか分からない奇襲に怯えて、すっかりとした休養が取れないと言う状況は心理的に負担が大きい。

特に大きさ故に狙われやすい戦車や自走砲などは、いかに機関銃や小銃と言った装甲で防げる攻撃だとしても銃弾が装甲を叩く音と言うのは心地の良いものでは無い。

攻撃が集中こそはするが、余程運悪く戦車であれば砲塔天板に設置されている車長用キューポラや搭乗員用ハッチ、ペリスコープに直撃

するか、自走砲なら天板が無いので戦闘室内に直撃しない限り撃破されはしないが、銃弾や迫撃砲の破片などが当たって弾かれる音と言うのは、やはりどうしても精神的に大きな負担となる。

それによって搭乗員が精神的に限界が来て後送されると言う事態が起きている。

対処法としては、攻撃を受ける前に敵を叩くなどが挙げられたが結局あの密林の中を夜闇などを利用して忍び寄ってくる敵歩兵を事前に察知するのは難しい。

特に野営中だと難しく、進軍している部隊や途中で野営中の部隊は結局、戦車兵に関しては交代要員を準備して1週間ごとに交代させるぐらいしか今のところは無い。

飛行場や補給拠点と言った場所であれば、基本的に部隊が動くなんてことは余程のことが無い限りは有り得ない。

なので集音器を飛行場や補給拠点などの周辺に大量に設置して、事前に敵部隊を察知し駐屯し防衛に当たる歩兵部隊が迎撃に乗り出す、なんてことが出来るが、そうでない前進を続ける各戦闘団は、一々野営する度に集音器を設置して回収してを繰り返さなければならなくなる。

これでは迅速な移動などはやりようもなく、用兵の基本理念の一つである「兵は拙速を聞く」から大きく外れることとなる。

結局野営中に敵ゲリラへの対処は歩哨を多く立てて警戒する他に無い。

我々もカリマンタン島などでの戦訓を取り入れているが、敵もカリマンタン島での戦訓を十分に取り入れている。

カリマンタン島奪還の時は敵の戦術も今と変わらず、ゲリラ戦が主であったがここまで洗練されたものでは無かった。

ゲリラの拠点をこちらが把握する前に別に移して、破壊されるのを防いでいたりあちこちに武器弾薬食料を隠していたりだとかで、こちらが作った道も通れば横から銃弾を浴びせられたり、地雷で擱座させられて擱座した車両の回収に時間が掛かったりと補給線への攻撃も、空中投下があるから前線部隊への大きな影響は無いものの、頻発して

いるので物流が数日滞ったりするのだから馬鹿に出来ない。

どこかの村や町と言った市街地などになると彼我共に大規模な部隊同士がぶつかる事も多いが、フィリピン全域の敵軍の総数は15〜20万が精々であちらこちらの大きな町などを防衛しようとしたリゲリラ戦に兵力を投入するとどうしても兵力分散を強いられることになる。

装甲戦力はこちらの敵地後方破壊作戦によって各地の燃料貯蔵施設などを吹き飛ばしたことによって燃料不足が発生、それが原因で行動は芳しくない敵側はその殆どが偵察用のオートバイや精々装甲車ぐらいだ。

それでも市街地や開けている場所だと航空支援の下で戦車を活用してきている。

こちらは確かに陸海軍航空隊によって制空権を奪取しているが、場面場面や要所要所にのみ戦力を投入すれば航空戦においてギリギリ拮抗する程度にはなる。

だからそちらへ装甲戦力と航空戦力を投入しているためにゲリラ戦では敵戦車は数回見られただけでそれ以外は市街地戦や戦車が十分に戦える場所以外でしか見られない。

全体的にはこちらが優勢になるだろうが、何ともやり辛い。

敵ゲリラとの戦闘は彼方此方のジャングルで発生している。

カリマンタン島などの奪還時のように、道に迷って迷子になる部隊は航空支援や通信機を使った相互連絡などで随分と少なくなっているが、やはり迷子になる部隊はある。

幾ら相互連絡で位置を把握しているとはいえGPSと言った正確に位置情報を知ることが出来る機器が無い。

航空機での位置把握も結局のところ紙の上で印を付けて、それを機上の搭乗員が指示を出すと言ったものだから、全ての部隊を同時に把握することは出来ない。

だから思わぬ場所に出てしまい、どこに居るか分からなくなって連

絡は取れているが互いにどこにいるか分からなくて数日ジャングルを彷徨うだとか、川に出て喜ぶも東の間に位置を測定したら予定地とは全く別地点であるなどだ。

川に出たなら、まだ空から見つけやすいし大発なり小発なりで回収に向かつて良い。

しかしこれがジャングルの中だとどこに居るのやら把握するだけで時間が掛かる。

幸いなのは、通信を逆探知してどこにいるかを大体把握することが出来ることだろう。

これが無かったら目視で目立たない目印が見つかるまで探す羽目になっていた。

訓練を積んでも足を踏み入れたことの無い詳細な地図の無い土地では、それは仕方がない。

作戦が若干遅れている主な理由は敵ゲリラへの対処と部隊の迷子が原因だ。

「提督、パナイ島の奪還が終了し現地部隊が掃討戦へ移行しました」

「良くやった。奪還に当たった部隊に慰労の電文を送ってやってくれ。予定通り休息を挟んだらギマラス島の奪還へ向かうように」

「了解しました」

パナイ島の奪還が完了したと報告を受ける。

予定より2週間遅れであるが、被害は小さく抑えられている。

休息は3日であり、その間に再編と補充を済ませれば問題無い。

「提督、第一護衛艦隊から入電だよ」

「どうした？」

「2日後の1530までには合流出来るって」

「予定通りだな」

当直指揮官である飛龍から報告を受け取る。

今は制海権と制空権を奪取、陸軍飛行戦隊も進駐を次々と開始して

いるので艦隊は交代で本土へ戻り、整備を受けている。

第一護衛艦隊が最後で、合流すれば艦隊の全戦力が揃い踏みとなる。

外洋への長期航海は途中に泊地などを持たない我々にとって大きな負担だ。

艦と言うのは1か月も外洋に出るとあちらこちらが錆だらけになってしまうのだ。

毎日手入れをしてはいるが、それでも追い付くものでは無い。

だから定期的に本土へ戻って機材を入れ替えたりなどの重整備を受ける必要があるのだ。

整備を受ける艦の数は少ないから、瀬戸内海全域にあるドックへ入渠することが出来る。

修理中の艦艇や浮揚作業が大詰めになっている大和、武蔵を除いても可能なのだ。

輸送船の建造の他に戦闘艦艇が損傷した場合に備えてドックは常に20箇所は空けている。

だから多くても30隻程度を擁するに留まる各艦隊は交代でも昼夜問わず行えば10日もあれば十分に整備を終えられる。

これは作戦中であるから昼夜問わずであるだけで、作戦が無ければ昼夜問わず運転しているのは輸送船建造を担当しているドックぐらいである。

工員妖精達も抜き打ちの検査を不定期に実施しているが、十分に休息を取っている。

そちらに関しては、問題無い。

作戦に関係の無い問題として今あるものとすれば、各地への補給問題ぐらいなものだ。

護衛艦隊をさつさと輸送任務に回しては、と言う意見もあるが敵艦隊が出張って来た時を考えるとどうしても第一機動艦隊ないしは護衛艦隊だけでは対処しきれない。

だから確実にフィリピンを奪還してから再開するのが堅実であるのだ。

輸送任務を再開して、これで輸送船団と護衛艦隊どちらにしても大損害を食らっては大事だからな。

ともかく、早く第3段階を終えて第4段階に移りたいものである。

「提督、独立工兵大隊からだけど……」

「増援の懇願だろう？」

「まあ、そうだね」

「もう少しだけ待つように言ってくれ」

「……分かった」

今日もまた、独立工兵大隊から増援を願う暗号文が届く。

それは何故か？

簡単な話だ、独立工兵大隊の被害が大きいかからである。

実のところ、フィリピン戦で最も損害を被っているのは独立工兵大隊に他ならない。

第二に各戦闘団、そして次が陸軍飛行戦隊である。

戦闘団は前線で直接戦うから損害が出るのは当たり前だ。

ゲリラにしろ、市街地戦や村の奪還、進軍中に地雷を運悪く踏み抜いたり、低調とは言えども時折現れる敵機が落とす爆弾や機銃掃射を食らったり。

もつと運が悪いのは友軍戦車の砲撃に誤って巻き込まれたりしたときだ。

我が軍では、歩兵に関しては無線機を5人に一つの割合で配備している。

戦車や自走砲と言った車両類と航空機は全てに無線機が設置されている。

これは戦術的な意味で、物凄く大きい。

単純な話、GPSや衛星、C4Iと言ったものに比べればお笑い程度だが、それでも相互の位置を把握し易くなるし、目標の選定から始

まりあらゆることが円滑に進めやすくなる。

何より誤射の危険が少なくなる。

なんせ戦場と言うのは混沌だ。

どれだけ相互連絡、相互連携を密にしても情報はある程度は錯綜したりしてしまう。

敵味方の識別なんて、精々軍服などの服装か肩、胸、背中のそれぞれに縫い付けられている3cm四方に収まる程度の小さな国章だけ。

戦車でもそれは同じで部隊章か、国章ぐらいなものだ。

それも偽装などで簡単に分からなくなってしまう。

更に言ってしまうえば南方方面に派遣される兵士に支給される被服は、実は簡単な迷彩色が施されている。

ジャングルの中で迷彩服を着ているだけでも分かり辛いのに、更に偽装を施している奴を、どうやって敵か味方かを判別出来ようか？

しかも戦車にとって歩兵と言うのは、実は敵戦車よりも恐ろしい存在だったりする。

戦車は装甲を纏っているから強い、と思われがちだが実は歩兵に対してかなり脆弱である。

歩兵の支援があれば絶大な威力を発揮するが、歩兵支援の無い戦車など、対戦車火器を携帯した歩兵からすれば恰好の獲物だ。

だから戦車は歩兵に対してかなりの警戒心を持って対処せねばならない。

逆も然りで、歩兵は装甲に守られていないから、着弾した時に飛び散る破片どころか、吹き飛ばされた石でも歩兵は死ぬ。

戦車の支援がある歩兵は敵歩兵に対しても敵戦車に対しても挑めるのだが、戦車に限らず車両は迷彩塗装が施されている。

大抵は工場で塗装が為されるが、現地ではそれに加えて偽装を施したりどうやったのか、何故か染料を抽出してどこに居るのか分からないレベルの迷彩を勝手に施すなんて連中まで居るのだ。

歩兵からしても戦車は恐ろしくも、歩兵支援が無ければ良い戦果だから狙いたくなる。

撃破を重ねようものなら昇進だってあるし、戦車撃破勲章なんかを

貰えるわけだ。

これが互いに歩兵支援、戦車支援が無い状態で友軍同士が不意に遭遇しようものなら、驚きの余り不意にどちらかが発砲してしまえば敵味方の確認をする余裕も無いままに完璧な同士討ちが発生してしまう。

実際、南方方面作戦ではそのような事が起きていたし、今のフィリピンでも起きている。

しかも厄介なのがこちらがそうするように敵だつて我々の兵器や迷彩服を鹵獲して使用してくる。

味方の振りをして対戦車火器や戦車砲でドカン！と撃たれたら終わりだ。

いままでも、敵の反撃で摺座した戦車や戦死した兵士から奪った武器兵器、迷彩服を使って奇襲を何度かされている。

そうになると、戦場では疑心暗鬼が始まる。

どこから現れるか分からないゲリラに加えて、鹵獲したもので襲い掛かってくるかもしれない。

疑つて当然、寧ろ疑わない奴が居たら神経がおかしいか、ただの阿呆である。

故に友軍歩兵や戦車の服装や迷彩であつても敵である可能性を疑わなければならぬのだ。

そんな同士討ちをする可能性を低くしてくれるのが、無線である。

互いに互いが出くわして、どっちか分からないとなった場合は無線で連絡を取つてどこに居るのかとか、どんな動作をして欲しいだとかで判別出来るのだ。

結果、効果抜群である。

流石に全てを防ぐことは出来ないが、同士討ちは滅多に起きない。

ついでだから迷彩服、戦闘服についても話しておこう。

迷彩というのは、その土地その土地によつて効果が発揮される調色や配色が全く異なる。

極端な例を挙げるとすれば、アフリカ大陸の迷彩と欧州の迷彩をそ

それぞれの土地で使ったとする。

迷彩なのに、物凄く目立つのだ。

そりゃあ、植生や土の色が全く違うわけだから当然だ。

日本本土には日本本土用の効果を発揮する迷彩、旧自衛隊が使っていた迷彩がそうだ。

アレをフィリピンやカリマンタンで使ったら、それはもう目立つ目立つ。

自己主張が激しいのかと言うぐらい目立つ。

そして、前述の通り今の陸軍、特に南方方面に展開する部隊には例外無く迷彩戦闘服が支給されている。

と言うのも、元々はカーキないしは単色迷彩の戦闘服が支給されていたのだが、戦訓として陸軍は、南方方面攻勢が終了した際に従来のカーキや単色の緑色では偽装を施さないとジャングルの中で、単色戦闘服はまだしもカーキは馬鹿みたいに自己主張をするが如く目立つことを確認しており、それが大問題となっていた。

これは単純に敵からの視認性を大きく上げてしまうだけでなく、隠れても隠れても簡単に位置を悟られてしまうのだ。

そうなるとう極論、隠れた敵に対してこちらは一方的に撃たれてしまうことになる。

それはあまり損害を出したくない陸海軍にとって致命的だ。

兵士の損耗を抑える意味でも、早急に迷彩戦闘服を最低限南方方面軍に支給、配備する必要があった。

南方方面作戦の時は互いのゲリラ戦や対ゲリラ戦の戦術が未熟であったため、問題は表面化しなかったが、それでも敵の狙撃手にやられたと言う報告が頻発したし、作戦後半になるとそれが表面化、兵士達の間では、「俺達の仕事は進軍中でも草木のフリをすることだ。戦闘は二の次」なんて冗談まで始まる始末。

敵からすればジャングルの中で偽装していないカーキ色はそれはもう良い的にしか写らない訳だから、そんな冗談が流布しても仕方が無い。

そもそもカーキ色の戦闘服が使われていた理由は、単純に迷彩を行うことで生産性の低下を招くからだ。

増える兵員全員に迷彩服を支給するのは、爆撃で工業能力が壊滅的と言つていい日本にとつて死活問題足り得る。

流星に下着や訳の分からない民兵紛いの服装で戦地に送り込めるわけがない。

だから生産性に重きを置いてカーキが主で、単色迷彩もある程度は生産するみたいな状況だった。

しかし更なる、来るべき南方での作戦を考えると、カーキや単色迷彩を使い続けるのは現実的では無かった。

そこで陸軍は、奪還作戦中から迷彩の研究を始めたのだ。

日本本土なら旧自衛隊が使つていた迷彩を流用して、と言う事が可能だが南方方面はそうもいかない。

数か月の研究の結果、南方方面では色調が濃い目の3色迷彩、濃緑、濃茶、暗く色調したカーキを混ぜた色になった。

大至急、最低限フライリピン奪還作戦に参加する部隊だけには行き渡るよう生産が開始され、今に至ると言うわけだ。

話を戻そう。

独立工兵大隊の損害が大きい理由は、単純な話、狙いやすいから。

他の戦闘団に比べ、大した火力も無ければ護衛の歩兵こそいれど守りも薄い。

忍び寄つてしまえばあとは一撃食らわせジャングルの中に再び逃げてしまえばいい。

道から一步外れれば同じような光景が延々と続いているのがジャングルだ、追撃も容易じゃない。

それで自分達が迷子になったら笑えない。

それに、特に最前線で道を切り開く独立工兵大隊は損害がでかい。

真つ先に敵陣への道を切り開くから当然敵の攻撃に一番最初に受

けてしまう。

だから機材も人員も損耗が大きく、速く補充を寄越せとせつつかれていますわけだ。

部隊の損害は、どれだけ技術が進歩しようと、生身の兵士が戦地に出て戦う以上決して避けられないことだ。

損害0で戦闘に勝とうなんて、どれだけの夢物語を見ているのか、と普通なら再び軍大学なり教育隊に戻して、と言う以前より戦争とはなんなのかと言う事をみっちり叩き込まねばなくなる。

俺の仕事はそれを出来る限り少なくすること。

別に何も無しにその要請を保留にしているわけではない。

あと1週間もすれば、本土から交代の独立工兵大隊が到着し交代出来る。

そうすれば前線に居る大隊と交代が出来る。

前線の独立工兵大隊の損耗率は、人員こそ2割に抑えられているが、独立工兵大隊たる所以の機材は損耗率5割に達しており進軍速度が低下しているのも損耗によって予定速度で道が開けないことによる。

やはり独立工兵大隊には固有の装甲戦力を護衛として付ける必要があるとのこと、新しく送られる独立工兵大隊には、損害理由を加味して装甲戦力であるパンター4両を含め歩兵30名ほどを擁する警戒隊を新しく編入することにした。

建設機材はパンターの車台を流用したV号開削機やV号引揚機、ベルゲパンター、V号架橋戦車を装備しているが、あくまでも建設機材であるから装甲戦力としては自衛火器を積んでいるだけで大して期待は出来ない。

だからパンター戦車を1個小隊組み込んで、それに随伴出来る、戦車との相互連携訓練を積んだ歩兵を合わせて警戒隊とするのだ。

これで前方後方を戦車で守れる。

正直部隊規模が大きくなり過ぎている気もするが、今は取り合えずである。

正直IV号戦車でも良かったのだが、すでに戦車の生産はパンター、

センチユリオン、ティーパー、ティーパーIIの生産に振り切っているのでIV号戦車は自走砲用の車台や部品を除いて行われていない。

態々IV号戦車の生産を再開するぐらいなら、別にパンターで良いじゃないか、と言うわけだ。

取り合えずこれで凌いで、前線から下がった2個独立工兵大隊を優先し再編と人員、機材の補充に警戒部隊の編入を行う。

その間は訓練と休養を兼ねるので大体2週間を予定している。

そのあとはその独立工兵大隊を後方地域での任務に充てて、代わりに後方地域で活動していた2個大隊を再編、補充、編入、休養を行う。

2個大隊を休養などに回し、4個大隊を任務に就かせると言うローテーションを組む予定だ。

「あと1週間だけでいい、耐えてくれ」

「了解。どうする？戦闘団に命令してその間の護衛戦力を増やさせることも出来るだろうけど」

「……いや、止めておこう。戦闘団は戦闘団で任務があるし、損害もある。今はそれをやれる状態じゃないのは確かだ」

「分かった。それじゃあ、お昼ご飯にしよっか」

「もうそんな時間か」

「給料長がさつきから待ってるよ」

「そうだったか、それは悪かった」

「いえ、お気になさらず。本日は少し奮発して握り飯4つと具入りの味噌汁、それに卵焼きと、沢庵ではなく漬物にしました」

「豪勢じゃないか。どうした？」

「昨日補給を受けたので、食材には余裕がありますから」

昨日の内に艦隊は燃料弾薬、それと食料や水の補給を受けている。

冷蔵庫の中は、一昨日はすっからかんで何も無いみたいな状態だったの今は満載状態だ。

弾薬は今でも散発的に航空攻撃や敵潜水艦による攻撃があるので消費してしまう。

激戦続く陸軍の方に対空機銃や対空砲弾を幾らか融通することも

あるので、以外と馬鹿に出来ない消費だ。

海軍は敵艦隊の脅威自体が別方面から新しく転用されない限りは偶に現れる敵機と潜水艦にさえ気を付けておけば特に何かあるわけではない。

陸軍の支援で戦艦を始めとした砲火力のある艦が艦砲射撃を沿岸部に行くこともあるが、言い換えればそれだけだ。

とは言え、母艦航空隊は大忙しだ。

補給物資の空中投下任務を行う連山の護衛から、航空偵察の護衛に支援、陸軍の地上支援、爆撃、対潜警戒任務、艦隊直掩任務 e t c ……。

陸海軍の航空隊に与えられている任務は多岐に渡り、連日交代で烈風と流星が飛んで回っているのだ。

損失した機体と搭乗員に関しては既に本土に整備に戻った際に補充を受けており、しつかりと定数を満たしている。

新兵達も十分に実戦経験を積んでいる。

潜水艦隊の方も任務は上々。

フィリピンへ向かう敵増援を載せた輸送船に対して大打撃を与えているし、次に控えているスラウエシ島と小スンダ列島奪還に備えてそちらの方でも通商破壊を行っている。

どちらともこの2か月で50隻以上の輸送船やタンカーの損害を挙げている。

だがそれでも有り余る物量でもって、こちらの通商破壊網を突破してきている。

毎日10隻単位の敵輸送船団が昼夜を問わず突っ込んでくるのだ。

潜水艦に搭載されている魚雷なんて精々20本が良いとこだ、すぐに使い切ってしまう。

浮上して砲撃戦を仕掛けるわけにはいかないし、そもそも潜水艦で砲戦を行うなんてまず有り得ないし水中での抵抗力を減らす目的もあつて機銃も砲も下ろされている。

実際、微々たるものではあるが0.5ノット程度の速度向上が認められているのは確かだ。

だから魚雷を使い切ったらさっさとバリクパンかスラバヤの潜

水艦基地に戻って魚雷や燃料、食料の補充を受けて再出撃するしかない。

潜水母艦は無いから、仕方が無い。

通商破壊戦に艦隊から空母と戦艦を1隻か2隻つつと巡洋艦1隻、駆逐艦10隻程度の艦隊を編成して送り込んで良いのだが、そうすると敵の対抗馬として陸上機や潜水艦、果てはポート・ダービーやポート・ダーウインを根城にする空母や戦艦がいる敵通商破壊艦隊が出張ってくるだろう。

そうなると不味いので、やるなら同時に相手をして勝てる程度の戦力を出さないとならない。

と言うかそこまでやるならポート・ダービーとポート・ダーウインを直接攻撃してしまった方が手っ取り早いし、後腐れなく通商破壊を行える。

まあ、元々それをやろうとしていたのだが、いざ実行するために艦隊が出港し南方方面までやってきたら、そんな時に北海道に敵が上陸したのだが。

元々の計画自体はあるので、やろうと思えば事前偵察を行って場合によっては作戦を修正すれば実行自体は可能なのだ。

豪州奪還やスラウエシ島と小スンダ列島の維持を考えれば、やって損は無いどころかやるべきだろうが、やるならフィリピン奪還が完了してからだな。

なんならフィリピン奪還前に艦隊事に本土で整備を行ってから、ここからそのまま叩きに行けばいい。

奪還地域をいきなり増やすのは、兵站やその奪還地域の整備を行う観点から望ましくないが、一過性の攻撃ぐらいなら、奪還作戦に比べて必要な計算などは片手間程度だろう。

必要物資も艦隊の食料燃料弾薬ぐらいだけで済む。

備蓄の必要も無いし、輸送船の用意やら護衛やらをしないで良い。普段の作戦から考えれば、輸送船団を伴わないから自分達の身さえ守っておけばいいのだからなんとも気楽なものだ。

実行した場合は上陸もしなくていいから、陸軍との作戦の擦り合わせ

せをしなくていいし、海軍単独で敵艦隊と敵港湾施設を徹底的に破壊しておけばいい。

そうすれば、再建にどれぐらいの労力を投入するかで変わるだろうが艦砲射撃も加えれば半年は确实、下手をすれば年単位での使用が出来なくなる。

中代大将の方からも、作戦実行自体は検討して欲しいと連絡が来ているから取り合えずのところ返信として航空偵察の実行と作戦課にその情報で作戦の修正はさせておきます、と返答しておいた。

取り合えず今はフィリピン奪還が最優先である。

第67話

――――

フィリピンに上陸から3ヶ月。

戦闘団毎に交代で前線に出ている。

今は俺達の戦闘団が最前線で、つい数日前にタグビラランと言う旧市街地を奪還したばかりだ。

2、3日休んだらボホール海を渡ってカミギン島に上陸、奪還して、交代だ。

準備を進めつつ、休息をしているがここまで来ると、いよいよフィリピンも本格的に雨季に突入し始めているから、準備が終わったらやる事なんて、工兵隊が建てた宿舎で惰眠を貪りつつも体力錬成やら、花札トランプなんかのカードゲーム。

他にはなんだかよく分からない本を読むぐらいか。

この前なんてどこから持って来たのか、戦前の模型雑誌やバイクなんかの専門誌を読んだからな。

煙草も酒も支給数が決まっているから無駄に吸うことは出来ないし、それらを賭けてカードゲームで賭けをするのは禁止だ。

以前それで問題になったことがあるからだとかで、閣下直々の命令。

それでもここそ裏でやってる奴もいるが、何処から嗅ぎ付けたのか野戦憲兵の連中にバレてしよつ引かれていく。

態々前科を作って軍隊手帳に書かれるぐらいならやらない、と言うのが殆どだ。

ヘビースモーカーや酒好きには死活問題だが。

あとは暇を持って余してやり始めた椰子の葉で編み物ぐらいだ。

これが思いの外楽しいもので、色々と雑貨を作りまくっている。

海に飛び込むのもアリだが敵機が来るかもしれないからあんまり出来ない。

雨季と言っても毎日朝から晩まで雨が降っている訳じゃない。

大体、明け方と夕方ぐらいにスコールが降るぐらいだが、それでも毎日続いたら嫌になる。

地面はそれなりに泥濘むし、行軍となれば泥濘の道を歩かなきゃならない。

道路を固めたりなんて言う整備はやっているが、舗装はしていないから毎日の雨が降って毎日誰かが通っているからすぐに荒れてしまう。

車両が通れないとかでは無いのだが、やはり行動に制限を掛けられてしまう。

戦闘団の工兵中隊が通る前と通った後を整備しているが、舗装だとか砂利を敷くだとかの根本的な解決をしない限りは無理と友人が言っていた。

それに湿気は武器や弾薬にも影響を及ぼすし、昼間の暑さでべたつと張り付くようなじめつとした湿気は、ジャングルの中では中々に不快なものだ。

せめてもの救いは、雨が降るから身体や頭を洗うには全く困らない事ぐらいだ。

飲料水としては、下手に飲んだら腹を下したりして野戦病院に放り込まれる事になるのでいざ飲まねばならぬ、となったら濾過と煮沸消毒を行うように、と厳命されている。

誰だって、川や水溜りの生水を飲んでアメーバ赤痢などにはなりた

く無い。

態々リスクを冒さずとも、普通に水も食料も補給されるのだからそれを飲み食いする。

他にも野生動物の捕獲、殺傷に加えてそれらを食べるのも禁止だ。

ここは熱帯地域である。

どんな病原菌が潜んでいるか分からない。

深海棲艦の連中も、かなりの抵抗をしているが制空権を奪って、陸軍の飛行戦隊に守られている俺達からすれば、沖縄戦からずっと経験している市街地戦のが簡単で、ジャングルのがいつ襲われるか分からないから怖いもんだ。

ジャングル全部を焼き払うなんて出来やしない。

ゲリラを相手するのは中々に辛い。

特に、初めて実戦を経験した奴らはかなり疲弊している。

俺はカリマンタン島やジャワ島での経験があるから、ジャングル戦や対ゲリラ戦はこんなもんだと知っているし慣れているからどうって事は無いが、流石に8日間も連日攻撃を受けた時は寝れなくて参った。

損害こそ小さかったが、戦車大隊の連中が滅茶苦茶に狙われたらしく撃破された戦車や死んだ奴は3人と少なかったが、精神的にやられちまって20人以上が後送、療養病院送りになったとか。

まあ、今でこそ部隊付きの精神科医が居るから幾分か楽になったもんだが、相談に行く奴は後を絶たない。

俺も気を付けないとならない。

翌日、海軍の駆逐艦何隻かと、戦艦ティルピッツ、それと戦闘機と攻撃機に守られながら第200号型輸送艦に分乗して向かう。

1時間ぐらいの船旅だ。

しかし、ティルピッツと駆逐艦が上陸前に上陸地点周辺を砲撃で吹

き飛ばすから実際は船上で1時間の待機である。

護衛をする艦隊と合流して、カガヤン島の沖合10kmぐらいで戦艦が砲撃を始めた。

僅かな速度、多分1〜3ノット程度の本当に僅かな速度で航行しながらの砲撃である。

戦艦の砲撃と言うのは、俺達が使うような自走榴弾砲の比じゃないぐらいの砲声と砲炎を発しながら、上陸地点の砂浜と、その周辺地域を丸ごと吹き飛ばして耕していく。

確か海軍の榴弾は三式弾とか言うので、あたり一带を物凄い高温で焼き払いながら吹き飛ばすと聞いているが、あれは凄まじいなんてもんじゃない。

戦艦1隻だけであれだけなんだ、海軍の戦艦全部が一斉にやったらどうなるんだろうか。

炸裂した砲弾が、土塊や木、海岸線に置かれたトーチカや塹壕、対戦車障害物などを纏めて空高く粉々にしながら吹き飛ばしていく。

駆逐艦は俺達が乗る揚陸艦や輸送船計24隻の周りを、敵潜水艦を警戒しながらぐるぐる回っている。

対潜警戒と対地支援用の戦闘機や攻撃機もグルグル飛び回っていて、なんとも心強い。

戦艦から砲撃終了、のお知らせが届いたらしい、上陸準備が下令された、

輸送船の船上で大発に乗り込んで、クレーンで海面に次々と俺達歩兵が降ろされていく。

すぐにエンジンが始動して、砂浜に向かって進む。

後ろには工兵隊を載せた輸送艦と戦車隊を載せた輸送艦が横に並んでおり、俺達が砂浜を確保したら一気に上陸してくる。

大発が耕された砂浜に突っ込んで道板を下ろす。

その瞬間、先頭から次々と俺達は走り出す。

ここ最近の深海棲艦は、水際での防衛は殆ど行わないで内陸で抵抗する。

だがそれも確実な物じゃないから教本通りにすぐに前進しつつ物陰に隠れる。

爆薬を持った奴が戦車隊や工兵隊の邪魔になりそうな障害物を爆破して吹き飛ばし、次に砂浜に接岸した揚陸艦から俺達が乗るトラックなんかが出てくる。

トラクターが砂浜出来た大穴を均して、そこに穴開き鋼板を広げていく。

砂浜はどうしても柔らかいからトラックなんかは沈んじゃう。

それを確認したら、すぐに海岸保を得るために内陸部の方へ俺達は進んだ。

上陸地点の砂浜から2 kmほどを確保して、機動力の妨げになつて移動速度が落ちて狙い撃ちされ易くなるのを防ぐために置いておいた背囊などを受け取るために後退すると、すでに工兵隊の連中や戦車隊が上陸していた。

これから独立工兵大隊が来るまで一旦待機だ。

道が無けりや進めないからな。

少しすると独立工兵大隊が上陸して道を切り開き始めた。

そのあとに続いて俺達はカガヤン島を進んだ。

3か月と13日。

残すはミンダナオ島の奪還のみとなった。

他にも小さな島が残っていたりするが、そもそも深海棲艦の守備隊は配置されていないので、態々上陸する必要も無い。

仮に上陸、奪還するとしても活用するなら、哨戒網を広げるために電探基地を置くぐらいだろう。

ミンダナオ島自体はルソン島に次いでフィリピン2番目の大きさを誇る。

仮に順調に、敵ゲリラの活動を考えて奪還が進んだと考えた場合、1か月ぐらいだろう。

カリマンタン島に比べれば、進軍速度はとんでもなく速い。

フィリピン奪還が4か月程度で終わられるのは、やはり独立工兵大隊の活躍が大きい。

なんせジャングルの中を道に迷いながら進んだりしなくていいし、補給も戦車が余裕で二両並んで通れる幅の道があるから陸路での補給量が圧倒的に増加している。

それどころかジャングルの中には鉄道連隊が新しく本土から抽出された工兵隊の協力でもって鉄道が敷かれているのだ。

トラックではどうしても泥濘で立ち往生しがちな土剥き出しの道路を走らなければならない。

とは言え、各地で取れる石を砕いて砂利として敷き始めてからは随分と変わったが。

側面をコンクリートで幾らか固めてから砂利を敷いて高さを確認すれば水捌けもよく、泥濘にもならない道の完成だ。

舗装なんかは奪還が終わってからやればいい。

それと同じ道に鉄道を連日昼夜問わずで軌条を敷いているので、ミンダナオ島奪還が完了する頃にはある程度の鉄道網を敷設し終わる

だろう。

正直カリマンタン島と同じようにコンクリートで軌条を全て覆っていたら、何年掛かるか分からないので取り合えず豪州奪還、同地の整備が終わるまでは先延ばしにされている。

流石にミンダナオ島を守る敵は、撤退した敵部隊も合わさって数も多いが、輸送船団の殆どを最近は沈めているので補給切れが相次いで抵抗自体は激しいが燃料弾薬などの欠乏が相当らしい、大きな町など以外では敵は一切抵抗をしなくなった。

敵ゲリラ自体も殆どと言つていいほどに活動しなくなったし、馬鹿みたいに連日連夜のゲリラ攻撃に悩まされていた将兵達の心の安寧も取り戻されたも同然だろう。

ミンダナオ島の殆どを奪還し、艦隊は安堵の溜息があちこちで起こっている。

ここまでくれば、流石の敵でも艦隊を出してまで奪い返しには来ない。

艦隊が引き上げても全く問題無いが、念の為である。

「陸軍飛行戦隊の進出もすべて完了しました」

「これで、漸く進出予定の陸軍部隊全てが進出完了したか……」

「長かったねえ……」

当初の予定では2か月ほどで全部隊の進出を完了する予定だったのだが、飛行場の整備や建設に当たる予定だった独立工兵大隊が、道路整備に引き抜かれてしまい遅々として進まなかったのだ。

そこで本土から無理矢理新しく一個独立工兵大隊を編成して送り込んで飛行場整備と建設を突貫で行わせたのだ。

2か月掛かって全ての飛行場の建設や整備を終えて、当初の予定か

ら丸々2か月半も遅れて完了したわけである。

全員で一息吐いた。

これで艦隊に掛かる負担が大きく減らされたわけだ。

補給用の輸送船団の護衛は海軍の管轄なので、それだけはきっちりやらねばならないが、それさえやっておけば対地支援も空中投下による補給も陸軍にすべて任せられる。

艦隊は結構ボロボロだ。

全ての艦が錆だらけ、もし今攻撃を受けたら大損害待った無しである。

ここまできると敵も大損害と敗走を繰り返し、今ではダバオとその周辺に殆どが集まっている。

どうやらここで敵は最後の抵抗を続けるらしい。

馬鹿正直に付き合ってやる義理も何も無いので海側からは艦隊が封鎖して艦砲射撃が艦載機による爆撃を繰り返している。

敵は全くの無補給だから、どれだけ粘って戦っても10日かそこらが限度だろう。

13日後。

予想通り敵はダバオを墓場に殲滅された。

それ以降は敵の残敵掃討と各地の防衛体制確立が言い渡された。

即座に各地にそれぞれの師団は指示され担当となった地域の防衛体制を整え、哨戒体制の構築などを1週間で行った。

本土からは続々と資材、工兵が派遣されフィリピン全域に道路と鉄道を張り巡らせている。

時を同じくして、フィリピン奪還が完了したと宣言されてから3週間後。

フィリピン攻略に従事した8個師団がスラウエシ島に次々と上陸。兵糧攻めで弱り切っていた敵を1か月で殲滅、奪還を完了した。

小スンダ列島にはスラウエシ島奪還に従事した8個師団から4個師団を転用して1か月後に上陸。

同じく兵糧攻めを受けていた敵は、僅か2週間で瓦解、組織的戦闘能力を喪失。

それ以降掃討戦に移行することとなる。

全ての奪還を完了し、艦隊は呉に戻る。

錆だらけでボロボロになった艦隊は、すぐに次々とドック入りとなった。

第一、第二護衛艦隊を最優先で整備、修理を三か月で済ませてすぐさま輸送船団護衛任務に戻った。

第一機動艦隊の全艦は、四か月掛けて全ての修理と整備を終え、来るべき豪州方面作戦に備えることとなる。

豪州方面 第68話

フィリピンからティモール島までを結ぶ防衛線が確立されてから数ヶ月。

輸送船団護衛任務も再開され、同地の防衛体制確立を急いでいる。それぞれの地には以下の防衛部隊が就いている。

在フィリピン防衛部隊

第27師団（4個戦闘団）

第31師団（4個戦闘団）

第76師団（4個戦闘団）

第94師団（4個戦闘団）

陸軍第28飛行戦隊

保有機

疾風36機 補用12機

百式司令部偵察機8機補用2機

陸軍第37飛行戦隊

保有機：同上

陸軍第40飛行戦隊

保有機：同上

陸軍第52飛行戦隊

保有機：同上

陸軍第57飛行戦隊

保有機：同上

陸軍第103飛行戦隊

保有機

銀河20機（近接航空支援用）補用4機

百式司令部偵察機 8機 補用 2機

海軍第304航空隊
保有機

震電 60機 補用 12機

百式司令部偵察機 12機 補用 2機

海軍第305航空隊

保有機

同上

海軍第703航空隊

連山 60機 補用 6機

百式司令部偵察機 8機 補用 2機

海軍第709航空隊

保有機

同上

海軍第807航空隊

保有機

二式大艇 20機 補用 6機

海軍第808航空隊

保有機

同上

計 4個師団及び 12個飛行隊 (700機)

| | | | | | | | | |

在スラウエシ島防衛部隊

第17師団

第47師団

第61師団

第107師団

陸軍第14飛行戦隊

保有機

疾風36機補用12機
百式司令部偵察機8機補用2機
陸軍第53飛行戰隊
保有機
同上
陸軍第59飛行戰隊
保有機
同上
陸軍第81飛行戰隊
保有機
同上
陸軍第91飛行戰隊
保有機
同上
陸軍第92飛行戰隊
保有機
同上
陸軍第117飛行戰隊
銀河20機（近接航空支援用）補用4機
百式司令部偵察機4機 補用2機
海軍第314航空隊
保有機
震電60機 補用12機
百式司令部偵察機12機 補用2機
海軍第317航空隊
保有機
同上
海軍第322航空隊
保有機
同上
海軍第712航空隊

保有機

連山60機 補用6機

百式司令部偵察機8機 補用2機

海軍第721航空隊

保有機

同上

海軍第809航空隊

保有機

二式大艇20機 補用6機

海軍第813航空隊

保有機

同上

計3個師団及び14個飛行隊(840機)

| | | | | | | | | | |

在小スンダ列島防衛部隊

第91師団(4個戦闘団)

第109師団(4個戦闘団)

第113師団(4個戦闘団)

陸軍第61飛行戦隊

保有機

疾風36機補用12機

百式司令部偵察機8機補用2機

陸軍第112飛行戦隊

保有機

同上

陸軍第120飛行戦隊

保有機

同上

陸軍第117飛行戦隊

銀河20機（近接航空支援用）補用4機
百式司令部偵察機4機 補用2機
海軍第311航空隊
保有機
震電60機 補用12機
百式司令部偵察機12機 補用2機
海軍第315航空隊
保有機
同上
海軍第712航空隊
連山60機 補用6機
百式司令部偵察機8機 補用2機
海軍第814航空隊
二式大艇20機 補用6機
海軍第817航空隊
保有機
同上
計3個師団及び8個航空隊（504機）

以上のようになっている。

かなり航空隊の数が多いように感じるだろうが、実はカリマンタン島に展開していた陸海軍の航空隊の一部を移した結果である。

フィリピンから小スンダ列島までに防衛線が前進した事で、最前線がカリマンタン島から変わったのだ。

そうなれば今まで展開しているほどの戦力は必要無い。

内地から部隊を移すのにも時間や金が必要だが、防衛を担う航空隊の一部をカリマンタン島から引き抜けばその分負担などは楽になる。

ただ、海上輸送航路の関係上、引き続きカリマンタン島の航空隊は護衛艦隊と共に船団護衛任務に従事する予定だ。

今までに比べれば、敵航空機の脅威を防衛線である程度食い止めら

れるのだから随分と楽になるだろう。

敵の水上打撃艦隊も潜水艦隊も態々此方の奪還地域には出てこないだろうし、来るとしたらサンギへ諸島かフローレス海を通らねばならない。

監視の目は厳しいし、仮に通ろうとすればあちこちから疾風に守られた連山が爆弾の雨を降らせ、航空隊と連携した潜水艦隊に魚雷を叩き込まれることになる。

物資の輸送に関しては、スールー海、セレベス海、マカッサル海峡、ジャワ海が防衛線の前進によつて内海化された。

もつと簡単に言えば安全が一定値確保されたのだ。

その事により、随分と船団護衛任務が楽になった。

本土からカリマンタン島までの航路は護衛艦隊が付き、カリマンタン島を経由して各島々に物資を輸送船団のみが運ぶ形になった。

とは言え、カリマンタン島発の輸送船団には十分な航空支援も付くので全くの丸裸と言う訳では無い。

フィリピンではなくカリマンタン島経由である理由は、単純にこちらの方が安全だからだ。

フィリピンは確かに奪還したが、太平洋側からの脅威は未だ健在である。

それどころか、本土空襲に加えてフィリピンにまでB-29が飛来し始めたのだ。

フィリピンはマリアナ諸島からの距離も日本本土と変わり無く、B-29であれば攻撃可能だ。

それよりも奥、カリマンタン島やスラウエシ島には無理なのだが、しかし一体全体、どこにそんな物量があるのか呆れ果てるしかない。

幸いなのは、対抗策である震電の配備が出来たことだろう。

これがなければ一方的にフィリピンは空襲され弱体化するだけであつた。

それに何よりも大きいのが、バリクパパン港を大々的に要港として使えるようになったことだろう。

今まではスラウエシ島から来る爆撃機や敵潜の脅威が大きく、とてもでは無いが戦闘艦艇が投錨するのは出来なかった。

爆撃で港湾施設も大なり小なり、程度に差はあれど常に損害を受けていた。

港湾施設の修理はなんせ時間が掛かる。

損害がある分、修理用の資材を運ばねばならないしその分輸送船の数が增える。

それだけで無く荷下ろしにも時間が掛かる。

しかし、バリクパン港が内海に面する事により安全性は桁違いに上がり、攻撃しようにもスラウエシ島やフィリピンが障害になり、長距離爆撃を行おうものなら行きだけで都合2回、場合によっては帰り道でスラウエシ島の航空隊からまた迎撃を受け、3回も迎撃されることになる。

流石の敵も、そんな危険を冒したりはしない。

内海化してから、今の今までマカツサル海峡に対する敵の攻撃は、潜水艦によるものだけだ。

散発的な航空攻撃はあるものの数機だけの、恐らくは威力偵察のついでに攻撃して来ているだけだ。

この数ヶ月でバリクパン港は設備も十分に備え、艦隊を駐留出来る程度になっている。

戦隊と言えば、どの程度かにもよるが、少なくとも空母や戦艦を含んだ艦隊が駐留することが出来る。

とは言え基本は輸送船団が出入りするのが主目的であり、戦闘艦艇の優先度は二の次である。

基本、停泊するのは護衛艦隊のみであり、南方方面に対する作戦時にもみ第一機動艦隊などが停泊することになる。

既にバリクパンには（と言うよりも各港湾施設には）燃料輸送や部品、資材輸送を行う為のタンカーや輸送船、輸送艦が数十隻づつが所属している。

それを考えるとどうしても戦闘艦艇が停泊する余裕が余りないのだ。

停泊するだけなら別に第一機動艦隊も第一、第二護衛艦隊を全て停泊させて尚且つ輸送船団を停泊させられる。

であるが、ただ停泊させるのと、港湾施設として運用するのは全く別問題である。

円滑に運用するならば、どうしても戦闘艦艇に関しては精々戦隊一つが限界だ。

艦隊の編成については、第一機動艦隊から第二護衛艦隊、第一補給艦隊に至るまでは変わっていない。

しかし新しく編成された艦隊が一つだけ存在する。

それは、南方方面の、カリマンタン島各地やカリマンタン島から各島々への輸送船団護衛を行う為に新編された「南方航路護衛隊」である。

これは、第一、第二護衛艦隊が日本本土からカリマンタン島やジャワ、スマトラ、スラウエシ、フィリピン全てに対する輸送船団護衛任務を行うのは余りにも負担が重過ぎる、と言うことから前々から検討されていたことである。

今までは第一、第二護衛艦隊はカリマンタン島にまで輸送船団を護衛し、カリマンタン島を経由して各島々を巡るように護衛任務を行っていた。

しかしこれだと、護衛艦隊に対する負担は大きなもので、整備や休養と言う面から全くと言っていいほど余裕が無かった。

そこで、これまでも持ち上がっていた、区画分けを行ってその区画ごとに護衛艦隊を配置する、と言う分担方式を取ろうとしていた。

しかしこれは単純な戦力不足とカリマンタン島、スマトラ島などの奪還地域が思いつ切り最前線であったことなどで結局流れていた計画を、まあ取り合えずマカッサル海峡などが内海化出来たから、じゃあ配属が決まっていない修理、訓練を終えた駆逐艦と海防艦で新しく護衛艦隊を編成して内海の船団護衛任務をやらせよう、と言うことで結果的に新編されたのだ。

南方航路護衛隊

駆逐艦

江風

初雪

夕雲

海防艦

占守

国後

石垣

松輪

佐渡

対馬

三宅

所属する艦は以上であり、今のところ敵航空機の脅威はほぼ無いに等しいのに加えて陸海軍の基地航空隊による航空支援があるので気にしなくていい。

それでも対空兵装は運用上、問題無い程度で20mm、25mm、37mm、40mm機銃をハリネズミレベルで搭載している。

しかし主目的は対潜戦闘である。

内海化した各海峡や海に対する通商破壊は潜水艦がもつぱらである。

とは言え、昼間は二式大艇や連山が疾風に守られながら対潜爆弾を装備しているのだ。

となると夜に襲い掛かるしか無いのだが、その夜が問題だった。

今でも機上電探を装備している機体は陸海軍共に極少数だ。

しかも敵潜水艦を探知出来るような性能なんて備えている訳も無いのだ。

だから護衛艦艇頼りになってしまうわけだ。

今の潜水艦は、潜望鏡深度まで浮上しないと魚雷攻撃は出来ないわけである。

となると、艦艇搭載型の電探ならば潜水艦を探知出来るし、アクティブ・ソナーやパッシブ・ソナーを載せているから探知も攻撃も容易である。

結局のところ、戦前のように深海棲艦相手に有効打を与えうる対潜ミサイルか何かが開発されない限りは最も効果的ではあるがそこそこ古臭く地道な戦い方をせねばならないのだ。

昼間は航空支援で、夜は護衛艦隊で船団を守るという分担方式である。

故にこの艦隊の所属艦は対潜装備が実は他の艦よりも対潜装備と
言う面で見れば充実しているのだ。

他に言うことがあるとするならば、戦艦大和と武蔵が漸く浮揚作業が終了して入渠、修理が開始されたことだろう。

ここまで至るのに本当に長かったが、ここからも長い。

2隻が完全に修理を終えて習熟訓練を全て終わるとなると最低1年半は掛かるのだ。

因みに時間の配分であるが、修理1年、訓練6か月である。

まあ、豪州奪還作戦の準備が完了するのが2年は掛かるとのことなので、取り合えずのところ豪州奪還作戦には間に合う予定である。

予定としては、信濃、大鳳と共に艦隊を新たに編成して敵航空攻撃を吸収、その間に後方に位置する他空母が航空攻撃を行う、と言う運用を想定している。

豪州奪還作戦に関して。

これに関しては実施時期を2年〜3年後と予定している。

と言うのも部隊編成や物資の備蓄に時間が掛かる。

豪州は広大だ、今までの南方方面での陸軍投入戦力では到底成功など夢のまた夢である。

訓練にも、これまた日本本土とも南方方面とも全く違う砂漠と言う

地で戦わねばならないのだからその訓練が必要だ。

更には陸軍の基本編成単位である戦闘団の問題である、戦車数が少ないという問題がある。

豪州に展開する敵戦車の数は、数千両レベルだ。

となると、戦闘団に編成されている戦車数では、数の暴力と言うとうしても太刀打ち出来ないもので押し潰されてしまう。

航空支援も絶対では無い。

そこで、機甲師団を新たに4ないし5個師団を編成する必要があるのだ。

単純に戦闘団と言う括りで対抗出来る数の戦車を用意しようとしたら、正直投入兵力規模が大きくなり過ぎる。

だから機甲師団を編成するのだ。

機甲師団は、

4両1小队

3個小队||1個中隊||12両

3個中隊||1個大隊||36両

3個大隊||1個連隊||108両

4個連隊||1個師団||432両

以上のように編成される。

これを4個師団用意した場合、1296両になる。

主力となるのは3個師団はパンターとセンチリオンであり、残りの2個師団はティーガー、ティーガーIIである。

パンターとセンチリオンは攻撃を担い、ティーガーとティーガーIIは防衛用として運用する。

戦闘団編成の師団は20個師団を投入する予定だ。

人員数は陸軍だけで40万人越え、海軍も併せれば50万である。

正直、途方も無い、頭が痛くなるようなレベルの規模だ。

と言うかこれぐらいの戦力を投入しないと豪州全域の奪還なんて冗談抜きで出来ないのだ。

まあ、相変わらず一度に輸送出来ないので2個師団ごとに輸送を行うわけだ。

最初はティーガーIIを主装備とした機甲師団と通常の師団を1個師団づつ送り込む。

海岸保を確保してから後続の師団を次々に送り込んでいく予定だ。

防衛用の機甲師団は、ティーガーを機動防衛用、ティーガーIIを縦深防衛を担当する。

ティーガーIIが敵部隊を押し止めている間にティーガーが側面に回り込んだりと言う機動防衛を担当する。

本来ならば機動防衛の役割はパンターもしくはセンチュリオンを充てる予定だったのだが、パンターはまだしもセンチュリオンの生産数が伸び悩んでいる。

と言うのも、元々大規模に生産、戦闘団などに配備を進めていたパンターは生産ラインがあるし、生産数も全国の生産設備をひつくるめれば月産200両、修理の関係などで実際は150両程度であるが、それでも毎月戦闘団単位の師団を一つ編成出来る程度には生産数が確保されているのだが、日本全国に加えて南方方面に展開する部隊のIV号戦車やIII号戦車からパンターへの更新が兎に角数量が必要なのだ。

だから正直、防衛用機甲師団に配備出来るほどのパンターの生産数が無い。

他の部隊へ配備するパンターをこちらに配備すれば可能とさえも可能だが、そうなると仮に北海道のようにどこかに敵が上陸した場合、十分な抵抗が出来なくなる。

センチュリオンは豪州奪還に投入される師団にのみ配備される。

理由は重量の関係で、パンター以上の重量を持つセンチュリオンは南方方面での運用に向いていないからだ。

部隊の編制や、それに伴う訓練、作戦に必要な物資の備蓄など多くの事をやらねばならない。

物資備蓄はカリマンタン島に集積している。

訓練は中々大変だ。

なんせオーストラリアは今まで経験したことのない、広大な砂漠や大草原が国土の殆どを覆っている。

日本や南方方面の土地でそのような戦闘訓練を積める場所なんて言うのは殆ど無いと言って良く、軍が保有する猿ヶ森砂丘も鳥取砂丘も砂漠と同じ気候などかと言われると違う。

砂が沢山ある、と言う点で言えばまあ同じかもしれないが。

それでもやらないよりはマシと言う事で訓練は実施しているし、アフリカでの戦闘経験がある英独軍から戦訓を取り入れて砂塵対策などを行っているが、果たしてどの程度有効になるか分からない。

ジャングルがそうであるように、砂漠も土地によって全く環境が変わるわけだからあくまでも参考にしかならないのだ。

最悪、もし問題があつて改良などを施さねばならないとなつたら大規模な整備部隊を編成して機材や部品などを送り込んで現地での改造を施す必要があるかもしれない。

それには備えているが果たして現地での改造、改修を施すとなつたら全戦車の改修を終えるのに、どれだけの時間が掛かるか分かつたものではない。

様々な仕事を片付けていく。

パソコンのキーボードを叩いて書類を作成し、プリンターで印刷し各所に入る手続きを鈴谷に頼む。

新しく鈴谷が持ってきた書類を呼んで、認否のサインや判を押していく。

そろそろ終業時間、そろそろ皆は就業時間になるであろう頃合いになると、漸く書類の山々も片付いてくる。

今は各艦、各部隊の訓練報告書の提出を待っている状況だ。週間ごとに訓練報告書をそれぞれの部隊長は提出するのだ。

思えば最初に比べて随分と仕事を熟するのが速くなったものだ。それを続けていると、執務室、と言ってもプレハブのプラスチック

蓋を叩く様な音であるが、ノックする音が聞こえる。

窓ガラスは保安上や機密保持の為に全て防弾仕様、飛散防止用に中に鋼線が入れられている擦りガラスだ。

だから内外共に誰が訪ねて来たのかとかは分からない。

「んう？誰だろ？」

カリカリと書類に書き込んでいた鈴谷が向立ち上がって、ドアの方に向かう。

背恰好的には、多分原田少将であろうか？

「原田少将、湯野提督に用件があり参りました」

ノックの後に、ドア越しにそう言う。

やはり原田少将であった。

しかし、こんな時間に何の用だろうか？

確か、今日は母艦航空隊の編隊飛行から空戦や対艦攻撃訓練などが一連であった筈。

朝からつい先ほどまで母艦航空隊の艦載機が、エンジンの轟音爆音を鳴り響かせて飛んでいた。

まあ、演習空域は宿毛湾上空などだったので空母を発艦する時以外は工廠などの音以外は静かなものだったが。

「入れ」

「失礼します」

原田少将が入室する。

しかしどうも違和感を覚えた。

普通、俺のところを訪れる場合は誰であろうと基本的に戦闘服でも問題無い。

一々着替えるのも手間であるし、俺は別に気にしないからだ。

実際制服で勤務する面々以外は戦闘服であることが殆どで、原田少将も例に漏れない。

原田少将ここを訪ねる時は、今までならば飛行服なり戦闘服なりで訪ねてくるのが普通だったのだが、今回はどういわけか制服に身を包んでいる。

随分と珍しい光景である。

「制服でこんな時間に来るなんて珍しいな。一体どうした？」

「はっ、本日の訓練報告書の作成を完了しましたので、提出に参りました」

「あい分かった、受け取ろう」

「お願いします」

報告書を受け取り、パラパラと読む。

報告書とは言ってもその日その日の訓練内容、事故や怪我人の有無と言った簡単なことが書かれているだけだが。

消費燃料等は既に書類として存在するので全く問題無い。

そもそも、輜重兵、海軍で言う主計科でも何でも無い搭乗員にそんなことどうやって出来るというのか。

ここら辺はかなり特殊かつ専門的な知識が無ければ凡そ務まらないことなのだ。

問題がない事を確認して、判を押す。

そして、どことなく落ち着かない原田少将に向き直って切り出す。

「問題無し。それで、他に何か用件があるのだろうか？」

「……提督には全てお見通し、と言うわけですか」

「いやなに、今日に限って制服で来たものだからな、何となく思っただけだ」

「そうでしたか」

どことなく緊張している。

戦闘前でもあまり緊張しない彼らしくない。

果たして一体どんな話かしたいのやら。

「それでは、単刀直入に。現在の職を辞させて頂きたいのです」

原田少将のその言葉は、俺だけでなくその場に居た鈴谷をも衝撃させた。

「すまん待ってくれ……」

言葉に詰まる程度には、原田少将の言葉は衝撃的だった。

なんせ俺が着任する前からの、エース中のエースどころか陸海軍航

空隊内では伝説とまで言われるほどだ。

そんな彼が辞めたいと言うだなんて、衝撃的なんてものでは無い。

「取り合えず、理由を聞かせてくれるか」

「はっ。お恥ずかしい話ながら、今まで酷使して来た結果なのか、最近身体のおちらこちらにガタが来ておりまして。何より辛いのが、視力の衰えなのです。先日のフィリピン戦も、列機のカバーが無ければあわや撃墜される所だったのです」

「なるほど」

「その時に、ああ自分は搭乗員としては限界なのだなと悟りました。今のまま搭乗員を続けていても百害あって一利無し。ならば潔く職を辞して後進に譲ろうと思ったのです」

「なるほど。それなら仕方が無いなア……」

搭乗員と言うのは、身体を酷使して成り立つ。

操縦桿を操るのにも、ペダルやレバーを扱うのにも絶対的な筋力が必要だ。

でなければ何Gと言う高負荷状況下での格闘戦なんて出来ないからだ。

更に言えば、搭乗員にとって視力とは生命線だ。

機上電探があるとは言えど、前方向にしか索敵は出来ないし、そうなれば左右後方は直接自分で見て索敵をしなければならぬ。

何より、ミサイルも何も無い、機銃で戦わねばならないのだから、視力が弱ければ狙いも付けられない。

眼鏡やコンタクトと言ったもので視力の問題が解決出来たとしても、そのほかの衰えはどうにもならない。

これは、頷くしかないだろう。

「分かった。流石にすぐには行かないが、数日中に人癈を出そう」

「はっ、ありがとうございます」

「艦隊の航空参謀職に専念するか、陸海軍航空隊の教官職、どちらがいい？」

「……決めさせて頂けるのですか？」

「まあ、な。原田少将ほどなら後進育成でも航空参謀でも辣腕を振る

えるだろうか?」

航空参謀になれば、その実戦で磨かれた経験を行かなく発揮してくれるだろうし、教官職に就いたとしても後進育成で活躍出来る。

彼に決定を委ねても、余りある才覚と技量があるのが原田と言う搭乗員だ。

「でしたら、教官職を拜命させて頂いても宜しいですか?」

「あい分かった」

「ありがとうございます」

「他に用事は?」

「いえ、以上です」

「そうか」

「それでは、失礼します」

そう言つて退室していく。

「提督、良かったの?」

「何がだ?」

「航空参謀になつて貰つた方が良さそうだけど」

「鈴谷、俺は常々戦う上で最も重要だと言つているのはなんだ?」

「補給でしょ?」

「その通り。補給と言つても物資だけじゃない。戦う兵士もそうだが、特に搭乗員と言つるのは育成するのに年単位の時間が掛かる。それだけ、補充するのが難しいと言つるのは分かるな?」

「そりゃね」

「他の兵科であれば歩兵なら半年もあれば十分に戦えるように育てられるだろうが、搭乗員はそうもいかない。今だつて搭乗員は不足しているし、前線こそ充足率を満たしているが本土の航空隊は陸海軍共に充足率を満たしていないのが現状だ。だから、彼には搭乗員の教育課程の見直しなどもやつて貰おうと思つている。本当に必要な教育を施して出来る限り短期間で搭乗員を育成出来るなら長い目で見た時、戦力と言う点で優位に働くんのだ」

そう説明すると、なにやらニコニコとしながら、

「提督、育つたねえ」

そう言った。

「着任したての頃はさー、右も左も分かんないような感じで、私達が色々教えてたのに」

「そのお陰で今の俺があるんだ。感謝しているよ」

「そう言ってくれると嬉しいねえ」

そのあと、原田少将の人発を作成してから終業となった。

第69話

豪州奪還に備えること半年。

残り1年と言う短い期間で全ての準備を終えなければならない。

確かに物資備蓄なども中々に大変であるが、将兵の努力のお陰もあつて着々と進んでいる。

この調子であれば備蓄量は作戦決行3か月前には最大量に達するであろう、と予想されている。

南方航路護衛隊も十分以上に働いてくれていると言えよう。

一度の船団護衛任務で大体、10〜30隻程度とかなり幅は大きい
が、その船団を護衛する。

10隻であれば、輸送船やタンカー1隻辺り1隻の護衛が就くことが出来る程度の編制だ。

余程有力な敵艦隊、もしくは大規模な航空攻撃、あるいは数十隻単位の群狼作戦の真っ只中に突っ込みでもない限りは護衛任務を遂行することは可能だ。

なんなら航空支援がある時点で、どの手段も有効にはなり得ない。
たっぷりと補給を受け、実戦経験豊富、戦意も高い搭乗員が改良を重ねて性能が上がった疾風を操っているのだ。

普通に突っ込んできたならば逆に大損害を食らうこと間違い無しである。

因みに震電は低空での性能は高高度程高くない。

なので爆撃機迎撃は出来るが、船団護衛は以ての外。

参加していない。

とは言え何もかもが順調であるわけではない。
苦慮しているのが、投入予定である陸軍師団の編制だ。

戦車師団の編成自体は進んでいるのだが、問題は砲兵火力であった。

第一次世界大戦以降から、ともすればそれ以前からとも言える事であるが、戦場の主役は戦車でも歩兵でも無い。

最も威力を發揮し、そして戦場の主役足るのは砲兵であることは間違いない、疑いようも無い事実だ。

確かに航空機の威力と言うのは絶大だろう。

しかし航空機だけで陸上部隊全てを、現状の装備だけで粉碎出来るかと言われると否である。

精密攻撃が可能なミサイルや誘導爆弾ですら百発百中ではないし、全てを破壊する事は不可能なのだ、無誘導の水平爆撃や急降下爆撃での攻撃でなんて動き回る敵車両や兵員に対してではどうやっても打撃を与えるのが精々、結局は陸上戦力同士の戦闘によって決めるしかない。

豪州と言う広大な地域をカバーするには、戦闘団単位で装備するフンメルだけでは全くと言っていいほどに不足しているのだ。

今までフンメル自走榴弾砲を装備し、それだけに限られていたのは、南方方面、いわばジャングルでの交戦距離が短く、敵航空兵力の脅威が拭い去れなかったからだ。

自走砲化をしているのにも、諸兵科の進軍速度、特に戦車の進軍速度に付いていくことが絶対条件であるからだ。

しかも抗戦する敵部隊の規模が、大規模な部隊を展開することが難しいジャングルと言う性質上、ぶつかる敵部隊も良くて連隊規模。

それだと別にそこまで大規模な砲兵火力を投入せずとも対応可能だったことも理由の一つだ。

戦闘団のすべてのフンメルが一堂に会して砲兵火力を叩き込むなんて、市街地への突入前の準備砲撃が開けた場所ぐらいなものだ。

殆どをジャングルで覆われている南方方面だとそんな機会、片手で

数えるぐらいの機会しかない。

更に言ってしまうえば正直、我が陸軍の砲兵観測技術はお世辞にも高いとは言いがたい。

固有の砲兵観測部隊をそれぞれ有してはいる。

しかし観測の主な手段は、直接観測班が前進するか、もしくは音響観測、航空観測ぐらいである。

ただ、我が軍の音響観測技術はお世辞にも良好とは言いがたい、しかもジャングルは音が拡散してしまうのと遮られてしまうから音の収集がやりづらい。

ある程度は改善はされたが、以前までの音響観測技術ではジャングルの中では音の収集が難しかったのだ。

ただ、豪州では主戦場が全く変わる。

開けた砂漠地帯などが主である。

大規模な部隊の投入が容易であり、それこそ戦車師団や戦闘団と言う戦力をどれだけ揃えたとしても砲兵火力で負けていては意味がない。

正直、砲兵が並んで戦車部隊や戦闘団に対して一斉射を行ったら普通に粉碎される。

だから敵砲兵に対抗する為にも、こちらも砲兵師団を新しく編成しなければならぬのだが……。

「どうやっても数を揃えられないじゃないか……」

重榴弾砲の生産数が記された書類を見て執務室で頭を抱える。

生産数が足りない。

これが編成で難儀している原因だ。

正直なところ、豪州で必要とされる砲兵の数と、我々の生産数が全く噛み合っていない。

生産数が全く足りていないのだ。

一年間の生産数は、重榴弾砲のみでみれば上下はあるが、各地の部隊の更新のものも含めて600門以上が生産されている。

しかしそれを自走砲化するための、IV号戦車の車台や牽引が可能な半装軌式トラックの生産が全く追いつかないのが現状だ。

基本的には奪還作戦を主眼とする我が軍は、機動力確保の為に重榴弾砲は全て自走砲化されている。

でなければ機甲師団や機械化された歩兵に追従することが難しいからだ。

必要な砲兵師団数は最低3個師団。

正直、各地の装備更新も考えなければならぬ現状であれば、編成出来るのは2個師団が精々だろう。

各地の砲兵火力更新を遅らせれば3個師団は取り合えず用意出来る。

牽引式にして、ハーフトラックやトラックに牽引させる手段もあるにはあるが、こちらもまた生産数が足りなく、各戦闘団や部隊、師団に回す分しかない。

今まで生産していたIV号戦車の車台を残しておけば、自走砲化なんぞ生産数と合わせて容易だったのだが、退役や博物館行き、解体による資材化が進んでいて今残っているIV号戦車は僅か150両程度。

現在の車台生産数と合わせて考えても、足りない。

1個砲兵師団は300門程度の砲を有するのだが、そうなるとどれだけ頑張っても2個師団ともう半分ぐらいしか満たせない。

流石に砲門数を減らして編成するのは有り得ない。ただの廉価師団にしかないからな。

となると、2個砲兵師団を編成してそれを投入するしか無いだろう。

流石に各地の部隊から抽出するのは戦力低下が大規模に起こってしまうので不味い。

残りは後々編成して送り込むしかあるまい。

しかもそれとは別に輸送能力が足りないと来た。

現状の輸送能力では、護衛艦艇の数も考えるとかなりの回数に分けて輸送しないとならない。

どう考えても、一度に輸送出来る輸送能力を大幅に超えている。キャパオーバーも良いところだ。

これを解決するには、船団護衛を行える戦闘艦艇の数を増やす以外に手段は無い。

今でさえ護衛艦隊は手一杯で、地獄の様な忙しさであると言うのにこれ以上守る対象が増えたら、安全が確保されていない海を渡らねばならない以上、損害は増えることになるだろう。

スンダ列島からの航空支援があるとはいえ、それも昼間だけだ。

仮に500隻を超える輸送船団を護衛するとしたら護衛に就く空母どころか艦載機、全ての艦種において不足してしまう。

今までの計画通り、戦闘団編成の師団と機甲師団を送り込んでからその次に砲兵師団を送るしかない。

機甲師団は大隊編成を基本に、それを3つ集めた連隊を4個連隊で編成される。

機甲師団の戦車総数は機甲師団で432両となる。

機甲連隊は単純な戦車戦力以外に、そこに随伴歩兵大隊や独自の砲兵大隊を有する。

機甲連隊編成

1個パンター、ないしセンチリオン戦車連隊 第200号型輸送艦20隻

1大隊36両×3大隊 108両

V号弾薬運搬車 18両

兵員 約650名

1個歩兵連隊 輸送船1輸送艦2隻

装甲兵員輸送車 25両

トラック 20両

オートバイ	12両
ケツテンクラート	12両
兵員	2000〜2500名
1個砲兵大隊	輸送艦6隻
フンメル自走榴弾砲	1中隊12両×3中隊
砲兵観測小隊	38両
オートバイ	12両
ケツテンクラート	12両
V号弾薬運搬車	6両
人員	約300名
1個対空戦車大隊	輸送艦6隻
ヴィルベルヴィント	10両
オストヴィント	10両
クーゲルブリッツ	8両
V号弾薬運搬車	10両
人員	140名
1個整備大隊	輸送艦4隻
整備機材多数	
	100〜150名
1個輜重小隊	輸送艦4隻
	30〜50名
総人員約	3800名
計	44隻

大体の指標となるのが上記の編制だが、特に歩兵連隊が大隊3つだとか2つになったりとかかなり変わるのであくまでも基本編成がこれであると言う認識だ。

取り敢えずのところは歩兵連隊で揃えているが、この先どうなるかは分からない。

戦闘団と違うのは、単純に装甲戦力にその殆どのリソースを振り分けていること、工兵中隊と対戦車自走砲を有さないことだろう。

これを3つ集めた装甲師団であれば、総人員は上下するが総人員は大体15000名程度になる。

1個機甲師団を176隻の輸送船、輸送艦で運ぶことになる。

これに戦闘団編成の師団を含めたら300隻近い輸送船団を抱えることになる。

砲兵師団は3個砲兵連隊を基幹として編成される。

1個砲兵連隊

輸送艦12隻輸送船6隻

フンメル自走榴弾砲1大隊36×3大隊 108両

砲兵観測大隊

オートバイ 36両

ケツテンクラート 36両

V号弾薬運搬車 20両

人員 約1200名

1個歩兵連隊 輸送船2輸送艦2隻

装甲兵員輸送車 25両

トラック 20両

オートバイ 12両

ケツテンクラート 12両

人員 2000〜2500名

1個対空戦車大隊 輸送艦4隻輸送船4隻

ヴィルベルヴィント 12両

オストヴィント 12両

クーゲルブリッツ 4両

V号弾薬運搬車 10両

人員 140名

1個整備大隊 輸送艦6隻

整備機材多数

100〜150名

1個輜重小隊 輸送船7隻タンカー4隻（各種補給資機材、食料燃料等運搬用）

約100名

総人員約4000名

船舶47隻

砲兵師団は主力となるフンメル自走砲を324門有する。

1個砲兵師団の輸送には141隻を必要とする。

これを投入出来る2個砲兵師団用意した場合、648門、必要船舶282隻と言う数になる。

正直、砲兵師団を一つ輸送するのでギリギリ、戦闘団師団を一つ入れたら精一杯なのだ。

これを解決するべく、輸送計画としてはまず第一陣で戦闘団編成師団を1個、機甲師団を1個輸送する。

これでも補給用の燃料弾薬、食料飲料水や雑務水を運ぶ輸送船を入れたら軽く300隻を超える輸送船団なのだ、第1機動艦隊も護衛に加わって辛うじて護衛任務を行えるだろうと言う規模だ。

まあ、流石の敵も艦隊を出してくるだろうからその時は第1機動艦隊が打って出ねばならない。

これで海岸保を確保した上で、幾らか海岸保を広げつつ第二陣で砲兵師団を送り込む。

内陸部に幾らか押し込んだならば、同じように第3陣で戦闘団編成師団1つ、防衛用機甲師団1つを送る。

これで漸くより内陸部に押し進むことが出来る。

もう一度残りの1個砲兵師団を送り込んで、砲兵師団の輸送を完了

したならば、あとは戦闘団師団と機甲師団を順次送り込んでいくだけだ。

正直、万端に戦うならば砲兵師団、機甲師団をそれぞれ予備も含めて2個師団づつは欲しいところであったが用意が間に合わないならばあるもので戦うしかない。

戦闘団師団は予備師団を3個確保しているからある程度は安心出来る。

それに人員と装備の充足率は予備を含めて完全充足状態に出来ている。

あとは航空支援で出来る限り穴埋めをするしかない。

それでもやはり、航空機も万能では無いのだ。

大和、武蔵の修理も大詰めになった。

艦体そのものの修理は既に完了している。

今は艦上構造物や主砲から始まる火砲類、対空対水上対潜電探類と言った武装の艤装工事中であり、それが終われば公試を行う。

予定では速力31ノットを發揮する予定だが、多少の上下は所要範囲内であろう。

大鳳は35ノットを發揮し得るが、信濃は最大速力31ノットなのでその護衛に就く大和と武蔵は30ノットあれば良しとされた訳である。

計画値では31ノットとしているが、まあ取り合えず30ノット出せば、と言う感じだ。

空母は大小関わらず全艦にカタパルトが装備されているから、艦が停止状態でも発着艦は出来る。

発艦作業中でも回避行動が取れるので、基本的には20ノット前後で発艦、敵機攻撃下でのみ30ノット以上を出す。

敵潜探知などによっては発艦作業中でも速力を上げることはある

が、大抵の場合は発着艦作業中なら20ノット程度だろう。

大和、武蔵の修理は、浮揚作業と比べて概ね順調に進んでいると言えるだろう。

2隻の武装面での攻撃能力は、艦隊全てと比べてもずば抜けている。

主砲は口径などは据え置きの46cm砲だがその攻撃力は言うに及ばずであり、敵戦艦相手ならばほぼ確実に、金剛などでは対応が困難で、一方的に撃たれるだけの可能性すらある敵艦相手も難無く熟せるであろう。

艦体が大きい分、対空機銃や対空砲もその分大量に載せられる。

勿論、運用上支障が無い程度、ではあるが。

無茶苦茶に積んだは良いがまともに運用出来ませんでした、ではシャレにならない。

それでも搭載される対空火器は他艦よりも多い。

それこそ1隻で軽空母ならば2隻ぐらいいは纏めて守れるぐらいだ。

大和、武蔵の2隻が揃い踏みになれば、正規空母に関しては空母1隻に付き戦艦1隻が護衛に就くと言う体制が可能になる。

今までは防御力が高い大鳳と信濃を有する二航戦の戦艦を1隻減らして他の戦隊に回さざるを得なかったが、大和と武蔵が戦力化されればその2空母と共に新しく艦隊を編成することになる。

だから空母一隻当たりにも1隻どころかもう1隻が余る計算だ。

編成予定としては、艦隊名などは除いて属する艦自体は決まっている。

戦艦

大和 武蔵

空母

大鳳

烈風57機

流星12機

彩雲9機

計78機

信濃

烈風106機 流星12機 彩雲6機 計124機

重巡洋艦

筑摩 最上

軽巡

酒匂

駆逐艦

春月 初月 満月 長波 Z1 Z3 菊月 霜月 藤波 雄竹

艦載機数

烈風161機 流星24機 彩雲15機

計202機

以上だ。

本来なら護衛艦隊からの引き抜きはしたくなかったのだが、南方航路護衛隊が実戦配備状態であり、作戦時にはこちらも船団護衛に参加することから抽出が決定した。

既に大和、武蔵を除いて艦隊運動訓練など、諸訓練を開始しており新たに編成された艦隊ともあってこの一か月は丸々訓練の為に航海に出ている。

この艦隊の目的は敵艦隊の攻撃では無く、敵攻撃隊の吸収及び迎撃である。

今までは烈風と共に流星を載せていたがこの編成からは烈風を主力として対潜哨戒用の流星数機、それと偵察用の彩雲を載せるだけだ。

後方に位置する本隊への攻撃を許したとしても、この艦隊で敵攻撃隊の戦力を減らし、そしてさらに迎撃を行って痛撃を与える、となっている。

我が軍の基本戦術としては、迎撃を主眼に置き、敵の攻撃隊を撃滅した後に敵艦隊への攻撃を行うとしている。

あくまでも原田少将以下、搭乗員からの体感としての意見である

が、最初期に比べて敵の搭乗員の質が低下しているような感じが
らしい。

確かに一定練度はあるらしいのだが、どうにもエース級の敵機を
見ることが少なくなっている、との事だ。

南方方面に展開する陸軍航空隊などからも同様の報告が上がっ
てきている。

確かに南方方面で疾風や震電と死闘を繰り広げている敵戦闘機は
P-51と言う恐ろしい敵機であるが、ここ暫くの敵機の練度が余り
宜しく無いらしい、電探の哨戒網や戦闘空中哨戒網の充実によって侵
攻してくる敵機編隊に対して機体性能では負けているが、十分に上
に渡り合っている。

震電ならば機体性能、主に武装と速度性能で勝っているが、対爆撃
機戦に特化している為に対戦闘機戦は殆どと言っていいほどに得意
ではない。

旋回半径は大きいし、そもそも高速性能を重視したから低速域で戦
おうものなら舵の利きも悪いし新兵が操っているのかと思うぐらい
のザマになる。

敵機と格闘戦をしようものなら震電はたちまち撃墜されてしま
うのだ。

そこは戦術でどうにかするしかない。

陸軍飛行戦隊だけでなく、海軍航空隊では各機の連携を重視して
いる。

基本的には1機が敵機と戦っている時は僚機が最低1機支援に入
るように、と教本に書かれているし実戦ではそうしないと機体性能差
が大きい陸軍機同士の戦いでは命取りだ。

海軍ではまだ機体性能差がマシだが、それでも敵機の方が速度性能
では優位である。

陸軍機が戦っている敵機は、P-51やスピットファイアの強化型
と言った機体性能が疾風より優位に立っている機体ばかりだ。

疾風も確かに欧州技術のテコ入れによって性能自体は向上させて

いるから、その気になれば710 km/hぐらいならば発揮可能だ。とは言えP-51に至っては「高度7600 mで703 km/h」と言う性能を安定して発揮出来る。

頑張つて700 km/hの疾風と、普通に700 km/hを出せるP-51では、どちらが優位かは明らかだろう。

それに格闘性能も高速域では良い。

低速域での格闘性能は確かに疾風が勝っているが、そもそも敵はそんな状態で戦ってはくれない。

速度性能を生かして一撃離脱、仮に格闘戦となればサッチウィーブと言った連携戦術で戦ってくるから疾風がその格闘性能を存分に生かせることはない。

そこで迎撃を行う疾風と震電で役割分担をしていると言うわけだ。

戦術としてはまず最初に各地に置かれている電探基地が敵編隊を発見し、その侵攻してくる方角や高度、機数を詳細に報告する。

流星に敵味方の識別や数センチ単位での高度、一機単位での詳細な機数と言った測定は無理だが、それでも高度は誤差50 m程度、機数は20 m程度の誤差で判定出来る。

この報告を受け取った各地の航空隊が連絡を受け取り整備中などの機体を除いて全機が離陸する。

実際に迎撃に参加する機は各隊からそれぞれ出されるので、全機が参加するわけではない。

そりや武装を取り外して整備していたりするわけだから無理である。

所謂空中退避と言うわけだ。

そして電探に誘導されて敵機に対して攻撃をするのだ。

基本的に敵爆撃機や護衛戦闘機は機種にもよるが高度7～8000 m程度が基本だ。

これぐらいの高度なら十分に戦えるのと、震電なら殆ど確実に高度優位を取れる。

疾風が同高度、震電が高度優位を取るのだ。

迎撃には主に三つの部隊に分けられる。

1. 敵戦闘機を抑え込む制空隊（疾風中心）
2. 敵爆撃機を叩く迎撃隊（震電中心）
3. 上記2隊を支援する支援指揮隊（連山とその護衛）

性能の良い大型の機上電探を搭載した、所謂早期警戒管制機化した連山によって迎撃隊は指揮される。

敵機は二つに戦闘機を分けねばならず、しかも震電はそもそも急降下一撃離脱に徹しているから迎撃に向かっても相手にされない。

戦って勝てないなら戦わなければ良い、勝てる状況で戦えばよい、ただそれだけの事である。

疾風が基本的に敵戦闘機と組み合って戦いつつ、震電がその隙を穿って敵重爆や敵戦闘機に徹底的に一撃離脱を仕掛け続ける。

震電は高速性能が高く、特に機体が頑丈だから急降下時は900 km/hを悠々と飛べる。

それを生かすのだ。

敵機は確かに多いが、それでも練度で圧倒的に勝る搭乗員が操る疾風相手に戦っているのだから余裕は少ない。

仮に突っ込んできた震電を追い掛けようものなら他の疾風や震電に撃墜される。

これらの戦術は、敵機の鹵獲とその性能試験によって確立したものだ。

敵機の鹵獲は、各戦線でよく発生する。

そりや自分達の領域に敵が来るのだからそこで敵を撃墜すれば嫌が応にも敵機の鹵獲と言うのはあるものだ。

敵機の種類はそれこそ豊富であり、確認されている敵機は大体鹵獲している。

状態も様々で、良好な状態であるもの、部品取りぐらいにしか使えないもの、一部しかないものなど様々だ。

この内状態が良好な機体を主にあちこちから鹵獲した部品を持ってきて組み上げるのだ。

そうして飛べる状態にして日本本土に船便もしくは自立飛行でもって空輸するのだ。

日本本土に送られた鹵獲機は陸海軍兵器審査局に送られる。

兵器審査局は、文字通りの役割を担っており個人用の火器や装具類、戦車、砲、航空機、船舶と軍で使われる物はここであらゆる検査審査をされる。

設立された経緯は極々単純、こっちの方がやり易いからだ。

元々陸海軍は別々で各種兵器の検査や審査、鹵獲した敵兵器の試験を行っていた。

陸軍で試験して、海軍に渡して試験する。

そんな面倒なことが行われていたのだが正直お役所と言うのもあって一々手続きやらが面倒だしそもそも試験するのは同じものだろうに何故態々別々でやるのか訳が分からない状態だったのは言うまでも無い。

そこでさっさと統合してしまったと言うだけの話だ。

これであらゆる想定状況を作って試験して、陸海軍で情報を統一出来るし予算削減も出来る。

なんと楽なことか。

話を戻して。

ダメージコントロールに関しても幾らか触れておこう。

艦の防御力、と言われると真っ先に誰もが思い浮かぶのが分厚い装甲があれば良い、だろう。

確かにその通りである。

敵の砲弾や爆弾、魚雷の性能を凌ぐ装甲があれば確かに防げる。

しかしそんな装甲を無尽蔵に増やせる訳も無い。

戦艦の装甲を単純に2倍3倍する、まともな頭を持っているならこ

れがどれほどに無茶苦茶なことか誰にでも分かる事だろう。

そもそも溶接出来ないどころか、リベット工法でも無理だ。

とまあ、実は単純に装甲の厚さだけでは艦の防御力は測ることが出来ない。

艦防御力とは、浸水や火災が広がり難い構造であったり、損害を受けたときにどれだけの速さや精度でそれを復旧し、戦闘力を維持するのか、と言うのも含まれている。

元来は実際自前の装甲で敵弾を弾く、と言う考えがあった。

しかし単純に自身の分厚い装甲一枚だけで攻撃を防ぐ、と言うのは魚雷や爆弾の性能向上や戦術の変化により時代遅れになった。

それを象徴しているのは、空母であれば大鳳や信濃、戦艦だと大和や武蔵と言えるかもしれない。

4隻は従来艦と比べても遥かに分厚い装甲を装備しており、元来の艦艇と比べて遥かに撃たれ強い。

特に飛行甲板の脆弱性が何よりも戦術上の悩みの種であった装甲空母2隻はそれを補うべく、と言える。

この装甲甲板の性能は、500kg徹甲爆弾の急降下爆撃にも耐えられるように設計されている。

少なくともこの敵艦載機の急降下爆撃は艦橋などに直撃しない限りは爆弾は殆ど意味を成さない。

精々与えるダメージと言えば、命中箇所によるだろうが機銃や対空砲の操作要員に対する爆風、破片等による殺傷、制動柵や空中線の断裂ぐらいなものだ。

場合によっては通信や電探に損害を食らうだろう。

しかしこれぐらいの損害なら修理に時間なんて殆ど必要としないし、即座に戦線復帰が可能だ。

ただし、これだけではどうしても魚雷と言う大型艦に対する絶対的な脅威である魚雷はどうにもならない。

単純な一枚の重装甲だけでは、性能向上もあって普通に破られてしまうのだ。

我が海軍随一の装甲を有する大和、武蔵、信濃の3隻も魚雷だけではどうしても敵わない。

そこで前々からの研究や試験、欧州軍からの技術提供の結果、軽巡、駆逐艦や海防艦と言った小型艦艇を除いて（艦の大きさ故に搭載が困難であると言う場合がある）重巡以上の大型艦艇には多層防御を施すことになった。

重防御と言つて問題無く、重油タンクと装甲を何層にも重ねた多層防御だ。

この水雷防御方式を初期から採用、装備しているのは瑞鶴ぐらいなものだ。

空母は修理や改装の時に装甲、空気、重油タンクの三重装甲に加えて装甲、空気、コルク材を用いた、6層にもなる多層構造バルジの増設で水雷防御向上を図っている。

戦艦は砲戦を行った時に元来の装甲に加えて2層の重油タンクと装甲の二重装甲、空母と同様に装甲、空気、コルク材の増設バルジで水雷防御の向上を図っている。

重巡も同じであり、装甲、空気、重油タンクの三重装甲に加えて装甲と空気、コルク材のバルジを装備している。

コルク材は水に浸かると膨張する特性がある為に、魚雷による浸水を受けてもその穴を塞いでくれる、謂わば防水マットなどの役割を兼ねている。

正直バルジは損傷を受けたら引き剥がして新しいものに交換するので戦い事に使い捨て、ぐらいの感覚だ。

他にも電力は5チャンネル（電力を流す為に5つの回路があると考えてくれればよい）、それら全てが使用不可能になったとしても問題無いように3時間程度使用が出来るバッテリー、消火装置（散水装置、消火剤散布機）も給水、放水のいずれも一つが駄目になっても大丈夫なように区画分けされた区画に複数存在する。

消火剤は、汲み上げた海水に石鹼液を混ぜ、空気で攪拌して、凄く簡単に言えばとんでもない量の濃密な泡で作られる。

格納庫、弾火薬庫にはそれぞれ独立した消火装置があり、格納庫内

はスプリンクラーが走っている。

航空燃料が通るパイプにはそれらが破断し、燃料漏れを艦内で最小限に止めるべく緊急投棄装置、水密扉にはダメコン要員が行き来するための専用ハッチがある。

航空機用燃料タンクには不燃性ガスと水、そして装甲を施した3重構造のタンクで囲われている。

仮にこれら突き破って燃料タンクに到達しても、その場を取り仕切るダメコン班の判断で燃料の投棄を可能にしているし、そちらが出来ない場合は艦橋指揮所からでも連絡ないし火災検知のランプが光るので艦橋要員によって可能だ。

それ以外にも各種塗料の改善を図った。

元々艦外艦内問わず、塗装に使われていた塗料はなんせ燃え易かった。

これは塗料自体が燃えやすい油性であることが原因であつたからだ。

火を付けようものならどんどん燃え広がり、手が付けられない状態になる。

しかも厄介なのが、火災が起きるとその熱が周囲に伝わって自然発火する恐れがあることだ。

これは可燃性のある塗料を使っていると、隔壁で閉じていても熱が伝わって塗料に火が付くと言う事だ。

艦そのものが塗料によってデカイ可燃物になっているのだ、幾ら艦内にある可燃物を難燃性に変えたり除去したりしても全く意味がない。

これは艦内火災が広がる原因であるので、即座に難燃性塗料へ替えられた。

今の艦艇に使われる塗料は全てこれである。

実装されている諸装置の実用性は今までの海戦の結果が物語っているであろう。

これも欧州軍からの技術提供が無ければ、信頼性の低いままで搭載してたから、無いよりはマシ、ぐらいで大した効果は発揮出来なかつ

ただろう。

そして何よりも重要なダメコン要員も欠かせないだろう。

これは他にも言えることであるが幾らハード面（技術）を強化したところでソフト面（人員）が全くの役立たずでは意味が無い。

結局のところ、どれだけ設備や装備を良くしようとも最終的に扱うのは兵士達だ。

兵達の訓練をしっかりとやらねばどれだけ最新設備にしても宝の持ち腐れ、意味は無い。

ダメコン要員はそれぞれ分隊で編成されており、4分隊に加えて予備が1分隊、消火専門分隊が1つ。

それ以外の乗組員も海軍兵学校や配属後の習熟訓練などでダメー
ジコントロールを徹底的に叩き込まれる。

習熟訓練期間が6か月となって居るのは、普通の戦闘訓練だけならば3か月で済むが、そこにダメー
ジコントロール訓練を含んでいるからだ。

ダメコンが適切に行われれば、その分艦の生存能力は大きく向上する。

指揮系統の単純化なども図っているし、以前に比べて随分とやり易くはなっているだろう。

今まではダメコンを行う工作班は、分隊長が戦死した場合その分隊において分隊長の次に最も階級の高い者が指揮を引き継ぐとしていた。

1分隊のA2等兵曹が指揮を執っていたが戦死したために1分隊A兵長が指揮を引き継ぐ。

そのような形となって居たわけだ。

だがこれは、実は普通のように見えて現場では混乱の種であった。

ダメコンにおける指揮と言うのは、分隊指揮官全員がダメコン専門教育を施している海軍工作兵学校に最低1年間在籍せねばならない、と規定されるほどにその指揮は難しい。

ただ穴を塞げばいいとかそういうレベルでないのだ。

そりやそんなダメコン指揮における専門教育を受けていない者が指揮を引き継いだらどうなるかは明らかであった。

であるのにそれに現場からの直接談判が無ければ気が付かなかった俺も無能である。

そこでこの指揮継承を改定し、同じ分隊では無く各工作班の中でも階級の高い者がその指揮を引き継ぐと改定した。

ここに至るまでかなり苦勞の連続であった。

人員養成はどうにかなったが、装備の方に欠陥やら問題やらがあつて浸水時の艦平行を保つための試験において注排水装置がぶつ壊れて結局注水に13時間も要したりと、実戦であればとつくの昔に沈んでいる、そんな有様だった。

材質問題、設計問題、動力不足、過剰負荷 e t c ……。

まあ、実験やつて探せば幾らでも欠陥が出てくる出てくる。

技術畑の妖精達はそれはもう頭を抱えて叫びたかったに違いない。兎に角見つかった問題は風潰しに試行錯誤、時にどうしようもない場合は負荷を小さくするために装置そのものの数を増やすなんかの妥協でもって改善されたので、今では起こっても別区画の装置で代用可能なようにしているから一斉に全部壊れたなんてことにでもならない限りは大丈夫である。

これら全てをひっくるめてが、艦の防御力である。

作戦準備は着々と進んでいる。

陸軍師団の編成も半年で大急ぎで終わらせて、カリマンタン島に輸送中である。

これには人手が足りないので1航艦も護衛任務に就いている。ついでに乗組員の外洋航海訓練も行えるからな。

流石に俺は書類仕事があるので現場に立つことは出来ないが、皆無事にやっている。

「原田少将、久しぶりだな」

「お久しぶりです、提督」

母艦航空隊搭乗員を養成する、大分飛行場の視察だ。付いてきてくれているのは本日秘書艦を務める鈴谷だ。

本来は鈴谷は船団護衛任務を第一機動艦隊所属艦として参加する予定であったのだが、機関部から異音がある、とのことで点検整備の為に外されている。

第一護衛艦隊、第二護衛艦隊、第一補給艦隊が今は呉にあり、次の輸送船団護衛に備えて点検整備と休養中である。

「オツスオツス、元気？」

「お陰様で。鈴谷さんもお変わりないようで」

「そりゃ勿論」

「それで、今期の状況はどうだ？」

「一応及第点と言ったところでしよう。空戦技能は確かに一級線でしょうが、なんせ発着艦がまだまだですな」

発着艦はどうしても空母が無ければ出来ないし、技能向上も出来ない。い。

陸上でも飛行甲板を模した滑走路で出来るには出来るのだが、洋上を航行して揺れる狭い飛行甲板への着艦と、陸上の動かない広い滑走路への着陸ではまるで別物だ。

今は陸軍師団の輸送に1航艦までもが出張っているから空母への

発着艦訓練回数が少ないのは仕方が無いだろう。

「このままの調子だと、戦力化にどれくらい掛かる？」

「そう、ですね……。今年一杯は掛かるかと。次期作戦までには空母を必要とする諸訓練はギリギリ終えられるかどうか、と言ったところでしょうか」

「それなら良い。その手の訓練は空母が無ければどうしようも無いからな。色々手回ししてみるが、輸送の負担がデカいから向こう3か月はまともに空母を訓練には使えんだろうな」

「護衛が出来る艦が少ないのは、やはり苦しいですなア」

原田少将はしみじみと言う。

彼もまた、船団護衛任務を何度も経験した身だ。

それこそ俺がこの世界に来る前の戦線後退の際の撤退する船団護衛にも就いていたのだ。

撤退中や死に物狂いの攻勢の時なんぞ船団が文字通り全滅、護衛艦隊も大損害だなんてザラだった。

だからこそ護衛戦力が少ない事の辛さは良く分かっている。

「皆頑張ってくれている。戦力を増やせないんだ、そこはもう仕方が無い」

「運用もギリギリでは？」

「そうなんだ、戦力が足りないから運用、戦術、戦略でどうにかしようにも結局のところ実働戦力が全く増えないで、変わらんからなあ」

二人で溜息を吐く。

今週の秘書艦である鈴谷を始めとして、皆頑張ってくれているがそれでも、だ。

寧ろその皆にかかる負担を考えれば、出来ることならば戦力を増やして負担を欠片でも減らしてやりたいものである。

「提督、緊急電です！」

原田少将と歩いていると、伝令兵であろう兵卒が物凄い勢いで走ってくる。

「何事か！」

「はっ、突然失礼します！第一機動艦隊より入電です！」

彼が差し出した電文には、衝撃的なことが書かれていた。

『大規模な敵潜水艦隊出沒。輸送船多数撃沈サル。陸軍兵多数救助ナレド機材多数喪失。ビスマルク、大鳳ノ盾ニナリテ被雷3ナレド航行ニ支障無シ。1127』

電文には、護衛に就いていたビスマルク諸共大損害を被つたと書かれていた。

撃沈された輸送船の隻数、それと陸軍の損害、ビスマルクそのものの損害が重要だ。

魚雷3本をも食らっているから、下手をするとビスマルクの豪州作戦参加が間に合わないかもしれない。

機関部や主砲弾火薬庫なんかがやられていたら、修理に半年は掛かりかねない。

それに、失つた陸軍将兵や機材の補充なんかも大急ぎでやらねばならない。

電文によれば、将兵の大部分は生きて救助されたとのことだが機材を多数喪失していると言う。

もしこれが事実であるならば下手をすれば輸送していた師団は戦闘師団であるから幾らか機材補充は楽であろうが、それでも補充状況によってはこちらもまた作戦参加を延期なり見合わせるようになる。

機材補充が大変な機甲師団や砲兵師団でなくて良かったと思うべきであろうが、それでもだ。

「派手にやられたな……」

鈴谷も凡そ何があつたのかは想像が付いたのだろう、俺の顔を見ている。

「鈴谷、至急護衛艦隊に詳細な損害、喪失人員、機材の報告をさせるように。ビスマルクは護衛の駆逐艦を残してバリクパン港で修理のち本土へ回航せよ。全て暗号文。嚴重にな」

「りよーかい」

「伝令、鈴谷を通信室まで案内してくれるか」

「はっ、承知しました」

伝令兵が鈴谷を連れて走っていく。

「提督、呉にお戻りになられますか？」

「ああ、すまんな」

「いえ、お気になさらず。すぐに陸攻と護衛を手配しましょう」

「ありがとう」

原田少将がすぐに俺が乗って来た一式陸攻とその護衛である紫電改を飛べるように手配してくれた。

一式陸攻は、実は機体そのものはもう生産されていない。

その生産リソースを全て連山に振り分けているからだ。

部品生産が細々と続けられているだけだ。

今まで配備されていた一式陸攻も、徐々に配備縮小と退役を進めており、対潜任務から輸送任務など全ての点に置いて連山と二式大艇に置き換える予定である。

深山はとつくの昔に退役して博物館で展示されている。

動態保存なのでいざとなれば整備を行えば飛ばすことも可能だ。

まあそんな状況になった時点で深山を有効に使える状況かと聞かれると疑問なわけであるが。

今実戦配備されている一式陸攻は、正式には一式陸上輸送機である。

防御火器を全て20mm機銃に変え、側面銃座の廃止、機体上下と機体先端、後尾部に1基ずつ動力銃座を装備している。

輸送に特化した型式で、完全武装の挺身兵20名と装備する小銃や軽機関銃や迫撃砲の砲弾薬1t分、もしくは3tの物資を運ぶ能力がある。

輸送機型とは言えども、その殆どが日本本土での細かな輸送や挺身隊の訓練、あとは連山に移る前段階の訓練用に練習機型があるのでそれに使われるぐらいだ。

活躍した事例としては先の大震災の時に連山では壊れた滑走路への着陸が出来ないので、代わりにこの一式陸上輸送機がピストン輸送

を行っていた。

防御力も日本本土で運用されるなら別に精々3000kmもあれば良いから余剰となる3000km分の燃料タンクはいらないし、減らすとなれば重量も軽くなる。

軽くなつて余裕があるから防弾装備を付けることが出来る。

従来の一式陸攻よりも遥かに打たれ強い。

それに乗って呉に急いで戻る。

護衛には紫電改20機と一式陸上輸送機3機が就いてくれている。

呉までは長くても15分ほどの空の旅である。

呉に戻り、即座に電文を受け取った。

どうやらビスマルクの被雷は右舷に集中しているらしく、速力こそ10ノットに低下しているが自力航行は可能、電力も保持しているとのことだ。

バリクパパン港に入港すること自体は可能で、ドックも空いている。

そこで被雷時の穴や機関の応急修理を行った後に本土へ回航する。

輸送船の損害は12隻。

兵士の殆どは海に飛び込んで無事であったが、小銃から戦車や自走砲を連隊分を丸々失っているとのこと、その補充には苦慮するだろう。

既に各部隊から機材の抽出を行っており、輸送船に積み込んでいる。

それとマカツサル海峡、セレベス海に侵入した敵潜水艦隊に対しては、大規模な掃海作戦が展開されることとなった。

潜水艦狩りが得意な第一、第二護衛艦隊と3航戦、1航戦と2航戦の軽巡、駆逐艦の殆ど、それに加えて各地の二式大艇、連山が対潜爆弾をたっぷり抱えて参加することになった。

第一機動艦隊の残りの空母、戦艦、重巡、第一補給艦隊は本土で待機することになる。

流石に対潜水艦戦闘となると空母はまだしも戦艦と重巡には全く出番が無い。

空母の盾、なんて運用も出来なくも無いが正直効果があるかと言われると疑わしい。

輸送船団に戦艦の護衛を就けているのは敵潜水艦に対してでは無く、敵航空機や敵水上艦に対してである。

航路の安全が確保されないと、今回と同じことが何度も繰り返されることになる。

だから最低限マカッサル海峡の掃海はやらねばならない。

それ以降、丸々2か月間掛けて徹底的に掃海作戦と、サンギハ諸島、カラケロン島、スラヤール諸島に対潜監視所や電探基地の建設、整備を行うことになる。

第70話

セレベス海、マカッサル海峡、ジャワ海、フローレス海の安全が対潜監視所や電探、航空機による対潜哨戒網の嚴重化によって確保された。

これによってその地域を通る輸送船団の安全性は以前よりも大幅に確保されたと言っていいだろう。

敵潜を内海でこれらの海域で見るとは殆ど無い。

海軍では護衛艦隊の負担軽減の為に日本本土と南方方面を結ぶ航路に関しては護衛を行うとし、南方方面のみの航路では昼間は各地の陸軍航空隊と海軍航空隊の共同で船団護衛を行うとし、夜間のみ電探搭載型の連山数機、そして南方航路護衛隊が護衛を行うとした。

航行を行う場合は昼間、夜間に限らず最低20隻の船団で動くことを絶対と改めて厳命。

それに内海に敵潜が出たとなれば輸送船団運航を一時停止して該地域の陸海軍航空隊を主力とした積極的防衛、所謂ハンターキラー、潜水艦狩りを南方航路護衛隊と共に行っている。

内海化するまでは船団護衛任務中に敵潜水艦への攻撃などで毎月30隻を超える敵潜水艦を撃沈していたのに、今では月に2隻も撃沈すれば大戦果だ。

代わりに侵入可能経路近辺での敵潜撃沈数は1カ月辺り23隻ほどに倍増している。

これはやはり内海に侵入することの出来る箇所に対して大量の機雷原の設置、対潜用電探を装備している連山、二式大艇が警備しているからだろう。

見つけ次第爆雷の雨を降らせて撃沈し、撃沈出来なければ追い掛け回して撃沈する。

まあ、固執するのも良くないのである程度ではあるが。

確かに深海棲艦の潜水艦用電探の性能は機雷を見分けられるぐらいの高性能である。

実際、もし仮に欧州技術のテコ入れが無ければ、航空機用、艦艇用、陸上用と全てにおいて聴音機、探信儀、電探全てが最低でも2世代以上の世代差、性能差があったであろうと予想されている。

正直これはとんでもないレベルだ。

これはこちらの戦術が殆ど通用しないことを意味する。

どうやっても、どれだけ船団護衛の数を増やしても護衛艦諸共敵潜水艦に食われるのが目に見えている。

まあ、こちら辺は各種電探などの技術がテコ入れで対抗出来るレベルにまでなっている。

これが無ければ今頃の各地を結ぶ輸送航路は、とても目を向けられない状態になっていただろう

比較して少ないのはどうやら敵潜は内海への侵入をここ最近殆ど企図していないらしいからだ。

代わりにモルツカ海やバンダ海での通商破壊に本腰を入れられているらしくそちらでの被害が大きくなっている。

とは言えモルツカ海、バンダ海を通らなければいいだけの話だ。

その目的を達成するために、今現在バルと言う場所に大規模な港湾施設を建設中である。

ここを本格的に運用出来るようになれば、そこから鉄道を伸ばしてスラウエシ島全域に陸路での補給路を確立させられる。

そうすれば態々危険なモルツカ海を通ってトミニ二湾に入らなくて済む。

なんならトミニ二湾に戦略上大規模な艦隊を駐留させられる軍港を作るならバルから資材を陸路で送り込んで作ればいい。

そうすれば危険な海域を必死になって資材を運ばなくて済む。

フィリピンの補給は大きな島が点在していることから大きな島には1か所の大規模港湾施設、1か所の中ないし小規模な港湾施設がある。

小さな島々にも輸送船が同時に2隻が停泊、揚陸を行える漁港程度の港がある。

理由は余程小さな島でもない限り殆どの島々に飛行場や対空電探を装備する対空監視所、敵潜水艦の侵入を監視する対潜監視所が設置されているからだ。

フィリピンは太平洋に対する最前線であり、その圧力はかなりのものだ。

以前にも言ったと思うが、パラオやマリアナ諸島からB-29やB-24と言った重爆が連日連夜飛んで来てはあらゆる施設に爆弾を落としては被害を出していく。

だからどこか一か所が叩かれても別の場所が稼働してカバー出来るようにしている。

所謂リスクマネジメントと言うものだ。

それぐらいやらないと、フィリピンが前線基地としての機能を維持し、果たせない。

仮にフィリピンが無力化されれば再びスールー海やセレベス海に敵潜や敵重爆が押し寄せてくることになる。

そうなれば再び輸送船に大規模な被害が出ることになる。

大小スندا列島の防備は豪州から飛来する敵機や散発的に襲撃してくる敵艦隊に備えて中々のものだ。

陸軍航空隊や師団こそ数は少ないが、その全てが精強で知られる南方方面軍の中でもより一層の精鋭揃いだ。

理由としては敵潜水艦や艦隊の大規模な基地が豪州にあるからだ。こちらの航空偵察で確認されているだけでもシャーク湾、ジエラルトン、パース、ポート・ダービー、ポート・ダーウィン、カーペンタリア湾にある。

戦力は大規模と言ってなんら問題無く、推定でも潜水艦は数百隻単位、空母や戦艦を含む艦隊は大小に差はあれど4個艦隊。

空母の総数は二十数隻、戦艦も同数程度。

その護衛を行う巡洋艦以下の艦艇数は数える事すら面倒になるほ

どだ。

敵は我々の次の攻勢目標が豪州であると感付いているらしい、戦力を豪州方面やニューギニアなどに掻き集めている。

しかもどれだけ敵に損害を与えても後方にあるソロモン方面やフィジー、ニューカレドニア、ニュージーランドなどから馬鹿馬鹿しいほどの増援が来る。

我々が必死になってやっている潜水艦狩りも深海棲艦の艦艇数からすれば雀の涙程度の損害しか与えられていないのが実際だ。

とは言えそれでも熟練レベルの人的損耗はこちらと同様にそう易々と補充出来るものではないらしい、と言うのが唯一の救いか。

補給拠点に関してはある程度大きな島に港湾施設をフィリピンと同じように設けて、そこから陸路で運ぶ流れだ。

鉄道の敷設はスラウエシ島を除く全ての島で9割方完了している。現状であれば陸路の鉄道輸送は殆ど問題無いレベルだ。

それにスンダ列島には連山を配備して敵に対するカウンターとして爆撃を行っている。

流石に補給の関係上、毎日とは行かないが週に1度爆弾を落とすに行っている。

距離の関係上、シャーク湾を含めた南側には不可能だが、ダーウィン、ダービーの二か所に対しては護衛戦闘機を付けた状態で爆撃が可能だ。

搭乗員の救助には海軍の二式大艇や潜水艦が参加しており出来る限りの人的損耗を抑える努力はしているが、結局はシャーク湾などに敵艦隊は拠点を移しているから艦艇への効果は輸送船程度だ。

とは言えそれでいい。

この二か所を叩けば少なくともダービー方面からの敵艦隊の脅威は無くなる。

豪州作戦の上陸地点はエイティ・マイル・ビーチだから左右から挟

撃されることだけは防げる。

最初に敵艦隊との戦闘を行い、敵水上艦隊の脅威を排した後に上陸作戦を決行する。

エイティ・マイル・ビーチに上陸したら即座に北上してポート・ダービーの奪還、物資と部隊の揚陸地点を確保する。

ポート・ダービーの防備は重要拠点とあつて嚴重で、正面から上陸しようものなら大損害待った無しだ。

だからその側面と背後を突く。

どれだけ頑強な防御陣地も真正面から戦わずに後ろから吹き飛ばせばいい。

敵部隊が出向いてきたならば敵部隊の規模にもよるが機甲師団、通常師団（戦闘団編成師団）を用いて早期に排除する。

再び北上してポート・ダーウィンの奪還を行い、豪州北部の奪還を確定的にする。

そうすればこちらが使える大きな港が2か所になり、部隊と物資の輸送がより円滑化させられる。

ここまでが第1目標だ。

それが完了すれば、次は第2目標としてノーザンテリトリー州の奪還を行う。

次に第3目標西オーストラリア州、第4目標南オーストラリア州、第5目標クイーンズランド州、第6目標ニューサウスウェールズ州、第7目標ビクトリア州と順々に奪還していく。

もし豪州政府と豪州国民がまだ生きているのならば、何れかの段階で合流することが出来るだろう。

まあ、軍事的には正直奪還が終わるか、途中までは殆ど期待出来ない。

寧ろ内陸部の、しかも砂漠地帯に追い詰められている状況でまともな軍隊を維持出来る方が無理だからだ。

いずれにせよこれが大筋の作戦である。

物資輸送の船団護衛には1航艦も動員して行っている。

というか1航艦も動員しないと、護衛艦隊だけで船団護衛をやると消耗スピードが速すぎるのだ。

損失こそ無いが、船団護衛に出ると船団の速度に合わせなければならぬので丸々半月以上は余裕で掛かる。

敵に襲われれば少なからず損害を負うし、長期間の航海で艦体は頻りに重整備を行わなければならないぐらいだ。

普通なら1年ほどの間隔で重整備を行えばいいのだが、船団護衛任務と言う長期間の航海と戦闘を護衛艦隊だけで行うと3か月に一度の高頻度で重整備を行わなければならない。

修理や整備を担当する工場にとっても、輸送船の建造や艦隊に供給する部品や砲弾、機銃弾、砲身の生産も担当しているのだから、そこに更に3か月交代でほぼ休み無しに艦隊の重整備を行うにはこれは余りにも大き過ぎる負担なのだ。

とは言え豪州作戦に投入する陸軍兵力の輸送は全て終えているので、あとは作戦実施と各地の部隊を維持するだけである。

つい先日、大和が、その1週間後に武蔵が修理を終えた。

今は各種装備の試験中であり、今日は全力公試と各種火砲の射撃試験である。

「提督、射撃準備が整いました」

「上甲板にある乗組員は即時艦内に退避」

そう俺が言葉を発すると艦全体にブザー音が鳴り響く。

十数秒で全員退避完了のランプが点滅する。

「主砲1番より順次射撃開始。問題発生の際は報告せよ」

「了解、撃ち1方始め」

全員が対爆窓から視線を逸らし、砲撃時の砲炎が目に入らないよう

にする。

冗談抜きで46cm砲の砲炎は余りにも強烈過ぎる。

他の戦艦の砲炎も激しいが、それでもここまでではない。

大きな射撃音と、艦橋内に居ても尚感じる凄まじい衝撃が、たった1門ずつしか射撃していないのにも関わらず艦全体を包む。

標的は200なので、着弾に必要な時間は約60秒。

最大射程である42km先に砲弾が到着するまでに掛かる時間は余裕で2分近くになる。

そりゃ狙って撃つても当たらない訳である。

装填速度は25秒ほど。

元々の装填速度は30秒以上は掛かっていた。

理由としてはラマー（装填補機）を装備していなかったことで射撃する度に砲身を下まで下げなければならなかったからだ。

これは自由仰角装填、砲身をどのような仰角俯角向けていても装填が出来ない事を意味している。

そして他の戦艦にも言える。

と言うよりも大和がラマーを装備していなかったのには、そもそも46cm砲弾に対応出来るものが無かったからだ。

そこで装填速度向上と砲塔要員の負担軽減を狙い、大和が浮揚作業中の頃に開発をスタート、浮揚作業が終了するとほぼ同時に開発が完了したのだ。

これで自由仰角装填が可能になり、より円滑に装填作業を行うことが出来るようになった。

「相変わらず凄まじいな……」

思わずその言葉が漏れてしまうぐらいだ。

隣には175cmはあるであろう、亜麻色の髪を持つ長身の美女が立っている。

目鼻立ちは整っており、スタイルも抜群、普通ならば目が離れないだろうな。

彼女が大和の艦娘であり、この艦の主である。

これが平時であれば、まあ俺にそんな度胸があればの話だが口説くことも考えられただろうが彼女は部下である。無理。

物腰は柔らかいが、実のところ、と言うか艦娘全員に共通することだが腕つぶしも強い。

普通に70kgはあるであろう兵士を片手でぶん投げるぐらいだ。

大和に良からぬことをしようとした馬鹿な兵士が海に放り投げられ、後ろを付いてくる駆逐艦に救助されたなんて話もあるぐらいだ。

ただ、大和は家事炊事の腕が鳳翔も唸るぐらいらしい。

とは言えなんというか、ちよつとふわふわしている雰囲気を持ち主と言うか、普段は気が抜けるような雰囲気纏っている。

損傷した艦の艦娘は、殆どの場合休暇扱いになっており呉鎮守府内にある艦娘専用の宿舎で寝泊まりしている。

大和は損傷している間、呉鎮守府の食堂や各工廠の食堂で大活躍していたらしく大和の戦線復帰で食堂に大和が作った飯が出ないと鎮守府の者達はそれはもう残念がっている。

この食堂は民間人を雇い入れて飯炊きを行っている。

政府の方から軍でどうにか雇用を作れないか、とせつつかれた結果である。

まあ、実際民間人の雇用を作る事には賛成だが誰彼構わず採用は出来ない。

軍施設内で働く以上、それ相応に身分の調査なんかもやらねばならないので結構手間が掛かる。

今は資材などの余裕が出てきて消防、警察組織の再建に漸く着手したところで、捜査能力なんかは未だに陸軍憲兵に依存しているんだが。

各主砲は次々と砲弾を標的に対して撃ち込んでいく。

電探なども砲撃の衝撃で壊れたりすることは今のところないらしい、後続する武蔵と護衛を行う駆逐艦をしつかりと映している。

各門が20発を射撃したところで各部署に確認を取る。

「各部署、問題は？」

「今のところ問題はありません。砲塔内の温度が上昇気味ですが、空調設備のお陰である程度は抑えられています」

各艦の主砲塔内部は、射撃時に温度が大きく上昇しやすい。

普通に50度を超えるぐらいには熱せられる。

沖縄奪還戦の時は対地支援で砲撃を行った各艦の砲塔要員に熱中症患者が続出したほどだ。

そこで各艦の密閉式砲塔には空調設備が完備している。

簡単な話が冷房特化のエアコンと外の空気と中の空気を入れ替える換気扇が備え付けられていると思ってくればいい。

とは言え簡単に言っただけなので実際は防御力の関係上効率の良い物ではない。

そのせいで射撃間隔によっては砲塔内部温度が30度に達することもあるが、50度よりは遥かにマシだろう。

温度上昇による暴発も防ぐことも出来る。

今は全力で射撃を行っている状態なので、温度計は30度程度になるだろう。

30発ほどを射撃したところで一度射撃を停止、一斉射試験を行う。

「射撃停止。これより一斉射撃試験を行う。準備急げ」

1分ほどで装填を完了し、一斉射を行う。

大和の斉射は、その射撃時の反動が大き過ぎる余り9門全てが同時に撃つことは出来ない。

両側2門の計6門、真ん中1門の計3門づつが射撃するのだ。

とは言え、それでも衝撃は1門毎の射撃の比ではないが。

艦そのものが、射撃方向である左舷の反対側に反動で大きく傾く。

思いつ切り身体全体を揺さぶられたような衝撃で、それこそ（俺は関東住まいだが）東日本大震災の時のようだ。

「次弾装填急げ」

装填を急がせる砲術長の声が艦内無線を伝って砲塔要員に伝わる。

これは乗組員の訓練も兼ねているので装填時間が遅くても仕方が無い。

「やはり斉射ともなると段違いだな……」

「今のところ問題は起きておりません」

斉射が続けられ、その度に艦が揺さぶられる。

後ろの武蔵からも凄まじい砲声が聞こえてくるが、異常ありとの報告は上がっていないので大丈夫だろう。

戦艦の主砲の、と言うより軍艦ほぼ全てに言えることであるが、軍艦がどのように敵を狙って、どのように砲弾を命中させているのか。

軍艦の主砲は間接照準射撃でもって砲弾の着弾範囲（散布界）を目標に合わせて行う。

戦車の主砲は直接照準射撃で撃つので、陸上兵器で最も近いのは自走砲などの榴弾砲や迫撃砲などであろう。

戦車の砲撃を射的に例えるならば、軍艦の砲撃はさしずめ輪投げとかであろう。

戦艦の艦種にもよるが平均して大体遠近で500〜600m、左右で200〜300mほどの楕円形に広がっており中々に広い。

まあ改装で散布界を縮める改装も施されたので実数値としてはこれよりも100mぐらいは小さいだろうか。

要はこの楕円形の中に目標となる敵艦を収め、命中を狙うと言うものだ。

まあ命中を狙うと言うよりも運の要素が随分と大きく、当たるまで撃ち続けるみたいなのだが。

とは言えこの範囲ならば戦艦が相対する大型艦艇、主に戦艦で考えれば戦艦ル級や姫級鬼級と言った艦艇は軒並み200m以上は確実にあるのだから割かしの対して砲弾が飛んでいく範囲は小さい方なのだろうか。

勿論こんなやり方をしている時点で、砲弾にはGPS誘導やらレーザー誘導などのものは搭載されていないし、主砲にも勿論自動照準装置、砲安定装置なんてものも搭載されていない。

砲撃戦の手順としては、まず最初に自艦と敵艦の位置情報を測定することから始まる。

方位盤や射撃用電探、水上電探（対艦）を組み合わせ割り出すのだ。

ここで手間取ったり間違ったりすると、計算をここから、一番最初からやり直しになるので絶対に間違えられない。

次に距離を測る。

こちらは測距儀と呼ばれる艦橋の一番上に付いているでつかい装置とこれもまた電探で測る。

ここまで分かれば、砲弾をどのような弧を描いて飛ばせば命中させられるかが分かる。

他にも敵艦の速力と自艦の速力差や、反航戦ならば相対速度の割り出しをして偏差射撃をしなければならぬ。

戦車と違って狙う的が居るのは遙か20km先なんて事もザラだ。

進路予測に関しては、方位と距離が判明しているならば事前に集めた今までの戦闘データや偵察時の写真、我々ならば安芸を計測した際のあらゆるデータから算出された全長と、望遠鏡に映し出されている敵艦の全長を照らし合わせ、その差を計算することで進路を予測する。

ただしこれらの計算は兎に角難しい。

戦闘や波の影響で艦は前後左右に揺れまくるのだからそりや当然難しいに決まっている。

それどころか測距は敵艦との距離が20kmなんて離れていたら敵艦は水平線の向こう側、昼間ならまだ見えるかもしれないが夜間なら目視で見つけるのは難しい。

そうして得られたデータは艦の奥深くにある射撃盤に送られる。

射撃盤とは、沢山の歯車を使って動かすアナログコンピューター

だ。

歯車の回転角、カムのリフト量と言った砲術畑を歩んでいない俺でも分らない難しいもので計算を算出するものだ。

第二次世界大戦後も、デジタル電卓が発明されるまではこの方式を用いた電卓、タイガー手回し計算機と呼ばれるものだがそれが民間、それこそ一般家庭でも多く使われていた。

戦艦とはすなわち、バカデカイ計算機みたいなものだ。

そしてすべての戦艦がアナログとは言えどもコンピュータ照準で戦っている訳である。

方位、距離、進路、相対速度、自艦の揺れ、風速、大気圧、湿度、地球の自転などあらゆる膨大なデータが合わさって射撃盤で計算される。

とは言えこの算出された数値はあくまでも「予測」でしかない訳だ。しかもこのアナログコンピュータの精度も戦前に多く普及していたデジタルコンピュータと比べてずっと悪い。

ぶつちやけ、言ってしまうならば俺が普段執務で使っているノートPCやデスクトップPCのが性能は絶対に良いと思う。

これが何を意味するかは、戦艦同士の砲撃なんてまともに当たるものには無いと言う事だ。

因みにであるが、動かない陸上の要塞砲と言った大砲と戦艦の主砲が撃ち合ったら殆どの場合戦艦が負ける。

そして射撃盤でデータを算出したらば、次は各砲塔にそのデータが送られ、そのデータを正確に、精密に再現するのだ。

でなければ当たらないし、まともな方向や距離に飛んでいかないしで、各砲塔が正確かつ精密に再現出来なければ射撃盤で算出されたデータは意味がなくなる。

射撃盤のデータは砲塔内のメーターに出され、そのメモリに砲側の針を砲手が合わせる。

先ほども言ったが、艦は揺れているし動いているしなので、その振動に合わせて砲を調整するのは砲手の腕に丸投げ状態と言っている。砲塔、砲身は重量があるのでこれを動かすとなると、どれだけハンドルを回してペダルを踏んでとやっても砲手側と砲塔砲身側とでタイムラグが存在する。

艦の揺れと砲塔が動作するまでのラグをリアルタイムで合わせなければならぬ。

しかも艦の揺れは全くのランダムと来ているのだから至難の業、しかも砲の砲手は水平方向と垂直方向をそれぞれで担当するから各砲塔ごとに2名づつ居るのだ。

3連装砲ならば6人の砲手が合わせなければならない。

伝言ゲームを突き詰めに突き詰めた究極と言っても良いものだ。

算出されたデータは全て予測値、計算もそもそも正確か分からない。

しかもその不確かな数値に砲が追従出来るかどうかは砲手の腕次第。

更には天候、海の荒れ具合、砲弾や装薬の質までも関わってくる。

100発撃って命中弾無し、もしくは1〜2発だなんてこともザラだ。

究極のガチャガチャ、運試しゲームと言うのが戦艦の砲を撃つと言う事だ。

だから、そんな不確かなものに頼るよりも、航空機と言うもつと確かなモノの方が威力を発揮するのだ。

そりゃ20km先の敵艦に砲弾を撃ち込むのと、敵艦の10手前で魚雷を投下したり200m上空で爆弾を落としたりするのは明らかに後者のが命中するに決まっている。

敵機による迎撃などもあるだろうが、爆弾も魚雷も敵艦の手前まで運んでしまえばあとは搭乗員の腕と、戦艦の砲撃よりは遥かにマシンな運だけだ。

しかもこっちの方がユニットコストや運用コストの面からみても

遥かに安い。

大和一隻を建造する金額で陸攻が1000機以上も製造出来ると言えばどれほどのものか分かって貰えるだろうか。

まあ、戦艦の砲撃も航空機による着弾観測があれば話は随分と変わってくるのだが。

そうした複雑な経過を経て撃ち出された第1射目はまず当たらない。

初弾命中なんて、砲術専門の艦長達でも運が良いとか奇跡だ、と言ってしまうレベルの話だ。

第1射の目的は、敵に命中させると言うよりも評定射撃（試射）として誤差修正目的に撃つと言うのが実際のところだ。

データと実際の誤差を撃つてみて確かめる、それが初弾だ。

もし、初弾のデータが間違っておらず、全ての計算が合っている、敵艦も回避しないとしたら、第1射、遠近でそれぞれ1射、左右でそれぞれ1射で夾叉となる。

最短で5射程度で命中があってもおかしくはない、と言った感じになる。

当然、敵は回避行動を取るからデータが意味をなさなくなるまでに沢山撃つのだ。

装填速度も艦砲射撃の命中率、命中させるための大事な要素の一つとなっている。

砲撃戦となれば敵艦も自艦も当たらないようにするために回避行動を行うし、そうなればデータは次々に計算をし直さなければならぬ。

だから何度も言っているように、艦砲射撃同士による戦いは究極の運ゲーなのだ。

これに関しては2種の解決方法が主にある。

第一に乗組員、砲塔要員の練度向上。

第二にテクノロジーによるもの。

第一は前提としても、テクノロジの差は埋める努力をしなければ簡単に開かれてしまう。

我々も当然テクノロジによる解決も行っている。

電探と射撃盤を連動させるなどだ。

今現在戦艦から重巡と言った大型艦に搭載されている6号3式水上電探と7号2式射撃盤は連動している。

レーダーの提示した数値を元に射撃盤が自動で数値を出したり調整出来ると言う代物だ。

更には7号2式射撃盤は英軍技術の提供を受けてジャイロ安定器が付いているから、自艦の揺れを自動で補正する機能を有しているから単純に電探と連動させるよりも遥かに命中精度が良くなっている。

これは画期的なもので、光学照準ではどうしても長距離や悪天候下、夜間では限界があるのに対してこのレーダー射撃はそれらに対して絶大な威力と効果を発揮する。

試験での成績ではあるが、距離300、250にてそれぞれ行った射撃試験では、なんと各艦において初弾こそ命中しなかったものの、それでも早ければ3射目にて命中弾を記録することとなった。

流石にこれは随分と上手く言った所謂運がとても良かったと言う事例であるので丸々参考には出来ない。

それでも何度もの試験で出された結果は平均して凡そ5射ないし6射目で命中弾を得ることが出来ると言うものだった。

まあ、それでも15射を超えても命中弾が得られないなんて場合もあつたが、まあそんなものだ。

とは言え勿論目視による観測も行うし、陸地に対する艦砲射撃では観測機も普通に飛ばす。

旧海軍が構想していた艦隊決戦は、恐らくだが結局引き分けとかで終わるように思う。

戦艦同士の決戦なんて、やったところで結局面倒臭いだけなのだ。

結果的に他の対艦攻撃手段、最たるものは航空機であるが、それが発展したところで戦艦同士の砲撃戦なんて本当の意味での戦艦同士の戦いなんて第三次ソロモン海戦ぐらいしか無かった。

殆どの場合航空戦で戦いの決着は付いていたのだ。

我々だって第二次バンガ島沖海戦での夜戦における砲撃戦は結果的に航空優勢が確保されてもおらず、どちらとも決着が付かなくてこちらは後が無かったから実施されたに過ぎず、もし仮に余裕があったならばさっさと撤退していたかもしれない。

後世の歴史家達が分析する機会があるならば、あれはかなりグダグダな戦いだったと言う者もいるだろうし、俺はその評価が間違っているとは思わない。

成功し、勝ったから良かったものの負けていたらそれこそ人類の負けであった。

もし深海棲艦が最後の一兵まで戦うと言う存在でなければ、航空戦で決着が付いた時点でさっさと撤退していたであろうし、そうなれば戦艦同士の殴り合いなんて発生しなかつただろう。

なんなら夜間の航空攻撃手段を得た時点で、それこそ砲撃戦は発生しないだろうし、戦艦は本当の意味で活躍の場が空母の護衛や対地攻撃、それも沿岸部だけぐらいになったと言っている。

数時間に及ぶ射撃試験を終え、土佐湾を10ノットでぐるっと回る。

「提督、昼食の時間です」

「ん、分かった。すぐに行く」

大和が艦橋に俺を呼びに来る。

何時もならば秘書艦が朝昼夜の食事を作ってくれるのだが、今日は大和の試験を見るので食事は大和艦上で行う。

どうやら大和は俺が乗るとあって余程気合が入っているらしい、元居た世界含めて一度も食った事が無いレベルの豪勢な食事が出されている。

他の艦長達もこんな豪華な食事を目にしたことが殆ど無いらしい、

驚いている。

「大和、これは……」

「ご安心下さい、全て私の自腹です」

「なにっ?」

「これを全部自腹!?!」

思わず俺と艦長が驚きの声を上げてしまう。

「提督がこのような食事を好まれないと言うのは他の皆さんからお聞きしておりますが、せっかくですし堪能して頂きたいなど」

「それはありがたいが、大丈夫なのか?」

「実を言うと頂いていたお給料の殆どを使う機会が無くてずっと溜まっていく一方だったんです。だから凄く良い機会だなと」

「どうやら本当のことらしい、幾ら節制とは言えこのような好意を無下には出来まい。」

有難く頂くとしよう。

大和の作ってくれた食事の数々は、それはもう美味しかった。

夕方1530頃、執務室に戻る。

大和と武蔵は一度ドックに入って各部の点検整備を行う予定だ。

あれだけ派手に、それこそ砲塔内の主砲弾を撃ち尽くすレベルでの射撃試験を行ったのだから、整備の必要はある。

秘書艦である加賀が、執務室で書類仕事をやっている。

「お帰りなさい、提督」

「ああ、ただいま」

「それで、大和の試験はどうだったのかしら」

「上々だ。あとは乗組員の練度さえ上がれば実戦配備が出来るな」

「そう。それなら上々ね。それはそうとして、こちらの書類に宜しければ判を押して下さい」

「分かった」

加賀に渡された書類の束を読んで、可否の判を押していく。

二時間もすると、すぐに終業時刻になる。

加賀は中々強硬派で俺が仕事を区切りをつけて辞めないでいると機を見て無理矢理取り上げていく。

ついでに少しのお小言も併せてだ。

かなりキツイお小言なので受けたくない。

中代大将に似ているのだ。

「提督、時間です」

「あとこれだけだ」

「分かりました、夕食の準備をしますからそれまでには終わらせて下さい。でないと、分かっていますね？」

「分かっている」

少しばかり脅されて領く。

加賀は台所に向かって晩飯を作り始める。

言いつけ通り、さっさと終わらせて茶を入れておく。

大抵秘書艦と飯を食うから、あつて損はないだろう。

海外艦の皆だと、食事のメニューが和食じゃないことが殆どだから、その時は紅茶や珈琲、もしくは水で済ませる。

珈琲は例の店で定期的に購入し、海外勢の艦娘が秘書艦をやる時なんかに出している。

緑茶も良いが、やっぱり慣れ親しんだ珈琲や紅茶のが良いらしい。

先日釣り上げた鯛を使った鯛飯に、味噌汁、お浸し、里芋の煮っ転がしと美味そうなのが並んでいる。

俺の場合、将官なので自己負担だ。

市場に買いに出て、食材や日用雑貨などの諸々を買い込んでくるのだ。

制度が変わったことで尉官以上は自己負担となったのだ。

軍では下士官までは衣食住を軍が負担する。

理由は給料が少ないからだ。

尉官は陸海軍で共通して言われる事だが、よく「水飲み尉官」だなんて言われるぐらい貧乏だ。

尉官に関しては衣食までは毎月3万円が軍から補助として出される。

未だにあらゆる物価は高いままであり、全て自己負担となれば誰も生活出来ない。

しかし住に関しては完全に自己負担になるのだ。

尉官になると、大抵自分の家を持っているか官舎に住んでいるのだが、官舎住まいならば家賃は全て自己負担。

しかも官舎だから家賃は安いとは言え部屋にもよるが一番安い部屋で毎月5万円、高い部屋だと10万円は払わねばならない。

尉官の給料は25万円〜30万円程度。

そこから税金や保険云々が引かれるので手元に残るのは精々14〜5万円と言ったところか。

半分も残らないのが実情だ。

なんなら下士官までの兵士達のが尉官よりよっぽどマシだろうな。

彼らは給料は税金、保険を引いても手取りで17万円ぐらいは貰えるのだからな。

だから俺が一番押さえやすい食費を抑えるべく、大体自分で海に釣りに出て食料を調達してくるのだ。

野菜なんかは流石に育てられないから買ってくるしか無いが、それでも主菜を自分の手で賄えるのは大きい。

肉も精々月に一度、軍の放出品である牛缶詰を市場で買ってくるぐらいだ。

まあ、皆も流石に月一ぐらいなら牛缶は許してやろうと言う事で食える。

軍の製造した牛缶は、例に漏れず滅茶苦茶に味が濃くて高カロリーだからなあ……。

そりゃ駄目だと言われる訳だ。

食べ終え、執務机を片す。

書類が散らかりっぱなしと言うのは宜しくないからな。

確か、来週から武蔵が早速秘書艦を担当する予定だったな。

秘書艦の表を見て確認する。

当たりだ。

本当ならば大和、武蔵は訓練に専念するべく豪州作戦終了までは秘書艦をやらない予定だったのだが武蔵に入渠予定があったので、それならば、と予定が入ったわけである。

まあ何にせよ、俺がやる事は変わらないであろうな。

「加賀、安芸のところへ行くぞ」

「はい」

加賀を連れて安芸のところに向かう。

呉にいる時は基本毎日顔を出しているのだ。

特に変わった事は無く、かなりここでの生活に順応している。

流石に機密保持の観点から出歩かせる訳にはいかないが、最近は畑も作って色々と野菜やらを育てている。

どうやらこちら側の食べ物にド嵌りしたらしい。

色々と自分で食材を育てては料理を作り、食べている。

まあ、女性らしく体重の増減はかなり気にしているらしいが、そこは上手いことコントロールしているようで体型に変わった様子は無い。

と言うか月1で行われる身体検査の結果が俺のところ送られてくるもんだから知りたく無くても知ってしまう。

別に俺が知る必要があるのか、と言われると実は捕虜が一人しかいないと言う事が大きく関わってくる。

安芸はこの戦争、いや大戦と言っても良いであろう戦争を通して唯一の捕虜であり、それ故に何かしらの捕虜扱いに不備があれば確実に証言が一つだけになってしまいうから確実に大事になる。

情報を聞き出したりするのも何かあれば不味い。

となれば安芸の健康管理なんかも重要な訳だ。

因みにであるが、安芸のスパイ疑惑は未だあるもののその線は薄いと今のところは言える。

と言うか基本24時間体制で監視されているのだが、映像や音声、電波と言ったあらゆる通信手段を感知されておらず、しかも安芸が住む場所にはテレビやPCどころかラジオも無い。

流石に電波妨害はされていないが、深海棲艦の使う無線などの電波は特徴があるので感知した場合見逃す訳も無い。

数年もここに居れば日本語も随分と流暢になるもので、最初は片言であったなどと初めて見たものは誰が思うだろうか。

どうやら夕食は終わっているらしく、適当に持ち込まれた書籍を読んでいるところだったらしい。

2時間ほど話し、安芸の下を後にする。

そうすればさつさと風呂に入り、寝るだけだ。

今日は10時就寝と中々早い。

相変わらず秘書艦である加賀がこっそり起きて仕事をやらないか
しつかり寝るまで監視している。

怒られるのも嫌だし、流石にもうやらない。

さつさと寝て、加賀にも休んでもらおう。

第71話

作戦準備も中々順調に進みほぼ全ての準備を終える事が出来た。

1 航艦と第1、第2 護衛艦隊、陸軍部隊の輸送を担う輸送船団はそれぞれバリクパパンとボンタン、マドウラ島とスラバヤ島の間にある湾に停泊している。

あとは支作戦、本作戦の実施を待つだけである。

支作戦（陽動）は敵の目を逸らす為に我々の勢力圏内であるスラウエシ島以东にある敵地飛行場や港湾施設を各地の連山によって爆撃、破壊するものである。

作戦名はタ号作戦と命名され、投入される戦力は上記の連山に加え、偵察や搭乗員救助を担う二式大艇、それらの護衛を行う疾風である。

改修や機種転換が進み、全機が更に改良を施され夜間空中戦から対艦対地攻撃も可能になった機上電探と、より鮮明にやり取りが出来る機上無線機を装備する機種であるから昼間迎撃から夜間迎撃まででもござれだ。

流石に実戦配備から今までの期間があれば、機上電探の改良から量産体制の確立、既に配備済みの機体の改修や新規機体製造、それらの部隊への配備は進む。

全てを置き換えるには今少し、具体的には1〜2年の期間が必要になるが、それでも前線部隊にはそれなりに纏まった数を送り込んでいく。

改修は外地防衛を担当する陸軍航空隊や沖縄、硫黄島向けが今のところ殆どであり、新規製造機体は日本本土にある母艦航空隊や本土防空隊向けだ。

まあ、新規機体製造も軌道に乗っているから徐々に新規製造機体に置き換えられていく予定だ。

配備の優先度的には全体の数が他と比べて少ない母艦航空隊と本

土防空隊が最優先になる。

配備率は母艦航空隊100%、本土防空隊の震電が80%と言ったところだ。

次に優先されるのが、南方方面の外地防衛に就いている陸軍航空隊であり、その規模故に配備率は35%だが、改修用機材と人員を適宜送り込んでいたので余り時間は掛からずに50%を超える。

それと並行して夜間飛行訓練が本格化している。

陸海軍どちらとともに、前線部隊から新兵訓練を行う訓練飛行隊全てにおいて夜間飛行に始まり夜間戦闘などの夜間操縦飛行訓練が新たに必修科目になった。

この点、夜間飛行などは陸軍航空隊の方が熟達している。

なんなら海軍の先の夜間攻撃に関する訓練は陸軍航空隊から教官を引っ張って来て、その協力の下で行われたぐらいだからな。

外地防衛の主戦力である疾風は、今までに度重なる改修や改造、改装を受け続けている。

基本的にはエンジン馬力の強化を第一にしておりその強化された馬力を使って防御力や各種装備の搭載、強化を行っている。

ハ43―82と言う、排気タービン過給機や、強制冷却ファンの搭載など、大元の誉エンジンとは全く違うエンジンに変わっている。

と言うか技術者が大元の誉エンジンとハ43―82を並べて見た時、ぱつと見同じエンジンだとは誰も思わない、と言うか思えないだろう。

ハ43―82を搭載した疾風の性能は以下のものだ。

エンジン馬力2331馬力

最高速度710km/h

巡航速度

武装は陸海軍の弾薬に互換性がある2式3型20mm機関銃4挺

5式2型機上電探

6式4型機上無線機

爆装各種50kg〜250kg爆弾2発

これが今の疾風の前線で発揮可能な性能値である。

内地での武装無し、燃料は最小限、防弾板の撤去、エンジン負荷を一切無視したフルブースト等の状態であれば737km/hの発揮も可能だが、前線ではどうやっても無理である。

航続距離は増槽有りで約1600海里と燃費が少し上がったので200海里分ほど伸びている。

防御力に関しては全ての燃料タンクは15mm厚の装甲と20mmの積層防弾ゴムで覆われセルフ・シーリング式防弾燃料タンクとし、火災発生時に対応して機体各所に自動消火装置を装備している。

搭乗員の防護は、20mm機銃弾の直撃に耐えられるようにコックピット全周に15mm厚の装甲板、風防は全周25mm、前面部90mmの防弾ガラスで覆われている。

脱出も行い易いように、風防上面と後部に火薬を指向性に配置し、コックピット後部を吹き飛ばすための飛散装置を装備している。

かなりの防御力であり、深海棲艦機の主武装である12.7mm機銃はほぼ間違い無く、20mm機銃も防ぐぐらいの防御力はある。

これらの装甲などを全て取っ払えば航続距離は2000海里程度には伸びる。

エンジン馬力の余力は、その殆どを防御力と追加された機上電探や機上無線機などに割り振っている。

機上電探は言わずもがな、機上無線があれば連携も取り易く、装甲に守られていれば搭乗員が生き残れる可能性がより高くなるからだ。

機体なんぞ工場で月産300機と幾らでも作れるが、熟練搭乗員は育つのに実戦経験も加味すれば丸々数年は掛かる。

どちらを取るかなんて明らかだ。

疾風は被撃墜数は前線基地であれば、全体で200機以上とかなり多いが、搭乗員の生還率は9割を超える。

200名の搭乗員の内、140人は五体満足で帰って来て、残りの2割は戦闘中や脱出の際やパラシュート降下時の着水時などで怪我を負っている。

流石に腕や足、視力を失ったら搭乗員としてはやっていけないが、

本土で経験を活かした教官や戦技研究などを務める事も可能だ。

手術すれば治る怪我であったり、骨折ぐらいの怪我なら現地で十分治療可能、完治したらそのまますぐに戦線復帰可能だ。

撃墜されても搭乗員さえ生きていてくれれば、何度でも戦えるし、その分経験を多く積んだ熟練搭乗員が生まれることになる。

人命重視こそ、長期戦を戦う我々の勝利に繋がるのだ。

その分二式大艇を装備する部隊は毎日毎日大忙しだ。

二式大艇の話をしただけすると、怪我をした搭乗員や輸送船の乗組員を収容した時にその場で治療が出来るよう、ある程度の治療設備を備えている機体を装備している部隊がある。

対潜や船団護衛専門、搭乗員救助専門の二種類にそれぞれの部隊は分けられ運用されている。

それぞれの島に2個ずつ二式大艇装備の部隊があるのはその為だ。

母艦航空隊の主力戦闘機である烈風は疾風よりも最高速度が遅い。

搭載しているエンジンは疾風と同じであり、馬力は2331馬力を発揮出来るが正規全備重量状態であれば、664km/hが限界だ。

コックピットや燃料タンク、エンジン周り、電探、機上無線周りの防弾装備を全て外せば、まあ670〜680km/hは発揮出来るだろうが仮に進言されたとして許可するわけがない。

最高速度が疾風よりも大分遅い理由は、艦載機であると言うのが一番大きいだろう。

艦載機は陸上機に比べ、必要とされる固有装備が多い。

数々もある機体の着艦に耐えられる為の強度を持ったアレステイング・フック。

折り畳み翼を装備するから、その折り畳み翼装置のそれを載せていても空戦をして空中分解しない為の強度確保。

目印の無い洋上でも母艦へ正確に辿り着く為の誘導無線。

カタパルトで射出されるからそれに耐える為の機体全体の強度向

上に伴う重量増加。

それら全てを合わせると燃料や弾薬を満載にした時の全備重量は5136kgにもなり、疾風が4229kgであるからほぼ1tもの差がある。

最高速度が疾風よりも50km/h遅くとも仕方が無い。寧ろこれだけの差で済んでいることを褒めるべきだ。

疾風同様、艦載機に必要な装備類や防御装備、武装を全て取り外し、燃料も最小限にしてエンジンに掛かる負荷を一切無視、フルブーストを行えば700km/h以上の発揮は可能だがそれでは意味は無い。烈風の航続距離は1500海里(2778km)に制限し、その上で防御力を上げている。

1200海里ぐらいにまで減らしてもなんら問題無いのだが、それだと艦隊防空戦を連続して戦うことを想定した場合、航続距離不足に陥る可能性がある。

だから余裕をもって1500海里としている。

片道最大で500海里も飛べれば十分なのだ。

何故ならそこまで遠距離で戦うなんて事が無いからだ。

1600海里もあれば殆どの場合の戦闘は余裕をもって戦える。

敵との距離が遠ければ遠いほどに、搭乗員へ掛かる負荷は増大するしその分損耗率も上がる。

そもそもの戦う距離が短いのであれば無理して航続距離を伸ばさなくても良い。

連山と二式大艇は武装を20mm動力機銃に全て換装した以外は特に変わりは無い。

あの2機種は元々の防御力が高く、元から装甲に覆われている操縦手以外の機銃員や電信員、電探員用に防弾ガラスや装甲板を追加したぐらいだ。

重量増加で多少航続距離が短くなったが、搭乗員の命には変えられないし、それでも二式大艇が7800km、連山も6900kmもある。

るのだから4発重爆や偵察、哨戒、救助用としては十分だろう。

この2機種は1機撃墜されれば10名もの、それぞれに特化し専門に訓練された貴重な搭乗員を失う事になる。

1機辺りの人的損耗は戦闘機よりも重い。

防御力は高いことに損は無い。

二式大艇の主任務は何度も言っている通り、哨戒任務と撃墜された搭乗員の救助、それと哨戒偵察も兼ねている。

連山だけでは対潜哨戒は出来ないし、海面に降りての搭乗員救助はどうやっても出来ない。

船団護衛の際の対潜任務も二式大艇の方が向いていると言うのもある。

それに万が一すべての陸上飛行場が離発着不可能状態に陥った場合、海面と言う広大な決して無くなることのない滑走路を使って離着陸が出来る二式大艇は重要だ。

航続距離が長いから、その分連山よりも哨戒任務で飛ぶことが出来る時間も長い。

それぞれに、適した任務があるからこそ連山と二式大艇と言う2機種が存在するのだ。

海軍の主力戦闘機である本土を守る紫電改は搭載エンジンは疾風、烈風同様であり最高速度は703km/hの発揮が可能だ。

日本本土の空を震電と共に守り続けている重要な機体である。

艦載機ではない為に、機体の高速化が容易だから烈風と比べて随分と速い。

紫電改を艦載機化しても、結局艦載機固有装備を載せたりすることになるので結局は烈風と同じぐらいになる。

武装は幾つかのパターンがある。

20mm機銃を4門搭載している紫電改1型、30mm機銃と20mm機銃を2門ずつ搭載している紫電改2型。

そして様々な武装搭載試験用に色々と改造されている紫電改3型

だ。

紫電改3型は、説明した読んで字の如く装備試験機である。

烈風や疾風に搭載されている機上無線や電探は紫電で一通りの試験などを行って、実戦に耐え得るものかどうかを凶る為に作られたものだ。

燃料タンクは翼内武装を色々と載せる為に幾らか減らされ余裕を持たせている。

それ以外は色々と変わるが、今陸海軍で使われているほぼ全ての装備がこの紫電改で試験されている。

無線機や機上電探、防弾燃料タンク、防弾板、20mm機銃、20mm機銃用の弾薬等々。

大きなものから小さなものまで上げればきりが無いほどに様々な装備や武装の試験をしている。

とは言え3型の配備機数は10機ほどと少ないので殆ど知っている者は居ない。

そも、装備や技術の試験機であるから数を揃えなくて良い。

今の海軍が主力として配備している紫電改は1型であり2型は既に生産されていない。

2型の生産が撃ち切られた理由は必要無いからだ。

30mm機銃は装弾数が少なく、爆撃機迎撃任務には震電が居ることから100機ほどが生産されて以降生産はされていない。

単発機相手だと確かにとんでもない威力を発揮する30mm機銃だが、各門30発しか搭載出来ないから継戦能力が低く、結局装弾数の多い20mm機銃で戦う羽目になる。

だったら別に敵機に対して十分な効果がある20mm機銃で固めた方が補給もし易いし戦いやすいとのことから生産が撃ち切られている。

結果、1型を大量生産して本土防空に充てた方が良く、B-29の迎撃やその護衛に戦闘機が就いてきても高高度性能も十分にあるから戦えると判断したのだ。

そして現在開発真つ只中の新型艦上戦闘機、陣風について。

こちらは今のところ、試作機の製造に海軍呉航空廠が着手しており、6機の製造が予定されている。

これらは完成次第すぐさま各種試験を行われ、問題が見つければそれらを解決し、母艦航空隊に順次配備、機種転換、実戦投入がされる予定だ。

とは言え問題がどの程度のものにもよるが、最低でも1年ほどは掛かる見通しだ。

少なくとも豪州作戦中は、敵がどれだけ強力な機を出してきても烈風で戦わねばならない。

今日は作戦前の陸海軍合同会議が開かれている。

「航空偵察写真によると、エイティ・マイルビーチには防御陣地は敷かれています、そこまで重防御ではない様です。トーチカも十数程度、塹壕が主です」

「内陸部へも塹壕やトーチカが確認されているので、恐らく縦深防衛を想定しているのでは、と考えております」

「敵の防衛戦力としては2ないし3個師団と見積もっております」

「近辺に飛行場が2つありますが、どちらも1000m級滑走路が1本ですので規模としては多くても3ないし4個航空隊ほどかと」

「ただ、軌条が4本走っているので迅速に確保しないと縦深防衛での時間稼ぎと相まって、戦力が集まってきたら相当厄介です」

「上陸地点の戦力はそこまで大きくは無いな。軌条の一部さえ破壊して一時的に使用不能にしてしまえば増援は防げるだろう」

恐らく、戦力の関係から上陸自体は成功する筈だ。

問題は敵艦隊だろう。

「敵艦隊との戦闘が長引けばその分陸海空全てにおいて増援が来てし

まう。我々海軍がどれだけ迅速に敵艦隊を排除出来るかに掛かっていると言う訳だ」

「この方面に展開する敵艦隊は空母だけで15隻は下らない、航空戦力差は最低でも300機、最大で500機以上、護衛艦艇を含めて考えても丸々1個艦隊以上の戦力差になります」

参謀長が言った通り、なんせこれでは勝ち目が薄い。

それどころかこちらと拮抗するぐらいの戦力だけをぶつけて残りで輸送船団を叩くことだって出来る。

こちらの戦力が限られており二つに分けることが難しい以上、どうしても敵に別動隊を用意されて同時に輸送船団に攻撃をされたら対処は出来ない。

「船団護衛には陸軍からも飛行戦隊を出しますが、空母や戦艦を含む艦隊の相手は戦闘機が主力ですので正直厳しいですな」

「戦艦が突っ込んで来たら、戦闘機だけではどうにもならないのは当然だし、銀河を配備したところであの戦艦の対空砲火の中に双発機が突っ込んでいくのは自殺にしかならないから……」

「陸軍は対艦攻撃兵力が無いのだから、そこは仕方無い。敵機と敵潜水艦の対処さえしてくればそれで良いのだ」

寧ろ陸軍に敵艦、それも戦艦や空母を沈めてくれと言う方が間違いだ。

基本的に陸軍は戦闘機が主力だ。

そこに重爆と若干の対地支援機や戦術、戦略偵察機が含まれる。

敵地侵攻任務の際の攻撃兵力の殆どは海軍が担っているのだから仕方が無い。

指揮権に関しては一々面倒になるので、外地の連山装備部隊は現地陸軍の指揮下に置かれている。

本当は陸軍に連山部隊を創設した方が面倒が無くて良いのだが、これがまた面倒なところで爆撃機搭乗員になれる適性を持つ妖精はその殆どが海軍適性なのだ。

これは陸軍に属することが出来ないと言う事だ。

だから海軍で爆撃機隊を作って、それを陸軍の指揮下に入れると言

う回り諄い

二式大艇に関しては任務の性質上、海軍の直接指揮下にあるが護衛を陸軍に頼まねばならない。

とは言え、仮に連山を対艦攻撃に転用した場合の結果は火を見るよりも明らかだ。

あんなデカイ機体が雷撃を仕掛けようものならただの的にしかないし、対艦水平爆撃にしても同じだ。

連山に対艦攻撃をさせると言う考えそのものが間違っていると
言っている。

第一、対艦攻撃で安全を保つために高度6000m以上、しかも無誘導での爆撃なんて当たりやしない。

連山は陸地に対する爆撃こそが本来の運用であり、最も大きな効果を発揮することが出来るのだ。

色々と話し合った結果、敵の増援を防ぐためにも、上陸部隊が発見されるのは望ましくない。

そこで当初は1航艦のみが出撃し、敵艦隊を撃滅する為に行動することとなった。

1航艦だけであれば一過性の攻撃と言う可能性を敵は捨てきれないからだ。

そこで安全最優先としてスラバヤ港沖に輸送船団を待機させ、敵艦隊の殲滅を行った後に艦隊が迎えに行き、輸送船団を出港させることになった。

これなら最悪艦隊が勝てなくても、輸送船団は無傷のままで作戦を中止出来る。

この会議において陸海軍双方の最大の論点となったのは、上陸地点付近にある飛行場を先んじて爆撃し潰すかどうかだった。

反対派の意見としては流石に飛行場を重爆に爆撃されれば、敵も上陸することに感付くだろう、という最もな意見だった。

これは確かにその通りだ。

確かにポート・ダービーやポート・ダーウィンへの爆撃は行われて

いるが、それでもいきなり別の場所に爆撃が行われたらそつちで何かあると考えるのは普通だろう。

各地に対して爆撃を仕掛け、上陸地点を絞らせないようにするのも一つの手だが、そもそも投入する戦力が上陸が出来そうな場所と言えば上陸地点のエイティ・マイル・ビーチやブルームと言う市街地があつた場所の近くにある砂浜、ポート・ダービーの3か所ぐらいしかない。

もう1か所か2か所あれば攪乱も大きく意味を持つだろうが、3か所では流石に効果は小さいと予想される。

逆に賛成派の意見は、やった方が艦隊は敵基地航空戦力と敵艦隊の2正面作戦にならず安全性が格段に上がると言う主張だ。

これもその通りであり、敵飛行場を野放しにしていたら確実に敵艦隊と敵飛行場を最悪同時に相手取ることになる。

ただでさえ航空戦力、戦艦戦力どちらも劣っているのにここに敵飛行場まで加われればその航空戦力差は1000機を超える可能性だつてあるのだ。

これを事前に叩くことが出来れば、後顧の憂いは絶つたと言えるだろう。

それに敵艦隊の撃滅に成功したとして、次に敵飛行場を叩くとなると、艦隊にそれだけの十分な戦力があるとは言い切れない。

それならば連山による爆撃で予め潰しておいた方が良いのでは、と言うものだ。

結果、爆撃を実行することになった。

とは言えエイティ・マイル・ビーチ近辺の飛行場だけでなく、ポート・ダービーの飛行場に対しても爆撃を行うことになった。

その方がどちらに来るか分からないし、どちらかの戦力をどちらかに集中するなんてことも出来なくなるからだ。

少なからず防衛用戦力を張り付けておかねばなくなる。

手順としては、まず最初にポート・ダービーの飛行場に対して4個

飛行隊240機の連山で大規模爆撃を行う。

距離もそこまで離れていないから、恐らくエイティ・マイル・ビーチの飛行場戦力も迎撃に出る筈だ。

こちらは陽動なので派手に行く。

護衛の疾風もたつぷりと就け、万全の態勢で挑む。

爆装は陸用25番と25番夕弾を4発ずつの8発を装備する。

距離が遠いので、最大爆装量には出来ない。

ただ、全機が無事に投下を完了することが出来れば480tもの爆弾を落とすことになるから、十分だろう。

これで使用不能にすることが出来なくても、状況によっては反復攻撃をすることも視野に入れている。

そして陽動の爆撃隊が作った隙について、1個飛行隊60機の連山と護衛の疾風120機がエイティ・マイル・ビーチの飛行場を爆撃する。

30機ずつになるが、25番陸用爆弾と25番夕弾を4発ずつ抱えて爆撃を行うので30機でも240発、1つの飛行場に60tの爆弾の雨が降ることになる。

流星であれば80番を全機にぶら下げたとしても75機もの機数が必要になる。

240発もの爆弾の雨を降らせれば予備滑走路が無事だったとしても運用出来る機数は限られて、主滑走路は最低1週間程度は使用出来なくなる。

この作戦を発動するに伴い、スンダ列島に連山を全てと疾風を集められるだけ掻き集めている。

連山だけで300機、疾風も300機以上が参加する作戦だ。

そのために夜間攻撃を成功させるべく機上電探を生産する工場を突貫工事で増設し、連日昼夜問わずの生産を行ってギリギリ間に合わせたのだ。

ここまでの航空兵力を陸軍が一度に動かすのは初めての事であり、整備が補給、参加する人員の興奮などで大騒ぎである。

今スンダ列島の各飛行場に降り立てば疾風や連山が所狭しと並ん

でいる勇壮な光景が見られることだろう。

作戦が開始される。

既に陸軍部隊の輸送船団への積み込みは完了している。

1 航艦と両護衛艦隊が真っ先に出港。

敵艦隊との決戦に向けて進む。

次に連山と疾風が飛び立った。

本隊、陽動隊どちらも大編隊を組んで豪州へ飛んでいく。

艦隊の電探でもその大編隊はしっかりと捉えていた。

「提督、連山と疾風が頭上を飛び越えます」

「昼間なら姿が見えただろうが、夜では仕方が無いな」

艦隊が出港し、爆撃隊が敵地へ飛んで行ったのは2200の事である。

連山に合わせた巡航速度でも、片道1時間ほどの旅である。

中々に長い道のりである。

高度は9000m。

目標は大きな飛行場だから高高度でも外しはしない。

きっかり1時間後。

爆撃隊から電文が入る。

『陽動隊総隊長機より入電。『我敵機ノ迎撃ヲ受ク。護衛戦闘機隊戦闘開始』以上』

「敵機の迎撃だと?」

『はっ、その通りです』

「何かの間違いでは無いのか?」

『いいえ、電文にははっきりと書かれております』

参謀長が訝しむ様に電信室に無線で確認を取る。

しかしどうやらそれは事実らしい。

「可能性としては、敵が闇雲に迎撃機を上げ、地上電探による誘導で迎撃を行っているか、敵にも夜戦能力のある戦闘機が出て来たか。そのどちらかだろうな」

元々機上電探が使えなくとも地上や艦上の電探で迎撃機を誘導し、それによって迎撃任務を戦闘機に行わせると言う手法も研究されている。

こちらがそれらを研究、実戦配備している以上、敵もそうなるだろうと予想はしていた。

「そうすると、我々の作戦構想自体が揺るぎかねませんな」

「ああ、艦載機にも搭載可能であるならば、厄介だぞ」

少しすると新しく電文が届く。

『陽動隊から続報。『新型双発戦闘機。機種ハ2種、夜戦能力アリ。片方ハ速度遅ク、片方ハ疾風ノ最高速度ニ匹敵スルト予想サレル』。以上』

「疾風の最高速度に匹敵!？」

「時速700km以上は出せる、そう言うことになるな」

「双発機である以上、艦載機では無さそうですが……」

「いや、敵は間違いなく艦隊上空にこれらの戦闘機を配置してくるだろうな」

「となれば、このまま作戦を実行するわけにも行きますまい。幾らか修正が必要でしょう」

作戦の修正が必要であろう、と皆で話す。

作戦自体の続行はするが敵に夜戦能力が追加されたとなればどうしても修正する必要がある。

すると次々と新しい電文が入ってくる。

『陽動機隊より新たな入電。『敵機武装ハ12・7ミリト20ミリノ混載。火力強力ナレド数ハ少数。爆撃隊本隊ノ損害無シ』以上』

『陽動戦闘機隊より新たな入電。『敵機ハ電探搭載ノ公算大。敵機頑丈、20ミリノ複数命中ニ耐工容易ニハ撃墜出来ズ』以上』

「電信室、迎撃に上がって来た敵機の正確な機数が分かるか爆撃隊に聞いてくれ。凡そでも構わん」

『了解しました』

出来る限り正確な敵夜戦戦闘機の機数情報が欲しい。

それがあれば、どの程度の夜戦戦闘機を有しているのか分かるし、敵艦隊上空にもどれだけの敵機が居るかある程度把握することが出来る。

B-25を空母に載せて本土に突っ込んできたと言う前例がある以上、この報告にある敵機が艦載機でないと言う保証は欠片も無い。警戒をしておくに越したことは無いだろうな。

暫くすると、新しい報告が上がってくる。

『陽動隊より入電。『高速機ヲ乙、低速機ヲ甲トス』』

『乙60機、甲150機ト見積モラレル。敵機ノ戦術未熟、練度不足。戦闘機隊損害軽微ナレド敵機ニ与エル損害モ軽微也。本隊敵機ニヨル損害無シ。又道中エンジン不調機11機引キ返ス』以上です』
「平文か？」

『いえ、暗号化されております』

「分かった。引き続き爆撃隊には出来る限りの情報を送ってくるように言ってくれ」

『了解しました』

通信を切る。

どうやら陽動隊は詳細な情報を打電、しかも暗号化するほどの余裕があるらしい。

とは言え陸軍も夜間空戦は初めてであり、訓練は積んでいるとしても撃墜機は多くない。

どうやら敵機を撃墜して本隊を守ると言うよりは追い払うことで守っているらしい。

敵も夜間空戦は初めてとあって我々と同じような状況であるらしいが、なにせ爆撃機を撃墜しなければならぬと言う任務があるものだからこちらよりは追い詰められているのだろう。

我々は別に敵機を撃墜しなくとも本隊さえ守り、飛行場に爆弾を落とせばいいのだからな。

『陽動隊より新たな入電。『我敵対空砲火ヲ受ク。投弾2分前』以上で

す』

「どうやら敵機の出迎えは上手い事搔い潜つたらしいな。あとは敵飛行場を叩けるかだな」

「本隊はどうなのでしようか？幾ら陽動隊が戦果を挙げたとしても肝心の本隊が戦果を挙げられなければ本命の意味はありません」

「予定では30分ほど後に爆撃が始まる。それまでは待つしかない」
少しすると再び無線が鳴る。

飛龍が無線を取り、内容を聞く。

「提督、不審な電波を探知したつて。多分、敵潜水艦だと思う」

「気付かれたか」

「これだけの大艦隊です、寧ろ気付かれない方が無理でしょう」

「艦隊は引き続き無電封止、出来うる限り我々の位置を敵に知らせるな。駆逐隊は敵潜を叩け。対潜戦闘の際は短距離無線を使用。それ以外は緊急事態以外での電波発信を禁ずる」

電探は最初から稼働状態だ、もし逆探を使われたら位置情報はバレバレである。

とは言え逆探を恐れて敵艦や敵機の接近を許すぐらいなら電探は稼働させておいた方が良い。

「第1護衛艦隊の2隻が敵潜狩りに出ました」

「了解した。十分注意せよ。他艦は引き続き対空対潜警戒厳。見付かって電波を発された以上他の敵潜も寄ってくるぞ」

大艦隊である以上、敵潜に発見されてしまうのは仕方が無い。

その後をどうするかだ。

尾行をされるのを防ぐ為にも確実に電波を発した敵潜は撃沈しておかなければならない。

とは言え戦闘艦艇のみであるから輸送船団発見の報告はされていない筈。

寧ろ見付かって輸送船団の存在が秘匿出来るのならば好都合かもしれない。

停泊中の艦はどれだけ武装を積んでいても動けないから、大きな的ぐらいにしかならない。

しかも輸送船団は停泊はしているが輸送船の中には数多くの陸軍将兵や武器弾薬燃料水食糧医薬品が大量に詰め込まれている。

一度襲われて火災が発生したら、燃料や弾薬に引火しようものなら消し止めるどころか逃げる事も儘ならない。

「提督、敵潜の撃沈を確認しました」

「ご苦労、急ぎ所定位置に戻るように」

とは言え、電文を発された以上これからは常に敵潜に狙われながらの航海と戦闘になる。

『第2護衛艦隊から入電。『敵潜らしき反応を捉える。方位274、距離30km』以上』

ほうら、言った先からだ。

「対潜戦闘を第1、第2護衛艦隊に下令。発見次第個々の判断での敵潜迎撃を許可する。一隻たりとも見逃すな」

「了解しました」

すぐさま第1、第2護衛艦隊に下令する。

正直な話、彼らの方が対潜戦闘と言うものでは海軍でも圧倒的に能力が高い。

連日の輸送船団護衛任務では敵潜に狙われるのが当たり前であり、彼らはその敵潜相手に命懸けで戦い続けていたのだ。

その戦術や戦技、練度は紛れも無い。

南

装甲艦隊

第1機動艦隊

第二護衛艦隊

第1護衛艦隊

北

艦隊の配置は以上の様になっており、装甲艦隊は第1機動艦隊の3海里前方に位置する。

装甲艦隊とは大鳳、信濃を主力としその護衛に大和、武蔵を中心とした13隻を編成した艦隊である。

装甲艦隊と命名された理由は、文字通り艦隊の中でも突出した装甲防御力を有しているからに他ならない。

正直捻った名前よりも分かり易く覚え易い方がこちらとしても都合が良い。

艦載機数は烈風163機、流星24機、彩雲15機と戦闘機である烈風の数が圧倒的に多い。

それはこの艦隊の役割が他とは別だからだ。

装甲艦隊の役割は、意図的に突出し敵航空攻撃を吸収、有する戦闘機で敵航空戦力の漸減にある。

他空母が矢としての役割があるのに対し、装甲艦隊は完全に盾の役割に徹することになる。

163機と言う烈風は直掩にするには中々多く、他空母の直掩戦闘機を合わせれば4機つつ他の空母が直掩機を出したとしても227機、敵攻撃隊を撃退するには十分な戦力だ。

敵が一度限りの全力攻撃で直掩機も残さずに攻撃をしてきた場合は防ぎ切れないだろうが。

『本隊より入電。『我敵地上空ニ到達。迎撃機現レズ』』

本隊が無事に敵地に到着したらしい。

「敵は陽動隊の迎撃に全て出払ってるみたいだね」

「電探に最初に捉えたのが数百機の大編隊だからな、そりゃそっちの迎撃に全力を出すだろうさ」

「このまま何も無ければ目的は達成だね」

「ああ、あとは敵艦隊を叩けば良いだけだ」

『本隊より入電。『我敵飛行場ヲ爆撃セリ。敵機多数破壊、滑走路爆弾痕多数確認、数日中ノ使用不可能ト認ム。再度攻撃ノ要無シト認ム』以上です』

どうやら本隊の攻撃は成功したらしい。

「潜水艦隊から、何か報告は上がっているか？」

『まだです』

「了解した、引き続き頼む」

通信を切つて、艦橋の俺の椅子に腰を掛けて腕を組む。

「敵艦隊は出張つてこないのだろうか」

「いえ、恐らく出撃準備は整えている筈です。問題は、大型艦になればなるほど出港に要する時間が必要になること、それにあれだけの大艦隊ですから港から出るのに相応の時間が必要な事でしょう」

「……敵艦隊が態勢を整えるのにどれぐらいの時間が掛かると思うか？」

「そうだね、戦艦空母が出港するのに最短で8時間だと見積もつて、艦隊の陣形を整えたりするのに2時間ぐらいだとして、10時間。余裕を持って考えるなら±2時間は前後するかも」

「どちらにしろ、夜戦は仕掛けられんな」

「距離が遠いからね、互いの相対速度を考えても攻撃隊を出せるのは最短でも日の出つてとこかな」

「出来れば、夜戦を仕掛けて出来うる限り戦力を削いでおきたいところだが、そこは仕方が無いか」

「攻撃隊の準備はどうしますか？」

「今回は慎重に行こう。夜間戦闘が可能な敵機が確認されているからな、攻撃を受けないとは限らない。長い間燃料弾薬を満載した機を格納庫内に置いておくのは居心地が悪い」

「分かりました。では日の出と同時に攻撃を行う為に日の出の2時間前からの出撃準備で宜しいですか？」

「それで頼む。偵察機だけは発艦させておこう。それ以外の各員は交代で休憩を取って決戦に備えよ」

「了解しました」

いつも通り指示を出し、椅子に深く腰掛けた。

艦隊同士の戦闘の火蓋が切られたのは唐突であった。

突如として電探が艦隊外苑約10km程の位置に急速接近する敵機を発見した。

『電探に感有り！高度30m以下、距離100！機数30機前後、双発機の模様！』

「直掩隊をすぐに向かわせろ！」

直掩任務に就いている烈風が闇夜の中、機体を翻して敵機に突っ込んでいく。

「どうしてこんなに接近されるまで気が付かなかった!？」

「恐らく、電探の弱点である俯角を取り辛いところを突かれたものと思われます。電探はある程度の高度以上を飛ぶ敵機でなければ探知出来ませんので」

参謀長が航空参謀に勢い強く聞くと、さも当然と言った感じで答える。

我々全員が、警戒はしているもののこの真つ暗闇の洋上を電探に探知されないほどの超低空で敵機が突っ込んでくるなんて思っても居なかつたのだ。

昼間ですら海面に激突する危険性が大きい超低空飛行を、夜間で全く灯りの無い中でやるなど正気の沙汰では無いからだ。

『敵機、さらに接近する！』

「全艦対空射撃待て！撃てば位置を晒すぞ！」

その命令によって一隻たりとも対空機銃や対空砲を撃つことは無い。

恐らく敵機は隠密性を優先して照明弾を投下する機を用意していない。

飛ばしてきているのであれば、ある程度の高度を取らないと照明弾を投下しても照らせない。

そうになると、高度を取らねばならない訳だがそうになると確実にこちらの電探に写る。

それが見えていないと言う事は、敵機は電探だけが頼りだと予測出来る。

『敵機方位127！速度600km/h以上！』

烈風が敵機を落とす。

火の玉となった敵機が、海面を照らしながら水飛沫を上げながら海面に激突しバラバラになるのが鮮明に見える。

恐らくスポンソンでは、十数名ほどのカメラマンが戦後の記録の為にシャッターを切り、映像を残していることだろう。

『敵機20機、2航戦に突っ込む！』

「2航戦に回避行動を許可、各艦相互位置の把握、衝突は絶対に避ける！」

双眼鏡を覗くと、真つ暗闇の中に艦橋から漏れ出る夜間照明の小さな灯りが見える。

2航戦は大鳳と信濃を引き抜かれたことで空母は葛城と阿蘇の2隻になっている。

2隻を守るのはビスマルク以下戦艦3隻、重巡3隻、軽巡2隻、駆逐艦13隻であり、恐らく空母1隻辺りの護衛戦力は1航艦の中でも一番だ。

しかし夜間対空戦闘技術がまだ確立されていない今は、空母を守る手段と言えば精々自らを盾にすることぐらいだ。

今出来るのは、爆弾にしろ魚雷にしろ当たらないように祈るだけである。

少しすると、魚雷が命中した時の特有の爆発音と衝撃音が響いてくる。

「どうやら、被雷した艦がいるようですね……」

『アドミラル・ヒツパーより入電。右舷艦中央前部に魚雷1本命中。命中箇所より後部で武装用電源喪失。右舷魚雷発射管に異常あり、魚雷は投棄。3時間もあれば電源復旧可能。艦傾斜発生なれど注水にて復元、航行に支障無し。艦運用上の電源は保持、現状戦闘は不可。速度30ノット発揮可能。以上』

「かなりの痛手を被ったな……」

とは言え、彼女の損傷は痛手だ。

彼女に加えてプリンツ・オイゲンは、大型艦艇と言う艦種と、現状の海軍の中では珍しく、そして貴重な機雷敷設能力を有している。

現状の海軍の機雷敷設を担当しているのは、連山や潜水艦隊が主である。

理由としてはこれ以外に機雷を装備することが出来る艦や航空機が無いからだ。

元々2隻には機雷敷設用の軌条が装備されていたが、装備として必要なのか、そして撤去するか否かの議論が行われた結果、残された経緯がある。

残された理由としては海軍には機雷敷設艦が無い。

と言うのも深海棲艦に効果のある武器を載せられるのは、艦娘のいる艦もしくは妖精達が建造した艦のみである。

しかも厄介なことに、艦娘が存在する艦ならば艦種に沿った武装はどんな種類のどんな兵装でも載せられるが、それ以外の兵装は載せられない。

そして搭載可能な武装の基本原則として、過去に自らが装備していた武装が主になると言う事になる。

機銃ぐらいならこれを超えて様々な艦種に搭載することが出来るが、それ以上は不可となる。

例えば空母に駆逐艦などが搭載する魚雷発射管は載せられないし、逆に艦載機を戦艦に乗せることは出来ない。

それに加えて妖精たちが建造した艦艇に武装が載せられると言うのもかなり制限があるものだ。

実はこの載せられる武装と言うのが精々単装の小口径砲までであり、魚雷だとか機雷なんかの兵装は全く載せられない。

運ぶことはできるが、装備は出来ないと言うわけだ。

航空機による機雷投下は、確かに広範囲を一気にカバー出来るし、短時間に大量に敷設が可能だ。

しかしある程度の高度から投下しなければならぬこと、それによつて着水時に誤爆したり故障したりすること、空中投下なのでパラシュートを備え付けなければならぬことなど結構面倒臭い。

その点、重巡と言う戦力ながら安定して機雷を敷設することが出来る2隻はとても貴重だ。

なんせ連山では精々20発ぐらいしか載せられないが2隻は200発は載せられる。

しかもばら撒いておきたい場所に正確にばら撒けると言う点も大きい。

今までも多くの機雷敷設任務に従事してきたし、今後も同じように任務に従事するだろう。

そのうちの1隻が暫くの間戦線離脱を余儀なくされると言うのは、かなりの痛手だ。

ともあれ、今は彼女を艦隊に組み込んだまま戦闘を行わせるか否かを決定せねばならない。

電源は3時間もあれば回復出来ると言っているが、日の出まで時間は無い。

修理するとなると退避して、停止してとなるのだがそんな余裕は無いだろう。

しかも度重なる戦闘を耐え抜けるかどうかとも疑わしい。

彼女を失うのは、それこそ取り返しが利かない。

そうなると、どのような決定を下すべきかは自ずと一つに絞られてくる。

「アドミラル・ヒツパーに駆逐艦3隻の護衛を就けてスラバヤ湾へ退避させよ。応急修理を行った後にバリクパパンへ向かってそこで本格的な修理を行わせる」

「了解しました」

アドミラル・ヒツパーの護衛には暁、雷、電の3隻が就き、スラバヤ島で待機していた陸軍の疾風24機と二式大艇2機が護衛に就くことになった。

これで主だった脅威である敵潜

道中、敵潜の脅威はあるが、通信や暗号傍受とその解析の結果、どうやら敵潜は我々1航艦目指して集結しつつあるらしい。

電探で敵潜を避けつつ航行すれば無事に辿り着けるだろうし、アドミラル・ヒツパーには必要ならば更なる航空支援を陸軍に要請することを許可している。

恐らく、敵飛行場を潰したから空襲を受けることは無いだろうが、敵潜だけが心配だ。

艦隊から4隻が分かれ、スラバヤ島に向かった2時間後。

日が昇り始める。

「偵察機からの情報は？」

「まだです」

「電探があるとは言え暗闇の中で、敵艦隊を見逃した可能性がありません」

「まあ、電探の性能からして、50km圏内に収めなければならぬかな。正直、見つければ奇跡ぐらいの感覚だ。第2波索敵を出そう」
今急ぐべきは、敵艦隊を発見することだ。

我々は今、敵艦隊に圧倒的なアドバンテージを奪われている。

「敵艦隊は我々の位置を知っているが、我々は敵艦隊に位置を知らないのだ。」

このままでは一方的にやられるだけだ。

「電探手、敵編隊を見逃すな。飛龍、彩雲を1機用意しておいてくれ」
「どうするの?」

「恐らく先に攻撃を受けるのは我々だ。そこで敵攻撃隊に対して彩雲を張り付かせて敵艦隊を見つける。第2波索敵が最大到達線に至るまで、あと数時間は掛かるし、確実に見つけられる保証は無い」

「なるほど、送り狼をやるうってこと?」

「その通りだ。それに、彩雲が上手いこと張り付いていてくれれば攻撃隊や潜水艦隊の誘導も出来る」

彩雲を1機準備させつつ、恐らく1000頃にならないとこちらは攻撃隊を出せないであろうと頭の中で考える。

敵艦隊を発見出来るとしたら、恐らく0900〜0930ぐらいになると予想されるからだ。

「直掩隊と迎撃隊の準備を進めてくれ。先手は恐らく敵が取るだろうからな」

「了解しました」

皆が領き、戦う為の準備を進め始めた。

そう予想した3時間後、艦隊は敵攻撃隊のかつてない程の猛攻を受けることになる。

第72話

『大鳳より入電、電探に感あり。距離150km、方位223！機数200機前後の編隊が4個！総機数1000機を超える可能性あり。速度時速約300km』

「直掩隊は即座に敵攻撃隊迎撃に向かえ。各母艦は烈風を上げられるだけ上げろ！」

その情報を聞いた瞬間に、直掩隊は敵攻撃隊に向かっていく。

とは言え直掩隊の数は100機ほどであるから敵攻撃隊の1つを撃退するのが精一杯であろう。

敵機の数からして30分ほどで装甲艦隊に到達、攻撃が開始されると思われる。

幾ら装甲艦隊とは言え1000機もの敵機による波状攻撃を受けてはただでは済まない。

空母からは命令が伝達された瞬間に烈風が次々と後部昇降機に翼を折り畳まれた状態で2機ずつ載せられ、飛行甲板に上げられていき、甲板に上がると同時に翼を広げてカタパルトに載せられて射出されていく。

2本のカタパルトから交互に射出されていく烈風の発艦速度は1機辺り30秒も掛からない。

次々と射出されていき、全ての烈風を射出し終えるのに掛かった時間は17分ほどであった。

装甲艦隊の電探による誘導で、既に装甲艦隊に近く直掩隊が迎撃をしている敵編隊を通り過ぎ、その幾らか後方にある敵編隊に烈風が襲い掛かる。

『装甲艦隊より入電、『我敵機ノ攻撃ヲ受ク』以上』

「恐らくこちらに敵機が来ることは無いだろう。とは言え、これは敵艦隊に対しての攻撃をするのは無理だな……」

「迎撃に徹する他無いでしょう」

参謀長や航空参謀と話す。

飛龍は艦の指揮を執り続けている。

空母艦上は大忙しだった。

なんせ敵機の数が多いから一度の迎撃戦だけでは終わらない。

最初に発見された敵4個梯団の迎撃をしている最中に、装甲艦隊から更に後方に2個梯団を発見したと言うのだ。

最初の4個梯団を全力で迎撃した烈風には、燃料はまだまだ残されていたものの残弾数が心許無い機が多かった。

そりゃ1000機を超える敵機を迎撃したのだから弾切れになって居てもおかしくは無い。

こちらの損害も、撃墜された機が100機ほどと軽いとは言いい切れない損害を負っている。

迎撃戦が続く中、それを突破した敵機が次々と装甲艦隊に突っ込んでくる報告が上がってくる。

遠くでは、大和と武蔵のものであろう砲声が響いている。

対空射撃で3式弾を撃っているのだろう。

4個梯団が装甲艦隊への攻撃を終了した時の損害は、大鳳には爆弾の直撃弾が21発、信濃には18発と普通の空母ならとつくの昔に空母としての機能どころか艦としての機能を失って沈んでいてもおかしくは無い被弾数を数えている。

魚雷は信濃が回避しきれなかった1発を右舷に食らったのみであり、戦闘力は依然として保持している。

乗組員は全ての機銃を防盾で守っているからそこまでの被害は無いにせよ、それでも100名を超すほどに上る。

とは言え、こんなにも苛烈な攻撃をこれだけの被害で切り抜けられたのには迎撃に徹し、烈風を集中的に運用出来ていることが大きい。

敵機の数が多過ぎるが故の結果論ではあるが、それでもこれだけで切り抜けられたのは大きい。

撃墜された搭乗員は全員ではないが、脱出出来ているので付近に展開する潜水艦隊が救助に向かっている。

概算ではあるが、恐らく当初の見積もりである我が艦隊の2倍の戦力を有していると言うのは間違いないだろう。

艦載機数も倍が良いところ、もしかするとそれ以上の可能性が高い。

迎撃に出て弾薬切れになった烈風が度々小隊単位で帰投してくる。その烈風をすぐさま收容して、整備員総出で弾薬補給と燃料補給を済ませて再び戦いの空へ送り出していく。

この間にも敵機は次々と来襲しており、2個梯団の発見の後に更に2個梯団が電探に映っている。

今は戦場に留まり続けている烈風は総勢で250機ほどであり、その中の150機ほどが最初の2個梯団を迎撃中であり、その中から100機が新たな2個梯団に迎撃に向かっている。

一旦帰投して補給した烈風は後方の2個梯団に差し向けることにしているが、その数は決して多くは無い。

と言うのも帰投して来た烈風の多くが修理が必要であったり、艦上では修理が出来ず投棄するしかない機体がかかなり多かった。

撃墜された機体を含めて、投棄と即座の戦線復帰が不可能な烈風の機数は200機を越しており、烈風の総機数の約3割に達する。

現在進行形で撃墜される烈風や修理が必要な烈風、投棄される烈風が増え続けておられるから戦闘が終わる頃には4〜5割の烈風を失うだろうと予想されている。

「戦闘機隊からの報告だと、最初に攻撃を仕掛けて来た4個梯団は全て戦闘機で編成されてたそうだよ。あとの4個梯団は戦闘機が5割に降爆と雷撃機が5割ってとこ」

「最初にこちらの航空兵力の漸減を狙ったな」

「どうやら敵は、数の利を生かしてこちらの艦載機を減らした後に空母や戦艦叩こうと言う戦術を採っていたのだろう。」

最初の4個梯団全てが戦闘機だったことが裏付けている。

1000機もの戦闘機を差し向けておいて、これで何の狙いもありませんでした、と言う方がおかしい。

こちらの戦闘機を予め叩いておいてから、障害の無い道を雷爆同時攻撃を仕掛けようとしていたのだろうか？ そう上手くは行かせんぞ。

「敵がこちらの戦闘機の消耗を狙っていると言うのなら、我々よりも敵機を消耗させてやればいい」

「我が方の空母がやられる前に、敵空母叩いた方が宜しいのでは？」

「いや、状況的には我々が不利であるとは思わん」

「何故でしょうか？」

「我々は守りに全ての戦力を割くことが出来るが、敵は艦隊防空と攻撃隊の二つに戦力を割かねばならない。幾ら戦力差があるとしてもこれで実際に戦う事の出来る戦力は同数程度になる。それに敵は頼みの綱であろう基地航空隊をこちらの爆撃で失っている。と言う事は一対一の正面对決と言うわけだ。それらを加味するに五分の戦いであろうと思うのだが」

戦力差は倍になるだろうが、こちらは保有している艦載機の全てを迎撃に投入出来る。

共同攻撃を担う敵基地航空隊は爆撃で叩いてあるので、まず出撃は出来ない。

戦闘機程度ならばノンストップで復旧作業を行えば離発着出来るであろうが、爆弾や魚雷を抱いた雷爆撃機や、それこそ数tの爆弾を抱えていて長い滑走距離が必要なB-24やB-17は一切出来ない。

それこそB-24などの重爆を攻撃手段として運用しようとしたら、敵の機械化率を考えると、それでも1週間は使用不可となる。

「それならば、流星も迎撃に出しては？ 敵戦闘機は戦闘機隊が抑えていることですし流星でも十分に迎撃に参加出来るかと」

「それに、今の状況では攻撃隊を出すことは叶わないでしょう。例えば編成して出撃させたとしても敵の迎撃機に大半が落とされてしまいます」

「……よし、流星の半数を敵機迎撃に充てよう。それ以外は敵艦隊攻撃に備える」

「分かりました、すぐに準備させます」

「頼んだ」

「飛龍、念の為に聞いておくが、魚雷や爆弾は全て弾火薬庫に仕舞ってあるな？」

「勿論。降りて来た烈風用の機銃弾だけは格納庫内にあるけど、全部被弾した時に備えて投棄口の近くにしっかりと固定してあるから」

「そうか、ありがとう」

「んーん」

艦の状況も確認し、いざと言う時の戦闘行動にしっかりと備えていることを確認する。

飛龍はにつ、と笑いながら答え、その様子や雰囲気は流石歴戦と言うべきものがある。

「参謀長、主席参謀、皆に聞きたい。敵飛行場の継続した使用を妨害する為に連山にもう一度敵飛行場を爆撃させた方が良いだろうか？」

「出来るのなら、やった方が良いでしょう。上陸開始時に敵飛行場が稼働して戦闘機でも飛び立てばそれこそ脅威です」

「いえ、私は反対します」

「私も航空参謀の意見に同意します」

参謀長や主席参謀が賛成する中、航空参謀と主計参謀が異を唱える。

「何故だろうか」

「第一に、今回出撃した連山以外に待機している連山が無く、帰投中の連山をもう一度出撃させる他無いからです。連山は往復2000km以上の長い距離を飛行しています。それ相応に整備補給を必要としますが、全機による全力出撃を再び行うには最低でも三日程度は整備期間を設けなければなりません」

「補給の問題もあります。今回の作戦用に備蓄された爆弾の数量は、全力出撃1.5回分だけです。燃料も護衛の疾風分を考えれば、スラバヤの燃料タンクは殆どが空になってしまおうでしょう。そうなれば

今後の活動に大きな支障を来たす事になります」

「そうなれば、来襲する敵機に対して無防備になるか……」

「はい」

「それどころか、豪州進出予定である陸軍航空隊すらも暫くは活動出来なくなります。そうなれば、豪州上空の制空権は敵の手に完全に渡ってしまいます」

二人の意見に、皆が考え込む。

事実、その通りであるから反論の余地は無い。

今回備蓄された爆弾は主計参謀が言った通りに全力出撃1・5回分となる。

本来ならば全力出撃2回ないし3回分の備蓄は行う予定であったのだが、以前敵潜水艦が内海に侵入した際に撃沈した輸送船の中に連山の爆弾を大量に積み込んだ輸送船が居たのだ。

その輸送船が撃沈されたことによつて、本来備蓄される筈だった爆弾量を大きく下回っているのだ。

もう一度送ることも考えたが、それ以上に陸軍将兵の輸送や糧食、予備の武器弾薬の輸送も行わねばならず、結局そちらを優先したために航空爆弾の輸送は見送られた。

駐留する飛行場が元々備蓄している爆弾を使うことも考えられるが、基本的に疾風が爆撃することは少なく、精々が対地支援任務の際に近距離での精密な爆撃支援が必要な時だけである。

そうなるも備蓄している爆弾の数はそこまで多くない。

各飛行場に各飛行戦隊が30発程度づつを備蓄しているに過ぎない。

これは1個飛行戦隊36機が爆撃任務を数回熟せる程度の量でしか無い。

しかも全て通常陸用25番か、25番タ弾のどちらかでない。連山の爆弾積載量は往復の燃料を考へても2tの爆撃を施すが、300機を超える連山全機に爆撃を施すととなると2tでも600tを超える爆弾量が必要になる。

疾風装備の飛行戦隊の総爆弾量はどれだけ多くても120tしか

無く、僅か6分の1ほどの量を満たすに過ぎない。

このスラバヤ島などにある陸軍飛行戦隊は、航空参謀達が言った通り豪州への進出も予定されているから下手に資機材を使ってしまおうと豪州進出の際に戦闘行動が取れなくなってしまう。

銀河を装備する飛行戦隊には各飛行戦隊に100発ずつと多くの爆弾があるが、使用は避けたい。

と言うのも、これらの飛行戦隊も豪州への進出が予定されており、豪州と言う広大な戦場では対戦車攻撃の機会が多くなると予想される。

その時に爆弾が無ければ、航空攻撃によって予め敵装甲戦力を減じることが出来なくなる。

そうなれば装甲戦力で劣っている我々は純粋な装甲戦力同士の正面对決をしなければならぬ。

北海道での戦闘で見られた敵新型戦車は、豪州に大量に配備されていると予想されるので、そうなつては流石に勝ち目は薄い。

ましてや広大な大地を戦車だけで駆け回って制圧していくのは無理だし、特に大規模な戦車対戦車戦闘の経験が無い我が軍なのだから航空攻撃は豪州作戦の成否を分けると言っていいたいだろう。

更には爆弾だけでなく燃料の問題もある。

先程の輸送船が撃沈された時に燃料輸送を行っていたタンカーも多数撃沈されており、そのせいで作戦投入予定の燃料は当初予定していた備蓄量に達していない。

沖合に停泊している、豪州進出時に燃料補給を行うタンカーに積まれている燃料を使えば全力出撃は出来るだろうが、それ以降の航空機の活動や運用に制限が掛かりかねない。

そもそも結局爆弾が無いので意味は無いだろう。

それを考えれば、出撃は出来ないだろう。

「であるならば、敵飛行場の運用を阻害する程度の妨害を加える、と言うのは出来るか？」

「可能ではありませんが、連山の出撃機数は精々4機2個編隊、8機が精々でしょう。敵航空戦力も殆ど封じていますし、護衛の疾風も20機、どれだけ多くても30機程度に絞ってならば、数回は可能です」
主席参謀が聞くと、可能だと言う答えが返ってくる。

「このことですが、どうされますか？」

「……それならば、実行しよう」

「了解しました」

「すぐに出撃可能な連山と疾風、それと搭乗員を3個隊選抜してくれ。それと搭乗員にはしっかりと休息を取らせたい。翌日に実行可能か聞いてほしい」

「聞いてみます」

「頼む」

30分後、各飛行場から10時間後には機体の整備と補給が完了する旨が伝えられた。

最悪、既に敵機の活動が再開されており迎撃を突破しての爆撃が困難と判断された場合は爆弾は全て投棄し、帰投することを許可している。

こんな攻撃には態々命を掛けるほどの価値は無い。

「提督、可能とのことです」

「分かった。そうしたら……、現在時刻が1233だから、今よりきつかり16時間後に出撃。これで、敵地上空に0600か0700には到達出来るな？」

「了解しました。打電します」

「それと本土に大至急爆弾の補給を輸送船5隻分、それと航空燃料を5隻分を要請してくれ。今からであれば、積み込みも考えて8日後には爆弾が到着する筈だ。最悪、すぐに用意出来ないとなったら近場の航空隊が備蓄している爆弾を使い」

「それだと該当する航空隊の爆弾備蓄が無くなってしまいますが」

「構わん。これで豪州作戦の最初の段階で失敗しました、となるよりはマシだ」

「了解しました。すぐに指示を出して準備させます」

はあ、準備不足が如実に出ているな……。

状況的に致し方ない部分があるとはいえ、数多くの将兵の命を預かる者として許されるものでは無いだろう。

せめて、これ以降の補給状況は安定させておきたい。

結果的に豪州作戦全体に関わってくださることでもあるからな。

連山を装備する航空隊の内の幾つかは、豪州の飛行場が修理完了し、使用可能になった場合に豪州に進出し、内陸部への偵察や敵補給線等への爆撃任務が予定されている。

少しすると、出撃した連山や疾風の搭乗員救助を担っていた二式大艇から入電が入る。

「提督、搭乗員救助を行っていた二式大艇より入電です」

「どうした？」

「疾風搭乗員33名、連山搭乗員48名の救助完了、帰投中。他二式大艇は現在も搜索救助中。以上です」

「ご苦労、

引き続き頼むと送っておいてくれ」

「了解しました」

戦闘空域の周辺には二式大艇が撃墜されても脱出した搭乗員の救助をするために待機している。

潜水艦隊には敵艦隊を搜索し、可能であれば雷撃によって敵艦隊に多少でも良いので打撃を与える任務に就いている。

既にこちらも撃墜された搭乗員の救助を開始しているとの連絡が入っている。

『装甲艦隊より入電。『大鳳、信濃被弾多数、艦上構造物二多数ノ被害有り。発艦装置故障、着艦装置修理不可、対空砲及び機銃多数沈黙、被雷2ツツ、速力25ノット。両艦中破ト認ム』以上です』

「酷くやられたな。他の損害が報告されていないと言う事は、大鳳と信濃が徹底的に狙われたと言う事か」

「そのようです。被雷数は少ないので、爆弾の直撃は所要して沈められる可能性のある魚雷の回避に専念したのでしょう」

「あれだけの敵機の攻撃を受けてこれだけの被害で乗り切ったのですから損害軽微と言う他ありません」

「あの2隻だからこそこれだけの損害で済んだんだよ。私達じゃこうはいかないね。下手したら半分以上やられてたかも」

「提督、取り合えず2隻を退避させましょう。発着艦装置がどちらも故障しては飛行甲板が無事でも空母として全く機能しません」

「そうだな、大鳳と信濃にはバリクパパンまで退避するよう命令。応急修理をした後に本土へ回航して入渠させよう。大和と武蔵は1航艦に合流するように命令」

「了解しました」

バリクパパンにあるドックは全部で4つ。その内の2つは加賀などの大型艦の入渠も可能にするために全長300m、幅60mの大きさを誇る。

陸海軍の工兵隊や資機材を大掛かりに動員しての建設だった。

建設した目的は、単純に損傷艦艇を本土まで回航する必要を無くす為だ。

損傷艦艇を数千kmも離れた本土まで回航するのは、それだけで危険な任務だしその間に襲われでもしたら一溜りも無い。

確かに本土の方が設備は整っているが、それでも前線近くで修理して再び戦線復帰が可能になると言うのはかなり大きいことだ。

それだけで燃料節約や、戦線復帰に掛かる時間が大幅に短くなる。

なんせ大破して、10ノットしか発揮出来ない状態で本土まで回航しようとする1か月以上掛かる。

それだけ入渠時期はズれるし、修理や訓練も長引くことになる。

損傷した艦艇を必死になって維持する艦娘や、乗組員達の負担ははつきり言って想像を絶するレベルのもので、過去には入港と同時に気を失うほどに体力を使い果たしていた艦娘や乗組員達も多い。

瀬戸内海のドックは殆どが輸送船やタンカー建造の任務があるし、そこに修理も加わるのだから修理する側の負担も大きい。

内海になった場所での被害が無くなったと言うだけであり、スラウエシ島向けの輸送は未だに内海側に港が出来ていないことから大

きな被害を出すことも多い。

その負担軽減も考えれば、とても大きな意味を持つのがバリクパパンなのだ。

それに加えて今現在スラウエシ島に潜水艦用の、ドイツ軍で言うところのUボートブロンカーの建設が進められている。

とは言え本家のもものと比べると大仰なものではなく、2隻分のドックを有する小さなもので、精々が「潜水艦を隠すことのできる前線基地」と言う言葉が正しい。

防御力は普通に1tクラスの徹甲爆弾で簡単に破壊されてしまう程度でしかない。

その代わり、偽装は特に念入りに施される。

正直航空写真だけでは全く違いが分からない程だ。

この潜水艦基地は多少の整備と補給が目的であり、修理はそのものは本土でなければ出来ない。

理由は潜水艦の修理や建造に必要なとされる技術は他の艦艇の修理建造と全く違うからだ。

水上艦艇は海の上を航行するだけでいいが、潜水艦は海の中に潜って数日耐えるなんて当たり前だ。

その分必要とされる技術水準は高いし、使われる装甲も他のものとは大きく違う。

その製造や、溶接等に必要とされる技術は高く、単純に分厚い装甲を持つ戦艦よりも建造や修理難易度は高い。

それに加えて、潜水艦はその特性上多くの任務が口外されない場合が多い。

例えば撃墜された搭乗員の救助から始まり、敵地偵察任務はまず口外されない。

潜水艦の出港自体もその殆どが悟られたりしないように夜間であったり、任務によっては潜水艦の乗組員の中で向かっている場所を知っているのは艦長だけ、なんてこともある。

故に機密保持の観点からも設備の整った本土でなければ修理は出来ないのだ。

「装甲艦隊の艦載機は全機1航艦の各母艦に着艦。どの空母でも構わん。収容しきれない場合は搭乗員のみを収容し、機体を投棄せよ」

「了解しました」

暫くして、敵攻撃隊が全て帰って行ったと言う報告が上がって来た。

恐らく敵も再出撃可能な機体の選出や、補給、再武装には2時間は掛かるだろう。

その間に、こちらも態勢を整えないとならない。

『彩雲から入電。『我敵艦隊ス発見ス。方位213、距離500km。敵艦隊ハ4群二分カレル。眼下ノ艦隊ハ空母6、戦艦4、巡洋艦以下多数。更ニ南、及ビ西側、南西方向ニ艦影アリ。空母20、戦艦15ハ確實也』』

『続けて報告、『我敵機ノ迎撃ヲ受ク。コレ以上ノ偵察ハ困難、退避ス』以上』

どうやら送り狼としての彩雲が敵艦隊を見つけたらしい。

それにしても空母20隻とはまた、こちらの予想や偵察結果と変わらないとは言えなんとも……。

「上空警戒に各母艦から4機づつを残し、他の烈風と流星は補給、修理を済ませて再出撃に備えよ。敵の攻撃はこれだけでは終わらんぞ」

「了解しました。流星には武装を施しますか？」

「……いや、止めておこう。恐らく敵の第二次攻撃隊はこちらに向かっている筈だ。今武装をさせたら、武装中に攻撃を受けることになる」

「それでは、本日中は迎撃に徹すると？」

「ああ、それで行こう。最悪、敵空母をやれなくても艦載機さえ全て落としてしまえばこちらの勝ちだ。戦艦が居るとは言え、空中援護の無い中で砲雷撃戦を仕掛けてくるとは思えんしな」

「そうなれば、敵も撤退するでしょう」

その1時間後、敵の第二次攻撃隊を電探が捉えた。

総機数は未だに600機を数えている。

補給と修理を終えていた烈風200機がすぐさま飛び立った。

烈風は戦闘で200機を損失、損傷で60機を破棄している。

もう200機ほど烈風は健在であるが、まだ補給中だ。

「防ぎ切れないな……」

「もう50機いれば、大分違ったのでしようが……」

「無い物ねだりは出来んさ。上げられる機体は全て上空退避。補給と修理が済んでいれば戦闘に参加しても良いが、無理はするな」

遙か150km先の上空で、烈風が敵機に襲い掛かる様子は電探でしっかりと捉えていた。

200機もの編隊が3つ。

敵攻撃隊には護衛戦闘機が60〜70機ほどとの報告が上がっている。

烈風は二手に分かれてそれぞれが別の編隊を迎撃している。

前二つの敵攻撃隊は戦闘機の機数であれば十分対抗し、攻撃隊を迎撃することも出来るだろうが3つ目の敵編隊には一切手出し出来ない。

今から飛び立つ烈風を向かわせても、多勢に無勢、圧倒されてしまう。

元より全機を防げるとは思っていない。

2つの敵編隊を迎撃出来ただけでも上々だろう。

「対空戦闘用意・200機以上が襲ってくるぞ」

艦隊に下令すると艦上は慌ただしくなる。

機銃操縦要員や対空砲要員達は次々と自分達の担当する銃座や砲座に駆けて取り付いていく。

空撃ちをして撃発等問題が無いか、照準や旋回、仰俯角の操作をして異常が無いか確認する。

戦隊ごとに準備が完了した旨の報告が上がってくる。

準備は僅か1分半で終えられ、その練度の高さを物語っている。

「電探、敵機の動向を随時報告、共有せよ。戦艦は距離250で主砲撃ち方始め。対空砲は射程に入り次第撃ち方始め。機銃群は統制射撃

用意」

『電探室より報告。最後尾の敵編隊が迎撃をすり抜けて向かってくる。敵機出現方向、221。到達まであと20分!』

「全母艦状況知らせ」

「うちはもう上げられる機体は搭乗員と一緒に上げたよ。あとは弾薬と燃料をしまっただけ」

「間に合うか?」

「多分間に合うよ」

「多分では駄目だ。確実に間に合わねば危険過ぎる。格納が間に合わない判断した場合は弾薬燃料等、可燃物を投棄して構わん。命には変えられん」

「了解。それなら間に合わせる」

他の空母からも報告が入ってくるが、あまり色良いものでは無い。今攻撃を受けたら、そして被弾すれば、それこそ全滅もあり得る。

装甲艦隊の着艦機が集中した瑞鶴と加賀の艦上は他の空母よりも混雑していて、艦載機もまだ半分ほどしか発艦させられていない。

残存機が集中した理由は単純に艦の大きさが十分にあり、他の母艦と言っても着艦が容易だからだ。

一応母艦航空隊の訓練の中には母艦がやられた場合、他の空母に着艦する場合が想定される為に他母艦での発着艦訓練は行っている。

とは言ってもやはり自分の母艦で一番慣れているからやり辛いは確かだろう。

それでも事故無しで全機が着艦して見せたのは流石としか言いようが無い。

「これより各艦の判断で機体、弾薬、燃料の投棄を許可する。被弾した際の被害を最小限に抑えよ」

「はっ」

「電探手、敵編隊との距離、機数は?」

『距離90km!前2個編隊の数は減少しつつあり!後方1個編隊は勢力変わらず!』

「分かった、引き続き監視を行い距離50kmで報告せよ」

『了解しました！』

加賀と瑞鶴の作業がいち早く終わることを祈りつつ、報告を待つ。

『敵編隊艦隊より50km！尚も迎撃戦継続中！』

その報告がされた1分後に、瑞鶴と加賀から報告が入る。

『加賀より入電、『我作業終了見込ミ無シト認ム。機体、燃料、弾薬ノ投棄ヲ開始ス。注意サレタシ』』

「了解した」

『瑞鶴より入電、『作業終了ナレド機体収容限界ニ付キ機体ノ投棄ヲ行ウ。後続艦ハ投棄サレタ機体ニ注意サレタシ』以上』

「間に合いませんでしたか」

「いいや、間に合ったさ。きちんと間に合わないと判断して、安全のために危険物を艦上から投棄したのだからな」

敵機が来る方向を双眼鏡で覗くと、遠くの方に黒点が沢山あるのが分かる。

そしてその黒点が、上下左右に動き回り、時折光って黒い煙を引き摺りながら落ちていく。

それが敵の攻撃隊と、それを阻止するべく戦っている迎撃隊であろうことは誰にでも分かった。

「艦隊、対空戦闘用意。戦艦は距離300にて主砲射撃。次射撃は200。重巡は距離250。続けて200、150、100にて射撃。

軽巡、駆逐艦は射程に入り次第主砲射撃始め」

「戦艦、重巡は主砲対空射撃終了次第、3個目の敵編隊に対し次弾射撃準備。射撃開始距離は同じとする。後の射撃は各個に判断」

戦艦や巡洋艦、駆逐艦達の主砲が敵機が来るであろう方向に向けられ、仰角を取る。

それと同時に対空砲や機銃が次々と同じように空を睨む。

弾薬や砲弾は既に装填されており、あとは引き金を引くのを待つばかりであるのはどの艦も同じだ。

「提督、対空戦闘用意終わりました」

「了解した」

各艦から準備完了の報告が上げられてくる。

それに頷いて、敵機を待つ。

艦橋内をちら、と見るとこの作戦の前に着任したばかりの年若い石田参謀が、顔を緊張でがちがちに固めて立っていた。

その頭には本来被って居なければならぬ鉄帽は被られていない。両手に持ったままだ。

「石田参謀、鉄帽は被っておけ」

「あつ、はつ、失礼しました」

慌てて鉄帽を被って紐を締める。

彼はこの作戦が初陣だから緊張していても仕方が無いだろう。

海軍大学では抜群の成績であったと聞くし、卒業してからまだ3年ほどと言う速さで参謀に抜擢されるほどの優秀な人物だが、流石に初陣は緊張するらしい。

「緊張するなどは言わん。だが、それで何も出来なくなることの無いようにな」

「はっ」

「飛龍は操艦の名人だ、被弾一発もせんだろうさ」

「ちよつと提督、変なプレッシャーは止めてよねー」

「すまん。だが自信はあるんだろう」

「もつちろん。私が操艦名人じゃなきゃ今頃提督は海に放り出されて海の上を漂う経験をしてた筈でしょ」

「違くない」

飛龍は笑って言う。

実際その通りなのだ。

飛龍の見事な操艦の腕が無ければ今頃俺はここに立っていることすら無かったかもしれないのだから。

少しすると電探手から砲撃予定距離に敵編隊が侵入した事が告げられた。

その報告から数秒遅れて空母の周りを囲む戦艦の主砲が一斉に火を噴いた。

とんでもない大きさの砲声が艦隊中を包み、その砲炎や砲煙で視界が遮られてしまうほど。

20隻もの戦艦による一斉射は、音速を軽く超える1tを超える砲弾を撃ち出した。

数十秒の後に、敵編隊の先頭集団の少し中ほどで三式弾が一斉に炸裂した。

「……全部で30機ほどの撃墜です」

「よくやった」

30機の撃墜だとしても、20隻で割ってしまえばそれぞれ精々2機を撃墜した程度の損害だ。

何よりも今の敵編隊は迎撃隊によって数を大きく減らした手負いだ。

その後ろには無傷の編隊が丸々一つ残っている。

予定していた距離に予め照準を合わせていた巡洋艦や駆逐艦達も次々と射撃を始める。

辺り一帯は砲声と砲炎、砲煙で覆われている。

火薬が燃焼した時の独特な匂いや味がする。

「す、凄い……」

「だろう？ 彼ら皆が、我々を守ってくれているのだ。何よりも心強い」
すると十数機の敵機が突っ込んでくる。

雷撃機が5、降爆が7と言ったところか。

『敵機目標我が飛龍！ 距離70！』

戦艦や巡洋艦の機銃が敵機に向かって伸びていくが、運悪く敵機を撃墜することは無かった。

『敵機突っ込んでくる！ 雷撃機距離30！ 降爆距離40！ 雷爆同時攻撃！』

「各艦に打電、我回避運動開始、衝突に注意されたし！」

飛龍が舵を切る。

面舵に大きく切ると、遅れて艦が曲がる。

飛龍は他の艦に比べると小さい方であり舵の利きも早いですが、それでも改装を重ねて排水量25000tを超える巨艦だ。

それなりに舵の利きは遅い。

「見張り員、敵機の動向を逐一報告して！ 数は少ない、無傷で乗り切る

よ！」

飛龍が大きく通る声で叫ぶ。

狙われた飛龍の操艦の腕は、やはり見事であった。

見張り員と良く連携し、右に左にと回避を続け、そして1発目、続けて2、3、4発目の降爆の爆弾を避けていく。

飛行甲板や作業員待避所、機銃座や対空砲座は爆弾の爆圧で噴き上げられた海水を思いつ切り被っている。

乗組員の靴底には凹凸状のゴムが貼られているが、滑らないと言う保証は無い。

海水に攫われた乗組員が居ないことを祈るばかりだ。

『敵降爆、 投弾！ 距離5！』

『敵雷撃機、 投雷！ 距離10！』

「良い腕をしている……」

投弾のタイミングが上手い。

恐らく、よく訓練された熟練搭乗員だろう。

回避しきれるかどうか、際どいところだな……。

投下された爆弾を次々避ける。

魚雷も見事に4本回避してみせたが、最後の1本はどう見ても避けられるものでは無かった。

「総員衝撃に備えッ！」

全員が掴まれるものに掴まった次の瞬間、艦全体に大きな衝撃が響いた。

それから数拍置いて、巨大な水柱が飛龍の左舷中央に立ち上った。

「損害確認、 ダメコン急げ！」

数十秒後、伝令が走ってくる。

「報告！ 艦中央部に被雷1！ 傾斜2度！ 電力問題無し、重油、航空燃料の流出、引火確認されず！ 浸水軽微！」

「まだまだ戦えるね、次に備えるよ！」

飛龍のその言葉の通り、まだまだ戦える。

次に襲い掛かって来たのは、迎撃を掻い潜った20機程の雷爆撃機であった。

狙われたのは飛龍の後ろを航行していた加賀であり、飛行甲板に2発の被弾、2本の被雷を受けることになった。

最初の被弾の際に、燃料に引火して煙の勢いが強くなり視界が悪くなったことで立て続けに被弾、被雷してしまったようだ。

燃料自体は投棄したので大事には至っていないようだが、飛行甲板の修理にはそれなりに時間が掛かるとのことで、戦闘への復帰は絶望的の様だ。

速力は26ノットの発揮が可能である為、早い内に退避させてこれ以上被害が大きくならない様に努めた方が良い。

再び戦闘に参加しようとするのなら、大鳳と信濃同様にバリクパンでの入渠を終えねばならないだろう。

損害状況から見て、空母3隻はそれぞれ3週間程度の入渠になるだろう。

それまで空母3隻が戦列から離れることになるが、中々に手痛い。300機ほどの航空兵力を運用出来なくなってしまうと言う事だからだ。

まあ、損害は織り込み済みで作戦計画は立ててあるから問題は無いが。

「加賀には駆逐艦3隻を伴わせてバリクパンへ退避。同地で入渠するように」

「すぐさま加賀に退避命令を出す。」

『敵機第3群、急接近！距離40！』

「数は？」

『変わりありません』

烈風の多くは、最初の2個編隊との戦いで弾薬の多くを消費してしまっている、との報告が上がっている。

燃料はまだまだ余裕があるが、弾薬が無ければ戦えないのは当然だ。

烈風は20mm機銃を4門、弾薬は各門250発ずつの計1000発搭載しているが、搭載している機銃の発射速度は毎分700発。

250発の弾丸を撃ち切るのに、20秒も掛からない。

内側と外側の機銃を別々に撃つことが出来るとは言え、撃ちっ放しにしたらそれでも40秒しか撃つことが出来ない。

撃ち切ってしまうえば、母艦に戻って補給を受けるしかない。

「迎撃隊には無茶をせず、退避せよと打電」

「了解」

『敵機編隊距離300!』

その報告より少し遅れて、戦艦が一斉に主砲を撃った。

一際大きい砲声であるのは、大和と武蔵の2隻であるのは間違いない。

敵機の只中で三式弾が次々と炸裂していく。

それは戦艦だけでなく重巡から軽巡、駆逐艦のものもある。

黒煙を引き摺りながら落ちていく機体もあれば、ふらふらとよろめいたと思ったら真つ逆さまに落ちていく機体、粉々に吹き飛ぶ機体もある。

「……40機ほどを撃墜しました。他に引き返していく敵機が20機ほどです」

「襲い掛かってくるのは200機程か」

それなりに多い。

恐らく2〜3隻程度に集中して狙ってくるだろう。

となれば、2隻は間違いなく戦線離脱を余儀なくされるのは間違いない。

敵機はどうやら飛龍と瑞鶴、蒼龍を狙う腹積もりらしい。

一気に突っ込んでくる。

対空砲や機銃をどれだけ撃ち上げても、怯む様子は無い。

それぞれに20機つつの雷撃機と降爆機が突っ込んでくる。

5機づつに分かれて、波状攻撃を仕掛けてくるその動きは、今まで戦った敵の中でも上位に位置するほどに練度が高い。

「連中、この戦いの為にあちこちから熟練を引き抜いているな」

「今までの南方方面での作戦で敵の母艦航空隊が弱体化していたのは、それが原因でしょうか？」

「分かん。いずれにせよ、何かしらの関係はありそうだが、敵はこの

戦いを決戦と定めている腹積もりらしい」

そうになると、厄介だ。

敵はいつも以上に死に物狂いで攻撃を仕掛けてくることだろう。

そうなたら、厄介極まりない。

突っ込んでくる敵機に対空砲や機銃が火を噴き続けるが、数は思うように減らない。

時折落ちていく敵機はあるものの、攻撃を断念させるほどでは無い。

飛龍に限らず、3隻は次々と回避をする。

右へ左へ艦首を振って、爆圧で噴き上げられた海水を被る。

しかし全てを回避することは出来なかった。

最初の1発が飛龍の飛行甲板で炸裂した。

艦首付近への被弾らしく、黒煙の間から覗く損害状況を見ただけで航空機の発着艦は出来なくなったことは明白であった。

立て続けに3発被弾し、ダメコン班やそれに他の大勢の乗組員が消火作業を始めている。

『蒼龍被弾！』

飛龍艦上の大騒ぎの中、蒼龍までもが被弾したと見張り員が叫ぶ。

双眼鏡を覗くと、飛行甲板から黒煙を吹き上げている蒼龍の姿があった。

しかし被害はそれだけでは終わらない。

黒煙で視界が遮られる中でも回避を続ける飛龍と蒼龍に、被弾よりも大きな衝撃が走る。

『左舷艦首、及び艦尾に被雷！』

『ダメコン！損害抑えろ！』

艦橋や艦内で怒号が飛び交う。

「提督、急いで移乗準備して。これぐらいじゃ沈みはしないけど、もう戦えないから」

「分かった。一番近い艦は誰だ？」

「右舷の長門が一番近いかと！」

「攻撃が終わり次第すぐに移乗する！司令部移乗準備！」

「「はっ！」「」」

皆が移乗の準備を大急ぎで進めていく。

『報告！艦内火災消火完了！飛行甲板、格納庫内の火災消火見込みあり！浸水により傾斜11度！発着艦不可！以上！』

『報告！機関室に浸水、3番、5番ボイラー緊急停止！速力20ノット！』

『報告！弾火薬庫、航空燃料緊急投棄！』

次々と上がってくる報告はどれもダメコンのものだ。

悲観的になる情報もあるが、誘爆や火災が激しくなる前に弾火薬や航空燃料を投棄出来たのは不幸中の幸いだ。

ボイラーの緊急停止も当然だ。

大量の海水が流入すれば、水蒸気爆発を起こして一瞬で沈んでしまう可能性もある。

どうやら丁度3番、5番ボイラーの間にある隔壁のところに魚雷が命中し、両方に浸水が発生したらしい。

とは言えこれでもまだまだ沈みはしない。

飛行甲板はズタズタにされたが、魚雷の命中は3本だけだ。

さっさと飛龍と蒼龍、被弾していたら瑞鶴も退避させてしまおう。

敵機が攻撃を終えて飛び去って行った。

総被害は、

飛龍 5発被弾、2発被雷。

蒼龍 4発被弾、3発被雷。

瑞鶴 4発被弾、4発被雷。

以上のようなになった。

いずれにせよ戦闘能力は喪失したと言っている。

それぞれに駆逐艦を3隻付けて退避、俺を始めとした司令部は丸ごと長門に移乗した。

第73話

長門への移乗後、電探に捉えていた敵機編隊以降、ピタリと敵の攻撃が止んだ。

恐らく、攻撃兵力を全て出し尽くしたか、これだけの大規模攻撃を続けて行ったことよって爆弾はまだしも、魚雷ぐらいは使い切ったことも考えられる。

機数的に考えても攻撃可能兵力の殆どを動員した総攻撃であったことは間違いないし、その殆どを撃墜もしくは損傷を与えて追い払ったのだから再出撃可能機が極小になって居たとしてもおかしくは無い。

「提督、迎撃隊の被害集計が終わりました」

「報告せよ」

「烈風167機が撃墜、61機が修理不能と判定され合計228機が失われました」

「搭乗員は？」

「今現在も潜水艦以外に駆逐艦を派遣しての救助作業中ですが、現在までに133名が救助されています。誘導中の流星によるとまだいる、とのことで救助作業は終わっておりませんので、まだまだ増えるかと」

「全員、一人残らず救助せよ」

「提督、敵艦隊への攻撃はどうされますか？」

「やろう。敵が疲弊した今が好機だ。艦載機を使い果たしている今しかない。今なら被害を抑えられるだろうし、敵艦隊の近くで墜落しても艦載機に大打撃を被った今なら撤退する動きを見せる筈だから救助もし易い」

今やらねば、敵艦隊を全くの無傷で返してしまうことになる。

そうなれば艦載機さえ補充してしまえば、いやそうしなくとも空母数隻分の艦載機はあるのだから豪州作戦の途中で影響が出る。

輸送船団がやられたら、陸軍将兵は干上がってしまうことになるし、何より敵に立て直しの機会を与えてしまう。

いまなら敵の迎撃も大したことは無く切り抜けられるだろうし、そうなれば技量抜群の搭乗員達だ、確実に空母を撃沈してくれる。

こちらも少くない数の艦載機を失っているし、長時間の迎撃戦で特に烈風搭乗員達は疲弊しているだろうが、正念場だ。

「各母艦に流星の爆装と雷装を下令。攻撃隊は2波に分ける。第一波は烈風による制空隊、第二波攻撃隊を攻撃隊主力とする。今まで通り、制空権を奪ってから降爆で敵の対空砲を黙らせて、雷撃で止めを刺す」

今から出撃準備を整えて、出撃し敵艦隊に攻撃を仕掛ける頃には恐らく辺り一帯は夜闇に包まれているだろうが寧ろ好都合だ。

それに全機が夜間戦闘が可能な機体だ、闇夜に紛れて敵空母の甲板やどてっ腹に魚雷や爆弾を叩き込んでくれるだろう。

恐らく敵機の夜間戦闘機は、我々の基地攻撃か防空戦闘によって数を減らしている筈だ。

そもそも、敵機そのものが大幅に数を減らしている。

我々の迎撃によって撃墜された機体や不時着水をした機体、母艦に戻れたとしても再出撃不可や廃棄された機体など多数ある筈。

こちらの迎撃は、確かに1航戦の全空母が戦闘不能、退避させる状況になったが、それでも大小合わせて11隻の空母がまだまだ健在だ。

艦載機は烈風730機中228機損失、凡そ3割を失っているが、搭乗員は無事だ。

交代での出撃も念頭に入れられる。

戦闘力は十分に保持していると言えるだろう。

500機も烈風があれば、艦隊防空の為に100機ほど残すとしても400機は制空と攻撃隊の護衛に割くことが出来る。

そうすれば攻撃を集中させるとしても、空母2〜3隻はやってくれるだろう。

「提督、出撃準備完了時刻は3時間後の1830を予定しております」
「では攻撃隊出撃時刻を1850としよう。その前に偵察機を放って敵艦隊の詳細な位置を掴もう」

「了解しました。出撃する偵察機は何機に致しますか？」

「各空母から120から270方向に5度つつ30機を2段索敵で出そう。敵艦隊を発見したら追跡、位置を随時攻撃隊に知らせる様に」
「それならば、敵艦隊を追跡する為に彩雲を更に8機ほど出してはいかがでしょうか？」

「ふむ」

「2機つつを敵艦隊に可能な限り張り付かせるのです。敵艦隊はどうやら4つに分かれていますようですし、それぞれの敵艦隊の動向を探る為にもやる価値は十分にあるかと存じます」

「そうしよう。各母艦は急ぎ攻撃隊の編制を実行せよ」

「了解しました」

参謀長達とのやり取りが終わった頃、下士官達が艦橋に合戦飯を運んでくる。

「ありがとう」

「いえ」

メニューは握り飯4つに沢庵3切れ、卵焼きが2切れ。それと出港して日が経っていないこともあって和布や大根と言った具材が入っている。

味は美味しい。

卵焼きは味付けが艦毎に違うので、長門の卵焼きは薄甘い味付けだ。

手早く済ませ、再び指揮を執る。

「提督、早めに空母に乗り移った方が良い。まだまだ航空戦は続く。戦艦の上に居るより空母の上で指揮を執った方が良いだろう」

「ああ、準備が出来次第移乗する」

長門に言われた通り、移乗する準備は終わっているが、今空母の艦

上は収容機の対応と攻撃隊の準備に追われている。

そこに更に移乗作業が加われれば余計な手間になる。

それならば攻撃隊発艦が終了してからでも良い。

「提督、どの艦に移乗されますか？」

「3 航戦旗艦の隼鷹にしよう。艦橋も大きさがあるし旗艦ともあつて通信設備が整っているからな」

「了解しました、その旨を伝えておきます」

「頼む」

辺りは夕日によって茜色に染まっており、機上電探が無ければこんな時間に攻撃隊を発艦するなどまず有り得ない。

「隼鷹に繋いでくれるか」

「はっ」

無線電話で隼鷹に呼び出しを掛ける。

と言つても、話したい相手は隼鷹ではないのだが。

『どうしたのさ提督』

「すまないが、制空隊と攻撃隊のそれぞれの総隊長を呼んで貰えるか」

『あいよー』

少しすると、制空隊の総隊長機である穂村中佐が変わった。

穂村中佐は元々水上機勤務であったのだが、戦闘機乗り転科したと言ふ珍しい経歴を持つ。

転科した当時は周りからやんややんやと、言われたようであるがところがどっこい、訓練をしていく内にとんでもない技量の持ち主だと知ることになる。

当時、戦闘機乗りを養成するために練習母艦航空隊に勤務していた彼は、4 機編隊同士の空戦訓練（空戦訓練は4 度目だと言ふ）でなんと3 対1 と言ふ圧倒的不利な状況下にも関わらず見事全機撃墜と言ふ逆転勝利を飾ったのである。

高度有利を取られ、どうにかこうにか僚機が1 機を撃墜したは良いものの、中佐以外は全機撃墜判定を食らってしまう。

そんな中にも関わらず、残った3 機から撃墜を奪ってみせたのだ。

その時は誰もが偶然だと思つたが、続く5 度目以降の空戦訓練でも

その圧倒的な技量で最初からの機数差があろうと勝ってしまうほどの力を見せ付けた。

原田少将曰く、

「あれほど技量抜群の搭乗員は、私と同じぐらいの生き残りの中でもまず居ない」

とのことで、母艦航空隊配属後に当時戦闘機隊の総隊長を務めていた原田少将と模擬戦をやって10回中4回勝つと言うとんでもない力量の持ち主だ。

言っておくが、原田少将は現役搭乗員を引退し、陸海軍航空隊の新米教育に携わる道を歩んでいるがそれでも半ば伝説となって居る存在だ。

総撃墜機数は確実なものだけでも、10年以上もの激戦を潜り抜けたことで単機での撃墜数は600機を超える。

不確実なもの、僚機との共同撃墜などを含めればその数は優に1000機を超える。

戦闘機乗りは口を揃えて、空戦の神様と言うほどだ。

そんな彼に10回の内4回も勝つと言うのは未だ誰も成し遂げたことの無い偉業であるからだ。

穂村中佐は勝ち逃げされた、と言っていたが原田少将に言わせれば腕を磨けば確実に俺以上になる、とも。

勿論個人技だけでなく、部隊指揮も一級品だからな

この二人が目立ち過ぎるだけで、母艦航空隊は他の基地航空隊などから見れば化け物揃いだと言う事も言っておこう。

『穂村中佐、変わりました。どんな御用でしょうか?』

「忙しい時に申し訳ないな」

『いえ、今は丁度食後の休憩中でしたので』

何時も思うが、彼らは良くあれだけの空中戦をやる前に食べて吐かないな。

俺だったら一瞬でコックピットが吐瀉物塗れだぞ。

「さてと、制空隊の皆には迎撃戦から戦いつ放しにさせてしまう。す

まない」

『いいえ、それが職務です。提督のお陰で撃墜された機の搭乗員も生きて帰ってくれました。これ以上高望みは出来ません』

「そうか。だが、ここからが正念場と心得よ。敵の夜間戦闘機は居ないだろうが、心して掛かれ。攻撃隊本隊が敵艦隊を撃滅せしめるかどうかは、中佐以下制空隊の働きに掛かっているのだからな。とは言え機銃掃射はするな。そんな事で墜とされてはならないぞ」

『はっ、粉骨碎身の心構えで戦います』

「ああ、それとだ。……皆、命を掛けて戦え。そして何よりも、命を掛けて戻って来なさい。いいね？機体など捨てていい。お前達の命の方がよっぽど大事だ」

『はっ、何よりも心に刻んで戦います』

「では、武運長久を祈る」

『はっ。失礼します。坂田中佐に変わります』

穂村中佐から、攻撃隊総隊長機の坂田中佐に変わる。

坂田中佐は根っからの航空雷撃屋だ。

その命中率たるや、投下した魚雷は全て命中するだとか、敵が魚雷に当たりに来ているだとか言われるほどの雷撃の名手だ。

彼もまた、母艦航空隊の中でも古株に位置しており古くは南方方面奪還作戦の際から勤務し、敵艦隊と戦い続けている。

一番の古株は沖縄奪還作戦時から戦い続けている半藤大尉や、俺が着任する前からの艦爆乗りである城嶋少佐であるが、彼らは坂田中佐と比べると大部隊の部隊指揮と言う点で劣る。

各母艦航空隊の隊長ぐらいならば問題無く勤められるが、攻撃隊の総隊長機ともなるとやはり坂田中佐に見劣りしてしまうのだ。

指揮官機に求められるのは個人の技量だけでなく、全体の把握とその指揮だ。

その点、彼はなんせどこか他に目玉が飛んでいるんじゃないかと思うぐらい現状の把握が上手い。

攻撃隊の総隊長機を任せるならば、彼を置いて他に居ない。

『坂田中佐、変わりました』

「ご苦労。初めての夜間対艦攻撃だが、自信はあるか？」

『勿論です。その為に模擬魚雷や模擬爆弾を味方に何十発も撃ち込んできたのですから』

「それもそうか。恐らく、この戦いの趨勢を決める総攻撃になることは間違いない。敵空母をやっつけてしまえば、豪州作戦は安泰だ。頼むぞ」

『はっ、ご期待に沿えるよう、命を掛けて攻撃隊一同全力で励みます』
「ああ。だが生きて帰ってくる事、これが何よりも重要だ。これにも命を掛けてくれよ」

『勿論であります。こんなところで死ぬわけには参りません』

「それでいい。それでは、攻撃隊の武運を祈る」

『有難うございます、失礼します』

無線電話を切り、息を吐く。

戦争とは、犠牲が付き物だ。

命懸けで戦うものだし、戦いで自分や他の誰かが死ぬのも当たり前だ。

それでも彼らには、戦う事と同じぐらいに命を掛けて無事に帰って来てほしいものだ。

1915までに攻撃隊が全て発艦を終え、その後隼鷹へ移乗することとなった。

隼鷹の出迎えは相変わらず、ゆるつとしていているが気を張り続ける戦場では良い塩梅の緩衝材になる。

艦長達は苦笑していたが。

「そう言えば提督がアタシに乗んのは久しぶりだね」

「ああ、だが乗り心地はとても良い。よろしく頼む」

「任せな。つと、早速だけど、先に敵艦隊に飛んだ偵察機から入電だよ」

「聞かせてくれ」

「我偵5番機、敵艦隊上空到達、追跡開始。敵艦隊距離方位224、2

50 km、敵空母4群二分カレテ航行中。速力29ノット、風上二向カウ』つてさ」

「随分と距離が近いな。流星が巡航速度で飛んでも1時間も掛からんぞ、これは」

流星の最高速度は魚雷などの武装無しで621 km/hに達するが、魚雷などを抱えた状態だと530 km/hになる。

巡航速度は430 km/h程度だが、魚雷を抱いた状態での航続距離は2100 km。

500 kg爆弾搭載であれば2600 kmになる。

200 kmほど余裕を見ても、片道900 kmの攻撃が出来る。

因みに深海棲艦の中で最も航続距離の短い艦載機は現状だとSBドローントレスになる。

武装にもよるが1000 km程度しかない場合もある。

敵艦隊との距離は250 km。

流星が巡航速度430 kmで飛んでも、多方向からの同時攻撃を計画したとして、攻撃位置へ就く事も考えれば、それでも燃料満載で1000 km分は燃料に余裕がある。

恐らく制空隊も攻撃隊も巡航速度より圧倒的に速い速度で突っ込んでいくだろう。

そうなれば、間違いなく40分か30分ぐらいで敵艦隊に到達して、攻撃位置に付いたり各隊の攻撃目標の選定をやったりしても1時間ぐらいでト連送が発されるに違いない。

「まあ、こつちもあつちも特に回避したりしないで接近してたからね、近くなって当然さ」

「空中での編隊集合は間に合ったのか？」

「勿論。距離が近いから増槽無しで飛んでそのまま編隊形成の為に空中で待機してても余裕だった」

「それはそうか。にしても風上に艦種を向けているとは、こちらの攻撃隊を察知しての迎撃機発艦か、もしくは攻撃隊の着艦収容作業中か？」

「この電文の時には確認されてないけど、多分そう見て間違いないね。」

時間的に攻撃隊の迎撃機説が濃厚だね。ただ、問題はここじゃない」「どうした？」

「この後発された電文によれば、どうやら敵の戦艦が丸々消えたらしい」

「……退避したか、或いは」

「夜間の切り込みを狙ってるかのどちらかだね」

「切り込みにしろ、撤退にしろ空母を全て捨て駒の餌にするとは、我々じゃあ考えられんな」

「羨ましい戦力量なこつて」

空母を餌にして一時退避、そこから戦艦と重巡、水雷戦隊による夜間の砲雷撃戦が最も有り得そうな展開だ。

深海棲艦の事だ、我々の空母を6隻撃破した程度では気が済まんだろう。

間違いなく仕掛けてくるだろうな。

「まあ、なんにせよ敵の空母に再度の攻撃隊発艦の兆候は無さそうとみて間違いはないね。あとは敵戦艦の事だけ」

「俺達の攻撃隊は1度限りの全力出撃に加えて夜間攻撃だ。余程の事が無い限り敵空母を撃沈せずとも無力化は出来る」

「どうやら、航空隊の連中の話によれば敵さん今までに比べて随分と練度が高かったらしいね」

「ああ、どうもあちこちから掻き集めた熟練が多いらしい。報告によれば敵機の撃墜数よりも遥かに撃破数が多い。と言う事は撃墜では無く撃墜に集中出来る状況では無く、撃破を優先せねばならなかったと言う事だ」

「攻撃隊の練度も遠目に双眼鏡やら望遠鏡で覗いたけど、中々のもんだった。ありゃあ、失ったら戦力回復が大変だ」

「どうせそうなれば、ニューブリテン島などから基地航空隊で攻撃を仕掛けて時間稼ぎをしてくる。その間に立て直すだろうさ」

「で、敵空母は早急の問題じゃ無いとして、敵戦艦はどうする？」

「……取り合えず、索敵機を更に放って敵艦隊を捜索しよう。位置が分からなければ対策のしようが無い」

「りよーかい。そんじや各母艦に伝えるよ」

「頼む」

隼鷹にそのことを頼んで、対策を考える。

「提督、念の為艦隊を反転させて現海域から距離を取っては？このままだと位置が完全に敵にバレているので危険ではないでしょうか？」

「そうしよう。それと全艦に対水上電探を稼働させろ。気付かぬうちにいきなり殴り込まれては敵わん」

「了解しました」

「それならばいつその事、戦艦と重巡、水雷戦隊を分離させて敵戦艦に備えては？」

「……どう思うか？」

「賛成します。空母を伴った砲雷撃戦など危なくてやりたくありません」

「よし、そうしよう。ただ、敵戦艦の位置が分かってからでも遅くは無

「……敵戦艦の位置が割れてからでも遅くは無いです。偽装航路を取って、仮に敵戦艦が300、いや150km離れていたとしても、艦隊分離と隊列の組み直し、空母が逃げる時間ぐらひは余裕であります」

「よし、ではそうしよう。対空、対水上、対潜警戒は厳だ。全戦隊と1水戦、2水戦は艦隊分離とその後の砲雷撃戦に備えよ」

そう下令した30分後、制空隊が少数の夜間戦闘機と会敵、これを余裕をもって撃墜し、その20分後に攻撃隊が敵艦隊へ突入した。

1時間半に渡る攻撃で、敵空母4群全てに空襲を仕掛け、そして見事10隻を撃沈、他の空母にも大小様々な損傷を与えたことが確認された。

これを受けて敵空母は艦隊を率いて撤退を開始。

搭乗員救助を二式大艇に任せ、手隙の潜水艦隊に可能ならば攻撃を命じた。

敵戦艦を求めて発艦した偵察機が、発艦から2時間後にこれを見。

戦力は戦艦22隻に巡洋艦が同数、随伴艦もたつぷり40隻と言う大艦隊だ。

距離は130km。

敵艦隊の速度は25ノット、こちらも25ノットで進めば互いの速度もあつて1時間で110km/hは距離を詰められる。

砲戦開始距離を250に設定しても、確実に会敵までに1時間は掛かる。

「提督、どうする？移乗するかい？」

「ああ、距離もある、移乗して砲戦の指揮を執る」

「了解。アタシらはどうする？」

「一緒になって突っ込む訳には行かない。艦隊分離後すぐに制空隊、攻撃隊を収容して再武装を施してくれ」

「敵戦艦をやるっての？」

「ああ、敵戦艦の方が射撃レーダーなんかは性能が良い。まともに撃ち合えば負ける可能性もある。そこで敵に空襲を仕掛けてほしい」

砲戦をやっている中で航空攻撃を受けると言うのは、物凄く厄介だ。

回避せねば航空攻撃が確実に命中してしまうし、回避すれば主砲の射撃諸元は全てお釈迦になるから計算し直しだ。

命中させられずとも敵の砲撃の妨害は確実に出来る。

上手いこと魚雷を命中させて速度低下と浸水による傾斜か射撃レーダーの損傷で砲撃をし辛くしてくれば十分。

「なるほどね……。でも、攻撃隊を編成するとなったら収容作業と再武装、暖機運転全部合わせて2時間か3時間は掛かるよ？」

「構わん。距離もあるし、戦闘が始まってでもそれぐらいの時間は稼いで見せる」

「小隊事に突っ込ませるのは？」

「駄目だ。対空砲火でやられる。最低でも50機以上の攻撃隊を編成

してから発艦させてくれ」

「あいよ。それぐらいなら、まあ急げば1時間で準備出来るね」

「撃沈を狙わなくていい、薄く広く損害を与えて、砲撃の妨害や敵水雷戦隊の突入阻止をしてくれればいい。特に敵の水雷戦隊を念入りに頼みたい。報告通りの数の敵水雷戦隊に切り込みを掛けられたくない」

「それぐらいなら、敵は艦隊上空に戦闘機を張り付けていないし余裕。それなら烈風にも噴進弾をぶら下げさせるかい？」

烈風には爆弾か噴進弾を搭載することが出来るが、どうするか。

対地用の噴進弾は有効射程距離が3000〜6000mと短いんだつたな。

対地支援なら、十分だが対艦攻撃となると使い勝手が悪い。

対空用もあるが、こちらは射程が800mと長い。

主に重爆編隊に使用され、その効果はB-29迎撃戦での活躍を見てもらえれば十分に分かるだろう。

とは言え、対艦用の噴進弾なんて無いので対地用のものを使うしかない。

それでも潜水艦や駆逐艦や軽巡、輸送船と言った装甲の薄い、もしくは存在しない艦艇なら効果は抜群である。

しかし、流石にこれ以上戦闘機隊には無茶をさせられない。

彼らにはこれからも輸送船団の護衛なんかもやって貰わねばならないのだからな。

「……いや、いい。噴進弾は射程に難がある。余程近付かなければ命中どころか妨害も出来ない。無理はさせられんさ」

「了解、そんじゃ内火艇を出すから行つといで」

「ああ、艦隊指揮は隼鷹に任せる」

「了解。ただ提督、ちゃんと帰つて来なよっ」

「勿論だ。内地の馬鹿政治家屋共にお前達の指揮権を与えて殺されて堪るか」

隼鷹から降り、そして大和に乗り込む。

近くにいた長門か金剛でも全く良かったのだが、

「提督が砲雷撃戦の陣頭指揮を執られると言うのなら、安全性も考えて私達では無く一番分厚い装甲に守られている大和に乗ってほしい」

と言われてしまった。

まあ、雰囲気からしてもだが、そもそも説得する理由は無いので素直に頷いておいた。

「提督にー、敬礼っ！」

大和へ内火艇で乗り込むと、大和以下20名ほどが出迎えてくれる。

「態々出迎えありがとうございます」

「いえ、提督が座乗されて、しかも砲雷撃戦の陣頭指揮を執られると言うのですから当然です」

「そんな大袈裟なものでもないだろうに」

「いいえ、全く足りないぐらいです」

「そうなのか」

「はい」

ううむ、やっぱり大和は戦艦なだけあって砲雷撃戦となるとテンションが上がるらしい。

若干、普段と比べて気分が上がっているのか声が弾んでいる、と言うか上擦っている。

心なしか、顔も輝いていると言うかこう、なんだろう、やる気に満ちているな。

やはり敵戦艦と砲撃戦による殴り合いは彼女ら戦艦娘にとって何物よりも勝るものらしい。

出迎えば、他にどうやら給料長以下、烹炊所の皆が来てくれているらしい。

砲術科などは今、敵艦隊との砲戦に向けて大忙しだろう。

とは言え烹炊所も乗組員達に合戦飯を作らねばならないから忙しいはずだ。

「給料長が出迎えとは、忙しいところ無理をさせたな」

「はっ。とは言え既に仕事は済ませました。恐らく大和艦上で食事を摂られていないのは提督だけかと」

「そうか。それなら良いんだ。とは言え飯は大事だ、皆にはしっかりと食わせてやれ」

「勿論であります」

烹炊所は右舷後部にある。

恐らく出迎えてくれる寸前まで握り飯を握って、配食していたのだろう。

しかも正装に着替えて、小銃まで持って出迎えてくれているのだ。さぞ出迎えの支度を整えるのは大急ぎにして大変だったろう。

大和は3400人も乗組員を抱える。

長門が1600人ほどだと言う事を考えても、倍近い人数を食わせねばならないのだから大変だ。

烹炊所はそれ相応に大きく、そして勤務する者も多い。

3400人の腹を満たすのは並大抵の事では無く、毎日朝から晩まで働き詰めであり、最も過酷と言われる事もあるほどだ。

とは言えそのお陰で皆、戦えるのだから頭が上がらない。

「さて、では艦橋に上がろうか。出迎え有難う」

「はっ」

大和と共に艦橋に上がる。

参謀長達には後の事を任せて隼鷹の指揮下に入って貰った。

隼鷹の事だ、敵艦隊への攻撃も上手くやってくれるに違いない。

「提督、艦橋に上がられます！」

「敬礼ッ」

「ご苦労。早速だが、敵状の報告を頼む」

「はい」

大和が前に出て、説明を始める。

「現在敵艦隊上空には、空母からの偵察機が2機在空しております。報告によれば、距離120km方位は224。陣容は戦艦22隻を主力とし以下重巡洋艦22隻、軽巡以下は詳細を掴めておりませんので、凡その数になってしまいますが、50隻は下らない数が続いています」

「こっちは戦艦20隻に重巡が18隻、それと2個水雷戦隊23隻の61隻に対して敵は確実に100隻以上か……。最悪、倍の敵と正面から殴り合わねばならないな」

「圧倒的に数的不利です」

「ほとほと呆れる物量だな、連中は」

航空攻撃に専念しても良かったが、敵戦艦から逃げながら航空隊を発艦させて着艦させると言う作業を繰り返すのは危険だ。

最悪混乱状態になって事故でも起きたら、取り返しのつかない事態に発展しかねない。

最もな安全策を取るならば、戦艦で敵艦隊を防ぎつつ航空隊による攻撃、になる。

完全に逃げてても良かったのだが、豪州奪還作戦と言う目的と作戦がある以上退くのは得策では無い。

仮にここで撤退したとして、敵艦隊に輸送船団を伴った状況で再び攻撃を仕掛けられる方が最悪だ。

ならばここで決着を付ける以外に他は無い。

「戦術としても、T字有利は望めないでしょう。取ったところで、敵航空隊と同じように練度が高ければ数の利を生かして覆されてしまうでしょう。突破、もしくは水雷戦隊による突入を許してしまう可能性も高いです」

「となれば、同航戦か反航戦になるわけだな」

「はい。とは言えそれも中々危険ですね。なんせ数で負けているので敵水雷戦隊が突入して来たら、我が方の水雷戦隊は防ぎ切れるかどうか分かりません」

「一応の作戦、と言うよりも布石は打ってある」

「布石、ですか」

「ああ。隼鷹以下空母に攻撃隊の発艦を命じておいた。これで敵艦隊に打撃を与えつつ砲撃戦を行う」

「攻撃隊ですか」

「と言つても最初の発艦までに1時間ほどは必要らしいがな」

「攻撃隊の目標は？」

「敵水雷戦隊を主目標にするように言つてある。敵戦艦は2隻向こうが多いだけだが、水雷戦隊に切り込まれて魚雷を射出されたら堪らんからな」

「なるほど、と言う事は我々は取り合えず時間を稼げば良い、と言う事でしょうか」

「そうだ。1時間稼げば、攻撃隊が水雷戦隊を叩いてくれる。そうなれば思う存分主砲を振り回せるし、水雷戦隊も存分に切り込んで暴れ回れる」

「分かりました、その作戦で行きましょう。皆、良いわね？」

「」「」「はっ！」「」「」

「では諸君、持ち場に」

皆がそれぞれの持ち場に戻っていく。

「電探、反応有り次第別命無しで即座に報告」

『了解』

暫く進むと、電探に反応があると報告が上がる。

『対水上電探に感有り！凄いな数です！』

「敵で間違いないだろう。詳細を報告せよ」

『はっ、数100以上、内大型艦40前後！距離500！方位227！』

「陣形は分かるか？」

『恐らく水雷戦隊が前路哨戒で警戒陣を敷いています。その後ろに4列の複縦陣、両脇と後ろをがちり水雷戦隊が固めております』

「了解した、ありがとう。引き続き見続けてくれ。何かあれば即座に報告」

『了解』

電探の情報によれば、どうやら敵はがっちり陣形を組んで突っ込んできているらしい。

あれを崩すのは、並大抵の事では無いだろう。

それが単純な砲雷撃戦であれば、の話だが。

「全艦に合戦準備を下令」

『艦隊合戦準備、艦隊合戦準備！』

「初めての砲戦だ、気を引き締めて掛かれ！」

合戦準備を下令すると慌ただしく、騒々しくなる。

「対空電探、友軍攻撃隊は捉えたか？」

『いいえ、まだです』

「分かった。引き続き監視頼む」

「早ければ、もう来てもおかしくは無いのだが……」

「隼鷹さんは兵力集中を採られたのでしうか」

「恐らくな。普段の態度やからは到底想像出来ないが戦術や戦略には明るい。兵力分散はせずに叩くつもりなのだろう。あれでももう少し酒癖が落ち着いてくれれば良いんだがなあ……」

本当に、ずっと酒の付き合いがあるが、隼鷹だけでなく酒飲み連中と飲むと一年分の酒量を一晩で呑むことになる。

俺は、自慢じゃないが酒も煙草もやらないから、酒豪連中と飲む時以外は殆ど呑まない。

彼女達に誘われなければ呑まないからな。

だから後始末が大変なんだ。

流石に吐かれた時はどうしてくれようかと思ったが。

簀巻きにして窓から吊るすか、いやいやそれは不味いから上官命令で禁酒を命じるか。

臭くて臭くて堪ったもんじゃなかった。

真面目にそう考えるぐらいだったのだ、あの時ばかりは。

仕方が無いから執務室で寝ることにしたが、あれはもう勘弁してもらいたい。

とは言え、翌日になって朝一番に土下座で謝りに来たもんだから「まあ反省しているならそれで良いか……」と許してしまった。

それはそれとして2週間禁酒と言う罰は与えたが、隼鷹もあの時ばかりは相当に反省しているらしく素直に領いていたな。

鳳翔には甘過ぎると言われたが頭から吐瀉物を被ったわけでもないし、一晩寝たら怒りも収まっていたから別に良かったのだ。

それ以降酔い潰れてそのまま寝ることはあっても吐くことは無くなったから特段気にしてはいない。

「そう言えば提督、偶に隼鷹さんとか那智さん達に酒盛りだって殴り込まれてますものね」

「ザルだぞ、あの面々は。こっちはとつくに水を飲んでいと言うのに。しかも酔い潰れてそのまま爆睡するから余計質が悪い。下手に触ったらセクハラだぞ、セクハラ。何度艦娘の皆に頼んで運んで行ってもらった事か」

「でも、それだけ皆さんが提督の事を信頼して、気を許しているってことじゃないですか？じゃなきゃ酔い潰れるまで殿方の前でお酒を飲んだりしませんから」

「そう言われると弱るな。いやしかし、もう少し抑えて欲しいのは確かなところだ。何時だったか俺の部屋で思いつ切り吐かれたこともあるからな？」

「それは……、ちよつと行き過ぎですね……」

大和は苦笑する。

と言うかそうするしかないだろう。

「お二方、ご歓談のところ申し訳ありませんが対空電探に感有りです」

「友軍か？」

「方角、機数からして友軍かと」

「機数は？」

「100機ほどです」

「分かった。敵艦隊との距離は？」

「380です」

「分かった」

皆が俺を見る。

俺の号令を待っているのだろう。

応えねばなるまい。

一息息を吸って、号令を出す。

「総員合戦準備！砲雷撃戦用意！観測機上げ、弾着観測用意！各種全電探は常時稼働、何があっても電源は落とすな！」

「反航戦用意、主砲左舷向け！弾種徹甲、第1射照準は距離250、速度28ノットに合わせ！」

「了解ッ！」「了解ッ！」

号令が発されると、艦内、艦上問わず皆が持ち場に付き、そしてやるべきことを行う。

主砲は仰角、俯角、主砲塔の旋回や揚弾筒などの各部の点検確認をし、機銃や高角砲は弾薬を集積する。

大和の高角砲は、浮揚修理時に秋月型駆逐艦の主砲と同じ10cm連装高角砲だ。

毎分19発に加え、12.7cm連装高角砲よりも旋回速度が速く、装填速度も速く、揚弾筒と半自動装填装置の改良によって毎分20発を可能としている。

砲塔内部には即応弾が40発格納が可能であり、集積弾を合わせると、各砲塔にもよるが60発程度は即応弾として使うことが出来る。

これは敵航空機編隊の先頭集団を撃墜、撃破するには高射砲弾150発が必要であり、最低限とされた数値であるが、敵機を確実に落とすための弾幕形成を行うには最低でも各門が10発は撃たねばならない。

この10発と言う数は、射撃速度を考えれば2分に1機の割合での撃墜が理論上は可能であるが砲塔内にある即応弾が切れてしまえば即応弾だけでは僅か2分しか全力射撃が出来ない。

即応弾と集積弾を全て撃ち尽くしたらそれ以降は

20〜30発は必要であるが、そこは他砲塔と連携することでカバーしている。

集積した砲弾の数にもよるが最初の2〜3分は、確実に全力射撃を行うことが出来、貫通力や破壊力は高初速と欧州から齎された新型爆

薬によって対空砲弾は従来の3倍になる。

徹甲弾は2倍程度であるが、それでも主目標たる駆逐艦や軽巡程度の敵、戦艦などでも非装甲区画や構造物を貫通し破壊するには十分な威力だ。

射程も装薬を新型にした為、20000mにまで伸びている。

大和と武蔵は片舷に8基16門、両舷16基32門を搭載する。

元よりも4基多いが、これは艦中央部にある25mm機銃を3基づつ撤去し増設した為だ。

全ての砲塔は4cm厚の特殊装甲に守られ、乗組員の保護に一役買っている。

敵の機銃掃射は確実に防ぐことが出来るが、ロケット弾や爆弾には耐えられない。

勿論、敵の主砲弾なんて論外も良いところだ。

内部には火災時に備え自動消火装置、それと駄目になった時の為に消火器が2本設置されている。

主砲と同じく、排煙装置と砲塔内気温の上昇を防ぐ為の冷房もある。

対空速射を長時間行い続けると、気温の上昇が激しく排煙による酸素濃度低下などもあるので必須装備だ。

砲塔内温度が上がれば、砲弾の暴発やそれによる誘爆や火災もありうる。

これら8基16門が射程2000に入り次第一斉に火を噴く訳である。

毎分20発、それが16門なので毎分320発が敵を襲うことになる。

幸い駆逐艦と違って大和はその巨大な艦体を存分に利用して大量の徹甲弾備蓄があるので問題は無い。

とは言え本来は対空射撃が主任務だから徹甲弾の数は対空砲弾に比べて少ないが、最悪対空砲弾でも対空用信管を上手いこと調整して敵艦にぶち当てることも出来る。

当たらなくとも艦上構造物に大なり小なりの被害が出ることは間

違いない。

観測機が各艦から射出され、敵艦隊上空で観測を始める。

『観測機から入電。』各艦400m程度、距離ヲ維持シ航行中、速力28ノット。敵艦隊180度急速転舵、同航戦ヲ挑ム模様』

「ここで転舵？そんな事せんでも敵の数ならこつちを磨り潰せるだろうに、なぜこのタイミングで……？」

艦長が首を傾げる。

このタイミングでの転舵なんて全く意味が無い。

砲塔も取り舵にしる面舵にしる、右舷側に砲門は向いている筈だから指向をし直さないとならない。

深海棲艦の主砲旋回速度が幾ら速いとは言えど、この位置関係では場合によっては先手を取られてしまうし、奇跡に近い事だが初弾命中などしようものなら一方的に撃たれる可能性だって大きい。

このまま反航戦を行った後に、転舵してこちらの右舷に付くなどした方が絶対に良いはずである。

「いや、敵はこちららの攻撃隊を電探で探知したのだろう。まっすぐ突っ込むよりも安全だと思って転舵したのだろうが……」

「寧ろ逆ですね。攻撃隊との距離を考えるなら、最大戦速にしてこちらとの砲戦を一時断念なり中断なりして我が攻撃隊に向かって突っ込むべきでしょう」

「その方が狙い辛いし、何より相対速度が大きく跳ね上がる。爆撃はまだしも、雷撃はかなり避けれただろうに」

「なににせよ敵はこれで我が艦隊と攻撃隊の二つを相手取らねばならなくなりました。どう出てくるでしょうか？」

「俺だったら、判断ミスを理解した段階でさっさと逃げの一択だな。砲戦を仕掛けても攻撃隊に確実に先手を取られるしそのまま敵艦隊にも先手を取られる。どうやっても余程の奇跡が起こらない限りは有利は取り返せない」

奇跡、と言うのは例えば初弾数発命中だとかそのレベルのものだ。そんなものをアテにしている時点で負け確と言うやつだ。

「魚雷が命中すれば、と言うのも考えられますが？」

「魚雷なんてこの距離じゃ射程外、命中させようとするなら無誘導だからどれだけ遠くても70までは接近しないとらん。そんなことしている間に敵に滅多打ちにされて壊滅待った無しだ。航跡が見えないから牽制にも使えん」

「戦うだけ無駄、と言う事ですか」

「ああ」

大和と一緒に言う。

攻撃隊にとって逃げる敵を負う方が楽だ。

なんせ航空機の速度を以てすれば、魚雷を抱えた足の遅い雷撃であろうとも先回りすることも簡単であるし、急降下爆撃だつて投下すると爆弾は前方方向に流れながら落ちていくから当てやすい。

それに比べ、今の攻撃隊と敵艦隊の彼我の距離は僅か50km程度。

これなら航空機は一分も掛からずに敵艦隊に到達するだろう。

この時点、もしくは今すぐに最大戦速にする。

航空機からの攻撃は的が移動目標である場合、目標の移動速度が速ければ速いほど命中させ難くなる特性がある。

それを利用するのだ。

仮定的が33ノットで攻撃隊に突っ込んだ場合、攻撃隊の速度を400kmと仮定した場合彼我は460km/hで擦れ違うことになる。

そうなると本来よりも60km/hで擦れ違うことになるのだ。

この60km/hの差は大きい。

想像としては、高速道路を並行して走る車と、反対車線の擦れ違う車、どちらが速く見えるかと言うのが分かり易い。

高速道路では大抵100km/hかそこからで走るだろうが、反対車線の車も100km/hで走ったとすれば200km/hになるわけだ。

あれだけでも十分速く感じるし、もし仮に反対車線の車にボールや

棒を命中させよ、となれば慣れている者でも恐らく命中率は10回中1回程度になる。

慣れていない者ならば、100回投げて数回まぐれ当たりを期待するしかない、そんな状態だ。

ところが敵艦隊が逃げの一手を選んだ場合、今の状況であるが、400km/hの相対速度が340km/h程度にまで落ちる。

攻撃隊の足の速さを考えても、こちらが時間稼ぎをして最高とまでは行かずとも、我が航空隊の練度を考慮して小隊で魚雷を投下すれば1本は命中確実と言う攻撃位置と射点に付くことが可能だろう。

しかし攻撃隊に敵が突っ込んでくるとなると、攻撃隊が攻撃位置に付き、必中確実の射点に付くには旋回性能や距離を考えると、十数秒以下で付かねばならなくなる。

どれだけ熟練搭乗員でもそれは殆ど無理な事で、しかも目標は俺が指示した通りに行くならば小型高速の駆逐艦や軽巡だ。

大型艦を狙うよりも難しい。

それを考えると、敵の一手は現状考えられる最悪のものと言える。

敵は我が戦艦群と攻撃隊を同時に相手取ると言う愚行を犯したのだ。

「艦隊へ打電！『敵ノ一手愚力也。敵艦隊トノ距離250マデー二接近セヨ。攻撃隊ノ空襲ト同時ニ射撃始メ。攻撃隊ノ目標ハ小艦艇ニ付回避運動ハ考慮セズ』！」

「はっー！」

艦隊は取り舵に、距離250まで一気に接近するとともに一斉転舵。

敵艦隊に並ぶと同時に面舵に切り、平行。

敵艦隊が我が艦隊と並ぶと同時に、攻撃隊が空襲を仕掛け始めた。

「敵水雷戦隊、隊列乱れるも戦艦及び重巡群の隊列は乱れず！」

「回避運動を一緒に取っておけば良かったものを。よし、絶好の射撃機会だ、主砲射撃諸元良いか!？」

『1番主砲塔射撃準備よし!』

『2番主砲塔射撃準備よし!』

『3番主砲塔射撃準備よし、後は敵に叩き込むだけです!』

「提督、全主砲射撃準備完了しました、何時でも行けます!」

「他艦はどうか?」

「既に準備完了しております。あとは撃つだけです」

「よし、各艦1番艦より20番艦までを標的に設定!諸元入力後、各艦は各個射撃を開始せよ」

命令を下すとともに、艦隊から発砲音が次々と聞こえてくる。

「私達も撃ちます。評定射撃始め。電探と観測機は各種修正値を随時報告、砲術はそれを元に射撃諸元を設定。甲板上の乗組員は総員艦内に退避。別命あるまで待機!」

命令を下したすぐ後に、大和自身が号令を出した。

20秒ほどの間を置いて退避完了のブザーが鳴り響く。

次の瞬間、主砲射撃のブザーが鳴った。

1から3番砲塔の1門づつが一斉に射撃を始めた。

その衝撃は1門毎とは比較にならなく、腹の底から来るもので艦が射撃の衝撃で横滑りしたのではないかと思うほどだ。

砲炎も目を反らしたのにも関わらず周りの艦の艦影を映し出すほどに明るい。

今は夜だから、もし直視をしてたら一瞬の内に失明していたかもしれない。

『観測機より入電。全弾遠弾!下げ2、右1!』

射撃諸元を修正したのち、再び主砲が撃たれる。

観測機から次々と修正値が送られてくるが、中々命中しない。

その間に敵艦隊も撃ち返してくる。

流星に隊列を乱されていないからか、射撃はしてきているが今までの深海棲艦に比べて精度に欠けている。

恐らく我が攻撃隊から受けた動揺が収まりきっていないらしい。

敵艦は次々と撃ち返してきては、大和や他の艦の周りに魚雷よりも遥かに大きな水柱を立てては崩れていく。

流石は16インチ砲搭載なだけはある。

確認されている戦艦は姫級、鬼級が10隻ほど。

水鬼や棲鬼クラスがわんさかだ。

他の戦艦もル級やタ級、それも16インチ砲搭載の強力な艦ばかりだ。

大和以下長門やネルソンと言った40cm砲以上の主砲やビスマルクやテイルピッツ、ヴァンガードと言った艦は十分に渡り合うことが出来るが、金剛達35.6cm砲を装備する艦は幾ら長砲身化を行って射程と初速向上による貫通力が上がったとしても、依然として相手取るには重い相手であることには変わらない。

35.6cm連装砲は、現在50口径に砲身長を改められている。

あちこちから46cm砲は無理でも41cm砲の搭載が提案されていたのだが、金剛と長門の艦体の大きさの違い故に断念している。

試算の結果ではあるが、35.6cm砲装備艦に41cm砲の搭載を行うと艦のバランスが維持出来なくなることや、そもそも艦幅を広くしたり砲塔環を広げなければならぬなど、改装に実に丸々1年も掛かる上に訓練を考えれば1年半は前線から離れることになると思われた。

常に戦力不足である我が軍にそんな余裕は無く、この41cm砲搭載案は廃案とされ、代わりに攻撃能力の向上として長砲身化が採用された経緯がある。

これならば砲身長を5口径分長くし、砲塔各部の強化をすればよいだけで工期も2か月で済む。

扱いは殆ど同じだから新しく訓練を施す必要は無いので改装後に長砲身化による特性の変化などを掴むための習熟訓練を行えば実戦配備は簡単だ。

どれだけ掛かったとしても、5〜6か月程度で終わる。

結果長砲身化案が採用されたと言うわけである。

実際貫通力の向上や射程の向上は叶ったが、それでも35.6cm砲であることには変わり無く、攻撃力不足であることは否めない。

しかも相手は3連装3基9門で、4基8門の金剛達よりも火力で圧

倒している。

日向と山城は航空戦艦から戦艦に戻された上で全部と後部主砲2基ずつを残して艦中央にあった主砲2基は撤去、代わりに10cm連装高角砲や対空機銃、機関砲をこれでもかと載せたので砲門数でも負けている。

お陰で日向、山城は大和武蔵をも凌ぐ対空砲火を撃ち上げ艦隊防空の要であるのだが、それはまた別の話だ。

重巡や水雷戦隊にも同様に姫、鬼級が多数混ざっており、もし攻撃隊を出していなければ想像をしたくない事態に陥っていただろう。

そちらは今のところ敵が混乱しているからか、随分と一方的らしい。

それでも戦艦、重巡と言う砲火力どちらもが数的不利を背負っているこちらとしては態勢を立て直されたらどうなるか分からん。

それぐらいに敵は強力だ。

平均的に電探射撃での命中弾を得られ始めるであろう7射目を迎えても中々命中せず、更に撃ち続けついに13射目になった。

「敵艦発砲！」

「大丈夫、取り合えず撃ち返してきているだけ！あれじゃ当たりはしないわ！」

大和の言葉通り、周りに巨大な水柱を立てるだけに終わる。

「どうした砲術!?大和初めての敵戦艦との殴り合いだぞ！初弾命中ぐらいの心持ちで撃たんか！」

砲術長が怒鳴る。

そりゃ他の艦が命中弾を出している中で大和だけが未だに命中弾を出せていないのだから言いたくなる気持ちも分かる。

しかしその叱咤は被弾によって消えてしまう。

叱咤の数秒後に大和の艦体が凄まじい衝撃と共に大きく揺れる。

それは主砲射撃の衝撃とは全く違うもので、誰もが被弾したことを瞬時に理解した。

「先を越されてる！次は当ててるわよ！」

「艦前部に被弾！火災発生！」

「ダメージコントロール！応急班と消火班を大至急向かわせろ！」

「どうやら今のはまぐれ当たりであつたらしい。」

「それ以降は全く至近弾すら無い。」

「発生した火災はものの数分で消し止めた。」

「問題無い。」

敵戦艦の砲弾は次々と先頭を進む大和や武蔵、長門に着弾しているが空襲からの混乱がまだ抜けきらないのか精度は良くない。

とは言え、流石に立て直し始めたのか次第に散布界も縮まって精度が良くなってくる。

砲撃戦が始まって30分も経つと、敵は完全に指揮統制を取り戻したのか艦列を組み直してこちらに猛烈ともいべき程の砲撃を仕掛けてくる。

こちらが使っている射撃用レーダーよりも高性能な物を使っていることもあるだろうが、練度も高い。

艦隊の周りに落ちる砲弾はどれもこれも40cm砲弾、水柱の大きさは軽く艦橋の高さを超えている。

何発かが近くに着弾し、爆圧によって空を舞う海水が艦にドドドドッ、と凄い勢いで落ちてくる。

「水柱で攫われた奴は居ないな!？」

「機銃や機関砲群は射程外に付き操縦要員は全員艦内に退避しているので問題有りません！高角砲も動作異常無し！」

しかし、こうして撃ち合うと分かるが……。

「連中、相当練度が高いぞ」

「電探射撃とは言え、これほどまでに精確な射撃とは」

「旗艦が碌に命中弾を与えないでどうするか!?!しっかり計算をやって正しい諸元を砲術に送らんか！」

幸いにも大和自身は最初の1発以外に被弾は無かったが、その後ろに続く武蔵以下は窮地とは行かないまでも若干の劣勢を強いられていた。

『武蔵に被弾！艦中央バイタルパートへの被弾の様！火災等は認められず！』

「武蔵より信号、『被弾ナルモ装甲ニテ弾ク。損害軽微我異常無シ、戦鬪続行ス！』」

武蔵は尚も意気軒昂、46cm砲を撃ちまくっている。

艦列は前方に2水戦を配置し、敵潜の警戒を行っている。

その後ろに、

大和

武蔵

金剛

霧島

長門

リシユリユー

ネルソン

ヴァンガード

ビスマルク

ティルピッツ

比叡

榛名

リットリオ

ローマ

日向

山城

クイーン・エリザベス

ウォースパイト

ラミリーズ

デューク・オブ・ヨーク

と並び、更にその後ろに1水戦が位置に就いている。

闇夜に主砲射撃の閃光が繰り返し光り続ける。

「不味いな、敵が完全に統制を取り戻したぞ」

「1水戦、2水戦に敵水雷戦隊の突入に備えさせて！」

流石に敵も統制を取り戻し、初動の失敗が嘘であるかの様に見事な艦隊運動を取っている。

『ッ！命中命中！敵一番艦に本艦の主砲弾直撃！』

「良くやった！主砲次より斉射！敵艦を漁礁にしてやる！」

『射撃諸元そのまま、どんどん撃て！』

敵艦の艦上に大きな爆発が起きる。

観測機から歓声の様な叫びが無線を通じて聞こえてくる。

漸くの命中弾に艦橋は湧き上がる。

あとは敵艦が回避行動を取るまで、出来る限り多くの砲弾を叩き込むだけだ。

回避されたらまた諸元を測定し直さないとなくなるからな。

主砲3基は1基に付き1門、一度に3門が撃つ。

大和の主砲は反動が強過ぎるが故に、金剛の様に全門斉射と言うのが出来ない。

と言うよりも、戦艦の主砲は基本は交互撃ち方であり、全門斉射と言うのは殆ど行わない。

他の艦も交互撃ち方による斉射だ。

これは、大和であれば1番砲塔から3番砲塔の右、中、左とそれぞれ一斉撃つ撃ち方である。

それでも3門同時射撃は艦が少しとは言えど横滑りするほどの衝撃と反動だ。

『対空電探に感！』

「敵か!?機数と高度は!?!」

『出現方向と機数から考えて友軍の可能性大!』

『見張り員より報告！多数の航空機が敵艦隊に突っ込みます!……友軍機です!』

「これで、上手くやってくればまた敵の混乱とまでは行かなくても動揺ぐらいは誘える訳だが……」

双眼鏡で覗いてみても、攻撃隊は見えない。

今日は新月だから月が辺りを照らしてくれることは無い。
大空に瞬く星々の光はあれども、それは光源足り得ない。

それでも攻撃隊は照明弾も無しに敵艦へ突っ込んで行っているらしい。

程なくして敵艦隊への攻撃が開始されると電探にははつきりと隊列や足並みが乱れたことが映し出されていた。

遠くの方では魚雷命中時の爆発音と思しきものや、爆弾による火焰が上がっているのが双眼鏡を覗くと良く分かる。

今使っている双眼鏡は、光学機器分野では我が国の数歩先を行くドイツ製のものだ。

欧州からの輸送船団の中には光学機器、双眼鏡の設計図や生産設備も含まれていたのだが、他の装備などの優先度の方が高かった故に細々と生産を続けられているに留まっている。

それでも戦艦と空母分だけでも数を揃えられたのは大きい。
より鮮明に見えるし、敵機などの判別もし易い。

敵戦艦は空襲下でもなお、果敢にこちらへ砲撃を行ってくる。

距離も140にまで接近しているし、敵艦の両用砲の射程だから小口径弾もわんさか飛んでくる。

そしてその内の1発が大和の艦橋に突き刺さる。

そこは、折しも俺達がいる場所であった。

刹那、腕と足、頬に鋭い痛みを感じた。

幸いにも弾いたようだが、砲弾か艦橋のものかは分からないが、破片か何かが俺に飛んで来たらしい。

触って確認するが、そこまで深くはなさそうだ。

じくじくと痛むが、死ぬはしないだろう。

「軍医を今すぐ呼べ！早くしろ！」

「提督！」

「大丈夫だ、見た目よりも傷は浅い！」

「今すぐ医務室へ……」

「これぐらいの傷なら治療しながらでも指揮は取れる。それよりも他に怪我人は居ないかを確認しろ、居たらすぐに医務室に運べ」

問答を続ける間も砲戦は続く。

軍医が大急ぎで艦橋に入ってくる。

取り合えず痛み止め、モルヒネの注射をされた後に消毒と止血をしてくれる。

諫山軍医大佐は、なんだかんだと昔から世話になっている。

俺の主治医は畑軍医大佐であるが、畑軍医大佐と並んで世話になることが多い。

畑軍医大佐が俺を診る事が出来ない時に、諫山軍医大佐が診てくれるのだが実を言うと諫山大佐の方が優しいのだ。

畑大佐は何と言うか、結構容赦が無いと言うか、かなりボロクソに言われることが多い。

「傷はどうか？」

「……頬と腕の傷は大したことはありません。縫うことには変わりありませんが。足の傷は思っているよりも深いのでちゃんとした治療が必要でしょう。放っておけば大事になります」

「分かった。取り合えず止血と応急処置だけ頼めるか」

俺の顔をじつ、と見た諫山大佐は頷いた。

「戦闘が済んだらどれだけ暴れようとも医務室に担いで行きますので、ご承知の程を」

「分かった、迷惑を掛ける」

「職務ですのぞ」

軍医は手早く止血をして、消毒と包帯を巻いてくれた。

念の為、諫山軍医大佐が俺の側で待機しているとのことで、それよりも兵士達の手当や治療をしてやれと言ったら向こうは手が足りているから問題無いときっぱりと断られてしまった。

大和は乗組員が多い分、軍医が多い。

今回は艦の損害自体も軽微であるから、負傷者も少ないのかもしれない。

流石に命令と言う形を取るわけにも行かず、大人しく頷いた。

「提督、もう水雷戦隊に突撃を命じてよいのでは？」

「電探、見張り員どうか？」

『敵艦、敵水雷戦隊の抵抗は微弱です。戦艦や重巡は健在の様です』

敵水雷戦隊は数回の航空攻撃で壊滅したとみていい。

水上電探には敵の水雷戦隊と思わしき艦影が写っているが、大きくばらけていたり、落伍している艦ばかりで戦闘能力を有しているとはどうやっても判断し難い。

個艦毎の戦闘はまだ可能かもしれないが部隊規模の戦闘行動はあれでは取れまい。

舞台は整ったと判断出来るだろう。

後は敵艦隊への止めと言う最後の締めをきっちりやるだけである。すぐさま1水戦、2水戦に突撃を命令。

敵には健在な重巡や戦艦が残っているが、抵抗自体は余り無い。

再び態勢を整え戻される前に決着を付けておいた方が無駄に被害を出さずに済むし、その方が良いだろう。

「戦艦、重巡は突撃を行う水雷戦隊の支援。決して彼女達を撃たせるな」

「提督、取り合えず医務室で治療を。後の事はお任せ下さい」

「……分かった、そうしよう」

戦いの趨勢は決した、そう言わんばかりに大和に治療を勧められる。

諫山軍医大佐に連れられて医務室に向かうと、傷病者で溢れていた。

大和は合計4発の被弾で済んだし全てを装甲で弾き返したが、高角砲を撃っていた者や見張り員の中などにはその弾片を受けて負傷したものもいる。

被弾時の衝撃で怪我をしたりなどもだ。

そう考えると俺の怪我など大したことは無い。

「むさ苦しいところで申し訳ありませんが、我慢してください」

「問題無い。他の者は大丈夫か？」

「戦死者が20名ほど。他の者は重軽症者合わせて50名程度です」

「……そうか。あとで、弔ってやらねばな」

「そうですが、提督はご自分のお身体の事ももっと慮って下さい」

「すまん」

傷病者の中で、手当をされる。

麻酔をされているからか縫う時も痛みは無い。

抜糸の時や治るまでの痛みがあるだろうが皆の怪我に比べれば大したことは無いだろう。

傷が再び開かぬように用心するだけである。

大和の艦内にある長官室が自室として充てられ、そこで諫山軍医大佐の言い付け通り大人しくしていると戦闘終了、用具収めの喇叭に続いて艦内放送がされた。

どうやら決着が付いたらしい。

それから暫くすると大和が訪ねてくる。

「提督、大和です。お怪我をされている所申し訳ありませんが、報告に参りました」

「報告頼む」

「はい。戦艦同士の砲撃戦での撃沈戦果は武蔵による戦艦1隻のみですが、水雷戦隊による切り込みで戦艦と重巡へ大損害を与えました。撃沈確実14隻、撃破は更に20隻ほどになります。敵艦隊が撤退の動きを見せた為に追撃はさせず戦闘終了を下令しました」

「我が方の損害は、私が被弾4発で小破。いずれも機銃座への損害程度なので修理も数日で完了します。ビスマルク、霧島、ローマ、クイーン・エリザベスが中破。他に被弾した艦はありますがいずれも数日程度の修理で済むものです」

「水雷戦隊は？」

「敵艦隊が完全に混乱していたので、砲撃を行いながら距離40にて投雷。敵艦の撃沈戦果は全て雷撃によるものです」

「航空隊の戦果は、分からんか」

「はい。敵の水雷戦隊にも大損害は与えたのですが詳細は確認中です」

「報告ありがとう」

「追撃を行おうと思ったのですが、こちらは水雷戦隊と完全に分離していましたので断念しました」

「いや、それでいい。俺達の任務は豪州奪還で敵艦隊の殲滅ではない。輸送船団を無事に守り抜いて、豪州奪還さえ出来れば取り逃がした敵艦は何時でも叩ける」

「はい。それで、隼鷹さんに連絡を取ったらそのまま大和で休んでいろ、と……」

「あいつ……。まあ、ここは隼鷹の言う通りそうするよ。残りの任務は輸送船団の護衛だけだ。航空戦の指揮も隼鷹に任せておけば問題無かろう」

隼鷹にはとつくに手を回されていたらしい。

ちやらんぼらんではあるが、なんだかんだと気遣いが上手い。

「それでは、これからの行動ですが、予定通りスラバヤまで輸送船団を迎えに行くで宜しいですね？」

「ああ、頼む。大鳳と信濃、それと1航戦はどうなった？」

「今のところ特に報告は入っておりません。大鳳と信濃は3日後にはバリクパパンに入港、修理を開始する予定です。1週間もあれば戦線復帰が叶うかと」

「問題は1航戦だが……」

「ドックの数もあるので一度応急修理をバリクパパンで行ってから本土で本格的な修理をするとのこと。修理と再訓練に4か月ほどを頂ければ戦線復帰は可能とのこと」

「それでいい。バリクパパンは前線での軽微な損傷艦の修理を優先させてくれ。その方が戦力の維持はしやすい。中破以上の艦は全て本土に回せ。設備も整っているし乗組員の訓練も必要だから」

「艦隊には燃料の補給を、主に駆逐艦と軽巡に行っています。戦闘でかなり消費してしまっただけ」

「給油はケチらなくていい。足りないとか後々に影響が出るかもしれないと判断したら本土か南方方面から直接タンカーを送ってくれるように俺の名前で要請して構わない」

「了解しました」

報告を終えた大和は一礼して艦橋に戻った。

恐らく今は烹炊所が戦闘終了後の食事を配る為に奮闘していることだろう。

時計を見ると、既に夜中の0300を回っている。

もう30分ほどで0400になる。

艦隊はこれからスラバヤまで戻り、輸送船団を伴って豪州上陸、そして奪還作戦を本格的に開始する。

本当の戦いはこれからである。

寝ていてくれと言われたが、戦闘後の興奮で寝付ける訳も無い。椅子に腰掛けてしていると大和が再び部屋を訪ねて来た。手にはトレイ、その上には作り立てであろう、湯気を立たせた食事が乗っている。

「提督、早いですが朝食をお持ちしました」

「ありがとうございます。皆には食事を摂らせましたか？」

「滞り無く。今は交代で入浴と就寝をさせています」

「大和は配置中か？」

「いえ、先に休憩を頂きましたので提督の食事を作りました」

「それはすまない、ありがとうございます」

「はい」

大和と共に食事を食べる。

相変わらず、大和の作る食事は美味しい。

メニューはロールキャベツにスコッチエッグ、それにコンソメスープ。ヨーグルトも添えられている。

主食は米だ。

戦闘後の空腹でも、満足出来るように腹にしつかりと溜まるもの

だ。

食べながらから水雷戦隊の話をする。

「あれだけの好条件での切り込みによる砲雷撃戦に参加出来ないだなんて、神通や龍田辺りが悔しがるかもしれないね。私達の実力を見せる良い機会だったのに、って」

「いや、案外分からんぞ」

「？」

「あの二人なら、温いとか言い出しそうだ。普段あれだけ過酷な訓練をやっているのだからもつと厳しい状況下でこそ砲雷撃戦と言える、とかなんとか。下手すればこれでは実力の半分も出せないとか」

「有り得そうですね……」

苦笑いと共に頷く大和からみても、あの二人の訓練は厳しいらしい。

食事を終え、大和に手伝って貰いながら身体を拭く。

流石にこのままベッドに潜るのは憚られる。

大和が帰った後、俺は少しだけ椅子に座って休んだ後に就寝した。

第74話

海戦終了後、スラバヤまで輸送船団を迎えに行き、無事豪州上陸を果たした。

1か月間で相当進軍し、ノーザンテリトリー州と西オーストラリア州北部の奪還が済んでいる。

想定よりも速い。

豪州作戦に従軍する将兵全員には、狂犬病などの必要とされる予防接種は実施済みだ。

豪州は日中の気温が40度を超えることも珍しく無く、行軍は専ら夜間行軍か耐熱行軍が殆どであった。

夜間行軍はこちらの行動の秘匿が容易である上に、夜間は歩き続けるので砂漠特有の夜間の低気温もあまり問題にはならない。

耐熱行軍よりも頻度が高い。

耐熱行軍は昼間の行軍になるが、こちらは熱射病や熱中症の危険が高い為に水分補給や休息に普段以上に気を遣わねばならないと言う事で週に1度か2度ほどしか行われない。

熱中症や熱射病対策としては、十分な睡眠と食事、水分補給を徹底すると共に作業服の襟や袖を開いたり捲ったりすることが推奨される。

豪州作戦に参加する将兵には戦闘帽に垂布が付けられた、戦闘帽が全員に支給されているのでそれを被るのも推奨される。

衣服に関しての対策は精々これぐらいしか出来ない。

代わりに重点を置いているのが、食事や水分、休息などだ。

食事や水分補給なども、他とは違って一日一粒梅干しを配給され米飯も酢飯であったり醤油で炊いたりすることで塩分補給をし易いように工夫している。

水も朝昼夜と3度補給され、ハーフトラックには専用のドラム缶に

水を入れてあるから、各分隊や小隊指揮官の判断で随時補給が出来るようにしてある。

昼間行軍を行う場合に関しては朝と昼に補給される水に砂糖、塩、ナトリウム、カリウム、マグネシウム、カルシウム、ビタミンB、ビタミンC等が含まれており実質スポーツドリンクと同じである。

とは言えども、その夜間も毛布や外套が必要になるほどに冷え込む。

基本的には夕方5時から6時ぐらいから行軍を始め、日の出からまだ気温の低い日の出から1時間後ほどまで行軍を続ける。

昼間は専ら天幕を張って偽装を施して睡眠や食事を行っているわけだ。

砂漠のど真ん中での偽装と言っても、砂漠色の偽装網や被膜を広げてその上から砂やらその辺から持って来た草木を乗せるだけである。制空権が無ければ、決して出来る事では無い。

因みに現在の日本の年間平均気温は15〜17度と言ったところで、戦前に比べれば随分と涼しくなっている。

平均気温低下の理由としては恐らくは人類の活動が深海棲艦によって大幅に縮小した事が原因だろう。

それでも夏になれば、地域によっては30度を超えるが戦前や元居た世界の連日40度越え、なんてのよりは遥かにマシだ。

全ての部隊が機械化されているが、ハーフトラックは部隊で運用されているが、普通のトラックは陸路補給の為に駆り出されているので歩兵は自分の足で歩かねばならない。

進軍速度が速いために補給線の構築が遅れているのが原因だ。

ハーフトラックなどの装甲戦闘車は専ら燃料弾薬食料水医薬品、その他重機材や輜重部隊の運搬移動に使用されている。

豪州ではその広大な面積でしかも兎に角開けた土地であるが故に今までの密林ジャングルの様にじわじわと補給線を構築しながら進むと言う、今までの戦術は採用出来ない。

大軍の展開が容易であるから、呑気に補給線を構築しながら進んで

いたら兵力差に物を言わされて負けてしまう。

だから豪州作戦に関しては補給の重要性を一段下げ、部隊の機動力による電撃戦で敵戦力の包囲殲滅を最たる重要目標としたわけである。

こちらの豪州作戦に投入された我が軍の総戦力は50万ほど。

大して敵は余程あちこちから掻き集めたのだろう、100万を超える大兵力を有している。

しかも敵の洋上補給線は東側にあるから健在なままで潜水艦隊を展開させることも用意ではない。

補給線を攻撃しての兵糧攻めは抜本的な意味では、意味を成さない。

敵の補給線は豪州全土、空路と陸路に分かれており、それは網の目や蜘蛛の巣を思わせられるものなのだ。

これらを全て破壊することは出来ない。

敵輸送機をどれだけ片っ端から叩き落そうが、敵の輸送車の車列を疾風や対地攻撃仕様の連山や銀河で吹き飛ばしても敵はそれよりも多い数で、量でそれら損失を補ってくる。

となれば、敵は確実に物資や戦力を前線に集積することが出来る訳である。

そうなつてしまえばこちらの戦力は50万ほど。

全戦線にどれだけでも後方への強襲上陸などと言った攻撃から奪還地域防衛戦力を引き抜いてしまうと、精々40万程度しか張り付けることが出来ない訳である。

ところが敵は総兵力は作戦開始時の概算でも100万は超える。

今はあちこちから掻き集めた兵力も、敵の輸送能力を考えれば集結して軽く150万を超えていてもおかしくは無い。

だから大軍を展開されて数的有利を生かされる前に、機動力に勝る機甲師団を主力にして徹底的に敵戦力の包囲殲滅を図り続けるしかない訳である。

豪州奪還作戦における、陸軍の指揮官には欧州から逃れて来た指揮官も数名参加している。

5個機甲師団の内二つの、第10機甲師団の師団長に元独陸軍のシュリーマン・ヘインツ少将、それと第14機甲師団には元英陸軍パウエル・H・リッチレイン少将をそれぞれ任命している。

彼らはアフリカ戦線やスエズ運河防衛戦での経験があり広大な大地での対戦車戦闘や電撃戦の経験が皆無である我が軍にとっては、打って付けの二人だ。

砂漠地帯での戦い方を十分に心得ている二人以外にも、戦闘団編成の師団にも彼らの様な指揮官は居る。

第5師団　コリン・グリーンヒル准将（元英陸軍）

第13師団　リー・D・ビル少将（元英陸軍）

第17師団　アベニウス・オルソン准将（元瑞典陸軍）

第22師団　ジャコモ・アニエージ少将（元伊陸軍）

第23師団　オーケルフエルト・グスタフ少将（元独陸軍）

第38師団　ミシエル・アレツポ准将（元伊陸軍）

以上が豪州奪還戦に従事している。

採用されている戦術としては、言った通り電撃戦である。

パンターとセンチュリオンで編成された機甲師団が、電撃戦と言う機動攻勢作戦を取っている為に豪州と言う広大な大地では大活躍をしている。

ジャングルではその足の速さを生かす事は無かったが今回は東西南北と走り回っている。

ティーガーとティーガーIIを主力とした機甲師団は各地の防衛に就いており、敵の反撃が今までに何度も行われているがそれら全てを完璧に弾き返している。

機甲師団は完全に機械化されており、歩兵から砲兵に至るまで全ての部隊は全て車両移動なので、特に燃料不足と言う補給切れで干上がっては元も子も無い。

しかし陸路での補給線は全く間に合わない。

そこで我々が機甲師団に対してどのような補給を維持しているかと言うと、最早我が軍のお家芸となつている空中投下によるものだ。連山や二式大艇や銀河をフル稼働させて補給を行つているわけである。

幸いにも制空権はこちらに有利が傾いているから護衛を就けて任務に就かせれば、損害も無く遂行が出来る。

敵地に対する爆撃任務も含めて、連山部隊に休む暇は全く無い状態だ。

これでは機材の損耗も激しいので、どうにかローテーションを組めるようにするために本土から70機ほどを引き抜いて豪州での任務に当たらせている。

機甲師団が進んだその後ろを通常師団が進むと言うものだ。

堅牢な目標、例えば大きな市街地などは敵によって拠点化されているので機甲師団はそれらをスルーし、砲兵師団によって吹き飛ばしてから通常師団が進む訳だ。

市街地に立て籠る敵を、一々相手していたらキリがないし、それはこちらの被害も馬鹿にならない。

そこで建物ごと立て籠もる敵を吹き飛ばして進む訳である。

砲兵には、爆薬量を多くした榴弾や、自走砲用に新しく開発された三式弾を配備している。

三式弾は曳下射撃を行えば塹壕の中や建物の中の敵も纏めて吹き飛ばせる。

戦争とは、極端に言えばどれだけ多くの兵士と大砲、そして弾を用意し撃つことが出来かによって勝敗が決まると言っても良い。

砲兵師団は逐次増強され、最終的に3個師団分の砲兵を送り込む予定だ。

豪州のエイティ・マイル・ビーチやポート・ダービーにある飛行場は常時稼働状態であり、連山に加えて陸軍飛行戦隊の疾風が配備されている。

連山は370機、疾風も300機に上る一大兵力だ。

コンクリートで舗装した滑走路は、震電の運用も視野に入れているので準備さえ整えば陸軍の震電が順次進出する予定だ。

何故震電の進出が行われるのか、と言うと単純な話でニューギニア方面からの敵航空兵力が度々飛来してきているからだ。

これは当初から危惧されていたことで、震電の進出は予定通りではあるが予定よりも進出飛行戦隊の数を幾つか増やしている。

B―17に加えてB―24と言った重爆だけでなく、双発爆撃機まで出てきている始末だ。

疾風だけなら転圧した無舗装の滑走路でも運用は出来るが、連山に震電はコンクリートかアスファルトで舗装されていなければ運用出来ない。

爆撃で穿たれた大きな爆弾孔を修理するのにも、幾らブルドーザーなどを用いているとはいえ中々に手間が掛かる。

機材を爆撃で失う事も往々にしてあるし、放っておけない。

場合によっては敵の飛行場を艦砲射撃なり母艦航空隊で吹き飛ばす必要も出てくるだろう。

豪州の奪還は中々早く進んでいる。

予定が1〜2か月遅れることが今までの常であったから、それぐらいの作戦遅延は視野に入れていたのだが、今回の作戦は予定よりも1か月以上早く進んでいる。

広大な大地であるから特定の地点での防衛線の構築が難しく、しかも敵が防衛線を張るであろう場所は大体大きな町などに寄る為に予想や偵察がしやすい。

敵の防衛線構築を察知したら即座に機甲師団と砲兵師団を用いて包囲殲滅を図るわけである。

実際殆どの敵部隊は補給線を叩きつつ防衛線を構築される前に方位殲滅してしまえば良い訳である。

場所によっては遮蔽物の無い開けた場所であったりするから、密林

に覆われた場所よりも遙かに大軍の展開が容易であり、戦車が活躍しているのも一つの要因だろう。

敵の豪州に展開する戦力は全て合わせて百万に上ると見積もられていたが、機動力に勝るこちらが包囲殲滅をあちこちで行っているのが現状である。

とは言え全てが順調と言うわけではない。

進軍速度が予定よりも遙かに速い為に補給が追いつかないのだ。

我々は進軍速度が遅れる予定を立てることは今までの経験から慣れているが、予定よりも速い速度での進軍予定は立て慣れていないと言う弊害が諸に出してしまった訳である。

そこで陸路での補給はどうやって間にも合わないのか何時もの如く、最早我が軍お得意となっている空中投下による補給を行っている。

所定の地点を予め連絡によって定めて、そこに空中投下で様々な物資を投下していくわけである。

補給は海軍の所轄とは言えども、奪還したポート・ダービー近郊の飛行場を大急ぎで昼夜貫行での整備と拡充、そして連山が豪州に進出していなくなったらまず出来ない芸当である。

スラバヤから豪州までの距離だと、補給物資を満載した状態では沿岸部辺りまでしかカバー出来ないからな。

Eイティ・マイル・ビーチの飛行場には陸軍の飛行戦隊が続々と進出している。

制空権は飛行場の整備と陸軍飛行戦隊の進出が完了するまでは海軍母艦航空隊が保持し続けていたが、喪失機材が多く補充をしなければならぬ頃合いであったから今は内地から機体を搭乗員によって直接空輸で運んでいる最中だ。

輸送機で内地まで戻って、3日間ほど掛けてカリマンタンまで来たら、輸送船団の護衛を行う各艦隊と合流するわけである。

搭乗員の補充は終わっているが、失った機体が多すぎるのでそれらの補充に苦労した。

まあ搭乗員達は内地に機材受領のついでに休暇を与えておいたから、英気は十分に養えたであろう。

損傷艦艇の修理も、1航戦以外は全て終了しており戦線復帰している。

1航戦の4空母は修理に2か月、人員補充に2週間、訓練に1か月ほど必要とするらしく、それさえ終われば幾らでも戦えるとのことだ。

まあそれは特段問題ではない。

問題は、太平洋での敵の動きが活発化していることだ。

特に警戒をしていたパラオでの敵の動きがここ1週間で以前の4倍ほどにも通信量が増え、大規模、と言うほどでもないが10隻の船団と18隻の船団の入港が間を置いて確認されている。

恐らくパラオをこちらに対する前哨基地、監視の要とする為と考えられるがこれの対応をどうするかが問題だ。

着実に兵力増強が図られているようで、潜水艦隊に命じて通商破壊による封鎖を試みているが効果が表れる頃にはパラオは立派な要塞島になる。

しかも敵護衛艦隊は対潜戦闘に秀でている艦が多いらしく、警戒も厳重で中々手出しが出来ない。

潜水艦隊の戦果は1か月で2隻のみ。

それも敵の護衛駆逐艦を沈めただけで輸送船団は全くの無傷だ。

パラオの飛行場が全力で稼働し始めたら、B-17やB-24と言った4発重爆が連日連夜、フィリピンに対して雲霞の如く押し寄せてくるのは明白だ。

今動けば、敵に要塞化される前に叩いて尚且つこちらが太平洋、それこそマリアナ諸島に対する前哨基地を得ることが出来る。

マリアナ諸島との位置関係を考えれば硫黄島と同じ程度の対空監視役割に加えて、前々から知られていた大規模な泊地としても利用しようと思えば可能だ。

B-29などが飛来するから、艦隊を常駐させることは出来ない

が、それでも輸送船団を、少なくとも敵潜水艦の脅威の外にある環礁内に収めて安全に荷揚げが出来る。

艦艇修理施設などは備えていないが、言ったように数百隻単位での入泊が出来る泊地と規模の大きな飛行場を幾つか手に入れられる。

それに電探や二式大艇を配備すれば警戒網を前進させると共に大きく広げることが出来るし、二式大艇であれば直接マリアナ諸島への偵察だけでなく多少の爆撃も行える。

そうなれば敵の本土爆撃の手が少しは弱まるであろう。

戦略的に見て確かに価値があるのは間違いないが、問題はそこではない。

こちらに投入することの出来る戦力が少ない事だ。

艦隊は船団護衛任務から引き抜いて、空母3隻と戦艦4隻、随伴艦ぐらいは揃えられるが問題は上陸部隊だ。

陸軍は豪州奪還で手一杯だから割ける戦力は少ない、と言うより殆ど無い。

となると豪州上陸戦で戦った以降は内地や沖縄での訓練に従事し、全く余力のある海軍陸戦隊を投入するしかない訳だが、こちらも十分な兵力があるとは言い難い。

輸送能力の関係で精々3〜4個連隊2万人を投入出来るかどうか、と言ったところだ。

これでは全く兵力は足りておらず、予備兵力を考えてももう1個師団は欲しい。

それに陸戦隊だけでやるにしても4個連隊だけと言う彼らを運ぶ輸送船も足りていない。

南方方面と日本本土、そして豪州を結ぶ輸送で輸送船は殆どが駆り出されており重火器や各種機材、食料水、武器弾薬、燃料に医薬品を含めて運ぶとなれば相応の規模が必要だ。

艦隊への補給を含めても第1補給艦隊丸々に、50隻ほどの輸送船は確実に必要になる。

これらをどうやって都合付けるのかが大きな課題になる。

日本本土近海での輸送任務に従事する輸送船を引き抜けば、まあど

うにかなるかもしれないがそうになると日本の物流が滞る。

中代大将達は、パラオ奪還作戦に関しては実施するか否かをこちらに任せるとのことだが、これからのことを考えるならば、被害を最小限に止めるなら今やるべきであろう。

「さて、パラオ奪還作戦に関してだが……」

作戦会議を開く。

艦隊司令部の面々に加えて、艦娘何人が参加している。

「やれるのならば、やるべきでしょう。パラオを敵に要塞化、重要拠点化されては喉元に刃の先を突き付けられているも同然です。幸いにも敵陸上兵力は2個連隊ほどですし、要塞化も進んでいないようです。確認されている敵艦隊もどれだけ多くても空母4隻、戦艦3隻程度です。同程度の戦力を割けば十分に奪還は可能と考えます」

作戦参謀がやるべきだと言う。

「抽出出来る戦力はどれぐらいになるかによるのではないか？ 私達はやれと言われれば勿論やるし、艦隊に問題無い。だが陸上兵力が問題だ。1個師団程度じゃあの島は落とせんぞ」

「今のところ4個陸戦隊と、陸軍に取り合えずのところ作戦実施をする場合は3〜4個連隊の抽出を取り付けてある。二個師団程度の戦力は用意出来る」

長門からの質問に対して、俺が答える。

それならば、と唸る長門だがその戦力を豪州に投入して作戦を早期に終わらせるべきでは無いのか、と言う表情だ。

議論は交わされるが、賛成反対の割合は半々程度だ。

「提督、作戦には具体的にどの程度の艦隊戦力を割かれるお考えでしょうか？ 奪還後の輸送航路上での護衛や維持に用いられる兵力を

概算でも良いのでお教え頂けませんか。それによつては、私達の意見が賛成か反対は大きく変わります」

加賀による投入戦力の質問に、少し考えてから答える。

「……豪州向けの船団護衛もあるから、パラオへの船団護衛は第一補給艦隊に任せる。場合によつては戦艦1隻を混ぜても良い。主力部隊は空母2く3隻程度と戦艦も3隻ほどで良いだろう。護衛は各水雷戦隊から秋月型を中心に数隻づつ引き抜くと言う形を取りたい。これで十分だろう」

「……それぐらいであれば、私としては賛成します。敵艦隊も先の海戦で痛手を負っている筈ですし、大きく懸念すべきは基地航空隊だけかと」

次に手を上げたのは護衛艦隊旗艦である鳳翔だった。

補給を司るだけあつて、その質問は的確かつ鋭い。

「提督、問題は作戦を行うか否かではありません。奪還した後の同地の維持を如何なされるのかと言う事です。私達護衛艦隊は既に1機艦の手を借りなければならぬ程に手が足りていません。新しくそちらへ補給を行わなければならぬ、となれば護衛艦隊旗艦の私としては補給に関する責任を持つことは難しいと判断します」

「それに関しては、駐留させる戦力を2個連隊と1個独立工兵大隊として、索敵用に二式大艇を数機、基地航空隊を配備するとしても1個航空隊ぐらいが限界だろう。作戦発動と同時に資材を搬入して早急に要塞化を進める。補給には第一補給艦隊にタンカーと輸送船を4隻づつ新規に配備して、そのまま充てようと考えている」

「それがギリギリですか……。分かりました、私は賛成します」
鳳翔の意見は実に正確に的を射ていた。

実際補給の問題はあるし、展開することのできる部隊はそう多くは無。無い。

陸海軍共にその主眼が、今は豪州にある以上パラオ奪還に投入する兵力は必要最小限に止めておくべきだ。

その後幾つかの議論が交わされた。

「提督が決定されるだけです。やれと言われれば私達は全力で事に挑

みましょう」

「……やろう。犠牲が少なく済むのならそれに越したことは無い。作戦準備に取り掛かってくれ」

「了解しました」

結果としてパラオ奪還作戦は実行されることになった。

「提督、一つ宜しいですか？」

「どうした、鳳翔」

「奪還後の駐留戦力を少なく抑えるのならば、索敵用の二式大艇のみの配備に留めて基地航空隊は配備しないでおくと言うのは？硫黄島と同じ役割を持たせると言うのなら戦闘機の配備は過剰戦力となつて補給を圧迫するだけです。優先すべきは索敵網と警戒網の早期構築でしょう。ならば変わりに電探を配備する方が堅実かと」

「基地航空隊無しで防衛に関してどうする？」

「1個基地航空隊程度では、敵が本気で奪いに来れば大した抵抗も出ないでしょう。敵だつて奪われれば黙ってみていることはしません。空襲なりで打撃を与えに来るはずです。それで兵力を損耗するぐらいならば、割り切つて戦闘機の配備を諦めるのも一つの手段です。敵重爆相手には耐え、敵艦隊が現れればこちらも艦隊を出すぐらいでも宜しいかと思われます」

「なるほど……。しかしそもいかに」

「何故でしょうか？」

「将兵の精神的な理由だ。自分達の頭の上を守る戦闘機が一機も無く、ひたすらやられっぱなしと言うのは中々辛いものがある。パラオの奪還をした意味が無い。ならば多少なりとも戦闘機は置いてやらねばならない。敵の攻撃が激しく損耗が大きくなると予想される場合は、航空隊を後退させるつもりだ」

「……分かりました、提督の御決定に私は従います」

どこか納得がいけないと言うか、不満そうに頷く。

パラオをただの前線哨戒基地にするなら最低限の人員でも良いが、

あそこは立地上そうもいかない。

泊地としても利用可能だし、飛行場の適地も多い。

あの規模の島々を維持して守るとなれば陸海軍合わせても3〜4万人ほどの人員は必要になる。

そこを守るのに、戦闘機が居ないと言うのはかなり問題だ。

それにフィリピン向けの輸送船団が太平洋側を通る事が出来るようになれば、日程の短縮に繋がる。

そうなるかどうかしても戦闘機を置いて、二式大艇や水上機を多数配備して船団護衛と共に海域の安全確保に努めねばならない。

「すまないな、鳳翔」

「いえ、私こそで出過ぎた真似をしました」

「いや、いい。これからも同じように意見してくれ。でなければ俺はやっていけないからな」

「はい、承知しました」

幾つかの詳細を詰め、2週間後に作戦を行う事が決定された。投入兵力は以下の通り。

臨時編成パラオ攻略艦隊

空母

隼鷹 飛鷹 大鳳

戦艦

大和 長門 日向

重巡洋艦

摩耶 愛宕

第6水雷戦隊

軽巡洋艦

矢矧

駆逐艦

秋月 照月 若月 宵月 霜月 花月 涼月 春月 初月 満月

第7水雷戦隊

龍田
驅逐艦
雪風 浦風 有明 海風 江風 峯雲

上記の艦隊は臨時で編成されているので、作戦終了後に解隊、各艦は原隊へ復帰し船団護衛任務などに従事する。

6水戦は艦隊防空任務に、7水戦は対潜警戒と万が一の砲雷撃戦に備えての編制になっている。

愛宕、摩耶は高角砲を全て10cm連装高角砲に換装し、機銃を大量に載せている。

更には3番主砲塔を撤去し変わりに10cm連装高角砲4基、37mm機関砲2基と20mm4連装机銃を4基を増設している。

砲火力そのものは低くなっているが、その分対空火力は大きくなつたし10cm高角砲を片舷2基だから投射火力は増えている。

艦隊防空戦力としては、相当なもので要として十分に働いてくれることを大きく期待している。

秋月達を含めれば、対空火力は臨時編成とは言え最高峰になるだろう。

輸送艦隊

第一補給艦隊

軽空母

千代田

重巡

加古

軽巡洋艦

名取 鬼怒 大井

駆逐艦

白雲 有明 長月 荒潮 親潮 黒潮

磯風 時津風 山風 初春 若葉

給油艦

神威 速吸 鷹野
龍舞 塩瀬 高崎

給料艦

間宮

タンカー6隻

輸送船6隻

海軍特別陸戦隊4個連隊約1万3000名

海軍第3特別陸戦隊

海軍第7特別陸戦隊

海軍第10特別陸戦隊

海軍第13特別陸戦隊

海軍陸戦隊輸送部隊10隻

揚陸艦

あきつ丸（海軍陸戦隊1個連隊搭載）

神州丸（海軍陸戦隊1個連隊搭載）

輸送船4隻（2個陸戦隊と、武器弾薬食料水医薬品を2隻づつ）

輸送艦4隻（重砲、戦車を2隻づつ）

陸軍4個連隊約1万4000名

陸軍第23連隊

陸軍第105連隊

陸軍第142連隊

陸軍第201連隊

陸軍部隊輸送船団64隻

各連隊毎

戦車中隊 輸送艦2隻

歩兵連隊 輸送船1、輸送艦2隻

砲兵大隊 輸送艦3隻

対空戦車大隊 輸送艦4隻

整備大隊 輸送艦2隻

工兵中隊 輸送艦2隻
計86隻

海軍陸戦隊は、今回は重火器の配備を限定しての作戦参加となつた。

陸軍も戦車大隊を3分の1に、自走対戦車砲中隊無しの編制となる。

砲兵大隊と対空戦車に関しては、火力と防空能力の手っ取り早い強化と維持のために数はそのままだ。

結局50隻どころか80隻を超える大船団を編成しなくてはならなくなった。

本土近海で輸送任務に従事している輸送船や輸送艦を大分引き抜いての編制だ。

寧ろこれで済んで良かったと思う。

戦車や対戦車自走砲を編成から外さなかったら間違いなく1000隻を軽く超えていただろう。

給油艦6隻全ては艦隊への補給を目的とし、タンカー6隻の内3隻は陸軍と陸戦隊向けだ。

タンカー1隻と輸送船の内2隻ほどはパラオと本土を結ぶ輸送に従事することが決められている。

作戦終了までは艦隊もパラオ近海に留まらねばならないし、艦隊だけでも数万人を軽く超える人員を擁している。

攻略艦隊だけでも2万4000人を数え、輸送艦隊は1万2000名になる。

合計して3万2400人、そこに陸軍と陸戦隊が加わるのだから、凡そ7万人を超える兵士達の腹を満たさねばならない。

とは言えども、実は食事と言う面だけで見れば間宮1隻で殆どを賄えるのだ。

当初1万8000人分を3週間輸送することが出来たが、改装によつて今では2万人分の食料を3週間運ぶことが出来る。

改装と言つても、中々に大工事で艦体を延長すると言ふものだ。高速力を発揮出来るように機関部を入れ替え、防空能力を大幅に向上させる際に、それぐらいやるなら艦体延長と搭載能力の向上をしたわけである。

165mにまで艦体を延長することによつて搭載能力は食料水2万人分を3週間の搭載が可能だ。

栈橋が無い場所への揚陸をする為に大発を6隻甲板上に搭載している。

給油艦6隻の搭載能力も併せれば、実は7万人分の食料水を賄うこと自体は可能なのだが、これがまた軍隊と言ふものの面倒なところで備蓄もせねばならないのだ。

この備蓄量を考えると、どう考えても流石に足りない訳である。そこに武器弾薬や燃料、医薬品まで加わるわけだから、どうやっても輸送船は必要になる。

特にパラオは奪還した際、敵の猛烈な攻撃を加えられる可能性もあるので、対空砲や機銃、敵上陸に備えた防御陣地などの建築資材の輸送も平行して行わねばならない。

何時になつても補給問題は常に最重要でありながら、同時に頭を悩ませる大きな難問だ。

輸送船の中には欧州組の輸送船の内の4隻、ヴェーザーラント、ハーフェルラント、レーゲンスブルク、ブルゲンラントが含まれている。

彼女らは日本へ多くの機材や設計図を運んできてくれた武勲艦であることは間違いなく、今までは本土近海での輸送任務に従事していたが今回久方ぶりに外洋での任務に参加することになる。

予定を1週間先延ばしにしての準備を終え、艦隊が出港する。

偵察によれば、今は敵艦隊はパラオには居ないようで、いたとしても主力艦が精々3〜4隻程度に随伴艦とのことだ。

先行して第1潜水艦隊を周辺海域の偵察、敵艦隊の動向を監視させている。

今のところ何の報告も無いので、特に問題は起こっていないようだ。

今回乗っている艦は隼鷹である。

今回も敵機との戦闘は起きるだろうし、通信設備も整っている。

空母艦載機は、対潜と対地用に流星を各艦12機、ついに彩雲4機、つ、残りは全て戦闘機で固めている。

空母の数が少ないから確実に制空権を握る為に戦闘機を多く搭載している。

「はてさてこの作戦、吉と出るか凶と出るか……」

「大丈夫だつて、提督の指揮の下なら成功するつてば」

「買い被り過ぎだ。戦争に絶対は無い。今まで勝てたのは、皆の献身努力と運があったからだ。俺の力など微々たるものだ。それよりも、敵艦隊の動向が気になる」

「敵艦隊の動向は、6時間前に伊401から敵艦隊出港の電文が送された以降、一切不明です」

「それに、大型艦の推進音7、と言うのも……。事前情報では大型艦が4隻程度とされていた筈ですが……」

「敵がこちらの作戦に感付いた他あるまい、その上で戦力も強化したのだろう。問題は陣容だ」

参謀長が話す。

実は今より6時間ほど前に敵艦隊がパラオ泊地を出港した旨の緊急電が伊401より送されたのだ。

これ自体は別段問題があるものではない。

敵が来たら迎撃を試みると言うのは極々自然なものだ。ただ、気になるのは大型艦の推進音が7と言う報告だ。

事前の偵察によれば多くても大型艦4隻程度であったが、実際は3隻も多い。

増強された戦力が空母にせよ戦艦にせよ、全く侮れない。

我が艦隊としては単純な戦力として考えた場合、圧倒的劣勢に立たされているわけだからな。

聴音機の性能向上と多くのデータ収集によって、深海棲艦が発する推進音や機関音は類別することが出来ているので、大型艦、中型艦、小型艦とそれぞれ聞き分けられる。

「流石に全て空母とは考え辛いけど、4隻も居れば臨時艦隊の倍の艦載機を持つてる事になるね」

「ああ、もしかすると今回の戦い、相当大変なものかもしれないぞ」

隼鷹が言った通り、最悪2倍の航空戦力差であればまだいい。

深海棲艦の空母は正規空母であれば100機を超える艦載機を搭載可能だし、軽空母でも50機は余裕で載せられる。

こちらは輸送船団がある以上、千代田の母艦航空隊をこちらの迎撃に回すわけには行かない。

臨時艦隊の航空兵力は234機。

その内186機の戦闘機であるが、流石に厳しいだろう。

一応、念の為に秘策と言うか、まあ手と呼べるのか分からない程度の手は打ってあるのだが、それがどこまで有効かは全く想像し得ない。

パラオまでもうすぐと言うところで、いよいよ緊張が艦隊を包む。

どれだけ多くの作戦に従事して、生き残ったとしても戦うとなれば誰でも気を張らずにはいられない。

敵艦隊が出迎えてくるとすれば、恐らくはこの辺りだからだ。

「艦隊全艦は対空対潜警戒厳、第2種戦闘配置。空母に信号、索敵機発艦準備始め。発艦時刻は今より15分後」

「了解」

敵艦隊を見つけ、奇襲を許さぬ為に彩雲を放っておく必要がある。

「提督、ここはもう敵の懐です。電探の使用許可を頂けませんか」

「許可する。ただし無電封止は継続せよ。可能な限りこちらの行動を

「隠匿する」

「了解しました」

安芸の艦体を調査した結果、深海棲艦は逆探を標準的に装備していることが判明している為に、必要な時以外は使用を避けている。

だから今までも全ての電探を使っていなかったのだが、ここまで来て使わないのは流石に愚かであろう。

「敵艦隊は何処にいるかな……」

「敵艦隊が18ノットでまっすぐこっちに来るってんなら、敵艦隊はパラオから半径110海里以内に居るって事になるさね」

「流石にまっすぐ突っ込んでくることは無いと思うが……、それを元に考えれば攻撃隊が来るとしたら、もう2時間後ぐらいだろうな」

「ここは敵の泊地近くですから、速度を大きく上げて突っ込んでくることも考えられます」

「その場合、どれぐらいの速度を出すと考えられる?」

「タンカーの手配をしているとすれば話は変わりますが、この際それは戦闘があるので除外出来るでしょう。……戦闘行動もあるので、最大で25ノット程度は有り得るか」と

「とすると、最大でパラオから150海里(280km)圏内と言う事になるな」

「はい。艦隊がパラオより325海里(600km)ですので、彼我の距離を考えればあと1時間もパラオに近付けば敵機の攻撃範囲に入ります」

「流石に近いか。」

直掩隊は各母艦より16機つつ出ているが、敵攻撃隊は数波に及ぶだろう。

最初の1波は防げるかもしれないが、その次は難しいだろう。

となれば、追加で直掩機を上げておく必要があるだろう。

「直掩機を増やしておこう。各母艦より追加で12機つつ上げてくれ」

「あいよー」

手早く飛行甲板から発艦していく。

その速さは相当の練度であることを物語っていた。

「例の戦闘機はどうだ？」

「今のところ問題無いか。まあ、実戦でどうなるかは分からんけど」

「まだ試作だが、試験は全て合格している。同乗している航空本部の技術者が問題無しと言うなら大丈夫だ」

「そうかねえ？ま、提督が言うなら大丈夫か。変なもん前線に出したりしないし」

「当たり前だ」

例の戦闘機とは、打った手の一つである。

恐らく感付く者もいるだろうが、これは新型戦闘機陣風の試製である。

既にその開発は最終段階に入っており、今回増加試作として各空母に16機ずつの48機を搭載している。

今は量産性向上の為に小改良や、生産ラインなどを構築している状態で早ければ年末頃には母艦航空隊に配備が始まる。

因みにであるが、陸海軍は共通化の一環として陣風を双方採用することで決定しており、最優先は母艦航空隊となり、次が最前線である陸軍航空隊やパラオとなり、次に本土の海軍基地航空隊となる。

性能は要求値をしっかりと満たしている。

速度は最大719km/hの発揮が可能だ。

防御力も20mm弾に対応したものだし武装は、ドイツ軍機に搭載されている薄殻榴弾を使用出来る新規開発の六式20mm機関銃を翼内6門計1300発を装備しており、1門辺り250発だ。

片翼に3門ずつだが、真ん中の機銃だけ150発、両側は250発の装弾数があるので継戦能力も高い。

片側1門ずつでの射撃も可能となっている。

旋回能力は流石に烈風より幾らか劣るが、速度性能があるので基本的には一撃離脱戦法が基本となる。

とは言え格闘戦も熟せるので、開発期間を考えれば高性能と言えるだろう。

6番から25番までの爆弾か、噴進弾を片翼6発計12発の装備が

可能だ。

攻防整っており、そして航続距離も2500海里と申し分無い。薄殻榴弾は航空機の攻撃力向上のために前々から増産計画があったが、漸く陸海軍に行き渡らせられるだけの生産量を維持出来る生産設備を整えることが出来たので、搭載機銃の開発に踏み切った訳である。

防空の要である震電に搭載出来れば、30mm機銃と同じ程度の攻撃力を得るとともに装弾数を増やすことが出来る。

「そう言えばさ、烈風にもあの機銃載つけてんだろ？」

「ああ、元々計画自体はあったからな。空技廠に頼み込んで六式20mmの搭載機を開発してもらってはいたんだが、そもそも機銃弾の生産が追い付かないってことで結局全く出番も無く何機か作って倉庫に放り込まれていたんだ」

烈風が元々使う20mm機銃は、確かに優れては居たが、一発一撃辺りの攻撃力はどうしても深海棲艦機相手では威力不足は否めなかった。

なんせ深海棲艦機は20mm機銃を食らっても、撃破止まりなんて事も多々あるし当たり前などの場合によっては平然と飛び続ける事もある。

熟練搭乗員なら敵機の弱点部分を狙って撃つ事も出来るだろうが、若年搭乗員では難しい。

そこで搭乗員の練度に寄らなくても問題無いようにするべく開発されていた。

開発自体はスムーズに行われたが、結局機銃弾の生産数の兼ね合いで配備は見送られていたのだ。

それを今回、陸軍の備蓄弾薬を譲って貰うことでどうにか揃えた訳である。

「今ならそれが出来ると」

「ああ。今はまだまだ海軍向けの生産量も少ないし備蓄も殆ど無い。だから陸軍から弾薬を譲って貰った。全機とは行かないが、それでも試製陣風に加えて烈風36機に搭載させられたのは運が良かった」

「そりやまあ、凄いだろうけどさあ、問題はちゃんと扱えるかってことじゃね？」

「機体自体は烈風だが、機銃は別物だからな。2週間程度の訓練でどれだけ扱えるようになっていくかは皆の技量次第だ。試製陣風も習熟訓練中だった者達だからな」

「そこまで急がなくても良かった気もするけどねえ」

「こっちはただでさえ手数が少ないんだ、少ない手数の攻撃力を上げるのは急務だったからな。まあ、何かあれば責任は全て俺にある。心配要らんよ。搭乗員達には無理をするなど厳命しておいてくれ」

「はいよ」

さて、偵察機が敵艦隊進出予想線外苑まで到達するのに、遅くても1時間半と言ったところか。

「今の内に合戦飯を食わせておけ。多分、もう1時間か2時間ほどで戦闘が始まる」

腹が減ってはなんとやら、だ。

第75話

合戦飯を食い終え、1時間半ほどした頃。

「江風より入電！『我对空電探感有り！方位045、距離280km、高度約4000、約350km/h、機数230〜250機！』」

「浦風より入電！『我对空電探感有り！方位091、距離300km、高度約3500、約350乃至370km/h！機数200〜220機が急速接近中！』」

艦隊外苑を守る7水戦が敵機を見つけたらしい。

「方位045の敵編隊を1群、方位091の敵編隊を2郡とし、以降の呼称とする」

「戦闘機は全機発艦、こっちは空母3隻、それも打たれ弱い

「機数が多い、心して掛かれ！」

「提督、試製陣風も向かわせますか？」

「当たり前だ、その為の増加試作機だぞ」

「はっ、了解しました」

「陣風と、薄殻榴弾搭載の烈風は2郡へ、残りは全て1群に向かえ。輸送船団に敵機迎撃開始を打電、警戒させよ」

「はっ」

186機の戦闘機全てが全力出撃だ。

2郡には84機の陣風と烈風が、1群には102機の烈風が迎撃に向かった。

数の上ではそこそこのものだし敵機もただでは済まないだろうが、これが2波3波と続けば不味い。

次々と突破されてしまう。

「この攻撃隊の規模から見て、間違いなく空母が4隻、いや5隻は確実に居るな」

「そうだね。この攻撃隊の機数を考えたらもう1波ぐらい来そうなも

んだけど」

「多分な。残りの2隻は護衛の戦艦と言ったところか」

恐らくは、随伴艦の中に今まで確認されている中でも最も強力な対空火力を持つ、防空巡洋艦辺りが多数含まれている筈だ。

戦艦の対空火力がずば抜けて高い事は言わずもがなであるが、今回はその戦艦が少ないから穴埋めをするために必ず多数いる。

しかもその防空巡洋艦はこちらの20・3cm砲よりも小さく、単発の火力ではこちらが勝る。

しかし15cm砲ほどの口径に加え、優秀な各種装填機構や射撃装置、葉莖方式による装填によってこちらの防空の要である秋月達の主砲射撃速度を凌ぐ。

それに射撃速度が速い事と、初速が速いために対艦火力も高い。

投射火力量と、攻撃力だけでは主砲5基を搭載していた頃の我が重巡組を凌ぐ。

戦艦であれば相手取るのはなんてことも無いが、艦上構造物が軒並み大損害を食らうのは間違いない。

そうなれば長期の入渠を余儀無くされてしまう。

そんなのに守られている空母への攻撃など、攻撃兵力である流星の数が少ない現状では攻撃隊の事を考えれば出来る事ならやりたくないのは事実だ。

「今は防御に徹する他、無いか」

「攻撃隊を編成する事は出来ませんが、対潜警戒中の流星全機を呼び戻し全力出撃としても、36機しかありません。これでは敵艦隊に有効打を与えることは望めないでしょう」

「温存するしかあるまい。対潜警戒の方は？」

「今のところ報告はありません。潜水艦による迎撃網を張っていてもおかしくは無いと考えたのですが……」

敵潜水艦の動向が相変わらず不明だ。

潜水艦はその特性上、敵味方双方の動向を掴み辛いのが、今回ばかりは艦隊に襲い掛かってくるであろうと読んでいたのだ。

なんせ豪州作戦、正確には豪州方面へ向かう我が輸送船団に対する

敵潜水艦の活動が余りにも低調であるから、どこかに隠して別の機会を狙っているのではないか、と考えていた。

仮に温存策を採っていたとすれば、そこにパラオを指す我が艦隊と輸送船団があるのだから、どちらかを狙ってくる考えたのだ。

しかし敵潜は1隻も見つからない。

流星に、こちらに都合が良過ぎるのではないか、と皆が何かの罫であることを警戒しているのだ。

「兎に角今は、敵潜の警戒を怠るな。空襲中ならまだいいが、迎撃隊の収容中に襲われたら堪ったもんじゃない」

「はっ」

「迎撃隊より入電！『我敵機ト会敵、コレヨリ戦闘開始ス！』」

「続けて報告！迎撃隊よりト連送受信！」

「始まったか」

艦隊に到達するまで、迎撃隊を加味すれば30分と言ったところ。

「対空戦闘用意、今回は装甲艦隊とは違って大鳳以外は打たれ弱い。1機も通すな、全て叩き落せ」

隼鷹と飛鷹は正規空母に負けぬほどの能力を有しているが、それでも大鳳や信濃と言った装甲空母と違って兎に角撃たれ弱い。

一応全空母には250kg爆弾ぐらゐならばギリギリどうにかなる程度の装甲が飛行甲板に備えられているが、今の深海棲艦の急降下爆撃は500kg爆弾が主武装だ。

元々の設計が装甲空母ではないから下手に飛行甲板に装甲を施してしまうと、トップヘビーになり過ぎてしまう。

それだと、被弾や波浪の際に復原性能が低下し簡単に転覆してしまう。

バルジがあるとはいえ、ギリギリのところに対250kg爆弾と言わうわけだ。

無いよりはマシ、それぐらいの認識だ。

とは言え、今回も狙われるのは大鳳だろう。

なんせ大和並みに大きい艦隊に加え、飛行甲板は防弾積層ゴムを張り巡らせているから木目では無く、難燃性の軍艦色で塗られているか

ら、それはもう兎に角目立つ。

一度、本土各地の視察で彼女らの上を連山で飛んだことがあるが、大和や武蔵は確かにその巨体故に目立つのだがそれ以上に大鳳と信濃は目立っていたし、なんせ見てしまう。

周りの艦の甲板が木製であるのに、2隻だけが違うのだから目立つて当然だ。

勿論心理的には、どうしても大鳳を狙いたくなる。

デカく、周りと違う見た目をしているからだ。

だから今回も大鳳が集中的に狙われるだろう。

勿論、そのための装甲空母なのだ。

機銃や対空砲は勿論装甲に守られているし、それらが備え付けられているスポンソンは突貫ではあるが装甲で覆っている。

乗組員が露出するのは見張り員や飛行甲板で作業する整備員、応急班などぐらいだ。

大鳳と信濃はその特性故に狙われ易く、そしてこちらも狙われても問題無いように飛行甲板や機銃、対空砲には装甲を施していたが、それ以外の通路など戦闘中に乗組員が行き来する場所は剥き出しであった。

これでは機銃や対空砲を守る事が出来ても、伝令や機銃弾を運ぶ兵士達は守ることは出来ない。

生身では爆風や爆炎ですら致命傷になり得る。

これで弾を運ぶ兵士が死んでしまっただけでは弾が届かなくて結局戦えなくなってしまう。

だからスポンソンやそれらを繋ぐ通路を全て装甲で覆ってしまえ、と言う事になったわけである。

バリクパパンでそれらの改装を修理と同時に受け、今回が初実戦である。

同様の改装は信濃も受けている最中である。

単純な装甲では防ぎ切れないので防弾ゴムと装甲を3層に重ねた多層装甲でもって薄くても機銃弾は十分に防ぐことが出来る防御力を有している。

とは言え爆弾やロケット弾の直撃は防げないので、あくまでも爆炎爆風、破片と銃弾を防ぐのが主目的だ。

「全艦対空戦闘用意！各艦三式弾撃ち方用意！戦艦は距離300に初弾照準、次弾照準250、最終弾は200。重巡は150、次弾100に照準合わせ。軽巡、駆逐艦は100に合わせよ。照準距離に入り次第各艦は撃ち方始め。4号対空戦技の準備」

その命令が伝えられると、各艦の主砲が敵機編隊方向へ向けられ、主砲身は仰角を取る。

100で敵機に対して各艦の対空砲に加え、軽巡と駆逐艦の主砲である10cm連装高角砲が一斉に火を噴き弾幕を形成することになる。

敵機は高速、一々照準を追っているのは狙いなど付けられない。

であるならば、敵機の進行方向の空域全てを切り取るようにそこに対空砲弾と機銃弾を撃ち込んで網を張り絡め取ってしまう方がいい。

そうすれば全てとは行かぬとも、普通に狙って撃つよりは撃墜は容易になる。

『新たな敵編隊を確認、方位063！距離290km、高度3500！4000！速度約370km/h、機数約150！』

「やっぱりまだ居たかア」

「迎撃隊は、艦隊が対空射撃開始後、速やかに第3群の敵機編隊を迎撃するよう打電」

「やっぱり空母3隻じゃ5隻の敵空母相手はきつついねえ」

「敵機を全て叩き落してしまえばいいだけのことだ。艦載機の無い空母はただの浮かぶ箱でしかないのだからな」

「そりゃそうだ」

「迎撃隊より入電、『敵敵第1群約100機艦隊へ向かう、警戒サレタシー！』」

「迎撃隊より更に入電！『敵第2群約70機迎撃ヲ突破、艦隊二向かう、警戒サレタシー！』」

どうやら、試製陣風と薄殻榴弾搭載型の烈風は遺憾無くその威力と

実力を発揮したらしく、数は少ないながらも3分の2を撃墜破したらしい。

薄殻榴弾の攻撃力は折り紙付きで、敵の4発重爆でも主翼を狙えば一撃で叩き落せるし、胴体でも当たり場所と命中した弾数によっては機体が真つ二つになるほどの威力だ。

問題は、数を揃えられていないと言う点であるが、それも解決の目途は立っている、と言うより既に生産工場は多数が建設済みで、後は陣風の生産と烈風の改装を施せばよいだけだ。

敵機の来襲を構えていると、戦艦3隻の主砲による対空射撃が始まった。

その砲声は何時もと違い3隻だけではあるが、あまりにも大きくそして頼もしいものだ。

距離は離れている筈なのに、身体の内側を揺さぶられるような衝撃と音は何度体験しても慣れることは無いだろう。

双眼鏡で覗くと、弾着と同時に30km先の空に次々と三式弾が炸裂し周囲を3000度で焼き払う。

結果的に30機ほどを撃墜破させる事が出来たが、70機がこちらへ突っ込んでくる。

艦隊の対空砲の射程に入ると、陣形外苑の駆逐艦から次々と10cm連装高角砲が発砲炎を次々と噴かす。

硝煙によって辺り一帯が煙くなっているのは何時もの事だろう。

双眼鏡を覗くと対空砲の弾幕に絡めとられた敵爆撃機が次々と落ちていくが、全てと言う訳ではない。

低空から迫る敵雷撃機には大量の機銃火箭が伸びている。

「上手い事機能してるみたいだね」

「ああ」

この対空射撃の肝の部分は、単純なものだ。

1機事に狙いを付けられないと言うのならば、空域を切り取るように敵機進路上に機銃、対空砲弾を大量にばら撒き、絡め獲る。

とは言えこの対空射撃の本来の目的は、敵機の撃墜では無く敵機の

妨害にある。

C I W S の様に火器そのものが高性能なレーダーや射撃指揮システムに制御されている訳ではない、今の艦隊は結局装填を自動化しても照準や射撃は人力に頼らねばならない。

しかも電力で動いていると言っても、やはり最高速度に近い速度で突っ込んでくる敵機に照準を付けるのは至難の業、しかもそれが回避を行いながらなのだ。

予測進路を立てる事がどれだけ難しい事か、当事者にならなければ到底理解し得ない。

そこで、敵機を撃墜すると言う考えではなく敵機の攻撃さえ阻止してしまえば良い、と発想そのものを大きく変えたわけである。

結局のところ、敵機に爆弾や魚雷を捨てさせるか突入を妨害して失敗させてしまえば、無力化となる。

撃墜そのものに固執しなくても、より有効に対空火力を迅速に目標へと割り振り、早期の無力化が出来る訳である。

これの発案者は艦隊防空の要の一翼を担う涼月だ。

元々彼女を始めとした防空駆逐艦に類別される艦娘達は、砲雷撃戦に置ける戦技研究に対しては他艦隊に任せ、要とされている対空、防空にその全てを注いで貰っていたし、彼女達もそれが本懐である、として乗組員一同航空機の脅威を、実戦や演習で嫌と言うほど叩き込まれた連中だからこっちが引くぐらいの熱意を以て当たってくれていた。

ただ、その彼女達でもやはり次々と高速化する敵機への対応には苦慮するしか無く、どれだけ図上演習や洋上を重ねても一定以上の効果を発揮する事が出来ないでいた。

想定している状況の中でも、特に厳しいのは戦闘機による航空支援、所謂エアカバーが無い時は兎に角酷い、と秘書艦を務めていた時に聞いたら零していた。

船団護衛任務を、エアカバー無しの状況とし、その状況で敵機に襲われた場合を想定した。

洋上演習では20隻の船団を護衛した状況を作り、護衛には秋月達10隻を筆頭に戦艦4隻、重巡3隻、軽巡3隻、駆逐艦6隻の計26隻による護衛艦隊を編成し、護衛に当たった。

護衛戦力としては、額面上の数は輸送船団よりも多い数であるから中々充実した戦力と言えよう。

まずもって中々無い状況下の、数だけで見ればかなり良い条件の船団護衛任務だと言える。

開始された演習は、攻撃側空母4隻と戦艦2隻が参加した。

他には重巡が2隻に一個水雷戦隊と、機動部隊にしろ船団攻撃任務にしろ、ごく普通のなんら特別でもない編成と言える。

敵機は3波に分かれての計360機、1波当たり120機ほどと空母対空母の戦いからすればそう多くは無い機数ではあるが、輸送船の足に合わさざるを得ない最高速度25ノットの航空支援の無い輸送船団にとっては「死」そのものと言ってよい。

輸送船団にこれほどの戦力を出すのか、と言う疑問であるが、恐らく軍事教育をしつかりと受け、補給の重要性を重く認識している指揮官ならば例え正規空母を含めた艦隊を投入してでもこの船団を叩く筈だ。

なぜなら、この20隻の船団に、例えば食料や水、燃料弾薬各種部品が満載されていたとして、その送り届ける先が戦況逼迫下にあり、『その補給があれば適切な治療で傷病兵を救うことが出来、戦線復帰や必要ならば後送と将兵の命を救う事も、そして戦線崩壊そのものを防ぐことが可能である』

と想定すれば、正規空母や戦艦を何隻も投入してでも叩く優先順位度は遥かに高い。

想定し易い状況下としては、かの大戦におけるフィリピン決戦や、それこそガダルカナル攻防戦を想定しても良いかもしれない。

いや、戦略上の重要度を考えればマリアナや硫黄島の方が正しいかもしれない。

これらの戦いも、海上での戦いはまだしも陸上の戦いは、特に初期

段階での航空兵力は、米軍側250〜300機、日本側170機と語られるほど旗色の悪い戦いでは無かった。

寧ろやりようによっては各地から精銳を掻き集めた部隊でもあったから十分に可能性は有り得たと言えなくもない。

これに十分な補給と増援があれば、戦いに勝つことは出来なくても最低限拮抗状態に持ち込める。

そう仮定した場合、輸送船団の重要度は遥かに高くなる。

この輸送船団を叩けば、真っ向から戦った場合、陸戦で消耗する兵力や装備、時間等と考えればその損耗を被らずに、もしくは遥かに少ない損耗で突破が出来ると考えれば戦果は単純に戦艦を何隻沈めたとか、空母を何隻沈めた、敵機を何十機落としたとかよりも圧倒的に戦略や戦術上での意味は大きい。

後々の戦いに、損耗しなかった分の兵力をそれだけ投入出来るし、物資の消耗も抑えられるから作戦の前倒しやより入念な作戦準備に作戦立案だって出来る。

360機もの航空機を投入する物量はあるのか、と言われれば深海棲艦の物量であれば、全く可笑しくない規模の航空攻撃だ。

実際問題、スラウエシ島を奪還するまでの、輸送船団に対する攻撃はこの想定すら甘い、倍の数による攻撃などザラであったのだから、母艦航空兵力だけでも十分に捻出は出来るだろう。

それに、航空支援が無い艦隊への攻撃など、実戦経験の乏しい新兵達からすれば貴重な実戦経験に加えて敵艦隊を撃滅したと言う確固たる自信を与えることになる。

自信過剰や自信欠乏と言うのは毒であるが、適度な自信を持つと言うのは悪い事ではなく、これが敵にあった場合なんとも恐ろしいことだ。

結局この洋上演習の結果がどうなったか、と言うと輸送船団20隻中18隻が轟沈、残る2隻も大破によって物資全損と言う、消滅に等しい損害を被った判定を下された。

戦艦が4隻居ようが、船団よりも多い数で護衛しようが結局航空機

による波状飽和攻撃の前では全く無力に等しいと言う事が証明された訳である。

護衛艦隊も殆ど大打撃を被り、生きて帰ってこられたとしても向こう1年は行動不能の痛手だ。

この演習で得た戦訓は、例え30機程度の少数であろうと空母乃至基地航空隊による航空支援は必要不可欠、そして従来の方法では艦隊防空、特に艦隊による対空戦闘は効果薄と言う重大且つ早急に対策をせねばならない、と言うものであった。

結果として、防空の要を担う秋月達防空駆逐艦と各艦種より2名づつを出した防空戦技科が本格的に組織され、そこで防空、対空戦闘の研究が始まることとなる。

そこで涼月が考案したのが、今我々が行っている対空射撃だ。

正式な名前は付けられていないが、仮称として四号対空戦技と呼ばれている。

今のところの問題点としては、消費弾薬が多い事と、確実に防ぐには戦力不足であることぐらいだろう。

実際火力不足であることは事実であるし、結果として先の海戦で一航戦は防空網を飽和攻撃によって突破され、軒並みやられている。

解決策は単純に、各艦の対空火力を増強することであるが、これは無理だと言わざるを得ない。

現状各艦には運用上の問題が出ない程に機銃や対空砲を所狭しと増設しているのだ、これ以上やるとなれば運用に支障を来たしてしまう。

今のところの案としては、重巡か軽巡の中から数隻、防空特化に改装を施しては、と言う案が出ている。

主砲を全て降ろして、その代わりに連装高角砲や機銃を載せる訳である。

こちらの方が現実的であるし、何より実現そのものが十分に可能であると試算されている。

問題と言えばどの艦が、その改装を受けるのに適当であるのか、と

言う事だ。

重巡にしろ軽巡にしろ雑に選んでは意味が無い。纏まった数を搭載可能で、何よりも艦隊防空の要を担い易い艦でなければならぬ。

砲戦火力が減ってしまうのは不味いのではないか？と危惧する者もいるが、結局航空機による夜戦が可能になった今、砲雷撃戦を態々挑んでやることも、挑まれてやる必要も無い訳だ。

ならば33隻とそれなりに纏まった数の巡洋艦の中から数隻ぐらいを防空巡洋艦にしてしまっても良い、と言う考えだ。

護衛艦隊、補給艦隊の3個艦隊に編成されている重巡乃至軽巡を1隻づつ、1〜3航戦に編成される重巡を1隻づつ防空巡洋艦に改装することが検討されている。

重巡は主砲20・3cm連装砲と水上機を全て降ろし飛行甲板も廃止、代わりに10cm連装高角砲を前部3〜4基、後部3〜4基をそれぞれ搭載する。

これで既に搭載されている片舷側4〜5基から、前後部3基づつとしても戦闘時には片舷11基にまで増える。

搭載した16基の10cm連装高角砲は、秋月型駆逐艦4隻分に匹敵し、対空火力不足は完璧とは行かずともかなり解消されるだろう。

今の我が軍の信管技術では言い方は悪いが極論、数撃ちや当たる、方式に頼らねばならない。

今のところ考えられているのは、重巡の中での候補として愛宕、摩耶、鈴谷、熊野、青葉辺りだ。

軽巡では能代、阿賀野、矢矧、酒匂辺りが適当ではないかとしている。

実際に改装が行われるのは、恐らく豪州作戦中盤以降、ある程度戦いが落ち着いてから順次となる。

敵機が侵入してくる進路へ、大量の砲弾と機銃弾がばら撒かれる。

どうやら多方向からの飽和攻撃を意図していたらしいが、正確な防空指揮の下で各艦の対空砲火が敵機に襲い掛かるから、殆ど艦隊外苑で食い止められている。

時折侵入してくる敵機もいるが、近距離での火力を担う25mm、20mm機銃の大量の火箭に絡めとられて投弾前に海の藻屑になっている。

空が一面黒煙で覆われ、これでよく狙いを付けて敵機を撃てるなど思ってしまうほどだ。

「敵機直上！」

「高高度からの侵入で取り逃がしたか！」

「機銃指向急げ！狙いはアタシら空母だよ！」

敵機の進路から推測するに、どうやら狙いは信濃らしかった。

「敵機急降下！目標信濃！」

「信濃艦上に弾幕！登弾を妨害しろ！」

信濃の真上に、とんでもない量の弾幕が形成される。

艦隊内側を向いている機銃の殆どがたった数機の敵機に対して射撃しているのだ。

当然、火箭に絡めとられた敵機が次々と火を噴く。

「敵機投弾！」

「問題無い、あんなフラフラで投下したんじゃ当たりやしないよ！」

隼鷹が声を張り上げて次の敵機を狙うように指示を出す。

敵機が投弾した爆弾は、言った通り信濃よりも50mほど外れたところに大きな水柱を立てるだけで終わった。

「信濃より入電！『我敵機ヨリ3発ノ投弾ヲ受ク。ナレド損害無シ。援護ニ感謝ス』以上！」

「迎撃隊より入電、『我敵第3群トノ戦闘開始ス』！」

今のところ、被害は無い。

上手い事艦隊防空が機能してくれている。

「敵第2群急速接近！」

「対空砲、指向急げ！艦隊外苑で食い止めろ！」

空一面、真っ黒な黒煙で覆われ真っ赤な火箭が敵機に向かって伸び

ていく。

勿論それで敵機の大部分は攻撃を諦めて爆弾や魚雷を投棄して逃げていったり、撃墜することが出来るがそれでもうまい事対空砲火を掻い潜って艦隊に近付いてくる敵機もいる。

「敵雷撃機6、突っ込んでくる！」

「目標は日向の模様！」

「日向より入電、『我コレヨリ個艦回避運動実施、衝突ニ注意サレタシ』！」

「魚雷を見逃すな、確実に位置方位を伝達！各艦への報告も忘れるな！」

日向の艦首が向きを変える。

そのすぐに敵機投弾の無電が日向より発せられた。

どうやら輪形陣中心の、敵機に対して最も近い位置にある日向が狙われたようだ。

艦首を右に大きく振りながら、日向は回頭するが、6機同時に、それもどうやら投下の際それぞれの魚雷が絶妙に違う角度を付けての投弾だったらしくその内の1発が日向の右舷中央後部に命中、艦橋よりも高い大きな水柱を上げた。

被雷した衝撃で日向の対空砲と対空機銃が一瞬撃つ手を止めてしまった。

そこを、練度がある敵機は見逃しはしてくれなかった。

被雷した日向を集中的に攻撃を加え始めたのだ。

第2郡の残りの敵機約30機が全て日向に向けて突っ込んでいき、次々と周りに爆弾の水柱が上がる。

「日向上空に援護射撃！好き放題させるんじゃないよ！」

「敵機第3群、急速接近！既に対空砲の射程内！」

「撃ち続ける！」

最後の敵編隊にも、猛烈な射撃が浴びせられるが、それでも全てを撃墜とは行かない。

結局二十数機の突破を許し、爆弾の直撃と被雷をして黒煙を上げる日向に攻撃が集中することとなった。

「日向、速力低下、26ノット!」

速力も既に大分低下している。

回避をするのも一苦労だろう。

「日向、更に被弾2!」

「日向への被雷1を確認!速力低下!」

次々と被弾と被雷の報告が上がってくる。

「耐えろ、日向……!」

水柱で日向の姿が、何度も何度も隠されるほどに攻撃は激しかった。

結局、空襲をどうにか日向は切り抜けたが、左舷に1発、右舷に3発の被雷、艦首から艦尾までに掛けてまんべんなく7発の被弾となった。

被雷による浸水によって右舷に8度の傾斜がある状況であった。

これではどう考えても作戦への参加を続行出来る事は不可能だ。

それでもバルジの防御力と決死のダメージコントロール、機関部への浸水だけは死守したことで24ノットの発揮は可能であったが、対空機銃と対空砲は被弾の際の断片や爆風で殆ど使い物にならず、主砲こそ4基とも全て射撃可能であったがこれ以上の被弾、被雷は危険であると判断し、春月と満月、有明を伴っての後退を命じた。

兎に角、敵空母の数の予想からして、これで一旦攻撃は打ち止めであろうと判断、最低でも5時間ほどの猶予はあるとし、迎撃隊を収容、すぐさま補給と休息を取らせて次の攻撃に備えさせた。

しかし敵もそれで攻撃を終わらせてくれるような相手ではなかった。

次に攻撃を受けたのは輸送船団だった。

航空攻撃ではなく、敵潜水艦群による攻撃である。

船団を護衛していた千代田の艦載機が比較的離れたところで発見し、即座に対潜警戒態勢を敷いた事で、今のところ被害は出ていないが数が多く何時何が起こるか分からないと言う逼迫状況である。

千代田艦載機は対潜爆弾を装備し、引つ切り無しに発艦しては敵潜

の搜索と爆撃を行い続けているらしく、対潜爆弾の数も余り余裕が無いと緊急電を打って来た。

「今すぐに各母艦から流星を4機づつ応援に出せ。輸送船団がやられるのは不味い」

「了解」

流星に対潜爆弾を装備させ、すぐに発艦させる。

輸送船団は数の割に、護衛をする艦艇の数は多くない。

波状攻撃を仕掛けられては、幾ら航空機があると言っても無傷では済まない。

5時間は猶予があるのなら、流星を出来る限り応援に出しておいた方が良さだろう。

「それともう4機を対潜爆弾を装備させて待機させておけ。今出て行った流星が戻ってきたら、すぐに出すぞ」

「我々の対潜警戒網が薄くなってしまふのでは？」

「こっちは守るべき船団は伴って居ない。攻撃を仕掛けられたとしても、12機の流星がまだある。駆逐艦を含めて考えれば必要最低限の兵力はある」

「こちらは潜水艦の魚雷を一発ぐらい喰らっても何とかなるけど、輸送船はそうもいかない。輸送船団には、戦術の無い兵士を乗っけてんだ、アタシらが責任持って守んなきゃなんないんだよ」

隼鷹が中々良いことを言う。

これでは俺は形無しだな。

まあ、別に良いが。

「敵潜水艦群の数は？」

『今確認されているだけでも、20隻、恐らくまだまだ増えるかと』

無線電話の相手は敵潜水艦狩りを行っている大井だ。

鬼怒とそれぞれ2隻づつ駆逐艦を伴ってあっちへこっちへ潜水艦に対して爆雷を落としまくっているらしい。

「持ち堪えられそうか」

『航空支援があるので、なんとか。ただ、爆雷の数にも限りはありますし、余り長くは続きませぬね』

「この状況じゃ、爆雷の補充も受けられないしな……」

『どうされますか?』

「兎に角、そのまま敵潜水艦を狩り続けてくれ」

『了解しました』

そういうと電話を切る。

大井も昔に比べて随分と態度が柔らかくなったものだ。

今でこそ普通に接してくれるが、昔はまあ、何とか恐ろしいものだった。

「提督、敵艦隊はどうするよ?」

「このままじゃあ、こっちのジリ貧だな……」

どうするか。

このまま受け身で敵機を削るのも可能ではある。

報告によれば、迎撃に出た戦闘機は修理可能な機体ばかりで撃墜こそされていない。

今すぐに敵機が来襲しても120機は迎撃に出せる。

他にも修理と補給待ちの機体が100機。

修理不可能として部品取りと投棄が決まったのが31機。

撃墜された機体が29機で、搭乗員の救助を駆逐艦が直掩機を12機付けて行っている。

120機、それも全部烈風と試製陣風だから対艦攻撃能力は精々翼下に懸架出来る噴進弾か、胴体下に25番が1発。

敵艦隊に対する物としては、余りにも不足し過ぎている。

なにより防空を主に考えていたから50番こそ100発ほどあるが、25番は補給で受け取ればよいとして第1補給艦隊に殆ど積載している。

弾火薬庫の中には25番が30発と碌な数が無い。

それともう一つ別の爆弾の様なものもあるが、あれに攻撃能力は一切存在しない。

噴進弾は対地攻撃用にかなりの数を積載しているが、これで撃沈出来るのは駆逐艦ぐらいだ。

かといってこのまま敵機が来襲するであろう4時間後を呑気に

待っていられるほど、輸送船団に余裕は無い。

「隼鷹、あと1時間でどれだけの烈風と試製陣風を揃えられる？」

「んえ？そうだね……。まあ、ざっと各艦合計で50機は出せる、かな」

「そうしたら、あの爆弾を流星に搭載してくれるか」

「ええ？アレ使うの？」

「勿論だ。実験と演習では効果有りだったからな」

「りよーかい。何機出す？」

「4機でいい。護衛に烈風を2個小队付けて、半包围上に、30度の角度を付けて4方向から投下させたい」

「発艦は何時にする？」

「1時間後。それと同時に戦闘機隊も上げられるだけ上げるぞ」

「……あいさー」

成程隼鷹は何をしようとしているのか理解してくれたいらしい。

俺がやろうとしているのは単純な話で、戦闘機隊を使って敵航空兵力を叩こうと言うだけの話だ。

戦闘機隊を敵艦隊方向へ進出させる。

勿論敵は機種など分かるはずもないから、迎撃機を出さねばならぬ。い。

これで正面からぶつかれば、良くて互角で、数的不利は否めない。

そこで敵戦闘機隊を分散させるのだ。

勿論こちらが戦闘機隊を分散させれば敵戦闘機も分散するだろうが、それでは結局意味が無い。

そこでこちらは分散せず、敵機にだけ分散を強いる方法として、陽動を行うのだ。

当然敵だって馬鹿じゃない、数が少なければ艦隊の対空砲火で撃墜出来るから食いついてなんて来ない。

ならどうすればよいか？

単純な話、敵に見えるこちらの機数を多く見せて誤魔化せばいい。

レーダー画面に映る機影と言うのは、基本的にレーダー波の反射を受け取って映し出している。

これはどれだけ精度が良くても、レーダー波を反射する物であれば反射したレーダー波を受け取ってしまうのだ。

それを逆手に取って、敵にこちらの数を多く見せるのだ。

早い話が、チャフの応用だ。

チャフとは対レーダー用のデコイ、囷である。

勿論金属製でレーダー波を反射するから、敵のレーダー画面には敵機が居る様に映る筈だ。

これを使つて、こちらの機数があたかも数百機は居るように見せればいい。

そうすると、敵はどうしてもこれらを迎撃する必要がある。

なんせ、仮にチャフを使つていたとしても本当の敵機かどうかは分からないのだからな。

そうすれば必然的にそれぞれの機影群に対して割り振る戦闘機の数は少なくなる筈だ。

となれば、こちらは本命の戦闘機隊に向かってきた敵戦闘機を叩いた後でチャフに向かって行った敵機を各個撃破すればよい、という戦法である。

このチャフを搭載した爆弾は、10号爆弾と呼ばれている。

防御用のチャフを攻撃用に転用しただけで、実際に攻撃力は全くない。

重量があるから機銃ぐらいなら直撃させれば壊すことはできるだろうが。

大きさとしては80番を流用しているから、大きさは同じだが内部には薄いアルミ片を束ねた、ポンポン状のものが100個入れられている。

これを空中に散布すると開いて、ゆっくりとふわふわ落下していくのだ。

するとレーダーにはこれが反射して映る、と言う寸法だ。

目視するまで何が映っているのか分からない今のレーダー技術なら、十分に騙せる。

投下し終えたら、母体の弾殻をさっさと放り捨てて逃げてしまえば

いい。

一時間後、まず最初に10号爆弾を搭載した流星4と、護衛の烈風8機が飛び立っていく。

すぐに流星1機と烈風2機の3機每ばらけて、敵艦隊へ向かう。

そのすぐあとを170機の烈風と試製陣風が追い掛けるように敵艦隊へ向けて飛び立っていく。

これで敵には600機近い敵機がばらけて向かってくるように見える筈だ。

勿論仕掛けが分からないのであれば大慌てになるだろう。

なんせ空母3隻しかいないと思っている所に、どうやったって3隻どころではない数の攻撃隊が多方向から同時に向かってくるのだからな。

もし俺だったら、撤退も視野に入れるぐらいだ。

ついでに第1潜水艦隊と第2潜水艦隊に網を張らせてある。

混乱の最中に、雷撃を食らわせてやろうと言うわけである。

勿論無線暗号でやり取りすれば、解読するタイムラグはあるだろうが連携は取れる。

1時間後、どうやらこの策は大成功した。

本隊である170機の我が編隊に向かってきたのはたった50機程度の敵戦闘機で、勿論170機に袋叩きにされて全機撃墜。

残る4方向に分散した敵機も精々40機〜50程度で勿論、3倍近い我が戦闘機隊に囲まれて次々と各個撃破されていった。

これを受けて敵艦隊は撤退の動きを見せたが、そこに網を張っていた2個潜水艦隊による雷撃が加えられ、53cm酸素魚雷を数本食

らった敵空母3隻を撃沈。

どうやら他にも何発か命中したらしいが、敵駆逐艦による反撃を警戒して戦果確認は出来ていない。

これで敵艦隊は完全に戦意を喪失したらしく、撤退を開始。

輸送船団を攻撃していた敵潜水艦隊によつてタンカー2隻と輸送船3、輸送艦2が撃沈されたが早期に脱出したお陰で乗組員、陸海軍兵士の被害は100名ほどと数十隻の潜水艦に狙われたにしては完勝に近い損失で乗り切った。

勿論臨時艦隊も駆けつけ、即座に対潜狩りを開始。

空からの脅威がある中では流石に敵潜水艦も逃げるか隠れるかをするしか無く、速力を最大にして振り切った。

また襲われては面倒だから、パラオ諸島に対して艦載機と艦砲射撃による絨毯砲爆を3日間行った後に陸戦隊が次々と上陸。

敵地上部隊の抵抗こそあったものの、どうやら地下陣地などの構築はまだまだであったようで3週間もすれば組織的抵抗が終わり、残敵掃討に移ることが出来た。

2週間もすれば、パラオの残敵掃討も終わり、整備と部隊配置を進める事が可能になった。

進出部隊は海軍基地航空隊を4個。

紫電改144機に、対重爆用として震電装備の航空隊1個が進駐予定だ。

水上機基地には哨戒と対潜用に二式大艇を8機。

陸上兵力は海軍陸戦隊を4個隊、1万4000名。

作戦に参加した陸戦隊をそのままと幾らかの工兵を追加で駐屯させている。

部隊の主力は歩兵と砲兵、そして対空戦車となっており、戦車は72両、自走対戦車砲は配備されていない。

代わりにパンターの砲塔を流用したトーチカを多数配備している。

工兵にはバベルダオブ島に繋がる環礁から物資揚陸用の港湾施設の建設を急がせている。

環礁にさえ入ってしまえば敵潜水艦の脅威は無い。

今のところ物資揚陸は大発と小発によるピストン輸送に頼っている。

と言うのも大型の輸送船やタンカーが停泊することのできる港湾施設が無いからだ。

正確にはコロール島とバベルダオブ島に港があったが、深海棲艦が我々の上陸前に徹底破壊をしたことで全く使えなくなってしまった。

それも輸送船やタンカーが同時に停泊することは出来ない。

と言うのも二つの港はどちらも浅瀬にあり、座礁してしまうから入れないのだ。

そこでサンゴ礁を爆破するのも手間が掛かるとのことで、環礁内部の沖合に向けて栈橋を建設することになったのだ。

勿論物資を運ぶトラックが並んで通れる幅に、パイプラインも引いて簡単に燃料を輸送することも出来るようにしてあるので、それなりに大きな栈橋になる。

今は燃料タンクも建設出来ていないので、ドラム缶に燃料を詰めてそれを大発や小発に載せてタンカーから島まで運ぶと言う方法を取っている。

勿論保管方法もドラム缶にそのまま詰めて置いてあるので、万が一そこに爆弾が直撃でもすれば辺り一帯火の海、大惨事待った無しである。

今最優先で行われているのはバベルダオブ飛行場のコンクリート舗装と、地下埋設型燃料タンクの建設、そして栈橋の建設だ。

バベルダオブ飛行場は震電が駐屯するから、コンクリートで舗装しておかないと離着陸が出来ない。

アンガウルとペリリユーの飛行場は駐屯するのが紫電改だけだから転圧さえしておけばいい。

急いでコンクリート舗装を終えないと、震電装備部隊が進駐出来ないのだ。

他の2つの飛行場は後々舗装するかもしれないが、優先度は一番低い。

燃料タンクと栈橋は言わずもがなである。

それらが終われば、島内の防御陣地構築が最優先で進められるだろう。

太平洋における最前線なのだから、そのままと言うわけには行かない。

それでも各島の飛行場を整備し、3つの飛行場と1つの水上機基地が稼働状態にある。

敵潜水艦の攻撃で失った兵員、物資、機材は第1補給艦隊によって既に補充済み。

各種車両も十分な数がある。

本来はパラオを前哨基地、太平洋の監視に使用するぐらいだったが、太平洋側、特にマリアナへの圧力と中部太平洋方面などに攻勢を仕掛ける場合にここを補給などの後方拠点とすることが決定された。

流石にこれ以上の兵力配備は不可能であるし、輸送能力としてもこれ以上は増やせない。

だから常に稼働させるのではなく、いざと言う時、使いたいときに使える状態にするのだ。

こうすれば維持に必要な人員をだけを置いておけばいい。

運用に必要な人員はその時に送り込めばいい。

パラオが落ち着いたのと同時に、豪州でも動きがあった。

その対応をするべく、急遽豪州へと向かうことになる。

第76話

パラオでの作戦が終了し、基地航空隊が進出するまでの間、近海での制空権維持を空母3隻で行っていた。

第1補給艦隊は本土とパラオ間の輸送任務に従事しており、パラオ完全制圧から2週間後、点圧の完了したアイライ第1飛行場に2個航空隊、紫電改72機が進出。

この内の1個航空隊はアンガウルへ進出予定の部隊だが、先んじてアイライに進出している。

これで母艦航空隊無しでも取り敢えずの制空権を握る事が可能になった。

飛行場は全部で3箇所建設予定で、アイライ第1飛行場と予備のアイライ第2、第3飛行場で纏めてアイライ飛行場。

これはアイライ第1飛行場は1200mのコンクリート舗装をされた滑走路を持つ飛行場になる予定であり、場合によっては連山や一式陸攻の受け入れも担う一番大きな飛行場だ。

燃料タンクの建設は始まったばかりで、建設が完了するまではドラム缶からになる。

屋根を設けただけの場所に燃料は置かれていて、偽装は施されているが殆ど野晒しに近く、もし爆撃を喰らおうものなら一瞬で火の海になる。

次にペリリュー飛行場。

こちらには1個航空隊紫電改36機が進出済みで各任務に就いている。

点圧しただけの、土や草剥き出しの舗装されていない800mの主滑走路と500mの予備滑走路が十字に交差している。

燃料タンクの建設はまだであり、ドラム缶からの給油になる。

最後にアンガウル飛行場。

こちらにも1個航空隊紫電改36機が進出予定となる。

建設はまだまだ序盤であるから、あと稼働させるにはあと10日は掛かる。

これも点圧しただけの700m滑走路になる予定だが、ペリリュー飛行場の建設が完了した独立工兵大隊が大発に機材を載せてつい数日前に到着したばかりであり、機材運搬の為に3日間の休暇を設け、漸く建設に着手したばかりだ。

パラオから船団護衛に戦闘機や二式大艇を飛ばすことも出来るし、敵潜水艦によってパラオを封鎖するにも相応以上の潜水艦を用意しなければ、対潜水艦能力が高いから良いように狩られる事になる。

コロール島には栈橋の建設が行われている最中で、水上機基地と駐留の二式大艇12機が稼働状態にある。

アイライには震電36機も進出予定だが滑走路の舗装が終わっていないから、それが終われば本土から進出となる。

アイライにはもう2つの600mほどの滑走路が建設される予定だが、こちらは予備飛行場となる。

流石に空母機動部隊が殴り込んできたら分が悪いが、重爆相手ならば十分に戦える。

これで一方的に叩かれることは無くなった訳である。

南側にある大きな環礁内には停泊の為に浮や停泊中の乗り降りや物資の運搬をやり易くするために浮栈橋が幾つか浮いている。

北側にあるジェレチャー島に面する環礁は予備環礁兼潜水艦用泊地としてある。

最低限の建設整備は終えており、今は伊400以下第1潜水艦隊が交代で停泊して補給を受けている。

使わないでいる方が金が掛かるから、少しだけ使っておくのである。

環礁内には洋上迷彩を施されたタンカーの大洋丸と、潜水艦隊に補給する為の魚雷や食糧水、医薬品などを載せた輸送船雄洋丸が停泊し

ており、潜水艦隊への補給を担っている。

この2隻は暫くの間はジェレチャー環礁に留まり、潜水艦隊への補給任務を行う。

潜水艦は魚雷以外は武装を持たない。

砲や機銃は水中速力の向上と海水の抵抗による騒音を防ぐ為に撤去されたからだ。

最終的にパラオには紫電改3個航空隊108機、震電1個航空隊36機の4個航空隊計144機が駐留する事になる。

これでパラオを太平洋側に対する前哨基地と対空対潜警戒基地にすることが出来る。

フィリピンに対する圧力が軽減されれば、輸送航路の安全がより確実に確保され、物資輸送がより安全に行えるだろう。

懸念があるとすれば、敵がパラオに対する海上封鎖をより強力にして来たならば、パラオそのものが孤立化しかねない事だろうか。

俺でも考え付くのだから、当然深海棲艦も考えるだろうしその物量があれば潜水艦だけでなく、水上艦艇をも使ってくるかもしれない。

パラオの弱点は、本土、フィリピンどちらとも距離が離れていることだ。救援を要請しても一番近いフィリピンが要請に応えたとしても、航空機でも出撃準備を整えるだけで1時間、離陸から空域に辿り着くまでに数時間は掛かる。

位置関係としてはラバウルとガダルカナル島に近いものがあり烈風、疾風はどちらも航続距離不足で往復は出来ない。

爆装を施しての往復が可能なのは、連山か二式大艇のどちらかしか無く、勿論救援要請が出された時点でパラオの飛行場は使用不可能であるから制空権の無い場所に、しかも戦闘機の護衛無しで突っ込む事になる。

結果は明らかだ。

となればそれを解決するには艦隊を、しかも総力を挙げた上での出撃が必要になるだろう。

そこまで戦況が押し込まれていたら、そもそもパラオの維持救援を

考えるよりさっさとパラオを放棄して全部隊を撤退させる方が賢明だろう。

その方が守る為に戦って生じる損害を少なく出来るし、何より長期間に及ぶと予想される防衛戦、維持戦と言う泥沼の損耗戦をしなくて済む。

立地上、確かに有要な地である事には変わらないが、我々にはパラオに固執する理由は無いに等しい。

パラオを拠点に対潜哨戒網を広げても、カバーしなければならぬ範囲が広過ぎる為に索敵討ち漏らしは必ず発生するし、フィリピン方面へ侵入しようとする敵潜水艦が増えれば増えるほど、それは難しくなる。

それらを全て防ごうとすると、必然的にパラオに駐留させる二式大艇の数を増やさねばならず、そうなれば維持運用をする為の人員を一緒に派遣し、その分の食料水、部品や燃料、対潜爆弾などを更に送り込み続けなければならなくなる。

これではパラオに駐留する部隊を可能な限り小さくした意味が無い。

だからパラオには哨戒と、船団護衛任務しか与えていないのだ。

あとは潜水艦隊の泊地であるが、これは後々になって見つかった用途になる。

船団護衛ならば、輸送船団の周りを警戒するだけで良いし、哨戒も同じだ。

要は殆ど積極策を取らないでいるのがパラオな訳である。

潜水艦隊なら積極策を採っても水上艦艇と比べて補給量は殆ど小さくて済む。

武装は魚雷だけだから、他の武器弾薬の補給は考えなくて良い。

輸送船には100本の魚雷と専用の調整室が備えられている。

酸素魚雷はその内の20本だけだが、残りは電池魚雷だ。

酸素魚雷は確かに高威力長射程、隠密性にも優れているがなんせ高いし整備は面倒だしで、兎に角扱いが面倒臭かった。

鉄粉一つで故障や誤作動、誤爆が起こる代物で、下手をすれば母艦

に搭載している時に爆発しかねない。

砲雷撃戦中に魚雷発射管や次発装填装置ふきんに被弾一発でもあれば純酸素を使っているから火の手に弱いと言うのもあり、即座に投棄しなければならぬほどに繊細で、まともに運用するには毎日の整備に丸半日を費やす事も当たり前だったのだ。

その点、電池魚雷は高性能爆薬や電池の改良によって酸素魚雷には劣るが必要な性能は有している。

信頼性も高いし電池魚雷だから酸素魚雷と同じように航跡は残さない。

速度は遅いが狙う距離はそんな10km20kmと離れていない。精々1kmか2kmと近いから、精々6km分もあれば良い。

魚雷には音響誘導装置も搭載されているから未熟とは言え命中率は従来のものより高い。

安価で信頼性も高く、使い勝手も良いし更には量産にも向いている、しかも必要な性能はちゃんと満たしている。

だったら態々扱いが面倒臭いものより選ばれて当然だった。

とは言え、酸素魚雷が完全に居場所を奪われたかと言うと、実はそうでは無い。

酸素魚雷の長射程高威力は、輸送船や小型艦艇に対しては費用対効果が余りにも悪過ぎるが、こと大型艦相手となれば話は違ってくる。

電池魚雷は確かに必要な性能はあるが、対大型艦となると実は威力不足感が否めない。

確実に撃沈するには戦艦相手なら5本、空母相手でも3〜4本が必要とされている。

酸素魚雷ならば、戦艦でも3本あれば確実に、空母なら2本もあれば十分と、大体半分の命中で済むのだから威力の違いは相当なものだ。

電池魚雷だと、1本か2本なら艦尾の推進軸や艦首の一番先端に初弾命中しない限りは、中破程度の損害で済むし応急修理と傾斜復元が済めば戦線復帰は簡単だ。

余程の不幸、それこそ魚雷や砲弾が空いた破口に飛び込んだりしない限りは戦闘を続けられる。

その点、酸素魚雷の破壊力は単純なものさしで見た場合、魅力的なのだ。

勿論音響誘導装置も搭載されているし、命中率も向上している。

ちゃんと改良も続けて、電池魚雷には及ばないが信頼性や扱い易さなども向上させている。

言わば、必殺であるのが酸素魚雷だ。

輸送船相手に一々酸素魚雷を撃っていたら、こっちが先に魚雷不足で戦えなくなる。

だから安価で扱い易い電池魚雷を使うのだ。

輸送船1隻もあれば全ての潜水艦が全ての魚雷を撃ち尽くしたとしても1回ぐらいいは満載はできなくても一戦交える程度の補給出来る。

潜水艦隊は偵察と哨戒、通商破壊が主任務だが、太平洋方面に関しては哨戒は昼夜問わずに二式大艇がやるし、通商破壊をする場所も無い。

だから全く偵察任務ばかりで魚雷を使用する機会そのものがないから輸送船が1隻もいれば十分な訳だ。

この輸送船には魚雷を搭載する為のクレーンや調整室などの整備が新しく改装によって設けられた。

言わば潜水母艦の代わりが雄洋丸なのだ。

今の海軍には潜水母艦が無い。

空母に改装されるか、あるいは俺がこの世界に来る前、それまでを第一次戦役と呼ぶが、その第一次戦役中に沈められている。

では何故第1潜水艦隊が太平洋側の偵察任務に就いているのかと言うと、実は今現在最も強力な敵戦力があるのは中部太平洋方面、言わばハワイ諸島方面だからだ。

通信傍受や偵察結果を考えるにハワイ諸島を根拠地とする空母機動部隊が3個、戦艦主力の水上打撃部隊が2個、潜水艦隊が2個、兵站を担う艦隊が1個か2個艦隊。

さらに基地航空隊は、総数2000機を超えると予想されている。彼我の戦力比を換算するとどれだけ甘く見積もっても艦艇数は1:

3は確実、厳しく見積もつて1：4〜5。

航空機に関しては移動があるから正確な数を把握し切れないので断言は出来ないが、それでも母艦航空隊だけで1：3、基地航空隊も合わせたら1：6は確実だ。

南方方面の作戦が豪州奪還作戦を迎えた事でひと段落したから中部太平洋方面に潜水艦戦力を割く余裕が出来たのだ。

だから一番重視しなければならないのがこちらになる。

万が一これらの戦力が一齐に打って出てきたら、各地の基地航空隊を前線に送り続けるか、或いは内部に引き込んででも大損害、それこそ文字通り全滅覚悟で敵艦載機を削りつつ、全潜水艦隊による後方兵站線の破壊活動、最後に艦隊戦で決着を付ける以外に方法は無い。

そうならぬように、事前に情報を得るべく最精鋭の第1潜水艦隊をパラオに置いてある訳である。

最終的に駐留する部隊は、

3個海軍陸戦隊

パラオ港湾部

第200号型輸送艦2隻

4個航空隊

1個潜水艦隊

他にも軍病院など諸々の人員を含めれば2万人程度の総人員数になるが、他と比べれば非常にコンパクトな規模になる。

はつきり言ってしまうと我々にとって、あつた方が良いが別に無くても困らないと言うのがパラオだ。

だからいざと言う時は放棄しても特段問題にはならない訳である。その場合に備えての準備はしている。

陸戦隊と工兵大隊、航空隊の人員、港湾施設運用要員やらを全て引つくるめて丸1個師団規模、人員数にして1万8029名を収容する訳である。

戦闘機隊は自分の機体に載ってフィリピン、沖縄経由で本土へ向かい、二式大艇には可能な限りの人員を詰め込んでローテーションを組んで往復させれば良い。

資機材は燃料弾薬を除いて、動かせるものだけを大発や小発に載せ、あきつ丸や神州丸を筆頭に第200号型輸送艦に載せられるだけ載せる。

本来なら小火器から重火器に至るまで、人員以外は全て爆破し廃棄した方が合理的で楽なのだが、そんな余裕が無いから回収出来るものは回収しなければならぬのだ。

これでもパラオを防衛維持するよりは遥かに安上がりなのだからな。

燃料弾薬爆弾爆薬類の火気厳禁物に関しては、持ち帰れない機材や飛行場の爆破や焼却処分を使う為に全て置いてゆく。

と言うか陣地やトーチカ、飛行場、港湾施設破壊の為に全て使用する予定なので残らないだろう。

楽なのは駐留する部隊全てが海軍の部隊である事だ。

これなら陸軍と作戦の擦り合わせなどが少なく済む。

航空隊の一時受け入れ先であるフィリピンに対しては擦り合わせや物資の融通を話し合う必要はあるが、それぐらいだ。

他の作戦に比べれば、全く無いと言って良い。

手筈と、その為の準備だけはしてあるからいざとなれば艦隊を率いて囷とし、安全かつ迅速に遂行出来る。

パラオに関してはこんなものだ。

—————

臨時艦隊は一度本土へ戻り、戦闘を交えた長期任務後の点検整備を受けてからそれぞれの艦隊へ戻る事となった。

そのついでに愛宕、摩耶、矢矧の3隻が防空巡洋艦に改装される事になった。

愛宕と摩耶は主砲を全て撤去し、代わりに10cm連装高角砲を前部4基、中央片舷3基、後部4基の14基搭載する。

矢矧は愛宕、摩耶同様に主砲を全て撤去、10cm連装高角砲を前部4基、後部4基、中央片舷2基の装備となる。

先んじて3隻が改装され、鈴谷と熊野、阿賀野、能代、酒匂が交代しての改装が予定されている。

改装には点検整備と運用訓練を合わせて各艦6週間ほどを予定している。

高射装置や射撃電探、対空電探と言った各種電子装備なども最新のものに交換され、より迅速により正確に対空戦闘を行えるようにされる。

本土で臨時艦隊と共に休暇を数日挟んでから書類仕事をこなし、改装と整備、艦載機と怪我と戦死で穴の空いた搭乗員の補充も終えた臨時艦隊と共に、豪州向けと南方方面向けの輸送船団150隻を護衛しながら豪州沖へ。

その内40隻を南方航路護衛隊へと引き継ぎ、110隻を連れて豪州へ向かう。

60万を超す将兵達を飢えさせず乾かさせずに、しかも戦わせるには大変な量が必要だ。

大体20万人で300tぐらいが必要になって来るから、海軍も合わせて60万人を超える将兵が豪州作戦に従事している。

そうになると1日辺り食糧だけで最低900t以上が必要になる計算なのだ。

これで最低量なのだ。

戦闘や行軍と言ったことを考慮したら1日当たり、1200tは食糧が必要になる。

輸送船は1万tの積載が可能だが、それでも7日間しか保たない。

南方方面軍の総兵力30万人分、約450tを合わせれば1日当たり1600〜1700t。

豪州まで船団を組んでの航海だと14日掛かる。

嵐や台風、スコールなんか遭遇したりすると伸びたりするが、基本的に14日の航海で計画している。

となれば南方方面軍と豪州方面軍を合わせて輸送船1隻辺り6日分しか保たない。

1週間も保たない訳である。

これに水が加わると、より大変だ。

1日辺り70kgの体重の兵士ならば最低2.4L、ただし豪州と言う気温の高い、乾燥した地域だから戦闘やら全てひつくるめて1日当たり、4Lは補給しなければならぬ。

輸送船1隻だと連隊を2500人を1日保たせることしか出来ない。

川から水を汲んで煮沸消毒や濾過をするにも燃料が必要になるし、簡易ではあるとは言え濾過用の器材も必要になる。

川や湖、池が無ければ水の補充は出来なくなるし、全くそれ頼りになるのは全軍将兵の命を預かる人間として受け入れられない。

煮沸消毒用の燃料も辺りに生えている草木を、とは行くまいし、そうなるかと燃料を運ばねばならない。

ただでさえ航空機用ガソリンに艦船用の重油、トラックや戦車などの車両用ガソリン、各種機械油を運ぶので精一杯なのに、将兵60万人分の水を確保する為の燃料など、到底計算に入れられないと言うのが実情なのだ。

それなら普通に本土から専用のドラム缶に詰められた水を運んだ方が煮沸消毒の手間や時間、それに金も掛からなくて済む。

それに運ぶのは飲料水だけでは無い。

雑用水と呼ばれる、飲料以外の目的で使われる水も必要なのだ。

これでよく少しとは言え備蓄分を捻出出来るものだから補給を司る将兵達には本当に頭が上がりません。

—————

臨時艦隊を解散し各艦をそれぞれの戦隊へ配属配置を戻し、1航艦旗艦である隼鷹艦上で艦隊指揮を執り始めたのだが、そこで予期せぬ事が起きた。

「提督、偵察機から緊急入電が」

「どうした？何があった？」

自室で書類仕事をしていると通信参謀が駆け込んでくる。

作戦や攻勢を行うために豪州各地の上空を飛び回っている百式司令部偵察機から緊急入電が入ったと言う。

百式司偵は武装を一切積んでおらず、代わりに速度性能を最優先にしている。

時速751kmの発揮が可能であり、震電を除けば陸海軍の航空機で比べるとダントツに早い。

急降下や緩降下を行えば音速に近い速度も出す事が可能だ。

高高度性能も抜群で、実用上昇限度は13000m、無理をすれば15000mまで上がる事も出来る。

航続距離は4000kmにも及び、双発機としては十分なものだ。

搭乗員が2名であるし、偵察以外の任務は一切行わないから機体内部には通信機器や電探、酸素ボンベを搭載しても尚、余裕がある。

その分は航続距離を稼ぐ為の燃料と防弾装備に割り振つてある。

防弾性能も防御火器が無い分、搭乗員2名の周りと燃料タンクは20mm弾の直撃に耐えられるものとなっている。

偵察用のカメラも少数生産の抜群に高性能なものを載せているので、正しく偵察の為だけの機体だ。

その偵察機が緊急電を発するなど、かなりの事だろう。

「イナミンカで包囲されている友軍部隊があるとの事らしく、至急援軍を差し向けられたし、と……」

「イナミンカ……？陸軍はまだそこまで到達していない筈だぞ」

頭の中に叩き込んだ地名と記憶にある現在の陸軍の最進出線を中心の中に思い浮かべて首を捻る。

何故なら今陸軍が進出している場所から1000kmは奥地の場所の地名であるからだ。

イナミンカに最も近い最前線はつい最近奪還したばかりのコレラ湖、シルベスター湖、デボロー湖の3つ。

この3湖近辺は奪還したばかりであり、今は部隊の再編や補充、休

息を取っているところなのだ。

だから少なくとも、消費した物資の補給や、部隊再編が完了するまでの数日間は部隊は全く動かない筈。

進軍再開の報告も上がっていないことからそれは間違いない。

「ではどこの部隊が包囲されているのでしようか……？」

「急ぎ豪州方面軍に確認しろ。それと偵察機に詳細を知らせるように」

各方面には16機ずつの百式偵察機が配備されており、敵地上空を常に8機体制で偵察監視を行っている。

部隊の移動は余程の小部隊でもない限り、鮮明に撮影するならば高度4000〜5000mでも分かる。

なんなら10000mからでも十分に任務は完遂出来る。

陸軍は西部戦線、東部戦線、南部戦線と3つの戦線に分けて奪還を進めており、今主要な作戦地域は西部戦線になっている。

と言うのも敵が使える港があるからそこを早い段階で奪還しておきたいからだ。

西部戦線の敵はそこを海上輸送の荷揚げ港としており、これを叩くことが出来れば西部戦線や南部戦線に大きな影響が出る。

奪還地域と、報告のある場所は一番近くても1000kmは離れているのは間違いない。

この数日だけでそれだけの距離を、師団規模の大部隊が車両移動をしたとしても困難。

ましてや今は物資輸送にトラックを割いてしまっているのだから移動するのは間違いなく不可能だ。

仮にどこかの部隊が報告無しに進軍した挙句に敵に包囲されているとしたら、軍法会議ものだ。

もしくは、もう一つの可能性もあるには有り得るのだが……。

十数分後、豪州方面軍から報告が入ってくる。

「豪州方面軍司令部より報告です。どうやら問い合わせた方面の陸軍

に進軍再開をした部隊はありませんでした。各部隊に点呼も取って確認しましたが、隊旗の所在地は一切変わっておりません」

参謀長による報告だと、間違いなく陸軍部隊に所在地が変わっている事は無いらしい。

「なら誰がそんなところで包囲されているのだ？」

「海軍陸戦隊にも報告させましたが、所在地は変更無し、河川機動戦や沿岸部への後方上陸戦のみに従事しているようです」

艦隊司令部は方位されているのは誰なのか、と言う議論で持ち切りとなった。

「議論する余地も無いだろう」

「提督……？」

恐らくではあるが、我々が最も望んでいたことであり、そして現時点では最も起きて欲しくない事である。

「豪州政府か豪州軍、或いはそのどちらもだろうか」

「……」

それを聞いて誰もが黙った。

何せ、今の我々に彼らを救う手立ては殆どない。

最寄りの飛行場は、沿岸部に集中していて戦闘機である疾風は往復するだけで精一杯。

連山部隊は飛行場の関係で1000kmは離れている、爆弾を積載した状態では往復2000kmと言う距離は飛べるにしても、中々重労働だ。

そもそも疾風にしろ連山にしろ、敵機との制空戦と地上支援で手一杯な状態だ。

流石にこれ以上負担を増やすのは、難しい。

「で、ですが見捨てる訳にも……」

そうは言うが、どのような手立てがあると言うのか。

仮に陸軍がそこまで到達することを早めたとしても、間違いなく敵が勝つ方が早い。

かといって、疾風や連山に対してこれ以上の任務を課すのも厳しいだろう。

「提督、どうすんの？アタシとしちゃ、見捨てるってのも一つの手だと
思うよ」

誰もが言えなかった事を隼鷹が言ってくれる。

実際、こちらにそれだけの兵力的な余裕は無い。

寧ろ豪州作戦の為に南方方面軍に、本土から相当数引き抜いてい
る。

豪州作戦に従事している陸軍部隊は50万。

この数字は陸軍総兵力の4分の1に相当する。

海軍も含めれば、70万を超える。

単純な兵力であれば陸軍からまだ投入することは出来るが、補給能
力と言う問題があるからこれ以上兵力を増やすことは出来ない。

南方方面に加えて、硫黄島、パラオ、それに加えて豪州方面軍への
補給は、並大抵の量ではない。

ただ食わせるだけなら大した事は無いが、それに加えて戦う為の武
器弾薬に燃料、戦闘や病気に罹った将兵の為の医薬品、それに部品な
ども輸送しなければならぬ。

そうなつてくると全く話は違ってくる。

戦闘無しであれば、弾薬の消費は射撃訓練ぐらいでしか使わない
が、豪州は全面的に戦闘中だ。

消費する弾薬や砲弾、燃料、そしてただあるだけで部品を消耗する
戦車や自走砲などの車両類は戦闘で消耗し続ける。

それを十分に戦わせ、食わせてやらねばならない。

救援の為に数万の兵力を増やしただけでも、補給線が破綻しかねな
い。

やるならば、今の投入兵力から捻出するか、新規に投入するにして
も可能な限り攻撃力は高く、しかしコンパクトな部隊だろう。

それを考えれば、見捨てるという選択肢も一つであろう。

「戦闘準備が整っている部隊で、なるべく規模が小さくとも戦闘力の
高い部隊はあるか？」

「……そうになると、陸海軍の特殊部隊程度になってしまいます」

「それでは駄目だな。包囲している戦力だつて小さくはない筈だ。特殊部隊を全て投入しても数百人。この程度では意味は無い」

「百式司偵より入電！」

「読み上げろ」

「はつ、『包囲サル友軍戦力少数、数千程度。敵軍3方ヨリ包囲シ、総戦力3乃至4万ト見積モラレル。増援急ガレタシ』以上です」

「それだけの戦力に囲まれて、攻撃を受けていると言うのなら保つて1週間程度だな」

「少なくとも5倍以上の戦力差に加えて、物量でも負けているだろう。」

「持ち堪えている事自体が奇跡に近い。」

「司偵より更に入電！『友軍ヨリ発光信号ヲ確認ナレド光量微弱、断裂、読ミ取レズ』以上」

「十中八九、偵察機に気が付いたのだろう。」

「藁にも縋る思いで、必死になつて発光信号を打つたに違いない。」

「提督、見捨てることなど出来る筈ありません……！」

「参謀の一人が立ち上がり拳を握り締め、言う。」

「彼らの思いを慮れば、到底見捨てる事は出来ない。」

「止せ……！我々にはそれ以上に戦略上の決定を下さねばならんのだ……！」

「参謀長は苦しいであろうが、それでも厳しい決断を下すこともしなければならぬと肩を怒らせ震わせる。」

「提督、アタシらはどんな決定でも従うさね。アタシらの提督に対する信頼はそれぐらいで消えるような信頼じゃあ、無いよ」

腕を組んで隼鷹は構えている。

「……参謀長、今彼らを見捨てるか、それとも救つて今後味方となる存在が出来るか、どちらが戦略上の重要度、利点がある？」

「勿論、後者です」

「そうか……」

息を吸いながら天井を一度見て、決める。

「救おう。すぐに投入部隊の選定、現地への投入手段を策定せよ」

会議室は湧き立った。
各々が自分の仕事の為に駆けだしていく。

「提督、よろしいですか」

「決まったか」

「はっ。では」

参謀長が地図に指揮棒を指しながら説明を始める。

「今回の作戦に置いて最も課題となるのは、彼我の距離です」

「最も近い最前線のシルベスター湖でも1000kmは離れており、
どれだけ急いでも敵軍との戦闘もある為、救援に到着するまでに3週
間は掛かると見積もられており、これでは到底間に合いません。そこ
で、挺身隊の投入を具申します」

「それには同意する。だが、何処から運ぶ？歩兵は勿論だが、戦車は無
理でも最低限榴弾砲程度の重火器の投入は必要不可欠だぞ」

「それに関しては、牽引式15cm榴弾砲を幾つかに分解して投下し
ようと考えております。連山は4tの積載が可能ですので、余裕を
持って牽引車としてケツテンクラートを2両、砲弾運搬の為に機体を
2機の計6機で1門の榴弾砲を運べば良いかと」

牽引車としてケツテンクラートを選んだのは重量の問題だろう。

他の牽引車は連山の搭載能力は4tだが、牽引車の殆どはこれを
軽々超えている。

そこをケツテンクラート2両で引っ張ろうと言う事らしい。

「対戦車火器は？」

「南方方面軍が予備保管として保有している7.5cm対戦車砲と操
作要員で1機、砲弾用1機、牽引車としてケツテンクラート2両1機
の計4機を考えております。予備保管である機動90式野砲は本土
にある為、運ぶ時間が無いので除外しました」

「それでいい。歩兵の投入兵力は？」

「敵軍への対抗を十分に、それも友軍が到着するまで耐えるには挺身
隊を3個投入する必要があります。輸送機型の連山の機数から考え

て、どうしても数波に分ける必要があります」

「まず最初に単純な正面戦力として挺身隊1個連隊2500名を、次に対戦車砲を20門。こちらは野戦重砲の到着まで、任務を兼任させられる事から先に対戦車砲の投入を行います。出来る限り部隊規模は小さく火力は大きくしたつもりですが、これでも総投入機は200機を軽く超えます」

連山は完全装備の歩兵を機関銃、迫撃砲を含めて50名の搭載が可能だ。

4tの積載が出来るから、重砲やその牽引車も分解すれば運ぶことも出来る。

問題は、最大積載量の関係で野戦重砲を牽引する為の牽引車、我々で言うところのハノマークなどの半装軌車であるSd. Kfz. 251などが運べない事だ。

これは重量が7.8tを超えていることから、どうやっても載せることが出来ない。

借りに分解して載せたとしても牽引車両一つでまさか連山を、確実に運べるようにするには3機必要だが、そんなに使うわけには行かないし、載せる重量が重ければ重いほど連山への負荷が大きくなって消耗も大きくなる。

それぐらいならケツテンクラートに牽引を任せた方が良い。

1両毎の牽引能力はどうやっても重砲を引っ張れるほどは無いが、そこは2両で引っ張ることで解決している。

ケツテンクラートは重量1.5tと2両載せてもまだ余裕がある。

操作要員を含めて考えても、ケツテンクラートと兵士2人、燃料幾らかと食料に医薬品を少しぐらいは纏めて輸送可能だ。

勿論弾薬と砲弾、燃料は別の機体で輸送することになるが、取り合えずの場繋ぎとしては有用だろう。

「兎に角、最初に送り込むのは場繋ぎとしてでいい。あとに続く部隊が到着するまで現地で持ち堪えられるだけの兵力と物資があれば十分だ」

「承知しました」

作戦の承認を行い、各地から輸送機型の連山が掻き集められる。

空挺作戦に投入出来る連山は機体後部に重機材や武器弾薬などを収めたパッケージを投下出来るようにハッチが設けられており、分解された重砲やケツテンクラートも楽に投下出来る。

掻き集められた連山は180機になり、第一陣に50機の連山に挺身隊が乗り込み、各種物資を投下する為に更に50機の連山が揃えられた。

それでも部隊や物資の積み込み、移動に3日は掛かる事からその間、どうにかして持ち堪えさせるために友軍支援の為に爆撃機型の連山と護衛の疾風が対地支援を行いつつ時間稼ぎを行う。

ついでに無線などに一切反応の無い友軍宛てに通信筒に救援部隊と物資の編制を行っている旨を伝え、到着するまでの間どうにか持ち堪えるよう書き連ねた手紙を投下させた。

勿論敵側にこちらの意図などバレバレであるが、制空権は拮抗状態にある。

そこで挺身隊の投下を行う前々日に敵に対して航空撃滅戦を挑んだ。

流星に腹の中に重いものを抱えさせた連山を襲わせるわけには行かないから、予め場所が分かっている敵飛行場に対して爆撃を行ったのだ。

勿論疾風だけでは攻撃力不足であるから、爆撃機型の連山を20機、各部隊が保有する銀河も混ぜて攻撃力の水増しを図る。

可能な限り敵からの抵抗を減らす為、夜間爆撃に攻撃は絞ったが、存在する敵飛行場6か所の内、最重要とされた大規模飛行場3つは確実に破壊、残り3つも大小の損害は与えている。

夜間であるから戦果確認は出来ていないが火の手の規模からして地上破壊戦果も相当数になると見積もられる。

飛行場を修復しても、敵機を叩けなくても、燃料タンクを破壊することが出来ていれば敵は作戦行動を大きく制限されることになるから、どちらでも構わない。

とは言え損害は小さくはなかった。

敵夜間戦闘機の迎撃があり、連山が合計で3機、疾風が7機撃墜され、たのだ。

銀河は損害無しで乗り切ったが、撃墜された機の28名の搭乗員の内、7名が戦死となった。

6日後、ポート・ダービーにある広く設備が十分な飛行場から挺身隊と各種物資を載せた連山100機と、途中までの護衛を行う為の疾風50機が次々と飛び立った。

道中で護衛が交代し、6時間後に敵戦闘機の迎撃を受けつつも戦闘機隊の獅子奮迅もあって更に1時間後になってイナミンカ上空に到達。

事前に豪州軍に降下可能地点を囲う様に目印を書かせておいた場所に挺身隊と物資の投下が開始された。

翌日、降下した挺身隊長が豪州政府との接触に成功したという電文が発せられた。

イナミンカは豪州南オーストラリア州とクイーンズランドの境に近い場所にある小さな町であり、砂漠のど真ん中にある。

すぐ近くにクーパー川があるが、それでも今まで持ち堪えるのには相当に過酷であった筈だ。

豪州軍の総戦力は歩兵約4000名と野戦重自走砲が2門。

戦車は無く、武器弾薬の充足率は僅か3割であり、弾薬は1日に銃1丁につき30発、大隊2つともう幾らかに対して辛うじて武器と弾薬を持たせることしか出来ない状態であった。

自走砲2門には1日辺り3発の砲弾を供給するのがやっとで、見つけ次第大量の火力投射が行われることから地下陣地に隠れている事しか殆ど出来ていない。

食事は民間人には1日辺り握り拳の半分ほどのパン、煮沸消毒などが出来ない為に太陽光による蒸留で得た水を1日に100mlを

配給するのがやつとな状態であった。

現在の総人口は僅か3万人ほど。

勿論食糧事情もあつて軍から民間、政府首脳部を含め極度の栄養失調と脱水症状を患つており、何時人死が起きても全くおかしくは無い、挺身隊の軍医からは武器弾薬よりも医薬品、食料の供給を最優先にしてほしいと懇願されたほどだ。

戦っていることから優先して配給される兵士達も戦えている事自体が不思議であるほどの状態であると言う。

物資を送り込む手筈は勿論整えるがともかく今は、現地で耐えてもらう他あるまい。

政府中枢と、生き残つた国民、軍全てが内陸部にその生活圏を移してからどれぐらいの年月が経つただろうか。

頼みの綱であつたアメリカ軍は日本軍を巻き込んでハワイ沖で奪還作戦の失敗と戦力の殆どを失う大敗をしてから後退続き、ついには俺達を見捨てやがつた。

最初はビスマルク諸島やソロモン諸島の防衛を行つていた日本軍も圧倒的戦力差から徐々に押し込まれ、陸の戦いでは部隊が丸ごと消えたし海と空の戦いも数の差に圧殺されていった。

海上輸送路もとつくの昔に途切れたままだし、勿論どこの国とも連絡なんて取れようもない。

それでもまだつい2か月ほど前までは良かった。

まだ最低限の訓練を施す余裕も幾らかはあつたし、十分ではなかったとは言え軍民共にある程度は食べていくことも出来た。

敵も抵抗する俺達を態々被害を被つてまで潰そうなんて考えていなかったのだろう。

実際俺達には備蓄物資や生産出来る物資にも限りがあつて、どう

やってもタイムリミットがあった。

3か月耐えれば御の字と言ったところだったのだから。それが過ぎれば飢餓地獄と、内紛で滅びるしかなかったんだから。だがつい2か月ほど前になると、どういう訳か今まで包囲して爆撃と砲撃を時折してきただけだったのに、大規模な、それこそこちらの数倍にもなる規模の兵力で一斉に攻撃を仕掛けて来たのだ。

当然大混乱になった。

とは言え俺達だって何もしなかったわけじゃない。

残存兵力はその時、10000程度は存在していたから必死に戦った。

けど、単純な兵力だけじゃない、火力が違い過ぎた。

こっちは砲兵30門程度が精々、それも各門に30発ずつ程度を備蓄していたに過ぎないし、

最盛期は各地に部隊を派遣してた我が陸軍も、今じゃ各部隊の解体と統合を繰り返してなんとか兵員数を満たす部隊を作ってはいるが、武器の充足率なんて全体の3割程度も戦闘力を有しているのは2個大隊と幾らかだけ、それも碌な訓練を行っていない士気も練度も最低以下の新兵ばかり。

食事は1日200mlの水に拳大のパンが1つ、後は極稀に肉が欠片程出されるだけ。

俺を含めてお偉いさん方も、骨と皮しか残っていないような身体で、地獄の亡者みたいだ。

今じゃ飢えと渴きと戦うことが一番の辛い事で、敵と戦って死ぬる方がまだ名誉もあるから楽だ。

野戦病院や治療施設には軍民間問わず怪我人がそこら中に転がっている。

碌な医療器具も医薬品も何時底を付いたのかすら覚えていない。

俺だって、この攻撃が始まる前までは40人程の部隊を率いる小隊指揮官だったのに、今じゃ上官達が軒並み最前線で戦死か、それとも敵の砲爆撃でバラバラに吹っ飛ばかして、この2か月で連隊長にまでなっちまった。

しかも内実は中身が全く伴わない部隊の最高指揮官で、これじゃあ懲罰人事のが良い。

こんな嬉しくもなんともない昇進はしたくなかった。

練度なんでもものは存在しないし、ベテランの兵士はそれこそ両手で辛うじて数える程度。

武器も無けりや、弾も無い。

頭の上を守ってくれる戦闘機や敵に爆弾を落としてくれる爆撃機も居ない。

陸戦の要と言っている砲兵だって敵機や敵砲兵から隠れているのがやっとな自走砲が2門あるだけで、それも敵機に執拗に狙われるしそもそも砲弾が無いから戦っていても支援砲撃だって望めない。

それでも可能な限り武器弾薬の生産ラインの尻を叩きまくって取り合えず小銃や機関銃の弾薬は撃ち合える程度の数を揃えたは良いが、そこで生産ラインは力尽きたと言ってよかった。

武器弾薬を作る為の資機材は爆撃で残骸の山になったし、そこで栄養失調で立っているのも覚束無い身体や霞む目に鞭を打って生産に従事していた妖精達も死んじまった。

指先程の補給が完全に無くなっちゃったんだ。

「もう終わりだ……」

「頼む、このまま何も出来ないで死ぬのは嫌だ……、せめて戦って死なせてください……」

部下達も絶望ばかりで、希望など一つも無かった。

謔言のように戦って死なせてくれ、それが駄目なら頭を撃つてくれ、と。

これ以上の地獄なんて、他にあるものか。

いや、あつて堪るか。

民間人達も、最早食料水を求めた暴動を起こす気力体力すら無く、ただただ死ぬのを待つばかり。

精々違うのは砲撃で死ぬのか、機銃掃射で死ぬのか、それとも飢えか渴き、怪我の治療が出来なくて死ぬか。

或いは敵に直接殺されるか、と言うどうやって死ぬか、ぐらいだろ

う。

助けなど到底期待は出来ない。

楽に死ぬることだけが今は救いなんだからな。

すると、対空監視に当たっていた部下の一人が双眼鏡を覗いて、突然ぼろぼろと泣き始めた。

「おい、どうした……？」

ついに可笑しくなったのか。

これだけの状況だ、何時狂つてもおかしくは無い。

「た、たいちょう……、俺が、おかしくなつたんですか……？」

「何、言つてんだ、早く報告するならしろ」

軌条に振る舞いながら部下に報告をするように促す。

すると余りにも信じられない報告をしてきた。

「こ、高度8000m付近に、the rising sun flag……、日の丸が描かれた飛行機が……」

「馬鹿言うな、ここはオーストラリアで、日本は遙か彼方なんだぞ」

「でも……、でも、あれは、日の丸だ……」

対空監視に努める者達は、皆各国の航空機に描かれる国籍を頭の中に入れてある。

今はマニュアルにそれが書かれていて照らし合わせて確認する方法だが、もう十年ほど他国の航空機が見えただなんて報告は聞かなかったし、なによりも信じられない。

今報告をしているのはベテランの兵士で、日本軍の航空機を何度も見たことがある。

「貸せ、俺も見ろ……！」

それでも自分の目で見るまで信じたくなかった。

これで喜んで、それが幻覚だつたらもう二度と俺は、立ち上がれない。

備え付けてある大きな双眼鏡を空に向けて、覗く。

少しだけ探すと、濃緑に濃紺が混じつた見たことの無いがそれでも特徴的な迷彩と、識別をするための日の丸が書かれてた。

それを見た瞬間に、部下と同じように涙が溢れる。

余りにも大き過ぎる、十年以上も待ち望んだその希望は、死に掛けるの身体に活力を与えるには十分過ぎた。

まだ俺達は、負けちゃいないんだ。

「発光信号！どれだけ弱くても良い、あの飛行機に俺達の存在を知らせろ！」

「は、はっ！」

地下から、どれだけ使っていないか分からないデカイ探照灯を引張り出してなけなしの電力を回す。

幸いにも探照灯は使えるが、電力が全く足りなかった。

小さく明滅するだけで、とても文章を打てるようなもんじゃなかった。

「隊長、駄目です、電力が足りません！」

「ならありったけの電力を集めてこのおんぼろに回させろ！アレを逃したら、今度こそ俺達は終わりなんだぞ！」

あちこちから無理矢理電力を回させ、お偉いさんが居る辛うじて薄暗い電気が付いているだけの地下の電力も全て回す。

「文章じゃなくていいんだ、俺達が此処にいる事さえ伝わればいい！」
双眼鏡で覗くと、どうやら日本軍機はこちらに既に気付いているようだった。

俺達の頭上を旋回しているのを見るに、多分偵察機か何かは時々俺達を見付けてくれたらしかった。

二度ほど、探照灯を明滅させるとどうやらこちらがまだ生きている事を悟ったらしい。

「ツ！日本軍機がバンクしています……！気づいてくれたんだ！」

「文章は打てるか!？」

「駄目です、探照灯がぶっ壊れました！」

「畜生、こんな時にぶっ壊れやがって！」

悪態を吐く部下だったが、探照灯には感謝しないとイケない。

十年以上も放置されて埃を被って碌に手入れもされていなかったのに、ちゃんと光ってくれたんだから、こいつは俺達の命の恩人に違

いない。

「日本軍機、続けてバンクしています」

「返信する手立ては無い……。あとは、救援が来てくれるのを祈るしかない……」

暫くすると日本軍機は頭上を飛び去って行った。

出来る事ならば、俺達の頭の上に何時までも飛んでいて欲しかった。

離れて行った時、恐らく俺だけでなく皆がとても心細く感じただろう。

俺だつて視界が狭くなるように感じたのだから。

「地下に行くぞ。急いで上に報告するんだ。出来る限り、もし、もしも救援が送り込まれたときに備えて受け入れ態勢を整えておかなければ……」

「はっ！」

身体を引き摺るように地下に向かって、お偉方に諸々の報告を済ませ、信じない連中に見た全員を連れてきて証言させた。

これで一人が見た幻覚ではないことが証明されて、その場にいたお偉いさん達全員がぼろぼろと泣き崩れ、力を失ったように細くなった身体をへたり込ませた。

でもそうしている余裕は無い。

こうなったら何時来るかもわからないが、それでも救援の受け入れ態勢を整えなければならぬのと、それまでの間持ち堪え続けなければならぬ。

次の日になると、日本軍機がまた頭の上に飛んで来た。

すると何かを落としていく。

「通信筒、のようなものを投下したらしいです」

「急いで回収させろ」

どうやら日本軍機は、かなりの腕の持ち主らしく俺達が維持している地域のど真ん中に綺麗に落としていった。

周囲をぐるりと何度か旋回する。

どうやら敵機の有無を確かめているらしい。

敵機が周囲にいないことが分かると敵地上部隊に何度も機銃掃射を掛けて、俺達の頭の上を、高度100mぐらいの高さで、今まで聞いたことが無いほどに頼もしく勇ましいエンジンの轟音を轟かせながらコックピットを開けながら敬礼し、そして機体をバンクさせて飛び去って行く。

その姿に、軍人も民間人も、政治家も関係無く大きく湧き立つ以外に無かった。

泣き崩れて倒れ支えられる者や張り詰めていたものが途切れたのか気を失ったりする奴も居るぐらい。

「通信筒、回収してきました」

通信筒を持って来た下士官は、号泣していた。

恐らく中身が無事かを確認する為に読んだか、或いは見たのだろう。

雰囲気としては悲観的なものでは無いから、恐らく希望的な事が書かれている。

「中身は、無事だな？」

「はい、問題ありません」

手紙を受け取って読むと、それこそ泣く以外にどうすれば良いのか分からない程に涙が溢れてくる。

しっかりとした英語で書かれている。

『我々は貴軍ら北東1000kmの位置にあり、今すぐの救援は困難ではある。しかし別手段を以て救援部隊の派遣を敢行する。救援部隊到着時には、可能であるならば最も安全かつ開けた土地に、一辺1km四方の目印を立てて貰いたい。勿論無理にとは言わない。救援部隊到着は通信筒投下より5日後。投入方法は空挺投下。第一陣2500名、続いて同規模の部隊を3つ投入予定』

『長い間、良く生き延び、戦い続けてくれた事に、全軍を代表して敬意を表する。救援部隊到着まで最大限の支援は行うからどうか持ち堪えて欲しい。武運を祈る』

『日本陸海軍大将 湯野勝則』

「おお、おおっ…、おお”お”…!!!」

手紙を握り締め、泣く。

それでも気持ちにすぐに整理を付けて、この手紙を政府の方へ持つて行かせ、5日間と言う俺達にとっては余りにも長い時間稼ぎをするために部隊の指揮を始めた。

どうやら深海棲艦の連中は一連の事に察知したらしく、圧倒的な砲兵火力と航空兵力で徹底的に最前線を破壊した後に戦車に支援された歩兵が突っ込んできた。

それでも俺達に怖いものは無かった。

助けが必ず来ると分かっているのだから、退く理由なんて無い。

俺達が全滅してでも、あと4日耐えればいいのだから。

それでも戦うにあたって一番の課題は敵の戦車や砲兵をどう撃破するかだ。

俺達には対戦車火器と言えば搔き集めた油で作った火炎瓶ぐらいしかない。

対戦車砲や対戦車無反動砲なんて贅沢な物は最後に見たのはもう遙か昔だ。

それでも対戦車火器も重砲も無いのは、余りにも不利が過ぎる。

どうやって敵の戦車を食い止めればよいか、碌に栄養も無く渴きで回らない頭を必死に回す。

対戦車壕は掘ろうにも体力の問題で無理だし、精々使えるかどうか分からない対戦車地雷を通りそうなところにはばら撒いておくことぐらいしか出来ない。

迫撃砲は砲弾も幾らかあるから戦車の周りに落として、歩兵と分断したところを側背から接近して火炎瓶や手榴弾を車内に放り込んでやろう。

正直、肉弾戦法以外に取れる戦術は無い。

それ以外に対戦車火器が無いからだ。

あとは榴弾砲を直撃させるか、至近弾で擱座か何かを狙うしか無いだろう。

それでも兵達の士気は今までに無いほどに最高潮だった。

なんせ来るはずがないと誰もが絶対に諦めていた助けが来ると言うのだから、士気が上がるのも当然だ。

でも身体は栄養失調と脱水症手前で言う事を聞いてくれない。

気合いと根性、助けが来ると言うか希望のみで戦っているようなものたま。

もどかしくて仕方が無い。

敵戦車をどうするか、前線を何度か食い破られながら考えていた頃、手紙に書いてあった支援が駆け付けた。

何よりも強力な航空支援だ。

250kgぐらいの爆弾を抱えた翼がW字の様に折れ曲がった攻撃機が急降下しながら爆弾を次々に落とすとしていく。

直撃や至近弾を受けた戦車が跡形も無く吹き飛んだり、ひっくり返ったり横倒しになっていく光景には誰もが、掠れて力も無かったが声を上げてしまうほどに勇ましいものだ。

乾いて久しかった涙を流しながら、その様子を眺める。

戦車や装甲車に爆弾を落としていつてはついでと言わんばかりに敵歩兵に対して機銃掃射を掛けていく。

多分、20mmクラスの機銃だろうから装甲車でも一溜りもない。

被弾した車両が煙を上げ、爆発炎上していく。

敵歩兵も逃げ惑いながら、遮蔽物に隠れる。

本来ならこれで俺達が突撃をして、敵歩兵を叩かねばならないのだろうがそんな体力なんて無い。

そして敵機が殆ど来襲しないのは本当に不思議だ。

これだけ好き勝手やられたら必ずどこかから敵機が守る為に現れる筈なのに、1機も出てこない。

考えられるのは通信妨害か、敵飛行場が使用不能になっているか。

何にせよ、助かると言うのならなんでもいい。

後ろにいる、民間人達が殺されずに済むと言うのなら、それでいいのだ。

5日後。

降下地点にある周りより10mほど高い高台に登って救援を待つ。すると日の丸が描かれた単発機や双発機が現れて敵陣や敵対空陣地に爆弾を次々に投下していく。

爆発音が鳴り響き、弾薬か燃料に引火したのか派手な火柱が時折上がる。

それらが機銃掃射を仕掛けていると、紅い丸が翼に描かれた、濃緑と濃紺の4発機とそれを護衛する戦闘機が百数十機も飛んできた。

綺麗な、ガツチリとした編隊を組んでおり、その周りや中にいる護衛の戦闘機がしっかりと守っている。

あれでは迎撃をしたとしても中々手を出せないだろう。

あれだけ綺麗な編隊を組むと言うことは、それだけ練度が高いと言う事になる。

下手に手を出せば、返り討ちにあって痛い目を見るのは間違いない。

4発の重爆は、機体後部が開いているからどうやら爆撃機では無く輸送機らしい。

目印を付けた1km四方の場所に目掛けて編隊が飛び、輸送機の腹の中から次々と兵士が飛び降りてくる。

あれが、救援の部隊だろう。

空挺部隊はどここの国でも精鋭部隊だ。

あの空挺部隊も精鋭であるのは間違いない。

次々と着地し、落下傘を回収して集まる。

良く訓練されているのが分かる動きで、装備も良い。

ぼろぼろで痩せ細った俺達とは比べ物にならない。

次々と兵士が降下してきては部隊毎に集まり、統率の取れた動きで物資を回収し戦闘準備を整えていく。

隊長と思わしき人物が指示を飛ばしながら次の部隊が降りてくるのを降下地点の端で待つ。

次の部隊が降りてくると、同じようにして指示を出し、部隊を動か

す。

最後に降りてきたのは、沢山の物資を入れた木箱に重砲や重火器、多分その運用人員、それに腕に赤十字章を付けた軍医達だった。重砲や車両に命令を出して行動させ始めると、軍医達や30人ほどの兵士を連れて俺のところをやってくる。

綺麗に並び、敬礼をする。

それに応えると隊長は言った。

「日本陸軍第1挺進連隊長、間島大佐であります。これより作戦行動に移ります」

「あ、ありがとう……。助けに来てくれて、本当にありがとう……。」
隊長は軍医に言つて俺達を診させる。

その後、彼らは我々に食料水を配つてくれ、そして傷病者の治療を施してくれた。

我々が戦わねばならないのに、我々の為に彼らは戦い死んでいく。
決して忘れてはならない。

—————

挺身隊は自分達の3日分の食料を除いてその殆どを配給してしまつたと言う。

確かにこれは人道として立派な事であろう。

しかしそれは、本来彼らが次の部隊と補給物資を送り込むまでの間に戦う為のものだ。

部隊指揮を行い作戦指揮を執らねばならない事を考えれば、素直に領くことは出来る判断ではない。

まあ、現地での惨状を考えれば当然の判断であろう。

追認となるが指揮官に対し、食料と水に限つての物資配給命令を出

しておけば後々何かあった場合に文句を言われるのは俺で済む。

今は会議室に一度集まり、各種報告を行っている。

「現在我々は連山4機と護衛の疾風12機を断続的に投入し、先発した2500名分に加えて現地住民、及び豪州軍用の物資を送り込んでいます。ですが、豪州軍が再戦力化されるには、治療を含めても4か月は掛かる見通しとなっており、その間我々だけで戦わねばなりません」

「補給状況に問題はありますか？」

「問題と言えば、単純に必要な物資量が丸々2個師団分の物資が断続的に必要になってきている事です。ですが輸送船団の数を増やし、1航艦も船団護衛に張り付くことで、ギリギリ保たせています」

「余裕は無いか」

「正直なところを申しますと、全くありません。今後の輸送船団は連山の部品や燃料の輸送にリソースの大部分を取られることから備蓄に回せるほどの物資を運ぶこと自体も困難です。どうかして輸送船団の内の輸送船1隻分ずつの物資は備蓄し続けておりますが、海上輸送航路が途切れれば備蓄のみだと6日間、切り詰めても10日と言ったところでしょう」

かなりギリギリだ。

やはり連山を連続して集中運用すると言うのは、負担が大きい。

「それと次の投入部隊の中に、軍医と看護師を数名、医薬品と栄養食を追加しても宜しいですか。現地の栄養状態や医療環境が余りにも酷いこのことで、先に現地入りしている軍医達に泣き付かれました」

「勿論だ。人命優先で構わん。必要なら本土か南方方面から引き抜いていい。軍医達を死なせるな」

「はっ、ありがとうございます」

補給参謀の報告が終わると、次に作戦参謀が立ち上がって報告を始める。

「戦況報告を行います」

「頼む」

「現在我々は、イナミンカの市街地周囲10kmを保持しております

が、戦力の関係上、一度戦線を全て4 km後退させました。豪州軍も戦っておりますが、栄養状態と武器弾薬の関係から戦力としては期待しない方が良いでしょう」

「4方向に対しそれぞれ1500名を張り付け、500名を機動予備としております。対して敵軍の戦力は3個師団、歩兵だけで6万以上と見積もられ、歩兵師団ではありますが北海道で確認された新型戦車が幾らか存在するようで、火炮もかなりの数を揃えており早急に対抗火力の増強をしなければなりません」

「圧倒的戦力不足だな」

「はい。一辺6 kmですが、敵戦力は歩兵師団を中心に、それを支援している砲兵と装甲部隊が確認されております。敵砲兵は155 mm口径、敵戦車は新型M26で編成された部隊となっております。現場からは自走榴弾砲か、或いはパンター、ティーガーIIの増援を要請されています」

「今はどちらも無理だ。パンターはまだしもティーガーIIに1000 kmも自走させるなど、結果は悲惨を通り越した有様になるぞ」

「承知しております。ですから我々は敵砲兵、敵戦車に対しては航空機による地上支援で対処します。陸用50番を流星か、或いは疾風に抱えさせれば、至近弾でも撃破は可能です」

「対する我が軍の戦力としては、現在最精鋭である第1挺身連隊と対戦車砲20門を空挺降下によって投入、戦闘状態にあります。豪軍も戦いに参加し一応戦力に数えておりますが、先程も仰られた通りに栄養失調と脱水症によって戦力にはなりません」

「戦況は圧倒的不利、航空支援によって辛うじて戦線維持をしておりますが、このままであれば戦線崩壊は時間の問題でしょう」

「敵の包囲戦力を考えれば一辺に付き1個連隊は欲しいところですが、後陣の部隊はまだ投入されておりません。あと2日は現状のまま、航空支援の下で戦わねばなりません」

第1挺身連隊には、かなり無茶な戦いを強いている。

本来ならば師団や戦闘団規模で戦わねばならない相手であるのに、大した重兵器を持たない歩兵主体の連隊で戦わせているのだ。

幾ら挺進隊が精銳部隊とは言え、厳しいものがあるのは当たり前だ。

「航空支援はどれぐらいを維持している？」

「近接航空支援の為に連山と銀河を6機つと護衛の疾風16機が常備待機し、支援しております。」

「可能な限り速やかに増援を送り込め。必要なら対地支援機を増やして構わん」

既に第1挺進連隊とは先ず一番に通信を確立しているから、連携もやり易い。

対地支援と増援があれば、勝てる戦いだ。

その後、次々と挺進連隊や軍医達、野戦重砲などが運び込まれた。

十分とは言い難いが、それでも持ち堪える事が出来る程度の戦力と物資は揃えられた。

補給物資の第一陣は不足する火力を補う為の野戦重砲が幾らかと、それらが十分な火力や能力を發揮出来るように砲弾薬、小火器や迫撃砲の弾薬、牽引車のケツテンクラート用の燃料、そして各挺進連隊が譲った分の食料水が送り込まれた。

豪州軍や政府、民間人向けの食料水、医薬品、発電の為の燃料が補給物資の第二陣となった。

これ以降は消耗品である各種砲弾薬や燃料、食糧水が送り込まれ続ける事になる。

3週間後、イナミンカに救援部隊本隊が到着、解囲作戦が開始された。

ニューギニア・ソロモン方面 第77話

豪州政府と豪州軍、そして民間人を合わせて4万1345名を無事救い出す事が出来た。

戦闘によるものや治療中に死んだものなど、1267名が死亡する事となった。

挺進隊の損害は各連隊合わせて2500名余りとなり、ほぼ1個連隊の戦力を喪失したことになる。

投入した空挺兵力の内の4分の1が喪われた事になる。

特に第1挺進連隊が被った損害が大きく、連隊2500名の内、1019名が戦死乃至傷病者となった。

各挺進連隊は本土へ戻り、再編と訓練を行う事が即座に決定した。イナミンカに常駐するには周囲の敵戦力が大きい事、突出部が出ている状況であり分断包囲の危険性が高い事から放棄が決定、民間人達を伴い撤退を開始し、民間人はポート・ダービーの軍病院へ移された。

ポート・ダーウィンにも軍病院や設備はあるが、今現在ニューギニア方面からの空襲に連日晒されている事から見送られたのだ。

ポート・ダービーの軍病院で一旦の治療を行った後に、豪州政府と民間人達、軍人には一度カリマンタン島へ順次退避してもらう。

確かに作戦は順調に進んでいるが、ニューギニア方面から敵重爆などが飛来して来ているし、アラフラ海やティモール海、スラバヤ島から豪州を結ぶ航路は敵潜水艦の脅威が強く残っている。

被害もそれなりに出ており、安全とは言い難い。

だから安全が確保されているカリマンタン島で集中して治療を受けてもらうのだ。

日本本土も考えられたが、距離の関係で断念せざるを得なかった。

豪州政府とは後日、退避先のバリクパパンで会談を行う予定であるが取り敢えず数ヶ月は先である。

傷病者に対する治療は行われており、豪州軍は回復した者からリハビリを、それが終わったら訓練を施す予定だ。

流石に短期間で終えるのは無理であるから、リハビリ、訓練を含めて大体1年程度の期間を予定している。

暫くの間は養生してもらおう他無い。

病人を戦わせたり働かせる訳には行かないからな。

作戦も順調に進んでおり、ノーザンテリトリー州と西オーストラリア州の殆ど全域を奪還し終える事が出来た。

今はクイーンズランド州奪還の為に部隊の集結と編成、物資の集積を進めており、陽動として南オーストラリア州側に対しての圧力を強めている。

クイーンズランド州奪還に際して最も警戒すべきなのは、やはりニューギニア方面からの敵機や敵艦隊だ。

作戦では、陸路での迅速な展開は難しいから、カーペンタリア湾から上陸作戦や河川機動戦術でノーザンテリトリー州側に展開する敵兵力の包囲撃滅を狙う。

レイックハルト川やニコルソン川、ノーマン川、バイノー川に対して河川機動戦術を行う。

遡上には遡れる場所まで第200号型輸送艦を用い、途中からは大発や小発を使う。

川幅と水深がある程度ある事から可能な戦術だ。

支作戦として、モーニントン島やベンティンク島などの攻略を行う。

同地に飛行場を建設し、そこからの航空支援を行いながら本作戦を進めるのだ。

作戦は既に動いており、モーニントン島、ベンティンク島の奪還は終わった。

飛行場もあと2日もあれば戦闘機の離発着が可能になり、そうすれば本作戦の発動となる。

3日後、本作戦が発動され、敵地後方に4個師団が強襲上陸、河川機動戦術を開始した。

敵も対応して来たが、先の救援作戦で敵航空戦力の撃滅をしていた事から航空優勢は我々にあったからある程度楽に事が進んだ。

敵戦力の方位に成功し撃滅、3ヶ月掛けてクイーンズランド州の奪還を行った。

そのままニューサウスウェールズ州、ビクトリア州を3ヶ月で奪還すると、包囲される形になった南オーストラリア州に対して最後の攻勢を開始。

撤退した敵戦力が集結し、防衛体制を整えていた事から抵抗は強かったが、ケアンズ、ブリスベン、シドニー、タスマニア島に設けた飛行場からの敵輸送船団に対する通商破壊作戦により事前に弱体化されていた事もあり、2ヶ月半ほどで作戦が完了となった。

これを最後に、豪州奪還作戦の完遂が宣言され、各地の防衛体制の確立にシフト、同時並行で残敵掃討戦が開始された。

これで丸1年に及ぶ豪州奪還作戦は終了となった訳である。

—————

豪州作戦から1ヶ月余り、豪州の防衛には陸軍から20万人を抽出している。

戦力は本土と南方方面から引き抜き、作戦に参加した師団は全て日

本本土や南方方面に後退し人員や機材の補充、部隊再編と補充、訓練が施される事になった。

損害は全体で10万名ほどとなり、投入兵力の7分の1を喪う事になったが、作戦は成功と言って良いだろう。

それに続いて豪州軍の戦力化が開始されている。

既に1個連隊ほどが作戦投入可能状況にあると豪州政府から伝えられており、最終的には2万程度の兵力となる予定だ。

戦後処理が終了次第、民間人には豪州へ戻って貰い、各地で食料生産などに従事してもらう事が豪州政府との間で決められている。

他にも各種資源の提供などが確約されており、その見返りに我々は豪州の防衛と武器弾薬の供給を担う。

今は豪空軍に対する訓練を開始したばかりであり、供与される機体は隼と零戦となる。

二機種が選ばれたのには、各地での損耗補充で精一杯であるのと、まずは経験を積み空を飛ぶ事に慣れるべき、との原田中將からの意見により倉庫に予備保管とされていた隼36機、零戦36機の各1個航空隊分が供与される事となった。

暫くの間、これらの機材で慣れた後に順次疾風に機種転換を行う。

豪州には続けて陸軍主体の陸空から成る防衛兵力を駐留させ、共同で防衛に当たる。

海軍は長期作戦明けと言うこともあり、全ての艦が本土にてオーバーホールを受ける事になっている。

艦によっては機関部を丸々取り替えるなんて事もしなければならず、向こう1年は大規模行動の実施は出来ない。

今動かせる戦力は第1補給艦隊に、1航戦の空母4隻と金剛、比叡、榛名、霧島、ネルソンの戦艦5隻。

他には防空巡洋艦の鈴谷と熊野、能代の3隻。

水雷戦隊は龍田以下4水戦の駆逐艦涼月、リベッチオ、浦波、狭霧、有明、海風、江風、峯雲、霞、藤波となる。

1 航戦は先の海戦による損傷修理を終え、余裕がある事から先に入渠、点検整備を済ませて動かせる戦力とした。

他には南方航路護衛隊があるがこちらは船団護衛任務に従事する為に動かせるものではない。

第1護衛艦隊と第2護衛艦隊は船団護衛任務中の損傷修理とオーバーホール中で、終了次第船団護衛任務に再び就く。

今はネルソンを旗艦とし、金剛、榛名、霧島と熊野、有明、海風、江風、霞、藤波が練習航海訓練中である。

暫くの間はネルソンが旗艦と秘書艦を担当し、臨時編成である艦隊を纏めている。

戦艦

ネルソン 比叡

空母

飛龍 蒼龍 瑞鶴 加賀

防空巡洋艦

鈴谷 能代

軽巡洋艦

龍田

駆逐艦

涼月 リベッチオ 浦波 狭霧

以上が即応可能な戦力となる。

次期作戦に関しては、既に準備が進められている。

目標はスラウエシ島以东の島嶼帯、ニューギニア、ビスマルク諸島からソロモン諸島に駆けてである。

大仕事になる事には間違いなく、特にニューギニア島における作戦は規模としてはカリマンタン島奪還作戦に匹敵するのは間違いはない。

問題は、ニューギニア島中央には険しい山脈が連なっている事だ。

西からマオケ山脈、ビスマルク山脈、オーエンスタンリー山脈と、オセアニア最高峰もここに含まれる。

最低でも4000m級の山々が連なっており、これを踏破するのは困難極まる。

単純な話、富士山よりも場合によっては1000m以上も高い山々を、兵達の足のみで登り、降らねばならない。

高山病の危険性や山岳地帯である事から野戦重砲などの重機材の運搬が不可能に近い事、地形の性質上防衛側、敵が圧倒的有利である事。

それに加えて補給線の構築維持が今までの作戦に比べ圧倒的に難しい事が挙げられる。

ただこれらの問題は解決の目処が立っている。

単純だが相手をするだけ無駄だから、相手をしなければ良いのだ。

幸いにも我々にはスラウエシ島のトミニ湾、豪州のダーウィン、ケアンズと言った港が使える。

三地点からそれぞれ部隊が別地点に対して上陸を行うのだ。

トミニ湾の部隊はマノクワリへ、ダーウィンの部隊はドラク島へ。

そしてケアンズの部隊はポート・モレスビーへ。

マノクワリに先ず上陸し、同地の飛行場を整備、陸軍飛行戦隊と対潜用の二式大艇の部隊を送り込んだならばすぐさまアラフラ海へ艦隊を移動させ、ドラク島へ上陸させる。

この支援には、ヌランベイに進出させた豪州空軍を使う予定だ。

距離としては約650kmほどであるから、増槽を装備する隼ならばある程度の任務は熟せる。

飛行場が整備されたなら、そちらに零戦部隊共々進出して貰う予定だ。

最後にポート・モレスビーへ上陸することになる。

ポート・モレスビーはニューギニア島最大の市街地があった場所であり、現在は深海棲艦の、ニューギニア方面における重要拠点の一つである事には間違いない。

飛行場は3箇所も整備され、敵機の総数は700機を超えると予想される。

当然敵もこちらの作戦を砕く為に艦隊を出してくるだろうから、

ニューギニア島奪還の最大の山場はここであろう。

3箇所への上陸を行う事で、これで敵戦力の分散を狙えることに加え、山脈を包囲する様に部隊を展開出来る。

この様な作戦になったのには、勿論戦術上の事もあるが、何よりも使える港全てが修復や建設を十分に終えておらず、必要な能力に達していないから、と言うのもある。

トミニニ湾にある港こそ、前々からの整備で機能は整っているが敵の攻撃で少なからず被害を被っている。

ダーウインはまだ整備が進められ始めてから1年足らず、ケアンズに至っては半年だ。

作戦実施時期を1年後としても、どれだけの規模まで押し上げられるか分からない。

最低限必要な能力は、どうかしなければならぬがアラフラ海、珊瑚海は敵通商破壊が盛んで、スラウエシ島を奪還する前までのカリマンタン航路を思わせるものだ。

距離を考えれば豪州を南回りする訳にも行かないし、陸路は限界がある。

となれば海路しか無いわけだが、それも中々上手くいかない。

既に輸送船に対して30隻の被害が出ており、護衛艦隊への被害も無視出来るものではない。

喪失こそ無いが、山城、ウォースパイットの2隻が敵潜の魚雷を受けて中破、デューク・オブ・ヨークが大破している。

他にも航空攻撃によつて摩耶、愛宕、キャンベラ、ゴトランド、グレイヤルが大破、駆逐艦も20隻が大小の損害を受けて入渠中となる。

護衛艦隊の空母群には損害は無いが、かと言つて艦載機の損害は大きい。

搭乗員こそ大多数が生還出来ているが、全員が全員すぐさま戦線復帰を望めるわけではないし、大怪我のせいで退役止む無しと言う者までいる。

今でこそ、義手義足技術を発展させたおかげで腕や足を失っても戦える場合が多くあるが、やはり五体満足よりも劣ってしまう事から積極的に投入するには行かない。

彼らを戦いたいと言う希望があったとしても無理に戦わせてしまえば、それだけ貴重な熟練搭乗員を失うことになる。

特に母艦搭乗員にしておくには余りにも安定性が無く、基地航空隊配属となる。

ダーウィンに対する輸送船団は2隻の輸送船が失われただけで大した被害は無いが、ケアンズに対する輸送船団は甚大な被害を被っている。

特に被害が集中して起こるのは、トレス海峡からケアンズに掛けるの海域だ。

ケアンズに北航路で向かうにはどうしてもトレス海峡を抜ける必要があるのだが、トレス海峡は150kmと狭い上に水深が浅く、島と岩礁で迷路になっており必然的に大型艦が通れる場所は制限されてしまう。

しかもポート・モレスビーからケアンズまでは1000km程度しか離れておらず、飛来する敵機の活動範囲内だ。

潜水艦も補給は容易に行えるから魚雷や機雷の払底に気を使わなくて良い。

しかも距離だけでなくカバーしなければならない面積も小さいから、その分潜水艦や航空機の密度を多く出来る。

そこを敵潜や敵機に狙われて損害を喰らうのだ。

失われた物資は既に60万tに達し、兵員こそダーウィンからの陸路になるから損害は無いが、各種資材や物資、陸路で運ぶのには些か面倒な重機材が多数失われている。

だからと言ってダーウィンから陸路で輸送しようとするれば、鉄道の増敷設は不可欠。

しかしそれには時間も掛かるし何より輸送量が船舶輸送には足元に及ばない。

船なら軽く1万tの物資や資材を軽々輸送出来るが、鉄道は100

両単位でも何回、何十回と往復しなければならぬか分からない。
それだけ時間が掛かるし、恐らく作戦実施時期までに間に合わない
のは確実だ。

そうなれば海路を使うしかないのだが、このまま続けてもジリ貧は
間違いないし何より損害が無視出来るほどのものでは無い。

どうにかして解決せねばならないが事は単純な話では済まない。

何らかの作戦を行う場合の投入出来る兵力自体は揃えられるが、問
題は内側にある。

政治家連中が大陸反抗作戦の実施を懲りずに言い始めたのである。

しかも今回ばかりはどうやら一筋縄では行かなさそうらしく、色々
と手を回したのかあちこちで同じような声を上げる存在が居る。

今俺が居るのは東京であるが、ここに居る理由も大陸反抗作戦の実
施は可能かどうかと言うのを聞かれる為である。

中代大将達が説得を試みてくれていたし、今までもそれで解決して
いたのだが今回ばかりはどうにもならず実働部隊のトップである俺
の意見を聞かせると騒いでいるらしい。

そのために俺が召喚され、陛下を含めた会議で決定されることにな
ったのだ。

「それでは、大陸反抗作戦における会議を始めさせて頂きます」

この場にいるのは俺を含めた中代大将、広野中将の3名にそれぞれ
の従卒数名、反対派、賛成派を含める政治家連中に各省庁の官僚、そ
して陛下である。

「単刀直入に聞かせて欲しい、大陸反抗作戦の実施は可能か？」

最初に発言されたのは陛下であった。

中代大将から聞いた話では陛下自身は大陸反抗作戦に反対の立場
であると言う。

ただ、政治家連中の声が大きくなり過ぎた為に抑えておけなくなっ
ていると言う事から今回の会議が開かれたと言う側面もあるらしい。

「お答えさせて頂きます。はつきりと、申し上げますが大陸反抗作戦の実施は何時如何なる時期時勢であつても不可能であります」

「それは何故か？」

「単純な兵力の問題もさることながら、補給の問題も大きい事が挙げられます」

「今現在我々は、優勢に立っているように見えますが、その実劣勢と言つても良い状況であるのは間違ひありません。概算ではありますが、大陸に兵力を派遣するとなれば、現在の陸海軍総兵力が凡そ300万ですので、各地の防衛兵力などを考えれば最低でもこの倍の兵力は必要となるでしょう」

「それに加えて輸送能力は現時点の3倍、輸送船数にして今の保有隻数1500隻を加えて3000隻は必要になるかと。確実に成功させるために必要な数字は、現実的云々の話ではありません」

俺の発言にどよめくが、賛成派の連中は俺を睨んだりとよほど気に食わないらしい。

「これでもまだ少ない方です。仮に今、作戦を実行すると言うのならば豪州から南方方面だけでなく本土の兵力も全て、一兵残らず動員する必要があります。勿論、それらの地の防衛は一切捨てて、です」

「軍ならば我々の命令に従うのが相応なのではないか？」

「正規の手順や手段を踏んだわけでもないのに命令とはとんだ御冗談を」

「なっ……!?!」

一瞬で顔を真っ赤にして睨んでくるが、怖くもなんともない。

「そも、命令だと言うのならば実現可能な、まともな作戦を立ててから言うが宜しい。この会議は、貴方方の一方的な主張が理由で開かれていると言う事を知るべきだ」

「私には300万の部下達を死地に追いやる権限があり、それと同時に彼らを守らねばならない責任がある。勿論命であるのは前提だが、彼らを死なせる命令を下す者としてせめて彼らが無駄死しない命令と作戦を下さねばならない。それを考えれば、到底大陸反抗作戦など賛成も実施も出来ようはずは無い」

余裕と言うのは、大抵慢心を生み、そして敗北をする。

余裕と慢心は全くの別物ではあるが、どういう訳か近付いて行ってしまうものなのだ。

目の前にいる連中は、正しくそれに囚われてる事に違いない。

でなければ荒唐無稽なことなど言うはずもないのだから。

「だが今までは作戦を成功させてきたではないか！」

「リスクを取らずして成功など有りはしない！」

「それは勝算があり、それを成功させるための算段があったからだ。確かに博打に近い作戦があったのも事実だが、貴方方の言うリスクはリターンが0の物だ。履き違えているのではないか？」

言い合いと言うには余りにも無様なそれを、陛下が止めて聞く。

「では聞くが、何故我々は今勝ち続けて来られたか？」

「海と言う存在があるからです」

「海？」

「海と言うのは天然の要害であり、島国である我が国においてもそれは例外ではありません。何処かへ向かう場合は海を渡らねばなりません、それは敵も同じ。だから守ることがある程度容易に行えるのです。海を隔てていますから、直接的な戦いと言うのは避けられません。ですが大陸は地続きで、常に戦線に兵力を張り付け、そして戦い続けねばなりません。島を奪い合う戦いとは根本的に違うのです」

「カリマンタン島や、オーストラリアもか？」

「はい。面積が大きいからこそ勘違いしてしまいますが、それらも大きな、と言う言葉が付くだけで結局は島です。ですので面積が広いと言う点を考慮して練り直したりはしなければなりません。基本的な戦術は島嶼帯の戦術と同じで良いのです」

「もしそれでも作戦の実施を主張されるのなら、まずは貴方方が銃を取って、最前線で泥濘や汚物、戦友の血肉に塗れ命を懸けて戦ってかと言うのが良いでしょう。そんな気概も無く、他者に犠牲を強いるだけならば何を言う権利も貴方達には無い！」

俺のその言葉を最後に、陛下が大陸反抗作戦は実施しないと仰ってくれた事で会議は終了した。

翌日、豪州作戦の成功と日豪両政府の国交が再開されたことを記念した式典、と言うよりパーティに参加するように言われ、真っ白な2種軍装に身を包んで参加している。

本来ならば立襟燕尾服がこういう場では正装となるが、急な参加と言う建前で着ていない。

勲章をじゃらじゃらとぶら下げるのも好きではないし、この格好ならそのまま執務や何かあつた場合に出向くことが出来る。

パートナーにはウォースパイトに隼鷹に頼んで、俺達の護衛に413大隊の6名。

別の場所にさらに10名の兵士が待機している。

ネルソンは艦隊旗艦であるから、留守を任せている。

隼鷹とウォースパイトならその辺の礼儀がしっかりしているから心配は要らないと言う事で頼んで付いてきて貰ったのだ。

貸し出されたドレスに二人は身を包んで薄化粧をしているからか、野郎共がお近付きになる機会を狙っている。

とは言え二人は傍を離れずに、護衛の兵士達宜しく表情や雰囲気には出さないが周りを警戒している。

これで好きにしていいたいと言うと、そんな事は言うものではないと二人に怒られる事は分かり切っているから大人しくしているのが吉だ。

料理は、時勢を考えれば豪華であることは間違いなく、それを適当に突きながらおべっか塗れのゴマスリやや見合い話を適当にいなしでいく。

やっぱり皆が作ってくれる食事の方が美味しい。

そう思いながら普段余り食べないローストビーフを口に入れる。

「にしても、提督はモテるねえ」

「あんなもの範囲に入らんだろう」

さつきまで淑女然としていた隼鷹がニヤニヤしながら弄ってくる。

「ですがお見合い話が多いと言うのは本当だったのね」

「毎日来るぞ。しかも別のだけじゃなく同じところから何度もな」

「提督は結婚なさらないの？」

「軍人だから何時死ぬかも分からないし、殆ど考えたことなど無いな」
ウオースパイトもやはり俺の身の振り方と言うのは気になるように聞いてくる。

今は会場の端に逃げて適当に食べつつ話している。

実のところ、周りにいる女性と言うのは全員艦娘の皆だ。

しかも誰も彼もが世間一般に出れば間違いないく10人中10人は振り向く美女ばかりで、言い方は悪いが彼女達に見慣れてしつていからそこらの女性が眼中に入らなくなっているのだ。

しかもただ見目麗しいと言うだけでなく、家事全般に加えて仕事も物凄く良く出来ると言うのだからこれで勝てる存在の方がおかしいだろう。

適当に時間を潰し、機会を見て中代大将に一言言って帰路に就く。

主役の一人である俺が途中で抜けるのは宜しく無いが、仕事もまだ多く残っているから、と言って抜けさせて貰った。

と言うかこれ以上見合い話をされて堪るか。

近くの陸軍駐屯地に少しばかり間借りさせて貰う。

横須賀は連日の空襲と先の震災で大損害を被っているから使用なんてとても出来るものではない。

本土の港湾施設で整備の優先度が高いのは外地、佐世保、大湊、横須賀となる。

呉にはこれ以上の能力を求めるのは酷な話であるから、リソースの5割を外地、3割を佐世保、残り2割を大湊と横須賀に振り分けている訳である。

佐世保は整備計画が進められている段階であるが、外地における前

線泊地整備計画を優先せざるを得ない状況で、進捗率は全体の二割と言ったところだ。

それでも戦艦、空母と言った大型艦が入渠可能なドックが6つ、他に中小艦が入渠出来るドックが7つある。

これらは普段修理に使われず、輸送船や輸送艦の造船、修理や点検を日夜担っている。

瀬戸内海の、主に呉近辺のドックの数は佐世保の比ではない。

大型艦の入渠が出来るドックだけで15を数え、更に巡洋艦や駆逐艦、潜水艦などが入渠出来るドックが他に17ある。

しかも同時に並列2隻入渠が可能なものだ。

輸送船や輸送艦の建造を担うドックは瀬戸内海中に、凡そ30はある。

以前までは輸送船の被害が少なくなってきたから全力稼働状態ではなかったが、今は被害が増え始めていると言う事で増産体制の準備をさせている。

早ければ年内にもドック1つ当たり月産2隻体制を整えられるだろう。

こちらのドックは200mほどの大きさがあるから駆逐艦や軽巡ぐらいならば入渠させられるから、重宝している。

長期作戦明けなどは一斉入渠となることが多い為、殆どのドックを艦艇が埋め尽くしている状況で、今もそのような状況だ。

輸送船の損害はまだ佐世保工廠で賄える程度であるから、今の内に戦力の立て直しを図るのだ。

陸軍駐屯地と言っても、そこまで豪勢なものでは無い。

一応鉄筋コンクリートで作られてはいるが、作り自体は簡素だ。必要な機能のみを有しているだけで、それ以外は全く無い。

兵舎や官舎を問わず二階建ての建物しかない。

と言うのも敵重爆は高層建築物を見つけるとそこに集中的に投弾することが良く知られており、4階建て以上になるとよく狙われてし

まうのだ。

だから建物の殆どは、ダミーを除いて2階建てに制限するようにしてあるのだ。

ダミーの建物は難燃性塗料を塗布した木枠に、難燃性塗料を浸してある紙を張っただけのものが殆どで、これなら一日程度ですぐに修復することが出来る。

工場などもダミーを用意してあるが、兎に角連中は物量で押ししてくるから被害は抑えきれていない。

恐らくこれらの被害を受けた工場が、被害を受けずにいたならば今頃物資不足に困ることなど無かったかもしれない程の被害を被っているのだ。

とにかく、敵重爆B―29も問題であるが、それもニューギニア方面の問題解決が先だろう。

こちらをなんとかしなければ作戦実施は覚束無い。

空路で呉に戻り、作戦を考える。

投入出来る兵力を考えるならば、まず戦艦での砲撃が有効だろう。

爆撃と比べれば投射出来る鉄量が桁違いだ。

1000機の攻撃機と戦艦2隻の火力は大体同じだから、効率良くより広範囲を叩けるのは戦艦だ。

沿岸部と言う戦艦の射程内に対する場所であれば、これに勝る者は無い。

と言うよりも、連山を使えない、と言う実情がある。

ただでさえ補給で苦勞しているのに、そこに更に連山の為の補給が増えたならば、敵の攻撃を待たずして補給戦で負けることになる。

連山の投入による爆撃は、ポート・モレスビーの飛行場を最低限叩いてからでなければ迎撃による損害が大き過ぎて実施出来ない。

空母も今のところ4隻しかいないから、攻撃兵力としては不足しているから使えない。

飛龍、蒼龍、加賀、瑞鶴の総艦載機数は383機だ。

ポート・モレスビーの航空兵力は倍近くと見積もられるから、機上

電探が実用化される前ならばやりようはあつたが流石に今は無理だろう。

かと言つて1航艦の全空母が揃うには丸半年は掛かるし、流石に待つていられる状況では無い。

護衛艦隊の空母を引き抜く訳にも行かないから、4隻でどうにかするしかない。

航空兵力は使いたくても使えないと言うのが現実なのだ。

それにタイムリミットもある。

ポート・モレスビーを叩く場合、作戦準備に掛けられる時間そのものが殆ど無いのだ。

待つ事が出来るのは、輸送船の被害状況から考えて精々1ヶ月ぐらい、それ以上は輸送船の被害、損耗が所用限界を超えてしまうのと、ニューギニア方面作戦の準備が間に合わなくなる。

輸送船の被害が所用限界を越えれば、少なくともケアンズに対する海上輸送航路は破綻、と言う結果になる。

立て直しを図るか、或いは陸路での輸送に頼るしかなくなる。

そうなつたら、ニューギニア方面への作戦を実施するなぞ夢のまた夢となるだろう。

延期は必須、敵に戦力立て直しの時間を与えてしまう。

ニューギニア方面作戦を実施するには、やはりポート・モレスビーの無力化が必要となる。

数日後、艦隊司令部を召集し作戦計画を練つた。

結果としてポート・モレスビーの他にラエ、フィンシユハーフェンに対する攻撃も盛り込まれることになった。

ラエとフィンシユハーフェンには大規模な飛行場があり、ポート・モレスビー無力化後に継続して打撃を与えるには、同地からの迎撃が懸念されたからだ。

航路はパラオを出港後に、ビスマルク海からヴィティアス海峡を抜け、隊を一度分けてからラエとフィンシユハーフェンに対する同時攻撃を実施。

それが終了後、艦隊を再合流させダントルカストー諸島とニューギニア島の間、ゴーション海峡とドーソン海峡を抜け、モレスビー島沖を抜けてポート・モレスビーを目指す。

ポート・モレスビー砲撃後は、トレス海峡を抜ける。

事前に海軍特殊部隊が艦隊の航行可能な場所に発信機を設置し、通過時に一齐に点火、全力で疾る。

その際に余力があるならばダル島の飛行場を叩くが、敵艦隊が出て来ればそんな余裕は無いだろう。

作戦自体は夜間に行われるが、敵夜間戦闘機や攻撃機の襲撃があると当然予想される。

参加する兵力は以下の通りとなった。

空母

1 航戦

飛龍 蒼龍 加賀 瑞鶴

戦艦

ネルソン 大和 武蔵 金剛 比叡

重巡洋艦

足柄 古鷹

防空巡洋艦

鈴谷 摩耶 能代

軽巡洋艦

龍田 天龍

駆逐艦

宵月 満月 霜月 春月 花月

涼月 若月 春月 秋月 照月

リベッチオ 浦波 狭霧 江風

長波 有明 海風 藤波

タンカー15隻

以上40隻が参加する。

少数での突破も考えられたが、叩く目標が3つである事、目標の都合上敵地のご真ん中を突つ切る事、生半可な戦力では逆効果になる事から決まった。

先ず最初にフィンシユハーフェンを、次にラエを砲撃する。

この2箇所は夜間の砲撃とし完全な秘匿、奇襲とする。

ポート・モレスビーは2箇所を砲撃した後には砲撃となるから強襲を意図している。

艦隊旗艦はネルソンだ。

主砲配置が前部3基と、後方に対する手段を持たないが対地砲撃任務であるから問題は無い。

追撃されたら苦しいが、反撃はせずに艦隊は全力で逃走を図るからこちらも気にしなくて良い。

今回は敵飛行場の無力化只一点にのみ投入兵力の全力を叩き付けるのだ。

目標に対する諸元の算定は事前に航空偵察、潜水艦偵察、敵地上陸偵察により予め距離150、速度2ノットで計算している。

5隻の戦艦による砲撃は、三式弾、一式徹甲弾を飛行場1箇所につき各門20発、5隻で1720発の砲撃となる。

ポート・モレスビーに対しては港湾施設に対しても打撃を与えねばならないから各門30発の射撃になる。

三式弾は空中炸裂に調整し、一式徹甲弾は着発となる。

対地砲撃任務に於いて、三式弾は空中炸裂が、一式徹甲弾は着発が最も効果が大きいからだ。

実戦や実験で得られた情報を基にこうなった訳である。

一式徹甲弾は着発だから良いが、三式弾は空中炸裂だから事前に綿密な弾道や飛翔時間の計算が必要になる。

既に必要な数値は算定済みだ。

一式徹甲弾は柔らかい土壌でも爆発し易いように改良された信管を搭載し、更に落下角が深くなるように装薬を調整している。

砲弾の弾道としては、頂点に到達したら急に落ちる弾道となる。

地面に刺さる形で落下させるのだ。

何故こうしたのか、と言うと砲弾の落下角が浅いと地面で跳ねたり十分な衝撃が足りずに起爆しない可能性が高くなるからだ。

飛行場の滑走路に落ちれば問題なく起爆するが、柔らかい土壌だとそうは行かない。

1番分かりやすい想像としては石を水面で跳ねさせる水切りが良いだろう。

厳密に言うならば、水切りも違うのだがあくまでも想像するだけならこれで良い。

普通に撃つと柔らかい土壌、飛行場の周りに落下すると信管が作動しない可能性があると言うことだ。

だから落下角を深く取るのだ。

基本的に、砲撃時以外は二ニゴ諸島辺りまでは16ノットだが、それ以降は20ノットを基本として状況により増速、高速を維持しながら迅速性を重視し敵艦隊の追撃や迎撃は可能な限り無視、速力で振り切る。

タンカーを15隻も用意したのにはそれが理由だ。

海軍でも保有隻数が15隻と数少ない高速艦隊に随伴可能と言うコンセプトで建造された高速給油艦も全て引張って来た。

万が一の場合、敵制空権下でも生存性が高い事と言う理由もある。

ただ、高速力を優先した為に経済性が宜しくないのと、建造に戦時急増型のタンカーに比べて造船に必要な金額が20倍と言うこともあって、3年に1隻のペースでしか建造されない。

輸送船型もあるが、こちらも保有隻数が20隻と少ない。

最高速度は高速艦隊に随伴可能と言う事もあって30ノットを發揮出来る。

ただし先に言った通り経済性に難があり、普段は一桁ノットに制限されている。

だから本土近海で輸送任務に就いている。

外洋などだと低速力が要因で被害を被る可能性が高く、本土近海以外では任務に就く事が出来ないのだ。

今回の作戦はパラオからダーウィンに寄港するまで軽く5000 km、2700海里を超える航海と戦闘となる。

大和やネルソンでも速力を出す関係上、戦闘行動を取らねばならないとなれば燃料不足になる。

天龍や龍田、駆逐艦達は間違いなく燃料不足に陥る。

途中で立ち往生なんて事になったら不味い。

だから普段能力を發揮出来ないのだから、こう言う作戦の時に使わないでおくのは余りにも意味が無い。

だから今回投入をするのである。

――――

作戦は1ヶ月前から始められた。

先ず駆逐艦10隻が先んじてパラオに向かい、同地の航空隊と協力して潜水艦狩りを2週間掛けて行い、可能な限り情報の秘匿に努めた。

2週間で潜水艦19隻の撃沈破を記録し、パラオ周辺の安全は確保されたと言えるだろう。

それに加え艦隊の呉出港時期を2週間遅く暗号文にすることで万が一暗号解読がされても良いようにしてある。

パラオには航空機で直接指令書を届けたから問題無い。

1週間遅れて艦隊がパラオに入り、泊地に投錨。

更に1週間後15隻の高速給油艦と、それとは別のタンカーを伴い第1補給艦隊が到着し、燃料や各種物資の補給を受ける。

全艦が燃料を満載した状態になると、いよいよ出撃となった。

第78話

「艦隊、出撃準備完了しました」

「艦隊抜錨、これよりタ号作戦を開始する」

天龍率いる水雷戦隊が前路哨戒を行う為に環礁を最初に抜ける。

それに続いてバベルダオブ島、コロール島間にあるコロール水道とマカラカル島、ウルクターブル島間のマカラカル水道を抜けていく。ネルソンを先頭に、大和、武蔵、金剛、比叡からなる戦隊が環礁から出て天龍達と合流。

その次に飛龍、蒼龍、瑞鶴、加賀が龍田達水雷戦隊と共に出る。

艦隊が全て合流したならば、陣形を整え進路をビスマルク海へと向けた。

ビスマルク海に入る前に水雷戦隊に対して一度給油を挟み突入する。

ビスマルク海に面するマヌス島沖100kmに達すると艦隊速力を25ノットに増速した。

先程給油中に敵潜が発したと思われる信号を確認したが、距離がかなり遠かった。

ただ発見された場合を想定し、速力を25ノットにしたのだ。

暫くすると、右前方にカルカル島が見え、その少し奥にバガバツク島が見えた。

「もう少して、ビシヤズ海峡だ」

「敵に見つかっているなら、この辺りで迎撃されてもおかしくは無い、か」

「どうする？速力を上げるか？」

「……いや、このままで良い。フィンシユハーフェンを砲撃するから、速度を上げ過ぎると困る」

「了解した」

ロング島を過ぎると、艦隊はビシヤズ海峡に差し掛かった。

左舷にウンボイ島を捉える。

「艦隊右舷砲戦用意。速力2ノットに落とせ。初弾から10発目までは三式弾、それ以降は一式徹甲弾。距離150、所定の諸元に各艦合わせ」

ネルソンの特徴的な艦前部に全て置かれた41cm3連装砲3基が右舷を向く。

16inc砲から砲弾供給の関係で41cm3連装に換装されている。

艦後方に主砲を指向出来ないなどの、主砲配置に難はあるがその火力と防御力はトップクラスと言える。

「空母群、水雷戦隊は周辺警戒を厳にせよ」

迎撃を受けていないから、多分敵に察知はされていない筈。

迎撃されるならば、フィンシユハーフェンの砲撃を開始したタイミングか、或いは終わったタイミングになる。

ラエに対する砲撃までは敵に攻撃されずに済む筈だが、その後はかなり厳しいかもしれない。

「時間です」

「艦隊、砲撃開始」

その一声で、戦艦5隻の主砲が一斉に火を噴いた。

目を逸らしていたのにも関わらず、艦橋の中は真昼間であるかのように明るく照らされる。

砲撃の衝撃もかなりのもので、椅子に座る身体が真横に揺らされた。

計43門もの主砲から放たれた三式弾は、飛行場だけでなく、その周辺にある飛行場に続く道や飛行場を守る陣地、燃料タンク、そしてジャングルを3000度と言う地獄に作り替えた。

たった5秒程度の時間だが、それでも3000度と言うものは辺り

一帯を火の海に変え、あらゆるものを燃やすには十分な時間だった。飛行場の周りを囲むジャングルは、瞬く間に火の手が上がり次第に火災の勢いが激しくなっていく。

ランゲマック湾にある港湾施設やフィンシユハーフェン旧市街地、湾に流れ込む川沿いの彼方此方に三式弾は次々と弾着し、被害を与えていく。

実を言うと、3回程の斉射で飛行場自体は全くの使い物にならない損害となっている事が知らされていた。

そこで目標を港湾施設などに変えたのである。

これらを叩けば、飛行場や港湾施設そのものを復旧する為の資機材を陸揚げする事が容易では無くなるから、結果的に復旧を遅らせる事が出来る。

三式弾の次は、一式徹甲弾が撃ち込まれる。

一式徹甲弾は着発信管だから、地面に突き刺されれば周りを抉りながら炸裂し直径10m、深さ5mはある巨大な穴を穿つのだ。

フィンシユハーフェンや飛行場を含む辺り一帯は、火の海になりもはや復旧には少なくとも数ヶ月は必要であろうことは明らかだ。

ジャングルで起きた火災は周りに延焼しながら燃え広がっていき、火の手は大きくなるばかりだ。

あれでは雨が降るまで燃え広がり続けるに違いない。

各艦20発づつの射撃が終わり、速力を上げる。

ラエまではフィンシユハーフェンから120kmほどであるから、25ノットで2時間半程だ。

各部の点検に腹ごしらえの時間ぐらいはある。

給料員が作ってくれた握り飯に沢庵、パラオで補給を受けたばかりだから食糧庫に余裕がある為、牛肉と牛蒡、人参の炒め物が出される。

それぞれが一斗缶ほどの大きさの容器に入れられ、各班の代表が走って受け取りに行く。

艦橋にも給料長が態々持って来てくれた合戦飯が。

「うん、美味しい」

「ありがとうございます」

各艦毎に出される食事のレパートリーは特色がある。

例えばネルソン達イギリス組の艦では牛肉があればローストビーフやフィッシュアンドチップスと言った英国由来の食べ物が週に1度程度出される。

ラム酒もイギリス組には提供されており、毎日朝に希望する乗組員には水で割られたものが1杯支給される。

伝統として誕生日の乗組員には、飲めなくなるまで全員からラム酒を分けてもらい、酔いつぶれた後は翌日までハンモックで寝続けても許されると言うものがある。

ドイツ組だと、ソーセージやザワークラウト、アイスバインなどが出されるし、黒パンなども定番だろう。

イタリア組はパスタやピザ、ワインが定期的に出され、フランス組だとガレットやオニオンスープ、鴨肉が出る。

元の国ごとに特色があり、そしてそれぞれの給料長は各国出身の妖精達だ。

ではどうして彼らの艦ではこれらが提供されるのかと言うと、単純に欧州組の妖精や艦娘達のストレス発散と言う目的があるからだ。

長い艦内生活と言うのは、驚くほどにストレスが溜まるしそうならば戦闘どころか通常業務にすら支障が出る。

特に彼らは国を捨ててまで生きながらえ、そして戦っていると言う背景もある。

放っておけばどんな影響があるか分からないのだ。

だから海軍全体ではなく、そこまで多い量ではない事から供給されている。

因みに他の艦でも酒保に行けば酒類だけならば数量限定ではあるが、手に入れられる事がある。

酒保に関してだけはどの艦も階級関係無く早い者勝ちなので、飲みたいのならば全力で走らねばならない。

間宮お手製の羊羹を始めとした菓子類が入ったとなったらもう、そ

りやもう何時もの統制された見事なまでの動きは何処に行ったのかと言わんばかりの状態で艦内酒保に全員が走っていく。

いや、あれはあれで寧ろ揃っているのか？

俺の場合は、間宮が気を使つて本土に戻ってきている時に羊羹などを差し入れてくれる。

流星に只では貰えないのでお金は渡している。

今のところ、各部隊から敵の迎撃があるような報告は無い。

艦隊は敵潜や敵機を探知していないし、敵艦隊の迎撃を受ける公算が高いダンカストルー諸島近辺に派遣した潜水艦隊からも報告はまだ無い。

ラエからダンカストルー諸島までは500kmだから、燃料を考えずに25ノットで航行したとしても11時間は掛かる。

途中燃料補給に2時間を掛けたとしても、13時間は確実に掛かる。

間違い無く艦隊を派遣するだけの時間はある。

母艦航空隊と、ポートモレスビーからの航空攻撃は5時間もあれば開始される。

今はまだ真夜中だが、航空攻撃が始まる頃には太陽が昇っている頃合いになる。

闇夜に紛れて敵機を振り切る事は出来ないだろう。

「対艦、対空電探に何か反応はあるか？」

「いえ、今のところは島影を映すだけです」

「島影を背にして電探に映りにくくしているかもしれない。警戒は怠るな」

「Yes, sir」

電探を担当する彼は、元は欧州脱出組で日本語など全く喋る事が出

来なかったが、今ではこの通りである。

ハーキュリーズ湾で一度給油を行う。

ホルニコート湾、ダイク・アクランド湾、コーリングウッド湾と越えて行けばダンカストル諸島はもう目の前だ。

迎撃を受けた場合、戦闘行動を取らねばならないがそうになると補給しなければ燃料不足で立ち往生しかねない。

対艦隊戦闘前、最後の補給になる。

やはり水雷戦隊の燃料消費はかなり多い。

既に水雷戦隊は各艦1回分の燃料を消費し補給しているが、給油艦に載せてきた燃料は、ルイジアード諸島を抜けて珊瑚海に出たら空っぽになるだろう。

戦艦や空母も、高速力を維持しているから燃料消費が激しい。

だが今のところは順調だ。

ビシャズ海峡とソロモン海にある潜水艦隊からも敵艦隊発見の報告は無い。

「対空電探に感あり、約200機が我が艦隊に向かって来ます。距離120〜160km、高度は……3000〜4500です。陸地が近い為か、レーダー波が反射して精度が出ません、申し訳ありません」

「いや、それは仕方がない。良く探知したな」

「ありがとうございます」

「これをどう見る？」

「まあ、まず間違い無く敵艦だろうな」

ポートモレスビーからのものだろう。

日の出から1時間ほどだから、多分日の出前に出撃して来たと思われるが、距離が近い。

オーエンスタンリー山脈に上手く隠れて来たのだろう。

山の向こう側では、幾ら優秀な電探があっても探知は出来ない。早期警戒機は隠密性を優先して上げていないから、目視による監視も無理だからこれに関しては仕方が無い。

「直掩機は32機だな？」

「ああ、各母艦から8機づつを出している」

「すぐに迎撃に向かわせる。艦隊、対空戦闘用意。輪形陣に組み替え。迎撃機を各母艦から12機つつ出すように伝えろ。他戦闘機は第2波、第3波に備えるように」

「了解した」

ネルソンに伝え、艦隊に伝えられると動き出す。

艦隊運動は、即席艦隊とは言え中々の物で10分で空母を中心にした輪形陣が組み上がった。

陣形を組み替えるその間にも迎撃の陣風が空へカタパルトで射出されて行った。

豪州作戦の終わり頃になって漸く量産体制が整った陣風だ。

本来ならもう半年は配備が早く始まり母艦航空隊は今頃全て陣風に機種転換がされている予定だったが、量産機型にするに当たり、不具合が生じたのだ。

量産性向上の為に簡略化をした結果、機体の強度が足りずに模擬空戦をした際に量産機全20機全てに主翼や胴体に歪みが発生したのだ。

どうやってもこれは直すことが出来ず、簡略化をする前の設計に戻して量産と言う形に落ち着いたのだ。

結果、量産が始まったのが4ヶ月前で、それでも3つの工場が24時間体制で量産をしてくれたお陰で1ヶ月前までに空母4隻分の陣風をなんとか揃える事が出来た。

「管制機より入電、直掩機隊敵機群と交戦開始。艦隊上空まで約20分」

管制機の流星が報告を入れてくる。

この型式の流星は爆弾倉を持たない代わりに、早期警戒管制機としての役割を果たす為に必要な装備を持つ。

特殊な長距離暗号無線機やより長距離を索敵出来る大型電探だ。

配備機数は艦隊に40機とそこまで多くはないが、重要な役割を担い、戦術や戦略上の要と言える。

「三式弾の残弾数は？」

「弾火薬庫と揚弾筒内を合わせて40発の残りがあります」

「よし、それだけあるなら十分だな。主砲対空射撃、三式弾用意」

「対地射撃分が少なくなるかもしれないぞ?」

「撃つたとしてもこの距離なら1波に付き2斉射が精々だ、無くなりはない。モレスビーには20発ぐらい残しておけばなんとかなる」

対艦戦闘では三式弾は使わない。

一式徹甲弾さえあれば良い。

各艦主砲塔1基につき、120発前後の砲弾があるが今回は一式徹甲弾、三式弾半々で搭載している。

三式弾も60発はあるから、ポートモレスビー用に20発残すとしても対空戦闘に各砲塔20発は使える。

戦艦5隻合わせて340発、足柄と古鷹も合わせれば500発の砲撃が可能となる。

これだけあれば、一式徹甲弾と合わせても後々に連山による爆撃も控えている事を考えれば十分だろう。

兎に角一時的にポートモレスビーが使えなくなれば良い。

あとは周辺の飛行場を叩きつつ爆撃で継続的に能力を奪えばいいのだ。

豪州には南方方面の連山を全て進出させている。

理由は距離が近いからだ。

豪州からならば、ニューギニア方面へは最大でも1000km程度だ。

この距離なら連山は最大爆装量でも余裕で往復が出来る。

沿岸部の飛行場から護衛の戦闘機も付けられる。

「電探に感有り。約200機が南西方向より進行中。距離は、100km〜150km、高度3500〜4500」

「各空母は上げられるだけ陣風を迎撃に上げろ。第1波を迎撃した直掩隊と迎撃機は艦隊防空圏に入ったら離脱、更なる敵機に備えろ」

敵第1波攻撃隊探知から程無くして第2波を電探が捉えた。

すぐさま格納庫に残る陣風全てが迎撃に向かう。
機数は約100機ほどだ、これで艦隊の陣風は全て迎撃に出払った
事になる。

格納庫には流星があるだけだ。

「敵機更に接近。第1郡距離約50km約100機。第2郡距離約8
0km約100機」

「艦隊、対空戦闘用意。ここでやられたら逃げる事は出来んぞ、各艦被
弾損傷は命取りと心得よ」

「了解」

今こそ防空専用に改造された3隻の真価が問われるだろう。

あの3隻は戦艦を凌ぐ対空火力を発揮出来る。

全艦を艦隊右舷側に配置し、その火力を発揮出来るようにしてあ
る。

左舷に抜けた敵機は攻撃を終えているし、そもそもこの状況で敵編
隊が迂回して両舷から挟んで同時攻撃と言うのは考え辛い。

仮に迂回したとしても戦艦がしっかり守っているし、防空巡洋艦で
はないとは言え足柄と古鷹も居る。

水雷戦隊と合わされば迂回兵力ぐらいならばしっかりと防いでく
れるだろう。

「敵機70機が艦隊防空圏に突入、迎撃隊は未だ戦闘継続中」

「敵第1郡迎撃隊に退避命令。同士討ちはしたくない」

命令を出すと迎撃隊の陣風が退避する様子が電探の画面上でよく
分かる。

予め距離200に照準を合わせていた戦艦5隻の主砲が一斉に火
を噴き、三式弾を敵編隊に対して叩き込む。

「三式弾による撃墜、約9機。炸裂が手前過ぎたようです」

「敵編隊崩れます！高度4000に降爆機、高度500に雷撃機！ほ
ぼ同時に突っ込んでくる！」

「編隊を崩されても突入のタイミングは変わらずか。連中、中々練度
が高いぞ」

ネルソンが腕を組んだまま言う。

確かに今までの掻き集めただけの兵力と言う感じではない。

大規模な編隊は崩れているが、それでも小隊単位での編隊はしっかり組んでこちらへ突っ込んでくる。

「三式弾撃ち方待て。今撃つても無駄弾だ。対空砲、機銃で応戦」

距離15000を切ったタイミングで、各艦の10cm連装高角砲が次々と火を噴き始めた。

敵編隊に飛翔する砲弾は一瞬で空を黒煙で埋め尽くした。

鈴谷、摩耶、能代の3隻を見ると対空砲火は他と比べて凄まじい。

彼女達が撃ち上げる対空砲火だけで空一面が真っ黒に染まっている。

「炸裂煙で敵機の視認が……、あつ、敵機2機が火を噴いて墜ちていきますー！」

見張り員が双眼鏡を覗いて敵機の報告をしようとしているがどうやら炸裂煙で敵機が隠れたりしてよく分からないらしい。

「しっかり目を開いて追えー！1機でも見逃して突入されれば命取りになるー！」

「敵機高度1000m以下で急速接近！距離5000！目標本艦の模様！」

「機銃応戦！今すぐに叩き落せ！」

ネルソンが声を張り上げて対空戦闘の指揮を執る。

接近して来た雷撃機十数機は一斉に放たれた多数の機銃弾に絡めとられて海面に叩き付けられた。

「敵降爆接近！降下体勢に入った！目標は本艦！」

「敵降爆戦闘機急降下開始！距離3500！」

「機銃は降爆に対応！落とさなくても良い、進路と登弾を妨害しろ！」

「信管の調定を間違えるなよ！」

「敵機距離500！」

「敵機投弾！コース外れている！」

「進路そのまま！」

見張り員の報告通り、投下された爆弾はネルソンの周囲に大きな水柱を立てるだけで終わった。

「ツ！ー！発直撃進路！」

「衝撃に備えー！」

ズドン!!と言う音と衝撃がネルソンを包む。

「被害確認とダメコン急げ！」

「命中は艦中央、救命ボート付近！火災発生、鎮火の見込み有り！」
すぐに報告が上がってくる。

損害は大したことは無い。

精々救命ボートや短艇が木っ端微塵になったぐらいだ。

「死傷者は？」

「破片や爆炎を受けて負傷者が十数名ほど発生しましたが、死者はありません。機銃3基が大破、使用不可能です」

「それならいい」

見張り員が被害を被ったようだが、幸いにも死者は無い。

これも防空巡洋艦に改装された3隻のお陰だろう。

あの3隻が殆どの敵機を撃墜するか、攻撃を断念させているからこれぐらいで済んでいる。

敵第2群も同じように攻撃らしい攻撃をすることは出来なかった。

投弾や投雷自体は出来たが対空砲火の影響で狙いがズレて回避せずとも良かったのだ。

「敵魚雷艦前方抜けた！」

「周辺の艦に通報、流れ弾に当たるなよ！」

第1波を防ぐと第2波が続けて攻撃を仕掛けてくる。

それも損害無しで切り抜けると、敵機の攻撃は止む。

恐らく、再攻撃はあってももう一度ぐらいだろう。

「ポートモレスビーの規模からしても、攻撃の規模が小さ過ぎやしないか？」

「恐らく、重爆などは出してないんだろう。対艦攻撃に4発重爆を出しても効果は薄いけど損害は大きいだけだ」

ネルソンが攻撃の規模が小さいと言うから予想を話すと頷く。

「問題は、この攻撃を見送った戦力がどうしているか、だな。そのまま飛行場に居てくれるのなら砲撃で纏めて粉碎出来るが、撤退されたら200機近い重爆が全く無傷のままと言う事になる」

「こちらの意図に気が付いていなければ、そのままポートモレスビーに居るだろうが……」

「フィンシユハーフェンとラエがあれだけの砲撃を受けたんだ、こちらの作戦行動の意図はとつくに察しているだろうさ」

「今からでも攻撃隊を出すか？」

「流星に武装を施して陣風に補給を行うとなったら我々はとつくにダンカストルー諸島だ。敵艦隊が居る可能性もあるから止めておこう」

「了解した」

「偵察機から報告は？」

「各機から特にこれと言った報告はありません。敵艦隊の発見報告も同様に無しです」

「この時点で敵艦隊が無いと言う事なら、敵艦隊は待ち構えていないと言う事になる。」

「敵艦隊は、温存策を取ったか？」

「どうだろうな……。豪州沖での海戦で大打撃を与えたが、連中の戦力だったらそれこそとつくに回復していてもおかしくは無さそうだが……」

「乗組員が足りていないとか、練度不足か？」

「有り得るな。それか、珊瑚海で迎撃の網を張っているかだがそうだったら索敵機が見付けているだろう」

「潜水艦で囲んでくるつもりなら、1隻も水上艦艇を見付けられないものにも納得出来るな」

「まあ、無いものに対策は出来ん。予定通りポートモレスビーを叩く。目的を果たしたらさっさと逃げてしまえばいい」

「敵艦隊の有無をネルソンと議論するが、そもそも偵察機が見付けられていないのだからどうしようもない。」

潜水艦隊からも報告は無いし、我々の艦隊の規模から考えても迎撃しようとするならば相応の戦力が必要だから見つけれないと言う事自体が不可能だ。

ならば敵艦隊は居ないと判断すべきだろう。

あとは敵潜水艦だが、可能性としてはポートモレスビー周辺で網を張っている可能性が一番高い。

ポートモレスビーを砲撃する時刻は既に太陽が昇っている時間帯だから、潜水艦の行動も低調なはずだ。

と言うより太陽がある内に潜水艦で攻撃を仕掛けるなど、簡単に発見されて逆に攻撃を受けて撃沈されてしまう。

或いは、単純に対応出来ていない、だろうな。

潜水艦と言えども出港までに時間は掛かるし攻撃可能位置などに移動しなければならぬからその分の時間も掛かる。

速力の遅い潜水艦では攻撃が出来なくても仕方は無い。

潜水艦に攻撃される可能性はポートモレスビー攻撃が一秒遅れるごとに高くなる。

であれば可能な限り早くやらねばならない。

「艦隊速力を上げた場合、離脱分の燃料を考えたら何ノットを發揮出来る？」

「各艦の燃料状況を問い合わせないと何とも言えませんね」

「すぐに問い合わせさせてくれるか」

「了解しました」

「どうした、提督」

「いや、敵潜の事を考えるなら可能な限り早く砲撃を終えてしまいたい。砲撃中はどうしても低速になるから攻撃され易い」

「なるほど。だが駆逐艦達の燃料も考えれば、このままの速度を維持するしかないだろうな」

ネルソンの言った通りであった。

やはり速度を上げてしまうと、軽巡、駆逐艦の残燃料に不安が出てきてしまうとのことだ。

砲撃中は対空、対潜警戒もしなければならぬから速力を揚げる余

裕は無いとのことだ。
そうならば仕方が無い。

結果だけを話すならば、ポートモレスビー砲撃は大成功となった。どうやら敵はフィンシユハーフェン砲撃が行われたのと同時に水上艦艇だけでなく潜水艦なども軒並み退避させたいらしい。

豪州に展開する索敵機が発見したらしいが通信機の故障で報告が出来なかったようだ。

珊瑚海を通ってニューカレドニア方面に抜けて行ったから、ダンカストルー諸島やルイジアード諸島に索敵を集中させていた我々は発見出来なかったようだ。

ともあれ作戦は大成功を収め、後々の事は連山による高高度爆撃に委ねられることとなった。

ポートモレスビー周辺の飛行場で主要なものは艦砲射撃で叩いたし、小さな飛行場も連山による爆撃で主要飛行場と共に継続的に叩かれ続けることになるのは間違いないだろう。

これで、ケアンズに対する海上輸送航路だけでなくパラオの安全もある程度の安全は確保されたことだし、ニューギニア奪還作戦に集中することが出来るのは幸いだ。

第79話

夕号作戦を無事に終え、被弾したネルソンも修理を終えた。

第一機動艦隊の各艦も入渠を終え、続々と戦列に復帰している。

ニューギニアに対しては豪州に進出、展開した連山によって連日爆撃が続けられ航空戦力に始まり陸上戦力の漸減も行われている。

既に存在する敵飛行場は使用不可能状態であることが知らされており、継続して使用不可能とする為に爆撃を続けている。

ニューギニア、ソロモン諸島方面に対する作戦実施は物資備蓄などを考慮し半年後に予定されている。

豪州が早い段階で耕作地として復旧出来たことから同地から直接食糧供給の2割を担える状態であるからだ。

流石に地雷や不発弾の除去が終わり切っていない場所を農地として再び使用する事は出来ないからな。

目下の最優先事項はニューギニア、ソロモン諸島方面に対する作戦準備と豪州全土の戦後処理と復興だ。

日本だけでは不足している農地や畜産業の為に、戦争で荒れ果てた広大な土地を再び開墾し、整備して行かなければならない。

既に浄水施設の建設や石油、鉱石資源を採掘する為の設備やそれらを輸送するためのパイプライン、鉄道も主要なものは敷設が完了している。

あとは網目状に豪州全土に拡げていけば良い。

相変わらず地雷や不発弾の除去に加えて各種建設、敷設などあらゆることに動員され続けている工兵の皆達には常々重い負担を掛けているばかりだ。

不発弾処理は想像以上のストレスが掛かる。

これでも週休3日はどうかして確保しているのだが、これ以上休みを削ると精神に異常をきたしたり、過労死や自殺をする者が冗談抜きで出て来ってしまう。

建設などは手隙の他兵科の兵達を応援に出しても問題無いのだが、専門知識と専門技能が必要とされる不発弾処理は駆り出せない。

だからこれに関しては時間を掛けて地道にやっけて行くしかないのだ。

豪州の防備も万全とは言い難いが、それでも日本本土やバリクパパンに投錨する艦隊が救援に駆け付ける時間稼ぎぐらいは十分に出来る。

豪州空軍は当初2個航空隊から現在3個航空隊、各隊12機づつの予備機を有し、計36機を含めて138機に増えている。

航空機の格納はソロモン諸島からの敵機からの攻撃に備えて地下となっている。

防御力は、地下5mに厚さ40cmのコンクリート厚だからそこまですては無い。

遅延信管付きの大型徹甲爆弾を食らえば簡単に貫通されてしまうが、通常の陸用爆弾なら十分に防げる。

豪州空軍は更に1個航空隊の錬成が開始されており、早ければニューギニア作戦中には戦力化の目処が立っている。

練度は我が母艦航空隊や陸軍航空隊に比べれば劣るが、兎に角ある程度の練度と何より数を揃えなければならぬ現状では、ある程度の技量があるならばあとは実戦で経験を積むしかない。

訓練だけでは得られぬ経験値と言うのが、実戦には明確にあるからな。

ここまで短期間の内に多数の搭乗員を揃えられた理由には、原田中將による搭乗員訓練課程の合理化及び短縮化などが絶大な効果を発揮していると言える。

今までの搭乗員訓練課程は、良く言えば士官候補生訓練課程のように手厚いものであった。

平時であればそれでも良いが、常に最前線における人的資源の損耗が発生する戦時だと養成に余りにも時間が掛かり過ぎてしまう。

事実、丸2年は掛かるほどの教育を施していた。

これでは搭乗員が大きく損耗した時に補充が利かなくなってしまう。

言いたくは無い事ではあるが、戦争と言うのは命すらも資源として考えねばならない。

だから戦時に於いては戦場で生き残り続ける為に本当に必要な教育のみを施し、前線に送り込む必要があるのだ。

それを実現したのが原田中将による功績だ。

この功績が無ければ航空戦力不足が理由となつて豪州空軍の戦力化には更に一年以上は確実に要する見込みであつたし、ニューギニア作戦やソロモン諸島作戦も同様に一年以上は実施が出来ないで居ただろう。

今までは搭乗員の損耗を徹底的に抑え、生還させてどうにかしていたがやはりそれでは足りないのは事実だからな。

—————

艦隊や母艦航空隊の練度は十分。

陸軍部隊の輸送も大詰め、物資の備蓄も十分。

艦隊はスラウエシ島トミニ湾まで進出し、同地で待機させていたタンカーから補給を受ける。

「艦隊の準備が整いました」

「支作戦の方はどうか？」

実施されている支作戦はニューギニア島全域の敵基地や防御陣地に爆弾を落とす続けると言うものである。

単純でありながら、効果は大きい。

「現在、豪州に進出した連山と疾風による爆撃を実施しておりますが、継続的に爆撃を続けて来ている為かほぼ沈黙しております。迎撃も散発的であり、迎撃と言うよりは稼働機の空中退避と言った様子で

す」

「被害は？」

「敵機との偶発的戦闘により疾風が11機と連山が3機。対空砲により連山7機の計21機となります」

「搭乗員達は？」

「戦死17名、重傷者18名、軽傷者39名となっております。軽傷者については治療後に戦線復帰済み、重傷者に関しても同様、もしくは前線勤務が出来ないと判断された者は後送されております」

「洋上に不時着した機の搭乗員は捜索救難隊や潜水艦によって救助を行っております。敵地に不時着した機に関しては現地で活動中の各特殊部隊によって救助、潜水艦に送り届け乗艦し帰還しております」
損害は小さい方だろう。

撃墜されても搭乗員さえ助かれば、それで良い。

何度でも言うが機体など本土の工場で幾らでも作れば良いのだ。

命には変えられない。

「遺体は？せめて国に還してやらねばならん」

「そちらも可能な限り、収容しております」

「そうか。だが、遺体に固執し過ぎるな。死んだ者達も、死んだ自分の為に誰か死ぬ事は望むまい……」

口にしながら、締め付けられる気分だ。

戦争だから死人無しとは行かないのは当たり前だし、俺自身も何度も将兵達が死ぬところを見ている。

だが、それでも一人でも死んで欲しくないのだ。

「これよりニューギニア島奪還作戦を開始する。艦隊抜錨」

号令により、既に出港準備が整えられていた艦隊が次々とトミニ湾から出ていく。

前路哨戒の為に湾の入り口付近辺りを二式大艇と南方航路護衛隊が対潜警戒を行っている。

陸軍の疾風も夜の空を飛んで、頭の上を守ってくれている。

報告は無いから、敵潜や敵機の脅威は無しと見て良い。

仮に何かあれば報告が最速で打たれるか、或いはそれよりも先に爆雷やら機銃弾が飛び交う事になる。

「2航戦、トミニ湾を出ます」

2航戦に続いて1航戦、装甲艦隊、3航戦がトミニ湾を出る。

更に後方には第1護衛艦隊、第2護衛艦隊、第1補給艦隊が陸軍部隊を載せた船団を守りながら続く。

艦隊の間を南方航路護衛隊旗艦夕雲と占守、対馬が抜けていく。

彼女達はこれから輸送船団をモルツカ海を抜け、ハルマヘラ海に入るまで護衛した後に南方、豪州向けの輸送船団護衛任務を引き続き行う事になる。

エアカバーは護衛に就く空母に加え、ハルマヘラ島の陸軍航空隊、二式大艇となる。

「手隙員上甲板」

艦隊を抜ける際、南方航路護衛隊が敬礼をしていくから手隙の乗組員に並ばせ、そして自分も艦橋から出て答礼をする。

進路を反転させ、トミニ湾へ戻って行く。

艦隊は輸送船団を後ろに控えさせ、マノクワリ周辺の制海権と制空権を奪取し、強襲上陸を仕掛けた後に飛行場を全力で奪取。

陸軍航空隊を進出させ、艦隊はダーウィンへ。

ダーウィンで待機する輸送船団を伴いドラク島へ。

渡河をしなければならぬ都合上、この陸軍部隊には指揮下に海軍陸戦隊があきつ丸や神州丸共に待機している。

同じ様にドラク島の飛行場奪取が済み、滑走路の修理と陸軍航空隊、豪州空軍の一部が進出した後にケアンズの部隊を迎えに行き、ポート・モレスビーへ強襲上陸となる。

これらの一連の強襲上陸作戦は1週間を目安に繰り上げなどを視野に入れつつ行う。

同時上陸も考えられたが、こちらの艦隊戦力が限られており敵艦隊出現の可能性も捨て切れない上に、輸送船団の護衛に就けられる戦力

に限られる以上は出来ない。

他にも洋上機動の為に各地点に上陸する部隊の司令部には200号型輸送艦が4隻、特大発動艇と大発動艇がそれぞれ25隻、計54隻が与えられている。

これらの上陸用舟艇の扱い自体は各司司令部に一任されている。

これらを繋いで一時的に仮設橋としても良いし、河川機動や洋上機動、物資の運搬に役立ててもよい。

使い方は多い。

潜水艦隊や航空機による偵察の結果、敵艦隊は迎撃には出て来ていない。

どうやらニューギニアでの艦隊を用いた防衛は捨て、ソロモン諸島での戦いに戦力を集中させるつもりらしい。

確かにソロモン諸島は深海棲艦の手によって要塞の様なものになっている。

艦隊を展開させて連携することが出来れば強力なものになる。

とは言えそれでもニューギニア島に展開する敵地上兵力は強大だ。

航空戦力こそソロモン諸島方面に後退したらしく存在しないが、侮る事は出来ない。

特にビスマルク海側からの敵補給線も未だ健在である事も懸念される。

だから敵地上兵力はその能力を十全に発揮出来る状態であるのは間違いない。

マノクワリに上陸する兵力は機甲師団含めて7万、ドラク島に対しては4万、ポートモレスビーに対しては10万となる。

合計21万名と、今までの作戦規模と比べれば精々半分以下の戦力だ。

投入戦力が少なくなったのには理由がある。

ニューギニア島中央を走る山脈がある事などの理由で大部隊の展開が他と比べてより困難である事や、単純に兵力不足であることから投入出来る兵力が限られているからだ。

海軍同様、陸軍も、特に地上兵力が不足している。

どれぐらい不足しているかと言うと、陸戦隊を貸してくれと海軍に泣き付いてくるぐらいだ。

陸軍で特に不足しているのは上陸戦の専門訓練を受けた部隊だ。

海軍陸戦隊は、上陸戦の訓練を徹底して行われた上陸戦専門の部隊だ。

通常の地上戦訓練も行われているが、単純な練度だけで言えばやはり各種上陸戦の方が圧倒的に練度が高い。

陸軍は性質上、どうしても地上戦訓練が主になり、さらには南方方面特有のジャングル戦の訓練が主体となる。

上陸戦と同じくジャングル戦も専門の知識や訓練が必要になる。

となればやはりどうしても上陸戦訓練は各部隊2回行えばよい、部隊によつては1回やっただけで実戦投入、となる事も往々にしてある訳だ。

規則としては訓練を行っていない部隊の作戦投入は禁止としているが、かと言ってたった1回訓練をしただけで上陸戦に、しかも敵の重要拠点で守りも固い場所に殴り込むなど狂気の沙汰だ。

陸軍も重々承知している事だし、今までは陸戦隊がその任務を行っていたのだが事今回に限っては、実は政治上の理由が絡んでいる。

今までの作戦は俺と言う存在がある以上餅は餅屋と言いながらもどうしても海軍主導の作戦になりがちであった。

とは言え陸戦は俺も詳しくは無く、当然陸軍に任せていたし、直接指揮を執るのは精々補給関係ぐらいなもの。

そこに噛み付いたのが陸軍派閥の政治家である。

後々に聞いた話ではあるが、陸軍としてはどちらが作戦を主導しようが気にしている奴のが少ないと言う意見であった。

確かに俺は陸海軍どちらもの最高指揮官ではあるが、とは言え流石に俺も、海戦ならば指揮を取る事が出来るが陸戦は大まかな指揮以外は無理だ。

出来るのは後方兵站線を維持する事ぐらいなもので戦闘部隊、しか

も軍団規模の部隊指揮を行うなど白旗である。

だから無理なものは無理、出来る奴に任せたらば良いと海を渡って補給せねばならない以上、補給線の維持以外は陸軍に一任していた。陸軍だってそれは承知の上で海軍が作戦を主導しても陸戦を任せてもらえていると言うことで全く気にしていなかったのだが、それに噛み付いたのが陸軍派閥の政治家だ。

陸軍としても頭を抱えるしか無いらしい。

なんせ今まで問題が無かったのにイチヤモンを付けて無理矢理問題にさせられた挙句に無理矢理議題として起こされたのだから溜まったものではない。

結果、陸軍共々今まで通り海軍主導で問題無いと御前会議などで散々説明したのだが全く折れる気配は無く、それどころかニューギニア作戦そのものに噛み付き発動を遅れさせようとすらして来たのだから悪夢だ。

作戦発動は決められた時期や期間に合わせて様々な調整をしているから、延期などにさせられたら全て水の泡だ。

結局、紆余曲折のすつたもんだを経てから、

「じゃあ……、まあ……、今回の作戦は陸軍主導でやりますか……」

と陸軍が渋々頷いた訳である。

頷いて作戦主導権を得たのは良いが、これで困ったのは陸軍だ。

なんせ渡洋を含む補給やら敵艦隊の対処やら、陸軍航空隊が進出するまでの制空権維持やら、余りにも専門外もいいところばかりで主導を握らされても操り切れないと言うのが現実だ。

海軍だって地上戦を任せると言われても無理だと、首を横に振るしか無いのだから当たり前と言うか、仕方がない事だ。

陸戦隊は確かに海軍の陸上部隊ではあるが、上陸戦が最専門なだけであって純然たる陸戦は陸軍に負ける。

ではどうしたかと言うと陸軍と話し合い体面上は陸軍主導ではあるが実際は今まで通り海軍主導でやろう、となった。

陸軍としても操れない手綱は要らぬ、と言うしか無い。

陸の戦いは確かにどんと任せて貰ってもよいが、海の戦いなど俺達

にどうしろと言うのだ、と愚痴を溢していた。彼らの上官も俺であるから、劳うしかない。

厄介なのはその政治家連中は良い仕事をしたと勘違いしてただでさえ、むかつく顔を余計にでかく、むかつかせていることだ。

余計なことしかしていないと言うのに、なんとも腹立たしい。

結果、戦力不足であることに加え陸軍が主導していると言う体面を保つ為に陸戦隊を陸軍の指揮下に入れた訳である。

陸戦隊なら海軍組織の一部隊だから、上陸支援や上陸後の艦砲射撃もやり易いし何より陸軍部隊に比べて訓練が足りない上陸戦を担えるのだから特に問題らしい問題は無い。

上陸戦と海岸堡の確保をしたら陸戦隊は撤収し、再び別作戦に備える事になる。

陸軍とは意思疎通がしつかりと取れているが、やはり組織が違うとどうしても齟齬が生じてしまう。

とある事例ではあるが陸軍から大口径による砲撃支援を要請されて、海軍は戦艦による艦砲射撃を実施したら威力が大き過ぎて危うく陸軍側に死傷者が出るところだったなんて話もある。

陸軍が使う火砲は、どれだけ大きくても15cmが精々、海軍の常識で言えば15cmは中口径クラス、しかも下から数えた方が早い大きさだ。

だが陸軍では15cmと言えば最大クラスの大口徑になる。

陸軍としては軽巡や重巡からの砲撃支援を要請したつもりが認識の差として、海軍は戦艦での砲撃を要請されたと思ひ確認を取らずに実施してしまったのだ。

これは双方に非があり、その点を留意させなかった俺に最大の責任がある。

死傷者が出なかつたのが幸いだが、危うかつた。

これを機にこの辺りの擦り合わせが徹底的に行われ、確認を取るようにとマニュアルが作られる事になる。

とまあ、様々な理由があつてニューギニア作戦に投入出来る兵力が限られたと言う訳だ。

3日ほどの航海の後、マノクワリ沖に達する。

直掩機を上げ、攻撃隊を発艦させる。

連山による爆撃で飛行場は継続的に叩いているとは言え稼働状態に無い訳ではないだろうし、飛行場周辺の陣地そのものは健在、或いは強化されていると見るべきだろう。

偵察でも敵地上部隊の動きはマノクワリやドラク島、ポートモレスビーを含めて各地で活発状態にあると分析されている。

艦砲射撃だけで叩いてもよいが、爆撃と艦砲射撃の二段構えで確実に敵防陣地は破壊しておきたいのだ。

陸用爆弾の他に、対地攻撃用の夕弾が主な装備となる。

急降下爆撃は通常の50番陸用爆弾だが、水平爆撃は800kgの夕弾だ。

夕弾は精密爆撃には向かないが、広範囲に打撃を与えるには優れている。

対空陣地などの精密性を要求される目標には急降下爆撃で、滑走路などの大きな目標には夕弾を、と使い分ければ最大限攻撃効果を高められる。

事実一度の攻撃で敵の滑走路は穴だらけ、航空機の離着陸はどれだけ急いでも3日は掛かるし、それも戦闘機を運用出来るようにするの
で精一杯だろう。

爆撃が済んだらば、戦艦と重巡が沿岸部に接近し、次々と砲門を開く。

以前の艦砲射撃と同じ様に三式弾を空中炸裂させ、辺り一帯を薙ぎ払いつつ一式徹甲弾を深い角度で落下させ地面に突き刺すようにさせて炸裂させる。

その砲声と炸裂音は幾らか離れた飛龍の艦上でも雷鳴の様な砲声が聞こえて来る。

「上陸予定時刻まで……、あと3時間か」

「陸戦隊の準備は完了。今は……、合戦飯を食べてるか、受領してる頃

かな？」

「腹ごなしもあるから、そうだろうな」

「私達はまだ先だね」

「まだ9時だ、ついさつき朝飯を終えたばかりだろうに」

艦砲射撃は丸4時間続けられる予定だ。

上陸は正午に開始される予定であるから、まだ時間がある。

戦闘中は飯を食っている時間など無い。

だから否が応でも食っておかないと戦えなくなってしまうのだ。

朝飯からまだ2時間程度しか経っていないが、それでもだ。

「敵艦隊、敵機、敵潜に関する報告はあるか？」

「ありません。艦砲射撃を除けば、静かで穏やかな海です」

「そうか。だが警戒は怠るな」

「勿論です」

艦橋でぐつ、と椅子に座り直す。

窓から見える風景は、穏やかとは言い難い。

艦隊が進むそれさえ無ければ穏やかな南洋の一風景にしか見えな
いだろう。

「いつか、終戦となって平和になったら、この景色も違ったものに見
えるのかもしれないア……」

「なにー？感傷中？」

飛龍に揶揄われるが、軽く笑って返す。

願わくば、そんな未来を自分の目で見てみたいものだ。

「暫くは、出番は無さそうだな」

「そうだね、航空隊は出撃後だから直掩隊と対潜警戒を除いて整備中。
早ければ、2時間後には攻撃隊編成が出来る程度にはなるかな」

「2時間もあれば、上陸開始時には陸戦隊の頭の上を守りつつ対地支
援も出来るだろう。十分だ」

話している間にも、戦艦と重巡による凄まじい勢いの砲撃が続く。

砲撃地点はさながら火山が噴火しているような、地獄の様相を呈し
ていた。

きつかり12時、あきつ丸と神州丸にそれぞれ乗り込んでいた2個陸戦隊5000名を第1波とし、大発動艇、特大発動艇、それにパンター戦車を載せた200号型輸送艦が海岸目掛けて突っ込んでいく。海岸近くに飛行場があるから、海岸線の奪取を完了したならばすぐさま飛行場を巡る攻防となる。

陸戦隊が海岸に着くと、微弱ながら飛行場付近から敵の火砲と機銃が火を噴く。

兵士が何人か撃たれ、倒れる。

衛生兵や周りに居た兵士が駆け寄り、応急処置を施したり、大発や輸送艦に担架に乗せて運んでいく。

機銃はパンターの主砲ですぐに沈黙し、火砲も上空を飛ぶ陣風がロケット弾を撃ち込むと、砲弾や装薬に引火したのか大爆発と共に沈黙していく。

それを空中で見ていた流星が敵の火砲やトーチカが破壊された事を陸戦隊に伝え、陸戦隊は戦車を盾に前進して行く。

本来なら対戦車障害物を除去する為に戦闘工兵が真っ先に前進するのだが、艦砲射撃で海岸線の障害物は殆ど吹き飛ばされて無力化されていると言うから最初から戦車を前進させることが出来る。

機銃や主砲を撃ちながらパンターが前に進み、その影に隠れながら歩兵達が内陸に向かって進んでいく。

やはり敵の防衛部隊は防御陣地ごと艦砲射撃で吹き飛んでいるらしく、飛行場で抵抗らしい抵抗があったのみで、殆どの生き残った部隊は更に内陸部、山中に散り散りに逃げたようだった。

その日の内にマノクワリを奪還し、更に3日ほどをマノクワリ近辺の残敵掃討や防御陣地構築、物資揚陸や集積、飛行場修理に充てる事とした。

陸軍側にも特に問題らしい問題は起こらず、陸軍航空隊の進出が完了したと同時にバードヘッド半島の奪還を開始した。

バードヘッド半島奪還を陸軍が進める中、艦隊はポート・ダーウイ

ンに向かうと同地で1日の半舷上陸を各員に設けつつ、砲弾薬や燃料水、食料等の補給を受けてから輸送船団を伴いドラク島を目指す。

途中、スコールに降られたがさしたる問題ではない。

上陸地点付近の波は少し高いが、作戦を延期するほどではなく、マノクワリと同様に敵飛行場を爆撃し、戦艦と重巡による艦砲射撃を実施する。

ドラク島は精々小高い丘がある程度の平らな島だ。

遮蔽物も無く、狙う側からすれば苦勞らしい苦勞は無いに等しい。

強いて言えば奪還した後には、砲撃で穴ボコだらけの島を平らにしたりと言う整備が大変な事ぐらいだ。

広い平地だから飛行場を建設するのに適しているし、前線における飛行場としてはかなりの好立地だ。

深海棲艦も勿論飛行場を建設し、豪州や輸送船団に対しての航空攻撃拠点として活用していたが、我々がニューギニア方面に対する圧力や飛行場破壊などを継続的に始めると敵は航空戦力の殆どをニューギニアからソロモン諸島に後退させ、それに伴いドラク島飛行場は放棄、守備隊が残るだけとなった。

ドラク島に飛行場を建設する事が出来れば、ニューギニア島全域への満遍ない航空支援を与えられる。

他にもアラフラ海の警戒監視任務、船団護衛任務、ソロモン諸島奪還の航空兵力の中継地点としても活用できる。

とは言えやはりビスマルク海の敵補給線の寸断、破壊が出来ていない以上ニューギニア島の戦いは激しくなるだろう。

本来ならこの補給線は真っ先に叩いておかねばならないのは間違いないが、足踏みをする理由がある。

実は敵の輸送船団に護衛空母だけで無く、大型の正規空母まで出張って来ている。

しかも1隻2隻と言う数ではない。

空母6隻戦艦4隻はくだらないガツチリとした機動部隊だ。

これを叩くとなったらこちらも総力を上げなければならぬし、損害も出よう。

ニューギニア、ビスマルク諸島、ソロモン諸島を含む海域では我々の攻勢に備えて敵は空母を4隻一塊りの機動部隊を複数揃え、更には戦艦と重巡を軸とする艦隊も多数確認されている。

確実に言えるのは、艦隊戦力だけで比べれば敵は最低でもこちらの倍は戦力を有する事が判明しているし、更には飛行場を多数建設し、ビスマルク諸島とソロモン諸島を航空要塞としている。

航空戦力も、母艦航空隊だけで挑めばこちらの5倍は下らないだろう。

陸軍航空隊や豪州空軍を投入出来るだけ投入し、数的不利を覆すだとか、拮抗に持ち込むのは無理でも戦いに勝って次に繋げられる可能性はある。

その為に陸海軍の戦略を司る者達と共に知恵を絞り、作戦を立てたのだ。

ドラク島奪還も順調に進み、損害らしい損害と言えば対戦車地雷によってパンター戦車を20両ほど失ったぐらいで、乗員は無事だから機材の補充を受けたら戦線復帰となる。

同地の飛行場も整備し終わり、野戦飛行場としては十分立派な滑走路が2本並んでいる。

燃料タンクが無いから、ドラム缶頼りの燃料補給だが早いうちに燃料タンクを地下に建設し終える予定だから、燃料が詰まったドラム缶を、擬装しているとは言え野晒しにしなくても良くなる。

大量に積まれているドラム缶と言うのは中々壮観な光景ではあるが、その中に燃料がたつぷり詰まっている事を考えると、あれは本当に心臓に悪い。

何時爆撃を食らって黒煙と大爆発、大火災になってしまうのかと気が気で無いのだ。

陸軍の主力戦闘機は疾風だが、疾風は1機当たり500Lの搭載が可能だ。

ドラム缶缶2本半分と言うことになるが、ドラク島には疾風が21

6機配備されている。

予備機は勘定に含めていないが、予備機はまあ良いだろう。

となると、216機が全機全力出撃するとなれば、108000L。

KL換算にして108KLと言う数字になる。

これはドラム缶540本分に相当する量だ。

ついでに言っておくならばこれだけでは到底足りない。

結果ドラク島飛行場には現在、5000本余り、約100万Lもの燃料がドラム缶に詰め込まれて置かれている訳である。

これだけの量が置かれている理由はニューギニア島における航空隊の最前線であるからだ。

連日連夜、航空支援の為に飛び続ける陸軍航空隊の燃料消費量は母艦航空隊を有する我々とは規模が比べ物にならない。

母艦航空隊は出撃機会が多くは無いから、訓練ぐらいでしか消費をしない。

それでも空戦らしい空戦が無い分、まだ抑えられている方だがそれでも十分とは言えない。

こんな量の燃料に、マッチ1本どころか火の粉を一つでも落としてみる、三式弾や一式徹甲弾の絨毯艦砲射撃を食らった敵地と同じような地獄絵図になる。

だから滑走路を整備し終えたらすぐに燃料タンクを作るのだ。

そうすれば、少なくとも250kgぐらいの爆弾が着弾しても安心していられる。

ドラク島飛行場の燃料タンク建設に着工した頃、艦隊はケアンズから輸送船団を率いてポートモレスビーに一路向かっていた。

陸地の比較的近くを通るといっても、やはり珊瑚海を通るから敵艦隊や敵潜水艦に襲われる可能性は他の上陸地点よりも高い。

「霞より入電、『敵潜探知。我是ヨリ江風ト敵潜搜索ヲ開始ス』以上です」

「やはり襲ってくるか」

「ここで時間を稼げば、その分ビスマルク諸島とソロモン諸島の要塞化を進められるからね」

「群狼作戦か、あるいは個別に仕掛けてくるか……」

「これだけの船団だからね、数を揃えて来られたらどつちも有効打だよ」

「敵潜の対処は取り敢えず、護衛艦隊に任せておこう。俺達は、上陸に備えなければならん」

恐らく、ポートモレスビーの上陸は今までと同じように楽には行かないだろう。

何故なら豪州を除けばこの方面に於ける数少ない重要拠点だからだ。

ラエやフィンシユハーフエンを叩いた事で、使える港があるのはポートモレスビーだけだ。

と言うよりも、敵は復旧をポートモレスビーに集中していると言うべきか。

ここを失えばニューギニア島陥落は時間の問題となる。

以前の砲撃で叩いた筈だが、やはり重要拠点と言うだけあって復旧もかなり早い段階で成されていた。

飛行場こそ復旧されていないが、防御陣地や要塞などは復旧され実戦に耐え得るものとなっている。

航空偵察による分析の結果だが、市街地だけで無くポートモレスビーの周りを囲む山々にも多数の陣地があると予想されている。

そこで、やはりと言うか艦砲射撃で敵陣地を軒並み吹き飛ばすと言う方法を先ず行う。

と言うよりも、これぐらいしか方法が無い。

爆撃でも良いがそれだと投射量が少ないから時間が掛かる。

沿岸部に対して手っ取り早く、確実にやるならば艦砲射撃が一番確実と言える。

三式弾の破壊力は、どうやっても爆弾では発揮し得ないからな。

ポートモレスビーへ、絨毯艦砲射撃を実施した後には海岸堡を得る為

に陸戦隊が上陸を開始した。

やはり敵の抵抗は他地点とは比べ物にならないほどに激しいものだったが、航空支援を受けながら陸戦隊は海岸堡を確保し、陸軍と交代。

陸軍は被害を出しながらもジリジリと、確実に前進。

17日ほどでポートモレスビー市街地、飛行場、周囲を囲む山地を確保することに成功した。

ニューギニア島奪還は想定通り、島の中央を走る山脈にぶつかり始めると我が軍の進軍速度は極端に落ち込んだ。

やはり山脈と言う地の利を生かし要塞や重防御陣地などを構築して激しく抵抗してくる。

しかもビスマルク海からの補給線が健在であるから武器弾薬も大量に、大量投射による火力こそ正義と言わんばかりの射撃量だ。

とは言え我々も馬鹿ではない。

こうなる事は想定範囲内であるし、作戦初期の中にはこれら要塞や防御陣地の奪取は含まれていない。

中央の山脈を包囲するように進軍し、完了すると先ず飛行場を各地に建設し、陸軍航空隊を進出させる。

こうすることで航空支援をたっぷり付けながら、地上部隊は進める。

海軍の役目は補給を企む敵艦隊を寄せ付けない事だがどうやら敵はニューギニア島を捨てたらしい、敵艦隊が近寄ってくることは無かった。

損害を出来る限り抑えつつ、航空支援を受けながら山脈を奪還し終えたのはニューギニア島上陸から2ヶ月と2週間が過ぎた日であった。

第80話

ニューギニア島の奪還を終えると、すぐさまビスマルク諸島へ上陸が行われた。

ニューギニア島は残敵掃討が残るだけで防衛に4個師団を配置し残りの部隊は全てビスマルク諸島へ転出となった。

ビスマルク諸島自体はニューギニアに比べれば大したことは無く、1か月ほどでビスマルク諸島の奪還を終えるとすぐさま同地に飛行場を建設し、陸軍航空隊を進出させた。

この頃になると陸軍航空隊の方にも徐々に陣風が配備され始め、機種転換訓練を終えた部隊が前線に投入され始めている。

陣風は防御力も高く信頼性も良い。

航続距離こそ烈風より少し長い程度であるが、何よりも20mm機銃6艇と武装は強力だし、弾数も各門200発の合計1200発と継戦能力も申し分無い。

陸海軍で纏まった数を投入することが出来れば戦局をより有利に働かせることが出来る。

しかしそう簡単に行かないのがソロモン諸島での攻防戦だった。

「大分損害が大きくなっているな……」

「はい。ソロモン諸島全域が航空要塞に変貌しております。各地の飛行場が電探による誘導や哨戒基地と上手く連携し迎撃も苛烈、敵機の搭乗員の腕もかなり良いです」

ソロモン諸島奪還作戦が開始されてから4か月、深海棲艦から奪還が出来たのは僅かにショートランド諸島と辛うじてチヨイスル島の二つのみ。

ブーゲンビル島を航空兵力の最前線としてチヨイスル島2個師団、ショートランド諸島1個師団の守備隊を置くに留まっている。

今はベラ・ラベラ島以东のニュージョージア島までの奪還を目指して作戦を展開している訳だが、御覧の通り大規模な航空戦が続いているばかりで上陸など夢のまた夢だろう。

やはりソロモン諸島をこの方面での決戦地と敵は定めているらしく、集められている敵兵力は軒並み高練度でしかも数が多い。

距離もあるから、一気に敵地を飛ばして攻撃を仕掛けることも出来ないから、これに関しては地道に島を一つつつ奪還していくしかない。

「幸い搭乗員は救助して無事な者が殆どです。しかし機体の損耗が激し過ぎて補給が限界です」

「特に酷いのは連山だよね……。あの機体、頑丈だから撃墜されるとか搭乗員が死ぬってことは中々無いけどその分滅茶苦茶に撃たれるから機体がボロボロになって使える部品取ったら廃棄するしかないってのが出撃事に20機は出るからね……」

「連山は陣風10機分の資材を使うから……。まあ、取り合えず搭乗員が無事なら何でもいい」

機体は幾らでも作れるが、どれだけ訓練期間を短縮したとは言え搭乗員はそうもいかないのが現実だ。

しかも爆撃機の搭乗員ともなれば、より専門的な訓練も積まなければならぬ。

目標としている島や当該海域などには第1潜水艦隊、二式大艇が数十機、敵地に脱出、降下した搭乗員は陸海軍双方の特殊部隊が派遣され救助を行い潜水艦に乗って帰投と言う手段を取っている。

敵地に降下した場合に備えてStg44を装備させている。

歩兵と違って、30発弾倉では無く携帯性を優先し弾倉は15発入

りとなっている。

それを4本乃至5本程度携行して搭乗するのだ。

携行段数が少ない理由は特殊部隊が到着するまで取り合えず凌げれば良いからだ。

連山や陣風は可能な限り生産性の向上のための設計と生産ラインの構築が為されているが、機体そのものの補給が追い付いていない。生還率が高いが、機体が無いから再出撃が出来ないのが現状だ。

それこそ部隊によつては迎撃戦を行う為に部隊予備保管兵器として倉庫に仕舞われてあつた疾風を引っ張り出したりなんて言う状況なのだから、どれだけ機体の補給が追い付いていないか分かるだろう。

今のところ、連山の補充に関しては搭乗員が本土まで戻つて来て機体を受領し、前線まで飛ばしていくと言うのが実際だ。

連山に限らず陣風や二式大艇などの航空機と言うのは大きいから船便で輸送するとなると再組立てとエンジンの調整が兎に角面倒だ。

連日連夜航空戦が繰り広げられて爆弾を落とされる飛行場の格納庫でそんな作業を悠長にやっていたら空で撃墜されるよりも先に格納庫で爆弾の餌食になる。

飛行機と言うのは空の上なら機銃弾が飛び交うだけだから、生き残れるが地上じゃあ何にも出来ない、無力なのだ。

だから搭乗員が直接受領し、飛ばしてきた方が安全であるし効率がいいのだ。

それに日本本土からビスマルク諸島まで、各地を経由しても合計24時間、更にスラウエシ島で合計6時間の訓練飛行時間を設けているから、新しい機体に慣れるぐらいは出来る。

機体には当然だが個癖がある。

個癖は小銃や戦車、対空砲と言つたあらゆる兵器に共通することだが30時間の飛行時間があれば個癖を掴むぐらいは出来る時間だ。

廃棄となつた機体は前線に物資を輸送して船倉が空になつた輸送

船で本土へ運ばれ、再び錆潰されたりして再資源化される。

こうした事は出来うる限りやって、資源の消費を可能な限り抑えなくてはならない。

ベラ・ラベラ島に取り合えず陸戦隊を上陸させて、前哨基地を作ればあとは島伝いに飛び石の様に輸送艦などの上陸用舟艇を使って兵力を送り込めばいい。

艦隊を出して一気に作戦を進めたい気持ちもあるがなんせ敵艦隊が強力だから下手に出してしまうと暫く作戦行動が取れないレベルの損害を食らう可能性が大きい。

敵基地航空隊も強力だし、艦隊は二正面戦闘にどうしても持ち込まれてしまうわけだ。

最低限敵飛行場を少しでも叩いておかないと、ただでさえ優勢な敵艦隊とは戦えない。

「それと、敵の戦闘機に新型が確認されました」

「……予想はしていた事だ。予想される性能は？」

「最高速度は時速700kmに迫る、或いはそれを超えているかと。上昇力も優れております。防弾性能は深海棲艦機らしく強力、武装は12.7mmが4〜6門。航続距離の方は不明ですが、増槽を付ければ2000kmは飛びそうだと実際に会敵した搭乗員は言っております」

「陣風と良い勝負だな……」

「しっかしここに来て敵も新型機を投入して来たかあ……」

「機体性能での有利は、あっさり埋められたわけだな」

「ですが配備が間に合っていないのか、まだF6Fがその殆どを占めているようです」

参謀達が収集したデータを報告してくる。

敵新型戦闘機は性能的にはやはり陣風と同程度、と言ったところだ

ろう。

問題は新型機を投入して、F6Fに対する機体性能差によるアドバンテージを失ったと言う事だ。

いや、敵の配備数が極々限られている今であればまだこちらが優勢と見るべきだろうが、その差など深海棲艦の物量であればあつさりと埋められてしまう。

「新型機が確認されてから、今までに確認された機数はどれぐらいだ？」

「搭乗員から新型機の報告があつたのが1週間前、この時は凡そ10機が確認されました。最新の情報は本日の午前中に敵に対して行われた攻撃です。本日は凡そ40機程度だと」

「大分、急いで配備を進めているらしいな……」

「はい、もう1週間もすれば100機は出てきてもおかしくは無い、と試算されております」

航空参謀の報告を聞いて、腕を組んで考える。

敵新型機が100機も出てくれば、今より戦いは辛いものになるだろう。

こっちは現状補充機体を用意することも満足に出来ていない。

本土じゃ、機体待ちの搭乗員がわんさかと居る。

ブーゲンビル島の飛行場は、その殆どが野戦飛行場でも100機は置いておけるものだ。

奪還作戦開始をした時は陸軍の陣風だけで700機以上、連山だつて400機はあつた。

それが今じゃ陣風400機、連山も250機にまで減つていると言うのだからどれだけ損耗が激しいか分かるだろう。

搭乗員はしっかり救助して生き残っているから良いが戦闘機搭乗員だけでも250人以上、連山でも1400人は機体が無いと言う事で本土で待機させられている状況なのだ。

これ以上損耗が広がれば、作戦の一時中断をせねばなくなる。

敵に再び備えさせるところか、反攻の機会を与えてしまうことになるわけだ。

そうなればズルズルと戦線は後退していくのは目に見えている。

……これが最後の機会か。

「参謀長、輸送船団を含めて艦隊はどれぐらいで出撃可能か？」

「は、はっ、3日頂ければ出撃可能です」

「よし、艦隊出撃準備、出撃日は3日後夕刻。陸軍師団は輸送船団に分乗、陸戦隊は上陸戦準備。陸軍航空隊の各隊司令を呼んでくれ」

「「「はっ」「」」」

命令を言うと、いよいよだと全員が表情を引き締めて駆けていく。それほどこの4か月は耐えに耐えた期間であつたと言えるだろう。

ケアンズ、ブリスベン、ポートモレスビーの3港では慌ただしく作戦準備が進められていた。

燃料補給や各種物資の積み込みを大急ぎで艦隊は行い、輸送船団は陸軍師団、陸戦隊をそれぞれ乗せて集結する。

「諸君、急な呼び出しにも関わらず飛んできてくれたこと、感謝する。しかし状況はかなり逼迫しているから、早速だが会議に入りたい」

ソロモン諸島の地図を大机の上に広げ、指揮棒を指す。

「今我々が奪還を進めているベラ・ラベラ島だが、敵の激しい抵抗で思うように進んでいないし、ましてやそれ以外の島々の奪還など夢のまた夢になる」

「つい先日、敵が新型戦闘機を配備し始めたのが確認された。これは近い内に我々の機体性能差によるアドバンテージを失うことを意味し、それ以降の戦いは今以上の泥沼の消耗戦となるのは目に見えているのは各人承知の通りだろう」

「そこで、少しでもアドバンテージがある今の内に、多少強引でも良いから作戦を進めた方が良いと結論に至った」

「では、目標はベラ・ラベラ島ですか？」

「いや、ベラ・ラベラ島だけではない。サンタクルーズ諸島までのソロモン諸島全域を一気に奪還する。その勢いを利用して、バヌアツ、

ニューカレドニア、ニュージージーランドまでの奪還を行いたい」

俺が指揮棒でサンタクルーズ諸島を指しながら言うと、会議室がにわかに騒めき出す。

「閣下、それは余りにも冒険が過ぎるのではないでしょうか？ 今も航空機の補給が間に合っておりませんし、それだけの一大攻勢を遂行出来るだけの能力が、果たして陸軍にあるのでしょうか……？」

「分かっている。だが、このままここで足踏みをしていても、より劣勢になるだけだ。であれば、纏まった戦力を投入出来る今こそ、最後の機会だと考える」

「……なるほど、承知しました。ですが、ソロモン諸島に対する作戦は我が陸軍も全力を以て参加させて頂きますが、バヌアツやニューカレドニア、ニュージージーランドに対しては我が陸軍は航空隊は出せませぬ」

「分かっている。あれだけの長大な距離を片道切符にさせるつもりは毛頭無い。ソロモン諸島にさえ全力を尽くしてくれるのなら文句はない。ソロモン諸島以东に対する攻勢における制空権は海軍が責任を果たす」

「閣下がそこまで言われるのであれば小官は従うのみです。分かり申した、我が陸軍も航空隊は出せませんが、地上部隊は最精鋭を掻き集めて事に挑ませて頂きましょう」

「感謝する」

頭を下げ、作戦の説明に入る。

三日後、出撃準備の整った艦隊と輸送船団はそれぞれ出港、目的地を目指す。

ポートモレスビーから出撃する部隊はベラ・ラベラ島からガトカエ島までの奪還を。

ケアンズから出撃する部隊はサントイサベル島、ラッセル諸島の奪還を目指す部隊とフロリダ諸島の奪還を行う部隊に分かれる。

ブリスベンの部隊はガダルカナル島、マライタ島、マキラ島の奪還を目指す部隊に分かれる。

それぞれ、ポートモレスビーは2個師団4万。

サンタイザベル島に2個師団4万、ラツセル諸島に1個師団2万。

ガダルカナル島に5万、マライタ島に5万、マキラ島に4万。

そして陸戦隊をウラワ島に2個連隊、ベロナ島2個連隊、レンネル島に3個連隊の派遣が決定している。

これらの護衛には第1、第2護衛艦隊と第1補給艦隊が当たる。

1航戦から3航戦は敵艦隊に備えてソロモン諸島近海で備える。

各護衛艦隊は空母1隻を残し、第1航空艦隊に合流する。

でないとならぬと敵艦隊との戦力差が厳し過ぎて話にならないのだ。

かと言って護衛艦隊に戦艦が居るとは言え輸送船団に全く空母を付けずにと言うのも問題だ。

軽空母1隻でも40機の搭載機数はある、主力級の敵空母が纏まって出てこない限り、陸軍や豪空軍の戦闘機も護衛に就くからやられない。しない。

対潜用に各艦の水偵や二式大艇もフル活用するし、その辺は急に決まったものとは言えど最大限の戦力を割く。

「潜水艦隊からの報告です」

「読み上げてくれ」

「はっ、読み上げます。『我伊401、敵大艦隊ニューカレドニア出港ヲ確認ス。空母戦艦合ワセ30隻以上、随伴艦100隻余り、第1航空艦隊二向カフ』以上です」

「22対30かあ、随分と戦力差があるね」

飛龍が声を漏らして言う。

「……いや、それだけで済むはずがない。何処かにもっと居る筈だ」
「どこにいますのしょうっ？」

「近辺で艦隊が停泊出来る場所は限られている。エファアテ島のメレ湾、ウンディネ湾辺りにもう1個艦隊ぐらいいはいる筈だ」

「確かにヌーメアとエファアテ島ならば距離も十分に近いですし、有り得ますな。索敵を命じますか？」

「ああ、頼む」

敵艦隊の追跡任務を行っている第1潜水艦隊にそれを命じようとしたところに、再び報告が入る。

それは我々が予想していた通りエファアテ島からも空母8隻、戦艦10隻の艦隊が出撃したと言う報告が入った。

これで、主力艦だけでも22対40となったわけだ。

「倍の戦力差ですか……」

「艦載機数は3倍、しかも高練度が予想される。今までの様に迎撃に徹していれば勝てる相手じゃなさそうだね」

「ああ。航空参謀、攻撃隊の編制を急げ。今回の戦い、先制攻撃をやった方の勝ちだ」

「攻撃隊はどのように振り分けますか？」

「先に発見した敵艦隊をまず叩く。戦闘機も各艦8機つつを残して全て攻撃隊の護衛に就けてやれ。装甲艦隊の戦闘機隊でどうにか凌ぐ」

「了解しました」

この戦いはどちらがどれだけ早く敵艦隊を発見し攻撃隊を出し、先制を取れるかが鍵になる。

少なくとも現段階では、我々が敵艦隊を発見したと言う先手を取っているからそのまま敵を叩かないと戦力差に物を言わせて潰される。であるならば、確実に敵空母を今この段階で叩かないとならない。

そのためならばこちらの直掩機を大きく削ったとしても攻撃隊に陣風を多く就け、何としてでも攻撃を成功させなければならぬ。

飛龍

陣風33機 流星32機 計65機

蒼龍

陣風33機 流星32機 計65機

瑞鶴

陣風 3 3 機	流星 5 2 機	計 8 5 機
隼鷹		
陣風 3 3 機	流星 3 2 機	計 6 5 機
飛鷹		
陣風 3 3 機	流星 3 2 機	計 6 5 機
天城		
陣風 2 9 機	流星 3 6 機	計 6 5 機
阿蘇		
陣風 2 9 機	流星 3 6 機	計 6 5 機
グラーフ・ツェッペリン		
陣風 2 9 機	流星 2 0 機	計 4 9 機
アークロイヤル		
陣風 2 9 機	流星 2 4 機	計 5 3 機
加賀		
陣風 6 2 機	流星 4 8 機	計 1 1 0 機
鳳翔		
陣風 1 6 機	流星 1 2 機	計 2 8 機
神鷹		
陣風 1 6 機	流星 1 2 機	計 2 8 機
龍驤		
陣風 1 6 機	流星 1 2 機	計 2 8 機
大鳳		
陣風 1 2 機	流星 1 2 機	計 6 1 機
信濃		
陣風 1 2 機	流星 1 2 機	計 1 1 0 機
陣風 3 9 1 機	流星 4 0 4 機	計 7 9 5 機

一度の攻撃に全力を掛ける総攻撃だ。

艦隊直掩は大鳳と信濃の戦闘機隊を主力に各空母から8機づつを
残し、計243機を残す。

予想される敵攻撃隊の機数を考えれば直掩隊は相当少ないが、敵空母を叩くことが最優先だ。

装甲艦隊を前に出し、今まで通り耐えてもらうしかない。

「敵艦隊との距離が予定に達しました」

「攻撃隊発艦始め」

1時間半ほど25ノットで敵艦隊に向かうと、攻撃隊の射程に入る。

すぐさま発艦を命じ、カタパルトで次々と射出されて行く。

「装甲艦隊を前に。艦隊輪形陣」

空襲に備えて装甲艦隊に1航艦から戦艦、巡洋艦、駆逐艦を多数出し、守りを固めさせて全面に出す。

敵の空母の数はこちらの倍だ、空襲も当然激烈なものになるのは簡単に想像出来る。

デカイ獲物を目の前に、しかもあれだけの戦艦に守られた目立つ色の装甲甲板を備えた巨大な空母2隻だ、敵もどうやっただって無視は出来まい。

他の空母も飛行甲板に装甲が施されているとはいえ、あの2隻ほどの装甲は無い。

改装を施されたお陰で、2000mぐらいの高度からであれば800kg爆弾の水平爆撃にも耐えられる装甲を施されている大鳳と信濃だ。

水雷防御やダメージコントロールも強化されているから、片舷に5〜6本食らわない限りはどうにでもなる。

新しい素材が開発されていないければ、こんなことはとても出来ない。

しかしそれでも、軽く1000機を超えるであろう敵攻撃隊を一身に受けては、その防御力もどれほど通用するか分からない。

「後の事は、頼んだぞ」

『勿論だよ。提督こそ気を付けてね』

「ああ。飛龍達の働きに掛かっているからな」

『うん、大丈夫。それじゃあ、本当に気を付けてね』

「武運を祈る」

『提督も、御武運を』

確実に装甲艦隊を目標とさせるため、大和に将旗を掲げそして俺自身も乗り込んでいる。

本当ならば艦隊旗艦の大鳳に、と思ったが流石に空母であるのに加えて俺が乗るなど二重に狙われやすくなる、何かあった場合大事では済まなくなるからせめて防御力の高い大和か武蔵に乗ってくれと皆に言われた結果だ。

通信でも、平文で俺が大和に乗っている事は流した。

これで幾分か、大鳳と信濃を狙う敵機は減る筈だが、それは勿論大和が余計に狙われると言う事を意味している。

辛い役目を背負わせてしまうが、納得してもらおう他あるまい。

「大和、損な役割を持って来てすまん」

「いえ、大和は提督にとっても感謝していますし、それに嬉しいです」

「嬉しい？」

「はい。あの戦争の時は、私は勿論武蔵も殆ど活躍らしい活躍の場を与えられずに、あんな最後でしたから。だからこうして大きな活躍の場を何度も頂けるのは嬉しい事です」

「そうか……」

大和の言葉に、頷いて空を睨む。

敵艦隊から攻撃隊の発艦が第1潜水艦隊より報告されている。

距離を考えれば、30分ほどで我が攻撃隊が敵艦隊に到達、2時間ほどで敵攻撃隊が来襲するだろう。

「提督、合戦飯をお持ちしました」

「ん、ありがとう。乗組員の皆には配ったな？」

「はっ、既に腹拵えを済ませているか、丁度している頃でしょう」

「そうか、ご苦労。有難く頂かせてもらうよ」

「はっ」

給料長が見慣れた合戦飯、塩の効いた握り飯に期限の近い牛缶を使った牛肉の煮付け、そして和布の入った味付けの濃い目の味噌汁が盆に乗せて運んでくる。

艦橋に詰めているのは俺の他に、俺の従卒が二人、それに大和の要職の面々だけであり、艦隊司令部は飛龍にそのまま載せているから人員は少ない。

全員に合戦飯が配られ、手を合わせてから食べる。

戦闘行動を考え、しっかりと塩分補給を出来るように濃い味付けがされた合戦飯は、質素ながらやはり上手い。

握り拳ほどの大きさの握り飯をガツと頬張り、手掴みで牛肉のしぐれ煮を口へ放り込む。

沢庵との組み合わせも良いが、牛肉のしぐれ煮と食うのも美味しい。和布の味噌汁も味が濃いのが、これからの事を考えれば寧ろ足りないぐらいと思える。

「ふう……、御馳走様でした。給料長、ありがとうございます。美味かった」

「はっ。有り難うございます。それでは盆をお下げします」

盆に乗せられていた濡れた手拭いで手を綺麗にしてから下げてもらう。

するとそのタイミングで攻撃隊から敵機の迎撃を受けた旨の報告が入った。

—————

攻撃隊が迎撃を受け始めたのは、敵艦隊から150km程の地点であつた。

攻撃隊全体を束ねる石田大佐は予め敵機から激烈な迎撃を受ける

と聞かされていたこともあり、高度有利を取る為に通常ならば4000mほどで進軍するところを、今回は8000mで進んでいた。

進軍高度が高過ぎると、その分雷撃の難易度が高くなるがそこは練度で補えると踏んでいた。

各戦闘機隊を8500mと7500mに配置し、高高度或いは低高度から敵機が襲つてきても良いように備え、機上電探に目を光らせていた。

『敵機右下方！機数600！』

「戦闘機隊は高度有利を生かして本隊に敵戦闘機を近付けさせるな！」

襲い掛かって来た敵機は1航艦の戦闘機機数と同等である。

本来ならば、攻撃隊本隊も甚大な被害を出す機数であるが、高度有利が1500mほどあった為に陣風各機は一撃離脱に徹することが出来た。

幸いにも敵の新型戦闘機の機数は全体の1割程度、恐らく空母1隻か2隻分程度であった事も有利に働いた。

『いいか、攻撃に失敗しても深追いするな！絡め獲られて墜とされるぞ！』

『本隊にさえ近付けさせなけりや良い！撃墜に目を眩ませるなよ！』

高度有利さえとつていれば、常に頭を押さえながら突っ込んで一撃を食らわせ、さっさと離脱してしまえばいい。

それでもやはり絡め獲られて撃墜される機や、深追いしてしまい撃墜される機もいる。

敵艦隊が攻撃隊から視認出来るようになった頃、陣風は300機ほどに数を減らしていた。

それでも多くが脱出し、1000m程の高度帯に真っ白な落下傘が幾つも開いき、海面には機内に内蔵されたボートで浮かんでいる者、それに寄って行って一緒に乗っている者もいる。

既に高度を下げていた本隊は、雷撃隊が1000m、急降下爆撃隊が4000mの高度でそれぞれ進軍している。

対空砲火で撃墜される機を出しながらも攻撃が開始された。

空母の数は大小合わせて20隻、十分な攻撃兵力があるとは言いが集中攻撃をするよりも確実に敵空母の飛行甲板を潰して二の矢を放てなくさせる事を総隊長は選んだ。

まず最初に急降下爆撃隊が敵の対空砲火を黙らせるために8機づつ、戦艦や巡洋艦に突っ込んでいく。

8機となると、大分少ないように感じるが全機が激戦を潜り抜け訓練を積み込んだ搭乗員達だ、8機もあれば確実に3発は命中弾を得られる。

その期待通り急降下爆撃隊はしっかりと戦艦、巡洋艦に最低3発の50番を叩き込んで対空砲火を黙らせる。

空母の飛行甲板も同様に50番を食らって炎上し、黒煙を上げている。

雷爆連携攻撃を徹底的に磨いた雷撃隊がその隙を見逃す筈が無かった。

対空砲火が数瞬沈黙したのを突いて、一気にヲ級や姫級、鬼級に肉薄し魚雷を次々に投下していった。

敵艦も30ノットを超える速度で回頭しているが、少しすると技量抜群の彼らはしっかりと敵空母の横っ腹に魚雷を突き立てた。

魚雷の命中の瞬間、80mは超えているだろうと言うほどの大きな水柱が次々とあちこちの敵空母から空に向かって伸びていく。

「命中命中ツ！でつかい水柱が立ってますよ!!」

「何本だっ!?!」

「4本です！敵空母の防御力を考えれば撃沈出来るかは、ちと分かりませんが4本も命中させれば戦闘は出来ません！」

「よくやった！」

総隊長が歓声を上げ、離脱していく。

魚雷を食らった敵空母のうち、ヲ級やヌ級は傾いて行き足が止まっています。

しかし姫級や鬼級は4本食らっても、まだ航行している。

流石にあれだけ飛行甲板に50番を食らっただけは空母としての機能は無いだろうが、生き残らせると厄介なのは確実だから後々確実に仕留めなければならぬのは間違いない。

――

攻撃隊から攻撃成功、敵空母の飛行甲板は全て破壊、二の矢は放さないと言う報告が来る。

艦橋ではそれを皆で喜び、そしてより一層気を引き締める。

次に攻撃を受けるのは間違いなく俺達だからだ。

暫くすると、170km程の距離で敵機編隊を捉えた。

その数はどう見積もっても1000機を超えていた。

「直掩隊も、この数を抑えることは出来んな」

「私の操艦技術の見せどころですね」

「頼むぞ」

すぐさま対空戦闘用意が下令され、艦内に喇叭が吹かれる。

各員がそれぞれの持ち場となる機銃や対空砲に飛び付いて動作の確認をする。

敵機の侵入方向に主砲や10cm連装高角砲が向けられ、射撃の時を待つ。

「直掩隊が戦闘を開始しました！」

1000対243だ、どれだけ彼らの腕が優れているとはいえ生き残る事で精一杯の戦場となるだろう。

無茶はしてもよいが無理はしてくれぬな、と心の中で思う。

艦隊の対空砲火の射程内に入ると、直掩隊は離脱していく。

報告によれば700機程の敵機が迎撃を無傷で抜けて行ったらしい。

長い長い戦いになりそうだ。

戦艦は予め敵機編隊の高度と進路に合わせてある。

300、250、200、150、100で主砲照準を合わせている。

50口径46cm砲の威力と射程は伊達では無い。

戦艦の主砲は全て50口径に砲身長を伸ばし、射程と威力を増大させている。

でないと深海棲艦の、姫級や鬼級レベルの装甲を持つ敵艦相手では大和や武蔵を始め40cm以上の主砲を持つ艦以外は装甲貫通がかなり厳しい。

手っ取り早く攻撃力を増す方法は、主砲口径を41cm砲に換装することだが、艦体の大きさの関係や砲塔リンクの直径を大きくしなければならぬと言いうのもあって現実的では無い。

やれなくは無いが、防御力を捨てる事になる。

だから残された手段として主砲の砲身長を伸ばすと言いう方法を取ったわけである。

「主砲、撃ち方始め！」

号令を出すと、大和を始めとした戦艦が一斉に主砲の砲門を開く。

15秒程度で高度3000m、距離3万mの空に三式弾が次々と炸裂していく。

編隊の手前に上手い事三式弾は突っ込んで炸裂してくれたらしい、敵機が落ちていく。

「数十機は撃墜破しましたが、さしたる影響では無さそうですね……」
「空襲をしてくる敵機が1機でも減るのならそれでいい。全く無傷の敵編隊に集中攻撃されるよりかは随分楽だ」

主砲が火を噴く度に1tを超える三式弾が飛んでいく。

敵編隊のど真ん中で次々に炸裂する重巡以上の砲弾は、周囲を3000度の地獄に変えながら燃焼し、更に弾子を撒き散らして被害を与えていく。

「高角砲、撃ち方始め！」

大和が号令を出すと、10cm連装高角砲が凄まじい勢いで砲弾を撃つ。

1分間に15発の射撃速度は伊達ではない。

一瞬で空一面が真っ黒に染まっていく。

「信管調定が甘い！しつかり計算しなさい！」

「連中、最大速度で突っ込んで来ていますな。こっちの想定より早いので炸裂が遅いでしょう」

『敵機大鳳、信濃に集中！』

『信濃取舵、回避始めたア！』

『大鳳被弾！』

見張り員から続々と報告が入ってくる。

やはり狙われたのは大鳳と信濃だ。

どうやら魚雷の回避に専念しているらしく、装甲甲板に爆弾を次々に喰らっている。

だが持ち前の装甲で弾き返しているらしい、爆弾の炸裂が収まると平気なように30ノットの速力で右へ左へ魚雷を回避していく。

周りには外れた爆弾が上げた水柱が乱立しているが、致命打になるものはない。

『敵機我に向かう！方位156、距離7000!!』

「対空機関砲射撃開始！」

40mm機関砲が火を噴く。

艦隊中からの射撃だ、空母を主に守っているとは言えその火力は絶大だ。

射程に入るとすぐに3.7cm機銃、25mm機銃、20mm機銃が次々に射撃を開始し、真っ赤な火箭が敵機に向かって伸びていく。

7000mなど時速450kmに迫る速度で突っ込んでくる敵機からすれば一瞬だ。

敵機の投雷コースを逸らすために、大和は既に舵を切っている。

武蔵も同様に狙われているらしいが上手く回避しているようだ。

それでも700機を超える敵機のほんの100機が攻撃を終えたばかりだ、まだまだ先は長い。

『大鳳被雷！左舷中央の模様！』

「何本だっ!？」

『今のところ1本だけです！それ以上の被雷は認められません！』

1本の命中では、余程当たり所が悪くなければ速力低下も起こさないだろう。

事実、双眼鏡で覗いた大鳳は速力を落とした様子も無く続けて回避行動を取っている。

『武蔵被弾、艦後部！』

それを最初に武蔵に対する被弾報告が立て続けに上がってくる。

どうやら最も敵の侵入方向に近い場所の武蔵が戦艦の中では最も狙われているらしい。

とは言え武蔵を案じている暇も無い。

『右舷雷跡4！』

大和が咄嗟に巻き込んで回避するために面舵に舵輪を回す。

「回避しきれない！総員衝撃に備えッ！」

艦内に一斉放送が走った次の瞬間、ズドン！ズドン！と2回大きな衝撃が走る。

『報告！右舷中央後部被雷2！』

「ダメージコントロール！詳細な被害状況知らせ！」

『被雷箇所で火災発生！消火班急げ！』

『敵機左舷7機！距離800、投雷！』

『降爆2000m、突っ込んでくる！』

「急降下爆撃機は機銃で対処！雷撃の回避を優先します！」

一度舵が聞き始めれば速いが、一度直進に戻してしまうと再び舵を効かせるのに時間が掛かる。

立て続けに大和の艦前方、第1砲塔付近に3発の爆弾が命中するが、大した被害はない。

だが魚雷は違う。

左舷から迫る7本の魚雷は、機銃か対空砲の射撃で照準を狂わされたのか先頭の4本は艦首を抜けていく。

だが後の3本は角度が絶妙で敵ながら天晴れと言う他無いほどに、綺麗に艦首から艦中央に万遍無く命中して、艦橋よりも高い水柱が上がる。

『敵機さらに来る！右舷より6機！』

右へ左へ大和は必至に舵を切る。

だが流石に両舷合わせて5本の魚雷を食らって速力が落ちた状態では全てを避けきることは出来ない。

5本程度の魚雷で沈むことはまず無いが、それとは話が別だ。

空襲が終わるまでに大和は魚雷9本、爆弾23発を食らい戦死者133名。

武蔵は魚雷7本、爆弾26発、戦死者203名。

武蔵の戦死者が多いのは、爆弾の命中が機銃群がある場所に集中したからだ。

主砲の射撃自体は可能だが、この状態での砲雷撃戦は危険だ。

少なくとも大和と武蔵が戦闘に参加出来る状態では無いというのは確かだろう。

大鳳は魚雷を両舷に1本ずつ、爆弾を11発食らったが艦載機の発着艦などには一切支障はない。

信濃は右舷に2本、左舷に1本の合計3本を食らうも速力は26ノットの発揮が出来る。

爆弾自体は30発以上を食らった辺りで数を数えられなくなったらしいが、着艦制動柵や制動網が軒並み吹き飛ばされたのと、一部の機銃が直撃を受けて吹き飛ばされただけで戦闘行動に支障はない。

どうやら集中的に狙われたのはこの4隻で、他の艦は被害らしい被害は爆弾が幾らか命中した程度だ。

「大和と武蔵は駆逐艦6隻を伴ってケアンズまで後退。応急修理を受けた後にバリクパパンで入渠してくれ」

「分かりました」

「大鳳と信濃の損害状況は？」

「はっ、飛行甲板の制動柵などの修理に1時間ほどを要することです。浸水は全て食い止め、両艦共に速力27ノットを発揮出来ま

す」

「戦闘行動に支障が無いのなら、攻撃隊の帰投までに修理をどうにか終えさせられないか」

「着艦ワイヤーの殆どが切れてしまっていますので、流石に無理があるかと」

「分かった、それならば仕方が無い。大鳳と信濃の攻撃隊は1航艦の各空母に着艦し補給、出撃に備えよ」

指示を出しながら、艦の移乗準備を進める。

敵の主力たる大多数の敵空母は撃沈とは行かないまでも飛行甲板は全て使えないように50番徹甲爆弾を何発かつつ叩き込んであるから心配は要らない。

問題は二つ目の敵空母郡だ。

あつちはまだ全くの無傷で、しかも正規空母が5隻もいる。

間違いなく600機を超える艦載機を擁している強力な艦隊だ。

先に叩いた敵艦隊も勿論二の矢を番えて確実に叩かなければならないが、かと言って全く無傷の敵艦隊があると言うのも大問題だ。

大和から射出された水偵に乗り、着艦作業を行っている飛龍達を眼下に収めながら考える。

飛んでいると、陣風が数機こちらに向かってくる。

機体のナンバーを確認してみるとどうやら飛龍戦闘機隊の隊長である平澤少佐の中隊らしい。

『こちら飛龍戦闘機隊長平澤少佐だ。これより護衛を行う』

「感謝します」

装甲艦隊と1航艦の距離は100kmほど離れている。

その間に襲われないように飛龍が直掩隊の中から護衛を出してくれたらしい。

「平澤、ありがとう」

『はっ、命に代えてもお守りさせて頂きます』

「そこまでする必要は無い。いざという時は着水して泳ぐさ」

平澤少佐以下12機の陣風に守られながら、飛龍に乗艦する。

幸いにも攻撃隊の帰投はまだの様で、慌ただしく余計な作業を増や

さずに済んだ。

「お帰り、提督。怪我は無い?」

「大丈夫だ。状況は?」

「戦果報告は先にした通り。艦隊の被害は装甲艦隊が敵攻撃隊の殆どを吸収してくれたからゼロだよ」

「そうか。攻撃隊を收容したらすぐに敵の2つ目の艦隊に攻撃を仕掛ける。何が何でも戦闘が出来る空母を1隻も残さないでおきたい」

「二の矢を放たないのですか?」

「そつちは潜水艦隊に狩りをさせる。第1、第2潜水艦隊が既に敵空母を仕留める為に網を張っている筈だ」

「分かりました。敵空母への攻撃は、再度総攻撃で宜しいでしょうか?」

「ああ、それで構わん」

「そうになると、收容から攻撃隊の発艦までに3時間は必要になります。が、それでも宜しいですか?」

「ああ、二つ目の艦隊とはまだ距離がある。それぐらいの時間はどうにかなる」

攻撃隊の收容が開始されると、真つ先に陣風の補給と修理が開始された。

装甲艦隊が十分な戦力として機能出来ない以上、無傷の敵艦隊からの攻撃に備えて直掩機は1機でも多い方が良い。

だから流星の修理や補給は取り合えず後回しにして、陣風への補給と修理を何よりも迅速にやって装甲艦隊の頭の上を守らないとならない。

大鳳と信濃の応急修理が終わったと言う報告を受けると、所属の陣風と流星を取り合えず優先して修理と補給を行って送り出す。

魚雷や爆弾を抱えている訳では無いから敵艦隊への攻撃自体は出来ないが、1航艦の格納庫内はある程度すつきりしたから作業がやり易い。

「あと1時間で陣風の補給と修理は完了します。流星の修理と補給はもう1時間頂ければ敵艦隊へ向かわせられます」

「流星の補給と修理をもう10分早められないか？」

「分かりました、整備班に伝えておきます」

「ありがとう。装甲艦隊が生きている内に何としても敵空母だけは叩いておきたい」

「了解しました、急がせます」

指示を出していると潜水艦隊から色々と報告が上がってくる。

敵艦隊に対して網を張っていた第1、第2潜水艦隊が次々と敵空母に攻撃を仕掛けたようで、戦果未確認ではあるがそれでも破壊力の大きい61cm酸素魚雷、しかも弾頭に乗せられているのは通常陸海軍で使われている爆薬よりも生産加工技術が高度で難しいが、より破壊力に優れた新型高性能爆薬となる。

それを弾頭部分に850kgも乗せているのだから、普通ならばそれで一撃大破だ。

幾ら防御力に優れている深海棲艦とは言えども、それを食らっているのだから、攻撃隊が命中させた魚雷も勘定に入れるなら撃沈が期待出来る。

電池式魚雷に比べると、やはり扱いは難しいが潜水艦1隻辺りの配備本数を限る事で問題は解決している。

1隻辺り、4本しか配備されないがそれでも対大型艦相手ならこれで十分な数になる。

しかも音響誘導魚雷だからより命中精度は高くなる。

問題と言えば、高度な音響誘導装置の開発はまだまだ先であるから、目標を選び辛い所だ。

誘導装置には音の大きさ、拾える音の大きさを調整することで目標を選べるようにはなっているのだが、これがまた、まだまだ信頼性が低い。

基本的に排水量の大きさや推進器、スクリューなどの大きさによって発する音は大きくなったり小さくなったりするわけだ。

と言うよりも、大きさ云々よりも音紋が駆逐艦と戦艦や空母の推進

器音、機関室から発生する音の大きさは全く違うわけだ。

本来なら高度なコンピューターなどを搭載している魚雷ならこの音紋を入力することで目標艦を選定するわけであるが当然そんなものは無い訳である。

だから推進器や機関室から発せられる音の大きさを区別して追尾するわけなのだが、聞くだけなら凄いい進歩に聞こえるがこれがまた厄介だ。

設定した音の大きさが大きいと、目標が速度を落としたりして目標から発生する音の大きさが小さくなると追尾が出来なくなると言う課題があるのだ。

だからこの酸素魚雷が効果を発揮するのは敵に雷撃を感付かれていない最初の一撃だけでしかないのだ。

潜水艦による対大型艦雷撃なんて最初の一撃以外は殆ど意味は無いのだが。

なんせ周りにいる駆逐艦や巡洋艦の数が桁違いに多いから、一度魚雷を撃つたらすぐに潜航して隠れたり逃げたりしなければ爆雷の雨が降ってくることになる。

「最初に攻撃をした敵艦隊はどうか撃滅、と言う事でしようか」

「まあ、あれだけの攻撃を食らって無事かと言われると否だろうからそれでいいだろう。あとは残りの敵空母を叩いたら、可能ならば再度攻撃を仕掛けて確実に撃滅を図っても良い」

2時間もすると、陣風全機の修理や補給が終わって流星への補給と再武装も次々と開始される。

どうしても修理不可で廃棄された機体もあるが、530機もあれば十分だろう。

撃墜された機の搭乗員も第3潜水艦隊が救助に当たっているし、豪州から二式大艇も出ているから心配は無い。

既に編成は終わっているから流星への補給が済めば攻撃隊を出せる。

「流星の再武装には、あとどれぐらい掛かる?」

「4割が補給を終えていますので補給と修理、魚雷や爆弾の装備にやはりもう1時間は必要です」

「計画通りだな。速められるかどうかはどうだった？」

「流石に整備班の手が足りませんでしたので、10分の短縮は無理でしたが5分ぐらいならばどうか、と回答が返ってきております」

「よし、それでいい。速ければ速いほどいいのだから5分でも十分だ」遅れて届けられた戦闘配食を全員で頬張りながらの会話だ。

メニューは握り飯、味噌汁、沢庵だ。

やはり塩味が聞いていて上手い。

搭乗員と整備員達に優先して配らせていたから届くのが遅くなったのだ。

搭乗員達にはまだまだ激戦を戦い抜いて貰わねばならない。

大和の方が若干豪華のように思えるが、それにも理由がある。

単純な話、大和は艦の大きさがあるからその分食糧庫も飛龍のモノと比べて余裕があるから、色々と積んでいけるわけだ。

排水量だけでも大和は満載時は軽く8万tを超えるのに対して飛龍は改装を重ねた今でも精々3万t程度。

それだけ大きさに違いがあるのだ、載せられる量にも大きく違いが出て当然だろう。

長い作戦で長期間洋上に居るとどうしても艦上での娯楽は限られてくる。

食事と言うのは乗組員にとって数少ない日に3回しか無い娯楽なのだ。

戦闘配食を食べ終えて、再び指揮を執る。

大鳳と信濃の応急修理が完了し、装甲艦隊の上空を守る陣風が交代で補給を受けている。

大鳳と信濃は流星の搭載数が少なく、それに伴って爆弾と魚雷の搭載数が魚雷10本、爆弾20発と少ない。

重装甲で守られた2隻は前進して敵の攻撃を吸収するだけでなく、より後方から来る友軍機に対しての中継補給基地としての役割も兼

ねているから、魚雷と爆弾の搭載数が極端に少ない代わりに、機銃弾と航空燃料を多く搭載している。

だから自分達の頭の上を守る他の空母の戦闘機にも補給が出来ると言う寸法だ。

「提督、装甲艦隊の電探が敵機を捉えました」

「やはり来たか。機数は？」

「400機です」

確か、2つ目の敵艦隊は正規空母6隻に軽空母を2隻を擁していた。

となるとこれで大体700機ぐらいの航空機を抱えていることになるが、400機と言うのは多分艦隊防空を重視して攻撃機の数も多くして戦闘機の数を少なくしての編制である可能性が高い。

敵艦隊には直掩機が250機程度はありと見積もれるが、ちよつとばかり数の帳尻が合わせ辛いな……。

空母の数で劣勢になったのなら、攻撃隊を分けずに全てを注ぎ込んで放つ方が成功率は高い。

有り得るのは、今捉えた敵編隊は囹の可能性だろう。

この攻撃隊の攻撃が成功すればそれはそれでよし、ぐらいの扱いなのかも知れない。

ならば別動隊を警戒しておいた方が良さだろう。

「装甲艦隊の直掩に就いている陣風は何機だ？」

「全て合わせて230機程です」

「よし、直掩隊は全て敵攻撃隊の迎撃に向かわせろ。もう40機ぐらいを装甲艦隊の直掩に出して、我々は残る陣風で敵の別動隊を警戒する」

「了解しました」

1航艦が迎撃に上げられる陣風は今のところ250機ほどだ。

730機の内、500機が生き残っている。

残りの230機ほどは敵機との戦闘と、修理不可として廃棄されている。

装甲艦隊の方に270機もあれば敵攻撃隊を十分に防ぎ切れるだ

ろうし、こちらにも240機いれば十分以上だろう。

「迎撃を突破した敵機が装甲艦隊に攻撃を開始したようです」
「状況は？」

「400機を途中で分離させ、50機ほどが無傷ですり抜けたようです。それによって大鳳に魚雷2本爆弾5発、信濃に魚雷2本爆弾4発が命中しました」

「2艦とも大破判定だな……」

魚雷を4本づつも食らって、寧ろこれだけの被害で済んだのを喜ぶべきだろう。

「装甲艦隊はケアンズで応急修理を行った後にバリクパパンで入渠、修理を受ける様に」

「了解しました」

「別動隊は映ったか？」

「いえ、今のところは」

電探にはどうやら敵機は映っていないらしい。

仮りに別動隊があったとすればここまで時間を空けて来るか？

「考え過ぎか……？」

「それでは、敵艦隊に攻撃隊を放ちますか？」

「……その場合、1航艦の直掩に就いていた陣風を全て攻撃隊に付けるとして、装甲艦隊の直掩隊の補給をどれぐらいで終えられる？」

「そうですね……、収容作業と再出撃可能な機体の選定、補給で取り合えず100機揃えるのに1時間と言うところでしょうか」

「よし、やろう。直掩隊は全て攻撃隊に付けてやれ。流星の出撃準備は？」

「魚雷と爆弾の装備に15分頂ければ」

「頼む」

「はっ」

航空参謀がすぐさま準備を指揮していく。

すると見事に15分で攻撃隊の準備が整い発艦が始まった。

「收容した陣風の補給を急げ。今艦隊の頭の上にはほんの20機しか守っている陣風がないんだからな」

「承知しております」

装甲艦隊を守る為に戦った陣風を次々に收容していく。

修理を必要としない陣風の補給を最優先に、修理可能な機体を選定、修理に取り掛かる。

そうでない機体は修理不可として使える部品を根こそぎ取ったら投棄だ。

2時間ほどすると、攻撃隊から攻撃開始の報告が入る。

直掩には100機ほどの敵戦闘機が存在したらしいが、陣風の方が多いのを良い事に攻撃隊本隊には殆ど損害らしい損害も無く攻撃を始められたようだ。

1時間掛けて敵艦隊を攻撃し、きっちりと全ての敵空母を撃沈乃至大破となった。

第1潜水艦隊と第2潜水艦隊に命じてこれらにトドメを刺すように命令した。

これで上手くいけば出撃して来たバヌアツ辺りで修理の為に入港する敵艦隊を再捕捉し、魚雷を叩き込める。

酸素魚雷は無いが、あれだけ被害を被っているのなら電池式魚雷でも十分に沈められる。

その後輸送船団に乗せられた陸軍部隊や陸戦隊は各島に強襲上陸を仕掛け、無事にソロモン諸島での戦いに大きな楔を打ち込むことが出来た。

敵の地上部隊は内陸部に撤退しつつ抵抗しているようだが、それも時間の問題だった。

上陸から3週間で掃討戦に移り、防衛の為に部隊を残して他の陸軍部隊はバヌアツ、ニューカレドニア奪還に備える事となる。

敵艦隊は勿論きつちりと仕留めた。

2個潜水艦隊によってバヌアツ近海で捕捉し、徹底的にありつたけの魚雷を叩き込んである。

ニューカレドニアに対しても先に叩いた空母や戦艦が撤退し、修理をしていたからそこを1航艦の艦載機と戦艦で叩いたからこの方面における敵戦力は完璧に撃滅したと言える。

ソロモン諸島での戦いから2週間後にバヌアツ、ニューカレドニアに上陸。

1か月ほどを経て完全奪還、シドニーとブリスベンで待機していた15万人がニュージーランドへ上陸。

北島に6万名、南島に9万名が上陸し1か月掛けて奪還を成功させるとそのままの勢いを利用してフィジー、サモアに対する攻勢を開始。

こちらには大した兵力は配備されておらず1週間足らずで奪還成功となった。

フィジー、サモアに対する作戦を以て一連の作戦を終了とした陸海軍は各地の防衛体制の確率、補給線の構築、戦力の再編と補充を暫くの間は行うこととなる。

第81話

ソロモン諸島の奪還が成功し、フィジー、トンガ、ニューギラン
ドを結ぶラインでの防衛線を繋ぐ事が出来た。

問題は南太平洋にあるミクロネシアなどの小さな島々だ。

小さな島々と言っても、飛行場を設置して爆撃機を繰り出すことが
出来る程度の大きさは十分にある島も幾つかある。

爆撃機の機種こそB-24やB-17が主力で、偶にB-29の編
隊が飛んでくる程度だ。

恐らくB-29はマリアナ諸島への補給を最優先にしているらし
い。

しかしP-51やP-47、P-38と言った陸上高性能戦闘機の
護衛に加えて高度9000mを軽く超える高さで来襲してくる。

ここで問題になるのは敵機の高度じゃない。

我々の防御縦深が無い事が問題なのだ。

防御縦深と言うのは単純な話、本土と硫黄島の関係が最も分かりや
すい例だ。

硫黄島には1個師団と対空砲や対空機関砲、対空機銃を多数装備し
た専門の1個防空旅団、2個防空大隊の駐屯兵力に加え、長距離大型
電探基地が設置されている。

日本本土防空に際して最も重要な役割を占めているのがこの硫黄
島にある電探基地な訳だ。

ここで敵の編隊を捉えてその情報を本土にある防空司令部に送信
し、その情報を得た防空司令部が各部隊に迎撃を命じる。

硫黄島から東京までは1200km余りだから、この距離が防御縦
深と言う事だ。

これだけの距離があれば震電は十分な高度を取り、待ち構えられる
し対空砲も迎え撃つ体制をとる事が出来る。

その防御縦深が、ソロモン諸島やニューギニアには存在しない。

だから電探基地を設置しても探知範囲がどれだけ大規模な編隊でも250kmが限界で敵機が時速450kmで飛んできた場合、それだけの距離しかないと準備に掛けられる時間が精々20分前後しかない事になる。

これは如何ともし難い問題なのだが、解決策は南洋諸島の奪還以外には余りにも危険な、駆逐艦や巡洋艦を洋上に配置するぐらいしかない。

早期警戒管制機は敵戦闘機の脅威がある以上無闇矢鱈に飛ばせない。

早期警戒管制機型の連山はユニットコストが諸々の装備などの関係で爆撃機型の2・3倍にもなるし搭乗員も操縦士2名を含めて17名。

何れも何百時間と訓練を積み、何千時間と言う操縦時間を持つ熟練中の熟練だ。

早期警戒管制機に搭乗する乗組員は機上電探などの特殊機械に精通した選りすぐりとなる。

1機でも失えば機体は作れば良いから大したことは無いが、人員の面でそれこそ取り返しが付かない大きな穴が出来てしまう。

だから配備も出来ないのだ。

今の陸海軍には、大規模な作戦を実施する余裕は備蓄などの関係もあって無い。

だからミクロネシアなどの南洋諸島に対して攻勢を仕掛けられないのだ。

この対策が、目下最優先事項だ。

豪州に避難していたニュージーランド国民500人が帰国した。

とは言え戦後処理が済んでいないから元の生活に戻るにはまだ暫くは掛かるだろう。

半年もあれば戦前ほどとは行かないまでも、羊の放牧も出来るようになる。

防衛は勿論、2個小隊100人程度の兵力しか持たないニューギニア軍の代わりに我々が北島と南島に3個師団づつを配置し航空隊も多くが豪州から引き抜かれて配置されている。

フィジー、サモアにも3個師団づつが置かれており、バヌアツに3個、ニューカレドニアには4個師団。

ソロモン諸島、ビスマルク諸島、ニューギニアに3個師団づつ。

この3方面に関しては航空兵力が主体で陸軍航空隊の陣風と疾風が1000機づつ程度が配備されている。

これも豪州などから引き抜いた戦力になる。

取り敢えず戦力上の防衛体制は整えたと言う形だ。

ニューカレドニアは資源の宝庫だから、産出が軌道に乗れば資源問題はより軽くなる。

ニューギニアも羊を含めて家畜の飼育などが復興すれば食糧問題の解決にも目処が立つ。

やはり300万を超える軍隊に、3000万人もの民間人を食わせていくのは並大抵の事ではない。

どうしても軍への食糧供給が優先され、民間人は基本的に主食類である米や麦、あとは肉なんかはどうしても配給頼りになってしまう。

今でこそオーストラリアからの食糧供給がどうかこうにか軌道に乗り始め、北海道の不発弾除去やインフラ整備などの戦後処理がつい先日終了宣言が為されたから、飢えに苦しむとか餓死者や食糧難や燃料不足で越冬が出来ずに死んでしまうなんて事は無くなった。

しかしそれでも食糧事情は宜しくないのが、実情だ。

首都直下型地震の影響や連日連夜の空襲で北海道と東北の一部を除けば全国がB-29の爆撃可能半径にある。

これではどうしようもない。

マリアナ諸島の奪還も、やはり戦争を続けなければならぬ以上どうしても資源などを優先せねばならず、マリアナ諸島を奪還しても爆撃が無くなるのと中部太平洋に対しての圧力を加えられる拠点が得られるぐらい。

前者はまだしも、後者に関してはニューギニアで良いし後方拠点も

オーストラリアがあるから別に必要が無い。

マリアナ諸島は今や、奪還を企図して奪還したとしてもマーシャル諸島などの消耗戦で兵力を無駄に損耗するだけで戦略上殆ど重要では無い、意味の無い場所になっている訳である。

だから手を出さないのだ。

—————

本土で艦隊の修理や重整備、小改装をしている中で東京に呼び出される。

呼び出しとなるとよっぽどの事態なのだろうか。

人員輸送と連絡用の輸送機型連山に相乗りし、東京へ向かう。

この方が敵に飛行を悟られなくて良い。

とは言え戦闘機の護衛はある。

前線の陸軍部隊を優先して陣風に機種転換をしている為、本土を守る海軍航空隊はまだまだ紫電改が主力機となっている。

それでも改良を重ねた今では、流石に互角とは言い難いがそれでも十分に敵機と渡り合える性能を有している。

まだまだ一線級の性能である事は間違いない。

それが8機も護衛としているのだから安心出来る。

今日は特に誰かを伴っている訳ではない。

護衛に4人が付いてきてくれるが、それだけだ。

2時間半の空路だが、書類仕事は良い機会だとは取り上げられているからやる事もない。

だったら昨日は遅かったから少しばかり仮眠を取るかな。

「大尉、向こうに着くまで仮眠を取るから着いたら起こしてくれるか」「了解です」

一言告げてから、3種軍装の略帽を目深に被って目を閉じる。

海軍規定では上官に会う場合正式な軍装であれば何でも良いとなっている。

基本は1種軍装か2種軍装のどちらかになるが、3種軍装でも問題

は無い。

肩を揺らされ、目を開けると立川飛行場の上空を旋回しているところだった。

恐らく着陸許可待ちなのだろう。

少しすると許可が降りたらしく、高度が下がり始める。

着陸時の特有の衝撃で揺れるとすぐに減速し始める。

窓から外を見ると、本土防空を担う震電改が格納庫や掩体に収容され、スクランブルに備えた震電改が待機している。

海軍立川飛行場は、関東圏の防空を担う飛行場の一つだ。

元々は陸軍の飛行場であったが陸軍は奪還地域、海軍は本土防空を担当すると役割分担が決定された後に海軍管轄に移されたのだ。

本土にある陸軍飛行隊は数える程度しかない。

鹵獲機や新型機、空に関する兵器類の性能テストを行う陸軍飛行審査部。

他には搭乗員を養成する為の航空学校に属する練習飛行隊や教導航空隊ぐらいなものだ。

連山から降りると、迎えの車が来ていた。

どうやら中代大将が寄越してくれたらしい。

震災と空襲を受けた関東圏は、今まで煩雑な道路を良い機会だと一気に区画整理や道路整理を進めたお陰でだいぶ楽になった。

立川からでも1時間もあれば統合参謀本部に着く。

到着したら、取り敢えず身形を整えて略帽を被り直して中代大将の元へ向かう。

「湯野、入ります」

「いらっしやい、いきなり呼び出してごめんなさいね。事が事だから直接話したかったの」

「いえ、問題ありません」

「それじゃ、早速本題に入りましょうか。ああ、楽にしてくれていいわ」

「はい」

椅子に座り、略帽を脱ぐ。

目の前に幾つかの書類を出され、それを受け取り読む。

こっちの書類には観閲式、こっちには観艦式と書かれているな……。

ははあ、用件が何か分かったぞ。

「上からの要望なんだけれど、陸海軍でそれぞれ観閲式と観艦式をやって欲しいの」

「観閲式と観艦式、ですか」

「ええ。国民に勇気と希望を、と言う事らしいわ」

「因みに上、と言うのはどれぐらい上なんでしよう？」

「一番上よ」

「なるほど……」

「忙しいのも分かるわ。だけどどうにかならないかしら」

「観閲式ならまだ可能ですが、観艦式となるとどれぐらいの規模でやるかによりますが、今すぐにととなると少し厳しいですね……」

「やっぱりそうよね」

「なんせ艦隊全体が長期作戦明けの重整備に改装中ですし、終わったとしても各方面に対する船団護衛任務は外せません。奪還地域が増えましたから、1航艦も船団護衛任務に出さねばならなくなることも考えているほどです」

中代大将も領きながら溜息を漏らす。

「どうやら厳しいと分かっているながらも、一番上からの要望ともあって断るに断れないらしい。」

「やるにしても、小規模にならざるを得ないかと」

「どれぐらいの規模でならやれるかしら？」

「取り敢えず、今すぐにと言われるのなら装甲艦隊だけでやる事になります。既に戦線復帰はしていますし、インパクトと言う面であれば十分かと。もう暫く時間を頂けるのであれば、更に1個航空戦隊ぐ

「らいはどうか出来ます」

「それなら丁度良いわ。大和と武蔵は有名だから、是非って言われているの。どれぐらいの時間が必要？」

「点検整備に1ヶ月と訓練にもう1ヶ月、合計丸2ヶ月頂ければ」

「陸軍の方は？」

「取り敢えず確認してみなければ分かりませんが、本土の部隊と再編で引き上げている部隊でやれるかと。こちらも2ヶ月頂ければ参加部隊の選定と訓練を終えられます」

「そうしたら、それをお願いしても良いかしら」

「承知しました、謹んでお受け致します」

観艦式と観閲式の実施が、十数年ぶりに決定された。

—————

呉に戻るとすぐに観艦式に参加する艦を選ぶ。

装甲艦隊は決まりとしても、他が問題だ。

どの航空戦隊も、点検整備の進捗率は殆ど同じで変わりはない。

なんなら装甲艦隊だけでも良い気すらして来ているのだが、2ヶ月で航空戦隊を一つ参加出来るようにすると言ってしまったからな……。

さて、どうしたものかな。

「提督、用事って何だったの？」

「まあ諸々だな。特に観艦式と観閲式に関してだ」

「観艦式!？」

「あ、ああ」

秘書艦である愛宕が騒ぐ。

やはり彼女達からすると観艦式と言うのは一大イベントらしい。

まあ、観艦式となると戦闘以外で唯一華がある場だからな。

「それでそれで!？」

「実施自体は決定したが、参加する艦を選ぶのに難儀しているんだ」

「あら、全員で参加は駄目なのかしら？」

「無理だな。護衛艦隊と補給艦隊は船団護衛任務や各地への輸送任務でてんでこ舞い、最悪1航艦も護衛任務に駆り出さなきゃならん。ただでさえ戦力は少ないんだ、観艦式を理由に他を疎かにするぐらいならやらんよ」

「やつぱりそうよねえ」

「上からの要望で装甲艦隊の参加は決まりだが、もう1個航空戦隊ぐらいいは見栄の為に参加させないとならん。それが決まらん」

「あら、普通に1航戦かと思ったのだけど違うのかしら？」

「そうは思うんだがなあ……」

1航戦は海軍の中でも特に選りすぐり、やはり主力中の主力だ。

彼女達を戦線から抜くと言うのはやはり考えものだ。

とは言えまず間違いなく有名ではあるし、これほど人目を引くことも無い。

観艦式に参加するとなれば、これ以上は無いくらいだ。

「仕方がないな、1航戦と装甲艦隊で観艦式をやろう。点検整備が終わったら、それに備えて訓練だな」

愛宕に頼んで書類を作り、各艦に通達する為の書類もそれぞれ認めてから各艦長や戦隊長達を招集し観艦式が実施されそれに備える旨を伝えると、戦う以上に意気込んでいた。

最終的に観艦式に参加する事になったのは1航戦と装甲艦隊、それにビスマルク、ローマ、ウォースパイト、デ・ロイヤル、ゴトランドの参加が決定された。

他にも輸送船、輸送艦が5隻つつ。

航空機は1航戦の各空母所属機に加え、基地航空隊の紫電改48機、爆撃機型の連山20機となる。

観艦式には完全応募制とし、輸送船で見る事となった。

政府側からは陛下、総理大臣が参加される。

中代大将、広野中将は付き従うこととなり、俺は艦隊指揮官としての参加になる。

それを受けて、臨時に観艦式艦隊を編成。

1ヶ月間訓練に励むこととなった。

観閲式に関しては、本土各地から集められた陸軍の6個連隊に加えて2個海軍陸戦隊。

更に1個機甲連隊と1個砲兵連隊

再編中の5個陸軍航空隊より20機つつ計100機。

他にも独立工兵大隊や軍病院から軍医達、陸軍大学や海軍大学などの各教育機関からも参加する。

陸軍の連隊は全て戦闘団編成に変えられているから、各連隊にはそれぞれ独自のあらゆる兵科の部隊が属している。

朝霞駐屯地にて観閲式は行われ、観艦式の1ヶ月後になる。

開催時期が遅く取られた理由としては日本本土だけでなく、各方面から部隊を集めるからだ。

陸軍観閲式にはオーストラリア軍とニュージーランド軍からも参加がある。

オーストラリア軍からは1個連隊。

ニュージーランド軍から1個中隊。

これらの部隊の移動と訓練に時間が掛かるからだ。こちらにも俺は指揮官として参加することになる。

—————

観艦式当日、当選した民間人1万人が20隻の輸送船に分乗する。

どうやら倍率は大分高かったようで、かなりの応募が殺到していたらしい。

陛下や首相、中代大将と広野中将は専用として用意された輸送船相模丸を御召艦として駆逐艦時雨を先導艦に、初雪を供奉艦としている。

戦前のイージス艦や汎用護衛艦、戦車が日本にはまだ何隻とか十何

両と残っているが、修理中であるから参加は出来ない。

と言うより、沈まないようにドックにぶち込まれているだけの状態で、修理中とはなばかりのギリギリ保存状態と言うべきものだ。

理由はそれらの艦に供給する事が出来る武器弾薬や各種装備品が作れないからに他ならない。

旧自衛隊に供給される装備は民生技術が多数含まれており、しかも特定の中小企業にしか開発製造が出来ないなんてものもある。

勿論その中小企業は、大企業もだが開戦してから暫くして爆撃で吹き飛び、海外に頼り切りだった材料が入らないから倒産した。

だから作らないではなく、作れないが正しいのだ。

一応、幾らかの生産設備や技術者は軍がどうにかこうにか確保しているが、それも陸上装備のものや航空機関連のものだけで、艦艇用のものは沿岸部に集中していたから呉の1箇所以外は瓦礫の山になった。

その呉にある各造船設備も今は海軍が使っているから使用出来ない。

イージス艦と汎用護衛艦は場所を神戸に移しており、そこで入渠状態が続いているのだ。

戦前の武器装備類は全て年に1セットのペースで細々と生産されているのに加え研究開発を常に進めているが、これには勿論技術と技術者が絶えることを防ぐのと同時に戦後を睨んでの措置となる。

日本は周りを海と言う天然の要害に囲まれてはいるが、近隣諸国はほぼ敵、或いは黒寄りのグレーな国家に囲まれている。

今その国々がどうなっているか、知った事では無いし知り得る手段も無い。

どうなろうがどうでも良いが仮に戦争が終わり再びその国々が、となれば備えておかねばならないのも事実だからな。

漸く戦争が終わって、復興に向けて歩まねばならないと言うときに横やりなぞ入れられたら堪ったもんじやない。

抑止力としての戦力は必要不可欠であることは間違いない。

最初は停泊状態で観艦式が始まり、各艦を陛下や民間人達が一通り見た後に航行状態での観艦式に移る。

観艦式は全艦が速力4ノットで航行しつつ、輸送船は速力15ノットで航行する。

航行する艦隊の周りをぐるっと1周し、次に各艦の空砲射撃を行う。

駆逐艦は対艦戦闘を想定した通常射撃、対空戦闘を想定した速射を行う。

軽巡洋艦も駆逐艦と同様の射撃となる。

重巡洋艦は主砲の各個射撃、一斉射、交互撃ち方の3射法。

戦艦も各個射撃、一斉射、交互撃ち方となるが、大和、武蔵の2隻は一斉射を行えない為に各砲塔1門ずつの3門からなる斉射を実施する予定だ。

口径が小さい艦から順々に1隻ずつの射撃になる。

「右舷より輸送船」

「距離に十分留意させろ」

「了解」

「艦隊単縦陣。弾種空砲、仰角5度。右舷砲戦用意」

「艦隊単縦陣右舷砲戦用意、宜候！」

模擬対空戦闘を終え、空を一面の黒煙に変えた後に陣形を単縦陣に変更させる。

駆逐艦、巡洋艦の射撃は輸送船との横距離300mで実施するが戦艦の主砲射撃は距離500mで実施する。

距離を離す理由は危険だからだ。

艦隊に砲戦用意の喇叭が鳴り響き、各員は何時も通り訓練通りそれぞれの持ち場に走っていく。

砲戦用意の喇叭は輸送船の中でも放送され、これから砲撃が行われる事が伝えられる。

「観測機発艦始め」

観測機はあくまでも飛ばして見せるだけで今回は弾着観測は行わない。

「砲戦準備完了、何時でも行けます」

「駆逐艦より順に主砲斉射3回。撃ち方始め」

号令が伝えられると、駆逐艦が一齐に主砲を撃つ。

10cm連装砲の一齐射ともなれば口径は小さくても迫力がある。

10秒置きに射撃が行われ、ものの30秒で射撃が終わる。

次は巡洋艦だ。

軽巡洋艦は駆逐艦と同じ主砲を装備しており、重巡は20.3cm連装砲が主装備になる。

改装されて防空巡洋艦になっている鈴谷は主砲を全て撤去し10cm連装高角砲を多数装備しているが、それでもあれだけの門数による一齐射撃だからな。

同様に3斉射を終え、次に戦艦の射撃に移る。

と言っても今までのように全艦での射撃、とはならない。

戦艦の主砲射撃は目玉と言っても良い展示だから、1隻ずつの射撃になる。

と言うより全艦による射撃を予定していたのだが、やはり目玉だから1隻ずつにしてはどうかと提案を受けたのだ。

少し悩んだが、その提案を受け入れることにしたのだ。

射撃に輸送船には距離を500mにまで開けさせる。

その確認が取れたらば、射撃開始となる。

金剛から順に霧島、長門、リシユリユ、ビスマルク、ローマ、ウォースパイトと射撃をした後に、大和と武蔵がそれぞれ射撃となる。

比べ物にならない大きさの爆炎と砲声が一齐に海面と空気を殴り付ける。

仰角5度と言う水平射で放たれた爆風によってべこんと海面が凹む。

そりゃあ、あんな爆風を近距離で喰らったらぐちゃぐちゃに吹き飛

ばされる訳だ。

観艦式を終え、呉に戻る。

観艦式を終えてもまだ観閲式があるから、その準備を進めなければならぬ。

「部隊の集合状況です」

加賀から手渡されたクリップボードを見る。

殆どの部隊は集合を終えて観閲式に向けた訓練を本格的に初めているらしいが、豪軍と新軍の到着が10日遅れているらしい。

「……オーストラリア軍とニュージージーランド軍の到着がかなり遅れているようだが、何かあったのか？」

「この時期ですから。南方方面では天候が随分荒れているそうです」
「ああ、それなら仕方が無いか」

台風、向こうだとサイクロンと言えはいいのだろうか？が発生している状況の海と言うのはそれはもう危険だ。

空母や戦艦みたいな大型艦なら大丈夫な荒波でも、巡洋艦や駆逐艦のような中、小型艦艇、ましてや輸送船にとっては試練の連続と云っている。

だから無理して出港しても最悪沈没、乗船している者達は荒れ狂い凍える海に放り出され漂流して死ぬしなくなる。

ならば到着が遅れても、安全に来てもらった方がよい。

「到着があと一週間も遅れそうなら天候が良い日に輸送機を手配して空路で来てもらおう。事前訓練もある。重装備は……、近隣の連隊から借りよう」

「分かりました」

観艦式の後始末もあるし、観閲式の準備に合同訓練もある。
のんびりはしてられない。

どうにか到着が間に合い、訓練が進められる。

「提督、ソロモン諸島方面軍より緊急電です！」
「どうした」

「はい、読み上げます。『我敵艦載機及び重爆撃機大編隊ヨリ猛爆ヲ受ク。迎撃スルモ突破、飛行場及び港湾施設爆撃サル。直後敵艦ヨリ艦砲射撃受ク。飛行場使用不可。偵察機ヨリ沖合ニテ敵艦隊発見。戦艦、空母ヲ含ム艦隊也。輸送船団ハ見エズ。至急来援ヲ請フ』以上です」

「なんとまあタイミングの悪い……」

情報を聞くに、制空権の喪失は確実だろう。

爆撃だけで無く艦砲射撃を受けたと言うのだから、突貫で修理をしても2週間は使えまい。

艦隊を出そうにも、なんせ距離があるのに加えて未だに入渠中の艦も多い。

すぐさま出せるのは1航戦と装甲艦隊のみ。

ソロモン諸島各地にある飛行場や港湾施設を軒並み使用不可能にした艦隊相手では、空母6隻では手も足も出ない。

「どうされますか?」

「取り敢えず飛行場の復旧を急がせ、豪州方面軍とニューギニア方面軍に即応体制を下令、ソロモン諸島方面軍は全軍敵上陸に備えさせろ」

「艦隊はどうされますか?」

「今すぐに出撃が可能なのは?」

「金剛型の4隻と先日入渠から出た鳳翔さん、それとグラーフだけです」

他の空母や戦艦は軒並み入渠中か、或いは船団護衛任務に就いている。
手が足りないからだ。

「少ないな……」

「少ない戦力だけで向かうのも危険ですから、兎に角今は様子を見ては? 大艦隊と報告してきているのですから、1機艦を総出撃させなければならぬ事態である事は間違い無いかと」

「……そうだな。現地司令部には敵上陸を確認したらすぐに報告するように言ってくれ」

「はい」

悩ましい問題だ。

偵察機の報告では輸送船団は居ないと言うし、かと言ってソロモン諸島の飛行場が軒並み使用不可になるほどの爆撃に艦砲射撃を加えてきて何も無いと言うのも腑に落ちない。

艦隊もまだ再建途中、戦力不足で主力艦隊まで輸送船団護衛に駆り出しているほどだから直様の対応は不可能。

出来なくは無いが、明らかに戦力が足りない。

今打って出ても結果は目に見えている。

対応策を考えながら、執務を進めていると再び通信科の大尉が駆け込んできた。

「緊急報告！豪州沖に敵大艦隊出現、現在豪州南部全域が猛爆撃を受けているとー！」

「加賀、南太平洋の地図を持ってきてくれるか」

「はい」

「都司大尉、ソロモン諸島、豪州の現地司令部から詳細な攻撃を受けた飛行場や港、町を全てリストアップして送らせてくれるか。被害報告も頼む」

「了解しました」

「提督、地図です」

「ありがとう。さてと……」

執務機のペン立てから青色と赤色の鉛筆を抜いて友軍基地や飛行場、駐屯地、港を青で囲む。

主要なものはやられている筈だから、赤で×を書く。

1時間もすると、現地から続々と被害報告が届き始める。

それらを集計していくと、やはり殆どの基地が打撃を被っているのが分かる。

しかも最低1週間は使い物にならないレベルだ、復旧は容易じゃな

い。

2時間もすると、詳細な損害報告が入り始める。

それと同時に豪州西部、クイーンズランド州の沿岸部に位置する飛行場や都市、港が空襲を受け始めた。

どうやらかなりの低空で飛んで来たらしい、ギリギリまで電探に反応は無かった。

しかも主兵力の殆どをソロモン諸島、ニューカレドニア、バヌアツ、ニュージージラント、フィジー、サモアに引き抜いてしまったから、特に航空兵力は船団護衛に必要な戦力を残しているだけだ。

敵の主力艦隊や戦略爆撃機の大編隊を十分に迎え撃つ戦力はどうやったって存在しないし、こちらの戦力が限られている以上は仕方がない事だ。

それを踏まえて我々は索敵網や哨戒網を最前線に構築していたが、敵はこれを実行したのだ。

最前線にそれを集中しているから1箇所がやられると、暫くの間大きな穴が空くことになる。

上手いことやられた、と言う他無いだろう。

「さて、敵の目的はなんだろうな……」

「後方拠点の豪州と前線の切り離し、補給線の破壊でしょうか」

「いいや、だったらニュージージラントやニューカレドニアなんか叩く筈だ。豪州だけを叩いても補給物資の受け入れ先が無事なら他ルートから送り込める」

秘書艦である加賀を始め、艦隊司令部の面々が執務室の隣にある会議室に集まり頭を捻る。

「妥当なのは、ソロモン諸島の切り離しと言ったところか？」

「ニューギニアではなく何故ソロモン諸島なのです？」

「ニューギニアは特にマリアナ諸島と直接対面している都合上、戦力的に守りが固い。展開している兵力も、各地への補充兵力を考えたら南太平洋の中で一番だからな。その点、ソロモンは防御縦深が無いのと広範囲の哨戒索敵網が無いから攻め易いのだ」

「であるならばすぐにでも救援に向かわなければなりません」

「いや、無理だな」

「何故……」

「こちらが出せる戦力が殆ど無いからだ。出せても1個戦隊程度の戦力だ。報告では空母、戦艦を含む大艦隊だそうだからな、今打って出ても太刀打ち出来ん」

こちらが打つことの出来る手と言うのは現状限られている。

艦隊を出せないから制海権や制空権を奪還しに行く事も難しいし、飛行場が使えない以上航空隊の増援を送り込む事も出来ない。

航空機と搭乗員だけを送ればいい、と言う話でもない。

予備部品や予備の機体、増員に伴う食糧や燃料と言った補給の増大もある。

ましてや輸送船団で陸軍部隊を送り込むのも出来ない。

輸送船団の手配だけでなく、陸軍師団の準備にも時間が掛かる。

援軍と現地部隊の兵力を大きくすればするほどその分補給線も大きくしないとならない。

ソロモン諸島は赤道直下の過酷な環境だ。

まともな補給をしていても感染症や伝染病に罹る兵士がいるし、高温多湿と言う環境で物品の損耗も激しい。

定期的にそれらを入れ替えないと戦えなくなるのだ。

それを考えたらどれだけ早くても2週間は打てる手が無いと言うのが現状なのだ。

「取り合えず、敵艦隊は輸送船団を伴っていないと報告が上がってきているので、現状こちらの攻勢を遅らせる為の一過性の攻撃の可能性が高いのでは、と考えますが」

「ああ。ただ、そうなるとソロモン諸島だけでなく何故豪州本土まで、しかも南部と東部と言う広大な地域に掛けて攻撃を仕掛けて来たのか、と言う事に対して明確な説明と理由が分からない。ただの戦力不足によるものか、はたまた別の意図があるのか……」

「現状、続報を待つ以外に他はありません。何か不足の事態が発生しても良いように艦隊と増援の為の陸軍部隊の準備を進めましょう」

「頼む」

加賀の提案により、それが決まった。

敵の戦略目標が分からない以上こちらの戦略目標も定められない。敵戦略目標を変えさせる事も出来なくはないが、こちらの被害も相応な物になる。

余りにも情報が少な過ぎる今は出来る限りの準備と情報収集に努めるべきで、積極的な行動は起こせないのは確かだ。

もう幾らか情報があれば、行動を起こせるかもしれないのだがな……。

報告から2週間。

状況は深刻であった。

結論から言うならば、敵はソロモン諸島に限定してこちらの補給線を絶つ作戦を採ってきている。

ニューギニアの飛行場からだところちらの陣風は航続距離が足りずに船団護衛任務はソロモン海と、粘ってもブーゲンビル島辺りまでが限界だ。

そのブーゲンビル島の近海には敵の機動部隊が張り付いていて長距離の飛行に加えて空戦になるから危険過ぎて出せない。

もし危険を承知で護衛任務を任せても結果はかの大戦でのソロモン諸島を巡る戦いをなぞる事になる。

数少ないソロモン諸島にある程度距離が近く、十分な数の戦闘機を配備し得るウツドラーク島やバナチナイ島にある飛行場は艦砲射撃で周辺まで派手に耕されて使用不可能。

再び稼働状態にするにはこれまた2週間は掛かる。

何よりも問題なのはソロモン諸島方面軍の備蓄物資の底が見え始めてきていると言う事だ。

敵は少数部隊、それこそ小隊や大きくても大隊程度の部隊でこちら

の物資を蓄えている倉庫やそこから各地に運ぶための道路などを破壊して回っているのだ。

本来なら孤立しても数か月は全力で戦える物資を蓄えていたのに、関わらず、破壊工作によって今や10日で底を付く悲惨な状況だ。潜水艦の数も尋常じゃないし、数十隻の機動部隊まで駆り出して完全に補給線を絶つてきている。

今ここで手を打たないとソロモン諸島方面軍の全滅なんて事になる。

それならまだいい、最悪ニューギニア、フィジーやサモアなども危うい。

「提督、ソロモン諸島方面軍司令部からです……」

「ありがとうございます」

何度目になるか分からない救援要請が届く。

その文面は悲痛に溢れている。

とは言え感傷に浸っている場合でもないし、その文面を見て悲観的な想いを抱える事も無い。

何故ならば、敵を倒す為の準備をしているからだ。

「輸送部隊の状況はどうなっている?」

「高速輸送船、高速タンカーどちらもとも全てが揃っています」

「艦隊は?」

「補給にあと36時間頂ければ完璧に終わられます」

「よし、出撃準備命令を下令」

「はい、分かりました」

何も手をこまねいていた訳では無い。

今現地で必要とされているのは物資だ。

それも食料と医薬品を早急に、それも現地で戦う10万を超える人数分。

そしてそれらを運ぶ為の車両を動かす為の燃料。

武器弾薬は締め付けが殆どで、戦闘らしい戦闘と言えば時折嫌がらせのように行われる、精々20機かそこらの少数の戦爆連合による攻撃だけ。

だからそちらの消費は殆ど無い。

早急に運ばねばならないのは、燃料と水、そして食料医薬品だ。

これらが無ければソロモン諸島方面軍だけでない、我々の防衛戦は1週間後には崩壊するだろう。

それを解決するべく、まずはソロモン諸島に対しての輸送作戦を決定するのだ。

しかし一つ問題がある。

用意出来る高速輸送船と高速タンカーが10隻ずつ、計20隻しかないと言うことだ。

これでは到底足りない。

だから何度かに分けて輸送を行うのである。

最低限の物資量を送り込むのに島々を区画分けをしたとしても5回、余裕を持たせるならば倍の10回は必要になる。

それも、全ての輸送船とタンカーが無事に辿り着く事が出来たならばと言う前提だ。

途中で何隻かを失ったら、輸送回数は増える。

参加するのは高速輸送船10隻、高速タンカー10隻。

そしてそれら20隻を守るべく金剛、比叡、霧島、榛名、長門を中心に鈴谷、プリンツ・オイゲン、青葉、古鷹、足柄を付ける。

それに2水戦、4水戦から花月、涼月、海風と江風の4隻が加わる。

合計25隻の護衛艦隊となる。

他にも残る1機艦と装甲艦隊が突入支援に当たる。

敵主力艦隊の注意を引き付けてもらい、突入をし易くしてもらおう。

あれだけの数の主力艦が揃って敵艦隊を指すのだから、無視は出来まい。

全ての空母は兎に角注意さえ引き付けて、輸送艦隊に敵艦隊が向かわなければ良いだけだから、対潜警戒と早期警戒管制機の流星だけを搭載して他は全て陣風だ。

ソロモン諸島に数か所残る飛行場から戦闘機を出し、輸送艦隊を敵機と潜水艦の脅威から守ってもらう。

とは言え出せる機数は合計しても70機前後だから精々隼鷹や飛

鷹単艦の艦載機数程度しか無く、もし敵の大規模な航空攻撃があれば只では済まないだろう。

潜水艦隊も投入して、警戒線も張るし可能な限りの万全を尽くす。第1潜水艦隊には機会を見て敵艦隊に攻撃を仕掛けても良いとしているし、運があれば空母か戦艦の1隻か2隻ぐらいは撃沈出来るかもしれない。

敵潜水艦も多く展開しているとソロモン諸島方面軍から連絡を受けているし、輸送船が多く撃沈されていることからそれは明白だろう。

どうにかして敵の潜水艦に捕捉されないように祈るしかない。

どれだけ頑張って潜水艦を探しても、今の技術では100mまで潜られたらどうしようもない。

50mぐらいなら磁気探知機で見つけられるが、それ以下の深度に潜られてしまったらどうしようもない。

磁気探知機も前線配備が開始されたばかりの新兵器で、信頼性は確かだがその性能が敵潜水艦の性能に追い付いていないというのが実情だ。

改良を重ねていくしかないが、現状の性能が今出し得る最高だ。

1週間後、輸送艦隊は長門を旗艦にしポートモレスビーに一度停泊し補給を挟んだ後に輸送艦隊は夜間を狙って突入を開始した。

一度目の突入ではチョイスル島に、二度目の突入でベラ・ラベラ島、ラノングガ島、ギゾ島、コロバンガラ島、ニュージョージア島に物資を送り込んだ。

3度目はサンタイザベル島とラツセル諸島。

4度目の突入はガダルカナル島、フロリダ諸島に。

5度目の突入はレンネル島、迂回航路を採ってマキラ島、ウラワ島に送り込んだ。

5度目の突入はマライタ島に輸送を行った。その際インディスペンセイブル海峡通過時に敵潜水艦群による攻撃を受けて高速輸送船第4雄大丸、室蘭丸、函館丸の3隻が撃沈、高速タンカー第5清栄丸、第2能登丸が被雷、退避。

結果輸送量の低下計画の修正を強いられた事で、計画の修正を行うとともに第二次マライタ島輸送が決定される。

「提督、敵潜探知です」

「対潜戦闘用意、航空支援は？」

「陸軍航空隊が先程対潜爆弾投下の報告を打電したとのことです」

「寄せ付けるな、対潜対水上警戒厳」

「電探に感有り！大型艦の反応複数、他多数！」

「詳細な数は？」

「島の影に隠れているので、ざっと5〜10と言う事しか……」

「1機艦に打電、我有力なる敵艦隊に捕捉さる、至急支援求む」

「了解」

10分ほどすると返電が報告される。

「1機艦より入電、『我攻撃受ク、支援出来ズ』」

「出迎えられたか……」

間違いなく迎撃の網を張っていたのだろう。

前回の輸送で敵潜水艦隊に捕捉されて損害を出したのが決め手だったのだろうか。

「提督、反転しましょう。今戦えば結果は目に見えています」

「……電探、発見時と現在の敵艦隊の凡その速力と距離は分かるか？」

「はっ、発見時は約20ノット距離約60km、現在約35ノット距離50ノットです」

「逃げられんな」

「ですが……」

「こちらの艦隊最高速力はどれだけ早くても30ノットが限界だ。それに敵艦隊の速力は35ノット、もうとつくに捕捉されている。逃げ

切れん」

「ではどうする？ 輸送船とタンカーを見捨てる訳にも行かんだろう」

「足止めをする。輸送船団に暁、雷、電、響を護衛に付けて退避させろ。他は敵艦隊を足止めする」

「はっ、了解しました」

「艦隊合戦用意、砲戦！」

艦内放送で喇叭が鳴り響くと各員が持ち場に付く。

「提督、数的不利はどう覆す？ 流石の私でも50口径の16インチ砲相手に2対1は厳しいぞ」

腕を組んで敵艦隊の方をじっ、と見据えながら長門が聞いてくる。

「流石の俺もそこまで馬鹿じゃない。決戦じゃないし輸送船団を逃がして1機艦か装甲艦隊からの支援が来るまで耐えれば良いんだ」

「どういうことだ？」

「なに、真面目に戦う必要も無いと言う事だ」

「艦隊速度を30ノットに、敵艦隊との距離は300を保て」

「それでは金剛達の射程ギリギリではないか。命中弾を出して装甲を貫くなら最低でも150にまでは接近しないとならんぞ」

金剛達の射程は50口径に主砲身を伸ばしたとは言えど、それでも3万8000mが限界だ。

長門の主砲射程は50口径で4万2000mだ。

とは言え300と言う距離は射撃管制装置や射撃用電探をフル活用しても中々当たる距離ではない。

本当ならば350ぐらいにまで距離を離したいが、それだと遠過ぎで敵に意図を察知されかねない。

300ならば数的不利での戦闘を恐れて距離を開けている、と思わせられる可能性がある距離だと思う。

「いや、いい。さつき言っただろう、真面目に戦う必要は無い、とな」
「なるほど、そういう事か。中々良い性格をしているじゃないか」
「にやっ、と笑みを浮かべる。」

「しっかり逃げ回るぞ」

「艦長、聞いたな？」

「はい、操艦技術の見せ所ですな」

「敵艦隊接近！戦艦13、巡洋艦11、他随伴艦多数！」

「同航戦に持ち込むぞ。艦隊面舵一杯」

敵艦隊の戦艦の数がかなり多い。

かなり不味いかもしれんな、これは。

「了解。おーもかあーじいっばあーい！」

「敵艦隊面舵に転舵、同航戦です！」

「距離300で各艦射撃開始、付かず離れずで距離300を維持するように。他艦は周辺警戒。特に対潜警戒を厳とせよ」

命令通り、艦隊は敵艦隊に対して3万mの距離を維持しながら砲戦を開始した。

流石に3万mも距離が離れていて互いに30ノットの高速で駆け抜けてしかも回避行動をしている中では命中弾と言うのは100発撃って1発ぐらいの命中率だろう。

こつちには1隻辺り2隻分の砲弾が次々と降り注いでいる。

長門、金剛、比叡には3隻が狙いを付けているらしく榛名と霧島の周りに弾着する砲弾数よりも明らかに多い数が次々と巨大な水柱を乱立させている。

「榛名が命中弾を得ましたが、有効打ではないようです」

「この距離での砲戦なんだ、35・6cm砲じゃバイタルパートに当たれば弾かれる」

「敵弾弾着5秒前！……だんちやーく、今！」

「今のは近かったな」

「至近弾だ、段々と精度が上がっているな。これだと命中弾を食らうのも時間の問題だ」

「1機艦より入電、『敵艦隊二戦艦見当タラズ、我航空攻撃ヲ凌グ、コレ以上ノ攻撃ハ無シト認ム。戦艦ヲ応援ニ送ル』以上です」

「200kmはあるから今回ばかりはアテには出来んな」

「ならば友軍に向かって、少しづつ後退しては？それならば合流可能時間を早めることが出来ます」

「そうだな、そうしよう」

その意見を受けて、少しづつ悟られない程度に友軍に向かって艦隊は後退を続けた。

3時間半ほど掛けて徐々に後退を重ねつつ、友軍艦隊と合流する頃には長門、金剛、比叡、榛名、霧島の砲弾は可能な限り節約していたとは言え、僅かに3割程度が残っているのみだった。

「艦隊反転、敵艦隊を叩くぞ。制海権を奪い返す」
「了解した」

長門と霧島が2発ずつの被弾を許していたが、戦闘能力は依然として有している。

戦力差も12対13になったし十分勝ち目はある。

航空攻撃は残念ながら搭載している艦載機の都合上全く期待出来ないが、それでも頭の上を守って貰えると言うのは心強いことだし敵潜水艦の脅威を気にしながら砲戦をしなくていいと言うのは大きい。

「敵艦目標を再選定、各艦と戦闘を開始しました！」

「我々ほどの敵を叩く？」

「最初から狙いを付けている艦で良い。照準をやり直すほど砲弾も余っていないからな」

「目標艦が重複するかもしれないが、良いか？」

「構わん」

長門も負けてはならぬ、と41cm連装砲を撃つ。

すると3射目に命中弾を出した。

「敵艦に命中弾2！火災発生の様！」

「幸先が良いな」

「散々じれったい思いをしながらの砲撃でしたから、砲術の皆も鬱憤を溜めていたのでしょうか」

結果として友軍と合流して勢いを得た我々は反転攻勢に出、翌日の午前7時頃まで続いた戦艦同士の殴り合いの結果、敵戦艦2隻の鹵獲、7隻撃沈、他撃破と言う大戦果に終わった。

こちらは長門、霧島、ビスマルクが大破。

ヴァンガード、ローマ、榛名、霧島が中破。

2水戦の各艦を始めとして多くの中、小型艦艇が戦艦の至近弾を食

らったり、最後の魚雷戦で砲弾を食らったりで小破、中破した艦が目立つ。

結果としては輸送作戦自体も成功し、ソロモン諸島から敵艦隊を撃滅、撃破し制空権制海権共に奪い返す事が出来た。

1機艦の損害は少なく、100機程が撃墜されたが搭乗員は殆どが無事に救助されて補充の機体と搭乗員を待っている状況だ。

戦略目標を達成し、戦術レベルでも十分以上の勝利を掴んだは良いが、こちらの損害も大きい。

鹵獲した敵戦艦2隻はポートモレスビーまで曳航し取り合えず防水などの応急修理をした後にバリクパパンで排水と被弾孔や被雷孔を塞ぎ本土に回航、ドックに入渠となった。

乗っていた敵兵とは臨検中隊が乗り込んだ際に戦闘になったが無事に制圧、深海棲艦娘もどうかこうにか捕虜とすることが出来た。

とは言え安芸と違ってこちらは敵意剥き出しで到底話をすることなど出来そうになく、安芸とは別の収容所を安芸がいる収容所の隣に用意することとなった。

勿論自殺や脱走を防止する為に、艦娘の中から10名ほどを選抜し監視に当たらせることとなった。

勿論監視に当たる艦娘は可能な限り他業務の免除を図っている。

出撃に際しては特殊部隊から人員を引っ張って来て当たらせるつもりだ。

ひとまずは、これでソロモン諸島での戦いは落ち着いたと言っていだらう。

南洋諸島作戦 → マリアナ諸島奪還作戦 第82話

ソロモン諸島での一件が落ち着いた後、戦後処理の会議をする為に、具体的には主に鹵獲艦等の扱いを始めとして防衛体制の早期再確立とその強化の為にマーシャル諸島やトラック諸島への攻勢を検討する為に再び東京に向かっていた。

予定では輸送機で人員輸送に相乗りする予定だったのだが1週間ほど天候が崩れると言う予報が出た為に急遽列車での移動となった。東京方面行きの列車の1両を貸し切り、護衛の兵士達と共に乗り込む。

今回の艦娘の同行者は筑摩である。

それ以外の皆は即応待機を除いて全艦がドック入りと休暇となっている。

休暇とは言え保安上の理由もあるから市街地に出ることは出来ないが、その分鎮守府内には大抵の施設や設備が整っているから我慢してもらおうしかない。

あれだけの戦いの後だ、特に輸送艦隊は主砲も派手に撃ちまくって損害も大きいから修理や整備をやらなければならない。

第1、第2護衛艦隊は作戦に参加してはいなかったが船団護衛と言う重要な任務があるからな。

普通の機関車だが40両編成となる。

本来ならば呉から東京まで15〜17時間もあれば到着するのだが、今回相乗りするのは貨物列車でそれに俺達が乗る旅客車両をくっ付けた状態だ。

しかも途中で岡山、神戸、大阪、名古屋、浜松、静岡、小田原、横浜と停車して荷物の積み下ろしもあるとのこと、丸三日の旅路になる。

鉄道のダイヤは事細かく刻まれており、しかも今は航空機が使えない。

い現状である為、市民一般の長距離移動の足として、重量のある貨物を運ぶ手段として乱すことが難しい。

人員輸送なら連山を使うことも出来るが、やはり数を移動させられる点においては鉄道には敵わない。

大量輸送ならば船舶輸送が間違いなく優れているが、あちらはどちらかと言うと加工前の原材料や軍関係の重量物を運ぶことが殆どだ。と言うより海軍関連の重量物となると、船舶でなければ輸送が出来ない物ばかりだからだ。

駆逐艦や高角砲の砲身ぐらいならば列車でも運べなくはないが纏まった数となると運べない。

それこそ巡洋艦以上となったら列車では運べたとしても時間が掛かるしコストパフォーマンスも悪い。

内陸部に行くには鉄道を使わねばならないが、そうでないなら船舶輸送で纏めて運んだ方が良い。

だから貨物列車が運ぶのは食料や衣類などの軽い物が殆どだ。

この列車も加工食品や戦闘服、銃弾などを運んでいる。

「ふう……、流石に大阪まで座りっ放しとなると尻が痛いな……！」

立ち上がって身体をぐりぐりと動かす。

大阪に到着するまでずっと座りっ放しでいたからか、腰が悲鳴を上げている。

動かすとボキボキッ、と全身で音がする。

「出発まで四時間だそうです」

「また長いな、どうした？」

「この列車に載せ変える荷物を載せた列車が道中の事故で遅れるそうです」

「それは仕方が無いな。しかしどうするかな、仕事と言えばこれ幸いと取り上げられてやる事が無いし、散々やったトランプも流石に飽きて来た」

「将棋や囲碁は時間が掛かり過ぎますからね」

「隊長、少し降りて駅構内だけでも散歩しに行かんか」

「はっ、散歩ですか」

「流石に歩かんと不味い気がしてきたし、それに腹が減った」

「我々の中から買いに行かせましょう。流石にこうも人が多いと安全を確保しきれると言えませんので、お許しください」

「それなら仕方が無いか。じゃあ、皆の分も纏めて買って来てくれ。大阪だからたこ焼きとお好み焼きがあれば文句はあるまい。あとは適当に食い物と飲み物を任せる」

全員で15名の護衛に俺と筑摩、それに従卒の佐藤大佐、石崎中佐の二人を合わせて19人の一行となる。

まあ使い道の無い給料もこういう時に使ってやろうと考えていたから財布の中にはかなりの金額が入っている。

道中は食べ物が美味い所ばかりだから、珍しく食道楽と行っても良いだろう。

大阪は港としてもかなり栄えているのもあって、他地域に比べると物資がある。

豪州で作られた小麦や南方で栽培されている果物などが運び込まれるから、かなりの賑わいだ。

大阪駅はその物資を各地に運ぶ物流と交通の重要拠点の一つだから、確かに値段は戦前や元居た世界に比べれば高いが良い物が食える。

「宜しいのですか？」

「俺の給料はな、殆ど貯まるだけなんだ。こういう時ぐらいしか使い道が無いから甘えておけ」

そう言うと、隊長は5名ほどを選んで買いに行かせる。

「さて、帰って来るまで少し身体を動かしておこう。凝って仕方が無い」

買い出しから帰って来るまでの30分ほどを俺と筑摩は軽い体操をしつつ待つ。

「お待たせしました！」

5人が両手に色々と抱えて帰って来る。

どうやら色々と買い込んできたらしく、食欲をそそる良い匂いがする。

食える時に食う、寝れる時に寝るが基本の軍隊生活に慣れると、こうして美味そうな匂いがするだけで腹が減っていなくても減るものだ。

たこ焼きやお好み焼きなど、食べるのは何年ぶりだろうか。

普段は皆が作ってくれるバランスの良い食事を食べているからこういう、ジャンクフード、というのだろうか？そういうものはまず食べない。

それよりも皆が作ってくれる飯の方が絶対に美味しいからな。

まあだが、偶に食べるぐらいならば良いだろう。

各地で名物を食いながら、東京に向かう。

途中で天気が崩れて雨と風がかなり強く吹いていた事以外は特に問題らしい問題は起きずに無事に到着することが出来た。

東京駅からは復興されて区画整理をしっかりとした道を車で統合参謀本部まで向かう。

勿論護衛の装甲車付きでだ。

東京は震災で被災し大きな被害を受けたが、それでも人口は数百万人と言う大都市だ、そんな中を装甲車に守られながらだと目立ち過ぎるから装甲車は要らないと言ったんだがなあ。

会議が終わり東京に泊まる。

会議の結果は、トラツク諸島、マーシャル諸島とギルバート諸島の3つの南洋諸島に対しての攻勢を行う事が決定された。

問題は実施時期だ。

海軍は先のソロモン諸島での海戦で損傷艦を多数抱えており修理と再訓練の為に半年は行動が出来ない。

陸軍もソロモン諸島に対する作戦で増援師団を多数送り込んでい

るから新しく作戦をやろうとしても、投入出来る師団の数が十分ではない。

何よりも既に多方面に対する補給に加えて更に加わる長大な補給路の維持が問題だった。

正直奪還自体は戦力を整えれば十分に可能な程度ではあるのだが、南方方面、ニューギニア、オーストラリア、ソロモン、その先にあるフィジー・サモアやニューカレドニアなど既に複数の補給線を維持しなければならぬのに、そこに更に敵潜水艦の脅威がこれらの方面よりも格段に高くなる南洋諸島への補給線の維持が果たして本当に出来るのかというものだ。

護衛艦隊は2つしか無く、南方航路護衛隊は駆逐艦を最高戦力にした、基地航空隊の直掩を常に受けられる南方方面の船団護衛しか出来ない編成だから引き抜くことは難しい。

第1機動艦隊は主戦力だから恒常的に船団護衛任務を任せる訳にもいかない。

遠洋練習航海のついでに、が精々か。

やらなければならない事だから全力を尽くすが、それでも限界はあるだろう。

トラック諸島に1個師団と1個連隊、ポーンペイ島に2個連隊、マーシャル諸島に1個師団と1個連隊、ギルバート諸島に1個師団と1個連隊、ウエーク島に1個連隊、合計で4個師団＋1個旅団程度の戦力になる。

それぞれに海軍陸戦隊が上陸戦用に1個連隊づつが投入されるが海岸保が確保出来たら撤収する。

海軍陸戦隊は上陸戦専門部隊である、と言うのは伊達では無い。

マーシャル諸島とギルバート諸島には防衛戦力として1個師団＋1個連隊程度が置かれる事になる。

これらはそれぞれの師団司令部と連隊司令部を持ち、更に上級編成単位と上級司令部として他の南洋諸島や島々の防衛を担う、南洋諸島

方面軍司令部が置かれる。

これらの投入戦力は攻略中の予備部隊、防衛部隊もすべて含まれることになる。

トラック諸島はマリアナ諸島の目と鼻の先で最前線になるから陸軍航空隊を含めるとかなり規模が大きい。

数百機もの戦闘機が最終的に展開、防空にあたる予定だ。

半年もあれば敵も態勢を整えて迎え撃ってくるのは十分に予想が出来る。

とは言えこちらが全く事前に攻撃が出来ないと言う訳でもない。

実は3つの諸島は最も近い場所から連山を爆撃に出せば攻撃可能距離内にギリギリ収まっているのだ。

連山の航続距離は6000kmに延ばされているが、ニューギニア方面やフィジー・サモアなどから出撃すれば往復で5000km程度になる。

最大爆装とは行かないまでも、それなりの量の爆弾を積んでいくことが出来る。

50機ぐらいを同時に攻撃させれば3tほどの爆装量で150tの爆弾を落とすことが出来る。

そうすれば敵艦隊と敵基地航空隊を同時に相手取らずとも良くなる。

問題はこれだけの長距離飛行を連日行えるかどうか、と言う事だ。

純粹に補給能力がこれらの出撃で消費される物量に追い付くことが可能かどうか、という点に尽きる。

消費する燃料も馬鹿にならないし、何より往復飛行は軽く12時間を超える。

搭乗員の疲労やそれだけの長時間酷使されるエンジンや機体各部の部品の損耗も大きいのは想像に難くない。

それらを常に万全の状態にした上で十分に打撃を与えられるだけの爆弾の量を常に補給し続けられるのが問題なのだ。

流石に計画にある以上出来ませんとは行かないから、どうかするしかないが最悪機数を絞ることになるだろう。

とは言え20機程度で爆撃をしたとしても大した効果は無い。

せめて40機ぐらいは纏めて飛ばさないと、距離の関係上護衛機を付けてやる事が出来ないから、高高度爆撃となる。

せめて纏まった機数を飛ばさないと防御火器の密度も下がるしそうになると撃墜機数も多くなり、戦果も大したものではなくなる。

一応の計画としては各地に120機ぐらいを配備して、3つの爆撃隊を整備兵などを含めて編成し、ローテーション形式で出撃、整備休息を取らせる事を考えている。

360機となるが、当然損失なども出る事を考えて後方に予備機や搭乗員を待機させておかなければならないのは勿論だ。

予備機などを含めたら400機は下らない。

補給を管轄する兵站部にはその辺りの詳細を考えて、連山と搭乗員、整備兵に対する補給計画を練ることを命令しているので早ければ1か月ほどで計画書が出来上がるというから、攻略作戦開始の3か月前から爆撃を開始する予定なので、計画書作成に1か月、部隊の移動と物資の集積に2か月を予定している訳だ。

ともかくこちららも艦隊と陸軍部隊の準備を進めさせなければならぬ。

今日は特にやる事も無いので、統合参謀本部の宿舎で過ごす。

売店もあるからそこに何か食い物を買に行こうか迷うところである。

食事に関してはここの食堂に行こうかと思ってるが、夕食まで以外と時間がある。

会議が長引いたお陰で昼食を摂り損ねたのだが、今食べてしまうと夕食が食べられなくなる、そんな時間だ。

考えていると、空襲警報が鳴り響く。

その数秒後に大佐と中佐が部屋に殴り込んでくる。

「提督、敵の空襲です！」

「そんなことは警報で分かっている。防空壕に避難するぞ、備え付けられてある避難袋を持って逃げ」

東京は連日敵の爆撃を受けているから、統合参謀本部の宿舎や隊舎などには避難する際に防空壕に持って行く為の避難袋と言うものが備え付けられている。

勿論全国各地の民間用防空壕や軍用防空壕に避難する際も同じようにするが、実は俺がこれを使うのは初めてである。

というのも瀬戸内海の方には滅多に爆撃が来ないからだ。

来たとしても重要な工場や港湾施設が集中している瀬戸内海周辺はその分防御が分厚い。

敵の標的も比較的防御の薄い艦載や九州、四国が殆どで山陽地方や山陰地方には殆ど来ない。

仮に来たとしてもそこら辺に展開する海軍航空隊の迎撃に、突破したとしても対空砲の迎撃があるから被害が無いのが実際のところだ。

避難袋の中には水や食料、缶詰形式ではあるが1週間分入っており、生き埋めになっても助けが来るまで凌げるようになっている。

防空壕は全て軍と政府が建設したもので、全て地図に場所や規模が事細かに記されているので必ず救助が向かう仕組みを採っているから、これさえあれば助かると言うわけである。

1分ほど遅れて護衛の皆がやって来る。

装備などはそのまま身に着けていたのか、どうやら情報収集に走って来てくれたらしい。

何人か居ないから筑摩を迎えに行っているのだろう。

「提督、すぐに避難しましょう。どうやら近くの工業地帯が標的の様で、流れ弾の可能性があります」

「分かった、行こう。大佐と中佐もしっかり連れて来るんだぞ」

「勿論であります」

護衛に連れられて防空壕に走って避難する。

途中で女性用宿舎に泊まっていた筑摩と合流し、防空壕に入る。統合参謀本部には合計で5つの防空壕がある。

それぞれが地下30m以下に整備され、地下にある避難所はコンクリートと特殊鋼、水、衝撃吸収材の4種類の装甲材を重ねたものになる。

厚さは5mにもなる。

収容人数は最大で400人、食料と水を4日分備蓄してある。

それが5つで2000名の人員を収容出来る訳である。

この2000名と言う数字は統合参謀本部に勤める者達の凡そ1.5倍の人数に当たる数字だ。

その5つの内の宿舎区画にある防空壕に避難したわけである。

防空壕はそこでも指揮が執れるように設備は充実しており、各防空壕は有線電話で繋がっている。

中には地上の施設が吹き飛ばされても良いように食料や水も十分に備蓄されている。

防空壕の中には宿舎区画に居た下士官や兵卒、士官達も避難している。

「どうやら連日の空襲で慣れているのだろう、だいぶん落ち着いているな。」

「大丈夫か」

「提督こそ大丈夫ですか？」

「これでも運動はしているんだ、問題無い」

「敵機はB-29か？」

「B-29だそうです」

「全く敵の物量にはほとほと呆れるしかないな……。どこから出てくるんだか」

「小官には分かりかねます」

「震電もあるし、問題はないと言いたいが……」

「あとは対空砲や対空機銃に任せるしかありません」

全国の防空は海軍航空隊頼りと言う訳では無い。

勿論高射砲や低空で侵入してくる艦載機に対しては対空砲や対空

機銃、対空機関砲もある。

高高度に対する対空戦闘を実施する為に15cm高射砲がその任に当たっている。

これは対B―29用に開発された高高度用の高射砲で、10基の高射砲が1群と纏められ、各種電探と連動しているから命中精度も高い。

10門と言う纏まった数の高射砲を纏めて電探で照準して射撃するから弾幕の形成も容易だ。

実際の口径は149.1mmだが、呼び易さもあつて15cm高射砲と呼んでいる。

60口径の長砲身、最大射高は対B―29用に開発されたとあつて2万mを誇る。

射程は2万5000m、自動装填方式で毎分10発、全国各地の要地に配備されている。

自動装填式の理由は砲弾重量が45kg、装薬量が17.6kgの合計62kgを軽く超え、平射も可能としているから弾種によつては普通に70kgを超えるものもある。

これだけの重量を手動で装填するなど戦闘中と言う状況下ならば尚更に、訓練などでも無理である。

砲弾は対空弾、対地榴弾、徹甲榴弾の3種類があり、基本的な構造は3式弾と同じで、対空弾は半径150mに対して焼夷弾子を撒き散らすから敵編隊のど真ん中で炸裂すれば威力は抜群と言える。

とは言え高度10000m以上を高速で飛ぶ目標に対しての射撃だから、10発撃てば2発ぐらいは命中するだろうと言うものだ。

対地榴弾は専ら前線の敵侵攻が予期される地域に優先配備されており、徹甲榴弾も同様だ。

信管は砲弾によつて別の信管がある。

対空弾用の対空信管、対地榴弾用の着発信管、遅延信管、曳火射撃を可能とする時限信管の3種。

徹甲榴弾は対地榴弾と同じ着発信管と遅延信管が使える。

この砲は正式名称13式15cm高射砲と言うが、実際は対空に特

化した対空対地対艦全てを熟せる汎用砲に近い。

最近は南方方面やフィリピンを始めとしてニューギニア、ソロモン諸島、ニューカレドニアなどの前線に置ける要地に配備が進められている。

どうやらB―29が侵入したのか高射砲が射撃を開始したらしい、地面の下でも若干の振動と音が伝わってくる。

東郷参謀本部にも各種電探に加え高射砲が2個要地防空大隊、15cm高射砲10門と対空機銃や機関砲が備えられている。

そりゃ陸海軍の最重要拠点だから守りは固い。

とは言えここが目標では無いが、近くにある陸軍用の砲弾と戦車や榴弾砲の砲身を作る陸軍東京第3造兵廠と戦車の車体や砲塔、部品などを作る陸軍東京第5造兵廠、陸軍東京第9造兵廠が目標らしい。

暫くすると地鳴りのような着弾と炸裂音が聞こえてくる。

高度1万2000mで侵入して投弾したから、その分落下エネルギーは大きくなる。

着弾時の衝撃だけでも凄まじいものになる。

「今のはだいたい近いな、流れ弾が敷地に落ちたか？」

衝撃がかなり近い場所で複数立て続けに起こる。

「そのようですね」

最近の爆撃は重要目標に絞って行われるのが殆どだ。

恐らくこちらの迎撃で半分ぐらいが撃墜か撃破で引き返していくから、最終的に爆撃を行えるB―29が平均100機程度にまで落ち込むからだと言われる。

何百機が当たり前のように、侵入して無差別絨毯爆撃をしていた時は目標の周辺ごと焼き払えば良かったが、今は侵入出来る機数が少なくなから、周りごと絨毯爆撃をすると目標に対しての被害は小さくなる。

だから100機ぐらいに限られた目標に対して集中して爆撃をする事で補っているのだ。

その方が確実に目標を破壊出来ると踏んだのだろう。

B―を 29はだいたい4tほどの爆弾を搭載して飛んでくる。

100機で400tになるから、工場を幾つか纏めて更地にするには十分な量だ。

今回も100機ほどが迎撃と対空砲火を潜り抜けて爆撃を成功させたらしい。

しかも流れ弾とは言え統合参謀本部の敷地内にも命中弾が出たのだから敵の攻撃は成功と言えるだろう。

この様子だと、工場も瓦礫の山になっている可能性が高い。

空襲警報が発令されてから2時間もすると警報は解除された。

今頃は送り狼として出撃した震電が敵機に攻撃を仕掛けている頃だろう。

「提督、外を見てきます」

「ああ、頼む」

護衛の一人が外を見に行く。

10分ほどで戻って来て、安全が確保されたのを聞いて外に出る。

ほんの2時間半程度の事だとは言えど、地上に出る事が随分と久しぶりのように感じる。

時刻は夕方、辺りは茜色に染まっており普段通りならば食堂に多くの者達が殺到している頃だろう。

「食堂の解放時間が6時半になるそうです」

「そうか、なら我慢しよう」

今は5時13分、丸一時間半ぐらいは待たなければならぬらしい。

被害は爆撃を受けた工場は大破、再稼働に2ヶ月は掛かるとなったが、避難が早期に行われていたことから人的被害は最小に抑えられた。

確かに大規模な3つの造兵廠がやられたのは痛いし生産に影響は出るが、大局に影響があるほどでは無い。

こういうことに備えて各地に工場を分散させているのだ、他の造兵廠が無事であれば供給は保つことが出来る。

漸く後始末が終わって食堂が再開すると、腹を空かせた兵達が食堂の方に駆けていくのが見える。

確かにもうこんな時間だから、対空戦闘に参加した兵達だけでなく、訓練で大きくカロリーを消費しているのだから腹が減って仕方が無いのだろう。

俺達も士官食堂に向かい、晩飯が盛り付けられた皿を盆に乗せていく。

士官食堂と言っても普通の下士官や兵卒達が使う食堂とメニューはほぼ変わらない。

そこに一品ほど追加されているぐらいである。

下士官や兵卒達の食事は基本的に、欧州系の部隊を除いて週に一度ほど、場合によっては二度ぐらい麺類が出る事以外は主食は米である。

各種ビタミン不足を補う為に主菜や蜜柑などの柑橘系の果物も定期的に出され、栄養素も考えられた質、量共に良いものである。

海外組が多く在隊する部隊においては週に三日間、麺やパンなどが出る。

理由は精神的なものがあるからだ。

彼らは祖国を捨ててでも戦う為に逃げて来たと言う過去があるが、必然的にメンタルケアも必要となる。

そのメンタルケアの一端が食事と言う訳である。

特にバリエーションが豊富なのは、イタリアやフランス組の食事で、食事に掛ける情熱と言うのが、知らない人間からすれば戦う事よりも一生懸命に見えるほどだ。

とは言え月に補給される小麦などの量は勿論決まっているので一定の水準を超える事は無い。

今日のメニューは豚肉のキムチ炒めに餃子5つ、それに味噌汁、米飯、蜜柑となっている。

今日は餃子が今日は士官に追加で出されている。

護衛の皆は指揮官である大尉を除いて階級が下士官や兵卒の者で構成されているが、俺の護衛中という場合は全員士官食堂での食事となる。

翌日、兵器開発や戦技研究などを担う技術研究開発本部に向かう。こちらでも視察をするのだ。

この技術研究開発本部はその扱う物の性質上、実験等に広い場所が必要なのだが限られている。

そこで広めの土地が要求される。

置かれているのは富士山の麓にある旧東富士演習場と北富士演習場、旧富士学校の敷地を統合した富士駐屯地と富士演習場だ。

他にも猿ヶ森砂丘も演習の他に各種試験等に使われる。

富士駐屯地の総面積は13406haにもなり、他に駐屯するのは陸軍の教導団となる。

この教導団は全兵科における専門教育や対抗部隊の役割を担っている。

各種全兵科の教導連隊や学校が所属している。

例外として陸軍航空隊と軍楽隊のみが属していない。

で、この教導団と共に富士駐屯地に所在するのが技術研究開発本部ということである。

日夜様々な開発研究が行われており、陸海軍屈指の頭脳と変態性を持ち合わせたゲテモノ集団である。

かなり言い方が悪いと思うだろうが、実際その通りなのだ。

良い連中なのは間違いないのだが、なんせ無茶苦茶なのが多くて困る。

先日開発研究中の新兵器が取り合えずの実用化の目途が立ったと

連絡が入って急遽視察が決定したのだ。

その結果を見る為に、というわけである。

「お待ちしておりました、閣下」

「ご苦労。それでは早速見せてもらおうか」

「はい、こちらです」

案内されて見せられたのは、H s 293と言う大まかに言えば対艦ミサイルを元に開発が進められていた試製誘導爆弾である。

欧州脱出の際、ドイツ軍やイギリス軍が共同研究を行っていたもので、有用であると研究開発が続けられていたものだ。

現状の対艦攻撃方法は、特に撃沈を意図して攻撃する場合敵艦に対して1000m以内に肉薄し魚雷を投下しなければならぬ。

これは勿論危険極まりなく、可能な限り搭乗員保護の観点なども考慮して遠距離からの攻撃手段が求められるのは必然であった。

魚雷そのものの改良も行われ、潜水艦用の魚雷だけでなく航空魚雷にも音響誘導装置を搭載することが予定されている。

とは言えそれでも限界があるのと、結局肉薄しなければならぬことには変わりなかった。

それよりも3〜4倍程度の射程を持ち、より遠距離からの敵撃破を狙う魚雷や爆弾が要求されることになる。

そこで目を付けたのがH s 293であった。

当初はフリッツXと言う滑空爆弾も同時並行で開発研究が進められていたが、こちらは推進装置を持たない事から結果的に敵に近付かなければならないと言う事で研究中止となった。

フリッツX分の予算も回されたH s 293の開発は本腰を入れて行われることになったのだが此処で問題が一つ。

推進装置を付けただけではただのデカイロケット弾ぐらいにしかならないということだ。

遠距離からの発射と命中を両立させるためにはどうしても爆弾そのものを敵艦に導くための誘導装置が必須であったのだ。

音響誘導装置の開発も進められたが、開発成功となっても更に問題が出て来た。

この音響誘導装置、魚雷に搭載するならまだ良いが、ロケット推進器を搭載する誘導爆弾では誘導爆弾そのものが発する音が大き過ぎて目標の音が探知出来ず全く誘導が出来ないと言う事が判明したのだ。

無線誘導も考えられたが、こちらは命中精度が低過ぎる事、発射母機が結局一定の進路を取り続けなければならない事で魚雷による攻撃と危険性は大して変わらないと言う結果が出た為敢え無く開発中止となる。

最終的に音響誘導装置による誘導を目指したのだが、誘導装置そのものだけでなく、爆弾が凍り付いたり遅々として進まず今漸く実用化の目的が立ったと言う事である。

「音響誘導方式の1型、誘導方式をテレビ誘導に変えた2型の2つがあります」

「音響誘導は駄目ではなかったか？」

「当初は集音器の性能不足で全く使い物になりませんでした、やはり発射母機の安全性を考えると音響誘導方式が最善であるとして開発を続けました」

「それで、どうなった？」

「実用には問題ありません。強いて言うならば操作員によるテレビ誘導方式の方が命中精度が高いぐらいでしょう」

元々音響誘導方式を採る予定だったのだが、どうしても誘導爆弾そのものが発する音が大き過ぎて目標の音が探知出来ず全く誘導が出来ないと言う誘導爆弾の根本問題が解決出来なかったのだ。

そこで一旦誘導方式を既に実用化の目的が立っていたテレビ照準に変えたのである。

「どうやら音響誘導方式も十分な成果を得ているらしい。」

「まあなんにせよ、だ。どれぐらいの射程と命中精度がある？」

「最大射程5000m、目標を狙うならば4000mが限度です。テレビ誘導方式の命中率は20〜25%、熟練した者ならば30%と言ったところでしょうか」

「音響誘導方式の方は命中率はどれだけ高くても20%ですね」

「命中数を担保するならば数を撃たなければならぬか……。飛行実験部からは何かあるか？」

「以前と比べて格段に照準が付け易くなりましたね。音響誘導方式は撃ちつ放しが可能ですから撃つたらさっさと退避してしまえば良い」とは言っても4000mから狙うので目標は豆粒にしか見えませんから命中精度を上げるには結局敵艦に接近しなければなりません。1発辺りの過度な期待、一撃必殺だとか言うのは禁物でしょう」

「取り合えず、実用には耐え得ると？」

「ええ、命中精度の低さを補う為に数を用意しなければなりません、生産性は高いので数を揃えると言う点さえクリア出来れば後は訓練を施して実戦投入可能となります」

実戦で使えるのならば文句はない。

「バリエーションは？」

「対艦攻撃用と対地攻撃用、それとまだ開発中ではありますが対空用の3種類になります」

「どうやら指示したあたりに問題は無いらしい。」

対艦用は貫徹力を高め、装甲の薄い巡洋艦や空母ぐらいまでならば沈められるぐらいの性能だ。

対地用は戦車や家屋、滑走路などを破壊する為のもので単純な単弾頭のものから、タ弾を内蔵したものの2種類がある。

基本的には単弾頭を対戦車や建物などに使い、多弾頭を滑走路破壊などの広範囲にダメージを与えたい場合に使う。

対空用は敵重爆編隊の中に飛び込ませ、そこで爆発させる。

弾頭は三式弾と同じで、直撃しなくとも損害を与えられる。

「ただもう一つ問題があります」

「問題？……ああ、発射母機か」

「はい。艦載機用の誘導爆弾の開発を行っておりますが、どうやっても弾頭重量を減らさなければならぬのに加えて貫徹力もある程度は犠牲にしなければなりません。どうしても攻撃力の低下は現状避けられないかと。対艦攻撃力を期待するならば……」

どんな兵器も使用するにあたってどうしても制限が出てくるのは

仕方が無い。

問題はそれをどうやって補い運用するかだ。

「双発機以上への搭載しか無い、と言う事だろうか？それは承知の上だ。開発を頑張ってもらおうしかない」

「はい、ご理解痛み入ります。銀河だと1発しか搭載出来ませんが、連山ならば3発は搭載出来ます」

「4発は無理か？」

「誘導装置の搭載もあるので、3発が現実的なところでしよう。4発も搭載出来なくは無いのですが、そうすると重量超過に」

「なら3発にしておこう。無理をして運用に支障がでたら本末転倒だ。3発も撃てれば十分、航空魚雷は1機に付き1本だ、命中精度が低くてもそれだけ搭載出来れば補えるだろう」

「あとどれぐらいで量産体制を整えられる？」

「3か月……、いえ、2か月頂ければ最終調整と工場の建設を終えて最初の量産が可能です。連山の改修も同時並行で行います。訓練も含めて5ヶ月ほど頂ければ実戦投入が出来ます」

その返答を聞いて俺は大きく頷いた。

5か月で完全な実戦投入が出来るのだから十分だ。訓練に3か月掛ける事を考えても、次作戦への投入は出来そうだ。

そうなると、作戦に投入予定の連山部隊は改修に訓練に前線配備の為の移動とかなりの大忙しになるな。

慌ただしくなるな。

最終的に連山の設計を再設計し、誘導装置を新たに搭載した連山二型の生産が二週間後に開始され、それだけでは間に合わない為作戦参加予定の連山部隊の機体は順次改修が施されることになった。

第83話

南洋諸島奪還の為の作戦、る号作戦の発動が決定されて3ヶ月が立つ。

既に誘導爆弾の量産体制も整い、前線部隊から順次配備と訓練が進められている。

もう2週間すれば訓練が終了し、備蓄に全力を注ぐことが出来る。

今も備蓄は進めているが、各前線飛行場には40機分の全力出撃5回分程度しか誘導爆弾の備蓄は無い。

大きな効果を発揮する為には、命中精度の低さを補うしかない。

その為には数を撃たねばならないから、これでは到底足りない。

既に南洋諸島の敵飛行場から出撃してくる重爆と熾烈な航空戦が展開されている。

被害も小さくは無く、連日数十機程度が撃墜されて搭乗員達が二式大艇の救助を待つことになっている。

ここまで被害が拡大している理由は敵の重爆に護衛戦闘機が就いている事が理由だ。

重爆だけが相手ならば震電にしろ陣風にしろ、迎撃による大きな効果を期待出来るが、そこに護衛戦闘機が加わるとなれば話は変わってくる。

ではどこからこの護衛戦闘機が出てきているのか、という話だ。

まず前提として、南洋諸島からだと言え最も近い飛行場までだとしても航続距離は足りない。

敵の軽空母か、或いは正規空母2乃至3隻を基幹とした艦隊が行動している兆候がある。

恐らくはその艦隊から護衛戦闘機を出して、爆撃機に就けているのだろう。

これが思いのほか、我々を苦しめているのだ。

なんせ重爆だけでも100機、200機だとかのレベルであるのに護衛に就いている戦闘機の数がまた同じぐらいの数なのだ。

確かに全ての震電や陣風の数を合わせれば戦闘機の数ではこちらが勝っているだろうが、そうもいかない。

各飛行場に分散しているから、同時攻撃は難しい。

飛行場や物資を大量に備蓄してある倉庫などの被害は馬鹿に出来ない。

爆弾が1発倉庫に直撃するだけでも計画の微修正などは免れられないのだからな。

幸いにも継戦能力に大きな打撃は出ていないのが救いであるが、それも運が良いだけの話で、いつまで続くか分からない。

それ以外にも悩みの種はある。

ここ最近になってインド洋方面での敵の動きが活発になり始めたことだ。

敵の艦隊もそれなりの規模が活動しているらしく、通信量も増大している。

地上部隊の移動なども活発になっていくらしく、警戒大、としている。

どうやら中東やアフリカからインドやビルマ、マレー半島に航空機を中心とした戦力を大規模に送り込んでいるらしい。

地上部隊の動向も探った結果、どうやら一定以上の増援を受けていると言う事は分かった。

とは言えその増援が防衛用兵力なのか、或いは攻勢目的の為に集められたものなのかは判然としない。

と言うのも輸送船の数を照らし合わせてみると、インド方面やビルマ、東南アジア方面の通信量が攻勢を目的としているには少ないからだ。

その地点に所在する部隊の数や規模が増えれば増えるほど、通信量が増える傾向にある。

それと比べて、どうも通信量は確かに増えているが、とは言え攻勢を企図している、とも断言出来ない程度の増量なのだ。

だからこちらも断定出来ないでいる。

増援されている地上部隊も確かに厄介だが、特に厄介なのはアンダ

マン・ニコバル諸島の敵飛行場と、そこに展開する敵機だろう。

なんせB―29が進出し始めてからはスマトラ島全域が爆撃の被害に晒されているのだ。

ただでさえ大陸方面、マレー半島からの規模は大きくないとは言え時折攻撃に晒されていたのに、そこにアンダマン・ニコバル諸島の敵が加わったのだから溜まったものでは無い。

旧ベトナムなどの沿岸部からも通商破壊の為に敵機が南シナ海に現れ始めているのだ、早急な対策が必要となるのは間違いない。

今はまだ目立った損害も出ていないが、それが何時まで続くかわからない。

我々は敵に2正面作戦を強要されつつあるのが今の現状である。

しかもインド洋にはスリランカ、モルディブ、ディエゴ・ガルシア島を根拠地として4個ほどの空母や戦艦を3隻つつぐらいいを含む有力な艦隊が展開しつつあるとの情報もある。

規模を考えると、スマトラ島や大小スンダ列島近海に展開しての通商破壊か、或いは飛行場や駐屯地への攻撃だろう。

どうやらチェンナイ辺りにも艦隊が既に展開しているらしいが、正確な規模などは分からない。

現在は展開する基地航空隊だけでも対処出来ているが、その内戦力増強に迫られるだろうから、スラウエシ島やニューカレドニア島などの前線よりも後方となる辺りから引き抜く事を検討しておかねばならないかもしれない。

本土でも陸軍航空隊の錬成や編成は進んでいるが、それだけで足りるかは分からない。

取り急ぎ既に増援要請が届いているし、1個飛行戦隊つつをカリマナン島、スマトラ島に増配する手配をしておこう。

パラワン島とリアウ諸島がシーレーン防衛の要衝でもあるし、次点での優先配備先だな。

取り急ぎ、南洋諸島を奪還し終えたらば大陸東南アジア方面に対する根本的な対処を考える必要があるだろう。

連山による空襲か、艦隊を出して敵艦隊ごと纏めて撃滅してしまう

かのどちらかになる。

戦線の無闇矢鱈な拡大は望ましくないから、奪還まではしないだろう。

あくまでも今現在の我々の主戦線は太平洋だから、インド洋にまで奪還地域を広げられるほどの余裕は無い。

だったらさっさと太平洋地域の奪還に全力を注いで、それから取り掛かればいい。

「物資の備蓄状況は？」

「各地に最低要求量の備蓄は達成しています」

「当初の想定よりも少ないな。やはり敵潜の活動が活発化しているか」

「はい。輸送船の被害は南方地域全域の奪還を果たす前に近くなっていきますね」

霧島がクリップボードから報告書を何枚か取り出し、執務机に並べてくれる。

そこに書かれている数字は半年前の輸送船の被害と今現在の被害を比べたものや、物資の備蓄状況を各物資事に詳細に書き記したものだ。

霧島は腕つぶしもさることながら、書類仕事や事務仕事も卒なく熟すから有難い。

「どれぐらいの敵潜が展開していると想定される？」

「ニューギニア、ソロモン、フィジー・サモア方面にそれぞれ最低でも3個潜水艦隊、現実的などころを見ると5個潜水艦隊は居るものと想定されます」

「随分な数だな、ローテーションも考えればもう2個潜水艦隊は後方にあるだろうな」

「戦術は群狼作戦を基準にしていますね。一度輸送船団が発見されて電波を発されれば、数十隻の敵潜に囲まれることに」

「こちらはどれぐらいの撃沈戦果を挙げている？」

「今月は14隻、先月は11隻でした」

「こちらの被害に比べてあまり成果らしい成果は挙げられていないか……」

「戦力の問題もあって潜水艦狩りを行えませんから仕方が無いでしょう。護衛艦隊の各空母からの対潜哨戒とそれと連携した水上艦艇による対潜戦闘しか出来ませんから」

霧島と会話し、腕を組んで考える。

対潜兵装自体は新式のを優先して護衛艦隊に配備しているから、単純な装備と練度における対潜攻撃能力は高い。

だがどれだけ練度や装備で優れていても護衛艦隊に属する艦艇がカバーしきれぬ範囲を超える数で襲われれば一溜りも無いのは明らかだ。

元々投入戦力が少ない事から集積しなければならぬ物資量も今までの作戦に比べて少なく済むことが今回の作戦の唯一の良い所ではあった。

しかし敵は潜水艦隊を大規模に投入して、こちらの物資集積だけでなく特にオーストラリア以東に対する補給線へも攻撃をしている。

護衛艦隊は頑張ってくれているが、各地への補給量に加えて作戦用の物資の輸送は正直間に合っていないと評価せざるを得ない。

この備蓄量ならば、作戦を発動することは可能だが、あくまでも想定外の事態、例えば戦闘の長期化などが怒らなかつた場合にのみ作戦を完遂することができるといふ程度の量だ。

だから何か問題が発生すれば作戦を遂行することが出来なくなるのだ。

「霧島、もし第1機動艦隊から護衛艦隊に戦力を出すとになったら、どれぐらいの戦力を出せる？」

「……空母1隻か2隻に護衛の巡洋艦を2〜3隻、2個駆逐隊が限界

でしょう。それ以上は予想される1機艦の戦闘行動そのものに影響が出てしまいます」

「作戦発動日時に影響はあるか?」

「まだ1か月は猶予がありますから、損傷さえ受けなければ2度の船団護衛ならば整備を考えても影響はありません。博打ではありませんが」

確かに霧島の言う通りだろう。

もし敵潜の魚雷を食らったら修理に1か月は掛かる。

そうなれば修理が完了するまで作戦参加は見送りになってしまうだろう。

「グラフとプリンツ・オイゲン、足柄、由良を呼んでくれ」
「了解しました」

俺は船団護衛に1機艦から戦力を出すことに決めた。

「Admiral、グラフ以下3名招集に応じ参じた。用件は?」

「君らには船団護衛任務に加わってもらおう」

「私達が、ですか?」

「ああ、護衛艦隊の手が足りないのと、輸送船団にかなりの被害が出ている。それを補う為に君らの力を借りたい」

「ふむ、了解した。しかし我々だけか?」

「いや、2個駆逐隊を随伴させる」

「了解した。他には何かあるだろうか?」

「敵情の情報も伝えておく」

敵の主な編成や規模を伝えておく。

駆逐艦8隻は浦風、初雪、浦波、夏雲、村雨、時雨、綾波、朧を選抜した。

次回の船団護衛任務から参加し、次々回の船団護衛までを参加期限とする。

12名が船団護衛任務に加わり、一定以上の成果を出している。どうやら80機近い艦載機を載せられる正規空母と晴嵐を3機ずつ搭載する重巡が数隻加わるだけでも全く違うらしい。

グラーフツエッペリンは改装によって搭載機数が83機にまで増えているから、その分活動の幅が広がる。

グラーフ・ツエッペリン

陣風38機 流星38機 彩雲7機

晴嵐は空母を除く艦艇の主力搭載水上機となっている。

速力もフロートが付けた状態で537km/h、フロートが無ければ611km/hにまで達するほどの最高速度に最大爆装量が1.5tにもなるペイロードの優秀さもある。

専ら対潜警戒、対潜攻撃、索敵任務か観測任務に従事し、夜間砲雷撃戦時に照明弾を搭載し、投下するぐらいだからペイロードの量はそこまで発揮されている訳では無い。

とは言えその優秀さは際立っており、空戦を除けばほぼ全ての任務に従事出来る事と、操縦性や整備性の向上、生産性を考慮した設計で搭乗員達には好評だ。

水上機基地に配備されている機体は水上機基地の規模によって分かれるが、二式大艇か晴嵐のどちらかである。

「戦闘詳報です」

「ご苦労……、輸送船の被害は3隻に抑えられたか。上々だな」

「はい、これならば必要備蓄量を確保出来ます」

「次の船団護衛任務が終わり次第、護衛艦隊は即座に入渠、点検整備を済ませて出撃準備を整えられる手筈を整えておいてくれ。帰港から作戦開始まで2週間しかない」

「了解しました」

榛名に諸々の必要書類を渡して工廠や補給関係の方に準備を整えておくように向かわせる。

これで何か重大な問題が無ければ、護衛艦隊は作戦参加に問題を抱

えなくて済む。

陸軍の方は準備が整っているし、あとは出撃を待つばかりである。陸戦隊の方も含めて既に各地で待機済みだ。

カロリン諸島、トラック諸島、ポーンペイ島に対する作戦に参加予定の兵力はニューギニアで待機中。

マーシャル諸島、ウェーク島への部隊はソロモン諸島で。

ギルバート諸島に対する部隊はフィジーとサモアで待機している。

1機艦が先んじて出撃し、敵艦隊が出てくればそれらを排除して制海権と制空権が確保されれば、各地から上陸部隊が出撃、渡洋して上陸する流れとなる。

それから護衛艦隊が輸送任務を果たし、必要な物資を各地に備蓄することが出来てから2週間後の真夜中。

2400丁度に1機艦が瀬戸内海から出撃し始めた。

第1、第2護衛艦隊の両方は1機艦の後方で敵地への上陸戦を行う海軍陸戦隊を載せた200号型輸送艦や神州丸などを筆頭とした強襲揚陸艦を守りながら進んでいる。

各地に送り込まれる海軍陸戦隊はその兵力こそ海岸保の確保を主目的としていることから、1個連隊や場合によっても2個連隊程度であるが、その実、歩兵だけでなく各種兵科を含んでいるから1個連隊辺りの実際の兵力は5000名程の強力な兵力を有している。

しかも各種上陸戦と言う敵前に対しての殴り込みと言う一番苛烈な戦闘を想定しての訓練を積んでいる陸海軍双方の陸上戦力の中でも一際特殊な立ち位置の部隊だから、その練度や士気などは比べるべくもないほどに高い。

戦車 600 t

戦車用燃料 10 t

弾薬 10 t

糧食 20 t

真水 12 t

その他軍需品 12 t

第200号型輸送艦が運べる物資の量は以上の通りで、戦車だけでなく戦車を積載しなければ歩兵を載せることも出来る。

第200号型輸送艦は、1隻で12両と戦車乗員60名を載せられる。

艦内は主に機関室、格納庫、弾火薬庫、倉庫、居住区、艦橋、前部甲板、後部甲板に分けられる。

格納庫は上下2段に分かれており、艦内に戦車を全て格納出来るようになっていいる。

甲板には対空機銃と対空機関砲、それに物資を積み下ろしする為のクレーン1基、40mm4連装機関砲を前後甲板に1基ずつ、25mm3連装機銃を環境の左右に片舷2基ずつ、同単装機銃を片舷1基ずつ、20mm4連装機関砲を片舷2基となる。

他には対潜ソナーと対戦爆雷投射基を2基備えている。

1個戦車大隊 第200号型輸送艦5隻

パンター戦車1中隊12両×3中隊 36両

V号弾薬運搬車 12両

自走式迫撃砲 15門

迫撃砲指揮車 3両

兵員 約360名

1個歩兵連隊 輸送船2輸送艦5隻

装甲兵員輸送車 40両

自走式迫撃砲 10両

重迫撃砲 10門

軽迫撃砲 50門

トラック 20両

ジープ 30両

オートバイ 12両
ケツテンクラート 12両
兵員 約3000名

1個砲兵大隊 輸送艦5隻
フンメル自走榴弾砲1中隊12両×3中隊 36両 252名
砲兵観測小隊 50名
オートバイ 12両
ケツテンクラート 12両
V号弾薬運搬車 10両
人員 約400名

1個対空戦車大隊 輸送艦7隻
88mm自走対空砲 12両
ヴィルベルヴィント 12両
オストヴィント 12両
クーゲルブリッツ 12両
V号弾薬運搬車 15両
人員 約500名

1個整備大隊 輸送艦4隻
整備機材多数
約300名

1個工兵中隊 輸送艦10隻
V号架橋戦車 4両
V号開削機 4両
V号引揚機 4両
ベルゲパンター 15両
ブルドーザー 10両
トラック 20両

工兵 約200名
約350名

1個輜重小隊 輸送船3隻

各種物資多数

物資運搬用特大発動艇 20艇

特大発動艇操縦要員(予備員込) 25名

機銃員(25mm機銃2艇を装備の為) 40名

輜重隊本部50名

計135名

陸戦隊の基本兵力はこの通りである。

以前よりも兵力が膨らんでいるが、陸軍の連隊も同じような編成でここに自走対戦車砲中隊が加わる。

新しく配備されているV号自走迫撃砲と迫撃砲指揮車は、V号戦車の車体に12cm迫撃砲を載せたものと、迫撃砲の射撃観測装置を載せたものだ。

単純に戦車を支援する為の火力として、他の迫撃砲などだと人力で運んだり、或いは牽引であるとかで運ばねばならない。

牽引式でも良いのだが、足場が悪い状態だと戦車と行動を共にし辛いし、かと言って全く砲兵頼りの支援砲撃だと柔軟性が薄い。

だったら余っているパンター戦車の車体に必要なものを載せてしまえ、と言う事で開発されたのが2種の車両である。

実は3か月前に、パンター戦車の砲塔を作っている工場が幾つか空襲で吹き飛ばされて更地になってしまったのだ。

作られるはずであった戦車の為に、車体を量産していた各工場には、砲塔が無くてどうしようもないパンター戦車の車体があちこちの倉庫に300両分ほどが放置されていたところ、それをどうするかとなって、結果的にV号自走式迫撃砲と迫撃砲指揮車が開発されるに至った。

開発期間はまさかの2週間。

製造自体は砲塔部分をベルゲパンターのように切り取って、そこに迫撃砲と砲弾を載せれば良いだけの話だったから、扱い易いように幾らか工夫を凝らしただけで、急造品ではあるが実際はかなりの威力と効果を発揮している。

これだけの兵力を移動させるのに、合計で41隻もの輸送船と輸送艦が必要になる。

輸送艦の数が多いのは基本的に輸送艦で運んだ方がそのまま上陸させられるからだ。

輸送船からだ、まず甲板に上げて上陸用舟艇に載せ替えて、海に降ろして、そして漸く乗員が乗れると言う面倒で、しかも波で安定しないと言う危険な状況下でやらねばならない。

その手間や危険性を考えると輸送艦の数を揃えてそのまま海岸に突っ込んだ方が楽で安全なのだ。

輸送船は専ら各種物資の輸送や歩兵などの兵士を運ぶ。

輸送船と言ってももつと詳しく言うならば、兵員輸送船と言うもので居住性ある程度の居住性を考慮して設計、建造されている。

運べる人数は各人の装具類や武器、上陸時に持って行かねばならない弾薬や爆薬、航海中に必要な水食料類なども積み重ねばならず、被弾や被雷時の避難等を考え1隻辺り1300名程度となる。

狭い船内に押し込むのは衛生的にも安全面としても宜しくないのだ、ギリギリの人数がこの約1200名と言う数になる。

それでも2隻用意すれば歩兵を2600名は運べるのだから十分だ。

瀬戸内海から1週間、フィリピン、パラオを経由してカロリン諸島の攻略に取り掛かった。

陸戦隊の上陸時に若干の抵抗があったものの、損害らしい損害も無く海岸保が確保されるとニューギニアに待機していた陸軍部隊が

次々と各地で上陸を開始した。

どうやら敵は地上兵力を幾らか残してその殆どを撤退させたらしく、特に問題らしい問題も起きずに2週間ほどで完了となった。

続いて攻略に取り掛かったのはトラック諸島とポーンペイ島だった。

こちらには兵力を集中させて、各島に堅固な防御陣地を築いていた。

陸戦隊の上陸前から、海岸に向かう大発や輸送艦の周りに水柱が立つぐらいの抵抗があり、上陸の際も損害が出た。

艦砲射撃と航空機での支援ですぐにその砲火は沈黙したがどうやら、早まった敵の攻撃らしく、思えば確かに組織的に攻撃をしたかと言われると疑問の残る攻撃であったから納得が行く。

それでも陸戦隊が海岸保を確保し、陸軍が内陸に進もうとするとかの抵抗があり、掃討戦が終わるころにはトラック諸島とポーンペイ島合わせて戦死者613名、戦傷者1062名となった。

続いてマーシャル諸島の奪還が進められ、こちらは順調に問題無く完了となった。

最後にギルバート諸島の奪還に取り掛かったが、こちらでは海戦が勃発した。

海戦と言っても敵基地航空隊と潜水艦による攻撃だった。

脅威度は中々に高く、敵機が注意を引き付けている間に敵潜水艦隊が陣形内に侵入、攻撃が行われリシユリー、ビスマルク、榛名、武蔵の4隻が魚雷を1〜2本食らって中破するに至った。

それでも艦載機による対潜爆弾の投下や駆逐艦などによる潜水艦狩りが始まり10隻ほどの撃沈が確認され、残りの敵潜は逃げて行った。

双眼鏡で覗くと、陸戦隊の皆が次々と浜辺に雪崩れ込む様に上陸していく。

装備は鉄帽と小銃、予備弾倉を入れた弾倉入れ、水筒、携帯猿臂、救

急治療用のセットが纏められたポーチのみを付けているだけだ。

陸戦隊はその性質上、上陸戦時はなるべく軽装であることが望まれる。

自身が乗っている大発が沈んだり、などと言う場合によっては海を泳がねばならない必要性も出てくるしなにより海岸での戦闘は遮蔽物が少なく素早く動ける事が何よりも重要だからだ。

そこに色々と詰め込んだ背囊などは邪魔以外の何物でも無い。

だから可能な限り歩兵は軽装であるのだ。

「敵の抵抗は殆どありません」

「ギルバート諸島は小さく平坦な島ばかりですから、艦砲射撃と爆撃で殆ど片が付いたのでしよう」

「まあ、犠牲が少なく済むのならそれに越したことは無い」

「仰る通りです」

ギルバート諸島の奪還を終え、各地に防衛用の駐屯部隊と陸軍航空隊や水上機を配備して艦隊は本土へと帰還する。

損傷艦は速やかに入渠し、陸戦隊は兵員の補充や訓練となる。

さて、しかしこれで一息吐ける訳では無い。

寧ろ重大とも言える問題が幾つかある。

- 1：インド洋方面での敵の動きが活発になってきていること。
- 2：ハワイ方面で大きな動きがあること。
- 3：北米大陸から発せられたと思われる微弱も微弱、探知出来たことが不思議なぐらい弱弱い電波を探知したこと。
- 4：ユーラシア大陸方面での敵の動きが活発化しマリアナ諸島だけでなく、大陸からも爆撃機が襲来し始めたこと。

以上の4つが主な重大問題となる。

この大きな問題を短期間に解決する為には今まで以上の、圧倒的でも言えるほどの労力と犠牲が必要となってしまう。

先ず第一にその労力と犠牲に見合う何かを得られるのか、現実的に

遂行可能な作戦の立案が可能であるかどうかという観点で見れば、インド洋方面での何かしらの作戦か、或いはハワイ諸島の奪還作戦であろう。

北米大陸の件は太平洋全域の安全が確保されない限りは距離があまり過ぎてどうやっても、我々に打てる手立ては無いのだ。

ユーラシア大陸に関しても、飛来してくるのが内陸部からだからそこまで進まねばならないがそんな力は無い。

それどころか今のよう陸軍戦力を恒常的に失い続けなければならなくなり、補充なども困難になるであろうことは軍上層部だけでなく、末端の兵卒ですら誰もが承知の上だ。

更々その様な気は毛頭無いと断言するが、もし大陸への攻勢をしようとしたら、俺であっても大反発を食らうのは間違い無い。

戦線の無駄な拡大は防ぐべき、補給の維持や現状投入可能戦力、と言う事を考えればインド洋方面への作戦は控えるべきで、必然とハワイ諸島の奪還作戦が現実的なのところであろう。

しかしここで懸念点が一つ。

我々はマリアナ諸島を全く奪還出来ていないのである。

俺を含めて、陸海軍がマリアナ諸島への奪還作戦を発動するのに忍び越し、渋っているのには明確なワケがある。

と言うのも、マリアナ諸島は幾つもの大きな島があり、そこには大きな飛行場が多数存在する。

B-29は勿論の事、戦闘機や攻撃機が少なくとも1000機近くは存在していると見積もられ、敵艦隊の規模も空母10隻、戦艦10隻15隻と大きい。

航空戦力だけでB-29が常に500〜600機配備され、単発機が1000機前後、空母の艦載機が最大で800機。

全て合わせればどうやっても2500機は下らない。

これだけでも十分に厄介極まりないのに、各島々には15万を上回るであろう守備隊が存在している。

しかもその島々は堅牢な要塞化されており、こちらは予備兵力含め

て60万は用意せねばならないと言う試算すらあるほどだ。

航空偵察でも分かるくらい野戦重砲や戦艦クラスの要塞砲、高射砲、高射機関砲、対空機銃もたっぷり配備されているし武器弾薬や水食料燃料、医薬品などの備蓄も十分、堅固な守りに包まれているだろう。

装甲に守られているだろう要塞砲などは戦艦の砲撃や爆撃でも破壊することは叶うまい。

こんなバケモノを相手にしなければならぬとなれば、事を急いでは無駄な犠牲を出すのは確実であろうから、奪還するまでに1年程度は確実と見ておかねばならない。

以前、マリアナ諸島奪還を検討する為に要塞と上陸した部隊での対抗演習を行った事があるが、艦砲射撃の段階で要塞内に格納された重砲などは一切無傷であったし、それによって上陸した部隊が壊滅すると言う結果が出た。

このマリアナ諸島を奪還し、更にミッドウェー諸島を奪還しない限り我々がハワイ諸島に歩を進めることはどうしても叶わないのだ。

ミッドウェーを飛び越しても良いのだが、そうすると我々は側背を突かれる危険性があるし、何より前哨基地無しでハワイ奪還を成功させなければならなくなる。

ミッドウェーの敵航空戦力は無視出来る規模ではないし、索敵哨戒線も広くハワイの北西側を広くカバーしていることもあるし、潜水艦ぐらいなら停泊出来る程度の環礁でもある。

これを無視して一足飛びにハワイ、となるならばハワイ駐留の敵艦隊やハワイを守る守備隊、それらが立て籠もる要塞と合わせてかなりのリスクを背負わねばならなくなる。

今の我々に果たしてそれだけのリスクを背負って尚、勝てる力があるかは疑問だ。

今我々が考えるべくは、マリアナ諸島攻略は現実的なものであるか、インド洋方面は艦隊を出さなければならぬのか、この2つをよく考えなければならぬ。

ユーラシア大陸と北米大陸に関しては手出しが出来ないので、爆撃には震電による迎撃で対応するしかない。

「さて、諸君集まって貰ったのはマリアナ諸島作戦の検討、インド洋方面への対応を考える為だ。中代大将や陛下からは決定は委ねる旨を頂いている」

陸海軍の戦術、戦略レベルの人間を30人ほど集めての会議だ。

「陸軍としては、敵のマリアナ諸島における要塞の無力化が現実的で無いのならば、反対です」

「海軍としても要塞砲と撃ち合わせなければならない必要上、不利なのはこちらですから、無力化する手段が確定的でない限り作戦を実行するのは反対です」

「敵要塞の無力化さえ行えば良い、と言う事でしょうか？」

「え、ええ、その通りです」

「安直ではありますが、島全域に煙幕を張ってしまうと言うのはどうでしょうか？」

「煙幕を張る？」

「ええ、艦砲射撃や空爆で煙弾を叩き込むのです。そうすれば少なくとも直接照準射撃は不可能ですし、煙幕の中にアルミ箔を混ぜれば対地砲撃にも電探の活用が出来なくなります」

「なるほどな……」

確かにそれならば、射撃電探の開発が双方ともに遅れている地上戦ならばこちらが有利になる。

「それではこちらも電探射撃が出来なくなるが？」

「そこは今まで通り直接照準射撃でやれば良いかと。島の地形は航空偵察や潜水艦による偵察である程度判明していますし、自ずと敵砲の配置位置も判明する筈です」

「……陸軍はこれをどう思うか」

「我々としては、海軍側が実行可能である、と言うのなら……」

「技研本部、戦艦級の煙弾の開発は可能か？」

「可能です」

「それならば、結論は決まったな」

技研本部から出向してきている技術者に聞くと、頷く。

実際問題、煙弾の開発が達成出来なければ第一歩にすら立てない。

取り合えずそれはクリア出来そうであるから、一安心だ。

マリアナ諸島への奪還作戦の実行が決定され、それに向けて準備を進めることとなった。

内心で実行可能な作戦が立てられつつあることに安心していると一人が手を上げる。

彼は砲術畑を歩み続けて来た東間大佐である。

砲撃のスペシャリストとでも言うべきで、電探射撃から航空機による弾着観測射撃、直接照準射撃、対空射撃に至るまで全ての射撃の指揮を執らせれば抜群と言う人物だ。

「提督、提案があります」

「どうした？」

「戦艦用の煙弾は不要と考えます」

「ほう、それはどうしてだ？」

「戦艦の主砲射撃速度はどれだけ頑張っても1分間に2発か3発撃てれば良い方です。これでは効果的に煙弾で遮る事が出来ません」

「ではどうする？」

「巡洋艦、駆逐艦、それと航空機を主体として煙幕を張るのです。そうすれば最も攻撃力のある戦艦の主砲を対地攻撃に使えます」

「兎に角数を撃ち込んで、視界を継続的に奪おうと言う事か」

「はい。一番の打撃力をその分攻撃に全て割り振れますし、その方が効果的かと考えます」

「……よし、それで行こう。だが最初の煙弾は戦艦に撃ち込んでもらう必要がある。あんな要塞に巡洋艦はおろか駆逐艦達を近付けるわけには行かん」

「分かりました」

「技研は早速戦艦用の煙弾の開発に取り掛かってくれるか」
「了解しました」

これより次々とより具体的に、現実的に作戦が練られることとなる。

第84話

マリアナ諸島への作戦発令が決定され、実施時期は半年以内とされた。

この間に各方面に展開していた連山を一度本土へ戻し、硫黄島、パラオ、コロニアへの再配置が行われている。

理由は噴進爆弾を運用出来る部隊が彼らだけだからだ。

生産だけで無く機体の改修も順次進められているが、それでも纏まった数を新しく配備するにはどうやってもマリアナ諸島奪還作戦までに間に合わないから配置転換をする他無いのである。

硫黄島とパラオ、よりマリアナ諸島に近いコロニアへの物資備蓄も進められている。

この3島が作戦の要、連山の前線拠点、補給拠点となる訳である。硫黄島には陣風2個飛行戦隊、連山60機が配備されている。

パラオには艦隊の補給に必要な物資を載せた輸送船が数十隻待機しており、マリアナ諸島近海で作戦行動を行う艦隊に必要とあればすぐさま補給が可能な体制を整えている。

連山240機が配備され、マリアナ諸島に対する爆撃の主力を担っている。

コロニアには島の南部に飛行場が置かれ、防空用に陸軍2個飛行戦隊と連山が120機配備されている。

他にもコロニア港の周辺には陸軍向けの物資が急増された多数の倉庫に大量に積まれている。

ここが陸軍への補給拠点となる。

トラック諸島にも連山180機が各島にある飛行場に分散配備されている。

トラック諸島の飛行場は戦闘機を展開するには十分な大きさだが、纏まった数の連山を1か所の飛行場に配備するには不十分な大きさ

だ。

だからウエノ島、ポル島、トル島、フェファン島の4島に分散配備されている。

ウエノ島には一番大きな飛行場があり2個飛行戦隊、他の3島に1個飛行戦隊が配備されている。

他にも陣風を装備する陸軍飛行戦隊が8つ、300機ほどが配備されている。

水上機基地には哨戒用の二式大艇がある。

トラック諸島は文字通り、陸海軍にとって中部太平洋上の最重要拠点として整備されつつある。

今のところ、計画されているのはウエノ島とトル島に入渠ドックを備えた工廠を建設する計画があるが、時間などの問題もあるので建造中の浮ドックを配備する計画とどちらが良いか検討中だ。

パラオには輸送船だけでなく、修理や摩耗した砲身交換なども行えるように工作艦も4隻待機している。

八幡型工作艦と呼ばれる4隻はイチから新しく設計した特務艦である。

大元の設計自体は戦時急造型輸送船のものを流用しているが、異なる点が幾つかある。

まず全長が違うことだ。

通常の戦時急造型輸送船は、兵員輸送型であれば全長180m、搭載能力は人員2500名と個人装備類一式纏めて一度に運ぶことが出来る。

しかし工作艦4隻は全長が230m、全幅35mと海軍の中でも中々に大型の部類になり、空母や戦艦などに匹敵する。

勿論大型化した理由もある。

各戦艦の主砲身交換を前線でも可能にする為であるのと、その為の

格納庫や他の修理、改装等を随時前線で行えるように、各種工作機械などを載せる為だ。

元々巡洋艦ぐらいの主砲身ぐらいまでならばどうか前線でも交換が可能であったが、流石に戦艦ともなると日本本土に戻るか各地の工廠でしか交換が出来なかった。

これでは不便な為に、工作艦にその能力を付与したわけである。

それでも工作艦が2隻いないと主砲身の交換は出来ないが、前線で出来るのと出来ないのでは全く話が違う。

ローテーションを組んで、1〜2週間は掛かっていたのが1日あれば交換が修理し、戦線復帰が可能となるのだ。

艦中央部は露天作業場で、大型クレーンが2基、中型クレーン2基、小型クレーン2基の計6基を備えている。

対空兵装を艦首付近に40mm4連装機関砲を2基、艦橋横と艦橋の左右に25mm3連装機銃と20mm4連装機銃を2基づつ、同単装を2基づつ。

艦尾付近に40mm4連装機関砲を2基、25mm3連装機銃と20mm4連装機銃を2基づつ。

同単装を2基づつ。

武装はこれだけで、艦内甲板全てを含めて残りは全て工作機械が占めている。

- | | |
|------|----|
| 1 番艦 | 八幡 |
| 2 番艦 | 下瀬 |
| 3 番艦 | 来栖 |
| 4 番艦 | 宇治 |
| 5 番艦 | 大垣 |
| 6 番艦 | 三島 |
| 7 番艦 | 桐生 |

以上が各地で任務に就いている。

今回は2、3、6、7番艦をパラオに集めたわけだ。

工作艦の他にも浮ドックが建造中である。

こちらが就役すれば工作艦をより柔軟に運用することが出来る。
全長320m、全幅60mにもなる。

内側のレールにガントリークレーンを備え、外側のレールには通常のクレーンが左右に2基づつ計4基が備えられる。

戦艦、空母の修理も可能であり、特に艦隊における数的主力たる駆逐艦に至っては丸々6隻を同時に修理可能となっており、大破しても即座に浮ドックに入れ、修理、戦線復帰が可能となる。

改装にも対応出来るし、機関部の入れ替え、と言うような大規模な修理や改装でも工作艦と連携することで可能になる。

とは言え流石にそこまでの修理となったら普通に各地の工廠でやった方が効率は良い。

海軍の中でも特に重要な戦力になるのは間違いない。

1隻が訓練中、もう1隻が艤装中、もう1隻が建造中であるが、訓練中の1隻は早ければ今年中に、もう1隻は来年春頃には任務に就く事が出来る予定だ。

建造中の1隻も特に問題が起きなければ来年の10月初めには就役し再来年2月初頭には前線配備となる。

前線と言っても、実際に配備されるのは後方の泊地が主になる。所属としては補給艦隊の扱いになる。

移動の際に護衛の都合が付き易いからだ。
自走も可能で最大15ノットを発揮出来るが、他に比べて遅いので、前線に送られる手順としては以下の通りになる。

我々が制海権、制空権を確保した後には補給艦隊が投錨地などに拠点構築、その後、補給艦隊と共に護衛艦隊に守られながら前線へ赴く。こうでもしないとデカくて遅く、しかも工作に能力を殆ど振り向けているから自衛火器は殆ど無い、と言う格好の的にしかならないのだ。

それに自衛火器と言っても40mm4連装機関砲が四隅に1基づつの4基、37mm、25mm、20mmの単装機銃が片舷に2基づつしかなく、対潜装備はもちろん無い。

だから他者から守ってもらう事が前提の艦なのだ。

南洋作戦で消費し尽くした噴進爆弾が新たに大量投入が予定されている。

しかし相手は堅牢な地下要塞を多数要するのだから前回の作戦の比では無い消費量となるだろう。

それにしても、今までデカイのと数があるだけで最低限維持されていただけの硫黄島飛行場が活用される日が来るとは思ってもいなかった。

マリアナ諸島奪還に向けてと、本土防空の要たる硫黄島は飛行場を拡張したは良かったが、電探基地を設置して守備隊を置いただけで終わっていた。

作戦前に配備されていた航空機と言えば、連絡用と人員輸送用に連山4機、哨戒用に二式大艇12機と言う、飛行場の規模に比べて余りにも小さなものだった。

実際硫黄島の役割は重要で、本土防空における要衝中の要衝ではあるのだが、電探基地と哨戒戦力、防衛用の陸軍部隊さえあればそれだけで戦略価値があるので態々大量に航空機を配備して補給量を増やす必要までは無かったのだ。

陸軍の守備隊が2個師団4万名ちよつとに加えて野戦重砲連隊1万名と独立工兵大隊が1つがあるが、その殆どは防御に重点を置いた編成で積極的攻勢は想定していないものになる。

硫黄島守備隊に限らず各地の守備隊の目的は救援が来るまでの間を兎に角持ち堪える事だ。

守備隊の性能的にはパッシブディフェンスに能力の殆どを割り振られている状態でアクティブディフェンスと例えば万が一の戦車戦に備えてティーガーIIが1個大隊とそれに追隨する為の機械化歩兵が400名ほどなのだ。

とは言え硫黄島と言う小さな島で戦車戦が起きるとは考えにくい話ではあるが。

敵が来襲するとなればまず間違いなく爆撃で飛行場は無力化され

ると想定されており、そこに多数の航空機を配備するのは戦力と資源、時間の無駄と割り切つての措置だ。

それでも大規模な飛行場が建設されたのには、先ほども言った通りマリアナ諸島奪還作戦が発令されるかもしれないというのに加え、中部太平洋に対する睨みを効かせる為だ。

どうなるか分からないが、前線基地として好立地だし一応造つとこう、と言うのが実際のところで、実際に使われるかどうかは怪しいと言うのが陸海軍双方の認識であることは間違いなかったのに、そこにまさかまさかであるから、誰もが建設しておいて良かったと胸を撫で下ろしているのである。

『提督、入っても宜しいですか?』

「構わん、入れ」

「失礼します」

報告書を持って榛名が入って来る。

届いた報告書を受け取るように頼んでいたから、各方面から届く書類を抱えている。

厚さは1cmにもなる量だ。

「連山部隊の再配置が全て完了しました。備蓄状況は8割と言ったところですよ」

「予定通りだな。陸軍の方は?問題無く準備は進んでいるか?」

「パラオに行われた爆撃によって弾薬輸送船が1隻沈みましたが、代わりを手配しました」

「周りの船に被害は?」

「離れた位置に投锚していましたので、破片が飛び散り軽微な被害を被った輸送船が何隻か。そちらも工作艦によって点検、必要な艦は修理済みです」

「それなら良い」

泊地や港、投錨地では弾薬輸送船とタンカーは積載物がある場合、

他の船舶や艦艇から最低2 kmは離れた位置に投錨、停泊するように決められている。

数千t、数万tにもなる大量の燃料、砲弾薬や装薬、爆薬を積んだ船が炎上すれば、誘爆は免れない。

その際に近くに他の艦艇がいると被害が拡大してしまう。

タンカーが被弾炎上となつたらもつと悲惨になる。

爆発でもすれば火が付いた燃料を爆発で周囲に撒き散らすのだ、上からそんな燃えている燃料を被つたら消火など望めないだろう。

そういった事態にならないように、給油や給弾の際を除いて他艦艇から距離を取って停泊させるのだ。

海中に落下した砲弾薬も爆発すれば危険なので、工兵隊が爆薬を仕掛けて吹き飛ばす。

タンカーが沈んだ場合は速やかに流出した燃料を回収させる。

マリアナ諸島の各島に築かれた地下要塞は堅牢極まり無く、全く今までと同じように上陸すれば陸軍の被害は計り知れない、それこそ作戦そのものを中止する事になり得る。

煙幕で遮ると言う手法も、結局はその場凌ぎでしかなく、事前に射撃諸元を出しておいて、そこに撃ち込めば煙幕の効果も著しく低下する。

戦艦による艦砲射撃も分厚い岩盤に阻まれて、徹甲弾でも中々効果は出ないだろうし、かと言って英軍が欧州から逃げてくる時に持ち込んだ馬鹿みたいな大きさの爆弾など、重過ぎて連山含めて搭載出来る航空機は無い。

開発するにもそんな余裕も時間は無いし、ましてや資機材も無い。今はあるものでどうにかするしかない。

左右に首を振ると、特徴的な濃紺と濃緑色の迷彩塗装が施された連山200機近くが重層編隊を綺麗に組んで飛んでいる。

第15爆撃隊の部隊指揮官である自分でも中々見ることが無い光景で、とても力強い光景だ。

飛行場の規模と数がもつと大きければ、もつと数を集められるんだが、生産能力も考えたらこれが限度だろうな。

以前の濃緑だけの迷彩は、陸地の上空なら良いが、海上だと逆に目立って敵機から視認されやすいと言う致命的な欠点があった。

そこで新しく、濃緑色に加えて濃紺を加えた迷彩を新しく開発したと言う。

機体下面は今まで通り、下側から上空に紛れられるように明灰白色で塗られている。

今回は硫黄島、パラオ、コロニア、トラック諸島からの一斉出撃、同時攻撃になる。

これは敵機の迎撃を分散させる為で、爆撃で敵飛行場を無力化したら、各地の待機している連山が時間差を開けて続く。

私達も明後日に再出撃の予定が入っており、それを10回ほど予定されている。

4機1小隊が縦に3つ並び、1中隊を構成しそれが横や縦に並んでいる。

合計15中隊、180機。

指揮下にある6個大隊の内の5個大隊を率いての出撃だから、殆ど全力出撃のようなものだ。

マリアナ諸島に対する爆撃の1番槍を任されたのが我々で、作戦初動の要と言える光栄なことだ。

連山の翼から、1基辺り2600馬力を発揮するエンジン4基が轟

音を上げながらプロペラを回している。

高度6000m、エンジン快調、各種計器に異常は無し、往復10時間の旅路だ。

「少将、そろそろ昼食にしましょう」

「そうするか。田島、先に食っていいぞ」

「良いんですか？ありがとうございます、お先に頂きます」

副機長の田島大尉に先に食事を摂らせる。

連山には私を含めた操縦士が2名、通信手兼衛生兵1名、爆撃手1名、電探手1名、航法手1名、機銃手6名の計12名が搭乗している。交代で食事を摂らせ、自分も田島大尉と交代して操縦席の後ろに下がる。

「お疲れ様です、機長の弁当箱はあちらに」

「ありがとう」

爆撃手の飯田が指差す棚には、俺の名前が書かれた出撃前に持たされた弁当が置いてある。

12名分の食事を入れておく為の保冷箱や保温箱に纏めて入れられ、食べるのときに取り出して食べるのだ。

連山も最近は乗り心地がともよくなった。

以前に比べて長距離飛行長時間任務が当たり前になってきたことで、連山には狭いながらもトイレが備え付けられているから便意を我慢しながら飛ばなくて済む。

以前の連山に乗っていた頃は便意を我慢し過ぎて膀胱炎と便秘になつて暫く待機命令が下つたこともある。

酷い奴だと尿道結石になつて病院に担ぎ込まれて手術した奴もいるぐらいだ。

その点、こういうのはとても有難い。

連山が正式採用される前から一式陸攻や銀河など幾つもの爆撃機に乗って来たが、連山の乗り心地は別格だ。

一式陸攻や銀河は高度を取れば取るほど寒さに耐えながらの飛行だったが、連山は機内も与圧されていて温度が保たれて薄着でも寒くない。

食事も充実しているし、便意との戦いをしなくても良いし、仮眠用の折り畳みベッドもある。

こういったものを必要だと認めて装備の為の改修を許可してくれる提督には感謝せねばならんな。

「おつ、今日は巻き寿司か」

6本ほどの直径3cmの巻き寿司が入っている。

具材はそれぞれ別で、味もしっかり楽しめる。

具材を見てみると、赤身の魚やきゅうり、卵焼きと様々だ。

航空機搭乗員で良かったと思う点の一つがこの出撃時に渡される弁当の豪華さだな。

鮪の巻き寿司を一口齧ると、鮪の美味さと海苔の風味、米の味が口の中全体に広がる。

キュウリの巻き寿司も、キュウリの歯応えと音が気持ち良い。

卵焼きは甘い味付けで思わず笑みが漏れてしまう。

しょっぱい味付けの時もあるし、全く飽きることが無い。

ちゃんと醤油も小さなボトルに入れられている。

飲料はラムネが各人2本つつあるので、1本開けて飲みながら食べる。

これから戦地に向かうとは到底思えない様子だが、恐らく敵機の盛大な歓迎を受けることになるだろう。

撃墜されれば、死ぬ可能性もあるのだから全員覚悟は出来ている。

機体には脱出した際のサバイバルキット、小さく折りたたまれている救命ゴムボートが載せられているし、全員必ず脱出用パラシュートを装備させているが爆散したら意味は無い。

墜落するときの角度や速度、ロールしたりしていたら脱出も難しい。

「今日の弁当は大当たりでしたね」

「ああ、作戦前に補給艦隊が入港していたから、その時に運ばれて来たんだらうな」

補給艦隊様様だ。

どこぞの誰かが補給艦隊は全軍の女神とか言っていたが、あながち間違いではないな。

特に間宮さんが来た時にだけ買えることの出来る菓子類と来たらもう、買えなかつたときの気分は絶望の一言に尽きる。

食べ終えたら手を合わせ、操縦席に戻る。

空には何も無く、雲が遠くにちらほらとある程度。

そんな良い天気でもグアム島に近付くにつれて、徐々に緊張感が高まって来る。

航法にミスが無ければ、グアム島まで500kmの位置になる筈だ。

「全機周辺警戒厳、電探点け」

各機に装備されている電探の探知距離は50km、編隊の前後左右を進む警戒機は爆撃能力は無いが早期警戒管制機としての性能を求めたものであるから探知距離は我々の機体よりも遥かに長い。

暫く進んでいると、警戒機から無線が入る。

『敵機接近、前方130km、機数100機、高度5000、時速450km』

「全機敵機接近、戦闘用意！」

すぐに機内の空気が張り詰めた。

20分ほど進むと、敵機に1000mほど高度優位を奪われた状態で敵機が襲い掛かって来た。

敵機の発射炎や、連山の防御火器である20mm機銃の敵よりも幾分か大きな発射炎があちらこちらで起こる。

私の機体にも、敵機が襲い掛かって来る。

敵の銃弾が機体を叩く嫌な音が連続して聞こえる。

続けてもう2機が右斜め前から突っ込んでくるのが見えた。

「山田、石畝、右斜め前1時方向敵機！」

機体前方上部と下部にそれぞれ備え付けられている20mm連装機銃を操る2人に伝えると、少し遅れて旋回し終えた機銃が敵機に向

かつて射撃を始める。

ぱつと見た感じ、敵機に命中弾があつた様に思えたが、キャノピーにも数発命中し、防弾ガラスに蜘蛛の巣のようなヒビが入る。

「敵機の機種は分かるか!？」

『P-51とF6Fが半々ぐらいです!』

機体後方の機銃に就く根岸が答える。

どちらの機種も12.7mm機銃だが、なんせ撃ってくる弾数が多い。

連山の防御力は20mm機銃を想定しているが、12.7mm弾でも大量に撃ち込まれれば結果は同じだ。

会敵から10分、ついに撃墜される連山が出た。

あれは、4大隊の佐々木機だ。

古株の機長に率いられた機で、実戦経験が豊富な男達が乗っていた。

敵機の攻撃を受けて撃墜される機体は何機か出ると同時に、爆弾を捨てて引き返す機体や不時着水をする旨を伝えて高度を下げていく機体もある。

苛烈な迎撃を受けつつ進軍し続けると遠くにグアム島が見えてきた。

上空に侵入すると、敵機が離れていき、代わりに対空砲の苛烈なお出迎えが始まった。

あちこちで敵弾が炸裂し、破片を撒き散らし、機体を破片がカンカンと叩く音がする。

するとその内の1発がどこかの機に直撃し、搭載していた爆弾に誘爆したのか凄まじい爆発と炎で周囲の連山を何機か巻き込みながら爆散していった。

何処の機かは確認している余裕は無い。

今は自分達が爆弾を投下して任務を達成し、そして生き残る方が重要だ。

「教導機、敵飛行場に照準合わせ!各機は教導機に続く!」

『了解!』

「爆弾倉開け、投弾用意！」

駆動音と共に爆弾倉が開かれ、中に収められた対地爆弾や焼夷弾が投下されるのを今か今かと待ち侘びている。

『投下、投下、投下!!』

爆撃手が声を上げると同時に、爆弾が地上目掛けて落下していく。

47分の爆弾が一気に無くなったことで、機体が軽くなりふわっと持ち上がる。

それを抑えて、暫く直進した後に、旋回して戦果確認を兼ねながらパラオを目指す。

どうやら上手い事敵飛行場に爆弾の雨が降り注いだらしく、滑走路やその周辺から黒煙が上がり、燃料か爆弾、機銃辺りに誘爆したのか派手に燃え盛っている場所もある。

道中で集計した結果、撃墜されたのは27機、撃破判定となったのは31機。

合計で58機を失うことになり損害も大きかったが、戦果も十分だろう。

パラオに戻ったらすぐに報告書を書く。

搭乗員は爆散した機とそれに巻き込まれた2機を除いて、全員が無事に二式大艇に救助されたと聞いて安心した。

重軽症者も多数いたが、死ぬよりかは遥かにマシだ。

翌日、被害が拡大した要因を護衛戦闘機が無かったから、と通達が来ると同時に2日間攻撃を中止、戦力の補充に専念せよと通達があった。

出だしから若干躓いた気がしなくも無いが、連絡機が沖縄経由で飛んでくると中止になった理由が分かった。

どうやら提督が護衛戦闘機を就ける為に空母を手配してくれているらしい。

どの空母が来るかは分からないが、30機でも護衛戦闘機が就くのなら有難い。

マリアナ諸島に対する準備攻撃は前もって開始されている。

まずは焼夷弾に若干の通常陸用爆弾を混ぜて絨毯爆撃によって島々を焼き払うことから始まった。

ジャングルに覆われているは正確な敵情の把握は出来ない。

ジャングルを焼き払ったらば、露出した敵陣地や砲陣地、隔壁に隠された各種重砲などを噴進爆弾や200番爆弾で叩く。

十分な効果は望めないかもしれないが、ある程度の効果は見込める。

1週間も続けていると、焼夷弾によって焼き払われた島々は緑が完全に失われ、土が剥き出しの茶色の禿山状態になっているのが航空偵察写真で簡単に分かった。

写真はまずモノクロ写真で撮影され、機械処理や人の手によってカラー化される。

ただ単純にモノクロ写真だけでなく、時間と金は掛かるがカラー化された写真の方が作戦を進めるのに都合が良い。

陸軍や陸戦隊には各小隊長クラスにまで写真が配られ、どのような状態であるのかが分かるようになっていく。

地図だけよりも、互いに照らし合わせる事が出来るから、これがあれば南方作戦の時などジャングルの中で1週間も迷う部隊が出るなんてことも無かつただろう。

マリアナ諸島に対する爆撃は順調に進んでいる。

当初は敵機による迎撃もあって撃墜される連山もあったが、葛城、阿蘇の2隻を派遣して護衛戦闘機を就けたり、潜水艦隊による敵艦隊

攻撃や輸送船狩りを続けた結果、敵機の活動は小さくなり飛行場は復旧されなくなった。

どうやら飛行場の復旧に労力を割いても無駄だと判断したらしい。問題は敵艦隊の動向が今回も分からないことだ。

敵艦隊に対して噴進爆弾による3波の攻撃を仕掛けたところまでは良かった。

空母や戦艦は狙わずに巡洋艦以下の艦艇を狙うように指示してあった。

元々大型艦に対しては噴進爆弾は貫徹力不足で効果が薄いと分かっていたし、特に戦艦相手には精々上部構造物を破壊できるぐらいの貫通力しか無い。

だから狙っても意味が無いとしたのだ。

勿論それ以外の艦艇にはかなりの大打撃を与えたとし、実際に戦果確認の為の偵察ではサイパン島のラウラウ湾やテニアン島、グアム島近海に幾つもの黒煙が立ち上っていた。

恐らく駆逐艦や巡洋艦あたりの防御力だと噴進爆弾の破壊力には耐えられずに撃沈となったか、或いは被弾炎上中であつたのだろう。

それで損害を与えるのと艦隊を置くのは宜しく無いとしたのか近海から全く姿を消したのだ。

順当に考えれば、ハワイ諸島方面に移動したのだろうか今の段階ではどこに行つたのか分からない。

偵察は続けているが、航空偵察では航続距離が足りないし、潜水艦隊は時間が掛かる。

もし再度敵艦隊が出てきても良いように、準備は整えておかねばならない。

作戦準備が整い、出撃した艦隊がグアム島沖に並ぶ。

戦艦は主砲を島に向けており、いつでも砲撃を行えるように備えている。

「改めてこれだけの艦隊が並んでいると、壮観だな」
ポツリと漏らし、窓の外を眺める。

主力たる第1機動艦隊がグアム島沖に大挙して並んでいるこの光景と言うのは、やはり圧倒される光景だ。

今は連山が煙弾を投下し、上陸地点であるグアム島ポリロック湾近辺を煙幕で覆っていく。

続いて戦艦、巡洋艦、駆逐艦達が前進し、次々と砲撃を開始する。

「艦砲射撃開始しました」

「敵からの反撃はあるか？」

「今のところは何の反応もありません。このままで進めば良いのです
が……」

「敵だって海岸線での防御なんぞ意味が無いことぐらいは今までの戦訓で十分に理解しているだろうさ、内陸部に全兵力を集中させているんだろう」

北部は平坦で、あまり防御には適していないが、上陸地点があるグアム島中央部から南部にかけてには小高い山々が多数連なったりして存在している。

敵はここに戦力を集中して、こちらの攻撃を弾き返そうとしている。

1m厚のコンクリートがあれば、たとえ大和や武蔵による砲撃でも徹甲弾を使って尚且つ直撃させなければ破壊は出来ない。

だったら辺り一带丸ごと三式弾で焼き払う方がまだ良い。

或いは航空機で直接叩くぐらいだ。

丸々3日間の煙弾を混ぜた砲爆撃を加え、僅かに残っていた木々も全て焼き払われた。

「陸戦隊の第1波が出撃します」

砲撃と煙弾、そしてロケット弾と爆弾をぶら下げた陣風、流星の支援を受けながら大発が並んで海岸に突っ込んでいく。

先に歩兵が上陸し、海岸堡を幾らか確保したらすぐに輸送艦が突っ

込んで戦車や自走砲、対空戦車など重装備を上陸させる。

付近の機雷や地雷は全て除去してあるから心配は要らない。

双眼鏡を覗くと、やはり排除しきれなかったか、或いは新しく布陣したのか敵からの攻撃を受けている。

大発に向かって撃たれた砲弾が海面を叩き、水柱を何十本も乱立させるが煙弾によって視界を遮られているおかげで1発も大発を捉えることは、幸いにして無かった。

発砲炎に向かって陣風がロケット弾や爆弾を落とし、地面から爆炎と土煙が上がるとすぐに攻撃は収まった。

『第1波接岸!!』

陸戦隊と繋がっている無線から報告が入る。

双眼鏡を覗くとタラップを下ろした大発から陸戦隊員が次々と走り出て、遮蔽物に隠れていく様子が見える。

陸戦隊員達は皆軽装だ。

背囊などは背負っておらず、個々人が身に付けている装備と言えば鉄帽と小銃に装填された弾倉1つ、予備弾倉6つの計7つ。

弾倉入れをぶら下げた弾帯をベストからぶら下げ、ベストには他に水筒と携帯円匙、救急ポーチ、それに1日分の食事が入ったポーチが付けてある。

軽機関銃の場合は射手が機銃を持ち、弾薬手が2人付いて自身の装備に加えて250発の弾帯が入った弾薬箱を2つつつ、装填された分を合わせて計1250発持つ。

陸戦隊員の装備はこれだけで、より長い時間を戦わなければならぬ場合など、それ以上の物資は接岸した輸送艦や大発が運び、直接受け取る。

上陸戦時は特に無防備かつ敵から狙われやすい。

海岸線、上陸に適した場所は遮蔽物が無い事が殆どだ。

背囊やらを背負ったりしては迅速な行動が出来ない。

ましてや、場合によっては舟艇を捨てて海に飛び込まねばならない場合もあるが、そんな時に余計な装備を身に付けていたら溺死待った無しである。

そこで取り敢えず上陸時に戦えるだけのものを持っていれば良いと割り切った訳である。

本格的な地上戦は陸軍に任せているし、陸戦隊は何度も言うように上陸戦専門、その時だけ全力で戦えば良いのだ。

丸々2個連隊の歩兵が一斉に海岸に上陸している様は中々見られるものではない。

陸戦隊員を載せた大発動艇が100隻、波間を掻き分けて変わる変わる砂浜に乗り上げては兵士達を下ろしていく。

第2波は戦車や自走砲、迫撃砲などの重機材を載せた輸送艦だ。海岸に向かって突進していく。

「第2波、出撃します」

艦橋の皆は固唾を飲んで見守っている。

幾らか抵抗はあったが、損害は無く無事に重機材の揚陸が開始されたと報告が入る。

「取り敢えず、これで一段落か……」

艦橋の中は、俺を含めて皆が安堵のため息で満たされた。

3時間ほど戦闘が続き、海岸から1kmほどを陸戦隊が確保し、物資の揚陸が開始される。

するとあちこちから敵兵が突然現れ、混乱状態に陥った。

『地下から敵が現れました！くそ、連中全く損害らしい損害を喰らってない!!』

『敵の抵抗がかなり強い、後退許可を!』

「提督、どうされますか?」

「海岸線から500mまでへの撤退を許可する。陸軍師団の揚陸準備を急がせろ」

3時間掛けて奪い返した1kmを、たったの10分程度で半分も失うことになるとは。

どうやら敵は余程マリアナ諸島での戦いを入念に進めていたらし

い。

しかも地下坑道を張り巡らしてあるのか、あちこちから現れては消え、を繰り返しているらしく敵に対して有効な反撃手段が無い。

航空機は味方との距離が近い事や、攻撃位置に付く前に敵が隠れてしまうことから援護は出来ない。

少しすると山々から、隠れていた敵砲兵による砲撃まで始まった。煙幕で遮られているとは言え、やはり事前に諸元を算定していたのか、上陸地点に向けて砲弾、それも15cm以上のが飛んで来ている。これはどうやら、厳しい戦いを覚悟せねばならないらしい。

敵が神出鬼没に現れる地下坑道や、その出入り口をしらみつぶしにしていくしかなく、火炎放射器、或いは戦車の榴弾、爆薬、ガソリンで一つ一つ潰すしか対抗手段は無い。

陸戦隊の損害は大きく、2個連隊は合わせて1127名の死傷者を、たったの半日の戦闘で出した。

本命の陸軍が大挙して上陸すると、陸戦隊はすぐに交代し再び接岸した輸送艦や大発に分乗し載ってきた船に戻った。

怪我などで、必要な者は病院船に移された。

病院船も戦時急造型輸送船を病院船として内部の設計を変えたものだ。

基本的な艦型は輸送船型と同じであるが、内部は傷病者の収容、治療に適した設計に直されている。

左右舷側に6つづつの患者を運び入れる為のクレーンが備えられている。

病床数は300床、重症者用のものが100床、合わせて400床となる。

手術室は30室であり、作戦時は基本的に常に稼働状態にある。理由は勿論傷病者が先頭によって常に発生するからだ。

建造された経緯は、実は首都直下型地震が大きく影響している。

実はあの時、被災者の救助や治療を行う手立てがかなり不足してい

た。

それにより初動対応が遅れたのだ。

空輸では機材人員共に足りず、重傷者から優先しての治療となったから、治療待ちの軽傷者が行列を作る事になった。

作戦においても輸送船内に手術室と医務室があるとは言え、それは精々手術室1つと20床かそこらの病床だけで、どう足掻いても診療所レベルの域を超えなかった。

戦闘で発生する負傷者はこんなものでは到底足りない。

そこで新しく病院船を建造するに至った訳である。

それ以前からも病院船の必要性は解かれ、実際に建造案を唱えていたがいかなせん普通の輸送船の建造すら足りていない状況があつたは続いていたから、最新の医療設備を大量に搭載し、しかも衛生面やらの諸課題をクリアしながら建造となると、年単位の建造期間が掛かる。

そんな長期間ドックを占領されては敵わないということで、建造に時間が掛かる病院船の建造は後回しにされてしまつていたので。

総建造数は8隻である。

今回の作戦にはその内の3隻、鷹野丸と氷室丸、天塩丸が参加している。

「陸軍の第13師団が上陸を完了、現在第23師団が上陸中です」

「13師団の状況は？」

「内陸部に向けて敵坑道やその入り口、陣地、トーチカを一つ一つ潰しながら徐々に前進しているとの事です」

第13師団は元々岩手県に駐屯、訓練していた師団の一つであるが、パラオの奪還作戦の際に前線投入され、作戦による損耗を補充する為に一時本土へ戻った。

豪州奪還作戦、ニューギニア奪還作戦でも激戦を繰り広げ、ソロモン諸島奪還作戦に際しては予備師団として待機し、戦いに参加していたから連戦に次ぐ連戦であると言えよう。

とは言えしつかりと補充、訓練、休養は取らせてある。

師団長は中井兼光少将である。

経験は浅いとは言え、師団長として初めて参加したニューギニア奪還作戦では優れた指揮能力を見せている。

第23師団は沖縄奪還戦以来数々の作戦に参加してきた歴戦中の歴戦師団となる。

駐屯は沖縄であり、そこから各戦地へ送られており、戦闘経験が最も豊かな師団の一つとなる。

ほぼ全ての作戦に参加しており、何よりも数多くの戦場を戦い抜いた兵士達の練度や経験は、訓練などでは得難いほどに高い。

師団長の佐伯秦六少将も優秀かつ歴戦だ。

階級は変われども、数々の作戦や戦闘に指揮官として参加している指揮官であり、南方方面奪還作戦から最前線に立ち続けている。

「山中からの砲撃は？」

「煙弾によって妨害していますが、やはり事前に射撃諸元を算定していたのか、煙幕越しでもそれなりに正確な砲撃が飛んできています。他にも敵歩兵と戦車による奇襲、ダグインした戦車による擬似的な移動可能なトーチカ、地下坑道を使つての遊撃戦等々、抵抗は激しいの一言です」

「どれぐらいの敵火砲、敵兵力が生きています？」

「あれだけの砲撃をできていますから、恐らく8割は生きていますと予想されます。敵兵力はぎつくりと、甘く見積もっても7万は下らないかと。10万ぐらいはいても驚きはありません」

「こちらの損害は？」

「13、23師団合わせて死者1000名、負傷者約2500名。戦車、自走砲、対戦車自走砲、対空自走砲全て合わせて71両が撃破、または擱座となります」

「損害はかなり大きいか……」

想定内とは言え、心配になる数字だ。

上陸戦からそう経っていないにも関わらず、これだけの損害を出したのはかなり久しぶりだ。

「船上待機中の第17師団と第41師団の投入はやはり出来ないか？」

「今よりも前進し、奪還地域が増えれば可能ですが、今上陸させてしまうと混乱が生じたり、万が一の際に撤退などが出来なくなってしまうので、今はまだ投入を控えた方が宜しいかと」

「艦砲射撃で十分に支援してやれ。山に立て籠もる敵さえ押さえられればかなり楽になる筈だ」

「了解しました」

輸送船や輸送艦の上には未だに第2陣として第17師団と第41師団、第3陣として第3師団、第44師団が控えている。

さらに装甲戦力として第13機甲連隊、予備連隊として第20機甲連隊が待機している。

第13、第20機甲連隊は、他の機甲連隊とは装備が違う。

今回作戦に投入される機甲連隊は全て合わせて4つになり、第2機甲師団を構成する。

この機甲師団に属する4つの機甲連隊は、他の機甲師団などと違い装備する戦車がティーガーII重戦車となる。

元々、この機甲師団は防衛用師団の一つであったのだが作戦に転用される事になった。

マリアナ諸島の各島に存在する敵要塞や防御陣地からの攻撃を受け、耐えながら前進しなければならぬと想定される中で、パンター戦車では不十分とされたからだ。

自らの防御力で敵の攻撃を確実に弾き返しつつ、攻撃をも行えないとならない。

事実、既に上陸した陸戦隊や師団のパンター戦車の損害は今までに比べてかなり大きい。

これは敵歩兵からの地下坑道を活用した戦術によるものもあるが、敵の砲陣地や対戦車陣地からの攻撃もある。

パンターの装甲厚は車体前面100mm、砲塔前面110mmであるが、ティーガーIIは車体前面160mm、砲塔前面185mmとなる。

両車共に傾斜装甲を採用しているが、やはり防御力はティーガーIIが圧倒的に高い。

しかも今回戦っているのは、敵の新型主力戦車であるM26と戦車砲などよりも強力な榴弾砲などだ。

M26はパンターに対して機動力では劣っているが、攻撃力と防御力では勝っており、しかもこの作戦では狭い島での戦闘だから機動力は殆ど意味を成さない。

圧倒的に防御側の敵が有利なわけだ。

となるとそれよりも強力な戦車が無ければ戦闘は困難になる。

そこで投入部隊全てに行き渡らせることは出来ないのです、第2機甲師団を投入したわけである。

「参謀長、機甲連隊のどちらかだけでいい、早急に上陸させられないか」

「1個機甲連隊なら、と言いたいところですが機甲連隊故の規模ですから難しいと言わざるを得ません。なにせ戦車だけで100両を超えますから」

「やはり厳しいか」

一応聞くだけ聞いてみたが、やはり難しいか。

あれだけの規模の部隊を新たに送り込もうとしたら混乱してしまいうだらうし、やるならばどちらかの師団を後退させなければ厳しい。

丸1週間の激戦の末、ようやく上陸地点から南北5km、西に2.5kmの地域を奪還し終える事が出来た。

第17師団と第41師団は合わせて戦死者2141名、戦傷者3102名を出すこととなり一時後退、部隊再編となった。

代わりに2個機甲連隊と4個師団が満を辞して上陸。

再編を1週間後に終わらせた第17師団と第41師団は島北部リンディアン岬周辺に陸戦隊と共に再上陸。

若干の抵抗を受けたものの僅か1週間で飛行場4つを奪取。

南部での激戦が嘘であるかのようであった。

南部に近づくにつれて抵抗は激しくなっていたが、それでも戦死者212名、戦傷者314名であった。

すぐさま飛行場の整備復旧が行われ、完了すると陸軍航空隊が配備された。

各飛行場に1個飛行戦隊、陣風36機づつが置かれる。

他には旧アンダーセン飛行場に対地攻撃仕様の銀河と連山を4機づつ装備する第12対地攻撃隊が配備された。

母艦航空隊も引き続き近海警戒を行い、戦艦や重巡は交代で対地支援の為艦砲射撃を続けている。

北部を奪還し終え、残るは南部に広がる山岳地帯であるがこちらではまさに地獄のような戦いが繰り広げられている。

敵は尾根伝いに多数の地下陣地や坑道を作り観測兵を置き、弾着観測をしている。

しかもあちらこちらに洞窟、地下坑道があるからこちらの艦砲射撃や爆撃で潰そうにも、その時には敵の砲撃は終わった後、観測兵はさつさと逃げ隠れしてしまう。

前線では陣地を巡って血みどろの奪い合いが毎日行われている。

沖繩奪還戦の如く、白兵戦すら起きている。

しかも厄介なのは、敵は昼間には防御に徹している事だ。

敵の攻撃は必ず夜襲、太陽が沈み辺りが暗闇になってから行われる。

戦力としてはM26を数両、多くても10両程度に、歩兵を100〜150を伴っている程度ではあるが、全く油断が出来ない。

なんせ戦車を盾にして突っ込んで、それに歩兵が伴って暴れてくるものだから突破力が高い。

この戦車歩兵共同突撃を粉碎するには、まず何にせよ突破力の要である敵戦車を撃破しなければならない。

しかしM26を安定して撃破するには戦車が必要であり、歩兵の対戦車火器では真正面から撃破するのは困難だ。

歩兵が単独で撃破するならば、側面攻撃しかない。

正面からやるならばパンツァーシュレックで履帯を破壊した後、パンツァーフアウスト辺りで側面から撃破するか、予め敷設した対戦車地雷で吹き飛ばすしかない。

その点、我々はパンターとティーガーII、新たに送り込んだ対戦車自走砲のナースホルンがあるからまだ良いが、全ての前線にこれらがあるわけではない。

ナースホルンは88mm対戦車砲から、現在10cm対戦車砲に換装し、これを装備している。

この対戦車砲は元々は海軍の10cm対空砲を対戦車砲に改良したもので、砲弾不足などに陥った場合は互いに砲弾を融通する事が可能だ。

ティーガーIIも現在10cm対戦車砲の搭載をするべく、設計などを行っている最中である。

連隊固有の戦車はまだ前線に配置されているが、より強力なティーガーIIやナースホルンは幾らか後方にあるから、夜襲が起きたらその都度遊撃に出掛けなければならぬ。

前線が食い破られてしまうのも仕方が無い。

支援もこちらができるのは殆ど無い。

艦砲射撃をしようものなら白兵戦で殴り合いが起きていると真ん中に戦艦の砲弾を落とす事になり、味方諸共吹き飛ばす事になるし、夜間の対地攻撃支援はまだまだ現状技術的な問題により困難。

赤外線暗視装置の性能と敵味方の識別を確実に出来る技術があれば夜間対地支援攻撃が可能になるが現状は全く性能不足。

結果、前線部隊が独力で戦ってもらうしか無いのだ。